
フィニット・ストラトス Verweile doch, du bist so schoen

シート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフイニット・ストラトス Verweiledo
ch, du bist so schön

【Nコード】

N7587R

【作者名】

シート

【あらすじ】

男でありながらISを使える男、織斑一夏がISと出会うよりも十年前以上。

『天才』と呼ばれる少女の傍らにはある一人の男はいた。

その男は常に天才と呼ばれる少女の傍にいて、少女を『不変の刹那』を愛し続けた。

原作約十年前以上から始まるこの物語 さあ、開幕の時だ。

始めに注意事項

この小説はシートのほぼ自己満足で書いたIS<インフィニット・ストラトス>の次創作小説が置いてあります。

オリジナルの主人公を中心に進めていき自己中心的な論説や理解しがたい言い方などがあると思いますが華麗にスルーしてください。また、「設定が違う」、「性格が違う」、「違いすぎる」等の事があっても、二次創作と割り切ってください。

と言つよりも何かあってもある程度は二次創作と割り切つて下さい。お願いします。

主な設定としましては原作開始約十年前、ISできる少し前から物語は始まります。

ですので原作の主人公であるはずの一夏の影が薄くなりますがこの辺も二次創作と割り切ってください。

原作に追いつき次第、絡ませていく予定なので気長に待っていて下さい。

更新もこれはサブなので不定期です。気長ーにお待ちください。

あと、この小説は他の漫画やアニメ、ゲーム、特撮等のネタが多少含まれています。元ネタがわかる人はラッキーですね。

さらに私が素人なので誤字脱字がかなりあると思いますが報告してくださいましたら幸いです。

感想もたくさん頂けると私のモチベーションに直結しますしアドバイスなども頂けるととっても嬉しいです。

では、長くなりましたが『IS インフィニット・ストラトス Verweile doch, du bist so scho

e n 『を楽しんでいただきます。』

第一話（前書き）

どうも初投稿です。生暖かい目で見守ってくれと幸いです。
始まり方はエロゲチックな始まりかたです。

第一話

綾視点

PPP . . .

ぼんやりとした意識の中に、朝を告げる目覚まし時計のアラーム音が響く。

意識は覚醒しつつも未だ眠くて瞼は閉じたままなのだが、それでも伝わってくる明るさから言ってそろそろ起きなければならぬ時間だろう。

そう思い、目覚めしを止め体を起そうとするが、本来隣にはいない、いてはならない人奴によって利き手である右手を掴まれ妨害され、起き上がれなかった。

「んっ……」

眠気一杯の子猫の甘い泣き声の様な甘く可愛らしい“女”の小さな寝息が寝ている隣から聞こえる。

眠気に勝てず目を閉じている為、声だけしか分からないのだが俺はその声の主を知っている、よく知っている。

あと、腕に伝わる柔らかく胸の感触もよく知っている、よく知っている。

一応、確認の為、その声が幻聴である事を腕に伝わる感触が幻覚である事を祈りつつ恐る恐る目を開けて隣を確認した。

「はあ……」

「んんっ……」

確認してまたかと思いきわらず溜息が出た。
声と感触は幻聴でも幻覚でもなかった。

俺が寝ている隣には美しい長い髪に整った美しく可愛らしい容姿は一般的に美少女に呼ぶに相応しく、居候先の家の人間の娘であり俺の幼馴染でもある“篠ノ之束”しののたはねはスヤスヤと隣で気持ちよさそうに隣でまだ、眠っていた。

「ん、んんっ……」

「ちよっ……！」

気持ちよさそうな小さな寝息を漏らしつつ束は俺の右腕を自分の方に抱き寄せ俺の腕に抱き付く様に抱きしめる。
そうになると、腕には束の腕が当たってしまう訳で……

もじゆ

柔らかく豊満な束の胸の感触が更に腕に伝わってくる。

束の胸は同年代でもかなり発育がよく、胸は大きい。

美女もしくは美少女で胸が大きいとか……反則でしょ、これ。

俺も健全な男でありスケベなのは多少、自覚しているし『男は皆、スケベなんだ』という迷言もあるからある意味、大丈夫だ、問題ない。

そら……束の豊満な胸を腕に押し当てられれば当然、反射的に反応してしまうわけだついでに驚いて大きい声を出してしまいそうになった。だが、このままでは起き上がれないし学校にも遅刻してしまう。

早く束を起して俺もちゃんと起きないと。

「束、朝だ。起きろ」

「んにゅううう〜あと、五分〜ッ」

「聞く耳持ちません。起きなさい」

利き手は今だ、抱き付かれて動かし難い為、体を少し捻らせ残っている左手で束をユサユサと軽くさすって起してみた。

これはあくまで俺なりの優しさで……この程度では起きるわけなく二人、被っていた掛け布団を引き剥がした。

「うう〜ッ綾のいじわるう〜ッ！」

「はいはい、分かったからほら、起きた」

眠たそうに目を開けまだ、敷布団の上で寝転がっている束に起きるように言い起きることを促す。

よし、やっと起きたな……時間はまだ、ここで束とじゃれていても大丈夫。

なら、どうしてこうなったのかを問い詰めてやるか。

「ん〜！仕方ないな、起きて上げるよ！おはよう〜！綾」

「ああ、おはよう。それでだ、どうしてここにいるのかな？」

「ん？」

なるべく問い詰めてる感を強調する為に強めに言ったが束は眠たそ

うに首を傾げるだけだった。

この様子、どうやら何を問い詰められているのか分かっていない様子だ。

「ん？じゃない、どうしてお前は俺の部屋で寝ているんだ。今日も、いつもいつも」

「あゝそういう事か」

「で、どうしてだ？」

「綾と一緒に寝たかったからだよ！この天才の束さんが一緒に寝てあげているんだよ？得役だよ〜！」

「まったくお前は……」

溜息しか出てこない。

こいつは何度言っても言う事を聞こうとはしない。

言ってもその場だけ反省したふりしてまた、同じことをやる。

常習犯の犯罪者みたいだ……いや、俺にとってはある意味、常習犯の犯罪者よりも質が悪い。

「ならあゝ綾は私と一緒に寝れて嬉しくないの？私は綾と一緒に寝れて嬉しいよ」

「お、おいイ?!」

朝からハイテンションとは一転して突然、妖艶な雰囲気纏い束は俺の上に馬乗りの様な感じで座る。

馬乗りの様に座る束は上半身だけ起している俺に体を預けるように

抱きついて引っ付いて確信的に胸を当ててくる。
そして、止めに上目使いで見つめてくるがその妖艶で優しい微笑みを浮かべている束には妖艶な雰囲気と共に正直に己の気持ちと言わないといけない様な雰囲気もあつた。
敵わないな、俺は。

「まあ……その、俺も嬉しいよ」

「ふふんっ やった！」

そう束は嬉しそうに更に抱きついて嬉しそうに表情を綻ばせる。
そうしているとやはり束は可愛いな。

福眼、福眼と。

「ん？どうしたの？」

ぼけーと可愛らしく嬉しそうにしている束を見てると突然、問いかけた。

「あ……いや、な。今日も束は可愛いな……と思ってな」

口から自然とそんな言葉が零れた。

だが、嘘じゃないしお世辞でもない本音みたいなモノだ。

すると、束は……

「も、もう朝からなんて事言うのっ！もう〜」

自然と言った言葉が嬉しかったのか束は珍しく頬を赤らめ照れていた。

本当、可愛い奴だ。

「ふふつ。まあ、これは水に流してあげるよ。でも、なるべく自重する事。分かった？」

「はい」

曖昧な返事をする束。
まったく、こいつは。

「でも、まあ、こんな事をせずつもちゃんと例えば一緒に寝ることを考えなくもない」

「ツンデレこゝでも、やったねっ！」

また、可愛らしく束は喜んでいた。
朝からハイテンションな奴だ。お掛けて俺は苦勞するが別に悪くない。

「誰がツンデレか。さあ、そろそろ本当に起きるぞ。束も自分の部屋で制服に着替えておいで」

「了解」

俺に抱き付き抱きしめるのを満足した束は俺が言った通りに自分の部屋へと学校に行く制服に着替えに俺の部屋を出ていた。
部屋を後にする束を見送ると俺も学校に行く制服に着替え学校に行く鞆を持ち部屋を後にした。

「さて、今日も一日楽しもうか」

これが俺、
神山綾の朝の光景だ。

第一話（後書き）

はい、と言うわけで第一話いかがだったでしょうか？

と、言ってもまだ、始まりすぎてメインヒロインしか出てませんが

（汗）

束さんって難しいですね。いろいろと。

とりあえずこれから原作十年前の物語が始まっていきます。

いろいろと絡めていきますのでよろしくお願いします。

では、次回の更新も頑張っていけますのでよろしければ感想やアドバースをよろしく願います。

第二話（前書き）

今回は少しシリアス？な雰囲気が出ました。

第二話

綾視点

「ほら、東行くぞ」

「ああん〜！待ってよ〜！」

朝のいつもの出来事から制服に着替え学校に行く用意して朝食を取った俺達は家を後にして学校に向っていつている。

俺達が通っている学校は篠ノ之家からある程度、歩いたところに建っており、通学手段は徒歩だ。

ちなみに学位は中学校で学年は二年生であり俺も東もそして、彼女も同じクラスだ。

彼女とは……

「おっはー！ちーちゃん」

「おはよう。千冬」

通学中、いつもの約束の場所まで来ると住宅地の街角、通学路にある電柱の近くに彼女はいた。

「ん、東、綾。おはよう」

俺達がおはようの挨拶を言つとそれに気づいた“織斑千冬”おじむらびしひふいがおはようの挨拶を返してくれた。

織斑千冬……彼女も束と同じく俺の幼馴染でもあり束と同じ天才、彼女の場合は武の道の天才だ。

千冬は剣道をやっており剣道部に所属しており、ブリュヒンデ戦女神と言う異名が付くぐらいの実力の持ち主だ。

現に圧倒的な強さと実力で千冬が出た大会は全て千冬が総なめをして数々の優勝と凄い成績を収めている。

そして、また、千冬も美女でもあり美人だ。

束の妖艶で可愛い美人ではなく整った美しい顔立ちとスラっとしたプロモーション、そして、クールな雰囲気も相まってクールビューティーな美人だ。

美人であるから異性にだけでなく千冬は同姓に多大な人気があり下級生から『お姉様』と呼ばれており一部、ほぼ大変に等しい上級生からもそう呼ばれており凄い人気だ。

それに加えて学力面でも束には敵わないが優秀な成績を修めている……まさに完璧美人なのだ。

まあ、当然、短所みたいな所があるのだがそれはまたの機会にでも。

「~~~~~」

束は俺の腕に抱き付き抱きしめ歩きながら嬉しそうに鼻歌を歌っている。

天才か……そういうことなら束もそうだ。

束は奇人変人と呼ばれるほどの本当の天才で難関大学の難問やフェルマーの最終定理等を意図も簡単にゲームをプレイが如く解き、正に天才、異才だ。

学校でも学力や成績では常に一位で絶対的なモノになっている反面、教師や束の家族も束を持ち余しているところがある。

束は自分の興味のないことにはとことん無関心になる性格で、俺達には関心を俺には異常なほど関心を持っているみたいで後はかろうじて両親を「身内」として判別できるくらいで、それ以外の人間には興味がなく。

そういった性格故、容姿では絶大な人気があるのだがそのあまり天才ぶりに誰も追随させず近寄せず束自身も他人とは一線を引いており、あまり俺達以外の人間からの評価はよろしくない。

俺もそれはどうにかしようと思っっているが束自身はこれで満足しているから手を出す必要がない、いや、手を拱いている。

押し付けの善意と変わらない身勝手な悪意となってしまっいそう。

「こらッ！束！綾に引っ付きすぎだッ！離れろっ！」

「い・や 何？ちーちゃん、嫉妬しているの？」

「なっ！？だ、黙れッ！」

二人と話つつ登校しながら二人の事を改めて思い返していると二人は何やら揉めていた。

千冬は束が俺の腕に抱き付きながら歩いているのが気に入らないのかむうとした表情で束に言うとからかわれ顔を真っ赤にして何故か照れて否定していた。

嫉妬？何にだ？っていうか、束は更に俺に腕に抱きつくじゃない、歩き難い。

だが、こうして美人美女にして天才の幼馴染の二人が隣に居てしみじみ思う、痛感する。

俺は二人ほど凄くはないな……と。

剣道部に一応、所属しているが千冬ほど凄い実力があるわけでもな

いし大した成績を収めてない、よくて準決勝優勝ぐらいだ。
学力方面でもめちやくちゃ頑張ってる中の上どまり……凡人過ぎるな。

まあ、気にしてもどうしようもない……高望みはしない、今で満足するしかない、いや、今で満足している。

こんなにも個性的で素敵な美女である二人が隣に居てくれるのだから。

「な、なんだ？そんなじーと私達を見つめて」

「どうしたの？」

二人を見つめながらぶつくさと考えている二人は不思議そうに問いかけてきた。

二人が傍に今、こうして隣に居てくれる事が嬉しくて照れ隠しからか、二人をからかいなくなった。

「いや、こんなにも美人で可愛い二人が俺の隣に居てくれて俺は幸せものだなあ〜と思ってね」

「ば、馬鹿者ツ！何を言うかと思ったらこんな事を言いよって」

「ばかあ〜」

からかって言うと二人して頬を赤く染めて可愛らしく照れていた。
可愛い反応をしてくれる奴らだ。

本当、こんな何気ない“至福”の日常をいつまでも味わい続けられればいいのに。

「んんっ！そ、そう言えば明日は合宿だったな」

照れたのを隠す様に咳払いで誤魔化して千冬は話題を振ってきた。

そういえばそうだったな。

剣道部の強化合宿とかで金曜日が休みなのを利用して金土日と三日間、合宿所に強化合宿をしに行く。

メンドクサイことこの上ない……せつかくの休日なんだ、惰眠を貪ったり筹や一夏の相手をしてあげたいというのに……ちくせつ。

「ああ、そうだったね。メンドクサイ」

「何を言うか、馬鹿者。そう言っているうちは強くなれんぞ（束には悪いがこの気に一歩、リードさせてもらっ）」

「分かっている……束？」

何やら千冬がぶつぶつと小さな声で言っていてそうしながら主に部活の話とかをしていると束の様子が少し変だった。

俺と千冬の後ろを束は通学鞆の持ち手を強く握ってとぼとぼと俯いて歩いてついてきていた。

察するに話に入れずどうしていいのか分からず……といった感じかな。

「あ、ううん。何？」

「大丈夫か？」

「何のことだか分かんないけど大丈夫っ！この天才である束さんはいつでもテンションMAXだよっ！」

「そうか？だけど、話す気になったら何か合ったらいつでも言っ
ね」

「もう！心配しすぎだよ。何かあったら言うから大丈夫！」

そうおどけて束は言うもののさっきの束の瞳は孤独感が一杯で何処
か寂しげにも見えどうしたものかと思いつつ俺達は学校に向った。

…

第二話（後書き）

いかがだったでしょうか？第二話。

ISってほぼとっていいほど過去を語られないので独自設定となりますね。

主人公は兎も角、千冬が中学の時に部活で剣道部に所属していたか。

見ての通り二人とも主人公に惚れてます。

いいですね〜主人公補正と待遇は。私も欲しいです。

それと驚いたことに昨日のPVが3 / 265アクセスでユニークが802人でした。

驚きましたねwww流石、流行のIS。化け物か。

これも束さんのお陰なのかもしれないねw 『束！世界一可愛いよ！』

感想ありがとうございます！

感想は随時大募集中です！

よろしければ今回、読んでくださったのなら感想やアドバイス等、
お願いします！

第三話 ？（前書き）

今回は初めての束視点です

第三話 ？

東視点

放課後。

つまらなく下らない学校が終り私は学校の剣道場に来て綾とちーちゃんの練習風景を見ていた。

掛け声とカチン、カチンと竹刀と竹刀がぶつかり合う音が静かに剣道場に響く。

いつもと変わらない、いつも通りの放課後。

何処の部活にも所属していない通称“帰宅部”な私はいつもこの剣道場に来て邪魔にならない所に座って

本を読みながら綾やちーちゃんの練習風景を見ながら終るのを待つのがいつもの私の放課後の過ごし方である。

「メインヤーツ！」

そんな掛け声を大きな声で出しつつ綾は竹刀を縦に振り下ろす。

その振り落としと構えはとっても綺麗で美しい。

綾とちーちゃん、二人の練習風景のみを見ているけどちーちゃんの練習風景を見ていて気づくと綾の練習風景を、綾を見ている。

そして、また、気が付くと綾ばかり見て綾ばかり目でおっている。

「ドーツ！」

「きゃー神山君、かっこいいっ！」

綾の胸が決まり軽い練習試合みたいなのに綾が勝ち身に纏っていた剣道の防具を外すと周りから女子の黄色い声が耳障りに響く。

防具を外すと黒髪の少し長めの短髪と綺麗な黒い瞳と整った美しい顔が見えるようになる。

そう、綾はかっこいい。高身長で整った美しい顔立ちは俗にイケメンや男前と呼ばれる分類でその分類に入る人間ですから綾の前では霞んでしまう程、かっこいいと私は思う。

ただ単にイケメンでかっこいいというわけではなく女たらしな一面も少しあつたりするけど何気ない仕草や言ってくれる言葉、全てが優しくてかっこいい。

それに加えて綾も天才だ。も、と言うのは私も天才だという事は自覚しているしちーちゃんもだ。

頭脳で秀でている私や武の道で秀でているちーちゃんのようなある一つの事に特筆した様な天才ではなく綾の場合はどの面をとっても100%完璧な万能型の天才だ。

綾自身はそういった面を自覚してないけど。

これほど素敵な面が沢山あるからもちろん、もてる。

それはちーちゃんの熱狂的な人気に追隨しているほどで、たまに綾絡みの恋話こいはなが耳に入ってきたりする。

まあ、救いみたくないのがその本人、綾がもテているというを、本人が自覚していないのがある意味、唯一の救いではある。

だけど、もてる事実は変えようなく今、さっきの様な耳障りな女子の黄色い声が聞こえる事が多い。

ムカつく……イライラする、言い知れない黒き気持ちの中心でとぐるを巻くように入り乱れてどうにかなくなってしまっそうになる。

「はあ」

気の重い溜息が零れる。

ただでさえ、最近は綾とちーちゃんと一緒にいて行動することが多くてどうしてかは不可解だけど心が乱れそうになるのにどうして束さんにはこんな目に見えない気苦労が襲うんだらうか。
やっぱり、私は世界“そのもの”に嫌われているのかな。

こんな事、^{考えて}思っていて思い出したけど、明後日、綾とちーちゃん強化合宿に行くんだっただけ。

今の束さんじゃ流石についていけないからお留守番という事になっちゃうけど……正直、言うとき寂しくて心細い。
それに何かちーちゃんに出し抜かれそうで不安。

でも、私は家で大人しくしている他、選択肢はない。

私が生きているこの世界はあまりにも私に適応してないから。

それでも、どれだけおどけて気丈に振舞っても不安で寂しくて心細い。

そんな私の苦し紛れの取り繕いも綾には見破かれているのかな。

だって、綾は……残酷なほど優しいから。

「何、暗い顔をしているんだ？束」

「えっ？」

お山座りで俯きながらいろいろな事を悶々と考えていると頭上から綾の声が聞こえた。

私はえっ？と思いい顔を上げるとそこには帰宅準備を終らせた綾とち

「ーちゃんがいた。」

「部活終わったの?」

「ああ……先ほどな」

「それで何で暗い顔をしていたの?」

また、その話題を振られる。

今は何か言いづらいから帰って言おう。

幸いなことに綾はウチに居候しているんだし。

「帰ってから言うよ、綾。さあ、帰ろっ!ーちゃん 綾」

「お、おいッ!?」

「束!?」

帰ると決まれば私はちーちゃんと綾の手を引きながら私達は各々の家に帰る事にした。

・
・
・

綾視点

「ただいま」

「ただいま」

部活が終り三人でいつも通り下校し千冬と別れた俺と束は家に帰っ

て来た。

いや、今日も疲れた。

朝のおなじみになってきつつあるイベントと学校に部活、本当に頑張った。

特に部活……顧問、俺に何度も練習試合させやがって、何か恨みでもあるのか。

等と心の中でふつつつと思いつつながら靴を縫いでいるとリビングの方から足音が聞こえてくる。

その足音はこつちに向ってくるようで音が大きくなってくる。そして……

「お帰りなさいっ！姉さん、兄さんっ！」

「ただいま、箒」

「ただいま 箒ちゃん」

足音の正体、俺達を出迎えてくれたのは黒髪にポニーテールの髪型の小さな女の子“篠ノ之箒”だった。

箒は束の妹であり小学一年生の少し男勝りな所がある可愛らしい乙女だ。

特に千冬の弟、一夏の前では可愛らしく。

いつもその光景を俺と束が見てはそのあまりの可愛らしさに萌えている。

そして、そんな俺達に千冬は深い溜息をついて呆れている……どうしてだ。

「」

「ん？どうしたの？ 箒ちゃん。機嫌がいいね」

「あのね！あのね、姉さん。実は……今日、また、一夏に剣道で「
凄い」って褒められて……」

「褒められて？」

「それでね……頭を撫でて貰ったの……」

「よかつたじゃん いくくんもやるね〜 ってか、照れた箒ちゃん
かぁいいよー」

「ね、姉さんッ！？」

リビングに向いながら何気ない話をしている束と箒。

そして、一夏との何気ないことで頬を赤く染め照れながら嬉しそう
に話す箒の反応に耐え切れなくなったのか

束は立ち止まって箒と身長を合わせる様にしゃがむとぎゅーと箒を
抱きしめ頬刷りまでしていた。

驚いて恥ずかしそうにしているが心なしか箒は嬉しそうに見える…
…仲のいい姉妹の様子だ。

箒は束に苦手意識が少しあるみただけどあつてないようなものだ。
数年前まではこんな様子みれなかったからしみじみ、いいと思う。
そして、また、篠ノ之家に居候させてもらい始めてから「絆」とい
うもののありがたみを強く思う。

ちなみに今更だが何故、篠ノ之家に居候させてもらっているかと言
うと、

あれはまだ、俺が小学三年生に上がりたての事だった……ある日、学校が終って家に帰るといつも居る筈の母親が居なく何処かに行っているのかと思えば、一人、帰りを待ったが待てども待てども母親はおるか父親も家には帰ってこずそのまま捨てられた。本当に消え失せたかのようにいなくなり……父親の姉であるおばさんの伝でこの篠ノ之家でお世話になる事になった。

あの時は不安だったが自分を篠ノ之家のご両親は暖かく迎え入れてくれ……それがあの時、何より嬉しかったのを今までも覚えている。

まあ、初めてこの家に来たとはまだ、束は俺には心を開いてくれず冷たかったのが笑い話の一つでもあったりする。

で、後から聞いた話なのが俺の両親は何処か遠い所で自殺して死んでいたらしい二人揃って……不自然な事に俺は葬式には呼ばれなかったがどうでもいい。

捨てられたこともどうでもいい……些細なことだ……“世界は所詮、こんなもの”なのだから。

今という時にわりと満足しているしこれでいいのだ。

「ただいま」

「ただいま帰りました」

「あら、お帰りなさい。束、綾君」

そんな事を考えているリビングにつきドアを開けて中に入ると篠ノ之のお母さんが夕食を作って出迎えてくれた。

そして、制服のままだが時間が時間だけに夕食を頂く。

ちなみに篠ノ之のお父さんは仕事で帰りで少し遅くなるらしくない。

「ああ……美味しいです」

今日の夕食も美味しい。

そう言えばいつか篠ノ之のお父さんが“篠ノ之家の女は料理が上手い”との事。

確かにそうだ……篠ノ之のお母さんの料理も上手いし東が作る料理も上手い。

ふと、出た言葉は篠ノ之のお母さんに聞こえていた様で嬉しそうに上品に微笑んでいていた。

「そう言ってくれると作ったかいもあるし嬉しいわね。そう言えば……明後日、剣道部の強化合宿だけど準備は出来ているの？」

「……ッ」

「ええ……大丈夫ですよ」

突然、来た明後日の話に黙って話には一切、参加せず無表情で黙々と夕食を食べている東の表情が絡まり箸が止まった。

まずいね……ただでさえ朝はそんな目をしていたのに。

「東は綾君が三日間ほど家に居ないけど大丈夫なのかしらね？」

また、きつい話が飛んできた。

合宿自体は初めてではなのだが今回は何処かが違っていた。

それに篠ノ之のお母さんは別に悪気があって言ったんじゃないことは分かっている。

他人に一切、関心を持たない東と少しでも話を持つとした篠ノ之のお母さん苦肉の手段なのかもしれない。ただ、話題が少し悪かった。

「大丈夫だと思いますよ。な、東？」

「うん……大丈夫。問題ないよ」

「そうかしら？東、綾君についてもベツタリだから……心配だわ」

そう篠ノ之のお母さんは心配した声で言うが東は無表情のまま黙々とご飯を食べ続けている。

やっぱり、話題が悪かった。

東は篠ノ之のお母さんに関心をあたり持たないから今の場の空気は何処か重たい。

そんな場の重い空気を箒が篠ノ之のお母さんに他愛の話をし入れ替えてくれた。

本当に迷惑掛けるね、箒には。

すると、東はご飯を食べ終えガタツと立ち上がる。

「ごちそうさま。お風呂行ってきます」

そう言い残すと食べていた食器を持ち台所の水につけて置くとお風呂へ向かっていった。

「やっぱり、話した内容はマズかったのかもしれないわね。東に関心を少しでも持って貰おうと思ったんだけどね」

束がお風呂に向った後、篠ノ之のお母さんが言う。

やはり、苦肉の策だったようだ。

束を想い束と少しでも『本当に家族』らしくあろうとしたことが裏目に出てしまった。

こればかりは……今の俺の力じゃどうしようもない。

今はただ少しでも束と篠ノ之のご両親とのミゾが広がらないようにしないと。

「大丈夫ですよ。ただ、少し間が悪かったのかもしれませんが……篠ノ之のお母さんが気に病むことはありませんよ」

「そう言ってくれると嬉しいわ。その……束の事、よろしく頼んだわね」

よろしく頼めますよ。

束は俺にとってなくてはならない存在なのだから。

「分かりました」

そんな話をしつつ俺も夕食を食べ終えた。

第三話 ? (後書き)

と、いうわけではいかなかったでしょうが第三話。

今回初めての束視点という事ですがやっぱり難しかったです。

口調はもちろんのこと、考えは思い方などが難しいです。

何気に苦労しました。

束と篤の仲ですが私的に昔は仲がよかったと思うんですね。

原作時はかなり苦手としていますが昔は普通に仲が良かったと思います。

作中にも書きましたが束の愛情表現が過激でちょっぴり苦手としていたけど昔の篤は束の事を好きです。

ただ、こんなに仲がよかった分、その反動とISの事が関係して原作ではあんな風になったと私は勝手に解釈をしています。

束と篠ノ之の両親との仲はとっても複雑です。

両親は基本、主人公を挟んでしか束と関わろうとはしません。

両親は束の事は主人公に完全に任せて関わろうとはしません。それは束も両親も

作中ではあんな風に言っていますが苦し紛れです。

これが原作時時、束が親に対する認識が曖昧だったり関心がギリギリなのに繋がっているつもりです。

主人公の生い立ちは無理やり入れましたwどうして私的に言ってきたかったのか

主人公の容姿が明かされましたが容姿と声は完璧にDiesiraの戒兄さんです。

これをイメージして今後、読んでください(分からない人は検索し

てください

中身は戒兄さん80%のロースト、蓮タン20%です。
分かるとおりぶっちゃんけ私の趣味です。

と、長くなりましたが随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第三話 ？（前書き）

束ちよいデレタイムです。

第三話 ？

綾視点

夕食を頂いた後、篠ノ之のお父さんは抜いて最後にお風呂に入った。湯船に使っている最中、朝のあの事をどう聞こうかと考えついのはせそうになった。聞き出すなら上手く聞き出して束を傷つけない様にしたいと思っているが結局、考え付かなかった。

やっぱり下手な手段を使わず単刀直入に聞くしかないか。後からフォローをすれば多分……なんとかなると思うし。

そうと決まれば取り合えず行動あるのみだ。そう思いやる事をまず、済ませてからと思い自室に戻ると我が物顔でベットの上に寝転んで難しい本を読んでいるその決意をきめた相手、束がいた。

「どうしている？」

「朝、登校前に言ったじゃん。言ったら一緒に寝るの考えるって。だから、お布団暖めていたんだよ」

律儀にも朝、何気なしに俺が言った言葉を束は覚えていた。都合がいいと言うか……束の中では考えるではなく既に一緒に寝る事が決まっているようだ。

勝手な脳内変換はやめてほしいものだが……こちらとしても都合がいい。

「そうか……なら、その事を飲むから聞かせて欲しい」

「えっ？本当？やった！で、何々？」

「どうして……朝や部活後、あんな寂しそうな瞳や暗い顔をしていたんだ？」

そう聞くとテンションの高かった束はそれが嘘の様に一気に静にそして、沈んだ暗い表情になった。

やはりこれは何かあるな……

「言わないだめ？」

「出来たら」

声は不安そのもので表情も何処か不安そうで寂しげ。表情そのままに束は口を開いて言葉を紡いだ。

「その……不安、だったの」

「不安？」

不安　　そう言う束の表情は本当に不安一色で今にも泣き出しかねない。

今の束にはいつもの様なハイテンションで明るい面影は微塵もなくただ、“未知の恐怖”に怯え震えている小さな弱い女の子の样だった。

「合宿にちーちゃんが綾が行くのは初めてじゃないけど……今回は何処か違って……不安で正直、心細いの」

本当に束は今にも泣き出しかねないくらい瞳に涙を浮かべていた。我慢しているんだろう……泣かないように。

泣いてしまえばその時点で無条件に勝ってしまう……だから、束は泣くわけにはいかないと我慢、しているのだろう。

「あはは……ごめんね。天才の束さんらしくないね。言っつすつきりしたからもう、大丈夫だよ」

涙を浮かべているのをパジャマの袖で拭くと束は心配いらないと強くアピールするように笑う。

どんな時でも強く気丈にそして、おどけて明るく振るまおうとする束。

こいつは昔からそうだった……天才すぎ“異種”すぎるが故に世界からはぶられ続けても飄々として強くあるうとして自分の世界を守ってる。

本当の弱音は一切言わないし表にも出さない心の奥に置いて一人考え思い続ける。

だから、少し不謹慎なのかもしれないがこうして弱さを見せてくれるのは嬉しい。

「束」

「綾？」

不意に束を抱きしめるときよとんした声を出していた。

こんな束が愛おしく思えた。

無性に抱きしめ抱き止めたくなり抱きしめる。

身体で存在を感じたくなる。

「ありがとう。束……話してくれて」

「別にいいよ。話せてスッキリしたし」

「うん。それでそのごめん」

「何が？」

「明後日から寂しい思いや不安な思いをさせてしまう……」

「分かっているよ。我が俣言ってあまり綾を困らせたくないからね。束さんも頑張って我慢するよ」

「ありがとう……ごめん」

「まあ、何で謝るのかな？いい子だから謝らなくていいんだよ」

何を言っているのか分からず唯だ謝り続けていると束は抱きしめて俺の頭を優しく撫で始めた。

母性愛に溢れていて何やらさつきとは逆転している。

本当に強いし束には本当に敵わないな。

それに比べて“俺は屑”だ。

「ただ、やっぱり束さんはまだ、心細くて不安なので一緒に寝る事。いいね？」

「取ってつけた様に言うなよ……だが、いいよ。そういう約束だか

らね

「そつと決まればそろそろ寝よ？」

甘えた声でそつ抱き付きながら束は言う。

うぁ……やばい、風呂上がりということもあって束の髪からいい匂いがする。

髪も艶ぽくて……そつ思ってくる何だか全身、色っぽく見えてくる。

「ふふっん」

「な、何？」

戸惑っている束は笑みを浮かべて甘えた色っぽい声で笑う。

そして、更に密着するように抱きついてくれる。

こいつ……わざとやってる。間違いない。

「色っぽい束さんに興奮したの？」

「ば、馬鹿言うなっ」

バレていた。

その上でわざつとやっている。

でも、本当に色っぽい。

束は俺が匂いフェチなのを知ってるから髪の匂いがするように密着してくる。

り、理性が！くぁwせdrftgyふじこー！

「ふふっ綾はかっこいいのに変な所で可愛いね」

「うるさいよ。そんな事、言っていると今日は一緒に寝てあげようと思っていたけど寝てあげないよ？」

立場を立て直す為に一旦、気持ちを落ち着かせて言う。
すると、ふざけている様な表情をだった束の様子はみるみる変わって。

「ずるいよッ！そ、それはなしッ！」

慌てた様に言っつてぶう〜と可愛らしくむくれていた。
計画通り。

やっぱりやらねばなしは癪に障る。
束を弄っているほうが性に合うに楽しい。

「はいはい、分かっている。からかっただけだから」

「うう〜！綾の意地悪ッ！」

「ごめん、ごめん。それで本当に今から寝るの？」

むくれている束にそう聞くと部屋にある時計を見る。
時計が察している時刻は夜、十時ちょっと過ぎ。
寝るには少し早すぎる時間だ。

「うん、そうだよ。いいじゃん！別に」

「はあ……分かった」

寝るには少し早いけど、寝る事にした。
部活で疲れたし早寝早起きは三文の徳と言っしいかな。
何より束のお願いだし聞かないわけにはいかない。

「じゃあ、電気消すぞ」

「はい」

先にベットに束が入ったのを確認すると電気を消しベットに戻る。
すると、ピツタリと束がまた、密着してくる。

「あの……近いんだけど」

「いいじゃん。ね？」

『ね？』じゃない。

じゃないんだけど……まあ、いいか。

少しでも束を満足させてあげられたら。

「それと、ね」

「ん？」

「手、繋いで寝てもいい？寂しいから」

「ああ、いいよ」

布団の中でもじもじと差し出された束の手を俺の方からそっと取る。
すると、束は目を細めてふにゃとした嬉しそうな表情をして俺の手

を握り返した。

繋いでいる手と手はしっかりと優しく握られていて束の手の感触が伝わってきた。

「ふふっこれなら、安心して寝られるよ。ありがとう、綾。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ。束」

束が先に眠ったのを確認し束の寝顔を見つめ頭を撫でつつ俺も眠った。

第三話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三話 ？。

私が思うに東は物凄く寂しがりやだと思っんです。

天才でハブられたってのもありますが純粹に寂しがり屋だと思いません。

この辺を覚えてくださると後々、繋がります。

原作の3巻の最後の方で夜、千冬と東がお互いを見ずに話していた所からヒントを得ました。

「つまらなさそうに」って所です。

その描写が私には寂しそうに見えました。

そして、何だかんだで主人公と東とイチヤイチャしていますね。

裏設定になるんですが二人はよく同じ部屋同じベット至近距離で一緒に寝ています。

清い意味でなんですがねwちなみに親は東が静かだから黙認です。

羨ましいぜえコンチクショー！

爆発しろ！

随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします

第四話（前書き）

再びの束視点です。
ちよっとシリアスぽいです。

第四話

東視点

木曜日の放課後、学校が終ると私と綾とちーちゃん、いつもの三人は家に帰っている。

木曜日は基本的にどの部活もお休みでそれは剣道部も例外ではなく私達は家へ帰っていた。

お休みという事だからいつもちーちゃんと別れる道では別れないでちーちゃんも一緒に私の家と言うよりも言うの道場に向っていた。

「ただいま」

「ただいま帰りました」

「お邪魔します」

上から私、綾、ちーちゃんの順で言い家の方ではなく道場の方には帰ってきた。

中を見てみると道場には篝ちゃんやいっくんがいて剣道の稽古をしている。

そう入り口で突っ立っていると私達に気づいた父がこちらに近寄って来た。

「おかえり。二人とも。千冬ちゃん、いらっしやい。今日はどうして？」

近寄ってくるなりそうちーちゃんに尋ねる父。

私の父は私の家、篠ノ之神社の神主をやっておりこの篠ノ之道場の師範もしている。

と、言っても門下生が綾とちーちゃんと篝ちゃんといっくんという小さなものだけだ。

多分、そのぐらいだったと思う……後は分からないし興味も大して興味、沸かないからどうでもいいや。

「今日は木曜日で部活が休みで丁度、いい時間帯なので一夏を迎えるに」

「そうか……今日は木曜日だったな。何も無いがもうすぐ終るからゆっくりしていつてくれ。千冬ちゃん」

「はい。ありがとうございます」

そう父は言い残すと稽古している子達の元へ戻っていた。

そして、私達は道場の端の方に座って稽古の様子を見ながら終るのを待っていた。

見ながらと言っても見ているのは篝ちゃんのいっくんの二人だけ。見ているのはそれなりには面白かったけど途中、飽きてきて足も痛い。

なんせ、道場では正座で座るのが基本であまり慣れていない私には辛く足が痛い。

平然と座っている綾とちーちゃんがちょっと妬ましく思う……冗談だけだ。

そして、待つこと30分ほど稽古は終わったらしい。

ううゝ殆ど正座しっぱなしで足が痺れて痛いし上手く立てない。

「東、足大丈夫？」

「大丈夫じゃないよ！綾、抱っこ！」

「抱っこって……はい、手に掴まって」

抱っこを要求したら普通に呆れて流されて手を差し出された。

シヨック……ちえっ、抱っこしてもらったついでに密着して匂いフェチの綾に匂いを嗅がせ様と思ったのに残念。

ま、いいか……まだ、私には夜があるわけだしね。

そう思いつつ私は差し出された綾の手に掴まって立たせてもらって帰り支度を済ませた篝ちゃんといっくんが向ってきた。

「千冬姉、お待たせ。綾さん、東さん、こんにちは」

篝ちゃんと一緒に私達のところに向ってきて挨拶をしてくれたいっくん。

いっくんこと、織斑おりむら一夏いちかはちーちゃんの弟でもあり私が関心の持てる人物の一人でもある。

いっくんはこの篠ノ之道場の門下生で綾曰く、筋非常によく門下生の中でも確固たる実力があり潜在的な強さや能力の高さは相当なものらしい。

ちなみに物凄い女たらしで高位のハーレム気質の持ち主でもあって……そして、篝ちゃんの未来のお婿さんでもあるのだ。

それは確定事項で異論は認めない。

それに無意識にだけど篝ちゃんといっくんの二人がイチャイチャしているのを見ていると楽しいしニヤニヤしてしまう。

ちーちゃん憧れて凜としようとする篝ちゃんもいいけど、いつくんの前では乙女になっていている篝ちゃんも可愛くていつもその光景を私と綾が見てはそのあまりの可愛らしさに萌もえている。
そんな私達を見てちーちゃんは呆れているわけだけでも。

「一夏、ちゃんと頑張ってる?」

「もちろんだよ。綾さんの方こそどうなの?」

「ほどほどに頑張っているよ」

「あっ、そうだ。いつものやろっよっ!綾さんっ!」

「そっだね」

そう言うと綾といっくんは荷物をいた道場の端に置き誰も居なくなつた道場の中央に行き二人、対するように向き合つ。

いつものかあ「アレ」が久々に見えるんだ。

最近は少し忙しくて道場に顔を出しに行くことが出来ないから見れるのは楽しみ。

「流派!」

「東方不敗は!」

「王者の風よっ!」

「全新!」

「系列!」

「天破侠乱！見よ！東方は赤く燃えている！」

二人は中央に行くを始めにポーズを取りそのまま様々なポーズを取りつつ互いの拳をぶつけ合うと綾、いつくんの順番に台詞を言い最後に一発、拳をぶつけ合った。

「あはは！最高だよ！二人とも！」

私は二人のその一連の動作を見て声を出して笑った。

そういえば二人はいつも合うたびに“コレ”をしている。

何かのロボット物の師弟の掛け合いらしんだけどいつもの綾のあまり考えられない熱いネタの走りっぷりについて、いつも笑ってしまふ。

いつくんもいつくんでノリノリだから余計におかしい……はあ〜本当に綾達は見てても飽きないな。

「はあ〜」

笑っている私とは裏腹にちーちゃんと篝ちゃんは頭に手を当て溜息をつき呆れていた。

面白いのに何で呆れるんだろう？

頭、固いなあ〜

「一夏……そ、その楽しそうだな」

「うん！楽しいぜ、篝！篝も一緒にしないか？」

「し、しないっ！」

いづくんに誘われているのに嫌がる箒ちゃん。
それを見ていづくんは少し残念そうな顔をしている。

確かにやれって言われたら私も恥ずかしくって出来ないかも。

「お前は毎回毎回、よくやるな……本当に。一夏もノリノリだし」

「ネタに走ってなんぼさ。もしかして、千冬もしたいの？」

「そんな訳あるか。馬鹿者」

「あいた」

コツンと裏拳の要領で軽くちーちゃんは綾の額辺りを小突く。

ちーちゃんがやったらそれはそれで面白そう。ギャグ的な意味で。

「全く、お前は」

ちーちゃんは呆れ気味に言っているけど何処か楽しそうでもある。
和気藹々としている綾とちーちゃんの二人。

そんな二人を見ていると胸が締め付けられる様な感覚に襲われる。
胸の奥がチクチクしている様にも感じ寂しい気持ちで一杯になる。
怒っているというほどではないが、不愉快な気持ちでいるのは確か。

「ねえ、姉さん。どこかいたの？つらそうだよ」

理解しきれない感覚に襲われていると隣から箒ちゃんの心配そうな
声が聞こえた。

顔に出ていたんだろうか

情けないな、私は妹に心配されるな

んで。

「ん？そうかな。そんな事はないんだけど……私おかしな顔をしてた？」

「うん。泣きそうな顔だった」

私はそんな顔をしていたんだ……ダメダメだな。

すっかりしないと、こんな顔、綾にはあまり見せたくない。情けなさ過ぎて本当に泣きそうになっしまうから。

本当に何なんだろうか？ この痛みや気持ちの原因は^{正体}。

「大丈夫だよっ！ 篝ちゃんっ！」

「うん。なら、いいんだけど……」

その泣きそうな表情とやらを元に戻して元気をアピールするようになるべく元気な声で言ったけどまだ、篝ちゃんは心配そうだった。

流石の天才の束さんでも分からないものは存在する。

特に感情なんて私の専門外だから知りようがない。

いつか、分かるだろう。

この感情も私が日頃、綾に抱いている感情も。

「そろそろ、帰るか……一夏。外も暗くなっているし」

気づけば夕陽はほぼ沈みかけており外は完全に暗くなってきつつある。

流石に二人も私達もそろそろ家に帰らないと。
夕ご飯の時間だし。

「そうだな、千冬姉。じゃあ、箸……また、明日学校でな」

「うん。またね、一夏」

「帰り道、気をつけたね」

「バイバイ、ちーちゃん、いっくん」

道場、家の外まで行って仲睦まじく手を繋いでいるちーちゃんといっくんの背中が見えなくなるまで見送った。

「さて、私達も帰る？」

「そうだね。家では篠ノ之のお母さんの晩御飯が待っていることだし」

そうして、私達も自宅へと帰っていた。

…

第四話（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第四話。

今回は少女漫画にある片思いする少女の気持ちを参考にして書きました。

めちゃくちゃ乙女ですね。束さんは。

原作の過去もこんな感じならいいですね……（妄想&願望）

束さんはISが出来るまでシリアス担当となってしまうですね。その反面、千冬さんがメインヒロインばい担当をしています。それでもこの小説のメインヒロインは束さんです！

ちなみに主人公と一夏の掛け合いは分かりますよね？

某有名師弟の名シーンのアレです。

何となく一夏とも仲がよくて兄貴分なんだぞーってのを表現したかっただけで深い意味はありませんwww

随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします

第五話（前書き）

ちよい千冬デレタイムです

第五話

千冬視点

さて、今日から待ちに待った剣道部の強化合宿だ。

現在、私達はその強化合宿を行う合宿施設に来ており既に練習を始めている。

家で留守番している束には申し訳ない気持ちがあるがこの三日間は大切に使わなければならない。

私という女を少しでも綾に意識させる為に。

私は綾が好き。

初めて綾が篠ノ之家に越してきた時に束の付き添いで会った時に一目惚れしたのが始まりだ。

始めはただの一目惚れにしか過ぎなかったが綾と束と私と三人で一緒に行動するようになって更に段々、惹かれていった。

綾は少し破天荒な一面もあるが基本的に裏舞台で活躍する役者のようだ。

いつも、いつも、表舞台に立つのは決まって私や束で綾は私達の日陰で私達を支えてくれている。

決して表舞台には出ないという事はないのだが基本的に裏方に回って私達を引き立たせてくれる。

同年代なのに精神年齢は高く何処か達観していて私が困っている必ず手を差し伸べてくれたりと気が効いて優しくとっても頼りがいがある。

そんな綾だからあの束も心を開いて今では心を許して好きなんだろう。

そんな綾だから私は好きになったのだろう。

それを自覚したのはいつだったか忘れるぐらい私は綾が好きだ。愛している。

譲るわけにはいかない。東と絶縁になろうとも私は綾が好き、愛しているということは絶対に譲らない。

「よしっ！」

私はもう一度、この約三日間という強化合宿中に綾に私を女として意識させるべく意気込んだ。

悲しいかな、綾は私や東の事は幼馴染にしか思っていない。

よくて親友以上恋人未満といった微妙な感じだ。

「何が「よし」なんだ？」

「ッ！？りよ、綾！？」

意気込み正座しながら髪を束ね面タオルをつけていると横から綾の声が出て綾となりと同じ様な感じでした。

いろいろと頭の中で一人、考えていたものだからビックリした。心臓が悪い。

「い、いつからお前は隣に居るんだ！？」

「いや、いつからと言われても……千冬が「私の隣にいろっ！」と言ったんでしょうが」

うっ……そ、そうだった。

驚きすぎて忘れてしまっていた。

不覚……

「で、何がよしなの？」

「な、何でもないッ！忘れろッ！」

「へえ〜」

厭らしい笑みを浮かべる綾。

こいつは私をからかっている。

いつもそうだ、私や束をからかって楽しんでいる。

ドS、鬼畜が。

「言えない事でも考えていたんだね」

「ツウ！？う、うるさいッ！」

からかわれて恥ずかしさから顔が赤くなるのを感じる。

い、言えるわけないだろ。

お前の事を考えていましたなんて……恥ずかしすぎて。

何でこう……からかって愉しそうなんだ、こいつは。

「顔、真っ赤ですよ〜」

「ツ〜ツ〜ッ！！」

自覚していただけに他人、綾から言われ更に顔が赤くなるのを感じる。

こいつは本当に楽しそうにしながらいいよって。

本当にこついつところは束とよく似ている……少し妬ましく思う。
ただ、こんな風にかかわれ続けるのに免疫なんてあるわけがない。
恥ずかしすぎて死にそうだ。

「おい、神山。こつちにこい」

そんな時に男の顧問が綾を呼ぶ声が聞こえた。

助かった……こんな風にかかわれ続けたら私はどうにかなってしま
いそうだ。

そうされるのは嬉しくもあるが……慣れてないから余計に恥ずかし
い。

「ほら、呼ばれているぞ。早く行ってこい」

「はいはい。あっ、そうだ。千冬」

立ち上がり呼ばれた顧問の方に綾が向おうとすると振り向き様に私
の名前を呼んだ。

表面上は冷静を保っているが内心は先ほどからかわれた事で混乱し
ている。

それに何だか妙に嫌な予感がする……

「な、何だ？」

「さっき、顔真っ赤になった“ちーちゃん”可愛かったよ」

「ツツ……!!は、早く行ってこいっ!馬鹿者ツ!……」

「はいはい」

そうほがらかな笑みを浮かべながら綾は行ってしまった。

こんな破壊力が凄まじい爆弾な言葉を残して。

くそ……私の今の顔は絶対に真っ赤だ。さつき以上に。

それに真っ赤だけではないのもわかる……頬が緩みきってふにゃとした表情をしているだろ。

「可愛い」なんて言葉を綾からそう言っただけで貰えた。

そう思うだけで胸が一杯で温かくなる。

だが、やはり恥ずかしいのは変わらない。

綾め、覚えているよ。いつか仕返ししてやるからな。

そんな決心も抱えつつやっぱり嬉しい気持ち、一杯で私は練習に打ち込んだ。

・
・
・

練習に打ち込んでいて気づくと夜になっていた。

強化合宿だという事で練習もハードでいつも以上に疲れるかと思っ
ていたがそうでもなかった。

あの嬉しい（忌まわしい）言葉が予想以上に私に力をくれた様でそ
んなには疲れなかった。

部活の時間が終わるとお風呂に入り夕食を食べ明日のミーティングを
すると後は自由時間となっていた。

そして、自由時間となった今、私と綾は合宿施設にある外付けのテ
ラスにいる。

当たり前前の事だが自由時間でも外出は認められてないのだがこのテラスの使用は認められている。
このテラスは天上が窓ガラスとなっており夜空が綺麗に見え周りにもちらほらと部活仲間がいる。

二人つきりというのは流石に無理だが実質、このテーブルに座っているのは私と綾だけなので私的には大満足。

「綾、ここの夜空は綺麗だな」

「そうだね。雲一つなくて星が見え、綺麗だね」

何気ない話をしつつ私と綾は夜空を見上げる。

綾が言った通り夜空には雲一つなく沢山の星々が綺麗に輝いている。二人きつり……では、ないが綾とこう二人して夜空に浮かぶ綺麗な星々を見ているのは何というかロマンチックに感じる。

「今頃、束はどうしているのかな？ 箒に迷惑を掛けてないといいけど……」

「そうだな……」

「多分、束の事だから俺の部屋で勝手に寝るな。荒らされてないといいんだけど」

そう綾は夜空に浮かぶ星空を見ながらぶつぶつと束の事を言っている。考えている。

束があんな破天荒な性格だから篠ノ之のご両親も持ち余して綾に頼りきって完全に綾に任せきっている。

それ故に綾がいつも束の事を気にかけて離れていても心配して考えるのは分かるのだが……

正直、言つとやめてほしい。
複雑な気持ち、モヤモヤとした嫌な気持ちになる。
こいつに悪気がないのもわかってはいるのだが、私は嫌だ。
私もまだ、十四歳とはいえ一人の女だ、二人で居るのに別の女の話
をされるのはいい気分ではないしむしろ嫌だ。

「綾……」

「何？」

「その……今は二人なのだから他の女の話はやめて欲しい」

「あ……ごめん。不謹慎だったね、ごめん」

意を決して言つと綾は申し訳なさそうな顔をして謝つた。
う……口で言えないと伝わらないから言つたがこんなにも申し訳な
さそうな顔をされるとは。
言っている事は間違いないのだがこんな顔されると悪い事した気に
つてくる。

「そ、そんな顔をしないでくれ。ただ、言つておいて綾に覚えて欲
しかったから言つたまでで」

「そうか……分かった。何かごめん、千冬」

「だから、謝るな。馬鹿者」

そう語気を強める様に言つと綾は困つた様に苦笑いをしていた。

「はあくでも、これで一日目かあ……メンドクサナイな」

「何を言っているんだ。だらしない。そんな事を言っているから鍛えが足りなくていい成績を残せないんだ」

「ちーちゃん酷いよ〜人が気にしていることを」

「束みたいな言い方するな。事実、そうなのだから受け止める」

「分かっているけどなあ」

そうまだ、不満がある様に綾は言う。

こいつはまったたく……本当に。

本気を出せば余裕で優勝を狙える程の実力があるのにそうしようと思わない。

少しめんどくさがり屋でもあるがやはり、私達を目立たせて引き立たせようとしている。

他人の事ばかり考えて自分はオマケ程度にしか考えてない。どうしたものか……

「まあ、その、なんだ……が、頑張っている綾の姿はその、か、かっこいいから……もっと頑張れ」

「へっ？」

こいつに少しでもやる気を出させて頑張れる様に勇気づける言葉と言おうとしたが変な事を言ってしまった。

ああ……私はなんて恥ずかしい事を。

こんな事を言うもんだから綾は呆気に取られている。

変な事を言っているという事を自覚しているだけに自然と少しずつ顔が赤くなっていく。

今日、何回綾の事で赤くなるんだ……私は。

「そうか……ありがとう」

「うう〜」

物腰柔らかい笑顔でそう言われるとつい変な声が出てしまった。

情けない……顔は真っ赤だし変な声は出してしまっし本当に情けない。

手のかかる弟、一夏がいるから姉として凜然でいようと心がけているはずなのに綾の前ではどうしても崩れてしまっ。

気を張っているのが馬鹿らしく思わせるような雰囲気は綾はかもし出して私を乱す。

綾の前では私も恥ずかしながら“恋する乙女”になってしまっ。

等と恥ずかしい気持ち一杯で悶々と俯き加減に考えていると綾は一つ、いつもの様な卑しい黒い笑みを浮かべる。

それを俯きかげんに見てしまっとまた、変な声を出してしまっ。

「ひゃッ!？」

「ふふっ、可愛い声を出すね」

私が出した変な声を綾は聞きその黒い笑み、一杯で言う。

くっ……また、からかわれた。

言い返せば済む話だが今だ恥ずかしさが続いていてこの綾の表情から目が離せない。

「俺も……頑張っている千冬の方がカッコいいと思うから明日もこの調子で頑張って」

そう綾は先ほど一瞬見せた、卑しい黒い笑みを隠してほがらかないっつもの笑みで言った。

「カッコいいか……」

言われ慣れているし嬉しいのは嬉しいが少し不満だ。

やはり、私も女なのだから言ってくれるのならカッコいいではなく可愛いと言われたい。

「恥ずかしいが。」

「その……わ、私はカッコいいのか？」

「そうだよ。千冬はカッコいいよ。いつも凜と凜然としていて……いや」

「恥ずかしいのを精一杯堪えて言っただけで欲しい事を隠しつつ聞いてみると、予想通りの言葉を言ったが途中、私の顔を見て言うのをやめた。」

「まさか……気づかれたのか?!」

「バレないようにポーカークフェイスを装っているのに。」

そして、その疑問は現実の光景として証明された。

綾はいつも以上にほがらかでにこやかな優しい笑みを浮かべ優しい声色で言う。

「千冬、君は綺麗だよ……それでいてとっても可愛い」

好きな人からそう言われて頬がまた、更に熱くなるのを感じそれと

同時に胸が熱くなるのを優しい温もりに包まれるのを感じる。

まったくこいつは質が悪い。

見透かしているかのようにしてほしい事をしてくれたり言っしてほしい言葉を上手く言ってくれる。

それは嘘でも立ち前でなく本心からそうしてそう言っているから尚更だ。

だから、こんな事を言われても私は嬉しくてつい、黙ってしまふ。

「いつもの千冬はクールビューティーでかっこいいけどこうして照れている千冬は本当に可愛いね」

「だ、黙れっ！」

強い口調でも言うものの嬉しくて顔が赤いのが元通りにならない。それに気を抜けば、口元が緩んでそれにつられて頬もふにやとなっ
てしまいそうになる。

「そろそろ、終身時間だしお互い部屋に戻ろっか？それ以上、千冬をからかい続けていたら気絶しかねないし」

「う、うるさいっ！」

綾と部屋の前で別れるまで頬が赤いのは……いや、眠りにつくまで頬が赤いのは収まらず。

眠ろうとしても綾に言われて嬉しかった事が頭の中で何回もリピートして胸がドキドキして寝るに寝れない、

ある意味、最高（最悪）の強化合宿一日目だった。

・
・

一日目から早三日経った。

この強化合宿も今日の午後までで終わり強化合宿を終えた私達は地元へ帰ってきて家に向かっている。

一日目もいじられからわかれ続けたが二日目、三日目もからわかれ続けた。

言い返そうとするがその度に私にとって嬉しい事ばかり言ってきて上手く言い返せない。

だが、私もからかわればなしではまけばっなしでははいはられなかった。

練習が終って小休憩に入った綾にスポーツドリンクを渡したり汗が出ていたので拭いてあげたり前当てタオルの替えを渡したりしてやった。

ん……？あれ？これってやり返したと言っただろうか？

「今日もハードだったね」

「そうだったな。ま、お前は私をからかって楽しんでいたが」

「あはは」

「笑い事ではない。まった……」

こんな風に他愛もない話をしながら私達は二人並んで帰宅路を歩いている。

時間は夕方で道が空に浮かぶ夕陽で茜色に照らされており私達の影が二つ並んでいる。

哀愁を感じさせるような雰囲気だ。

周りに人が居ないのを人の気配を確認すると私を綾に問いかけた。

「な、なあ？綾」

「ん？何？」

問いかけると私達の歩みも自然と止まった。

いざ、問いかけたもののこれから言う事に緊張してどもってしまった。

言うって決めてたんじゃないか！しっかりしろっ！織斑千冬！！

そう自分に強く言い聞かせながら意を決して言った。

「今度の日曜、私と二人つきりでデートしてくれッ！！」

そう、いろいろな気持ち混ぜあって赤くなっている顔を茜色の夕陽で隠しながら私は言った。

第五話（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第五話。

何故か千冬がメインヒロインをしているという変な回でした。
あくまで絶対にこの小説のヒロインは東で東一筋です。

千冬もめちやくちゃ乙女ですねwww原作ではめちやくちゃクール
デューティーな千冬さんですが、
昔はこんな感じに「恋する乙女」ではなかったのなかぁ〜という私
の妄想です。

主人公を好きというのをはっきりしてしまし「恋する乙女」ですね

www

まあ、好きな理由は定番ではあるんですが……（汗）

ちなみに後、二話は千冬のターンです。

デレ千冬を楽しんでください。

可愛く掛けていたのなら幸いです！

ですが、メインヒロインは東です！

この小説でダブルヒロインとかハーレムとは論外なのであしからず。

随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします

第六話 ？（前書き）

まだまだ続く千冬のデレターン！

第六話 ？

綾視点

ついに日曜が来てしまった。

起床して起き上がると同時にそんな事を思った。

今日は日曜日であり……強化合宿が終った日曜日に千冬に「今度の日曜、私と二人つきりでデートしてくれッ！」と言われたその今度の日曜日でもある。

あの物凄い勢いのあまりOKを出してしまった。

あの状況で意味が分からないから却下する事も出来たかもしれないがああのがあんなに言われたら断る事が出来ないし

それに何か思いつきり決意をした様だったから断る事はできなかったししなかった。

「考えても仕方ない……起きるか」

現在の時刻は八時ちょっと過ぎ。学校がある日より少し遅めに起きた。

約束の時間は十一時。まだ、約束の時間まで余裕があるけど早めに身支度をしと置くか。

そう思いつつベットを抜け出そうとしたがガシツと体を手で掴まれて拒まれる。

掴まれた方を見ると俺の体の隣がもっこりと盛り上がっており布団に人が入ってる事を証明していた。

「束か……」

布団を捲って中を確認すると彼の腰に手を回してガシッと抱きついている束が気持ちよさそうにまだ、眠っていた。

どうして束がここにいる？昨日はこんな事になるだろうと思って別々に寝て一緒に寝てないのに。

ってか、どうやって入ってきたんだ？こいつは……ちゃんと戸締りしているのに。

まあ、鍵は締めてないけど。

「何て力だ。離れないッ！」

「んー！んー！」

起すのも休日だし可哀想と思い剥がして俺だけベットから抜け出そうとしたが束は離れない。

引き剥がそうとするが束は物凄い力で更に引っ付いてきて離れようとしな。

むしろ、抱きつく力は強くなり離そうとせんばかりに強い力で唸って嫌がる。

こいつ、起きてるよね？こんなに「んー！んー！」唸っているし。

「いい加減に離せッ！」

「嫌！」

い、嫌！？

こいつ、本気で引き剥がそうとすると「嫌！」と言った。

起きている。迷惑を掛けてくれるのは嬉しいがそれは別の都合のいい日にお願したい。

こんな事言っても束には意味がない事は分かっているから言わないけどもいい加減に離してほしい。
千冬との約束の時間に遅れる。

「起きてるなら離して！頼むから！」

「絶対、嫌ッ！」

頼んでも決して離してくれない束。

いつもならいくらか譲歩してくれるのに今日の束は駄々を捏ねていつも以上に聞き訳がない。

まさかとは思うが千冬と出かけるのを引きとめようとしているのか？
まさかな、いや、そんな筈はない。

束には一切話してないのだから。

そうして束と攻防をベットの上で攻防を繰り返しているバランスを崩してドタンと音を立てながらベットから二人そろって転げ落ちてしまった。

「束、大丈夫？」

「大丈夫だよ」

転げ落ちて束が床と衝突しそうになった瞬間、束の背中に腕を回し抱く様にして衝突を回避した。

束は軽いためクッション代わりに回した腕も何ともなかった。
だが、次に新たな問題が起こってしまった。

「さ、離して。起き上がるから」

「やだっ！」

転げ落ちて束が床とぶつかりそうになるのを回避する為に、腕を背中にして回してクッションした為か端から見ると俺が束を押し倒している様に見える。

俺がすぐさま起き上がれば何も問題はなのいだが束が俺の背中に手を回し抱きついてまた、離そうとはしない。
本当にどうしたんだろうか……今日の束は。

俺の気のせいなのかもしれないが今の束はこうしていることが何処か楽しそうに嬉しそうに見える。

だが、時間も余裕がなくなってくるしこの体勢の姿を見られたらやばい。

そんなフラグを立ててしまったと気づいた時

「兄さん、姉さん。起きてる？朝ごはん出来たんだ……け……ど」

運悪く本当に物凄く運悪く部屋に箒が入ってきた。
そして、俺達のこの体勢を見るなり黙る事、数秒。

箒は動き出した。

「えーと、お邪魔だったよね？ご飯できてるから冷めない内に早く降りてきてね」

そう大人な暖かい暖かい態様をして箒は部屋を出て行った。
絶対、勘違いされたよ。コレ　ちくせう。

「えへへ勘違いされちゃった」

「黙れ」

心なしかとつても嬉しそうにしている束に溜息を付きつつ嬉しそうにしている隙をついて起き上がると下に下りて朝食を食べて身支度を整えた。

朝から幸先悪いな……朝から不幸だ。
せめて、千冬の買い物ぐらい楽しくゆっくりしたいものだ。

・
・
身支度を整えた後、束をやり過ごし早めに家を出ると二駅ほど電車に乗り千冬の待ち合わせ場所に行った。

地元は田舎と言えば田舎だがそれなりに発展しておりショッピングモールとかありショッピングできるが千冬はこの街を指定してきた。まあ、電車で二駅ほどかかるが地元よりは遥かに発展しており店も充実しているし来るのも以前、束と二人で数度ほど来たから別にいけど。

「時間は……」

腕時計で時間を見ると時間は約束の時間まで十五分ほどある。俺が早く着すぎただけでまだ、約束の時間にはなっていない。待たせるようにも待つほうが好きだし待とうかな。

そう思った時だった

「綾、来ていたのか」

腕時計で時間を見ていると千冬の声が聞こえた。

顔を上げて声を聞こえた方向を見ると白いワンピースに黒いカーデイガンを羽織っている千冬の姿が目に入った。

千冬はその姿を見ての感想は綺麗の一言。

千冬の姿は可愛いと言うよりは綺麗という言葉がよく似合う。

同じ年なのにその姿は綺麗で大人びていた。

「それでだな。そ、その……どうだ？」

あまりにも綺麗だったから見惚れていると千冬に問いかけられた。

どうだ、と言うのは服装の感想だろう。

いつもの千冬ならこんなことは聞かないが今日は特別か。

感想　言う事は決まっている。飾らず素直に見て思った感想を言う。

「服、とってもよく似合っている。クールビューティーな千冬らしくて綺麗、だよ」

さりげなく褒めるのは常識らしい　前、読んだ本からの知識のだが。

端から聞けばクサイ台詞なのかもしれないけどこの言葉は俺の素直な感想であり本音。

本音だから自然と言えたのかも知れない。

「そ、そうか。えへへ」

いつもの千冬とは違い頬を赤らめて素直に嬉しそうにしている。

千冬から「えへへ」なんて甘い声が聞けるなんて思っていなかった。凄惨な破壊力だ。表面上は平然を装っているが今の千冬のあまりの可愛さにニヤけてしまいそうになる。

ニヤけそうになるのを何とか耐えていると手を差し出された。

「ん？」

「ん？じゃない。せつかくのデ、デートなんだ。手ぐらい繋ぐものだろ」

そう千冬は恥ずかしいのを我慢しているかのように努めて平然と言う。

確かに女の子とのデート買い物で手を繋ぐのも常識らしい。これもまた前、読んだ本からの知識なのだが。

女の子と手を繋ぐのは初めてじゃない。束と出かけたときによく繋いでいるし。

でも、いざデートと思って手を握る事を意識すると何だか俺まで気が恥ずかしくなってくる。

が

「……………」

差し出された手を握る。

手を握ると千冬の頬は更に真っ赤になっている。

おお〜可愛い表情だ。

そんな表情を見ていると悪い癖でつい、からかいたくなって

「顔、真っ赤になっていますよ」

「ツツ！？」

赤くなっている事を自覚したのか驚いている千冬。

すると、驚いた衝撃でぎゅー！と俺の手を握る千冬の手の力が強くなる。

それが痛いなんの。流石はブリュヒンデ（戦女神）と呼ばれるだけある。凄い力だ。

このままの力で握られ続けていたら手がお亡くなりになりそう、なんとかしなくては。

そう思い千冬が握っている力を逃がす為に動く指を全力で稼働させ指を絡める様にして優しく握り直した。

ちなみにこの握り方は俗に「恋人繋ぎ」と言うらしい。

「……じゃあ、行こうか」

「あ、ああ……！」

千冬の手を引きながら歩き出すと千冬も同じく歩き出す。

少し驚いた事にもう一度、優しく握りなおすと千冬も優しく握り返してくれた。

手に伝わってくる女の子独特の手の感触と体温にちよっぴりドキドキしながらも千冬の心なしかの嬉しそうに表情を

横目で楽しみつつ待ち合わせ場所から歩き出した。

第六話 ？（後書き）

と、いうわけではいかがだったでしょうか第六話 - ？

前書き通り今回も千冬のデレターンでした。

まだまだ、このぐらいは序の口な方です。

？がいろいろとすごい事になっています。

今回は本当なら千冬視点で書こうと思いましたが話に移り変わるのに視点が続きますし一身上の都合によりやめました。

束のデレも前半に書いてみましたがいかがだったでしょうか？

何とも可愛らしい感じに書いたのですが……ちょいデレがデレに勝

つのは難しいですね。

そして、篇は空気を読みすぎていい子過ぎる。

早くデレデレな束の甘々な話を書きたい。

随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします。

第六話 ？（前書き）

さあ、お待ちせの第六話ー？です。
皆さん、存分にデレデレ千冬に萌え悶えて下さい。

ちなみにサブタイトルは

『俺の知っている千冬が本当はこんなにデレデレで可愛くないわけがない』

ですwwww

第六話 ？

「やっぱり、ここのショッピングモールは凄いね」

「そうだな」

俺達は待ち合わせ場所から少し歩いた所にあるショッピングモールに来ていた。

やはりここのショッピングモールは何時来ても凄い。

様々な店が充実して立ち並んでおり地元のショッピングモールとはかなり違う。

「〜」

ショッピングモール内の店を見て周りながら歩いているのだが千冬の機嫌はいつにも増していい。

普段は歌わない筈の鼻歌も小さく楽しそうな声で嬉しそうに歌っている。

そんなに今日を楽しみにしてくれていたのか……そう思うと何だかこちらまで嬉しくなってくる。

「ふふっ」

洋服店に入って適当に千冬の服を見繕う様に見ていると隣で突然、千冬が微笑んだ。

その笑みはふにゃ〜と頬が緩みきっておりいつもの凜然としている千冬からは想像が付かないほど可愛い。

「ん？どうしたの？千冬」

「いや、何でも」

問いかけるとそう聞かれてしまった。

何でもと言う割には相変わらず楽しそうで嬉しそう。

その証拠に千冬は今も繋いでいる手を何でも握りなおしている。まるでこの刹那^時が“至福”であることを噛み締めるように。

「そろそろ、昼ご飯にしない？」

腕時計を見ると時計の針は十二時三十分過ぎを差していた。

店を見て周っていて気づかなかつたがそろそろお昼ご飯を食べるの
にいい時間だ。

いや、むしろ遅いぐらいかもしれないが。

「そうだな」

「何処がいい？と、言っても軽食ぐらいしかご馳走できないけど」

「いや、気を使わなくてもいい。自分の食事だいぐらい自分で出す
から」

「こんな時にぐらいはカツコつけさせてよ。ね？」

「そ、そうか……なら、ご馳走になろう」

数秒、迷ったが千冬はご馳走させてくれた。

こんな時ぐらいいは男としてカツコつけさせてほしい まあ、こんな時ぐらいいしかカツコが付かないのだが。

行く店は大体、三つほど決まっている。

その中から千冬に一つ選んでもらい向った。

向った店は皆大好き「ワクドナルド」、定番のファーストフード店。月のお小遣い三千円の俺にとっては良心的な値段の店だ。

注文をして品を受け取ると空いている席を見つけて座る。

座った席は四人用の窓側の席で俺と千冬は隣り合って座る。

本来なら真正面に座ればいいのだがこれでは逆に緊張して楽しくなくなるので緊張しないというの考慮して隣り合って座った。

「ワックク食べるの久しぶりだな」

「そうだね。基本部活が毎日あって休みの日もそんなに遠出しなからね」

等と、他愛のない雑談をしながら食べていく。

ワックク自体、食べるのは本当に久しぶりだ。

毎日、食べるのは遠慮したいがたまに食べる程度なら美味しく感じる。

久々に食べるワッククの味を楽しみながらハンバーガーを食べ終える。

「綾、ちょっと」

「何？」

名前を呼ばれ何かと思い振り向こうとした時だった。

頬をペロツと舐められる感覚が伝わってきた。

その感覚に数秒、思考は停止していたが直ぐに再起動させ一瞬で状況を再確認した。

「千冬……?」

「ケ、ケチャップが付いていたから取ってやったんだ」

その顔を真っ赤にさせながら！マークは付かないものの語気を強めて言い張る千冬。

取ってくれたのは嬉しいが何も舐めて取らなくてもいいのでは？
言ってくれば自分で取ったし　そう言おうと思ったが今の千冬の迫力に圧倒され言うのはやめた。

人前でこんな事をするなんて　今日の千冬はいつも以上に大胆だ。
まるで束の様だ。

「そうか……あ、でも、自分でしておいて赤くなるのはどうかと」

「うるさいっ！」

更に顔を真っ赤にさせた千冬は言い返してきた。
素晴らしいツンデレクーデレですね。分かります。

そんな風にラブコメをしつつ俺達は昼食を楽しんだ。

・
・
・
楽しい楽しいデートシヨッピングの終わりを告げている夕方。

あのシヨッピングモールを後にした現在、俺達は地元へと繋がる電
車に揺られ帰っていた。

車内には人影は少なく夕陽で茜色に照らされている。
そして、茜色の夕陽に照らされながらぼーっとしているとふと、肩に重さを感じた。

「すう〜すう〜」

隣を見ると千冬が俺の肩を枕代わりにして可愛い寝息を立てながら眠っていた。

その寝顔にはいつもの凜然としている様子は何処にもなくただ、あどけない寝顔をしていた。

多分、疲れたんだろ。

今日の千冬はいつもに増してテンションが高かった訳だし。

いや、でも、本当の今日の千冬のテンションは高かった。

デート中、流石に長時間、異性と手を繋ぐのは恥ずかしいから離そうとすると拗ねるし、

お陰で長時間、繋ぐことになって今も眠っているのにも関わらず手に意志があるかのように手を繋いだまま。

「まあ、いいか。刹那至福の様な一時だったわけだし」

そんな言葉が口からぼそつと小さく出る。

今日は本当に楽しかった。いつも見れない様な千冬表情も見れたことだし、

それに何より、“至高”の刹那至福を味わい尽した。

後は隣に束が入ればこの刹那は更に止まった様に不変の輝きを放つだろう。

そんな事を思いつつ千冬の寝顔を堪能しながら電車で揺られ続けた。

電車を降りると俺達は残す事は家に帰る事のみだった。
電車を降りて帰宅路を歩いている俺達は特に話さなかった。
話したとしても今日の感想を少しで後は特にとっては話さなかつた。

沈黙はもちろんあったが重苦しいものではなく心地良い沈黙だった。

「なあ、綾。少し公園によっていいか？」

そう隣で手を繋いで一緒に歩いている千冬が言った。

見渡すとそこには大きく綺麗な噴水が目立つ公園がある。

その公園は昔……と言っても小学生三年生ぐらいの時によく三人で来た隠れ家的な公園。

その事を思い出すと千冬の問いかけに頷いて答えその公園に寄った。

「懐かしいところに来たものだね」

「そうだな。昔は私と綾と束とよくここに遊びに来たものだ」

そんな話をしつつ俺達は噴水を背にした近くのベンチに腰をかける。
周りを見渡すと人は誰一人と居らずその公園は俺達だけだった。

立ち込める沈黙と背にある噴水の水の音だけが聞こえる。

そんな時、沈黙を破ったのは千冬だった。

「今日はありがとう」

「えっ？」

いきなりお礼を言われたが何のことだか分からない。
何の事に付いてのお礼かの頭の片隅で考えていると千冬は言葉を続ける。

「デートに付き合ってくれた事だ。あの時には勢いで頼んだがしてくれと言ってくれた時は本当に嬉しかった」

「そうか……それはよかった」

「ああ。それに今日はその頼んで受けてくれた時以上に嬉しかったし……それに楽しかった。本当にありがとう」

「いや、お礼を言われることは全然」

「それでも私は心からお礼を言いたいんだ」

「そ、そう」

本当にお礼を言われるほどの事はしてないけど千冬は力強くお礼を言ってくる。

「ただ、ここは素直に受け取っておく。お礼を言われるのは言われなくてないけどお礼を言われるのは悪い気分はない。」

「まあ、本当にお礼を言われるような事は何一つしてないんだけど。」

「それと……綾？もう直ぐ別れるから……今日の記念と言うか我が俣と言うか……兎に角、最後に一つお願いをいいか？」

「いいよ」

「ありがとう。なら、目を閉じこっちを向け。私が言いというまで」

そのままだ」

何をするかはまったくもって分からないし検討もつかない。ただ、言われた通り千冬の方に顔だけを向けて目を閉じた。千冬は今から何をするのかを考えられるだけ考えていると……

「んっ」

唇に柔らかい感触が当たっているのを感じる。

この感触は……唇だ。

そうだと分かると驚いて目を開けた。

すると、目の前には目を閉じて俺にキスをしている千冬が見えた。

何故、こんな事をされているのかどうという意図で千冬が俺にキスをしているのか分からない。

ただ、状況を確認するとキスをされているのがしっかりと分かると同時に

脳裏に鮮明の様で鮮明ではないような感じで悲しそうですれでいて寂しそうにしている束の様子が見えた。

そんないろいろな事があり様々な想いが交差する中、今日という“初めての分岐”の日は閉じたのだった。

第六話 ？（後書き）

と、いう訳でいかがだったでしょうか第六話 ？。

スーパーデレデレ千冬タイムでした〜

『ませた中学生だなあ〜』と思いつつ書いてみましたが
めっちゃデレデレで大胆ですね。千冬さん。

千冬がヒロインし過ぎて……いや、なんでもありませんよ。

今回は束さんのターンです。

ただ、デレとかはありません。

どちらかというとデレとは真反対のシナリオです。

こっご期待を！

随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします。

第七話（前書き）

今回はキャラ崩壊のスーパーシリアスヤンデレ束タイムです。
ご注意を。

第七話

東視点

カタカタカタと私がキーボードを高速で叩く音が部屋に響く。

私は一人部屋にいていつもの様に“ある物”についての基礎理論を考え纏めている。

ふと、目線をディスプレイの最下部の右端に表示されてある時計に向けると時刻は十二時三十分過ぎを指している。

昼食を取るには丁度いい時間帯。もしかすると遅い時間帯なのかもしれない。まあ、どっちでもいいや

「ふう〜」

目線をディスプレイから外しディスクチェアに深く凭れかかり天を見上げる。

十二時三十分過ぎ 本来なら昼食を取らないといけない時間帯だけどお腹は別に空いていないから食べたくない。

綾が居れば自然と食べるように促してくれるかもしれないけど。

「綾か……」

綾の事を思うと口から自然と綾の名前が出た。

出ると口元はまるで私の制御から外れた様にふにゃと緩む。

綾と言えば……今頃、ちーちゃんと楽しく仲良くデートしているんだろうな。

綾やちーちゃんは私にバレないように必死に隠そうとしていたけど逆にそれが仇となったバレバレ。

だって、ちーちゃん、隠すの下手くそだからこの一週間、浮き足立

つっていたし簡単に分かる。

それにちーちゃん…… “一人の異性として綾の事、好き” だから。

朝、行かないでほしいという強い本音と悪ふざけが相まって引き止めてみようと試みたけど無理だった。

がちりちりと捕まえてみてもあつさりと破られて軽くやり過ぎされてしまつて綾は出かけてしまった。

そして、綾とちーちゃんは二人っきりで私は自分の部屋で独りぼっちという無残で当然の結果だけが残った。

篝ちゃんは篝ちゃんदैいつくんと剣道の稽古をしていて本当に独りぼっち。

別に綾と二人っきりでいるちーちゃんを憎んでいるわけじゃない。

憎む理由なんて一つもないと思う。ちーちゃんの方が今回は一枚上手だったという訳だから。

ちーちゃんの事は好き、むしろ、愛している。それは親友としての域だけだ。

もしも、綾が居なくてちーちゃんが男だったらという “if” なら私はちーちゃんに恋に堕ちているだろう。

それほど魅力的で興味が尽きる事のない私が興味や関心をもてる数少ない人間の一人で大切な大切な親友。

私を本気で怒ってくれる存在の一人。

ただ、今回は妬みに近いのかもしれないけど羨ましいというだけの事。

「はあ」

重苦しい深い深い溜息が小さく出てしまった。

今の私の気持ちを一言で表すとしたら『不安』がぴつたり。そう、その不安な気持ちで一杯だ。

あの忌々しい剣道部の強化合宿が終ってから綾とちーちゃんの仲は私からして見ると更によくなっている。

その仲の良さは息がピッタリな長年連れ添った熱々の熟年夫婦の様。私が入る隙も邪魔する一つも私の見る限りは存在し得ない。

手遅れだ……もう、既に私は手遅れなのかもしれない。

私は全てから取り残され弾かれハブられている。

天才過ぎた。私は天才過ぎた。普通の意味の天才ではなく。

そんじよそこからの普通の天才が素晴らしい偉業を成したとされたとしても私がそれと同じ事をすればその素晴らしい偉業は“無意味”だったという事に成り下がる。

私はそのぐらい天才過ぎた。別に慢心している訳でも過信している訳でもなく事実そうなのだ（少し自惚れしているけど）

この世界は……いや、世界という物は『異種』を『自分とは異なる存在』を極端に嫌う。

“有史以来、世界が平等であったことなど一度もない” そう
という絶対的な事実があるののに人間は平等を求め。

だから、世界は人の世は異種を嫌い……下手すると異種を絶対に認めない。

そうした矛盾があり私は天才過ぎた故に世界からもそして、人の世からも弾かれハブられ続けている。
置いていかれている。

「んっ」

そんなどうでもいいような思考を振り払う為に私は作業に戻り没頭

する。

不安で溜まらないこの気持ちを私は忘れる為に。

そうしていても私の頭にはどうしても浮かんでしまう絶対的な存在が居る。

「綾……」

作業をしていてももう一度、綾の名前が口から零れた。

100%思考を高速で活動させていてもその内の50%は綾の事で一杯で綾の事だけで埋め尽くされている。

私が興味や関心を持てる数少ない人間の中で綾は特筆して特別な存在。

綾という存在は私の中でどんな人よりも特別で大切な存在 なくてはならない私にとっての絶対な存在。

綾はちーちゃんよりも高順位にある。

綾は昔から綾だった。

初めて私の家に引っ越してきて居候を始めからそこにいてそこに居てくれた。

昔、私は綾が苦手だった。初めて出会ったのにいきなり興味や関心を持ってた時は本当に驚いた。

そんな事があつたから始めのうちはどう接したらいいのか分からず冷たく接してしまっただけでも綾は“変わらず分け隔てなど一切なく”接し続けていた。

裏なんて綾にはありはしなかった。ただ、そうありたいと思う思いだけが愚直なほどの思いあるだけで……そんな綾だから私は次第に心を開いたのだろう。

私にとって綾が全てであり絶対的な存在。

こんな事を言ってしまったえばお仕舞いだけど綾が永劫、傍に居てくれるならちーちゃん達は要らない。
こんな狂った想いを例えるなら……

「愛……恋」

その二つの言葉とその意味が掲載されている電子辞書のページがディスプレイに映し出されている。

ああ……何だ。私も綾の事が異性として恋の対象として好きで恋に落ちていたんじゃない。

今の今更になつて漸く、気づいた。天才過ぎたと思つていたけど私は変なことで抜けていた。

そうだ、私は綾の事が好き、好きで好きで堪らない。物凄く好き、大好き。私は綾の事を誰よりも何よりも世界で一番愛している。

そんな風に綾が好きで好きで堪らない、綾への恋に落ちている事を自覚すると次第に胸が苦しくなる。

いつもの様な痛くて悲しくて辛い苦しみではなく甘く甘く切ない心地のよい胸の苦しみ。

ああ……これが恋をしている時、独特の感じなんだ……恋煩いつて奴かな。

「ふふっ」

ふいに嬉しい声色の笑みが零れる。

ディスプレイを見るとメモ機能のメモ帳にスクロールバーが出ない様に一面、一杯に「綾」の名前を打っており「綾」の名前だけで埋め尽くされていた。

狂っている様にも見えるこの行動。いや、狂ってる様にじゃなくて

元から私は狂っているんだ。

こういうのをヤンデレって言うんだっただけ。狂っている行動をしているのは自覚はあるんだけど何だか楽しくも感じる。メモ帳、一面に綾の名前だけで埋め尽くされているというのは。

「ッ」

その楽しい嬉しい気持ちとは裏腹に今度は胸が苦しくなる。胸の苦しみは甘く甘く切ない心地のよい胸の苦しみではなく不安に支配される苦しみ。

綾への思いによく気づいた代償と言わんばかりにその苦しみは『不安』は大きい。大きすぎてその『不安』な気持ちに押し潰されそうになる。

私は今、一人なんだ。独りぼっち……なんだ。

それは今だけはなくもしかすると最悪、不変のものとなる。

そうしたら……私は未来永劫、独りぼっち。

「……ッ」

そう考えてしまうと息が詰まって苦しくなる。

上手な呼吸の仕方が分からなくなって苦しい。

何とか息をして呼吸を整えようとするとももの息は乱れたまま。

ダメ、ダメ、ダメ！嫌だ、嫌だ、嫌だ！

未来永劫、独りぼっちは嫌だ。そんなの耐えれない。耐えたくない。

こんな不安に私は押し潰されるわけにはいかない。

この未来を破壊し続けてやる。永劫に。

世界そのものを私に“適応”させる。

その為には今、構築している“ある物”の基礎理論を考え纏め、いち早く実証しなければならぬ。

「……………」

無論、その“ある物”の基礎理論を考案、実証した暁にどんな事が待っているのかは分かっている。

多分、私は人の世から完全に弾かれハブられ拒絶される。

もしかすると、ちーちゃん達からも拒絶されるかもしれない。

だけど、それでもいい。

世界そのものが私に“適応”してくれるのなら。

綾が未来永劫、傍に居てくれるなら。

ちーちゃん達がもしも私を拒絶しても綾なら私の傍に居続けてくれる。

そう、私は確信できるし確信を持てる。

だって、昔、幼い日に綾は私に約束してくれた。

『何があっても絶対に東の傍に居る、永遠にいる。ううん、むしろ、居させてほしい』

そう綾は幼い日に私に約束してくれた。

綾は多分、覚えてくれているだろう。

指きり付きのたった一言だったけど私にはとっては思い出深く大切な大切な一言。

この一言は私の心の支えでありこの言葉のお陰で今日までやってこられた。

何も怖くない……『不安』がある必要はない。

私には幼い日に綾が言ってくれた言葉があり、私の隣には綾が居てくれる。

うん、大丈夫。だから、今はやる事をやる。

そして、私は“ある物”の基礎理論を考え纏め、いち早く実証する為に打ち込んだ。

…

第七話（後書き）

というわけでいかかだったでしょうか第七話。

今回は心理描写とかににめっちゃ力を入れたのですがどないでしょうかね？

その分、描写、心理描写がめちゃくちゃ多くなりましたが（汗）

今回は主人公と千冬さんのデートの裏側、東さん視点のお話でしたがシリラスとなりました。

東さんは漸く自分の想いも主人公への恋心にも気づきました。そして、ヤンデレにも……

Q どうしてこうなった…（＾　＾　）

A 当初からの予定です。

以前の後書きで言った「東さんは寂しがり屋」というのは東さんのヤンデレ化にも繋がっています。

天才過ぎるが故の孤独と主人公への想いが合わさってヤンデレへとしました。

シリラスな思考とこのヤンデレモ関係して東さんがISを開発した理由の一部となっています。

ちなみに東さんは依存型のヤンデレです。

ヤンデレとなりましたがほんの少しくらい手を上げても監禁したり殺したりは絶対にしません。

それは私がヤンデレキャラを書く上上での絶対的な決まりとしており殺してしまえばヤンデレではなく殺デレになってしまうと思いませんね。

それに私の持病みたいなものでもありません。ヒロインがヤンデレになるのは。瑠璃色で私のリリなの小説を読んでくれる人はよく分かると思います。

それと感想のほうである方がキャラが違いすぎると思つと書かれますが。

何分、二次創作でそれも過去編からの開始なので仕方ない思つています（言い訳）

それでも書く時には出来る限りそのキャラ“ぽく”なるように書いているのですが「違いすぎる」と思われるほど違うのですからね？
どうなんでしょう？

やっぱり二次創作も難しいですね。

と、長くなりましたが随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第八話 ？（前書き）

今回は前座みたいな話です。

ご都合主義的な独自設定がありますご注意を。

それとちよつと展開が速い気がしますすがご了承を。

第八話 ？

綾視点

今でも脳裏に鮮明に思い浮かぶ。

あの日、茜色の夕暮れに照らされてあの公園の噴水を背にしたベンチで千冬に唇にキスされた事が

その時と同時に束の寂しそうなで悲しそうな顔が脳裏に浮かんだ事が今でも脳裏に鮮明に強く思い浮かぶ。

千冬には「忘れてくれ……気にしないでくれ」と強く言われたが気にせずにはいられないし忘れられるわけもない。

あの日が始めの分岐点だったのかも知れない。

キスされた日から今日で優に一ヶ月経ったが違和感を覚える。

千冬は始めの数日間はその事を気にせずにはいらなかったみたいだがそれでも最近は束の様に千冬は俺にベッタリとなってる。

嬉しいと言えば嬉しいけども……そして、それに拍車をかける様に最近千冬と一緒に行動する事が多くなってきた。学校でも部活でも。

その事を千冬は喜んでいて、もしかすると、俺は千冬に好意をよせられているのか？

いや、そんな筈はないと思う。自惚れもいいところだ。

千冬も変わったけど束もあの日から変わった。

千冬と一緒にいる事が多くなって必然的にかは分からないけど束を独りぼつちにさせてしまう事が多くなった。

それは悪いと思う……どうにかしたいと思うけど思うだけどうにも出来ない。

教室で本を読んで独りぼつちでいる束を見るのは辛い、胸が苦しい。

どうにかしたいと思うがどうにも出来ない。

ただ、束は学校では以前ほどや干冬ほどベツタリしなくなった。その反動で家では以前よりもベツタリで決して一人では寝ようとなない。いつも、俺と寝る事をせがんでくる。

最初のうちは変だと思ったが、寂しそうで心細そうな顔をされ、今まで時折見せていた寂しそうで心細そうな顔とダブリ、最近はずっと一緒に寝ている。

寝ている寝顔は至福の様に幸せそうだけどせがむ時の表情は何処か狂っている様に見える。

置いていかれまいと必死になって壊れていつている　そんな感じに狂った様に見えた。

それに最近は三人で下校することもなくなった。

束は最近、おばさんの研究所に通っているらしく学校が終ると一人、束は通っている。

それにより俺達の部活が終るのを待つという事がなくなり三人で下校する事がなくなった。

嫌な激しい胸騒ぎがしてならない。

いいと悪いとも取れない胸騒ぎでただ、その胸騒ぎは気持ちが悪い。これから何か大きくて世界を破壊し変えてしまっほどの事が起きると告げているようで。

「……ここか」

そして、俺は束が通っているおばさんの研究所に来ていた。

この気持ちの悪い胸騒ぎを解消する為に。

束と会う為に。

息を一つ付き一つ吐いて俺は研究所の中に入る。

アポは事前にとって入る許可は貰っている。

ただ、束には「来ないで」と来ることを拒否されてけども。

だが、俺は束に会わないといけない　　会って確かめないとけない。
い。

束があんな風に寂しそうな悲しそうな表情をしているのかを　　ど
うして束から狂っている風に感じたのかを。

「いらつしやい、綾」

思い詰めながら研究所内を歩いているとおばさんに出合った。

おばさん　　名前は水城奈々。

自殺した俺の親父の姉でありこの研究所の最高責任者。

歳は四十代ぐらいだと思っただが二十位前半の様に容姿は若々しく
結婚もしており旦那さんは世界に大きな影響力がある有名資産家。

そして、世界的に有名な宇宙工学の権威でもあり束の師匠。

生まれもつての体質で子供は出来ないが俺や束を実の子供の様に分
け隔てなく愛してくれる。

ただ、その物腰柔らかい感じとは反対に性格が問題で物凄くマッド。
いろいろと狂っている世間では称されている自他共に認めるマッ
ド科学者。

「こんちには、おばさん」

「まあ、奈々さんでいいっていつも言っているでしょう」

「そうでしたね……奈々さん」

やりづらいタイプの人だ。
テンションが基本高いのに物腰が柔らかくおしとやかだったりと掴み難い。
こういうところは東と通じる物があるから東も俺達ほどではないけど普通に關心がもてるのだろう。

「それでよろしい！で、探し物は東ちゃん？」

「はい……何処に居るのか教えて下さい」

「んーどうしよっかな。東ちゃんには来させないで言っていわれているけども」

「それでもお願いします」

直ぐに奈々さんははぐらかそうとする。

人間味溢れすぎる人だからスペースに乗せられると簡単に家へと返されてしまう。

それだけは絶対に回避しないとここまで来た意味がなくなる。

「まあ、いいわ。東ちゃんの居る研究室に連れて行きましょう」

「いいんですか？」

「東ちゃんには「来ても連れてこないで」って言われてるけど言われただけで他は何もないしそれに別にどっちでもいいのよ」

話をしながら奈々さんは歩き出す。

多分、その束が居る研究室とやらに連れて行ってくれるのだろう。

「どっちでもいい?」

「綾と束ちゃんが会おうが会おうまいがどっちでもね。結局、今会わなくても明日ぐらいには必ず会うと思うしね。私にしたら案内するのが今日か明日かになるだけの話」

そう言いながらも通路を歩き続ける。

これはバレていたと言っているのだろうか。

今日、万分の一の確率で会えなかったらまた、明日も部活を休んで会いにこようと思っていた所だし。読まれている……という訳か。

「ありがとうございます」

「いいのよ。別に。可愛い甥っ子の頼みだしね」

「あはは」

通路を歩きながら奈々さんにウィンクされ乾いた苦笑いしか出来なかった。

ウィンクをかわしつつ俺は気になっていることを聞いてみた。

「奈々さんは束が何をしているのか知っていますよね?」

「ええ、もちろん。ここの最高責任者ですから把握はしてかないからね。でも、アレは凄かったわよ。私も自分を天才過ぎたと思っていただけで上が居たことを思いさらされたわ。異才ね」

複雑な気分になる。

世界的な宇宙工学の権威である奈々さんにこれほどの事を言わせてしまうとは……

今、束がしている事はそれほど凄い事なのだろう。

そう思うと更に胸騒ぎが何処が強くなるのを感じた。

「……」

「複雑そうな顔しているわね。まあ、そうなるわね。束ちゃんが創り出そうとしているのは“今の世界を破壊して新たな世界を作る”様な物だからね」

えっ？と疑問や驚きが入り混じった声が出そうになったと同時に

「着いたわよ」

歩いていた足を止めると大きな扉があった。

後、一步前に出たら自動ドアが開きそうなくらいのところまで立ち奈々さんを見る。

すると、奈々さんは既に俺の方に背を向けて通路を歩きここから立ち去ろうとしていた。

「奈々さんっ！」

「何？」

大声を出し呼び止めると奈々さんは立ち止まり顔だけ此方に向けてた。

「ありがとうございます」

「いいわよ……お礼なんて別に。まあ、私から言う事は……」「現実と向き合い目を背けるな」と、束ちゃんの総てを受け入れ愛してあげなさい。それだけよ」

本当にそれだけ言うと奈々さんは通路を曲がり姿を消した。

束の総てを受け入れて愛してあげなさい　か……

元より束の総てを受け入れるつもりだ。それが例えどんなものであったとしても受け入れる。絶対に。

だって……俺は束の事を　しているから。

そう思いつつ意を決し自動ドアを開けようとした時だった。

「ッ」

何ともいえない言えない感覚が体を走り向けぬけ。

ああ、やってしまった

その言葉が脳裏に浮かんだ。

何だ？ コレは。いや、今は余計なことは振り払おう。

振り払うように頭を振るうともう一度、意を決して自動ドアを開け中に入った。

第八話 ？（後書き）

というわけでいかがだったてじょうか第八話ー？。

千冬さんとの話をアレ後の話を書いててもいいのですが
そうしたら千冬さんがメインヒロインに完全になってしまいますし。
それに白騎士事件までちんたら書くのもアレなんでキンクリさせて
もらいました

ご期待とかしていた方はすみません。しつこいようですがメインヒ
ロインは東さんなので。

主人公のおばさん設定が物凄く都合主義とチートな設定になって
しまいました。

こうでもしないと理屈つかないのでご了承を。
原作を読んで疑問に思ったのですが東さんって始めてのISコアを
何処で作ったのでしょうか？

東さんは神社の娘という設定ですが……果たして神社の娘がこんな
凄い物を誰の協力もなしで作ったとは考え難いんですね。
だから、今回はそういう意味合いもあり書きました。

ただ、私の手元に現在、貸していて4巻までしかないのでこちら辺
が書かれていたら独自設定となりますが。

ご不明な点とかありましたら言っして下さい。

あ……ちなみにおばさんの名前は気にしないで下さい。

思いつかなかったので好きな人の名前を使わせて貰いましたw

一文字違うから大丈夫ですよ……w

それと活動報告でも書きましたが少し、一言二言でいいので感想をお願いします。

我が俣……というのは分かっているのですが読んでくださったのなら一言でもいいの感想は欲しいです。それはいつも言いますが純粹にモチベーションや書く意欲に繋がりますし

感想で今後の展開の参考になる事も多いですから……

ちなみにある人曰く「今はまだシャイな人たちしかいないんですよ！」「らしいですww

シャイとか萌えるジャマイカw

冗談ですwww多分(キリッ

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第八話―？（前書き）

今回は白騎士事件前の山場、見所、重要ポイントです。

いくつか作中に身勝手な独白論がありますが暖かいご理解とご了承をお願いします。

それでスーパーシリアスヤンデレデレ束さんタイムの始まりです。

第八話―？

自動ドアが開き中に入るとその部屋の奥には二体のロボットの様な物が並んで立っていた。

二体とも騎士ぽかったが一体は白、もう一体は黒と陰と陽の様な色合いだった。

そうした、二体のロボットに呆気を取られたが中へと進んでいく。

「~~~~」

研究室の中に入ったものの集中しているのか束は俺には気づかず楽しそうに鼻歌を歌って何かの作業をしていた。

何をしているのかはまだ、この段階では分からない。

だが、すごい事をしているのは確かだろう。奈々さんが言った“今の世界を破壊して新たな世界を作る”そんな事が出来るものを創っているのかも知れない。

「束」

「~~~~ えっ？」

束の後ろまで行き名前を呼ぶと鼻歌を歌いながら作業をしていた束の手と鼻歌は止まった。

そして、そのまま後ろを振り向き俺の顔を見ると小さく驚いた様な表情になる。

「……あ、えっと。どうして来たの？」

「会いに来た」

驚いて淡々としか言えない様子の束の問いに俺も短く答える。
突然の事で驚きが隠せないといった表情だが束も状況を把握してき
たようで表情が見る見る強張ってくる。

「来ないでって言ったじゃん」

「ああ、言ったね。でも、「絶対」には言ってない……でしょう
？」

「ずるいね、綾は」

ああと静かに頷く。

確かにずるいね、俺は。

漸く今の今になってどう事態が進んでいくか分かってきたと言っ
の。

俺には止める気なんて更々ない。

「それは？」

「これ？」

話を進める為にあの二体の事を聞いてみた。

すると、座っていた束は立ち上がり二体の傍に行くと言え

「これはね……通称、“IS”と言って正式名称はインフィニット・
ストラトスって言うの」

「インフィニット・ストラトス……か。いい名前じゃない」

「えへへ〜ありがとう」

名前を褒めると嬉しそうに束は可愛らしく笑う。
こんなところはまだ、変わってない。

「それでどういう用途で使うんだ？」

「それはね……」

説明はこうだ。

通称、“IS”。正式名称“インフィニット・ストラスト”。
宇宙空間での活動を想定し、開発されているマルチフォーム・スー
ツであり兵器としても運用可能。

ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマ
ーから形成されている。その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い
『究極の機動兵器』。

特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーと呼ばれ
るシールドによりバリアーや『絶対防御』などによってあらゆる攻
撃に対処でき、

操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。また、IS
には武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦
者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。

さらに、ハイパーセンサーと呼ばれる超高性能センサーの採用によ
って、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せ
る。

まさに『究極の機動兵器』。

そう束から説明された。

何だ……これは。

本当に宇宙服として束はこれを作ったのか。とてもじゃないが信じられない。

俺には宇宙活動を想定しての宇宙服と言うのはただの建前にしか思えない。

「えへへ〜凄いでしょ！褒めて褒めて！」

「……」

俺の方に詰め寄って抱き付き褒めてくれる事を期待するような表情を束はする。

抱き締めて頭を撫でて一応、褒めるものの言葉が出ない。

啞然としているか驚いているのかは自分でもよく分からないけど上手く言葉が出ない。

何と言ったらいいのか分からない。ただ、あるのは啞然と驚き。

束のこの“IS”に恐怖してない。これを作った束に恐怖はしない。むしろ、感動すら覚え始めている。この歳でこんな狂った《凄い》ものを束は作れるなんて。

ただ、やっぱり啞然と驚きは消えない。

そして、やっとの事出た言葉は問いだった。

「どうして……これを作った」

「だから〜それは宇宙空間での活動を想定しての宇宙服みたいなマルチフォーム・スーツとして」

「それはただの建前だ。俺が聞いているのは本当のことだ」

そう言うと笑みを浮かべていた束からは笑みは消え抱きついていて腕も解き俺から数歩後ろに下がるよう離れた。

離れると束はスカート裾を両手でぎゅっと強く握り下を向いて俯く。

場に重苦しい空気が立ち込め部屋の雰囲気は暗いものに支配される。

「……世界を私に適應させる為に私はこのISを作ろうとしている」

「どういっ……」

「そのままの意味だよ。この世界はあまりにも私に適應してない。だから、私はこの“IS”で世界を私に適應させる」

まだ、俯いて俯き加減に束は淡々と言う。

世界を束に適應させる？

そんな事で束はこの“IS”という究極の機動兵器を作ったというのか。

そんな事でたったそれだけの事で いや、束にとってしてみればそんな事ではないんだろう。

「どうして……どうしてそんな風に思ったんだ？」

「 れたくなかった」

「 えっ？ 」

小さく呟く様に言った束の言葉が今一つ聞き取れなく聞き返してしまっ

その聞き返してしまっただのがいけなかった。

壊れ崩れた。

束の表情は壊れ崩れた。

「置いていかれたくなかったの!!」

「ッ!？」

俺の両方の二の腕を掴み束は叫ぶ。

その声は悲痛で一色。

あるのは孤独感。

「皆、皆!! 私を置いていく!! 私に『天才』というレッテルを張って弾いて! ハブいて! 置いていく!!」

束は叫ぶ、悲痛に叫ぶ、叫び続ける。

今まで押えていた胸の内を全て吐き出すように。

「私だって、最初は皆に適応する為に頑張った! 努力だった! だけど、そうすればそうするほど私に対する拒絶は強くなって弾いてハブく! 置いていた!」

涙声になって束は叫ぶ、叫ぶ、叫び続ける。

今まで隠していた思いを全て表に出して吐き出すように。

「どうして?! ねえ!?! 私が悪いの!?! 天才であるしかなかった私が悪いの!?! どれだけ頑張ったって皆を恨んで拒絶する!」

「そんな事……!!」

そんな事ないとはつきりと言えなかった。

本当に今まで一度も束を拒絶した事がなかったのかと自分に問いかけると答えは帰ってこなかった。

否定できなかった自分が情けなくて辛い。

「そんな事！？ 本当にそうなの！？ なら、どうしてちーちゃん
とばかり！ ずっと一緒に私を置いていったの！？」

「違う……置いて行ってなんかっ」

「置いていった！ 綾は私を置いていった。私は置いていかれたくないのに！ 一番置いていかれたくない人達に綾に置いていかれた！」

二の腕を強く握り束は涙声で叫ぶ。

痛い、二の腕が痛い。だけど、これが今まで束が感じてきた胸の痛みなのかもしれない。

確かに俺は束を置いていったのかもしれない。

最近千冬ばかりと一緒にいて千冬の事を優先しすぎた。束が大事だとか言いながら結局、俺は束を置いていった。

後悔した時にはもう既に遅い。

こうなってしまった。

刹那という一瞬の“至福”を求め過ぎた故のツケ。

「だから、私はこの“IS”で世界を私に適応させる！ そうすれば私は置いていかれる事はない！」

「そんな事したらどうなるか分かっているのか？」

「もちろんだよ。私は天才過ぎるんだよ」

自分をあざ笑うかのような皮肉ぶるかのように束は笑って言う。
その笑みは涙でぐちゃぐちゃでそして、狂って壊れていた。

「そうすれば私は世界は私に適應しても人の世からは完全に拒絶される。もしかすると、ちーちゃんや篝ちゃんいつ君達からも拒絶されるかもしれない。それでも、私は別にいいの」

「いい？」

「だって、綾が傍に居てくれるんだもん。どんなになっても。綾は私の傍に未来永劫居てくれる。だって、昔言ってくれたでしょう？」

『何があっても絶対に束の傍に居る、永遠にいる。ううん、むしろ、居させてほしい』

そう束は昔俺が言った言葉を言った。

この言葉は幼い日に約束した言葉。

一人は独りぼつちは嫌だと泣き続ける幼い束に言った言葉。

ああ、やってしまった

その言葉が再び脳裏に思い浮かんだ。

ああ、やってしまったな。

束がこんなに思い詰めたの。

思い詰めてこの“IS”を開発しようとしているのも。

全て、全ては大元の原因は俺か。

「この言葉があるから私は壊れそうな今までをやってこれた。だから、置いていかれたことも流す。私、何があっても綾だけには置いていかれたくない！私は綾を絶対に離さない」

そう言つて東は掴む手の力を更に強くする。

「絶対に離さない！離さないっ！何があつても！絶対に私は綾の事は離さない！一人は嫌っ！嫌ッ！怖くて寂しいのっ！置いていかないでっ！置いていかないでっ！私を一人にしないで！」

東はそう俺の腕を強く握りながら悲痛に泣き叫ぶ。

俺の二の腕を掴んでいる両手はまるで絶対に俺から離されず置いていかれないようにしているみたいでまた、繋ぎ止めているみたいだった。

俺はただ、泣き叫んでいる東を胸の内に抱き寄せる事しか出来なかった。

これ以上、東が悲しまない様、これ以上、東が苦しんで壊れて狂つてしまわぬ様。

あの幼き日に言つた約束は東にとって今日まで在れた心の支えだったのかもしれない。

だけど、それと同時に呪いの言葉にもなっていたのかもしれない。だけど、気づいた時にはもう、遅い。遅すぎた。

「私はね、綾が好き。大好き！好き…超好き、凄い好き！死んでも好き！殺したいくらい好き！！言葉には言い表せないくらい…好き！」

東は俺に抱き付き俺の顔を見つめながら言う。

束は頬を赤らめて照れたように言うが瞳からはハイライトが消えていた。狂気、その一言に尽きる表情。言っている言葉も狂気を含んでいる。

だけど、恐怖は感じない。むしろ、愛おしささえが感じる。

「家族としてじゃなく、一人の異性、男性として綾の事が好きなの。誰よりも何よりも綾の事を愛している」

「束……」

束からの突然の告白。

こんな状況でとも頭の片隅で思ったがそんな状況だから言ってくれたんだろう。

こんな状況になってこんな事を言われたんだ。

流石の俺でもどういう意味での告白ぐらいかは分かる。

奈々さんが言った「現実と向き合い現実から目を背けるな」、束の全てを受け入れる。

そして……愛してあげる。

言われた時はちゃんとした事は分からなかったが今になって漸く分かった。

理解した。

「綾はどうなの？私の事をどう思っているの？」

「俺は……」

なら、今は返事をする。

束に対する想い気持ちを

「俺は……俺は束の事が好きだ。家族としてじゃなく一人の異性、女性として何よりも誰よりも束を愛している」

はじまりの気持ちが強かったのかなんて……もう、おぼろげだけだ。

初めて出会ったあの日からずっと惹かれていんだと思う。
大好きで大好きで何よりも誰よりも束を愛している。

許せなかった……束を取り巻く世界が。

どうして束だけをこんなにも酷くあからさまに拒絶するのかどんな考えても考えつくしても分からなかった。

そんなことに世界も人の世も悪びれる様子もなくむしろ、平然な顔をして……あまつさえ加害者でもあるくせに一方的に被害者を決め込んで。

束だけを拒絶して踏みにじった全てが許せなかった。

そんな何もかもから束を守りたかった。

他の誰でもない。俺の力で。

だから、どんな事、何があっても束の傍に絶対にいる。

それもあって“あの約束”をしたんだ。

そんな考えが端からしてみれば間違っているのかもしれないがそんな事は些細な事。

俺は何より誰よりも束を束だけを愛している。

そう俺も告白すると束から狂気はなくなった。

その代わりに一筋の涙が束の瞳から零れた。

「嬉しい」

そっと抱き返され俺も束を抱きしめた。
もう、後戻りは許されない。言ってしまった。
この気持ちに嘘偽りは無い。

束の傍に未来永劫、居る。

これぐらいしか俺に出来ることはない。

束を狂わせてしまった俺に出来ることは。

贖罪の気持ちもあるがそれでも束を好きだという気持ちの方が遥かに大きく強い。

そうしていると束を抱きしめていた手が振り解かれどうしたかと思っ
ていると…

「んっ」

唇に柔らかい感触があっている。

そう理解すると次に口内に舌が進入していた。

突然の事に驚き押し返そうとすると逆にキスの相手、束を喜ばせる
だけだった。

そうしていると段々、頭に甘い痺れだけが体に走り舌が勝手に束の
舌と絡み合った。

理性が束の甘い唾液と舌によってガリガリと削られていく感じがす
る。

抵抗する気さえまったく起きなかった。

むしろ、こうしているのが気持ちがいいと思う自分がある。

そして、束が俺から唇を離す。

唇を離すと俺と束の間には部屋の明かりで照れされ輝いている唾液の橋が出来ていた。

「ふふふっ」

嬉しそうに微笑む束。

そうして嬉しそうな表情を見れると安心してくる。

さっきの狂った表情をしていた束が嘘のよう。

「これで晴れて私達、恋人同士だね」

「そうだね。だから、安心して。俺も束は置いていきはしない」

そういつて強く抱きしめる。

束を繋ぎ止める様に。この刹那の“至福”が不変になるように。

そして、束もまた、俺を確認するかのように俺の体に束の体を預けるように抱きつく。

「うん。あつても、浮気したら許さないから。ちーちゃんなら考えるけど」

「何だそれ」

お互いに微笑み合う。

いろいろと滅茶苦茶で支離滅裂だったけど丸く収まった様だ。

丸く収まったのならこれでいい。多くを語れば却ってややこしくなる。

ただ、今はこの“至福”の刹那が少しでも長く不変になるように祈る。

「“IS”」

残る問題はコレのみ。

さて、どうしたものか。

本来なら止めればいいんだけど。

「この“IS”はどうする気？開発は中止？」

「ううん。このまま開発を続け完成させる」

「そっか」

俺が言うのはそれだけ。

束がこのまま作るというのなら俺は付き合っただけ。
それが俺に出来るせめてものこと。

「止めないの？」

「止めてほしいのか？」

「ううん。でも、このまま私が“IS”を作れば……綾まで……」

「いいよ。別に。そんな些細な事は。束が爪弾き者というのなら俺だっただけ。それに覚悟は出来ているんだろう？狙われたりするの……人の世から拒絶されることも」

「うん。出来てる。それは仕方ないことだからね。それに綾が守ってくれるんでしょ？」

「もちろんさ」

ISを作ればどっちにしたって狙われる。

世界が受け入れれば重要人として世界が拒否すれば重要危険人として。

どちらになってもほぼ同じ。どっちもどっちだ。

世界に受け入れられても人の世からは拒絶される。

方法としては正攻法だ。既存の法則、ルールがいやなら“ルールを作る側に回ればいい”。

ただ、それに乗っ取ってやろうとしている。

けれど、ルールを作れば当然、アンチ批判されて拒絶されるのは目に見えている。

覚悟がないのなら止めるが覚悟が出来ているのなら止めはしない。

その証拠に束の表情や瞳ははそうなることも覚悟している。

と、言うより俺には残念ながら止める気なんて更々ない。

あるのは束がやることに付き合っつて束を守る　それぐらいだ。

真人間なら止めるべきだろうが俺も狂い壊れている。

刹那を求めすぎていろいろと失敗している。

束が狂っているのなら俺はそれ以上、十二分に狂っているのだろう。

「ごめんね。ありがとう」

「こっちらこそ、今まで悪かった。ありがとう」

「ふふっ何だか変な会話だね」

「そうだな」

本当に変な会話だ。
変てこ過ぎるな。かなり支離滅裂な滅茶苦茶な話だったし。
この詳細を理解しきれるのは本人達のみとかとなりそんな話だった。

まあ、兎も角、丸く収まってよかった。
本当に丸いのかと聞かれると答えづらいけど。

これで今後がほぼ決まってしまった。
どうなるうとも俺は束の傍に居て支え守る。
例え自分の身がボロボロになるうとも。

これが俺の強く揺るぎない“^{思い}渴望”だ。

「よし〜なら、完成まで頑張るぞ！」

「そうだね」

ああ、やってしまった。

そんな感覚がありつつも俺は今日、この日、決断した。
束の傍で未来永劫、どんな事があっても束と共に在り続けることを。

そうして、“IS”、“インフィニット・ストラトス”は完成して
いった。

第八話―？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第八話―？。

いろいろと詰め込みすぎて支離滅裂になったやもしれません（汗）

前書き通り白騎士事件前の一番の見せ場でした。

いろいろと無理があったかもしれませんがこれで主人公と束が結ばれました。

主人公も束さんと同じく壊れて狂っていますね。それは元からですけど。

真人間なら開発を止めるのでしようがこの主人公はあえてしませんでした。

それは話の都合、原作の遵守するという物語としての意味合いもありますけど

今まで束を拒絶していた世界や人の世に対するある意味での身勝手に複雑な哀しい主人公と束さんの復讐というある種の複雑で変わった意味合いもあります。

束さんも適応する為に頑張りましたが結果は作中通りでその他の理由も作中通りです。

当然、咎は受けます。この小説のコンセプトの一つとして“アンチされる側”というのがありますから。

ISを開発したのも原作でも物凄く個人的な理由で開発した物だと解釈しています。

束さんの人格や人となりからして「宇宙空間での活動を想定し、開発された」というのは建前の様な気がするんですよ。

これは世間向けの理由であり本当の確信的な理由は物凄く身勝手に個人的で複雑で悲しく孤独なもの私は原作を読んでそう思い解釈しました。

本当に今回は独自解釈とご都合主義な話でしたが要所要所、理解して楽しんでいただけたのなら書いた私としても嬉しい限りです。ただ、いくつかはご理解とご了承を頂く点がありますがその時はそうお願いいたします。

また、ご不明な点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当にどうかよろしくお願いいたします。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第九話（前書き）

今回は白騎士事件への前座です。

ついにISが出てきましたよ、皆さん。

十二話でようやくくってエ………最初はもっとかかる予定だったんですけどね。

兎も角、それでお楽しみ下さい。

第九話

綾視点

千冬にも“IS”の事を包み隠さず話した。

どうして“IS”を作ったのかという経緯や束のあの胸の内の叫びも全て包み隠さず千冬に話した。

すると、千冬も今までのそのことを謝って束も千冬を許した。許す許さないの問題ではなのいかもしれないけどこれでいい。

そして、三人、そろってワンワン泣いた。涙なんて枯れ果ててしまいうそなぐらいたくさん、たくさん三人で泣いた。

これでまた、三人で仲良く面白おかしく過ごせる。本当に良かった。束との事はまだ、千冬には話せてないが近いうちに話したいと思う。そして、また、千冬も束に力を貸してくれるとってくれた。それを聞いて束は大喜びしていた。

で、“IS”だがついに完成した。

俺も手伝ったが基本的にISは全て束が一人で基礎理論を考案し実証して一人で作り上げた。

手伝ったのは精々、OSのみぐらいだ。

作れたときは流石に自分でも驚いた。その反面、束や千冬は出来た事に納得していたけど。

ISが出来たと思っていたらISには重大な利点とも欠点とも言える点があった。

それは……女性にしか使えないという事だ。

詳しい理論とかは聞いてないし聞かないつもりなので分からないがISコアは“原則”女性にしか反応しない。

つまりは女性にしか絶対に動かせないという事だ。
奈々さんが前に言っていた“今の世界を破壊して新たな世界を作る”というのはいかような事か……
これが世に浸透すれば男女のバランスが大きく反転する。まあ、それでも止める気は更々ない。

現在、出来ているコアは二つ。

東の研究室に始めて行った時に見た、白い騎士と黒い騎士用の二つだけ。

一騎、白い騎士は千冬用に開発したらくもう、一騎の黒い騎士は予備らしい。

ISは“原則”、女性にしか動かせないから男性である俺は動かさせない。

申し訳ない気持ちもするけどこれで裏方に徹しられる。
そう思っていたのだが……

「どうしてこうなった」

「諦める、綾。大丈夫だ、私がついている」

「あはは！まさか、コアが反応するとは！まあ、そんな気もしていいんだけどね」

コアが男である俺に反応して起動してしまった。

ある日、コアを搭載した黒い騎士、名称、「黒騎士」に触ったのが間違いだった。

触れた瞬間、脳に大量の情報が流れてきた。

流れてきた情報を全て理解して処理するとISに見入った様に体が動き気づくとも全身にISを装着した。

そして、先ほどの会話文の光景となった。

裏方に徹しようとする俺は思っていたがそうは問屋が降ろさない。束の傍に居て未来永劫、一緒にあり続けると誓ったあの日から何かの力が働いたのだろう。

俺も表舞台の一員となってしまうた。

嬉しいか嬉しくないかで聞かれれば束や千冬と同じ舞台で立てるのは嬉しいが正直な気持ちを言うと複雑だ。

どうして男である使えるのかは束自身もよく分からないみたいで束が言うには「見たことのないパターンの不思議なフラグメントマップを構成している」との事。

しかし、コアが反応したとしてもこの「黒騎士」に使われているナンバー002のコアのみで試しに「白騎士」のナンバー001に触れてみたが反応はしなかった。

使えることには変わりがないが俺が使えるのはこのナンバー002のコアのみ。

一応、束に「始めから俺が使う事想定して作ったのか？」と聞いたがそんな事はなく俺がISを使える理由と同じくこのコアだけが反応する理由にも開発者の束にも分からないらしい。

そして、現在。束の研究室にいる俺と千冬の前で束と奈々さんが何か話している。

「やっぱりダメだったわね」

「そうですね。私のISの良さは凡人達には分らないのですよ」

どうやら二人はISを学会に発表したことについて話しているようだ。

最近……と言ってもつい二週間ほど前の事だが奈々さんの伝手を使わせてもらって宇宙工学等の学会で東は発表した。

発表内容としては建前である宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツとして発表したのだがそんなに注目はされなかった。注目されたといっても開発者である東が僅か十四歳という歳でマルチフォーム・スーツを開発したとか東自身しか注目されずISはそんなにところかほば注目はされなかった。

余談程度に『ISは現行兵器全てを凌駕する』とも東は発表した。誰も間に受けず信じなかった。

いや、信じなかったというのはそれと同時にそうは信じるわけにはいかなかったということでもある。

けれど、東はそんな事はまったく気にしておらず。

次にどうやってISを注目させようかといういろいと資金や技術面で協力、サポートとしてくれる奈々さんと黒い笑みを浮かべて企んでいる。

ああ……なんだろう。物凄く嫌な予感がする。

「なあ……綾？私、何だかとっても嫌な予感がするのだが」

「千冬もか……実は俺も、ね」

どうやら千冬も嫌な予感がしていたらしい。

嫌な予感が……と思えば思うほど嫌な予感は強くなってくる。

考えないようにしようとしても目の前の何か絶対に企んであろう黒い笑みを見てしまうと考えずにはいられない。

「師匠、どうすればいいんですかね」

「そうね……このままにしているのはとっても勿体無いわね。見せ付けないとね、世界に」

「？」

「見せ付けるのを。束ちゃんの作品を世界に。どのくらい偉大で絶対的なものかを」

「絶対的………そうだ！」

奈々さんと束が話していると奈々さんの言葉を聞いて頭の上に電球のマークが浮かんだみたいな様子で束は何か閃いた様な顔になる。その束の表情は黒さが一杯でめちゃくちゃ何か企んでいる。

ああ………嫌な予感が止まらない。むしろ、さつきよりも強くなっている。

「何々、何か思いついたの？」

「実はですね………」

奈々さんに束は耳打ちをしてこそこそと話す。

耳打ちをして束から話を聞かさせていると思わしき奈々さんの表情は見る見る変わっていく。

最初こそは真面目な顔だったが次第に笑みが黒い笑みか浮かんで二ヤついている。

耳打ちしている束も黒い笑みを浮かべニヤついておりその様子を俺と一緒に見ている千冬は頭が痛そうに呆れ手で頭を押え呆れた顔をしている。

「ナイスよ 束ちゃん！それで行きましょう」

「はい、師匠！じゃあ、さっそく始めましょう」

「勝手に始めんな！」

何やら勝手に束と奈々さんの間で決まり慌てて止める。

この二人だけで物事を進めるさせるのは危険すぎる。

愉快だけでやるうとしてその上、計画性が高いから質が悪い。

それで何が決まったのかを聞くなり千冬は

「馬鹿がつ！」

思いつきり束の脳天目掛けてチヨップを落とした。

物凄い音がして束は涙目になる。

「ち、ちーちゃん！びといよ。束さんの天才的頭脳が左右に割れたよ！？」

「ほお〜それはよかったな。これからは左右、別々に考え事が出来るぞ」

「おお！そっかあ！ちーちゃん、頭いい〜！私が気づかなかったことに平然と気づく！そこに痺れるツ！憧れるウー！」

ネタに走って馬鹿をしている束の様子にこめかみに手を当てて呆れ果てている千冬。

そして、その様子を腹を抱えながらも上品に小さく楽しそうに笑う奈々さん。

何と言うカオス。ダメだ、千冬以外のこいつら何とかしないと。

そして、話の内容だがこうだ。

ISを認めさせる為に発表した時に言った『ISは現行兵器全を凌駕する』と言うの実証する。

その為に日本を攻撃可能な各国のミサイルシステムをハッキングして日本に一齐にミサイルを向けて発射させISの性能を世界に見せつけつつそれを全て無力化。

ここまではファーストフェイズで次に考えられるのはセカンドフェイズの内容は各国からの『ISの分析。可能であれば捕獲。無理ならば 殲滅』。

セカンドフェイズでもISの性能を見せつけつつ向ってくる各国の戦闘機や巡洋艦、空母や監視衛星等を破壊あるいは無力化する。

ただ、破壊あるいは無力化するのではなく各国の戦闘機を撃墜しながらもけして人名を奪うことなく戦う。

そして、『ISは相手を生かしたまま無力化できるほどの余裕があり』 『ISを倒せるのはISだけである』というのを知らしめ見せ付ける。

しかし、これはあくまで世界に知らしめる為の一種のパフォーマンスの様なもので開発理由の建前である『宇宙空間での活動を想定し、開発した』というのは変えないらしい。

だが、束曰く

「多分、そうはいかないだろうね。世界はバカだからこの理由を無視して平然と兵器として使う。他にどんな理由をつけてもこのパフォーマンスをしなくても」

との事。

確かにそうだ……人間はどんなに知性をつけて偉くなっても地球上で唯一戦争や同族殺しを平気ででき愚行な歴史を繰り返す動物だからな。

兵器じゃないものも愚かしく高い知性を用いて発想の転換で兵器にするぐらいだし。

しかし、これが話の内容の全貌か。

これを聞いたとき、俺と千冬は沈黙で張り詰めた。

この事の大きさと計画性の高さに。

ただ単に事が大きいだけではなく次に起きる事まで想定している。

この話をしていた時の束の表情は真面目だったからこそセカンドフェイズは必ず起きると告げている。

だから、こそ本当に質が悪い。

だが、やはり俺には止める気は微塵も更々ない。

「やるのか、束」

「もちろん。これが一番の方法。だけど、ちーちゃんはしたくないんでしょ？」

「正直言えばな。だが、やるさ。協力すると言ったからには絶対に束は大切な親友だからな」

「ちーちゃん」

そう言って嬉しそうに目を細めて束は千冬に抱きつく。

抱きつられた事に千冬は驚いていたが直ぐに落ち着いて束を抱き返す。

これで千冬も決意は決まったな。

「奈々さんは……いいんですか？」

「ん？いいわよ、別に。東ちゃんの計画最高じゃない 今からあの事を考えるとゾクゾクするわ」

上品な笑みを浮かべるものの考えはマツドだった。

気にするだけアレか……奈々さんの人格上ことういう感じだし。

そう思っていると奈々さんは真面目な顔付きで言う。

「東ちゃんのあの事情も私にはよく分かるし……それに世界は変わらなければならない。どんな波乱があってもどんな形でもね」

「……奈々さん」

確かに世界は変わらなければならないのかもしれない。

どんな波乱がとつてもどんな形でも。

もしかすると俺達が今からしようとしているこの事も弾かれていた世界の“変革”に利用されているかもしれない。

そんな考えが頭に過ぎったが今はこの事だけに集中しよう。

「んじゃま、結構はIS発表から丁度約、一ヶ月経つ来週の今日で」

「分かった」

「了解」

束が日付を決めると千冬と俺は賛成して奈々さんも頷いて賛成する。それを聞くと束は二機の元に行き鼻歌を歌いながらキーボードを叩き何やら最終調整を始めた。

キーボードを叩く速度は物凄く早くピアノの鍵盤キーを叩いているみたいだ。

「ん〜白騎士には大型ブレードと大型荷電粒子砲を搭載するはいいとして……黒騎士には大型ブレードとライフルと常時ステルスでいいかな」

白騎士と呼ばれたのが今回の事の主役機で初めて出来たISであり操縦者は千冬。

続いて黒騎士と呼ばれたのが二番目に出来たISであり俺が操縦をする。

どちらも顔がばれないようバイザーが付いており黒騎士には常時ステルス機能がついている。

これは男でありながらISを操縦できる俺への束なりの思いやりで対処の仕方です。常時ステルス故、現行の最新高性能レーダーでも捉えられず目視も出来ないように仕上がっている。

つまり、この事で活躍するのは白騎士のみで俺は舞台に登場しても存在しない黒子という訳だ。

そんな事を考えつつ束が最終調整をしているのを見ているとふと、隣を見ると千冬が心なしか不安そうにしている。

「……………」

「千冬、やっぱり不安なのか？」

「ああ……不安だ。シュミレーションは何度もしたがミサイルを斬るなんて初めてだからな」

「そうだな……初めてづくしの事だから不安になるよね。もしかすると最悪、戦闘機とかと戦闘することにもなるから」

「まあ、戦ってみたいたい気も私はするが」

「なんだそれ。だが、大丈夫だ。千冬の背中俺が守る」

「……綾」

そつと置いていた手の上に覆いかぶさるよう千冬の手が乗る。

高性能なISがあるとはいえ僅か十四歳で戦場に入ろうとしているんだ不安じゃないわけがない。

その不安を隠すように今、手を千冬に握られている。

俺は不安といえば不安だ。

そつ握り返そうとた時、束から物凄い鋭い視線が飛んできた。

「綾〜！」

「は、はい？」

「ちーちゃんとイチヤイチヤしてないで早くこっち来なさい！」

「わ、私は別にイチヤイチヤなんて……！」

「してるもん！綾、早く！」

「はいはい」

顔を真っ赤にしている千冬とむくれて自分の横にきて座れてと言うようにバシバシ床を叩いている束。

何だか微笑ましい光景だ。次もこういう“至福の刹那”を味わえるよう、頑張らないとな。

そう決意を新たに胸にしなから東の隣に向った。

第九話（後書き）

という訳でいかがだったでしょうか第九話。

最初の「千冬にも“IS”の事を包み隠さず話した」というのは描写だけに留めてキンクリさせてもらいました。

本当なら書くべきなんでしょうがそうなると白騎士事件まで若干、なぐくなりますし止めました。

主人公と束が恋人関係になったというのを今、言わなかったのは二人的には特にそれ程、深い理由はありません。

ただ、今は……というだけで私としては白騎士事件後にそれも絡ませて二人の殴り合いの喧嘩を書きたいのであえて言わせませんでした。

ごめんなさい、千冬さん。

白騎士事件の計画はいろいろと原作に沿っているつもりです。

束さんは全て起こる事を予期して千冬さんにやらせたんだと思います。

計画性高そうですね、束さん。

取り合えず奈々さんは自重させるべきだ。サブキャラとしては動かせやすいが。

主人公もISを動かせるようになりました。

と、意つてもナンバー002だけですけど。

これはテンプレを回避しようとした結果の成れの果てだと思ってください。

後は今後の為にです。

まあ、一夏もほんの少し怪しいんですけどね。試験会場の奴は束さんが細工したから動いたのかもという描写もありますから。

ちなみに常時ステルスなのはあまり気にしないで下さい。

白騎士事件をブレイクしなくなかったと言うのと表舞台に立つのは千冬さんというコンセプトの元、こうなりました。

まあ、設定とエネルギー上、無理があるんですが。

OSを主人公が構築したというのもサポートという意味があります。主人公は基本、裏方で東や千冬を支えサポートして

表舞台に立ったとしてもあくまで黒子役をしたがり黒子役でいつづけますからね。

その分、裏では働きます。それはキリキリと。汚れ役専門ですね。

主人公は。

全ては束を取り巻く世界世界の為に。束の為に といった感じの思想の主人公です。

言っておきたいのはこのぐらいですね。

また、ご不明な点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当にどうかよろしくお願いいたします。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

次回、『白騎士事件』というな変革。

お楽しみに。

第十話（前書き）

ついに白騎士事件です丸

これでプロローグにあたる部分は終わります。

ここまでくるのに十一話ぐらいたかかりましたが何とかこれしました。今回は原作の白騎士事件の記述に基づきブレイクしないようにする為になりとサククリと書きました。

その為、多少描写不足なんですけど温かい目で見守って下さい。

イメージBGMは主人公達視点ならDies iraeのベアトリ
スのテーマ曲「Thrud Walkure」を
相手視点なら劇ナデの「ブラックサレナ？」を聞きながらも読ん
でみた下さい。

それでは白騎士事件、お楽しみ下さい。

第十話

綾視点

俺の選択が「正しいかったのか？」と万人が問われるとほぼ間違いなく「正しくはなかった」と言われるだろう。

しかし、俺はこの選択が「正しかった」と言える。

それは俺が俺であり俺が選択したことなのだからその選択の正しさは俺にしか分からない。

止まるわけにはいかない。

また、刹那の様な“至福の一時”を迎える為に。

俺のためにも千冬の為にも何より東の為にもこの事は成就させなければならぬ。

だから、俺はこの信念を抱き最後まで貫き通しこれを必ず成就させる。

「綾、来るぞッ！」

「ああッ！」

今日でIS発表から約一ヶ月が経ったこの日、正午、事を始めた。計画通り東が日本を攻撃可能な各国のミサイルシステムを一斉にハッキングして日本にミサイルを向けて発射させた。

ミサイルの総数は二三四一発。それらを一斉にハッキングし、制御不可能に陥ったとされ日本は混乱と絶望のまっただ中になった。

そこに現れたのが俺達。

テレビ中継されているらしく実際、写っているのは白騎士、バイザー型ハイパーセンサーで顔を隠して見えないようになっていた千冬

のみだが俺達が現れた。

そして、現れるなり俺達は作戦行動へと入り日本へと向っているミサイルを一つ残さずぶった斬り始める。

「……………！」

「！」

向ってくるミサイルに向けて超高速で接近し俺と千冬は左右に別れ剣を振るい次々に落としていく。

やはり、こう近距离でミサイルを破壊するのは怖い。爆発が近くで起こるのだから幾ら大丈夫だと分かっても怖い。

シュミレーションで何回も体験しているが仮想と現実での実感の差がよく分かる。

しかし、剣に斬られ両断されたミサイルは爆発するがその衝撃はエネルギーシールドによった完全に防がれ体には衝撃は来ない。

それを確認しつつ更に超高速で飛翔しミサイルを次々に落としていく。

作戦行動が始まって数分が経つが俺と千冬は左右に分かれながらも各々、既に約六一発ずつ破壊しており二人合わせると約一二三発のミサイルを破壊している。

「綾、そろそろだ」

「了解」

千冬の指示を聞き近くのミサイルを開始終ると千冬の上まで飛翔しホバーリングして静止する。

そして、千冬は俺の安全を確認すると剣を粒子分解させケースにし

まうと次に大質量の物質を粒子から構成した。空中に構成し召喚したのは現在、試作型の大型荷電粒子砲。俺の黒騎士には常時ステルス機能が搭載されているからどうしても搭載する事は出来なかつた装備であり全距離殲滅兵装。

千冬はその荷電粒子砲を空中に召喚すると距離的に離れている残りのミサイル郡の中心部分に向けて無反動で放った。すると、荷電粒子はミサイル郡を乗り込みように全て一瞬で破壊しつくした。

この光景を見ている者達にしてみれば異様な光景だろう。各国のミサイルが日本に向かってくるという危機的状况の中、白銀のISを纏った一人の女性が現れ、超音速による圧倒的な格闘能力と大質量の物質を粒子から構成する能力を持って日本に向っていた各国のミサイルを全て撃破したのだから。

ヒーロー漫画のヒーロー、英雄と呼ばれるかもしれない活躍ぶりだ。だが、政治家や軍のトップ、お偉いさん達にしてみれば驚異にして脅威の存在。ヒーロー視や英雄視はされないだろう。愚鈍でなければ

『綾、ちーちゃん。セカンドフェイズ始まるよ。今、そっちに日本の偵察機が国際条約無視して向ってるから』
セカンドフェイズが始まる事をいつもの様にふあふあした声の調子で東が知らせてくれた。

日本もこの“未知の恐怖”の驚異にして脅威の存在《IS》に対し

て愚鈍ではなかったようだ。

束が言った通りこっちに向って偵察機が来ている事をハイパーセンサーも注げている。

向って来ているのは偵察機だけではなく戦闘機や巡洋艦、空母も向ってきておりそして、これでもかと言うかのように監視衛星も展開している。

驚いたらいいのかは分からないがハイパーセンサーが告げるには現行の最新鋭の機体も数多く投入されているらしい。

これも全て束が想定した通りになった。

ああ……本当に頭が痛い。

「綾！」

名前を呼ばれるとその向ってきている新たな軍勢を視認する。

まだ、向こうはこちらをロックできていないようで真っ直ぐに高速で向ってくる。

それに俺達は警戒するように剣を再構成して待ち構える。

「来た」

俺がその言葉を洩らし敵機もこちらを視認しロックすると同時に編隊を組んだ状態からミサイル一斉発射した。

向ってくるミサイルに回避行動を取りつつ俺達がミサイルを斬り落とすと剣を構えなおした。

「綾、行くぞッ！」

「応ッ！」

相手の攻撃を確認し俺達はセカンドフェイズを開始することにした。千冬が先行し向ってくる戦闘機を破壊していく。牽制用の機関銃や大量のミサイルで攻撃されるがISの速度には敵わず機関銃の銃弾は当たる事はなくミサイルは斬り落とされてく。

「ふんっ！」

千冬が剣を振るい次々に撃墜されていく大量の戦闘機。

やはり向こうの狙いはあの計画を言った時に束が言った『ISの分析。可能であれば捕獲。無理ならば 殲滅』の様だ。

始めは捕獲の様だったが何機も最新鋭の戦闘機が撃破されたのを知ると殲滅に変わったみたいだ。

その証拠に攻撃が次第に過激になっている。

だが、束が作り出し俺達が操るISはそんな事を諸共せず戦闘機を死者出す事無く撃墜していつている。

まだ、俺達の実戦慣れしてないと言う事もあり数回ほど機関銃やミサイルが当たるがエネルギーシールドがありISの装甲は一つも傷ついてない。

使って戦闘して改めて実感するが絶望を覚えされるほど圧倒的だ。

「はぁあっ！」

千冬がまた、高速戦闘機を破壊する。

この最新鋭の高速戦闘機ですからISの機動力には敵わず急速な旋回も行えず急速な旋回を行える千冬に後ろを取られ撃墜されていく。気づけば向ってきているのは日本のものだけではなく各国の兵器もこの現場に投入され撃墜しているのは戦闘機だけではなく巡洋艦や空母も撃破、無力化している。

「千冬、宇宙の監視衛星を破壊してくる」

「分かった。無理だけはするなよ」

「了解」

プライベートチャンネルでそうやり取りするとこの場を無双している千冬に任せ急上昇して監視衛星の破壊へと向う。

別に破壊しなくても監視衛星なので攻撃されることはまずないが余計な情報を取られるわけにも追跡されるわけにもいかない為、破壊せざるおえない。

監視衛星を破壊可能な距離まで上がると俺は監視衛星が前に見えるよう機体を仰向けの体制にして対戦車ライフルの様な長いライフルを粒子から構成し構えた。

この状態では一度、常時ステルスを解かなければエネルギーを大量に消費する為、一度、解いた。

そして、監視衛星が俺を捕らえようとしたと同時にライフルのトリガーを引き次々に監視衛星八基を無力化した。

「よし」

監視衛星発揮を無力化すると体の向きを変え空から地上が前となるように向き千冬が今だ戦闘機を破壊している空域に居る空母や戦闘機、巡洋艦へと向けて発砲した。

狙ったのは全て航行機能をダメにする箇所ばかりで敵機が無力化になったのを確認するとライフルを終い再び常時ステルスを展開し千冬の元へ向った。

「終わったな」

「そつだね」

千冬の元へ行くと千冬は既にこの場に居て全ての兵器を無力化していた。

俺達の足元、海に広がるのはISによって歴然の差を知らされた兵器の藻屑。

これほどの惨状が海には広がっているが人命を奪う事無く。

計画の目的である『ISは相手を生かしたまま無力化できるほどの余裕があり』 『ISを倒せるのはISだけである』というのがここに実証された。

「さて、帰るか」

「そつだね。計画の目的は全て達成された訳だし」

ここに長いしていれば更に兵器が投入され長期戦となる。

そつなればこちらも僅かながら振りとなる。

俺達も生身の人間であるのだしそれに今は丁度、日没。

帰るのにはいい時間帯だ。

「ステルス展開」

千冬がそつISに指示すると白騎士もステルスが展開しこの場から白騎士はかき消えた。

まるで幻の様に淡い奇跡の様に、はたまた夢見の悪い悪夢の様に白騎士は消失する。

そつして、俺達もステルスを展開し姿を消して超音速でこの場から去った。

今回、俺達が破壊、無力化したのはミサイル二三四一発、戦闘機、二〇七機、巡洋艦七隻、空母五隻、監視衛星八基。

そうした現状とISの次元違いな圧倒的性能の前に世界は敗北した。敗北させるおえなかつた。

これが後に『白騎士事件』と呼ばれ世界が“変革”する大きな第一歩だった。

…

第十話（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第十話、『白騎士事件』。

今回はISでの初めての戦闘描写でしたがサクッと簡単に書きました。

その訳は原作小説三巻にある白騎士事件の記述を少しでも遵守してみたかったからです。

長く書くことも一応は可能なのですがそうになるとノリで白騎士事件自体、破壊してしまいそうで怖かったのでサクッと簡単に書かせていただきました。

その為、戦闘描写は短くなりましたがご了承を。

と、言っても黒騎士がいる時点で白騎士事件は壊れているんですね。

一応、常時ステルスで黒子役と無理やりして見ましたが相手にしてみたらと

白騎士に攻撃されているわけでもないのに突然、撃墜されるというわけの分からない状態ですから。

普通に考えてこの世界の住人なら原作よりもISの評価は高くなりそうなんですけどね。

ライフルってのも無理やりです。

ISの宇宙活動の設定があまりないのでそんな状態で宇宙に出てもいいのか分からず

ライフルで下から打ち落としました。破壊した理由も無理やりですね。

これで主人公も東も立ち止まっても引き返せないに自分でしました。世界はこれで急速な成長と“変革”をしていきます。

アンチものではいろいろと叩かれているほぼ一方的に束さんですが一方的はおかしいです。

方法としてはかなり正攻法なので。

既存の法則、ルールが嫌で嫌で仕方なかった束さん達はISという分かりやすい力で世界を変えました。

それは今のルールが嫌だったから“自分でルールを作る側に回れ”とうだけなので一方的にアンチされて一方的に悪とされるのは間違いだと思っています。

ちなみにこの“自分でルールを作る側に回れ”というのはドラゴン桜から来ています。

初めて読んだ時はそうであ〜と思い使いました。

それに一方的にアンチされるのは間違っていると私が思うのはもう一つあります。

今回の白騎士事件はあくまでも「兵器としても応用したら使えるけど宇宙服です」というを知らしめるための一種のパフォーマンスみたいなもので

実際、原作でも受け入れた世界は『兵器』としてしか見られず『兵器』として使ったというのがあり(間違っているのは重々、承知です『製作者の意図は別に』という描写があり実際、兵器として使うことを決めたのは世界でもあるのだから一方的にアンチするのはおかしいと思っています。

悪い悪くないの次元ではありませんが100あるうちの50%は絶対に束さんが悪いですが残りの50%強は受け入れた世界や人の世が悪いも思っています。

それは例え受け入れざるおえなくてもです。
まあ、奇麗事を言っても結局、主人公や束さんが悪なのは変わりませんし。

こういった事実があるのにアンチされるのは悲しいものです。私、個人としてはとってま。

とはいもつものの私の自論もこの小説も穴だらけなのは重々、承知しています。

前回の奴は本当に酷かった。指摘されて痛感しました。

自分の技量不足に今でも悔いて恥じ続けています。

でも、私の自論や独自思案が少しでも多く理解されたいとは思っています。

これでプロローグは終わったので次回は本編更新はお休みとさせていただきます。

少し読者の皆様のお力を借りたいモノが出来ましたのでそれを明日は定時投降する予定です。

更新頻度も毎日更新していきまず難しくなりました。

白騎士事件までしかストックがいなので今回の更新でストックがなくなりました。

二日に一回は更新してみたいとは思っていますが予定は未定で私の技量不足も

関係してくるので最低でも一週間に一話は絶対に更新するつもりです。

と、長くなりましたが

また、ご不明な点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当にどうかよろしくお願いいたします。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十一話 ？（前書き）

この話は前々から書きたかった話です。

一応、テーマとしては“アンチされもの”のつもりです。

めっちゃダークシリアスになりましたが。

どうぞ

第十一話 ？

綾視点

『白騎士事件』。

あの日の出来事はそう呼ばれた。

あの日、世界はISという“未知の存在”にして“未知の恐怖”の前に完膚なきまでに敗北した。

その事実と決定打の証拠の前に敗北者たる世界はISを無抵抗に受け入れた 受け入れざる得なかった。

そうして、世界は着々と束^{IS}に適応していきつつある。

その事が分かった時、とてつもない安心感と高揚感が胸を襲ったのをよく覚えている。

ああ、やっとだ これぞ束と“不変の刹那”でいられる時が来た。新世界の幕が上がった。

束が少しでも救われた ああ、それが何よりも嬉しい。

世界は例え受け入れざる得なかったとしても世界は受け入れたんだ。この事を世界はよく覚えておいて欲しい 忘れさせはしない。

俺達がやったのは正攻法だ。

既存の法則、ルールが嫌で仕方がなかった。

その為に既存の法則、ルールを破壊して“自分でルールを作る側にまわった”

そして、“自分でルールを作った” ただ、それだけの簡単なことだ。

アンチされても一方的にアンチされる義務も権利もない。^{批判}
この新たなルールが嫌なのなら作る側に回ってこればいい。^{批判}
本当にただ、それだけの事でそんな事もせず一方的にアンチして
いるだけなら誰にでも出来るしそれはただの負け犬だ。

と、俺は変わっていく“変革”していく世界を見て常々思う。
しかし、思い返してみると……

「（……あれから約一年か）」

そうあの日、『白騎士事件』から約一年が経とうとしている。
この約一年で世界は巡るましく“変革”し成長している。

『白騎士事件』で世界中に名を知らしめる事となったISに各国は
驚くべき速さで対応を決めていった。

例え一機でもあれば他国の軍事力を凌駕するという事実により既存
の近代兵器は価値や力、効力を失い戦争は少しずつだが減っていっ
ており各国の抑止力となり、
急速なIS運用制限条約と開発普及を全世界へと促していつている、
とこの約一年で目覚ましい急速的な“変革”とも取れる成長を世界は
していつている。

そして、やっぱり受け入れた世界はISを建前である『宇宙空間で
の活動を想定したマルチフォーム・スーツ』としては使わず。
白騎士事件でのパフォーマンズとしてみせた『兵器として“も”運
用できる』という『兵器』のみに注目して『兵器』と運用していこ
うと世界はしている。

それ自体は予測と想定範囲内だったので俺や束としては問題ない
しいが『製作者の意図』とは別に使われようとしている。

その点だけは束も複雑そうにしてた 「宇宙に行けないなあ」
とぼやいたりして。

世界のこの成長の中でも仇の様なものありISは軍事的な各国の抑止力となったがISの特性 原則、ISは女にしか動かさせないというのがあり少しずつ“女尊男卑”という社会風潮が出来つつある。

それに嘆いている人達もいるが今までには男尊女卑の社会風潮があり今の今までもそれが尾を引いていただけで反転しただけの事だけと思う。

歴史は同じ様なことが永劫繰り返されるのだから それは今までの歴史が証明しており今回はまたまた、女の人が尊いとされただけの事。

今まで男が尊いされていて俺達が起した“変革”によりそれが反転して変わり女の人が尊いとされると同じ様な事が繰り返されている ただ、それだけの事。

そんな事を思ってしまうのはやはり、俺がISが使える男という事なんだろうな。

他の男からしてみれば嫌な存在 男だけではないな新しく出来上がりつつある世の中にとつてしてみればISが使える男というのは嫌な存在、異物なんだろうな。

何かそれで起きるかもしれないが……まあ、どうでもいい。物事は本当に起きてからしか何がどうなるとか分からない 起きてからしっかりと対処する。束の為にも俺の為にも。

そして、もちろん『白騎士事件』で起こった異常な各国のミサイルシステムのハッキングでISの開発者である束は各国からスパイ容疑を受けた。

容疑を世界中からかけられ身柄引きわしの要求をされたが荒業とも言える束の反論もとい弁解により世界中は説き伏せられ黙ることしかなく難を逃れた。

まあ、奈々さんや旦那さんの力もかなり大きいがああの際で見
いたが束の弁解は物凄かったのをよく覚えている。
世界中の政府の役人がたかだか十四歳の娘に圧倒されたじだっ
たのは面白かったと言えば面白かったがあの人達の気苦労は凄まじ
かっただろう。

世界は束というISにISという束に急速な速さで適応していつて
いるがそれは世界だけの事。

束と俺は本当に少しずつ人の世から遊離していつている。
それを物語るある出来事が起こった。

それは『白騎士事件』が起こりISの開発普及が始まった時だった。
ISが世界に広まった事により束は重要人物として隙あらば誘拐・
暗殺がいつ起きても仕方ない状況にあり奈々さんの所に身を寄せて
匿ってもらい

それがほんの少し落ち着いて時に篠ノ之のご両親から「話したい事
があるから二人とも一度、家に帰って来い」という連絡があり一度、
家に戻った。

久々に家に戻ってきて家の雰囲気がいつもと違い全体的に重く暗い
雰囲気包まれていたのを今でも痛いほど覚えている。

そして、また久々に会った篠ノ之のご両親の顔は酷く疲れきつてお
り消耗していて本当に酷い顔をしていた。

その時、篁が数日、織斑家に泊まりに行っていると聞いて本当に安
心して後悔した。

篁は俺達がいけない間にもご両親のこんな顔を見ているのかと見せて
しまったのかと後悔して泊まりに行っている間は見せないで個々に
安らぎを得られている事が分かって安心した。

話をした場所はいつもの様にリビングでお茶やお茶菓子が出され、

最初に話したのは簡単な事、今までどうだったとか本当に何気ないことを少し話した。

けど、少し話すとその場が凍り付いた様に沈黙が降り誰もが黙る。何を話したらいいのか分からずただ、黙ることしかできない。

そうした長い長い長すぎる長すぎた沈黙に痺れを切らして束は言うてしまつてくれた。

「……話はそれだけですか？」

その言葉を束が言った瞬間、場は冷たくとつても冷たく凍りついた。ただ、冷たいだけではなく雰囲気も冷たく暗く重く苦しくて場を氷と例えるなら今にも割れてしまうそうにヒビがいつている。

その程までの事でその一度の言葉で

「それだけだと!？」

「ふざけるんじゃないわよ!!」

篠ノ之のお父さんやお母さんの態度や雰囲気、全てが一転して壊れた。

声を荒げ声には怒りや憎しみが籠っていて声を荒げながら暴れている。

まるで自分の思い通りにならなくてイライラしている思春期の子供の様にコップを払いのけ壊しテーブルをひっくり返しご両親は暴れている。

こんな二人を見るのは初めてだ　いつも優しく暖かいイメージがあっただけ一瞬で消え去った。

そんな二人を俺達は向いに座ってただ、呆然と見ていた。

いや、俺は若干、驚きで顔を歪ませていたのかもしれないが束はいつもの様に無表情で俯き加減に見ていた。横目で見ると束の表情は表面上でこそは無表情だが何処かで失望しきっている様に見える。

「束！お前があんな物を作ったから私達まで世間のさらし者に！その気持ちがお前にも分かるか！」

「今まで育ててきてあげたのに！！どういつつもりで！私達が今まで誰の為だと思ってるのよ！！誰の為に毎日毎日努力して……ふざけてんじゃないわよっ！！」

声を荒げて力の限り必要に叫び続ける二人。

もう、二人に残っているのは怒りと憎しみと自己の悲しみだけ。

そして、その溜まった憎悪を今、全部、俺達にぶつけて吐き出している。

もう、呆然と見ていることしか出来なかった。どう言葉を掛けていいのか分からない。

何か言おうと思っても一瞬、考え付くんだけど萎縮して全て一瞬で消えて何を言おうとしていたのか分からなくなる。

そう黙ってしまっていると

「何とか言いなさいよ！束！！　　ッ！ッ！そんな顔してないで！

！」

「束ッ！！」

言葉だけで叫んでいるだけじゃ耐えていたけどもう、限界で耐えれなくなつた篠ノ之のお父さんは束の名前を呼んで殴ろうとした。

それでも束は無表情　　いや、ご両親をこんな風にしてしまった罪

を償うような目を無表情のまましていて怖がるうともせず逃げようとも避けようともしなかった。
「ただ、俺は」

「ッッ！！」

「綾！？」

無意識に体が動いて束が殴られそうになった瞬間、とっさに束の前に出て束を庇うように篠ノ之のお父さんに殴られた。

本気で殴ろうとしていた為か威力はとてつもなく反動でそのまま壁までぶっ飛ばされた。

壁に背をぶつけた瞬間、あまりの衝撃に意識を手放しそうになったが束が名前を呼んでくれて何とかそれは免れた。

「ただ、ぶつかった背は痛くそして、殴られた頬もまた、とつても痛くジンジンしていた。」

拳はその人の思いを伝えるものと何処かで聞いた覚えがあるけど正にその通りだ。

殴られて伝わってきたのはとてつもない怒りと憎悪。

「ああ、やってしまった。」

「そんな言葉が再び頭の中で再生された。」

「ああ、やってしまったな。」

「ご両親はISを作った事によってその開発者の親として世間から異様な目を見られた。」

「今までも次元違いの天才である束の親として異様な目で見られていたけどそれでも今の今まで耐えてきた。」

それでも今回のISの事が全てのきつかけと壊れていた。

こうなると何処かで分かって分かっていたのに頭の隅で本当に分か
りきっていた。

なのに、俺は誰よりも何よりもずっとずっと昔から束の事だけが
切で独占したかったんだ。

俺だけのものにしたかったただけなんだ　守りたい大切にしたい
って気持ち以上に。

そして、何よりも誰よりも束だけを優先しすぎた。

優先しすぎて束という“刹那”が楽しくて束といれて“刹那”を感
じて嬉しくて束との一瞬一瞬の刹那を“不変”にしようとし過ぎ
て束だけをとし過ぎて他を蔑ろにしすぎた。

そのツケが今、回ってきた。

確かに俺と束は前のルールが嫌だったからISという力を生み出し
ルールを作る側に回った。

その結果、世界は適応しつつある。

その事で一方的に叩かれる義務も権利もないと言ったがそれでも俺
達は叩かれなければならない。

咎なら受けるつもりだ　本当なら俺一人で受けたいがどうも束も
でしゃばりで一緒に咎を受けようとしてくれる。

あの時、止めていればよかったがやはり止める気は今でも更々ない。

そうした事で後悔がないと言えは嘘になる。

だけど、それでも後悔は絶対にしない。

「……………あなた達は！」

殴られて今一つ、体に力が上手く入らなくて倒れている俺の傍に束

は寄り添って心配そうに手を握ってご両親を睨んでいた。
睨む目はとつても鋭く見える瞳には怒りが籠っている。
咎を受ける覚悟がありこうなる事も覚悟していてもどうしようもない気持ちはある。束の今の気持ちはそういう気持ちなんだろう。

睨み怒りを露にしている束とは反対にご両親は俺を殴ったことで怒りが少し収まったようではほんの少しだがスッキリした顔をしていた。束を殴ろうとしけど俺が庇い殴った事に悪びれる素振りなんて微塵も無くただ、とつても冷たい目の色をしている。
そして、その目のまま篠ノ之のご両親が冷たく言い捨てるように言う。

「束がそんな表情でそんな目をするなんてね」

「ははっ！そうか　お前が束を唆したんだな」

冷たく言う篠ノ之のお父さんの言葉に余裕がまだあるのか「どうしてそうなる」と思った。

「止めなかった」唆した「が唆したらになるのならそうかもしれないが本当にどうしてそうなる。」

そう心に余裕があつて思っていると続けざまに言う。

「君も束と同じく天才だからな、いらん悪知恵が働いたんだらうな」

「そうかもしれないわね。本当に。そんなにだから貴女は神山夫妻捨てられたのよ」

「……どういつ」

どうしてそれに繋がるのかどういつ事なのか訳が分からずにいると

更に言葉を続く。

「ああ、あなたは知らないのよね。どうして夫妻が自殺したのかを。丁度いいわ、言っておける」

「君はね……捨てられたんだよ！幼い頃から天才だった君を夫妻は気味悪がって君という存在に受け入れられず精神を病み、耐え切れず夫妻、二人揃って自殺したんだ」

「（……ああ、そういうことか）」

「貴女はねえ！爪弾き者なのよ！」

と、ご両親に冷たく言い捨てられた。

不思議と嫌な気持ちも怒りの気持ちも一切、沸かなかった。

むしろ、死んだ両親の事でモヤモヤとしてた事が全てすっきりとして全てに納得がいった。

何故、両親が死んだのか、その理由も何故、葬式に呼ばれなかったのかという理由も全て納得がいった。

俺も爪弾き者だと常々思っていたが今一つどうしてそう思うのか分からなかったが言われたことで納得がいった。

漠然としたといったらいいのかモヤモヤとしたと言ったらいいのかわからないが　そうした全ての事に納得がいった。

「兎に角、もう、帰ってくれ」

「……」

「そして、もう帰ってこなくてもいいわよ。水城さんには悪いけど其処へ……どこか目の届かない所に行つて」

「……」

「もう、分からないから……どうやって貴方達を愛していいか分からないから」

「綾君……君なら束を任せられると思つていたが失望したよ。今日はもう、帰つてくれ」

ご両親が代わり代わりに言う言葉は明らかな「拒絶」の言葉。

違う……こんな事を言つて欲しかったんじゃない。

ただ、普通に前、見たいに和氣藹々と少しでもいいから束も交えて皆で話せられればよかった。

だけど、こんな風に言われたら俺は兎も角、束はどうすればいい。

血が繋がった家族なんだぞ“血が繋がっていれば分かり合える”なんてキレイゴト言いたくないけどどこで関係性を捨てたらもう何も試せない何も取り戻せない。

「分かりました……今日のところはこれで帰らせていただきます。

だけど、覚えておいて下さい。どんな事を言つてもどんな事をしてもご両親と束と篤は血の繋がった家族です」

「……っ、な、何を言つて」

「その重さをいずれ知り今はだめでもきつと分かり合えると私は信じています」

そんなシンプルな言葉しかいえない。

何を言ってももう、やってしまったのだから意味がないと分かってもこうとしか言えなかった。

言っでご両親に覚えておいて貰わないといけない。

本当の爪弾き者は俺だけで充分だ。

「では、また近いうちに顔を出しに来ます。今日は失礼しました」

「……………失礼……………しました」

そう立ち直しながら俺がまず、始めに言うと言って続けて束も途切れ途切れに言った。

そうして、俺達は篠ノ之のご両親に背を向けリビングを後して家を出ようとすると背を向けた後ろに聞こえた。

「勝手にしろ」

そうシンプルな言葉が。

確かに拒絶はされてしまったがこう言われた内は大丈夫だ。

互いが互いを忘れない限り分かり合える機会は少しでもあるはずだから。

…

第十一話 ? (後書き)

というわけでいいがだったでしょうか第十一話 ?

最初の白騎士事件後の世界の変化の仕方は一応、原作設定に基づいています。

そして、この話は前々から書きたかったのです。

今回の話のテーマとしては世界を変えたツケ、堪える身近なツケです。

筈には原作ではたた、触れられています。が篠ノ之のご両親については触れられてないのでこんな感じかなと思いつつ書きました。

参考はフルーツバスケットの拒絶型の親が参考となっています。

普通はこうなると思います。

今までが今までだっただけに、その積み重ねで。

アンチではないのですが主人公と束さんはこういう風に変えた責任を問います。

この小説はいつもいいますが“アンチされもの”です。

つまりはアンチされる側の視点でそういう話を書いていきます。

ちなみに主人公の両親が死んだ理由は最初もつと凄かったのですが押えてこうなりました。

もっと、後書きでいわなきゃいけない事があったのですが忘れしました。

最近ちょっと疲れ気味で思考がかなり鈍っています。

では、また、ご不明な点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さ

い。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

追記：感想がくるまで次回は更新しないつもりです。

感想下さい。詳しくは活動報告を参照。

第十一話 ？（前書き）

やっぱり感想の力って凄いですね。

鬱になりかけて更新する気がなったのに更新する気になったんですもの。

それではどうぞ。

第十一話 ？

家を後にして手を繋ぎながら奈々さんの所に帰る道中、俺達は無言だった。

さっきの様な重く苦しく暗い雰囲気は無言ではなくお互い何処か心地のよい無言。

そして、互いに今日の事を頭の片隅で少しずつ整理している。今日はいろいろとありすぎた。

「ごめんね、綾」

無言だった道中、聞こえたのはそんな束の言葉だった。

「あの人に殴られたけど大丈夫？」

「ああ…その事。大丈夫だよ。それとあの人なんて言っちゃダメだよ」

「でも……」

束がそう言ってしまう気持ちも分からなくはないつもり。

あんな事を言われてされたのにも通じ「お父さん」なんて呼べて言われても直ぐには呼べないし呼びたくはないだろう。

それでも「あの人」なんて呼ぶのはあまりよろしくない。

「それでもだよ。今は無理でも追々、前みたいに呼べばいい。だから、そんな風に篠ノ之のお父さんの事を呼んではダメだよ。どんな事が合っても家族、なんだから」

「……分かった」

小さくだが頷いて束は分かってくれた。

「それにこうなると分かっていたけど、咎は受けないとその覚悟があつてやったんだ、総てを」

「そうだね。覚悟があつて総てをした」

「それでも……」

「何？」

「こんな事になつてしまつたけど篠ノ之のご両親の事を忘れないでくれ。関心をなくさないでほしい」

そう言うと束は再び黙つた。

束の篠ノ之のご両親への関心がかろうじて『身内』として認識できるぐらいだったからその辺が少し心配だった。

今回のこの事で束の両親への関心が完全に無くなりもう、関心もてなくなるじゃないかと。

束にしたら関心がなくなるという事はつまり忘れてしまつたという事と同じだ。

忘れてしまえばそれで終わりだ。忘れたものをもう一度、思い出そうと感心を持つとうるのは難しい。

だから、俺は少しでも“ギリギリ”としてでもいいから束の篠ノ之のご両親への関心はなくさないでほしい。

それが俺の身勝手な思いだと分かっているがそれでも関心をなくさ

ないでほしい。
忘れられない限り……分かり合う機会は幾らでもあるし作られるのだから。

「……あ……う……わ、分かった。努力……善処する」

そう束はしどろもどろになりながらも言った。

今はそれでいい　むしろ、それがいい。

努力、善処していればなんとかなる　必ず。

忘れる事は無いだろう　お互い。

「あ……でも、篝ちゃんにもしつかりとお話しないと」

そうだな。

篠ノ之のご両親があんな感じだったんだ篝はもつとだろう。

天才の妹として見られ今度はIS開発者の妹であり『身内』そして、

あのご両親。

辛いことが何度も続いている。これからもしかすると心身ともに負担を受け続ける事になるだろう。

何とかしなくては。

これは嫌われるだろうな……完全に。

嫌われることも何もかも覚悟してISを世に解き放つたんだが……覚悟していても悲しい。

今まで篝を溺愛しすぎていたのか嫌われると思うと心が痛む。

何かを得るためには同等の代価が必要と聞いた事がある。

俺達が得たものは確かに多いし大きいが見失ったものまた、多く大きく同等である。

「二つは得られないか……」

「そうだね…… 箒も話し合わないよ。話し合って理解し合わないよ。お互いの気持ちを言葉でぶつけ合っても」

「うん。私が言ったら何だけど…… 箒ちゃんならきつと分かり合ってくれと思うんだ」

「可愛くて素直で利巧で優しい姉思いのいい子だからね。きつと分かり合ってくれよ。俺もそう思うよ。そうだと信じている」

「だね。あ、それと姉思いでもあると思うけど兄思いでもあるんだよ」

そう束は隣で歩きながらにっこりと笑顔を向けて言う。

話してあったたからしか理解はし合えない分かり合えない。言葉とはそういう意味でもありその為にも使えるのだから。

それに箒とならきつと理解し合い分かり合えると信じている。身勝手でご都合主義な考えなのは充分、理解している。それでも希望は捨てたくない。

箒と束には前の様な関係で…… 前、以上の信頼関係でいてほしい。

もしもダメだったとしたもそうあってほしい。

本当に爪弾き者でいいのは俺だけで充分…… なのだから。そう思っていると。

「あ〜っ！」

隣でそんな踏めき声の様な声を出して束はむうとむくれた様な表情

をしていた。

どうしたのか……そう思っていると束はそのままの表情で言う。

「どうせ綾の事だから……」「本当に爪弾き者でいいのは俺だけで充分……なのだから」とか思ってるんでしょ」「

「えっ」

言われた時、上手く反応が出来なかった。

見透かされていた……完全に。

思ったこと一字一句違わず見事に言い当てられた。

「やっぱりね。綾はお父……さん達が言った“あの事”を気にして思っているんだろうけど気にしすぎ……気にしなすぎもダメだけど気にしすぎなのもダメだよ」

「それでも……」

「綾だけにこのやってしまった事の罪の部分を絶対に背負わせないでしゃばりと思われてもいい……だけど、その罪は私でもあるのだから私も一緒に背負っていく」

そう歩く足を止めて束は真剣な目で言う。

足を止めたところは誰も無い“あの公園”とは別の公園で静かに風が吹き太陽が木漏れ日となって俺達を照らしている。

束には敵わないな。

思っている事を全て言い当てられている。

「爪弾き者は私もだよ。それは変わらない。でも、爪弾き者だとし

ても一人じゃない綾が傍にいる。だから、そんな風に考えたり思ったりしないです」

「……束」

「綾は私にあの約束をしてくれた。そして、それを守ってどんな時でも私の傍に居てくれた。だから、私も同じ。どんな事があっても絶対に未来永劫……綾の傍に居る」

向き合って真剣な面持ちが言う束から強い思いが伝わってくる。強く強く言葉の思いが伝わってくる。

「私は譲らない。人の世から弾かれたのは確かに悲しいし寂しい。けれど、綾から離れるのも置いていかれるのはもっと寂しくて悲しくて嫌」

「……」

「いつも傍に隣にいたい。離れるのは嫌。待っているのも嫌。どんな時でも未来永劫でも綾の傍にいる。居させてほしい」

俺の両手を束は両手に包むように握って言う。

本当に束には敵わない。

こういう嬉しい刹那一瞬があるからこそこの選択は絶対に後悔しないと思える。

不変なんて無理なのかもしれないけど今はこの嬉しい思いを感じられる刹那を不変になるようにしたい。

このまま時が止まれば　それはそれで美しい。

だけど、何だろうか“不変な刹那”なんていらなと思う。

一瞬、一瞬の刹那を味わいながら束と前へ前へと変わっていきたい
― 変わり続けていたい。

二人一緒に手を繋いで嬉しいこと悲しいことの刹那を繰り返して
そうやって前へこれからを歩んで生きたい。

「ありがとう」

そう言っただけは束を抱きしめる。

抱きしめると束も安心してなのか俺に体を預けてくれた。

この今感じられている“至高の刹那”を不変に出来る様、これから
頑張っていこう。

二人一緒に。

「二人で頑張っていこう」

「そうだね。どんな時も二人で頑張ろう。一人で頑張れるところは
頑張ればいいしダメな時は頼って担がれればいい。むしろ、担ぐ。
重荷なんかじゃない……重荷なんかじゃないんだよ」

「うんっ分かつている。それはお互い様な事でもちろん私もそうで
綾もだよ？」

「分かっている。さあ、帰ろうか」

「うんっ」

もう一度、俺達は手を繋ぎ帰り道を歩き始めた。

降り注ぐ木漏れ日はまるで俺達の背を優しくさすって後を押しして
くれている様だった。

ISによって世界は“変革”して変わりつつある。

得たものは大きく多いが失ったものもまた、大きくて多い。

たまに後悔したり足を止めたり後ろを振り返ったりするかもしれない
いし必要だけどそれでも止まり続ける事はしない……絶対に。

立ち止まったり後ろを振り向いたり後悔しても俺達は少しずつでも
前へ前へどんな時でも 二人一緒に歩んでいく。

この出来事はそう決意を新たに固めた出来事だった。

そして、現在

「（どうしてこうなった）」

俺はたくさんの女性に囲まれていた。

…

第十一話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第十一話ー？

束さんが結構、変わって主人公も少し変わっています。

主に考え方や思い方ですね。本当に微々たるものではありませんが、両親とも和解させて上げたいものです。無理に近いですが。

問題は筈ですね。

原作ではかなり嫌っていたのでそこに主人公を挟む事によって解消していきたいと思っています。

目標としては仲のいい姉妹ですかね。物語の初めの頃の様なもしくはそれ以上に。

束さんの両親への関心についても今回で原作どおりギリギリとなりました。

あれは私の自論ですね。忘れてない限り忘れられてない限り機会はあるというのは。

ご都合主義な自論ではありますがww

束さんの主人公に対する思いや決意。

二人の決意は私なりのものですがやたらフルバ臭がするかもしれませんが悪しからず。

そして、次回からは新たな章の始まりです。

これから様々な事が起きる予定です。

千冬と束が殴り愛したりアンチされたり殺されかけたりといろいろなイベントが盛りだくさんです。

いい意味でも悪い意味でも。

また、ご不明な点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。
今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十二話（前書き）

新しい章の始まりですっ。

今回はいろいろと主人公の心理描写を柔らかくしてみました。

それではどうぞ。

第十二話

綾視点

春。

それは始まりの季節。

その他には出会いの季節　なんて呼ばれたりする季節。

国によつては違うが日本では毎年三月が年度替わりとされ様々な区切りとなり会社や学校が新しく始まる季節でもある。

暖かく心地のいい穏やかな日差しと風を浴びながら新しい気持ちで新しい物事を始める季節。

俺も春は大好きだ。

四季の中でも春と秋が好きでその中でも春は大好き。

花見をしたりするのもいいし気候もほどよい感じで昼寝するのは絶好だ。

ああ、俺は春が大好きだ。大好きなのだが今の俺としては嫌いになりそうな気持ちだ。

と、言うより新たなしい展開期でもあるのに今にも心が折れて俺の^{言葉の}新書春が終わりそう。

「（どうしてこうなった）」

俺は机に両肘を付け両手で頭を抱えて悩むように心の中で俯く。

何故そうしているのか　簡単にして簡潔な事、俺以外のクラスメイトが全員一人残らず女子だからだ。

本当にどうしてこうなった。何処で選択肢間違えてこんな拷問されている様に気持ちに追い込まれているんだ。
教えてください。

「綾？大丈夫？何だか変つてこな難しい顔しているけど」

「何とか、ね。大丈夫だよ」

隣の席に座っている束が心配そうに声をかけてきた。

それを俺はほぼこのままの体勢で横目に束を姿を見ている。

実に新学期にして新入学らしい“高校の制服”を束は着ている。

うん。自慢の彼女ながらとつても似合っていて可愛らしい。時と場合がそろって二人つきりなら脱がしているかもしれない。

と、自重、自重。餅ついて落ち着けて神山綾。いつもの調子を保つんだ。

春と入学というキーワードで分かると思うが今日、俺達は正式に高校生になった。

それ自体は至極、喜ばしいことで奈々さんや旦那さん達にも喜ばれた。

ただ、入学した学校が変。と言うよりどうしようもなかった。

俺達が入学してこれから約三年間、通うことになる高校の名はIS学園。

学校名の通りIS関係の学校で特殊国立高等学校。

『白騎士事件』から約一年が経ちISが開発普及を全世界へと促して世界は“変革”しIS運用制限条約が締結されその条約のに基づいて日本にこの学校は設置された。

ISに関連する人材はほぼこの学園で育成されまた、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、干渉されない。

つまりは治外法権区なわけで日本がまだ、成人ではない束を人間としてのモラルと人権を遵守して守るべく設置された意もある学校でもある。

ISはまだ、開発普及は少しずつでありIS自体も白騎士を解体し企業などに技術提供の形で公開して今後のISの基盤となり現段階ではどの国でもISは研究試作開発、段階であり

高校としての機能もあるがどっちかと言うと研究機関としての機能の方が強く治外法権な為、他国のISとの比較や、新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。

とは言うもののIS運用制限条約 通称、アラスカ条約が締結されてから少し後にこの学校はでき本当に新高。

ISについての知識を理解したのは極一部それも数多ある知識の極一部でありこの学校は今後のISに対しての理解と知識を深める為にもありISの知識や教科書については東自らが書いた。

と、言っても本当に書いただけで全て分かりやすく修正したのはほぼ俺と少し千冬である。

ちなみに治外法権区だがそれは絶対ではなく学校を運営するあたり資金が必要であり運営資金は「自国の人間のツケは自国で払って技術だけは寄こせ」というもので 実際に言われた。

そういう事情のとうか脅しとうかそんなんでも運営資金は全て日本も持ちでウチ半分は旦那さん “水城一郎”さんの会社が出してくれる事となった。

それを聞いた時、俺は全力で綺麗なジャンピング土下座で感謝して怒られた 「漢が簡単に土下座するものではない。だから、お前は阿呆なのだ！」と某最強師匠な口調で言われて。

で、何故、俺がこの女の園であるISに入学して通うことになった

のかというのも至極、簡単な理由。

俺が今のところ、世界で唯一ISを使える男でその事をこの学校が出来たと同時に束と奈々さんと公表して強制的に入学することになった。

もちろん、人権と人道的なモラルをある程度、守つての取調べや身体調査は何度も同じ様な事をされた。

それ自体は許容の範囲内で大した事は無いのだがそれより現状の方が辛い。

本当ならモルモット行きだったのだが良心的な一郎師匠の息のかかった政治家の方々のお陰でそれは免れた。

ただ、このIS学園に入学する事を免れることは無理で束のお目付けとセーブ役としての入学の意もあり俺と束にはいくつかの願いがあった。

それは男として使える俺の運用データの一部を全世界への公開と束は少しでもいいから知識と技術協力がしてほしい等のお願いがあった。

それも許容と予測の範囲内で受諾した。まあ、束は少し乗り気ではなかったけど。

「綾、本当に大丈夫か？さっきからその状態だぞ」

「えっ？ああ、大丈夫だよ」

などと今までの「どうしてこうなった」というのを思い直していると今度は前の席に座っている千冬が後ろにいる俺に向って少し振り返って心配そうに問いかけてくれた。

それを俺は心配させないように言つと千冬はまだ、心配そうな表情をしつつも前に向きなおした。

本当、言うとは大丈夫じゃない。

もつと有体に言うとは「そんな状態で大丈夫か？」と男の墮天使に聞かれると俺は素早くはつきりと「大丈夫じゃない。大問題だ」と答えるぐらい本当に辛い。

ただでさえ束と一緒に異様な目で見られるのに『世界で唯一ISを使える』とプレートのお陰で異様な目で真面真面と見られる。

現在は新入学や新学期とかの恒例である自己紹介タイムで席順は適当に座ってバラバラだが端から始まってそれを聞いている。

聞いて待っているだけなのにジリジリと精神力が悪い意味で削られていく。

誰かが自己紹介をしている時はある程度はその人に視線が行くが残りの半分は俺に集まって俺と隣の席に座っている束は煩わしく感じている。

こんな風に見られるのは分かっていたし覚悟していたから大丈夫なんだけど。

問題はこんな風に見られてこの現状に置かれている事だ。

流石にこんな状態になるなんて予想してないし第一予想がつかない

ISを開発して広めたのを後悔そうになる。100ある内の10%強だけだ。

いや、よくよく考えた今のところ男でISを使えるのは俺一人で他は全て女性なのだから「こうなるのも当然では？」と今更になって考えついたが耐えるのなんて無理です。

エロゲやギャルゲーで女子高に女装してとか女子高との仮統合で女の園に放り込まれるとかこんな状況とよく似たゲームをプレイしてよく「女だらけの学校は実際辛い」とか読んだが本当にそうなのでびびくりしてとっても痛感している。

視線が刃のやいば様とかの比喻表現があるがまさしく、だ。

事情が事情なだけにどうすることもどうにかするわけにもいかずこれからこのやっってしまったことへの罰ゲームの様な黒百合咲く生活をしないといけないと思うマジで死ぬウツ。

第、一夏……兄さんは入学そうそう不登校という悪い高校生デビューしそうな状態です。

安西先生……俺、お家に帰りたいです　もっとも帰る様な家はなくなってしまうたわけだけど。

そう集まる視線を受け止め流しながら現状に対する気持ちを落ち着ける為に考え事に耽っていると自己紹介の順番は束に回ってきていた。

「篠ノ之さん、次ぎどうぞ」

「はい」

短く返事すると席を束は立ち上がる。

表情上はほぼ無表情でいつも通りだった。

まあ、束らしいと言えば束らしい。

大して緊張も俺の様に阿呆な考えもしてないみたいだし。

「篠ノ之束です。どうぞよろしくお願いします」

いつも通りの雰囲気と無感情な口調でそうとだけ簡潔に名前と挨拶だけ言って軽く会釈すると束は静かに席に座った。

うん……頑張ったほうだね。前なら無言か名前だけ言って終わっていたし……それを考えると少しは束の内心でも変化があったと言う事。

ああ、いい事だ。俺としても束の進歩といか変化で見れて大変嬉しい。

だが、束の自己紹介の簡潔さにクラスの人間は啞然としており唯一早く反応した女の担任の先生が慌てて束に問いかける。

「そ、それだけですか?!」

「……っ、それだけですが、何か?」

「……い、いえっ、何でも」

担任の問いかけに束は煩わしそうに一瞬して無感情に最後の言葉の語気を強めて言うと女の担任は慌てたように何処か怯えたように次の人の自己紹介に移った。

考え事に耽っていて名前は忘れたけどあの女の先生、大変だな。

なまじ子供だと思って強く出ると世界が壊れてしまいそうな感じの奴だからな。端からすると束は。

迷惑がられないように全力で守って全力で要所要所でフォローを入れていかないと。

苦じゃないしむしろ、束の為になるんだから喜んでやる。

だが、束にもこの気が変わってもらえればと思う。

「どうしたの?綾」

「いや、よく頑張って偉いなあ〜と頑張って」

「もお……ばかっ。こんなところで言わないでよ」

何となく言葉で言って頑張りを褒めたくなつた俺は小声で束だけに聞こえる音量で束を褒めると束は同じく俺だけに聞こえる音量で照

れたように言って可愛らしく照れてた。

こんな状況でこんな可愛らしい表情を見れてるとは……福眼福眼。何か今の今まで削られていた精神力が一気に回復した気持ちだ。そんだけ束に俺はベタ惚れってことか。

照れた束に見惚れているといつの間にか順番は俺の前に座っている千冬の番となり。

千冬は座っている席を立ち自己紹介をしようとするところの時だけ千冬に全ての視線が集まり教室は女子独特のざわつきに包まれる。ざわつきから聞こえる会話は千冬の評価でそれなりよりも高い。

ここでも……高校でも千冬は人気が高いな。千冬は容姿端麗で性格もよく成績優秀で頭もいいそれに加えて面倒見もいいそれにお姉様気質だ。

いいところがバーゲンセールみたいに多い。それもどれも高品質とといった感じでいい。そう思ってた自分と比べてしまうとやはり自分がどんだけ凡人なのかよく分かる。

「初めまして織斑千冬です。皆さんとこれから仲良くしていきたいと思うのでどうぞ、よろしくお願いしますね」

そう千冬は優しい笑みを浮かべながら温かみのある優しい声でそう自己紹介し軽く会釈する。

凄いな。流石、千冬だ。変に好きな物とか入りたい部活はとか言わずにシンプルイズベストに乗っ取って簡単に簡潔な自己紹介だ。それでいて表情や声色は好意を持てる感じで千冬らしい自己紹介だ。

反応はよく教室はピンク色に包まれ白百合の花が咲きそうな雰囲気。で女の子達の静かでそれでいて凄く歓喜の様なざわめきに支配された。

凄いな、本当に。クラスメイトの半分が千冬に見惚れて惚れている

人もちらほらと。

これはよくある姉妹の関係を、とか千冬は言われそう。実際の女子高でそんな事があるのかは知らないけども。

そして、千冬は自己紹介をすませ席に座ろうとした瞬間、一瞬だけ俺を方を向き「どうだった？」といった感じの目配せをしてきたので俺も「よかったよ」と言った感じにアイコンタクトの要領で目配せをして返事をする。千冬は何故か頬を少しばかり赤らめ恥ずかしそうに視線を逸らしそのまま座った。

何故、照れる？

そう思い思っていると次に座っている俺の番となった。

ついにか……散々、束や千冬の自己紹介を聞いて偉そうに分析して言ったが上手く出来る自信はあまりない。

自己紹介の類が苦手ではないけども……こんな状況下で自己紹介をするのは始めの体験な訳で感じがつかめないでいる。

とりあえず立って皆の方を向くかな。

「(オウ……っ)」

席から立ち上がったって視線を全て独占状態にすると先ほどより強い視線に思わず心の中で情けない言葉を思い浮かべてしまった。

何、コレ いざ、自分の番になって今から自己紹介をしようするのにし難いし辛い。

物珍しさな視線が中にも数人ほど混じっていて強い視線を集めすぎで人間不信になりそうな気がする。

兎も角、今は自己紹介をして取り合えず座ろう……これならまだ、座って視線を浴びている方が幾分かは楽だ。

「皆さん初めまして神山綾です。史上初の男のIS操縦者でありただ一人の男と言うことでいろいろ迷惑をかけることもあると思いますが、よろしくお願いします」

千冬を見習って優しい笑みを浮かべながら温かみのある優しい声でそう自己紹介し軽く会釈する。

自己紹介の言葉はほぼ、千冬を拝借させていただいた。こんな状況で笑みを浮かべるのも初めての事でつい引きつりそうになった頑張った。

千冬の凄さが改めて分かった。あんな愛想の笑みじゃない自然な笑みを浮かべられるなんて凄い。

そう思いつつ会釈した上半身を起すと横目に耳を塞いでいる束と千冬が目に入った。

何か起きるわ。

取り合えず自体の備えて一瞬で身構えると……

「キヤヤヤヤヤヤツ！カツコイイ！」

クラスほぼ一同の大声が聞こえる。

突然の事に反射して耳を押えたので耳は大丈夫だったけどそれ同時に何を言っているのかは聞こえなかった。

何だろう？変なことだったら嫌だ。

取り合えず自己紹介が終わったら座ると横目に座った束の様子が変わった。

何というか拗ねている様な嫉妬しているような感じ。

「どうしたの？」

「ふんっ！べ、別になんでもないっ」

次の人の自己紹介の邪魔にならない様に小声で束に聞いてみると束は小声でやっぱり拗ねていた。

さっきの千冬の様子といいクラスの女子の訳の分からない叫びとい束のこの様子といい……今一つよく分からない。

束には後でフォローを入れつつ聞いて慰めておくか。

その後、やはりどうしても集まる視線に耐えつつ受け流し続けていると自己紹介が終わった。

終わったといっても本来は一時間目を全部使って丁度終る予定だったらしく現在、あと十五分余っている。

何だ……その、嫌な予感がする。主に質問攻めされそうな意味で。

「それでは自己紹介も早く終わった事ですし……後は自由時間とします。二時間目からはカリキュラム等の説明をしていきますので二時間目の初めは皆さん揃って座っていてくださいね」

そう言い「先生は次の用意をしに職人室に行きますが節度ある高校生として自覚ある行動をするように」とだけ先生は言々と教師を後にした。

何だか終わった様だ……バツクレよう、メンドクさくなる前に。

校舎の全体図は既に頭に入っているし迷う事はない……二時間目始まる一、二分前ぐらい戻れるようにしたらいいか。

そう思い席を立って本当にバツクレようとした時だった。

「ねえ？皆で神山君に質問タイムにしようよ！」

「いいね～さんせー」

一人ノリのえらくいい子が訳の分からないことをいいそれにクラス
の大半が言葉を揃えて賛成した。
うあ〜バツくれるの無理だった 質問タイムとかやっぱり女の
子はそういうのが好きなのかな。
まあ、現状でハッキリしている事はバツくれるのは無理となったの
は確定的に明らか。

その証拠に俺と束の机の周りには沢山のクラスメイトが集まってい
る。

それも全員、女子で逃げようにも逃げられない状況にあった。

俺にその質問タイムとやら拒否権はないようだ…ちくせう。

「ねえねえ！好きな食べ物って何？」

「えっ。えーと、シチューかな」

「あはは。可愛い」

前触れもなく質問されつられる様に答えると訳の分からない返しが
来た。

可愛いのか？確かに子供っぽいのは認めるが。

「次に特技は？」

「あ……一応、家事全般を」

「本当に〜！神山君って家庭的なんだ。うんうん、いい主夫になり
そう」

「……主婦」

そして、流される様に答えてしまった事でそれに拍車を掛けたのか更に次々と質問がいくつも飛んでくる。

その質問に仕方なく応対している間、束の千冬の視線がとつても痛く心が酷く痛かった。

その後も審問タイムは二時間目のチャイムが鳴るまで続き束達の鋭く刺さる視線といい精神的にきつかった。

…

第十二話（後書き）

というわけではいかげんだったでしょうか第十二話。予想外だとなったのなら嬉しいです。

ついに新章です。

感想板では新章を原作時のIS学園編と思ってらっしゃる方が多かったです。

残念っ！過去のIS学園編です。

学園の設定とかは原作設定を交えつつ独自解釈した独自設定を使用しており

一部設定はしんかー先生の「IS - 疾風の生更ぎ - 」の設定を許可を頂いて使用しております。

この章では普通に学園ストーリーをしつつ原作の設定にある事もしていきます。

例えば千冬が日本代表になって第一回モンド・グロツソに優勝してあの称号を手に入れて有名になるなど

原作でほのめかされている事を細かくやり様々な事したり起したりしつつアンチさせたりしていきます。

感じとしてはエロゲーやギャルゲーみたいな感じで進めていきたいと思っています。

いろいろなイベントをしたいので。

そして、今回ですが主人公の心理描写がネタだらけでしたww

いきなりこんな状況になってテンパっているというのもありますがISが世界に受け入れられ束も地に足を付けれる事ができて心に余裕が持てたという意味もあります。

今回は本当にためしでネタだけられになりましたが基本的にはこんな感じですよ。

ただし、次回からはこの感じは少し押えていきたいと思っています。束さんも変わりました。前回は内面的でしたが今回は外交的に以前の束さんな名前だけ言って終了でしたが挨拶と会釈つきなので大分、変わりました。

これも主人公と同じく心に余裕を持たたからです。まあ、基本無表情なので大して変わりがないように思えますが変わりました。

千冬さんはやっぱり人気者ですねww

姉妹ができそうな一方的な百合百合な感じにしていきたいと思っています。

百合といっても言い寄られるだけで千冬さん自体は主人公一筋です。

ちなみにこの主人公ってヘタレですかね？

何となく気になっただけなのであまりに気にしないで下さい。

それと旦那さんの名前も気にしないで下さい。

苗字を水城にする前から決まっていたたまたまだったので。

つてか、早く主人公と束さんをイチヤイチャさせたい。

それはもう読んでいる方々が100%糖分で出来た血を吐くぐらいの話。

だが、展開がそれを許さない。公表してないので……ちくせう。

また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいた

します。

次回の更新意欲に深く関係してくるので。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十三話 ？（前書き）

今回はほのぼのした話です。

基本的にはこれにもう少し甘さを足した感じの話を書いていきたい
ものです。

本当、白騎士事件以前までのシリアスが強くて多かったので自分で
も違和感を

覚える話ではありますが

それではどうぞっ

第十三話 ？

綾視点

「はぁー」

「深い溜息だな。確かにお前の気苦労も分かるがそんな溜息についてたら幸せ逃げるぞ」

「逃げてるからついているんだよ」

再び深い溜息をついついてしまった俺の様に隣でいる千冬は苦笑いを浮かべながらも俺を心配そうに気に掛けてくれている。

ようやくあの気の重たい午前の授業が終わった。

やはり俺という男子一人に対して他は全員女子というのは辛い。

それと物珍しさな視線や異様な視線で見られ続けているのも辛い。

とつても応える……こんなのがこれから続くと思うと気が思いやられる。

時期にこんな感覚もマヒして慣れてしまいそうなのが今のところ、ある意味では悪いところである。

そして、現在、時間帯的にはお昼ご飯時で俺達はというと職員室の前で束を待っている。

理由は別に束が入学早々、何かをしでかしたというわけではなく簡易型のIS基礎理論授業についての束への質問と打ち合わせみたいなモノを束は今、一人でしている。

大人からしたら子供に教えを請うのは癪だろうが如何せん、ISについて全てを完全に理解把握しているのは製作者である束なのであ

るからプライドを立てずに聞くのは最善だと思う。

最初はやはり束はその打ち合わせ等に渋っていたけども「少し頑張ってみたら」と背を押すと束は渋々だが打ち合わせ等をするのを了承した。

それでもやっぱり心配だったので呼ばれているのは束だけだったが着いていこうとしたら「悪いけど待ってて。私、一人で頑張ってみるからっ」と言われ

それを聞いた時は驚きのあまり俺と千冬は絶句して束に拗ねて少し怒られてしまったが束が自らゆっくりと少しずつでも変わろうとしているのが分かりとつても嬉しい。

そんな気持ちを抱いたまま俺達は束を見送り職員室の前で待つ事にしたのだった。

「束があんな事を言うなんてな。思ってもみなかった」

「そうだね。でも、いい事でしょう。少しずつでもゆっくりでも変わろうとしているのは」

「だな。昔と比べると大分、変わったよ。束は」

そんな風に束がゆっくりと少しづつ変わろうとしている事を千冬と俺が喜び合いながら話ながら束を待つ。

既に待つこと約十分経とうとしているが今日は午前中までしか学校はなく明日から本格的に授業とかが始まるらしくて時間には余裕はかなりある。

そうして壁に凭れながら束が終えて戻ってくるのを待っていると千冬が俺を横目でチラッとだけみて何か言いたそうにしている。

「な、何か？」

「あつ……いや、そのだな。どうだ……?」

照れた表情で千冬は壁に凭れている俺に姿がちゃんと見える様、斜め前に少し出る。

斜め前に少し出ると千冬は気恥ずかしそうに制服姿を見せてきた。どうだ?というのは制服姿の事だろう。

中々、言う機会がなくて制服姿の感想を言えてない。

「そうだね……」

「……うん」

体を起し真面真面と千冬の制服姿を改めて見てみる。

それを千冬は少し不安そうにしながら何を言われるのかと待っている。

改めて見てみたけど千冬も制服姿がとってもよく似合っている。

制服が千冬に似合っていると言えいいのか。とにかくレベルが高い。

「制服、とってもよく似合っているよ」

「……っ！ほ、本当!?!」

「嘘は言わないよ。本当にとってもよく似合っているよ」

「……あ、ありがとっ綾」

素直に感想を言つと千冬は頬を赤く染め俯いて恥ずかしそうに照れ

ている。

デジャぶるんだよっ！だったっけかこういう前にも同じ様な光景を見た時に言うピッタリな台詞は。

デジャぶったけどいい物は見れた。

千冬はいつも凜然としてクールビューティーな雰囲気だからたまにはこんな可愛らしい千冬表情もいいな。

こんな事を思っているのを束にバレたらどうなるのか分からないけども。

そう千冬可愛らしく照れた表情を楽しみつつ束を待っていると度、タイミングよく束が職員室から出てくる。

「お待たせっっ！」

職員室から出てくるなり束は俺を視界に入れると嬉しそうにニコニコとした笑みを浮かべ俺の方に向かって元気よく掛けてくる。

さながらその様子は飼い主を見つけて嬉しそうに近寄ってくる子犬の様だ。俺、犬大の苦手だけど。

けれど、何だかそう掛けてこっちに向ってくる姿は可愛く微笑ましく思えてつい頬が優しく緩むのを感じる。

「綾っ！待っていてくれてありがとうねっ！」

「どういたしまして。ってか、そんな風に掛けて来て束は子犬？」

「むう〜！私、犬嫌いなもの知ってていつてるでしょうっ。束さんはうさぎさんだよ！ピヨピヨっ！」

「はいはい」

俺の制服をぎゅっと握りながら言っただ話したかと思うと両手でウサギの耳の動きのマネをする束の姿に何だかまた、微笑ましくなり応答をしながらついつい小さく笑ってしまった。

ウサギか……そう言われてみるとそんな気が。

迷信だけどもものの例えとしてウサギは寂しいと死ぬいうから確かにその点は似ている。

束は何だかんだで寂しがり屋で他人を拒絶しているけど人一倍誰かと繋がっていたいと心の置く隅では思う様な奴だからね。

ウサギ……ウサ耳。

この辺りの地形を覚えたらそうというのが売っている店でウサ耳の力チューシャでも束に買ってきてやるう。

きつとかなり似合うと思うしからかういいネタにもなりそうだ。

「ちーちゃんも待っててくれてありがとう……って、あれ？ちーちゃん？」

千冬にもお礼を言った束だったが千冬の様子を見て少し首を傾げる。お礼を言われたものの千冬は今だ頬を赤くして俯き照れている。

「ふふんっ」

「な、何だっ!？」

束の怪しげな笑い声にビクツとして顔を上げる千冬。

本当に束は怪しげな笑い声を発しつつ怪しげな笑みも浮かべている。

「また、ちーちゃんは綾に何か嬉しい事を言われて顔、真っ赤にしているんでしょっ」

「なっ!?!」

見事に言い当てられ千冬はドキッとした表情でまた、赤くなる。凄いな……束、いい当てるなんて。

洞察力が凄いというか……って、関心している場合じゃない。言い当てられたという事はそれは俺にも関係してくる。

「にははっ! 当たりだね。真っ赤になっているちーちゃんもかぁいいよー」

「五月蠅いっ!」

おどける口調で笑いながらからかう束に千冬は顔をまだ、赤くしたまま語気を強めて黙るように言う。

おどけて千冬をからかっている束だが一瞬だけ俺を見た目は「あんまりそういう事を言っていると……分かるよね?」と言っているかのような鋭い視線であり。

俺は唯唯、「……はい」と言うような視線をこれまた、一瞬で返して返事した。

おどけている様に端から見れば見えるが俺にああ言った視線は正直、怖い。

ハイライトがないヤンデレ目だった気が……前みたいにヤンデレが覚醒しない様に気をつけないと。

いや、まあ……ヤンデレな束も魅力的といえば魅力的だけど……肝に銘じておこつ。

「ほら、終わったんなら昼ご飯食べに行くぞ」

「そうだね、ちーちゃん。綾も行っこ？」

「ああ……」

そんなこんながありながらも俺達は漸くお昼ご飯を食べるべく学食へと向った。

・
・
・

お昼時を少しばかりこしていたが学食には今だ大勢の女子生徒が昼食を取っている。

と、言っても男は学生で俺しかいないので学食は女の子独特の賑わいに包まれている。

俺達は食べたい物を注文し受け取ると空いているテーブルを探す。ちなみに注文した品は三人とも同じく和食ランチセット。

白ご飯に焼き鮭に味噌汁に漬物といったメニューのセンチセット。

各国から人が来ているとだけあって様々なメニューがバリエーション豊富にあったがえて軽い和食にした。

洋食も美味しそうではあったがいろいろとあり過ぎて食欲がないし食べたら吐きそうなのでこれで落ち着いた。

そうして、空いているテーブルを探して見つけると腰を降ろして座る。

席の順番的には俺が真ん中で二人が両隣に座るといった感じである。

「頂きます」

三人の言葉が綺麗に重なり漸く昼食を食べる。

まず始めに焼き鮭から口に入れて頬張る様に食べる。

「あっ……おいしい」

同じく焼き鮭を食べた束がそう漏らす。

確かにおいしい。

こういい具合に焼かれていて塩鮭が使われているようでこれまたいい具合に塩が効いていて美味しい。

流石はIS学園といった所か……金をかけているかは分からないが中々の味だ。

「ふふっ」

「何？」

味わいながら食べていると隣に座っている束が俺の顔を見て微笑む。微笑むほど美味しかったのか？　そう一瞬、思ったがどうやら違う様だ。

「綾って初めてのところで何か食べる時、絶対に真剣な顔をして食べるよね」

「そうだな。さながら料理人みたいな顔付きで食べているぞ」

「そうかな？」

どうやったら作れるのだろうかとかこの味を出すにはどうしたらいいのかなどを頭の片隅で考えながら食べるがそんな顔をしているのだろうか。

「そうだよ。主婦みたいだね」

そう言われて食欲がなくなりそうになった。

それあの質問タイムの時も言われて複雑な気持ちになったのを思い出す。

せめてそういう事を言うのならもう少し別の言い方をしてほしい。

「主婦ってねえ……言われても嬉しくないんだけど」

「綾にお似合いの言葉だと思っただけど」

「よしよし、束には何も作ってあげないし食べさせない」

「えっ、えっ？嘘！ダメ！それなし！取り消すからっ」

「それならよろしい」

慌てて訂正する束にそう言つと束は胸を撫で下ろした。

俺達のそんな様子を千冬は呆れつつも黙々と食べている。

そんな風に束をからかいつつも昼ごはんをしっかりと食べる。

食事中に喋るのはあまりよろしくないがまあ、いいだろう。

息抜き、という奴だ。午前中はいろいろの意味でストレスで寿命がマッハになった事だし。

生憎と今は落ち着いてご飯を食べていられている。

俺達に対して束はこんな風におどけているが外部には近づけないオーラをている。

周りの人達には申し訳ないけどお陰でそんなに視線を受けずに落ち

着いて食べていられる。

「一時間目の自己紹介の時、辛そうな顔をしていたが今は大丈夫か？」

最後に味噌汁を飲み干すといち早く、食べ終わった千冬がそう聞いてくる。

「あ……ああ、何とか」

「まあ、気持ちは分からなくはないがそんな事では先が思いやられるぞ」

「分かってるよ。いつも東や千冬と一緒にいてなんだけど……女の子は凄まじい事を痛いほど実感した」

本当に凄まじかった。

あの視線といい質問タイムの時といい。

俺の身の回りにいる女の子……とつても千冬と東だけだが。

二人は比較的に同年代の女の子達よりもかなり落ち着いている。

特殊な家庭環境が影響しているんだろうがあそこまで凄まじくはない。

だから、今日は本当に疲れた。

そう事を思い出すと俺は苦笑いしか浮かべられなかった。

けれど、そんな俺の様子に千冬も苦笑いを浮かべるがその笑みは俺を励ましてくれている様な笑み。

ちよつとあの時の辛さが報われた気がする。

「それはよかつたじゃないか」

「まったくもって……いろいろな意味でね」

そんな感じに励まされつつも落ち着いて昼食を食べることが出来た。

「はあ〜幸せだ」

「ふふっそうだね。いい昼下がり」

「そうだな」

三人、そろって啜る緑茶は程よい暖かさで身に染みて美味しい。

まったりと時間は流れる“至福の刹那”を味わいながら過ごした昼下がりだった。

…

第十三話 ? (後書き)

というわけでいかかだったでしょうか第十三話ー？

ほのぼのした話でした。

これからは前書きでも言いましたがこんな風にはのぼのとしたのに甘さを足した

話を書いていきたいものです。

今までシリアスやダークな話が多かったので。

こここの束さんは随分と頑張りますね。

これも主人公のおかげでもありますが束さんの自らの意思でもありません。

自分から動いてみようとするのは……そうさせた主人公、凄いね。まあ、その分、原作の束さんとは最早掛けられすぎている気もしますが二次創作なのでご了承を。

そして、ヤンデレな束さん。

もう少しヤンデレを出してもいいのですがそれは二人きりじゃないと出来ません

何分、二人が付き合っている事は公表してないので。

隠れて付き合うのも中々、おもしろそうなのですがどうでしょう？

千冬さんもちよっとだけですがデレさせて見ました。

千冬さんにしたらまた、二人が付き合っているなんて

明確には知らないのでチャンスはある状態です。千冬さんにしたら。そうなるをやっぱり理不尽かな？

ちなみにウサミミの力チューシャは伏線です。ネタ的な意味での

で、七巻エ……

詳しくは活動報告を見て欲しいのですが何度、読んで泣いた事か。あまりにも扱いが理不尽で更にそうなりそうで泣きました。アンチ増えると思うと更に悲しくなります。

最近のアンチはあまりにも一方的で悪意を押し付けすぎなので。流行に乗っただけで中身とかスツカスカのたまに見るし。

ですが、もう原作でこういった感じの事があっても私はその記述や設定を

“気持ち的に” 全力で無視します。

あくまで“気持ち的に” なので話の構成としては遵守するのですが救済して束さんには幸せな家庭を持って欲しい。

ハッピーエンドを迎えさせてあげたい。何としてでもっ！

でも、これで原作で殺されたり捕まったりとかされたら本当にどうしようもないな。

考えただけでも複雑な気持ちになってくる……原作でもいい扱いになります様に

それこそシャルロットの様に（かなり切実）

また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十三話 ？（前書き）

今回は、シリアスな付箋を含みつつ、久しぶりの束デレですっ！
読んだ方が萌え悶えるデレ束さんに出来ていたらいいなあ

それでは、どうぞっ！

第十三話 ？

綾視点

夜、夕食を食べ終えお風呂に入ってた俺は一人自室でゆっくりとしている。

漸く、一人になれた。

何をするにしても一々、視線を浴び何処にいこうとしても後ろからついて来られるからたまったもんじゃない。

明日も同じ様な事になるんだろうな……だから、少しでもいいので一人の時間は欲しい。

ちなみにここIS学園は、全寮制である。

通う生徒は、全て寮で生活することを義務付けられている。

これは、将来有望で希少性の高いIS操縦者候補生を保護するという意味があるらしい。

それは、ISが開発復旧にあるとはいえ、コアの数自体も少なくその適正が人間も少なく。

試験運用段階にあるとはいえ今の国防を担っているのは、ISとその操縦者だ。

その今や未来の国防が関わってくるとなれば、その中でも優秀な人間を如何なる手段を用いても自国に引き入れようするのは、おかしくない。

と、言うより他国よりもいち早くISを理解しようとして優秀な操縦者を持つと必死だ。

こんな理由があって全寮制だが正直、助かっている。

男でISを使えるのは、今のところ俺だけでここに通っている間は、

前みたいな取調べなどを受けなくて済むし。

それに何より本来、帰るべき家を失った俺や束にとっては本当にありがたい。

優遇もされている。

俺の使わせてもらっている部屋はかなり充実している。

システムキッチンや冷蔵庫、トイレやシャワールームがあり、かなり広い。

それを一人で使わせても貰っているところも非常に助かっている。

始めは束と千冬と共同部屋になりそうだったがそれは、マズイと全力で拒否し一般常識的にも『若い男女が同じ部屋にいるのはダメです』という政治家の意見が多く晴れて一人部屋になった。

束は、最後まで渋って何かアクションを起しそうだったがそこは、自重してもらい理解してもらった。

だが、まあ……同情や情けで一人部屋にしてもらった気がする。

世界で唯一ISを扱って他は、全て女性　そんなおかしな状況になった俺を大人達は哀れんでせめても、で一人部屋にしてくれたんだと思う。

同情でも情けでも哀れみでもいいが、これはこれでありがたいが、流石にこんな大きな部屋を一人で使うのは、広すぎて寂しい気もしたりしなかったりする。

多分だがこの部屋になったのは、一郎師匠が手を回したからだと思う。

でないとなんか馬鹿みたいな部屋にはならないだろう。

「そういえば……」

暖かい緑茶を考え事に耽りながら少しずつ啜っているとある事を思い出す。

そういえば一郎師匠に一日目の感想を聞かせるようにとあの嫌らしいニヤついた笑みで言われてたんだっけか。

そんな事を思い出しテーブルの上に置いてあったノートPCを起動させネットに接続すると専用のインターネット電話ツールを起動させる。

時間は夜の九時　　多分、出るだろう……向こうから言った事だし。

「……もしもし」

「おお、待ってたぞっ！」

テレビ電話を一郎師匠にかけると待機していたのか直ぐに出る。

出た一郎師匠の声は何処か弾んでいてニヤついて卑しい笑みを浮かべている。

ディスプレイに移っているのが奈々さんの旦那さんである水城一郎師匠。

束に宇宙工学を教えた奈々さんが束の師匠なら、一郎師匠は俺に武術や対人戦闘を教えてくれた師匠である人。

今は世界的投資家で社長をしているが、一昔前は某A国の陸軍軍人からCIAの秘匿中央情報局工作員となり、後に傭兵となった人でその筋では伝説の人らしい。

顔や声、そして、話し方は何処となく、何処となくだが、有名な某スニーキングミッションを得意とする傭兵に似てなくもなく性格はネタに走る以外はかなり某有名傭兵に似ている。

御歳、五十歳を越え外見も歳相応なのだが肉体年齢が二十歳戦後で奈々さん曰く一郎師匠は、全否定しているが戦闘力は今も現役、全

盛期と大差ないチートでおかしな人間である。

「おいつ綾、失礼な事、思わなかったか？」

「……そうですか？」

モニター越しでも内心を読まれそうになる。
気をつけないと。

「まあ、いい。それでどうだった？ハーレム学園の初日の感想は」

「楽しそうな笑みしないで下さいよ。えーと感想でしたっけ？正直、疲れましたよ。精神的に。質問攻めにもあいましたし物珍しさとかな目で見られましたし」

「くくっだろうな。それが普通で当然だ」

ディスプレイには、俺の話を聞いて師匠が笑っている。
物凄い嫌な厭らしい楽しそうな笑みで。

師匠の笑みを見てくると、「他人の不幸は蜜の味」という言葉が脳裏に思い浮かぶ。

「ストレスで死なない程度にはそういうことも甘んじて受ける」

「分かっています」

「なら、いい。それとな……」

そう言うと、さっきまで師匠の嫌味たらしい楽しげな笑みが真剣な顔つきになる。

ディスプレイ越しからはなんというか……威圧みたいなものを感じる。

「最近、不穏な動きがあるとの報告を受けた」

「……」

「私の方でも調べているが警戒は怠るなよ？」

「はい」

「そうか……嬢ちゃんに対する暗殺などもまた、あるかもしれない。情報も渡すしそうならない様にこちらでも二十分に手を打つが。もしもの時は分かっているな？」

「もちろんです。全力で守り抜きます。束に連なる人達をそして、何より束を全力で我が身に代えても守り抜きます」

何があっても束に連なる人達を、束を絶対に我が身に代えても守る、守り抜く。
例えば束に連なる人達を守れなくても、束だけは絶対に守る、守り抜く。

その為にこの約一年間、師匠の元で修行して鍛えてもらったんだ。

修行とは名ばかり、常軌を逸した肉体改造みたいなもので、その過程で体中の骨で折れてない場所はなくなり、何度も折られ砕かれ叩き潰され内臓の位置さえ変わるような修行に明け暮れた。

折られ潰されただけじゃない、何度も体は銃などで撃ち抜かれ、如何なる状況でも生き抜き乗り越え、束を守れるように戦術や戦略も叩き込まれた。

過ぎた力や強さはいらない。
だけど、俺は強くなりたかった強く在り続けたい。
束を誰でもない俺の力で守り、守り抜けられる様に。
強く何より強く 不変の様な不変の至福《刹那》を感じられるように。

「そうか……そう言うなら私も全てを教え、お前を人として殺した
かいがあるというものだ」

俺の言葉を聞いてか師匠は、嬉しそうに小さく笑みを浮かべる。

「兎も角、ほどほどにしつかりとやれよ。ISは特殊学校だが高校
であることには変わらない。青春を謳歌しろよっ馬鹿弟子」

「分かってます。師匠も筭と一夏をよろしくお願いします。奈々さ
んにもよろしく言っておいて下さい」

「分かっている。しっかりと紳士、淑女に育て上げてやるぞ。あっ、
それと何か面白い事があつたら報告よろしくっ」

「えっ！？あ、まあ、はい。わ、分かりました。それもあわせてま
た、連絡します」

「ああっ楽しみにしている。では、通信終了」

師匠の方からきってもらい通信が終った。

不穏な動き……か。

世界が受け入れても、人の世の拒絶の色は目に見えて強い。

理解して拒絶されるのも、覚悟しているが辛いものは辛い。

「（考えても仕方ない）」

事が起きないように未然に防ぐのは師匠の役目であり俺は万が一、事が起きてしまったのなら、俺は、穩便かつ速やかに事態を対処、収集すればいい。

ただ、それだけの事。

起きるかもしれないという事態を考え予想するのはいいが、考え予想するばかりにその事態に恐怖して、思考や行動を鈍らせてしまえば本末転倒。

だから、今は起きるかもしれない事態に備えて心構えしておくしかできる事はない。

そんな事を頭の片隅で考えノートPCの電源を落とし片付けるとお湯がなくなつた急須にお湯を入れ風味を出すために急須を零さないよう軽くふり熱い緑茶を入れる。

「（まだ、九時半か……）」

熱い緑茶を冷ましつつ少しずつ飲みながら時計を見てるとまだ、時計は九時半を表している。

寮での部屋から外出禁止時間は基本的に夜、十時。

あと、三十分ほどあるな……そう思いながらお茶を飲んでいるとベツトが目に入る。

「……そうか、今日から一人だった」

前までは、いつも束と一緒に寝ていたが今日からは違つんだつた。家でも、奈々さん達の屋敷でもいつも束と一緒にのベツトで一緒に寝

ていたから変な違和感みたいなモノを覚える。

今までが普通に考えれば変だったわけで、それが普通になっただけなのだが、何処か寂しい気もしたりしなかったりする複雑で変な気分。

と言うより束、一人で寝れるのかな？　まあ、千冬がいるから大丈夫だとは思っけど。

温くなりつつある緑茶を飲みつつ天上を見ながら考えている扉からノック音が聞こえた。

「（誰だ？）」

また、政府からのお達し関係で誰か来たのか？

ともかく、扉の前に誰か入るのは、明らかなので部屋の扉を開けるすると……

「……あ、えーと、こんばんわ」

「……束」

扉の前にいたのはいつも通り、ウサギ柄のパジャマ姿の束だった。突然の事に啞然としてしていると束が言う。

「入っただい？」

「えっ？あぁ……」

問いかけられ、啞然としつつも束を中に入れる。

部屋の中に入ると、入りあえずテーブルに座らせお茶を出し話を聞く。

「どうして来たの？何か用事？」

「用がないと来たらダメなの？」

「いや……時間が時間だしね。それに千冬は？」

「ちーちゃんならクラスメイトに捕まって何処かに連行された」

「そうなんだ」

そんな問い掛けをお茶を飲みつつする。

中々、理由を言わない。

用がないと来てはいけないという事はないし、束の事だから理由なしに何となくつてもあるんだけど……表情が何とも。

何と言うかやけにしおらしい。

「えつとね、会いたくなって来ちゃったのと少し謝りに来た」

「はっ？」

思わず、変な言葉で聞き返してしまった。

会いに来たくれたのは嬉しいが何故、謝られるのか分からない。

「ほら、午前中の授業中ずっと視線浴びて辛そうな顔していたからそれで」

「何でそれで束が謝るのさ？」

「だって……私のせいで綾がこんな事になったから」

言われて納得がいく。

そんな事気にして態々、夜も遅いのに謝りに来たのか。本当に束は変わったよ。悪い意味でもいい意味でも。

「バカだね……束は」

「えっ？」

「気にしすぎなんだよ。私のせいって言ったけど俺達のせいだろ……今の現状も世界の移り変わりも。一人だけのものにはしないって前にも誓ったはずだけど」

「あ……うん、そうだったね」

「でしょ。確かに辛かったけど時期にマヒしてなれると思うし束が一々気にする事はないよ。それに私のせいなんて言わないで欲しい。二人のものなんだから」

「……ふふっごめんなさい」

何故か束は微笑みように笑いながら謝る。

まあ、いいか。変にしおらしかったのも直った事だし。

「優しいね、綾は」

「さあ、本当にそうなんだろうかね」

「優しいよ。だって、私は綾が言ってくれた、たった一言でくよく

よ悩んでいた事がバカらしく思えたもん。謝ったのも今、思うと考
えたらずだったなと思うし」

「そう……なら、よかった。謝ると言ったら俺が謝らないと。ほら、
自己紹介のときとか不機嫌そうにしていたから」

「あ、あれは……！」

今度は俺が謝ろうとすると、束の顔が真っ赤になる。
意味が分からない。どうして？

「あ、あれは謝らなくていいよっ」

「？」

「あれは……私が勝手に嫉妬してただけだから」

何に嫉妬していたのだろうか。

束がそう言うが俺には心当たる点がなく分からない。

「皆、綾をカツコイイだとか言って色目で見ってたから……その嫉妬
しちゃって」

座っている隣で、言うのを躊躇いながらも恥ずかしそうに、緑茶の
入った湯のみを握りながら頬を赤らめてそう言う束。

そんな束の表情を見ると、愛しいという気持ちが強くなってく
る。

嫉妬してくれたのか……束には悪いけど何だか嬉しい気持ちになる。

「そっか、ありがとうっ」

「……綾」

嬉しい気持ちがつい、行動に変わったのか、隣にいた束の方に向き優しく抱きしめる。

すると、束は突然の事に硬直しかけていたが、すぐさま、状況を理解したようで抱き返して体を預けてくれる。

一日の気苦労が全てぶっ飛びそうなくらい束を抱きしめていると安心する。

それは、束も同じ様で横目でチラッだけ見えたが、気持ちよさそうに目を細めている。

「それとごめん。これからもそうさせてしもうかもしれないけど」

「分かってる。学校では綾だけだからね、男子は。私も頑張ってるって変わると決めたから頑張るっ。だから、綾は浮気絶対にしたらめダメだよ」

「分かってる」

そう言っつて、カ一杯優しく抱きしめて束から体を離す。

体を離そうとすると束は名残惜しそうな表情をしている。

俺としてももう暫くこうしていたいのが時間的には外出禁止時間の十分前。

このまま抱き合っていて誰かに見られればややこしい事になる。

「束、そろそろ外出禁止時刻だ。部屋に戻らないと」

「ええ〜！やだ〜っ！だって、今日から綾と一緒に寝れないんだよ。」

寂しくて寝れないっ」

「それは俺だって束と一緒に寝れないのは寂しい気もしくないけど……部屋の話した時に約束したでしょう？」

「そ、それはそうだけど……でも……っ」

やっぱり今一つ腑に落ちない様子の束は駄々をこねそうになる。

俺だって、そうしてあげたいのは山々だけど、そうしたら一人部屋になった意味がなくなる。

だから、最終手段に出る事にする。

「……束」

「ううゝ何？」

名前を呼びこちらに向けさすと少し強引に束の唇に俺はそっと顔を寄せ口づけた。

「っ！」

驚き、体を強張らせる束。

そのキスは駄々をこねそうな束を落ち着かせ宥める様な、寂しい束の気持ちを安心させる様な、しかし奪う様な強引なキス。そういった感情を込めつつ、俺は束の唇を塞いでいる。

「りよ……う……ん　んっっ……」

甘えた声で俺の名前を呼び、体の強張りが解けたのか束も唇を強く押し当ててくる。

駄々をこねそうだった気持ち落ち着いて今、安心していつているのが束の唇を通して感じられる。

俺達は今、言葉では想いを告げず唇を通して互いの愛を伝えるかのように、抱き合い、唇を重ねあう。

今という、一瞬を刹那の至福を感じるように。

そして、どちらからもなく唇をそっと離して俺が言う。

「これで我慢しろと言ったらズルイかもしれないけど今はこれで我慢してほしい」

「……うんっ」

キスをした後だからなのか、束は、頬を赤くし大人しくしている。いつも、こつちが赤面してしまうような行動をしてくるのに束は、赤面するとおとなしくなる事が多い。

初々しいというか何と言うか……そんな束の表情もまた、可愛らしくて何よりも誰よりも愛しい。

「いい子だね」

「……にゅっ」

小さな子供を褒めるように束の髪を優しく撫でると束は、気持ちよさそうに泣き声を漏らす。

その鳴き声に安堵を覚え手を離す。

「じゃあ、私帰る」

「うん」

束に手を引かれ扉の前まで見送る。
そして、扉を開けようと手を伸ばすと、扉が外から開けられた。

「束……やはりここにいたか」

「あつ、ちーちゃん」

扉を開けたのは、千冬だった。

千冬はまだ、制服姿で束が俺の部屋にいるのを分かっていた様だ。
つてか、学園に来て日が浅いのに行く場所なんて限られる訳で、こ
こに束がいる事は直ぐに予測がつくか。

「まったく……人が連行された際に出ていきよって」

「ごめ〜んっ」

「全然、誠意が感じられん謝られ方されても嬉しくない。さあ、帰
るぞ、外出禁止時刻を過ぎてるんだからな」

そう言つて千冬は、束を連れて帰ろうとする。

先生方がまだ、見回りに幸いだが時間的には外出禁止時刻を過ぎて
いる。

早く返さないとな。

「はい」

「まったく……本当にお前は。悪かったな、綾」

「いや、いいよ。いつもの事だから」

「そうだな。では、お休み」

「お休みなさい」

「うん、二人ともお休み」

二人が帰っていくのを見送ると俺は、明日の用意をして、少し速い時間だが明日に備えて眠りについた。

…

第十三話 ? (後書き)

というわけではいかかだったでしょうか第十三話 ?。

今回はシリアスを告げる連絡と甘い回でした。

今更な気もしますが、主人公達にバツク補正チートが付与されました。

主人公も人体改造を受けてチートとなりました。

あまりチートしないよにするつもりなのでまあ、その事は頭の片隅にでも置いておいて下さい。

師匠はもう、完全に私の趣味ですww

最初は某マスターアジアにしようと思ったのですが

ビジュアル的に某スネークとなりましたww

主人公の鍛え方も漫画、紅を知っている人は分かると思います。

そして、久しぶりのデレ東さん。

状況が状況だけにあまりデレデレの甘々にはできないので

ちよっと甘め、といった感じに仕上げましたがいかがでしょうか？

読んだ方が萌え悶えていただければ私としては、幸いです。

感想で指摘され、「、」句読点をいつもより多く使用したのですがどうですか？

あまり、私は句読点を使うのは好きではなく勝手がよく分からないので

そういうサイトを参考にしてい、使い方がおかしいかもしれませんが

そういう事があれば、感想と一緒に言っていたけると嬉しいですよ。

また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でもいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十四話 ？（前書き）

どうでもいい事ですが原作時の構想を練り直していたらを

篤が何故かDies iraeの螢ぽくなりお姉ちゃんっ子&お兄ちゃんっ子になって

ツンデレではなく、ツンデレ系クーデレになりました。どうしてこ
うなったww

第十四話 ？

綾視点

今日で入学してから約二週間ほどが経つ。

始めの数日間は、本当にきつかった。

何をするにしてもいろいろな感情や思いが入り混じった視線を浴び物珍しさからだろうか……よく別のクラスからも女子生徒だけが人が集まり、質問とかをされたりと客寄せパンダみたくで大変だった。その間、やたら束の視線が痛かったがそれでも嫉妬してくれているんだなあと思うと不謹慎ながらも頬が綻ぶのを感じる。

そのもう一方では千冬からの視線も無茶苦茶、痛かった。

束には、訳を聞いたから大体は分かるんだけど、千冬に睨まれる理由が今一つ分からない。

思い当たる節もないしな　まさかだとは思うが……いやいや、自惚れも大概にしる。

そして、現在という絶賛、授業中である。

授業科目はというとISの稼動訓練と簡易型の戦闘訓練。

全クラス合同の授業であり人はいつもの授業の倍近い。

と、言ってもIS学園自体、新高な為、一学年しかなくクラスも三クラスしかない。

そういう事だから合同授業と言っても約一八〇人ほどしかおらず普通の学校と比べると少ない分類に入るだろう。

ただ、このIS授業は、苦痛だった。

別にISが嫌でこの授業を受けたくないとかでは断じてない。

むしろ、ISは大好きだ、愛している。恋焦そびがれる宇宙そびにいけるかもしれないのだから。

ただ、授業を受けている女の子達の服装が苦痛の原因の一つでもある。

女の子達の服装はスポーツ用インナー、通称、ISスーツ。

ISを動かすに辺り活動しやすい様にといった理由等で着る競技服みたいなインナーであり千冬白騎士が着ていたインナーを元にデザイン製作されたらしいのだが。

妙に厭らしい……競技服みたいなインナーなのだが、こつピッチリと肌に密着していて体のラインや凹凸物を強調させている。

まるでスクール水着の様でクラスメイトの皆さん、中々、発育がよろしく胸がスーツによって強調されているのだ。

ちなみに俺のISスーツは黒くなった某赤い弓兵のインナーそのものである。

卑しいが生憎と俺は、束以外に興味も関心も、そういう厭らしい意味ではないので反応したり興奮したりはしない、皆無なのだがやはり、目のやり場に困る。

俺の反応を楽しもうとポーズを取って、更にそういうのを強調したりしてくるクラスメイトもちらほらいたりして、本当に目のやり場に困っている。

見ようものなら……

「綾……？」

「すみませんでした」

この通り見ようものなら隣にいる束の目が笑ってない、むしろ瞳のハイライトがない満面の笑みを向けられ。

何処か物凄く重みのある綺麗な声で「見るな」と、言っているかのような名前を呼ばれ目を反らすしかなくなる。

しかし、授業を受けるために授業光景は見ないとけいないわけで、そうすると必然的に目に入ってしまっただけで、そういう目で一切、見てなくても見ていると思われ、さっきみたいに満面の笑みを向けられて名前を呼ばれると無限ループになる。

これらが苦痛の原因だ。

甘んじて受け入れるが流石に少し無理があるかもしれない。

今の俺は、俺の寿命がストレスでマツハなんだが……状態になりつつある。

同年代の同姓の友達や親友がいれば、愚痴を聞いてもらえたりと、出来るのだが生憎とない。

中学の時は学校では話したり一緒に行動する男の友達はいるにはいたが、それはあくまで学校だけの事。

連絡を取ったりたまに遊んだりする男の友達or親友はいない。というか女でも東と千冬以外いない。

中学校ではそれなりには友達がいたけど東と千冬以外そういうのが俺には誰一人とない。

理由はまあ、あえて考えるほどでもないほどに明白だ。

でも、こう思うと廃れた中学校生活を送っていたな……何か空しくて涙出そうになる。

清々しいほど空が青いや。

唯一の救いというか、オアシスは東のISスーツ姿である。

東のISスーツは薄い白色にはのかに薄いピンクが出ている色であり、スタイルがいいので他の子の様に体のラインや胸が綺麗に強調されてエロイ。

これは、流石に見ていたらそういう意味で反応してしまいそうなので目を逸らして目のやり場に困っている。

それを東が気づいて反応を楽しんでくるので本当にいろいろな意味

で困っている。

授業始まる前は本当にやばかった……抱きつかれて反射的に抱きしめてしまったものだから感触が……

ダメだ、自重自重。変に考えないようにしよう。下手に考えるといろいろと問題が発生するかもしれない。

いや、本当に清々しいほど空が青いや……心が洗われる。

そんな現実逃避をしつつも真面目に真剣に授業を受ける。

「神山君、ここはどうするの？」

「ああ、そこは……」

班の子に質問され分かりやすいように丁寧に、を心がけながら他の子達ともあわせて教える。

この授業はISの適正試験で高ランクを取った人を筆頭に班を作り、先にも言ったとおりISの稼動訓練と簡易型の戦闘訓練をする。

先生たちもちらほらと教えているが、人数的にもどうも足りない様で、ISの適正試験で高ランクを取った人を講師として使って授業を回している。

この授業は楽だ。班長になった人は班の子にISの歩行方法や操縦方法を教えてアドバイスしつつその実習光景を見守る。

班長は基本、この授業でISを触ることはほぼなく、動かさないのが残念だが幾分か楽だ。

ちなみに班は俺と束は高ランクだが事情により同じ班で俺が班長であり千冬は別の班で班長をしている。

「はあ……」

授業をしている最中、授業を見ている束はつまらなそうな顔をそんな風に溜息をつく。
つまらなそうな顔をしているが何処か複雑そうな顔をしているようにも見える。

やっぱり複雑……だよ、束としては。

いくら兵器として応用できる面を白騎士事件で見せなくてはいけなかったとしても、本来通り次世代宇宙服として使ってほしかった。だけど、受け入れざる得なかったとしても、受け入れた世界は兵器としかISを見ず、次世代宇宙服としての概念は捨てられた。そして、開発普及している今も完全な兵器として開発普及している。

それが束にとつてしてみれば、嬉しいけど悲しいけど嬉しいといった感じで複雑なんだろう。

ISは確かに世界が受け入れざる得なかったとしても受け入れた、世界にISは受け入れられた。

しかし、開発者の意図とは別の形で受け入れられた 兵器としても使えるという兵器としての部分のみ。

そんな風に束はついつい考えてしまい、複雑そうな顔をしているのだろうと俺は思う。

「束……大丈夫？」

「えっ？何が？」

心配になって聞いてみたけど束は、いつも通りおどけた様な笑みをただ向けるだけだった。

複雑そうにしていた顔を隠すように

「また、いつものこと考えしてたんでしょ？」

「バレた？」

「バレバレ。考えるのはいいけど程ほどにね」

「あははーはい」

言い当てる東は罰が悪そうに笑って返事をした。

「よろしい」

「……にゅっ」

返事した彼女が何だか愛しくなって人目をはばかりて東の頭を撫でた。

すると、東は気持ちよさそうに目を細めて気持ちよさそうな声を漏らした。

俺も考えすぎる節があるから人の事はあまり言えないけど、考え過ぎはよくない。

何度も思つが「すぎて」「しすぎて」を続けて、思考や行動を鈍らせてしまえば本末転倒だ。

物事はほどほどが一番、だと思つ。

「にしてもちーちゃんモテモテだね」

「あ……そうだね」

班の子の訓練の様子を見ながらも、隣の方で同じ様に教えている千冬を横目で見ると、千冬はたくさんの班の子に囲まれながらも、いつもの

凛然とした様子で的確に教えている。

その様子はクールでかつこよく、班の子はおるか周りの子達までもがその千冬の教えている姿に見惚れている。

中には頬を赤らめ瞳をハート型にして潤ませている子もちらほらといて……ちよっぴり怖い。

けれど、それほどまでに千冬は人気があるという事だ。

中学生の時よりもその人気がすごい事になっている。

その人気は女子からだけなのだが……流石は女の園であるIS学園という訳か。

「百合ハーレムだね……ちよっぴり怖い」

「あははっ……そうだね。でも、私はちよっぴり羨ましいかな」

そう笑って言いながらも何処か影を落とした様に束は羨ましそうな声で言った。

束と千冬は、似ている様で似てない、似てないようで似ている……鏡合わせの様に对象的だ。

二人は、同じ天才だけでも、束が世界を惹きつけるなら千冬は人を惹きつける。

とっても似ている様で似てなく、とっても似てないようで似ている。束は、世界を惹きつけ、特別視されるが、千冬は他人を惹きつけ人望を集める。

千冬は、自然体で人と「普通」と付き合える……そんな千冬の所に束は憧れている。

懂れているからこそ、束は千冬を慕って素直なんだろう。

それは千冬も同じで、素直にいられて何でもそつ無くこなす束を羨ましいと思っている。

そんな風に昔、二人が別々の時だったけれど真面目な顔して話してくれた。

束は千冬が千冬は束は羨ましいと思っ……そんな二人だからこそとつてもよく似た者同士で仲がいいんだろ。

「でも、流石に私もアレは怖い。ってか、嫌」

「あはは……」

先ほどまでの何処か影を落とした様な羨ましそうな顔とは、打って変わり本当に嫌そうな顔を束はしていた。
それに俺は、思わず苦笑いしか出来ずにいた。

…

第十四話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第十四話 ?

普通にISの授業風景を書きました

ISスーツってエロイですよね……スクール水着みたいでwww
アニメみてそう思いましたwww

あんな格好の束さんに迫られたら主人公は確りと反応しますよwww
何気にエロイですから、この主人公はwww

まあ、他の人には悲しいほどまったく反応しませんけどw

ちなみに束さんのISスーツは筈の紅椿使用時に着ていたあのIS
スーツと全く同じなのでその様にイメージして下さい。

ちなみにこの主人公には一夏みたいに

五反田弾等といった男の親友はおるか、束さんや千冬さん以外の親
友はいません。

中学校ではそれなりに友達はいましたがそれは学校だけで連絡を取
り合ったりという親友はいません。

理由は言わずもがな。その点が一夏よりもきついですね。ある意味

そして、今回、書きたかったのは束さんの千冬さんへの憧れです。

原作ではああいう態度を殴って修正してくれ

「本気で自分の事を思って怒ってくれた」から等の理由で千冬さん
にも関心を持っているとありますがちょっと足りない気がしたので
憧れというのもつけました

憧れているからこそ束さんは、千冬さんに関心を持ち素直だとい
う事です。

それは千冬さんも同じで……どっちもなんですがね。

そろそろ千冬さんも絡めないと百合ハーレムが強化されて…何でも
ないですww

それとこの話の束さん視点の書いたのですが見たいでしょうか？

話的にはこの話を束さん視点でみたので流れは同じなのですが、感
じ方は違います。

ご協力お願いします。

また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞い
て下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいた
します。

次回の更新意欲に深く関係してくるので。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

次回、いずれ来る女尊男卑の形。

第十四話―？（前書き）

今回はいろいろと危険な話かもしれませんが。

男尊女卑、女尊男卑について独自の自論を言っており

オブートに包まれて優しい指摘なら甘んじてけますが

それ以外の激しい指摘や中傷などは受け付けませんのでご了承ください。

この回は何卒、深いご理解をお願いいたします。

第十四話？

「お疲れ様、千冬」

「ちーちゃん、お疲れ様」

「ああ、二人もお疲れ様」

俺達の所に帰ってきた千冬に労いの言葉をかけると、千冬も労いの言葉を返してくれた。

現在は、授業と授業と間の休み時間。

次の授業も続けて同じ授業であり、グラウンドの隅の方、三人で休んでいる。

漸く落ち着けた……教えているのも楽しかったが、辛い事は変わりがなかった。

女の子達にはからかわれるようにISスーツ姿を見せ付けられ、束には痛い視線を浴び、今だISを動かせてないと散々。

早く授業が終ってお昼になるなり、放課後なるなりしてほしいと願ったり願ってなかったりしている。

「ちーちゃん、モテモテだったねっ」

「うっやめてくれ……そういう事を言うのは」

「嬉しいくないの？」

「……綾、お前まで束みたいに聞くな。同姓にモテて嬉しくないだろう、普通。ちょっと怖かったし」

それもそうだ……同姓にモテて嬉しいのはそういった趣味のある人達だけだろう。

俺は別にそういうのを批判したり嫌ったりしない、愛があるならいいと思う。

俺を巻き込まなければの話だが。

それにやっぱり千冬自身も怖かったんだ。

「まあ、その……お疲れ様」

「ありがとう」

何と言っているのか分からずまた、劣いの言葉をかけると千冬は嬉しそうにしていた。

「でも、ちーちゃん。こんな事で疲れてたら後輩とか出来たら凄い事になるよ」

「やめてくれって……考えだけでも頭痛くなる」

「じゃはは」

束にからかわれ本当に頭が痛そうにこめかみを押える千冬の姿に束は楽しそうに笑っていた。

そんな風に休憩しているところらに向って誰かが来ているのに気づく。

その気配は段々と大きくなり俺達の前に立つ。

「初めまして」

「（……誰だ？）」

俺達の前に、正確には俺達の前に立ったのは女の子だった。

その女の子は名家の出身を思わせる様な高貴なオーラを出していて、他の女の子とは一線を強調している。

ただ、あまりその子からはいい感じはしない。

「私の名前はレイチエルわたくしアルスター。クラスは三組でイギリスの代表候補生をしております。以後、お見知りおきを」

思った通り本当に名家の出身なのか、自己紹介をするとスカートの両端を掴むように持ちお礼する。

「ああ……これはご丁寧に。私は」

「いい、大丈夫です」

座ったままだったが俺達は頭を下げ千冬が代表して、名乗ろうとするとアルスターさんは遮るように言う。

「貴女の事は存じております。織斑千冬、この学園で三人しかいない適正ランクスではほぼ代表操縦者に近い日本の代表候補生。

先ほどの授業の様子を見ていただきましたが代表候補生の恥じぬものでした」

「……それはどうも」

高飛車な物言い、アルスターさんは千冬の事を言い、千冬は何処か嫌そうな顔をしながらも深々と会釈する。

ちなみに代表候補生というのは、国家代表IS操縦者のその候補生として選出される人達の呼び名。

IS操縦者達ほぼ誰もが国家代表生の次に憧れる物で、つまりはエリート……正確に言つとエリート一歩手前。

日本では、千冬がほぼ国家代表操縦者扱いの代表候補生である。

何故、そんな曖昧な扱いかというと複雑な事情があり、千冬も国家代表を乗り気ではない為、そんな曖昧な扱いになっているが国家代表操縦者である事はほぼ変わらない。

始めは俺が国家代表や代表候補生にという声もあつたが、各国の批判の声も少なからずあり日本の政治家の中にも「世界が安定している今、いらぬ混乱をいれるべきではない」という声もあり

俺は国家代表や代表候補生は免れだが、千冬に重荷をおしつけてしまったみたいで負い目は感じている。

「そして、貴女が篠ノ之束さんですわね。貴女の事のご高名はかねがね承っておりますわ」

「……」

アルスターさんにそう言われても束は無視している。

高飛車な物言いが気に入らないのか、それとも人柄事態が気に入らないのか無視して我関せずでPADを弄っている。

束ってこういうタイプの人間、嫌いだったな。

少しはマシになった俺達以外の人への接し方も以前のようだ。

「貴女ねえ……人がっ！」

「落ち着いてっ。束はちょっと人と接するのが苦手で……あまり気

にして気を悪くしないでほしい」

「っ……！……あら、貴方は」

束に無視されたのが頭にきたのか、凄い剣幕で怒りそうだったのを宥めつつ束のフォローを入れると、アルスターさんは俺を真面真面と見る。

彼女は印白人独特の白い肌に金髪の長髪がよく映えており、容姿も美人に入る分類の人で、何故かは分からないが透き通ったブルーの瞳がつきく、俺を睨みつけている。

高貴なオーラを身に纏っている様で、その視線と雰囲気は男を見下している様に感じる。

「（変革の仇か……）」

女尊男卑。

ISが発達普及している同時に社会にも広まり浸透しつつある社会風潮。

今の世の中、ISが現れてから女性は優遇されつつある。

今は優遇ですんでいるが、時期にいき過ぎになるだろう。

女々偉いみたいなのの中、お花畑咲いたような構図を持ち出してくる人達まで出てきている事だし。

そうなるのは、時間の問題で歯痒くもあるが、仕方ないとも感じ思う。

今の今まで男尊女卑の風潮の名残があり、過去の男尊女卑の影響を受け、昔も男尊女卑の風潮が強く続いていた。

歴史を振り返ってみても、全世界で男尊女卑の時代は長き渡って続いており、日本は特に仏教の男尊女卑思想が強くあるからその気持

ちは強い。

女尊男卑の社会が完全となれば、近いうちに男の立場は完全な奴隷労働力になると言われているが、それは今まで男尊女卑だった仇だと思う。

それこそ男尊女卑の時代は女の人を見下し、性犯罪の被害者させ、それを言おうものなら権力と力で黙らせていたなど、いろいろと前科がある。

だからこそ、そのやってきつことのツケが今、来て女尊男卑という今までのツケを受け入れないといけないから俺は仕方ないと思う。

“歴史というのは似たような事が未来永劫繰り返され続けるものなのだから”。

俺自身も歯痒くはあるが、受け入れるしかないと思う。

世界がISを受け入れたように。

でも、まあ、この考えは自分でも偏った考えなのを自覚しているので、ご了承ください。

「そう……貴方が世界で唯一、ISを使う事が出来る男。あなたのも授業の様子も見てましたが織斑さんと……篠ノ之さんと同じ様にSランクなだけありますわね」

皮肉ぶった言い方をするアルスターさん。

俺に対する物の言い方を聞いて俺ではなく、東と千冬がこめかみをピクピクとさせている。

あれ……？何か怒っている。

「はあ……それはどうも」

「ですがっ」

「えっ」

「唯一男でISを操縦できると聞いて確かに知的さを感じてましたが、全然男らしさが感じませんわね。まったく期待はずれもいいところですよっ」

「なっ！？お前エッ」

見下すように言い捨てるアルスターさんに、言葉を聞いて言葉を聞き千冬はバツと立ち怒りを露にしている。

俺に何かをそれも勝手な期待されても、どうしようもないんだけど。つてか、この人は随分と未来の社会風潮を先取りしている。

こんな人が今後、増えると改めて思うと何だ嫌だ。

それに元々、こういう高飛車な性格なのは分からないが、早くも今後出来てしまう社会風潮に影響されている。

まだ、一年で広まりつつというだけなのに、こつも女尊男卑を象徴する物言いができるとは……元々の性格とかも関係しているんだろ。うけども、飽きれを通り越して感動が沸きそう。

上を目指すのは大変苦労して時間もかなりかかるが、落ちぶれるのはとつても簡単で一瞬。そういうのがよく分かる人だな、この人は。

「あら？織斑さん、何を怒っていますの。当然の事でしょう。その男は所詮、その程度の人間。所詮、男という生き物は醜く劣った劣等人種。貴方方もつとその男を利巧に使うほうがいいですよ。奴隷や道具として」

「っ！お前エエッ！」

かなり見下された言葉を俺は言われ、その言葉を堪えながらも落ち着いて聞いていて千冬は堪忍袋の緒が切れたのか、怒りを露にした表情を浮かべ今にも彼女に殴りかかりそうだ。

流石に騒ぎとなった周りには沢山の女の子達がクラス問わずに囲むように集まって、この様子を見てざわざわと騒いでいる。

大変な事になった　とりあえず千冬を落ち着けないと。

そう思い慌てながら立ち上がり千冬の殴りかかりそうな腕を止める。

「離セツ！綾つ。お前は悔しくないのか?!あんなに風に言われて私は悔しいっ」

「俺だつて悔しいけど、下手に大事に発展させたらそれこそダメだ」

「そうだがっ!しかし...!」

落ち着け宿めるものの千冬は、今一つ腑に落ちず納得できない様子だが、ただでさえ騒ぎになっているのにこれ以上、騒ぎを起してこの人と何かあれば国家間の問題になりかねない。

そうなれば束や千冬にも何かあるかもしれない。だから、それだけは未然に防がないといけない。

それに漸く、束が足をつけられる場所が出来たのになくなってしまふ。そうなれば意味がなくなってしまふ。

そう感じ千冬を押えていると、パシッという何かを叩いた音がした。

悪い予感をしつつ音をした方を確認すると

「あ、貴女っ!?!」

「さつきから黙って堪えながら聞いていれば意味不明で頭の悪い事ばかり言つて。ISが使えるからって偉いなんて思つている貴女こそどうかしているよ。ISという力があるのなら力がある人間なりの正しい考えをして言葉にしてなよ」

「う……」

「でないと自分の身を滅ぼす事にもなるしそれに私は貴女みたいな人を社会を作りたくてISを世の中に解き放つたわけじゃない。あまりふざけた事言つていると

貴女、“ISを使えないようにするよ”」

「……っ!？」

音は束がアルスターさんの頬を強く引つ叩いた音で、引つ叩いた束は無表情、無感情で冷たい言葉を言う。

冷たいのは言葉だけではなく、無感情な視線も無表情な言葉も、そして口調も冷たい。

冷たいながらも、圧倒的な威圧を放っており、アルスターさんはそれに圧倒されたじろいであり、さざわめいていた周りも静かになっている。

束がこんな事いうなんてちょっぴり感動だ。

それに冷たい様に感じるが、俺には何処か怒っている様に見える。考えすぎかもしれないが、俺には俺の為に怒ってくれている様に見える。

やっぱり考えかもしれないがそう思うと不謹慎ながら心が嬉しくなる。

俺は飽きれて感動すら覚えそう、怒るに怒れない以前に“捨てられた日からそういう感じを半分、失損しているから”怒るに怒れない。

「馬鹿にしてっ！いくらISの開発者とはいえ犯罪者の癖に、天才という化け物の癖に、付け上がっているんじゃないやありませんわっ！」

「……天才、化け物」

怒りが爆発したのかアルスターは、言うてはいけない事を言っ、束を引つ叩くのではなく殴ろうとしている。

対する言われた束は、「天才、化け物」とうわごとのように何度も言い、俯いて殴られるようになっていいるのに気づいていないみたいだった。

コイツはこの女は……言ってはならない事を言っ、言いやがった。そこにあるモノに対してなんでも区別したがり、自分に理解出来ないものは拒絶する。

こいつは束を認めてない癖に拒絶してその上、言ってはいけない事を言いやがった。

ああ……許せない、許せないよ、許したくない、許せるわけない。許させない、許さない、許せない、許せない、許せない、許せない、許せない、許せない。

ユルセナイ、ユルセナイ、ユルセナイ、ユルセナイ、ユルセナイ、ユルセナイ、ユルセナイ、ユルセナイ。

「……そこまでにしろっ」

「……っ！は、離しなさい」

殴りかかろうとしている腕を強く掴んで、殴らせるのを阻止する。これ以上、何も言わせない様に威圧するように俺も強めに冷たく言う。

すると、威圧されたのか彼女は萎縮したように静かになる。

いろいろとふつきれた。

ああ、許せないな、この人は。

俺を馬鹿に見下してくれるならそれは嬉しいことだが、こいつの俺だけじゃなくて男そのものを見下している。

それはこの学校にいる女の子達にも少なからずある事で……思い知らせて理解される必要がある。

それに何よりこいつは束を否定した。

前の世界の回りの人間たちの様に、認めもせず一方的に批判するだけして拳句に拒絶する。

それが何より許せない。思い知らせてやる、こいつが手に入れたISという力で。

こいつは腕を離すと言っだろう。言ってくれらるだろう。

「ツうう！神山綾ツ！決闘ですわ！」

と、俺に指をつきつけて。

「いいだろう。俺としては問題はないけど貴女は俺でいいのかな？」

「代表候補生である私を舐めないで下さい！男である貴方に言っているです。男である貴方を倒さないと見世物になりません。目に物

のを見せてあげますわっ!」

「そうか……なら、受けて立とう」

彼女が単純な思考の持ち主でよかった。

この状態から、どんな事を言うのか予想はつく。
この申し出を俺には蹴る理由はない、受けてたって思い知らせてやる。

男という存在を束を拒絶したへの罪の重さを。

「威勢がよろしいですわっ。貴女が負けた暁には全校生徒の目の前で地面に顔を擦り付けながら謝ってもらいましょう。そして、死ぬまで奴隷にしてあげますわっ」

「ほお……なら、俺が勝ったら男に対する考えを改め束に土下座で誠心誠意に謝ってもらう」

「それだけでいいのですの?」

「ああ……あとは決闘で思い知らせてやるから」

「っ!わ、分かりましたわ。決闘は今日の放課後、第三アリーナで」

「分かった」

こうして決闘することが決まった。

…

第十四話―？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第十四話―？

セシリア戦のオマー・ジュミみたいな回となりました。

今回の新キャラのモチーフは見て分かる通り、初期のセシリアです。

初期のセシリアよりも凄いですが、これは元々、貴族で高飛車だという事もあり

こつこつという雰囲気と態度にしました。

実際はこんな感じだと思います。セシリアは何気にもいい子でしたから。

ちなみにモブキャラ、ヒロインにはなりませんしなりません。

あくまで社会風潮の象徴的な人物像を作り集つたのと、主人公の相手がほしかっただけで作つたキャラなのでこの場限りの役者です。

このキャラはセシリアよりも強く、優秀ですが……人格は作中通りのキャラです

もうちょっと二人が怒つたのも深くした方がいいかなあ〜と感じています。

あまりにも単純な気がして……まあ、怒りなんて単純な方がいいんですけども。

束さんの台詞や怒り方は力を入れたつもりです。

その反面、帰ってきて、主人公がアレな感じになりましたが（汗）主人公も一夏みたいに怒らせればいいんでしょうけど、何分、壊れているので

あんな感じで自分の事は最後回しな感じになりました。

男尊女卑や女尊男卑についてはISの通過儀式みたいな話ですね。

どの小説でもわりとつかわれていきますから。

それらの内容については私の自論です。

いろいろな思案も参考にして書きましたがやはり、持論となりました。

よくそういう事を書いている小説様では、一方的におかしいと主張していますが

それはおかしいと思い、私の場合は作中どおりで今のいいまでのツケが帰ってきたと考えました。

支離滅裂で理解しがたいと思いますが、何卒、ご理解をお願いします。

オブートに包まれて優しい指摘なら甘んじてけますが

それ以外の激しい指摘や中傷などは受け付けませんのでご了承を。

この回は何卒、深いご理解をお願いいたします。

また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十四話 束視点（前書き）

活動報告でも言ったとおり今回は第十四話の束視点です。

蛇足ではありますが、折角書いたので掲載しました。

話的には主人公視点の第十四話と変わりありませんが、別視点なので話の見え方、感じ方は違ってしている様にしています。

それではどうぞ。

第十四話 束視点

束視点

今日で入学して、約二週間が経つ。

私はやっぱり、学校というものがどうも苦手である。

入学して二週間を経つがそれをよく再確認する。

何をしてもほぼ必ず、いろいろな感情や重いが入り混じった視線を浴びる。

私はISの開発者であるからそういった好奇心や訝しげな視線といった視線が多い。

沢山の視線を集め浴びるのは昔からあまり変わらないから、さほど気にしないし、気にもしないようにしているけど、やっぱり相変わらずこういう視線は煩わしいし鬱陶しい。

それにちーちゃん以外の女子から綾に集まる視線も煩わしいし鬱陶しい。

それは綾が世界で唯一ISを使える男というのもあるのだろうけどそれは多分、半分。

残りの全て好奇心に似た強い好意の視線だろう。

理由は簡単、綾が美形で男前だからだ。女というのはそういうタイプの男にいろいろ意味で惹かれやすい。

だから、私はついイライラとして嫉妬しちゃってつい、綾を睨んでしまう。

綾を瞳に映していいのは私だけ、綾の瞳に映っていいのは私だけ

そんな独占欲が湧き上がる。

「綾は私のっ！」と、公然で言い認めらいいんだけど、事情が事情なだけにはそれが出来ないのは悔しい。

でも、綾に今以上に迷惑をかけるのもいけないし、迷惑を掛けてほしいと言われたけどそれは気が引けるので自重する。

そう思うと私って随分、変わったな。いい方向か悪い方向かは自分では、よく分からないけど。

そして、現在の私は憂鬱だ。

今、している授業はISの稼動訓練と簡易型の戦闘訓練。全クラス合同の授業であり人数はいつもの授業の倍近い。

この授業はISを動かす為、ISスーツを着て授業を受けなければならぬ。

ただ、着ているのが私とちーちゃんだけならいいが、この学園は新校であり特殊高の為、一学年三クラスしかなく。

更に合同授業の為、全校生徒がISスーツを着ている。

このISスーツは、白騎士つまりちーちゃんが来ていたインナーを参考にしてデザイン、製作されたものらしいのだが明らかにおかしい考えた人の頭がおかしいのか世間がおかしいのか、どこからどうみても感じ的にスクール水着ぽい。

IS特性上、こういう薄い作りになるのは仕方ないけど、もっとマシなデザインはなかったのかと思う。

まあ、それを着ている私もどうかしていると思うけど。

そして、この学校は男子は綾しかいない。

よって、見せつけようとする人も現れる。

それに授業を受けるにあたってそれを着ている人を視界にどうしても入れないといけなくなる。

だから

「綾……？」

「すみませんでした」

注意を呼びかけ脅すように、「見るな」と言う様に、綾に笑顔を向けて名前を呼ぶ。

すると、綾は私の意図に気づいたのか、謝って視線を反らす。

授業を受けているのだから必然的に見てしまうのは仕方なく、そういう目で見てないのも分かっているけど嫌。

こんな事して、迷惑かけているのは分かっている。綾、気疲れしているから。

でも、やっぱり見るなら、私だけを見て欲しい、見続けて欲しい。

これが私の身勝手な独占欲のは分かっているけど、やっぱり嫌なもの嫌。

だって、綾は私の彼氏、旦那様なんだもん。

そんな憂鬱な気持ちの中でも嬉しいことはあった。

綾が私のISスーツ姿を見て、興奮してくれたのだ。

授業の始まる前、二人っきりの時に何度か見せたのだけど顔を赤くして目を反らしていた。

その様子からこの姿に興奮してくれている事がよく分かり、確認の為、試しにISスーツ姿で抱きついてみると反射的に抱きしめてくれた。

そして、抱きしめるのはやめず、恥ずかしそうに顔をほんのり赤くさせていて本当に興奮してくれている事が分かって嬉しかった。

これは本当に嬉しかった。真っ赤になった綾、かあいいかったよ。でも、やっぱり今、憂鬱な気持ちなのは変わらない。

「はあ………」

授業中、授業の様子をぼんやりつまらなそうに思いつつ眺めていると溜息が出た。

憂鬱で複雑だ。

この授業を見ているとそんな気持ちが湧き上がる。

別にISを兵器として使ってくれるのはいいけど、我が俣を言うなら本当は、宇宙服として使ってほしかった。

ISが世界に受け入れられたのは、嬉しいけど悲しいけど嬉しいといった感じ。

受け入れられたけど、私の意図とは別に、完全な兵器として使われ宇宙服としての概念は捨てられたようなもの。

中々、世界ってものは、思い通りいかない。それがおもしろい所なのだけど、このISの使用方法は複雑だ。

今更、兵器として使えないようにしたらまた、受けいられなくなるし……

そんな事をついつい考えてしまうと複雑で憂鬱な感じになる。

「東……大丈夫？」

「えっ？何が？」

考えてしまっているとふと、声をかけられ内心ドッキとした。顔に出てバテてたかな。

そう思いつつも、何も無い事を装う為におどけて言い首を傾げてみた。

「また、いつものこと考えしてたんでしょ？」

「バレた？」

「バレバレ。考えるのはいいけど程ほどにね」

「あはは〜はーい」

言い当てられると私は何だか罰が悪くなり誤魔化すように笑って返事をした。

やっぱりバレてたか。

本当、綾には私の事、全て何でもお見通し、敵わないや。でも、それがとっても嬉しい。

私の事を理解しくれて、理解しつくして、受け入れてくれて愛してくれているという事がよく分かるから。

「よろしい」

「……にゅっ」

返事をする、何故か綾に頭を優しく撫でられた。

人目をはばかっている、誰かに見られる心配はないけど、心地いい。

頭を優しく撫でられると、気持ちよくて変な声を出してしまったけど、本当に気持ちよくて心地いい。

撫でてくれる手の温もりは、私の憂鬱で複雑な気持ちを癒してくれる様で暖かくて気持ちいい。

撫でられていると心が落ち着いて、安心して、憂鬱で複雑な気持ちが何処かへいってしまふ。

撫でられ、気持ち心が暖かくなっていると、ふいにちーちゃんの様

に様子が目に入った。

「にしてもちーちゃんモテモテだね」

「あ……そうだね」

ちーちゃんは、沢山の班の子に囲まれており大変そうだ。

やっぱり、ちーちゃんが班長して教えている様子は、クールビューティーでかつこいいい。

その様子は誰が見ても、かつこよくて実際、周りを囲んでいる班の子達は指導しているちーちゃんの姿に見惚れている。

見惚れているのは、班の子達だけじゃなくて、周りの別の班の子達も皆、ちーちゃんに見惚れている。

見惚れる気持ちは分かってあげたくもないけど、中には頬を赤らめ瞳をハート型にして潤ませている子もちらほらという怖い。

だけど、ちーちゃんは中学校から変わらず人気者だな。

私はそんな、ちーちゃんが

「百合ハーレムだね……ちよっぴり怖い」

「あははっ……そうだね。でも、私はちよっぴり羨ましいかな」

ちよっぴり羨ましい。

ちーちゃんは自然体で、普通に人と付き合えてそうしている自然に回りに人が集まってくる。

殆どの人が恐れなしにちーちゃんに憧れ他人を惹きつけ人望を集める。

私とはまったく別。だから、私もちーちゃんに恋焦がれるように憧

れている。

私だってちーちゃんに様になれるのなら、ちーちゃんの様に出来るのならなつたみたいし、してみたいよ。

「でも、流石に私もアレは怖い。ってか、嫌」

「あはは……」

でも、あんな風と同姓に囲まれてあんな目で見られるのは嫌、怖い。同姓のハーレム形成して嬉しい人なんてそっち系の人だけだ。女子高みたいなものだから、出来やすいんだろうけど、私にはそっちの趣味はない、綾一筋。

ちーちゃんもそっちの趣味はないと思う 多分。

そんな風に嫌そうな顔をして言う私に、綾は苦笑いしていた。

・
・
・

「お疲れ様、千冬」

「ちーちゃん、お疲れ様」

「ああ、二人もお疲れ様」

私達の所に帰ってきたちーちゃんに、劳いの言葉をかけるとちーちゃんも劳いの言葉を返してくれた。

現在は休み時間。

次の授業も続けて同じ授業であり、グラウンドの隅の方、三人で休んでいる。

授業はおもしろくなかった。知っていることを繰り返しているだけで。

ただ、綾の傍に入れたのはよかった。

「ちーちゃん、モテモテだったねっ」

「うっやめてくれ……そういう事を言うのは」

「嬉しいくないの？」

「……綾、お前まで束みたいに聞くな。同姓にモテて嬉しくないだろう、普通。それに少し怖かったし」

あ、やっぱりちーちゃんも怖かったんだ。

だよね……皆、ちーちゃんを見る目が変だったし。

「まあ、その……お疲れ様」

「ありがとう」

何と言っているのか分からない様子 of 綾がまた、劳いの言葉をかけると、ちーちゃんは嬉しそうにしていた。

ちよっと複雑だな。

「でも、ちーちゃん。こんな事で疲れてたら後輩とか出来たら凄いな事になるよ」

「やめてくれって……考えだけでも頭痛くなる」

「じゃはは」

そんな風にちーちゃんをからかいつつ、休憩していると、こっちに
向って誰かが来ているのに気づく。
その気配は段々と大きくなり私達の前に立つ。

「初めまして」

私達の目の前に立ったのは、女子だった。

その女子は、絵に描いたような名家出身を思わせるオーラを放つて
いる。

見た目もそうだけど、この人から私は、まったくいい感じがしない。

「私の名前はレイチエルわたくし・アルスター。クラスは三組でイギリスの
代表候補生をしております。以後、お見知りおきを」

思った通り本当に名家の出身なのか自己紹介をするとスカートの両
端を掴むように持ちお礼する。

見ているとなんか、イライラしてくる人だな、この人は。

「ああ……これはご丁寧に。私は」

「いい、大丈夫です」

座ったままだったが私達は頭を下げ、ちーちゃんが代表して名乗る
うとすると、この人は遮るように言う。

「貴女の事は存じております。織斑千冬、この学園で三人しかいな
い適正ランクSではば代表操縦者に近い日本の代表候補生。

先ほどの授業の様子を見ていただきましたが代表候補生の恥
じめものでした」

「……それはどうも」

高飛車な物言いでの人はちーちゃんの事を言い、ちーちゃんは何処か嫌そうな顔をしながらも深々と会釈する。

この人は本当に嫌だ。

そう思っていると、今度は私を見てきた。

「そして、貴女が篠ノ之束さんですわね。貴女の事のご高名はかねがね承っておりますわ」

「……」

言葉をかけられたが、関心も興味も沸かなかつたので無視してPA Dを弄り続ける。

相手していれば、こういうタイプは自慢話から初めて自慢話を続けて、会話を交わす度にどんどん凶に乗ってメンドクサクなるから嫌いだ。

と言うよりも、私はこの人の高飛車な物言いと人柄自体が気に入らない。

私は、こういう人が大嫌いだ。

「貴女ねえ……人がっ！」

私に無視されたのに腹が立ったのか、この人は声を荒げて怒っている。

普通なら腹立てて怒りそうになるぐらいのに本当に怒るなんて。

メンドクサイ、人だな。

「落ち着いてっ。束はちっよと人と接するのが苦手で……あまり気

にして気を悪くしないでほしい」

「っ……!……あら、貴方は」

怒ったこの人を綾が宥めるとこの人は、真面真面と綾を見る。

何事かと思いつつ見てみると、この人は鋭い目つきで綾を睨んでいる。

その睨んでいる目と雰囲気は、男を、綾を見下しているものようだった。

「(……… 変革の仇)」

この一年でこういう見下した目線を男の人に向ける頭の悪い人が増えてきた。

それは、私達のせいなんだけど、どうもISを使える女は偉いという頭の悪い社会構図が出来つつある。

国防を預かっている訳だから、そうなるのも仕方ないとは思うけど、頭が悪い。

自分では何もなしていないのに私が勝ち取ったモノに縋り付いて威張っているだけだというのに。

私が言えた事ではないのは分かっているけど、今一度、己の立ち位置に返って己を見た方がいい。

「そう……… 貴方が世界で唯一、ISを使う事が出来る男。あなたのも授業の様子も見てましたが織斑さんと……… 篠ノ之さんと同じ様にSランクなだけはありませんわね」

寝ている様にも聞こえるが皮肉ぶってこの人は、綾を見下した言い方をする。

それを聞き、頭にきて私とちーちゃんは思わず、こめかみをピクピ

クとさせて怒りが爆発しそうなのを堪える。

「はあ……それはどうも」

「ですがっ」

「えっ」

「唯一男でISを操縦できると聞いて確かに知的さを感じてましたが、全然男しらが感じませんわね。まったく期待はずれもいいところですよっ」

「なっ！？お前エツ」

見下すように言い捨てるこの人の言葉を聞いたちーちゃんは、我慢できなくなったのかバツと立ち怒りを露にしている。

本当にこの人は頭が悪い。

勝手な期待しとして、思い通りじゃなかったら見下して言う。そういうタイプの人間の典型的タイプだ。

「あら？織斑さん、何を怒っていますの。当然の事でしょう。この男は所詮、その程度の人間。所詮、男という生き物は醜く劣った劣等人種。貴女方も、もっとその男を利巧に使うほうがいいですよ。例えば奴隷や道具として使うとか」

「っ！お前エエツ！」

更に見下した言い方をしてちーちゃんは堪忍袋の緒が切れたのか、怒りを露にした表情を浮かべ、今にも、この人に殴りかかりそうに

なっている。

「離セツ！綾つ。お前は悔しくないのか？！あんなに風に言われて私は悔しいっ」

「俺だつて悔しいけど、下手に大事に発展させたらそれこそダメだ」

「そうだがっ！しかし…！」

綾は殴りかかりそうなちーちゃんの腕を掴んでちーちゃんを宥めている。

言われた本人である綾は、言われた事なんて気にも留めずにいる。多分、内心では私達のことばかり大切に思つて、考え自分の事なんてまったく考えてないんだろうな。

綾は昔からそうだ、自分が馬鹿にされても気にもせず平然としている。

まるで、そういう感情が欠損しているかのように、自分の事では怒らない。

そう綾が思つていても、私はダメだ。

我慢できない。

この人が許せない。

散々、見下すだけ見下して最後は物扱い。

こんな人を生み出した私が言えた事じゃないけど、最低最悪だ。イライラする。

許せない、綾を見下して物扱いして、許せない。

ゆるさない　ゆるさない……ゆさせない、ゆるさせない、ゆるさ

ない、ゆるさない。
ゆるさない、ゆるさない、ゆるさないッ、ゆるさない、ゆるさない
ッ！ゆるさないッ！！

「あ、貴女っ！？」

私はこの人の頬を力の限り引つ叩いた。
すると、当然、この人も回りも驚いてざわめいていたのが静かになる。

ちーちゃんを宥めていた綾やちーちゃんもまでも、私がした事に驚いている。

「さつきから黙って堪えながら聞いていれば意味不明で頭の悪い事ばかり言っつて。女でありISが使えるからって偉いなんて思っている貴女こそどうかしているよ。ISという力があるのなら、力がある人間なりの正しい考えをして言葉にしてなよ」

言いたい事を全て吐き捨てているかのように言っつ。

言っつている事は、私が言えた言葉じゃないのは分かっつている。ただ、言っつて思い知らせてあげないといけなない。

所詮、この人はISという力を理解し切れてないという事を。

「でないと自分の身を滅ぼす事にもなるしそれに私は貴女みたいな人を社会を作りたくてISを世の中に解き放つたわけじゃない。あまりふざけた事言っつていると貴女、“ISを使えないようにするよ

”

頬を叩かれてなのかは分からないけど、たじろいでいるこの人に追っつ討ちをかけるよう、更に言っつ。

言った事が凄かったのかは分からないが、周りは時間が止まったように静かになっている。

そう言いたい事、全てを言い捨てると

「馬鹿にしてっ！いくらISの開発者とはいえ犯罪者の癖に、天才という化け物の癖に、付け上がっているんじゃないやありませんわっ！」

更に怒りが爆発したのかこの人はそう言ってきた。

「……天才、化け物」

言われて私こそが己の立ち位置に戻る。

そうだ、私は天才という化け物だから世界からは弾かれ両親にも捨てられたんだ。

ああ、私も何だかんだで自分を知らなかった。

刹那を求めすぎて忘れていた。自分が天才という化け物という事を。

そう思うと頭が真っ白になっていき、周りが何やら騒いでいるが気にする事も出来ない。

「……そこまでにしろっ」

「……っ！は、離しなさいっ」

頭が真っ白になりつつある中、綾の声が聞こえ我に返ると綾がこの人の腕を掴んでいた。

状況を確認すると、この人はどうやら私を殴ろうとしていたらしく、それを綾が防いでくれた。

ただ、この人の腕を掴んでいる綾の目と視線は冷たく周りにいる外

野の人達は、怖くなったのか恐れて凍りついた様に静かになっている。

ああ、綾は怒っているんだ。

それも私の事で。

今の状況で喜んだらいけないのだろうけど、そう思うと心が温かくなって嬉しくなる。

やっぱり、綾は優しいよ。愛しく思うよ。

そして、綾が腕を離すとこの人は言う。

「ツうう！神山綾ッ！決闘ですわ！」

と、綾に指をつきつけて。

突然の事に私は驚いたが綾は

「いいだろう。俺としては問題はないけど貴女は俺でいいのかな？」

戦う気、満々だった。

多分、決闘というのを上手く使って圧勝して何かを思い知らせるつもりなんだろう。

「代表候補生である私を舐めないで下さい！男である貴方に言っているです。男である貴方を倒さないと見世物になりません。目に物の見せてあげますわっ！」

「そうか……なら、受けて立とう」

やっぱり、この人は単純な思考回路の持ち主だった。頭に血が上っているから単純な思考しか出来ない。

だけど、相手にする分にはやりやすい相手だ。

でも、綾が決闘をする事になったのは私のせいだ。そう思うと罪悪感に苛まれる。

けれど、綾と目は戦うことを決意している。

なら、私はその綾の意思を汲むことしかできる事はない。

「威勢がよろしいですわっ。貴女が負けた暁には全校生徒の目の前で地面に顔を擦り付けながら謝ってもらいましょう。そして、死ぬまで奴隷にしてあげますわっ」

「ほお……なら、俺が勝ったら男に対する考えを改め東に土下座で誠心誠意に謝ってもらおう」

「それだけでいいのですの？」

「ああ……あとは決闘で思い知らせてやるから」

「っ！わ、分かりましたわ。決闘は今日の放課後、第三アリーナで」

「分かった」

こうした経緯があり、こうして決闘することが決まった。

…

第十四話 束視点（後書き）

というわけでいかかだったでしょうか、第十四話 束視点。

本当なら決闘へへ行けば、流れるには綺麗になるんでしょうけど。蛇足気味になっても、折角書き勿体ないと思い掲載しました。ちなみに書いた動機は「束さん視点書いてないし、書きたくなくて書いた」です

話的には主人公視点の第十四話と変わりありませんがそれでも別視点、束さん視点なので話の見え方や感じ方は主人公視点とも違うものとしているつもりです。

ちなみに基本的に主人公と束さんはいろいろな所が似ています。

久々に束さん視点を書きましたが難しいですね（汗）

束さんの一視点は本当に難しいです。

過去編だからと言って原作の束さんと違いすぎますね。

少しでも近づけるようにしなければ。

後は心理描写も私なりに感情移入して書いたのですが、所々支離滅裂。

これも善処せねば（汗）

今回はあえていつもしている話の補足はしません。

あまり必要な気がして（上手い言葉がみつからなかった、とかではありませんか？

では、またご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

今日の活動報告にも書いた事も少し関係して次回の更新今意欲に深く関係してくるので。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十五話―？（前書き）

今回は決闘です。

瑠璃色の方ともあわせて久々の戦闘描写でISを使つての戦闘は初めてなので

上手く書けているの心配です。

ちなみに今回の決闘時のBGMはDies iraeの「Holo
caust」です。

それではどうぞ

第十五話―？

綾視点

放課後。

俺達はアルスターとの約束通り、決闘をする為、指定された第三アリーナに向っている。

アリーナの使用許可はあっさりと出たらしく、あの事を見ていた生徒だけではなく先生達も見物に来ているらしい。

本当にいい見世物だな。

そして、第三アリーナ・Aピットに着くと、ここにくるまで終始無言だった束が言った。

「ねえ……綾」

そう言った束の表情は、複雑そうにしつつも暗く沈んでいる。

それはここに来るまでも同じで、何処か申し訳なさそうにしている様にも見える。

「ごめんなさい……私のせいで綾が決闘してしまう事になって」

何処か申し訳なそうして、俺に謝る。

そして、やっぱり、束は暗い顔をして沈んでいる。

確かにこの決闘の原因の一旦は束が彼女を引っ叩いて、ああ言った事に原因があるかもしれないが別に、俺に謝るような事ではない。

決闘をする事を望んだのは俺であり。また、戦おうとするのは俺なのだから。

だから、束が謝る必要も気に病む必要もない。

「謝らないで、束。それに、別に謝ることでも気に病む事でもないよ」

「で、でもっ、私があんな事をしなければ綾が決闘する必要なんてっ！」

そうは言っても束には、罪悪感があるのか声を少し荒げ反論してくる。

こんなにも束が感情を露にするなんて……俺を心配してくれているんだ、幸せ者だ。

「決闘する必要ならあるよ。彼女は侮辱した、男という存在を。そして、何より束を侮辱した……言っではならない言葉を言って。それに戦うと決めたのは俺の意思だ。違う？」

「そう、だけど。……それでも」

「いいんだよ。謝る必要もないし罪悪感を覚える必要もない。それに俺は嬉しいんだ」

「嬉しい？」

俺の言葉を疑問に思ったのか束は首を傾げる。

嬉しい、嬉しかった。

束が俺の事を思って、あんな風に彼女に怒ったのが、俺の為に怒ってくれたのが、何よりも嬉しい。

「束があんな風に俺の為、怒ってくれたのが何よりも嬉しい。だから、気にする事も気に病む必要もない」

「……綾」

昔、よく二人にしていたみたいに俺は、束の頭を少しでも安心させるように優しく軽く撫でる。

そうすると、束は少し安堵を覚えたのか、安心した表情になった。

誰かに言われて決闘するのではない。

これは、俺の意思で自分自ら判断して決闘する事を決めた決闘だから、自分の意思で戦う。

男という存在を今一度、彼女を始めとする周りに思い知らせる為に。そして何より、束を侮辱した、その罪の重さを思い知らせる為に。認めようとせず、一方的に批判した、その事の重さと罪深さを思い知らせる為に。

自己中なのも傲慢なのも、考えが破綻しているのも、俺が狂っているのも自覚している。

だが、俺は決闘、戦う。

束との“至高の刹那”を味わい尽くす為に。

「……」

安堵して安心している束とは反対に千冬は険しい顔して複雑そうにしている。

千冬もまた、俺を心配してくれているんだろう。

ああ、こんなにも想われて俺は、本当に幸せ者だな。

「……大丈夫なのか？」

「何が？」

「相手はあんな、なりしていても、代表候補生だ。大丈夫なのか？」

「千冬も心配しすぎだよ。大丈夫だよ。それに俺の“本当”の強さは千冬もよく知っているだろう？」

「そう、だったな……要らぬ心配だったかもしれないな」

「そんな事ないよ。心配してくれてありがとう。嬉しいよ」

そう言つて千冬にも、少しでも安心させる様に優しく軽く撫でる。

そうすると、千冬も安堵したのか俯き加減に気恥ずかしそうに安心していた。

「俺は勝つよ、必ず。勝つなら圧倒的に勝つ。だから、東、千冬。勝つて帰ってくる俺を暖かく出迎えてくれ」

俺は二人に背を向けアリーナへと続くゲートに向つてゆっくり歩き出す。

俺は、勝つのなら圧倒的に勝つ。

この言葉は有名な哲学者の言葉だが、俺もそうだと思い、そうしている。

今回ばかりは、“いつもみたいに”控えめに戦う訳にはいかない。圧倒的に勝てば彼女もこれ以上、東や千冬に突っかってくる事もなくなると思う。

それに圧倒的に勝てば、少しでも男と言う存在を認めずにはいられ

なくなるだろう。

ISが世界に圧倒的に勝ち、認めさせたように。

だから俺はこの決闘を戦い、勝つのなら圧倒的に勝つ。

「じゃあ、行っています」

「行ってらっしゃい。綾」

「行ってらっしゃい」

束と千冬の二人にそう見送られ俺は、背を向けてまま二人に手を振りアリーナへと出た。

・
・
・

アリーナに出ると、そこから見える空は茜色に染まっており地面や観客席を茜色に照らしている。

観客席には、たくさんの人が詰め掛けており俺と彼女が決闘するのかを今か今かと待つかのように歓声に包まれている。

見世物扱いだが、決闘の舞台としては最高だ。

「逃げずに来ましたか。そこだけは褒めてあげましょう。ですが、所詮は男、女が相手という時点で勝敗は決まっていますわっ」

彼女がふふんつと鼻を鳴らし、今だ見下した高飛車な事を彼女は言う。

腰に手を当てまた、男という存在を見下した様な目をしている。

「それでは、ドレスアップといきましょうか」

そういうと彼女の体は淡く光る量子に包まれISアーマーが形成されている。

形成されたISアーマーは、西洋の騎士甲冑みたいなデザインで両手にはそれぞれ、フェンシングで使う様なサーベルと専用の盾を持っている。

見た感じ、西洋の騎士をイメージしてのデザインだと思うが、どちらかというとなんか某ギャンの様なデザインだ。

「……………」

そんな余計な思考を少しずつつ振り払い、意識を集中させる。イメージを固め、量子から少しずつつ形成させる。

切り刻め、俺やそして、何より束に降りかかる全てを。

俺は、未知なんていらぬ………未知は怖い。

束と一緒にいられる一瞬、“至福の刹那”さえあればいい。それが不変の様にいつまでも続けばいい。

だが、目の前の彼女はその刹那を壊そうとしている。

ならば、恐れている未知を受け入れてやる。

そして、その未知すら壊し、再び“至福の刹那”を取り戻してやる。

ああ、そうだ。束を一方的に否定し、拒絶するものなんて、全て永劫破壊しつくしてやる。

俺には、その為の力と技能がある。

だから、始めよう。歌劇を。

「形成 Yetziran 時よ止まれ おまえは美しい」

それは魔法の言葉。

ISを起動し活動させる為に必要な、俺だけ。

俺の体は量子の淡い光に包まれISアーマーが形成される。
光が消えると俺の体は黒いISアーマを纏い、右腕には黒くズツシリとした巨大なギロチンが形成される。

俺の専用機『黒百合^{クロユリ}』。

全身は黒く禍々しく 『黒騎士』に変わる俺の新たな力。

近接戦闘に特化した機体で、武器は三日月の刃は黒く、長大でありながら無駄がない、巨大なギロチン『マルグリット・ホワ・ジュステイス罪姫・正義の柱』。

武器はこの一振りだけだが、黒くスマートなボディーとこの巨大な黒いギロチンはミスマッチしているから他の武器はいらない。

これが俺の意思、思いの形。

降りかかる未知の恐怖を永劫破壊し続け、再び、束との刹那を感じる為の力の形。

束が作り出し共に作り上げた、この世でもっとも罪深く禍々しい罰あたりな機体にして至高のIS。

全ての機能は正常に機能している。

それどころか、この機体のコアでもある黒騎士にも搭載されていたナンバー002のコアが今から戦うのに過剰反応しているが如く、感度良好。

「身なりだけは立派ですわね。ギロチンとの中々、悪趣味ですが。さあ、最後のチャンスをおあげますわ。貴方が無様な負け姿を晒す前

に謝れば、あの事の無礼を許しますけど?」

手に持つ、サーベルの剣先を俺に向け、最後の最後まで、見下した口調で言葉を言う。

頭にくるな、この人は。いい加減にしてほしいものだ。だから、俺は威圧を放つ気持ちを萎縮させるように言う。

「黙れよ。勝つのは俺だっ」

「っ!そ、そうですか……いくら強がってそう言つともわたくしが一方的に勝つのは明白ですが、それでは始めましょうかっ」

俺の一言に萎縮したような怯えたがすぐさま、体裁を取り戻して開戦の言葉を言う。

警告。敵ISが左手、シールドミサイルを発射。接近中。

警告音と共にミサイルがこちらに向けて発射されたのを確認した。ハイパーセンサーは便利なものでミサイルが発射されたのを即時に確認して次の行動に移せた。

「これで……なっ!?!」

彼女は放ったミサイルが着弾したものだとは確信していたが、放った場所には既に俺はおらず砂煙が爆風で巻き上がるのみ。その事をすぐさま彼女は、理解したが既に遅い。

「どこに!?!? 後ろっ!?!? くううっ!」

「ハアアアッ!」

彼女に背に回りこみ俺はギロチンを振り下ろす。

反応してこようと、彼女はしたがそれも既に遅く。

ギロチンの刃はエネルギーシールドを斬り、ガギンツという音を立てシールドエネルギーを削る。

「くううっ！やりますわねっ！でけすけどっ！」

ギロチンでエネルギーシールドを斬られ、その衝撃でよろめいた体を彼女が立て直すと再び、シールドミサイルを今度は先ほどよりも倍の数、撃ってくる。

彼女は少しずつ焦ってきているのだろう。

見下していた男に初弾を当てられず、あまつさえ先行を取られシールドエネルギーを削られた。

その事を彼女のプライドが許すわけもなく、ただ、焦りだけが膨れ上がっていつているみたいだ。

「なんとおお！」

ミサイルを避け俺から距離を取った彼女の元へとギロチンを振り翳しながら接近する。

狙いどころはいいが、教科書の教えの範囲を出ていない。

これなら、師匠が持つ重火器の一斉掃射を避けるよりも楽だ。

「避けッ！？　　ッ！？」

「うおおおおっ！！！」

ギイン　　ギイン、ギイン、ギインッ！！

接近しギロチンを振ると、彼女のレイピアの刃とギロチンの刃がぶつかり、激しい衝突音をアリーナに一带に鳴り響かす。

負けるか　負けてたまるものか。

俺は、この決闘に戦いに何としてでも勝たなくてはならない。僅差では圧倒的に勝たなくてはならない。

俺以外の男の為に、そして、何より束の為に。

この動機が偽善なものも自分勝手なものも理解している。だけど、俺は何としてでも勝つ。

「速いつ！　くうっ！」

「そのまま、倒れるっ！」

キーン、キーン、という刃と刃がぶつかる音が何度も小刻みなる。彼女も名家の出身でそれなりに武道の心得があるのか、俺の攻撃にギリギリ反応し、刃を弾くようにして防ぐ。だが、素早く振り下ろすギロチンの全ての攻撃には反応しきれず彼女をジリジリと後ろに押していく。刃と刃がぶつかり合っているが、それでも俺は彼女のレイピアよりも一歩早く、ギロチンを振るい確実にシールドエネルギーを削っている。

「はぁあっっ！」

「うっっ！」

キーン　ドガアアアアンッ！

向ってくるレイピアをギロチンで上に弾き、出来た隙に回し蹴りを叩き込む。

主力武器であるギロチンほど、威力もないしシールドエネルギーも奪えないが相手を挑発又は焦らすには充分な攻撃手段だ。

いくら決闘とはいえ、見下している男に蹴られもすればお高いプライドは

「くううっ！！何たる、侮辱っ！卑怯な手を。許せませんわっ！」

案の定、傷ついた様だ。

それに卑怯と言ったが別に卑怯なんかじゃない。

元より、そんなルールはないし決めてもない。

相手が目に見え、使い続けている武器だけで何時までも攻撃してくるとは限らない。

隠し武器を使ってくるかもしれないし、拳を使ってくるかもしれない。

それを考えきれないと自分が負け　悪ければ死ぬ。

ただ、それだけの事であり、次を考えられないものは自分で自分を汚す。

ルールがある内は、決闘とは言わない　それはただの競技だ。

「私は認めませんわっ！こんなっ！」

声を荒げ、イグニッション・ブースト瞬時加速でこちらまで瞬時に距離を詰めると、フェイシングの突きの様にしてレイピアを彼女は振るう。

突いてくる箇所は中々、狙いところがよく、先ほどまでの体を少しズラすだけの回避では回避しきれず

ダメージ23。エネルギーシールド残量977。実体ダメージ、低。

エネルギーシールドにレイピアが掠り、ほんの少しシールドエネルギーを削られた。

予想の範疇、やっと彼女も俺に攻撃を当ててくれた。こうでなくては思い知らせる為におもしろくない。

「掠っただけっ!?!」

彼女の中では確実に当たっていると思っていたんだろうが、現実には掠っただけ。

その事に彼女は驚き、悔しがって予備動作を取ってはいるが甘い。このままいつきに押し切る。

「はあああっ!」

「きゃあああっ!」

ギインツ!!

攻撃する為に不用意に近づいたのが仇となりレイピアを弾き、オマケに一闪、ギロチンをエネルギーシールドに斬りつける様に叩き込む。

すると、彼女は随分と可愛らしい悲鳴を上げながら飛ばされる。

散々、舐め腐っていたのが彼女の仇となった。何とも、高飛車な人らしい落ち度で当然の結果だ。

「はあっはあっ!くうっ」

男の癖に生意気なっ!男なんて、所詮

は劣等である事を！そして、篠ノ之束がどれだけ愚かで哀れな存在なのかとくと思いい知りなさいっ！」

吹き飛ばされ体勢を立て直した彼女は、最後の最後までそんな風に男と束を罵倒し言い放った。

そして、見下してきた男《相手》に散々、無様な格好にされプライドをズダズタにされた彼女は頭に血が上りすぎたのか、シールドミサイルを全弾放ってくる。

数は多く、見ただけは派手で圧倒的だが狙いが甘い。

いくら頭に血が上ったからとはいえ、これでは最早、勝敗は決した。

もういい、彼女には口を閉じ黙ってもらおう。

言葉はいらない、男を見下し、最後の最後まで束を一方的に拒絶した彼女には最高の贈り物を贈ろう。

敗北という一文字とその事実を。

さあ、幕引きだ。

「黙れよっ！束をそんな風に言うんじゃないっ！そんな風に二度と言わせはしないっ！」

「っ！？」

向ってきたミサイルを瞬間加速を使い、すり抜ける様に動くと、ギロチンを振るいミサイル数十発を斬って破壊した。

そして、そのまま一気に加速して彼女の元まで行き

「そしてっ！男を舐めるなあああっ！」

ギイン

首を落とす様にシーエネルギーシールドに迫ったギロチンを振り下ろした。

敵ISエネルギーシールド残量0を確認。敵IS沈黙の確認。

『そこまで。勝者 神山綾』

ISがしてくれた報告と共にアリーナ全体にそう勝者を告げる放送が流れる。

刹那、アリーナは暖かく沢山の歓声と拍手喝采に包まれた。それを聞き、安堵を覚えた俺はISの展開を解除する。

勝ったのは俺 そう、始めに宣言した通り勝ったのは俺だ。束達との約束通り、勝ったのは俺で勝つなら圧倒的に勝った。

その事実にもアリーナは今も尚、歓声や拍車が鳴り響き盛り上っている。ただ、一人、目の前にいる彼女を除いては。

「くっ………こんなっ」

ISを解き、疲れからかはしらないが地面に座り込んで悔しそうな顔でそう悔しそうな声を彼女は漏らしている。

騒然の結果だろう、相手を散々、見下したツケが回ってきた。自分が言ったことに責任も持たず言い、こんな事をするから、この様な結果になった。

自業自得、因果応報だ。

まあ、仮にちゃんとした態度で挑んでかかってきても結果は同じだろう。

覚悟の差というか……経験の差がものを言うから、こういうのは。それに俺は負けるわけにはいかないし。

「認めませんわっ！こんなっ」

「認めないも何も、これが現実の結果だよ。認めなくもいいけど、この事は変わらない。決して」

「くっ……」

再び彼女は悔しそうな声を漏らす。

こんな状況になってもプライドや誇りを保とうとするのは流石に感心を通り越して尊敬の念すら沸いてくる。

けれど、諦めが悪い。

例え、どんな言葉を並べてもこの事実は変わらないし変えようがない。

起った事は受け入れるか受け止めるしかない。

「それと相手や男を見下し続けるのは貴方の勝手だけど、そのツケがいつか、近いうちに倍になって返ってくる事は覚悟しておきなよ、アルスターさん。今、みたいに返ってくるから」

「……っ」

「世界は同じ様な事が未来永劫繰り返され続ける。だから、その内、自分がしてきた事のツケは必ず返ってくる。この現実を受け入れ、今一度、我が振り見直したほうがいいよ」

「っ……か、考えときますわ」

「そう、よかった」

根は聞き分けのいい人の様だ、この人も。

そんな事を思いつつ彼女に深く一礼して、俺は束と千冬がいるAピットに戻っていた。

…

第十五話―？（後書き）

というわけでいいがっただでしょうか第十五話　？。

自分なりにやり過ぎはよくないので“ほどほど”を心がけてフルボッコタイムを書いたのですが、満足していただけましたか？本当に久しぶりの戦闘描写なので何気に苦労しました。瑠璃色の方は戦闘描写でスランプ中なので本当に不安です（汗）今回の話は一応ではありますが「アンチされもの」です。

今回はめっちゃくちやDies irae要素を入れました（以前、すくないと言われたので

起動の言葉や起動時の描写など微々たるものですが、分かる人にはそれなりに楽しんでいただけたらと思います。

相手のISは完璧にギャンです。

イギリス⇨騎士⇨ギャンという発想の元そうしました。

なまじ時代が時代だけに大した装備の物は選べませんからね。ちなみにギャンは第一世代型です。

そして、“勝つなら圧倒的に勝て”というのは私の心の師匠、ニ―チエの言葉です。

意味は、「競争においては、かろうじて相手に勝つのなら、僅差ではなく、圧倒的な差をつけて勝つのが良い。そうすれば、相手は「もう少しだったのに」という悔しい思いも自責の念を持つこともない。それどころか、かえってすがすがしい気持ちで素直に相手の勝利を称える事が出来る。相手を辱めるようなきわどい勝利や、微妙な勝ち方、遺恨を生むような勝ち方は良くない。それが勝利者のマナーと言つものだ」というものです。

この言葉に元ずき、主人公に本気を出させ、圧倒的に勝たせ、ほどほどにフルボッコにしました。

主人公は最後に彼女に言った言葉も毎度の如く、私の自論です。

また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言一言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十五話―？（前書き）

更新率、が中々安定してきました。

二日、三日に一回といは中々、自分的にはいいペースです。

ですが、活動報告にも書きましたが、風邪引きましたwww

37.3 の微熱ですが、次回、この調子で更新できるかは微妙です。

更新できたとしたも、支離滅裂かもしれませんがご期待はしておいて下さい。

それでは、第十五話 ？、どうぞっ

第十五話？

綾視点

「お疲れ様、綾」

「お疲れ、綾」

決闘を終え、Aピットに帰ってくるなりそう束と千冬の二人が暖かく出迎えてくれた。

何だか、気が楽になった。

肩に重い荷物が乗っかっていたのが降りたの様に肩が軽く感じる。

安心、しているんだろ……二人がこんな風に暖かく出迎えてくれて。

「ありがとう、二人とも」

「あつ……ふふっ」

言葉を返すと、安心してついに表情が和らぐ。

表情が和らいだのに束が気づき、束は柔らかく嬉しそうに微笑む。

決闘に気合入れて、アドレナリン異常分泌状態で戦い、今安心したこと忘れていた疲れが出てきつつある。主に精神的に。

必要時だから本気というかいつもみたいの手を抜かずにやってみただけ、やっぱり通常時よりも倍近く点精神的に疲れる。

これだから、昔からの自分の主義と師匠の教え以外でその二つを遵守していても、本気を出すのは嫌だ。

でも、束のこの表情を見れたから幾分か癒される。

隙があつたら、思いつきり抱きしめて束分を補給しよう。

「勝つたな」

「ああ、勝つたよ。言った通り、圧倒的に勝つた」

「本当に凄かったよ、回避は全てスラスターの微調整だけでしてたし」

「大きく動いて回避する必要なんてないよ。ああいう相手には。逆に動いて大きく回避したら当たりについているものだし」

「そうだね。でも、綾……かつこよかったよ」

「そうか……ありがとう」

束に褒められ嬉しくなり、つついお礼をするように優しく束の頭を撫でる。

すると、「……にゅっ」という可愛い鳴き声を束は漏らし気持ちよさそうに目を細める。

綺麗で可愛いなあ〜流石に千冬が見ているから、撫でることしかできないけど、二人きりだったらハグしたらハグされているだろう。

その証拠に束は嬉しそうに気持ちよさそうにしながらも、今にも抱きつきたがりそうにしている。

安心感溢れる一時だ。

俺はこんな幸せな刹那の為に頑張った。

罵倒されて気分悪かったけど、ちよっぴり清々しい、いい気分だ。

そんな感じに二人と雑談し、制服に着替えるとAピッチの整理をし

て後にした。

・
・
・
第三アリーナ・Aピットを出ると不思議な事が待っていた。

「……………お前は」

努めて冷静に千冬がそう言うが少し驚きを隠せていない。

第三アリーナ・Aピットを後にした俺達、三人の前に現れたのは先ほど戦ったレイチエル・アルスターさんだった。

取り巻きみたいな人達を二人連れているが、表情は何処か申し訳なさそうにしている。

負けを負けと確りと自分の中で自分で認められたみたいだ。

ただ、どうしてここに？

「えーと、何か？」

「……………謝りに来ましたの」

「謝りに？……………あっ」

思い出した、束に謝れと言ってたんだっけか。

あの時は、キレて売り言葉に買い言葉でつい勢いで言ってしまったけど本当に謝りに来るとは。

あまり期待してなかっただけに少しだけ驚きは大きい。

見下していた男に^{相手}圧倒的に負かされ、少しでも思い直す事が出来た

んだらう、そう信じたい。

そうならば、俺は紛いなりにもいい事ができたということだ。あんな事をしても。

流石に負かされ、何かを見出して好きになるかテンプレ的には事はあえないな、そういうのを期待しているわけじゃないけども。

一応だ、一応。そんな束以外からのフラグはいらない、むしろ、全力で折る。

まあ、一夏なら摩訶不思議の力でそういうフラグを量産できるが。

「ど、土下座はいりますかっ？」

謝る、という事を決めても彼女には今までの自分とそのプライドと誇りがある。

だから、幾ら謝ろうと決めても、土下座まではその今までの自分とそのプライドと誇りが邪魔をして出来ない。

だが、実際のところ俺としては別に土下座はいらない。

あの時は勢いで言ってしまったし……

だが、謝る対象は束だ。つまりこの場合、俺の意思は別にいい。

「……束？」

尋ねる事でもないが、とりあえず尋ねる。

「……土下座はいらない、謝ってくれるだけでいい」

そう他人の手前、嫌っている相手の前だからなのか無表情&無感情でそう言う。

束にしたら土下座は疎か、謝罪もいらぬから速攻に目の前から消

えて、もう二度と視界に映り込まないでほしいと言った感じだろう。だが、俺は勢いで言ったとはいえ言った手前、今更言った事を取り下げるわけにはいかない。そうすればまた、面倒な事になるかもしれない。

俺の落ち度だな……だから、感情的になるのは嫌で下手くそなんだ。けれど、束は自分の気持ちを抑えてそんな俺を立ててくれているんだろう。

でなきゃ、束の事だから無視して何処かに行っている。

「そうですか……では」

彼女は身嗜みを簡単に整え。

「この度は本当に申し訳ありませんでしたっ。わたしくしの非を深く謝ります」

言葉こそは何処か上からな感じだが、確りと束とそして、何故か俺に対して深く頭を下げて謝罪している。そして、取り巻きも巻き込んで頭を下げていた、彼女が数秒して頭を上げた瞬間、チラッとだけ俺を見た。

「（……懐かしい目だ）」

俺をチラッとだけ見た彼女の目は少し恐怖に染まっていた。

多分、先ほどの戦闘で、だろう。

少しやりすぎたのかもしれない、自重。

しかし、本当に懐かしい目だ。

昔、まだ幼い日に束を苛めようとした人達をおっぱらった時も同じ

様な目をしていた。

誰一人、例外なく瞳を恐怖に染め、ただじつと沈黙していたけど……今とは、あまり関係ない話だけ。

幸いな事に束はそれを見ても気づいてもおらず、彼女が俺にも謝罪した事が嬉しかったのか無表情の裏では嬉しそうに安堵しているように見えた。

「……分かりました。今回の事はその謝罪だけで結構です」

「そうですね……では、長いしてはアレですから、わたくし達はこれで……」

「……あつ、うつ……ま、待って下さい」

立ち去ろうとした彼女達を束が何故か突然、呼び止めた。

それに彼女達も啞然としつつ、アルスターさんは「何か？」と束に聞く。

啞然としているのは、彼女達だけではなく、俺や千冬も束の思いがけぬ行動に啞然としている。

普通にそのまま、何事もなく返すと思ったのに……まさか、呼び止めるなんて。

何かする気とかじゃないよ、な？

「……私の方こそ、引つ叩いたりしてすみませんでした」

無表情に無感情に言い終えると、束は頭を深々と下げ謝った。

表情や声こそは無感情だが、頭を下げている束は本当に申し訳なさそうにして謝っている。

「!?!」

!?!

束が……謝った

えーと、えーと、夢じゃないよな?、これは夢で夢を見ているという自覚がある明晰夢とかじゃないよな? とりあえず、落ち着け。

呆気に取られる突然の事にアルスターさんはもちろんのこと、俺や千冬も先ほど以上に呆気に取られている。

夢じゃないのは確かでこれは現実だ。

驚きを隠せないのもまた現実だが……まさか、束が謝るなんて。

「そ、そうですか……気にしてないと言ったら嘘になりますけど、私の方こそこれだけで充分です」

「……そう、ですか」

「ええ。では、わたくし達はこれで本当においとまいただきますわ」

そう言うと彼女は取り巻きの子達も連れて、今度こそ本当に帰っていた。

俺はただ、啞然としていて黙って彼女が帰っていくのを見つめていた。

驚きすぎて、ここからどう反応をリアクションをしてらいいのか分からない。

感動すればいいのか？感涙すればいいのか？いつその事、このままオーバーリアクションで驚けばいいのか？

と、次の反応や二の句に困っているところに。

「おい、綾？ちーちゃん？」

三人になった事で対人様の無表情、無感情をやめた束が呆気に取られている俺達に呼びかけ、目の前で俺達の反応を伺う様に手をひらと振っている。

「あ……ああ」

「ちーちゃん、大丈夫？」

「大丈夫だぞ。少し呆気に取られてだけで」

一足先に千冬が呆気に取られているのから復帰した。

「綾も大丈夫？」

「う、うん、大丈夫だよ。少し俺も呆気に取られていただけだから」

心配そうな顔をされ、俺も千冬に続いて復帰した。それでも、驚きが隠せないのは今も変わらない。

「でも、まさか……お前が謝るなんてな」

「本当、驚いたよ」

「じゃはは……」

少し気恥ずかしそうに笑う束。

彼女もだけど、束も今回の事で考え直す所があったのかもしれない。そうだとするなら、俺が下手くそながらも頑張った甲斐がある、頑張りは無駄では無かったと思える。

「私もまた、少しだけでも頑張ろうと思って、ああしたの」

「頑張る？」

「綾は私の為にも頑張ってくれた。だから、今度は私の番と思ってああして頑張ったの。まあ、あんな風に謝れなかったけど、ね」

そう言っつて、束はまた、何処か少し気恥ずかしそうに微笑む。

ああ、無駄じゃなかった。

頑張りは無駄ではなかったと今、感じられた。それだけで、苦労は労われる。

「そうか……頑張ったね、束」

「あつ……にゆう」

褒めながら頭を撫でると嬉しそうに束は声を漏らした。

こうしていると何度も思うが、束は変わったな。

悪い意味でも変わったが、いい意味での方が大きく変わった。

俺の頑張りは、俺という存在は無駄では無かったと実感でき安心で

きる。

「じゃあ、そろそろ……帰ろつか。時間的に夜ご飯時だし」

ここに長居している理由も無いし、さっさと帰ろつ。

精神的には幾分か癒されたが、身体的には疲れた。お茶の一杯も啜ってゆっくりしたい。

「そうだな、お腹も減ってきていることだし」

「うん。あつ、そうだ、ちーちゃん」

「ん？」

何やら束が千冬に耳打ちして何かを話している。

耳打ちをして声が小さく何を話しているのかは分からないが、何か企てているみたいで束の表情は楽しげで、耳打ちされている千冬の表情は赤くなったり驚いたり表情が七変化している。

珍しいことに束があんな表情で何か企んでいるみたいけど、悪い予感はない。

疲れすぎて第六感がマヒしているのかな、まあ、何か起る気はするんだけど。

そう何が起るのか待っている耳打ちを終えた束が俺に言う。

「綾、私たちね、言い忘れていた事があったの」

言い忘れた事？

そう思い当たる事を頭の片隅で考えて、何かと待っていると。

「!？」

ガバツと束と千冬の二人に抱きつかれた。

突然の事に驚き、抱きつられ勢いでバランスを崩しそうになったが足を踏ん張らして持ちこたえ体勢を安定させる。

何事かと驚いていると二人が綺麗に口をそろえて言う。

「お帰りなさい、綾」

そう、束と千冬の二人が言う。

二人が言い忘れていたというのは、この言葉の事か。

二人が抱きついてきた事には今も、混乱しているし、二人の抱きついてくる力は少しずつだが強くなっている。

まるで、俺を労う様に。

二人は「お帰りなさい」と言った。

ならば、混乱していても俺が言う言葉はただ一つ。

「だだいま、二人とも」

そう言葉を返し、二人を抱きしめ返す。

そして、今という一時の刹那、“至高の刹那”を味わい尽くした。

…

第十五話―？（後書き）

と、いうわけではいかなかったでしょう第十五話　？

最初の束さんちよデレは上手くできたと自負しています。

まあ、いろいろと問題行動ではありませんが。

Dear My Friendの麻衣に前々から影響されて束にもその影響が出ています。

分かる人には分かると思います。

そして、今回の見所（？）は不器用ながらも謝った束さん。

束さん自身には大した理由はありません。

作中通り「綾が頑張ったから私も頑張ろう」という単純な動機ですが、結構束さんも人として進歩しています。これも主人公のお陰、主人公補正です。

最後の締め方は今一つの気もしつつ

アレはアレでいいかなあ〜とは思っています。

が、やはり。今一つの気がします。どうでしょうか？

ちなみに前回の話で最後に主人公がアルスターさんに言ったのは謝りに来るといふ為のモノです。筋通そうとしたらああしてこうなりました。

それでも、筋通ってなくてご都合主義なのは自覚しています。はい。

ちなみに怒りの日風に言うと束さんの渴望は

「主人公に追いついて主人公の愛した不変の刹那になり、愛してほしい」

というものです。分かる人には分かる渴望が元ネタ…と言うよりは

…そのまんまで

今、即興で考えたのでちょっとばかりは変わると思われます。

こんな感じに弄繰り回していますが、東さんの拒絶的な態度は変わっていません。

むしろ、酷くなっているかもしれません。

態度では示さなくても言葉が原作以上に変なトゲトゲしかったりするかもしれません。

ちよいちよい、修正していますが、セシリアへとかの態度は原作どおりになると思われます。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十六話 ？（前書き）

今回はかなり問題作だと思います。

言い訳染みた事になりますますがやっぱり、熱ある日に書くものじゃない。

特にこういう類の話は。

かなり支離滅裂で、どこをどう修正してよいのかわかりません（汗）

こういう話を書くのは私は好きなんですけど

学が無い奴が書くものじゃねなとしみじみ思いました。

これからはこういう話は極力、控えようかな。

兎に角、それではどうぞ。

第十六話 ？

綾視点

決闘から数日ほどの経った。

決闘に勝ち決めるところは決め、収める所は収めてから、それが拍車を掛けたのか同級生……女の子達の視線がより一層に強くなった。興味や好奇心の視線とかではなく熱いぐらい熱視ぽい線に変わり、千冬曰く「モテているんだっ」とむうっとした表情で吐き捨てる様に言われた。

俺がモテるといふのは最近、こんな生活環境だから、否応無く少しだけ自覚してきた。今だに信じられないが。

モテると言っても今回の場合は、どつちらかというヒーローや人気アイドルといった類への憧れみたいなものだろう。

彼女達が、俺を見る視線もその域を出てない様に思える……いや、俺がそうだと信じたいだけなのかもしれないが。

だが、その憧れの域を出てないのは明らかだと思う、俺だって目の前で凄いカツコイイものを見せられたら、憧れて場合によっては憧れる。

事実、そういう理由でガンダムや仮面ライダー、未だに好きだし。

と、まあ、いくら言葉を並べてこんな思案しても端から見るとモテている様に見えるらしく、俺としても現状は思わしくない。

この事により、理由は不明だが千冬はむくれて何処か拗ねているように、束にいたっては

「綾、大好き……超好き、凄いい好き！死んでも好き！殺したいくらい好き！！言葉には言い表せないくらい……好き……愛している」

と、上の台詞でも分かる通りヤンデレデレデレた。

この時は確か、また外出禁止時刻ギリギリまで俺の部屋に来て上の台詞を言っていた。

ハイライがない、俗に言うヤンデレ目で可愛らしい笑みを浮かべて。

正直、驚いたけど俺に非があるわけである時は、とりあえず抱きしめて宥めた。

別に恐いとか恐ろしいとかは自然と思わない、むしろそれに変わるように愛しさが沸いてくる。

定期的に束は、ヤンデレモードに入るが、長い付き合い……お付き合いしてから半年しかたつてないが、対処の仕方には手馴れてきて他にもいろいろとして宥めた。

いろいろと言うのは抱きしめたり、ディープキスしたりといろいろ。詳細は聞かないで欲しい、いろいろと大変だったし恥ずかしいから。

ちなみに病ンデレ彼女とお付き合いする場合、第一に相手を理解して信頼して受け止める事、第二に絶対に恐れたり逃げたりしてはいけない、自分も狂って全力で愛せ。

基本的に上に上げた二つの事を守っていれば、刺激的で甘美な激甘カップル生活を送れるが、守らなければ即バットエンド、ナイスボードになる。

その事をよく覚えておいた方がいい……そう俺は最近、結論づいた。

そんな思考をしているのは決闘から数日ほど経った日の放課後。

俺は校舎の隅の方にあるトイレで用を足し手を洗っていた。

このISは男の俺が居ようと事実上、女子高である。

なので、校舎……主立った階には、男子用トイレはなく、用を足すのなら毎回、この校舎の端になるトレイまで行く必要がある。

校舎の端なので、どこから向ってもそれなりの距離があり往復に時間がかかったりするのが難点だ。

けれど、だからと言って態々、男用のトイレを近場に作ってもらわねにもいかないし……ましてや、女子トイレを使うなんて言語道断だ。まあ、入学時には提案されて即効、拒否したけど。なので、現状に我慢するしかないし高望みもしない。高々と、言っでは何だけどトイレの問題だけだし。

「そういえば……」

手を洗い、ハンカチで手を拭いていると、ふとしたことを思い出す。

そういえば……この目と鼻の先にISの整備所があったな。

ISも最強の兵器だが、完璧ではない。以前の兵器みたいに整備はしつかりとしないといけない。

その為、ISを使い学ぶこの学校にも先進国にある軍事基地、兵器整備場顔負けの整備施設がある。

そこには各国、主に日本から選りすぐられたプロの整備士が働いており、年配の男性が多かったのを覚えている。

多いといっても精々、十人弱で、聞いたところによるとISの説明が東は日本語しか使いたがらないので日本語がペラペラの人が多いらしく、皆さん所帯持ちらしい。

そういった男性の人達が働いているから校舎の端に男子トイレがあるんだろう。

「ちょっと、覗いてみようかな」

そんな事をふと思ひ目と鼻の先にある整備場に向って歩く。

俺が整備場に行ったのは、ほんの二、三回。

それも束の説明の付き添いで行っただけで、ものの十分弱しかいた事がない。

なので、今回一人で行くのは始めであり、付き添いで行った時も本

当に付き添いで行っただけで、精々、顔を見せたぐらいで現場の人とは話した事が無い。

だから、この気に話してみたい。

俺と束が流出した新世界の感想とその新世界への本音でもある思いや恨み辛みを。

まあ、いろいろと身に染みるアンチ的批判な事を言われるのも怒りをぶつけられる事も覚悟している。

そんな風に考えながら、整備所へと続く自動ドアを開け中に入る。

中に入ると人影はなく、部屋にはただ静かにキーボードタッチしている音だけが聞こえる。

音は軽快なリズムを保っている様に鳴って、俺はその音がする方向を見てる。

そこには一機のISの前に男性が地面に座り込んでキーボードを叩きながら仕事している姿が見えた。

仕事をしてディスプレイを睨むように鋭く見る男性の姿は真剣そのもので、身の内からは伝わってくる雰囲気は職人といった感じの雰囲気だ。

俺はその真剣な職人オーラに少し圧倒され、どう話しかけようかといつくか考えていると……

「おいっ俺は後から行っていったらどうが、お前らは先に……って、ん？」

入ってきたのは俺ではなく同僚の人だと思った男性は呆れた様に少し強めの口調で言葉を言いかけていたが俺を見ると言うのを止める。そして、男性は訝しげに真面真面と下から上へ俺を見る。

まるで、品定めてをするかのよう。

「お前は……」

「……あ、すみません。勝手に入ってしまった」

問いかけれられ掛けられ何と返事したらよいか分からず、とりあえずこの場に最適で定番の言葉を言ってみた。

「いや、別に謝る事ねえけど。お前は確か……神山綾だったよな？」

「はい、そうです。ご存知で？」

「当たり前だ。ここに働いていて世界で唯一人、男でISを使える男を知らないわけがない。それにお前さんは結構、有名人だしな」

俺の問いに男性からは、ごもつともな問いが返ってくる。

有名人か……まあ、そうだろう。

世界で唯一、男でありながらISを使える存在な訳だし、それを差し引いても束の傍にいるわけだから、例え否応なしにでも有名になる。

望んでこうなったのだから、例え否応なしにでも有名になるのはさほど問題ではない。

だって、有名だったからこそ、こうして話していけそうでもあるわけだし。

「そうか……お前さんが、かあ……今日は気分がいいからってちょっとばかり残業した甲斐があった。折角だ、話したい事もあるしとりあえず、座れや」

そう言うと男性は何処からともなくパイプ椅子二つと簡易型の机を持ってくる。

俺としては元より、そのつもりもあって着た訳であり、別に断る理由もないのでお言葉に甘えて出してもらってパイプ椅子に座る。座ると、男性は自分と俺にもコーヒを用意して向かい側に座る。

「と、自己紹介が遅れたな。俺は吉岡源よしかげんつつつて、IS整備所の最高責任者兼チーフをしている者だ。元は自衛隊の整備士をしていた」

男性の名前は吉岡源さんというらしい。

歳は見た感じや雰囲気から推測するに五十代ぐらいぽい。

顔立ちはいかにも職人といった感じの顔で渋い。

だが、師匠と同じ様に見かけとは違い数言だけ交わしただけだが、フランクな感じもする。

それに元、自衛隊の整備士……自衛隊の人間か。

「う」丁寧にどうも。自分の事は知っているとありますが、神山綾です。以後、よろしくお願いします」

「礼儀正しくって律儀な奴だな。こないだの決闘で戦っていた時とは大違いだ」

どうやら、この間の決闘を吉岡さんは見ていたらしい。

そういえば、ちらほとアリーナの客席に作業服着た男性が居て、見えたのを思い出す。

まあ、あんだだけの騒ぎ起していられれば見られるのは当然か。

「それでどうしてここに、お前さんは来たんだ？」

「少し聞いてみたい事がありました……」

「聞きたい事？」

訝しげに呟き、吉岡さんは少し考え込むような表情をする。

回りくどい聞き方はせず、正直に聞いてみよう。
聞いてみたいと思っっている事を。

「吉岡さんは元、自衛隊の整備士でしたね？」

「ああ……そこから除隊してここに来たんだ。自衛隊よりも遥かに給料が高いし。それにいくら、女尊男卑になりつつあるとは言え、家族を養わななんといけねえからよ」

「そう、なのですか……では、吉岡さんから見た今の世界はどう思
いますか？」

そう問うと吉岡さんは額にしわを寄せて考え込む。

やっぱりいくら、そういう理由があつてEIS^{エイス}学園で働いていても、
今の世界について思う点や考える点があるのだろう。

元、自衛隊所属の人間として、そして、何より男として。
いろいろな思い、不満不平とかがあるのかもしれない。

「正直に言ってもいいのか？」

「はい。正直に言ってもらえると嬉しいので、遠慮なくお願いしま
す」

「そっか……なら、遠慮言わせて貰うが……」

吉岡さんが言うのを唯じっと待つ。

ほんの一瞬の事だが不安だ。

例え、どんな事を言われるのか、いくつか予想しても不安なものは不安だ。

今の世界だけじゃなくてって、ISの開発者である東に対してまで否定的ならどうしようか。

認められて否定せられるなら、それでもいい、俺達はそれほどまでの事をしたのだから。

でも、一方的に否定的だったら、どうしようか。そんな不安も頭の隅では悪循環している。

「正直言うと今の世界は気にいらねえ、腑に落ちないな。ISの出現で男尊女卑の風潮まで出てきやがったし、今の今まで俺達、男が築き上げてきたものを全て一瞬で壊されたみたいで」

言われた言葉は案の定のものだった。

吉岡さんが言っているのは一般的である意味、正解でもある。

男でありながら、今の世界に納得して満足している者なんてまず、いないと俺は思う。

俺個人としてはだが、男でありながら今の世界のありように納得や満足している方がどうにかしていると思う。

「今まで紛いなりにでも、国の平和や守り維持してきたのは俺達、男が大半だ。なのに、ISの存在でそれを忘れさられ、今まで俺達が培ってきたものが奪われてしまった」

「……」

「今ではISという女の力の前に男は奴隷に様な扱いになりつつある。その事が俺は悔しくて気に食わないし腑に落ちない」

そつだ、男尊女卑の時代があり、今の今までそれが少しながらも長引いていたとしても。

今の今まで紛いなりにも、国の平和を守っていたのは、男が大半を司っていた。

だが、それはISの出現により、国防関係の仕事は全て女性に持っていたれ今では独占状態。

男は強制的に戦うという名の守るといふ手段を奪われてしまった。

事実、国防はほぼISへと変わり、戦闘機も活躍しているがISに押されている。

その為、軍には女性の比率が少しずつ多くなっていき、戦闘気乗りなどの男の軍人や自衛隊員は除隊と言ふ名目でほんの少しずつだが減りつつある。

その事が広まり、出来上がりつつある女尊男卑の社会風潮に拍車をかけている。

そう思うと心が痛みそう。

今まで男が築き上げてきた栄光を破壊したのは俺達だ。

俺はやはり、頭の何処かでこう世界がなると分かっているも束を庇護して優先して、今も優先し続けている。

束以外はどうでもいいと思っているんだ、俺は。

今、吉岡さんに言われてそつだと思ひ考えて改めて回りの現状に気づく。

俺は屑だ。

「だがよっ、俺個人としては今の世界やISに不満はあれど絶望も恨んでも妬んでもいねえ。むしろ、ISや今の世界の現状の甘んじて受け入れて受け止めているさ」

「えっ？」

話を聞きつつ、思考を頭の片隅で考えていると驚きの言葉が聞こえた。

てつきり、今まで会ったり聞いた他の男性の様に今の世界やISを恨んで絶望しているとも勝手に思っていた。

けれど、違った。詳細は聞いてないけど、自然と少しずつ安堵感が沸いてくる。

「確かにISによって以前の秩序は破壊された。だが、まあそれは当然でそう物事にはつき物だ。女尊男卑も仕方ないと言えば何だが、仕方ないと俺は思う。今の今まで男尊女卑が僅かながらでも、続いていたからな」

「……」

「それにISのお陰で苦しくもなったがよくもなった面もある。それは言うまでも無いよな」

「はい」

短く簡素に返事を返す。

吉岡さんが言った通りISの出現で世界は激しく乱れたが、それでも何とか持ち応えISを上手く利用している。

ISのお陰で……と言えば聞こえをよくしてしまうが、ISによって数多ある内の少数だが、いくつもの国家間同士の冷戦、いざこざに終止符がついた。

それに不満を言う一部の武器商人紛いの政治家もいるが、それでもISによって争っていた者達と同じテーブルにつき話し合いにより平和を築かれた。

ISが招いた世界や人の世に対する悪影響は多からずあるが、それと同等にISが招いた好影響も少なからずある。ファイファイファイ。テイ。

「それに強力だがISが女しか使えないってのとコアが今だ普及段階で数事態も少なく、少数精鋭だからな。今までよりもかかる金は若干ながら安く人材費も少なくて済む。その分、浮いた金は内政とかに回せているからな。ISってのは悪くもあり良くあり、どっちもどっちだ」

「……」

「だから、少しばかり納得は出来ずにいても恨んだりも絶望も肯定も否定できねえ。

悪い点もあるがいい点もあるからな。まあ、これが俺の今の世界って言うか、ISも含めた今の世界への感想だ」

そう吉岡さんは言った。

…

第十六話 ? (後書き)

というわけでいかかだったでしょう第十六話 ?。

前フリのヤンデレ束は最初はもつと長かったんですけど

この話にあまりいらなないと思い、あの長さと話にしました。

本当はちゃんと書きたかったんですけど、書いた日の体調が思わしくなくて

こうなりました。近いうちにちゃんと書くつもりなので楽しみに。

そして、今回登場した吉岡源さん。割とこういうタイプの人好きです。

あまり、オリキャラを出すべきではないのですが、必要だと思い書きました。

モデルは私達です。ISの原作を読んで賛否両論な。

吉岡さんは今の世界にも、ISにも賛否両論です。理由はとりあえずは作中通りです。

勢いと書きやすい様に書いているので庇護的や擁護的に見えるかもしれないませんが

あくまでも物このキャラは理解力が高く中立、賛否両論な意見の持ち主としています。

話的にも庇護、擁護はしてないつもりですが。どうしてもなってますまっているかもしれません。

私が常日頃、束が一方的にアンチされるのはおかしいと言うのは作中に書いてあるISによって齎された利点から少しばかりはきています。

どうでもいいですよね。

指摘も毎回の如く、大募集中ですが。
なるべく、言葉をオブラートに包んで短めだと助かります。
指摘されて長文だと脅迫されている様に見えてしまうので。すみません。

ちなみに読んでいる皆さんにお聞きしたいのですが。
今、二巻のお弁当の話のオマージュみたいなお話を書いているのですが
東さんと千冬さんの料理を作る光景はありますか？
感想と一緒に聞かせ下さい。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に
聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願っています。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、なるべく感想のご協力を願います。
本当に感想をお願いします！

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十六話 ？（前書き）

前回と引き続き内容的には同じですが深くなっています。

まあ、支離滅裂でむちゃくちゃなのは自覚しています（滝汗）
それとこの小説も低迷期みたいですね。感想が……orz
いろいろと迷っています。今後について。

それではとつぞっ！

第十六話 ？

「だから、少しばかり納得は出来ずにいても恨んだりも絶望もできねえ。悪い点もあるがいい点もあるからな。まあ、これが俺の今の世界って言うか、ISも含めた今の世界への感想だ」

正直、こんな事を聞けて嬉しい。

今まで出合った人達はほとんど今の世界を表立っては恨んでなくても、心の何処かでは深く恨んで妬んでいた。

それがある意味、当然といえば当然なんだけど、やっぱり俺はそれにも腑に落ちない。

だけど、こつこつ吉岡さんの声に偽りは無く、本心だと言う事が分かる。

なら、もう一つだけ、聞いておこう。

「吉岡さんは……」

「ん？」

「東、IS開発者の篠ノ之東についてはどう思いますか？」

今の世界はどう思うかよりも実際はこつちの方が聞きたかった。

今の世界をどう思うか、はあくまでこの事を聞く為だけの前置きみたいなもの。

問いかけると吉岡さんは、「これまた、難しい事を聞いてくんなあ」と呟きつつ言っ。

「そうだな……篠ノ之束、あの嬢ちゃんは……正直に言わせてもら
うと、いいとも悪いともなんとも言えないな。便利な言葉を言わせ
て貰うと賛否両論と言ったところだな。悪いと思うが」

どういう意味なんだろうか？

そんな疑問の言葉が出そうになったが、押えて黙って言葉を待つ。

「世間的な評価的にも賛否両論と言われているが、アレはどっちか
つて言うとは批判的だな。もしくは拒絶的な評価だな」

「……（っ、拒絶のか）」

やっぱり世間的にはそうなんだろう。

賛否両論と言っても、それはよく人が使う建前みたいなものだ。

実際のところ、大多数の人なんてものは賛否両論なんて言う便利な
言葉を並べ本音を醜く隠すだけでだけで結論つけずに曖昧で中途半
端にしているだけ。

確信的な本音の部分では、殆どの誰も彼もが束を恐れ憎み、直視を
躊躇い忌避を選ぶ。

それは束の凄さとも言える美しさに絶望し、己の矮小さを認めたく
ないから。

人というものは、理解できないものを「悪」と呼ぶようにできてい
る。

だけど、悪とえば己の矮小さを認めてしまう事になるから、「賛
否両論」という便利な言葉で留めているのだろう。

下らないな、本当に下らない。

けれど、それが今の世界の中心の中心にいる束への評価。

ある意味、当然の事だろう。俺達はそれほどの事をしており。また、俺達は「悪」でもあるのだから。

「だが、俺が賛否両論というのはちゃんとした理由があるんだ。それは分かってほしい」

「ちゃんとした理由？」

「悪いといったのはあの、ISの公表の仕方だ。アレは過激すぎだな。許される事ではないし、俺もあのやり方は認めねえ……アレが嬢ちゃんが批判される一番の原因だろうな」

「……そうですね」

今でも、白騎士事件の追及は続いている。

もっとも、毎度の如く束の弁論の前に追及されてきた人達は説き伏せられているが。

確かに今思うとなり点やり過ぎだったと思う。

だが、まあ、あの時の俺達にはアレが最善だったのでやり過ぎたと思うだけでその他には何とも思わない。

「それにISが女尊男卑にしたつても批判される原因の一つだな。まあ、正確には拍車をかけたといった方がいいな」

「拍車？」

そう俺が疑問に思い言葉に表すと、吉岡さんは続けて言う。

「その事についても追々、話するのが次に良いと言ったのは、ISによって齎された利点だ」

「利点ですか……」

「そう、利点だ。ISによって世界の技術は何百年も進んだ。それは軍事技術だけじゃなく、ISの技術の転用と応用で医療機器技術を始めとする科学技術が大きく進歩した」

「……」

「それに嬢ちゃんはまだ、悪戯に考えなしにISをばら撒いたわけじゃなさそうだしな。小耳に挟んだんだが、嬢ちゃんは医療技術なんかにも技術協力心だろ？」

「はい、その通りです」

「……そうか」

何か納得したように呟き、俺の顔を見ると吉岡さんは深く考え出した

吉岡さんが言った通り、ISが世界や人の世に齎したのは何も難点だけじゃない。

それと同時に、または反対にISは吉岡さんが言った通りの利点も齎した。

ISの技術転用は容易ではなく難しく、転用できたとしてもほんの僅かだ。

それでも、軍事技術以外にも技術は何百年も進んだ。

それにより、少しでも世界は豊かになった。

技術協力も束はたった一度だけ、だけどした。

師匠と奈々さんにそうする様に言われて、そこまでもっていくのは大変だったが、説得して協力させると束はきつちり最後までやる人間なのでちゃんと僅かながらでも技術協力した。ちなみに何故、師匠達がそうさせるようにしたかと言うと「善意と悪意は平等に広めなければならぬ」ということかららしい。

「そういう事があるからよ、俺はいくらあんな過激な事を嬢ちゃんがして女尊男卑に拍車とはいえ嬢ちゃんを否定できねえし、また、こういった利点があるからと言って肯定もできねえ。だから、ズルイ言い方なのは自覚しているが賛否両論と言うわけだ」

「……そうですか」

安堵を覚えつつ、俺はそう返す。

吉岡さんの声からは嘘偽りが無いのがよく分かる。言葉は本心からのものだ。

批判されながらも、認められると言つのはやはり、いい。聞いていた心地がよく感じる。一方的に批判されるよりも。

「それで……拍車をかけたというのは？」

「おっと、それもだったな」

そんな風に言い、まるでその事を忘れかけていた様な素振りを見せ吉岡さんは話し始める。

「ISが女尊男卑に拍車を掛けたって言ったのは、何もISだけが絶対な原因じゃねえんだ。“あくまでISは拍車をかけた”だけなんだ」

「よく分からないんですけど……」

「そう、焦るなよ。焦るのは若い者も特権だが焦りすぎたら早死にするぞ」

「……分かりました」

「分かればいいんだ。それで、話を戻すが女尊男卑はISが作ったんじゃない。あくまでもそれに“拍車”をかけただけで元からそういう風潮も僅かながらでもあったんだ」

「元から？」

「そう、元からISが発表される以前の世界をよく思い出してみろ。わけの分からないと言ったら言い方が悪いが……バイトとかでわけのわからない待遇とかなかったか？」

と、問いかけられ、ISが出る前の世界の様子を思い出して少し考えみる。

思い返すとそうだったのかもしれない。ISが現れる前から元々、女尊男卑もあった。

いろいろ理由つけて『女はずるい』みたいな言い方をして悪いが、何かと女性は優遇されていた。

例えば、会社では女は定時で帰れるや就職では女性の法が有利な場合のほうが多い現実、主に中小企業等等で、や女性専用車等、いろいろと優遇されていた。

それは子供を生める体という事で無意識に優遇していて、そうなるのはある意味、当たり前前の事だからかもしれない。

けれど、優遇されているからとつてその優遇が何時過ぎ面もあり女尊男卑が形成されつつあったと思う。

優遇されすぎて実際、父子家庭には補助金が出来ないが母子家庭には補助金が出る等のある意味、女尊男卑とも取れる優遇の行き過ぎがあった。

「ありましたね」

「だろ。ISはあくまで“拍車”をかけただけで作ったわけじゃない。そこを履き違えている奴らもいる。ISが開発者の嬢ちゃんだけが必ずしも悪いなんてないんだ」

「……そうですね」

「それにこれは俺の個人的な考えだが、例えISが出現しなくても、遅かれ早かれ時間はかかるが高確率で気づいたら女尊男卑の社会はできていたと思うんだ。それは女尊男卑の風潮が僅かながらでもあり、男尊女卑の時代に行き過ぎた事をやりすぎたからだと思う」

男尊女卑の風潮が長く続いてきた反動として、IS出現以前の日本は女性が少し優遇されていた。

行き過ぎた時代のツケは新たな行き過ぎた時代への風発となる。

男尊女卑だった昔、男女平等と言われながらも偏った優遇をされていた前の世界、そして、ISの出現して偏った優遇に拍車をかけて女尊男卑となりつつある世界。

本当に世界というものの時の流れ、歴史は似たような事が永劫繰り返され続ける。

まるで終わりのないワルツの様だ。そして、永劫繰り返し続け、最後に回帰、永劫回帰する。

この仕組みは俺と束でも変えられない。変えるなら、神や世界、そして自分すらも破壊する様な事をしなければ。

「今から出来上がる女尊男卑を食い止めるなんて無理だろうな。元々から人の世に根強く根付いているから例え、ISを取り除いても無理だと思っ」

「……」

「それにこんな事になりつつあるのは人の世や俺達、男にも責任があるんだ」

「責任……ですか」

「男つてのは極端に本質的に打たれ弱いんだ。心を刀の刃に例えると、鋭く強靱で真っ直ぐで切れ味もいい。だが、一度折れたらそこで終めえだ。中々、打ち直す事なんてできねえ」

「……」

「その分、女つてのは強い。男よりも打たれ強い。刀身が折れても何度も打ち直して不屈の精神と心構えでこんな不甲斐ない男を支えている」

「……」

「それに最近の男つてのは、情けなくもあるんだ。主義や主張ばかり言葉ばかりで行動でなそうとするのはまず、少ない。男は負けたら負けっぱなしだ。いつから、こうなっちまったんだろうな」

吉岡さんはコーヒークップを片手に遠い目をして哀しそうに言葉を漏らした。

吉岡さんの目は古き良き時代を懐かしんで尊んでいる。

この目の感じは確か、師匠も同じ様なのをしていた。

師匠も吉岡さんみたいな言葉を言って同じ様な目と表情をしては遠くを見つめていた。

最近の男は情けなくもある……

そうなの……かもしれない。

皆々、ほとんどの人がISという存在の前に心が折れ、弱腰になっている。

男も女尊男卑をなしていると吉岡さんが言った今だ、何となくだが事が分かった。

「実際、自衛隊にも居た時もISの力の前に逃げた男を何人も知っている。だから、こうなったのも俺達、男のせいでもあるんだよね……。俺も現状に立っているだけで精一杯だし」

再び、吉岡さんは哀しそうに遠くを見ると様に天上を見上げていた。

「その分、お前は凄いよ」

「え？」

突然、そんな事を言われたものだから間拔けな言葉が出てしまった。

「この間の決闘の事だよ。お前の戦う姿勢だけはよかったぜ？後はあの最後の言葉だ……」

『男を舐めるなあああっ！』

そう吉岡さんにあの決闘で言った台詞をニヤついた顔で言われる。

改めて聞いて思うと、小っ恥ずかしい。

あの時は熱くなって、こんな台詞を言ってしまったけど、今聞くと臭い台詞だ。

「……あははっ。お恥ずかしい」

「確かに臭え台詞だがよ。俺はこの台詞を聞けて嬉しかったんだよ。今でもこんな事を言える男がいて、それを体現して更に先へと突き進もうとしているからな。そう意味ではお前はすげえよ」

「そんな事ないですよ。俺は忌み嫌われる世界で唯一ISを使える男として、自分なりに出来る事をしただけですから」

あの台詞やあの行動が自己満足であり偽善なのも自覚しているし分かっている。

けれど、世界で唯一ISを使える男として出来るのはこんな偽善染みた自己満足まがいの事しか考えつかない。

「ああ、やってしまった」、そんな事に対してのある種の罪滅ぼし、下らない。

よくよく考えると俺は束を優先して、それが擁護しすぎとなって「正義」も「悪」も貫けてない。

束を守るなら手段を選ばず、時には犯罪や殺人もいとわず自らの意思で残忍になる、不恰好でも「悪」になり、「悪」を貫き通す。

だが、それ以外はどっちつかずの中途半端な存在だな。

そんな事を考えていると顔に出ていたのか、吉岡さんは「そうか」とだけ言い、他に追求はしてこなかった。

「なら、次はこっちの番だ。お前さんはどうなんだ？」

「何がですか？」

「だからよっ。お前さんは今の世界はどう思うんだ？」

問いかけられ、数秒の間を置いて俺は少しだけ考える。

俺は今の世界をどう思っているんだ？

満足しているのか？ そんな訳が無い

なら、後悔したり絶望したり恨んだりしているのか それもない。
なら、俺は……

「今の世界は俺も確かに気に入らない部分も多からずあり、気腑に落ちません。それに今の世界に満足もしてないです。ですが、そうだからと言って後悔や絶望、恨んだりもしていません」

「で？」

「吉岡さんと同じく、今の世界のあり方を今ある世界を甘んじてでも受け入れて、甘んじて受け止めていますよ。どの過ぎた高望みもしていません」

「そうか」

「極端な話になりますが……もしも、仮に今の世界や今の世界のル

ールが嫌ならルールを作る側に回ればいいだけの事だと俺は思いません」

その言葉を聞いた吉岡さんは、一瞬難しい顔をしていたが、あえて追及も反論も言わずに肯定も否定もせず吉岡さんは静かに俺のその言葉を聞いていた。

今の世界や今の世界のルールが嫌ならルールを作る側に回ればいいだけの事。

これはある種の正攻法であり悪法でもある。極端なのは分かっているが、こういうのがあるのも事実。

それは今までの過去、歴史がそうだという事を裏付けており。開発されたISはある意味核よりも恐ろしい大量殺戮兵器まがもの。簡単に人を殺せる。

作った束やそれ協力した俺達も悪だが、だからと言って世界はこれっぽっちも悪くないなんてない。

本当にこれだけを悪としたいのなら、拒絶し続ければよかったと頭の何処かでは考えてしまう。

今までの様に誰も彼もが束を恐れ憎み、直視を躊躇い忌避を選び続けて。

束の凄さとも言える美しさに絶望し、己の矮小さを認めずい続けたらよかった。

こういった物事には双方に明確なそれぞれの原因がある。

だから、片一方だけが絶対に一方的に悪いなんてないと思う。

ISが開発された時点で受け入れる以外、世界は選択肢がなかったとは言え、受け入れた人の世や世界“も”悪いのかもしれない。

被害者は束だけだなんて主張はしないけど、こう考えていると世界も被害者であり加害者でもある。どちらも悪であり正義だ。

そんな余計な思考に走ってしまい、これ以上深く考えそうなので考えを頭の中で振り払い、思考を切り替える。

「それがお前の感想か……」

「ええ。まあ、感想にすらなっていないと思いますが」

「いや、充分なっているさ。それで充分だ。そうか、そうかつ。くくく」

俺の感想に少しばかりでも納得がいった様子みたいの吉岡さんは天上を見上げ、目を被うように片手を乗つける。

そうしている吉岡さんは微かに笑い声を漏らしている。

聞こえてくる微かな笑い声は嬉しそうで微かに垣間見れる表情も笑っていることが関係しているかもしれないが、嬉しそうにしている。

「吉岡さん？」

「おっと、すまねえ。つい嬉しくなったよ。ISの世界のお陰で世界は変わって一部には生き辛い世の中となったが悪いことばかりじゃなかったと実感できる」

笑いそうなるのを我慢しつつも声色は至極、嬉しそうな吉岡さん。

「IS、篠ノ之束様様だな、おいっ！。ISのお陰でお前みたいな

狂った様になつた奴と会えてよかつた。やっぱり、生きてるってのはいいもんだ。例え辛くてもよおッ」

そう言う吉岡さんは小さな幸せを噛み締めているみたいだ。俺が一瞬一瞬の至福の刹那を味わい尽くしている様に。

吉岡さんはどちらかという批判的だが一方的じゃない。しっかりと悪い点と同時にあるいい点も認めた上でしっかりと批判してくれる。

俺も今日、吉岡さんと会って話ができてよかつた。

そう心ながら喜んでしていると吉岡さんは漢らしい笑みを浮かべながら言った。

「ありがとうよっ」

「こちらこそ、ありがとうございます。吉岡さん」

「どういたしまつた。それと事は下の名前でもいいぜ?」

「はっ?」

「はっ?じゃねえよ。男同士つて言うのはそんなもんだらうが?互いの意見を、本音を少しばかりでも言いあつた仲じゃねえか?。なら、今日からマブダチだらう?」

はつきり言つて反応に困っている。

それはこんな事を言われたのが始めてだったからだ。

高校以前は友達はいたが、それはあくまで学校だけの事で実質、束や千冬以外のちゃんとした友達なんてものは今の今まで居なかつた。

だから、俺はどう反応したらいいのか分からず困っていた。

そんな困っている俺の様子に吉岡さんはあざとく気づいたみたいで言った。

「何も困ることなんかねえよ。突然のかもしれないんがどうってことのない普通の事だ。歳の差なんてかんげねえよつ。今日から俺のお前、綾はマブダチだ。それでいいよなっ？」

「分かりました。これからはマブダチとしてよろしくお願いします、源さん」

「さん付けかあ……まあ、いいがな。年上をどんな形であれ敬うのは大切な訳だし。じゃ、改めてよろしくなっ、綾」

そう景気よく言われた。

と、なると源さんは初めての友達となるわけだ。歳が離れすぎている為か不思議な感覚はするが悪くはない。

そんな風にちよつとばかり物思いに浸るとポケットに入っている携帯が鳴る。

携帯はマナーモードの為にハイブだが、激しく揺れており携帯をポケットから取り出すと電話の様だ。

二つ折りのディスプレイには「篠之ノ束」と映し出されており、源さんに謝りを入れつつ電話に出る。

「はい、もしもし……」

『綾、何処に居るのっ！？トイレにはあまりに遅すぎだと束さ

んは思うんだけど、早く帰って欲しいんだよっ!』

「あっ……ごめんっ」

忘れていた。

元々、トイレに行つてくると言つて束と千冬を待たせていたんだっけ。

やばい、話し込んでいたと言つのは問題ないが忘れていたとは流石に言えない。

電話口の束は声は心配しているのはよくよく分かるが少し大きく僅かながら漏れている。

その漏れているのが聞こえたのか源さんはあえて俺から顔をそらししているがからかう様にニヤついている。

何かそのニヤついた表情を見ると師匠の事を思い出した。

相槌等で返事をしているが電話口の束は相変わらずで、それを見かねた千冬が束の変わりに出た。

電話の後ろ側では、「あぁ〜んっ!ちーちゃん、返してよっ」と束が少し騒いでいる。

「ごめん」

『謝るのは後でいいから早く帰ってきてくれ。束が五月蠅い』

「あはは……了解しました。直ぐに戻りますよ」

千冬の声は気疲れしたような声でまた、束が迷惑をかけたのが伺える。

とりあえず、早急に帰らなければ。

そう判断した俺は、束に代わってもらい、今すぐ変える旨を伝えると電話を切った。

「お開きだな」

「そうですね。これで帰らせてもらいます」

「そうか……たまにはここにもこいよなっ」

「はい、もちろん。じゃあ、今日はありがとうございました。失礼します」

「最後まで変なところで固い奴だな。それがお前のよさ、おもしろさでもあるんだろうがよ」

そう言っただけ源さんは拳を軽く突き出してくる。何の事かと首を傾げていると源さんは言う。

「昔ながらの漢同士の別れ挨拶だ」

「ああ、そうなんですか」

「そうなんだよっ。まあ、今日は俺も楽しかったぜ。それとこれは一人だと事だと思ってくれ」

「……？、はい」

「お前が守りたい人がいるのなら、そいつの事だけ考えて想い続けて何としてでも何をしてでも守りぬけよ。でないと後悔する事になるからよ」

そう言われて合わせ様としている突き出した拳が止まりそうになる。言っていない筈なのに誰の事なのか分かっていてみたいであり、年の功には敵わないとはよく言ったものだ。

そして、その言葉に答える様に軽く拳を合わせると、俺は整備場を後にして東達の元へと帰っていった。

：

第十六話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第十六話 ？。

今回も自論だらけでした。

束さんが主人公の説得によって医療技術に手をかしたというのは私の「こうであつたらいいのになぁ or こうであつたほしい」という願望ですが

その他のIS技術転用で世界はよくもなつたというのはありうる事だ
と思います。

実際、現実社会でも大量殺戮兵器の平和利用もありますし……
まあ、流石に一年とよつとで技術できるというのはありえないです
が大目に見てください。

女尊男卑に拍車をかけたというのは私の勝手な推測です。
ですが、多分この通りだと思います。

ISが女尊男卑を作りと束さんがさも絶対悪だと言っているのを沢
山見たので

本当（？）はこうじゃないのかな？という私の勝手な思考です。

まあ、拍車をかけたと言うのも充分悪いのですが。

あくまでも作つたのではないというのを理解していただきたいです。
遅かれ早かれなりますし。

実際、私達の世界でも近いうちに女尊男卑になるかもしれないら
しいです。

男が打たれ弱いというのもよく私は母に言われてきました。

実際、物事を挫折した時、立ち直りは女性の方が基本的に速い
ですね。

そして、ついに主人公のマブダチが出来ましたっ！イエーイっ！
作中にも書きましたが主人公は今まで学校限定の友達しか居ませんでした。

一夏に弾君がいるような存在はいませんでした。
一緒に遊んだりする様な友達親友はいません。遠慮されていたんですよ。

まあ、主人公の周りが回りなだけに。
ですが、今回やっとできましたっ！めちゃくちゃ歳が離れてますが関係ないです

実際、私にも歳の離れた親友はいますし……
今回は理論的な話をして、主人公に親友を作りたかったんです。
自分とは違う意見を持ち、真っ向から否定しあって絆を深めるようなマブダチが作りたかったんです。

いろいろとむちゃくちゃですが、これだけで私は満足です。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス等、お願いします！

第十七話 ？（前書き）

何とか書けましたがいつもにまして文章が整っていない（汗）

支離滅裂かもしれない（汗）

それは疲労のせいだと思います。最近、疲れが上手く抜けないので。今の私の気持ちは「拙者はもう、働きたくないでござるっ！」ですね。

それは置いといて、では、どうぞっ！

第十七話 ？

綾視点

昼食時、俺達はいつも通り学園の学食を食べていた。

このIS学園に入学して約二カ月半が経とうとしているが案の定、感覚は麻痺していつている。

若干ながら落ち着いてきたものの、相変わらず何処に行っても何をしても、遊園地の人気着ぐるみキャラ並みの視線や注目を集めてしまっているが、最近は然程、気にはならなくなってきた。

それを自覚すると、「ついにかあ……orz」と軽く凹み自己嫌悪をして、慣れというものは恐ろしい事を改めて理解した。

また、少しだけその事を思い出し内心で少し凹んでいたのが顔に出ていたのか、隣で一緒に昼食を食べている束は少し心配にしていた。

「ん？どうかしたの？」

あまり考えていても取りとめも無い事なのでその考えを振り払い気にしない様に言う。

「あ、いや、何でも」

そう言うと納得した様子で束は再び昼食を食べ始める。

何というか食べている様子が何処となくウサギぽく思えるのは感覚がマヒしているからだろうか。

そんな事を頭の隅で考えつつ、俺も箸を進める。

昼食を取っているメンバーは俺と束と千冬のいつも通りの三人。

メニューは三人とも白身魚の和食ランチセット。
基本的に俺達は和食しか食べず、三人同じものを頼んで食べる事が多い。

たまに洋食も食べるが本当にたまにで断然、和食が多い。
それは束も同じでやっぱり、家が神社で和食が断然多かった篠ノ之家での食生活が深く関係しているのだろう。

俺も束も千冬も、和食は好きだが、それでも別にほぼ毎回、三人一緒の食事にしなくてもいいとは思う。

ちなみにどうでもいい話だがこの学食、カレーはあってもシチューはなくそれを知った時、今まで以上にシヨックを受けたのはいい思い出だ。

まあ、シチューがある食堂なんて見た事ないんだけど。

「ん〜ん〜っ！」

最後に味噌汁を味いながら飲み干していると、隣から束の唸り声が聞こえた。

何事かと、飲み干しつつ横目で束を見ると束は綺麗になった食器を見ながら何か難しい顔をしていた。

今日のご飯に何か不満でもあったのかな。いつも通り美味しかったんだけど。

「どうしてんだ？束、何か不満でもあったのか？」

「ん〜不満とは言いがたいんだけど……何というか学食に飽きてきて」

「それはいくら何でも早過ぎないか？」

「そうなんだけど……確かにここの学食は美味しいよ？ だけど、何か飽きてきちゃって。例えるならいくら好きなものでも毎日食べると飽きてしまうのと同じ感じなんだよ」

「んーまあ、分からなくもないが」

俺も束のその気持ちは分かる。

ここの食事は、種類も豊富で栄養バランスや見た目もよく美味しいが。

どんな美味しいものでも毎日食べると飽きるという、人間の欲張りみたいなものがあるから飽きた様に感じるんだろう。

そういう場合はよく、普通の手料理等に行き着く事が多いらしい。

「（手料理か……）」

ここ約二ヶ月半、自炊してない。

篠ノ之家にいた時、篠ノ之のご両親が用事でいない時には、よく作っていた。

その時はよく、束や箒も手伝ってくれて三人仲良く一緒に作っていたんだけど。

また、機会があれば三人仲良く料理を作りたいな……まあ、そんな事は現状では難しいけど。

だったら、久々に手料理でも作ろう。

久々に作りたいというのものもあるし、何により自分が作った料理を親友や大切な想い人に食べてもらいたい。

そして、何より自分の料理を食べもらい喜んでもらって、「美味しい」という一言を聞いたら何よりも嬉しい。

それ一言を聞くのも料理を作る上での醍醐味でもある。

「じゃあさ、明日の昼に俺が三人分、弁当を作ろうか？」

「…………お弁当？」

「そう、飽きたんなら気分転換に。最近料理してなくて久々に作りたいしね」

「弁当？」

とりあえず提案してみると、束と千冬は何か考えはじめ出す。

さて、何を作ろうかな。

見た目や味はもちろんの事、栄養バランスも大切だ。

二人に食べてもらうのなら、その三つに特に気をつけなければならぬ。

そんな事を考えつつ、答えを待っていると……

「ねえ、ちーちゃん。あのさ…………」

「ん？何だ？」

二人は俺には、聞こえないようにこそこそ話をしている。

耳打ちをしていて、俺には聞こえないがまじめな話をしているみたいだ。

みたい、と言うのは、束は束でいつも通りおどけた笑みを浮かべているが、真面目な表情もしており。

千冬も束の話聞いて、いつも通り少し呆れている様だが、今回は珍しく真面目な顔して束の話に頷きながら聞いている。

「えーと、それでどうなの？」

「……それなんだけだがな、綾」

「私達が綾の分のお弁当、作ってきてもいい？」

そういえば、束の手料理を白騎士事件後は作ってもらおう機会が中々なくて食べさせてもらってない。

束は料理が上手だ。

生まれながらの天才という事が関係しているのか、束は誰かに教わるでもなく知識と俺の料理している姿をみただけで料理を覚えた。その上、手際よく、見た目も良く、味も美味しいと三拍子揃っている。

あまり、メンドクサがって作ろうとはしないけど、いざ作り始めると楽しそうに作るので食べさせてもらっている側としても束の料理は楽しみである。

久々に束の手料理を食べてみたいし……弁当を束達に作ってもらおうというのはいいかもしれない。

けれど……

「達って事は千冬も？」

「そうだが……ダメか？」

「いや……」

ちょっと考えてみる。

作ってはくれるのは嬉しい。

だが、千冬とも十数年来の長い付き合いになるが千冬の手料理はこの方、一度も食べた事がない。

そういう機会が今までなかったのもあるが、織斑家では一夏が家事を担当しているらしく、どんな物をどういう風に作れるのか知らない。

そういう事もあり、千冬の料理も食べてみたい。

だが、そうするのは少し気が引ける。

俺には束という彼女がいるわけで……その彼女の前で他の女性の手を食べるといふのが引ける。

と、言うか彼女にも失礼だが相手にも失礼だと思う。

そんな事を思い束にアイコンタクトで「食べてもいいのか？」と言うのを聞くとあっさり、「いいよ」とアイコンタクトで返事が返ってくる。

「いいよ」という返事も返ってきたことだし、束が提案した事だし今回は大丈夫だろう。

正直、千冬の料理はどんなのか知りたいので物凄く食べてみたいのだが、それで束のヤンデレが出たら大変なのでそれを一番、危惧している。

ヤンデレ状態の束は、白騎士事件を起した時よりも何倍も魅力的であり厄介で、心身ともに疲れる。

「分かった。なら、お弁当二人にお願いしようかな」

「ああ、任せてくれっ」

「やったっ！頑張るぞっ！」

お弁当を作る事を二人にお願いすると二人は喜んでやる気満々になる。

何にせよ、久しぶり食べれる束の手料理、初めて食べれる千冬の手料理、どちらも楽しみだ。

彼女がいるのにこんな風に期待するのは変かもしれないし、間違っているのかもしれないが今回は大目に見て欲しい。

「そうと決まれば、ちーちゃんっ。調理室の使用許可を取りに行くよ」

「ああっ」

本当に二人はやる気満々の様子。

そこまで張り切らなくても、と思う反面、微笑ましく嬉しく思う。

となれば……やっぱり、俺も二人の分を作ろっ。

そうすれば、そういうシュチュエーションでありえる自分の分はないといのは回避できるし。

流石に自分だけ作ってもらって、相手はないといのは避けたい。

というか、料理が作りたい。作ってあげたい。

そんな事を思っていると……

「ああ、そっだ。綾？」

「ん？」

「私達はちゃんと自分の分も作ってくるから、綾は作てきちゃだめだよ?」

「いいな……?」

「……はい」

妙な気迫に押されて、俺は頷いてしまう。

釘を刺された。

やっぱり、長年の付き合いからなのだろうか、俺の考えは簡単に読まれてしまう。

付き合いが長いってのはある意味、考えものであるのかもしれない。

ああ……料理をする機会がまた、遠のいていく。

ちくせう……夜にでも何か軽いものを作ってこの衝動を解消しよう。

そんな事を考えつつ、明日の昼を待つ昼下がりがりだった。

オマケ・東視点

綾に弁当を作ると言った翌日の早朝、私とちーちゃんは調理室に居た。

ぶっちゃけ、今物凄く眠たい。

弁当を作る為に早起きをしないとイケないとはいえ、思考は今だ寝ぼけ眼だ。

「眠たそうだな。そんなんで大丈夫か?」

「う、うん。大丈夫」

ちーちゃんに声を掛けられ、寝そうになっていた頭を起す。

早く作るう。私は朝に弱いから考えながら頭を動かして何かしてないと立つたまま寝そうになる。

現に今がそうだ。危ない。

「じゃあ、弁当作ろうか」

「そうだな」

早速、弁当の料理作りを始める。

献立は昨日の内に既に決めてある。

あとは決めた献立のレシピ通りに作るだけだ。

「確かにここは……」

「あつ、ちーちゃん。料理出来たんだ」

「一応はな」

ちーちゃんとは小学校一年からのとっても長い付き合いだけど（小学校や中学校とかの調理実習は絶対参加なのでカウントしないけど）、こうしてちーちゃんの料理している姿を見るの初めて。

料理をしている姿をしている姿を見るのも始めたけど、ちーちゃんの料理を一度も食べた事はない。

作っている厚焼き玉子の見た目は普通に良くて美味しそうに見えるんだけど味はどうなんだろう？美味しいのかな？

見た目とは反対にまずいとかはよくある話だけど……普通に美味し

そんな匂いがしているから多分、大丈夫だろう。匂いだけだから何ともいえないけど。

あっそういうえば、思い出したけど昔、いつくんが「千冬姉の料理は出来れば遠慮したい、本当に普通の味だから」と綾に言っていたのを聞いた覚えが……

「そういうお前は……料理出来たんだっただな」

「一応、ね。乙女の嗜みだよ」

と、言ってもメンドクさくてあまり作らない。

初めて料理を作った時も「料理は何だかんで難しい」と聞いていたわりには案外あっさり簡単にそして、美味しく出来てしまったのでそこで一度、私の中からは興味は失せかけた。

けれど、そこで綾が初めて作った料理を食べて「美味しい」と言ってくれてその一言がその時、何よりも嬉しくて、またその一言を言っただけで偶に料理をする。

そう思い返してみれば、『美味しい』とは魔法の言葉であるとはよく言っただけだと思っただけだ。

たった一言で興味が失せそうだった物事を偶にでもしているのだから。

やっぱり、大好きで愛しの綾に言われたのが一番大きいのかな？

「　　」

鼻歌混じりに弁当の中身である献立を次々と手際よく作っていく。

ちなみに献立は鮭の塩焼きに鶏肉の唐揚げ、きんぴらごぼう、ほう

れん草のゴマ和えに白ご飯という和食ベースにしたバランスの取れた簡単なもの。

今は鮭を焼いて、鶏肉の唐揚げの調理中。他は簡単なもので既に終わっている。

本当は綾の好物であるシチューを作れたらいいんだけど、弁当にするのはとっても難しいし、お昼ご飯かというと夜ご飯なので無難にこの献立にした。

機会があれば、シチューも作ってあげたいと思う。

この献立の中で特に力を入れて手間をかけているのが今、作っている鶏肉の唐揚げ。

これは綾がシチューの次ぐらいに好きな料理。やっぱり、綾も男の子なんだな。

この唐揚げは普通の唐揚げと違い、あらかじめ鶏肉にコシヨウを少し混ぜてからシヨウガと醤油とおろしニンニクを混ぜて作っており、隠し味に大根おろしが適量を使っているから揚げ。

そう、この唐揚げの作り方、味付けは母、お母さんが作ってくれた唐揚げと同じ。

綾はこの唐揚げが好きで。だから、作ってあげたくて私は唐揚げの味と箸ちゃんから教えてもらったお母さんの唐揚げの味付けを思い出しながら作っている。

「……」

こうして、お母さんの作ってくれた唐揚げの味付けを思い出しながら、その味付けの唐揚げを再現する様に作っているのは少し不思議だ。

それどころか、私自身驚きである。「親」への関心がまだ、あるなんて。

正直、関心をなくして「親」の事なんて忘れていたと思っていた。

けれど、いざこうして料理を作ろうという事になり、綾がシチューの次ぐらいに大好きな唐揚げを作ろうと思った時、親をお母さんが作ってくれた唐揚げの味付けを思い出した。

そして、今作っている。その事が私の中では何処か不思議な感じで「親」のしてくれた事を思い出したのは驚きなのである。

やっぱり、これも綾のお陰なんだろう。

あの日、私は確かに親に拒絶された。

それは仕方ないことで同然の事。だけど、あの時の私はそういった事実全てに失望して元々、薄かった両親への関心が無になりそうになった。

だけど、それでも綾がそうなる私を支えてくれてギリギリでも両親への関心を残してくれた。

やっぱり、私の中で「綾」という一つの存在は誰よりも何よりもとつてもとつても大きい。

「ふふっ」

料理を作りながらそんな事を思うとふいに嬉しい声色が小さく漏れる。

ちーちゃんにも持ちかけて、私達がこの弁当を作ろうと言ったのは元々はと言うと私の作った料理を綾に食べてもらって、

「美味しい」と言ってもらいたいという自己満足もあるけど、今までの恩返しという意味もある。

私はISを開発して、世界を変えた。

それに綾は喜んで自ら私と共に居てくれる事を自らの意思で選択してくれたけど、私が綾を巻き込んだのもまた事実。

こんな私でも、私なりにはそんな事に罪の意識は持っているし感じている。だから、ある意味、罪滅ぼしの意味もある恩返し。

こんな罪滅ぼし、恩返しは間違っているのかもしれないし、おかしいのかもしれない。

だけど、私はいろいろな意味で不器用だからこんな方法でしか罪滅ぼしを恩返しを出来ない。

でも、それで綾が喜んでくれたのならとっても嬉しい。

「ふふっ」

料理を作りながらも、この料理を食べて綾が「美味しい」と笑いながら言ってくれる姿が妄想すると、再びに嬉しい声色が小さく漏れる。

ちーちゃんも一緒に作ろうと言ったのは、何となくの気まぐれ。

だけど、作るんだったらちーちゃんには絶対に負けない。

勝ち負けなんてありはないだろうけども、絶対に負けない。

何たって、私は綾の彼女で奥さんのだから。

だから、ちーちゃんには負けないし綾を渡したりなんてしない。

前、綾に「浮気するならちーちゃんならいい」と言ったけどやっぱり無理。

そんなのやっぱり嫌。身勝手なのは分かっているけど嫌なものは嫌。

やっと手に入れた私だけの居場所なのに。

それが失われると考えだけでも気が今以上に狂いそうになる。

綾は私のもので私は綾のも。それは絶対であり、例えばちーちゃん

も綾は絶対に譲らない。

私は綾が大好き、大好き、大好き。綾を愛している、愛している、愛している。

何よりも誰よりも綾だけを優先する。その結果になら、ちーちゃん達に拒絶させるのも構わない。

綾さえ居てくれればいい。綾が居ないと私は私ではなくなってしまいそう。私にとって綾は世界そのものなのだから。

「（まあ、それは頭の片隅に置いて。ラストスパートっ！）」

料理を作りながらもこれ以上、余計な思考に走ってしまいそうなので、その思考を頭の片隅に置いてラストスパートをかける。

兎も角、作って食べてもらうなら、やっぱり「美味しい」と言ってもらえる様な美味しい料理を作ろう。

そう考えるのは当然の事で私も乙女なのだから。

だから、もう一頑張りしよう。

そんな事を考えながら私はお弁当を完成させていくのだった。

…

第十七話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第十七話 ?。

今回は次回への準備ですね。完全に。

今回は二巻のお弁当回のオマージユとなりそうです。

まあ、こういう学園物には弁当関連のイベントは必需だと思うので仕方ありませんね。

オマケは疲れている時に書いたので最後の方や纏め方、締め方が無茶苦茶です。

束分が足りてないと指摘されたので、束視点で束分を補給してみたのですがいかがだったでしょうか？

ヤンデレですね。分かります。ヤンデレ束はここでは至高にして絶対ですwww

ちなみに束さんはお料理が激上手いという設定にしています。

天才なので何をしても出来るけど簡単に出来てしまうので飽き易いという設定にしています。

これは原作で詰まらなそうにしている束さんの表情からきています。弁当の中身が箸と作ったものと同じなのは、姉妹だからという簡単な理由にしています。

親への関心も内心では原作の随分と変わっています。

原作では「そんなの居たっか」ぐらいの認識ですが、

ここでは普通に覚えています。主人公補正といったところでしょうか。

兎に角、もう少し束さんを恋するヤンデレ乙女としてちゃんと書き

たかったですね。
今の私では難しいですけど。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします！

第十七話 ？（前書き）

やっぱり五月病と持病である軽度の鬱病のコンボは辛い（滝汗）

今回の更新でストックがゼロorz鬱だ、京都に（ry

今回の話のテーマは「久しぶりの三人でほのぼのラブ」です。

それを踏まえた上で、それではどうぞっ！

第十七話 ？

綾視点

翌日のお昼休み。

俺達三人は学園校舎の屋上にいた。

普通、高校の屋上といえば立ち入り禁止なのが一般的だが、ここはS学園ではそんなこと一切無い。

むしろ、開放的で美しく設置された花壇には季節の花が咲き誇り、欧州を思わせる石畳が並べられ落ち着いている。

その他にもいくつか円テーブルがあり、生徒が使いやすいようにと整備が整っている。

普段は晴れた昼休みになるとそこそこの数の女子で賑わうらしい。だが、今日の昼休み屋上には俺達以外誰も居ない。

つまりは貸切という訳だ。子供染みているけどこんな広い屋上を独り占めor貸切というのは何となくテンションが高くなりそうになる。

「でも、何で屋上？」

「無粋な事聞くな、綾。学食はいつも通り一杯だったし、手作りお弁当を屋上で食べるといのは定番。ううん、最早お決まりなんだよ」

そういつになくテンション高めに言う束。

定番と言えば確かに定番だ。

そういうシユチュエーションのドラマやゲーム、漫画は多いし。それに仮に学食で食べていたら、いつも以上に注目を集めていたことだし。

この選択は正解と言えば正解だろう。

まあ、それは置いておくとして、今の束もテンションが高いがそれは千冬も同じで、二人とも朝から何処となくそわそわしていてテンションが高かった。

それはやっぱり、俺も昼食を楽しみしていたが束達も楽しみにしていたという事なのだろうか。

「それは兎も角として、さっ早く食べようっ」

「そうだな。時間は限られているわけだし」

左右、少し斜め前に座っている二人の前に弁当が現れる。

弁当は二人とも大きめで中にはそれなりの量が入っていることが伺える。

「はいっお箸。開けてみて」

「ありがとっ。じゃあ……早速」

お箸を受け取り、お箸が三人分ある事を確認しつつ、まず始めに束の弁当から開ける。

弁当の中には、鮭の塩焼きに鶏肉の唐揚げ、きんぴらごぼう、ほうれん草のゴマ和えに白ご飯というなんとバランスの取れた和食ベースの品々が詰まっていた。

見た感じ、かなり手が込んでいるのが分かる。久々の料理という事で頑張ったんだろう。

「凄いね、流石は束だ。どれも手が込んでいる」

「ふふんっ そーでしょっこの天才の束さんにかかればこんな朝飯前だよ！お昼だけど。それに綾に美味しいって言っつて貰いたくっつて頑張っつて作っつてみましたっ！」

自分の料理に自信満々なのか束は胸を張っつてそう言っつ。

変な所で束は素直だな。

後者は普通、恥ずかしくて言えないものだろうに。
まあ、束らしいといえば束らしい。

「さあさあ、食べてみて」

「じゃあ、頂きます」

手を合わせてから、そう言っつとまず始めに唐揚げから食べてみる。

「おおっ、これは……！」

「どっ？」

「美味しいよ」

「えへっ」

素直に感想を言っつと束は嬉しそっつにはにかむ。

弁当なので作っつたから時間がたっつて冷めているがそれでも美味しい。

衣がぱりっとしていてベタついておらず、それほど油濃くない。鶏肉の歯ごたえも良くふんわりとしており、噛むたびに口の中で広がる肉汁は、冷める事を計算し尽くしてか味付けはやや濃いめに感じる。

それでも不思議と後味はしつこくなく、むしろ丁度いい。飲み込むともうもう一口、唐揚げがほしくなるほどだった。

「うん、本当に美味しいよ。結構仕込みに時間がかかっているね。混ぜているのはシヨウガと醤油とおろしニンニクかな？」

「正解っ！流石だね、綾 それとね、あらかじめコシヨウを少しだけ混ぜてあるの。あとは隠し味に大根おろしが適量。はいっもう一口、どうぞっ！」

「へえ、そうだったんだ……あつ、ありがとう」

もう一口、唐揚げを貰いほおぼる。

やっぱり、何度食べても美味しい。

腕は落ちてないようだ。むしろ、上がっているかもしれない。それ程まで、手が込んでいて気合を入れて作ってくれたのが分かる。

「でも、これって……」

「あつ分かった？これはね……お母……さんが作ってくれた唐揚げの味を思い出して作ってみたの」

罰が悪そうに微笑みながら言う束。

やっぱり、そうだったか……

食べた事がある味付けだと思ったら、やっぱり篠ノ之のお母さんの味付けだったか。

「お母さん」と言うのは心の何処かでまだ、抵抗があるのか途切れ途切れだったが、その事を知れてよかった。

思い出しながらでここまで味付けを再現できるとは……それほど束にとつては思い入れのある味なのか。

あの日から半年たった今でも束の「親」の事は覚えている。

それを知れて懐かしい味と美味しい唐揚げを食べよかった、何だか嬉しいよ。

「……綾？へ、変だったかな？」

「いや、そんな事はないよ。この唐揚げ、とっても美味しいよ」

「そ、そう？えへへ」

もう一度、褒めると束は頬を緩ませて嬉しそうに微笑む。

あれこれと心配するだけ杞憂の様だ。

「んっんっ！次は私のを食べてくれっ」

今度は千冬が咳払いして俺の前に弁当を差し出してくる。

蓋は既に開いており、弁当の中身は厚焼き玉子にウィンナー、サラダ、白ご飯という定番を踏んだ献立だがバランスいい。

見た感じはちゃんと出来ており、美味しそうに見える。

だが、肝心なのは味だ。見た目はいいが見た目と反して味は破滅的というはよくあるらしい。

「んぐっ……頂きます」

「何故、生唾を飲み込む？まあいい、食べてみる」

「じゃあ、厚焼き玉子から」

厚焼き玉子を箸で挟み食べる。

こ、これは……！？

「どうだ、綾？」

「うん……その何だろうね」

「口に合わなかったか？ちゃんと味見たんだが……」

「そうではないんだ……何と言ったらいいのか」

「ねえ、ちーちゃん。私も食べていい？」

「あ、ああ、いいぞ」

「じゃあ、頂きます」

コメントに困っていると束が厚焼き玉子を食べた。

「あっ、普通」

「普通に美味しいだろ？」

「いや、そうじゃなくって。本当に普通なんだよ。取り留めてま
ずくも美味しくもないんだよ。だから、普通」

そう、千冬の厚焼き玉子は普通の味なのだ。

束が言う通り、取り留めてまずくもないし食べられるんだけど美味
しいかと聞かれると答え辛い普通の味。

凄い平均値と言うか既製品ばい。どちらかと言うと美味しいが本当
にそうなのかと聞かれると答え難くなる味。

ふと、思い出したが一夏が昔、家に来て料理を教えて欲しいと言わ
れた事があった。

その時に「千冬姉の料理は出来れば、遠慮したい。普通の味だから」
と言っていたのを思い出す。

ああ、何で一夏があんな幼くして家事が上手いのか分かった。そし
て、それと同時に一夏の努力と苦労が目浮かぶ。

束に言われた事がショックな様で千冬は少し目じりに涙を浮かべて
こちらを見る。

「そ、そうなのか？」

「お、美味しいよ？けど、何と言うか……取り留めて本当に美味
しいのかって聞かれるとコメントし辛い普通の味。本当、ごめん」

「あう……」

「特徴がなくてコメントに困る感じかな。卒が無くて隙がないんだ
ろっね、旨味がなくなっているよ。物凄く普通」

「……………」

束の一言がトドメとなったのか千冬は目に見えて落ち込む。

物凄く頑張って作ってくれたのは分かるのだが、本当に普通の味。上手いフォローを出来ればいいんだが、生憎とフォローすればするほど逆に、更に追い込んでしまいそう。

「そう言われるとそうだ。味見した時はそうでもなかったのに」

「固定概念みたいなものだね。第三者の視点も大切という事だよ。ちーちゃん」

「黙れ、お前に言われると無性に腹が立つ。はぁあ……」

自分でも確認の為に食べてそれを自覚せざる終えなくなって、続げ様に束に言われて更に落ち込む千冬。

束は心なしに勝ち誇った表情をしている。まあ、束はこういう事では千冬に勝るものはないしな、勝ち誇る気持ちは分からなくはない。

そういった意味ではそんな風に勝ち誇った表情をしている束は微笑ましいが千冬が可哀想だ。

このまま放っておくなんて事できないしな。

「えーと、ま、まあ、そう気を落とさないで。普通なだけでまずくないから食べられるんだからね」

「だが、普通なんだろう？ふんっ、普通なんて評価されても嬉しくないぞ」

「ふふっ、そう拗ねないで」

「わ、笑うなっ。拗ねてなんかないっ」

拗ねた小さな子供みたいに千冬が言うものだからつい微笑ましくな
って笑いながら言ってしまうと千冬は更に拗ねたように言う。

いつも、凜然としてクールビューティーなのに変なところで千冬は
子供ぼいのかもしれない。

どっちかというのこっちの方が案外、素だったりするのかもしれない。
い。

それを見せてくれているというは信頼してくれているからであって、
嬉しい反面、申し訳ない気持ちになる。

もしも みたいで。

「……まあまあ。頑張って作っていったら美味しくなるよ」

「な、なら……その、あの……今度、私に手料理教えてくれ。普通
なんて言わせないように」

「それぐらいならお安いご用さ」

「あ、ありがとうっ綾」

そう言う千冬の頬は仄かに赤く染まっている。

喜んでいるみたいだが、そこまで喜ぶ事なのか？

そして、喜んでいる千冬とは対照的に束は何処か少しだけ不機嫌そ
うに一人、ちびちび黙々と弁当を食べていた。

何か地雷を踏んだらしい。

千冬は嬉しそうで束は不機嫌。 天気は快晴なのに……乙女心という

のは難しい、男には難解だ。乙女心と秋の空とはよく言ったものだ。

「と言うか今更で悪いんだけど……」

「ん？」

「何で二人とも弁当が一つなんだ？」

本当に今更だが二人はそれぞれ弁当を一つずつ持っていない。他にも一つある気配はない。

量的には二人分を想定しているのか多いがそれでも二人が食べると足りない。

「一つの弁当を二人でつづくのが楽しそうだったから」

そう回りくどい言い方は一切なしで素直にそして、楽しそうに言う束。

それは千冬も同じな様で……もう、何て言っているのか分からない。こんな事なら、やっぱり作っておくべきだった。

そう思った時は時に既に遅しな訳だけだ。

「まあ、そんなに落ち込むな。心配しなくても、ちゃんと二人分をそれぞれ作ってあるんだ」

「そうだよ。私の分とちーちゃん分、あるんだから大丈夫だよ。それに私達、お昼あまり食べないの知ってるでしょ？」

「そうだけど……」

それだけの問題じゃない。

確かに俺の弁当を作ってくれて食べさせられるのは嬉しい。ただ、弁当は一つずつしかなく、それで二人が足りなくなるのは問題外だ。

お昼ご飯は午後を乗り切る大事なエネルギーなのだから。

「そんなに心配するな、綾。大丈夫だから」

「そうそう。私達を心配して優しいところも綾のいい所だけど心配しすぎはよくないよ。あんまり心配する様なら……」

「？」

「はい、あーん」

「はっ!？」

「なっ!？」

驚きの声を発したのは俺と千冬。

束は弁当のおかずである鮭を一口サイズにして箸で掴むと零れないように端の下に手を引き、こういうシュチュエーションの定番である『あーん』をしてくる。

なんてつこたい、そうだよこういう面白いシュチュエーション、束が見逃すはずない。

ああ、やってしまった。

本当にやってしまった。

簡単に予想ついただろうにどうして予想つかなかったんだ。浮かれてないのか？

まあ、なんでもいい。今は目の前のコレを上手くそして、効率よく乗り越えなければ。

正直に言つと千冬の手前、食べていいのか悩んでるだけである。

「ほら、早くつ。落ちちゃつよ。食べて？」

「くつ……分かった」

「ふつつほら、あーん」

「……あ、あーん」

抵抗しても結局、食べる未来は回避できないと判断し素直に食べる。状況に流されているが下手に断る事も出来ない。

ヘタレな自分を呪うが束にももう少し、状況を考えてほしかったと思う。無駄だけど。

「あつ、これも美味しい」

「でしょ からあげの次に自信作なんだ」

この鮭の塩焼きも唐揚げに負けず劣らずで美味しい。

焼き加減も丁度で塩の量も俺の好みに合わせて作ってくれているのか、丁度いい。

そんな風に考えながら味わって食べていると束も同じ様に鮭を食べているのだが、何故だか嬉しそうにしながら食べてる。

料理の品を褒められた事だけが嬉しいのではないみたいだ。

「どつしたの？」

「ふふっいや、ね。間接キスだな〜と思って」

「んなっ!?!」

鮭を飲み込んでいなかったら、危うく喉に詰まりそうになった。なんて事を言うんだ、束!状況を考える、状況を!それと嬉しそうに箸を舐めるな。はしたない。

「ずるい……」

「えっ?」

「ずるいぞっ!綾ッ!わ、私のも食べッ!」

何に対して何で怒っている(?)のか分からないが、千冬は照れた様に顔を仄かに赤くさせウィンナーを箸で挟んでこっちに持つてくる。

何か束に対抗意識を燃やしてらっしやる。

それに照れて恥ずかしいのなら、やらなければいいのでは?

まあ、そんな事、今の状況では火に油なので言わないけども。

「わ、分かったよ。とりあえず、落ち着いて」

「分かっている。ほ、ほら、あ、あーん」

「……あーん」

抵抗なんて時間の無駄なので大人しく口を開けてウィンナー食べさせてもらう。

流石にこれには素材がいいのか美味しかった。まあ、焼くだけだし、

甘味が無くなるなんて事はないな。

食べたのはいいが、「あーん」出来た事が満足なのか千冬は束に勝ち誇った様な表情をする。

おいおい、俺が火に油注がなくても勝手に火に油注がれているじゃねえか。

「むつかあ〜！綾ッ、もう一口行くよッ！」

「アホッ、出来るか。お一人様一回だけだ」

「むう〜っ！綾の意地悪ッ！」

対抗意識を燃やそうとする束を宥めると拗ねる。

はあ〜奈々さんに散々、言われたけど女性の扱いというのは本当に難しい。

ちなみにむくれて弁当に手をつけてない束とは反対に千冬は今だ、満足そうに何食わぬ顔でお弁当をゆっくり食べている。

「はいはい。ほら、束も食べて」

「ほつといてよ。お弁当食べたいんだったらちーちゃんの食べてればいいじゃん」

本気で拗ねている。

このままでは埒が明かない。

お昼ごはんもすっかりと食べさせないといけないし。

早い気もするが最終手段を使うか。

「束」

「……………何っ?」

ツケケンしている束をこっちに向けさせ……………

「はい、あーん」

「……………へっ?」

俺は箸で一口サイズの鮭の塊を箸で掴み「あーん」をして束に食べさせようとしている。

突然の突拍子もしもない行動に束は間の抜けた声を出していた。

「だから、ほら、あーん」

これが俺の言った最終手段だ。

大した事の無い最終手段だが効果は抜群だ。

ほら、この通り……………

「あう……………あ、あーん」

多少ぎこちないながらもそう言って口を開け、束は鮭をほおばる。

その頬が仄かに赤いを見ると、恥ずかしそうに照れている。

束は攻めるのには強いが普通に攻められるのには弱い、つまりは受けという事だ。

照れている表情はそうされた事が嬉しそうで頬が緩みきっている。

「これで機嫌、直してくれるかな?」

「うんっ」

とびつきりの頬が緩みきった嬉しそうな笑みでそう言う束。
機嫌が良くなって何よりだ。本当に。

下手したらヤンデレ化しかねない状況だったし。

といった感じで、その後も束や千冬に「あーん」させてorして等の無限ループに陥りながらも。

やっぱり弁当は自分も用意するべきだと痛感しつつ、面白おかしくそして、楽しく過ごせたいつもりとは少し違ったお昼を満喫したのだ。

…

第十七話 ？（後書き）

というわけではいかがだったでしょうか第十七話 ？。

今回は完全な二巻のお弁当シーンのオマージュですね。

原作を参考にした為、描写等で似ている部分が多々ありますがご了承を（滝汗）

前書きにも書きましたが今回の話のテーマは

「久しぶりの三人でほのぼのラブ」です。

最近は漸く束さんがヤンデレヒロインをしている為、

どうしても千冬さんが空気といか蔑ろになるので今回はヒロインチックにしました。

束さんのデレも書くのはやっぱり楽しいですが、久しぶり書く千冬さんのクールデレも書いていて楽しかったです。

束さんはデレさせすぎたwww

箸舐めるとか、ちよつと変態チックwww

勝手に指が進んでるので仕方ない。でも、書いていて楽しかったです（性的な意味で

千冬さんは原作でも料理できると思っています。

定番の料理の腕は破滅的等といったそんな記述、私が流し読みしている内には見当たりませんでしたし。

設定でも千冬さんは「家事が苦手」として書かれていない為、一応は料理できるという設定にしました。

千冬さんの料理の腕は物凄い平均値です。

厚焼き玉子に到っては物凄く平均値、普通の味で何とも言えない普

通の味なんですがね。

ちなみにこの料理の腕の設定はDies iraeを知っている人ならピンと来る人物がいる筈です。

器用貧乏で電撃バチバチ的なアノ人の事がwww

話のオチというか締めについてはすみませんでした(汗)

完全に失速して墜落しました。ちゃんと書けばよかったです……書いたらこれ以上に長くなるのでやめました。内容も似たような事が永劫繰り返されるだけです。

言い訳染みた事を言うと言った時はかなり精神的に疲れていたのです。その性もあるかもしれませんが(滝汗)

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いしますっ！

第十八話（前書き）

今回から話の中では六月です。

一学期もそろそろ終わりですね。

それではどごぞっ！

第十八話

綾視点

六月。

日本で言う梅雨の季節に入った。
連日、雨は静かに降り続けている。

偶に振る雨の日は好きだが、俺は梅雨という季節が嫌いでもあり好きである。

嫌いな理由は連日、雨は降り続いて、空気はじめじめと湿気ており洗濯物が乾き難いからである。

所帯染みた理由だが、もう一つ嫌いな理由は親に捨てられたのが連日、雨が降り続いた梅雨の雨の日だからだ。

あの時は流石に堪えたのかもしれない。

雨がふって憂鬱な気分だったのに帰ったら、居る筈の母は居らず、雨が激しくなり雷が鳴り幼いながらも不安な気持ちで両親の帰りを待っていたら、何の前触れも無く捨てられたのだから。

でも、その嫌いなのと同時に梅雨が好きな理由もある。

束と初めて会ったのもこんな静かに雨が降る梅雨の雨の日だったから。

今となつては、両親に捨てられた嫌な日となつたのも、束と初めて出会ってちょっぴり好きになった日でもあるので、どっちもどっちだ。

六月というのは一学期の折り返しみたいない時期であり、今月の最終週に『学年トーナメント』なる物が企画されているらしい。

『学年トーナメント』と言うのは各クラスから数人の選出を選び戦う、

トーナメント製のスポーツ競技みたいなものだ。

期間は三日と短く設定されているが、学年末テストの次に重要な行事であり、現段階での生徒のISの稼働率や熟練度を実践形式で図るものとなっている。

ISの普及自体まだ、満遍なくは行き通っていないが、各国の政府高官が見に来るらしい。場合によってはスカウトもありうるらしい。形式としては個人戦で生徒にしたら、己のクラスの強さをアピールするみたいなものらしく各クラス、IS実技で優秀な成績を収めている生徒がクラスの選手として選ばれている。

ちなみに俺と千冬も既にトーナメントに出る事は決まっている。束の名前も拳がったが、束の一瞥によってなくなった。

そんな学年末テストの次に大事なトーナメントがあり、それに向けて頑張っている為、この梅雨である六月は日を追うごとに緩やかに慌しくなっている。

そんな事を頭の片隅で考えている現在は、いつもの如く、授業中である。

ちなみに三時間目で科目は家庭科。

IS学園がいくら、IS専門の特殊国立高等学校とはいえIS関連以外の普通高校が行うような授業もきちんとなる。

ただ、IS関連授業があり、その上通常の授業もある為、月曜日から金曜日までは回りきらず土曜日も午前まで学校、授業はある仕組みとなっている。

そして、肝心の授業内容は家庭科の調理実習。

実習の前に簡単な注意事項と調理の手順を先生に振り返って言うってもらい確認して調理実習に取り掛かる。

調理実習で作っている料理は、メインは鮭のムニエルで他は厚焼き玉子とうすあげと小松菜の炊いたん、お味噌汁（豆腐とわかめのも）と白ご飯という献立の料理。

品数が多く、手間がかかる物もあるがそこは各班、一人は料理が出来る人が運良く配置されており、何とか上手く言っている。

「あの……神山君。これはこれであってるの？大丈夫？」

「あ、ああ……それで合ってる、大丈夫だよ」

「ねえねえ、悪いんだけど少しこっち手伝って？今一つよく分からないから」

「……分かった」

各言う俺もその料理できる人の一人でありなし崩しに班長という立場にいる。

班長といってもただの飾りで、特にコレといった仕事や役割は無い。ただ、俺がいるこの班では料理が出来るのが俺と束ぐらいしかおらず、他はあまり作った事の無い人達ばかりなので教えながら作っているので少し大変である。

俺と束は同じ班なのだが、束が誰かに丁寧に教えるなんてまず、ありえないので俺一人で教えている。別にそれでもいいんだけど。

千冬はと言うと別の班で調理実習をしており、料理経験者なので指示を出して作っているのだが……

「エプロン姿の織斑さんっ、くう〜！」

「いいっ！実にいいっ！ぜひ、玄関で裸エプロン姿で三つ指突いて帰りを待っていてほしいっ！」

「分かるっ！本当に最高よっ！美人で成績優秀、おまけに料理も出

来る！どれだけスペック高いのよっ！」

「織斑さんのエプロン姿……はあはあ（*´、*）」

調理しながら横目で見たけど正直、いろいろな意味で千冬の班の子達は怖い。

皆、千冬のエプロンを付けて料理している姿に恍惚な表情を浮かべ見惚れており、一部悶えたり問題発言している人達がいる。

千冬を取り囲むように見ており、小さな声であんな会話をして、何とか空気はピンクで百合の花が千冬達の周りに見える様な気がする。

俺の班の子も手を止めて見惚れており、他の班にそんな感じの子がちらほらといたりする。

千冬はそんな事は一切、気にしてない……気にしているけど気にしないようにして指示を出して黙々と調理している。

むしろ、本当に集中しているのか周りの雑音は聞こえてない様に調理をしている。ちなみに今、千冬が調理しているのは厚焼き玉子。

あの弁当の時のリベンジと言わんばかりに物凄い集中力で何度も味見をして作っている。あの弁当の様な同じ失敗は二度としないという事だね。

それにしても毎度、思うけど本当に怖いぐらいの凄い人気だな。

特に女の子からの人気が高い。中学校の時にも女子から圧倒的な人気があったけど、この実質女子高のIS学園に入学してからは更にその人気に拍車がかかっている。

いつか、千冬、女の子から愛の告白されたりするかもしれない……あまり、変な事は考えないでおこう。

そんな事を考えている事を読まれたのか、千冬から鋭くキツイ視線が痛いほど突き刺さっている。

「にしても、神山君。本当に料理が上手だね。クラスで一番じゃないかな？」

「そうかもつ。家事が特技って言うだけはあるね。家庭的ない旦那さんになるよっ！」

「……あ、ありがとう……？」

そんな事を言われ、意識をこちらに戻すと上手く反応しきれず語尾を上げて、疑問符をつけた様に言ってしまった。

何かよかった、「家庭的ない旦那さん」と言われて。

此間は主婦と言われて、何か微妙に傷ついた（後から言われたには、主婦ではなく主夫らしいのだが。

料理が上手いと言われたがそんな事はない。俺よりも上手い人は回りに沢山いるし、現に他の班にもちらほらという。

クラスで一番とか言われているがそんな事はない。別に謙遜している訳でもないけどそうだ。

まあ、褒めてもらったのは嬉しい。

そう言われると努力してきて努力し続けているのが報われる気がするから。

ただ、やっぱりこんな言い方をされるのは微妙なというか気恥ずかしい感じがする。

別にそんな事を言われる為に上手くなったのではなく、筈、一番に束に俺の料理で喜んで欲しくて努力（？）したから尚更な気もする。

こんな感じで俺や千冬は受けはいいのだが、残る束は……

「……」

いつも通り、無表情&無口で束は一人、黙々と俺が与えた仕事をしている。

仕事をしているというのはいい事だ。

仕事を与えてない初めのうちは何もせず、束は俺が実習している姿をぼーっと楽しそうに見てるだけだったからな。

だが、仕事をし始めれば本当に一人黙々と与えた仕事をしているだけ。

無表情&無口からなのか、束の周りだけ空気が冷めきって誰も近づかせない雰囲気を放っている。

他人嫌い……いつもの授業でもこんな感じだが、今日は一段とその他人嫌いが強い様を感じる。

「何？」

「いや、何でもないよ。ちょっと様子を見ただけ」

「ふふっそうなんだ」

けれど、束に視線を向け束の視線を向けると俺には優しい笑みを向けてくれる。

俺達には普通に様々な表情を喜怒哀楽を見せてくれるが、俺達以外には特別なことがない限り常に無表情&無口で対応し、態度は拒絶的。

こればかりは変わらないいくら、束自身が変わろうと努力しても中々難しい。簡単に直れば今まで苦労はしない。

けれど、変わらないと言ってもほんの少しは変わった、よくなった部分もあるからいい傾向なのかもしれない。

「ただ、我が俣を言わせてもらおうと束には少しでも社交性を身につけて俺達以外の他人と少しでもいいから接してほしいと思う。そんな事を思っている……」

「あつ、篠ノ之さんも料理上手っ！」

「おっ、本当っ！凄いい、どれも美味しそうっ！ねえ、凄いいよっ！篠ノ之さんっ！」

「……」

「ありやりやゝ無視されちゃった」

「ドンマイっ」

班のメンバーで気さくな子を先頭にして束に話しかけてくれた。話しかけられた束はいつも通り、話しかけられた事すら認識してないかのよう無視して黙々と与えられた仕事を続けていた。けれど、話しかけてきた気さくな女の子は無視された事を気にもせず、笑って楽しそうに残念がって別の子に励まされていた。

突然の事に俺は内心で驚く。

束に話しかけてくる人間なんて俺達以外普通、特別な用事がない限りいない。

それに一番驚きなのが彼女達の反応だ。

普通なら無視されればむっときたり怒ったりするだろうが彼女達は残念そうにして楽しそうに笑っただけだった。

正直、束が話しかけられいつも通り無視した時は内心かなりドキドキした。また、トラブルの火種になるんじゃないかと。

でも、そんな事はなく、直ぐに起こりうる事態の対応にへと変な気を張っていただけに内心ではかなり気抜けした。

「ねえねえ、篠ノ之さんっ！」

「……………何？」

「うあゝ凄い間。まあいいや。それでね、篠ノ之さん？料理教えて？というか一緒に作るっ？」

「えっ？」

きよとんとする束。

突然の予想してないことに今一つ上手く対応できてない様で珍しい反応だ。

「あっ！私も私も！」

「えっ？ええっ？」

「ねえ、教えて？」

「あう……………ちよつと」

突然の予想してない事に束はいつもの無表情を少し崩し慌てふためく。

珍しい様子だ。俺達以外にこんな反応をするなんて。

教えてと言ってくる彼女達には束を利用しようだとか、束を悪い意味でどうこうしようだとかの下心は感じられず。

表情から感じ取れるのはこの時でも良いから仲良くしたいという事。

つまりは下心や打算のない素直で単純なこの時だけでも仲良くしたいという思い。

束は他人の心や心の動きに人一倍異常なほど敏感で下心や打算的な人を即座に見抜き、そういう人を束は極端に嫌い拒絶する。

逆に束は下心や打算のない素直で単純な人が無意識に好きで、そういう風々に接してこれると束は心なしか弱い。

まあ、弱点……みたいなものだ。複雑にして案外単純な。

「りよ、綾つ……どうしたらっ」

状況に弱点をつかれ、周りには気づかれない様に少し崩し慌てふためいて束は俺に助けるを求め。

本当に珍しい光景だ。この状況でいつもみたいに自分一人で考えて自分で一瞥吐いて等の事態の対処はせず、

俺に助けを真つ先に求めて、人前でこんなにも崩し慌てふためいているのは本当に珍しい。

束には申し訳ないが少し面白い。俺達以外の人前でもこんなにも人間味を出しているのは。

面白いし、この状況はいい傾向かもしれない。上手く事を運ぶことが出来たら少しはクラスの人も打ち解けるかもしれない。

なら、俺がする事は

「ほら、皆もこう言っている事だし頑張ってみたら？」

「えっ……でも」

「不安がる気持ちも分かるけど束は少しでもいいから変わるんでしょ？なら、不器用でもいいから頑張ってみたら？」

「うん……綾も傍に居てくれる?」

「ああ、もちろんだとも。傍にいるよ」

「うん、綾がそうしてくれてそう言ってくれるなら頑張りますっ」

こそこそと話し束は決意を決めた様で小さく意気込む。

今だ、「綾が」とは言っているがまあ、よしとしよう。

どんな動機や事であれ、しないよりはいいから。

「……了解しました。一緒にしましょう」

「やった!なら、さっそく。一緒にこれをしよう?」

「……はい」

「これってどうするの?」

「……それはですね」

二、三人の輪に囲まれかなりぎこちないながらも一緒に調理したりする束。

幸運なのかもしれない……こんな気さくな子達がクラスメイトとして近くにいてくれて。

束もこの場限りだけでも頑張ってみようと思っている様でやっぱりまだ、心を許してなく無表情を保っているがたまに崩れて心なしか少しだけ楽しそうにしている様に見える。

束も頑張っているという事だ。ほどほどに。

何と言うか気持ち的には、内気だった愛娘の一人立ちを感傷的にな

りながらも喜ぶ父親の様な気分だが悪くはない。

これもまた、至福の刹那。

東と一緒に味わう至福の刹那もいいけどたまにはこういう一味違った至福の刹那もいいと思える。

ああ、いつまでもこいう何気ない楽しい一時刹那を不変になるぐらい味わい続けたい、思う存分味わいつくしたい。

「何ぼーっとしているの？ほら、神山君も来て。班長なんだから、そんな所でぼさーっとしているのはダメだよ」

「あっ……うん」

「ほら、綾も来て？ほいで、一緒に作るう？」

「うんっ」

ぼっーと東の他の子達と一緒に料理している光景を微笑ましく思いながら見ていると少し注意されてしまった。

注意されて東達の元へ良くと一緒に調理実習をして、その作ったのを元々から決まっていた今日のお昼ご飯として美味しく頂いた。

「ほんのちよつとだけだけど私、楽しかった」

「そうか……それはよかったよ」

東は俺達以外の他人とほんの僅かでも打ち解けられた様でその事を嬉しく思う中々、充実して満たされた一時となった。

…

第十八話（後書き）

というわけでいかかだったでしょうか第十八話。

今回は繋ぎの話ですね。

六月に入っているいろいろと伏線を張ってみました。

原作にあるあのイベントのプロトタイプをみたいなものなんですけどね。

そして、今回の見所は千冬さんが百合モテモテじゃなくて

束さんが頑張った所ですね。

前に束さんがハブられたのは努力不足だと指摘されたので少し努力してもらいました。

と言っても「綾が」と言っているからあんまり意味はないように思われますが

それでも昔と比べるとかなり頑張りました。

何と云うか沢山の人に囲まれて楽しそうに作業している束さんもいかなと思いつながら書きました。

まあ、原作のとは乖離していますがこのままにして最後は原作に少しだけ近づけます。

それと刺激や怒りの日分が足りないとの声がありますがもう少しだけ待っていて下さい。

6月の最後には両方入るのでそれまでは待っていて下さい。

いろいろとまだ、何か言っておきたいのですが時間がないので
気になる点などがありましたらお気軽に感想と一緒に言ってください。
い。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でもいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いしますっ！

第十九話 ？（前書き）

活動報告でも書きましたが五月十日は私の誕生日でしたw
また一つ歳を積み重ねたと思うと何やら感情深いですねww
ちなみに私は十日で十七回目の17歳になりましたwwいい歳にな
ったww

それでは本編をどうぞっ！

第十九話 ？

綾視点

学年トーナメントまで後、四週間強まで迫ったある日の放課後。

「しんどっ」

俺は一人、訓練用ISをしまっ格納庫にいた。

ここまで一人で運んで運んできたのだが、しんどいし訓練機を運ぶIS専用のカートは重かった。

訓練機はIS専用のカートで動かすのだが、ある程度科学の力で補助されるとはいえ使う動力は「人力」である。

うちの班は、必然的に唯一男である俺がメインに運び、一日の授業の終り六時間目という事もあり、運ぶのが遅い班の分も序に運んだ。自分の班の分も入れて計四班分。

女子はみんな力仕事は男がして当然だと思っているし、そうでなくとも男性の立場は弱くなっている。

元来、男が力仕事をするというのが古からの仕来りみたいなものであり、特に日本ではそうだ。

それに俺は力好きだしそれで何かといった問題はないから別にいい。頼ってくれるというは中々、男として気分がいい。頼りがいのない不甲斐ない男と思われるよりは絶対がいい。

だが、流石に四班分は疲れる。

時間が時間なだけに千冬や束は先に帰らせているが、少しゆっくりしたい。

今日は雨は振ってないが何処かどんよりとした天気で明日の朝には雨がまた降るらしい。

日本の六月の気候というものはジメジメとしいて湿気が多く、蒸し暑い。

「はあ〜暑い」

四班分もカートで運んだ為、全身汗だくで暑い。

まだ、ジメジメとして湿気が多い為か汗が気持ち悪く感じる。

俺は暑いのは嫌いだ。特に夏とか大嫌いだ。何であんな暑い季節があるか分からない。

暑さでやる気やら、いろいろとやられるので尚更、大嫌いだ。

「よお、綾。ダレタ顔してんなあ」

「……ああ、源さん」

休んでいると格納庫に源さんが現れた。

いつも通り、作業服を着て首にタオルを巻いて職人オーラが出ている。

格納庫に来たのは源さんだけじゃなく、他にも数人の人がいる。

「疲れた顔をしていますね。神山君」

「……橋本さん」

源さんの次に話しかけてきたのは橋本さん。

源さんと同じ様に作業服を着て首にタオルかけている。

雰囲気は優男みたいな雰囲気。容姿もメガネを掛けており、文学系の顔付きで優しい表情を浮かべているが実は気性が荒い。

元々、橋本さんは学生時代ヤンキーで荒れていたらしく、源さんにポッコボコにされて更生して整備士として自衛隊に入ったとか。

本当に気性が荒く、源さんに紹介してもらって他の整備士の方々と初めて会った時に源さんに質問したのと同じ質問をする。

橋本さんは今の世界がどうも気に入らないようで、橋本さんはキレてあまりにも暴言混じりだったのでついには少し頭にきて橋本さんの自論の欠陥にツツコムと殴られ、殴り合いの喧嘩となった。

その時は源さんや他の人に止められたのは今となってはいい思い出だ。

橋本さんはかなり否定な意見だったがそれで今の世界の在り方を甘んじて受け入れていた。けれど、嬉しかった。

どんな形であれ、自分の思いをはっきりと素直にぶつけてくれて。俺も東と同じでやっぱり、自分に素直で分かりやすい人の方が好きだ。

その後は源さんが仲介に入ってくれて和解はして、今では仲のいい知り合いとなったのは今となってはいい思い出だ。

「いや、ちよつと訓練機を運んでいて」

「これ、全部か？」

「ええ、まあ……一応」

「うわあ〜大変なことって」

「バカな人ほど死にやすいとはよく言ったものですね」

源さんには呆れられ、橋本さんには物凄く失礼な事を言われた気が

する。

「いいじゃないですか。好きでやったんだから」

「まあ、別にいいけどな。お前の事だ自分からやりについてたんだろ？」

「……まあ」

「やっぱりな。頼りがいのない男と思われんのは男としての恥だからな。どんだけ時代が変わってもな。相変わらずいい漢だぜ、お前さんは」

「源さん……」

源さんも同じ考えの様だ。

ちよっぴりジーンとしている。

じーんとしているのに橋本さんは……

「そうですね。頼りない男なんて男（笑）みたいなものですからね」

「橋本さんエ……」

悪い意味でいい感じに雰囲気をそげぶした。

何気に橋本さんは毒舌だ。毒舌で言い回しをムカつく言い回しをする。

困った大人だ。

「それで源さん達はお仕事ですか？」

「おうよっ！学年トーナメントだったっけか？アレに学生共は気合入れてるからな。それにあわせて俺達も機体を整備して万全にしないといけねえからな」

そう言っつて源さん達は格納庫にある機体を見て目視による簡易点検を行う。

訓練機は殆ど所々人間で言うところの掠り傷みたいな小さな傷がはいっている。

今日は実戦形式の模擬戦闘訓練を外にあるアリーナで行っていたからその性だろう。

「ああ〜結構、傷いつてんなあ。バランスーも狂っつてそうだな、こりゃ」

「大事に使っつて欲しいものですね」

「橋本、そりゃそうだが俺達が整備した機体をこんなになるまで使っつてくれるんは整備師冥利に尽きるつてものだ。こんだけされたら整備し甲斐があるだろう？」

「相変わらずですね、貴方は。何処か変態チックですよ」

「うるせえ、テメエにはいわたかねえよっ、この毒舌が！整備師の鏡と言えっ」

「はいはい、そうですね」

主に源さんと橋本さんが雑談しながらも整備士の皆さんは簡易型の点検を続ける。

その光景を俺は適当なところに腰を降ろして座って眺めていた。

早く帰ればいいんだけどやっぱりまだ、体の疲れがあまり抜けてなくもう少しここで休むことにした。

「ふう〜……」

「本当に疲れてんな。汗だくだし……風呂でも早く入れ」

「風呂ですか？シャワーじゃなくて？」

「アホ、そうだ。シャワーもいいが日本男児はやっぱり風呂だろ。それに風呂入ったら汗で気持ち悪いしのも取れるしそれにシャワーじゃ体臭は一時的に隠せても落とせなねえからな」

「そうなんですよね。本当は俺も風呂入りたいしお気遣いは嬉しいんですけど……源さん俺の置かれている現状忘れてます？」

「現状？……あつ、すまん」

思い出した様で源さんは軽く謝る。

俺も本当言つとお風呂に入ってゆっくり湯船に浸かりたい。

だけど、俺が置かれている現状はそんな事は許してはくれない。

IS学園には大浴場はあるが実質この学校は女子高な為、俺が大浴場をいろいろと問題が発生する。

事実、一度時間をずらして使用してもいいという案も上がったが、結構な数の生徒から異議申し立てがあつたらしい。

何でも『私たち後に男子が入るのなんて、どういう風に（私達が）お風呂に入ったらいいのかわかりません！』だそうだ。

確かにそうだよな、男が自分達が入った湯船に入って何かするとか

考えたりでもすればそんな意見が出てくるのは当然だろう。
篠ノ之家に居た頃にはあまり気にしなかったけどこっぴつ反応も当然普通なわけである。

逆に女子の前の時間　という編成でも同じ様に結構な数の生徒から異議申し立てがあつたらしい。

『男子の後のお風呂なんてどういう風に使えばいいんですか!』とこれもごもつともな主張だ。例外がない限り普通、年頃の女の子が男が使った湯船に浸かりたくないだろ。

ただ、この主張なら……なんか別の意味合いがありそうでこっちはある意味では怖い。

とまあ、こんな二つの異議申し立てがあり内容もごもつともであり。たつた一人の為に使用時間が割り振りするのは無駄が多くいろいろ問題があるということで、俺は大浴場を一度も使った事がなく、シャワーで済ませている。

余談みたいなものだが、束が何か手を打とうとしそうだったが、それは全力で止めた。

束の事だから、学校脅して一緒に入るとかだろうとは思ふ。まあ、中学の時はたまに強制的に一緒に入らされていたから高校では遠慮したい。

「なら、綾。お前、風呂に本当に入りたいんだな?」

「入りたいですっ」

出来る事ならお風呂に入って湯船にゆっくり浸かりたい。

いつもはシャワーで全力で体を隅々まで洗って済ませているから、尚更入りたい。

俺はお風呂好きだし。

「よろしい、ならば銭湯だ」

「……戦闘？」

「それはちよいとイントネーションが違うな。銭湯だよ、風呂の方の。綾、お前チャリ……自転車持っているか？」

「自転車ですか……はい、ありますよ」

折りたたみ自転車だけど部屋のクーロゼットの中に締まってある。これはIS学園に入学する事が半ば強制的に決まった時に入学祝いとした師匠から貰った物だ。流石に子供扱いしこの学園では使わないだろうと思い、遠慮したが無理やり押し付けられ、荷物と一緒に持ってきたのがまさか、こんなにも早く使う事になりそうだとはい。

「なら、大丈夫だ。俺達の仕事終わった……夜、一緒にチャリ漕いで銭湯行こうぜつ。近場にいい銭湯があったからよっ」

「はぁ……そうなんですか」

「乗り気じゃねえな、おいつ。人が折角誘ってやってんのによ。何か不満か？」

「いや、不満はないですし……お気遣いは嬉しいんですけど……流石に夜、外出は難しいですよ」

「許可とれば大丈夫だろ。俺も学園の上には顔、効くから何とかしてみせるぞ」

そう豪語する源さん。

不思議と何とかしそうな気はする。

こういうところ、誰かに似ていると思ったなら師匠もこうだったな。

師匠は「リアル不可能を可能にする男」だから、そういう雰囲気似ていると感じさせるのだろう。

「何とかしてみせるからよ。銭湯、行こうぜ？男同士の裸の付き合いってのも必要だ。俺とお前さんは真とも友と書いて真友というマブダチの仲なんだから」

言っている事は無茶苦茶だが心が揺さぶられる。

むしろ、源さんは狙ってこういう事を言っているんじゃないかとさえ思える。

俺は最近、自覚したのだがこういうの言葉等に弱い。
今が今までだったから人一倍、そういう事に憧れが強いからだと思う。

「っつ、分かりましたよ。許可はやっぱり必要なので許可が出れば喜んで行かせてもらいます」

「おおっ！」

「お前ならそう言うと思ってたぜっ。そうと決まれば全力で許可は取るとして……おい、野郎共っ！今日は早めに切り上げんぞっ！」

『了解っ！』

チーフである源さんの中で今日の夜の予定が決まった様で他の整備士の人に声を掛け指示を出す。

それに賛同した他の整備師の方々が次々、修理点検する訓練機の運搬作業を手際よく始める。

ここにきて源さん達と会って約十五分ほど経つけど、凄い勢いで物事が進んでいく。

流されてはないけどさうけど状況をちゃん理解するので精一杯な気がする。

「という事だ。許可取れたら八時半頃、外の見つけやすいところにチャリ持っている。無論、嬢ちゃん達にはなるべく内緒でな？バレれば面倒な事になりそうだからな。分かったか？」

「はい」

「おおっ、いい返事だ。なら、久しぶりの風呂楽しみにしているよっ！」

そう笑いながら言葉を残し源さんは仕事へ戻っていた。

何かあれやこれやと凄い勢いで決まったけど、こうして一応、久しぶりのお風呂、銭湯に行くことが決まった。

…

第十九話 ? (後書き)

というわけではいかがだったでしょうか第十九話 ?。

この話は原作でのお風呂のオマージユ(?)ですね。

原作の一夏はシャルルという強い味方を得てラッキースケベをしつつ風呂に入りましたが

綾君は違いますね。と言うより一夏みたいには出来ません。

という事で源さん達と銭湯に行く事になりました。

また、前回とこの回は次の話への繋ぎなので大した意味はありませんが。

綾君には少しでも男同士の交流をしてほしいので書いてみました。

何というか源さんマブダチといより親戚の仲の良いおじさんみたいになりつつある。

まあ、それでも問題ないけどもふくので真の友と書いて真友なマブダチ関係です。

橋本さんは適当ですwww

何となく意味もなく出してみました。サブキャラですらありません。この回だけかもしれない、登場はもしかすると。

結構、綾君との過去は書きましたが。

ちなみに橋本さんのビジュアルは少女漫画キスよりも早くのおじしる先生です。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願っていた

します。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

誕生日プレゼンとして沢山、感想をくれたっていいんですよ？（チラチラ

何か惨めですね。すみません。

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします！

第十九話 ？（前書き）

やっと、本編。

この銭湯の話を書く為にわざわざ銭湯に行ってきました。
取材と骨休めと雰囲気掴みの為に。

それではどろどろっ！

第十九話 ？

綾視点

夜八時半。

約束通り俺は銭湯の用意と自転車を持って外の分かりやすいところにいた。

外出許可は源さん効果なるものが効いたのか随分、あっさりと出た。見るからにゴリ押しな許可の取り方だった気もするが面倒な書類手続きもなかったので気にしていけない。

許可は取れたのはよかったが、束や千冬の目を掻い潜るのは大変だった。

内緒にしなければいろいろと面倒なので内緒にしてここまで来たのだが。こんな時に限って束は鋭く、束の目を掻い潜るのはまた一苦労だった。

束に隠し事をするのは負い目みたいなものを感じるが、こんかいはよしとしてほしい。俺だって久しぶりにでも湯船に浸かりたい。

まあ、こういう類の内緒は後でバレるとというのが定番ではあるけど。今はこの僅かな刹那を味わっていたい。

つまるところ、風呂が楽しみなだけである。起きたら起きたで上手く対処すればいい。

「おっ、いたいた。待たせたなっ！」

夜空を見上げながら来るのを待っていると源さん達が来た。

源さん達はそれぞれ自転車を持って、流石に作業服ではなく普通の私服を着ている。

何と言うか源さんの私服、渋くてかつこよくダディーな雰囲気醸し出している。

ちなみに俺も私服だ。流石に夜間、制服でいるのは怪しまれたりといろいろと問題が発生するので私服を着ている。来ている私服は落ち着いて綺麗な青色のズボンに同じ色の薄い上着に中は白の半袖といった感じ。

「よし、ならさっさと行くか。許可貰った時にあまりお前さんの帰り遅くならないようしるって言われてるしな」

「何かすみません」

「いいさ。お前さんは学園やES委員会とかにとつたら大切な存在だからな。あまり気にすんな。短くてもその一瞬をだろ？」

「ははっ、そうですね」

「なら、行くか」

そうして、自転車を跨ぎ源さんを銭湯にして走り出す。

目的地が何処か知らないので付いていくだけだが、心なしか旨が踊っている。

夜遊びするというのは初めてじゃないけど、同姓とはほぼ初めての体験なので多分その性だろう。

何だか夜遊びを始めする中学生みたいな気分だ。

「チャリ漕ぐのも久しぶりですね。バイクか車で行ってもよかった気がしますけど」

「アホか、橋本。近場なんだからよ、チャリで充分だ。近場なのに

バイクや車で行ったら燃料無駄だろうが」

俺の前を走る源さんと橋本さんは談笑をしながら自転車を漕いで目的地に向っており、他の人達もそんな風にながら自転車を漕いでいる。

束や千冬達と行動するのも楽しいけど、こういつ同姓ってのもやはりいい。

IS学園来てから周りほぼ100%女性なので尚更、同姓というのはいいものだとは強く感じる

「何だか楽しそうだな、綾」

「こういつの同姓では恥じめてなんで何だか楽しくて」

「そうか……なら、今夜は存分に楽しんだらいいさ」

「はいっ」

そんな感じに夜風に辺りながら目的地である銭湯に向った。

・
・
・

「ここですか……」

「おうよっ！ここは俺達の隠れ家的な銭湯、「足立銭湯」だ。まあ、一ヶ月数回来るかどうかな。建て構えが中々、いい味出ているだろ？」

学園を出発してから約十五分後、目的地である銭湯に着いた。時刻九時近くだが銭湯は営業している。

この「足立銭湯」は入り組んだ所にあり、正に隠れ家的な銭湯となっている。

人影は俺達以外見当たらないが、この銭湯はよくあるスーパー銭湯とは違い昔ながらのレトロチックな銭湯で源さんが言うとおりの味を出している。

「中に入んぞ」

「あつはい」

自転車を邪魔にならないよう適当な所に止めると中へと入る。

中は外観と同じ様にレトロチックな古きよき内装で最近あまり見なくなっただけならしい、番台まである。

近代でこんなにも昔ながら銭湯があるなんて。

そして、中に入ると源さんはこの店主らしき男の人と知り合いの様で軽く世間話をしている。

俺も挨拶だけはしてお金、四百円を払うと男湯の方に行き脱衣所で服を脱いでお風呂に入る準備をする。

「はあ〜それは中々」

「な、何ですか？」

服を脱ぎ体を洗うタオルを持って脱いだ服を締まっていると橋本さんに真面真面と裸姿を見られる。

物凄く気持ち悪い。橋本さんが無類の女性好きなのは一応知っているのでそつち方面の水モとかじゃないのは分かるが、裸姿を真面真面と見られるのは鳥肌が立つ。

俺は何があっても絶対にそういう裸を見られて興奮する露出狂のじ

やないので鳥肌が立って気持ち悪い。

「いや、雰囲気はひよろひやるの優男なのに体は細マッチョ風に鍛えられていると思ひまして」

「一言多いですよ。橋本さんだつて人の事言えないじゃないですか。細マッチョで何か体にいくつも傷があるし」

「昔は不良で喧嘩ばかりしていたからその性ですよ、マッチョなのは。傷があるのは喧嘩による男の勲章です」

ああ、なるほどと思つてしまったのが何か悔しい。

細マッチョなのはいいとしても、橋本さんの体にある傷はただのバカやっただけじゃないのかと思つた。

だから、何か悔しく思つた。ちくせう。

ふと、目を横にやると源さんの姿が目映った。

源さんも元自衛隊の整備師だったという事が関係しているのだろうか、ガタイはがっちりとしてムキムキマッチョだ。

でも、ゲーム等での不自然なマッチョキャラみたいな感じではなく普通にバランスのいいムキムキマッチョだ。

「にしても、いい体してんな。ちゃんと鍛えられているし。何かしたのか？それと云つておくが変な意味じゃからな」

「分かつてますよ。何かしていたと言われると……剣道とCCCくらいですかね」

「剣道は分かるがCCCやってんだよ。アレ、軍隊や警察でしか実戦しないだろう」

「いや、何とか親戚に元傭兵の人がいまして……束を守る為にならいます……」

「あーなるほど、それなら納得だな。お前、本当に変わってなんて」

「よく言われます」

本当の事全ては言っていないが嘘も言っていない。

束をIS以外の力で守る為にCQCを習ったのは本当の事。

ただ、習ったのはCQCだけじゃなくCQB等、いろいろと叩き込まれた。

代償として全身の骨で折れてない所がなくなったのは何と云うか複雑な気分である。

「じゃあ、取り合えず入るかっ」

「はい」

ガラガラガラツと音を響かせながら横引きの扉を減さんが開け中に入る。

「……………おお」

お風呂を見て小さく驚愕の声が出る。

お風呂場は大きな湯船が一つに洗い場があって奥の壁にはテレビでしか見た事のない富士山の絵が書かれており、何度も言っが昔ながらの内装で昭和な雰囲気が出る。

昭和風のドラマやアニメでしたか見たことでない風景が広がっており、内心では興奮している。

「初めは体から洗うぞ。垢ついたまま入るのはご法度だからな」

「分かってますよ」

「（あつ……やっぱり、ケロリンって書いてある）」

黄色の洗面器の底に定番の「ケロリン」という文字が書かれており何か銭湯に来たんだという事を改めて実感する。

タオルに備え付けのボディソープを付けて少し泡立て体を洗う。男が横に一直並んで体を洗う光景は少しムサイ気もするが、こういう体験はほぼ初めに等しいので体を洗うという何気ない事でも少し楽しく感じる。

それにいつもとは違う所で体を洗うから何だか新鮮にも感じる。

「嗚呼、さっぱりした。さて、そろそろお楽しみ風呂に入るかつ」

「はいっ」

「おっ！いい返事だな。そんなに楽しみなのか……よしよし」

体を洗い終わるといよいよお風呂へと入る。

湯船へと向っている今、段々と心が楽しみで踊っている。

例えるならそれは遊園地に来た初めの小さな子供みたいな感じだ。

そして

「ふう〜いい湯だ」

「そうですね。ああ、本当にいい湯だ」

「どうだ？久しぶりの湯船の心地は」

「最高……至福の一時みたいです」

「そうかそうかつ……本当に気持ちよさそうにしてやがんな。それなら連れてきたかいがあるぜ、こりゃ」

俺の感想を聞いて源さんは嬉しげな笑みを浮かべ同く気持ちよさそうに湯船に浸かっている。

本当に気持ちがいい。

お湯は当然、熱いが丁度よく、その熱さが体に染みるような感じでの体の疲労が抜けている様で癒される。

湯船に浸かるのが久しぶり過ぎてそう感じているだけかもしれないが、至高の刹那にも届きそうなくらい至福の一時だ。

ある人物が風呂に入って、『風呂はいいねえ、リリンの生み出した文化の極みだよ』と言っていたが正しく本当にそうだ。

風呂はいい、日本人の心の一つだ。

「いいですね、本当に」

「何がだ？」

「大勢の人達とこうして楽しく湯船に浸かれるのはいいですね」

「そうだな。滅多に出来る事でもないしな」

「ですね。それに今までこういう事をあまりしてこなかったですし」

「ん？父親と入った事とかないのか？」

「覚えている限りないしですね」

「なら、今度一緒に入ってやればいい親孝行になると思っぜ」

「そうできたらいいんですけど……」

「ですけど、何だ？」

「父親といより両親ともこの世にはないんですよ。父親代わりだった人にもちよつとIS絡みで勘当みたいな事言われましたし」

そう、ついつい言ってしまうと少しだけ空気が重くしてしまった。

「……それは悪いこと聞いたな」

「気にしないで下さい。もう一人、父親代わりの人がいるから出来ますし……あまり、実の両親に対して大した感情が湧かないですし」

「どついう事が聞いても言いか？」

「はい。何と言うか、俺の家庭はドラマで出てくる様なアットホームな家庭だったんですけど……あまりにもアットホーム過ぎて……それに最後は気づいたら捨てられましたし」

「……気づいたら……さらつとブラックな事を言っつなよ」

「すみません。何と言うか何処か人事の様で……」

俺の捨てられる前の家庭は本当に奇妙なぐらいアットホームだった。本当にドラマの中で描かれる様なアットホームな家庭で今思うと気持ち悪いぐらい奇妙に思える。そのぐらいアットホーム過ぎた家庭だった。

それに親についてもあまり大した感情が沸かない。

今でも両親の事は言ってしまうえばアレだから言わないけど、大好きだし愛してはいる。

それに二人の事もちゃんと覚えている。優しかった事もちゃんと叱ってくれた事も与えてくれた愛情やモノも、ちゃんと確かに覚えている。

それでも大した感情が普通という感情しか沸かない。

俺にとって両親はテレビに映る芸能人の様な感覚でその例で言うと例え好きでもそれはあくまで芸人としてだけでそれ以下もそれ以上もないといった感じ。

だから、正直に言つと何処か他人事のように感じている。血が繋がっているのにも関わらず。

だから、死んだ時もそれなりに辛かったり悲しかったり寂しかったりしたけど、ただそれだけでそれ以上は何とも思わなかった。

そんな感じだから、束や箒には深く深すぎる愛情が沸くのかも知れない。

そう思うと俺は昔から壊れていて、束にいろいろと偉そうな事を言っているがあまり言えたことではないな……と思う。

と言つたか、いつから壊れていたのかよく思い出せないでいる。生まれて時からずっと、壊れていたはずではないと思うんだけど……

「……お前も中々、ヘビィで暗い過去を持っているんだな」

「あまり気にしないで下さい。今でも大した思い入れはない……それなりに悲しかったりしますが今というこんな何気なくとも至福が一時があるからいいと思います。」

それに俺はこの過去から目を逸らさず糧として生きていますので。言えて口ではないですけど」

「そんな事はないさ。そうか……ありがとうな。マブダチとしてお前の過去を聞けてよかったぜ。過去から目を逸らさず糧として生きるか……中々、言っじゃねえか」

「……ははっ」

源さんに頭をワシヤワシヤと撫でられる。

嫌じゃないけど少し気恥ずかしい。

師匠にもよくされるけど……父親ってこういう感じなのだろうか。

「さて、この話はここまでにして。上がって皆さん揃って腰に手を当てて牛乳を飲みましょう。憧れていたんですよ」

「おおっ！中々、分かっているじゃねえか、綾っ！よしなら、湯船に肩までつけて全員で一億まで数えて脱落者なしなら全員分の牛乳おごっやる」

「源さん、気前いいですよね……って！？一億っ！？」

「チーフいくら何でもそれは無理ですよ」

「うるせえぞっ、綾、橋本。漢は度胸と根性とノリの良さだっ！つべこべ言わずにやんぞっ！野郎共、漢を見せろよっ！んじゃま、初

めっ！」

源さんの豪快な一言が開始の合図となり俺達は全員、肩まで浸かり大きな声を出して一億まで数え始める。

幸いな事に時間が時間だからなのか、俺達以外のお客はおらず存分に大きな声を出して一億まで数えられる空間となっている。

そして、湯船に肩まで付け全員で一億まで大きな声を出して数え、何とか頑張った。

脱落者こそは幸いな事にいなかったが大半がダウンしており、漢を見せたはずなのに負けた気したというか何か複雑な気分になった。それでも源さんも一緒に湯船に肩まで浸かって、一億まで数えていたのに全然平気……むしろ、更にいけそうな様子で改めて只者じゃないなと感じた。

ちなみに本当に一億まではちゃんと数えたわけじゃない。

常識的に考えて無理だし、本当に上せ死ぬからかなり飛ばし飛ばしに数えた。

「よくしつ、野郎共。よく頑張った。約束通り、風呂上りの牛乳の一杯は全て俺の奢りだっ！ありがたく飲みやがれっ！」

少し休んで風呂から上がり全員、着替え終わると源さんは約束通り、風呂上りの一杯の牛乳を奢ってくれた。

本当に気前のいい人だ。全員分、何の躊躇もなく楽しそうに奢ってくれたのだから。

この人と出会えた……瞬間、刹那にふと感謝だ。

「頂きます、源さん」

『頂きます、チーフっ！』

俺と皆さんの声が重なり源さんにお礼を言って牛乳瓶を開ける。

この牛乳瓶も昔ながらの牛乳瓶で針みたいな栓抜きで牛乳キャップを指して抜く。

そして、開けると全員揃って飲む。

ゴクゴクっという飲む音が周りから聞こえる。

「はぁーっ！うめえっ！どうだ？お望みの風呂上りの一杯の感想は」

「最高です。憧れていたただけあってこうして皆さんと飲む一杯は格別です」

「嬉しいこと言ってくれるじえねえかつ！ダツハハハツツ！やっぱり、風呂上りの一杯は格別だっ」

憧れていたただけあって風呂上りの牛乳は美味しい。

こういつ何時もとは変わった雰囲気がそう感じされているだけなのかもしれないが、普通のよりもとっても美味しく感じる。

少し年寄り臭いかもしれないが源さんも言っている通り、風呂上り一杯は格別だ。

そうして、風呂上りの一杯を味わいつつ少し雑談すると店主さんにお礼を言って俺達は学園へと帰っていく。

帰りの自転車を漕いでいる時、風呂上がりだからか夜風が涼しく感じて心地いい。

「綾、機会があったら行こうぜっ」

「はい、喜んでっ」

体に当たる夜風は心地よく気分は最高という。
至福の刹那の様な夜の一時となった。

…

第十九話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第十九話 ?。

今回は銭湯にやっところさ行きました。

ちなみに作中で出てきた銭湯の名前は適当です。

実在はしますが関係はありません。書いた後に気づきました。

リアルに銭湯に行ったから書いたのでネタを妙にリアルぽくしています。

今回の話では綾君の親について触れてみました。

一応、これが後々の事に付箋として繋がって行きます。

綾君の両親対しての思いは物凄く平均でい。深くも浅いというわけでもなく

束の様に無関心というわけじゃないのですが、似て非なる物。

ドラマを見ている様で他人事です。普通の家庭のちよつと悪いばんぐらいます。

それと源さんはマジ漢。

本当に父親ぼくなりましたがあくまで父親ポジションにいるのは師匠さんです。

一億数えさせれたのは昔よく、じい様と銭湯に行った時にさせられた新手の拷問がネタです。

他に何か言っておきたいことあったが忘れしました。

マンキツに止まるもんじゃねえなつ。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします！

第十九話 ？（前書き）

皆さんが待っていたっ！！……かは分かりませんが？となったオマケです。

一言でいうと束さん無双です。

こういう系統を書くのは好きなのですが私が書くとワンパターンになってしまいます。

ですので、雰囲気を楽しんでいただければ幸いです。

それではどうぞ。

第十九話 ？

オマケ

「じゃあなつ綾。早く寝るよっ」

「はい。お休みなさい、源さん」

「おうっ！お休みなっ」

学園に戻ってくると源さん達と別れの言葉を言って別れる。

時間は約九時五十分頃。外出禁止禁止時刻の約十分前。

まあ、十分もあれば部屋には戻れるし、流石に時間が時間だけに流石に束達には見つからないだろう。

折りたたみ自転車を畳み担いで部屋へと帰る。

IS専用のカートほどの重さは無いのでアレよりは遙かに軽く感じて楽に担げる。

時間が時間だけに人はあまり見かけない。見かけたとしても遠目だけであまり人は見かけない。

そして、部屋まで戻ってくると自室のドアの前で違和感の様な物を感じた。

「……」

ドアノブに触れたただけだけど……これ、部屋の中に誰がいる。

扉は出る前にちゃんと鍵をして出たし、見た感じでは誰かが開けた痕跡はない。

だけど、何か誰かがいる事ははっきりと分かる。

ちなみに鍵は電子キーだ。

思い当たるある人物なら呼吸する様に意図も簡単に開ける事が出来る。

むしろ、その人物しか思いつかない。

兎も角、何か入って確認だ。

中に入れば全てが分かる。

そういう事でドアを開け中に入る。

一歩一歩、ベットのある奥のリビングみたいな所に近づく。
そして

「あつゝ！綾 遅かったね お帰りなさい」

「……た、ただいま」

部屋の奥まで行くと束がベットの上にちょこんと女の子座りしていた。

流石に時間が時間だけに流石に束達には見つからないだろう

そう思っていた時期が俺にもありました。

アレがもしかしてフラグだったのかもしれない。

自分で立てて自滅(?)した。

「私ね？綾の帰りが遅いから悪いけど綾のお部ですつつつと、ずつつつと待っていたんだ」

「……そ、そうなんだ。それはごめんね」

「ううん。それはいいの綾を待っているのは好きだから。でも、ね？何で内緒にして銭湯に行ったのか教えて欲しいなっ？」

ニツコリと綺麗な笑みを浮かべられ問いかけられる。

表情こそは笑っているが目は笑ってない。

それどころか、瞳のハイライトがヤンデレ目になっている。

ああ、やってしまった。

本当にやってしまったよ。

というか、やっぱりバレていたし。

何処かでそういうフラグを立てたのか原因なのだろうか。

上手くバレないように出来ていたと思っただけだな。

やっぱり、東に隠し事をするもんじゃない。

こうしてそのツケみたいなものが返ってくるから。

「教えて欲しいなっ」

「……はい」

凄みのある気迫に満ちたヤンデレ目で綺麗な笑みで念を押す様に再度、問いかけられる。

結果から言うと素直に包み隠さず白状した。

今の東に下手に隠し事をして無意味だし、隠し事しているのも気が引けたので素直に白状した。

すみません、源さん。

白状してしまった事にも源さんに対しても申し訳なく思い、心の中

でそつと謝る。

「とうわけだったんだ。悪かったね」

「うづん、いいよ。綾、お風呂好きだからね、仕方ないよ。でも、言ってくれば学園の大浴場貸切にもらったのに」

「学園の上やIS委員会を脅して？」

「もちろん その時は私と一緒に、だけど。混浴だよ混浴 キヤッ」

「一緒に入るのはまあ……いいけどそれだけは勘弁」

若い男女が混浴するのはいろいろと問題があるかもしれないが、俺としては問題はない。

一応、散々中学の頃は強制的に一緒に入らせられて。慣れちゃダメなんだけども。

ただ、問題が無くても脅すのは流石に問題が大アリだ。

いろいろと立場が、もしかすると不味くなるし、役人の人達に多大な気苦労をかける事になる。だから、束には自重させる。

「まあ減るもんじゃいなのにブーっ！」

納得がいかない様で束は何処かおどけた様に可愛らしく少し不貞腐れる。

「いや、いろいろと問題あるし、ね？」

「けちんぼっ！でも……内緒にしていた理由も分かったんだけど……
…本当は寂しかったんだからねっ」

そう束は語気を強めて本当に拗ねた様に……そして、寂しそうに言う。

源さん達との同姓独特の居心地のよい一時もよかったが。

俺にはやっぱり、束との一時、刹那が何よりも心地がよくて至高の至福だ。

だからこそ、それを大切にして不変にしたいと渴望思している。
だからこそ、束の思いや束を蔑ろにするなんて出来ない。

「ごめん。寂しい思いをさせてしまって」

謝ってベットの上、近くにいる束を抱き寄せ、抱きしめる。

抱きしめると束の暖かい体温と共に束の感じていたであろう“寂しさ”みたいなものが体温と共に伝わってくる。

束に寂しい思いをさせてしまった。

ダメだな、一つの刹那を大切にすると本当に大切な刹那を蔑ろにかける傾向が俺にはある。

直そうとは思いい、気をつけているのだがやっぱりこうなる。

何よりも誰よりも束を大切にしたい続けると誓い続けているのにこれだ。

俺という存在はいて初めて成立するというのに。

抱きしめっていると束も抱き返してくれており、嬉しそうにしているのが分かる。

「ううん、いいの、謝らないで。理由もちゃんと分かったし……だけど、次からはこういう事があつたら一言言つて欲しいな。私も綾の事に関しては理解がある、分からず屋じゃないつもりだから」

「分かった。次からちゃんと一言言つてからにするよ」

「ありがとう、綾。隠し事の必要性は理解しているけど綾に隠し事されるのは少し悲しいから嫌だな。出来たら、隠し事はやめてほしいかな。私達は二人でようやく一人になって、私達は連理れんりのえだの枝みたいなものなんだから、ね」

「そうだね」

そう抱きしめ合いながら互いの体温を感じつつ話し合う。

俺達は二人でようやく完成した一人となる。

どっちか一人だけじゃ意味がない、二人でないと一人として完成しない。

俺は束がいてようやく整理する。でないと、ただの世界の異物ではない。

それは束も同じで……だからこそ、二人で一人。

「もう少し、このままでぎゅーってして?」

「分かった」

抱きしめ直し、ぎゅーと優しく抱きしめ、束も抱きしめ返してくれる。

束になら心も身体も魂も自分の全てを捧げられる。
生涯唯、束一人を愛し愛され、無償の愛情を注ぎ合う。
そんな関係であり、そうあり続けたいと思う。
そう束も思っている。

そんな事を考えながら束を抱きしめているとパツと束は少し体を離して何か思いついた様な表情で言う。

「ねえねえ。今度、連休があつたら温泉に行こ」

「？」

「ほら、だつて銭湯は混浴できないし……温泉なら貸切にもできるし」

一理ある。

そう思うと機会があれば、銭湯はむりだけど温泉とかに束を連れて一緒に行きたいと思う。

その時は束が言う通り一緒に混浴もいいかな。

「それはいいかもしれないね。たまにはそういうのもいいと思うよ」

「本当っ?!なら、約束だよっ!」

向かいに座っている束は小指を立てて少し突き出してくる。
指きり拳万という事か。

小さい頃、特に束が心を開いてくれて俺と束と千冬の三人で過ごす様になってからは事あるごとに二人に特に束にさせられたんだつたっけな。

今思うとあの時から束は世界や人の世に気丈に振舞っていたけど内心ではとつても心細かったんだろう。

だから、事あるごとによく指きり拳万という形はないけど目に見えて分かりやすく感触として残りやすい指きり拳万をしたのだろう。今はそんな事なくなっただけで懐かしいなあ……と思う。

「何の約束？」

「いつかある連休に絶対に温泉に一緒に行って混浴を絶対にするって約束と内緒事はお互い極力しないっていう約束だよ。ちなみに混浴について拒否権なんてものは存在しないからねっ？」

「はいはい、分かったよ」

そう言って、差し出された小指に自分の小指を絡める。

束の小指は女の子独特の小ささと柔らかさや暖かさを感じ、少しだけ心の中でドキツとする。

そして、初めに束、次に俺の順で最後に二人でゆびきりの誓いの言葉を言い始める。

「指きり拳万」

「嘘付いたら針千本のーます」

「指切った！」

小指を絡めながら絡めあつた状態でおまじないの言葉を言いながら、繋がった小指同士を上下に振り指切りをした。

指きりが終って小指を離しあうと、何だかおかしくなって俺達は微

笑み合う。

少し名残おしいながらも、そつと繋いだ小指と小指と離すと東は数秒、俺の顔をじつと見つめてきて。

「誓いのキス　　ちゅ」

そつと軽くキスされた。

突然の事に反応できず、俺は啞然としている。
誓いのキスって……なあ。

「ふふつ、綾。顔、ほんの少し赤くになってますねー」

「うるさいよっ」

少しからからう様に言われて、少しだけ恥ずかしくなり視線を少し東から外す。

不意打ちに弱いわけじゃないけど、突然こんな事されれば自然となる。

誰だってそうなる　俺だってそうなる。

「まあ、可愛いね、綾は。でも、本当に約束だからね……破ったら、分かっているよね？」

「……分かっています」

少しおどけてからかうように言っていたが約束の話になると東は綺麗な笑みを浮かべ、ヤンデレ目で強く言い聞かせる様に言った。

俺は肯定の返事をしながら、肝に命じておこうと思った。

あまり、東に不安を覚えさせないようにしないと……下手したら本当にヤンデレ化しかねない。

俺の返事に満足したのか束は嬉しそうな表情をして、再び抱きついてき、見上げて俺を見つめてくる。瞳は熱ぼく、何処か妖艶だ。見上げて見つめてくる瞳は熱ぼく、何処か妖艶だ。

「ねえ、綾？もう一度、キス……してもいい？」

「いいけど……時間も時間だし、千冬がくるかもよ？」

「私は規則では縛られないのだ〜っ！それにちーちゃんなら疲れて一足先に寝てるから大丈夫だよ」

千冬エ……

まあ、疲れているのなら仕方ない。ゆっくり休ませるべきだ。

千冬だけに束のストッパーを押し付けるのはダメだ。元々、俺だけの役目だった訳だし。

それにチャンスかもしれない……入学してから最近までごたつについて束にはあまり恋人らしい事をしてあげられてない。

だとするのなら、こんな可愛い我お願いが尻を聞くぐらいはしないと……むしろ、聞いてあげたい。

「しょーがないね。ほら、おいで」

「やったっ！」

嬉しそうにしながらもしおらしく束は目を閉じ、自分の唇で俺の唇に触れてくる。

「んっ……ん」

唇と唇が何度か触れ合うと今度は束の小さな舌が、俺の唇に触れる。その行為に答える様に俺も自分の舌を束の舌と絡め合い、束を味わう。

その行為は互いの存在を深い所で確認する様で、今という“至福の刹那”を味わうような深く甘いキス。

「ん…っ…ちゅ…っ…ふ…あ…うん」

小さく喘ぎながら、深いキスを繰り返して一旦、顔を離すと、吐息の触れる距離で束は俺の瞳を真っ直ぐ見つめ小さく呟く。

「愛してるよ、綾」

そう、嬉しそうにはにかみながら小さく呟く束は妖艶でありながらも純粹無垢であり、この世の誰よりも何よりも美しかった。

…

第十九話 ? (後書き)

というわけでいかかだったでしょう第十九話 ?。

以前から予告していた通り

帰ると何故か部屋で束さんが待っていて一悶着という話でした。

自分では中々、頑張りました。この話を書くのに何気、三日はかけましたから。

時間に直すと丸一日に相当する時間ですが。PCされる時間が三時間と限られているので。

前書きで言った通り束さん無双でした w w w

私なり束さんにはかなり力を入れて仕草や台詞を可愛くして

ヤンデレ束をプリーズという電波を受信して書いたのですがいかがだったでしょうか？

あまり、束さんをヤンデレさせたくないですよ。タグにヤンデレとありますが

ヤンデレって事は情緒不安定という事なので。今は比較的落ち着いてしますし。

今回のちょっとしたヤンデレは寂しさの反動ですね。

キスの描写にもかなり力を入れました。

何度もそういう描写がある恋愛ゲームのプレイ動画を見て勉強したので。

ちょっとだけエロくもしてみました。マグナムがランザムにはありませんが。

ちなみに作中で触れた二人の関係の例え『連理の枝』について補足すると。

『一時の快樂に身を委ね褥を共にするだけでなく、永の別離に到るまで髪の毛一本、魂の芯まで一つであることこそが、真なる「連理の枝」である。』

生涯唯一人を愛し愛され、無償の愛情を注ぎ合う。そんな関係をこそ表す言葉なのである。』

という意味です。詳しくはアニヲタWikiの『連理の枝』を参照してください。

私もそこから引用しているので。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします！

第二十話（前書き）

東さんマジ、恋する乙女っ！

今回はかなり、歳相応の恋する乙女ぽく東さんを書いてみました。

「いくぞ皆の者、甘い話への耐性は充分か」（シロウ風

それではぶじっぞっ

第二十話

東視点

「はふう〜」

部屋に帰っていて真つ先にベットに顔向けで顔を埋め寝っ転がる。

今日は学年トーナメントまで後、三週間強と迫ってきた土曜後の午後。

通わされているIS学園では土曜日の午前は理論学習と通常学校で行う様な普通教科二時間の計三時間までで学校は終り、午後は完全に自由時間、お休みとなっている。

出来た午後は土曜日、アリーナが完全開放となるので学年トーナメントも近い事があってほとんどの生徒が実習に使っているらしい。まあ、出ない私には関係ないし綾とちーちゃんがしてないならどうでもいい。

441

そして、学校が終わった私達はお昼ご飯を食べると一旦、分かれて自分の部屋に帰った。

綾もちーちゃんも学年トーナメンが近いからと言って、周りの人間達のような無意識には焦りを覚えて、その気持ちのまま訓練したりはしない。

二人は鍛えなくても揺るぎない強さを誇り、ISという枠組みの世界、今の世界では確実に世界最強だ。ちーちゃんが世界最強で綾は世界最狂。

だから、二人はあえてアリーナで実習したりはしない。慢心しているわけじゃないし、それにちーちゃんはこれから用事があるらしく、綾に限ってはめんどくさがってやらないだけである。

綾は基本的にやらなくてもいい事は極力やらない性格だからね、やりたい事しかやらないし。

「こら、束。制服のまま寝っ転がるな。シワになるぞ。寝っ転がるならせめて、部屋着に着替える」

「もおく分かってるよっ」

寝っ転がっていた体を起して、制服から部屋着へと着替える。

この後は予定ないし、このままずっと部屋着でいいや。何か用があれば、その都度着替えばいいや。

制服から部屋着に着替えていると隣のベットでちーちゃんが何やら荷作りをしていた。

午後からは用事があるって言っていたけど、何処かに出かけるのかな？

「ちーちゃん、荷作りなんてして何処か行くの？」

「何だ忘れたのか？家に帰るんだ。明日は休日休みだから泊まって来るんだ」

「あつ、だから、荷作りしてるんだ」

「そういう事だ。一夏とも触れ合いたいしな。それに姉の座を咲夜さんに奪われかねないし」

「……あはっ」

何処か嬉しそうにいくんの名前を言うちーちゃんは私は思わず苦笑いみたいな小さな笑い声が出た。

本人に自覚はないがちーちゃんはかなりのブラコンだ。
それはまだ、いっくんが幼い事も関係しているんだろうけど、ちょっと度が過ぎた所がある。

学園に入学してから一緒に生活できない為、よく電話しているし…
…大好きなのは分かるけどちょっと、ね。

まあ、私も篝ちゃん大好きだからあまり人の事は言えないけど。

ちなみに咲夜さんっていうのは一郎さんの家から織斑家に派遣された完全で瀟洒な従者な美人メイドさん。

昔からいろいろな面で織斑家を世話していた一郎さんが学園入学と共にどうしても家を離れないといけなくなったので。

その学園に通っている間の三年間、保護者代わりとして派遣されてメイドさんらしい。

綾から聞いた話では「完全で瀟洒な従者」という言葉通り、クールで完璧超人な性格らしく、いっくんとの相性も中々いいらしい。

それがちーちゃんには気が気じゃない様子。姉の座というよりは私的に嫁の座を奪われそうな気がする。いっくんの嫁は篝ちゃんなのにつ！

「いっくん好きなの分かるけど……一線、超えちゃただだよ？」

「お前は私を何だと思っっているんだ？実の弟に手を出すか。アホっ」

「あっ痛っ」

ちよつとからかったただけなのに強烈な裏拳が飛んできた。

もぉーちーちゃんは乱暴なんだから。

これでも手加減して本気で怒っているじゃないのは分かっているけど。

これじゃあ、将来成人して大人になった時、女の子にはモテモテでも男の人には高根の花。r暴力女扱いされて結婚できず婚期逃しそ
う。

世界がいくら変わっても、いつだって男の人は無意識の内に心の奥底では良妻賢母な女の人や大和撫子な女の人を求めているんだ、と奈々師匠が教えてくれた。

もつとも、こんな話をすれば更に強烈で本気の裏拳が飛んできそうなので言葉を飲み込んで抑える。

「はあくまつたくお前という奴は。そういうお前はどうなんだ？」

「何が？」

「だから、箒に会いに行ったりはしないのか？連絡も碌に取ってないじゃないか」

「ちーちゃん、それ……私の事情を分かった上で言っているでしょう？皮肉のつもり？」

「皮肉に聞こえなかったのか？アホな事を言うからだ」

言われて、私は苦笑いするしか出来なかった。

別にちーちゃんに皮肉を言われて頭に来たりはしないし、何とも思わない。

むしろ、ちーちゃんとはこんな事でもジョーク的な皮肉として言い合えるからむしろ、嬉しく思える。

変に回りくどかったりするの嫌い。

「まつ、そういう事だから私は一旦、家に帰る。戻るのは明日の夕方頃になると思う」

荷作りが出来たのか、ちーちゃんは鞆を持って部屋を出ようとする。

「だから、私の居ない間、綾にあまり迷惑をかけるなよ」

「……分かってるよ。ちーちゃん、私を何だと思ってるの？」

「ただの戯言だ。聞き流してくれても構わない。それじゃあ、行つてきます」

「もおっ、いつてらっしやい」

私の問いには答えず、ちーちゃんのはぐらかす様に言つて部屋を出た。

何か失礼な事思われていた気がしたけどまあいいや。

ちーちゃんが出て行った後、ぼーとっしていてもう一度、ベットに仰向けに倒れこむ。

「……んっ」

仰向けに倒れて寝転びながら、天上に手を少し掲げる。

ちーちゃんが家に帰ったつて事は今夜、私一人なんだ。

一人は好きだけど、一人は寂しい。

矛盾している様に聞こえるかもしれないけど、一人は寂しい。だから、好きな反面嫌いでもある。

でも、私一人なんだ。

「あつ」

ある事が思いつき、私はベットからバツと勢いよく起き上がる。

そうだ、そーちゃんが家に帰って私は今夜から明日の夕方まで一人なんだ。

一人、一人。

世界は私を見捨ててない。無理……じゃなくて、努力して綾達以外の人達と接してみた甲斐があった。

あれはあれで斬新で少しだけ楽しかったし、これはチャンスだ。

「ふふっ」

思いついた内容がよくてつつい、小さな笑いが漏れる。

ちーちゃんには申し訳ない気もちよっただけするけど、ちーちゃんがないなら遠慮する必要はない。

別の人が見てる？はっ、そんな事は関係ない。黙らせればいいし適当に誤魔化せばいい。

万が一、ちーちゃんに話がいつても適当にはぐらせばいい。まあ、申し訳ない程度にはちーちゃんに罪悪感を持つたりするだろう。直ぐ忘れそうだけど。

それでも真実を知っているのは私と綾で充分。

「よし、決定っ これは絶対っ」

一人きりの部屋で自分に再確認させるように言う。

思いつきり自己承諾だけどいいかな。

たまには(？)(こつ)いつのもいいだろう。

それに綾と恋人になってからいろいろとごたついでいて、定番の“コレ”は出来てない。つまりは初。そう思うとまた、楽しみで少しだけ心が踊っている様な気がした。

綾ならきつと承諾してくれるだろう。

私と綾の思いは“あの日”からいつだって一つなんだから。

「決まったら、善は急げっ」

時刻はまだ、午後の一時十五分頃。今からする“ある事”をするにはいい時間。

適当なところに置いていたPADを見つけ、起動させ特別なツールも起動させる。

使うツールはISのコアに内蔵されているコア・ネットワークシステムのプライベート・チャンネル。

本来コアがないと出来ないけど私にはこのツールがあるから出来る。携帯でもよかつたんだけど、秘匿性を選んでこれにした。秘匿する必要はないのかもしれないけど、念には念を。

もちろん、繋げる相手は綾。

インカムみたいなのをつけて、綾に繋げる。

『ハ口ハ口』

『もしもし、束？どうしたの？』

『ちよつと内緒の用事。綾は何してるの？』

『部屋の掃除だよ』

綾にプライベート・チャンネルを繋げて、軽く初めに雑談している。

部屋の掃除……ね。

相変わらずだな、綾は。

こまめというか、家庭的というか。

ちーちゃんほど酷くはないけど反対に私は片付けとかあまりしない。

綾は将来いい主夫、旦那さんになる。もちろん、“私の”だけ。

『それで内緒の用って何？携帯じゃなくって、こっちでかけてきたって事は重要な事？』

『うん、重要な事だよ。ねえねえ、綾は私服持っているよね？』

『は？私服……？持っているけど』

念の為の確認。

制服で“アレ”をするのもいいかもしれないけど、それじゃあ味気がない。

折角の午後からの休日ならんだから、私服で“アレ”をしたい。

建前を抜きで言うのなら、折角“アレ”をするんだから、お洋服を着て綺麗に美しく着飾った私を見てもらいたい。

『だったら、ちーちゃんも家に帰っていない事だし。よかったら、その……デートしない？』

『……デート？』

そう、私が思いついた“ある事”、“アレ”とはデートのこと。

折角の午後からの休日でちーちゃんに実家に帰っていない事だから、デートしてみたい。

何度も言っているかもしれないけど、いろいろな事情があつて私達は一度もデートした事がない。

つまりこのデートは“初デート”となる。

『ねえ……どう、かな？』

そうもう一度だけ、問いかけて綾の返事をじつと待つ。

綾は考えているのか、ちよつと間沈黙が出来た。

数秒ぐらいのちよつと間の沈黙だけど、不安と期待が入り混じつて綾の返事を待つ私の心臓の鼓動はドキドキと早くなっている。

何か苦しくて、その苦しみは少し苦しいけど楽しくも感じる苦しみだ。

『そうだね。しょうか、デート』

『（ほっ……）本当？よかった』

綾の返事を聞くと胸の内ではつと胸を撫で下ろして、嬉しくて言葉も出てしまった。

本当によかった、綾が承諾してくれて。

正直言つと不安だった。断られたりしたらどうしようつて。

いくら、私と綾の思いは“あの日”からいつだって一つなんだからつと言つても、物事にはもしもある。

そのもしもが起こつて、『断られたら』と思うとどうしても不安な気持ちも湧き上がってくる。

でも、綾は快く承諾してくれた。

やっぱり、私と綾の思いは“あの日”からいつだって一つだった。その証拠に

『いや、実はね？俺も束をデートを誘おうと思っていたところなんだ。でも、先を越されるとは……面目ないね。ほら、一般的にデートは男の人から誘って欲しいってあるから』

そう綾は申し訳なさそうに言っていた。

やっぱり、綾も同じ事を思ってた様だった。

些細な事だけど、何だか嬉しくなって胸がさっきの苦しみとは違う感じでドキドキと少し鼓動が早くなっている。

『いいよ、気にしなくても。また、別の時に綾から誘ってくれればいいから』

『分かった。それで何処に行くの？』

『ほら、最近ここに新たしく出来た『レゾナンス』って所に行こう？』

『確か……大きなショッピングモールだったね、あそこは。分かった、そこに行こうか』

『うん。あっ……デートは制服じゃなくて、私服でね。その方が雰囲気出るから。あとは……』

次の言葉を言うのに何故か、一瞬言葉を詰まらせてしまい言おうとすると綾の方が一步、早く言った。

『私服だね……分かった。なら、デートの雰囲気出す為に待ち合わせでもするっ。』

『ッー!?う、うんっ!』

私が言おうとしていた事を綾が変わりに言ってくれた。

わあ、本当に些細な事だけど、同じ事を思っていてくれたのは何だか嬉しい。

やっぱり、好きな人と何かが同じというのは嬉しい。

嬉しすぎたのか、ほんのり頬が熱く赤くなっているを感じた。

そして、時間を見て待ち合わせ場所を考える。

時間は一時半前。さて、何時頃にしようか。

支度に時間がかかると思うし……だと言って、遅くしたらデートする時間が短くなる。

悩む……うーん、支度を短くしつつもバッチリおめかしすればいいか。

あっ……でも、奈々師匠から『おめかしには手を抜かない事』って、耳が痛くなるほどよく言われていたんだっけ。

三十分ぐらいあれば短くすむし、言いつけも守られる。

よし、三十分後で決定。ちなみに最初は十分後の予定だった。

そうして、約十秒間の間に考えをまとめて綾に言う。

『だったら、待ち合わせの時間は三十分後の約二時頃で、待ち合わせ場所は校門で。絶対に私服で来てね』

『分かった。何から何まですまないね。東の私服、楽しみしている』

『うんっ 期待して待っててねっ それじゃあっ』

『また、後で』

通信を切ってインカムを外しPADを適当な所に一度、置いて伸びを一つする。

伸びをして一旦、気持ちを落ち着けようとするものの嬉しくて少し大きめの嬉々とした声が出てしまった。

「やったっ！綾と初デート〜」

嬉しくて頬が綻ぶ。

幸いなことに部屋は一人きったりで寮の部屋は女子学生が使おうと言
う事が考慮されており、防音がしっかりとっていて大きな声が出て
も然程心配はない。

そんな事よりも早く支度をおめかしをしなくっちゃ。嬉しさのあま
り、悶えている場合じゃない。

待ち合わせの時間まで時間は限られている。限られた時間の中で綺
麗で美しく、そして可愛くおめかししないと。

「よーしっ待っててね、綾っ」

そんな風に意気込みながら、私はおめかしを始めた。

…

第二十話（後書き）

という事でいかがだったでしょうか第二十話。

五月入ってから本当はこの話を書きたくて溜まらなかつた。ただ、いきなりどんっ！と書くよりも順序を踏んでから書いた方がいいのでこうなりました。

だけど、銭湯のオマケとイチヤイチヤするって意味では被っているので、オマケを書いたらいいのが困っていました。

今回は束さんと綾君の初デートです。

散々、本編では隠れてイチヤついている二人ですがデートした事はありません。

ですので、初デートで束「恋っばいことしようぜえ？」ですww

今回は甘い話に耐性のない方は大変、かしれませんww

下手したら乙女な束さんで死人が出かけない。通称、甘死にww

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いしま

す
!

第二十一話 ？（前書き）

恋する乙女な束さんマジ恋する乙女っ！ というのが今回のお話です。

これから始まるの甘いさで蹂躪された地獄です。

さて、皆様はこの甘い甘い地獄に耐えられますかな？

それでは……「さあ、地獄を楽しみなっ！」

第二十一話 ?

東視点

綾と初デートの約束をしてから、約三十分後。

私は少し早歩き気味で待ち合わせ場所である、校門に向っていた。別に早歩きでなく普通に歩いても約束の時間には間に合うけど、変に緊張してどうしてもぎこちない早歩きになってしまう。

今まで綾と一緒に二人きりでお出かけした事は結構あるけど、恋人同士になったからは初めてだ。

ましてや、初デート。変に意識しすぎて緊張してしまい、やっぱりぎこちない早歩きになってしまう。

こけないように下を見て歩いているけど、段々と待ち合わせ場所である校門に近づいている。

その事が分かると心臓が緊張でとっても早くドキドキしてきた。

待ち合わせ場所に向いながらも、気持ちを落ち着け様としたけど、それよりも先に待ち合わせ場所に着いてしまった。

「お、お待たせ……待った？」

「ううん、全然まってないよ」

「そっか」

デート等の持ち合わせとかでよく聞くといい、お決まりの言葉を言ってくれた。

多分、少しは待たせているだろうに……綾はそんな事はなかった様

に平然と言ってくれた。
些細なありふれた言葉だけど、言ってくれた相手が綾というのと綾が優しい笑み付きで言ってくれたものだから、心臓は更に早くなってきたのだった。

やっぱり、まだ私物凄く緊張してる。

初デートの緊張ってこんな感じなんだ。

暇つぶしに少女漫画を読んだ時は「アホらし」と切って捨てていたけど、実際なるとその気持ちがよく分かる。

それに綾の私服姿もいい。

服装は落ち着いた綺麗な黒色のズボンに同じ色の薄い上着に中は白の半袖といった感じのもの。

シンプルだけど綾の雰囲気とマッチしており、とってもよく似合っている。シンプル・イズ・ベストというやつだ。

「えーと、あの……綾、私服似合っている。かっこいいよ」

「そう？ありがとうございます」

優しい笑みを浮かべる綾。

学園に入学させられてからはいつも制服なので私服というものは何だか新鮮に感じる。

今度は私のはどうなのかなあと思い、聞いてみる事にした。

「……………どう、かな？」

ちゃんと綾に見える様、服を見せる。

選んで今日、着た服は。

上着である白のニットカーディガンに中は同じ色のロングキャミソール。

この服は入学前に奈々師匠に選んで仕立ててもらった服であり、服とかに疎い私は今回、大変助かった。

髪型はいつも通り、ロングストレート。

デートという事だから気分転換に髪型を箒ちゃんみたいなのポニーテールにしようかと思っただけど、いい髪留めが見つからず、髪型はいつも通りの方がいいかと思いついて何時もの髪型にした。

そうしながら服を綾に見てもらっていると、綾はただ、何処か啞然とした様な表情でじっと私を見つめていた。

「……………似合っていない、かな？」

不安になってしまい、つい聞いてしまった。

頑張つて奈々師匠から教えてもらった薄化粧もしておめかししてみただけど、やっぱり似合わなかったのだろうか。

そうだよね……………ついてもこんな女らしい事しないから変だよね。

そんな風に不安に思っていると、綾はすぐさま慌てて言った。

「そ、そんな事ないっ！ただ……………」

「……………ただ？」

「何と言うか……………その服を着ている束が綺麗というか可愛らしくって……………見惚れていて言葉が出なかつたんだ」

「えっ？」

恥ずかしそうに言う綾の言葉を聞いて私はきよとんとなる。

どういう事？つまり、これって……

「服、とってもよく似合っている。いつも、そうだけど今日の束はいつにもまして綺麗で可愛いよ」

そんな言葉が優しい笑み付きで聞こえてきた。

言われ褒められている事を認識した瞬間、心臓が本当に爆発なくらいドキドキと鼓動が早くなった。

嬉しい……不安に思っていたのも関係しているんだろうけど、ただ純粹に物凄く嬉しい。

嬉しすぎて顔が熱く赤くなっているのを感じる。

赤くなっているのが妙に恥ずかしくて、見せないように少し俯き加減になっているけど、今私物凄く顔真っ赤なんだろうな。

「そっ、そっか……えへへ、嬉しいな」

顔を真っ赤にしつつもそんな甘い声で出してしまう。

恥ずかしいけど、嬉しさの方が勝って今は心が嬉しい気持ちで一杯だ。

まだ、デートも始まってないのにとっても幸せな気分。

これから始まる初デートも嬉しい幸せ一杯だったらいいな。

「それじゃあ、お手をどうぞっ？」

手をすつと自然に差し出され、私は再びきよとなる。

「こんなところでもう、繋いでいいの？」

「いいよ、噂立っても揉み消したり変なこと言わなければいいだけの事だし」

「それもそうだね。じゃあ、お言葉に甘えて」

綾の手を取りしつかりと繋ぐと指を絡めて、『恋人繋ぎ』をする。昔からいつも綾と手を繋ぐ時は恋人繋ぎにして繋いでいるけど、こいういうシュチュエーションでは初めてだから何だか新鮮な気分。好きな相手をより感じられるようにという恋人繋ぎだけど、本当により綾を感じられて、それは綾も同じ様だ。

「それじゃあ、行こうか」

「うんっ」

繋いでいる綾の手の温もりを感じつつ、私達は待ち合わせ場所の校門から歩き出し、デートをし始めたのだった。

・

・

・

「大きなショッピングモールだね」

「そうだね。地元の隣町のショッピングモールとは比べ物にならないほど大きい」

私達は駅前のショッピングモールにいた。

交通網の中心にあるここは様々な交通機関を利用でき、市の何処からでもアクセス可能、そして市の何処へでもアクセス可能である。

そして、駅舎を含み周囲の地下街全てと繋がっているのが私達がいる、ショッピングモール『レゾナンス』。

ここはつい最近出来たらしく、情報によるとIS学園設立に合わせ
てリニューアルされたとか。

規模は綾が言う通り昔、よく行っていた地元の隣町にあるショッピ
ングモールとは比べ物にならないほど大きい。

ただ大きいわけじゃなく、料理店は和欧中を問わず完備しており、
衣服なんかも量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。

その他にも各種のレジヤーは抜きがなく、子供からお年寄りまで幅
広く対応可能。

まあ、何とか兎に角凄い。

「で、どうする？綾？」

「そうだね。初めて来る所だし、適当に歩いて見て回るっか？」

「うん、そうしようっ」

手を離れた訳じゃないけど、握り直し私達はショッピングモール内
を歩きはじめる。

さつき説明した通りの概要であり、休日の午後という事もあってか
人は多い。

多すぎて、下手するとはぐれそうだけど、そこは綾。

はぐれない様、しっかり手をぎゅっと繋いでくれており、私は安心
しつつデートを楽しめる。

初デートといっても、別にデートプランとかがあるわけじゃない。

考えおければよかったと一瞬思ったが、それでもこんな風にこれと
いって目的がなく適当に歩いて見て回るもいい。

それよりも綾とデートをしていると思うと気持ちには新鮮な気持ちで楽しく、綾と一緒に嬉しくて楽しい。

何より、この今という刹那を綾と共に味わえていると思うだけで無性に嬉しいから、今のままで満足だ。

「何か楽しそうだね、束」

「うんっ 何気ない事でも綾と一緒にっただけで無性に嬉しくて楽しいの」

「そうか……それ何よりだよ」

ありのままの想いを綾に告げると綾は嬉しそうな表情をしていた。

今は雑貨店と小物店が合わさった様なお店で適当に商品を見ている何か欲しいというわけじゃないけど、商品を眺めてはあれこれと雑談を少ししつつデートを楽しむ。

もしも、何かほしくなってもお金はそれなりにあるので大丈夫。ISの特許料とかIS関係のお金が私には入ってきてお金については問題はない。

その点は綾も同じでお金に困るという事はない。

そんな事しなくても奈々師匠から昔、貰ったかなりの額のお小遣いもまだ残っているし。

「あれは……」

小物とかを適当に見ている綾が何かを見つけた様だ。

つられてその方向を見るとアクセサリーや髪留めがあるコーナーだ

った。

「どうかしたの？」

「あ……いや、そうだった。悪いけど少しここで待っていてくれるかな？」

「ん？いいよ」

「ごめん。直ぐ戻るから」

そう謝る言葉を残すと綾はそのアクセサリや髪留めがあるコーナーの方へ行った。

何だろう？もしかして、プレゼントだったりして。

そうだったら、指輪か髪につけれる何かだったらいいな。

指輪だった場合は婚約指輪だったりして……キヤッ

そんな行き過ぎた妄想をしつつ小物を適当に見て待っていると何かを見つけ会計を済ませた綾が戻ってきた。

「お待たせ。ごめんね？」

「ううん。いいよ。それで何か買ったみたいだけど何買ったの？」

「ああ、これ？内緒。帰ったら教えるよ」

そう言って綾は手に持っている大きい紙袋と小さな紙袋を肩掛けバックの中に直す。

帰ったら教えるか……気になるけど、後のお楽しみとして楽しみにしておこう。

そっちの方が楽しみは倍増するから。

「じゃあ、次行こうか」

「うん。そうだね」

離していた手をもう一度、繋いで再び歩き出す。

「あっ……」

雑貨店と小物店が合わさった様なお店を後にしてフラフラ歩いていると店が立ち並んでいる一角にあるクレープ屋さんが目に入った。

糖分は頭の回転をよくするから甘い物は好きで、その中でもクレープはかなり好きなスイーツだ。

そういえば最近、クレープも食べれてなかったな。

ISを発表してから忙しくも得した事も多く大きいけど、些細なところでちよっぴり損した物もあるな。

後悔はしないけど、ちよっぴり反省。

でも、クレープ美味しそう。

そんな甘い誘惑が私を襲ってくる。

「クレープ、食べたい？買う？」

言葉を発するより先に心の声を読まれてしまった。

「いいの？」

「もちろん。どれにする？奢るよ」

「えっ？いいよ、自分で買うから」

「ダメです。こんな時ぐらい彼氏らしい事せて？遠慮はいらないから」

「……分かった。なら、お言葉に甘えてご馳走になるのかな。ありがとね、綾」

「いえいえ。どうしてまして」

遠慮は日本人の文化というけど遠慮しすぎはいけない。

遠慮し過ぎて相手の好意を蔑ろにしてしまうかもしれないから、私は綾の好意に素直に甘える事にした。

それに綾は「恋人、彼氏」って言うてくれた事がまた、嬉しい。

そうして、私達はそのクレープ屋さんに行きクレープを買う。

私が選んだのは定番のショコラ・フレーズという生クリームとショコラクリームの上に新鮮な苺をたっぷり並べた定番のイチゴ・チョコ。

綾が選んだのはミルククレープケーキを薄くクレープにしたもの。

こっちもカスタードクリームとかが多く、甘くて美味しそう。

その二つのクレープを買おうと私達は店の奥、隅の方の席を見つけ適当に並んで座る。

「では、いただきます」

「どござっ」

綾に感謝の言葉の変わりである言葉を言ってクレープを頬張る。

味わいながら何回か噛むとクレープの甘い味が口一杯に広がる。
このクレープを買う時に「当店人気クレープ」と書かれていただけ
あつて、甘くて美味しい。

常にフル回転している頭を糖分がいい感じに癒してくれて、少し幸
せな気分になる。

「美味しいね、綾」

「そうだね、甘いものはいい。疲れた頭を潤してくれる。リリンの
生み出した文化の極みの一つだよ」

「ふふっ何処の使徒？」

そんな他愛のない話を微笑みながら私達は、しつっクレープを食べ
続ける。

綾も甘いものは割りと好きな方で美味しそうに食べている。
本当に美味しそうに食べる綾の表情は無邪気でその表情を見ている
と胸がきゅんとする。

「あ……」

自分のも食べつつも綾が食べている姿が目に入る。

そういえば、そっちの味も食べたかったなあと思っていると。

「こっちも少し食べる？」

食べていたクレープを差し出される。

どうやら、じーと見つめていたのが原因なのか私の思っていた事は

読まれていた様だった。
流石が綾。

「いいの？あつ……なら、交換しよっ？」

「分かった。どうぞ」

自分のクレープを一時的に交換する。

食べようとしてふと思う。

私が食べようとしている所はさっきまで綾が食べていた所で。

また、綾が食べようとしている所もさっきまで食べていたところ。

これって……間接キスだよな。

綾と間接キスなんて今まで何度もしているから初めじゃないけど、
変に意識してしまう。

デートしているという雰囲気があるのか、変に意識
してしまうと頬が少し熱くなるのを感じる。

私とは反対に綾は平然としているけど、間接キスって事に気づいて
いるのかな？

まあ、綾の事だから……間接キスって事も私が今変に意識している
ことも分かった上で、私の反応を楽しむ為に平然な顔して食べよう
としているんだろうな。

綾の意地悪。

うう〜でも、変な風に恥ずかしく感じて、食べるのに躊躇しそうに
なる。

そうだとっても、女は度胸っ！変に意識して恥ずかしいのに耐えな
がらクレープを口に運ぶ。

「……こ、こっちも美味しいね。そっちは……どう？」

「美味しいよ。ただ、やっぱり物凄く甘いね。ストロベリー入っているからだから当然だけど」

「そっか。そういえば綾、そういうタイプの苺は苦手だったね。ジヤムも苦手だったし」

「あははっそうだね。普通の苺は好きなんだけどこっついつのとかジヤム系は苦手だね。感覚の問題かな」

「そうなんだ」

妙に恥ずかしいのに耐えつつ綾の意識も逸らす様に他愛のない話を振る。

もう、クレープは返したけどまだ口の中には綾のクレープの味が残っている。

クレープの味というよりは綾との間接キスの味といった方が正しい。間接キスの味なんてしないけど、感覚みたいな感じで味が残っており、嬉しい反面やっぱり恥ずかしい。

そんな気持ちがあり、誤魔化すようにして少し急ぎ目にクレープを食べていると綾が私がクレープを食べている姿を楽しそうに見つめていた。

見られている恥ずかしく食べづらいいし、ただ楽しそうに見ていくれるぐらいなら問題ないけど、綾は楽しそうにしながらも何処か黒い笑みを浮かべて私を見つめている。

「そう言えば……束？」

「……な、何かな？」

「そういえばさっきのって間接キスだよね」

「んっ!？」

私の思っていた事なんて当に見透かしていた綾はからかう様に言う。幸いな事にクレープを飲み込んでいて、定番の喉に詰まるとかのアクシデントは避けられた。

いや、それすらも綾は計算していたかのようだからかわれていたのと恥ずかしさの二重で余計、顔が真っ赤になる。

「……もおっからかわないでよ、綾っ！」

「ごめんごめん。珍しく恥ずかしそうにしている束が可愛くて、っ
い」

「うう……そ、そんな嬉しいこと言われてもゆるさないんだからっ」

「ごめんっば」

半笑い気味に嬉しい事を言われて、むっとなっていた私の心がぐらつく。

本当に綾は意地悪さんでズルイ。

でも、言っても欲しいと思ってた事は言ってくれ、更に些細な事にも気がついてさり気なくしてくれるから嬉しい。

だけど、やられぱっやなしは恥ずかしすぎる。よし、反撃だ。

「綾」

「ん？」

名前を呼び、こちらに向き直す綾。

その隙に出来た無防備な隙をよく狙って。

「んっ」

そつと頬にキスをした。

「た、束？」

「さっきのお返しだよっ」

ふいを付いて驚いている綾の表情を見れて私は満足な気分になった。幸いな事に店の奥で周りのテーブルには誰もいないのでさっきのは周りには見られてない。

むしろ、こういうのをする為に一番奥の席を選んだのは内緒だ。

「……束はズルイね」

「それはお互い様だよ。綾は意地悪さんなんだから」

「ははっ、でもこれは一本取られた」

微笑むように笑みを浮かべらも綾は嬉しそうにしつつ珍しく何処か照れていた。

それが少しおかしくて、たまらなく嬉しかった。

綾を喜ばせてあげられたんだと。愛はやっぱり、与えてもらうより

与えるもんだ。
もっともっと、綾を喜ばさせあげたい。

「にやははっ やったなり〜 ぶいぶっ
」

「まったく。なら、お返しだ」

「えっ？」

綾を喜ばせてあげられたと小さく喜んでいるとクイツと片手で顎を持ち上げられ視線と視線が合う。

私の瞳に映った綾の瞳は綺麗で魅力され、吸い込まれそう。

綾の唇に、私の唇が近づいていく。

自然に目を度して、そのままキスをする。

綾の唇は、クレープを食べた後なのかとっても甘い感触だった。

ほんの数秒の間……だけど、私には長い時間の中から切り取った一

瞬よりも短い時間、至福の刹那の様に感じられた。

綾からこんな事をこんな場でしてくるなんて珍しい。

周りに誰も居ないとはいえ、誰かに見られているかもしれないのに、
だけど、私の心の中は嬉しさと幸せで一杯となっていた。

「んっ……」

「ん……愛してるよ、束」

「あっ……」

飾りつけのない素直な綾の言葉。

言われ慣れた言葉だけど、何度言われても嬉しい。何度も言って欲しい。

そう言ってくれるだけで、心が嬉しい気持ちと幸せな気持ちで溢れそうになり、暖かくなる。

愛は欲するものじゃなくて、与えるもんだという言葉があり、私も大いに賛成でそうしているけど。

やっぱり、与えてもらえるのもいい。いや、愛をもっと二人で共感して不変で揺るぎないものになりたい。不変の刹那の様に。

だから、私も……

「うん 私も綾の事を何よりも誰よりも愛している」

そんな私なりの言葉^愛を囁き、行動でも示す様に綾の唇にそっとキスを返す。

一生という長い時間の中からこの時を切り取った一瞬よりも短い時間、至福の刹那を込めた甘く濃厚なキスを。

…

第二十一話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第二十一話 ?。

東さん視点はやっぱり、書いていて一番楽しいです。

こう……もっと恋する乙女、歳相応の女の子らしくしようとするとこうなりました。

今回、東さんが着ているお洋服は

2006年のシングル「Princess Rose」のカバーに映っているゆかりんが着ているお洋服がイメージです。

イメージというよりもそのままと言った方が正しいかもしれませんね。

話の内容的にはテンプレ、定番ですが頑張りましたよ、この話っ！
クオリティは毎度の如く低く心理描写意外は無茶苦茶ですけど。

肝心の心理描写はかなり力を入れてみました。

それ何気ない台詞とかにも力を入れてみました。

話の雰囲気も全体的にかなり甘くしてみました。

これで私が出せる甘さの75%ぐらいですw(微妙ですw)

満足するなりして口から甘ったるい砂糖でも吐血していただければ幸いですww

さて、次は夜のお話。

夜らしくエロチックな雰囲気にしようと構想中ですが。

一線を超えさそうかどうかで悩んでいます。

テンポがいいのでこのまま一線を超えさせてもいいんですけど。

その場合、無理はないんですけどちょっとやりたい話が潰れますね。後は物語の進行にも多少、支障しますね。

そういう事をするとな女性は目に見えて変わりますから（雰囲気的な意味で

寸止めぐらいで終るとは思いますが一線を超えさそうかどうか悩みますね。

まあ、どっちにしるエロチックな話である事には変わりありませんけど。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

ああ〜！早く鬼哭街の発売日になれっ！

そして、竜十恋と沙耶の唄も欲しいっ！プレイしたいっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いしますっ！

第二十一話 ? (前書き)

エロチックタイムっ！

ご期待してくれている方のご期待に答えられればいいのですが……
この話は完全脳内妄想補正、エッチなゆかりんボイス全開でお読み
下さい。

ニコニコのsm491127を片手に聞いて頂ければより、雰囲気
が出ると思います。

苦手な方は回れ右。

不評だったりしたら怖いな(苦笑)

それではどうぞっ！

第二十一話 ？

東視点

デートを終えた夜。

学生寮に帰って、学食で夕食を一緒に食べて今日のデートは今日はお終いだった。

夕食を食べ終え、お風呂に入りパジャマ姿に着替えたところで、今は寮の学生達が集まる広間の端の方で少しお喋りしている。

夜はもう、九時と遅く……そろそろ、外出禁止時刻なので自分の部屋へと戻らないといけない。

それがちよつぴり、名残惜しい。

今日のデートはもちろん楽しかった。

それは至福の刹那^{一時}で最高の初デートとなった。

だけど、我が俣みたいなものと言うとまだ一緒に居たい。

「どうかしたの？」

「えっ？あつ……そろそろ、時間だなと思ったたら何だか名残惜しくなってる」

「そうなんだ。確かに名残惜しいね」

微笑みながらも苦笑いもしている綾。

綾も同じ気持ちだったんだ……嬉しい。

だけど、そうだと知ると余計に名残惜しい気持ちが強くなる。

もつと、綾と一緒にいたいな。

それにデートで多少は疲れたけど、まだ元気パワーは有り余っている。

部屋に帰っても、今夜はちーちゃんが実家に帰っていないし、一人だしな。

「あつ………」

「ん？」

ある事を思い出し、ある事を思いつく。

そつだよ、今日はちーちゃんは実家に帰っていない。だから、誰も邪魔する者はいない。

「（にゅふふつ。よし、決定で確定）」

思いついた事が自分の中では名案に思えて、小さくつい笑っていると綾は少し奇妙そうな顔で私を見ていた。

これまた、思いつきり自己承諾だけどいいよね。もう少し綾と一緒にいて甘えたい。

本当に綾が聞いてくれるのは分からないけど、たまにはほどほどを遵守しつつも度の過ぎた我が侘を聞いてくれたら嬉しい。

それに“篠ノ之束に不可能はない”のだ。なーんちつて。

「ねえねえ、綾？」

「な、何？」

「今から綾の部屋に泊まりに行ってもいい？」

「……………なん……………だとうっ!？」

予想外だと言わんばかりに声こそは小さかったものの綾はとってまビックリしていた。

「……………いや、流石にそれは……………」

ビックリしていた表情とは一転して今度は真剣に深く考え込む綾。やっぱり、そうなるよね。

無理難題を言っているわけだし。

それでも私はもう一押しだけしてみた。

「ねえ……………だめ?もしも、何か問題が起きたら私が責任取るから」

「……………ちよっ!」

周りのことなんか気にも止めず、綾に密着するように近づき寄り添って、目線と目線を合わせ上目使いで綾を見つめる。

綾は驚きの声こそ出そうになったものの、抑えて困った様な顔をする。

確信犯なのは重々承知している。

それに綾の弱みみたいなどころに付け入って、最低な事をしているのも分かっている。

ちーちゃんが居ない隙について、こんな事をしようとしている悪い子だっことも分かっている。

それでも、コレが私の我が侂で私なりの不器用な甘え方。

そうして、上目使いで視線と視線を合わせじーっと見つめて、綾の判断をじっと待つ。

ちよっぴり、この間は怖い。大胆な事を言っておいて何だけど、断られたら潔く引き下がろう。

そこまでの我が侂を言っただけに迷惑をかける訳つもりもないし、そのぐらいの限度は弁えているつもりだ。

「はあ〜しょうがないね」

「えっ？」

「言っておくけど、今日だけだからな」

「いいの？泊まっても」

「ああ、いいよ。念を押して言うけど今日だけだからね。次は……まあ、その都度考えよう」

「あははっ、何それ。でも、ありがとうね。私の我が侂を聞いてくれて」

「そのぐらいの甲斐性はあるつもりだよ。好きな女が甘えてくれるなら、それはいいことだしね。それに問題が起きたら責任は俺が取るよ」

「何から何までごめんね」

やっぱり、綾の弱みみたいところに付け入ってしまった様でちよ

つぴり気が引けた。

けど、気が引ける半面、承諾してくれた時は物凄く嬉しかった。それに無理難題を聞き入れてくれた綾はやっぱり、優しい。

他人にしてみれば、綾の優しさはただの甘さに見えるからしれないけど、どうだったいいい。

綾は強い。だって綾の強さはその優しさが強さの裏付けであるのだから。

それは私の一番良く知っているから他人がどう思おうとどうだっていいい。

「じゃあ、とりあえず。部屋に行こうか」

「うんっ
」

綾に優しく手を握られ、手を引かれて綾の部屋へと向った。

・
・
・

一度、私達は私の部屋に戻って必要な歯磨きセットを持ち綾の部屋へと行き中に入る。

「お邪魔しまーす」

「いらっしやい」

一緒に入った綾の部屋は、いつも通りな感じで相変わらず綺麗だった。

「相変わらず綺麗だね」

「普通だよ。東達の部屋が汚いだけ。さっき見たけど少しは片付けたほうがいいよ。特に本類を」

「むう……分かってているよ。それに汚くないもんっ、普通だもんっ」
「はいはい」

いや、私達の部屋がちょっと汚いだけかもしれない。
私とちーちゃん、綾と違って片付け下手くそだからな。

一応、下手くそでも片付けは出来るけど私の場合、最低限の身の回りの片付けしか出来ないし。

そう思うと綾の方が家庭的な女の子のようでちょっぴり、胸の内でも凹む。

凹んだのを悟られない様にしつつ、手を繋いだままベットに行き、適当なところに腰を降ろす。

綾の部屋に来るのは忍び込んだり、何度かお邪魔させて貰った事があるんで初めじゃないけど今の私は変に緊張している。

というより、今日の私は変に意識し過ぎだ。やっぱり、初デートという雰囲気とそれを意識し過ぎだからかな？

それに初デートの夜に部屋に連れていってくれて、あまつさえ泊めてくれるんだから、そういう事も……ね。

何も私達は付き合っただけじゃなく……もう、半年近くは経っているからそういうのもアリだとは思っ。

付き合った当初は私達はまだ、中学生でES関係でこたついでいて……遠慮している部分もあったからしてないけど。

やっぱり、そういう事もしてみたいししておかなくちゃいけないと思っ。

恋人同士ってのもあるけど思っだけじゃなく体の深い部分でも綾と

繋がりたい、体でも綾を感じていたい。

それにやっぱり絶対に私の“初めて”は綾に貰って欲しい。私の何もかも全ての“初めて”を綾に貰って欲しい。

そういう事を期待するのはやっぱり、変なのかな？

まあ、もっとも綾の事だから、今日はそういう事はしてくれないかもしれない。

臆病やヘタレって訳じゃないけど、綾は私の事を大切してくれて大切に思ってくれているから。

そう事だけに囚われたくないとか大切に思ってくれて、多分してくれないだろう。

とっても嬉しい反面、ちよっぴり残念。

ここは過度な期待はしないでおくでしょう。

ベットに腰をかけ、そんな事を感かかっていると綾が何かを思い出した様だった。

「あつ……そうだ」

「ん？」

「ちよっぴり、ごめん」

一言言っつて手を離すと綾はベットの向かいの椅子に置いてあった肩掛け鞆を取る。

そして、鞆の中から何やら中ぐらいのサイズの付録を取り出した。

その袋、どっかで見た事があるような……あ、そっか、ええ。

「それって……あの店で買ったものだよな？」

「そつだよ。はい、プレゼント」

「わわっ、ありがとう」

袋を手渡され少しビックリしながらも受け取る。

袋を触った感じ……ゴツゴツとしていて少し大きい。

小物系の小さな物ではない事は触って分かった。

「ねえねえっ、開けてもいい？」

「いいよ。出来たらそのバスルームで開けて欲しい。そして、付けて来てくれると嬉しいよ？」

「付ける物なの？まあ、分かった」

付ける物って事は……中身は髪飾りとかかなあ。

そんな事を思いつつ私は部屋のバスルームに向った。

シャワールームに向うと綾がプレゼンしてくれた袋を開けた。

そして、絶句しかけた。

「（これって……前言ったのが原因なのかな？）」

プレゼンされたのはカチューシャだけど、デザインが絶句したかけた原因みたいなものだった。

前、綾に言った言葉が頭に過ぎる。

買ってくれた理由は何にせよ、折角プレゼンとしてくれたんだから付けないと。恥ずかしいけど。

意を決して、そのプレゼントしてもらったカチューシャを髪につけ

てみた。

「（は、恥ずかしい……綾に見てもらうなんて無理っ）」

プレゼントしてもらったカチューシャをつけた自分が目の前の鏡に映り、恥ずかしくて目を逸らす。

いつもおどけて大胆な事をしているけど……いざ、冷静になると恥ずかしい。因果応報みたいな感じかな。

これをプレゼントしてくれたのは嬉しい。でも……これを付けた姿を綾に見てもらうのか。恥ずかしいよ。

「束？付けた？」

一人、恥ずかしさから少しだけ悶えているとベットの方から綾の声が聞こえた。

綾の声は妙に楽しそうで私がこうして、恥ずかしさのあまり悶えているのは分かってるんだろうな。

いや、むしろ……そういうの事を狙っている感もする。

「（綾の意地悪っ！うう〜でも、どうしよう……恥ずかしいよお……でも、付けたのなら見て可愛いとかって言った貰いたい……よしっ！）」

決意を固め、シャワールームから出てベットへ向った。

「どう……かな？へ、変？」

「ううん、変じゃない。可愛いよ。そのウサミミのカチューシャを付けた束は」

「うう」

褒められて嬉しい反面、綾に微笑ましそうな顔で見られて恥ずかしい。

そう……私が綾にプレゼントしてもらったのはウサミミのカチューシャだった。

メルヘンチックでとっても可愛いけど、いざ自分が付けるとなるとこれはかなり恥ずかしい。

恥ずかしすぎて、自分でも顔が真っ赤なので頬の熱さで分かってしまっ。

「これ買った理由つてもしかして……前、私が言った事が原因かな？」

「あっ……気づいた？そうだよ 初デートの記念に何か思い出の品をと思ってアレからヒントを得て、それにしたんだ。ダメだったかな？」

あ……やっぱり、前に言っていた事が原因だったんだ。

「ダメじゃないけど……折角なんだから、指輪とかがよかったなあ」と思っただけ」

「指輪も考えたんだけど、ありきたりだし……それに指輪は束の誕生日に渡そうと思っていたから、ごめんね？」

「それならいいんだけど……流石にこれは……ちょっと恥ずかしいよ」

「恥ずかしがる気持ちも分からなくはないけど。とって似合っていて可愛いから自身を持って。それに別に嫌じゃないんでしょっ？」

「……そ、それはそうだけど」

ちよっぴり痛いところをつかれた。

嫌なんかじゃない……むしろ、いいかもしれない。

こんな風に綾が褒めてくれるのなら、今後、このプレゼントしてくれたウサミミカチューシャーを付けていこうとさえ思う。

このウサミミカチューシャーが私のトレードマーク的なものになったら、それはそれで面白いかもしれない。

「うんうん、よく似合っていて可愛いよ」

「あ、ありがとうっ……きゃっ」

ぼふっという布団が鳴る音を立てながら私は綾に押し倒された。

姿勢としては綾が上で私が下。正に押し倒されている。

私を見つめる綾の表情は優しい微笑みを浮かべ、瞳は優しく温かくて吸い込まれそうだった。

だけど、綾からはいつもの様に私を優しく甘く苛めくれる意地悪な雰囲気が出ていた。

「ああ、本当に可愛いよ、束。ウサギミミが相まって可愛い兎っ子の様だ。このまま、美味しく食べたいね」

「た、食べたいって」

いつになく綾がエロチックな言い回しをするもんだから、一瞬……
一瞬だけそっち系の妄想をしてしまった。

は、恥ずかしい……この体勢と場の雰囲気がそう意識させるのか、胸がドキドキして、過度な期待しないようとしていても期待してしまふ。

多分、表情とかで恥ずかしがっているのか、期待しているのか、ばれていると思うけど、これ以上悟られないように平然とした口調で言った。

「今の綾は可愛いー私 うさぎさん を食べたい悪い狼さんなんだね。私は食べられちゃうのかな？」

「悪い狼って……ねえ。あ……いや、悪い狼さんかもしれないね。だって」

言いかけ、綾の顔が段々と首元に近づいてくる。

一瞬の事のようにだけど、スローモーションの様に見えて、心臓の音が耳元でうるさいほど鳴る。

何かされちゃうっ！ そんな未知に対する恐怖も少しばかりはあるけども未知に対する期待の方が大きくて、私は楽しみな気持ち一杯で逃げずじつと待った。

そして……

「ちよつとっ……んうっ……はあっ……んうんっ……っん……」

首元に軽くキスを何度も落とされた。

優しいキスを何度も軽く落とされる度に私の体は電気が走った様に痺れて、硬直する。

硬直はするものの、その後はふわっとした感覚と共に硬直が解けゾクゾクとした快感を感じる。

それはキスをされる度に何度も起こり、とっても気持ちいい。

もつと……もつと、して欲しくなる。

綾に沢山、体を触って欲しくなる、触って欲しい。

「いや……あつ、んんっ……はあっんっ……もっ……とぉ……っ」

「ん？何が？」

「んあっ……意地悪ッ……んうっ……もつと、沢山いろんなところに、キスして？」

「ふふっ分かった」

欲求が素直に言葉として出てしまった。

もちろん、恥ずかしいけど……もつと、して欲しくて堪らない。すると、綾は微笑みながら答えてくれて、いろいろな所に沢山、キスしてくれた。

首元、首筋、頬、そして耳へと。

「……ひゃっ……ダメ、だよあっ……んんっ……あ、ん……だめえ……」

耳たぶをはむはむと甘噛みされ、気持ちよくていやらしい声が小さく出てしまう。

甘噛みされる度に体はゾクゾクとした気持ちのいい痺れに襲われ、脳を溶かしていく。

わ、私、耳弱いのに……それなのに綾は私の弱点でもあり、敏感な耳たぶばかりを弄ってくる。

恥ずかしいけど……もつと、もつとたくさん弄ってほしい。綾に触れて欲しい。

「……んっ……あっ……あっあっ……気持ちいいよお……んんっ……はあはあ」

耳たぶにはただ、耳を甘噛するだけじゃなく、時には耳たぶを優しく吸われたり舐められる。

吸われて舐められる度に敏感に感じて……腰が少しかくかく浮き上がる

気持ちいい……耳たぶを甘噛みされるのも優しく少しだけ座れるのも舐められるも、とっても気持ちいい。

恥ずかしくて堪らない。すぐにも綾を離したい。

頭ではそう思っているのに、快楽に囚われた私の身体は真逆の行動をしてしまう。

「あああっ……ん、んんっ……気持ちいいっ……綾お……もつとお……」

耳たぶを弄られ、襲ってくる快楽を私はただ、受け入れる。

体を襲うゾクゾクとした痺れがリズムよく襲ってくるもんだから、とっても気持ちよくて感じてしまう。

それに甘噛みの甘く気持ちのいい刺激と共に耳に綾の吐息がかかって、こそばゆくて……そのくすぐったい様な感じもまた、よくてとっても気持ちがいい。

ゾクゾクとした快感と快楽に囚われた頭は今すぐにもおかしくなりそう。

それに熱い。

体が熱いよお……全身が火照っているのを感じる。

ただ、火照っているだけじゃなくて……頭は甘くろおーとしているかの様にぼーっとしていて、もう簡単な事しか、綾の事しか考えられない。

それでも、綾に弄られ体に走るゾクゾクとした痺れのような快感ははきりと理解でき、とつても心地がよくて気持ちいい。

「やあっ……耳、くす……ぐった、い……綾お……あっあっ……うう……」

「くくっ……束、本当に可愛い、最高だよ。ウサミミカチユーシヤ付けて色ばい厭らしい声を出して……今、エッチな顔してるよ」

「うっ……んっやあっ、見な、いで……いやんっ……んっ」

言われた事が恥ずかしくて、目を閉じると綾は狙ったかの様に耳を甘噛みしたり首元にキスしてくる。

何度もそうさせる度に体にゾクゾクとした快感がまた、体を走り頭が甘くとりけてぼーっとしてくる。

そうして、もう一度綾を求めようとする……

「……んうっ……綾、もつとお……んっ!？」

「残念。ほら、時間」

「ほえ?」

意地悪な笑みを浮かべた綾に立てた人差し指を唇に当てられ、そう言われるとベットのの上にかかっている時計を見る。

時刻は十時半頃を指しており、寝るには少し早いかもしいが丁度、いい時間。

つまりはそういう事。

「そういう事だから……一旦、お預け」

「……ううっ、綾の意地悪っ！」

終始、意地悪な笑みを浮かべた綾にそう言われ、“一旦”お預けをくらったのだった。

…

第二十一話 ? (後書き)

というわけではいかなかったでしょう第二十一話 ?。

前以上に無茶苦茶頑張りましたよっ！

前回の話で伏線を張っていたはしっかり回収できましたね。

綾君が束さんにプレゼンとしたのはウサミミのカチューシャでした

www

綾君が束さんのトレードマークの原因ですねww

そして、今回の見所はエロチックな描写でした。

本当に頑張りました。約10回ほどはその描写は書き直しましたね。

エロチックな感じにご期待に副える感じになっていましたでしょうか？

活動報告の更新予告では規約ギリギリとか言っていましたけど、全然ですね(汗)

本番を書くのは得意なんですよ。基本、そういうシナリオを主にしてるので。

ただ、そればかり書くのは苦手ですね。描写的にも難しいので。

何にせよ、喜んでいただければ私としては幸いです。

目標としてはマグナムがトランザムしていただければ嬉しいですね。

今後もこういうテイストの話を書きたいですね。

まあ、次回へ続く………なんですけど。

今回は更にクオリティを高めようっ！

不評とかだったたりしたら、この話は消して修正したのをもう一度上げます。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でもいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします
す

第二十一話 ？（前書き）

エロい束さん、エロチックタイムっ！

前回よりも赤くて三倍ぐらい頑張った。

エロく仕上がったとは思っ。

それでどうぞっ！

第二十一話 ？

東視点

お預けをくらった後、私達はそそくさと寝る準備をしていた。主にさっきので乱れた髪を綾に直してもらったりや歯磨きとかだけだ。

そうしている時、綾の顔が恥ずかしさで見れなかった。

何度か目が合うとさっきの事を思い出し、顔が熱くなるのを感じ恥かしくて、つい目を逸らしてしまう。

さっきのは気持ちよかったけど……その反面、物凄く恥ずかしい。いざ、こうして頭が冷静になると綾とのさっきの事が脳裏に一瞬だけだけど、蘇って恥ずかしさのあまり、綾の顔が見れない。

だけど、さっきの事がまだ尾を引いており、お預けをくらって焦らされ、体は熱く火照っていて……何と云うか、む、むらむらしている。

「（むう）綾の意地悪」

時間はあれこれと寝る準備をゆっくりしていた為か、十一時を過ぎてしまった私達は一緒にベットに入った。

久しぶりに一緒に寝られるという事で、私は綾にぴったりと密着し、顔を綾の胸に埋める様にして横になっている。

そんな私を同じく一緒に横になっている綾は私の髪を撫でてくれている。

「（すうー、綾の匂いいい匂いだよ。それに鼓動もこんなにも近く

で聞こえて……安心するよ）」

悶々とした気持ちを抱えながらも、綾の胸に顔を埋め、綾の匂いを嗅ぐ。

とてもいい匂いで、心臓の鼓動の音も聞こえて、心が安らぎとっても安心する。

その顔を埋めつつ、匂いを嗅ぎ鼓動を聞きながらもさっきのお返しと言わんばかりに綾の胸に顔を埋めながらぐりぐりする。

「お返しだっ　ぐりぐりぐり〜」

「ちよっ！な、何っ!?!」

「何でもないよっ　」

ぐりぐりすると綾は驚いていたけど、満更でもない様子。私自身、ちよっぴり楽しかった。昔はよくしていたっけ。

「それにしてもこうやって一緒に寝るのは本当に久しぶりだね」

「そうだね。今は寮で部屋が別々だからね」

「だから、こうやって一緒に横になれているのはとっても幸せだよ」

甘える様にぎゅーと抱きついて、そう言う。

本当にこうやって一緒に横になれて寝るのはとっても幸せ。

学園に入学させられ、部屋が別々となり久しぶりに一人で寝ないといけない事になった日は中々寝付けなかったのは今となってはある

意味、いい思い出だ。

今は一人でも直ぐに寝られる様にはなつたけど。あの日までは当然の様に毎日、一緒のベッドで一緒に寝ていたから、中々寝付けなかつたのは当然かもしれない。小さな子供みたいだけど。

今日という日が終れば、明日からは別々に寝ないといけない。

なので、私は綾に腕枕してもらいつつ、ベッドやかかっている布団とかに私の匂いをつけておく。俗に言うマーキングみたいなものだ。オマケと言わんばかりにも甘えた様に抱きついて綾の抱き心地と匂いを堪能しつつ、綾の体にもすっかりマーキングしておく。

そんな事をしている私を綾は優しく抱きしめてくれ、髪を壊れ物を扱うかの様に優しく撫でたり梳いてくれたりしている。

何だかこれこれで気恥ずかしくてこそばゆくて、とつても気持ちがよくてリラックスしながらも心地よさに、目を細め、口元が緩む。

ふと気が付いたけど、綾はベッドと一緒に入って私が綾に抱きついている間、ずっと私の髪を触っている。

「ねえ、綾はずっと私の髪、触っているよね？」

「ん？そうだね……嫌だった？」

「嫌じゃないよ。むしろ、嬉しい。けど、どうして触っているの？」

嫌じゃない、むしろずっとこのまま優しく触っていてほしいけど、ふと気になった。

「何と言つか触り心地がよくて。束の髪、サラサラで綺麗だから」

「そ、そうなんだ。えへへ嬉しいつありがとうねっ」

綾は答えながらも髪を触れつつ、そう言ってくれど私は嬉しくて照れてしまった。

どんな形であれ、綾に褒めてもらえるのは嬉しい。

特に髪なら嬉しさは強い。「髪は女の命」というし。

それに……

「それに俺は束の長くて綺麗な髪が一番好きだよ」

そう、綾は昔から私の髪が大好きな髪フェチさんでもあった。

今さつき、ふと思いついたけど昔から私の髪をよく触っていて、時には髪を梳いたりだとかの手入れもしてくれていた。

特に綾は長い髪、ロングストレートが好きで私もちーちゃんも、そんな綾の好みに合わせて程よい長さのロングストレートにしている。まあ、綾に喜んで欲しいが故に今も伸ばしているけど長いものにも私自身気に入っているから、今更ばっさり切るつもりは毛頭ない。

「それに綾、髪も好きだけど匂いも好きよね。それは私もだけど、くすぐりたいよ」

「あっ、ごめん」

「いいよ。もっと、私の匂いを堪能して？私も綾の匂いを堪能するから」

そう言うなり、私は更に密着して顔を胸に埋め、綾の匂いを堪能始める。

すると、綾も私の髪を撫でるのはやめなかったものの、私の匂いを

嗅いで堪能している様だった。

嗅がれるのは吐息がかかって、こそばゆいけどこれはこれで気持ちよくて心地いい。

お互いを堪能して味わっている様で。

綾は髪フェチでせもあるけど、匂いフェチでもある。

今こうやって、髪を撫でつつも私の匂いを堪能しているのがその証拠だ。

昔からよく、一緒に寝た時は抱きしめられて嗅がれていた。

私はそれが何か嬉しくてもっと堪能してもらおうと、今みたいに密着して綾の匂いを堪能していた。

こうして考えると私もだけど、綾も変態だ。

「やあんっ くすぐったいっもおゝ綾はエッチで変態なんだから」

「何を言っているか。男はね？皆エッチで変態と言う名の紳士なんだよ」

「ふふっ何それっ。それに綾がエッチなのは知っていもんっ。あんなゲームするぐらいだったからねえ」

「……………」

罰の悪い声を漏らす綾。

あんなゲームとは、エロゲーの事。

と言っても、綾がしているのはそういうシーンがオマケみたいな感じの燃えゲーだったけど、それを初めて見つけてそういうシーンがあると知った日は偉く綾をとっちめたんだっけ。

元凶は一郎さんだったけど。

お返しと私は内心、そう思いながら笑みを浮かべ綾をからかっていると反撃が返ってきた。

「それを言うなら束だって充分、エッチで変態じゃないか。誰だっけかなあ〜昔、人の抜きたてのシャツ盗んで匂い嗅ぎながら寝ていたのは」

「ああ〜んっ！そ、それは言わないでよおっ」

「それにさっきまでエッチな顔して……エッチな声を出していたのは誰だったかなあ〜ん〜？」

「言わないでっ……ひゃっ！」

耳元で囁くように言われ、耳に綾の吐息がかかってくすぐったいくすぐったいのと同時にまた、あのゾクゾクとした快感が体を走りぬける。

普通にイチャイチャして火照ってむらむらしていたのは静まったと思っていたのに、ゾクゾクとした快感が体を走り抜けるとさっきの事もその快感も思い出す。
せつかく、落ち着いたはずなのに体がまた火照って……熱くなってきたよおっ。

「キスしよっか？」

「う、うんっ」

また、耳元で囁く様に甘く言われ、吐息がかかりゾクゾクっとして、

頭がぼーっとしそうになるのを絶えつつ胸に埋めていた顔を綾の顔の位置まで持っていく。

すると、目と目が合いドキッとすする。ただでさえ、甘く吐息がかかって頭がぼーっとしそうなのに、目が合うだけで胸の鼓動は早くなり、熱ぼくぼーっとしてしまふ。

「ん……くちゅ……ちゅ……ちゅる……はむ……ん」

舌の柔らかい感触、頬に当たる綾の熱い吐息。

そして、ゆっくりと激しく絡み合う舌……その全てが私を昂らせる。嫌でも物凄く体が熱く火照ってきている事が分かる。

「ふふっ、今の束はとってもいやらしい顔をしているね」

「いやあっ……ん、んうんっ……ちゅっ……」

恥ずかしくて顔を背けようとする、それを妨害する様にもう一度、強引に舌が割って入ってきて深いキスをする。

何度も何度も深いキスをして、激しくそれでいてゆっくり甘く舌を絡めあう。

もう、頭の中では深いキスをする事しかなく、深いキスは麻薬の様に頭を甘くぼーっと溶かしていた。

「ん、んちゅっ……」

一旦、唇を離し合うと唇と唇の間に唾液の橋がかかっており、ベツト近くの証明で薄くキラキラと照らされている。

その唾液の橋は直ぐに解けて切れたけど、橋がなくなったと同時に私達の目が合った。

ただ、目が合った……それだけの事なのに更に顔が熱く赤くなるの

を感じる。

頭の中は甘くぼーっとしているけど、とっても幸せな気分だ。

「いやらしくて可愛いよ、本当に。大好きだよ」

「大……好き？……いやらしい私も？」

「もちろん。そういうところも含めて、束の全てが大好きだよ」

そう言うと綾は優しく私をぎゅーと抱きしめてくれる。

抱きしめてくれると髪をまた、上から下へと優しく撫でてくれる。

やっぱり、気持ちがいい……そんな風に安らいでいるとお腹に硬いものが当たっているのを感じた。

これって……綾の、だよな。

という事は綾は私で興奮してくれってる？

「綾……興奮しちゃったの？私の体？匂い？」

「全部かな……束はとっても魅力的だから。嫌だった？」

「ううん、嫌じゃないよ……それどころか、とっても嬉しいっ」

綾が私で興奮してくれた。他の誰でもない私で。

そう思うと嬉しい気持ちで一杯になる。

だったから、もっと私で興奮して、私で満足して、私を味わって欲しい。

私達が愛する“刹那”を味わう様に。

「だから、もっと私を触って？キスだけじゃなくて……私の体、全

部を」

「いいのかい？」

「いいよ。優しく甘く私の体、全部を触って？私を好きにして？言葉だけじゃ淋しい…証が欲しいの…」

密着している性か、お互いに高まる鼓動が伝わる。

綾は背中に回していた右手を、私の胸元へと滑らせた。

この時点で今から何をされるのか分かっており、恥ずかしい反面、とっても期待している。

ゆっくりと服のボタンを上から外し、綾は私の胸元を露わにする。

ブラの紐を僅かにずらし、胸を少しだけ露出させた。

綾の息遣いが、胸にかかる。

それだけでまだ、触れられてないのにゾクゾクとした快感が体を走る。

「ふふっ可愛いね、束は。愛している」

「……っ！？うんっ！私も……ん、んっ…愛してる」

「愛している」、その一言でぱっつと甘くとろんつと溶けていた私の脳に衝撃が走りクラッと来た。

別に理性の箍が外れた訳じゃないけど、パズルのピースが一つずつれた様に理性がずれた。

言われなれても何度聞いても嬉しい。その一言だけで強張っていた体の緊張は解け、来るであろう快感と快楽を待つ。

そして、綾は私の胸に、優しく口づけする。

「はっ……ん、あ……っ」

それだけで、甘い吐息が漏れる。

唇から舌へ……綾は私の肌に滑らせる。

触れるか触れないか、ギリギリの線で私の胸を愛撫する綾。

綾の左手はもう片方の私の胸を、ブラの上から優しく掴む。

「あ……っくう……！」

私は恥ずかしさで声が漏れるのを我慢しようとしても、伝わる気持ちよさで必死に声を押し殺した様な喘ぎを漏してしまう。

いつしか私は綾にしがみつく様に抱きついていた。

綾に左手で優しく愛撫され、自分でも乳首が固くなっているのが判る。

すると、綾が左手の指で摘む様に刺激を与える。

「っ！……っあっ……」

刹那、首を後ろへのけぞらせ、綾の背中に回した手に一層力が籠もる。

そしてすぐに、綾にもたれ掛かると強く抱き寄せて、綾の耳元に切ない声で囁く。

「いやあっ、お願い……焦らさないで……お願い……っん！」

はあはあとした熱い息遣いが、漏れる。

私の脳はもう既にさっきの言葉と今の快感で完全に甘くとろけきつ

ている。

恥ずかしい事をされているのも分かっているけど、焦らされてじつ
たい気持ちになると同時に続きを求めてしまう。

もつと、綾に触れて欲しい。もつと、綾だけに触れられて私の体を
味わって欲しい……頭の中にあるのはそんな事だけ。

そうした私の反応を楽しんでいる綾は意地悪い微笑を浮かている。

そして、一頻り私の反応を楽しんだ綾は左の胸から一度、手を離し
パジャマの下を脱がし、

私が押し付けている胸に、ゆつくりと口を開き、舌で愛撫を繰り返
しながらゆつくりと歯を押し当てていく。

私は興奮に耐えるかの様に、全身を震わせる。

徐々に歯へ力を込めた綾は、舌で愛撫しつつ皮膚の下にあるこりつ
とした固さを楽しむと下の層を避け、柔らかな皮膚に歯牙を食い込
ませていく。

「あはあっ!!」

押さえきれない喘ぎ声と共に、私は腰を一瞬浮かせると片足を綾の
膝の間に強引に割り込ませ左の太ももに股間を押し付ける様にして
足を絡めた。

それに合わせて、綾の歯にも力が一層加わる。ぐつと食い込んでい
く感触を覚えた。

綾は力に強弱を加え、ゆつくりと、だが確実に私の胸へ咬み痕を刻
む。

歯を立てられたちよつとした痛みもあつたが、すぐにその意味も甘
く官能的な痺れに変わり、甘く官能的な痺れに覆われ、声を上げて
しまつ。

「あつ…うう、つ…うんっ！」

無意識になのか綾の左手にも力が籠もり、私の胸を荒々しく揉みしだいく。

「はっ…はあ…あう…」

そのリズムに合わせるかの様に、私は自ら腰を動かし 股間を太ももへ擦りつける。

恥ずかしいことだけど、自分で自分のアソコの熱さと、湿り気があるのを感じた。

「もっと…もっと強く…して…」

綾は一度胸から口を放すと、少しずらした所へ一気に噛み付く。左のブラを強引にずらし、私の胸の乳首を思い切り摘み上げる。

「きゃっ…うあ…いい…」

摘み上げられると痛みと共に官能的な甘い痺れを感じる。

そして、足に股間を打ち付ける様に、腰を振り出す。それに合わせて、綾の足も自然と動く。

力強く咬みながら、私の肌に吸い付く。

ベット近くの明かりだけの暗い部屋に、服が擦れる音とベットが少し軋む音、熱い吐息が響いていた。

初めてする行為なのにまるで実は知っているかのように、体だけは先に知っているかのように私の動きが、激しさを増す。

「私…っあ！…もっつ…だめえっ！…っはあう…っ」

絶頂に達した私は、全身の力を抜けて綾にもたれ掛かり　そのまま二人とも軽く抱きしめあった。

「はぁ…はぁ……」

二人とも荒い呼吸をしながら、お互いに余韻に浸っているかのようにな動かなかったが、やがて私が胸に埋めていた顔を上げると……

「好きっ…大好きっ！」

そう言っ唇を重ねる。

お互いの身体に腕を回し、強めに抱きあい貪るように舌を絡める濃厚なキス。

「うふうん…うん…」

いったばかりで、身体が敏感になっているのか　私はキスの間も吐息が途切れない。

やがて唇を離し、お互い息を整えながら見つめ合った。

「……大、好き……だよ綾」

「俺も大好きだ、東。誰よりも何よりも東を愛している」

「うんっ！私も綾の事を誰よりも何よりも愛してる。ただ、綾だけを」

そう二人で愛の言葉を紡ぎ合い、口直しみたいな普通のキスをもつ一度、しあった。

まるで、この一時一分一秒、この至福の刹那が少しでも長く続くよ

...

α, β, γ

第二十一話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょう第二十一話ー？

トランザム（エロチックタイム）はこれにて終了です。

満足していただけたでしょうか？

今回は前回よりも赤くて三倍ぐらい頑張った。

ただ、描写が所々、不十分かもしれない。

束さん視点で書いているけど男視点ばいから…

相変わらず、束さん視点が一番書くのは楽しい。一番難しいけど。

やっぱり、二人は一線を超えませんでした。それは次回で話すんだけど諸々の事情でしなかった。

自分ではこんかいかかなりエロく上手く書けたと自負しています。

やっぱり、理論話や戦闘なんかよりも甘い話やエロい話の方が書いていて楽しいし得意だ。

大丈夫だよな？この話。

おおぴろに書いたけど本番はしてないわけですし……

それに前回の耳たぶ舐めプレイよりもエロくしようとするこうなる訳だし…

まあ、いいか。

何か他にいろいろと言いたい事あったけど眠たくて忘れました。

明日といか今日、5月28日に鬼哭街を予約店に取りに行かないといけないで。

その事で頭が一杯です。台風も来るし……何よりもソフマップ特典が楽しみ。

さあっ！今日の夜にはヤンデレロリゆかりんボイス漬けたっ！

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にお気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いいたします

第二十一話 ？（前書き）

長かった……

この話が終わるまでに二週間弱かかったな。

これでも早いほうか……

それではどうぞ。

第二十一話 ？

東視点

あの後、汚れてしまった下着とパジャマを服を直した。備えあれば憂いなしとはよく言ったもので、こういう事もあるうかと代えのパジャマや下着を持ってきといて正解だった。綾のパジャマの下は汚れてしまったのは無性に恥ずかしかったけど、幸いな事に布団やシーツは汚れなかった。

そして今は、一度起き上がり、後ろから綾に抱きかかえる様に綾の膝に乗ってベットに腰を降ろしている。

後ろにいる綾は乱れた髪を持ってきた櫛で梳いて綺麗に整えてくれている。

さっきのも気持ちよくて幸せな刹那一時だったけど、今こうして髪を梳いてもらっているのも幸せな刹那一時である。

ちなみに時間は十二時近くでそろそろ、日付が変わろうとしている時間帯。

そろそろ本当に寝ないと明日に響くかもしれない。

「それにしてもごめんね」

「何が？」

「私だけ、その……き、気持ちよくなって」

「いいよ、気にしないで。可愛いトコいっぱい見れたし。俺も満足」

髪を整え終わつたのか後ろから私を抱きしめ、嬉しそうに言う。
何だか、そういう言われてしまうとまた恥ずかしくなってきた。それと 동시에 私は、その言葉で我に返り、パジャマの胸元から覗く胸元を見てまた少し赤くなる。それにいち早く、気づいた綾が言った。

「跡ついているね。大丈夫？」

「ふふふっ大丈夫だよ。証、くつきり付いてるからこれで私は綾だけの物だつて確信できる。それが何だか幸せだよ。消えそうになつたら、また付けてね」

「えっ？ん……分かった」

「やったっ」

嬉々とした小さな声を上げ小さく喜ぶ。

胸元を見ると、証を付けてもらったところが赤くなっており、キスマークみたいになっている。

丁寧に歯型までついており、キスマークは強く付いている。

見て、「これが私が綾の物という証なんだ」と思うだけでも、嬉しい気持ちになる。

それに歯型もくつきりついて、綾の独占欲みたいなものが知れてよかった。

綾は基本的に余計な感情は他人に知られないようにしているから、こんな形でも知れるのは嬉しい。

だから、私も……

「えいつ」

綾の方を向いて、両手で胸を優しくついて綾をベットの方へと押し倒す。

馬乗りの様な耐性になると綾は驚いた顔をしていた。ふふふつ、可愛い。そう思いながらも、顔を綾の首筋へと持っていて、綾の首の筋から肩ら辺に最初優しく口付けする。

「なっ!？」

「喋らないで。じっとしてて」

綾に言い聞かせ、優しく口付けをしつつ、歯を立て綾に優しい痛みを与える様にしてキスマークをつける。

たった数秒の事だっけど、歯を立て、盛り上がって口の中にある首の筋から肩ら辺の肌を舌でまさぐる事に酔っているかに思えたのだ。

「う…」

「ふうん…ん、んん…」

漏れる綾の声に快感と安堵感を覚えつつも自分の溢れる吐息も声も構わず、行為を続ける。

やがて、「はあっ…」という少し大きな喘ぎを漏らすと同時に、私は口付けしていた肌から口を離し、馬乗りの状態で綾を見る。

「えへへ 私も付けちゃった 嫌だった？」

「そんな事ないよ。急だったから驚いただけ。とっても嬉しいよ。」

これで俺も東の物という証が付いたね」

「うんっ 私は綾の物で綾は私の物だよっ」

冗談めかしに綾が言った言葉が何だか嬉しくて私も嬉々とした声で綾に馬乗りの状態で抱き付きついて言った。

耳元では綾の心臓の鼓動音が聞こえて、吸い込まれそうな感じがするぐらいとっても安心する。

この幸せを失いたくない、失うものか……そう思いながら綾に言い聞かせるように言う。

「だから、ね？浮気したら殺すよ」

「……き、肝に銘じておきます。それに東は俺なんだから、大丈夫だよ」

「うんっ そうだね、それならよろしいっ」

半分本気で半分冗談で言うと綾は苦笑いするように言ってくれた。半分冗談だとは自分でも思うし、大丈夫だと綾を信頼しているからそんな心配は大してはしてないけど、もしも浮気でもされたら本気で私は狂うだろう。

私にとって綾はなくてはならない存在で、“もう一人の私”でもあるんだから。

「さて、そろそろ本気で寝ようか。日付も変わったしね」

「そうだね」

そう言って私達は今度こそ、寝る為にベット……布団の中へと二人

一緒に入る。

時刻は十二時十五分頃。そろそろ、本気で寝ないと確実に明日に影響する。

布団の中へと入ると私達は手を繋ぎながら、横になる。

手を繋ぎながら寝る……これは私達が寝る時にする決まり事みたいなもの。

寝ていてもお互いを確認しあえる様にと昔からよくやっつけていて癖付いている。

「今日はありがとうね」

手を繋ぎ綾の方を向きながらそう、私は言う。

すると、綾は何の事が分かっていないようで少し疑問げな顔をした。

「ん？」

「だから、デートやさっきの事。私たくさんの幸せをありがとう」

「感謝されるほどの事でもないよ。それなら、俺の方こそありがとう。たくさんの至福の刹那を俺と共に味あわせてくれて」

「それは私もだよ。今日は本当に楽しくて幸せだったよ。だから、ありがとう」

「うん」

もう一度、お礼を言うと綾は手を繋ぎながら片方の手で私を抱き寄せてくれた。

今日は本当に楽しくて幸せだった。
楽しい事はあつという間に時間が過ぎる……とは、よく言ったもので、デートしている時はあつという間に時間が過ぎた。
まるで一瞬の刹那の様で。あつという間に過ぎたけど、私達はその一瞬の至福の刹那を味わいつくした。

それにプレゼントだった貰った。
ウサミミのカチューシャという恥ずかしいものだったけど、それでも嬉しく大切にしたい。

そして、さっきの出来事。
期待していた事とはほんの少しだけ違うけど、あれはあれはで気持ちよかった。

今日は私だけ気持ちよくなってしまったけど、いつかは私も綾を気持ちよくしてあげたい。
本番だって……近いうちには。

「ねえ、綾？変なこと聞いてもいい？」

「変な…事？うん、いいよ」

「綾はその……続きというか……本番はしたくないの？」

本当に変な事を聞いてしまった。

多分だけど、それは綾だっと思っていたに違いない。
綾だって、男の子なんだからそういう事に興味があつてほしいと思うのは当然だと思う。

「うん……そうだね。確かにしたいよ。俺だつて一応、青春真っ盛りな男子だからね」

「なら、してもいいんだよ？私を襲ってくれてもいい……綾になら、襲われたって何されたっていい、嬉しいから」

「襲うってねえ……そんな事はしないよ。それに本番はしたいけど束を大切にしたいから今はまだ、しないよ」

案の定の言葉が返ってきた。

本当ならしたいのに綾はやっぱり、自分よりも私の事を大切に思っ
てしてくれない。

大切にしてくれている……それはそれで嬉しいけど嬉しい反面、残
念な気がして申し訳ない気持ちにもなる。

「第一、学生寮だからね。流石に難しいかな、本番は。いろいろと、
ね」

「……そう、だね」

これが綾が本番をしないというか、出来ない第二の理由だ。

忌々しい……こんな学園に入学させられてなかったら、一々忌々し
い周りなんて気にせず出来たのに。

ある意味、これは自業自得なのでどうしようもない。ああっ忌々し
い。

「そっか……綾は私を大切にしてくれるんだね」

「当たり前だよ。束を大切にしたいって気持ちは誰にも負けない自
身があるから」

「あつははっ嬉しい。でも、ね？私は……告白して初めてキスした
“あの日”からもう覚悟は出来ているんだよ？」

「そうだとしても大切にしたいし、あまり早く求めすぎても束を怖
がらせてしまつと思つたんだ」

そう言う綾の繋いでいる手の握る強さが優しいながらもちよっぴり
だけ強くなる。

いろんなスキンプシップの果てに、綾になら触れられてもいい。

そう思っているし……“あの日”そういう事にも全て覚悟は出来て
いた。

「きつと、それはいつまであつてもいつもまでたつてもちよっぴり
怖いと思つたの」

「そうは言っても束にはやっぱり、無理させたくはない。覚悟は出
来ていても、心の準備はまだなんでしょう？」

「……………うん」

どうやら、私の胸の内は綾にはバレていたようだった。

情けない話で矛盾しているようだけど覚悟は出来ていもまだ、少し
心の準備は出来てない。

こういうのはその場の雰囲気だけならいいけど場だけの流れ、勢い
でするのもあると奈々師匠から聞いた事はあるけど、それは少し嫌
だ。

初めてなんだから、お互いの合意の下でゆっくりとそれでいて激し
くしたい……。

「だったら、無理する事はない。覚悟が出来て心の準備がちゃんと出来てから近いうちにはそういう事はしよう」

「うん、そうだね。それが出来た時は必ずしようね？心だけじゃく、体でも深いところで繋がって綾を感じたいから」

「分かった。その時は何処かホテルか旅館で、ね？それまでは待たせてしまう事になってしまっうね。ヘタレでごめん」

「そんな風に自分を言わないで。綾はヘタレじゃない、誰にもヘタレなんか言わせない。そんな事を言うなら私がそいつを殴っておくよ」

「あつはは。そう言って貰えると嬉しいよ」

私達はもう一度、繋いでいる手を握りなおす。

暗い部屋でも綾が傍にいる事を確認でき、直ぐ近くでは綾の鼓動の音が聞こえ安堵感を再び覚える。

安堵感からか、安心した私は段々眠たくなってきた。

「ふあ〜」

「眠たそうだね。話はここまでして寝ようか」

「そうだね。あつ……そうだ、アレ言っつて」

そう言っつと綾は「分かった」と言っつて言っつ。

「誰より何よりも君を想っつ。それだけが決して揺るぐことのない事実。愛しているよ、束」

綾は言い終わると私を更に優しく抱き寄せてくれる。

あの約束とは違うもう一つの言葉。

あの約束をしてくれた日に言ってくれた言葉である約束の次に今まで私を生かしてくれたかけがえのない言葉。

やっぱり、行動で想いを表現してくれるのもいいけど言葉で想いを表現してもらえるのもいい。

“綾はもう私のもの。”

私のためだけのもの。

なにもかも私のためだけに”

それは綾に対しても同じであり、

“私はもう綾のもの

綾のためだけのもの。

何もかも綾のためだけに”

だって、私達は二人で一つ、綾は私で私は綾、なのだから。

「私も誰よりも何よりも綾だけを想って愛してる。それじゃあ、お休みなさい」

「ああ、お休み、束」

最後にお休みのキスをして、私達は深い眠りへと落ちていた。

…

第二十一話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第二十一話 ?

今回は活動報告で予告した通り締めの話でした。最後までイチャラブえ……

締めの話なので補足や小話は思いつかないのですが。

東さん視点を書くのは兎に角、楽しかったww夏休み編に入るまで東さん視点がないのは残念だ。

全体を通して二十一話のエロ話は満足していただけましたか？

かなり、頑張ったよ。本番ならオリジナル小説でわりと書いているから得意だけど

ギリギリとなると難しい……満足していただけたのなら幸いです

ちなみに本番をしなかった理由は作中通りですが。

私的な事情を言うと千冬にバラすまで二人にはさせないつもりです。それが本番をさせなかった理由でもあります。ノクターンに行かないあかんし。

それにちゃんと親友には認めてもらったから……しないかね？

罪悪感が云々……まあ、東さんならその罪悪感、背徳感が堪らないと思います

レッツ背徳っ！

ちなみに最後の東さんの心理描写に出てきた“”つけの台詞は分かる人には分かる。

特に鬼哭街を知っている人には、うん。

次回からは学年トーナメント編。

バトル回ですね。本当にありがとうございます。
今回は綾タンと千冬様のISについての説明会と伏線を張る予定。
オリジナルシステムも登場です。お楽しみに。

そろそろ、瑠璃色の更新もしないとな……一ヶ月近く泊まっているし。

こっちの更新やめようかな……いや、あっちをやめようかな……何か受け悪いし

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします
す

第二十二話（前書き）

六月、最初の更新

そして、作者、メンタルへタレ中。

五月病ならぬ六月病ですね。本当にありがとうございます。

それではごっごっ！

第二十二話

綾視点

六月の最終週、学年トーナメントを明後日に迎えた日の放課後。

俺達は学園の外れにあるアリーナのピット内で、明後日に控えている学年トーナメントに向けて束にISの最終調整をしてもらった。

外れにあるアリーナで三人きりで最終調整をしているのは、秘密遵守だからだ。束製のISは現存のISの存在が無意味になるほどの代物であり。

束自身、自分が作ったISをあまり好き勝手に整備されたくないという事もあり、外れのアリーナを借りて、ピット内で最終調整をしている。

ピット内で最終調整している束の前には千冬の「暮桜」と俺の「黒百合」の二機が左右横に並び機体展開状態で最終調整を受けている。それを束は簡易式移動型ラボ『名前はまた無い吾輩は猫である（仮）』を使い、平
行して空間パネルも使い、作業している。

ちなみに簡易式移動型ラボ『名前はまた無い吾輩は猫である（仮）』は束専用の作業補助ツールだ。

展開され、左右二対で計四つの前腕部だけの部位が浮いているパーツを一見するとISの様に見えるがISではない。

簡易式移動型ラボの名が表示通り、ISの研究や実験、修理、調整をする作業補助ツールであり、束は基本、学園等の外部ではこれを使ってISの作業をする。

名前に（仮）が付いているのはまだ、プロトタイプらしく……これからどんどん進化するらしく取って付けたものらしい。

「~~~~」

アリーナのピット内で俺と千冬の専用機の最終調整をしている束は鼻歌を小さく歌いながら再調整している。その様子を俺と千冬は傍らで見ている。

「いよいよ、明後日には学年トーナメントだ。」

これにより、間接的に学年最強で決まってしまうらしい。ついでに世界最強候補も決まってしまうらしい。

俺の立場を揺るがしてしまいそんな危険なトーナメントだが、悲しいかな棄権するは出来ない。

理由としては、クラスメイト全員からの推薦が強く、政府の役人も見に来るらしく棄権しようにも棄権できない。

特に理由として二つのうち強いのが、千冬と束に「学年トーナメントには必ず出る様に」と強く言われており、無碍にするわけにもいかず棄権する事は出来ないのである。

そんな事を思っていたのが、表情にでも出たのか千冬が問いかけてきた。

「何だ、変な顔をしているな、綾。まだ、出るのに不服なのか？」

「そういう訳じゃないけど。何だかなあ〜とと思って」

「いい加減、覚悟を決めろ。お前には拒否権なんかないのだからな」

「酷い話だ。覚悟なら出来ているさ、推薦されて出る事を決めたとしても出て戦うのは俺だ。なら、自分の意思で戦う」

「そうか、ならいい」

言った通り、覚悟なら出来ている。

推薦させて出る事になったとしても出ると最終的に判断を下したのは俺だ。

いつも、どんな時でも自分の意思で判断を下し、戦ってきた。

ただ、今回は「何だかなあ」と何となしに思った。ただそれだけの別段、深い意味のないことだ。

「よし、終り」

千冬とそんな話をしていると、どうやら束の最終調整が終わった様だった。

最終調整が終わった束は、疲れを和らげるかの様に「んー」と小さく言いながら、手を上に伸ばし伸びをしている。

「お疲れ様、束」

「うんっありがとう。暮桜の最終調整は出来たよー完璧っ」

「すまないな、ありがとう」

「どういたしましてー この位の事、私からすれば朝飯前の夕飯前だよ」

千冬に感謝の言葉を言われ、嬉しかったのか束は今一つ訳の分からない言葉を言って嬉しそうにしている。

そんな束の訳の分からない言葉に相槌を打って、適当に流すと千冬は腕を組みながら、自分の専用機である「暮桜」を見つめる。

千冬の専用機「暮桜」。
企業などに技術提供の形で公開する為に解体した「白騎士」に変わる束製の千冬の専用機。

コアは白騎士が使っていたナンバー001が研究所に提供された事により、白騎士のコアが使っていたコアが使えない為、ナンバー003のコアを使用している。

第一世代型（性格には第1・5世代型）の機体にして、基本的に高速近接戦闘を焦点に置いた機体であり、他の機体よりも装甲が薄い分、驚異的な機動性を誇っている。

主力武装は刀剣の形をした刀剣型近接武器「雪片」のみを備え、操縦者の操作力に左右される機体だが、千冬は自分の手足の様に完全に使いこなしている。

武器は少ないがその分、現存のISよりも遥かに進んだ技術が詰め込まれている。

こんな感じの高速近接戦闘を焦点に置いた千冬に合った、千冬らしい機体だ。

「黒百合はどうなの？」

「私が出る最終調整は終わったよ。あとは綾も最終調整すれば完璧」

「そうか、ありがとう」

束にお礼を言いつつ、束から空間パネルを受け取ると黒百合のOS調整を始める。

基本的に束が全て俺に合わせて完璧にしてくれてやる事はないけど、OSは俺の担当なので俺が調整する。

OSの調整をしつつ、黒百合に少し目をやる。

俺の専用機「黒百合」。

白騎士解体に伴い白騎士事件時に使った「黒騎士」を解体して、暮桜と同時期に束と俺が作り上げた機体。

コアは黒騎士からそのまま、ナンバー002のコアを使用している。一世代型（性格には第1.5世代型）の機体にして、暮桜同様、基本的に高速近接戦闘を焦点に置いた機体であり、他の機体よりも装甲が薄い分、驚異的な機動性を誇っている。

主力武器は三日月の刃は黒く、長大でありながら無駄がない、巨大なギロチン『マルグリット・ホワ・ジュステイス罪姫・正義の柱』のみを備え。

このギロチン自体が黒く禍々しい機体を象徴するものであり。現存のISよりも遥かに進んだ技術が詰め込まれた機体同様、このギロチンにも様々な技術が搭載されている。

「にしても、いつ見ても黒百合は凄いな」

「何が？」

「存在そのものが、だ。まるでISでお前を再現した様な機体だ」

「そうだね。黒百合はIS版の綾だね。それに初めこの機体デザインと概要を言われた時は少し驚いたな」

「そうなのかい？」

「うん。だって、綾ならガンダムとかにすると思っていたから。まさか、こんな感じで来るとは思わなかった」

束にそう言われ、内心で「そうだな」と思う。

束が言った通り、初めはガンダムを再現しようと思ったり、某装甲

悪鬼村正の某村正みたいにしようかとも考えたが。今一度、考え直した時にこの黒百合の機体デザインと概要が思い浮かび、これだと思った。

「武器も雪片みたいに刀剣だと思ったら、黒くて大きいギロチンだし」

「悪趣味だけど……ね」

「そんな事はないさ。何というか、私は綾らしいと思っぞ」

「ありがとう、千冬」

「でも、黒百合って不思議な機体だよ。私でも分からない事があるから。いや、黒百合というよりもナンバー002のコアが不思議だね。唯一、初期化できないコアだし」

「そうだね」

ナンバー002は初期化できない。

構造的には他のコアと同じらしいのだが、初期化しようとするときコア自体がエラーサインを出し、それを拒む。

一度、束が無理やり初期化しようとしたが、その時はその初期化の動作自体受け付けなかった。

初期化をコア自ら拒むコア……まるで生きて明確な自我があるようだ。

「まっ、いいけど。初期化できなくても、綾の個人データは残して初期化みたいな状態にはなってくれるから、何の支障はないし。それにやっぱり……」

「やっぱり？」

「このコアには明確な意識が自我があるんだよ。まるで様々な感情のある人間の様な、ね？」

「……人間の様な」

束の言葉を聞き、繰り返すように呟く千冬。

「私でも男である綾にコアが反応する様に作ってないのに反応して、綾の為を思って初期化を拒む。変わった子だよ」

様々な感情のある人間の様な明確な意識か……。

それなら、それはそれで嬉しい。

このコアも生みの親である束に逆らってまで初期化を拒み、俺を覚えて……想ってくれている。
いつか……

「いつか、このコアの意思が漫画やアニメに出てくる様な人間みたいな様々な感情を持った完全自立型サポートAIに進化するかもしれないね」

思っていた事と同じことを束は嬉々とした声で言った。

「……ありえるのか？」

「もちろんっ コアは自己進化する様に作ったからそういう事もありえないよ。むしろ、私はそうなってほしいなあ〜楽しみが増えるから」

「楽しそうだな」

「楽しいよ、ちーちゃん。沢山の未知を考えられて。早くその未知の瞬間の刹那を感じたいよ。それにこの子はこの子は綾の為に生まれたのかもしれないね」

「どういう事だ？」

「だって、この子は私でも男である綾にコアが反応する様に作つてないのに反応して、綾の為に思って私の初期化を拒んだから。それが嬉しいよ。流星は私の子っ」

子供の成長を心の心の底から楽しみにしている親の様に楽しそうに愛しそうに話す東。

いつか、完全自立型サポートAIに進化するかもしれない。

そうなってくれたら、まずは「ありがとう」と言いたい。

そして、俺と東と共に何気ない至福である刹那を感じさせたい。

それに完全自立型サポートAIに進化したら、明確な自我が誕生する。

そうなれば、東が言うとおり「子」になると思う。

「他のコアもそうなるのか？」

「さあ？それは私でも分からない。私は“全てを知っていても全てを把握している訳じゃない”からね。進化は未知数だとよくいうし」

「そうだな」

「それにこのコアも特別なんだよ。綾が作ったエイヴィヒカイトシステムを乗っけているから」

「確か……ワンオフ・アビリティーと合わせて搭乗者の渴望を元にしてその渴望を能力として再現するシステムだったな」

エイヴィヒカイトシステム。

ワンオフ・アビリティー

機体搭乗者の渴望を単一仕様能力と合わせて再現するISの精神干涉理論に基づき応用して作ったシステム。

これはOSを作る過程で出来た偶然の産物。ある物語を元にシステムを構築をして、現在このシステムを搭載しているの黒百合のみ。暮桜にも搭載しようと思ったが、データ容量も割りと大きく、実はこのシステムまだちゃんと起動した事はなく、搭載するのは黒百合のみとなった。

理論としては束の協力もあつて確りしてシステムにも問題がないがちゃんと起動した事はない。

ワンオフ・アビリティー

原因として考えられる要因として、単一仕様能力をまだ数度しか発動させていない事と渴望の求め方が悪いのかもしれないのが原因だと考えている。

今のところはただ、データ容量が大きいお飾りに過ぎないが……その内、ちゃんと動いてくれると思っっている。いや、動いてくれないと困るといのが本音である。

しかし、そのシステムを乗せている事がナンバー002が特別なのに関係しているのか……何というか不思議なものだ。

「あつ……そつだ。ワンオフ・アビリティー、本当にこの学年トナメントで使うの？」

東と千冬の話聞きつつ、暮桜のOSの最終調整しているとそんな事をふと思い出した。

「うん、そうだよ。政府の役人共が来ているこんな絶好のチャンス、私が見逃すわけじゃないじゃん 世界にまた、ISの凄さと奥深さを見せ付ける。パフォーマンスの一環だよ」

「実際に使うのは私達だになっ」

「分かっているって」

冷静に、そして語気を強めて千冬は東につっこんだが、東はそんな事を無視して楽しそうにおどけて言う。

すると、また千冬がはっと浅く溜息をついた。何だか自分の事に千冬に悪い気がした。

単一仕様能力……ワンオフ・アビリティー。

ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する固有の特殊能力。通常は第二形態から発現する。それでも能力が発現しない場合が多い。

ちなみに現存のISでこの単一仕様能力ワンオフ・アビリティーが使えるのは黒百合と暮桜の二機のみ。

この能力については既に発表しているが、実在するものとして公表するのは今回の学年トーナメントが始めてとなっている。

だから、東はこの学年トーナメントを上手く利用して、単一仕様能力ワンオフ・アビリティーを目に見える形として公表つもりなのだ。

「綾のサポートOSのお陰でプロトバージョンよりもエネルギー効率もいい。これは上手くいくよ。ありがとう、綾っ」

「どういたしまして」

余談だが、束が基本的に一人でISの基礎理論を考案、実証し、ハード方面を担当し俺はソフト方面を基本的に部分的だが担当している。

ワンオフ・アビリティー
単一仕様能力のサポートOSもその一環の一つである。

このサポートOSは単一仕様能力に使うエネルギー効率をよくする為のサポートOSであり、特に暮桜の能力では重宝している。

「暮桜の『零落白夜』と黒百合の『絢爛舞踏』、どれもいい能力だよねえ〜ウフフ」

手元のPADで二機の状態と機体情報を見つつ、楽しげな笑い声を小さく漏らす束。

『零落白夜』と『絢爛舞踏』の能力は対に相反する様に作られたワンオフ・アビリティー。

暮桜のワンオフ・アビリティー、『零落白夜』。
対象のエネルギー全てを消滅させる単一仕様能力であり、使用の際は雪片が変形し、エネルギーの刃を形成する。

相手のエネルギー兵器による攻撃を無効化したり、シールドバリアを斬り裂いて相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられる暮桜の象徴にして最大の攻撃能力。

ただこんな凄い能力でも完璧ではなく、ただ一つ大きな欠点がある。零落白夜は自身のシールドエネルギーを消費して稼動するため、使用するほど自身も危機に陥ってしまう諸刃の剣でもあり

現段階の零落白夜はエネルギー効率も悪く、シールドエネルギーを

いくら発動時セーブしようとしてもかなり持っていかれる。
そこで俺が使ったOSが採用され、シールドエネルギーを攻撃能力に支障を出さないギリギリラインで能力用とシールドエネルギーの二つ分等し、能力を最大限発揮させる事に一役買っている
こんな感じに凄く完全無敵、と見えるがこのOSも毎回毎回点検をして調整を加えないと続けてこの状態では続けて使用できない（一応、連続使用できる様には緊張様ではあるが。

そして、次に黒百合の単一仕様能力、『ワンオフ・アビリティ 絢爛舞踏』。

この能力は暮桜とは反対物であり、暮桜の一对零のエネルギー消滅能力に対して一对百のエネルギー増幅能力となっている。

使用時には、少ない残量のエネルギーを増幅して一気にフル状態にし、理論上はほぼ半永久的に活動できる。

だが、この能力は完成している暮桜の『れいらくびやくや 零落白夜』とは違いまだ、発展途中だ。

最終的には減ったら増幅し一気にフル状態にしてを繰り返すし、理論上はほぼ半永久的に活動できるの能力と他のISへのエネルギー提供を機体接触するだけで即時実行出来る事を目指している。

ただ、機体接触による他のISへのエネルギー提供の能力は現段階では理論のみは完成しているが、能力安定性が最悪で理論のみ止めて実装していない。

それでもOSのサポートも受けて、強力で驚異的な能力である事には変わらない。

これらの単一仕様能力を今度の学年トーナメントで使い、世間に目に見える形として公表のか……

また、人の世が束、篠ノ之束に対する評価が危険なものになるな。

まあ、仕方ない……束はそんな事すらも分かった、見越した上で次に自分のやりたい事の為にそんな事も利用そうだ。

それを俺は東に対して度の過ぎた被害が出ないように全力で守ればいい、ただそれだけの単純な事。自分の身に代えても、必ず。

「あっ、そうそう。使用して公表すると言っても、綾かちーちゃん、どちらか優勝者を決める最終決戦で使用してね？」

「「はっ？」」

東の言葉に俺と千冬の間の抜けた声が重なって出た。

これじゃあ、俺と千冬が決勝戦で優勝を争って戦うと言っているものじゃないか。

「何だ、その言い方じゃ、私達が決勝戦で戦うと言っている様なだろ？」

「うん、その通りだよ、ちーちゃん。必ず綾とちーちゃんは決勝戦で優勝者を争って戦うよ」

いつものおどけた様な表情ではなく、東はそうなると分かりきった様な真面目な表情で何の飾りの言葉もなく、ストレートにそう言った。

「どうしてそう思うんだ？」

「だって、私の自慢で誇りである二人なんだもん。そこらへんのつまらない人間に負けるなんて絶対にありえないよ」

「そうか……」

東が真面目な顔をして、何か予言めいたことなどを言った時、それ

は必ず起る。

それは白騎士事件でも強く理解しているからこそ、これに関しては本当に質が悪くて、心の底からそうだと確信できる。

「それに私は見てみたいんだ」

「何をだ……？」

「有を無に返すワンオフ・アビリティーと無を有へと変えるワンオフ・アビリティー同士がぶつかるのを」

そう言い更に束は言葉を続ける。

「私が生み出した最高のISを使って最高の親友達が優勝を巡って争う姿を。そして、何より私は本気の全力全開で戦う綾とちーちゃん姿を見ていたんだ」

束は俺達の方を向き、そうになっている姿を思い浮かべている様に楽しそうに言った。

本気の全力全開で俺と千冬が戦っている姿を見たいか……

我が彼女ながら、とんでもない事を考えるものだ。

そんな事をすれば俺と千冬で本当に世界の最強を争うことになってしまう。

それはそれで一興だが、本気の全力全開を出せか……

「これはあくまで私の予言だからあまり気にしないで。でも、ワンオフ・アビリティー《単一仕様能力》は決勝戦で二人が戦った時に使って欲しいな。見栄えいいから」

「何だ、それ。矛盾した言い方をするね、束は。気にするなと言っても決勝戦で俺と千冬が戦う事は変わらないんだろ？」

「あははっ、うん、そうだよ。やっぱり、嫌？」

「ううん、そんな事はないよ。そうする事もまた一興だからね。だったら、そうしてみようかな。千冬もそれでいい？」

「ああ、私はいいぞ。本気の全力全開と綾と戦うのは初めてだからな、楽しみだ」

そうなる事を千冬も楽しみにしているのか、ニヤ付いた表情をしている。

たまには、本気の全力全開を出して戦ってみるのもいいか。自分の強さに過信しているわけでも慢心している訳でもないが、それも一興だ。

以前の様なちよつとしたミスも気を付ければどうにかなるだろう。

それに一度でいいから、俺も本気の全力全開の千冬と戦ってみたい。そう思い始めると心なしか、少しずつトーナメントが楽しみになってきた。

それに何より、束の願いだ。叶えてあげないわけがない。

「そっか、ありがとう。二人とも。私の話に乗ってくれて。大好きだよ」

「お、おいつ」

「ちよつとっ」

嬉しかったのか束は、その嬉しさを体一杯で表現するように俺と千冬に抱きついてきた。

「うんうん。二人ならそう言ってくれろと信じていたよ。よくっ！そうと決まれば、時間も時間だし。このまま学食に夜ご飯食べに行っこ」

「そうだな」

時間を見ると既に六時を回っており、最終調整を全て終わらせ、機体機状態にしていた機体を機状態に戻すとアリーナから後にして、そのまま食堂に向った。

「~~~~」

食堂に向う道中、先ほどの事がよっぽど嬉しかったのか束は俺達の前で軽くスキップしながら食堂に向っていた。

流石にすれ違う人には不思議そうな目とかで見られたりはしたが、何だか束のその姿は微笑ましかった。

本当に束のこの望みや願いは今回の学年トーナメントで叶えてあげよう。そして、嬉しそうに喜ぶ束の満面の笑みを勝利品とさせてもらおう（自己承諾だが）

そんな風に考えながら食堂に向っていると、隣にいる千冬からプライベートチャネルがきた。

『どうしたの？』

『いや、な』

隣で一緒に食堂に向っている千冬表情はいつもと変わらないが、声は何かモジモジとしている様に感じた。

何か、もの言いたげに言葉を詰まらせていると千冬は決心した様な顔つきになり言う。

『綾、少しお願いがあるんだがいいか？』

『いいけど……内容によるよ？』

『そ、そうだなっ。では』

妙に声に緊張がある千冬は一つ咳払いみたいなものをして言った。何を言うつつもりだ？

束の機嫌を損ねない程度とそれを遵守して俺の許容範囲を越えてないお願い聞くんつもりだけだ。

『そのっ、この学年トーナメントで私が優勝したら……わ、私とデートしてくれっ！』

「えっ？」

「どつたの？綾？」

「いや、なんでもない」

『おい、バカっ、落ち着け』

プライベート・チャンネルで話していたが、千冬の恥ずかしそうだけど勇気を振り絞った様な声で言われ、思わず普通に声を出して小

さくだが驚いてしまった。

すると、案の定隣の束が不思議そうな顔をして様子を聞いてき、またプライベート・チャンネルで千冬に怒られた。

そら、つい声を出してしまった俺が悪いけど……驚くのも無理ないと思う。

優勝したらデートしてくれって。

聞いてあげたいのも山々だが、俺には束がいて俺は束のものだ。

彼女がいるのに別の女とデートするなんて、普通に考えて論外だろ。何処かの誠さんじゃあるまいし。

それにやっぱり、千冬に束と付き合っていると行ってないのが仇となった。

俺が言おうとしたが、そこは束に「私から必ずちーちゃんに言う」と言われて押し切られて、この件は束に一任している。

だから、言えてなくてこんな話がくるのも予想はつくし……言えてなくて、秘密にしているというのはそんな事情があっても気が引け、負い目を感じる。

言ってしまうえばそれがいいのだが、束の件もある……何より、千冬に言い出すのは気がどうしても引ける。

言った時はこの関係も終わるかもしれない……それが何処か恐ろしくある。

だからといって千冬もなんてことは絶対にしない。俺はそこまで容量のいい人間じゃない、束《一人》の為なら全てを投げ打って犠牲することなんて厭わない男だ。

だから、今回は断るしかないよな。

『悪いけど千冬。それは……』

『断るなんて言わないでくれ。お前が束の事“も”思ってそういう事は初めから分かっていた』

思わず、また驚きの声が出そうなのを飲み込む。
この口ぶり……まるで知っているような気も……
まさか、知っていたりするのかな？

『あまり深く考えないでくれ。私も実はそんなに考えてない』

『そうなの？』

『ああ。軽い気持ちで考えてくれ。これはあくまで更にトーナメントのやる気を出す為のものだ。現金な話、そういう目に分かる勝利品があった方がやる気はでるだろ？』

『まあ……そうだけど』

『そうだろ。だからこそそのお願いで、断るなんて言わないでほしい。もし嫌なら、決勝戦まで行って私と戦って勝て優勝すればいい。そうすれば私のお願いは無効になる。簡単だろ？』

そうだと思ってしまった。

何だか、どんどん誘導尋問されている気がしてまじ。

確かに優勝すれば千冬のお願いは無効となるが……

『それでも……』

『お願いだ。たまにはこういうのもいいだろ？それにこれ以上、私を惨めにしないでくれ』

そう言われてしまうと、断ることも何か別の方法で阻止する事もできなくなってしまうた。

それに千冬の言葉から、言葉以上の何か深いものを感じた。これじゃあ、これ以上断るに断れないな。

『……分かったよ。千冬のお願いを聞いてあげる』

『そうか……やっぱり、お前は優しいな、綾……ありがとう。悪いな、お前の優しさに漬け込んで』

『いいよ、もう』

結局、折れてしまった。

選択肢が一択しかない以上、妥協するしかない。

ここで変に話をこじらせると面倒な事にもなりそうだ。

優しいと言われたが結局、根のヘタレが解消されてないから屑で軽く心の奥底で自己嫌悪にはしまった。

『しかし、千冬っ』

『な、何だ？』

『言っておくけど、あくまでもお願いを聞くのは優勝したらの話という事は忘れないでね』

『ああ、分かっている。大丈夫さ、勝つのは私だからな。ふふっ』

そう言っつて千冬はプライベート・チャンネルを切った。

隣の千冬の表情をふと伺うと、周りには知られないようにしつつも

心なしか嬉しそうにしている。

それとさっきの自身満々の勝利宣言が不安を募らせた気がした。

これは本腰を入れて本当に本気の全力全開で行かないとな。
いろいろとな人の為に。

大変で前途多難な学年トーナメントになりそうだな、これは。

「……」

「……どうしたの？束？」

「ううん。何でもないよー」

おどけてそう明るく束は言うものの、俺達を少し後ろ向き加減に見る束の何か感づいた様な瞳だった。

…

第二十二話（後書き）

というわけではなかったでしょうか第二十二話。

完成度はどのくらいかな？全体的に支離滅裂な気が……

今回は綾君と千冬の専用機二機のISの説明とちょっとした伏線でした。

二機の説明は必要だと前から思っていたので書いてみました。

暮桜は兎も角、黒百合の説明はしたほうがいいかなあと。

まあ、トーナメントの試合中かトーナメント後に説明した方が適切かもしれないけど。

それと新システム、エイヴィヒカイトシステム。

今回の全体の話を通してと、この新システム自体、無茶苦茶だけどツッコミはあまりなしでお願いします。自覚していますし、最初からこのシステムは予定なので。

登場ISの精神干渉理論に基づき……とか書きましたが大丈夫ですよ？ありますよね？

原作でもそればい事、二回ほどありましたし……（ラウラと一夏でまあ、このシステムとかは今後の伏線ですね。

そして、お久しぶりにちーちゃんを少しだけでもデレ（？）させてみました。

もう、こんな荒っぽい方法でしかちーちゃんをデレさせられないかもしれない。

二人があまりにも恋人恋人しているので。

やっぱり、綾君がヘタレになってしまった。

設定ではヘタレではまったくないのに……

私のメンタルが現在、前書きにも書いたとおりヘタレ状態なのでどうしてなってしまう。

重ねていいますが、綾君はヘタレではありません。私が間違っただけです。修正したほうがいいかな？そんな気力ないけど。

ちなみに千冬は表面上はまだ、一応、二人が付き合っているなんて気づいていません。

表面上は。……問題が山済みのカップルだな、本当に。まあ、自ら茨の道を選択したので仕方ないのですが。

本当に瑠璃色の方、どうしようか。

あっちがメイン更新のはずなのに……こっちがメイン更新なっているし……

いっその事、失踪するかっ！嘘だけど（みーくん風に）。

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします
す

第二十三話(前書き)

学年トーナメントと開催っ!!

第二十三話

綾視点

六月最終週の今日、学年トーナメントが開催された。今日の天気は曇一つない快晴で、既にトーナメント一回戦が終わったが大反響だった。開会宣言され、トーナメント初戦は俺からとなり、一先ず第一回戦目は勝ち星と景気のいい出だしとなった。

「……千冬も勝ったか」

一回戦目と二戦目を終え、更衣室で休憩を取りつつ、更衣室に備え付けられているモニターで各アリーナの様子を見てみると千冬の試合が映った。

結果は言った通り、千冬の勝ち……圧勝だ。千冬も出だし早々、景気のいい出だしとなっている様だった。

それなら、束が予言めいた事を言っていた通り、本当に決勝戦で戦う事になりそうだ。

あの約束もあって複雑な気持ちではあるが、楽しみでもある。

千冬がアリーナから退場したのを皮切りにモニターを切り替え、観客席の様子を見る。

「……何故、いる」

そこには各国政府関係者、研究員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

その中に見知った顔……一郎師匠と奈々さんが映っていた。

二人は企業席でアリーナを見に来ている様で興味深そうに行われている試合を見ている。

本当に何故いる。

会場の整備や雑務、特に来賓を誘導している時には見かけなかったのに。

連絡の一つや二人よこしてくれても罰は当たらない。まあ、二人の事だから、驚かそうと思ってとか言っていて連絡を寄こさなかったか容易に思いつく。

束や千冬は二人が来ている事は知っているのだろうか？千冬は俺同様、知らないと思うけど……束は知っていそうだ。

「……束、大丈夫かな？」

現在、当たり前だが更衣室には俺しかいない。

いつもの束なら、更衣室に押しかけて来て、そのままトーナメントが終わる最後まで居座るのだが今回は少し違った。

束は自ら学生用の観客席で見るといい出し、データを取りながらこの学年トーナメントを見ている様だ。

何と言うか違和感を感じて、束は氣遣ってくれてか一線を引いてくれている様だった。

聞かれてはないだろうが……やっぱり、千冬とのあの話を感じづかれているかもしれない。

束は感がいいから。もしそうなら、申し訳ない気持ちで一杯になってくる。

『神山綾選手 第三回戦が始まるので至急、第一アリーナまで来てください』

休憩を取っていると更衣室に次の試合を告げるアナウンスが聞こえた。

行かないと。うしうじ悩んでいても仕方ない。

物事はいずれ機会があれば、知れる。だから、その巡ってくる機会を今は待とう。

それに本当に気になるなら、直接東に聞けばいい事だ。遠慮することなんてない。

そう考えを切り替え、俺は第三回戦がある第一アリーナへと向った。

・
・
・

第三回戦が終わり、また次の試合への休憩を取る為に更衣室に戻ってきた。

結果は勝ち星。第四回戦へと進み、また一つ、約束の決勝戦が近くなってきた。

いよいよ、次は第四回戦。これが準決勝戦となり、これに勝てば決勝戦進出となる。

千冬の方かというと、千冬も順調に勝ち進んであり、俺と同じく決勝戦を控えている。

千冬の戦い方、戦っている姿は見るだけで、惚れ惚れする様な勇猛果敢で美しいものだった。

歓声が物凄かった。正直なところ、今回のこの学年トーナメントで確実に千冬の株が上がった。

これでまた、千冬の百合ハーレムが強固なものに……おっと、寒気が。

心身ともに休める為にどうでもいい様な事を考え、休みながらモニ

ターを弄って対戦表に切り替える。
対戦表を見てみると、次の対戦相手はまた、何かの意思が働いているかの様に感じる相手だった。

「……レイチエル・アルスター」

次の準決勝戦の相手はレイチエル・アルスターだった。
何と言うか本当に何かの意志が働いているように感じる。

彼女とは以前、“あの事”で戦ったばかりだった。
その事はまだ記憶に新しく、偶々だとしても彼女とまた、試合という形で戦う事になるのは何だか不思議な気分だ。
しかし、何にせよ、彼女と戦って勝たなければ千冬と戦うことも、束の願いを叶えてあげる事もできない。

たったら、彼女には俺の“勝利”^{わたし}になってもらおう。
そう決心を改めなすと

『 神山綾選手 第四回戦が始まるので至急、第一アリーナまで来てください』

という、アナウンスがタイミングよく聞こえてきた。
アナウンスが終わると同時に更衣室を後にして、第一アリーナに向う。

簡単な事前手続きを済ませると、いよいよアリーナへと出る。

『 アルスター選手に続いてAピットから出てきたのは現在、向うところ敵なしの王者つ神山選手です』

大層な場内アナウンスと共に会場の歓声も大きくなる。

人の多さとイベント事独特のテンションもあってか、いつ聞いても凄いい歓声だ。試合よりもこっちの方に圧倒されてしまいそうだ。それだけこのアルスターさんとの試合は期待されているということなのだろう。他の試合よりも歓声が大きい。

「お久しぶりですわね。神山さん」

「そうですね。アルスターさん」

向かいに立っている軽く会話を交わす。

久しぶりを肯定したが、学校では何度かすれ違うことは挨拶ぐらいはしている。

まあ、前はやり過ぎた事もあってか、あの事件後は初め心なしか少し怯えられながら挨拶をされていたけど。

「私はこの日という日を楽しみにしていました。あの日、私は貴方に完膚なきまでに負かされ、いろいろと気づかせていただきました。そして、私はもう一度、貴方と戦い、貴方に勝ちたいと思いました。その為に私は自分を磨いてきました」

「……」

「神山綾、今回も出来れば全力で戦って下さい。あの時の様なあの様な事情は一切無しで私も全力を出し尽くして貴方とぶつかり、この試合を楽しみたいです」

「そうだね。それもいいかもしれない」

彼女の言う通りかもしれない。

今回はあの時の様な悪意一杯の事情は一切ない。

だったら、純粹にこの試合を楽しめばいい。

そうだ、この刹那を楽しみ、味わえばいい。

彼女は「そうですか、それはよかった」という何処か嬉々とした声で言うと続けざまに言う。

「それでは参りますっ！」

『それでは両選手、両サイドに立ちISを展開してください』

先に構えたのは俺。

全身を包んだのは黒く一見すると禍々しくも感じる装甲。

そして、右手に現れるは黒く長大にして、この機体の象徴ともいえるギロチン。

同時にアルスターさんの全身にも、西洋騎士を模した装甲が展開される。

フェイシングの初段の構えに合わせて俺もギロチンを構え、開始の合図を待つ。

『両選手、準備が整った様です。それでは第四回戦、準決勝戦……初めっ！』

場内アナウンスの開始の合図と共に俺と彼女のギロチンとサーベルが交差する様にぶつかる。

俺は刃の方が重くて厚いけれど、彼女のサーベルの方が速くて鋭い。

「ぐっ……！」

「くっ…！」

ギロチンとサーベルがぶつかり合い軋む音を立て、つばぜり合いになりながら初めは両者とも相手の手の内を探るように己の得物を押し合う。

いくら相手が以前、戦って圧勝できた相手だとはいえ、彼女は一国を代表するIS操縦者の有力候補。

以前は圧倒的に勝てたとはいえ、今回も同じ様に勝てるというのはまず、ない。

それにあれからある程度の時も流れている。その間に彼女は俺ともう一度戦い、勝つために鍛えていることだろう。

それは彼女が言っていた事だし、まず間違いはない。

だったら、戦闘力も操作技術も短期間だけとはいえ、少しばかりは上がっているはずだ。

今までの試合に手を抜いていた訳じゃないが、この試合には心構えとして本気で当たろう。

次に待っている千冬との一戦がかかっている大事な一試合でもあるのだから。

「はあああっ！」

「……っ！」

つばぜり合いとなっていた状態から彼女がサーベルを引くと、サーベルの剣先を押し出すように突いてくる。

それを俺はギロチンの刃で上に跳ね飛ばす様に弾き飛ばし、彼女の懐へと飛び込むように一歩前へ踏み込みギロチンを振るう。

「そこだっ」

「くうっ！」

ギロチンを振るう速度が足りなかったのか、ギイインツという音を響かせながら彼女が左手に持つシールドに防がれた。だが、俺の攻撃はそこでは止まらず、シールドに防がれている状態のギロチンの重さを利用して、そのまま右腕を押し込む。前へと押し飛ばすように。

「くっ！ つ、はああっ！」

ギロチンで前へと押し彼女を前へと押し飛ばすと、彼女は押し飛ばされたものの、足に踏ん張りを入れ強制的な静止をする。押し飛ばされた事により、一度崩れた体勢を彼女は建て直しサーベルを構えなおすと、いくら俺との間合いを詰め。

シールド外側部分に二列ある内の一番外側の小型シールドミサイルを全弾、一発づつながらも連続して放ってきた。

それを

「レーザー兵器っ！？ つうっ！」

俺は向ってくる小型ミサイル郡に突っ込み、彼女との距離を小さくする。

射程距離まで来ると、予めギロチンに停滞させておいたエネルギーを刃へと変換し、ギロチンを右へと二度振るい、ギロチンの斬撃そのものをエネルギー刃としてミサイル郡に放出する。

一回目に飛ばしたギロチンの刃はミサイル郡とぶつかり破壊すると消え、二度目のギロチンの刃がそのまま彼女のシールドエネルギー

を削る。

彼女はギロチンの刃を見た時、驚愕の声を漏らして、防御を怠りシールドエネルギーを俺に削られた。

しかし、驚くのも無理はない。現在……現存の科学技術や軍事兵器を持ってしても、形を保つことはまず基本的に出来ない。

法則上レーザーは、光は何かにぶち当たるまでは直進し続けるがこのギロチンの刃はレーザーでありながら、ギロチンの形を形成して保っていた。

それが彼女……延いては観客席にいるお偉いさん達には驚愕以外の何物でもなく、驚きと一部では恐怖の声が上がっていた。

これは束の技術力による賜物。

実際はレーザーとプラズマの混同により、形を保っている。

威力は例えて言うなら、某ジムのビームスプレーガン並みの威力しかない。

それでも十分な威力であり、シールドエネルギーを削った事によりまた出来た隙をつく。

「うっおおっあああっ！」

「っ！」

彼女の機体の右斜め上からギロチンを振り下ろし、また彼女のシールドエネルギーを削る。

削ったのはよかったが、以前の彼女なら驚愕なり何なりと感情上の反応は示すが今回は違った。

意より先にサーベルが腹部に向けて突き刺すように強烈な突きが襲つてき、意識するより先にギロチンで突きは防御したもののこちらでもシールドエネルギーを削られた。

「はあはあ……っう　　そこですわっ！」

意より先に体が反応して彼女は俺に突きを放ってきたが、その事はあまりにも彼女にとっても突然の事で息を荒く上げて呼吸を乱していた。

呼吸を乱しながらも数度ほどの呼吸で乱れを直すと声を発し連続してサーベルの剣先で突いてくる。

「速いなっ！」

「ふふっ、そういう貴方も。ならこれはどうでしょうかっ！」

連続して放たれるサーベルの突きをギロチンで性格に弾き防ぎながらもそんな会話をする。

彼女は本当にこの試合を楽しんでいるようで声は明るく嬉々としており、戦っているこちらにもこの試合が更に楽しくなってくる。

ギアをまた一つ上げた彼女は更にサーベルでの突きの速度を早くして、狙い何処も鋭く弾き防ぐ事が時間が経つにつれ徐々に辛くなっている。

それに大した量ではないが防ぎ弾いても段々とシールドエネルギーは削られており、彼女のシールドエネルギーも徐々にではあるが削っていつている。

だがしかし、このままではこの状態で攻防をしているだけで試合に大きな一転はない。

だから

「はああっ！」

「なっ!?!」

失敗しシールドエネルギーを大量に削られるのも承知の上で連続して突きが向ってくるサーベルよりも早くギロチンを振るい、ギロチンの刃を入れ連続して迫りくるの突きを強制的に止める。

そうなると流石の彼女も連続の突きを止められるとは思ってもいなかった様で驚愕の声を出し、今度はこっちが攻める側に回った。

ギロチンを振るいながらも刃を当てる場所は一点だけに集中してギロチンを連続して振るい攻め続ける。

「はあああっ!」

「くううっ!」

ギインツ!ギインツ! という轟音をアリーナに響かせ、後ろへと押し追い詰める様に攻める。

彼女は俺に攻められながらもサーベルで迫りくるギロチンの刃を防ぎ。時にはシールドも合わせて巧に防御している。

だが、防御に徹するしかなく。そうしていても俺が振るうギロチンの方が速く、エネルギーシールドの一点だけに当たり続けるギロチンの刃により、シールドエネルギーは削られている。

「っ……」

これ以上は防いでいてもこの状態からの反撃は不可能と彼女はギロチンを弾くと即座に後ろに下がり距離を取った。

彼女は呼吸を乱していたが整えつつ、シールドを前に突き出し、サーベルを後ろへと下げた状態で俺の様子を伺いつつゆっくりと接近してくる。

接近してくる間、彼女はサーベルを振りかぶった。

試合を始めて早十五分近く以上経っている。

彼女もそろそろ決めようとしているのか　ならば、俺もそろそろ決めなくてはな。

丁度、次の一戦でアレを崩せるわけだし。

そうして、ゆつくりと彼女が接近してサーベルが振り落とされると思ったが違った。

「……ッ!？」

静かに俺は内心で驚く。

振りかぶって振り落とされると思ったサーベルはフェイントの様にシールドの中心部分、シールドの外枠のミサイル経口よりも大きい四つのミサイル経口からミサイルが四発同時に発射された
サイズこそは違うもののまた、通常のミサイルだろうと思い、ギロチンの刃をレーザーとして形成し打ち落とそうと思った矢先。

「ッ!？」

向ってくる四発中、二発がある一定の距離まで来ると上に上昇し俺の頭上へと飛来し、残りの二発のミサイルはそのまま向ってきた。
そして、俺がそれを確認し対処を凶っている一瞬の内にそれと合わせる様にして音を立て合計四発のミサイルは炸裂した。

「……徹甲弾かっ!!！」

炸裂したミサイルは通常のものではなく、ミサイル型の徹甲弾だった。

徹甲弾は、弾体の硬度と質量を大きくして装甲を貫く砲弾。

炸裂した徹甲弾からは砲弾が放たれ、向ってきて二発から車で水溜りを強く轢き水が大きく跳ねた様に喰らい。頭上からは雨の様に砲弾が降り注がれた。

これでは回避しようにも防御しようにも出来ない。

奇策……彼女も上手く考えたた。

実況もどきをしているアナウンスはもちろんのこと、会場からの声は大きい。

どうやらこの徹甲弾はIS用に作られた物の様でエネルギーシールドにより、砲弾を喰らっている操縦者にダメージはないがかなり、シールドエネルギーを削られてしまう。

凡そ満タン状態から半分だ。残り半分。

相手のシールドエネルギーは残り筈か……勝負を決める。

徹甲弾の砲弾がエネルギーシールドを削っている最中、そう判断を決めブーストを踏み込み。

「るっお おおお おおお おおお おおお っ！！」

「なっ！？あの徹甲弾を向ってくるなんてっ！」

エネルギーシールドを削られている事は気にも留めず、徹甲弾の砲弾の嵐を抜け彼女へ詰め寄る。

後一撃、後一撃を決めれば次は千冬との戦いだ。

待っている、千冬、もうすくだ。

頭の中には既に千冬との対戦の事で埋め尽くされている。

向っている俺に彼女は最後の反撃の如く、シールドの外側にあるシールドミサイルを全弾、撃ち放ってきた。

だが、しかし

「ここで瞬間加速ッ!!!？」

イケニッション・ブースト

ミサイル直撃寸前での瞬間加速。

イケニッション・ブースト

その事に彼女のみならず会場全体が驚愕の声を上げる。

そして、向ってくるミサイル郡を通り抜ける様に駆け抜けギロチンを振るい斬りおとす。

彼女との間合いをゼロにし、ギロチンを振りかぶると

「
」

声も発す事無く、一瞬でギロチンを振り降ろした。

振り下ろしたギロチンの刃は彼女の機体のエネルギーシールドへと直撃し、当て続けていた一部分だけ破壊した。

通常の武器ならありえないが、これがギロチン マルグリット・ボワ・ジュス 『罪姫・正義の柱』の能力。

刃自体にエネルギーシールドを中和するエネルギーを微弱ながら纏っておりある一定の回数、エネルギーシールドをきり続けると一瞬だがその部分を破壊できる。

斬撃そのものをエネルギー刃として放出する能力とは切り替えによって使い分ける事が出来る。

この能力により、相手機体はエネルギーシールドが全て破られたと誤認させる事も可能。

最後に一閃、振り下ろしたギロチンにより彼女の機体のシールドエネルギーはゼロとなったのだった。

『アルスター選手のシールドエネルギーがゼロとなったのを確認しました。これにより勝者、神山綾選手っ!!!』

勝者を決めるその声が聞こえると会場全体が勝者を祝う大きな歓声に包まれる。

会場を包む歓声に安堵感を覚えつつ、機体を解除する。

そうすると全身に爽快なまでの心地いい疲労感が襲ってきた。いい試合だった。そう今実感している。

そう実感しているのはどうやら、俺だけではなく彼女もだった。

彼女は負けたというのに清々しい表情をしており、負けたという事を何処か楽しげに実感している様だった。

そうしているとどちらからでもなく、離れていた距離お互いにつける。

「私の……負けですわね」

「そうだね。俺の勝ちだ」

「相変わらず嫌なお人ですわね。今回も圧倒的に負けましたがはそれでも、清々しい気分ですわ」

そう負けたという事実を受け入れ、楽しんでいる様に彼女は言う。

そんな彼女の表情を見ているとこっちまで彼女に勝てたという事実が何だかとっても嬉しくなってきた。

以前も勝つには圧倒的には勝てたけど。あの時は因縁めいた事情があったから何処か空しい勝利でもあった。

けれど、今回は違った。いい試合が出来、いい勝利を掴めた。

その事を噛み締めながら少し雲がかつていいる太陽が浮かぶそれに手を伸ばしている、彼女が手を差し出してきた。

その行為に一瞬だけ俺は疑問そうに見ると彼女は言った。

「試合後の握手ですよ」

「ああ、なるほど」

行為の意味に納得して差し出された手を掴ませてもらう。

「今日はいいい試合でしたわ。ありがとうございます」

「こちらこそ。ありがとうございます」

笑顔を浮かべて言う彼女に感謝の言葉を言われると、釣られて笑顔を浮かべ俺も感謝の言葉を言い、互いを労う様に笑顔で握手を交わしたのだった。

…

第二十三話（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第二十三話。

ついに始まりました学年トーナメン。

久しぶりの戦闘描写でしたけどいかがだったでしょうか？

戦闘描写は自分的にいい出来だとして、話の構成が少し……いや、かなり甘かった様な……

だって……第一回戦、第二回戦、第三回戦をおもいつきり端折ったからね……

まあ、理由としては普通の試合で見所がなくて邪魔になるから、端折ったというのがあるけど……

それに何かトーナメントの進行とかもおかしい気もする。

それは一先ず置いて久しぶりキャラの登場。

いい当て馬キャラを作ったものだ……実力もセシリア以上なので使いやすい勝手もいい

初登場のr初戦闘時よりもかなり、キャラが違って、変更していませんが。

これも綾君のいい意味での悪影響の賜物の一つです。

今回も現存する技術や兵器にそれなりの独自解釈をぶち込んでみた。特にレーザーについてはそれなりにちゃんとさせているつもり。

レーザーとプラズマを混同させて形を持ってないレーザーが形を持っているのは。

スターウォーズのライトセーバーの理論を使っています。

今回も圧倒的に勝たせました。

理由はいつも通りですけど、あまり僅差で勝っていい勝負感を出すのは嫌いです。

何か曖昧な感じがして……やっぱり、僅差での勝利でいい勝負だったと言わせるのなら同じ強さ同士でないと。

今の綾君は千冬さん並みに強く、僅差にするなら綾君の場合は千冬さんって感じに……

という事で次回はいよいよ、千冬さんとの決勝戦。

いろいろとやります。いろいろと（大事な事なので二回言いました。お楽しみにっ

では、また、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします
す

第二十四話（前書き）

今回は少し支離滅裂かもしれませんが（汗）

私生活が上手く言っていないので……

イミフなところがあつたら脳内補完してください。

こんな私ですみません。

それではどつぞっ！

第二十四話

綾視点

アルスターさんとの一試合、準決勝を終え俺は控え室である更衣室に戻ろうとしていた。

準決勝戦に勝った。それは俺だけの事ではなく、千冬も無事準決勝戦に勝っていた。

となると、次はいよいよ、約束の決勝戦。

ここまで長くも短くあった。

先ほどのアルスターさんの試合も心踊ったが……ついにと、思うと気持ちが高揚して更に心が躍ってくる。

次の千冬との決勝戦までには、会場整備という名目で出来た約一時間ほどの待ち時間がある。

俺にしてみれば、その待ち時間は丁度いい休憩時間となる。

一時間もあれば、先ほどの試合での少しばかりの疲労を十分に休めることが出来る。

その間に体を休めつつ、心が躍り高揚している気持ちも落ち着きかけられ、決勝戦に向けて心を備えるのにも十分だろう。

「……よしっ」

「あっ、お帰りなさい」

控え室である更衣室に戻ってくると束がいた。

それも当然の様に。

さっきまでは居なかったという事は……試合後に入ってきたのか。

出るときにはちゃんと鍵を閉めたし、ここのは電子キーだ。
簡単に破られる事は普通はありえないが……相手が束なら簡単に破られてしまう。

前にも似たような事があつたな……物凄くデジヴった。

「どうしているのかな？」

「どうしてって、それは……綾に会いに来たんだよ 我慢してたけど我慢できなくなって。それより……私がお帰りなさいって出迎えただよ。返事の言葉は？」

「……ただいま、束」

「うんうん それでよろしい なら、私ももう一度。お帰りなさい、綾」

これ以上はどうしてるのかという事に大して追求せず、素直に出迎えてくれた束に言葉を言うと、束は嬉しそうな笑みを浮かべも一度出迎えの言葉を言った。

控え室のドアの前でこのまま立っているのも何なんで更衣室の中へと入り、モニター前の長椅子に座る。

座ると俺の隣に束は寄り添う様に座り、ふらふらしていた俺の手をそっと握った。

何気ない事だが、握っているだけで疲れが和らいでいっている気がする。

「あつそうだ」

「何？」

「試合お疲れ様。戦っている綾の姿、とつてもかっこよくて、とつても綺麗だったよ」

「……そう。そう言ってもらえるなら嬉しい限りさ」

優しい微笑みを向けられ、突然思っているであろう思いを何の飾りつけもなくストレートに言われ、俺は何か恥ずかしくなって、表には表せなかったものの、つい素っ気無く言ってしまった。

何だ……こう、素直にストレートに言われると何だか無性に気恥ずかしい。飾りつけのない方がぐつとくるといいうのはよく分かった。すると、そんな俺の様子に東は感よく気づいたようで面白そうに小さく笑っていた。

「ふふっ、綾照れてるね」

「あんな事を突然、言われたらああなるよ」

「ふふんっ 嬉しかったんだね まあ、本当の事だからこれでいいんだけどね」

「……あつ、そうだ。東は一郎さんと奈々さんがトーナメント見に来ていたの知ってた？」

「うん、知っているよ。もっとも知ったのはトーナメントの試合が始まってからだけど。それに綾とちーちゃんの二試合目が終わったぐらいに会って来たよ」

これ以上、今の話題を引つ張り続けていると更にかかわれそうなので。

ふいに思いつた様な口ぶりで別の話題を振る。
やっぱり、からかわれるのは嫌だし趣味じゃない。束をからかっている方が性に合っているし、楽しい。

「そうか……それで師匠達は何か言ってた？」

「うん、いろいろと言ってきたよ。奈々師匠とはISについて少し話したんだけど、一郎さんは綾の試合を中々、高評価してくれていたよ」

「そうか……それは何よりだ。師匠なら軽く貶してきそうだからね」

「あっはは、そうだね。でも、私も綾の試合は物凄くよかったと思うよ。特にさっきの準決勝戦、あれはよかったよ。相手は兎も角として綾はわりと本気だったしね、全力ではなかったけど」

「……バレてたか」

「当たり前じゃん、綾の事なら何でも分かるんだから」

嬉しい事を言ってくれる束。

どうやら、束には俺がさっきの試合で全力全開でなかった事はバレていた。

アルスターさんの試合は確かに本気で挑んだけど、全力全開ではなかった。

それは別に彼女を過小評価していた訳でも、自分の力に慢心している訳じゃないが。

やっぱり、本気の全力全開は千冬との一戦、決勝戦でと思い。あえて本気の全力全開では、彼女にいどまなかったというまでの事。

「それに綾はちゃんと黒百合の力も会場に見せつけてくれたからね」
黒百合の力……それは多分、ギロチンの斬撃そのものをエネルギー
刃として放つレーザーライフル機能の事を言ってるのだろう。

あれは何も考えず、ただ本能にままに放ったけど今思うととんでも
ない事をしてしまったと思う。

レーザー兵器はまだ、試作段階で完全な実用には到ってないのに黒
百合はそれを完全な実用武装として使用した。

世界にとっしてみれば、黒百合はトンデモ機体で。東は更に嫌悪
される存在となるだろう。それはまた、俺も同じけど。

こんな事を考えている事に東は気づいたのか、俺を気遣うように言
う。

「何か気にしているみたいだけど、大丈夫だよ。時の場合はあれで
よかったんだよ。準決勝戦という中々、盛り上がる場面でレーザー
ライフルの本邦初公開できたんだから。いい演出だよ」

「……」

「だ〜から、気にしちゃダメだよ。遅いか速いかの問題なだけだ
し。問いただされはするだろうけどまた、後で言えばいい訳だし」

「……」

「何よりISの凄さをまた、世界に思い知らすことが出来た。それ
だけで私は満足だよ。だから、綾がそんなに気にする事はないよ。
もしも、何か起れば二人で乗り越えたらいい。違う？」

「そうだね。その通りだ」

あれこれ気にかけていても仕方がない。
やってしまった事には変わりはない。

束の事を気にして心配するばかり、気にし過ぎて、束の思いやりを蔑ろにしかけてしまった。反省。

何をして俺のやる事は変わらず揺るがない。だから、やってしまった事を気にしても大した意味がない。

その事を束に改めて気づかせてもらうと、少し混濁していた思考を決勝戦に向けて落ち着けながら切り替える。

「……」

左手に繋いでいる束の手の暖かさを感じつつ、開いている右手を真上へと伸ばす。

そろそろだ。

時間的にももう直ぐ、千冬の決勝戦。

そう思うと、落ち着けていたはずの心が昂って躍ってくる。

「そういえば。いよいよだね、ちーちゃんと綾の決勝戦」

「そうだね。本当にいよいよだ」

「ふふっ、小さな子供みたいに待ち遠しそうにしているね、今の綾は」

表情に露骨に出ていたのかそう笑みを浮かべながら言う束。

小さな子供みたいに待ち遠しそうにしているね……確かにそうだ。待ち遠しくて仕方ない。勝負事でこんな気持ちになるのは初めて……もしかすると初めてかもしれない。

それぐらい待ち遠しくて、楽しみだ。

早く千冬と試合をしたい。早く千冬と戦い。

そして何より　その瞬間の刹那を味わいたい。

「ふふっ、本当に今の綾は小さな子供みたいだね。綾はちーちゃんに勝てる見込みはあるの？」

「さあ、どうだろうね。千冬と本気の全力全開で戦った事ないからどうなるか分からないよ」

「それもそうだね。でも、私は綾が勝つと思うな」

「根拠は？」

「そんな根拠なんてちゃんとしたものはないよ。あえていうなら、私の自慢の旦那様だから、だね」

束は照れた様子もなく自信満々で言った。

物凄い根拠……と言うより、物凄い事を言ったな。

旦那様って……まあ、嬉しくはあるが何か照れくさい。

そうなる束は俺の奥様、愛妻となる訳だ。これも何か照れくさい。

束はおどけた表情と口調でいったけど、その裏には確かな自身があるから怖い。

束が真面目な顔して真面目な口調で言うと時もそうだけど、こんな風にその様子の裏には確かなものがある時。それはほぼ、100%とそうなるという事だ。

千冬に勝てば晴れて学園最強となり、世界最強候補となる。

そう考えればめんどくさくなりそうだな。めんどくさいのは苦手だ。

「もしも、勝ったのがちーちゃんでも私的にはいいよ。言ったあの目的さえ達成させていれば。それでももしも、ちーちゃんの約束事が有効になっても、ね」

「……」

おどけて様子ではなく落ち着いた様子と口調で言った束に俺は内心でかなり驚く。

やっぱり、束は俺の千冬があの日、約束をしていたのを気づいていた。た。

あの時の俺と千冬を見る束の目が何か気づいた様な目だったから、もしやと思っていたがやっぱりか。

「やっぱり、気づいていたのか」

「まあ、ね。長年付き合っている二人の事だからね、そりゃ気づくよ。にしても、やっぱりって事は綾も私が気づいているって事に気づいていたんだね」

「まあ、ね……」

「そっか……あつ、言っておくけど。盗み聞きなんて無粋な事はし

ないよ。あくまで二人の様子を見て察しただけだから。約束を内容は想像はつくけどあえて言わないよ」

気づいているだけではなく内容まで予想済みか。

人間観察に長けて感のいい束の事だから、予想とは言っても内容も一字一句合っているんだろう。

だからこそ、今更ながら恐縮な感じだが罪悪感が芽生えてくる。

「そうか……それで束はそれでもいいの？」

「約束の事？うーん、私の個人的な我が侷な気持ちを言うとな物凄く嫌。綾とちーちゃんがそういった事をすると考えるだけでどうになっってしまう」

「……」

「それでも綾が負けてちーちゃんが勝ったのなら私はその約束事の内容については我慢するよ。ちーちゃんを哀れんでいる様で気が引けるけど。そうでもしてあげないとね。私達はちーちゃんに対して最低な事をしているんだから」

そう落ち着いて罪悪感を感じている声で束は言い。

「まあ、その罪悪感が背徳感となって刺激的でまたらないけどね」

と、空気を少しでも重くないようにおどけてそう言った束。

束の言う通り、俺達は確かに千冬に対して最低な事をしている。千冬の黙って交際をしているという　ー最低な事を。

それなら言ってしまう方がいいと言われるが、それも今は出来ない。

現状がとつてもじやないが許さない。俺と東の立場は思っている以上不安定で脆い。次に、だったら東と別れればいいと言われるかもしれないが、それはいろいろな意味で論外なので無理。

何にしても、今俺達が千冬に対して最低な事をしているという事は違くない。

「本当は綾に勝ってほしいけど、私はどっちが勝ってもいいよ。ちーちゃんが勝てば今後の綾の負担が減るだけだし。そうだ、綾は決勝戦に勝ちたい?」

「……俺は」

問われ少しの間だけ考える。

俺は千冬との試合は楽しみだ。一分素一秒早く、千冬と本気で全力全開で戦いたい。

何よりその瞬間の刹那を味わいたい。

だけど、俺は勝ちたいのか?

所詮は刹那を刹那的な快楽を求めているしか過ぎない。

勝つと言うよりも楽しんで勝つと言う過程を求めているにしか過ぎない。

だったら、俺は負けたいのか?それは違う。

だとしたら、俺は

「?」

そう考えている少しの間、ふと束を見る。

そうすると不思議な事に深く悩んでいたのに答えは直ぐ出た。

何ってことはない……答えなんてものは最初から出て、分かりきっていた。

俺は

「勝ちたいよ。いや、むしろ勝つのは俺だ。負けはしない」

「ふふっ綾らしいね。綾なら本当はそう言つと思つていたよ。ちなみにそれは誰の為に？」

「自分の為にだよ。そして何より、俺自身である束の為に俺は勝つ」

考えるだけ無駄だった。

何があつても何をして、俺がやる事は変わらないし揺るがない。

俺は何に置いても最後は俺自身である束を優先し続ける。

それが、束の存在だけが俺という^{異端者}刹那主義者の屑な俺の存在する理由で存在価値なのだから。

その果てに悲惨な末路があつたとしても、それすらも受け入れ永劫破壊し、次なる刹那を味わう。

千冬には悪いが、束を優先させてもらう。そして、この試合を勝たせてもらう。

その果てにどんな事を待つていようが関係ない。勝つと決めたら、地べたを這いずって泣きじゃくつてでも勝つ。

「そっか、そう言つてくれると私も自分の事に様に嬉しいよ。そう言う綾は本当に綾らしいね。いい顔している。そうして、何も考えず刹那だけを感じている方が本当に綾らしいよ。」

私の巻き添え食っているよりも」

「えっ？束……？」

「うづん、何でもなし。ほら、時間だよ」

何か意味深な言葉を小さく束は呟き。

もう一度、聞こうとするとほぐらかし、時間を指した。
そろそろ、試合の時刻だ。そう思うと同時に

『 神山綾選手 決勝戦が始まるので至急、第一アリーナまで来て
ください』

という、アナウンスがタイミングよく聞こえた。

時間だ。いろいろな意味で、タイミングがいいな。

体は休められたし、気持ちも落ち着いているけど時間が時間なだけに。

今さっき束が小さく呟いていた事を問いただすのには時間が足りない気がする。

これも束は無意識にでも狙って、言ったのかもしれない。

兎に角。

「時間だ。行かなくちゃ」

「そうだね。途中まで着いていくよ」

そう束は言っけて控え室である更衣室と一緒に出て、アリーナと観客席へと別れる途中まで一緒に歩く。

会場に向っている最中、会話はなし。特にこれと言って話す事もなく

いいし、束も俺に余計な事を考えさせまいと気遣ってくれているのか話はしない。

ただ、手こそは繋いで別れるまで通路を歩いているけど。でも、これで充分だ。別に話さなくても手の温もりから束の思っている事や言いたい事は分かるから。

そうして、手を繋ぎながら会場に向かってしていると丁字路に着く。

俺は右のアリーナへ、束は左の観客席へとそれぞれ向かう事になる。

「ここでお別れだね。試合、頑張ってね」

「頑張るよ。必ず勝ってくる」

「うん、期待してる。綾なら、ちーちゃんに勝てるって確信している。だから、頑張っつて勝っつてみせてね」

「ああ、それじゃあ……」

名残惜しいながらも繋いでいた手を離す。

そうすると束は「……あ」と言う、名残惜しそうな声を漏らした。

束にも期待されているんだ。

その期待に答える為にも頑張らないと。

俺は勝つ。それは自分の為に、そして自分自身である束の為に。

名残惜しそうにしていた束が何かを思いついた様に言う。

「あっそうだ」

「？」

「綾が勝つようにおまじないしてあげる」

そうおどけて楽しそうに言う束に何事かと思っっていると

「んっ」

身長差があつた為か束は少し背伸びをして俺のふいをつく様に唇にそつとキスをする。

突然の事に初めは何をされているのか分からなかったが、段々と何をされているのか理解して、キスされている唇にキスをし返した。キスしていたのは一瞬だったけど長くも感じ、束はキスしていた唇を離すと嬉しそうにはにかむ。

「えへへ」

「おまじないってこれの事か」

「そうだよ 嫌だったかな？」

「そんな事はないよ。突然だったから驚いただけ」

「それならよかった。勝てそうな気がしたでしょう？」

「そうだね。ありがとう、束」

「どづいたしまして」

また、嬉しそうにはにかむ束。

おまじない。

些細な事な事だけど。

束がしてくれたというだけで、何だか本当に勝てそうな気がする。
る。

それに何より、自信も物凄くつく。

本当に束は凄くて自慢彼女の愛妻だ。

「それじゃあ、行ってきます」

「いつてらっしやい」

最後にそう会話を交わすと俺は束に背を向けアリーナとへ歩き出し、束は俺の背を見つめながら見送ってくれた。

…

第二十四話（後書き）

ということではいかがだったでしょうか第二十四話。

千冬さんの試合前の一コマです。

本来の予定なら、この話を少し書いて……そのまま試合に行こうと思っただけでしたが

予想よりも長くなって試合一コマとなりました。

とりあえずこの回で前々回の伏線は回収できました。

束さんは何気に物凄く感じがいいです。勘がいいってレベルじゃないですけど。

まあ、原作の束さんも勘がすごぶるよさそうな感じがするのでこうなりました。

何だかんだでこの束さんは普通に人間ばいですね。我慢もしていませんし。

ちょっとデレも入れてみた。

そして、私生活がうまくってないというか、私が情緒不安定なので支離滅裂です（汗）

今回の綾君も私の性でヘタレばいですし……

それに勝つ事を決める心理描写とその他の綾君の心理描写を書いていた時、何故かこの綾を刀語の七花をモチーフにして書いていました。

再び、刀語りを読んで見ている性かな？

何かいつもみたいにいるいろと補足しておかなきゃいけないのに全然思いつきません。

なので、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でもいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いいたします

第二十五話（前書き）

学年トーナメント決勝戦、千冬戦っ！

かなり頑張りましたっ！頑張った私の代償はデカイですが、かなり頑張りました！

大事な事だから二回言ったんですよは？ただ、いつもより長くなっ
てしまった。

熱い、狂おしいほど熱いバトル《試合》となっていればいいかな。

それではどうぞっ！

第二十五話

綾視点

決勝戦。

これがこの学年トーナメント、最後の試合で一番盛り上がる最終試合。

これで全てが決まる。勝者も現時点での学園最強、延いては世界最強候補が。

勝てば様々な不安要素が増えるが、勝つと決めたからには何が何でも絶対に勝つ。

負けない。負けるわけにはいかない。

全ては、もう一人の俺である束の為に。

今こそ、千冬との本気の全力全開の試合の一時、その最高の刹那を味わいつくそう。

『織斑選手に続いてAピットから出てきたのはっ！織斑選手と最強という名の双璧をなす神山選手です』

千冬が先に出たのに続いてアリーナに出ると、アナウンスと共に観客席のボルテージも最高潮となっている。

最後の試合　観客席から聞こえる物凄い歓声からも分かる。この試合がどのくらい期待されているのかが。

今までのどの試合よりも歓声は大きく、見に来ている観客の数も倍以上だ。

「この時を待っていたぞ、綾」

「うん。俺もだよ、千冬」

向かいの千冬との初めに軽く会話を交わす。

こうして会話を交わすもの朝以来の短い時間だというのに、物凄く長い時間会っていないくて久しぶりに再開する様な感じた。

有体に例えるなら、長年追い求めていた宿敵と合間見える事ができた。そんな感じ。

「お前は約束を守ってくれたんだな。それが私は嬉しい」

「まあ、ね。こうして戦うのは千冬とのある意味での約束だったし……それに何より、束からお願いだからね」

「束か……まあ、それでもいい。今からはこの試合を楽しもう。お互いの本気の全力全開を出しあって」

「そうだね。その為にも今日のトーナメントを頑張ったことだしね」

「それでは、始めようか。これ以上の会話は今の私達には不用だ」

「語るなら己が剣で」

『それでは両選手、両サイドに立ちISを展開してください』

俺達がISの展開の為に構えると同時に試合準備のアナウンスが聞こえた。

「来いっ！暮桜ッ……！」

「形成 時よ止まれ おまえは美しい」

Yetziran

同時にISを形成する。

千冬の体には一振りの刀を持ったISが。

俺の体には、黒く禍々しい装甲と右腕には黒くて長大にギロチンを持つISが現れる。

いよいよだ。

いよいよ、待ちに待った、瞬間が始まる。

俺は本気の全力全開を出し、この刹那を限りなく楽しみながら味わおう。

そして、その刹那の果て。俺は 勝つ。

『両選手、準備が整った様です。これが最後の試合となります。両選手とも力の限り競いあってください。それでは、決勝戦……開始っ！』

会場全体に響き渡る試合の開始の合図。

それが最後の試合の火蓋。この度、最後の狼煙。

そう、これこそがこのトーナメント、最後の勝負なのだ。

だから、最終にして最大、最高の一試合をしよう。

俺は本当の意味でこの時《刹那》を求めて、このトーナメントを勝ち抜いてきたのだから。

そしてこれより 至高の刹那、その歌劇が開幕する。

「おおおおおおおおおおおおおおおっ！……」

「はあああああああああああつー！」

開始早々、お互いの距離を詰めあい、ギロチンと刀の刃がぶつかる。衝突した刃と刃は激しい音を響かせながら、火花を散らす。

どちらかが押すのではなく、お互いが全力で相手を叩き斬る勢いで押し合う。

物凄い力だ。千冬の一閃には、この試合にかける強い思いや信念が強く、深く、たくさん込められている。

ほんの少しでも気を抜くと、千冬の力に飲み込まれ本当に叩き斬られそう。

そうして、どちらからともなく、一瞬互いの武器を引き合う。

「はああつー！」

「うおおおつー！」

するとまた、刀とギロチンは激しくぶつかり合う。

今度は衝突して押し合うのではなく。

激しく刃を討ち合う。何度も何度も幾百も幾百も幾千も無数の様にぶつけ合い続ける。

斬り合っては距離を取り距離を詰め刃と刃をぶつけ斬り押し合う。

ぶつかり合う度に互いの武器を振るう速度は早くなっている。

一閃一閃に千冬がこの試合にかける思いが籠っている様で速く重たい。

それでもやっぱり、千冬の雪片の方が鋭くて速く、俺のギロチンの分厚くて重い。

それにより、どうしても雪片の一步速く振られる。

外から見ると同じ速度で振られぶつかり合っている様に見えるが、やっぱり、俺にしてみれば雪片の方が速い。

油断はもちろんの事、一瞬たりとも息つく間すらない様に思える。

「はあっ！」

「ふんっ！」

跳ね合うように一閃を放つと互いに距離を取り合った。

「これが……本気の全力全開のお前の力か。思っていた通り凄い」

「そういう千冬こそ。本当に凄いよ。これが千冬の本気の全力全開。楽しい……心地いい刹那だよ」

本当に千冬は凄い。

本気の全力全開の千冬と戦ったのは、今回が初めての事だけどそれよく実感している。

千冬は一振りの剣の様に揺るがず突き通る様に強い。

だからこそ、そんな千冬と戦えているこの瞬間、この刹那が楽しくて心地いい。

「私もだ。お前とこうして戦えて楽しい。他の何よりも誰よりも。だからっ！」

言いつつ気づくと千冬が目の前におり、頭上から雪片が振り降りてきた。

それをギロチンで跳ね除ける様に防ぎ弾いた。

「だから、もつと楽しもうじゃないかっ！試合はまだまだ、これからだっ！」

「ああっ！行くぞっ！千冬っ！」

「こいつ！綾っ！！」

弾いた直後、ギロチンを千冬の横ッ腹目掛けて振るった。すると、流石は千冬。

子供騙し程度の策で話を気を逸らそうとしたが、すかさず反応してギロチンの刃を雪片で受け止めた。

だが、その策の内の一つ。

千冬の受け止め方は雪片をギロチンに向け、体もギロチンの方に少し向けているが体は俺を真っ直ぐ捕らえている。

けれど、体勢が少しでも崩れている事には変わらない。

千冬が雪片でギロチンを受け止めた状態のまま、俺はブーストを踏み込みそのまま叩き斬る様に押し込む。

「うおおおおっ！」

「くっ！」

叩き斬る様に押し込みギロチンに力を入れる。

ギイイイイインっ！　という音を雪片とギロチンは轟かせ、俺に押されている千冬は少し辛そうな声を漏らした。

このまま押し切る　そう思うとギロチンに込める力が強くなっていく。

「いけえっ！」

刀、延いては千冬を押ししているギロチンにこの瞬間、渾身の力を入れると、そのまま千冬を弾き飛ばす。

「くうっ！ はああっ！」

「っうっ！」

瞬間、千冬はかなりの距離を飛ばされそうになったが。

全身に力を入れると、飛ばされるのをキャンセルし、俺の数歩前で止まり、そこから下段からの切り上げの反撃の一閃を放ってきた。

それを俺は、眼前に翳したギロチンの刃で受け止め弾く。

弾いたのと同時にギロチンの刀身全体にエネルギーを帯電させ、ギロチンの斬撃そのものをエネルギー刃として形成し千冬目掛けて放った。

「はっ！」

「っうううっ！ はあっ！！！」

ギロチンのエネルギー刃は千冬に命中した。

だがしかし、命中したのは雪片の刀身。

千冬は向ってくるギロチンのエネルギー刃の軌道に合わせて雪片を掲げ、一旦受け止め受け流すように横へとエネルギー刃を弾き飛ばした。

恐ろしい操作技術と身体力だ。

この距離なら避けることすら難しいのに、それをあえて受け止めて横へと受け流した。

ただそうするだけではなく、軽快な身のこなしでの的確にギロチンのエネルギー刃を対処した。

そして、また押し合う激突。

「流石、千冬。恐ろしい事をするねッ！」

「それはお互い様だろっ！避けられると思っていたのに。それをまさか、あの返しの一閃を弾かれ、あまつさえ反撃されるとは考えていなかったよっ！流石は私の愛する男だっ！」

「それはどう、もっ！」

「……く！」

押し合い跳ね合うように弾き合う。

そしてまた、幾閃もギロチンの刃と雪平の刃がぶつかり合い始める。この試合では慣れ親しんだとも言える状況へと振り出しに戻る。

刃と刃のぶつけ合い。

互いの刃を食らわない様、相手の刃を相殺する様にぶつけ合う。

そうしていても、相手の刃を喰らいシールドエネルギーを互いに削り合う。

削ったと言ってもほぼ同じ。

試合開始時のシールドエネルギーの量は俺も千冬もまったく同じ量しか減っていない。

五分と五部、まったく互角の戦いだ。

刃を何度も討ち合い、まったく同じ様にしかシールドエネルギー量は減らない。

ある人物が言っていたが、“究極に近くなるほど陳腐になる”。

今更ながらそれが理解できたような気がした。

とはいえ、俺達が。ましてや、俺が究極だとは思わない。

千冬はまだ、発展途中でこれから更に成長して強くなるだろう。それこそ究極と呼ばれるほどに。ブリュヒンデ戦女神と呼ばれるように。

それは俺も同じで。時期、束が流出創り出したさせたを壊そうとする者らを一つ残せず、飲み込む究極の覇道者　超越者となるだろう。

けれど、やはり端から見ると陳腐な戦いに見えるのだろう。

ただ、お互い渾身の力で刃を討ち合う。

そこに戦術も何も在りはしない。ただ一閃ごとに全身全霊を叩き込む事の繰り返し。

まるで小さな子供の様な殴り合いだ。

無駄と無策の塊みたいな刃と刃のぶつかり合いで、しかし同時にこの場の極限の攻め合い。

こうしていつもでも攻め合い、この刹那を楽しみながら味わうのもいい。

だが、いつまでもこうしているわけにはいかない。

「はあっ!」

「はああっ!」

磁石が反発する様に大きく跳ね合い、大きく距離を取った。

距離を取り合うと互いに息を荒げた。

もう、戦い始めて数十分以上になるだろうか。

流石にその約数十分間、息つく間もなく戦い続ければ疲労は出る。

休みをとったからとはいえ、連戦続きなのは変わりなく、僅かに残っている前の疲労とも重なり疲労が増大している。

本当にいつまでもこうしているわけにもいかない。

現状の互いのシールドエネルギー残量はまったく同じ。

このまま戦い続けても、消耗戦となる。

消耗戦でこの試合を幕切れとするのは、盛り上がりにも納得にもかけるので論外だ。

だとしたら

「そろそろ……決着といくか？」

どうやら、千冬も同じ考えの様だった。

決着。

この歌劇も十分にそれどころか二十分に温まっている。ならば、最高の幕引きの一撃としよう。

「是非もない」

千冬の問題にそう一言で答え、互いに己の武器を構え発動する。

ワンオフ・アビリティ

単一仕様能力を。

「おおおおおおおおおっ！……」

「おおおおおおおおおお!!!」

発動されたのは黒百合の『けんらんぶどう絢爛舞踏』と暮桜の『れいらくびやくや零落白夜』の二つの対となる単一仕様能力。ワンオフ・アビリティ

けんらんぶどう絢爛舞踏が発動された事により、右腕のギロチンの刀身に紅い文字の様な紋様が現れる。

一方、れいらくびやくや零落白夜が発動された暮桜が持つ、雪片の刀身全体が変形し、エネルギーの刃を形成する。

これにより、この舞台に二つの単一仕様能力ワンオフ・アビリティが現れた。

決勝戦……俺と千冬の決勝戦、単一仕様能力ワンオフ・アビリティ。

これが束と約束した瞬間であり、刹那。

願いは達せられた。

これより、本当の勝負が始まり、そしてこのトーナメントの結果が生まれる。

だから

「行くぞっ!」

「おっっ!」

だから、一撃一閃でこのトーナメント歌劇を開演しよう。

俺達は互いの武器を構え、突っ込み合う様に接近する。

本当にこれで、この一撃一閃で全てが決まる。

このトーナメントの優勝者が……長年、決着がつかなかった俺と千冬の勝敗が決まる。

だが、しかしちよいとばかり武が悪い。

千冬の零落白夜はシールドバリアを斬り裂いて相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられる。暮桜最大の攻撃能力。

つまりはいくら、相手にシールドエネルギーがいくら大量にあっても意味はない。

逆に俺の絢爛舞踏けんらんぶたつは少ない残量のエネルギーを増幅して一気にフル状態に出来る。

この点だけ見れば強力な能力だが、零落白夜の前ではフル状態にしても、意味はなさない。

だからこそ、絢爛舞踏でエネルギーをフル状態にして、更に大きな一撃を当てないと勝てはしない。

勝機はある。零落白夜は自分のシールドエネルギーを能力に回している。

その分、エネルギーシールドは脆くなり、勝機は見出せる。

だが、その編は必ず千冬も対処しており、対応してくるだろう。

だからこそこのエイヴィヒカイトシステムだ。

今は一度も起動してないが、これにかける他に今はない。

渴望すれば必ず、黒百合も答えてくれるだろう。

だから 渴望しろ。

「あの約束はしかと守ってもらおうぞっ！だから、勝つのは私だっ！綾、お前を倒したという事実を持って私の勝利の証とさせようっ

！」

「抜かせよっ！負けるのはどちらから知れっ！だから、倒れろっ！勝つのはっ、俺だっ！！」

高速で接近しあっているが何故だか、スローモーションの様に感じる。

俺は勝つ。そうだ、俺は勝つんだ。

この刹那を抱いて。何としてでも必ず勝つんだ。

だから、もっと渴望しろ！ 心から“そうであつたらいいのに”と強く望め。

そうだ。

時間が止まればいい 今が永遠になればいい。

いつもそんなことを思っていた。

何気ない日常の一コマ、一時……刹那をいつまでも、永遠に感じて楽しんで味わっていたい。

それは誰でもない束と共にいつまでも永遠に 至高の刹那を感じていたい。

だから、俺が負けて千冬とのあの約束を守らなくてはいけない様になつて、束を一人残して悲しませるなんて絶対に出来ない。したくない。

千冬には、かなり申し訳ないけど。俺はもう、後戻りはしない。そのまま束と駆け抜ける。

あのISを始めて俺に見せてくれて、束の胸の内を教えてくれた時の様な悲しい思いを束には、もう二度とさせてくない。

俺は何に置いても、何よりも誰よりも束だけをもう一人の俺自身である束だけを優先する。

だから、負けない。負けられない。

「（時間が、この一瞬、刹那が）」

願うんだ。何より強く。

「（止まればいい）」

答えてくれ黒百合。 答えてくれ、
そう強く渴望した瞬間。

うん、分かった。私の愛しい人

エイヴィヒカイトシステム発動。喜んで学べ。

何処かから、透き通って優しい、それでいて少しだけ寂しそうな少女の声が聞こえ。
それと同時に今まで起動しなかったエイヴィヒカイトシステムが初めて発動したのだった。

そうして、視界は開かれた。
スローモーションこそはなくなっていなかったものの、今さっき様な意識に霧がかかった様な感覚は綺麗になくなり、意識はとっもすっきりとしている。
ディスプレイで情報を見たり聞いたりではなく理解した。ISに初めて触れたときにも感じた一体感で今、自分が何をしているのか理解した。

俺は今、時の体感速度を引き伸ばしている。
常識ではありえない事。だが、そのありえない事は今現実の現象として起きている。

操縦者の渴望《思い》に答え、常識ではありえない事を実現するのがエイヴィヒカイトシステム。

全てが止まったと錯覚させるようにスローモーション。
千冬が剣を振りかぶろうとしているのも。何もかも。
これが俺の渴望望んだした光景。

今なら勝てる。

そう揺るぎない確信を得て、エイヴィヒカイトシステムが発動して
いる今、二乗する様に瞬間加速イゲニッション・ブーストを発動する。

絢爛舞踏を発動して今、シールドエネルギーはフル状態。

その状態から更にエイヴィヒカイトシステムからなる体感時間の引
き延ばしによる加速。

それにより、瞬間加速イゲニッション・ブースト以上に速い加速となる。

そうして、その加速状態から千冬の懐へ入り、ギロチンを振り翳す
とエイヴィヒカイトシステムの効果も加速状態も丁度消えた。

「なっ!?!何故、お前がそこにつ!?!」

考えもしない、想像もつかいない、光景に千冬は驚愕の声を漏らし
ていた。

驚くのも無理はない。目の前にいて捕らえて絶対に逃がさない様に
していたが、気づいたから自分の懐。しかも、潜られている。

常識では、ありえない事。無茶苦茶なのは承知している。だが、こ
れは現実のものとしてここにある。

何故なら “ありえないなんてことはありえない” のだから。

「くっ!」

千冬は驚いていても、それでも対応してこようとす。

驚異的な反射と思考速度だ。
だが、もう遅い！

「俺のっ！勝ちだあああああああっ！！！！！」

その声を荒げて上げ、ギロチンを振り下ろした。

『試合終了。勝者 神山綾選手っ！』

そう勝利者を告げる放送が聞こえた。

ギロチンは千冬の暮桜のエネルギーシールドを貫き、絶対防御を發動させ、暮桜のシールドエネルギー残量を0にしていた。
その勝った事実を噛み締め、黒百合を解除した。

「私の……負けか……」

そう少しだけ悄気た様な呟く千冬。

機体は解除しているが疲れたからなのか、悄気ているからなのか千冬は地面に座り込んでいる。

「そうだね。そして、俺の勝ちだよ」

「そうだな。やっぱり、お前は強いや。それにあの約束も無効となつたな」

俯いていた顔を少し上げ、俺を見つめながら、少しだけ笑みを浮かべ千冬は言った。

やっぱり、千冬の戦う意思みたいなものの中には、あの約束があった様だった。

何処かで期待させていた分、申し訳ないけど……これが結果なのだ

から仕方ない。
そんな事、気にしているだけ無駄だ。

しかし、そんな考えが表情に出ていたからなのだろうか、千冬に心配されてしまった。

「綾……そんな顔をするな。確かにあの約束が無効となったのは、残念だが仕方ない。これが事実、なのだからな」

「そうだね」

「お前の優しさはお前のいいところだが、あまり優しすぎるのもどうかと思うぞ？ 兎に角、あの約束が無効になった事を気にしてないと言えば嘘になるが。私は私の本気の全力全開で本気の全力全開のお前と戦う事が出来た。それだけで充分だ。最高の試合だったよ」

「俺もだよ。ありがとう、千冬」

「こちらこそ、ありがとう、綾。だから、胸を張れ。私に勝ち、勝者となったという事実を噛み締める」

「言われなくても分かっているよ」

そう言って俺は地面に座り込んだ千冬に手を差し出した。
すると、千冬はその手に捕まり立った。

千冬が立つと自然とその捕まった手は握手の様になったのだった。

「優勝、おめでとう。綾」

「ああ、ありがとう。千冬」

そうして、会場がトーナメント優勝者誕を喜び祝う大きな拍手と歓声包まれる中、学年トーナメントは幕を閉じたのだった。

…

第二十五話（後書き）

というわけでいかがだったでしょう第二十五話。

前書きでも言いましたが、今回の千冬戦、かなり頑張りました。

活動報告でも言いましたが、今回のイメージモデルは燃えゲートの熱いバトルシーン。

例を上げるなら、Dies Irae、装甲悪鬼村正英雄編、デモンベイン等です。

久しぶり戦闘描写で決勝戦という事なので力はかなり入れました。

特に戦闘描写っ！これは自分でもかなり、高評価です。夜10現在は。

多分、明日感想を見て、少なさとかいろいろと見て、底辺になると思いますが。

ただ、少し厨二臭過ぎたかもしれないww後悔はしてないけど、「アレ？」とは思う。

特に後半での綾君の心理描写。

そして今回の大目玉、ワンオフ・アビリティっ！

登場の仕方はかなり苦戦しました。何か難しかった。

問い合えず、自分なり上手く活用できたからよかったかな。

それとエイヴィヒカイトシステム。

初起動は逃亡編という計画でしたが、勿体無いので今回初起動させました。

元ネタが元ネタだけに。能力が物凄いチートww

まあ、当分起動もしないし、うんともすんとも言わなくなるので登場はないです。

あまり、出しすぎてもチートインフレになりますからね。
それと分かる人には分かるネタとあの子がちよっぴりだけ登場。
本格的な登場は逃亡編でなので、大分先ですね。まだ、一年生の
六月ですし。

綾君が勝ちましたが、エイヴィヒカイトシステムのほぼおかげです。
これが起動してなかったら、もう少し苦戦していました。勝ってた
けど。

それに今回の綾君は約束通り、本気の全力全開でした。

本人にとっては始めです。その証拠に周りの事に一切触れてないで
すから。

アルスター戦では余裕があったので気にしてましたが。今回は集中
してました。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて
下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいた
します。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想
のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いしま
す

第二十六話 ？（前書き）

今回はある意味、いろいろな意味でヤバイ回かもしれません。
綾君と束さん、ちょっとやらかしたので。

どういふ事かは
れからです。

一

それではどござっ！

第二十六話 ？

綾視点

学年トーナメントが終わった。

結果としては優勝者は、俺。

そして、二位が千冬という見慣れた結果だった。

見慣れたというのは、今までも同じ様な結果だったからだ。

俺と千冬は幼い時から剣道をしており、大会に出では千冬は大会を総なめにしていた。

格という俺は、いつも千冬の次の二位で悪ければ、三冠には入っていないという事もあった。

まあ、それ自体、真面目に本気でやっていないとい事が関係していただんたろうが、別にあの時にも今でも不満も悔しい思いもなかった。

ただ今回、慣れ親しんだ結果でも唯一違う結果があるとすれば、俺が一位となり、優勝したこと。

そして、学園最強の名を手に入れてしまい、世界最強候補になってしまったということだ。

これにより、これから物凄く面倒な事が待っているんだろうな。そう考えるだけで気が参ってしまいそうである。

「はあ〜」

そんな小さくだが深い溜息が学年トーナメントを終え、インタビュ―やらなんやら諸々をも終え、一人更衣を済ませ更衣室を後にして一人廊下を歩いている時に出た。

幸いな事に更衣室から出た直後なので、一人だったので誰にも聞かれてなつくてよかった。

束になら聞かれていても、大丈夫だが。聞かれてのが千冬なら、ジト目を向けられ、小言の様にツッコまれていただろう。

だが、俺達が生活している我が国、日本には『噂をすればなんとやら』という言葉があるわけで……

「おっ、来たな」

渡り廊下の角を曲がったところ、そこに壁に凭れて腕を組んでいる千冬が居た。

服装は俺よりも早く着替え終えた様で制服である。

状況から察するにどうやら、千冬は俺を待っていていたようだ。

「待っていてくれたんだね。ありがとう」

「いや、気にするな。私が勝手に待っていただけのことだからな。それじゃあ、早く束の下に行くぞ。あまりアイツを待たせると後々五月蠅いからな」

「あはは、そうだね」

そう答えると千冬は俺の隣に立ち歩き始めた。

目的地は束のところ。

何処に居るのが正確な居場所は分からないが、高確率で観客席へと登る階段近くにでもいるだろう。

これといった明確な根拠はないが、俺の感がそこにいると強く告げている。

と言うより、今日は本当に疲れた。

激務の後に激戦の連続で、最後の千冬の一戦。

今日の気力を根こそぎ使い果たしたと言ってもいい。

だから、早く束と会いたい。

会って、束の笑顔を見たい。

それだけの些細な事で疲れなんて吹っ飛んでしまうのだから。

そんな事を思いつつも、束の下に向う。

多少話はするものの、千冬も疲れている様で、俺の事を察して、大した話はしない。

ほぼ無言、心地いい無言のまま歩いていると俺の感が告げていた通り観客席へと登る階段近くのベンチに座って束はいた。

「お待たせ、束」

束の見つけるやいなや声をかけていた。

それにベチンに座って俯いてばーっとしていた束は気づき勢いよく顔を上げる。

そして、俺の顔を見るなり嬉しそうな顔をして

「綾ーっ!」

こっちに向かって物凄い速さで向かってきた。

さっきの戦闘のあの能力がまだ尾を引いているのか、向かってくる束の姿はスローモーションに見えるが、イグニッションブースト実際物凄く速いのだろう。

例えるなら……イグニッションブースト瞬時加速ぐらいの速度。まあ、ありえないけど感じ的にそんな感じだ。

兎に角、物凄く速い。普段、とろい束と比べて何倍も。考えられな

いぐらい」。

とまあ、こんな感じに速いので疲労しきっている今の体なら吹き飛ばされてしまうかもしれない。
なので、転ばず倒れないよう受身を取って。

「お疲れ様っ！綾っ！」

抱きつかれて反射的に抱きしめる。

予想していた通り、こっちに向かって走り抱きついてきた束の勢いは凄まじく飛ばされそうになったが、受身を取っておいて正解だった。

不覚にも数歩後ろに後ずさりする様に下がったが、束ごと倒れなかっただけよしとしよう。

抱きついてきた束が、一言労い言葉を満面の笑みで言ってくれ、そのまま抱きついた体勢で束は頬ずりしてくる。

嫌じゃない。むしろ、嬉しいぐらいだがくすぐりたい。

だけどやっぱり、体に溜まっていた疲労は不思議な事に癒されている。

体がだるかったのも束と抱き合っている事によってなくなって、決勝戦で今だ高揚していた心も安らいでくる。

やっぱり、束はいい女だ。髪の毛もいい匂いだし。まあ、胸がガンガンに当たっているけど。

そんな風に俺も抱きついてきた束を反射的に抱きしめている。

周りも人の目も気にせず。そう、気にせず。

「……おいっ」

束と抱き合っていると隣からとつても冷たく、ドスの効いた千冬の声が聞こえた。

何事とかと、横目で千冬の様子を確認すると……千冬表情は、えらく不機嫌そうで何処かむくれているようだった。

何故？

「いつまでそうしているつもりだっ？」

変わらず冷たく、ドスの効いた声で千冬はそう語気を強めて言う。そして、問われた自分達の体勢を確認する。

ああ、やってしまった。

久しぶりこの感覚が来た。

今の体勢 俺は束と抱き合っている。

俺は事態の深刻さ（？）に気づき内心で少し焦りつつあるが、束はこの状況を楽しんでいる。

あまつさえ、束は更に密着しようとして、千冬を挑発しようとしており、それに感よく気づいた千冬はこめかみをヒクヒクっと引きつけている。

幸いな事にこの場には俺達以外誰もいなかったが、場の空気は暗く重たくそして、刺々しい。

声こそは発してないのだが、束と千冬は無言で睨み合っている。

止めて話なり何なりを逸らせばいいのだが、俺には今の二人の間に入ってこの睨み合っている状態を止める覚悟はない。何か二人の視線の間では、バチバチと火花が散っている様に見えるし。

それに今までも同じ様な事は何度もあった。

酷い時は睨み合いで収まらず、口喧嘩の殴り合い寸前みたいなもの
あつたつけ。

それは置いといて……長年の嫌な経験でこの場合の対処法は二十分
に心得ている。

だから

「はいはい。そこまでだよ」

だから、俺から離れてしまえばいい。

大抵の事の根幹の原因は、俺らしく。俺が離れば事態は穏便に収
まる。

なので、今回も穏便に収まった。空気は穏やかにものになり、刺々
しいのも消えた。

まあ、まだ二人は若干睨み合ってはいるけど。

それにこうすると大抵、千冬が引き下がる。

今回もそれはそうで、睨むのを先に千冬がやめてくれて安心する。

「はあ……相も変わらず仲良しなのはいいが常識は弁えろ、束」

「……はいはい」

「はいは一回だ。バカタレ」

「はあ〜い」

「はあ……もういいよ」

叱ってもぶざげたり、生返事しかない束の付き合っている事がバ

からしくなったのか千冬は呆れた様に溜息を付く。
今回は千冬が大人の対応をしてくれたからよかったが、昔みたいに殴り合いの喧嘩みたいになっただらどうしようかと変な不安を覚えていた事は、そつと胸の内に締まっておく。

何だかなあ〜いつもこれだ。

以前のアルスターさんとの一戦後の事にしてもしかり、今回の事にしてもしかりだけど。

本気の全力全開とかを出すと、いつも些細でしょうもない事とかで、その本気の全力全開とかを出したツケが注意していても、必ず回ってくる。

いい試合が沢山出来て、いい結果を得られたというのに中々どうして綺麗に締まらない。

だから、本気の全力全開を出すのは苦手なんだ。

それにいい加減、千冬もそろそろ気づくのだろうに。

俺と束の關係に。

今回は「相も変わらず仲良しなのはいいが」と言っつて、まったく気づいていない様子だったが……

「ん？どうした、綾？そろそろ、学生寮に戻るぞ」

「あ、ああ……分かった」

気にしても仕方ない。

迂闊にホイホイ聞ける事でもないし。

来る時きたがくればその都度、最善を尽くして事態に対応して対処すればいい。全力で。

刹那を駆け抜ける様に。

だから、今はどうしたって手段はない。

これは俺だけの問題でもない、俺が一人勝手に手を出していい問題でもない。

来る時に起ることが例え悪くてもそれが最善を尽くした結果なのだから。

だから今だけは、この日全ての事が終わった後の至福の刹那の様な何気ない一時を楽しもう。

「あっそうだ。ちーちゃんもお疲れ様。ちーちゃんの戦っている姿もかっこよかったよ。あの姿を見たら同性でも惚れるね。それぐらい惚れ惚れするかっこいい姿で。」

実際に惚れている子もいたし」

「うそ……だろ……？」

「本当だよ。よかったね〜モテモテで」

「……はあ〜」

学生寮に戻る為に歩いて話していると束の話聞いて千冬は気が重たそうに溜息を零す。

千冬の気持ちをつからなくはない。

確かに千冬の戦っている姿は、かっこよく惚れ惚れするものだった。それで惚れる子も気持ちも若干ながらではあるが分からなくもないが、千冬としてとつても複雑だろう。

人から好かれるのは多少なりと嫌じゃないが、今回の惚れたっというのは、恋人としてだろう。

この学園は俺以外女子しかない。だから、対象は女の子となる。その場合、そういう趣味の人じゃなかったら辛い事この上ないのだから。

だから、千冬は溜息をついたのだろう。そんな千冬の様子を見て束はおもしろそうに笑っている。

「にはははっ でも、二人ともかつこよかったよ ちゃんと試合の映像は高画質・高音質でバッチリ記録したから、機会があればいいくんにも篝ちゃんにも見せようよ」

「そうだな。機会があればな。機会が」

「そうだね」

機会があれば、束がバッチリ記録した動画を一夏や篝に見せてあげたい。

一夏は歳相応の子だから……画面に食いついて見るだろう。

ISは女性しか使えないとはいえ、ロボットアニメから出たような存在だ。

そんな存在に大好きな姉が乗って操作している姿を見れば、一夏はそういうのも好きだから目を輝かせてみるだろう。そんな一夏の姿が目に見えぬ。

まあ、千冬は一夏にその動画を見せるのも、ISに触れさせるのも乗り気ではないみたいだが。

一夏は千冬の説得次第だけど、篝に見てもらうのはとっても難しい。白騎士事件後、ゴタゴタとしたから……いや、罪悪感をどうしても感じてしまい、今一歩前へと踏み出せず、会うどころか一度も連絡

を取ってない。

見てもらうのは、あくまできつかけとしてだけ。いつか、この問題も近いうちに解消しないと。

いつまでも、手付かずのままにしているのもよくないし、それに昔みたいに束と箒には仲のいい姉妹に戻って欲しい。

だから、近いうち……夏休みぐらいにでも、無理にでも都合をつけて束を引っ張ってでも連れて箒に会いに行こう。

「それにしても、本気の全力の綾は本当に強かった。私も本気の全力全開で挑んで勝つつもりでいたが、まさか負けるとはな」

「悔しいの、ちーちゃん？」

「諦めがついたが。それでもやっぱり、悔しいものは悔しいさ。いろいろとな」

「ふーん、そうなんだ……」

悔しいといのはやっぱり、あの約束の事なんだろう。

あの約束は千冬が勝てば有効となるが、結果として俺が勝った。

その事は、千冬の中で整理が済み諦めがついていても、叶わなかったことは悔しいんだろう。

そんな千冬の言葉を聞いて束は、興味なさげに流しているながらも何処か興味深いそうに呟いていたのだった。

「でも、私もほぼ初めて本気の全力の綾を見たけど凄かった。流石は綾だよ」

「そうだな。あれが本当のお前の強さか……本当、凄かったよ」

「いや、そんな事ないって。あれはエイヴィヒカイトシステムが奇跡的に起動してくれたから勝てただけで。もし起動してなかったら、どうなっていたか分からないよ」

「それでもお前が勝っていたさ。お前はそれだけ強いという事だ。お前が自分で思っているよりもな。その強さは力だけじゃなく、精神的にもな」

「そうなのかな……？」

「そうなんだよ。お前は本当は私以上に遥かに強い。強いからこそ私はお前に憧れて追い求めている。お前を……ではなく、お前の様な強さを」

「そうそう、綾は自分を過小評価をし過ぎなんだよ。そういう謙虚なところが綾のいいところなんだけど。時々、何にしても度が過ぎているところがあからね。だから、もっと自分の力に自信を持ったほうがいいんだよ。綾はこの世で何よりも誰よりも凄いんだから」

「そうだぞっ」

そう二人に褒められ……特に東に褒められて気恥ずかしくなる。

褒められるのは、慣れてないから気恥ずかしい。

自分の力に自信を持ったほうがいいか　　そういうのは、あまり持たないようになっていた。

何故か　　それは、俺の力はどういい言い回しをしても、悪の力ではない。東《俺》の世界を脅かすものを全て、排除するだけの。だけどもあ、申し訳程度には持つておくことにしよう。

そうはしたものの気恥ずかしくなって気になっていた別の話を振って聞いてみた。

「東、ワンオフ・アビリティー単一仕様能力はどうだった？」

約束通り、千冬との決勝戦で使ってみたけど、そのことについての周りの反応が気になる。

予め、ワンオフ・アビリティー単一仕様能力については発表して説明もしている。

だが、現物を見せるのはあれが始めてだ。はたしてどういう反応だったのだろう。

「バツチリ、最高だったよ 使いどころもよくて試合最後のいい演出になって際立っていたよ 企業席の人達も度肝う抜かれたって顔して最高だったよ」

愉快そう言い、その時の様子を思い出したのか楽しそうに笑う東。

やはり、予想どつりの反応だった。

当然の反応だ。いくら、発表され説明されても、それはあくまでも言葉と文字でしかない。

現実の光景として、それを目の当たりにすれば度肝う抜かすのは間違いない。

見てしまえば、その力の前に誰もがそれを他より先に手に入れようとする。

それにより世界はまた、急激にそして緩やかに前へと次へと進んでいく。

それが今回、東が態々、学年トーナメント最終決戦を利用して、ワンオフ・アビリティー単一仕様能力を世界にみせつけた本当の理由。

ただ、これからが問題だ……用心しないと。

「ワンオフ・アビリティーと言えば……綾、最後の一撃の前、何をしたんだ？一瞬で目の前から消えて、気づいたら認識外から一撃を喰らっていた」

「ああ、あれね。どうやら、ワンオフ・アビリティーに共鳴してエイヴィヒカイトシステムが起動したようなんだ」

共鳴というのは、聞こえのいい言い回し。

実際のところは、俺のあの時の渴望に黒百合……コアの人格みたいなものが応えてくれたから、ワンオフ・アビリティーを利用して起動してくれたと思う。

これはあくまでも俺の推測なので。推測の域を出ていない。

「ああ、やっぱり。私も手元のモニターで黒百合と暮桜の機体状態を常にチェックしていたから、もしかと思ったんだけど、やっぱりね」

「なっ！？あれは今まで起動しなかったはずでは？！それがどうして？」

「さあ……それはよく分からないんだ。共鳴したとしか」

起動した事に千冬は驚きを隠せない様子だが、反対に束は冷静だった。

というより、束もどうしてシステムが起動したのか推測して気づいている様だ。

だから、冷静で冷静に今もその推測を更に発展させているのだろう。俺と同じ推測を。

「そうか。なら、あの速さは何なんだ。一瞬で目の前に来るなんてありえんぞ。見失わないようにちゃんと捕らえていたのに」

「そつだね……言うならば、アレは……体感速度を操ったからかな」「はあっ？」

意味が分からんと全力で言わんばかりに一言で聞き返されてしまったのだった。

こうなるのも仕方ない。誰だってこうなる、俺だってこうなる。

「……体感時間の引き延ばしだよ。自分が感じる体感時間を無限に引き延ばし、その引き延ばした時間の中を動くことで本来の時間軸イケニッションブーストにおいて超加速を行う。そして、その超加速に瞬時加速を合わせて使う。だから、あの速さを可能に出来たんだよ」

「何だ、その無茶苦茶な理由は。まあ、仮にそつだとしても。こんな事が可能なのか、束？」

「そつだね……システムを搭載してないISじゃありえないけども。システムを搭載しているISなら可能だよ。あのシステムはそういう無茶苦茶を不可能を可能にするシステムだからね。ね、綾？」

「そつだね」

変態システムである事には違いない。

あのシステムは俺の渴望を戦う力として、使う為に作ったシステム。

自分の渴望をこの世の理として今の理を侵食し、最終的にはその渴望からなる理を既存の世界全体に流れ出させる。
何もかも全ては束の為に。

「……私の暮桜に搭載する事は可能なのか？」

「可能だけど搭載はしないよ」

「どうして？」

「あのシステムは非常に不安定なシステムで今回、起動したのも奇跡中の奇跡みたいなものなんだ。だから、そんな不安定なものに乗せた機体に千冬を乗せる気にはいらんないよ」

「……」

「それにあのシステムはかなりデータ量を食うからね。そんなのを搭載するぐらいなら他に安全で強力な武装なり何なりを搭載したほうが堅実的でしょう？それに千冬には無理はさせたくないからね」

「そうだな。綾がそういうなら別に搭載しなくてもいいか」

説明すると千冬は何処か嬉しそうな表情を浮かべ納得してくれた様子だった。

それとは、反対に話を聞いていた束は少しむくれていた。

「だが、黒百合にそんな不安定なシステムを搭載していても大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。システムは起動すれば強力だけど起動しなければた

だの飾りみたいなものだし。黒百合自体、束が産み出す新技術とかを搭載して試す試験機の意味合いもあるからね」

「そうだったな」

黒百合は実戦機としても開発されたが、試験機としての意味合いも持つて開発された機体。

それ故に黒百合には、束が日夜産み出す新機能・新技術が試験的に搭載され続けている。

その例が、ギロチンのレーザーであり単一仕様能力であり、エイヴイヒカイトシステム。ワンオフ・アビリティ

そんな話をしつつ学生寮へと歩いていると束が小声で話しかけてきた。

「エイヴイヒカイトシステムだけど、使って変な違和感とかなかった？」

「いや、ないけど。変な違和感って？」

「例えば 女の子の音が何処かから聞こえた、とか」

そう静かで落ち着いていう束は、どうやらシステム発動間に聞いたあの少女の声を聞いていた様だった。

「その様子なら聞いたんだね」

「そういう束も聞いたのかい？というかアレは……」

「聞いたよ。あれはね、黒百合のコア……ナンバー002の自我だ

と私は思うの。私達が予測していた通り、エイヴィヒカイトによって促され、徐々に人格は芽生えつつある」

「そうか……楽しそうだね、束」

「楽しいよ　そういう綾も楽しそうだね　今日のトーナメントは面白かったよ　いろいろと更なる未知を体感して考えられたから」

「そうだね」

本気の全力全開を出した代償はある意味、大きかったけどそれ以上に得たものも大きい。

エイヴィヒカイトが起動して、コアの人格が芽生えつつある。

この一連のトーナメント、特に決勝戦は決して無駄ではなかった。それどころか、それ以上に有益なものだった。

「いい一日だったね」

「うん　そうだね」

「ああ、そうだな」

そんな話をしつつ、俺達は学生寮へと足を進めていたのであった。

…

第二十六話 ？（後書き）

ということではいかがだったでしょうか第二十六話 ？。

前書き通り、綾君と束さんがやらかしました。

が、あまり強くはツッコまないで下さい。本気の全力全開を出した反動なので。

千冬さんは、これでも今だ表面上では気づいていません。

鈍感（？）なのは、一夏と揃って似たもの姉弟です。あくで表面上ではの話です。

というより、千冬さんも所々でそういう気がある事を束さんに仄めかせている気が……

まあ、いいか。気にしたら、そこで試合終了だ。

今回、補足みたいなものをするのはこのぐらいですかね。

付箋にはあまり、触れられないし。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽にお問い合わせ下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いしま

す

次回、「またせたなっ！」なお師匠様、登場。

第二十六話 ？（前書き）

「待たせたなっ！」なあ、の師匠が登場っ！

大塚さんボイス全開、僕トランザムっ！状態で師匠の声を脳内再生して下さい！

それと後書きにあるアンケートを実施していねので感想と一緒に書いて下さい！

それではどうぞっ！

第二十六話 ？

綾視点

アリーナを後にして、俺達はひとまず先に学校の方へと戻ってきた。時間帯的には、夕方の五時頃であり、今だ来賓客もわりとたくさん残っている。

そんなところを歩けば例え学生だとしても、向こうは見ない様にしているみたいだけど、ジロジロと見られる。

やっぱり、それは俺が今のところ世界でただ一人の男でISを操縦できる男であり、今日なってしまった世界最強候補。

そして、隣に居る束は世界にISを見せつけ広め世界を約一年で塗りかえってしまった天災。

そんな俺達を見る目は合いも変わらず、異常なまでの恐怖と畏怖、そして強烈な警戒。

慣れてしまっただけにはならないけど、やっぱり少なからず煩わしくは束と一緒に感じてしまう。

そんな事を頭の片隅で微かに考え、学生寮へ戻る為に今だ学生寮へと足を進めていると束と千冬が何かを見つけたように、その方向へ視線を向けていた。

「あつ奈々さんだ」

「それに一郎さんも」

束と千冬の視線の方向……そこに奈々さんと一郎さんの二人がいた。二人は、柔和な人柄で親しみやすい雰囲気用の務員と何かを話して

いる様だった。

学年トーナメントの最中の控え室のモニターで二人を見かけたけど、まだ居たんだ。

連絡は、それなりに取らされてお互いの近況はそれなには知っているから別に大した話をしなくてもいいんだけど。

やっぱり、会ったのなら挨拶の一つでもしておいた方がいいかもしれない。

などと、思っていると二人はどうやら俺達の存在に気づいた様で一度、こちらを一郎師匠が見ると。

何かを話していたのにキリをつけ話し終え、話していた相手の用務員の方に二人揃って頭を下げて、分かれるとそのまま二人揃って向ってくる。

「お久しぶりね。綾、東ちゃん、千冬ちゃん」

「久しぶりだな、三人とも。元気にしていたか」

こちらに来て、開口一番にそう挨拶してきた奈々さんと一郎師匠。

奈々さんこと、“水城奈々さん”は相変わらず、若々しく四十代とはとても思えない。

見た感じ奈々さんは、二十位前半で多く見積もっても二十代後半、三十代前半にしか見えない。

今日は、来賓客としたということもあり、いつもの上着は白衣で中は私服というラフな服装ではなく、普通に着飾っていて美しい。

そして、もう一人が一郎師匠こと“水城一郎さん”。

一郎さんは奈々さんと対照的に五十歳と歳相応で相変わらず、声と

いい容姿といい有名な某スニーカーキングミッションを得意とする傭兵にかなり似ている。

服装も奈々さんと同じく、来賓客と言うことでスーツを着ているので更に似ていると思わせる。

この人が奈々さんの旦那さんであり、IS学園にも資金を援助して世界的有名投資資産家であり、元伝説的な傭兵であり、俺の師匠でもある人。

五十代でどう頑張っても二十歳前半にしか見えない若々しい奥さんがいるなんて犯罪だと常々思う　まあ、そんな事口にしたら死ぬから言えない。

ちなみに二人の名前はどこかで聞いた様な名前だが、偶々同じ名前だけであり漢字や経歴は違うので。間違っても、アニソン界の女王やアニソン界の兄貴を連想してはいけない。

「お久しぶりです。奈々さん、師匠」

「お久しぶりです　奈々師匠、おじ様」

「お久しぶりです。奈々さん、一郎さん」

俺、東、千冬の順に奈々さんと一郎師匠に挨拶をする。

「おおっ！会いたかったぞっ！我が娘達よっ！」

「はいはい。大好きな娘の様な存在の二人にあえて嬉しいのは私も分かるけど。流石に自重しない、アナタ」

「くう〜っ！」

束や千冬とこうして会うことどころか顔をあわせる事が久しぶりで
一郎師匠は嬉しくて二人を抱きしめようとして、呆れ顔の奈々さん
に首根っこ捕まれ抱きしめようとしたのを拒まれる。

その様子を「またか」と思いながら俺と千冬は呆れたように見て、
束は楽しそうに微笑んで見ている。

相変わらず、まったくこの人は。それに相変わらず奈々さんの尻に
叱れている様だし……こうなれば、元伝説の傭兵も形無しだな。こ
うはなりたくない。

子供が出来ないという事も会ってか奈々さんも師匠も俺達を本当の
子供の様に可愛がってくれる。それこそ、世間で言う親馬鹿の様に
それ自体は、問題ないしとっても嬉しいのだが。問題は一郎師匠だ。

一郎師匠は奈々さんを軽く超えて凌駕するほど、親馬鹿だ。

それは奈々さん同様、子供がほしくても出来ないという事が一番大
きいんだろうが、それでも限度を超えている。

特に俺以外の束や千冬達には甘い、それはもうドロドロのチョコの
様に甘い。

束達が何かを欲しがれば、それが例え普通では無理な者でもこり押
しで手に入れて与える。

実際それで昔、束が「プールが欲しいっ！」と言った時には、一郎
さん宅である豪邸にプールが一時間で出来たのは今でも強烈な思い
出だ。

それでもそんな風に一郎さんに接せられても、束達は嫌な顔どころ
か嬉しそうにしている。

それは一郎さんが純粹な気持ちで接してくるといふ事も関係あるが、
千冬や一夏には、両親が居らず……心の何処かで両親を求めており、

そうしてくれる事が二人にとっては嬉しく。
篤と束……特に束にとって一郎さんは、本当の父親である篠ノ之のお父さん以上に本当の父親的存在である。
変な話、束にとって一郎さんの認識は本当の父親である篠ノ之のお父さんよりも上だ。

皆、それぞれそんな理由があるからあんな風に接しられても嬉しそうにしているんだろう。

もっとも一郎師匠は俺には結構厳しい。弟子といつこも関係しているんだろうが、それを差し引いても厳しい。

まあ、その逆に奈々さんは俺にも甘いけど。

「H A N A S E ッ！奈々よ、私には束ちゃんと千冬さんをこの身から零れ落ちる愛で包容しなければならぬのだっ！」

「自重しない、ア・ナ・タ いい加減にしないと葬りますよ」

「ぐっ……」

首根っこ捕まれてもそれでも束と千冬を抱きしめようとする一郎師匠に、奈々さんは最後の大きい釘を刺す様に語気を強めて言う。その後こそ一郎師匠は抱きしめるのを諦めた様だった。

女は強し と昔からよく言い。女尊男卑の世の中それを嫌なぐらい強く物語っているけど、奈々さんと一郎師匠を見ているとそれを強く実感する。

大の男大人……それも元伝説的傭兵が外見年齢二十代の背の低い女の人の尻に敷かれている光景と言うのは、こういつては奈々さん達に悪いかもしれないが中々滑稽だ。

それに今の世の中になってしまいう前からこの夫婦の力関係はこうな

ので見慣れた光景だ。

ただ、見慣れすぎて呆れるか苦笑いしているしか出来ないでいると、ようやく一郎師匠はやっと俺をちゃん見て言った。嫌味を。

「何だいたのか、馬鹿弟子。相変わらず、ひよろひよろしているな。そんなんだから今の今までまったく気づかなかったぞ」

「五月蠅い、馬鹿師匠。この年下好きが。アンタ、いっぺん屋根高くから吊るしてやろうかつ！」

嫌味に俺も嫌味を返してやる。

まったく、この人はいつになっても世界がどう変化しても変わらない。い。

それがいいところで憧れている部分でもあるんだけど。師匠はいつも、会うたびにまず嫌味から言ってくる。

俺とは対照的に分類に入る人間で。だからこそ、俺の師匠でもある人だ。

対象的な人物だからこそ習う部分も多く、尊敬できる人だ。

と言うか、初めに「久しぶりだな、三人とも。元気にしていたか」と言っていたから、気づいてただろうが。この馬鹿師匠が。

「くっ、年下好き違うわっ！ たまたまだ、奈々がそうだっただけだ。クソっ……言われたくないことを言ってくれたな、この馬鹿弟子が。ここで引導を渡してやろうかつ！」

「来ませいっ！ 今日こそ、返り討ちにしてやるっ！ 馬鹿師匠っ！」

「良くぞ、言ったっ！馬鹿弟子っ！」

不毛な言い争いしている俺達に奈々さんは呆れ、掴んでいた一郎師匠の首根っこを離れた隙に一郎師匠はCQCの構えを取り。

それに対応する様に俺も一郎師匠のCQCと同じ構えを取り、戦闘態勢に入る。

激戦の後の戦い……更なる激戦となりそうだが、そんなこと関係ない。この人には、一撃浴びさせてぎゃふんと言わせないと気がすまない。

実際のところは嫌味言われて、むしろくしゃさしているだけだ。

「行きますよっ！師匠っ！」

「来いっ！綾っ！」

構えまま一郎師匠へと振り込もうとすると

「「そこまで」」

そんな重なる奈々さんと束の声が聞こえ、一郎師匠は前までみたい
に奈々さんに首根っこを捕まれ、俺は後ろから束に抱きつかれて、
俺と師匠……二人とも戦うことを強制的に中止された。

こうなってしまうば、どうにもする事は出来ない。一郎師匠は、奈々さんには数多が上がらず。

俺も振り解く事こそは可能だが、後ろから抱きついている束の力は
強く有無も言わさない強い覇気みたいなものを纏っており、この行
動をやめざる終えない。

そんな俺と師匠の馬鹿げた光景を残りの千冬は唯々、とてつもなく
呆れ顔で見ていたのだった。

「ハイハイ、アナタ。本当、いい加減にしなさいよ。大好きな綾（綾子）に会えて嬉しいのは分かりますが。それでいい歳して、照れ隠しのツンデレしているんじゃないやありませんよ」

「ツンデレなんそでは断じてないっ！私は……っ！「ア・ナ・タ？」
「すみませんでした」

師匠は相変わらずだ。奈々さんにお言い抑えられる様に言われると即効で謝った。

普段、おどけていたり優しい人が怒ると怖いというのはどうやら事実の様だ。

今の目の前にいる夫婦はそれを物語っている。
それに怒っている人が普段、相手に基本的に敬語じゃないのに敬語で怒っているのだと、更に怒っているというのを強く感じる。

「おいっ綾、お前もだぞ。いい加減にしとけよ。でないと、ここの地形が変わる」

「そうだよ、綾。落ち着いて、平常心平常心 でないと、ちーちゃんとの言つとおり、綾とおじ様がここで戦ったら、地形変わって学園諸共この島沈むから」

「あっはは……ごめん、東、千冬」

叱られ、どっという反応したらよいの分からず、とりあえず苦笑いしつつ俺は、東と千冬に謝る。

千冬は普通にちゃんと叱ってくれているのだが。

束は一応、落ち着けてはくれている様だが、何だかこの状況を楽しんでいる様だった。

これもまた、本気の全力全開を出した反動とツケみたいなものかもしれない。

「まあまあ、男共はそこらへんに放置して。お話ししましょう。束ちゃん、千冬ちゃん。久々にこうして会えた事ですし、いろいろと高校生活の話を知りたいからね」

「そうですね」

「分かりました、奈々師匠」

そんな事を皮切りに束達、女性陣は世間話をし始める。

こうなれば、女性陣の話というのは長いもので男は見守ることぐらいしか出来ない。

そう判断すると、夕暮れの茜色の空でも眺めつつ見守り始める。

そうしていると、ふと隣に一郎師匠が隣に立つ。

「なあ……綾」

「はい」

抑揚なく至極冷めた口調で俺の名前を師匠は呼んだ。

さつきまでのギャグ全開の雰囲気は一切消えており、今あるのは得物を睨みつけ捕らえて離さない蛇の様なとっても冷め切った雰囲気のみ。

現役、伝説にして最強の名を轟かせ名実としていた伝説的傭兵だっ

た師匠のこれが本来の雰囲気。
それは微かにしか放ってないが、俺の背に物凄い寒気を走らせている。

「お前も今日の学年トーナメントで気づいていただろ。あの団体が居たのを」

「はい……嫌と言うほど、嫌悪と憎悪の視線を浴びていたので」

「そうか……気づいてなによりだ。IS学園創立記念にして初めのイベント事だったからな、あのIS反対政府団体の奴らの動きも活発だった」

そう俺と師匠は、少し離れた目の前の方で楽しそうに世間話でも話し込んでいる束達に聞かれなくらいの音量の声で話し合う。

あの団体とは、師匠が名前を出してくれたが“IS反対政府団体”のこと。

この団体は、ISが世に広まり浸透しつつあると同時に発足された団体であり、名前が表すとおりISの存在を一方的に強烈なまでに判にして否定する団体。

少数だがそれなりの権力の強い政治家達を筆頭にして、ISの存在に対して批判するかなりの数の団体員もいるらしい。

団体のメンバー自体は、男が多いが少数ながら女性もあり、非政府組織だがよく抗議でもや政府にそういう書類を送りつけているらしい。

そのIS反対政府団体が今日の学年トーナメントに来ていた。

それについては俺も知っていた。試合中に何度もその団体の構成員らしき人達から強烈な嫌悪と憎悪の視線を嫌と言うほど浴びていた

からだ。

気にしないようにしていたし、気にもまったくならなかったが。今思うと、とってもあの目線たちは鬱陶しかった。

「今回こそは特に大きな行動はしてないし、奴らは政府や委員会から認められていない非公認組織だが、なまじ強力な権力を持つ権力者達の集まりだ。もしかすると、だ」

「……そう、ですね」

「所詮は頭の固い者達の集まりにしか過ぎないが。その内、過激な方法でISを束ちゃんを取り除こうとしてくるかもしれない。そうでなくても……」

「……以前言っていた、日本国内での不穏な動きがある、という事ですか？」

「そうだ。それは今だ申し訳ないが調査中だ。だが、ある情報によるとその不穏な動きを見せている者達とその団体で裏で繋がっていて、物資の横流しをしているというのがある」

「……」

本当、俺と束には敵が多すぎるな。

まあ、ISを広めた方法はある種の正攻法であるとは言え悪行であり。いくら世界に紛いなりにでも認められたとは言え、悪である事には変わらない。

罪は受けるが……その報いまでは受ける訳にはいかない。

その団体と不穏な動きを見せている人達が、世界を変える力もなく。

ただ、束だけを一方的に批判して排除するのなら、俺のやる事はただ一つ。

そうする者達を一人残さず、一つ余さず……刈り取るだけだ。その者達の血でギロチンに注ぐの飲み物へと代えてやる。

その人達をやる事を認めた上で否定して、そうしてやる。

もし、束だけを一方的に批判して排除しようとするのなら。

「だから、警戒して気を気をつけろよ。でないとお前も死ぬし束ちゃんも殺すことになる」

「そんな事、分かりきっていますよ。俺がする事はいつだってどんな時だって変わりませんよ。我が身に代えても全力で束を守ります」

ああ、そうだとも。

俺のやる事はいつだって、どんな時だって変わらない。一つだ。

我が身に代えても全力で束を守る　それが揺るぎなく変わらない絶対に解けない呪いの様な命約だ。めいやく

例えどんな困難があろうとも俺はそれを束と共の乗り越え　その果てに“不変の様な至高の刹那”を束の共に味わう。

「そうか……お前こそ本当にいつになっても変わらんな。それが不変の刹那か」お前

「……そうかもしれませんね」

「まあ、それでもだ。準備や調整は必要だろう。一度、夏休みにもやる事やってから家に束ちゃん引き連れて戻って来い。鍛えなおしてやる」

「分かりました」

そう短く答えるとどうやら俺達の方こそ長く話していた様で丁度、束達の話し終えたタイミングの被ったのだった。

夏休みか 篤と会ったからのついででいいだろう。

学年トーナメントが終わって、新たなる厄介事。

厄介事だが、別に苦じゃない。束を思えば尚更、やる気は出るというものだ。

全ては 俺という存在は……一つ余さず全て束の為に存在しているのだから。

…

第二十六話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第二十六話 ?

今回も表現とかにいろいろと凝ってみましたが、いかがだったでしょうか？

今回は小笑い程度の笑い&シリアスもどきの回でした。

何でこんな微妙な言い方をしているかと言うとハッキリと断言していいものか自信がないからです(汗)

だって、ネタも遊戯王ネタやグラハムネタとか分かり難く使っていますから。

まあ、分かる人には分かる感じ使用なので仕方ないですけど。

今回、久しぶりの奈々さんが登場して、一郎師匠が登場っ！

見た目は作中でも触れている通り、某スネークですが。

中身はギャクシーンにスネークもどきだと思っただけならば幸いです。

綾君と師匠の関係はるる剣の剣心と比古清十郎の関係性みたいな感じですよ。

親馬鹿も引くぐらいの親馬鹿です。綾君以外には。

嫌いつて訳じゃないですけど……ある種の愛情の裏返しみたいなものです。あの嫌味とかは。

愛しているの事には、変わりはありません。ツンデレですね、分かります。

綾君が一番のヤンデレでは？と以前、言われましたが。

違います、ありえませんが。狂っているだけです。一周して正常に見えるぐらいに。

というか、そんな男のヤンデレ嫌です。そう言うのはやめて下さい。

男のヤンデレって怖いでしょ？いろいろな意味で。
例を挙げるとブレイブルーのジン「キサラギみたいな（好きな人
には申し訳ありません）。

そして、アンケートです。

アンケートを取りたいのは、6月がこの話で終わり。
次回から7月なのですが、その7月イベントをやるかについてのア
ンケートです。

私としてはどうしようかと判断しかねているのでご協力をお願いし
ます。

1、原作の臨海学校オマージュみたいな話をやる。

メリット：これを選べ束さんたちの水着姿とキャキャフッフや
束さん限定のエロデレもどきが見れます。

デメリット：お楽しみシーンまでかなり時間がかかる。作者失
踪するかも？

ww

2、臨海学校編はせず1イベント挟んでさっさと本命である8月に
行く。

メリット：スムーズに更新が出来、作者の負担は少ない。

デメリット：エロゲーでいうところのCGシーンが1よりも極
端に少ない

1と2どちらか一つを選んで感想と必ず一緒に書いて下さい。

何かアレな感じで、別にアンケートだけでもいいんですけど、それ
だけじゃ悲しいので感想も一緒にお願ひします。

1の方が多いんだろうな〜デジャヴるぜっ！

1にいろいろと文句つけていますが、別に大丈夫ですよっ！やる気
満々ですっ！アンパンマンですっ！（え

ただ、面白さよりも作業量を思うと、気が滅入っているだけです。
サーセンww
締め切りは活動報告に次の更新予告が書かれるまでです。約一週間の期間となります。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言一言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

今回はアンケートと感想もお願いします。

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします
す

第二十七話（前書き）

一週間待たずに集計をやめてしまったけどアンケートの結果、1で行きます。

そして、今回新たな試みに挑戦してみました。
その名もっ！ DE O T I に W W W

それではどうぞっ！

第二十七話

綾視点

熱い、体が燃やされている様に熱い。

とつても熱い熱がジワジワと髑る様に蝕んでいく。

蝕まれているのは、体だけじゃない。

体を始めに簡単も視界も　そして、魂さえもそのとつても熱い熱がジワジワと髑る様に蝕んでいつている。

これは何だ　そんな問いに答える者は誰もいない。

ならば、自分で結論を出すしか、熱さで蝕まれ停止しつつある思考を活動させ続ける道はない。

そう、これは

この熱はまるで、罪人を処刑する断罪の炎の様だ。

そう結論を自分なりに導き出すと不思議とこれが本当の答えの様に思えてくる。

そうか……この体を蝕む熱さは、罪人を処刑する断罪の炎みたいなものか。

そう考えると、この熱さに体が蝕まれているのに頷ける。

俺は、罪人であるから。

たった一人の愛しの者が世界を侵食し創り変えるのに手を貸した。

たった一人の愛しの者の為だけに、既存の世界を前の世界をこの手で破壊した。

そして、彼女が侵食し創り変え新たに生まれ変わった世界でも尚、その世界を破壊する者らを斬首している。

抵抗する事を決して許さず、圧倒的な力で。

そうしているのは、全て俺の意思で全て愛しの彼女の為に。
俺という存在も何も全て 彼女の為に存在させている。
全て、彼女の為に

そうだしてもやっている事は悪行ではあることには決して変わりはない。

だったら、この裁きを喜んで受けよう。

彼女は、この熱さに苦しめられてはいないようだし 彼女の為に
例えば、何もかもどんな事も本望であり至高の歓喜だ。

ああ、熱いな。本当に体が燃やし尽くされてる様に熱い。

とっても熱い熱がジワジワと甚振る様に全てを蝕んでいく。最後に残っている、この思考さえも。

蠟の様に最後に残っている思考も溶けて消えていく ああ、溶ける。溶けていく、何もかも。

・
・
・
「……よ……よう……綾」

意識に霧がかかった様にぼーっとした意識の中、東の声が聞こえた。声色は、俺を心配してくれている様な声色。

「綾、大丈夫？」

「これで大丈夫に見えたら、東。どうかしているよ」

「じゃ、じゃはは……そうだね」

机の上に頭を乗せて寝て頂垂れている俺の返事に困った様に隣の席に座って居る束は苦笑いしていた。

六月が終わり、七月に入った。

梅雨の湿っぱさは、何事もなかったかの様に消え、これから非常に非常に残念な事に暑苦しい夏が始まってしまふ。

ああ、本当に残念だ。本当に。

「毎年、綾はこの時期になるとしんどそうだね。今もぐったりしているし」

「まあ、ね」

俺は正直言つと夏が大嫌いだ。

季候はもちろんのこと、夏独特の暑さが一番に大嫌いだ。

ほどほどの暑さなら丁度いいが、夏独特の暑さは度を遥かに越している。

この夏独特の性でいつも初夏早々に体調を崩しやすくなり夏バテ気味となり、夏真っ盛りには軽度の引き籠もりとなる。

嫌いな理由はそれだけじゃない。

夏といえば、俺は嫌いなのだが学生なら誰しもが大好きな夏休みという長期の休みが出来る。

その期間帯には、大抵の学生が休みを向え一夏、羽をおもつきり伸ばす様に遊んだりしながら楽しみつつ過ごすのが定番で。

人の往来が激しくなり、何処に行っても沢山の人があり鬱陶しい人がみんが量産される。

暑くてしんどいのに大量の人がいる……本当に嫌な季節があるもの

だ。気がめいる。

それに加えて夜も暑い……俗に言う熱帯夜と呼ばれる夜もあり、クーラーを付けてないと寝れない。

本当に夏は俺を殺そうとしているのかと錯覚するぐらい辛い季節。

これらが夏が嫌いな大きな主な理由だが、これでもまだ極々僅かなぐらいで嫌いな理由なんかこれ以上、上げると細かくなりキリがなくなる。

季節なんてものは、春と秋さえあればいいと思うよっ！

「本当に辛そうだね」

「早く……部屋に帰ってクーラーで涼みたい。篠ノ之先生、俺とつとと部屋に帰りたいです」

「神山君、そこで諦めたら試合終了ですよ。ってか、綾、もうちょっとだけ一緒に頑張ろうよ。後、ホームルームだけなんだしさ」

机の上に顔を乗せ束の方に顔を向けながらネタを言うと束はばてている俺の頭を癒すように撫でてくれながらネタを返してくれた。

けれど、束が「もう少しだけ頑張ろう」だなんて言うとは珍しいし喜ばしい。いつもはつまらなさそうな顔して早く帰りたいそうにしているのに。

それだけ今の俺がぐったりとしているって事か……情けない。けれど、早く帰ってクーラーで涼みたい。汗びっしょりだ。

そんな風に束の方を向くように机の上に頭を乗せながら暑さに頂垂れながら、束に頭を撫でてもらい安らいでいるとふと束の止まった。

何事かと思い、閉じていた目を開くと丁度、教室の入り口から千冬が入ってきたのだった。

相変わらず、束は変なところの駆け引きが上手い。まあ、上手すぎて学年トーナメントの日みたいに千冬の前で抱きつかれてもその後の対処に困るのだが。

「しんどそうだな、綾。大丈夫かっ？」

「もう、ダメぽ。織斑先生、帰っていいですか？」

「誰が先生だっ誰が。それにダメに待っているだろう。後、ホームルームだけで終わるんだ。頑張れ」

「頑張れってねえ……千冬は元気にさっきまで百合ハーレム形成してクラスの仕事していたから、そんな事言えるんだよ。本当、無理ぽ」

「百合ハーレム言っなっ、そんなの形成しても嬉しくはないわっ。お前が夏嫌いで体調を崩しやすいのは知っているが、そんな風に無駄口叩ける間は大丈夫だな」

「どっつだろっね」

一頻り会話を終えると千冬は自分の席である俺の後ろの席に座る。そして、俺は再び束の方に顔を向けながらぼーっと束を見つめながら机の上に顔を乗せ頂垂れる。そんな俺を束は、優しい瞳で見つめてくれた。

千冬の言うとおり、後ホームルームで終わるのは分かっているがそれども一秒でも部屋に帰りたい。

教室にもこの学校は進行なのでクーラーが完備されており、涼しいには涼しいが、朝から夏の暑さの雰囲気と暑さに体がやられて体がダルくてしんどい。

だから、一秒でも早く部屋に帰って休みたい。

こう……何度も帰りたいたい言っているとか々に学校に来た不登校児みたいだ。

ぼーっと隣に座っている束を見つめながらホームルームまでの数分を潰しているとチャイムと同時に教室に担任が入ってきた。手には、いつも通りの物と何かの用紙を持っている。

「それでは今から、ホームルームを始めます。織斑さんお願いしませう」

「はい。起立、礼」

『よろしくおねがいします』

担任が委員長である千冬に礼を仰ぎ、千冬の号令で全員礼をして着席する。

今からの事に関係ないが、千冬が委員長だが俺は副委員長である。何か、有耶無耶のなし崩しで決まった。

ホームルームが始まると担任の前フリの話から始まり、手に待っていたあの用紙を烈事に配り始めた。

前フリの内容は「七月に入った夏休みまで後一ヶ月です。七月という事なので……e t s」といった感じの内容。

前の子から配られてきた用紙の束たばから一枚プリントを取り、後ろの千冬へと用紙の束たばを回し、プリントの内容を見る。

「なん……だとう……っ!？」

そんな絶句した様な声を小さく漏らし、内容をもう一度読み直して、そしてまた絶句した。

「えー皆さん、臨海学校の案内のプリントは届いた様ですね。では……」

担任が手元の“臨海学校”に少しだけ目を落としながら軽い案内等を含めた説明を始める。

そう、俺が用紙を見て絶句した理由が“臨海学校”……これだ。

このIS学園で今月である七月にある期末テストと並ぶビックイベント。

特に俺達（俺は断じて違うが）、学生にとっては期末テストなんかよりも大事で楽しみな一大イベントである。

期間は、今週の週末の金土日の三日間。その三日間の日程のうち、初日は丸々一日自由時間。残りの二日は校外学習となっている。

夏の海、初日丸々一日自由時間、そこは咲き乱れるうら若き十代の乙女達。

この用紙を見るなり、クラスの女の子達はテンションが上がってとっても賑やかだ。

そんなクラスの女の子とは反対に俺のテンションは底辺に落ちて底辺すら突き抜け破壊していた。

「……海か」

実施される所は臨海学校の名が表す通り、海辺　海である。

俺は夏も嫌いだし、夏独特の暑さも嫌いだし、夏の海も嫌いだ。一言付け加えて言い直しておくとして別に海が嫌いという訳ではない。春や秋の陽気のいい日の海派好きだが、夏の海は嫌いだ。

理由は単純明快、ただでさえ夏の海は街よりも俺の気分的に暑いのにそれで尚、海水浴を求めて沢山の人が海水浴場に集まるからだ。それに太陽さんも海辺では街よりも過労死しそうなくらい働いて自分をギラギラと輝かして自己主張して、日陰を滅ぼす。

だから、夏の海は嫌いだ。無駄に暑いし無駄に多いし日焼けするし、日陰ないし。

加えて今年はIS学園に入学してしまった事で、男は俺しかいない海に行けば、女の子は皆水着に着替えて楽しそうに遊ぶ。

そうなれば、自然と目に水着姿が目に入ってしまう。別にそれで変な感情は決して抱かないが、俺には愛しの愛しの彼女の束がいる。ちなみに独占欲の高いヤンデレ属性つきという俺得な彼女。他の子の水着姿なんか見ようものなら即、ナイスポート……かなあ〜しみの向こうへ〜、バットエンドルートなのは確定的に明らか。

よくて、死なないが俺得な激しいスキンシップが待っているだろう。死ぬより危険だ。

真の友である源さんやその愉快なお仲間的小伙伴们について行ってもらうわけにもいかないしな……鬱だ。

こう……嫌いな夏の季節やその夏の海のことを考えていたら、この臨海学校かなり行きたくなくなってきた。

「~~~~」

だということにお隣の束は楽しみにしているニコニコとした笑みを浮かべている。

そういえば束、海好きだったな。
去年は、いろいろな理由でいろいろとゴタゴタとして夏は行けなかったけど。

それ以前は毎年、俺達三人と箒や一夏もつれて人嫌いな束を考慮して師匠が持っている日本にある近くの小さなプライベートビーチばい海に行っていたな。懐かしい。

こんなにも楽しみそうにしている束を見たら、「行くの嫌」とは口が裂けても言えない。

だが束は、用紙と睨めっこしている俺の顔を見て内心に気づいたようだった。

「あつ……綾、夏の海は嫌いだったよね。行くの嫌だよな？」

「珍しいね、束がそんな事を言うなんて」

「だ、だってっ今年の夏の綾は例年に比べてしんどそうにしているから、だから……」

「皆まで言わなくてもいいよ。確かに体調悪いし、夏の海は嫌いだけれど行くよ」

変な心配を束にさせてしまった、反省。

この季節は本当に体調が思うようによくなくて、上手く取り繕う事が出来ない。

だから、束に変な心配をさせてしまった、猛反省。本当に忌々しい季節だ。

まあ、夏の性にしても全部俺の責任なんだけども。

第一学校行事だから、休むことは出来ない。ある意味、強制参加だ。そんな強制参加の大嫌いな夏の季節の海だが、それでもそんな事すら忘れさせる楽しみなことはある。

「何より、東の水着姿を見たいからね」

「私の水着……姿？」

周りの人達には聞こえない様、東だけに聞こえる様に小声で言うと東は突然の言葉にきよとんとなる。

だが、回転の速い東。段々と俺を言葉を理解した様で

「うんっ そっか そっか なら、私の水着姿楽しみにしててね」

「ああ」

東は、俺だけに聞こえる小さな声で嬉しそうな声を漏らし嬉しそうな笑みを浮かべた。

まあ、俺も青春真っ盛りの健全な男子だ。下品な理由なのは承知している。

けれど、沢山の行きたくない理由があっても、東の水着姿が見れる。それだけで嫌な理由なんてものは簡単に我慢は出来る。我慢してもお釣りが出るぐらいだ。

所詮はその程度の嫌いな理由。東には勝てないのだ、あっはははははっ！

って、はっ！ダメだダメだ、この夏の独特の暑さと体のたるさで頭がやられ始めている。

言った事は本当の事で本音だが、どうも思考が変な方向に向っている。行く先が不安になってきた。

「海、楽しみだね 綾」

「そっだね」

不安もあるが今年の海は楽しくなりそうだ。
臨海学校がほんの少しだけ楽しみとなってきたのだった。

…

第二十七話（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第二十七話。

アンケート集計の結果、1となりました。

出だしは出オチみたいなものですww感覚的に詩やポエムぽく書いてみましたw

何だかんだで書くのに苦労したところですwww（何やってんだ、私はorz

今回は心理描写が少しかりおかしいです（汗）

まあ、一足早い夏風邪にかかっているのご理解して下さい。

あとは綾君が暑さでやられたというのもありますww

今回は本当に臨海学校準備編でした。

綾君は夏がダメです。主に体調的な意味で。

極度の夏嫌いという理由がかなり強いですが。身体的な意味もちよつとはあります。

ちなみに綾君は夏の季節、毎年こんな感じですwww

臨海学校、どうなる事やらw

ちなみに予め言っておきますが

原作みたいな水着を一緒に買いに行くというイベントはありません。ありきたりですし、お楽しみは後のほうで嬉しさは倍増するのでww

ww

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願いたい

します。

今回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします
す

次回

美女だらけの林間学校っ！イチャラブやヤンデレ、修羅場もどきがあれば、ポロリもあるよっ

第二十八話 ？（前書き）

刮目せよっ！これが卿らが求めた樂園だっ！
ヴァルハラ

第二十八話 ？

綾視点

臨海学校初日、無事天候にも恵まれ天候は雲一つない快晴。俗に言う、海水浴日和という奴だ。
自分を激しく自己主張する太陽の日の光を反射する海面は穏やかで、暖かい潮風が揺らいでいる。

快晴なのは大いに結構、海水浴日和なのも大いに結構。
だが、やはり海水浴場というものは例年通り暑い。
太陽が早々、激しく自己主張していて照り輝いている。

ここに来て数分だが、既にしんどくなってきた。このまま一日もつのか不安だ。
この揺らいでいる潮風ももう少しだけでも涼しかったらよかったのに。

「……眩しい」

右手を空を掴む様に空高く伸ばしながらも太陽の光が目に入り、まぶしくて目が細めになる。

既に臨海学校が始まり一日目である丸一日自由時間は始まっている。
早く水着に着替えた子もちらほらといて早速泳いだり、ビーチバレーを始めたり、日光浴している子達もいる。

俺達がいるこの海水浴場は、学園の所有地にいるのは女子生徒ばかり。

こんだけの広さの海水浴場を所有地としているなんて……流石は政府が設立しただけの事はある特殊学校だ。

何故だかは分からないが、何か一郎師匠の意図みたいなものを感じる。

俺も着替え終えて準備体操とかも終わらせ束と千冬が来るのを待っている。

そういえば、二人はどんな水着をきてくるんだろう。

臨海学校始まる前の前の日ぐらいに二人で水着を買いに行っていた様だから、新しいものなんだろう。

どんなのかは今は知らないが楽しみだ。

ちなみに俺の服装は下ボクサータイプの水着に上半裸の上着に半袖のパーカー、そして白の日傘だ。

半裸の上に半袖のパーカーを着ているのは少々、暑いが半裸で日傘差していたら何か変質者ぽいので仕方なく。

日傘は必要だ。暑いしここは案の定、日陰一つなのでこの日傘がないと俺はもつと大変だ。

そんなこんなで更に待つこと数分、かなりの数の女の子が何やら騒いでいる声が聞こえる。

その方角を向くと丁度、束と千冬が現われた。

「お待たせ」

「待たせたな」

思ったとおり、女の子達が騒いでいた原因は束と千冬だった。

束は白いビキニで、豊満な胸を面積の少ない布が綺麗に美しくそして、色っぽく強調している。

千冬は束と対照的に黒いビキニで、胸は束と比べてしまうと小さい

がそれで綺麗に強調されている。
二人ともスタイルもいいので水着に強調されていつもよりも一段と綺麗にそして、可愛らしく見える。

周りの女の子達が騒ぐ理由も分かる。

まあ、やっぱり……一部、千冬の水着姿を見る目が明らか変な子達がいるが気にしてはいけない。

ハアハアとかピンク色の吐息を荒く漏らしているのもきつとこの暑さによる幻覚と幻聴なはずだ。

だから、本当に気にしない。世の中には気にしてはいけない事は五万とあるのだから。

兎も角。

「綺麗だね、二人も。水着姿、とってもよく似合っているよ」

「えへへへ　ありがとう」

「あ、ありがとうっ」

素直に飾らず真っ直ぐな感想を言うと二人は頬を少しだけ赤らめ照れている。

白い砂浜に美女の水着姿に照れた表情。

いい絵だ。しんどいけど報われた気がする。

特に束の水着姿にさつきから無意識に目が行って見惚れてしまう。

束の水着姿は、見慣れてはいるがそれでも見惚れてしまう。直視しているとな変な照れ見たいな物を感じる。

豊満で綺麗な胸は去年よりまた、大きくなっていて。スタイルも運動していなくても抜群にいいので本当、見惚れてしまう。

本当に束は綺麗で可愛い。また、惚れ直した。

「にやはは、綾。そんなにみ、見ないでよ」

「ご、ごめん。つい見惚れてしまって」

「そうなんだ。にやはは、照れるね」

「ただ、あまり見れているもアレだし見ないよう意識していても目が行ってしまい。」

それに気づいた束は、恥ずかしそうにはにかんでいた。

「それにしてもお前は毎年、その格好だな」

「まあ、こうでもしないとここに出てこれないからね」

「毎年、綾は大変だね」

やっぱり、この格好に対してツッコまれた。

毎年この格好なのは仕方ない。俺は夏の暑さに弱いものだから。まあ、端から見てたらとっても変な格好なのは自覚している。

「まあまあ、そんな事を置いて。適当に過ごそうか」

「そうだね。あっ……そうだっ」

そんな何か思いついた様な声を漏らし何処からともなく日焼け止めを取り出してくる。

束の表情は、ニコニコと満面の笑みを浮かべていて何かを企んでいるのがとってもよく分かる。

うん、その、何だろう。物凄く嫌な予感しかしない。

「ねえ、綾？綾に日焼け止めクリームを塗って欲しいんだけどダメかな？ほら、背中届かないし」

と、束は俺の名前を強調しながら嬉々とした声で楽しげに言う。

案の定、企んでらっしゃった。それも物凄い事を。

なんて事言うんだ。二人きりならまだしも、公然の面前、それも千冬の目の前で。

千冬の鋭い視線が突き刺さる。

最近、こんな挑発的な態度が多いがまさか、本当に束は千冬を挑発しているとか？

それならかなり危険だが。何故、束は千冬だけを挑発しているんだ？相手がいないってもあると思うけどもっと、別の意図を感じる。

兎に角、今は現状打破。それが最優先事項。

「いや、俺を指名しなくても。ほら、千冬がいるんだから同じ女の子の方が束もいいでしょう？」

「むうっ……私は綾を指名したんだよ。だったら、それを受けるのが漢ってもんじゃないのかな。さっ行くよ」

「トンでも異論を持ってくるなっ！　って、ちよっ」

苦笑い付きの打開策も失敗に終わり、手を引つ張られ誰かが適当に立てて誰も使っていない様子のビニールシートを引いたパラソルのところまで束に手を引かれて連行される。

突然の事に俺の足は勝手に付いて行き、その様子を何事かと周りの

女の子達に見られるハメになる。

「さあさあ、塗って 遠慮はいらないから」

ズイズイツと日焼け止めクリームを押し付けられる様に渡される。
拒否権はなし この試合は早くも終了ですね。

「綾だけなんだからね……体を許すのは」

なんて100%誤解される様な誘惑染みた台詞をトドメと言わんばかりに色っぽい表情と色っぽい声で言われてしまう。

誤解は幸いな事にされてないようだが、その台詞を聞いた子達はキヤアキヤア騒いでおり視線が集まり、特に千冬の視線が体を抉り裂く様に突き刺さる。

視線で軽く何度も死ぬそう そんなことよりも、だ。

「(どうしたんだ、束?今日は一段と何というか変だよ。どうかしたの?)」

「(どうもしてないよ、いつも通り ただ、綾にしてしてほしいからお願いだけの事。その他に理由なんてないよ 変な心配はいらないよ)」

「(分かったよ)」

いつも束なら程ほどを弁えて行動してくれるのに。

今日と言うか最近、度を越した行動が少しばかり多いから試しに聞いてみたものの案の定、はぐらかさせてしまった。

まあ、気にしても束がはぐらかしてしまうので意味がない。気にした所で今の危機的状況をどうにかなるわけでもないし。

ちなみにさっきの会話は全てアイコンタクによるもの。
普通、アイコンタクで可能なのは目配せぐらいだが束曰く、俺と束
の愛の力で何度もどうにかなるらしい。
世も末な気がしてなくもない。

「はあ仕方ないな　いい男はいい女の頼みを聞くものだからね」

「ふふつ。ありがとう、綾」

「……アホが」

覚悟を決め言うど束には嬉しそうにされたけど。

千冬には睨むのやめて心底呆れられた様な顔をされてしまった。
千冬がそんな顔するのも仕方ない。あれこれ考えるのをやめてやり
遂げることにしたから。

言い様に聞こえるかもしれないが考えるのを捨てただけである。

そして、手の平に日焼け止めクリームを塗る。

束の体を触るのは別に初めての事じゃないし、日焼け止めクリーム
を塗るのも初めての事じゃない。

だが、こう周りに見られている何やら気恥ずかしいものを感じ。そ
れ故に変な緊張も一応はしたりはする。

無理な相談なのは重々承知しているが欲をいうと見ないでほしい。

「うん。それじゃあ、まずは背中からお願いね」

「了解」

ブルーシートの上、うつ伏せになっている束の水着の紐を解いて日

焼け目止めクリームを満面なく塗り始めていく。
今の所は順調に塗れている。束は、気持ちよさそうにしている。
今のところ特に変な反応もないし　　と思っっている矢先、一瞬だけ
束はこちらを向き俺を見た。
こちらを見ていた束の表情は確実に何か俺にとってはある意味では
悪い事を企んでいる表情だった。

「んっ、んんっ……あっ、んうっ……」

塗っていると突然、そんな艶めかしい声が聞こえた。
艶かしいのは声だけじゃなく、表情もまたとつても艶かしい。
素なのは分かるが、ある種の確信犯的な感じもする。

「な、なんて事を出すんだ、束っ！」

「だって〜気持ちよかったもん　仕方ないじゃん　あっ、もっと隅
々まで塗ってね　」

「仕方ないってねえ……」

愚痴を零しながらも言われた通り、背中から腿裏など体の裏面隅々
まで塗る。

さっさの艶かしい声もあつてから千冬の目線が更に強くなっている。
本当、このまま視線でも刺し抉り殺されてもおかしくない目線の強
さだ。

まあ、いい。とりあえず早くこれを終らそう。

「終わったよ。これでいいでしょう」

とりあえず終わった……というか終わらした。

ある意味、地獄の様な至福の一時だった気もしなくもない。
今だ、束の背中の肌の感触が手に鮮明に残っている。

その代償として千冬には、刺し抉られる様な視線で見られてしまっ
たがそれだけだから易いものだ。

それに日陰にいてそんなに太陽に当たってないのにかなりの冷や汗
《汗》を掻いてしまった。

「ありがとう、充分だよ。なんなら、このまま前も塗ってくれるか
な？」

「ふざけんな。怒るよ？」

「むう…軽いジョークなのに。あっそうだ。今度は私が綾の背中塗
ってあげる。ちょっと待っててね」

「ありがとう」

束が前を自分で塗っている間、俺も同じ様に自分の手が届くギリギ
リの範囲を塗ると塗り終えた束が後ろに行き、届かない背中を塗り
始めてくれる。

「痒いことはありませんか？」

「ないですよ」

美容室とかでよくそんな会話をしつつも束はちゃんと手の届かない
背中とかをしっかりと塗ってくれる。

背中に日焼け止めクリームを塗っている東は、楽しそうに鼻歌を歌いながら手の届かないところを丁寧に隅々まで塗ってくれる。おふざけとかは内容で安心だ。こんなところでこれ以上、ふざけられたら確実に俺のライフはゼロとなりかねない。

「終わったよ」

「ありがとう。助かったよ」

「どういたしまして」

東にお礼を言いつつ近くに閉じて置いといた日傘を差しながら立ち上がる。

千冬はちゃんと自分でしつかりと日焼け止めクリームを塗っている様なので俺が塗るなんて最悪の選択はないだろう。

だが、油断は出来ない。涼しいところでも求めてさっさと立ち去ろう。

「あつ、待ってよ、綾。ねえ、ちーちゃんは綾に塗ってもらわなくてもいいの?」

「はあっ!? な、何でそうなるっ!? わ、私は自分で塗れたらいいっ! だ、第一こんな公衆の面前で馬鹿のお前みたいな真似できるかっ!」

「馬鹿って酷いなあ〜東さんは天才なのに。ちーちゃんも中々、恥ずかしがり屋さんでなかなか乙女なんだね」

「う、五月蠅いっ!」

束の発言に千冬は珍しく動揺し顔を真っ赤にさせ、声を荒げて抵抗して束にからかわれている。

どうやら、俺が千冬のも塗るなんていう最悪の選択はないようだ。何かめっちゃくちゃ嫌がっているし。

安心　　と思っただが、俺は見逃さなかった。

「（は、腹黒い）」

愛しの彼女の束が千冬には見えないように、且つ俺には見えるように楽しげな笑みを浮かべ小さくガツポーズしていた。

こいつ、確信犯だ。千冬が拒否するのを分かりきった上であえて聞いて確認した。

その様子には俺は呆れて声も出せなかった。

もう、いろいろな意味で凄いや、束。

「でも、ちーちゃは背中塗れてないよね？この束さんに任せなさい

」

「お、おい。手にクリームつけてち、近寄るなっ！や、やめろっ！」

「よいではないか　よいではないか　」

両手に日焼け止めクリームを塗った束がジリジリとゆっくり千冬に詰め寄り千冬の背中を塗ろうとしている。

流石の千冬もこれには態様でできなかった様で束に逃げ道を立たれ、されるがままとなりつつあるのだった。

何というか……お代官と女中みたいだ。束がお代官で千冬が女中という配役の。

「お覚悟っ!」

「や、やめろおっ!」

千冬は弱々しく声を上げ最後の抵抗するものの抵抗空しく束に背中を塗られ始める。

塗っている当の本人である束は至極楽しそうで背中だけじゃなく胸辺りとかも塗っている様で千冬に後で強烈な脳天チヨップされて怒られていた。

それでも

「た、束っ、ど、どこを触っているんだっ。ん、んんっ……や、やめろっ……あっんっ」

「ふふっん ちーちゃん、可愛い」

「な、何っているんだ。ばかぁ……や、やめ……ん、んあんっ」

その光景を見ないように別の方向を向いていた為、声だけは聞こえてしまい。

その声と二人のやり取りは呆れるほど、とっってもエロかったとだけ言っておっじ。

…

第二十八話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第二十八話 ？

ついに始まりました臨海学校編、本編っ！

イベント事としては定番な物を用意していますが。

それでも力を入れて書いているのでそれなりに楽しんでいただけたらと思います。

でも、少し質というかクオリティが下がっている気がしなくもない気が……

今回は定番から始めてみました

何気にイチャイチャしている綾君と束さんの二人。

さっそくエロ出のエロ落ちというある意味、801展開となりました（汗）

でも、こういうの好きな方々には楽しんでいただけたかと……

束さんと千冬さんの百合もいいですよ（ネタ的な意味で）。

それと今回、束さんの腹黒さを出してみたのですがいかがだったでしょうか？

原作の束さんみたいにナチュラルブラックを表現しようとして、あなりました

ちよつと失敗した気もしなくはない気が……

この臨海学校編、かなり苦勞しています。

原作みたいな福音戦が起きないので2日目、3日目はキンクリするかもしれません（汗）

ですので、イベントのリクエスト等を頂けると2日目、3日目を書くかもしれません。

これは気が向いたらでいいので、リクエスト等を待っています。ただ、絶対に採用となる事はありません。本編の都合があるので……まあ、ネタ不足なだけなんですけどねww参考にはさせて頂きます。ちなみに旅館では綾君と束さんの二人は同じ部屋だった気が　ゲ
フンっ！

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします
す

第二十八話 ？（前書き）

久しぶり（？）の綾×束のイチヤラブタイム。

テーマは、ただ甘い感じながらもきゅんと胸にくるほろ甘いお話。

国語の教科書とかに載っている恋愛系のほろ甘いお話を感覚的に参考にさせてもらいました。

それではとつぞっ！

第二十八話 ？

綾視点

日焼け止めクリームを塗り終わった後、クラスの子達にビーチバレーに誘われた。

誘われたら断る訳にもいかないし、クラスの子達との交友も大切なので参加させてもらった。

ビーチバレーに束も誘ってはみたが束は「見てる」と言い参加せず、俺と千冬だけビーチバレーに参加した。

ビーチバレーの方は暑かったがそれなりには楽しかった。

けれど、やっている最中束の目線が痛かった。

一瞬だけ試合の最中束と目が合ったが、その時の俺を見つめる目がハイライトのないヤンデレ目だったのは紛れもない事実だった。

やっぱり、束からすると女の子達と一緒にビーチバレーする楽しそうに見え嫉妬してくれていたんだろう。

嬉しい反面、頭の片隅ではその反動がいつくるのかと少しばかり不安ではある。

ビーチバレー終えた俺達は、近場の海の家ベンチに並んで座っている。

目の前にはまだ、元気よく遊びまくっている女の子達の姿が映っている。

こんな暑いのに本当に元気だな……夏が嫌いだからあそこまで元気には遊べない。

それに今、ある一つの問題が起こっている。

「いい加減、機嫌直してくれるとありがたんだけど」

「ふんっ……！別に機嫌なんか悪くないもんっ！」

とは言うものの、あからさまに機嫌が悪い束。

ビーチバレー終わって束の元に戻ってからずっと、束はこうして剥れて拗ねている。

こうして剥れている束も可愛いのだが、いつも通り笑っている束の方が今よりも何倍も可愛いし好きだ。

「なんなの……ビーチバレーしている最中、ずっと女の子の水着ばかり見てデレデレしちゃってさ」

剥れ顔のまま拗ねた様子でぶつくさと束は言う。

やっぱり、拗ねてるじゃないかと一瞬思ったけどすぐさま「ごめんなさい」と謝っておいた。

拗ねて剥れている原因はやっぱり、これが。

剥れて拗ねている原因も分からなくはないが、ビーチバレーは基本的に相手を見ないと出来ない競技なので仕方ないと思う。

まあ、こうして可愛らしく拗ねている束も可愛いんだけど。

「それに大体なんなの……ちーちゃんばかり目が行ってさ、ちーちゃんの水着姿に見惚れて」

「そんな事はないけど……それに見ていたのは千冬が一番強かったからで」

「言い訳しないのっ！そうは言ってもちーちゃんを見ていたのは事実じゃんかっ！綾の浮気者っ！」

「浮気者ってねえ……悪かったよ。ごめんね、束」

いつまでも束を不機嫌にせているのは居心地が悪いので。

日傘を右手を持ち、左手で剥れて拗ねている束を宥めるように頭を撫でた。

「あ、頭撫でてくれたってゆ、許さないんだからねっ！べ、別に頭撫でられたってう、嬉しくないんだからっ！」

「あはは……よしよし」

「むう〜」

頭を撫でられたのが気恥ずかしかったのか束は頬を少しだけ赤らめツンデレみたいにか愛らしく照れていた。

とうやら、ほんの少しは機嫌が直ったみたい。本当によかった。

このまま不機嫌のままでもいいさせたられヤンデレルートにルートインしていたかもしれない。

それも怖いがそれルートを俺も心の何処かでは期待している様で…
…自分で自分が怖くなったのだった。

「あっそうだ。別のところに行こう？」

「別のところって？」

「ん〜人が少ないもしくははない静かで落ち着ける二人きりのところかな。まあ、そんなところを探してお散歩デートしよ」

「了解」

答えると脱いでいた半袖のパーカを着直し、右手で日傘を差し、残る左手で指を絡める手を繋ぎ合い二人一緒に何処へともなく歩き出す。

束が言うその人少ない、いない静かで落ち着ける二人きりのところを求めて。

・

「この辺でいいかな」

「そうだね」

数分ほど歩いた俺達は皆が賑やかに遊んでいる海水浴場から少し離れたところにやってきた。

ここ岩場地帯が上の方にある崖が影を作っており、さっきた海水浴場よりも気持ち的に涼しい。

それに束が指定通り、ここには人は誰も居らず、聞こえるのは優しい風の音と優しい波の音のみで二人つきりである。

日風邪もあり邪魔になるので差していた日傘を閉じ足元に置くと手は繋いでまま丁度いい、岩場に二人に並んで腰をかける。

「いいところを見つけれだね」

「そうだね。涼しくて暑くもないから、ここなら綾もゆっくり出来るでしょっ?」

「うん」

そう言って涼みつつ、開いている右手を空を掴むように空高く伸ば

す。

すると、コツンと肩に頭を乗せるようにして束が凭れかかってきた。

「綾……暖かいね」

「暖かい？暑いの間違いでしょう？俺はそんな事ないけどこんなにくつついたら暑いでしょう？」

「ううん、そんな事ないよ。綾は暖かい……その暖かさが私をどんな時だって安心させてくれる。私は綾の暖かさも大好き。さっきは小さな事で嫉妬しちゃっているいろと言っでごめんね」

「気にしないで。嫉妬されるのも嬉しいからさ。それだけ俺を強く強く束が思ってくれている何よりもの証拠だからね。それが何よりも嬉しいから気にしなくてもいいんだよ」

「ありがとう。いつも私は綾に感謝して助けられてばかりだね」

はにかんだ表情でそう言いながら繋いでいる束の握る力が強くなる。

いつも私は綾に感謝して助けられてばかりだね。

それは束だけじゃない、俺もいつも束に感謝してばかりだ。

辛い時も苦しい時も悲しい時も　どんな時も。

束に助けられ救われ感謝している。

束という存在があるからこそ、俺という欠けた人間は個人として成り立っている。

ありがとう　そんな感謝の思いを込める様に握る力が強くなって
いる束の手を優しいながらも強く握ると。

俺のそんな思いに気づいた顔をして、束は嬉しひえな気恥ずかしそうな表情をした。

「そつだ。束、今年の海はどうだった？」

「えっ、今年の海？そつだね、まあまあ楽しいのよ。こうして綾と二人きりでいられるしね。

まあ、一つ不満を上げるならやっぱり、人が多いのが不満かな。今まではおじ様のプライベートビーチだったからね。仕方ないんだけど」

「そつか」

「綾は今年の海はどうだった？」

「俺もまあまあ楽しいよ。やっぱり、体はしんどくてダルいけどね。それでもこうした束と二人っきりで過ごせるから楽しいよ」

「そつか」

そう呟くと束は優しげな瞳で遠くの水平線を見つめる。

以後、会話はなく沈黙が降りる。

気まずくはない、むしろ心地の良い沈黙だった。

俺達は互いを感じ合うように寄り添いあい手を強く優しく握り合っている。

二人を包むように潮風が通り抜ける。

これもまた心地いいものだ。

至福の刹那　永遠という長い時間の中から切り取った一瞬よりも短い至福の刹那の様に感じられる。

「本当に二人きりだね」

「うん、そうだね。束は嬉しい？」

「うん だって、二人きりになる為に綾がビーチバレーして他の女の子に鼻の下伸ばしている間にあれこれ策を巡らせていたからね」

「あはは……策士だね。ってか、言葉に棘を感じるのはどうしてかな？ やっぱり、まだ根に持ってる？」

「もちろん いつも言っているよね？ 浮気したら殺す って。 忘れてとは言わせないよ」

「忘れてないです。とつてもよく覚えています。すみませんでした」
めちゃくちゃ笑顔で言われたけど目が全く笑ってなかった。

と言うか、ハイライトがないヤンデレ目だった。
こつこつ時は変な事を言わず素早く素直に謝るに限る。
束も表情や言葉ではああ言っているが、そこで気にしてはないだろ
う。

「まあ、いいんだけどね。そんなに気にはしてないから謝らなくても」

と、こんな感じなので。
案の定、束はそんなに気にはしてなかった様だった。普通の目をしていたし。
けれど

「だって、私以外の女なんて見れないように考えられないように私色に綾を染めればいいだけの事だもん」

「ナンテコッタイ」

気にはしなかったが、物凄いくつ飛んだ考えを持っていた。考えていた事も恐ろしいが再びハイライトのないヤンデレ目なのが恐ろしさに拍車をかけている。本当にナンテコッタイ。

「それは置いといて」

「えっ？置いとくの？激しく不安なのですが……」

「気にしちゃ負けだよ それよりも……どうかな？」

話を切り替え隣に並んで座っている束は、凭れていた体を一旦離しこちらに少しだけ体を向けて座り直す。

どう というのは水着の感想だろう。

始め感想を聞かれた時は二人まとめて返してしまったみたいになっ
てしまったんだっけ。

折角の機会だ。有効に使ってちゃんと感想を言おう。

「水着、とってもよく似合っているよ。可愛いし綺麗だし何より色
っぽいよ。本当によく似合っているよ」

「そ、そうかな？えへへ」 改めて聞いて言われると何だか照れち
やうね」

少しばかりくどくなかったかもしれないが飾らず思っている事をありのまま言つと束はもじもじとした様子で照れていた。

白い水着 束にしては珍しい雰囲気の水着だ。

失礼な事だか正直、もう少し過激な水着を着てくるのでは、と思つていた。

けれど、束が着ているのは白色の水着、それもビキニタイプ。

露出面積こそは広いものの、白色という色合いが清楚な雰囲気を演出させ、清楚ながらも色っぽく見えている。

「そっか、やっぱりそう言ってもらえると嬉しいね。それに綾も何だかんだで私の水着姿に見惚れてたからね」

「仕方ないよ。束の水着姿はとつても魅力的だからね」

「魅力的かあゝもしかして、私の水着姿を見て興奮しちゃった？」

「まあ、ね。俺も青春真っ盛りな男の子だし。何より束は魅力的な愛しい彼女だから、そんな彼女の色っぽい水着姿を見れば興奮するよ。嫌かな？」

「ううん、そんな事ないむしろとつても嬉しいけど。ううゝ恥ずい照れるっ」

「自分で聞いていて照れないですよ」

「こんな嬉しくストレートに言われたんだから仕方ないじゃんっ！でも、そっかそっかゝ興奮してくれたんだ。嬉しい」

嬉しそうな声を洩らしながらほんのり赤になった顔を俺に胸に顔を

埋めるように抱きついてくる。

こうなるとかなり密着している事になり、必然的に胸が当たる。そうなると今まであまり意識しない様にしていたが否応なしにでも意識させられてしまう。

自分の胸板に当たっている束の胸の感触は柔らかく、半裸の俺と布一枚のしきを隔てている束の胸の感触は直にそしていつもより生々しく伝わってくる。

つい、自分でも興奮しているのか緊張しているのか判断できないほど自分の胸の鼓動がドキドキとうるさいくらいに高まって響く。

束、確信犯だろう。

と言うか、この水着姿で抱きつかれているのは非常に不味い。見てくれの体裁的にも、そして何より俺の理性的にも。

「~~~~ 綾の心臓の音、ドキドキと鳴ってとっても速いね。興奮してくれているんだね」

「そうだね」

「ぎゅーっ なら、もっと興奮……私を堪能してくれてもいいんだよ。ほら、綾も抱きしめて」

「うん」

束は確信犯だった。

一度、こう束のペースになると俺のペースに戻すのは中々難しい。下手に抵抗する訳にも下手に抵抗してこれ以上不味い体勢になるわけにもいかないので、ここは大人しく束に従っておく。

いろいろと大変だが得役なので深くは考えない むしろ、考えな

いようにしている。

本当、この岩盤地帯が人が寄り付かない誰もいないな場所でもよかった。

抱きついてきた束を抱きしめると束は、更に密着してくる。

ドキドキだとかドギマギだとかしながらもっと抱き寄せられる様に束を抱きしめる力を少しだけ強める。

抱きしめているだけでは俺の手は手持ちぶたさな様で気づくと勝手に束の長く綺麗な髪を上から下へと手櫛で梳く様に撫でていた。

撫でている束は体を預ける様に凭れかかってき、嬉しそうな気持ち良さそうな声を洩らしていた。

そうしているとふいに束の心臓の鼓動の音が聞こえて来た気がした。束もおどけて何だかんだ言っても、興奮したり緊張したりしている様で鼓動の音はドキドキと早い。

俺が束の鼓動の音を聞いたのにあざとく気づいた束は気恥ずかしそうに俺の胸板に顔を埋め、恥ずかしい顔を隠していた。

胸板に顔を埋められているのは、とつてもくすぐったく気恥ずかしいが悪い気分はしない。むしろ、何だか微笑ましく嬉しく思う。

ふと、俺と束の視線があった。

「(……あ)」

俺は見惚れてしまった。

俺をきよとんした顔で見つめる束が愛おしくて愛おしくて、あまりにもこの時の束は美しく綺麗で。

そして何より、束といるこの一時が至福の刹那の様に感じた。

そうして見詰め合っているとどちらからともなくゆっくりと唇を近づける。

唇と唇が重なるギリギリの間合い、互いの吐息が掛かる近さで

「好きだ、大好きだ、愛している。何よりも誰よりもこの世で一番に」

「うん、私も好き、好き、大好き。言葉には言い表せないくらい…
…大好き。この世の誰よりも何よりも綾だけをただ愛してる」

そんな愛の言葉を交わしあい、俺達はそつと唇を重ねた。

甘く溶かして甘美となった永遠という長い時間の中から切り取った一瞬よりも短い至福の刹那を二人一緒に味わい尽くすように。

…

第二十八話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第二十八話 ?

前書き通り今回は、

ただ甘い感じながらもきゅんと胸にくるほろ甘いお話を意識して書きました。

可愛くしつとする束さんは可愛いと私は勝手に思っていますww
それを表現したくて今回は書きましたし。

ただ、ヤンデレが見え隠れしていましたけどww

ヤンデレ描写が最近、小ネタ程度になっているな。

まあ、元々そうだったし……

あまりヤンデレ束さんでいるというのは情緒不安定ということなので。

使いどころというか表現が難しいところですね。

読んだ方が話と束さんにきゅんなっていただければ。もしくは
人体の黄金律ならぬ人体の砂糖律みたいに読んだ方々がなればいい
なあ〜と思っていますww

ただ、欠点として描写や話の感じが毎回同じもしくは似ている気がする
するんですね

まあ、仕方ないと言えば仕方ないですけど……ここも改善点ですね。
アドバイスなんかよろしくですっ！

さて、現在の一番の問題。

二日目をどうしようか……

原作では二日目は非限定空間における機体用装備のテストとなっているけど。

この小説でのISは第一世代しかまだ存在してないですし、よくて第一世代後期ですから……装備テスト云々は難しいですね。一応、テスト内容も考えているのでいいけど……書くのがめっちゃ難しい(汗)

二日目、三日目キンクリしてもOK？

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言一言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

読者のエッチ。

か、感想くれなきゃゆ、許さないんだからねっ！

ツンデレの皆大好きシャルルをイメージして台詞です。

もっとも、私はシャルルはあまり好きじゃないというか苦手だけです。

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします

第二十九話 ? (前書き)

今回は原作三巻をかなり参考にしているので。

描写や話し流れのかなり酷似していますが何卒、ご了承ください。
たします。

最後に綾君からの一言をどうぞww

綾「どうしてこうなった〜(^o^)」

それではどうぞ。

第二十九話 ？

綾視点

臨海学校初日の夕方。

自由時間を活用しての海水浴場での海水浴や束との二人きりの時間を過ごした後、

俺達IS学園の一同は今日から二泊三日お世話になる海辺の旅館、“花月荘”に来ていた。

「ここが今日から三日間お世話になる花月荘です。皆さん、従業員の方々の仕事を増やさないよう。注意しましょう。一度礼っ」

「……よろしくお願いしまーす」「」

担任の言葉の後、全員で元気よく挨拶をする。

すると、着物姿の女将さんは上品な笑みを浮かべ、丁寧に辞儀をした。

この旅館とIS学園は今年ならびに来年以降の臨海学校にあたり契約をしているらしい。

この旅館、そこらの旅館よりも高級感というか上品な雰囲気があり、かなり値は張るだろう。

大きな砂浜だけじゃなくこんな旅館までただの臨海学校で使えるなんて……流石は、政府設立の特殊学校IS学園である。

もっとも、よくよく考えると……二日目に非限定空間における機体用装備のテストがある時点でただの臨海学校とは言えないけど。

「はい、こちらこそ。皆さん元気があってよろしいですね」

歳は三十代前ぐらいだろうか、しっかりとした大人の雰囲気を漂わせている。
仕事柄笑顔が絶えないからなのか、その容姿は女将という立場とは逆にすごく若々しく見えた。

「あら、そちらが噂の………?」

ふと、女将さんは俺と束を見て俺と女将さんの目があった。
担任の先生に挨拶をするよう促されよりも早く挨拶をする。

「神山綾です。よろしくお願いします。ほら、束も」

「……うん。篠ノ之束です。よろしくお願いします」

先に俺が頭を下げながら挨拶をすると束に挨拶するよう促す。

そうすると束はいつも通りの無表情無感情の社交辞令的な挨拶をした。

相変わらずな感じだったが束にしては満点といったところか。

女将さんも気にするどころか、そんな束の挨拶を上品に柔らかく微笑んで包んでくれているし。

「ふふっご丁寧にどうも」

そういつて女将さんはまた丁寧なお辞儀をする。

この女将さんには、なり失礼だが、知り合い以外と接している時の猫を被った奈々さんを思い出してしまった。

この上品で優しく柔らかい佇まいというか雰囲気かそう思わせただろう。女将さんには申し訳ない。

「すみません。男一人ということで部屋割りが難しくなってしまう
申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。お気遣いありがとうございます。こんなお気
遣いをしていただけるなんて素敵な男性方ですね」

「……ど、どうも」

突然褒められて少しばかりどもってしまった。

本来、こういう事を言われれば少しながらも誇らしく思ったりす
るものなのだろうが。

俺よりも束の方が自分の事の様に無感情無表情の裏では誇らしげな
顔をしている。

「それではみなさん、お部屋のほうにどうぞ場所が分からない方は
従業員に聞いてくださいませ」

女の子一同は、はいと返事をするすぐさま旅館のそれぞれの部
屋と向う。

やっと落ち着ける。午前中は他の子みたいにそんな激しく遊んでな
いけど精神的に疲れている。

「ねえねえ、綾？私達の部屋どこなんだろうね？」

女の子達が部屋に向っているのを眺めていると隣にいる束がそう問
いかけてきた。

そう言えば、俺は部屋がどこでどんな感じになっているのか知らさ
れていない。

それは何故か束も同じであり、何と言うか……今更になっているい
ろな意味での嫌な予感みたいなヒシヒシと肌というか第六感に感じ

ている。

「さあ？俺も聞かされてないからね。とりあえず、担任の先生に聞いてみようか」

とりあえず聞いてみないからに事態は進展しない。

めちやくちやいろいろな意味での嫌な予感みたいなヒシヒシと肌というか第六感に感じているけど。

「あの、すみません……俺と篠ノ之さんの部屋ってどこですか？」

そう担任の先生に声をかけると体をビクツとさせ、こちらを向いた。何だか表情はとっても言い難そうな顔をしている。

その表情がいろいろな意味での嫌な予感みたいなものに拍車をかける。

「えっ？あつ、言ってますでしたね……その、とっても言い難いのですが……」

「はい」

「……その、えーと……神山君と篠ノ之さんの止まるお部屋は、お、同じ部屋です」

「……ん？」

俺の表情が聞き返した顔で固まった。ついでにこの場の空気と時も。

「……ワ、ワンモア・プリーズ？」

「で、ですからっ！神山君と篠ノ之さんの泊まるお部屋は同じっ！同室ですっ！」

語気を強めて言われて俺はトドメを刺され、言葉を失った。

幻聴とかでは……ないな。事実だ。

どうしてこうなった……本当、どうしてこうなった。

俺と束が同室？普通に考えたらありえないだろう。

束と同室が嫌というわけじゃない。

むしろ、喜ばしい嬉しい限りの事だが、状況が状況だ。

どうしてこんな時に限って同じ部屋になる。

「どうしてですか？俺、男ですよ？普通は年頃の男女が同じ部屋とか避けるのでは……」

「それはその通りです。私もその編は学校の方に問い合わせしてみました。が……」

「が？」

「政府とIS委員会直々の御達しで篠ノ之さんの安全を考慮して神山君と同じ部屋になりました。ほら、ここはいくらIS学園の所有地とは言え、学園外なので学園にいる時よりも篠ノ之さんに対する誘拐や暗殺の可能性が高いとの事らしいので。それに篠ノ之さんの護衛は全て神山君に一任されているので。私もそれに賛同しました」

「そうですか……お手数にかけます」

訳を教えてもらいとりあえず劣いの言葉を担任の先生にかけておく。こつ……語気を強めていつたり冷静を保とうと言ったり、いろいろと苦労をかけてしまっているな。

政府とIS委員会の言い分は分かると言えば分かる。

束の安全性を考えてくれているのは紛いなりにも嬉しい。

だが、どうしてももう少し別の選択を考えなかった。もっと、他の選択があつただろうに。

何かこつ……政府やIS委員会以外の意図を感じるのは気のせいでも済ませていたい。

「それに私も神山君ならもしもの間違えなんて起きないと信じていますから。堅実で優しい男性ですから」

物凄い褒めちぎられ信用されている分、心が痛む。

俺はそこまで信用に値する人間じゃない。むしろ、束の為なら邪魔なもの全て犠牲にする屑な男だ。

まあ、そんな事はいいとして……一部の人以上言っていないが俺と束は恋人関係にある。

だから、これと束がある意味問題である。

束がこんな絶好のチャンスを見逃す筈がない。必ず迫ってきそうな予感がする。

迫られたらそれに抵抗はするし拒否できると思うが多分、無理かもしれない。

何故なら、相手は束で束には勝てないからである。

その証拠に束は嬉しそうな表情をして何やら策をいくつも巡らしている様だ。ああ、激しく不安だ。

ちなみに一緒にいてこの話を聞いていた千冬は、腕を組み難しい顔している。目線が痛いです。

「あ、そうです。神山君と篠ノ之さん宛てに理事長伝えにある方から送られた手紙を預かっていました。はい、これです」

手渡された手紙を受け取り、手紙の内容を見て絶句する。
手紙の内容はこうだ。

「綾、束ちゃんへ

臨海学校を楽しんでいるか？

楽しんでる様なら何よりだ。この手紙を読んでいるという事はもう部屋割りについては聞いているだろう。

はっきりいうと、綾と束ちゃんを同じ部屋にしたのは私だ。

表向の理由は、担任の先生方なり印即の先生方から聞いている通りでそうなのだが、裏向きの理由は私的に面白そうだからそうした。それは奈々も賛同してくれてそういう部屋割りになったという事だ。二人ともいい部屋割りだろ？異論は聞かんがな。

まあ、いろいろと大変だと思うが精々励んで　ゲフン、頑張つて楽しい楽しい三日間の臨海学校を楽しんでくれ。

水城一郎、奈々より

P.S、一線は弁えろよ？二人とも。越えるなら確固たる覚悟を持つように。孫を楽しみにしているby水城一郎

避妊はしっかりね、あ、でももし失敗したら孫楽しみにしているわね　by水城奈々

追記、束ちゃんが可愛くてエロイからって猿になって束ちゃんを孕ますなよ、綾。by水城一郎』

と、手紙には書かれていた。

「（アンタらか……！）」

そう、俺は心の中で語気をかなり強めて言う。

怒りのあまり俺は手紙ちをぎゅっと力強く握っている。

ありがた迷惑な手紙だ。ご丁寧にも二人とも手書きだし。

この二人なら、それらしいもつともな理由をつけて、裏の理由の為に頑張るだろう。

二人がやりそうな手口だ。といか、態々仕組むなんて権力の無駄遣い過ぎる。

手紙の本文の締めも酷いがPSが特に酷い。

二人とも注意を呼びかけている一見見えるが、実際はやるの前提で書かれている。

本当、なんだこれ。二人揃って孫楽しみにしているって……呆れて何もいえない。

と言うか、態々手紙としてわざとこんな内容を書いてくる時点でかなり嫌見たらしい。主に師匠限定で。

特に馬鹿師匠の追記なんて論外だ。触れる気すらならない。

奈々さんはまだいい。

師匠は、今度夏休み会ったら絶対にフルボッコにする。

それがこの時この瞬間を持って確定事項となった。

「綾？ 凄い顔しているけど、そんなに凄い内容だったの？ その手紙は」

「凄いとかの次元じゃない。と言うか束、俺決めたよ。今度夏休み会ったら絶対に師匠をフルボッコにする」

「あはは…… そうなんだ。ねえ、どんな内容だったの？ 私にも見せて」

「ちよっ！ 待て」

束に手紙を引つ手繰られ手紙を黙読される。

束には見せるべきではないんだろっけど、思った時には時既に遅し。もう、読まれている。

まあ、束宛でもあるのだから読む権利はあるから読んでもいいんだろっけど、内容が激しく問題だ。

幸いなことに千冬はクラスの子に呼ばれて、この場にいないからこの手紙を知らないのよかった。

手紙を千冬に読まれたらただ事ではすまない。千冬に読まれたら白騎士事件なんて目じゃない事が確実に起きる。

束が読み終わったら即刻、消し炭にしよう。跡形もあつたという事実さえも消えるように。

手紙の内容を読んだ束は、驚いた顔をしていたが次第に嬉しそうな顔をする。

ついでに「奈々師匠…… おじ様」と言ったじーんつとした声を出して、じーんつとした表情もしている。

何処に感動する部分があるんだよ。

夏の暑い日といい束と同室といいこのふざけた手紙といい。どうこうして……こんなに事になるのだ。呪われているか？ 本当、どうしてこうなる 答えてくれ、黒百合 。 益々夏の季節が嫌いになりそうだ。滅びろ、真夏っ！

もともと、束と同室なのはかなりの得役である事には変わりない。少しでも長く……それも一夜という同じ時間を一緒に過ごせるのだから。

「ふふっ、奈々師匠も一郎師匠も孫、楽しみにしているだってこれは期待に答えなくちゃね」

「えっ？何それ、怖い」

手紙を俺に返しながら、束は妖艶に不気味に笑う。

その笑みを見て俺は身の危険を感じた。

主に純潔を。

受け取った手紙を見つからないようしまうと丁度、千冬が戻ってきた。

「話は済んでみたいだな」

「うん、まあ、ね。政府にもいろいろな意味で困ったものだよ」

「本当にな。綾は大丈夫だと信頼している。だが、束。言うておくが、綾と同室だからって変なこととして綾に迷惑かけるなよ」

「変な事って？私は分からないよ」

千冬の言い聞かせる言葉を束は華麗にスルーして、おどける。その束の様子に千冬は一瞬、怒りそうだったがそこは千冬。すぐに冷静さを保ち、おどける束を鋭く睨む。

おどける束とそんな束を睨む千冬。

端から見れば普通に睨み合っている様に見えるけど、二人の目と目の間には火花が激しくぶつかりあって散っている様に見える。

これが俗に言う女の戦いって奴か。束は兎も角、千冬がここまで張り合いに出てくる意味が分からないけど最近、よく見るようになって来た光景ではある。

「言えるか、馬鹿者つ。もう一度、言う。綾に変なこととして迷惑かけるなよ？いいな、束」

「はいはい 分かってまってます」

「……信用ならんな」

最後まで態度変えずおどける束に対して、張り合っている事が馬鹿らしくなったのか千冬は張り合うのをやめ。

最後に言い聞かせるように強く言い、一つ溜息をついていた。

「それじゃあ、とりあえず俺達は部屋に行くよ。また後でね、千冬」

「ああ、また後でな。綾、身の危険を感じたら私の所に来い」

「ちーちゃん酷い」

「あはは、そうならない様に願うよ。じゃあ、後で」

千冬の心配を背にして俺と束は今日泊まるその問題の部屋へと向った。

・
・
・

「ここか」

「みたいだね」

担任の先生から部屋の場所を聞き、その問題の部屋に着き中に入る。

ここに来る最中、何と無しに旅館の中を見ていたが旅館は広くてキレイだった。

一学年三クラスを丸々収容できる規模というだけで凄いが、その内装は由緒ある内装、装飾と最新設備が見事に融合したものとなっていた。

旅館内の廊下には、適度な温度のエヤコンが効いていてひんやりとして涼しくて素晴らしい。

夏が嫌いな俺にとっては憩いの場となりそうだ。

「おおっ！これはっ！」

「凄い豪華だね 広々としているし」

中に入った部屋は二人部屋といことを配慮されて広々としており、外側には襖があり、その向こうには小さな精々二人が向かい合って話せるぐらいのスペースがある。

そこから見える景色もこれまた素晴らしく、綺麗な海を一望できる。

東向きの部屋だから、日の出や夏の幻想的な月等もきつと綺麗に見えるだろう。

今は夕方でここから見える夕暮れも綺麗だが、今夜の夜空や月もきつと綺麗だろう。

何せ今日は、七月七日　七夕の日なのだから。

それ以外にもトイレ、バスはセパレート。

しかも洗面所まで専用の個室となっている。

ゆつたりとした浴槽は、男の俺でも脚が伸ばせるぐらい大きい。

多分、特別しようなのだろうが学生が泊まるのにこのスケールは凄い。

それに何より嬉しいのが部屋にエヤコンが設備されていることだ。

夏の夜は例え涼しかろうとも俺に取っては熱帯夜の様に暑いことは変わりない。

だから、エヤコンが部屋に在るといっのはありがたい。暑すぎたら寝付けなくて次の日に響く。

これで快適な夜は半分は確約された。残るのもう半分が今からの問題なのだが。

「ふふっ」

「ちよつと」

部屋の中に入り、とりあえず体を休めながら荷物整理をしていると後ろから束に抱きつかれる。

俺に抱きついていている束は、完全密着する抱きついて俺の頬に頬擦りしている。

「コラ、やめなさい。こんな所で」

「いいじゃん 二人きりなんだから 遠慮は無粋だよ？」

「そういう問題じゃない。場所を考えろ、場所を」

くすぐったいだけで嫌じゃない、むしろ嬉しいが場所が場所だ。

いつ何時千冬やその他の人が来るかもしれない。

一々、言い訳みたいな事をするものは面倒だ。

「私にこうさせているのは嫌なの？そうだったら、ごめんなさい」

「そういう訳じゃないが」

抱きつくのはやめなかったものの頬擦りはやめ、しゅんとした束の
声が背から聞こえ言葉を濁してまう。

半分本気の半分冗談なのは分かっているが、束にこんな風にされる
と弱ったな。

俺は束には甘いといか敵わないというか……こんな風にしゅんとさ
れるとそれが例え真つ赤な嘘でも許してしまう。

ダメダメなのは分かっているが……昔から過ぎて直そうにも今一つ
完全には直らない。とりあえず気をつけないと。

「そうしていてもいいよ。だけど、誰か来るのが分かったらやめる
事、いいね？」

「うん、分かった。なら、もう少しだけ。綾分を充電」

「何だそれ」

そんな事を呟きながら束のいろいろな感触に感じつつ荷物整理を続

けていると束にぎゅーっと強く抱きしめられ離れた。

強く抱きしめられている間、いろいろな感触……主に胸の感触をながらも束が嬉しそうにしているのを感じた。

それに平和で長閑だという事を感じ実感しつつ束が嬉しそうにしていると俺まで嬉しくなってきたのだった。

その綾分なるものの充電を一頻りした束も自分の荷物整理をし始めている。

「あつ……そうだ」

「ん？どうかしたの？」

「ねえねえ、綾。寝るときどうする？」

「あつ」

言われて気づく。

一番の問題を放置したままだった。

どうしようか……ここは無難に布団二つを並べて普通に寝るのが無難かもしれない。

下手に外側のあのスペースで寝たり、距離を話して別々に寝るとかをすれば多分だが束が勝手に進入しているだろう。

なら、普通に布団を並べて寝る方がいい。布団に進入される……一緒に寝るという確率自体は変わらないが。

等とどうしようかと考えていると束がドンデモない事を言った。

「一つの布団で一緒に寝る？」

「またまた〜ご冗談を」

「本当に冗談に聞こえるかな？何より、奈々師匠とおじ様の期待に答えないといけないしね」

「えっ？」

「まあまあ、その辺はまた後でにして。荷物整理も終わった事だし、もう一回充電 ほら、綾も抱きしめてよ」

「えっ？あ、うん」

俺の想像のの斜め上に行く束に呆気に取られながらも束の要望通り、抱きついてきた束を反射的に抱きしめる。

何だかいろいろな意味で就寝時間が激しく不安になってくる。

そんな不安を抱えながら俺達は夕食までの時間、二人きりの時間を楽しんだ。

…

第二十九話 ? (後書き)

という事でいかがだったでしょうか第二十九話 ?

前書きの綾君の一言を表している回となりました。

いつかの何処かで予告した通り。

超法規的処置みたいな物で綾君と束さんが同室のとなりました。

理由はご都合主義ですが、これまたご了承を

IS委員会や政府は兎も角、奈々さんと一郎師匠ww

この二人、綾君と束さんの事情を知った上でえげつない事をする人達です。

正に外道ww主に一郎師匠ww

二人は綾君と束さんの幸せを心から願っています、時々綾君にしたら疑いたくなるようなお二人ですww

綾君が苦勞で寿命がマッハになりそうですねww

束さんも束さんで暴走しそうですしww

綾君は一体、どうなることやら。

ちなみにどうでもいい事ですが、原作の臨海学校の舞台と同じ舞台です。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願っています。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想

のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

ボクと契約して感想書きになってよ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします
す

第二十九話 ？（前書き）

また、綾君に得役に見えて実は辛い役をさせてしまったorz
というか最近、いろいろなところでやらかしてばかりだorz
「僕は屑だ。全身腐ってるんだよ、シートって執筆者は」

そんなこんで本編どうぞっ！

第二十九話 ？

綾視点

「ババン ババンバン いい湯だな アハハン」

大昔に流行った歌のワンフレーズを小さく口ずさみながら体を洗い終えた俺は今、一人きりで大きな露天風呂の湯船に浸かっている。

現在の時刻は六時半頃 今は入浴の時間である。

久々の湯船というのものはやはり、気持ちよく湯船に浸かっている俺はリラックスして浸かっている。

それも露天風呂となればその気持ちよさは格別だ。熱いが丁度いい湯加減、そして綺麗な夜空……露天風呂はコレに限る。

旅館に来て露天風呂に入れたのはよかった。もしかしたら、入れないと思っていたから。

時間帯も速めに入れたのもよかった。

よかったんだけど……

「わあ〜っ！篠ノ之さん、やっぱり胸も大きくてスタイルいいっ！肌綺麗〜っ！」

「……………そう」

「そうだよっ！おおっ！織斑さんもスタイルいいじゃんっ！肌も綺麗だしっ！」

「うんうんっ！胸も綺麗だしっ！さ、触ってもいい？」

「誰が触らせさせるか。というか、目つきが怖いぞ」

という声が策を一つ隔てた向こう側の露天風呂から聞こえてくる。

露天風呂に早い時間から入れたのはいいが、この隣から聞こえる女の子達のピンク色のキャキャウフフな会話に困っている。

こういうのは本来なら、男である俺一人の為に残りの全員が窮屈な思いするのはおかしいという事で男である俺は一部の時間のみ使用可となるべきなのだろう。

だが、この旅館の大浴場は男女別々の片方の大浴場だけでも一学年三クラス全員を収容できる広さを誇っており、それも関係しているんだろうが。

何と悪戯、因果か女子と同じ入浴時間となっていた。

その事を知った入浴前にはもちろん絶句した。

こうなるのを既知していたので。

こうなるんだったら、やっぱり入る時間が限られていても女の子達とは別の時間がよかった。

そんな事を心の中で愚痴っついても仕方ない。

それに束が男湯に侵入してくるというテンプレ的なイベントも、

束はそこら辺の事はちゃんと「してはいないけない」と理解し配慮してくれ自重してくれているので起きてないし起きる気配もない。

それに千冬が居るから、そんなイベントは起きないだろう。

束は束で女湯で相変わらず無感情無表情ながらも角を立てずクラスの子達露と一緒に天風呂を楽しんでいるのは何となく分かるからよかったですし安心だ。

もっとも、そんなイベントが起きれば間違いないただことではすま

ない。

露天風呂の湯が真っ赤になりそうだ。何故だか、俺の血で。

「胸も肌も綺麗だし……篠ノ之さんと織斑さんって何か特別なケアとかしているの？」

「……何もしてない」

「私も特にしてないな」

「わあ〜っ！何もしてなくてこの綺麗さと抜群のプロモーションかあ〜」

「羨ましい。という事で織斑さん胸触らせて？」

「何故そうなる」

「いいじゃん、別に。触らせとけば静かになるよ。ちーちゃん」

「人事みたいに言うなよ」

「や、人事だし。それに私を触ろうなんてバカな考えを持つ人なんてないだろし。頑張れ、ちーちゃん」

「篠ノ之さんの肌ともか触りたいんだけど……後がいろいろと怖いからね。神山君に何言われるか」

「何故、そこで綾の名前が出で出てくるんだ？」

「気にしない。気にしない。っていう事で、皆のもの。織斑さんを

困もつっ!」

「「「「おあ〜っ!」「」「」

「はあっ!?!?な、何故そうなるっ!く、来るなっ!わ、私はもう上がるっ!って、手を掴むなっ!」

「さようなら、ちーちゃん。君の事は忘れないよ」

「こら、束っ!不吉な事を言わないで助けろっ! きゃあああっ

!?!」

と、言うピンク色の百合の花が咲きそうな会話がまた、聞こえてくる。

束以外の女の子に異性としての興味なんて皆無だけど。

流石にこっ……何度もこんな会話を聞かせられていると男の悲しい嵯峨といもので勝手に想像してしまい変にドキマギしてまっ。

と言うか、この会話が俺に筒抜けなのを承知の上でしている確信犯めいなものを感じるのは気のせいではないだろう。

「何だかなあ……」

湯船に深く浸かり月が浮かぶ夜空に手を伸ばしながら、そう小さく呟く。

一人きりでこの大きな露天風呂に浸かれてリラックスはできるけど

……何ともいえない入浴^{一時}時間だった。

・
・
・

楽しい時間というのはあっという間に過ぎていくものでお風呂から

上がり少し涼んだ後の今は夜の七時半。
大広間三つを繋げた大宴会場で、俺達は夕食を食べていた。

「……はぁ……はぁ」

「まだ、息が荒いけど大丈夫？千冬」

「大丈夫なものか……あんな事をされて」

「災難だったね。ちーちゃん」

「黙れ、束。元はと言えば、お前が……っ！」

「まあまあ、落ち着いて」

怒り出そうとしている千冬を宥めつつ夕食を食べ続ける。

ずらりと並んだIS学園の生徒の半分は座敷なので当然正座して夕食を食べている。

かくいう俺も座敷に座って座って夕食を食べており、その両隣に俺を挟むようにして束と千冬が座って一緒に食事を食べている。

全員がそうであるように俺も束も千冬も浴衣姿だ。

この浴衣はこの旅館から渡されたもので旅館内ではこの服装でいる事が好ましいらしく決まりでもあるらしい。

浴衣まで着ていると……本当に雰囲気が出てきて風情……みたいなものがあっていい。

旅館に泊まりに着ているという事がより実感できる。

「あつても、まさかとは思っていたけどちーちゃんに同性愛者の傾向があったとはねえ」

「お前な……っ！いい加減しろよっ……っ！そんなある訳なからうがっ！私は普通だ普通っ！」

「普通ねえ……普通に同性愛者って事ですね。分かります」

「言ってる。ああっ！そうだ、束。私がお前に直々にご飯を食わしてやろう。ありがたく思え」

「気持ちは嬉しいけど遠慮しとくよ。自分で食べたいから。それにそのイカの刺身、わさびで真緑だし」

「ちっ、腹黒兔がっ か、辛い」

「何でもっ ひゃうっ！？か、辛いっ！」

束が断ると千冬は舌打ちを小さく打って毒付き、イカの刺身について真緑を演出しているわさびを器用に取り始めている。

「うわぁ〜わさびで凄い真緑のイカの刺身だな。これをもしも食べたから、本物のワサビの分とっても辛いだろう。」

「食べ物で遊んだ分、それをちゃんと食べないといけない事を分かっている千冬はワサビを器用にとって食べている。」

綺麗に取れたようだけど、イカのワサビだから普通の刺身よりも辛く感じ、平然を装っていても食べている千冬は少し辛そうだ。

まあ、自業自得だけど。ちなみに束も刺身に少しワサビを乗せすぎた様で辛かったらしく辛そうな顔をしており涙を浮かべており、これもまた自業自得だ。

と言っか、俺を挟んで争わないでほしい。

「に、にしても美味しいね」

「そうだね。刺身も一級品みたいだし、ワサビも本ワサだし」

「そ、そうだな。美味しいな。一郎さんが出資しているというのもあるがIS学園は羽振りがいいな」

「本当にね。普通ではありえないね」

そんな話をしながらも比較的穏やかに食事を続ける。

正座しながらの食事に慣れてない子も多く少し辛そうだ。

俺達は道場で正座を一日していたこととかもあるから、このぐらいは何ともない。

ちなみに多文化多宗教を配慮してテーブル席もある。

それにしても昼もそうだったが今夜の夕食もとても豪華だ。

メニューは小さいながらも沢山の刺身の盛り合わせと小鍋、それと山菜の和え物が二種類。

それに赤出汁のお味噌汁に白しは漬け。

本当に豪華だ。特に刺身の盛り合わせが凄く。

まぐろにはまちにぶりに甘エビにいかにたこ等とどれも豪華な品々。聞いたところによるとどれもこの辺りの海で取れた新鮮な地産地消の上物らしい。

政府設立の特殊学校だけ本当のお金がかかっているな。普通の高校生やっていたら食べれないものばかりだ。けれど、その分どの料理もとてもおいしい。

「にやはは、綾……また難しい顔しているね」

「えっ、そうかな？」

「うん、また……コレはどうやって作られてどんな風に味付けされているんだろうとか考えながら食べているんでしょう」

「まあ、ね」

見事に当てられてしまった。

美味しく味わいながら夕食を食べているけど、やっぱりそんな事を考えながら食べてしまう。

おいしいからこそ気になり、自分でも作って束達にふるまってやりたいと思ってしまう。

つくづく俺は家事向きな性格の様だ。これじゃあ、主婦とからかわれても仕方ない。

「まさか、作る気にいるのか？これを」

「うん、まあ……味や味付けも大よそ分かったからね。機会と具材が揃えば作るうかと」

「おおっそれは凄いな。食べれる事を楽しみにしている」

「私も」

「けれど、こつまでいくと主夫の鏡だな」

「ありがとう」

褒め言葉として受け取っておく。

主婦主夫と呼ばれるのは普段呼びなれてないせいかな、テレビみたいな抵抗

がある。

束達が楽しみにしているんだ作る機会があれば、ぜひとも腕によりをかけて作ろう。」

そんな風に時間には余裕があるので味わいながらゆっくり美味しく食べていると隣にいる束に肩を軽く叩かれ、

その方向を向くと箸にマグロの刺身を挟みその下に手を添えて箸を束が俺の方に向けていた。

「ほら、綾……」

「んんんっ？何かな？」

「またまたとぼけちゃって 分かってるくせに あん」

楽しんでいる喜々とした声で言って再度、箸を俺の方へ近づけてくる。

束の瞳に映っているのは俺とついで程度に千冬。

しかも、千冬に見せ付けるようにもしている。

また、これだ。昼間の海水浴場でも同じ様な事があつたな……やっぱり、何かあつたんだろうか？

そんな俺の疑問を他所に束は、ニコニコとした表情で俺が食べるのを待っている。

当然、ここには俺達以外の人がいて皆興味深そうに野次馬みたいにニヤニヤとして視線で見ってくる。

凄く羞恥プレイだ。恥ずかしいという感覚が怪しくなってくるほどの。

「えっ？あ、うん？」

「もぉ〜っ！二度も言わさないでよっ……ほら、早く。落ちちゃうから。あ〜ん」

「んっんんっ……あ〜ん」

拒否権なんてものは存在せず、素直に口を開ける。

口を開けると束は嬉しそうにニッコリと笑みを浮かべ、箸で挟んでいるマグロの刺身を口の中に入れてくれ食べる。

大勢の人前でという事もあるのか変に照れ、それは束も同じ様でニッコリと笑みを浮かべながらも照れた様に頬を少し赤くしている。

と言うより、周りの騒がしさが物凄い。

若い十代の女の子という事もあるんだろうけども、こんな光景を見るのは初めてなんだろう。

だから、見ている子達は顔を赤くしながら騒いだりニヤニヤしてたりしながら俺達のこの光景を見ている。

ついでに先生達までも女子生徒達と同じ様な様子で見ている。騒ぎを起した俺が言うのは間違いかもしれないけど仕事してください。

そんな事がありつつも束の満足している様子に満足していると反対側の肩を軽く叩かれた。

「っ、次は私だっ……ん、あ、あ〜ん」

叩かれた反対側を向くと箸にタコの刺身を挟みその下に手を添えて箸を千冬が俺の方に向けていた。

前にも一度、似たような事を体験した様な知っている気がするな。

既知感、デジャヴ 某作品程の強烈な既知感は感じないが軽い既

知感みたいなを感じる。
デジャヴってるんだよ！

もつとも既知感モドキ云々よりも束がこんな場所でこんな事をする
と必然的に千冬も負けじと同じ様な事をしてくるのは分かりきって
いたことだ。

束の露骨な千冬への見せつけも多くなってきたけど、千冬が負け
じと束と同じ様な事をする事が昔よりも多くなってきたな。

どうしてだ？よく分からないけど、もしかすると　　というのはや
っぱり、ないだろう。

「ほら、早くしろ」

「いや……ちょっとね……」

流石に千冬のみで食べるのは少しいただけない。

さっきから可愛らしく剥れた束の視線がとっても痛い。

今は普通に剥れているだけだけど、いつヤンデレ状態になるか分か
った事じゃない。

そうだと言っても、千冬のを断るのもいろいろと問題だ。

困っていると千冬は口元をニヤッとさせた。

「断るなんて言わないでくれよ。それにいい男はいい女の頼みを聞
くものじゃなかったのか？」

「うっ……それはそうだけど」

痛いところを突かれた。

というか、よく覚えていたな千冬。

さて、本当にどうしたもののか。
退路や逃げ道は元よりなく。僅かの隙さえも千冬のさっきの一言により絶たれてしまった。

何より周りのニヤニヤした期待の眼差しが煩わしく感じてきた。

仕方ない。

束に対して最低の選択であることは承知しているが、変な角を立ててあの事を露呈するわけにはいかない。

俺に対する因果応報天罰観面だ。ヤンデレルートへまっしぐらとなりそうだが、選択肢は一つなのでこの際駆け抜けてしまおう。

ごめん、束　謝ったらいけない。だが、謝れずにいれず心の中でそっと謝った。

「ほ、ほら、あの……あ、あ〜ん」

「……あーん」

口を開くと千冬が箸で挟んでタコを食べさせてくれた。
食べていると、顔を真っ赤になった顔で見つめてきた。
見つめられ目を逸らせず、見詰め合うような感じになり動けなくなってしまう。

タコは美味しいし、得役なはずなのに……何とも言えない感じだ。
背中に貫き刺さる束の視線が痛いというか怖い。

「ど、どうだ？」

「お、美味しかったよ。ありがとう」

「そ、そうか。そう言ってくれると嬉しいな」

頬を赤らめ嬉しそうにしながら胸の前でぎゅっと自分の両手を握る千冬。

その様子に萌えた一部の女の子達はピンク色の声を上げており、その一部の一部の女の子達からは「きゃっっ！ツンデレっ！」と聞こえ。

その声に千冬は顔を赤くして、「ち、違うっ！」と否定していた。

そんな騒がしくも楽しい食事時ではあるが、正直今後ろを向いて束の顔を向くのが怖い。

けれど、向かなくてはいけないわけで……向いて束の顔を伺つと物凄くむすつとした顔で俺を見つめていた。

目が合うとぶいっつと視線を逸らしたところから、察するにヤンデレルートには入っていないようだった。

と言っても、一歩手前ばいけど。

すると、束ははあと小さく気分転換する様に付くと表情を変えて、笑みを浮かべて再び刺身を挟んでこちらに向けてくる。

「はい、次は私だよ」

「分かったけど……食べさせてないでちゃんと束も食べてよね」

「ちゃんと食べてるよ。ほら、あ〜ん」

「あ〜ん」

口を開け再度食べさせてもらう。

どうやら束の中で気持ちの区切りがついた様だ。

何かまた、別の事を企んでいるっぽいけど今は気にしないでおこう。

とりあえず、ヤンデレルートは回避できそうだし。

再び食べさせてもらった光景を千冬に見られ、ちょっぴり不機嫌そうなる顔をされる。

「私の時よりやけに素直なのはどついう事だ？綾？」

「そんな事はないと思うんだけど……と言っか、顔怖いよ」

「ちーちゃんの見聞が悪かったんだよ。綾はタコ好きじゃないからね。そこはマグロとかハマチとかで行かなくちゃ。分かってないね、ちーちゃん」

声は明るいが無礼な言葉が重くトゲトゲしく束は言い。

「ほお……よく言ったな、束」

冷めきつた声で重々しく千冬は言い。

二人は綺麗な綺麗な笑みを浮かべたまま無言で睨み合う。

そしてまた、二人の視線の間では激しく火花が散り、強烈なダイヤモンドダストが激しく吹きぬけている。

今日、何度目かの光景だが激しさが増している。

流石にこれを目の当たりにして騒いでいられるわけもなく、騒いでいた一同は固唾を呑みながら食事を食べている。

けれど、流石は大人組みの先生方。

「修羅場ねえ」とこちらを見ながら、食事のアテにでもする様に見て楽しそうに食事を食べていらっしやる。

アンタら、先生だろ。仕事してくれよ。

かく言う俺は流石にコレに入る覚悟はなく、睨み合っている二人に挟まれながらも暢気に食事を続ける事にした。

奈々さん教え曰く、『女同士の争いに男は無闇に口を挟むべきではないわ。挟む時は責任を持って』があるから今回は挟まない事にした。

挟んだから無限ループに陥るし、喧嘩するほど仲がいいというし。

「平和だね」

「何処がつ!?!」

等と二人にツッコまれながらも楽しい夕食時だった。

…

第二十九話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第二十九話 ?

今回はいつも以上に綾君が得役に見えて辛い役をしているなあ〜という回でした。

お風呂といか露天風呂の話 or 描写はアレでよかったのかな? と思っています。

最初はテンプレを踏んで東さんが男湯に入ってくるというのを書こうと思ったのですが

そんな話を書け露天風呂の湯が何故だか綾君の血で赤くなる光景が見えたので

ああいった話へと変更しました。あまりテンプレ過ぎるのも味がないですし。

それに何だかんだでああいった方が侵入されて一緒に入るよりも。ああいった方が男として堪えるものがあると思いますしね。

ちみなに確信犯 & 故意的に綾君に聞かせています。

気づいたかどうかと分かりませんが東さんは綾君の協力もあって。

何だかんだクラスの子達と仲良くはしています。この時点で別物の東さんですね。

千冬さんはナームーww

お食事編は特にこれと言った展開が思いつかなかったので。

女の戦い & 修羅場 or 垣間見えるヤンデレ東さんの気配と夜の部への付箋を

テーマとしてテンプレ的ではありますが、ああいった風に書きました。

嫉妬する束さん達とかに萌えつきればいいと思うよっ！

クラスの子もノリがいいといかよ過ぎで

先生達も楽しんでるので綾君が得役な様で辛いです。

「仕方ないですね。主人公だもの　しーと」（せんだみつお風に

ちなみに二日以降はキンクリに決まりました。

期待してくださった方すみません。

パッケージないですし、訓練するほどの内容もないですし。

一応、黒百合も高機動アーマーストライカーは存在しているのですが。

それを出すのも夏休み編ですね。夏休みが本番だ。

最近、似たような展開を再現して改変してやるといパターンが多い気がするんですよ。

それ故に皆様には失礼ですが、最近人気が落ちてるんです。

つまりはこの作品に飽きる人が増えたんですよ。

話や描写は似た様なのが被いし、テンポの普通だし悪く言えば悪いし。

原作までは程遠いし。いろいろと悩みますね。本当に

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願います。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。願いますっ！

某マミさん「行ってしまったわ…感想を書き田嶋の埋に導かれて…」

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします

次回 七夕の夜の就寝時間。

それは、シリアスでダークで甘い一時。

第二十九話 ? (前書き)

今回のテーマは、「ほろ甘く、そしてダークシリアスインサナティ&狂気」
長くなから、キリのいい所で切って投稿したけど。

次話はこの話とくっ付けてもいいよね？次話の次話を投稿したぐら
いに。

そんなこんなでどうぞっ！

というか、後書きの括弧つけ方が括弧悪いなw

第二十九話 ？

綾視点

食後に俺達は千冬達が泊まる部屋でカードゲームをした。

こういうイベント事での定番であるトランプゲームのばば抜きや大富豪等を。

それなりにカードゲームは楽しく、相変わらず人前だという事もあってか無表情無感情だっけれど束もそれなりに楽しかったみたいで、何よりで俺としてもそんな束が見れて微笑ましく思えてよかった。

そして、就寝時間近くに千冬達の部屋でカードゲームをお開きとした俺達は部屋へ戻ってきた。

「ああ〜疲れた」

「ん〜っそうだね」

部屋に入るなり適当なところに腰を降ろし腕を上へ伸ばし背筋を伸ばして伸びを俺達は一つする。

体にあるのは心地いい遊び疲れのみ。

この分なら明日に響くこともないだろうし、この心地いい遊び疲れもあることだ。

眠りに付けばずっくりと眠れるだろう。

眠りと言えば……寝る時の布団をどうしようか。

普通に布団を二つ並べて寝ればいいんだろっけども。

入浴時に束が言っていた事も気がかりだ。

流石に束の本気で師匠達のあのアホ手紙の通りにはいないと思うけど。

思うけど……聞けずじまいの有耶無耶のされている分、ちょっぴり怖い。

等と考えている時だった。

「綾」

後ろから束の甘えた声が聞こえ、後ろからぎゅっと抱きしめられる。体を全て俺に任せてくれている様で上から乗っかかれる。

体重こそはかかるが軽い束の体重なんてものは俺に取ってしてみれば、あつてないようなもの。

それによりも豊満な胸が背中に辺り、その感触が脳へと伝達され内心の奥底でモンモンとした感覚を生みそうになっている。

それに気づいた束は俺の横に顔を出して嬉しそうに気持ち様に頬擦りして妖艶に微笑む。

「えへへ」綾

「こ、こら。やめなさい。くすぐりたいからっ」

「ええっ！ そうは言っても綾は喜んでるじゃんっ。興奮しているし、ね」

「ちょっと！ 耳に息を吹きかけないでっ」

耳元で囁く様に艶がある色っぽい声で言われ耳に束の吐息が降りかかる。

そうになると自然にゾクゾクっとしてしまう。

その様子は更に束を喜ばすもので嬉しそうにまた、頬振りをしてく

る。

こうされるのは嫌じゃないがとつてくすぐつたい。それに興奮していることばれているし。

「にはははっ 興奮している 嬉しいな」

「はいはい。そうですか。それはよかったですね」

攻められているのはどうも肌に肌に合わなくて違和感を強く時感じるのでそっけない態度で言葉を返した。

すると、束は面白くないつと言った頬をぶくうつと膨らませて剥れた表情をする。

「むう〜っ！ああ〜こんな事なら入浴時間の時、引くんじゃなかったよっ！男湯に侵入でもすれば綾が興奮してくれたのにつ！」

「やめてくれ。そんな事されたら露天風呂の湯が血が真っ赤になつてたよっ」

「何で？ん〜あああっ！露天風呂での野外プレイでつて事だねそれで私が処女喪失してお湯が血で赤くなると。初体験が露天風呂でかあ〜中々、出来ない体験な分興奮するね 初体験、露天風呂での野外プレイ そして、処女喪失 キヤツ」

「キヤツ じゃないよっ！お湯が赤くなるつてのは何故だか俺の血でつて事だよ！それも刺し傷っ！というか、しないって」

「ええ〜っ！？」

「ええ〜っ！？じゃないっ！いい加減しろっ！」

怒っている訳じゃないが、ふざけている束を叱るように怒っている風に言い後ろから抱き付いている束の腕を掴んで払いのける。

万が一の為に吹き飛ばない様にジェットコースターの安全レバーみたいな役割を果たす為に束の腕を掴んでいた手が災いしてか俺が束を押し倒すような体勢になってしまった。

「きゃうんっ！？」と言う小さな悲鳴を漏らした後、すぐさまこの状況を理解して束は戸惑った様な何処か少しだけ怯えたような、それでいてここからのものもしもの続きを期待する様な潤んだ瞳でこちらをただじっと見つめている。

「束」

「えっ？あ……綾？」

先ほどと変わらない様子で名前の呼びかけにきよとんとする束。

様子こそは先ほどと変わらない。けれどやはり、この状態と状況からのものもしもの続きを期待しながらも何処か少しだけ怯えている。

状況や場所云々は兎も角として、こんな様子に束に手を出せる訳がない。

だから、そんな束に俺は

「ちえりおっ」

「ひゃうっ！？」

軽く、威力としては軽いデコピン並みの威力のチョップを束の額に軽く落とした。

流石の束でも、期待と予想としていた事以外らしく涙目になりなが

ら、混乱しているであろう思考で状況を確認しようとしている。

「にゃ、にゃにするのっ！綾っっ！」

「ふざけた事抜かす色ボケ兔にお灸の一発を、と思って」

「ううっだからっっっ！」

今だ少しだけ混乱している様であたふたあたふたとして涙目になっている。

そんな束が可愛くて可愛くて可愛くて、愛しくて愛しくて。

「涙目の束」

「えっ？」

「すげえいじめたくなる」

そう　慈しむように愛すように会いし尽す様に凄くいじめたくなる。

「にゃっ！？へ、へんたいっ！」

「あっはは、お互い様だろっ？それは」

「にゅっっ」

照れ隠しの様に剥れる束。

そんな束から腕を掴み起し抱き寄せ抱きしめる。

「さて、バカはこの辺にして。そろそろ、寝ようか」

「うん」

そして、二人一緒に立ち上がり布団を敷く事にした。

・
・
・

バカやった後、明日も朝早いという事で早めに寝る事にした。

布団は結局二つ並べて敷いて寝ているが、束が俺の布団の方に来て寄り添うように寝ているので実質一つしか使っていない。

今もまた、外は暑いらしいが部屋にはクーラーをかけているので涼しく束の引っ付いても快適に横には慣れているのだが……

「（寝付けない）」

布団に入って早十分。

最初の一二分こそは適当な話などをしていたが自然と終わり、言葉を交すことなく自然と寝る事になった。

寝ることになったのはいいが、さっきのバカ騒ぎがどうも変に響いているらしく寝ようにも寝付けない。

それは束も同じらしく、寝返りは打ちたくない束はさっちきら俺の胸板に顔を押し当ててみたい俺の手を弄ったりしている。

一応束は俺が起きて目をつぶって寝てるフリしている事は分かっている様子で少しでも寝付こうとしているのもまた分かっている様子で声はかけてこない。

もっとも、胸板に顔を押し当たられたり手なんか弄られていたら寝付こうにも更に寝付けない訳なのだ。

「……綾、起きてる……よね？」

「……あ、ああ」

束の問いかけに少し遅れて俺は答える。

どうやら束は我慢の限界だったらしい。

まあ、流石に寝付こうとして寝付けず相手が起きているのを分かっていて気をつかって一人時間を潰すのは時間が経てば経つほど苦痛なんだろう。

それは大いに賛成だ。このままこうして寝付けないものを寝付かせようと目を閉じ横になっていても寝付くのはかなり難しいだろう。

だったら、何か適当な話でもまたして気分を入れ替えてもう一度寝たほうが寝付ける確率は高いだろう。

そんな事を思いつきとりあえず、束の背に腕を回しながら二人一緒に上半身だけ起す。

上半身だけ体を起き上がらせるとふと、二人の視線が合い苦笑いみたいな小さな笑みを零しあう。

「にやはは……寝付けないね」

「そうだね。どうしたものか」

「私の性かな？さっきまでバカ騒ぎしていたから変に意識がさえちやっただのかも」

「それでどうして束のせいになるんだい？バカ騒ぎしていたのは俺だって同じだったじゃないから。なら、俺のせいでもあってお相手だよ」

「そうだね」

「それに二人、こうやって寝付けないのも運命みたいなものを感じない？」

「感じるかも。でも、変てこな運命めいたものだね。けど……ロマ
ンチックだね」

そう照れたように笑う束。

確かに変てこな運命めいたものだ。

けれど、こんな夜に束を一人きつりにしてなくてよかった。
それだけはこの運命めいたもの感謝だ。

「さてと、こうしていても寝付けないだろうから。向こうで適当に
話でも気分転換でもして寝付けるようにしようか」

「うん、賛成。今夜は夜空も月も綺麗だから話のいいアテになるだ
ろうね。それに今日は七夕だし」

そうと決まれば二人で立ち上がり、外側の襖の向こうにある精々二
人が向かい合って話せるぐらいの小さなスペースに行く。

そこへ行くと向かい合うように設置されている椅子に二人、向かい
合うように腰を降ろし座る。

ふと、窓の外を見てみると夕方にも思った通りそこから見える景色・
夜景は綺麗な海を一望でき、その綺麗な月の光に照らされ幻想的な
美しさを放っており、

夜空には、そつと俺達を包むように幻想的な月光を放つ月と夜空を

横切るようにあまなく星々が川の水の様に浮かんでいて綺麗である。

「そうだね……何を話そうか。ありきたりだけど……今日一日どうだったかな？」

「んーと、そうだね。楽しかったよ。ちーちゃんの襲われている光景も楽しめたし、お料理も美味しかった。トランプも楽しかったし。何より、綾と同じ部屋つてのが一番嬉しいよ。こうして、少しでも長く……それどころか夜を一緒に過ごせるからね」

「そうか。それについては俺もまったく同じ様な事を考えていたよ」

「そうなんだ。一緒だね。そういう綾は今日一日どうだった？」

「楽しかったよ、もちろん。皆のいろいろな^{表情}な刹那も見る事が出来たし、むろん束の刹那も^{表情}沢山見る事が出来たとってもよかったよ。ただ、少しばかりは気疲れはしたよ」

「綾には一見得役な様で大変な苦勞人の役をさせちゃっていたからね」

「何だ。分かった上での確信犯だったのか……ヒドいなあ」

「ふふっごめんなさい。でも、愛ゆえにだからいいでしょう？」

「愛ゆえにか……それなら仕方ないね」

大して気にしていたことじゃないが、愛ゆえにならある程度の度の過ぎてないものなら何だって許せてしまいそんな気がする。

本当にありきたりな話。

ようは何だつていいって事だ。

重要なのは、俺と束がこうして一緒に居ると言うことで、本当はそれさえ出来れば他に何も望んでいない事は互いに分かっている。

本来の目的さえ忘れそうになるがそれはそれでいいだろ。そうなるのも目的の許容範囲内であり、それはそれでそうしていれば自然と目的も達成される。

「ねえ、そっちに行って綾のお膝の上に座っていい？」

「いいよ。おいで」

少しわざつとらしく両手を広げ束を待ち構えると束は嬉しそうなかみ笑いをしながらこつちに来て、対面座位の様な座り方で俺の膝の上に座る。

そうして、はにかみ笑いをすね束の髪をついに梳く様に触ってしまった。

突然触られた束はドキツとはしていたが、すぐに嬉しそうなくすぐつたそんな表情をしていた。

「にゅっ……綾は私の髪、好きだね」

「髪もだけど。匂いにも好き。と言うよりも、それらを含めた束の全部が、束が好きだ。愛してる」

「……っう！？よく、平気な顔でそんな恥ずかしい事が言えるね。流石の束さんは照れりこだよ」

「恥ずかしいものか。本当の事なんだからさ。仮に言って恥ずかしいのなら、それは愛ゆえに、ということだよ」

「愛ゆえにか……うん、そうかもしれないね。でも、恥ずいッ」

頬を赤らめ恥ずかしそうにしている束は、そんな顔を見られるのも恥ずかしい様で赤くなつた顔を隠すように俺の胸板に顔を埋めている。

そんな事をしながらも束は、クンクンっという可愛らしい鼻音を鳴らし顔を隠しながら何故だか俺の匂いを嗅いでいる様だ。

何をしたいのか、どちらをしたいのか分からない　いや、束の事だからどっちらもしたいんだろうが。

こんな風に顔を隠していても、俺にしてみれば視線を胸元まで落とせば顔を真っ赤にして照れている束の顔は窓から入り込む月の光に照らされて鮮明に見れてしまう。

つまりは『だが、無意味だ』な訳で……そんなこと束も薄々は気づいているみたいだが…それでも続けている束が更に愛しく思える。

そんな風に夜の一時を過ごしているが当初の目的を忘れかけている気がする。

それはそれで別にいいし、下手に意識していると寝付けられないものか寝付けなくなるかもしれない。

それに時間はまだまだある。こうして俺も束もリラックスできている事だし、折角の機会だ。

最近、気になつていたあの事を聞いてみよう。

「ねえ、束。聞きたい事があるんだけど……いいかな？」

「聞きたいこと？うん、いいよ」

「ありがとう。最近、束は度を越した行動が少しばかり多いというか。千冬に対して、挑発的な態度が目に残るものが多くなってきて

るけど……それはどうしてかな？」

聞いて、束がドキっとしているのを見て取れる。

気になっていたのはやはり、これだ。

最近の束は度を越した行動が少しばかり多いし、千冬に対しての挑発的な態度が目にも余るものが多くなってきている。

少しばかりなら焼きもちなり嫉妬だと思っていたので気には止めなかったけど、最近の束の行為は少しばかり度を越している。

今までの事しかり、今日の事もまたしかりに。

それとなく聞き出そうとはしたが毎回、体よくはぐらかされてしまっていた。

だから、この機にちゃんと聞いておこうと思った。

「えっ……あ、うっ……そ、それは……その」

努めて冷静に思考を保とうとしているのは分かるが。

それでも動揺は隠しきれておらず、発する言葉はシドロモドロになっている。

やはり、聞かなかった方がよかったと思いはしたが、その機会に聞いておかなければズルズル引っ張っていけば、後の祭りになりかねない。

だから、この機会に何としてでも聞いておかなければならない。

例え、この時の束を少しでも傷つけてしまう事になっても今後の束……俺達の為に。

「い、言いたくないっ！」

声を押し殺す様にそれでいて叫ぶ様に語気を強めて言う束。

帰ってきた言葉は予想していた通りの言葉だった。

言いたくない　　というのは、それほどまでの意図なんだろう。

「どうしても？」

「どうしてもっ！言いたくないものは言いたくないっ！」

「…………どうして？」

感情を昂らせて語気を強めて言う束を少しでも落ち着かせる様に問いかける。

束の背に回して抱きとめ支えている腕にも少しばかり力を入れて落ち着かせようとする。

一先ず先に束を落ち着けない事には、感情が昂ったままの束では話を続けようと思っても続かない。

だから、感情が昂った束を落ち着ける様に努める。

そうして、段々と落ち着いてきたのか伏せ目がちにポツポツと問いかけてき始めた。

「…………言ったら、私を嫌いになるよ。仮に言ったとして、嫌いにならない？嫌にならない？私を怖がりししない？」

「ならない。嫌いにはならないよ。大丈夫だよ。だから、安心して言ってくれると嬉しい」

そう言って少しでも安心して話せる様にと束を抱き寄せる。

暫くそうしていると、束は安心した様子になっていき自分の中で結論を出した様で言う決心をした顔つきになっている。

「…………分かった。言う」

「ありがとう。それじゃあ、束はどうしてあんな風な事をしていたんだい？」

「それはね

」

そして、束はゆっくりと語り始める。

…

第二十九話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第二十九話 ?

この話の前半は明るい感じを意識して書きました。

なので、東さんが物凄い発言をしたりしていますwww

綾君は練炭をイメージして意識して書いているので何気にSツケがあります。

小ネタも少し入れたけど元ネタは分かるでしょうか？

「ちえりお」は兎も角、「照れりこ」分かったら私マジでリアルにノクターンを書くわっ！

後半は、ほろ甘くそして次第にダークシリアスに、を意識して書いてみました。

あの問い掛けがある意味でこの臨海学校編を書いた意図であったり

……

今回はあまり大ツぴろに補足が出来ないので補足みたいなのはこのぐらいです。

ちなみに綾君視点のこの第二十九話が終わったら。

東さん視点での第二十九話を書くんですがOK？

まあ、どのミチ書くので長ったらしくなると思われますがお付き合いですて下さいませ。

私自身、東さん視点をとっても書きたいので

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいた

します。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

『えっ？感想を書いてくれるだっ？』

『甘えよ』

『だが、その甘さ嫌いじゃあないぜ』

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします
す

第二十九話 ? 束視点(前書き)

お久しぶりの束さん視点。

束さん視点は、書くのは大変で難しいけど書いていて一番楽しかったです。

やっぱり、いいものだ。束さんは。

恋する悩む乙女を意識して力を入れて書きました。それではどうぞっ！

第二十九話 ? 東視点

東視点

食後、私達はちーちゃんが泊まる部屋でカードゲームをした。やったのは、こういうイベント事での定番であるトランプゲームのばば抜きや大富豪など。

私は相変わらず無感情無表情で遊んでいたけどそれなりにカードゲームは楽しかった。

それを見た綾に嬉しそうに微笑まれた時は、何故だか無性に恥ずかしかったけど。

それなりには楽しかった手けどやっぱり、人前は慣れないや。

そして、就寝時間が近くなったのでちーちゃんの部屋でカードゲームをお開きとした私達は部屋へ戻ってきた。

「ああ〜疲れた」

「ん〜っそうだね」

部屋に入るなり適当なところに腰を降ろし腕を上へ伸ばし背筋を伸ばして伸びを私達は一つする。

体にあるのは心地いい遊び疲れのみ。

こういうタイプの遊び疲れは徐々に感じる。

だけど、この分なら明日に響くことはないだろうし。

眠りに付こうとすれば多分、いい具合にずっくりと眠れるだろう。

寝るといえば……布団、どうするんだろうね。

隣にいる綾の事だ。体を休めながらも真剣にどうするのか考えているんだろつ。

そんな真剣に考えなくても、二人で一緒に寝て、甘い甘美な一夜を一緒に過ごせばいいだけの話なのにね。

そんな考えもあつてか、私は綾を誘う様に後ろから綾に抱きついた。

「綾」

私は綾を誘惑する様に耳元で甘いを出して言う。

私は綾に体を預け、上から乗っかる様にして抱きついている。

体重を乗っけていることで綾は重たく感じているじゃ……と思ったがそんな事はないらしく。

上から乗っかって抱きついている　それにより、自然と綾に背中
に胸が当たる。

その事に私よりもいち早く気づいた綾は、気まずそうにそれでいて悶々とした表情をしていて。

そんな綾の表情が嬉しくてつい微笑んでしまう。

「えへへ　綾」

「こ、こら。やめなさい。くすぐりたいからっ」

「ええっ！　そうは言っても綾は喜んでるじゃんつ。興奮しているし、ね」

「ちよっ！　耳に息を吹きかけないでっ」

綾の耳元で囁く様に言うと私の吐息がかかったのか、綾はゾクゾク

つと震えていた。

あっははっ……綾ってば、可愛い。

いつも綾は優しい笑みを浮かべてすまし顔の様な顔をしているから、こういう綾の表情は新鮮。

それにやっぱり、何処となく興奮してくれている。

だから、こんな表情が見れ私で興奮している事にまたまた、嬉しくなってそれを表現するかの様に私は綾の頬に頬擦りする。

別に嫌がっている様子はなく、むしろそれどころか、くすぐったそうにしているのがこれまた私を嬉しくさせる。

「にやははっ 興奮している 嬉しいな」

「はいはい。そうですね。それはよかったですね」

どうやら綾は、攻められるのは性や肌に合わないようでそっとなく、返事を返してきた。

それを見て私は、頬をぶくうつと膨らませて剥れた表情をする。

綾がそっけない態度を取ったあゝうっ！私にとってしてみれば、面白くないっ！

むしろ、不満。もっと、興奮とかしてくれても全然構わないのにつ！

「むう〜っ！ああ〜こんな事なら入浴時間の時、引くんじゃなかったよっ！男湯に侵入でもすれば綾が興奮してくれたのにつ！」

「やめてくれ。そんな事されたら露天風呂の湯が血が真っ赤になっ
てたよっ」

「何で？んんあああっ！露天風呂での野外プレイでっ事だね
それで私が処女喪失してお湯が血で赤くなると。初体験が露天風呂
でかあゝ中々、出来ない体験な分興奮するね 初体験、露天風呂で
の野外プレイ そして、処女喪失 キヤツ」

始めは綾をからかう様に言っていたけど。

次第にどんどんと妄想？が過激なものへとなっていく。

こうなったら、それはそれで嬉しいかも。

状況はともかく、貴重な体験である事には変わりないのだから。

そんな風に言っていると、綾は慌てて何処か私を怒るように語気を強めて言ってくる。

「キヤツ じゃないよっ！お湯が赤くなるってのは何故だか俺の血でっ事だよ！それも刺し傷っ！というか、しないうて」

「ええゝゝっ!?」

しないうて言われてショックを受けた私は半分冗談めかしに、けれど半分本気でそう返す。

しなうと言われるのは分かりきっていてもショックなものはショックなことには変わらない。

いくら状況や様々な理由が重なって出来なくても。

「ええゝゝっ!?じゃないっ！いい加減しろっ！」

怒っている訳じゃないみたいだけど、綾はふざけている私を叱るように怒っている風に言い後ろから抱き付いている私の腕を綾は掴んで払いのける。

優しい綾は、私が万が一吹き飛ばない様にジェットコースターの安

全レバーみたいな役割を果たす様、私の腕を掴んでいたけど、それが災いしてしまった様で、綾に押し倒されるように体勢になってしまった。

私は「きゃうんっ!？」なんて情けない悲鳴を小さく漏らした後、すぐさまこの状態に気がついて理解した。

目線の先には、困った様な優しい笑みを浮かべている綾がいて、いろいろな理由が重なって出来ないと分かっているのにどうしてもこの先を強く期待している私がいる。

そうして、綾に見つめられ動く事も出来ずにただ綾を見つめていると名前を優しく呼ばれた。

「束」

「えっ?あ……綾?」

突然名前を呼ばれ、私はきょとんとしてしまう。

どうしたんだろう?突然私の名前を読んだりして。

もしかして、本当に今からこの先が……私が望んでいる事が起きるのかもしれない。

そんな強い期待を抱く反面、ふと私は自分が静かに小さく体が震えていることに気づいた。

私は期待している以上に怯えている。

知識だけではどんな事をするのかは知っている。

だけど、当たり前なだけで体験して事なんて一度もないから。

やっぱり、初めては痛いんだろうか?辛いんだろうか?本当に気持ちだるうか?、などの勝手で無意識の憶測が微かな恐怖を呼び無意識に勝手に体が震えてしまう。

やっぱり、私はこの先の事を期待していてもまだ全然心の準備が出来てない。

こんな私ではダメだ。このままなら私はおろか綾まで傷つけてしまう。最悪、綾に「情けない女」だと思われてしまう。

また、そんな勝手な憶測が新たな恐怖を呼び体の振るえを増徴させてしまう。

けれど、目前には綾の手が伸びて来ている。心の準備が出来ていなくとも無理にでも覚悟を決めないと　そう思った私はぎゅっと目を閉じて待っている。

「ちえりおっ」

「ひゃうっ!?!」

軽く、威力としては軽いデコピン並みの威力のチョップが私の額に落ちてきた。

突然の事と軽い痛みには私は目に涙を浮かべ涙目になりながら、混乱している頭で少しでも状況を理解しようとした。

うう〜ちよっぴり痛い気持ちいいけど……でも、何で綾はこんな事を？

「にゃ、にゃにするのっ!綾っつ!」

「ふざけた事抜かす色ボケ兔にお灸の一発を、と思って」

「うう〜だからっつ!」

確かに色ボケ兔なのは認めるけど。

だからって何もチョップしなくてもいいのに〜っ!

ヒドイ事を言われ、私があたふたとしていると一瞬、押し倒した状

態のまま私を見つめている綾の目つきが変わった。
何って言ったからいいんだろう？今の綾の瞳は私を冷たく蔑む様な視線でありながら、それ以上に私を慈しんで愛でてくれる様な瞳。そんな瞳で見つめられてしまった私はまた、動けずにいた。けれど、この状態も何だか心地いい。

「涙目の束」

「えっ？」

「すげえいじめたくなる」

と、突然そんな事を言われた。

言葉を理解するのに数秒の間を要したけど、次第にその言葉を理解してきて顔が熱くなってくる。

ううう！なんて事を言うのっ綾っ！

「にゃっ！？へ、へんたいっ！」

「あっはは、お互い様だろう？それは」

「にゅうっっ」

嬉しいけど苦し紛れに言い返してみたものの逆に言い返され、照れ隠しする様に私は剥れる。

確かに変態なのは私もそうでお互い様だけど。
綾って時々、Sツ系があるよね。こんな事を本気で言ってくるぐら
いだし。

で、でも、綾になら別にいじめられてもいいかな……むしろ、いじ

められたい。

気持ちよさそうだし嬉しい、私だけを見て愛してくれていることは変わりはない。

けれど、恥ずかしい事は変わりなく剥れていると綾はそんな私の腕を取り抱き寄せて起してくれた。

私は抱き寄せられ抱きしめられると恥ずかしいのを隠すように綾に胸に顔埋めた。

「さて、バカはこの辺にして。そろそろ、寝ようか」

「うん」

寝るって事は……普通に寝るって事だよな。

先がなかったことに最悪な事に安堵してしまつて、期待してなかっただけに安堵以上に心の中で深い溜息をついた。

仕方がないか……何だかんだ綾に気づかれちゃっているみたいだし。

そして、二人一緒に立ち上がり布団を敷く事にした。

・
・
・

バカやった後、明日も朝早いという事で早めに寝る事にした。

布団は結局二つ並べて敷いて寝ている事となつた。まあ、始めは離して敷くというものだったから私が押し切つただけだ。

それに布団を二つ並べているからと言っても、私が綾の布団の方へ行って寄り添うように寝ているので実質一つしか使ってない。

夏場の夜だけは添い寝するのを綾は極端に嫌がるけど、部屋には適度な温度のクーラーをかけているから綾も私も横に慣れているんだけど……

「(ううゝ寝付けない)」

布団に入って早十分。

最初の一二分こそは適当な話などをしていただけと自然と終わり、言葉を交すことなく自然と寝る事になった。

寝ることになったのはいいけど、さっきのバカ騒ぎがどうも変に響いているらしく、それとさっきの綾に言われて事が頭に焼き付いていて変なドキドキして寝付こうにも寝付けない。

寝付けないのはどうやら綾も同じなようで、目を閉じて必死に寝付こうとしている。

そんな綾の邪魔はしないでおこうと思っっているけど、目が冴え過ぎて寝付こうにも寝付けないのでつい手持ち無沙汰になって綾の胸板に顔を押し当ててみたり、綾の手を弄ったりしてしまふ。

流石にそんな事をすれば、寝たふりをしている綾でも声をかけずとも反応して声を微かに漏らしている。

綾が寝付こうとしているのだから邪魔はしちゃいけないと思うけど、それでも一人で寝付くまでの時間を潰すのは暇といか苦痛というかそんな感じで我慢の限界が来てつい声をかけてしまった。

「……綾、起きてる……よね？」

「……あ、ああ」

私の問いかけに少し遅れて綾は答える。

どうやら……やっぱり、綾の寝付こうとしたのを邪魔しちゃったみたいだった。

やっぱり、私も一人無理にでも寝付こうとするべきだった。

綾の寝付こうとしたのに申し訳ない程度に罪悪感が出てきて申し訳

なく思う。

それに声をかけて起してしまっただけ、これからどうするか考えていない。

どうしようかと考えていると、綾が私の背中に腕を回しながら二人一緒に上半身だけ起してくる。

綾の中ではとりあえず、ちゃんと起きて何か適当な話でもまたして気分を入れ替えもう一度寝たほうが寝付ける事が決まっているみたいで。

自分も含めて私の事まで配慮してちゃんと考えられているんだなと勝手ながらにそう思いこんなところでも嬉しくなる。

上半身だけ体を起き上がらせるとふと、二人の視線が合い苦笑いみたいな小さな笑みを零しあう。

「にははは……寝付けないね」

「そうだね。どうしたものか」

「私のせいかな？さっきまでバカ騒ぎしていたから変に意識がさえちゃったのかも」

「それでどうして束のせいになるんだい？バカ騒ぎしていたのは俺だって同じだったじゃないから。なら、俺のせいでもあってお相手だよ」

「そうだね」

「それに二人、こうやって寝付けないのも運命みたいなものを感じない？」

「感じるかも。でも、変てこな運命めいたものだね。けど……ロマ
ンチックだね」

そう照れたように私は笑う。

自分で言っておいてなんだけど、確かに変なこな運命めいなものだ
けれど、こんな夜に一人きりにしてなくてよかった。

だから、そんな変てこな運命めいたものに感謝してそれ以上に私を
いつもどんな時でも気遣ってくれる綾に心の底から感謝する。

「さてと、こうしていても寝付けないだろうから。向こうで適当に
話でも気分転換でもして寝付けるようにしようか」

「うん、賛成。今夜は夜空も月も綺麗だから話のいいアテになるだ
ろうね。それに今日は七夕だし」

そうと決まれば二人で立ち上がり、外側の襖の向こうにある精々二
人が向かい合って話せるぐらいの小さなスペースに行く。

そこへ行くと向かい合うように設置されている椅子に二人、向かい
合うように腰を降ろし座る。

ふと、窓の外を見てみると夕方にも思った通りそこから見える景色・
夜景は綺麗な海を一望でき、その綺麗な月の光に照らされ幻想的な
美しさを放っており、

夜空には、そっと私達を包み込む様な幻想的な月光を放つ月と夜空
を横切るようにあまなく星々が川の水のように浮かんでいて綺麗。

綾の前に座ると綾は唇に手を当てて何か言い適当な話題を考える仕
草をする。

「そうだね……何を話そうか。ありきたりだけど……今日一日どうだったかな？」

「んーと、そうだね。楽しかったよ。ちーちゃんの襲われている光景も楽しめたし、お料理も美味しかった。トランプも楽しかったし。何より、綾と同じ部屋ってのが一番嬉しいよ。」

こうして、少しでも長く……それどころか夜を一緒に過ごせるからね」

「そうか。それについては俺もまったく同じ様な事を考えていたよ」

「そうなんだ。一緒だね。そういう綾は今日一日どうだった？」

「楽しかったよ、もちろん。皆のいろいろな刹那（表情）も見る事が出来たし、むろん束の刹那（表情）も沢山見る事が出来てとってよかったよ。ただ、少しばかりは気疲れはしたよ」

「綾には一見得役な様で大変な苦労人の役をさせちゃっていたからね」

いつもそうだ、綾には一見得役な様で大変な苦労人の役ばかりさせちゃっている事が多い。

それは必然的にそうなってしまう事も多いが、私が綾に苦労人の役をさせちゃってそれを綾が自ら買いに出ている。

本当に綾には昔からずっと迷惑ばかりかけて苦労させちゃっている。それが申し訳なくていたたまれない。

そんな私の心情を綾は察した様におどけた様に困った顔をして微笑を浮かべる綾。

それに釣られるように私も同じく微笑した。

「何だ。分かった上での確信犯だったのか……ヒドいなあ」

「ふふっごめんなさい。でも、愛ゆえにだからいいでしょう？」

「愛ゆえにか……それなら仕方ないね」

私の何気ない言葉を綾は心底嬉しそうにして目を細めて優しい顔をする。

本当にありきたりな話。

けれど、ありきたりだからこそ充実している様に思える。

ようは何だっというって事だ。

重要なのは、私と綾がこうして一緒に居ると言うことで、本当はそれさえ出来れば他に何も望んでいない事は互いに分かっている。

そうだ、綾とさえ一緒にいられれば充分だ。高望みなんて思いつかないほど満たされているから。

「ねえ、そっちに行って綾のお膝の上に座っていい？」

「いいよ。おいで」

少しでも近くで綾を感じていたいからとそんなリクエストをすると、綾は少しわざつとらしく両手を広げ私を待ち構えてくれ、

私は嬉しく思いながら綾の方へ行き、対面座位の様な座り方で綾の膝の上に座る。

そうして、綾のお膝の上に座っていると綾は私の髪を梳く様に触った。

突然触られて始めはドキッとはしたけど、触れているのが嬉しくなつて触られているとくすぐったい感じはするけど、気持ちがいい。

「にゅっ……綾は私の髪、好きだね」

「髪もだけど。匂いにも好き。と言うよりも、それらを含めた束の全部が、束が好きだ。愛してる」

「くっつう！？よく、平気な顔でそんな恥ずかしい事が言えるね。流石の束さんは照れりこだよ」

照れた様子なんか一切なく、真顔で綾に囁くように言われ照れからなのか顔が真っ赤になって熱くなっているのを感じた。

本当に照れりこ。

綾だけだよ、天才と呼ばれ忌み嫌われてきた私をこんなにも乱して翻弄して愛してくれて満たしてくれるのは。

と言うか、突然それも真顔であんな事を平気で言うなんて卑怯だよ。

「恥ずかしいものか。本当の事なんだからさ。仮に言って恥ずかしいのなら、それは愛ゆえに、ということだよ」

「愛ゆえにか……うん、そうかもしれないね。でも、恥ずいッ」

本当に綾は平気な顔してよく言えるものだよ。

何だかこっちのほうが一層に恥ずかしくなってくる。

恥ずかしくて顔が赤くなっているのをこれ以上、見られない様私は赤くなった顔を隠すように綾の胸板に顔を埋める。

だけど、このままでは平行線状態で変化が起きないので赤くなった顔と恥ずかしくて昂った気持ち沈める為に綾の匂いを嗅ぐ。

落ち着いてはきているんだけど……綾の匂いは私にとってとっても危険な麻薬の様な匂いでいいにおい過ぎて頭の中を気持ちよくぼー

っと溶かしていく。

別の意味でまた気持ち昂ってきそう。といか、下手したら興奮し
てきそう。

そのぐらい綾の匂いは私にとっていろいろな意味で危険なものだ。

そんな風に顔を胸に埋めて匂いを嗅いでいても、綾は視線を落と
して愛おしそうに目を細めて私を見ていて。

今だほんの少し真っ赤にして照れている私の顔は、窓から入り込む
月の光に照らされて鮮明に見られてしまう。

けれど、これ以上は隠しようがないし、それに綾は私の髪を梳く様
に撫でながら愛おしそうに見つめてくれているので、いいや見られ
ても。

「ねえ、束。聞きたい事があるんだけど……いいかな？」

「聞きたいこと？うん、いいよ」

何だろう？

そう思ったと同時に綾に優しげでそれでいて真剣な瞳を見て胸騒ぎ
がした。

それはただの胸騒ぎではなく激しく、胸騒ぎからなのか体が硬直し
ていつているのを感じた。

「ありがとう。最近、束は度を越した行動が少しばかり多いとい
うか。千冬に対して、挑発的な態度が目に残るものが多くなってき
るけど……それはどうしてかな？」

そう問われ、解ける体の硬直と入れ替わる様にドキツとする。

胸騒ぎの正体はコレだった。

いつかは……いつかは聞かれると思っていた。
嫉妬にしてはあまりにも弁えてなくて度を越していたから。
だから、聞かれた。今までは体よくはぐらかしてこれたけどもうダメだ。

完全に退路も抜け道も隙も絶たれている。もう、言うしかないの……かな。

「えっ……あ、うっ……そ、それは……その」

問われ混乱している思考を努めて冷静に保とうと試みるものの激しく動揺していて上手く言葉が出せない。

言おうとすると、どうしてもシドロモドロになってしまっ。

で、でも、何か言わなくちゃ。そう思いやつとの思いで出た言葉は

「い、言いたくないっ!」

そんな声を押し殺す様にそれでいて叫ぶ様に語気を強めて言う拒否の言葉だった。

すると、綾は激しく動揺している私を包み込み様に優しく問いかけてきた。

「どうしても?」

「どうしてもっ!言いたくないものは言いたくないっ!」

「……どうして?」

感情が昂り語気を強めて言う私を少しでも落ち着かせる様に綾は問いかけてくる。

どうしてって……言ったら嫌われてしまうかもしれないから。嫌われなくても、私が嫌になって、私を怖がったりするかもしれないから。

それにあんな黒くて醜い私の心の内を綾に見られたくない。それでも。

「……言ったら、私を嫌いになるよ。仮に言ったとして、嫌いにならない？嫌にならない？私を怖がったりしない？」

それでも、私はこの機に綾に言って話さなくちゃいけない。いつまでも綾に迷惑をかけ続けている訳にいかない。それにいつまでも逃げ続けている訳にもいかない。

例え綾の刹那に綾に追いつけないからと言って逃げてはダメだ。なら、前へと進め。綾を追い求めて綾と共に刹那であるんだ。

「ならない。嫌いにはならないよ。大丈夫だよ。だから、安心して言ってくれると嬉しい」

今だ決心が揺らいで今だ動揺も抑えきれない私を綾は少し安心して話せる様にと抱き寄せて抱きしめてくれる。

綾の体温を直ぐ傍で感じていると自然と不思議なことに揺らいでいた決心も次第に決まっていき、動揺も次第に落ち着いていく。そうなるのは、やっぱり綾が抱きしめてくれるのと綾が言うてくれたのが大きいと思う。

暫くそうしていると、私は安心した出来て自分の中で結論を導き出し言う決心を決めた。

言おう、不安でも怖くても、対話（話）して私の思いを綾に知ってもらって、二人で理解しあって二人一緒また前へと進んでいける様に。

「……分かった。言う」

「ありがとう。それじゃあ、束はどうしてあんな風な事をしていたんだい？」

「それはね」

「

そして、私はゆっくりと語り始める。

…

第二十九話 ? 束視点(後書き)

というわけでいかがだったでしょう第二十九話 ? 束さん視点

綾君視点と話の流れは同じですが

受ける印象は少しでも違うようにと頑張って書きましたw

前書きでも書きましたけど、束さん視点は書くのは大変で難しいです
すけど

書いていて楽しかったですw楽しすぎて綾君視点よりも文章量が多いですしww

恋する悩む乙女を意識して全体的に力を入れて書きました。

最後の方は駆け足になってしまいました。スランプは何とか脱却出来たと思っています。

補足は今回はないですね。綾君視点の時に書いたので。

けれど、悩みならあります(汗)

前にも書いて公にすべきではないと思っています。

にじファンでのISダグの「週間ユニークアクセスが多い順」等や
アクセス解析

感想量などを見る限り、やっぱり私の小説は飽きられている気がする
るんですよ

まあ、過去編からだから受けが悪いのもそうだし、小説事態も今
一ですからね

そういう点が私的には飽きられている要因、人気が出ない要因だと
思っているのですが

別視点から見るとどうなのでしょう？

何処がどう詰らなくて人気が出ず飽きられているのか気になってい
ます(汗)

あまりのを得ている指摘が来たら応えますが、それでも気になっています。

さてさて、どうしたものか（滝汗）

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

今回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ！

最近は感想を書いてくださる方が固定しているので（汗）

よろしければ、普段書いて頂けない方々も少しでもいいので感想を書いて下さると嬉しいです。

沢山の感想が次話の早い更新へと繋がるのでよろしくですっ！

では、感想は随時大募集中です！

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします

第二十九話 ？（前書き）

後半戦。

前回と変わらずテーマは、「ほろ甘く、そしてダークシリアス&狂^{インサ}気^{ナテイ}」

重要な回なのに重度のスランプのあまり、支離滅裂な微妙なものに

（汗）

なんだかなあ〜

第二十九話 ？

綾視点

「それはね……綾を引き止めていたかったら」

「それはどういう……」

「綾に少しでも追いつきたかったから、綾を離したくなかったから。そうは言われたものの今一つどういう意味なのか理解出来なかった。疑問に思っているし束は言葉を続ける。」

「綾の刹那は速くて速すぎて歩くの遅い私にはそう感じちゃって。また、綾の刹那に綾に追いつけずに置いていかれると思って引き止めたくてあんな風な事達をしちゃったの」

「俺は束を置いていくななんて事は……っ！」

「うん、それは分かっている。分かっているの。でも、幾ら分かっ
ていても頭でそうだと理解しきっていてもそう思っちゃって……ね」

淡々と静かに言う束。

俺が束を置いていく……？

ありえない。俺が束を置いていくななんて。

俺と束は、あの日から一心同体だからどっちかがどちらかを置いていくななんて事はありえない。

俺がそう思いはするけど、束はそうだと理解してもこうとは思えて

いないようだ。

なら、何が束をこんな風に思わせている？何が束を不安にさせている？

「…………それはどうして？」

「何って言ったらいいか分からなくて上手くは言えないんだけど。最近信じられないくらいに幸せだから」

「信じられないくらいに幸せ？」

「うん、信じられないくらいに幸せ。ISを世に解き放ったのはいいんだけど、それによっているいろんな物を自分の手で壊しちゃって命は狙われるし、汚い大人共には利用されそうになるし、いろいろな制約をかけられるし、親には勘当みたいなこと言われちゃうし、篝ちゃんにも嫌われちゃったみたいだし綾にも大変で辛い役目をどうしても背負わせてしまうことになってしまった。いろいろと辛い目に合っているけど、それでも…………」

「それでも…………？」

「それでもね。信じられないくらいに幸せなの。この学園に無理やり入学されて自由は制限されちゃったけど、ちーちゃんが傍に居てくれて大好きな綾が傍に一時も離れず私の傍に居て私を支えてくれるている。そのお陰でクラスの友達とも少しは話せる様になって、昔の私では考えられない事が起きて出来て。それが嬉しくて嬉しくて幸せなの。信じられないくらいに。でも、それと同時に同等になんだか、最近心配で仕方ない」

静かに呟くように言う東。

「私が幸せであればあるほど綾という私にとっての本当の幸せが至福の刹那が遠くへ行っちゃう気がして。綾が離れていく気がして……心配なの」

言われて何となく少しばかり納得が心の中でいく。

幸せだ。俺も今という一時の刹那が幸せで満たされている。幸せだからそこ不安にも俺もなる。

そうではないと分かっているても分かりきっていても。

東もそんな風に感じているのだろう。

だからこそ、俺の膝の上で話してくれている東をほんの少しでもいから安心させる様に抱き寄せる。

「大丈夫だよ。俺は東から離れたりはしない、決して。東を離れたりはしない」

「にゅっ……ありがとう。それでも、そうだと分かかって理解しきっていても。やっぱり心配……不安なんだよ」

「……何故？」

「いつか、この幸せが壊れてしまいそうだから。私を根本として壊れて、私の性で綾を殺してしまうかもしれない。綾は私といるばかりに大変な目にもあうから」

「それは百も二百も承知の事だよ。承知した上で東とこうして一緒にいて同じ刹那を感じている」

「でも、私のせいで綾は死ぬ様な目に合うかもしれないんだよ？ 最悪の場合、死んじゃうんだよ？！ そうなったら、本当に綾は私を置いて遠くへ行くんだよっ！？ それが私には不安なのっ！」

「そうだとしてもだ。それすらも承知しているんだよ。俺は死なない、絶対に。何度だって言ってる。俺は束を置いていかない、何があっても絶対に束の傍に居る、永遠にいるっ！」

「っ！？」

そう言ってもう一度、束を抱き寄せて力一杯優しく抱きしめる。

落ち着かせるように。

何より、そんな考えや思い達を考えさせない様に忘れさせるように力一杯優しく抱きしめる。

そして、言い聞かせるように言葉を昔の束を縛っていたながらも心のよりどころとなって、今も変わらず誓いの言葉としてあるあの言葉を言う。

すると、束は驚いた様に肩を震わせ……泣いていた。

俺の胸板に顔を埋めながら声を押し殺して静かに泣いていた。

そんな束に俺は言葉はかけず、落ち着いて気持ちが楽になるようにとただ力一杯優しく抱きしめる。

一分間ぐらいだろうか、もしくはそれ以上の時間だろうか抱きしめていると束が顔を上げてこちらを向く。

「ありがとう。言っただけで泣いたらすっきりしたよ。嬉しい、やっぱり、綾といるこの至福の刹那が一番幸せだよ。綾……絶対に妾を離さないで……置いていかないでね」

「ああつ……離さない……絶対に。置いていかないよ……絶対に。永遠に束の傍にいる、一緒にいる」

「嬉しい。とっても嬉しいよ。やっと、全てで分かって理解しきれたよ。私も絶対に離させない永遠に綾の傍にいる、一緒にいる」

そう言つて抱きついてくる束を俺は抱きしめる。

束の不安や心配をかき消しさる様に束を安心させ束を繋ぎ止める様に。

そして、俺達が求め望む“至福至福”が不変になるようにと祈りを込めながら抱きしめ続ける。

そうやって、抱きしめ合い続けるとどちらともなく一旦離れる。

「実はね……もう一つあるんだ。私があんな風な事達をしちゃった理由が」

「もう一つ?」

「うん。実はね……綾がちーちゃんに奪われそうな気がして挑発的な態度をしちゃったんだ」

「えっ?」

そう束に言われて間の抜けた声が出てしまった。

俺が千冬に奪われる?何故だ?

確かに千冬も束の挑発的な態度を意地みたいになって買いに出ている節があっただけ。

意図が見えないから頭の上に疑問符を浮かべている様な表情になる。

「ちーちゃんの方が私よりも美人でちょっと厳しいけど優しくて男の人を影ながらたててくれるし。それに私よりまともだしね。それに昔はよく綾とちーちゃんはベストカップルとか言われていたし」
苦笑いする様な微笑むような笑みを薄く浮かべて言う。

確かに昔は千冬とそんなベストカップルだのの噂を立てられていた事はあった。

それは普通に否定だし、千冬も顔を赤くさせて否定していた。まあ、否定したら否定したらで千冬は不機嫌になっていただけ。

けれど、そんな噂は所詮、過去の噂でしかない。

事実、このIS学園に入ってからそんな噂を一度も耳にした事はないし、影で言われている感じもない。
なら、どうして束はそんな事を気にする？

「それで俺が千冬に奪われると思ったの？」

「……うん。ちーちゃんは本当に魅力的な人間だからね。いつか、奪われてしまうじゃないかと心の何処かで気が気じゃないところがあった。それに時々、思うの。綾はちーちゃんと恋人としている方が幸せだったんじゃないのかなあ〜って思うの。あつ、あはは……
ごめんね変な事を言っちゃて」

何故、奪われるかと思っているのかを言ってくれ。

続け様に胸の内だと思っている事をつい言ってしまったという様子のばつが悪そうな誤魔化す様に笑っていた。

何故、奪われるのかと思ったのかは分かった。

ならば、俺が束に告げる言葉はとっくに決まっている。

「大丈夫だよ、心配ない。俺は決して束以外の誰にも靡かない。それが千冬であったとしても。俺が愛しているのは生まれ変わっても束だけだ。心配ないよ、安心して」

「うん そっか〜愛しているのは私だけかあ〜 ふふっ 嬉しいよ」

言葉を聞いたのは心底嬉しそうな顔をしている。

よかった。やっぱり、束はこうした嬉しそうな明るい顔をしている方が似合っている。

あの時の様な顔やさつきまでの暗く酷く沈んだ顔はしてほくない。

「でも、気になる事がまだ一つ」

「何？」

「束が挑発的な態度に出るのは分かったけど……それでどうして千冬まであんな意地になった感じにその挑発を買っただろうね？」

「あははっ 綾は鈍感だね」

「鈍感？そんな事はないよ……いつもビンビンだから」

「あはは 何それ 綾は鈍感だよ でも……やっぱり、綾はまだそうしているつもりなんだね」

束は楽しげに言いい最後に何か言った様だが小さすぎて聞こえなかった。

鈍感鈍感と今でもたまに言われるけどそうなんだろうか？

自分では鈍感ではないつもりなだけだな。

端から見るとそう見えるのか見えるのかもしれない。

束の想いに気づくのも取り返しがつく早い時期だったようで手遅れだったし。

「よしっ！なら、私は何が絶対に綾を手離さない。ちーちゃんが奪ってくるなら受けつ立つことにするよっ！絶対に綾を離さないから覚悟してよ？」

「それは俺もだ。束が嫌がっても離しはしないから覚悟するように」

「うん。お互い様だね」

そうして、どちらからともなく微笑みあう。

すっきりとした気分だ。

最近、ずっと聞きたかった事も聞けて。

尚且つ、束の胸の内を知る事が出来てよかった。

「あつ天の川だよ、綾。綺麗だね」

束のその声に釣られ窓の外の夜空を見る。

夜空にはあまねく綺麗な星々が星の橋を夜空に架けている。

天の川だ。

七夕と言えばこれに限る。空は晴れて澄みきっており、綺麗によく天の川が見える。

篠ノ之神社から見ていた天の川も綺麗だけど、ここから見える天の川も篠ノ之神社から見ていた天の川に負けないくらい綺麗だ。

「わあ〜っ！見て！綺麗だよ綾。晴れてよかった。」

俺の膝の上で同じ様にして窓から見える天の川を見る束はとっても楽しそうに見ている。

何を隠そう束は七夕に見れる天の川が好きだ。束にとって、天の川を見れる七夕の日はクリスマスやバレンタインデー並みに重要度があるらしい。

だから毎年、束は楽しみにしていて、一緒に見せさせられ一緒に見ている。

今日は晴れ綺麗に天の川が見れるからいいけど、雨の日でそれも曇っていたら束のテンションは最悪だ。

何年生だったかは定かではないけど、小学学生の時なんて本当に最悪だった。

楽しみにしている七夕の天の川が突然の雨の日の曇りで見れなくなつて束がマジ泣きしたんだっけ。

あの時は本当に手を焼いた。俺と篝の二人かがり二時間ぶつとうしで慰めて漸く機嫌が直つたんだっけ。

その後、束は泣き疲れて直ぐ寝て俺と篝も疲れて倒れるように寝たんだっけ。

兎に角、七夕の天の川を見れる日が雨の日でそれも曇っていたら束のテンションは最悪だ。

七夕の天の川が見れる日に雨があつたら、降っている雨は彦星と織姫が会えなくて泣いている涙を流しているという洒^{さい}涼^{りょう}雨らしいのだが束の場合は涙で済まない。

だから、今日は晴れていて尚且つこんな綺麗な天の川を見て本当によかった。

「綺麗だね」 天の川はいつみても飽きないや 晴れてよかったね

これなら今頃、彦星と織姫は会って又ル又ルのネチヨネチヨをしているんだろうね」

「いい話をそげぶしないでよ、束。だけど、晴れてよかった。洒^{さい}涙^る雨^いにならなかつたし、それに俺の姫も泣かなかつたからね」

「むう〜泣いたのは中学までじゃんかつ。流石にもう、この歳になつたら泣かないもんつ。綾の意地悪〜ツ」

俺の顔を見て離していた顔を拗ねた様にプイツと別の方向、もう一度窓の外に顔を向けて夜空にかかる天の川を見る束。

天の川を見ている束の表情は、とても楽しそうで無邪気で無垢だ。いつもの様におどけていね束の表情も好きだけど、こんな表情をしている束もいい。

だから、そんな束の表情に見惚れているとつい口元から笑みが零れてしまった。

「な、何？」

「いや、天の川を見ている束は楽しそうだと思って」

「子供ぽいつて思ったでしょう〜っ？」

「そんな事はないよ。ただ、本当に楽しそうだなっと思ってね。本当に束は天の川好きだね」

「まあね。七月と言えば、私的にコレだし。何より、空一面に宇宙空間を好きな星達を感じれるから好きなんだ」

そう静かにはにかみながら言う束。

そう言えば、束は星や天体、宇宙が好きだ。

昔からそれだけは好きでよく自分で調べたり、俺を連れまわしてプラネタリウムに言ったりしていたのはいい思い出だ。

好きだから、昔から宇宙工学を始めとする宇宙関係の権威である奈々さんの元へ束は弟子入りしたとも言っていた。

好きだからこそ、あの理由通り人類が大気圏の向こう……無限大の宇宙へと飛ばたける様にと宇宙服、マルチフォーム・スーツとしてISを束は開発したのかもしれない。

「そうだ。ねえ、綾は今会っているだろう彦星と織姫にもしもなっ
てしまいそうになったらどうする？」

「一年に一回しか会えなくなったらって事？」

「うん、そう。綾はどうするの？」

「……そうだね。天帝を説得して毎日、会えるように努力する、かな。もしくは極論を言つと、年に一度しか会えない誓いを上手い具合に塗り替えるかな」

「あははっ、綾らしい言葉だね。私も大体は同じかな。私と綾を引き裂こうとするものなんて頭どうかしているんだよ。そんな事をするヤツは皆皆、殴り倒すよ」

「わお〜バイオレンス」

笑みを浮かべて喜々として声で言う束に俺はつい苦笑いを浮かべる。そんな俺の表情を見て束は楽しそうに微笑み言葉が続ける。

「だって、さつきも言ったでしょう？ 私は綾を何があっても綾を離さない。絶対に絶対に。私は綾が好き、好き、好き、大好き、大好き、大好き。愛してる、愛している、愛してる、愛してる」

呪詛の様に同じ言葉を繰り返して束は言う。

言葉は狂気を孕んでおり、美しく聞き心地がいい。

いつもの様な瞳のハイライトがない、虚ろでありながら美しい笑みではなく。

今の束の表情は、狂気を纏いながら浮かべている美しい笑みは窓から差し込む月の光に照られて更に美しく幻想的。

そんな魔性な笑みに俺は魅力され心を奪われ見惚れている。

いつだっただろうか。

病的で狂気を感じるものは美しい　と聞いた覚えがあるが、正しくそうだ。

ただ綺麗なものには、平均的な美しさしか感じない。どこか奇妙で毒のあるものが、魅力を放ち強い呪いの様に強烈な美しさを感じ、圧倒的なまでに魅力される。

正しくそれが今の束だ。

狂っている方が一段と美しく見え、愛しく感じる。

そんな風に俺もやっぱり、壊れて狂っているんだろう。

けれど、嬉しい。こんなにも強く、狂おしいほどに俺を思ってくれて、愛してくれて。

だからこそ、今の束が一段と美しい思える。束が愛しい、狂おしいほどに愛しい。

そんな気持ちを抱き寄せて、答えるように抱き寄せ抱きしめる。

すると、束は嬉しそうにして体を俺へと預けてくれる。

「俺も愛している。誰よりも何よりも愛している。絶対に離さない」

「ふふつ。私もだよ。ありがとう、とつてもとつても嬉しいよ。変に不安になって心配しちゃて、それで綾に今まで迷惑かけてごめんね？」

「いいさ。これから弁えてくれれば。幸せだからこそ不安になるのは当たり前だし、その不安は対価みたいなものだしね」

「対価？」

「そう。幸せな人が幸せを手に入れている時、同時に発生する対価だよ。幸せなほど、大きくなる」

「そっか。対価、か。じゃあ、仕方ないね。払っていかなくちゃ。そして、そうなるのも」

「うん、そうだよ。俺達は今という時を刹那を生きている。いい事もあれば、悪い事も在るし、そんな風に不安になることもあれば、そんな風に心配になる事もある。俺達は永遠になる事の出来ない刹那だ。だって、そうだろ？それこそが」

「人間、として当然の事なのだから……でしょう？」

「ああ」

それこそが当たり前前のように、忘れがちな生き方で自分らしく在られる生き方。

「それを不安とかいろいろと抱えながらも生きなくちゃいけない。それがちょうどいい制約。それに本当にダメになりそうなら、しゃーねえなって笑えばと思うよ。」

いつかはそんな事もあったねって笑って「

「ふふっそうだね」

納得したように俺の胸板で束は微笑む。

「何だか、遠回りしゃった気がするけど。ようやくまた、駆け抜けた刹那に綾の刹那に……綾に追いつけて横に並んで歩いているよ」

「そっか。それはよかった」

嬉しそうに言う束と同じ様に嬉しく思いながら言葉を返した。

そしてふと、窓の外の天の川を見るとまだ、綺麗に夜空に架かっている。

今日も一日、大変だったけど満たされた刹那《一日》だった。

俺達は永遠になれない刹那。

けれど、この至福の刹那を少しでも長く続くようにと、それこそ永遠になるようにとするのは間違っていないだろう。

だから、そうなる様とに努力しよう。努力しないものは結果を得れずというし。

「ねえ……こんな話した後にはアレなんだけど……綾はしたくないの？今夜は二人つきりだから、私としてはいいんだよ？むしろ、したい」

と、突然束がそんな事を言ってきた。

まだ少し尾が引く様にあつた暗い雰囲気は消えたけど呆れた。状況を分かつた上で言ってきたている。

出来るわけがないのに……それが俗に言う兎っ子の発情期か？ときどき、変態と束に言われるが変態なのはお互い様である。

「アホな事言わないでよ。状況が状況でしょう」

「うううう分かつてる。でも、そんな事言っても綾も溜まっているんでしょう？なら、しようよ。ほら、おじ様達の手紙の事も在るし」

「変態が、自重しろ。と言つか、馬鹿師匠達のあの手紙を間に受けるな。それに束、怯えていたでしょう？」

「……………うっ」

そう束は怯えていた。

寝る前に押し倒してしまつた事故があつたけど、その時に束は怯えていた。

確かに期待するような表情や目はしていたが、それ以上に束は僅かだが怯えていた。

それはただの怯えではなく。束の体の震えが病まず拒絶にも似た怯え。

つまりそれは、まだ心の準備が出来ていないということ。

焦る気持ちも分からなくはないが、そんな束の心理状態で束に手を出すなんて出来ない。

俺が保守的になっっているのもあるけど、心の準備が出来てない束に無理させて下手に手を出して傷つけることなんてしたくはない。それに理由をつけているだけかもしれないけど、今の状況ではまだダメだ。

現状の整理も出来ていないし、それに千冬にもまだ言えてない。だから、そんなウチにそんなことをしてしまえばそれこそ最低の裏切りとなる。

だから、今はまだ。焦る気持ちで一杯の束を待たせて申し訳ない気持ちで一杯だけだ。

「焦る気持ちも分かるけど、焦らなくてもいい。心の準備がまだなら、ゆっくりでもいい。無理させて下手に手を出して、束を傷つけたくないからね。それに状況的にも危ういからね」

「……そう、だね」

「だから、ゆっくりでいいんだ。焦らず二人でそういう事を迎えられる。俺は束で束は俺、二人で一人となれる一心同体なんだからさ」

「そうだね。ごめんなさい……変に焦っててしまって」

「気にすることはないよ。それも当然なんだから。付き合っているとなるとそう言うことも必要でないと焦ってしまうからね。俺の方こそ、ごめん。待たせることになってしまった」

「綾の方こそ気にすることないよ。これは時間がかかる問題だし、謝るならそれはお互い様だよ。今はこうして触れ合えるだけで充分。こんなに風に……ね。んっ」

すると突然、唇に唇を重ねられキスをされる。

深いキスではなく、普通のキス。

だけど、それは甘く甘く。互いを求め合うようなキス。

どれほどそうしていただろうか。

短いように長いようにも思えるほどキスを唇と唇を重ねあい。

そして、どちらからともなく唇を離すと……束は嬉しそうに微笑んでいる。

「ええへへ キスしちゃった 今はこれで満足。いつかは、近いうちに営みもしたいししくちやいけないど。今はこれで。綾が傍に居て愛してくれるだけでいい」

俺の膝の上で微笑みながら言う束は天の川の星々にかすかに照られ美しい。

見つめていると再び愛おしさが込み上げてきて、抱きしめた。

すると束はいつもの様に体を俺に預けてくれ、両腕を俺の首の後ろへと回して抱きついてくれた。

そうして数分ほど抱きしめていると、束が肩から首にかけて腕をかけているのを確認すると、抱きしめている腕を背中から腰へと回して、束を両腕で抱き上げる。

「きゃあっ！？な、何？」

「ごめんごめん。話も終わったことだし。ほら、時間もいい時間となったからそろそろ寝ようと思って。長いこと話していたから丁度そろそろ寝れるかな。束も少し眠たそうだし」

「あっはは、バレてた。そうだね、時間も日ちょっと跨いじゃって

るし、そろそろ寝よつか」

そして、束を抱えたまま お姫様抱っこで部屋の布団へと運ぶ。運ぶと布団へと束を降ろし、俺も同じ布団へと入り横になる。

二人同じ布団で横になると気分がすっきりした事も在ってか、眠気と睡魔が襲ってきた。

それは束も同じなようで小さく欠伸を手で押さえながらして眠たそうにしていた。

俺はそんな束を安心して眠られる様、頭を撫でると嬉しいそうに束を細めて眠たそうにした。

「にゅっ……頭撫でられるの気持ちいいよ」

頭や髪を撫で続けていると本当に気持ちいらしく、段々と束の意識が眠りに落ちていつているのが見て取れる。

こうしている今も気持ち良さそうに目を細めているが、眠たそうにうつらうつらとしている。

「限界みたいだね」

「うん……そう、だね。おやすみなさい、綾。んっ」

「んっ……ああ、お休み、束」

最後にお休みのキスを交すと、寄り添い合い、抱きしめあい。

束は安心しきった気持ちよさそうな表情で眠りにつき、俺もそんな束の表情を眺めながら。

疲れ切っていた俺達は、そのまま睡魔に引かれるようにゆっくりと眠りに落ちていったのだった。

⋮

第二十九話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第二十九話 ?

今回は活動報告の通り。

何故、束さんが最近、度の過ぎた行為をしているのか。

何故、千冬さんに対して挑発的な態度を取っているのかに
触れ解消した回でした。つまりは伏線回収です。

これで束さんは少しは自重してくれます。気持ち一つ分ぐらいに。
そして、いろいろと伏線を張りましたが相変わらず雑だ(汗)
こんな小説で大丈夫か? 大丈夫じゃない、大問題だ。

七夕も取ってつけた様な感じになったし。結構重要なのに。
それと以前からの、「早くやれっ!」「ヤツチエエヨ、モウ」等と
指摘されていた営みについての応えは作中の通りです。
これもまた、無理やりだな。

でも、あまり付き合ったから 某ドラコン風に「愛し合おうじゃないか」と
その日や即、エッチさせるのって好きじゃないんですね。書く分には。
勢いでやって失敗した例を聞きすぎて私が臆病になっただけか
もしれませんが
それでもやっぱりそういうのは時間をかけてからじゃないと。かけ
過ぎてても問題ですけど。

最後の寝るシーン辺りは自分の微妙だった。
本当は、イチヤイチャする予定だったけどあまりし過ぎてもしつこ

いだけだし。

テーマがテーマだったから、普通にしました。

と言うか、やっぱりスランプ過ぎる(汗)

全体的に支離滅裂で話がかみ合っていないような所も多多ある気がする。

何処がどうと詳しくは言えないんだけど。

自分で修正がてら読み直して「アレ？」と思ったし……

本当、どうしてこうなった。重要な回なのに。

修正したいけど何処がどういう風に変orおかしいのかわからない

(汗)

誰か、アドバイス&オブラートな指摘、プリーズっ!!

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

本当に読んだのなら、感想を書いて下さい。お願いしますっ!!

永劫の読者に願う。この話の感想を書いてくれ

アテイルト
流出

では、感想は随時大募集中です!

よろしければ感想やアドバイス、誤字脱字報告等を何卒お願いします
す

ちなみに予定としては次回が二十四話の束さん視点で臨海学校編が

終了して

期末テスト + 微工口（仮）編で八月編突入という予定です。超お
楽しみにっ！

第二十九話 ? 東視点(前書き)

初の一万文字越えの長文の話になりました。

やっぱり、私はこういうのは好きだけど性にはあってない様で

綾君視点時の様に支離滅裂なものとなってしまいました(汗)すみません。

長文で読み難いと思いますので、ゆっくりお読み下さい。

それではどうぞっ！

第二十九話 ? 束視点

束視点

「それはね……綾を引き止めていたかったら」

「それはどういう……」

「綾に少しでも追いつきたかったから、綾を離したくなかったから綾の疑問にそう答えると、綾は今一つどういう意味か理解できてないという表情をする。」

これだけじゃ分からないよね。そう私は思い、今一つどういう意味か理解できてないといった表情の綾に対して続けざまに言葉を続ける。

「綾の刹那は速くて速すぎて歩くの遅い私にはそう感じちゃって。また、綾の刹那に綾に追いつけずに置いていかれると思って引き止めたくてあんな風な事達をしちゃったの」

「俺は束を置いていくなんて事は……っ！」

「うん、それは分かっている。分かっているの。でも、幾ら分かっているても頭でそうだと理解しきっていてもそう思っちゃって……ね」

綾に刹那は速い。

普段はそんな風を感じたり、思ったりはしないけど。

今みたいな精神状態で今みたいに一度、そう思ってしまうと否応無しにでもそう思ってしまう、そう感じてしまう。

綾が隣にいて私を放さない様、手放さない様、それこそ縛り付ける様に手を硬く繋いでくれていても、そう思ってしまったえば、距離を感じる。

近くに隣に傍に決して離れない様、綾がいてくれても距離を……目には見えない、距離を感じる。

その距離を感じると歩くのが遅い私は、置いていかれる。

過ぎ去っていく刹那に綾に追いつこうと悪足掻きをしてようとしても、綾の刹那は綾は速い、速すぎて追いつけない。

だから、置いていかれる。置いて行かれるのが、怖かった。置いていかれるのは嫌っ！

だから私は、置いて行かれるのなら、追いつけないのなら、どんな事をして止めてやるうって引き止めようって思ってしまった。

そして、あんなあんな風な事達をしてしまった。

無論、綾がそんな事を、私を置いて行くななんて事はしないのは分かっている。

いや、分かっているつもり。それでも、幾ら分かかっていても頭でそうだと理解しきっていても、一度そう思うと否応なしにどうしてもそう思ってしまう。

「……………それはどうして？」

暗く重くならない様、ついに淡々と言ってしまったのが仇となったのか。

本当は一気に問い詰めたいのを我慢して、私を気遣う様な努めて優しい声で問いかけられ。

私は思考の海から起き上がり意識をハッとさせ、少しだけ切り替えて答える。

「何って言ったらいいか分からなくて上手くは言えないんだけど。最近信じられないくらいに幸せだから」

「信じられないくらいに幸せ？」

「うん、信じられないくらいに幸せ。ISを世に解き放ったのはいんだけど、それによっていろいろな物を自分の手で壊しちゃって命は狙われるし、汚い大人共には利用されそうになるし、いろいろな制約をかけられるし、親には勘当みたいなこと言われちゃうし、篝ちゃんにも嫌われちゃったみたいだし」

綾にも大変で辛い役目をどうしても背負わせてしまふことになってしまった。いろいろと辛い目に合っているけど、それでも……」

ISを世に放つて、ISを基盤として社会や世界は再構築し、世界は確かにISの創造主である私に適応した。

けれど、あくまでも適応したのは世界だけ。人の世は予想した通り、私からかけ離れ乖離かいりした。

一応、認められはした。けれど、認められたのはISだけでその創造主たる私は実質まったくのところ認められてはいない。

それ自体は、ある意味当然であたりまえの事なので不満はあるけど割り切ってはいる。

認められず世界は適応してしまったせいでいろいろと辛い目にあっているのは紛れもない事実だ。

私が言葉に出して例に挙げ事がそうであり、いくつか堪えるものもあるけど。やっぱり、それでも……

「それでも……？」

「それでもね。信じられないくらいに幸せなの。この学園に無理や

り入学されて自由は制限されちゃったけど、ちーちゃんが傍に居てくれて大好きな綾が傍に一時も離れず私の傍に居て私を支えてくれるている。そのお陰でクラスの子達とも少しは話せる様になって、昔の私では考えられない事が起きて出来て。それが嬉しくて嬉しくて幸せなの。信じられないくらいに。でも、それと同時に同等になんだか、最近心配で仕方ない」

それでも、今が今という刹那が信じられないくらいに幸せ。

迷惑なんて言葉では済まないぐらいの迷惑をかけてしまっているのに相変わらず、綾とちーちゃんの二人は私の傍にいていくれて。

大好きな綾は一時も離れず私の傍に居て今まで私を支えてくれる。

そして、そのお陰で最近、クラスの子達とも少しは話せる様になった。昔は綾とちーちゃん以外と学校などで話すのは皆無でありえず、第一話しかけて来る人すらいなかった。

だけど、ここに入学させられてからは綾のサポートもあつかほんの少しだけ話す様になった。それを私は不思議と満更でもない気分で自分でも驚いて不思議だった。

そんな嬉しくて幸せで、昔の私では考えられない事が起きて出来るから、多少自由は制限されちゃったけど別にさほど苦じゃない。そんな満たされた至福の刹那があつて味わえている反面。それと同時に同等になんだか、最近心配で仕方ない。

そう言葉で呟く私の言葉を綾は静かに聴いてくれて、私は言葉を続けた。

「私が幸せであればあるほど綾という私にとっての本当の幸せが至福の刹那が遠くへ行っちゃう気がして。綾が離れていく気がして…

…心配なの」

言って綾は、何となく納得がいったという表情をする。
幸せであればあるほど、不安になるのはある意味当然の事で誰もがなる当たり前の事。

けれど、私の場合は少しだけ違う。

そんな風にあれこれ思っていると表情に影を落としてしまったのが、綾の膝の上で話してくれている私をほんの少しでもいいから安心させる様にといった感じで抱き寄せてくれる。

「大丈夫だよ。俺は束から離れたりはしない、決して。束を離れたりはしない」

「にゅっ……ありがとう。それでも、そうだと分かって理解しきつていても。やっぱり心配……不安なんだよ」

「……何故？」

「いつか、この幸せが壊れてしまいそうだから。私を根本として壊れて、私の性で綾を殺してしまうかもしれない。綾は私といるばかりに大変な目にもあうから」

「それは百も二百も承知の事だよ。承知した上で束とこうして一緒にいて同じ刹那を感じている」

「でも、私のせいで綾は死ぬ様な目に合うかもしれないんだよ？最悪の場合、死んじゃうんだよ？！そうなったら、本当に綾は私を置いて遠くへ行くんだよっ！？それが私には不安なのっ！」

私の不安は心配はこれだ。

私のせいで綾は死ぬ様な目にあつて、最悪の場合、死んでしまうかもしれない。

それを綾は、百も二百も承知の事、承知した上で私とこうして一緒に刹那を感じていると言ってくれたのは嬉しいけど。

それでも綾がそう思ってくれている以上に私は不安で心配で仕方ない。

綾は私というせいで近いうちに死ぬような目にあつて、最悪死んでしまふかもしれないと、私の何か強く告げている。

そうなるのは、やはり全て私のせいだ。私がISなんか作ったせいでもう一人の自分を殺してしまうかもしれない。

そうだ、全て私のせいで全部私が悪い。仮にIS抜きにしても、綾は私のせいで死ぬような目にあつて最悪死んでしまふかもしれない。

だって、私は天才過ぎるから、それ故に人からも世界からも嫉妬され嫌悪され憎悪され、忌み嫌われ忌避される。

それは昔からそうで今も変わらない、変わる事はないだろう。変わつても見てくれや言い回しだけが変わっただけで中身や意味は変わらないと思う。

私のせいで綾を殺してしまうかもしれない、そう思うといくら幸せで満たされた至福の刹那を味わつていても不安になつて心配で仕方なくなる。

だったら、綾と離れて一人でいえしまえばいいなんていう愚考も思い浮かんだけど、綾は私にとってなくてはならない絶対的な存在だから、そんな愚考なんて却下だ、論外だ。だからこそ、離れて一人になる事も出来ず、本当にどうしようもない。

バカだ……私はバカだ。天才なんかじゃなくバカだ。浮かれていた浮かれていた。綾に告白して受け入れてもらつて世界が私に適応し

て浮かれていた。

私のせいで、私の愚考のせいで綾を殺してしまうかもしれない。それに気づいた時には全てが進みすぎて手遅れだった。

綾を殺してしまう、殺してしまう、私のせいで殺してしまう、その可能性を考えてしまうと不安で心配で仕方ない。

胸が痛い。胸が苦しい。胸が……裂ける様な感覚がする。

このぐちゃぐちゃな思考を捨てて泣き叫んでしまいたい。

綾が死んだら私はまた独りぼっちだ。永劫独りぼっちだ。死者には追いつけない。これこそ本当に置いていかれる。

本当に本当に不安で心配で仕方ない。今すぐに泣き叫んで少しでも楽になりたい。

けれど、そんな事をすればまた更に綾に心配させて迷惑かけてしまう。う。

だから、我慢しろっ私。綾に負担をかけるなっ。

そう強く思ったことが仇となつてたのかどうやら表情がさつき以上に暗い顔をしまった様で綾に強く抱きしめられながら言われた。

「そうだとしてもだ。それすらも承知しているんだよ。俺は死なない、絶対に。何度だって言ってる。俺は束を置いていかない、何があつても絶対に束の傍に居る、永遠にいるっ！」

「っ!？」

そう言つて綾はもう一度、私を抱き寄せて力一杯優しく抱きしめる。抱きしめてくれる力は強い、とても力強く、それでいながら優しい。

そして、言ってくれた言葉は全て力強く綾の本心であり本音である

事が分かって、そして私の荒れて乱れていた心を沈め段々と落ち着けてくれる。

それにまた、言ってくれた。

『絶対に東の傍に居る、永遠にいる』

と。今も尚、私の心の中、その奥であり秘めている言葉。

この言葉が壊れそうな私を保ち続けてくれ、今でも私を保ち支えてくれている、心のよりどころとなっている言葉。

それは誓いの様な言葉であり、呪いの様な言葉。

その言葉が言ってくれた他の言葉も、全ての言葉が嬉しい。

言ってもらい抱きしめてもらっていると、自然と荒れて乱れていた私の心が感情が静まり、段々と落ち着いていく。

そして、思考が正常に動く私はある事に気づいた。

私は逃げていただけだ。

私のせいで綾が死んでしまうかもしれない、殺してしまうかもしれない　　という、未来が未知が怖くて目を逸らして逃げていただけだ。

あれこれ頭の中で理由をつけて、悪い事実を勝手に妄想して、その悪い妄想に囚われて今と言う瞬間を刹那を楽しまなかっただけだ。

私ただ逃げていただけ。悪い妄想に支配されて、その悪い妄想が及ぼす現実を見ているのが耐えられなかっただけだ。

昔から私は逃げてばかりだった。いつも逃げて、逃げた先に起したのがIS。逃げた先にはロクな事がない。

逃げていれば当然、綾に置いていかれる。

違う、置いていかれたんじゃない、私が逃げて綾から勝手に距離を取っていただけだ。

置いていかれると勝手に思っていただけ。

本当に私はバカだな。ああ……なんて私は情けないんだろう。これなら、こんな私なら、もしも置いていかれても仕方ない。

けれど、私は置いていかれるわけにはいかない。絶対に置いていかれない。

なら、私は逃げない。未来や未知に目を背けず逃げず綾と一緒に並んで先へ先へ、前へ前へ、進む。

こうして綾が逃げずに傍にいてるんだ。なら、私も逃げるわけにはいかない。

そう綾に抱きしめられながら思うと、多分安堵なんだろうけど、自然と涙が出た。

その涙は安堵からものだったけど、流石に人前で泣くのはふと恥ずかしく思っただけ、綾の胸板に顔を埋めながら声を押し殺して静かに泣いた。

嬉し泣きでもあるんだけど、逃げていたという事に今更になって気づいた自分を自分であざ笑う様な部分もある涙かもしれない。

そうだとっても嬉し泣きである事には変わりはなく、綾が傍に居てくれることが今みたいに優しく力強く抱きしめてくれることがあんな風に言ってくれた事が、嬉しくて涙が止まらない。

そんな風に泣いている私を綾は氣遣ってくれて言葉はかけず、落ちて着いて気持ちが悪くなるようにと風にただ力一杯優しく抱きしめてくれる。

一分間ぐらいだろうか、もしくはそれ以上の時間だろうか抱きしめられていると私は顔を上げて綾の方を向く。

「ありがとう。言って泣いたらすっきりしたよ。嬉しい、やっぱり、綾といふこの至福の刹那が一番幸せだよ。綾……絶対に私を離さな

いで……置いていかないでね」

「ああつ……離さない……絶対に。置いていかないよ……絶対に。永遠に束の傍にいる、一緒にいる」

「嬉しい。とつても嬉しいよ。やっと、全てで分かって理解しきれたよ。私も絶対に離させない永遠に綾の傍にいる、一緒にいる」

そう言つて抱きつく綾は再び私を抱きしめてくれる。

私の不安や心配をかき消しさる様に、私を安心安心させ束を繋ぎ止める様に。

そんな風に抱きしめてくれる綾に私も同じ様な想いを込めながら抱きしめる。

綾の不安や心配をかき消し去るように、綾が

そして、二人で私達が求め望む“至福至福”が不変になるようにと祈りを込めながら抱きしめ続ける。

そうやって、抱きしめ合い続けるとどちらともなく一旦離れる。

「実はね……もう一つあるんだ。私があんな風な事達をしちゃった理由が」

「もう一つ？」

「うん。実はね……綾がちーちゃんに奪われそうな気がして挑発的な態度をしちゃったんだ」

「えっ？」

突拍子がなさ過ぎたのか間の抜けた声を出した綾。

どうして綾は、ここでちーちゃんの名前が出来たのか分からないといった表情をして意図が見えないから頭の上に疑問符を浮かべている様な表情もしている。

だから私は、そんな綾でも早めに分かる様にと言葉を続ける。

「ちーちゃんの方が私よりも美人でちょっと厳しいけど優しくて男の人を影ながらたててくれるし。それに私よりもだしね。それに昔はよく綾とちーちゃんはベストカップルとか言われていたし」

言っただけはいいものあまり言いたくなかった節があるので、つい苦笑いする様な微笑む様な何とも言えない表情をしてしまった。

ちーちゃんはいいい女だ。

挙げた通りちーちゃんは、私よりも美人でちょっと厳しいけど優しくて男の人を影ながらたててくれる本当にいい女。

それに私よりも。私が何処か他人よりもおかしいのは重々承知済みになるのでちーちゃんがまともなのはよく分かる。

それに昔はよく、綾とちーちゃんはベストカップルだの噂を立てられていた事があった。

そういうのが好きな年頃ってのもあったんだろうけど、他人からすると綾とちーちゃんの方がお似合いに見えたのかもしれない。

そんな噂が当時の私には、忌々しいかったのをよく覚えている。

けれど、そんな噂は所詮、過去の噂でしかないことは分かっている。事実、このIS学園に入ってからにはそんな噂を一度も耳にした事はないし、影で言われている感じもない。

でも、今でもそんな昔の噂を気にしてしまう。だって。

「それで俺が千冬に奪われると思ったの？」

「……うん。ちーちゃんは本当に魅力的な人間だからね。いつか、奪われてしまうじゃないかと心の何処かで気が気じゃないところがあった。それに時々、思うの。綾はちーちゃんと恋人としている方が幸せだったんじゃないのかなあ〜って思うの。あつ、あはは……ごめんね変な事を言っちゃて」

つい、変なことを口走ってしまい罰が悪くなってるって私は取ってつけるように苦笑いするしかなかった。

本当、深く考えるものじゃないな。こつという系統の話は。

だって、綾はちーちゃんと恋人としての方が幸せだったんじゃないかって思ってしまうから。

そんな事を口走ってしまった。口走ったって事は、私も多少ながらそう思っているという事。それは認めたくはないものの自覚はしている。

普通に考えたら、そうでしょう？それが普通で当たり前の事なのだから。

例えるなら、破滅へミチと希望へのミチ。どちらか一つを選ぶなら、希望へのミチを選ぶ人がほぼ全員だろう。

それは誰もがそう選び、そう選ぶことが当たり前で、そう選ぶことで他者と立ち位置を合わせ他者より抜きん出なくて他人と同じで後ろ指刺されない普通である選択と考え。

けれど、私が愛する刹那を求め続け人として壊れて欠けた最愛の綾は、迷いはない言う事は既に決まっているという顔をしていた。

「大丈夫だよ、心配ない。俺は決して束以外の誰にも靡かない。それが千冬であったとしても。俺が愛しているのは生まれ変わっても束だけだ。心配ないよ、安心して」

「うん そっか〜愛しているのは私だけかあ〜 ふふっ 嬉しいよ」

ああ、本当に嬉しい。綾がこんな風に言ってくれて。

言ってくれた、たったこれだけの言葉で嬉しくなっただけが綻ぶ。

私だってそうだ。綾以外、誰にも靡かないし私には綾だけ、それは生まれ変わっても永劫回歸しても何があっても、私は綾だけを想い恋焦がれ愛する。

それだけは、変わる事のない強力な呪いの様な絶対事項。

「でも、気になる事がまだ一つ」

「何？」

「東が挑発的な態度に出るのは分かったけど……それでどうして千冬まであんな意地になっちゃった感じにその挑発を買っただろうね？」

「あははっ 綾は鈍感だね」

「鈍感？そんな事はないよ……いつもビンビンだから」

「あはは 何それ 綾は鈍感だよ でも……やっぱり、綾はまだそうしているつもりなんだね」

綾に疑問や言葉について笑ってしまい、そのままあまり言うべきじゃない言葉が出てしまい、言葉を抑える事は出来ないで綾には聞けないように言った。

そう言うと思いが当たる点は多々あるものの、問本的には本当に分からないと素振りをして、何かしら綾は考え込むような表情をしていた。

綾は、やっぱりそうしているつもなんだね。
仕方ない……とは、完全に言い切れないけど仕方ないような気もする。

そうしている事で苦し紛れでも現状維持にはなって、そうしているのがある意味での綾の優しさ。
とっても残酷なほどの優しさ。

それに綾には、そうしている理由もあるみたいだし。

私に変に下手に口を出して自覚させるべきじゃないと思う。

こういうのは、自分で自覚してそうであると理解しないと。

綾が自分から自覚して理解するそれまでは、ちーちゃんに更に酷い事をしてしまうことになるけど。

「よしっ！なら、私は何が絶対に綾を手離さない。ちーちゃんが奪ってくるなら受けつ立つことにするよっ！絶対に綾を離さないから覚悟してよ？」

「それは俺もだ。東が嫌がっても離しはしないから覚悟するように」

「うん。お互い様だね」

そうして、どちらからともなく微笑みあう。

いろいろとまだ、大小多少の問題とかはあるけどすっきりとした気分だ。

言いたくないようで本当は言いたくて仕方なかった胸の内を綾に伝える事が出来てよかった。

それに綾に想いや想いの強さも再確認できて、本当によかった。

「あつ天の川だよ、綾。綺麗だね〜」

ふと、窓の外の夜景を見ると天の川が綺麗に夜空に架かっており、そんな言葉が出て釣られる様に綾も窓の外の夜景と夜空を一緒に見る。

夜空には、帯状に見える無数の恒星の集まり一つの星の川が出来ている。

夏から秋の晴れた夜空に最もよく見える七月の風物詩、天の川だ。今日は七月七日の七夕であり、七夕と言えばこれに限る。空は晴れて澄みきっており、綺麗にとってもよく天の川が見える。

篠ノ之神社実家から見ていた天の川も綺麗だけど、ここから見える天の川も篠ノ之神社実家から見ていた天の川に負けないぐらい綺麗。

「わあ〜っ！綺麗だよっ綾。晴れてよかった」

そう喜々とした声を漏らし、私は綾の膝の上で天の川を楽しみながら見る。

何を隠そう私は、七夕に見れる天の川が好きだ。私にとって天の川を見れる七夕の日は、クリスマスやバレンタインデー並みに重要度があつて尚且つ高い。

だから毎年、この時期は七夕の日の天の川を楽しみにしていて。毎年、必ず綾とは私が眠ってしまうまでいつまでも一緒に見ている。

「綺麗だね〜 天の川はいつみても飽きないや 晴れてよかったね
これなら今頃、彦星と織姫は会ってヌルヌルのネチヨネチヨをしているんだろっね」

「いい話をそげぶしなでよ、束。だけど、晴れてよかったよ。洒さい涙い」

雨にならなかつたし、それに俺の姫も泣かなかつたからね」

「むう〜泣いたのは中学までじゃんかつ。流石にもう、この歳になつたら泣かないもんつ。綾の意地悪〜ッ」

言われたくない事を言われて私は、「拗ねているんだぞ〜ッ」感を強調する様半分冗談めかしに綾から顔を逸らしてプイツと別の方向、もう一度窓の外に顔を向けて夜空にかかる天の川を見る。

本当、言われたくない苦い思い出を言われてしまった。

確かに中学に上がる頃までは、七夕の日が雨で雲つて天の川見れなくて泣いて綾や篝ちゃんを困らした記憶はあるけど……

もう、私も成長しているんだからいい歳して見れなくて泣くなんて事はしないよ。

なのに言うなんて酷いよ〜ッ！

そんな風に拗ねた思いを抱きながらも、半分冗談の半分本気で拗ねて天の川を楽しんで見ているとふと、綾が私を見て笑った。

「な、何？」

「いや、天の川を見ている束は楽しそうだと思って」

「子供ばいって思ったでしょう〜ッ？」

「そんな事はないよ。ただ、本当に楽しそうだなっと思ってね。本当に束は天の川好きだね」

「まあね。七月と言えば、私的にコレだし。何より、空一面に宇宙空間を好きな星達を感じれるから好きなんだ」

天の川が好きと言うより、私は天体が大好き。

昔から大好きで、それだけは自分で調べたり勉強して、たまに綾を連れまわしてプラネタリウムに行ったりした思い出は強く覚えていて、天体についての興味だけは未だに尽きてない。

天体が好きという事もあって、昔から宇宙工学を始めとする宇宙関係の権威である奈々師匠の元へ弟子入りして天体の勉強や宇宙工学を本気で学んだんだっただけ。

それに好きだからこそ、あの理由通り人類が大気圏の向こう……無限大の宇宙へと羽ばたける様にと宇宙服、マルチフォーム・スーツとしてISを開発した。

開発した理由としては、もう一つあるけど。

「そうだ。ねえ、綾は今会っているだろう彦星と織姫にもしもなつてしまいそうになったらどうする?」

「一年に一回しか会えなくなったらって事?」

「うん、そう。綾はどうするの?」

「……そうだね。天帝を説得して毎日、会えるように努力する、かな。もしくは極論を言つと、年に一度しか会えない誓いを上手い具合に塗り替えるかな」

「あははっ、綾らしい言葉だね。私も大体は同じかな。私と綾を引き裂こうとするものなんて頭どうかしているんだよ。そんな事をするヤツは皆皆、殴り倒すよ」

「わお〜バイオレンス」

私の言葉に苦笑いを浮かべるしかないといった感じの綾とは反対に私は楽しくて笑みを浮かべる。

天帝を説得して毎日、会えるように努力する、かな。もしくは極論を言つと、年に一度しか会えない誓いを上手い具合に塗り替えるかな。

本当に綾らしい言葉。奈々師匠が言っていた通り、綾は基本受身のカウンタータイプだけはあるね。まあ、そのカウンターが凄いなだけ。

まあ、それは私も同じなんだけどね。言った通り、私と綾を引き裂こうとするものなんて頭どうかしているんだよ。そんな事をするヤツは。

多分、必要箇所の頭の螺子が抜けていたり、根元から折れたりするんだよ、きつと。だから、本当にそんな事をする奴らは私に殴り倒されても文句は言えない、言わさない。

綾の苦笑いの表情を見ながら私は言う。

「だって、さつきも言ったでしょう？私は綾を何があっても綾を離さない。絶対に絶対に。私は綾が好き、好き、好き、好き、大好き、大好き、大好き。愛してる、愛している、愛してる」

呪詛の様に同じ言葉を何度も繰り返して私は言う。

この世でただ一人……本当の意味での他人として、何もかも価値観や理由等を抜いて。

私は綾が好き、大好き、愛している。この世でただ一人、たった一人、誰よりも何よりも深く強く、それこそ狂いに狂い続けるように綾が好きでアイシテイル。

そう、愛している愛している愛している愛している愛している愛している
愛している
愛している愛している愛している愛している愛している愛している
愛している
愛している
愛している愛している愛している愛している愛している
愛している
愛している
愛している愛している愛している愛している愛している
愛している
愛している
愛している愛している愛している愛している愛している
愛している
愛している愛している愛している愛している愛している
愛している
愛している

何があっても私は、綾を離さない。絶対に絶対に。綾の何もかも全て、私の為のもので私だけのもの。

自分でも自分が物凄く狂気染みた事を言っているのも、私自信が狂っているのも理解や自覚もして、何度も言うけど重々承知している。

けれど、こうあるのが私……篠ノ之束だ。人間として……一人間として間違つて壊れて欠けて狂っている事こそが私で私らしい。

同じく綾もそうであり、私達は、『二つの別の欠けた存在』

だがそれと同時に、私達は『二人でやっとなり』になれる、一人間

として間違つて壊れて欠けて狂っている人間。

私が綾に依存しているのも、理解や自覚もしていて、何度も言うけど重々承知している。

けれど、それが間違つていても私はそれを間違いだとは思わない。それは、世間が定義する『間違い』であつて、私にとっては当然である。

だって、私と綾は二人で一人。

常に共にあり、死ぬときは一緒であり、片方が死ななければもう片方も死なない、私達が永劫共に在る限り死如きで離れ離れになる事は決してない。

それこそが私と綾という、一つの『刹那』なのだから。

それでも、依存しているとかにはついては、悪いなとかと申し訳程度には心にもあり秘めてはいる。

言つてそんな風に思っていると、綾は愛しそうに見つめてくれると私の言葉に答えてくれる様に抱き寄せ抱きしめてくれる。

言葉にしなくても綾の想いが痛いほど分かつて、嬉しくて私は綾に体を預け任せる。

「俺も愛している。誰よりも何よりも愛している。絶対に離さない」

「ふふつ。私もだよ。ありがとう、とつてもとつても嬉しいよ。変に不安になつて心配しちゃて、それで綾に今まで迷惑かけてごめんね？」

「いいさ。これから弁えてくれれば。幸せだからこそ不安になるのは当たり前だし、その不安は対価みたいなものだしね」

「対価？」

「そう。幸せな人が幸せを手に入れている時、同時に発生する対価だよ。幸せなほど、大きくなる」

「そっか。対価、か。じゃあ、仕方ないね。払っていかなくちゃ。そして、そうなるのも」

対価……なら、確りと払っていかなくちゃいけない。

それは、どれだけ人として間違つて壊れて欠けて狂つていても絶対に払わなくてはいけないもの。

世界の絶対的に理であり、『何かを得るには同等の代価が必要』というある意味での等価交換にも酷似したものだ。

だって、払わないものにはそれ相応の祝福は受けられない。

払っていくのは大変だろう。不安や心配は一瞬で全てを支配してそれ以外何も考えられなくなる。

だけど、払っていかなくちゃ。払おう。だって

「うん、そうだよ。俺達は今という時を刹那を生きている。いい事もあれば、悪い事も在るし、そんな風に不安になることもあれば、そんな風に心配になる事もある。」

俺達は永遠になる事の出来ない刹那だ。だって、そうだろ？それこそが」

「人間、として当然の事なのだから……でしょう？」

綾が言うとおり、生きていけばいい事もあれば、悪い事も在るし、そんな風に不安になる事もある。

けれど、不安だから心配だからといってそれ以上にその不安や心配

を煽る事はない。

それこそが何でもない、人間として人として当然で当たり前のことなのだから。

だから、私もその幸せの対価を払っていいこと。

煽る必要はない、私にはもう一人の私がいるのだから。

「ああ」

その言葉が当たり前のようで、忘れがちな生き方で自分らしく在られる生き方。

その言葉こそが……いや、その言葉の最終発展系こそが私達の行きつくところなんだろうとこの時思った。

何度も思ってしまったこといのかもしれないけど、この言葉達は刹那を追い求める綾らしい綾の様な言葉だと思う。

「それを不安とかいろいろと抱えながらも生きなくちゃいけない。それがちょうどいい制約。それに本当にダメになりそうなら、しゃーねえなって笑えばと思うよ。いつかはそんな事もあったねって笑って」

「ふふっそうだね」

しゃーねえなって笑えば、いつかはそんな事もあったねって笑うか

……

そうかもしれない。変に肩に力入れすぎたから余計に不安や心配を煽るだけで悲惨な結果を招くことになりかねないし。

辛いことも『しゃーねえな』って笑い流せば、自然とそんなに思い詰めることじゃないのかもしれないと思えるかもしれないしね。

納得した私は俺の胸板で微笑む。

「何だか、遠回りしゃった気がするけど。ようやくまた、駆け抜けた刹那に綾の刹那に……綾に追いつけて横に並んで歩いているよ」

「そっか。それはよかった」

嬉しく思いながら言う綾も同じ様に嬉しく思っているみたいに言った。

ただ一人の女として、駆け抜けた刹那に、綾の刹那に追いつけたと思いたい。

今、捕まえたと思いたい。今、追いついたと思いたい。

それだけが、何にも変え難い私の望み。誰にもいえない、真実の本音。

だから、もう二度と離さない。離されたりはしない。綾の横に並んでどんな時も二人で一緒に前へ前へ歩いていこう。

それに私達は、永遠になれない刹那。

けれど、この至福の刹那を少しでも長く続くようにと、それこそ永遠になるようにとするのは間違っていないと思う。

だから、根気よく努力するのは苦手であまり好きじゃないけど、少しでも長く永遠の様になる様に努力しよう。努力しないものは結果を得れずというし。

一人なら当然、無理かもしれないけど。私には綾がいるからきつとそう努力していけると、努力していくと思う。

そんな風に思っていると、どうでもいい様な事がふと思いつき勢いまま聞いてしまった。

「ねえ……こんな話した後にはアレなんだけど……綾はしたくないの？今夜は二人つきりだから、私としてはいいんだよ？むしろ、したい」

そう聞くと呆れられた顔を一瞬された。

内心は更にもっと呆れているんだろう。

自分でも物凄く呆れられる様な事を聞いているのはわかっているし、それに出来ない事情を分かった上でも、どうしても聞かすにはいられなかった。

けれど、同時に何か失礼な事を思われている気もした。

「アホな事言わないでよ。状況が状況でしょう」

「うう〜分かってる。でも、そんな事言っても綾も溜まっているんでしょう？なら、しようよ。ほら、おじ様達の手紙の事も在るし」

「変態が、自重しろ。と言うか、馬鹿師匠達のあの手紙を間に受けるな。それに束、怯えていたでしょう？」

「……………」

凶星を突かれ私は二の句が告げれなくなった。

薄々感づかれているだろうとは思っていたけどやっぱり感づかれ、気づかれていた。

やっぱり、私はダメダメだな。期待している以上に怖くて仕方ないのに、焦りでもちかけてしまう。

綾は優しいからこんな状態の私とは絶対にしようとはしない。現に今だって気遣って心配してくれている。

だから、申し訳ない気持ちで一杯だ。綾だつて男の子なんだから、そういう事はしたくて堪らないだろうに心の準備が出来てない私のせいで変に期待だけさせて待たせてしまっている。きつと、綾のことだからこれも自分のせいだと思っているに違いない、それが手に取るように分かる。

それに現状の整理も出来ていないし、それにちーちゃんにもまだ綾との事を言えてない。

いつも機会を伺っては言おう言おうと思つてはいるけど、結局いつも言えずじまい。

ダメダメだ、私は。言つてしまつたらどうなるんだろうという、その恐怖とその後の恐怖に怯えて一步も踏み出せずにいる。今こうして頭で分かつていても体がいう事を聞かない。

だからこそ、そんなウチにそんなことをしてしまえばそれこそ、ちーちゃんへの最低の裏切りとなる。

だから、今はいろいろな理由が重なつて出来ない。これも逃げているだけかもしれないけど。やっぱり、したいけども出来ない。

そんな事を考えていたのが表情に出たのか綾は、私を気遣うように言葉を言ってくれた。

「焦る気持ちも分かるけど、焦らなくてもいい。心の準備がまだなら、ゆっくりでもいい。無理させて下手に手を出して、束を傷つけないからね。それに状況的にも危ういからね」

「……そう、だね」

「だから、ゆっくりでいいんだ。焦らず二人でそういう事を迎えられる。俺は束で束は俺、二人で一人となれる一心同体なんだからさ」

そうだ、焦る必要はない。
時間をかけすぎてもダメだけだと、必要な時間は時間を賭けてゆっくり二人でそういう事を向かえればいい。
綾が言う通り、私達は二人で一人の一心同体の存在なのだから。時間も私達にとつて、充分なほどある。
それに焦りは禁物と昔からよく言う。

「そうだね。ごめんなさい……変に焦っててしまつて」

「気にすることはないよ。それも当然なんだから。付き合つていとなるとそう言うことも必要でないと焦ってしまうからね。俺の方こそ、ごめん。待たせることになつてしまつて」

「綾の方こそ気にすることないよ。これは時間がかかる問題だし、謝るならそれはお互い様だよ。今はこうして触れ合えるだけで充分
こんなに風に……ね。んっ」

そう言つて、唇に唇を重ねられキスをする。
深いキスではなく、普通のキス。
だけど、それは甘く甘く。互いを求め合うようなキス。

どれほどそうしていたらうか。
短いように長いようにも思えるほどキスを唇と唇を重ねあひ。
そして、どちらからともなく唇を離すと……綾は少し驚いた顔をしている。

「ええへっ キスしちやつた 今はこれで満足。いつかは、近いうちに営みもしたいししくちやいけなйд。今はこれで。綾が傍に居て愛してくれるだけでいい」

綾の膝の上で微笑みながら言うと綾は、少し驚いた顔から安堵した優しい笑みを浮かべた。

確かに綾と深いところ体で繋がる事は出来ない。

出来ないけども、永遠に出来ないというわけじゃない、今は出来ないけど近いうちにきっと出来る様な気もする。

本当ならありえない日々でもあるのだから、今はこうしてキスや触れ合っているだけで満足。綾が傍に居て愛してくれるだけでいい。私も綾の傍に居て、全力が愛したい。綾と為に何かをしてあげたいと思う。

だから、いまはこれだけでいい。度の過ぎた高望みとは我慢してしないようにしておこう。

そして、愛しそうに見つめられているときゅっと抱きしめられた。綾の抱きしめる力は強いけどそれでいて優しく、安心した私も体を預けて両腕を俺の首の後ろへと回して抱きついた。

数分ほど抱きしめられていると、綾は私が肩から首にかけて腕をかけているのを確認すると、私を抱きしめている腕を背中から腰へと回して、両腕で抱き上げられた。

「きゃあっ!?! な、何?」

突然の事に驚いて小さな悲鳴みたいな声を上げ落ちないよう密着するように更に綾に抱きついて、何事かと綾を見た。

「ごめんごめん。話も終わったことだし。ほら、時間もいい時間となったからそろそろ寝ようと思って。長いこと話していたから丁度そろそろ寝れるかな。束も少し眠たそうだし」

「あつはは、バレてた。そうだね、時間も日ちょっと跨いじゃって
るし、そろそろ寝よつか」

時間を見てると本当に長い事話し込んでいた様で日を跨いじゃって
しまっている。

それを確認し、「そろそろ寝ないと」なんて思うとつつすらとあつ
た睡魔が強くなって眠くなってきた。

眠たくてうとうとしていると、綾は私の顔を見て私を抱えたまま

お姫様抱っこで部屋の布団へと運んでくれる。

恥ずかしい気持ちもあるけど、眠気さのあまりさほど気にはならず、
それ以上に綾の鼓動が聞こえてきてこのままでも眠ちやいそうだ。

私を布団まで運ぶと布団へと降りし、綾も同じ様に同じ布団へと入
り横になる。

二人同じ布団で横になると気分がすっきりした事も在ってか、更に
眠気と睡魔が襲ってきた。

眠たさのあまり、小さく欠伸を手で押さえながらしてをした。

いろいろと綾に話せて気分がすっきりしたのがあってか、寝付けな
いと悩んでいた時のことが嘘の様に今は眠たくなってる。

そんな私を綾は、安心して眠られる様にと頭を撫でてくれると気持
ちよくて、本当にこのまま気持ちよく寝れそうになる。

「にゆうっ……頭撫でられるの気持ちいいよ」

ヤバイ。

頭を優しく撫でられて気持ちよくなって変に敏感になっているせい
か、気持ちよすぎて意識を保つのが限界。

意識は、半分寝かけていねけどそれでも意識を眠るギリギリで保つ
て、目蓋が落ちて細目となっている目で綾を見つめる。

私このまま意識を手放したら直ぐ寝れるのを綾は分かっている様で、
気遣ってくれながらも安心してグッスリと私が寝れるようにと頭を
撫でる手は休めない。

今夜は、本当に気持ちよくぐっすり眠れそう。

本当に今日は、充実して満たされたとつてもいい一日だった。

これも全て、綾のおかげ。やっぱり、私には綾がいないとダメだな。
それを強く再確認して一日だった。

「限界みたいだね」

「うん……そう、だね。おやすみなさい、綾。んっ」

「んっ……ああ、お休み、東」

最後にお休みのキスを交すと、寄り添い合い、抱きしめあい。

私は安心してぎってギリギリのラインで保っていた意識をゆっくりと
手放し、気持ちよく段々と眠っていく。

目蓋は閉じて綾の顔は見えないけど、綾も安心してきつた気持ちよさ
そうな表情で眠りについたのを手に取る様に感じて。

そして、疲れ切っていた私達は、そのまま睡魔に引かれるようにゆ
っくりと眠りに落ちていったのだった。

明日もまた、何気ないけども満たされた刹那が長く永遠に続くよう
に、と祈りを込めながら。

…

第二十九話 ? 束視点(後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第二十九話 ? 束視点。

前書きでも書いた通り、一万越えの長文的な話になりました。

綾君視点の時の様に支離滅裂になってしまったし……

長文になったのは、束さんの心理描写等に変に力を入れて書いたからですね(汗)

表立つては言わないだけで、束さんの頭中では常に論理的な思考的に様々な感情が渦巻いていると思うんです。今回はマイナス思考が強かったですけど

まあ、愛する人を自分のせいどころしてしまうとなれば、あんな考えをしたいと思います。

狂気的な思考は、書いて楽しかったです。

やり過ぎ出とは思いますがね、物凄く狂っていますから(滝汗)

本当にヤンデレなのかな? うん、ヤンデレだよ (自己完結乙)

束さんの心理描写が変に冷静だけで焦っていたりや変に支離滅裂なのは仕様……

のつもりなんですけど、本当に支離滅裂になったのはすみまでした(汗)

変に冷静なもの、頭の中だけでも冷静さを保とうとした名残です。

全然、冷静ではないですけど。

後はマイナス思考なのを強調する考えでした。

女性の心理描写も難しいです。私は漢女であって女性ではないので、本当の女性が書いた女性心理描写を見て、

自分のは漢女が書く女性の心理描写だなと最近、強く感じました。

と言うより、私の小説は全体的に似たような描写が多いですね。読み返してよく思います。修正のしようが分からないのでそのままにしています。

『それで』『そうして』『そんな』等が多いですし……
改善的は多いものの、改善の仕方が分からないとどうしようもないですね。

こんな出来の小説でしたが楽しんでいただければ幸いです。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします
待っています。

次回は、期末テスト編。

イベントとして面白みは薄いですが、

綾君が学園でのある地位に着く為に必要な回ですので、お楽しみに
っ！

第三十話―？（前書き）

前書きでいつも通り、何か書かなくちゃいけない気が強くするけど。
まったく思い出せないし、思いつかない（滝汗）

これも病原菌って奴の仕業なんだ　早く風邪治さないと（滝汗）

それではどござっ！

第三十話？

綾視点

いろいろとあつた臨海学校が終つたから早三週間弱が経つ。

七月も残るところ、後二週間で終わり。学校の学期、一学期は後、一週間で終る。

一学期が終ると、俺は断じて違うが誰もが楽しみにしている夏休みがやってくる。

そうということでは浮かれているのもいいが、その前に俺達学生には、大きな試練が待ち構えている。

「……期末試験、もう直ぐか」

今日も最後の学校の時間となるホームルームをながらそんな事をぼつそと呟く。

そう、もう直ぐしたら期末試験期間が始まる。

いくら、このIS学園が政府設立の特殊国立高等学校だとはいえない、普通高校と同じ様に期末試験or期末試験週間はある。

それこそIS関連の授業がプラスされただけで普通高校の様な普通教科の試験もある。

そして、この一学期の期末試験は俺達学生にとって大きな試練だ。

赤点なるものを取れば先生方との楽しい日々を迎えられ、取らなければ晴れて糞暑いだろう素敵な夏休みを迎えられる。

と言つても、生まれてこの方赤点を取りそうになつた事はあるけど取つた事はない。

取らないように束や千冬にテコ入れされたのが、いろいろな意味で

いい思い出だ。

「そういえば、そうだったね」

「そうだな。もう直ぐだから勉強しないと」

俺の呟きを聞いていたのか、東と千冬が言った。

周りを見渡すとぼーっとしている間にホームルームは終わった様でクラスの子達は帰る用意をしたり談笑をしたりしている。

何となくに聞こえてくる話はほぼ皆、期末試験に向けての勉強の話。真面目だな。

「勉強ね……真面目だね」

「そうだね、ちーちゃんは真面目過ぎるよ。別に勉強なんてしなくても普通、余裕で全教科満点取れるでしょう？」

「それはお前だけだ、東。と言うより、綾はそんな事言っていないで真面目に期末試験に向けて勉強しているのか？」

「真面目かどうかは分からないけど、それなりには」

「それなりについて、お前のことだ。いつも通り適当且つほどほどに適度にだろう？それで前回の中間試験は中学時代と変わらなかったじゃないか」

「まあ、それは……ね」

心配してくれている様な鼻で笑う様な微妙な表情を千冬に向けられ、何とも言えなくなった。

確かに前回の中間試験は中学時代と変わらなかったのは事実。

千冬に言われてしまったとおり、前回の中間試験も通り適当且つほどほどに適度に勉強して結果の成績が中の上ぐらいだった。

だけど、別に赤点も欠点も取ってないのでこの結果でもいいと思うんだけどな。

ちなみに東と千冬の成績は東が堂々で不動の第一位で、千冬がその次の二位。これは中学校時代からまっく変わってない。

「それにだ。今回は夏休み前の大事な期末試験だ。もしも、赤点や欠点を取って夏休みが潰れたらどうする？」

「そうだよ、綾。夏休み潰れたら最悪じゃん。私が言え口ではないけど、真面目に勉強したら？綾はいつも手を抜いてるだけで真面目にやったら余裕で一位二位に慣れるよ」

「だけどね……いつも通り適当且つほどほどに適度に勉強するから、別にそんな気負ってやらなくてもね」

「むう……何か私以上にやる気ないね……あっそつだ」

何か滅茶苦茶失礼な言葉を言って東は何かを思いついたというニヤ付いて表情をする。

「三人で勉強しよう」

「えっ？」

「はっ？」

束らしからぬ言葉に俺と千冬は思わず間拔けな声が出てしまった。

束が勉強しよう？またまたぐ冗談を。

そう思ったけど、束の表情は本気な様子。

明日、いや今日の夜から大雨降りそう……ここ一週間はずっと真夏日並みに猛暑らしいけど。

「珍しいね……束があんな事を言うなんて。どうかした？」

「別に……ただ何となく 本当だよ？それに私も偶には勉強でも暇つぶしがてらにしようかな……ってね」

「そうか。どんな理由にせよそれはいい事だ。なら、俺も少しは腰を入れて頑張ろうかな」

「おおっ！綾も少しはやる気を出した様だね。いい心構えだよ」

「そうだな。動機はアレだがやる気になったくれたのは私も嬉しい。それで束？何処でするつもりなんだ？」

「ん〜そうだね……定番的に図書室近くの学習スペースでいいんじゃないかな？あそこなら人少ないし、クーラーも効いているから綾は暑さで気落ちせず勉強できると思うよ」

そう提案してくる束。

確かに図書室近くの学習スペースならテンポよく勉強ではそうだが。人もすくないという事だから、束も少しは安心して勉強できるかもしれない。

それにクーラーが効いているとの事だから、涼しく快適に勉強でき

るだろう。

前回の中間試験は別に問題はなかったが、高校に入って勉強も今まで以上に難しくなって尚且つES関連の試験まで入ってきた。いつも通りに勉強していたから、少しヤバイかもしれない。

それに今年は夏にいろいろとする事を勝手ながらに計画しているの
で、赤点や欠点を取って夏休みを潰すわけにはいかない。

実技は問題ないけど、今回の期末試験は少し本気で頑張らないと。

「なら、そこにしよう」

「ああ、そうだな。そこならゆっくり集中出来て勉強できるだろう」

「よぉ〜しっ！そうと決まれば、善は急げ。学習ルームへレッツゴ

ー

「ちょっとっ！？束っ！」

「お、おいつ、束っ！引っ張るなっ！」

行く用意が済み行く事が決まると俺と千冬は、束に手をつかまれ手を引っ張られながら学習ルームへと向った。

・
・
・
「あ、綾。その問題の答え違うよ。それはね……こうだよ」

「なるほど、ありがとう、束」

「どづいたしまして〜」

図書室近くの学習スペースにやって来て数分、俺達は机一つ囲んで早速、期末試験へ向けて試験勉強を始めている。試験前という事もあってこの学習スペースに人はいるが、ちらほらという程度で人数は少ない。

そういう事とクーラーが程よく効いていて快適に勉強は快適に出来て、捗っている。

「ねえ？束？」

「ん？」

「束は試験勉強しなくていいの？」

テキストの問題を解いて勉強しながら、ふと気になった事を問いかけた。

ここ来て勉強を始めて数分、自分の勉強しながら千冬はちよちよく俺に教えたり俺が千冬に教えたりしているけど

束は、これといった勉強はせず、しても雑誌流し読みする様な感覚で適当に教科書をペラペラっと眺め読みするぐらいでこれといって勉強をしていない。

他は俺にあれこれと分かりやすく教えてくれるだけで勉強する気配は今のところまるでない。

「いいんだよ 何たって私は天才だからね まあ、することがないだけなんだけどね。今みたいに教科書適当に読んで少し復習する程度でいいし」

「……そっか」

「それに、勉強する範囲は綾やちーちゃんと変わらないから、綾にこうやって教えているだけでも充分立派な勉強になるんだよ」

そう東は、聞きとした声で言う。

それもそうか。相変わらず、東は要領いいな。不器用な俺とは大違いだ。

と言うより、昔から東は試験前こんな感じだったな。元がいいから、大した勉強を慌ててしなくてもいい。

昔は昔で試験前期間でも平気で東は俺の部屋来て、勉強せず勉強している俺で遊んで試験前期間をのんびり過ごしていたのも思い出した。

そう考えると今は昔とはあまり変わらないような……いや、気にしたらそこで試合終了か。

頭の中で納得して俺は、東に見守られながらも勉強を続ける。

「それにしてもこうして三人で勉強するの懐かしいね」

「ははっ、そうだな。こうして三人で勉強するのは、久しぶりだったな」

「そうだね。中学一年の冬の期末試験がいろいろ意味で大変だったのがいい思い出だよ」

「あっははっ そうだったね。あの時の綾は勉強してなくて私とちーちゃんが付つきりで勉強教えたんだったよね」

「お前のせいだがなっ!!!」

束の言葉に反応して語気を強めて言い返すと上手い具合に千冬と言葉が重なった。

昔、赤点や欠点を取らない様、束や千冬にテコ入れされた原因はコレ。

あの時は、確か中学一年の中間試験の結果を見て中の中ぐらいの結果だったので、「少しは頑張らないとなあ」と思い勉強をしようとした矢先。

束に「遊んで〜」と言われ、最初は断って勉強をしようと思ったが、その時だけ束は本当に大泣きして、箒や篠ノ之ご両親までやってきて。

束を泣き止ませ俺の邪魔をしないようにといると手を打ってはいたが意味はなく、結局勉強をしながら束を相手する結果になりその事件は事なきを得た。

けれど束を相手しながらそんな勉強できるわけもなく、出来ても精々一教科だったので、千冬にも教えて貰おうとすると束も参加してきて二人に教えてもらい何とかその期末試験を乗り切った

もっとも、束は相手すると大泣きしていたのが嘘の様に……と言うか、名女優も顔負けな嘘（演技）だったという事を知って、束に説教したのは言うまでもない。

まあ、惚れた弱みなのか演技だったのまったく気にはしてないけど。

語気を強めて重なった俺の千冬の言葉を聞いて、束はニコニコとしておどけた様な表情を浮かべて

「あれ？そうだったけ？忘れたよ〜そんな事」

「はあ……お前という奴は」

「まあまあ、過去の済んだ事をあまり気にしちゃダメだよ。ほら、今の束はちゃんと教えてくれながらも勉強していることなんだからさ」

「そうそう、あんまり過去の気にしちゃダメだよ。それに私は常に進化する存在なんだよ。前みたいな事はないから」

「綾に説教されたくないだけだろうが」

「にははは、バレてたか。テヘっ。まあ、説教している綾は怖いからね」

「はあ……」

相変わらずおどけている束に、千冬は呆れたように溜息をつきながらも勉強している手は止めずに勉強している。

我が彼女の事ながら、千冬には気苦労をかけてしまっている様で申し訳ない。

まあ、束の言う通り束は常に進化する存在、と言っかちゃんと成長して。

今も俺がこんな思考を頭の片隅で走らせながら勉強している真迎えで束は詰らなさそうに教科書を読んでいるのを見ているが限りでは、昔みたいなのは起きないだろう。

起きられてもそれはそれで困るんだけども。

「また、間違っているよ」

「あっ、本当だ。ごめん」

「どうやら集中してないのは俺だけらしい。」

「こんな小さなミスをするとは……もう少し真面目にやらないと。そんな風に雑談等を挟みつつ束や千冬に要所要所を教えてもらいながら勉強を続けていると傍に誰かが近づいているのを感じる。」

「あつ、織斑さん達じゃん」

「お前達か。お前達もここに勉強に？」

「まあ、ね。期末試験も近いから」

近づいてきたのは、クラスの子達だった。

クラスの子達は、以前調理実習の時に束に気軽に優しく声をかけて一緒に実習をしてくれた子達だった。

あの時は、偉く助かって束が人の輪に入れているのを見れてとつても嬉しかったのを覚えている。

不器用ながらもまああいう体験は束には必要だ。だから、ああいう体験をさせてくれた彼女達には感謝している。

「あの……よかつたらでいいんだけど。一緒に勉強してもいいかな？」

「私達あんまり頭はよくないからさ。織斑さん達の様な頭のいい人達に少しでも教えて貰えたらと思ってるんだけど……ダメ、かな？」

「私は別に構わないが……」

「俺の方もいいけども……」

俺と千冬、二人して言葉を濁らし、そして視線の先に束を移す。

束は相変わらずといった様子で、このクラスの子達が来たことすら気づいておらず、それどころか存在や気配自体を認識してない。表情は、相変わらず詰らなさうな表情で、あれは多分束の物だと思っうが天文学か宇宙工学のとっても難しそうな分厚い英文の本を黙々と静かに読んでいる。

「束？」

「ん？何……？」

声をかけるとすぐさま反応して俺の顔を見て、束自身からは気づかないだろうと判断し、クラスの子達が居る事を目配せで知らせた。すると、俺の目配せの視線に釣られて束は彼女達を見たが、彼女達を認識すると何かしらの表情を浮かべていたのから。

ゆっくりと自然な移り変わりで、いつもの様な無感情、無表情の顔付きになり、彼女達の事を認識したのはいいもののどうしているのかは分かかっていない様だった。

「彼女達が一緒に勉強をしたらいいんだけど……いいかな？」

「綾とちーちゃんは何てって答えたの？」

「俺達は別にいいと思っているよ。後は束の返事を待ちなんだけど……」

「ダメならダメでいいんだけど。よかつたら、邪魔にならないようにするから……一緒に勉強してもいい？篠ノ之さん？」

「……………」

問われ、束は無感情、無表情から険しい顔を一瞬してあれこれいろいと深く考えている様で数秒ほどの重い間を経て束は答えた。

「綾とちーちゃんがいいと言っているなら、私も別に一緒に勉強をしても構わない」

「やった〜っ！」

「ありがとうねっ！篠ノ之さんっ！」

「うん」

聊かオーバーリアクションではあったものの彼女達は束の言葉に喜び感謝して、

本当にそっけなく感謝の言葉に短く返事をして束は、机の上に置いてあった教科書や本を空いている俺の右隣にやって真向かいの席を立ち、俺の右隣に座った。

クラスの子達も動き出し、千冬が左隣の俺真ん中の束が右隣という俺達の真向かいに彼女達は座り、先ほどまでのなんちゃって勉強会からなんちゃってが抜けて本当の勉強会らしく感じる。

そして、各自適当に勉強を開始。

束以外の俺達は試験範囲の勉強をして、束は変わらず天文学か宇宙工学のとっても難しそうな分厚い英文の本を読むのを再開して黙々と静かに読んでいる。

「織斑さん……ここ教えてもらいんだけどいいかな？」

「そこか？そこはだな……」

「終わったら、私もお願いしますっ」

相変わらず、千冬はモテモテ、もとい大人気な様でいろいろと聞かれたり質問されたりしている。

それを千冬は、的確に答えたり教えたりして、そうしながらも自分の勉強をしている。

束には劣るとはいえ、流石天才。他人の面倒を見ながらも、抜け目や落ち度なくしつかりと自分の勉強も要領よく器用にこなしている。かく言う俺も聞かれたり質問されたりはするものの、千冬ほど器用じゃないので平行して自分のもと言うのは上手くいかず、どっちか片方だけとなってしまう。

けれど、そんな俺達を傍らに束は一切輪には入ってこず、無感情、無表情、それでいてつまらなさそうに本を静かに黙々と読み続けている。

やはり、人前ということがあって態度は極端にそっけない。悪く言えば、冷淡。

彼女達が来るまでは普通に俺達と話していたりしていたけど、今はそんな事はなく、本当につまらなさそうに本を静かに黙々と読み続けている。

相変わらず、態度があからさまだな。

仕方ない。俺がどうフォローしようとも本人に他人と関わる気がないのなら、これといって打つ手はない。

歯痒く思うが、仕方ない……そう割る切るしかない。

そんな風に思っているとある子が束に話しかけた。

「あの、篠ノ之さん。ここの解き方、教えて欲しいんだけどいい？」

そう聞いたのは、調理実習の時に率先して束に気さくに話しかけてくれて「一緒にやろう?」ともちかけてくれた子だった。その子には、相変わらず下心などといった動機は見え、ただ純粋に「束に聞きたい」という気持ちのみで聞いてくれた様だった。流石の束もこれは無視せず、やはり数秒の間はあったものの、その数秒の間の中にいると考え吟味した様子の束は答えた。

「いいですよ。何処ですか?」

「本当?!ありがとうございます!えーと、ここなだけど……」

「そこはですね……」

束なりの身内（俺達）以外の他人への最上限の接し方なのか、敬語で話し無感情、無表情のままその子に教え始める。束に教えてもらっている貰っているその子は、嬉しそうな表情を浮かべ理解しているかのようにうんうんつと頷いている。

「となります……」

「おおっ!なるほどっ!ここなるんだっ!流石、篠ノ之さん
とっても分かりやすいよっ!ありがとうございます!」

「……………どういたまして」

褒められ束は、変わらず無感情、無表情ままでかなりの間を要してお礼の言葉を返した。

本当に事務的にその子に教えていたが、束は教え上手である。教える態度こそは、無感情、無表情といった感じに不器用で一見す

ると、乱雑に見えるかもしれないが。

それでも束は、教え上手で教えてもらった内容はとつても分かりやすく理解しやすい。

教える態度こそは事務的で乱雑だと思えるが、それは束なりの俺達以外に対する他人とのレベルの合わせ方と協調の方だと思う。

実際俺も今まで何度も束に教えてもらって危機ばいのを乗り越えて来れたので、束が教え上手なのはよく知っている。

束の教えている姿を見ると口元から小さな笑みが自然と零れる。

「ふふっ」

「どうしたの？突然、微笑んで」

「いや、こうして人の輪に入って誰かに何かを教えている束の姿も素敵だなっと思ってね」

「もっ、もおおっ！おだてても何も無いよっ」

「分かっているよ。ただ純粹のそう思っただけのことさ」

「も、もおおっ。まあ、綾が傍にいてこうして綾達以外の人間に何かを教えるのも斬新で満更でもないよ」

「そっか。それはよかった」

「うん。後は、ここで恩でも売っという何かの時に役立て貰おうかと思ってね」

「束エ……腹黒いよ」

「にやははっ
」

そんな会話を周りには聞こえない程度の小声で話していた。

理由は何にせよ、こうして誰かに何かを教えるという建前で俺達以外の人と交流するのはいいことだ。

それに人の輪に入って不器用ながらも誰かに何かを教えている束の姿を見れてとつても嬉しい。

今までは、束に何かを質問したり聞いたりする人どころか、近づこうとする人すら皆無だった。

それは、誰しもが束という“同じ様な天才は二度と現われないであろう”特異点を恐れ憎み、直視を躊躇い忌避を選んでいたので。

だけど、このIS学園に入学して束に話しかけて輪に入れてくれて輪の中で一緒に何かを束としてくれる人がいて、驚いたけど嬉しい。輪の中に入っている束は、変わらず無感情、無表情だけどそれでも満更でもないといった表情をしていてくれるという事もまた嬉しい。

旧世界の既存の法則を塗り替え、新世界を流出《創造》して出来た世界は旧世界と変わってない部分もあるけど。

それでも、前の世界以上に済みやすく居心地はいい。

痛い事を思っているのも、現実から多少なりと目を背けているのも、理解しているけど、そう実感している。

そんな風に日常の何気ない変化と些細な移り変わりを実感した一時だった。

・
・
・

料理や食卓を囲み賑やかに食事を済ます夕食時。

つい三十分ほど前に勉強を勉強を終わらせた俺達は学食で夕食を食べていた。
彼女達を交えた試験勉強は充実していて、いつも以上にたいぶ勉強が出来た。
これでは、期末試験まで数日をきった時間を有効活用してちよくちよく復習がてら勉強すれば大丈夫。

「ご馳走様。先に食器を下げ返してくる」

「分かった」

「了解」

先に食べ終えた千冬は、席を立ち持った食器トレーを返しに言った。
俺と束はまだ、一品ほど残っており、食べ続けている。ちなみに同じものを食べている。

適当な雑談を交えつつ食べ終え、束が千冬が誰かに捕まって何かを話している当分帰ってこないだろう事を分かる。
その隙を付くように話しかけてきた。

「ねえ、綾？」

「ん？何かな？」

「あのね……私と綾とでテストの点数で賭けしない？」

「賭けねえ……」

賭けと言われ言葉を濁らす。

言葉を濁らせた理由、それはテストの点数で束に勝てる見込みがないから。

よくって動転の引き分け……それは、試験後帰ってくる束のテストの点数がいつもオール百点だからだ。

常に筆記実技問わず全教科満点というマンガやアニメ、ゲームとかに出てきそうな点数を取る相手にどうか勝てと。と言うか、これはデキレースだと思うんだけど。

だから、俺の返す言葉一つ。短く、素早く、分かりやすく、せーの。

「却下」

「ええ〜っ！何でっ!?!」

短く、素早く、分かりやすくをもっとうに言葉を返すと束は何でか分かっていないという表情をしている。

声色からして明らか分かってるよ、この子。

口元にも小さな笑みを浮かべ、ニヤニヤとしているし。

なら、更に分かりやすく答えてやろう。デキレースは却下なのは却下だ。

「勝てる見込みが皆無だからに決まっていますからです。第一、束は自分のテストの毎回の点数分かっているよね？始めから結果が見えているデキレースみたいなのをするつもりはないよ」

「そんな事かあ〜それなら問題ないよ　ちゃんとルールは考えているから」

「ルール？」

「それはね……」

ニヤニヤとして笑みを浮かべながら束は、言葉に溜めを交えて言う。
ルールは、こうだ。

1、俺が全教科、八十五点以上を取れば俺の勝ち。

2、引き分けになった場合は、俺の勝ち。

3、勝者は敗北者に一つ限度をこしてない命令が出来る

と言う内容のルール。

束なりに妥協して俺の事を考慮してくれてはいる。一応。

これならギリギリ、本当に何とか勝てる見込みはある。

全教科、八十五点以上はかなり厳しいが取れないことはない、それはもう、かなり頑張ったらの話だけだ。

「つと言った感じのルールなんだけど。これならどうかな？」

「このルールを束は確実に守れるか？」

「もちろん 守るよ 賭け事のルールは守らないと成立しないからね」

「なら、その言葉を信じるよ。受けてたとう」

「やった〜っ！負けたときは、ちゃんとルールを守ってね？」

「分かっているよ。でも、ちゃんと限度は守ってね？」

「分かっているよ」

売り言葉に買い言葉の要領でこの賭けを買った。

これは何としてでも勝たないと。負けた時の命令が怖いし。

部屋に早速、猛勉強だ。これは負けられない、負けるわけにはいかない。

「うっふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

「

けれど、隣にいる不気味な笑い声を聞いて不安がマッハになったのは確定的に明らかだった。

・
・
・

期末試験答案用紙返却日。

今日で賭けの決まる重大な日。

この期末試験一週間頑張りに頑張りまくった。

それこそ、期末試験が終る最終日ま部屋には早く戻って、日が変わるまで、毎日勉強して。

試験期間は毎日朝五時頃には起床してその日の試験の勉強をした。

こんなに頑張ったのは何時振りだろうか、多分生まれて初めてだと思っ。こんなに頑張ったのは。

試験も確りやった。解答欄は全て埋めて、答案の見直しも何度もして、その時はバッチだった。

手なんか抜いてはいない。そんなものこの後に続く生涯一度たりともしない。そのぐらいの意気込みで期末試験を頑張った。

頑張った……頑張ったと言うのに。

「なん……だと……っ!？」

最後の教科の答案用紙の点数を見て俺は、驚嘆の声を小さく漏らす。何度も答案は見直した、その今日に映る点数も何度も見直した。けれど、点数が変動するなんて事は現実問題ありえない。頑張ったのにこれとは……これが現実か。

「ふふんっ どうかしたの？」

驚嘆している俺に気づいて束は、わざつとらしく聞いてきた。俺に向ける表情は、口元がニヤ付いており、勝ち誇ったような表情をしている。何か若干ながらムカつく。

「最後の教科の点数はどうだった？」

「その……えーと、だね……」

「モジモジしているなんていつも綾らしく漢らしくないぞっ さあ
さあ、YOU!言っちゃいなYO!」

「84点です」

ニヤニヤと勝ち誇った笑みの顔をずいずいっと近づけられ大人しく素直に白状した。

84点……これが本日最後に帰ってきた英語の点数だった。後一点足らなかつた。惜しい惜しすぎる。でも、これが現実としてある結果。

他の教科は全て八十五点越えしているのに……赤で跳ねられている

のも本当にちよつとした些細なケアレス・ミス。

「ありゃ〜 後一点惜しいね」

「そうだね」

変わらず口元がニヤ付かせ、勝ち誇ったような表情をしている束に
対して、嘆息に返答する。

けれど、そんな俺の態度は気に止めず、確定した結果を確信して楽
しそうにしている。

ちなみに束は筆記、それからIS稼働等の実技試験もあわせて全教
科オール満点。

優等生……天才の名に恥じぬ結果だ。本当にマンガやアニメ、ゲー
ムとかに出てきそうな点数だ。

と言うより、第一凡人である俺が天才である束に叶はずない。そ
れに最初からデキレースだったものがあんなルールで変わる事はな
い。

という事は……はめられたのか？妥協案と考慮されたルールを餌に
して、それにまんまと釣られ乗せられて賭けを受けてしまった。

いや、はめられたというのはおかしい。どちらかと言うと、はまり
に行ったと言った方が正しい。

と言うより、こういうことで束に勝とうとする時点で間違っている。
本当に上手く乗せられたものだ、関心してしまう。

だが、はめられたというなら、束の事だ。こうなる事を計算して導
き出して上手く裏の意図を隠して、賭けを上手く提案して来たに違
いない。

多分、そうなんだろう。事実、隣の席にいる束は変わらず、口元が
ニヤ付かせ、勝ち誇ったような表情をしている。

けれど、どんだけ言い訳がましいことを並べても、結果は変わらないし、俺が賭けに受けて経ったという事実も変わらない。だとしてたら、俺に残されている選択肢は一つ。

「どうする？一点だけだし、私の負けでもいいんだよ？」

「それには及ばない。たった一点だけでも、約束の八十五点には辿りつかなかった。なら、負けは負けだよ。負けを認めるよ」

「ふふんっ そっか〜 素直素直っ 素直な綾も好きだよ」

「どういたしまして」

可愛らしくウインクされながら言われると、ついそっけなく返してしまった。

はめられて負けしまった事に対してなのか、それしも負けたくないという男の未練がましい思いからなのか、ふつつつと負けたくなかったという思いが湧き上がっている。

だけど、どう悪足掻きしようが結果は変わらない。負けは負けであり、その事実を認め受け入れよう。

こんなところで悪足掻きしても見っともないだけで、漢が廢るってものだ。

それに下手に悪足掻きして後で束からくるだろう命令の危険度に拍車がかかったら、それこそ後の祭りだ。

「なら、あとで負けた罰ゲームするから。命令、楽しみにしててねっ」

変わらず勝ち誇った様な満面の笑みの束を見て、心なしか肝が冷え

てきたのを感じる。

どんな事を言われるんだろつか？ともかく、本当に怖いです。

・

放課後。

期末試験期間は、いつも午前中で終る。

今の時間帯は、昼の十二時近く。

なので、とりあえず俺達は少し早いかもしれないが食堂でお昼ご飯を食べ終え。

各自の部屋に一度戻る為に学校の渡り廊下を歩いていた。

「今回の期末試験、綾は本当に頑張っていたな」

「まあ、ね」

「いつもこのぐらい頑張ればいいものを」

「それは流石に無理だよ。今回も頑張つての最高成績だったからね」

流石にこれを続けるのは、無理ではないけども、キツイ。

特に今の精神状態では、そう思ってしまう。

今回頑張ったのだから、束との罰ゲーム的な命令権がかかっていたからであって、そんなにいつも頑張れるわけじゃない。

こう思い返してみると、とっても現金な理由で頑張っていたんだな。少し反省。

「でも、ちゃんと頑張った結果は出ているじゃないか。ほら」

そう言っって千冬が指差した方向を見ると、そこには空間ディスプレイ

いで空中投影されていた。
その空間ディスプレイには、今回の期末試験の順位が映し出されており。

1位、篠ノ之束

2位、織斑千冬

2位、神山綾

と、空間投影された空間ディスプレイに今回の期末試験の順位が映し出されていた。

2位が二人いるが、俺と千冬の今回の期末試験テストの合計点数は同じだった。

だから、名前の順番で千冬の後になっているだけだ。

「凄いいじゃないか。学年で二位なんて。綾もやれば出来るということだな」

「だね。綾はやる気がないだけで。私が前言ったとおり、やっぱり綾は真面目に頑張ってたら余裕でそのぐらいの順位にはなれるんだよ」

「……そうだね」

「何だ、あまり嬉しそうじゃないな？」

「そ、そんな事はありませんことよ？」

「言葉が変だぞ？おい」

「あー気にしないで。この順位見てつい動揺してしまったただけだから」

「そうか。なら、いいが」

心配してくれている様で何処か訝しげに俺を見て言う千冬。

動揺して変なことを言ったのは間違いではない。

今まで中の中又は中の上の成績だった人間がたった一回、かなり頑張ってみたら期末試験の順位二位という上の上に食い込む事が出来た。

そのことに驚いて動揺しているが、これだけじゃない。

やっぱり、束が勝ち取った罰ゲーム的な命令権の命令内容がどうしても気になってしまい。

二位という凄い成績を取ったのに素直には喜べず動揺みたいなものをしてしまう。

気にしないでおこう、割り切ろうと思っても、どうしても気にしてしまう。

あれこれ考えると……更に怖くなったきた。

やっぱり、俺はヘタレで屑だ。

そんな事を思いながら渡り廊下を歩いていると丁度、俺の部屋と束達の部屋と別れるところにさしかかった。

「じゃあ、とりあえず。また、後で」

「ああ、そうそう。言い忘れていた。私はこのまま部屋に戻って

出かける用意したら少し出かけてくる」

「えっ……？……何処に……？」

「クラスの子達に誘われて、レゾナンスだったか？そこに買い物に行く事になっているんだ。お前達の付き合いも私にとっては大切だが、クラスメイトとの付き合いも必要だからな」

「あっ……そうなんだ」

「そう言うことだ。だから、東。毎度言うが、私がない間に綾に変な迷惑かけるなよ？」

「変な迷惑って何だよ！っ！ぶーっ！毎回、言わなくても分かっているよ。この天才東さんの事を信じなさいっ！」

「信用ならんから言っているだ」

「ひどいっ」

千冬 of 言葉におどけながらショックを受けた様な表情をしている東。千冬が出かけると聞いてから、頭の中の変な警報音が鳴り止まない。それと悪い悪寒みたいなものも収まらない。早いうちに身の危険が迫ってきたと感ずるのは気のせいなんだろうか？いや、きつと気のせいだ。気のせいであってほしい。

「まあ、何かあれば鉄拳制裁という愛の鞭を与えるだけだな」

「わおっ！ちーちゃんってば、アクレッシブっ」

「何とでも言ってる」

そうとだけ言い残すと千冬は俺達よりも一足先に自室の方へ戻って行った。

そして、その場に残ったのは、何とも言えない微妙な変な顔をしている俺とおどけてニヤ付いた笑みを口元に浮かべている束。

奇妙な空気がその場には漂っている。そう感じているのは俺だけはいけど。

「んじゃあ、用意したら後で綾の部屋に行くから……命令、楽しみにしててね」

「分かった」

楽しげに噛み締めて言う束に対して俺は努めて冷静に返事をした。けれどこの時、何故だか死刑宣告を待っている囚人の気持ちがいかに少しかつた様な気がしたのだった。

…

第三十話―？（後書き）

期末試験編、前編でした。

今回は、読んでいる方がおもしろいと感じたか不安です（汗）
自分的にはそんなに面白みが薄いと思っていますからです。

前回の後書きの最後や活動報告で予告していた通り。

期末試験編は、綾君が学園で“ある地位”に突く為に必要な回でした。

ある地位は、基本的に文武両道ではないと就けないと思っていますから（古い）

それに原作開始編では、あのキャラとの絡みのためと布石となっています。

東さんは私の中で学力チートだと思っています。

実技筆記問わずにオール満点の人なんか聞いたことありませんから、それを平然取る東さんっ！、そこシビつれるツツ！憧れるうっ！

それでも綾君達以外の人間に対する態度は極端。

まあ、接している分はいいと思うんですね。表情や態度は兎も角、そろそろ、東さんによく話しかけてくれる子に名前を付け方がいいかな？

いつまでも『ナナシノゴンベ』ではあんまりですし。

ただあまり言い名前が思いつかないという……

何かのゲームキャラからありがたくお名前を拝借して付けようかな？

そして、点数の合計を賭けての賭け事。まあ、結果は見えているんですけどねw

いくつか束さんが妥協案を出して、綾君がそれを呑んでしまいました。
いくら妥協分を出しても束さんは計算しているので、デキレースである事には
変わりはありませんwwww結果は見えすぎています。

実際、一点差でしたし。

でも、負けは負け。認める辺り、綾君は潔いです（諦めとも言いますけどww

けれど、学年二位にはなれたので“あの地位”につけますっ！

けど……千冬さんも出かけてしまい、束さんと二人っきりになって
しまい……

さあ、綾君の運命……体の安全はいかにっ！？

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘or誤字脱字報告を何卒お願いします。

第三十話―？（前書き）

某エミヤ的なシート『いくぞ読者の皆様方。エロスと理性の貯蔵は充分か』

という感じで今回は皆様方（？）が待ちに微エロ回ですww
いつもとはテイストを変えてみましたので、これはこれで楽しめる
はずですよ！

力作をどうぞッ！

第三十話？

東視点

部屋へいろいろな状況に備えての用意を取りに帰った後、私は上機嫌で綾の部屋へと向っていた。

こんなに早く、あの罰ゲーム的な命令を言えるとは思っていはなかった。

別にちーちゃんが今日出かけるのは計算に入れてなく、もつと後になるだろうと思っていた。

もつと、綾を考慮した妥協案のルールを出せば綾は賭けに乗ってくれて、賭けには私が圧勝するのは計算づくだったわけだけど。

それでも、急に予定が前倒しみたいになっちゃったから、命令の内容がまだ思いついてない。

……かと言って、考えすぎて決まらずに無しになるのも勿体無い。まあ、気楽に考えよう。

そんな事を考えていると綾の部屋へと着き、とりあえずノックした。

「私、束だけど、入っていい？」

「うん、いいよ。どうぞ」

開けて貰って部屋の中へと入っていく。

部屋の奥まで行くと、部屋の様子を何となしに見渡す。

久しぶりに来た綾の部屋は懐かしくて安心して、相変わらず丁寧な掃除が行き届いていて綺麗。

試験勉強を夜遅く登校ギリギリまでして教科書類が散乱している私達の部屋とは大違いだ。

「えーと、それで……どうして来たのかな？」

「またまた〜 分かってるくせに」

今日の綾は何処か変で往生際が悪い。

それはやっぱり、私の策に上手いこと乗せられてはまってしまった事が綾にしてみれば何処か罰が悪いんだろうと私は思う。

負けは負けと漢らしく認めては見るけど、それでも上手く乗せられてはめられて負けてしまったのは悔しいんだろ。

こう往生際が悪くて無意識に悪足掻きをしている綾はいつもとは違って、珍しくて子供っぽくて可愛い。

「な、何の事かさっぱり……」

「むう〜往生際が悪いっ！えいっ！」

「うあああッ!？」

綾の後ろにベットがあるのを確認して、ベットの方へと突き倒して綾を押し倒した。

そして、綾を押し倒すと私は倒れている綾の上へと馬乗りになって座る。

その一瞬の出来事に綾は驚いている様なそれでいて何処か覚悟を決めている様な顔をしている。

「束……何を」

「何って今から罰ゲーム的な命令権を執行するんだよ」

「マジでか……」

「マジです。それでは早速、勝者の戦利品である敗者への命令を言い渡します」

噛み締める様にそれでいながら焦らす様に綾に言い渡す。

その言葉を聞いて綾はゴクリッと唾を飲み込んでいる。

いつも、こういうシユチュエーションではやらればなしかけど、たまに逆の立場のこういうシユチュエーションもいかもしれない。どうも性に合わなくて少しばかり違和感を感じるけど。

「命令の内容は……お夕食までの時間、綾は私の命令には絶対服従で自由にさせてもらいますっ!」

「一つのはずなのに二つあるよ?それにトンデモない事を言っじゃないだろうね」

「トンデモないことなんて言わないもんっ。それに二つじゃないよ、一つだよ?ほら、“お夕食までの時間綾は私の命令には絶対服従で自由にさせてもらう”って言う一つの命令だよ」

「わあ〜トンデモ言い分。限度は、越えたらそこで命令権は消滅なのは分かっているんだろうね?」

「もちろん 分かっていますよーっ まあ、その限度は私が決めるんだけどねっ 勝者である私がルールだっ!」

「えっ?何それ、怖い」

「だから、つ敗北者である綾は黙っておとなしくして勝者である私に絶対服従で自由を捧げなさい。心配してなくても、“あの誓いは絶対に守るから安心して”」

前半おどけて冗談めかしに言いながらも、後半は綾が思っているであろう不安に対してちゃんと私もその事は理解してると言い聞かせるように真面目に言う。

すると、綾は後半の言葉に安心して様子で私の行動に向けていて警戒が緩みその隙を付いて私は素早く行動に移る。

手馴れた手つきで私は、綾の制服の上着やワイシャツのボタンを外していき、これまた手馴れた手つきで制服の上着を脱がして、ハイシャツだけの肌蹴た姿にする。

「ちよつ！束つ！？」

「お静かに。敗者は大人しく勝者に身を委ねなさい。抵抗は許さないよ 絶対服従なんだから、ねっ」

「ま、待っ！？」

「待ちませ〜んっ さあ、綾を感じさせてねっ それに漢なら、どっしり構えときなさい」

最後に言い聞かせる様に言う。と今だ抵抗の糸口を探している様子の綾に対して、本格的に行動に移る事にした。

覆い被さるようにして、まずそつと肌蹴たワイシャツから覗く鎖骨の少し下辺りにまずそつと口付けした。

「ん……」

「…………ッ…………」

口付けすると綾の体がビクッと跳ねた。

それが私にしてみれば面白くって、閉じていた唇を開き、舌でねつとりと鎖骨の少し下辺りの素肌をなぶる。

するとまた、綾の体がビクッと跳ねて、ゾックつとしているのが手に取るように分かる。

私はその反応をもう一度、見たさに口付けている所とは、別の所に口付け、鎖骨辺りを舌で優しくなぞる様になぶる。

「っん、あっ…………んっん…………っ…………ん…………」

綾が小さく喘いだ。

痺れるような感覚を全身感じて、思わず堪えていた声が漏れてしまったとろけるような甘い声の喘ぎを漏らした。

やばい。

聴きたい

もつと聴きたい。

頭がクラクラしそう。

やみつきになりそう。いつも綾が私を苛めて喘ぎ声を聞いて楽しんでいる気持ちは今ならよく分かる。

好きな人の喘ぎ声って、こんなに『クル』ものなんだって、初めて知った。

特に綾が漏らさない様、必死に堪えても、漏らしてしまっている姿はもつとくる。

そして、ふとある事を思い出した。

そういえば、綾にも身体で触れられたら弱い部分があったんだっけ。

そう思い出した私は、覆い被さって鎖骨辺りに口付けている状態から、うなじの中心部分の少し下辺りにそっと口付けをする。

「あっ…うう、っ…うんっ！」

今度は堪える暇もなく、喘いだ。

その喘ぎ声は可愛らしい女の子の様でぐっとした。と言っか、やばい。鳥肌が立った。

綾の身体での弱点はここ。

うなじの中心部分の少し下辺り…めちやくちゃ細かい限定された弱点部分だけ。

特にここが弱いつてだけで、うなじ辺り、首の後ろ辺りが弱い。この弱点部分は、昔無理やり見つけ出した。

綾は私の弱いところを沢山知ってるから、こっちも少しくらい知ってないと、不公平だから見つけ出した。

それにしても綾の喘いだ今の声も今の表情も、とっても可愛い。

いつもの表情と違って、いつも反応も違う。いつもとは違う、綾を見る事が出来て何だか新鮮で嬉しい。

もっと、たくさんいろいろな綾を見て知って、私の頭の中を埋めて欲しい。無駄な思考が出来ないぐらい、綾だけで全部全部埋め尽くして欲しい。

そして、もっと綾の喘ぎ声を聴きたい。

「東、ちょ、そこは、やめ……」

「…」

確認する様に言って、再び綾の弱いところに優しく何度も口付けを甘くキスをする。

そうすると、弱いところだけに流石の綾は喘ぎ声を堪える事は出来ず、喘ぎ声を漏らす。

「はっ…はぁ…あう…」

「ふふっ 綾、可愛いっ」

「その状態で…んっ…喋らないで…っぁ」

喋りながら、口付けている所をはむはむすると、綾の身体がビクツとした。

やばい、やばいよ、可愛い。私の行為が感じてくれている綾の表情は、本当に可愛い。

いつも私は攻められて苛められてそれはそれで嬉しくて気持ちいいけど。

いつもと形勢逆転している今の状況もこれこれで楽しいし、綾が感じてくれている事が嬉しい。

そして、体勢が少し辛くなったので起き上がって再び綾に馬乗りになって綾を見る。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

と肩で息をして乱れた呼吸を整えようとしている。

見下ろす綾の光景は本当にグッとくる。

服装はワイシャツだけで、しかも肌蹴て顔を紅潮させ、「はぁ…はぁ…」と肩で呼吸している。

これでグッとこない女はいないだろう。まあ、こんな綾の姿を見れるのは私だけの特権だけだね。

「……今の束、とつてもいい笑顔、ニヤニヤしているよ」

「え？」

私、笑ってた？

言われて、我に返ってみると、確かに私は笑っているかもしれない。そして、頬が緩むのを感じた。

本当に私、綾にベタ惚れなんだな。

綾を想うだけで、顔が強張っていても勝手に緩んでしまう。

それは綾も同じで、私の下にいる綾も愛おしそうに私を見つめてくれている。

見詰め合う視線と目に熱が籠り、お互い同時に微笑み合う。

綾も私も相手の事を互いの事を愛し合っている事が強く強く確認、実感できる。

体勢は変えず静かに見詰め合っていると腕を掴まれ、ゆっくり優しく綾の方へと引つ張られてると。

私の腕を掴んでいる腕とは別の腕がクッション代わりに背に回ってきて、景色が反転して押し押されたのを理解した。

「ふふっ」

「……あう」

マウントポジションを取られ、握っていたはずの主導権も取られ、何処か黒さを孕む笑みで微笑まれると、つい全身がゾクゾクとする。

この綾の表情で見つめられると何も抵抗できなくなってしまう。されるがまま。むしろ、抵抗なんかしたくないされないがままでいたいとさえ思う気持ちが無処かにある気がする。

私が私のせいで綾を待たせているのにも関わらず、やっぱりこの瞬間も何処かこの先を期待してしまう。

だけど、そこは理性と我慢が抑えてくれ“あの誓い”もあるから何とかなった。

それに先当分お預けになってさせてしまっけども、綾を求めるぐらには綾に求められるぐらいは出来る。

ああ、綾にめっちゃくちゃにされたい。いつもの様に ううん、いつも以上にもっともっとたくさんいじめてほしい。

もっともっと私を満たして欲しい。そして私も綾を満たしてあげたい。

すると、そんな考えを綾は察したのか分からないけど

「さあ、ご命令をどうぞっ?」

「命令……?」

「敗者である俺は勝者である束に絶対服従で束に自由を捧げているんだ。絶対服従だからこそ、俺からは何も出来ない。けど束の命令通り、望む通りには何でも出来る」

「あ……」

言われて少しだけハッする。
少し忘れていた。

そうだ綾は、私に絶対服従で自由も捧げている。
主導権こそは綾に渡してしまったものの、まだ命令権は私にある。
これは変わりなく、これさえあれば綾をある程度は自由に出来て、
命令を出来る。

それを綾は、あえて回りくどい言い方で教えてくれた。

なら

「じゃあ、キスして私をむちゃくちゃにして。むちゃくちゃに苛めなさいっ！」

「ふふっ、了解しました」

命令権はあるからこそはあえて強気で言ったものの。

内容は、強気とは反対の様なもので綾は微笑むとゆっくりと唇にキスしてくれた。

始めは軽く唇と唇が何度も触れ合う程度のキスで次第に激しくなっていく。

「んっ…ん…んんっ…っ」

口の中では、綾の舌に私の舌を好きなように絡められている。

そして絶え間なく激しく、互いを舌を激しく絡めあつ。

「ん、んうんっ…ちゅっ…」

激しく舌を絡めあつ度に脳髄は痺れ、脳内麻薬が大量分泌され痺れている脳髄を気持ちよく溶かしていく。

もう、私達の口の中はすでにどちらのものかもわからない甘い唾液で満たされている。

ああ、だめ…何も考えられなくなりそう。

そのぐらい甘く官能的な深い深いキス。

このまま脳髓だけじゃなく、全身甘い疼きで溶けて綾に全てを委ねてしまいたい。

ああ、それがいい。綾を攻めていたのもあれはあれでよかったけど。やっぱり、こうして受けになって弄られている方が私には性にあってる。

綾に愛でられながら弄られてキスされていると思うだけで、身体が僅かにゾクゾクしているのが分かる。

キスしているだけで感じてるよ。変な話、アソコが……

そんな私の様子に気づいた綾もとっても嬉しそうでいつの間にか抱きしめられていた力が優しいながらも強くなっている。

何と言うかこれじゃあ、賭けしての命令権がただの建前となって綾も喜ばして命令権の意味がないような気がするけど……まあ、いいか。

二人、こうして同じ刹那を共有できてお互い楽しんで喜んでいる事だし。

「んっ、ん……綾お……何かね、頭の中ふあふあして気持ちいいの
っっ」

「そっか……それはよかった。なら」

「うんっ もっと、気持ちよくして？」

「かしこまりました。お嬢様」

口調こそは明るくおどけているものの浮かべている笑みは綺麗ながらも何処か黒くて。

私を見つめて離さない綾の瞳から私は目を逸らせ事はせず、甘い痺れでぼーっと溶けて頭の影響を第一に受けているトロンとした瞳で綾を見つめた。

私のお願いに綾は今度、唇にはなく耳たぶに最初口付け、軽く優しく加えてはむはむしてきた。

「ひっ、やっ、あ……ひぁ……あっ」

耳たぶをハムハムされると私は思わず、声だけ《……》抵抗してしまっただ。

それを綾が聞き逃すわけなく、顔をあげ呼吸を乱し肩で息している私を見て口角を吊り上げニヤッと黒い笑みを浮かべて。

「何、「やっ」っていつてねのかな？ん？嬉しいくせにね」

「だぁ……っ……て……耳は、ダメ……ッ……んんっ……なッ……の……っあ」

耳から伝わってくる小刻みで心地いい快感に酔いしれてしまい、言葉が上手く言えない。

何を言っている事は把握しているつもりだけど、呂律が回っているか不安だ。

思考が上手く纏らない。気持ちよすぎて頭の中がやっぱり、気持ち逝くふあふあする。

上手く纏っても、頭の中は綾の事だけで一杯。賭けや罰ゲームや命令権なんてついて思考する隙はなかった。

「あっ……はあっ……いい……っ……ひゃっ！？……んああっ……舐め、ちや……だめえ……」

耳たぶをはむはむされたたり甘噛みされた後に耳を舌先で優しく舐められる。
はむはむされたり甘噛みされたり舌先で舐められたり、と様々な刺激が身体を襲う。
一つ一つ身体に襲ってくる刺激と快感に反応している私を楽しむ様に更に攻め立ててくる。

「きゃっ！ダメ…！いつちゃう…！あうう…いく…あ…あ…！」

始めに発した言葉とは裏腹に、上半身を後ろへのけぞらせ。快楽が絶頂に達した私はビクンッと激しく身体を痙攣させ、イッた。この時、あまりの快楽に頭の中が真っ白になって飛んだ。

そして少しした後私は、はあはあと肩で呼吸しながら、絶頂に達したからなのか。
上手く身体に力が入らないので、今は無理に力を入れず、ベットに深く背を預ける。

耳を攻めるなんてズルイ。
うなじ辺りを攻めていた私が言えた台詞じゃないけど。
やっぱり、耳は私の弱点で感じやすい。だから、攻められるとイッてしまう。

少しだけ落ち着いた頭でそんな思考をすると、うう…また恥ずかしくなってきた。
顔が熱い。真っ赤だ。

「もおお…綾たらっ…」

「愛しのお嬢様のご命令に従ったまでの事です。苛められて嬉しか

ったのでしょっ？」

「そうだけど……」

恥ずかしくて言葉をぼかす。

苛められて嬉しかったし、気持ちもよかった。

けれど、また私一つだけ気持ちよくなってイツちゃた。

私だけが一人満足してしまっただけみたいで、そこが少し悔しい。

「ごめんね、また私一人、イツちゃって」

「気にしないで。謝ることなんてないよ」

「だけど……っ！私にも、綾を綾の大事なところを気持ちよくさせてほしい」

「ありがとう、その気持ちだけ受け取っておくよ。でも、そんな事されたら、それこそ抑えが利かなくなるから今は」

「……うん」

私を押し倒した状態のまま、「我慢」と私や綾自信にも言い聞かせる様に私の唇に人差し指を当てていた。

やっぱり、我慢させてしまっ。

悔しい。いざ一線を超えるとなると震えてビビッとしてしまっ、臆病者な私である事が悔しい。

けれど、悔しいからといって無理に勢いだけで越えようとも思えない。

それは、“あの誓い”もあるんだけど、私を『大切にしたい、何時だって松から、無理はさせたくない』という綾の優しい気持ちを踏みこむ様な真似は出来ないし、絶対にしたくない。それでも

「……溶かしたいよ、綾のことを」

「……」

「心も、身体も、全部」

「……」

「綾の為なら何でもどんな事でもしたい。してあげたい　そう私
が思っている事は忘れないでね」

「もちろんさ。忘れないよ」

「ありがとう」

自然と素直に感謝の言葉が出た。

そして、私を押し倒してマウントポジションでいる綾の背中に手を回してこっちへ抱き寄せる。

すると、綾は私の気持ちを汲み取ってくれてか、私に必要以上に体重がかからない様、覆い被さるように抱きついてくれた。

そんな綾を私は両腕で包み込み様に抱きしめ、顔を至近距離で近づける。

ねえ、もっと伝わって。

深く繋がれ合えないのなら、それ以外の方法で感じてほしい。
不変な至高の刹那の様にいつまでも、私は綾の事を誰よりも何よりも深く強く愛している。 という事を。

「……………」

「……………」

何の前置きも脈絡もなく、どちらともなく、唇が重なり口付けを交わして、舌が絡み合う。

「綾、大好きだよ、愛している」

「俺も。大好きだ、愛している」

「ふふっ 幸せ」

永遠　変わる事のない至福をこの刹那に願う。

少し不器用で、変に鈍感で、意地悪で、変なところで鋭くって、そして世界一、優しい私だけの人。

そんな綾が、私は、誰よりも何よりも、大好き。

…

第三十話―？（後書き）

というわけではいかがだったでしょうか第三十話 ？。

と言うか、微エロ満足して頂けましたか？

私はそれが気になって夜も眠れません。昼間寝ているけど。

力作ですけど。やっぱり、自分的に第二十一話 ？の出来がよ過ぎ
て。

比べると、やっぱりもうひとつだなあ〜と誤ってしまいます（苦笑）

今回は前書きでも書いたとおり、いつもとは少しテイストを変えて
みました。

序盤からいつも束さんは攻められて喜んでいますが。今回は束さん
が序盤攻めました。

攻め側の束さんもいいでしょう？偶には。罰ゲームっぽいものなんだ
し。

でも、やっぱり後半は攻められました。

いや、ここでエロイ束さんを出さないで。

読んでいる人は興奮しないなあ〜と思ったので。

正直、受けの綾君を書くの辛かったただけなんです。

男が男の責められている姿と喘ぎ声聞いても興奮しないでしょう？

まあ、ゲイ的な人やバイ的な人なら分かりませんが……

束さんの乙女チック心理描写にも力を入れました。

最近、女の人が書いた女の子視点のエロ話を読ませていただいたの
で……

女の子の心理描写を上手く表現しきれていたら嬉しいな。

最後は綺麗に纏めました。

ちなみにこのはなし作るのに書いた時間だけで二日かかっています。書くだけでそれだけ時間かかるって、やっぱり遅筆だな。

兎も角、東さん視点の微エロ。

ご満足していただけたら嬉しいですっ！！

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

100万アクセス突破記念小説 私にとっての特別な呼び方（前書き）

Act a e s t F a b u l a っ！！未知の結末を知る
アクタ・エスト・ファープラ

この度、何とこの小説のアクセス数が100万を突破しました。本当に驚きです。小説を初めて5ヶ月ここまで行くなんて。頂ける感想の数も、始まった当初と比べても沢山になりました……それだけでも私としては嬉しいですねww
やはり、読んでもらっている方の感想は励みにもなりますしね。こんな私と小説ですが、これからもよろしくどうぞっ！

さて、今回の記念小説のテーマは、
タイトルにもある通り『特別な呼び方』です。
視点的には東さんですが、現代から当時を振り返ってという感じなので

ところ变なのがありますが、ご了承を。

100万アクセス近くに書こうとしたので少し雑で支離滅裂となりました（汗）

それでも楽しんでいただけると嬉しいです。意外な東さんの一面が見れるかも

それではどうぞっ！

100万アクセス突破記念小説 私にとっての特別な呼び方

東視点

あれは私がまだISを完成させるちょっと前。
中学二年のある日のことだった。

この日は、休日の日曜で両親は仕事とかの都合で朝から家には居ないらしく。
朝からいつも通りのメンバー。私、綾、ちーちゃん、いっくん、篝ちゃんの計五人でウチに集まって適当に遊んだりしてダラダラと過ごしていた。

この時の時間は時間帯的にはお昼頃で綾がお昼ご飯を作って、ちーちゃんがちょっとしたお手伝いをしていた。

「ねえ……束さん、聞きたい事があるんだけどいい？」

「ん？聞きたい事？いいよ、この天才束さんに何でも言ってみなさい」

そう私が言うと、「ありがとう」と礼儀正しく言ったいっくん。

聞きたい事って何だろう？何でも答えられるけど。

もしかして、篝ちゃんのスリーサイズだったりして……

そうなら、大変で楽しそうな事が起りそう。

主に綾からいっくんへの楽しい楽しいO H A N A S I的な意味で。

綾はシスコンだからな。まあ、私もだけど。

そんなくだらない事を当時の私が思っていると、いっくんが言った。

「どうして東さんは綾さんの事を「綾」って呼ぶの？」

「え？」

聞かれて一瞬、どういう事が分からなかった。

「あつそれは私も思った。ほら、姉さんは私の事や一夏、千冬さんの事は名前を省略して「ちゃん、君」付けで呼ぶのに。兄さんだけは普通に「綾」って呼ぶから」

「うん、だから……あれっどうしてだろう？って思ったんだけど……聞いちゃだめだった？」

「ううん、そんな事ないよ。呼び方が……」

いっくんと篝ちゃんに聞かれて私は今一度考える。

どうして、綾だけは皆みたいに呼ばず、普通に「綾」と呼ぶのかを。どれくらい、どれだけ考えてもそれはやっぱり。

「そうだね、そう呼ぶのは……私にとって綾は『特別』だから、かな」

「『特別……？』」

「そう、『特別』」

いっくんと篝ちゃん、二人声を揃って疑問そうに首を傾げる。

そんな二人に私は、もう一度繰り返し返すように言った。

「特別だからこそ、ちゃんと「綾」って名前を呼びたい、呼び続けたい。特別だからこそ、『綾』って大切にして呼んでいるの」

「そうなんだ。特別って、私達よりも？」

「まあ、そうだね。篝ちゃん達も私にとってはかけがえない大切で特別な存在だけど。その特別の中でも綾は特筆して『特別』なの」

「なら、束さん。どうして、綾さんはそんなに特別ななの？」

「それは……」

言いかけてふと思い出す。

どうして綾が特別の中でも特筆して『特別』なのか。それはやっぱり。

「初めて出会った時から綾は変わらず綾だったからかな」

「どういふ事？」

「それじゃあ、意味不明だよ。姉さん」

「にやははは、そうだね。簡単に言うとな綾が居候する事が決まって初めてうちに会った時から綾はいい意味で変わってないの。いい意味で昔のまま」

初めて会った時から綾は変わってない。

もちろん成長しているし、いろいろなことも学んで学習もしている。

だけど、綾は綾の一人間としていい部分は初めて会った時から変わってない。

本当に昔のまままで変わっていてもそれはいい意味で。そういう所は永久不変。

「それに私は初めて綾と出会った時、綾に関心を持たず認識せず無視して。嫌いと言うか……苦手だったんだよね」

「……」

「えええっ!？」

この内容を知っている篝ちゃんは、口を閉ざして黙って。

この内容を知らないいつくんは、「嘘っ!？」と言わんばかりに大きく驚いていた。

それもそうだよ。いつくんが知っている今の私もこの当時の私も変わらず、綾にべったり。

だから、いつくんは想像が付かないんだろう。綾に関心を持たず認識せず無視して綾に苦手だったという私が。

初めて綾と会った時、ちーちゃん達みたいに関心を持つ事はなかったけど違和感を感じたのは今でもよく覚えている。

違和感……それは初めて綾を見た時、綾はとっても酷いぐらいに無色透明に見えた。

私は生まれた時から世界がモノクロの様に見えていた。白と黒の色彩のみで構成され、そんな世界に面白みもなく興味も関心も持てるわけなかった。

そんな世界でも、ちーちゃんやいつくんや篝ちゃんは色が付いていて興味が引かれ関心を持つ事が出来た。

けれど、初めて会った時の綾はモノクロの世界の中で形こそはある

ものの無色透明。それゆえに始めは関心を持たず認識せず無視していた。

「ど、どうして苦手だったの!？」

「ふふっほら、綾って掴み所がなくて見られていると何かを見透かされている感じがするでしょう?」

「うん。よく綾さんには千冬姉でも気づかないことを見透かされて言い当てられたりする」

「ほら、ね。だから、最初はそういうところが苦手だった。」

嫌い……苦手というのもその違和感が関係して苦手だった。

綾はとつても酷いくらいに無色透明に見え、掴み所がなくいつも優しい笑みを小さく浮かべているから、何を考えているのか初めて出会った頃は全然分からなかった。

それに私を見る綾の瞳は私の何もかもを見透かしている様で苦手だったというのもある。

けれど

「そんな苦手も綾と接していくうちに変わっていったの」

「特別に?」

「そっだよ」

いっくんの問いかけに私は頷く。

両親が綾に「娘達と特に束と仲良くしてやって欲しい」と言ったからだと思っけど、綾は何かと私を気にかけてくれた。まあ、両親達にしてみれば、『気味の悪い娘を綾（のち）に任せて直視せずに済む』という思惑があったのは事実だろう。

実際、私は両親からも気味悪がられて、人の世である世間からもそして世界からも直視を躊躇われ忌避してされていた。

気にはかけてくれたけど、初めて出会った頃の私は綾になんて興味どころか関心がなく。

居ても『あついたの』ぐらいの認識で綾が居ようが居ない時と変わらずに過ごしていた。

普通、無視とかされれば僅かながら『むっ』ときたりや、怒ったり気を引こうと話かけたきたりする。

けれど、綾はそんな事はなく。気を引こうだとかで話しかけることすらなく、ただ本当に隣に居るだけで、私が綾から逃げる様に立ち去っても追いかけてくる事はなかった。

最初、それだけは『むっ』としたのは覚えている。でも、綾は気づくと傍に居て何かしら気遣ってくれた。

そんな風に普通とは違う接し方をされれば自然に必然的に僅かながら次第に綾に対して興味や関心を持つようになって、接してくようになった。

そして、接していくうちに無色透明である綾の事をもっともったくさん詳しく知りたいと思い始めた。

綾に始めから興味や関心があった訳じゃない。少しずつ接していくうちに次第に興味や関心をもてるようになって、そして認識外から特別へと特別以上の存在へとなっていた。

「少しずつ綾にも関心を持つようになって接してから、私を取り巻く世界は大きく変わって私自身大きく変わったの」

綾と接していくうちに私を取り巻く世界は大きく変わった。

人の世という世間や世界から『異質』として見られるのは変わらなかったけど、綾の気遣いのお陰で篝ちゃんとも仲よくなる事が出来、両親ともあの日まで、何とか折り合いを付けて親子として接する事が出来た。まあ、その気遣いを仇で返す事にはなってしまったけど。

そしてまた、私自信も大きく変わった。

綾のお陰で私は沢山変わることが出来た。それは今も変わらない。変わっていったお陰でモノクロ世界の檻ケットから脱却でき、沢山の人に関心を持つ事が出来た。

それは奈々師匠やおじ様であり、綾のお陰で奈々師匠にも出会えて弟子入りする事が出来た。

全て全て綾のお陰。

綾は全力で私と向き合ってくれた、そんな人は初めてだった。

綾は天才である私を『天才』として見ることはなく、ただ一人の『私』として見てくれて接してくれた。

ちーちゃんですら、呆れる私に綾は全力でぶつかってくれて全力で支えてくれた。

だから、私も綾には自分の外も内も曝け出して全力で向き合って、思いをぶつけた。

それは時には、ほぼ私の一方的な口論とかにもなったけど、綾は悪い事をしたら悪いと叱ってくれて全力でぶつかってくれて、一緒に一つ一つの問題を乗り越えてくれた。

そんなのは初めて体験でそれが何よりも嬉しくて、私は時が経つにつれて綾の事を誰よりも何よりも強く深く想っていた。

好きになっってしまうのも……接し始めてそう時間はかからなかった。

無色透明である綾に打算や計算はなく、あるのは愚直なまでに『そうありたい』という思いのみ。

そして、『刹那を感じていたい』という思いのみ。だから、そんな綾を追い求め恋焦がれた。

「綾は私にとって特別な存在、かけがえのない大切な人。それはいつくや篤ちゃん、ちーちゃんよりも大切に三人よりも大切に特筆して特別人」

三人で話しているはずなのに何処か独り言の様に私は言う。

この言葉から分かる通り、この当時から私は綾に惚れていた。

だけど、かなしいかなこの当時の私は変なところで間抜けて馬鹿だったから、綾を好きだった事を自覚するどころか全然気づいていない。

でも、綾の事が一人の他人として異性として好きだったのは間違いない。当時からむちゃくちゃ綾に言い寄る女に嫉妬して綾の手を焼かせたらしい。

実際、ちーちゃんにも嫉妬して、何度か殴り合いの喧嘩にはなったことがあった。そんな時はいつも綾が仲裁してくれて、仲直りさせられて事なきを得ていたな。

今更ながら、反省はしても後悔はしないけど、この時に綾への思いに気づいて告げていれば、きっと世界は変わっていたんだろうな。いい意味でか悪い意味でかは分からないけど。

それに大切に特別な存在であるからこそ、強く深く私を綾の事を思う。

それと同時に、特別でかけがえのない大切な人だから綾と離れたくない、綾を手放したくないという想いは異常なほど強かったと思う。

「そんな大切に特別な綾だから名前を大切にして「綾」ってちゃんと呼んであげたい、呼びたいの。だから、私は「綾」って呼ぶの。と……こんな感じなんだけど、これで分かったかな？」

「うん、大体は分かったよ。態々、教えてくれてありがとう、東さん」

「ん、どういたしまして」

結構、適当に答えてしまったけど、どうやら大体は理解してくれたようでよかった。

まあ、正直な話を言うと綾を普通に「綾」って呼ぶのにはもう一つ理由がある。

理由といってもそんな大して物じゃないんだけど、やっぱりちーちゃん達とは一線を引いて「綾」って呼ぶという意味もある。

特別だからこそ「綾」って読んでいる訳であって、ちーちゃん達と同じ様に砕けた呼び方するのは何か嫌な感じがしたりする。

とまあ、もう一つの理由なんてものは精々この程度。

それにこんな理由達を差し引いても、綾が特別以上の存在である事には変わらない。

「でもなあ、箒。やっぱり、東さんって綾さんのこと好きだよな？」

「まあ、そうだな。姉さんは兄さんのことになると思境がいつも以上になくなるから」

「あつはは、そうだな。今でも、覚えているぜ。あの千冬姉と東さんのガチバトルを」

「えーと、確か一郎おじ様が付けた名前はなんちゃって？」怒りの
目』だったな？……アレは悪夢以外の何物でもない」

「トラウマものだよな。あれを止めた綾さんは凄い。ああは出来な
いぜ。あんな事にはならないけど」

「お前が言うな」

「ん？二人とも何を話しているの？」

「何でもないです！」

二人がこそこそ話しているから何を話しているのか聞くと物凄い勢
いで首を横に振って言う。

物凄い勢いで二人は首を横に振るものだから気にせずふと、時計を
見る。

時刻は先ほどから十分以上経っている。そんなに長いこと話してい
たんだ、などと時計を見つめながら思っている。

「お待たせ。お昼ごはんが出来ましたよ」

「またせたな。一夏、箸」

「やった〜ッ！オムライスだっ！」

「兄さんのオムライスっ」

人数分のオムライスを乗せたプレートとコップとお茶を持った綾と
ちーちゃんが部屋に現われた。

箸ちゃんといつくんは、オムライスを見るなり大興奮している。

二人とも、綾のオムライス好きだし……綾が作るオムライス、料理全般は全て美味しいから興奮する気持ちは分かる。かく言う私も早く綾の料理を食べたくて仕方ない。

「楽しみにしていただけて何より。それじゃあ早速、食べようか。それでは手を合わせて……」

「」「頂きますっ！」「」

「はい、どうぞ」

全員テーブルに綺麗に付くと全員で声を合わせて食事の挨拶を言い食べ始めた。

「美味しいっ！」

「そうだな、一夏」

「兄さん、美味しいよっ」

「それはよかった。皆も喜んでくれているようだし。束はどう？」

「ん、もちろん美味しいよ」

私がそう言うと「そうか、それはよかった」と嬉しそうに目を細めていた綾。

嬉しそうでそれでいて優しげなその表情に見ていた私は思わずドキっとした。

綾の作る料理は美味しい。

美味しくくてさつきからスプーンが止まらない。これはいい主夫になるね、私の。

スプーンが止まらないは皆も同じなようで笑顔を浮かべていい食いつぶりで美味しそうに食べている。

そんなみんなの様子を見ている綾は変わらず嬉しそうな表情を浮かべて、ゆっくりと食べている。

「ああ、そうだ。さつき何か三人で話していたみたいだけど何を話していたの？」

「聞いてたんだ。それがね……いっくんが篝ちゃんのスリーサイズ聞きたいって言うから、それはどうかと私はお姉さんとして話していたんだよっ」

本当の事を言うのは恥ずかしくなって、別の話に逸らした。
すると、いっくんと篝ちゃんは「んぐっ！」という少し辛そうな声を漏らして慌てていた。

「ね、ね、ね、姉さんっ！！？何て事を言うのっ！！？」

「そ、そ、そ、そうだよっ！！そんな事話してないからっ！！」

食べる事すら忘れて、顔を真っ赤にして慌てている二人を見てつい笑ってしまった。

冗談のつもりなただけど、二人が顔を真っ赤にしているものだから、本当の事のように見えてしまう。

はう〜二人ともかぁいいよ。いっくんのお持ち帰りはちーちゃんにムッコロされるから、篝ちゃんお持ち帰りして、真っ赤になっている今の二人を画像に記録しておこう。

綾は私の冗談という事は見透かしているみたいだけど。
ノリよく、綺麗で優しい笑みんだけど黒い笑みを浮かべて慌て
る二人を見つめていた。

「ほお〜それはそれは。由々しき自体だね。一夏？食べたら、俺
と一緒に激お話しい稽古しようよ？」

「ヒイっ！？ルビの下の文字がおかしいよっ！？それに本当にそ
んな話してないからっ！」

「そうだよ、兄さんっ落ち着いてっ！ま、まあ……一夏になら、ス
リーサイズ教えてもいいけど」

篝ちゃん〜それは核爆弾発言だよ〜
と言うか、篝ちゃんもませているなっ 流石は私と綾の妹扱かりは
なかったっ

やっぱり、いっくんに恋する乙女している篝ちゃんはかぁいいよっ〜

一方、シスコキングの綾は篝ちゃんの核爆弾発言を聞いてマジで
絶句して固まっている。
そして……

「一夏っ！お前の様なハーレム男に愛しの可愛い妹は絶対にやらん
っ！欲しければ、俺を倒していけっ！という事で、腕が張れるまで
食後、剣道の稽古だっ！」

「何でそうなるのっ！？嘘なのにおかしいよっ！？スプーン、変な
方向に曲がっているしっ！！篝、東さん何とかしてくれっ！」

「兄さん、そんなに私の事を思ってくれているなんて。やっぱり私、

兄さんと結婚するっ、兄さんの女になるっ！」

「おお〜！そうになると、綾を真ん中にして両サイド私と篝ちゃんにいて三人でヴァージンロードを歩く事になるねっ 初夜は三人かあ
〜それはそれでいいかもっ」

「帰ってきて〜っ！二人ともっ！？ハッ、千冬姉助けてっ！！！」

「綾、そういえばオムライスの御代わりあったよな？美味しいから
もう一つ、貰ってくる」

「千冬姉まで……この世に神はいないっ！！！」

「諦めて我が刀の錆となれっ！」

「ふ、不幸だあああああ〜っ！！！」

こんな風に皆がそろってわいわい賑やかに騒いでいる日常。
何でもない様でとっても大切な陽だまりの一部だったと本当に思い
知らされたのはISを世界に広めてから後のこと。

もう、こんな暖かい陽だまりの日常には戻れないだろうけど、可能
ならもう一度戻りたい。

こうして五人何気ない陽だまりの日常を過ごしている一時《刹那》
に。

・

・

・

「……た……ね……」

「ん〜？」

「東、起きなさい」

「んにゃ？」

綾の声が直ぐ近くで聞こえ閉じていた目をゆっくりと開ける。

綾の言葉や意識にかかっている眠気さから察するにどうやら、私は眠っていたようだ。

その証拠に部屋は綾の部屋でベッド上で横向きの体勢で眠っていて、目の前には綾の顔がある。

ちなみにあらかじめ言っておくけど、服は着ていて乱れてないし行為の後でも何でもないので変な勘違いはしないように。

今だ意識は寝ぼけて覚醒してないけどとりあえず起きる。

「ごめん、眠っちゃってた。今、何時？」

「気にしないで。今は夕方の5時ごろ」

「三十分近く寝てたんだ」

よく寝ていたと……我ながら思う。

最初は十分程度のつもりだったのに。

綾の部屋に来ている理由は今日は普通に遊びに来ただけ。

遊びに来たと言っても、一緒に同じ時間を過ごすだけだけ。

ちーちゃんはクラスの子達とデート……じゃなくて、クラスのこの付き合いでお出かけ。

そういえば、ちーちゃん最近クラスの子と出かけるの多くなったな。まあ、今まで三人いつもべったりだったし。

それに昔と比べると少ないけど、少し寂しいな。まあ、仕方ないんだけど、いろいろとね。

「起してくれればよかったのに」

「気持ちよさそうに寝ていたからね。起すのが忍びなくて。それに何か嬉しそうに笑っていたし」

そう言われてさっきまで見ていた夢の事を思い出した。

随分と懐かしい思い出の光景を見たな。それに物凄く鮮明だった。それだけ私の中で思い出深い光景の一つということだね。

「懐かしい夢を見ていたんだ。とつても懐かしい……陽だまりの一時を」

「それはどういった内容だったの？」

「ふふんっ それは内緒っ んっ」

はにかみ笑みをそつと私は綾の唇にキスをする。

やっぱり、夢の内容……と言つか、あの思い出を言うのは気恥ずかしい。

特に名前についてのあの行を言うのは特に気恥ずかしい。恥ずかしい話ではないんだけど、そんな風に感じて思ってしまう。

「んっ……なんだれ、それ」

「ふふっ 綾っっっ」

「ん、何？」

「呼んだだけっ」

やっぱり、この呼び方がしっくりする。

他の呼び方なんてダメ。綾は「綾」って、この呼び方じゃないと。

大切に特別以上の存在、恋人である綾を呼ぶ、ありきたりだけど私にとっては特別な呼び方。

これは未来永劫変えるつもりはない。それは例え子供が出来たとしても変えない。ずっと、「綾」と呼び続ける。

私は「綾」と呼ぶふとした瞬間、大切に思いながら特別だと思いなから呼ぶ。

だってそれは。綾が私にとってなくてはならない『もう一人の私』である同時に大切に特別以上の『私を変えてくれた生涯唯一人の想い人』でもあるのだから。

…

100万アクセス突破記念小説 私にとっての特別な呼び方（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか

100万アクセス突破記念小説 私にとっての特別な呼び方。

今回は記念小説と題して過去話でした。

ちよつと他の小説様と違いを出してみたくて、

省略してやあだ名ではなく『綾』と読んでいるのについて触れました。

ちよつと分かりにくかったかもしれませんが、束さんが『綾』と呼んでいるのは

要約すると『特別な存在だから変に省略して呼んだり、あだ名で呼ばずに名前を大切にして大切に呼びたい』

と言うものです。なんて事ない理由ですが、ちよつと深くしてみました。

読んで一番驚いてくれたらなあ〜と思っているのは。

『始め束さんは綾君に興味や関心すら持たず、無視していた』という所です。

束さんが出ている小説では、出会って頃から束さんに関心や興味を持たれている

といのが多いですが、うちの小説の綾君の場合は違いました。

ガンガン無視されていました。それはもういないものと扱われている様に。

束さんが綾君に心を閉ざしていた頃は束さんのなかで黒歴史なので書きませんでした

今じゃ考えられないくらいに無視していました。

話しかけても呼びかけても無反応、しまいには聞こえてないかのよ

うに何処かへ行く。

東さんと千冬さんと綾君が一緒にいてもその時の東さんが話すのは千冬さんのみで無視。

酷いことされていましたが、綾君はその頃からおかしいので気にせず。

変わらず同じ様に接しているうちに認識外から特別へと特別以上の存在へとなっていました。

努力というか『継続は力なり』の体言の様な存在でした。

この辺は他の小説様と変えて見ましたが、いかがだったでしょうか？

ちなみに過去回想の最後はおもいつきりネタですwww

原作開始時でも一夏の扱いはあんな感じですwww

口調はあれでよかったかな？特に箒。歳相応をイメージしてそうだったけど。

それに話のまとめ、最後の一台詞も何か違和感を感じる。

前の描写の言葉と繋がってないような……

まあ、いいか。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

次回 夏休み編開始。これを機に物語りは動き出す。

第三十一話 ？（前書き）

久々(?)に『にじファン』のISタグの『週間ユニークアクセスが多い順』を見ました。

安定期よりもかなり下がったの3ページ目でした。

この小説、やっぱり人気ないですねwww面白いからですね。分かりません。

うん……気にしすぎだけなのは分かっています。そろそろ、精神科通院しなさいとな。

こんな事は分かれるか頭の片隅にでも置いて下さい。失態失礼。さて、今話から夏休み編突入っ！ここから物語は加速するっ！

と言いたいのですが、しよっぱなからシリアス！綾君と東さんの命運は如何にっ！？

それではどうぞ！

第三十一話 ？

東視点

七月最終週。IS学園も一般高校と同じタイミングで夏休みに入る。貰った通知表の成績も私達三人とも文句のないものだった。具体的な結果を言うと、テストの成績や日頃の成績を合わせた総合成績は私が学年一番で綾が学年二番でちーちゃんが学年三番という本当に文句のない結果だった。

今後のIS操縦者、関係者育成を目的に今年一学年だけ新設された試験校といっても、帰省……ならぬ帰国というものがある。

一年生の生徒半分が世界各国から訪れている為に帰国組も多く、日本人の生徒でも実家や里帰りする人もまた多く、寮は日を追う毎に人を減らしていく。

寮にいる生徒は本当に数えられるぐらい。ちーちゃんもまだ寮には居て帰ってないけど、夏休みには実家に長期期間帰省するらしい。私と綾はまだ帰省する予定はない。帰省すると言っても、奈々師匠のところだけど。一度は奈々師匠やおじ様に顔を出しておかないとな。

とりあえず、今は夏休みにどこか行くとかの話はしている。

「ねえ〜綾？夏休み何処行くところか？」

話している場所は食堂、私、綾、ちーちゃんといういつものメンバーでお茶しながら話している。

さて、本当に夏休み何処に行くところか。

日本国内からは政府との取り決めで出れないから外国とかには行け

ないから行くなら国内。
それも綾は、夏の海嫌いだから海とかには行かないだろうから。
行くなら比較的涼しい地方、避暑地とかだね。あっ、温泉地も捨てがたいな。

等と一人勝手に頭の中であれこれ行く候補を挙げていると綾が言った。

「それなんだけどね……実は実家の方に帰ろうと思っているんだ」

何処か影を落としているような少しだけ暗い真剣な顔付きで言う綾。場の空気が私達が囲んでいるテーブルの空気が凍り付く。

他とは明らか温度差が違う。例えるなら、このテーブルの空気は絶対零度。

内容を察した様にちーちゃんは綾と同じ様に少しだけ暗い真剣な顔付きで何かを考えている。

「じ、実家っ？ 奈々師匠のところ？ それなら、そんな早く帰らなくてもいいじゃん。最後のほうに顔を出せばいい事だし、ね」

本当に苦しいいい訳だ。

動揺までして、綾が何を言いたいのか分かっているのに分かってないフリをする。

また逃げている……自分でもそう思うけど、どうしても逃げてしま

う。
悪い予感がする。予感のまままで済んでほしいと思えば思うほど、その悪い予感は強くなって、心なしか何だか気分が重くなってくる。

「奈々さん達のところにも、もちろん帰らなくちゃいけないけど。」

俺が言っているのは……」

「いい。言わなくてもいいよ」

「篠ノ之家に帰るとのことだ」

「……ッ……」

悪い予感は当たってしまった。

始めから分かりきっていたことだから、当たってしまったという表現はおかしいかもしれないけど。

現実の言葉として否応なしに付きつけられる。

嫌だ嫌だ嫌だ。

逃避している現実から目を背け逃避している。逃げている、逃げている、そんな事は分かっている。

でも、逃げたい、逃げたい。そんなの嫌、嫌、嫌っ！！

「嫌っ！！」

「束」

パンツ！と机を叩き立ち上がる。

そんな私を宥めるように綾は私の名前を呼ぶ。

帰りたくない、帰りたくない、帰りたくない。

「帰りたくない」

「ダメだ。もう、篠ノ之のご両親には帰る連絡は入れて帰る許可も

貰っている。だから、帰らなくちゃならない」

「……ッ!?……」

心が再び動揺したのを、激しく動揺したのを感じる。
動機が少しだけ荒くなってきたのかもしれない。

目の前にいる綾の表情は真剣そのもので、もう私に逃げ道がない事を告げている。

相変わらず、綾は用意がいいというか、手際がいいというか。
でも、そんな事を言われても帰りたくないものは帰りたくない。
小さな子供みたいな駄々こねて言い分けられないのも分かっている。
だけど、帰りたくない。

それにあの両親が私達が家に帰るのを許した?
綾が説得してくれていけ様になったのは何となく分かるけど、どうして?どこで折れた?
あんなに私達を私を嫌って憎んで忌避していたのに。

もしかして、また無茶苦茶言って殴ってくるんじゃないだろうか?!
私が無茶苦茶言われて殴られるのは仕方ない。それですら生温い様な大罪を犯したのだから。
でも、家に帰るといふ事は綾も一緒。だったら、綾は何があっても私を庇うからまた殴られてしまう。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。帰りたくない帰りたくない帰りたくない帰
りたくない帰りたくない帰りたくない。
篝ちゃんにどんな顔をして会えばいいのか分からない。両親にどんな顔をして会ったらいいのか分からない。
会ったらどうなるのか分からない。何か悪い事が起った時、一体ど

うしたらいいのかわからない。

こんなにも取り乱して動揺するのは、果たしていつも振りなのだろうか。人間らしく人らしくなったツケなの？もう、頭の中では悪い想像が止まらない。

また、いつもの悪い癖であれこれ頭の中で理由をつけて、悪い事実を勝手に妄想して、その悪い妄想に囚われて逃げようとしているのも分かっているけど、どうしても悪い考えが消えない。

それでも帰るといふことは

「……………帰るって事は……………篝ちゃんの会う為にだよな？」

「その通りだよ。前に会いに行こうって約束したじゃないか。だから」

やっぱり、帰る目的は篝ちゃんに会う為だった。

前々から、そういう話はして約束までしていて、今回帰る目的がそれだとは薄々は気づいた。

追々、後へ後へとなる前に早いうちに会わなくちゃいけないのは分かっている。

でも、家にあんな所に帰りたくない。

「で、でも、会うなら別に家じゃなくてもいいじゃん。例えば……………
奈々師匠のところにも篝ちゃんを呼んだりして会えば……………」

「それはダメだ。家で篠ノ之家で会わないと意味がない」

「……………ッ……………」

私の苦し紛れのいい訳の様な提案は、ばっさりと拒否さらわれてしま

った。

これで私には、逃げ道が本当にならない事を明確になった。最終手段は……もう、逃げ出すしかない。でも、真剣な顔付きの綾を見ているとそんな事できない。

だけど、怖いよ。帰りたくない。帰りたくない。嫌だ嫌だ嫌だ。帰りたくない。帰りたくない。

「嫌ッ！！帰りたくないッ！！」

「……束」

思いが言葉となってしまい、つい叫んでしまった。

叫んでしまうと、声に驚いて周りのちらほらと少しだけいた人達の視線がこちらへ集まる。

それを綾は座っていた席から立ち上がって「何でもないですよ」と手振りで表現して、視線を散らせた。

叫んでしまった……また、言ってしまった。

言葉なんてものは発した瞬間から何かしらの力を持ち、重くも軽くもなる。

感のいい綾の事だ、私の思っていることなんて見透かしているだろうけど、最後の最後まで言葉にはしないでおこうと思ったのに言ってしまった。

言ってしまったって、抑えていた思いや気持ちを露呈してしまった。ダメダメな逃げ腰の私の心情を悟らしてしまった。

もう、どうしようもない。本当にダメダメだな、私。

「……帰りたくない気持ちも分からなくはない。俺だって篠ノ之家に帰るのは怖いし嫌だよ。篠ノ之のご両親や筭とどんな顔してどん

な風に接したらいいのか分からない」

「だったら……っ！」

「だからと言って、箒に会いに行くのをこれ以上、遅らせるわけにはいかない。それに束は、いつまでも「嫌だ、帰りたくない」と言っ
つて、逃げているつもりなの？」

「……ッ！」

言われて言葉が詰り、何か言い返すことも他の何かを言うことも出
来なくなった。

やっぱり、綾には何もかも完全に見透かされていた。

私ที่บ้านに帰るのが怖くて嫌だという事も。両親や箒ちゃんにどんな
顔してどんな風に接したらいいのか分からないことも。

本当、綾には敵わないや。

それに私は本当にいつまで、逃げているつもりなんだろう。

逃げないと、逃げずに前へと進むと決めたはずなのに。現実として
事態が起るとまた、逃げ出しそうになってしまった。

逃げた先にはロクな事がないということが分かっているはずなのに。

すると、綾はおもむろに私の方へと近づいてきて。

「……ッ！？り、綾？」

ぎゅっと力強く優しく抱きしめくれた。

私は思わず、驚いて身体をビクツとさせた。

驚いた。突然、抱きしめてくるんだもん。

それに綾が人目、特にちーちゃんを気にせず（一応、気にはしているんだろうけど）、抱きしめてくるなんて。

驚いたけど、こう力強く優しく、いつもの様に私の荒れた心をまるで落ち着けてくれるように抱きしめられていると、心が安心して落ち着いてくる。

「何も一人で頑張らなくてもいい。俺が傍にいる。二人で進もう」

「綾が傍に……？」

そうだ……悪い思考に囚われて見失っていた。

私は一人でやるう、やるう、頑張ろうとしてばかりいた。そんな弱い私が一人じゃ怖いに嫌でしかたないのに決まっている。

私には綾がいる。どんな時でも、『もう一人の私』である綾が傍に居てくれる。未来永劫、世界が変わり果てても永劫回歸しても絶対的に。

「そう、傍に居る。無理な頑張りは心にも身体にも悪いけど、少しは頑張ってみよう。一緒に篠ノ之家に帰って篠ノ之家で箸と会おう」

「うん……なら、家のドアを潜るまででいいから。手を繋いでくれる？その……不安だから」

「それぐらいならお安い御用さ。なら、一緒に頑張ろうか」

「うん、頑張ります」

頑張ろう。一人なら無理だけど、綾と一緒になら頑張れる。

弱い自分に湯を入れ、私は綾と一緒に今一步、前へと進むのだ。

一人で頑張らなくてもいい。辛ければ綾に担がれれば。前に『むしろ、担ぐ』とも言ってくれた。それは私も同じ。一人なら頑張るのは、無理かもしれないけど。私には綾がいるからきつと、頑張れる、頑張ろう。

綾と一緒に刹那を疾走して駆け抜けよう。

そうして、どちらともなく離れてそれぞれのテーブルの席に付く。

「まあ、その何だ、束。大して事はいえないが、頑張れ」

「うん、頑張るよ。ちーちゃん」

ちーちゃんに応援とちよつとばかりの勇気をもらえて様に気がする。綾にも、ちーちゃんにも、応援してもらったんだ。

その来る日、力の限り頑張ってみよう。

・
・
・

家に帰ると綾から知らされた日から数日後。

今日のお昼頃、私達は家へと篠ノ之家に帰ってきた。

ここまでは、電車を乗り継いでの大長旅で、夏真っ最中ということもあつてか外は暑い。

容赦なく私達を照らしつけていて激しく自分を自己主張している太陽が憎く思える。

まあ、こんな思考しているうちはまだ私には余裕があるという事。この余裕がなくなっていくはこれから。

「帰ってきたね」

「そうだね」

綾の言葉に私は、短く返す。

今私達は、家……神社の方の鳥居の前で足を止めている。

ここから神社も家も見えて、家を出た頃と何も変わってない。

この鳥居を潜れば直ぐそこだ。

すぐそこなのに……いや、すぐそこだからなんだろう。

神社や家を認識すると、一瞬だけいい思い出も嫌な思い出も頭に思い浮かんで、訳が分からなくなり。

心なしか、少しだけ気持ち悪くなってきた。

実家いえの前に立つたぐらいでこんなんじゃない、今日こそ逃げ回ってきたのと向き合つと決めたのに。

「東、大丈夫？」

「う、うん。何とか、いけるよ」

「そう。なら、辛いかもしれないけど頑張ろう。行こうか」

「うん」

深呼吸一つしてゆっくりと歩き出し、鳥居を潜って家へと歩いて行く。

気持ち悪さだけじゃなく暑さにやられたんだろうか、足が覚束なく、足取りが重い。

そんな私を気遣うように綾は繋いでいる手に優しく力を込め、ぎゅ

つと優しく握ってくれる。
ここまで来るあいだ約束通り、綾はずっと私の手を繋いでくれている。

綾の手は暖かくて優しい感触がして、その感触を感じていると何だか軽い気分でいれる。

頑張ろう。

「来たのか……」

「お久しぶりです」

「……お久しぶりです」

頭を下げた丁寧に挨拶をする綾に釣られて私も頭を下げた挨拶をする。

ただ、いつもの癖で表情は無表情で声色は無感情なものとなってしまった。

実家^{いえ}に帰って初めに会ったのは、父親だった。

父は相変わらず、神職装束に身を包んで手には掃き箒があつて、掃除でもしていた事が何となくが伺える。

そして、私達を見る目は、“あの日”から変わっていない。

表情こそは、普通だが父の私達の見るとは、抑えているけど抑え切れてない激しい憎悪と忌避の色が伺え、私達を蔑んでいる。

でも、父はこうして見ると中々出来た人間で大人な態様をしてくれている。

子供である私達とは違い。私達に抱く感情が、抑えきれず少しだけ溢れてきているのは瞳だけで、その他の雰囲気や表情には出ていない。

前の時の様な失言を私がしない限り、殴られる事も何か嫌味を言われる事もないだろう。

とまあ、私が抱けてた関心はこれだけ。

興味は相変わらず抱けないし、綾には悪いけど今更抱こうなんて思わない。

私が出るのは、ほんの少しだけの関心を持って、相手を分析するだけ。

人間としてはとてもお粗末な行為だけど、これが私が出る私のなりの父への関心の持ち方。

「……筈なら道場の方で待たせてある。行くといい」

「ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

綾と私、もう一度頭を下げて一礼をして家の玄関へと向う。

「懐かしいね……」

「……そうだね」

玄関の扉を開け、家の中へと入り、家の中から道場の方へと向う。

久々に帰ってきた実家は、外と同じく家を出たときと何ら変わって
いなかった。

あの時のまま。まるで不自然なほどで、この家は時が止まっている
ように感じた。

そして、一步一步、道場へと近づくにつれて、軽くなったはずの気

分は重たくなり、足取りも重たくなっている。
気持ち悪いし、逃げ出したい……そんな気持ちが出てくるけど、ぐ
っと飲み込んで堪え、道場への入り口へと着いた。

「俺、綾と束だけど。入るよ」

「……はい、どうぞ」

入り口で入る確認を取ると奥から篝ちゃんの声が聞こえた。

懐かしくて、愛しい妹の声。

声こそは暗く強張っている感じがしたけど、久しぶりに篝ちゃん
の声を聞いて、心なしにか不安だった心が安心した。

そして、奥へと入る。

奥に入ると待つてくれた篝ちゃんが道場の中央ず正座して座ってい
た。

正座して顔は伏せ目がちで、少しだけ伺える表情は酷く暗くて強張
っている。

私達は横に用意が詰ったポストンバックを置いて、篝ちゃん前へと
並んで座る。
いよいよだ。

…

第三十一話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十一話 ？

相変わらず、伏線の張り方が雑ですが。

ついに二人が篠ノ之家に帰ってきました。

前半でもかなり束さんは荒れましたが、篝との話し合いも全体的に荒れるかもしれせん。

父親さんについては今の所は手を付けるつもりはありません。

あの時よりも大人な態度をしてくれているので。

問題は母親の方ですね。かなりヒステリックになってしまったので当分は触れませんが……いつかぶつけないとな。

さて、シリアス全開のスタートとなった夏休み編。

はたして、いい夏休みになるのか、少し悲しい夏休みになるのか。

それはこの先、二人が進む道未知のみぞ知る。

それと相談なんです、綾君はともかく束さんと篝を仲直りさせてもいいのでしょうか？

篝の設定には、
『過去に2人の仲を裂く決定的原因となった大きな「事件」があったとの』

とあるのですが、このままではガン無視する方向なんですよ。

設定は原作重視にしたいのですが、八巻はでないし出て乗るとは限らないし。

まあ、奈々さん達がいるので篝の精神的な負担はすくなくなる予定です、

篝の修正案や一夏との連絡手段は用意していて、

今後こういう系統の話が出てきてもガン無視する方向なんですけど。ご意見などを頂けると嬉しいです。

福音戦でやけに仲のいい篠ノ之姉妹を拝みたいだけなんですけどw
では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。
待っています。

第三十一話 ? (前書き)

一日で書けたよ。

でも、簡潔に短くそれでいて深くまとめようとして。

無理したから、後半たいぶ支離滅裂です。

まあ、こういうかいでの私の定番なんですけどね (汗)

それと私はこの回で最低な事をやっています。

これは後書きについて触れていますので、後書きを参照。

それではどうぞっ！

第三十一話 ？

東視点

箒ちゃんの前に私と綾、並ぶように正座して座つると、開口一番に綾が口を開く。

「久しぶりだね、箒。元気していた？」

「うん、久しぶり。兄さん、姉さん……二人は元気になっていた？」

「うん、元気になっていたよ」

「そう……姉さんは……？」

「私も元気にしていたよ。それと……久しぶり、箒ちゃん」

「うん、久しぶり」

そして、沈黙。

道場を支配している空気や雰囲気は、暗い沈黙一色となり、暗い空気が立ち込めている。

空気がとつても重たい。張り詰めている。どう、ここから空気を変えていったらいいのか分からない。

それに箒ちゃんとも何処かぎこちない。

いつものおどけて明るく接したらいいんだろうけど、出来ない。

今の私は完全に雰囲気飲まれている。これも人間らしくなったツケなのかな？

それに本当、どんな風に篝ちゃんと接したらいいのか分からないよ。と言うか、あれ？今までどんな風に篝ちゃんと接していたんだっけ？上手く思い出せない。

そんな沈黙した状況に綾は、見切りをつけた様に口を開いて言った。

「……篝にはたくさん迷惑かけてしまったね」

「……っ！」

綾の言葉に激しく心揺らがせて、ぎゅっと道場着の裾を握る篝ちゃん。

早速、綾の篝ちゃんにこの話題を振った。

これが今回、篝ちゃんに会いに来て話さないといけない話の一つ。話さないといけないけど、話せば話すほど、話は複雑なものとなって、難しくなるまね

そして、話せば話すほど、私達と篝ちゃんとの目に見えない溝が深まるかもしれない。

でも、篝ちゃんに迷惑をかけてしまったのは言い逃れもいいわけも出来ない事実。

篝ちゃんが愛しい……大切なとほざいておきながら、私達は私は自分の事しか考えていなかった。

自分の事しか考えてない私は自分の我が侷かたちにして、その流れ出させて世界を創り変えて、新生させた。

それについては反省はしても後悔は絶対にしない。だけど、罪の意識はあって、篝ちゃんに迷惑をかけてしまったのは言い逃れもいいわけも出来ない事実。

何を言われても仕方ない。だけど

「綾……ここからは私が話すよ」

「……分かった」

綾は数秒ほど深くいろいろと吟味すると了承してくれた。

綾は私にかかるそんな重荷をまた一人で多分無意識になんดารうけど担ごうとしている。

だから、このまま綾だけに話させるわけにはいかない。

ちゃんと、根本の原因を作った私が言わないと。

「篝ちゃん……今までたくさん迷惑かけてしまったね」

「……ッ……」

「だから、その……」……」

言いかけて、言えず顔を伏せスカート裾をぎゅっと握って、悔しさからなのか噛み締めている唇が震えているのを感じる。

「ごめんなさいと言えなかった。」

いや、言えなかったんじゃない、言わなかった。

迷惑なんて言葉では済まないほど迷惑をかけて、酷いことをしたのに。

どうしても、言えなかった。

本来、こういう場合なら多くを語らず、謝って抱きしめるのがベストなんดารう。

だけど、私は言えなかった……謝ろうとしたけど出来なかった。

言葉にしたら、^{かたち}“それで終わりにしてくれ”って言っているみたい
で。
何だか“謝ったらいい”という固定概念でズルしているみたいで、
逃げている様に思えて。
謝れなかった。本当には謝りたかったけど、謝れなかった。

ここで謝るのは卑怯だ。そんな事したらもつと酷いをしているこ
とと変わらなくなってしまふ。
謝るという行為は簡単で優しいようだけど、残酷。だって、謝った
ら何だか許したくなっちゃうもの。
そんな卑怯だよ、逃げると言う言葉を謝罪の言葉で上手く隠して、
逃げているのと変わらない。
だから、私は謝れなかった。本当は私だって、謝りたいよ。でも、
謝れなかった。

悔しい……自分の行為の代償を知って、私は何も出来ないでいる。
悔しさから出てきそうな涙をぐっと堪える事しか出来ない。
謝れなくて、ただ黙っている事しか今の私には出来ない。

綾も篝ちゃんも黙っていて、場は重たい空気に支配され静寂してい
る。

でも……それを破ったのは……

「兄さん達は……姉さんはずるい」

篝ちゃんだった。

声はいろいろな感情を精一杯我慢して、冷静でいようとしている。
大人だ……謝る事もその他のことで償う事が出来ない私よりも、篝
ちゃんは遥かに大人。

大きくなった、強いなつとふと思った。

「兄さん達はいつもそうだ。本当に悪い事をした時、兄さんも姉さんも、自分が全て悪いって顔して。今だって本当に悪いって謝っているって顔をしてっ！兄さん達はずるいよっ！！」

「……………」

何も言い返せなかった。

言い返そうとも思わないし、言い返そうと思ったところでどんな言葉を篝ちゃんにかけたらいいのか分からない。

本当に分からないからこそ、ただじつと篝ちゃんの言葉を想いを受け止めることしかできない。

それに綾はともかく、私がずるいのはそうだ。

言葉かたちにしなくても、表情で謝っているという顔をしたら、それは言葉で謝っているのと何ら変わらない。

むしろ、言葉よりも明白に相手に思いを現れている事になる。そういう意味では、私は本当にずるい。

「私がどんな気持ちでっ！姉さんがISなんてものを作って兄さんが協力してばかりに家族は皆バラバラになった！お父さんだって毎日辛そうにして、お母さんは心を病んで体調を崩して寝込んだんだよ？！！」

「……………」

「それに私だっっているいろと言われたり聞かれたりする様にもなっ
たっ！大人の人達は私のことまで目の色変えて見てっ！友達は皆何
処かよそよしくなっ！もう、嫌ッ！！！！」

胸のうちに溜め込んでいた思いを全て吐き出すように篝ちゃんはおもいつきり叫ぶ。

こんなにも感情を露にしている篝ちゃんを見るのは何時振りだろう。いつもは、元々の性格とちーちゃんに憧れているのもあってかクールに凜としている。

だから、こんなにも感情を露にしている篝ちゃんを見れるのは嬉しいけど、それをこんな形で見る事になってしまっなんて……仕方ないね。

それにやっぱり、私のせいで迷惑を精神的な負担をかけてしまっているのは変え様もない紛れもない事実だった。

私達を見る篝ちゃんの瞳は涙目で、とつても恨めしそうにそして憎そうに睨んでいる。

その目はやはり、親子なのだろうか、父と似ていて、叫んでいる姿もヒステリックに叫ぶ母と似ているように見えた。

こうなると分かりきっていたはずなのに……分かってはいるからこそ、現実問題として目の当たりにすると酷く心が痛む。

「それなのに兄さんや姉さんは自分が全て悪いって顔して、悪いことを悪いと認めて顔で謝っている。そんな事されたら、私は何もいえないよっ!!どうしたらいいのかわからないよっ!!」

「篝ちゃん……だから、その」

「嫌っ!!触らないでッ!!」

どう声をかけていいのか分からず、落ち着かせるに触れようとしたけど。

それはどうやら、まずかつたらしく、篝ちゃんにバシッと強く手を

跳ね除けられてしまった。

叩かれて跳ね除けられた場所が少しだけ赤くなって少しだけ痛い。でも、これ以上の痛いみを篝ちゃんは感じていてんだろう。いや、こんな風に私の物差しで篝ちゃんの感じてきた痛いみを図るのは間違っている。

図るまでもなく、篝ちゃんの感じた痛みはこんなものではないのだから。

そして、篝ちゃんは私達を鋭く睨みつけて……

「兄さんなんて……姉さんなんて……大嫌いッ！！！！」

「……ッッ！！……」

「……ッ」

篝ちゃんに泣きながら声で言われて私も同様して、唇を強く噛み締めてたけど。

流石の綾も動揺した様で身体を少しだけ震わせ動揺していて、血が滲み出そうなぐらい力強く握って握りこぶしを作っている。

流石の綾もこれは堪えたみたい。溺愛していた分、ショックなんだろうね。

『大嫌い』と言われてしまった事が。

でも、仕方ない。嫌われるのも憎まれるのも覚悟の上で私達は、世界にISを流れ出させて世界を捻じ曲げ新生させ創り変えた。

だから、言われてしまって辛いとか、心が痛いなんて思う資格はないはずなのに。

ないはずなのに……やっぱり、辛い……心が痛い。

悲しさからなのか、辛さからなのか、悔しさからなのか……多分全

部が混ざってからなんだろうけど、堪えて我慢しているはずの涙が今にも零れそうだ。

泣いちゃいけない。それにそれはとっても卑怯な事だから。謝って泣いて、済む問題でもどうにかなる問題でもない。

前の前で座って泣いている篝ちゃんだって、泣くのを我慢して堪えようとしたけど。でも、溢れる涙は止められず、でも泣き顔は見られたくなくて、俯いて声を殺して泣いている。

だからこそ、余計に私が泣いてしまうわけにはいかない。

私が泣いてしまうのは卑怯な事でもあるわけだし、それに私はこんななんでも紛いなりには、篝ちゃんのお姉さんだから、泣いちゃいけない。

けど、現実として目の当たりにすると、やっぱり辛いし心は痛い……どうしても、泣いてしまいそうになる。

こうなる事も予想は済んでいた。でも、体験をしたのは今回初めていつもそう、私は知識があつて予測が何通りも何十通りも出来ていても、体験や体感した事はない。

だから、こうして事実として予想していた類の事が起ると、酷いくらい怖いくらい、痛感して、今一度思い知らされる。

本当に自分がどれほど自分勝手な人間で周りに迷惑をかけて、酷いことをしてしまったのかを。逃げずに前へと進むのって、こんなにも大変なんだ。

反省はしても後悔はしないと誓ったはずなのに……後悔してしまいそうになって、心が折れそうになる。

弱くなつたな、私。

「大嫌い……大嫌い、兄さんなんて姉さんなんて」

「……………」

「大嫌い、許せない、憎い……だけど……」

「……だけど？」

聞き返して何だけど、二の次の言葉が怖い。

はたして、何を言われるんだろうか。

もう予想なんてつかないからこそ、怖くて不安になる。

篝ちゃんと言うか言わないかを迷っているみたいで、場が沈黙する。沈黙している雰囲気や空気は、重く暗く、私の不安を更に煽る。

「大嫌いで、許せないし、憎い……だけど、どうしてもそう強くは思えない。私は……」

「……」

また、言いかけて言葉を濁す篝ちゃんの次の言葉を息を呑んでただじっと待つ。

何を言われてもいいようになけなしの覚悟を持って。

「それ以上に兄さんや姉さんが大好き。大好きだから……どうしても、大嫌いで、許せないし、憎いとかって強くは思えない。やっぱり、私は兄さんと姉さんの事を愛しているから。だって……私達は兄妹なんだからね」

「……篝ちゃん」

「だから……沢山酷い事を言っただけど。その……仲直りしよっ」

「うん、うんっ！そうだねっ！仲直りしよっっ！」

目を赤くした涙目できこちなく笑みを浮かべる、篝ちゃんを抱きしめて私は言う。

嬉しかった、篝ちゃんの口から『仲直り』と聞けて。

絶対に聞けないと思っていた。だから、聞けて嬉しい。

心なしか、我慢して堪えている涙が溢れてきそう。

私が抱きしめると篝ちゃんは身体を私に預けてくれた。

思い出した。これが篝ちゃんの抱き心地だ、懐かしい。

変わってないな、抱き心地も暖かさも、前のまま昔のまま。

本当はずっとこうしていたかった。

だけどあの日から、こんな事は二度と出来ないと思っていた。

私は全てを投げ打って、手に入れたものを手に入れた。

だから、こんな風に出来なくても仕方ないと思っていた。

だけど、今はこうして篝ちゃんを抱きしめて、温もりを感じられる。

迷惑かけて、逃げて、少し遠回りしちゃったけど、やっとこうする

事が出来た。

至福の刹那を迎える事が出来た。

「ありがとう、ありがとうね、篝ちゃんっ！迷惑かけて……」

「謝っても許さないよ、そんな事させない。どうしても許してほし
いなら、今は何も言わずこのまま抱きしめて」

「うんっ！うんっ！」

ぎゅっと力を入れて私は篝ちゃんを優しく抱きしめる。

やっぱり、最後の最後まで言葉かたちにして謝ることは出来なかった。いや、謝らない方がいい。それはやっぱり、言葉かたちにしたら、“それで終わりにしてくれ”って言っているみたいだし。言葉かたちにして言うのは卑怯だ。こんなにも篝ちゃんに迷惑をかけて、苦しめているのに。謝るところでは済まない。それでも、謝りたいという気持ちは消えたいないし変わらない。だから、少しでもその思いが伝わるようにと、これからはずっと篝ちゃんを大切にしていこうそんな気持ちを込めるように、抱きついてくる篝ちゃんを包み様に抱きしめた。

綾はそんな私達を見て、嬉しそう目を細めて見ている。そんな綾の様子を見て、私と篝ちゃんは目を合わせ、アイコンタクトで意思疎通する。

「ほら、綾も」

「兄さんも来て」

「えっ、あ……うん」

少し戸惑った様子だったけど、綾がこちらへと近づいてくる。そして、綾が近づいてくると私達は……

「「えいっ!」」

「わあっ!」

近寄ってきたけど、正座して座っている綾の両腕を二人で引っ張って抱き寄せ、私と篝ちゃんて綾を抱きしめた。

綾は驚いたように声を漏らしていたけど、直ぐに状況を理解して、

私達を抱きしめてくれた。

「箒、ありがとうね。俺達を許してくれて」

「うっん、許してないよ」

「えっ?」

間抜け声が出てしまった。

そして、少し凹んだ。どうやら、思い上がっていたようだった。

そっだよね、許せるはずないよね、あんなことしたのに。

そう思っていると箒ちゃんは、小悪魔的な笑みを浮かべ言う。

「やっぱりまだ、兄さんと姉さんは。大嫌いで、まだ全部を許せない、憎いけど。それ以上に二人の事が好きだから、愛しているから。だから、許さないけど気にしない事にした」

「箒」

「これは許す許さないだけの問題じゃないから。まあ、許しているのと変わらない気がするんだけど。気にしないで。

でも、どうしても許してほしいなら、兄さんも今は何も言わずこのまま抱きしめて。兄さんとも仲直りだよ」

「仲直りだね、分かった」

そう言うと綾は箒ちゃんごと私も優しく抱きしめる。

そのまま二人で抱きしめあうと、箒ちゃんは嬉しそうに微笑んだ。

篝ちゃんと二人で抱きしめあうのも、もちろん最高。

だけどやっぱり、私達三人は兄妹なんだから、三人でこんな風に抱きしめあわないと。

三人で至福の刹那を味わいつくす様に。

そうしていると私と篝ちゃんは、安心したからなんだろうか、我慢して堪えていた涙が零れ、声を小さく漏らして私と篝ちゃんの二人して泣いた。

それは悲しい涙ではなく、嬉し涙。二人の泣き声が、道場内を満たしていた。

そんな私達を綾は、抱きしめながらも優しく背中を優しく撫でてくれていた

長い間、ひとしきり私と篝ちゃんは泣いて泣き止むと、もう一度三人でぎゅっと抱きしめあった。

その状態のまま篝ちゃんが顔を上げて言った。

「大好きだよ、兄さん、姉さん」

「うん、俺も大好きだよ、篝」

「大好きだよ、篝ちゃん」

そして、また三人で抱きしめあう。

いろいろと迷惑かけて、逃げて、少し遠回りしちゃったけど。

途切れていた絆がもう一度、結びつき、今この刹那瞬間、やっと昔の様な兄妹に戻れたのを実感出来たのだった。

…

第三十一話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十一話 ？

箒との再開編でしたが。

これは酷いっ！特に後半。内容がないよ〜なものになっている（汗）
一日作業の実力や結果はこんな物か。

箒、明らか小一の話し方じゃない。大丈夫かな？これで。

小学生と中学の記憶は記憶喪失ですっぱり抜けてしまっている、その小一の話し方とかが分からない。

というか、アホに大人ぶっている高校生みたいな話し方に箒さんをしてしまった。

とりあえず一応、完全にこの回で箒と束さん、綾君は和解して仲直りしました。

ただ、やっぱり何度も言うけど最後の方は駆け足の早い展開となつたしまった。

最後の箒との許す許さない話は酷い。どうしてこうなった。

あれはまあ、箒なりの一線の引き方ですね。

本当は凄く許していけど、そう簡単には許せる事ではないという感じ。

最後まで謝らせなかった理由は作中の通りです。

謝罪の想いを言葉という形にしたら、

“それで終わりにしてくれ”って言っているみたいで嫌なんですよね。

この言葉は他人の請負なんですけど。

箒と束さんの問題は、謝って済む問題ではないですからね。謝ったから悪化しますし。

謝って済むなら、原作でもとつくに仲直りしていますよ。特に『多くを語らず謝る』は私が書く分には論外です。

言い訳しない分、見栄えはいいですが、謝罪で逃げているだけに見えるから。

要約すると『謝って済むなら警察はいらない』です。

まあ、謝っ済ますのは嫌いなだけなんですけどね。

今まで父には『謝るなら、代わりに行動でその誠意を見せろっ！』と着つく言われていますから。

関係ないですね。すみません。

そして、前書きで言った『この回で最低な事』とは。

ずばり、この時期での第との和解です。一見、いい話の様ですが。悪い目は早い内に摘んでおけの様に書いていて思えましたし。

まだ、家族はバラバラになってないですし、政府関係の転居もなく、政府からの執拗な監視と聴取を繰り返されもさせていませんから。精神的な負担もこの時点ではまだかなり軽い方ですから。

まあ、その政府関係も綾君にはいろいろと頑張らせるつもりです。

でも、これで愛に溢れた篠ノ之姉妹の誕生ですっ！

これで原作時、仲のいい篠ノ之姉妹が見れますよっ！キャッホーイッ！

綾君の篠ノ之姉妹ルートも解禁だwww(え

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘or誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十一話 ? (前書き)

夏休み編は基本的にほのぼのとした話が多いです。

シリアス関係は箒と両親以外なら、水城夫妻と関わったらなるぐらいです。

ほのぼのとした回なのですが、ロリ箒は箒役の声優である日笠さんのロリボイス全開でよろしくです。

イメージと感の例を上げるならロウきゅーぶの永塚紗季とか

ロリ箒の口調に少し(?)違和感を感じると思いますが、ちゃんと理由があるので後書きを参照を。

それではどうぞっ！

第三十一話 ?

東視点

篝ちゃんと再会して話し合い和解と仲直りした後、私達三人は道場にて近況報告も兼ねてお話をしていた。

例えば、学校での事や休日の過ごし方などいろいろ。

私達の話す話題はISを嫌っているだろう篝ちゃんを気遣って、ISの話題は極力さけて、学園でのことや休日のことなどを篝ちゃんに話した。

一方、篝ちゃんも学校の話や休日のことなどを話して聞かせてくれるけど、必ずといっていいほどいつくんの名前が出てくる。

篝ちゃんがいつくんの事を一人の男のこととして好きなのも分かるし、口出しもしないし、嬉しそうに話している篝ちゃんを見れて私達までも嬉しくなるけど、やっぱり、少しだけ複雑。

どんな組み合わせよりも、篝ちゃんといつくんのカップリングは鉄板である事は変わらない。

だけど何だか、篝ちゃんを見てみると、いつくんに篝ちゃんを任せるのは勿体無い気がしてくる。いつくんにはせめて、あの無意識フラグ生産病を何とかしてほしい。

他の女困ってくる癖に篝ちゃんまで手を出そうなんで豪語強談。篝ちゃんのお嬢さんになるなら、いい男になってもらわないと……と、綾と同じくシスコンの私は強く思う。

そんな風に楽しく近況報告も兼ねてお話をしていると、誰かが近寄ってくる気配を先に綾が察知して様で口を閉じ黙ると私たちも釣られて話すのをやめて黙った。

そして、道場に人が一人入ってきて私たちの方までやって来て、座っている私達を少し見下ろすように見ている。

「話は終わった様だな」

「はい。終わりました」

道場に入ってきたのは父だった。

入ってきたの同時に目を逸らして俯いてしまったけど。

俯き様に一瞬だけ見えた父の服装は来た時に見た神職装束ではなく、外行きの私服だった。

そういう出で立ちをしているけれど、以前私と綾を見る目は変わってない。

「あの一つお聞きしたいのですが、よろしいですか？」

「何だ？」

「篠ノ之のお母さんが家に居ないようですが……どちらに？」

と、父に綾は問いかけた。

それは私も気になっていた。

篝ちゃんからの話から、体調を崩して寝込んでいたというは分かったけれど、家には母の気配はない。何となく、家にはいない事は分かるが。

なら、何処に居るのだろうか。

「ああ、それなんだが。君達は水城さんの所に帰るのだろうか。なら、何時頃までいる？」

「えっ？あ、えーと……水城夫妻には夏休み一杯までいる様にと言

われてますので、夏休み一杯は」

「そうか……」

綾の言葉を聞いて父は何やら深く考え込む。

こんな事を聞いて一体何のつもり、どうするつもりなんだろうか。それに聞いた内容と母が家にいないのどう関係が？

「なら、悪いが。水城さんの家でもこの家でもいいから、八月のお盆の初め……夏祭りの準備まで筈の面倒を見てはくれないだろうか？」

と言う父の言葉に事情を知っている筈ちゃんは黙り、私は身体を少しだけ震わせ驚いた。

「分かりました、喜んで。ですが……どうして？」

「実は……妻は体調をここ最近、ずっと崩していて夏風邪も引き、実家の方で九月頃まで療養しているんだ。だから、今日から盆の初め、夏祭りの準備まで妻の傍に着こうと思っているんだ」

「そうなんですか……分かりました」

父の言葉に事情を知っている筈ちゃんは黙り、私は肩を少しだけ震わせ驚いた。

母が居なかった理由は……母方の実家を療養しているからなのか。でも、これも私のせいだな。夏風邪は兎も角、体調を崩しているのは私のせい。

母が心病んで体調を崩して床に伏せているのは私のせい。

私がISを作ったばかりに……後悔はしてないけど、こういう面ではやっぱり反省みたいなものはしてしまふ。
紛いなりにもここまで私を育ててくれたのは母であって、その母に私は恩を仇で返すようなとっても酷い親不孝をしてしまったのだから。

それに父の言葉にも驚いた。

私達を今だ深く恨んでいるだろうに、私達に篝ちゃんの面倒を見てくれと言った。

あまつさえ、この家でも面倒を見てくれないとさえ言った。つまりそれはこの家を使ってもいいと言ってくれているようなもの。どういう意図があるのかは知らないが、それは篝ちゃんを氣遣っての父なりの親子だった私達への氣遣いなんだろうと勝手に解釈しておく。

「そうか……それはよかった。生憎と親戚連中もこの時期は忙しいらしくて、困っていた所なんだ。だから、そう言ってくれると助かる。今すぐにも出ないといい時間帯に向こうに着かないからな」

「そうですか……」

「……お、お見送りするよ。お父さん」

「ありがとう、篝」

そう言って立ち上がる篝ちゃんへの後に続くように横に置いてあるポストンボックを取って立ち上がり。

篝ちゃんの後を着いていくように歩いて玄関まで着いていき、私の場合は形だけ見送りをする。

玄関に隅の方に手に持っているポストンバックを置くと、置いた方にと反対側には別に大きなポストンバックがあり父はそれを取り靴を履く。

父と篝ちゃんが先に玄関を出たのを確認すると靴を履いて玄関を出る。

「それじゃあ、篝。行ってくるよ、二人にあまり迷惑をかけないように。それと神楽舞の稽古はちゃんとしておくように」

「分かっている。お母さんによろしくね」

「ああ、篝はいい子にしているとお母さんに伝えておくよ」

「うん、ありがとう」

父は篝ちゃんと視線を合わせて話す。

話している表情は、私達を見ていると時よりも、比べるまでもなく柔らかく、優しい父親の表情をしている。

よかった……篝ちゃんにはまだ優しい父親で父がいてくれて。それだけで心の底からホッとする。

母に続いて父までもが私のせいで篝ちゃんに何かしらの影響を与えていたら割に合わないもん。

「それと綾君」

「はい」

手招きされ綾が父の方に行く。

何やら耳打ちする様に小さな声で話している。

父は私達を見るときは瞳をして表情は、何処か強張っていて険しい

顔をしてる。

対する綾は真顔で父の話の話を聞いている。

何を話しているんだろう。

話し声が小さすぎて聞こえないけど、いい話をしているように見えない。

やっぱり何か嫌味かきつい事を言われているんだろうか。

綾が無表情の時は大抵そういう事を言われたりしているときだから。

「……姉さん、変な顔をしているよ？何かあった？」

「えっ？あ、ううん……何でもないよ」

そういうとまだ心配してくれているけど、篝ちゃんは気にはしないようにしてくれた。

いい子だね。と言うか、いけない。綾のこと心配して、考えすぎてポーカーフフェイスが崩れていた。

聞こえなかったわけだし、気にしても仕方ない。多分言ってくれないだろうけど、後でこっそり聞けばいいや。

「それじゃあ、行ってくる」

「うん、行ってらっしゃい。お父さん」

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい……お父さん」

篝ちゃん、綾の後に続いて、何とかギリギリ名前つきで言えた。

父と読んだのはいつ振りだろうか。そんな事は定かではないけど。

物凄く緊張している。心拍数が速い。

一度、父と呼ぶだけでこれとは……先が思いやられる。もっとも、父と呼んだ声が小さくて父には聞こえてないみたいだけど。

そして、私達三人の言葉を聞くと父はそのまま行ってしまったのだった。

「行っちゃたね」

「そうだね。とりあえず、家の中に入ろうか」

「うん、そうだね」

篝ちゃんと綾が話して家の中へと戻って行く後を付いて私も着いて家の中へと戻って行く。

玄関で靴を脱ぎながらふと、思う。

元々五大家族で母は元々この家には居らず、父も先ほど出て行ったとなると、今は本当に私と綾と篝ちゃんの三人だけか。

「ねえ……兄さん、姉さん」

「何かな？篝」

「今日は……どうするの？」

「そうだね……」

少しだけ考え始める綾。

「篝ちゃんが聞いてきた。』どうするの?』」と言うのは、今日何処に泊まるという事だろう。

父からは家に泊まる許可は一応は貰った。元々は篝ちゃんと会って話したら、奈々師匠の家に直行という計画だった。

私としては、この家でも奈々師匠の家でもどっちに泊まってもいいけど。

篝ちゃんのことを考えるなら、この家の方がいいかな。それにどっちでもいいとは言ったけど、この家に泊まるのもいいかもしれない。久々の実家だし、泊まる機会なんてこれを逃すとないかもしれないから。

そして、考え出した綾の結論はというと。

「篝さえよければ、この家に泊まりたいと思っているんだけどいいかな? 束もいい?」

「私もいいよ。久々に帰ったきた事だし、泊まらないと勿体無いからね。いいかな? 篝ちゃん」

「うんっ! 全然いいよっ! むしろ、ここは兄さん達の家でもあるんだから遠慮はおかしい」

「ははっ そうだね。なら、遠慮なくお泊りさせてもらおう」

「そうだね。私も遠慮なくお泊りさせてもらおう」

「嬉しいっ。なら、私着替えてくるから。姉さんたちはリビングの方でも待っていて」

バタバタと可愛らしい足音を立てながら篝ちゃんは、ずっと身に纏

っていた剣道着を部屋へと着替えに行った。

「さて、俺達は先にリビングに行つて箸を待とうか」

「それなんだけど……少し遠回りして久しぶりに私達の部屋でも見てからリビングに行かない？少し箸ちゃんを待たせる事になつてしまつかもしれないけど」

「そうだね。少しだけ見ようか」

そう言つて私達はリビングとは別方向に歩き出す。

歩き出すと自然にどちらからともなく手を繋いでいる。

嬉しい……些細な事だけど何だか、今日頑張つた事の自分へのご褒美の様に思える。

「懐かしいね」

「そうだね」

私と綾の部屋は向かい合う様にあつて、先に私の部屋から見てみる。

部屋の中は家を出たときと何も変わっていないかつた。

もう二度と帰つてこないだろうと思つた私は、家を出る際にある程度の必要な家具や日用品・雑貨等は全て奈々師匠の家に行つた為、部屋には何も無い。

空き部屋状態となつており、正に伽藍堂のように何も無い部屋。

それは綾の部屋も同じ。

何も無い、伽藍堂のように何も無い部屋、空しく寂しさを感じる空間。

けれど、部屋の雰囲気を感じながら、少しの間だけ目蓋を閉じると脳裏に蘇る。

懐かしい光景の数々が。私はこの家で綾と篝ちゃんと一緒に育って、辛い事も、悲しい事も、苦しい事も、楽しい事も経験した。

どんな言葉を並べても、どんな嫌っても、この場所が些細なトラウマの地となっても、ここが私の育った実家である事は、変わりようがない。

そんな風に思っていると、ちよっぴり感傷的になってしまった。

「ん、満足。もういいよ」

「なら、リビングの行こうか」

満足して綾に手を引かれ私達は、リビングへと向う。

リビングに向うとまだ、篝ちゃんは来ていなかった。

まだ、お着替え中かな？

ふとリビングを見渡してみたけど、ここも変わってない。

電気はつけてないけど、外から少しだけ入り込む太陽の日の光で充分に明るい。

テレビはついておらず、物音一つしないので妙に静かで何処か落ち着かない。

「そうだ、束」

「ん？」

「一人で頑張ったね。偉いよ」

「あっ……ううん、そんな事ないよ。私は綾と一緒にだから頑張る事

が出来た。私一人なら絶対に頑張れないし、それ以前に実家いえに帰ってこようとも思わなかった。全部、綾のおかげだよ」

「それでも頑張ったのは、束だよ。俺は何もしてないし何も出来なかった。束は本当に頑張ったよ」

そう言っただ綾は褒めるように優しく私の頭や髪を撫でる。

気持ちいいけど、落ち着かずそわそわしていたのが和らいでいく。だけどやっぱり、綾は変なところで謙虚だな。

そこが綾のいいところなんだけど、変に謙虚過ぎるのも考え物だな。でも、頑張ったのなら、もう一つだけ私にとって小さなご褒美を貰っても罰は当たらないよね。

「なら、現金かもしれないけど……ご褒美いいかな？」

「ご褒美？」

「そ、ご褒美。ぎゅっと抱きしめて？」

「うん、それぐらいならお安い御用だけれど」

「ありがとう、綾」

抱きついてみると綾は抱きとめてくれて優しく抱きしめてくれた。でも、相変わらず頭を撫でる手や髪を楽しそうに梳く手は止まらない。この、髪フェチさんめっ。

髪を梳かれるのは嫌じゃない嬉しいけど、こそばゆい。

抱きしめられていると自然と肩に入っていた力が張ってきた気が抜けて、抱きしめながらも綾に身体を預けリラックスする。

そして、無意識にか綾の匂いをクンクンしていた。それが綾の匂いが私を更にリラックスさせてくれる。

もう、鳥居の前に立った時の様な気持ち悪さはなくなり、肩に入っていた力は抜け、張っていた気も抜け楽になっている。

本当にこうして頑張れたのも、頑張った結果篝ちゃんと和解して仲直りできたのも、全部全部綾のおかげ。

綾は、何もしてないし何も出来なかったと言っているけど、そんな事は絶対ない。今回もまた、綾に影ながら助けられた。

綾がいなかったら、こうして実家いえに帰っている事も、篝ちゃんと和解して仲直りすることもなかった。

それどころか、綾がいなかったらこんな事をしようとは微塵も思わず、なあなあに生きていただろう。

例え私が本当に今日頑張ったとして割りたい的には半々の50%弱だけで、残りのもう半分の50%強は綾が頑張ってくれた。

だから、頑張ったのは私だけじゃなく、もちろん綾も頑張ってくれた。何もしてないし何も頑張っていないなんて事はない。

私も背一杯、綾の今日一日の頑張りを労って褒めよう。私にしてくれているように私も同じ様にそれ以上に。

そんな思いを込めて抱きしめ、抱きしめあっていると……

「お待たせ、待つ……あ……」

「「あ……」」

「あつと、えーと……その、ごめんなさい、お邪魔だったよ……ね？」

「いやいや、ちょっと待ってっ」

「そうそうっ。出て行くこうとしなくていいから、篝ちゃんっ!」
すっかり忘れていた……篝ちゃんの事を。

いや、忘れるつもりはなかったんだけど、綾の事ばかり思っていたら、つい篝ちゃんが居るといふ事について疎かになっていた。反省。兎に角、パツと離れて、気を使ってくれて出で行こうとした篝ちゃんを引き止める。

妹の前で姉と兄が抱き合っているという、何とも恥ずかしい姿を見られ恥ずかしくて顔が少しだけ赤くなった。

そういえば……篝ちゃんには、まだ言ってなかった。

私と綾がその……こ、恋人になったということ。

今更かもしれないけど、『恋人』ということを改めて思うと、何か
気恥ずかしい。

気恥ずかしいけど、篝ちゃんにはちゃんと報告しないと。

この事については初めから報告しておきたいと思っていたし、篝ちゃんにはあまり隠し事とかもしたくないしこの機に言っておこう。

「その、見ちゃってごめんね？兄さん、姉さん」

「いや、気にしなくても大丈夫だよ。俺達の方こそ、恥ずかしいところを見せてしまったね」

「にやはは……そうだね。それで篝ちゃん、少しお話……と言うか、報告があるんだけどいいかな？」

「報告？分かった」

「じゃあ、とりあえず座ってお話しようか」

篝ちゃんにテーブルに座るよう促すと先にテーブルに付き、その篝ちゃんの向かい側に私と綾が座る。

何を報告するかは直接は綾と事前に話していないけど、アイコンタクトは取っているのだから何を報告するか綾は分かってくれているのだ。

ありえないけど万が一、伝わってなくても綾だから話をあわせてくれる。

「えーと、それで報告って?」

「実はね……篝ちゃん。私と綾は付き合っているの。つまりは……」

「俺と束は恋人同士ということなんだ。篝」

「へっ? 嘘っ!?! 本当っ!?! いつもの悪ふざけとかじゃなくって?」

「!」

「ほ、本当ですっ!」

信じられないといった感じの篝ちゃんに今一度確認するように言われると、つい語気を強めながら言ってしまった。

いつもの悪ふざけと疑われてしまった。

まあ、昔はそういう事をよく私は篝ちゃんに言っていたりしたから、信じられないの無理ないか。

でも、この事は紛れもない事実。だから、いつもの悪ふざけでも嘘でもない事実。

そして、篝ちゃんは今回のことは紛れもない事実ということを知り、くりと理解していつている様子をしている。

「本当……みたいだね。あんな風にラブラブで抱き合っているのが何よりもの証拠だね」

「あっはは……お恥ずかしい」

「そっか、兄さんと姉さんが恋人か……」

何処か篝ちゃんは寂しそうに呟く。

あっ……思い出した。

篝ちゃんの初恋の相手って、綾だった。

ちーちゃんからも好かれて、篝ちゃんまでもか……

流星は色男で私の婿。モテモテだね、ちょっと妬いちゃう。

でも、その初恋を私は今この瞬間、散らせてしまった。

仕方ないことだけ何だか申し訳ない。言葉で謝るのはあまりよくないから、心の中で『ごめん』とそつと謝る。

「とってもお似合いだと思うよ。二人は紛れもない『恋人』だね。

おめでとう。えーと、未永くお幸せにね。兄さん、姉さん」

「ありがとう。篝」

「あ、ありがとう。篝ちゃん」

満面の笑みで祝福されると何だか恥ずかしくなって顔を赤くなる。嬉しいよ……ッ篝ちゃんに認めてもらえた。それが嬉しい。

「ふふっ、珍しい。姉さんが顔を本当に真っ赤にしてるなんて」

「あっはは、そうだね」

「も、もおっっ！二人ともっ！からかわないでよっっ！」

祝福されてしまったけど、今までのお返しといわんばかりに篝ちゃんにからかわれてしまった。

篝ちゃんでも、こんなこと言ってからかっているんだ。意外というか新たな一面だ。

と言うか、篝ちゃんは全体的に柔らかくなった。口調も表情なども今まではちーちゃんのマネというか憧れて影響されて、凜とした感じだったけど、とっても柔らかくなった。

これも綾が与えてくれた、移り変わる刹那の様な変革なんだろう…
…そう私は思う。

「何だか姉さんが可愛い。コホン、兄さん」

「はい、なんででしょう」

「兄さんが知つての通りの性格の姉さんですが。末永く、幸せにしてあげてください。よろしくお願いします」

「はい、分かりました。お姉さんは私が末永く幸せにします。それをここにお誓いします」

「も、もおっっ！からかわないでっ！」

何と言うか変な例えをするなら、姉を嫁に出すしっかりもの妹とその姉を貰う婿の会話の様に二人が頭を下げて変な敬語口調で話し、

更に二人にからかわれてしまった。

二人が変な敬語口調で話してからかかってくるから何か調子が狂う。恥ずかしいし、何かくやしい。

柔らかくなったことで篝ちゃんて本当いい性格になったと思う。元々も、こういう性格だったんだろ。

けど、くやしいな。

ふふんっ こうなったら、篝ちゃんに仕返しだ。

「そっだ……篝ちゃんはいっくんとはどうなの？」

「それは俺も気になるね。兄として妹の事を知るのは当然だ」

「に、兄さんまで……姉さんニヤニヤしているし」

「それでどうなのかな？いっくんとはラブラブ？」

「ラブっ！！？そ、そ、そ、そんなことないっ！と言っか、どうして一夏がそこで出てくるのっ！？一夏とはなんでもないからっ！」

「本当かな〜 前はラブラブだったのにねえ〜」

「〜っ！〜！」

篝ちゃんが恥ずかしそうに真っ赤になってる。

新しい一面の篝ちゃんもいいけど、こうして可愛らしく真っ赤にしている方が篝ちゃんらしい。

真っ赤になっている表情まで恋す乙女の表情。おませさんだね。

ただ、隣に居る綾の表情が温かく見守るような笑みを浮かべている

よつで。

その実、何処か絶対零度の様に冷たく感じるのは気のせいかな？

「一夏とは仲良くしてるけど……」

「仲良くってラブラブして？」

「姉さんっ！いい加減にしてよっ〜！」

「にははは 篝ちゃんが可愛らしくてつい、ね」

「まあ、一夏と仲良くしているよつで何よりだよ。ただ、一夏にはお話が必要みたいだね」

「に、兄さん……？笑顔が怖いよ？」

「綾は相変わらず、シスコンだね〜」

「シスコンで何が悪いっ！」

「もぉ〜兄さんたら」

シスコン宣言している綾に篝ちゃんは呆れている様でそれでいて嬉しそつに言っ。

こんな風に楽しく何でもない様な話をして笑いあったりする“何気なけども楽しい日常”を過ごすのはいい。

昔に戻ったみたいで嬉しいし、もしかするとありえなかった瞬間でもあると思うと尚更嬉しい。

こんな“何気なけども楽しい日常”の“刹那を永遠に味わいたい”

という綾の渴望思が強く分かる。

本当にこんな楽しい時間の刹那を永遠に綾と一緒に味わっていたい。だから、もう二度とこんなに刹那一時を今見れている箒ちゃんの笑顔を失わないように、私もいろいろと頑張ったり努力しないと。

「そつだ。肝心なことを言い忘れていた。兄さん、姉さん」

話と話の雰囲気切り替える様に箒ちゃんが問いかけてきた。

「何だい？」

「何かな？」

「お帰りなさい」

そう言われると私と綾は目を丸くした。

それと同時に『ああ、帰ってきたんだな』という実感がわいてくる。言葉つてものは、本当に強烈だ。

実感が沸いて、帰ってきたということに染み染みする。

箒ちゃんが『おかえりなさい』と言ってくれたんだ。

なら、私達が返す言葉ただ一つ

「「ただいま」」

久々に実家いえに帰っていたという実感と懐かしさを噛み締めるように私達は言った。

…

第三十一話 ? (後書き)

というわけではいかだったでしょうか第三十一話 ?

私なりのほのぼのとして回でした。

父親が出て行き、ようやく三人きりです。夏休み編はこれから。

ただ、母が居ない理由や父が家を空けた理由はご都合主義過ぎたかな？

理由としては東さんと母が会えば、ヒステリックに叫ぶ姿しか想像付きませんし

父が家を空けて二人に箒を任せたのも、微かな子への信用です。信頼はないです

そしてついに綾と東さんが付き合い『恋人関係』になったという事を箒に報告しました。

バレたという方が正しいですがこれで認められました。

残るは千冬さんだけです。難しい、展開的に、プロットの先なので。

箒の初恋の相手は綾君でした。モテますね。爆発しろっ！！

箒の口調や雰囲気違和感を覚えたり、感じたりしたと思いますが理由は簡単、今までかかっていた肩の荷が降りたからです。

だから、柔らかくなつてああいう口調と雰囲気等になりました。

違和感等を感じたり、思ったりすると思いますが、『これこれでG』と思って頂ければ。

ちなみにモデルは怒りの日の桜井螢の幼少期がモデルです。

分からない方はググるなり、箒が柔らかくなつた感じだと思って頂ければ大丈夫です。

本音を言つとロリ箒で原作みたいな口調を続けるのは辛いだけなん

ですけどね（汗）

一夏の前では原作みたいな口調です。原作時には表立っては凜とした口調にします。

うちの設定ではこの柔らかい筈が素で凜とした筈は千冬さんへの憧れと言う設定です。

本来のプロット、構成では。この一話で。

三人きりになる 筈に報告 夕食編 “お風呂編” という構成でした。

ただ、長くなって夕食編までいかなかったorzお風呂編とか書きたいよっ！！

ちなみに入るのは筈と束ですからねっ！

綾君は（変態）紳士なんで風呂凸とかはしませんよ……多分ねwww
しないよっ？

地の分の文章的にもおかしい回でしたが楽しんで頂ければ幸いです。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘or誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十一話 ? (前書き)

私の活動報告を見た方は知っているとと思いますが。

今回でいこうと思っていたのですが、構成よりも長くなって、入りきらない様にもなつて

篠ノ之姉妹のイチャラブお風呂編が次となりましたorz申し訳ない。

DSがよくする焦らすプレイだと思ってください(苦笑)

それでは夕食編とぞっつ!

第三十一話 ？

東視点

やっぱり、篝ちゃんも女の子でそういう恋話に興味ある年頃なのか。根掘り葉掘り、綾と恋人になってからの事を聞かれて、綾も交えて話せる範囲で話していた。

篝ちゃんの聞いてくれる態度は、目を輝かせ面白そうにして相槌をたまに打ってくれたりといった感じで聞く態度はよく。
話している私も気分がよくなってつい全年齢対象外の惚気話話も話してしまいそうになる。綾に止められたけど。
まあ、それでも惚気すぎてたまに物凄く呆れられた顔もされたんだけどね。

「昔からだけど。姉さんは本当に兄さんの事が大好きだね」

「うんっ 大好きだよ だって、綾がいない世界なんて価値も意味もないんだから」

「わあ〜つまた、凄い発言。愛されているね、兄さん」

「そうだね、とっても嬉しいよ。束の言っている言葉には俺も同意見だ。束のいない世界なんて価値も意味もない。俺の世界は束があつて初めて成立しているからね。俺も束が大好きだ」

「もお〜綾たら〜っ」

「何だか……二人の世界に入っている。ヤンデレカップル？」

めちやくちや凄い事を聞かれた。

私がヤンデレなのは自覚しているけど。カップルって事は綾もか。そういう傾向はあるね。でも、ヤンデレカップルか……お揃いだ、嬉しい。

と、思っていたら……

「違う違う。ヤンデレなのは東だけ。と言うか、そんな言葉何処で覚えてくるの？」

真っ向から綾は否定した。

まあ、アレだね。『認めたくないものだな、若さゆえの過ちを』
って感じで認められなんだろうね。

綾も自分が『ヤンデレ』なのを認めちゃえばいいのに。そうすれば、私とお揃い。奇妙で恐ろしいお揃いだけど。でも、お揃いならある程度なんでも言いや。

それにしても、『ヤンデレ』なんて言葉を何処で覚えてくるんだろ
うね。

小一の女の子が覚えそうな言葉では絶対無いし。

奈々師匠辺りが篝ちゃんに吹き込んでいそう。

私もそういう変々な事を吹き込まれた経験あるから。

「えっ？奈々さんが言っていたんだよ。『あの二人はヤンデレカッ
プルねえ』って」

「あ、やっぱり」

「はあ〜〜そうなんだ。あの夫婦、一回屋根高く吊るしてやる」

「あっはははっ、やるならおじ様だけね。奈々師匠はダメだよ？」

「分かっているよ。馬鹿師匠は吊るした後、足に鉄筋でも付けて深
海に沈めてやる」

「でも、そんな事をしてもおじ様なら数秒で浮上してきそうだね。
かなりの歳なのに同じ人間か疑いたくなる時があるからね」

「俺はあの人を同じ人間だとは認めない。変態人間だ」

「ふふつ。そうかもしれない。あっははは」

楽しいな……本当に。

こういう、“何気ないふとした幸せな一時”は、
何気ないから……幸せに楽しく感じるんだろつ。

夕暮れ時、仲良し三兄妹が仲良く楽しく恋話などの雑談。

うん、素敵な一時の素敵な一枚絵だね。

本当にこんな事はありえないと諦めていたから、今という刹那一時を
実感しているとシミジミしてしまう。

「そろそろ……夕食の買い物に行った方がいい時間帯だね」

ふと、リビングの壁に賭けてあるアナログの針時計を見ると夕
方の五時前。

かなりの時間、お話していたんだ。

五時前だからそろそそ買い物に行かないと夜ご飯が遅くなる。

丁度、スーパ系の店はこの時間帯はタイムセールだろうし、行くな
ら今のうち。

一つ思ったけど……篝ちゃん、今までご飯どうしていたんだろつ。

母は倒れて床に伏せっでいて、料理をしようにも出来ないはず。第一、今は母方の実家に帰っでいるはずだし。

父は本当に簡単な料理しか作れないから……本当に今までどんな物を食べていたんだろう？

「変なこと聞くけど……簞は今までご飯はどうしていたの？」

「ん〜お母さん調子悪くていないから、貰い事のそうめんをよく食べた。たまにお父さんが作っでくれて……後は一夏が稽古しに来た日は咲夜さんがよくご飯作っでくれたよ」

同じ事を綾も考えていた様で私の変わり聞いてくれた。

ほっ……よかつた、簞ちゃんはちゃんとしたものを食べられている様だ。

咲夜さんが来てご飯を作っでくれたのなら、少し安心だ。あの人、奈々師匠の料理の一番弟子で調理師免許持っでいるぐらいお料理上手いからね。

咲夜さんは、美人でお料理やお掃除を初めとする家事なんでもござれの完全で瀟洒なメイドさんだけど、おじ様に心酔して愛してしまっでいるジジコンな残念美人。

おじ様に心酔してなかつたら、普通に結婚して家庭持てるのにな。まあ、私が口出すような事じゃないし、わりとどうでもいいからどうでもいいけど。

けど、いつくんも毎日稽古してくるわけじゃない、当然な一日二日は来ない日だっである。

だから、当然咲夜さんが毎日お料理を作っでくれない日だっである。そういうわけだから、何でもいいから簞ちゃんの好きなものもしくはこれが食べたいっでリクエストしてくれたものを作っで食べさせ

てあげたいな。

「そうか……なら、今日の夜ご飯は何がいい？」

「えっ？兄さんが作ってくれるの？」

「そつだよ。箸が好きなもの……今食べたいものを何でもどうぞ」

「食べたいもの……？んーと、んーとね……あっ！」

「何かな？」

「兄さんが作ったシチューが食べたいっ！」

ある意味、篝ちゃんらしいものをリクエストしてきたな。
綾が作ったシチューは美味しいし、篝ちゃんの好物の一つでもある
んだけど。

この季節にシチューか……暑そう。

「いいけど……この時期にシチューは熱いんじゃないかな？」

「クーラーかけたらいいんじゃない？」

「いや、そうだけどね、束。暑いでしょう」

「ダメなの……兄さん？」

「OKッ！お兄さんに任せなさいっ！」

「あっはは……」

箒ちゃんが不安そうに上目遣いで見つめると綾はサムズアップ付きで快く承諾した。

流石、シスコン、妹には甘い。呆れた笑いしか私は出せなかった。

と言うか、箒ちゃんが強力になつてきたな。

上目遣いで見つめるのも奈々さんが教えたんだろっけど、上目使いをしてくるだなんて。箒ちゃん……恐ろしい子ッ！

これは下手したらちーちゃんよりも強力なライバルになりそう。もちろん、恋のライバルとして。

「姉さんもシチューでいい？」

「……あつ、ううん。いいよ」

「どうかしたの？」

「いや……私も何か箒ちゃんに作ってあげたかったなと思って」

お料理上手な綾が料理を作ってくれるのなら、正直私の出番はない。綾は私のお料理の一番目のお師匠様であるんだから、綾に任せただけがいい。

お手伝いとかせてもらっても足を引っ張って、足で纏いになるかもしれないし。

「なら、シチュー作るの手伝ってよ。そうすれば束も一緒に作れる」

「でも、足手纏いになるじゃ……」

「何を言ってるだ。そんな事は絶対はないよ。俺は束と箒の為の

シチューを作りたんだ。それで充分だろ？」

「うん、そう…だね。私も張り切っちゃおうよ」

「姉さん、幸せそう」

「幸せだよ」

幸せ。こんな風に気遣ってもらっていると『ああ、綾は私の事をちゃんと考えて大切にしてくれているんだな』と感じて、小さなことだけど大きな幸せを感じる
それに綾にあそこまで言われたんだ。力の限り頑張らないと。
基本的な事は綾が全てやっちゃおうから、細かいサポートなどのお手伝いを張り切っちゃおう。

「それじゃあ、買い物に行こうか」

「うん。兄さん達はお金あるの？」

「あるよ。IS関係で私達はいろいろと貰えるから」

「ISって凄いんだね」

「凄い反面。危険でもあるんだけどね。まあ、そんな事は置いといて。バビューンっとう行こうか」

「うん」

お財布など簡単な手荷物を持つと家の戸締りをちゃんとすると、私達は夕食であるシチューの具材を求めてスーパーへと向い始めよう

とする。

「あっ！そうだ、皆で手繋いでお買い物に行こうよ」

「手を繋ぐの？」

「そうだよ ほらほら、繋いだ繋いだ 前はよく繋いでいたしょう？」

「そうだね。ほら、兄さんも」

「うん」

そうして三人とも自然な感じで手を繋いでスーパーへと歩く。

並び順としては、箒ちゃんを真ん中にして、私と綾が挟むようにして手を繋いでいる並び順。

久々に箒ちゃんの手を握ったけど、手は小さくて柔らかい。握り心地がとってもいい。

綾と手を繋ぐ時はまた別の安心感がある。

こうして箒ちゃんも交えてお買い物に行くのは本当に久々。

懐かしいな……昔はよく、こんな風に三人でお使いやお買い物に行っていた。

何だか久々すぎて近くのスーパーに行くだけなのに、ずっと楽しみにしているテーマパークに行っている様な気分みたいに、とっても楽しい。

「楽しいね〜ッ箒ちゃん、綾」

「うん」

「そうだね」

三人仲良く手を繋いでスーパーへと向っている私達を夕陽が照らし、三人の三つの影が地面に仲良く並んでいた夕暮れ時だった。

・
・
・
「「「ただいま」」」

家に帰ってきて玄関で三人一緒に揃って言うと

「「「おかえりなさい」」」

とまた、三人一緒に揃って言った。

これが昔からの決まり文句みたいなもの。

神職である両親は基本的に忙しいらしく、よく買い物《お使い》を頼まれて、家に居なかつたりする事が多かったのだ。

こんな風に決まり文句みたいなものを言うがお決まりとなった。

「さてと、それじゃあ、遅くならないうちに作ろうか」

「うん。箒ちゃん、少し待っててね」

「分かった」

箒ちゃんにリビングで夕食の支度を待つて貰い。

私達は早々とお台所に向かい、お夕食としてリクエストして貰った、シチューの調理に取り掛かる。

「私は何をしたらいい？」

「そうだね。こっちの野菜を切ってくれるかな？残りも鶏肉は俺がしとくから」

「了解、まかせてっ」

シチューの下準備の配分を貰い私は、包丁を取り出し下準備の調理を始めていく。

私がするのはお野菜を切る適当なサイズに切るだけでやっぱり、綾の方が多く下準備している。

仕方ないか。私はあくまでもサポート役のお手伝いさんなんだし、綾がメインシエフなんだしね。

綾が作るシチューは市販のクリームシチューの素とジャガイモ、人参、玉ねぎ、鶏肉を使ったベーシックなもの。

ベーシックでこれといって特殊な事はしてないけども、綾が作ったシチューだからなのだろうベーシックなものでもとっても美味しい。それに料理をしている綾は本当に楽しそう。楽しそうに想いを込めて料理しているのが美味しさの秘訣かもしれない。それに……

「ねえ……綾？」

「何？」

「こっちしてるとさ……何だか新婚夫婦の共同作業だね」

「くすっ……かなりピンポイントと例えだけど……そうかもれないね」

「将来、こうなれたらいいね」

「そつだね。将来的には……」

鍋に具材とシチューの素を加えて灰汁を取り煮立ち蓋をして弱火で煮込みながら、そんな話をする。

将来的はこんな風にお台所に二人並んで料理できる様な平穩で幸せになれたらいい。

いいけど……現実問題、今のままでは難しい。特に卒業後。

今は治外法権区であるIS学園に半強制的に保護されているからいいけど、卒業後は自分の身は自分で守らなくちゃいけない。

拒否しても絶対に綾が守ってくれるだろうけど……それでも自分の身は自分で守れるようにしないと、その為には今のうち何十通りも策を講じておかないと。

でも、やっぱり……平穩で幸せな家庭を綾と築きたいな。

先や未来、未知に対する不安は何時になってもなくならないもので、ほんの少しだけ不安になっていると後ろからやんわり抱きしめられた。

「どうかしたの、綾？」

「いや、別に。何となくこうしなくなっただけ」

「そっか」

相変わらず、私の事を綾はよく見ている様だ。

私の胸内の不安も見透かして、こうして抱きしめてくれているんだろっ。

目が何もかも見透かしている様な瞳をしている。変わらないな、昔から。

何とか今日は実家いえに戻ってきた事で、よく昔の事を思い出す。たまにはいいか、こういうのも。

・
・
・

それから数分後。

「お待たせ、ご飯ですよ」

「やったっ！お腹、ぺこぺこだよ」

「大分、待たせちゃったね。さあ、食べよう」

煮込むのに時間を少しかけ過ぎて、少しだけ完成するが遅くなったけど完成して、皆で一つのテーブルを囲んで、漸く食べ始めようとしている。

「それでは、頂きます」

「「頂きます」」

先に食前挨拶を言った綾に続いて私と篝ちゃんも言っただけで食べ始める。

シチューは出来てほやほやで湯気も立っていて暖かい……と言うか、
熱い。

一般的にシチューは、冬の食べ物と呼ばれており、この時期……暑い夏に食べるのには余り適してない。

だから、クーラーをかけて快適な気分で食べている。まあ、それで

も熱いけど。

「ん〜っ！やっぱり、兄さんのシチューは美味しいっ！」

私も思っていた事を代弁してくれるように満面の笑みの篝ちゃんが言った。

やっぱり、綾のシチューは美味しい。

本当に市販のシチューの素を使ったのかと、何か特別な事をしたんじゃないかと、疑いたくなるぐらい美味しい。

美味しいか思えてないけど、『美味しい』の一言でしか表現できる様な言葉はなく、この一言に尽きる。

綾が作るシチューは汁っ気がなく、変わりにとろとろとしてクリーミーなシチュー。

流石は、シチュー好き。細かいところまで気配りが行き通っていて、本当に美味しい。

美味しい料理を食べると笑顔になると言うけど、確かにそうだね。三人とも笑顔だ。

でも、一番は愛しの綾と大切な妹の篝ちゃんと一緒に食べている事が大きいんだと思う。

こうして篝ちゃんを交えてお夕食を食べるのも本当に久しぶり。

こんな風に三人でお食事を食べたり、団欒するのはやっぱりいい。今日は久しぶり尽くしの一日で懐かしさと、ありえなかつたかもしれない一時の幸せな刹那を感じれた嬉しさで胸が一杯だ。

「美味しいねっ！兄さん、姉さんっ」

「うんっ そうだねっ 篝ちゃんにそう言って貰えんと作つた甲斐

があるね、綾っ」

「だね。そう言って貰えると本当に作った甲斐があるし、何よりそんな風に喜んで食べて貰えると料理人冥利に尽きるといふものだよ」

嬉しそうに笑顔でそう綾は言い。

私も篝ちゃんも、三人笑顔で美味しく楽しく夕食を食べた素敵で懐かしい夕食時だった。

第三十一話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第三十一話 ?

お風呂編の件は前書きに書いたとおりです。申し訳ない。

この夏休み編は水城夫妻が関わらない限りはイチャほのぼのです。その中でも「くすっ」と笑って頂ける様ネタは投入します。

前回で知ったけど、ロリ篝需要あるなww

でも、その可愛い妹にヤンデレカップルと誤認されましたwww
綾君はヤンデレではないです。決して。そのっ系はありますが。

ただの変態と言う名の紳士なので悪しからず。

夕食編はほのぼのさせすぎて801展開となってしまうた。

夏にシチューに選んで理由は、ロリ篝の洋食で一番好きな物ということもあります。

私の今の食事がシチューだからでもありますし。

久々に学校に給食のシチューに食べて、シチューに嵌っただけなんですけどねw

シチュー狂いです、私は。カレーは食べれません(関係ない

私の小説はワンパターン気味になってきたなorz

今回も地の分の文章的にもおかしい回でしたが楽しんで頂ければ幸いです。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘or誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十一話 ？（前書き）

今回は皆さんお待ちかねのお風呂編ですっ！

ロリ箒に興奮したり、篠ノ之姉妹のイチヤラブに胸を熱くしたりと。

いろいろと楽しんでいただけると幸いです。ただ、スランプですorz

それではどござっ！

第三十一話 ？

東視点

夕食後。

洗い物を済ませた私達はリビングにて、テレビとの間にテーブルを一つ挟んだ先の床に座って、適当なテレビ番組を見ながら三人して団欒している。

私達の座っている位置は綾を真ん中にして、挟む様にその両端に私と篝ちゃんは座っている。

「んっ、綾は幸せ者だね」

「そうだね。本当に。しみじみ今日は思うよ」

「違う違う。美人姉妹に両脇を挟まれてハーレムで幸せ者って事だよ ほら、美人姉妹井だよ」

「ちよっ！」

ちなみに私も篝ちゃんも綾の肩に凭れかかれる様にして座っている。クーラーはまだ付けたままで涼しく快適で綾の体温を身近に感じている。心地いい。

篝ちゃんも気持ちよさそうに心地よさそうに目を細めている。

「篝、眠たそうだね」

「うん……しゅっ……」

「本当に眠そうだね、箒ちゃん。なら、目冷めちゃうかもしれないけど、寝ちゃう前に一緒にお風呂入ろうよっ」

「えっ!？」

私の言葉を聞いて目が覚めたのか驚く箒ちゃん。

変なこと言っていないのに、そんなに驚くなんて、何かシツヨク。

「な、何でっ!？お風呂なら一人で入れるよっ!」

「ええっ!？一緒に入ろうよっ!姉妹でも裸の付き合いは必要なんだよ」

「裸の付き合いは兎も角、二人で一緒に入ったら？目が覚めるとはいえ、箒は寝かけていたから危ないしね」

「兄さんまで……でも、確かにそうかも。今も眠たい。うん……兄さんがそうなら、姉さんと一緒に入るよ」

「そうと決まればお風呂へ直行だよ レッゴーっ」

「わわ、姉さんっ!」

「気をつけてね。束もちゃんと箒を洗ったりするんだよ?」

「分かってる。綾も一緒にどうぞ?」

「姉妹の裸の付き合い?を邪魔したくないから、また別の機会でも」

「ちえ、そっか。なら、行ってくるよ」

「行ってきます」

「行ってらっしゃい。お風呂も洗って沸かしてあるから、ゆっくりしておいで」

綾も一応決まり文句の様に誘ってみたけど、案の定やんわり断られて、綾に見送られながら着替えを持つと私と箒ちゃんは手を繋ぎながら、お風呂場で向った。

綾は相変わらず手際がよく準備がいいな。

と言うより、何時の間にお風呂の準備していんだろ。お風呂掃除しに行った姿見てないのに、不思議。

そんな事を私は思いながら、箒ちゃんと手を繋いでお風呂場の脱衣所に来た。

「さ〜てっ、箒ちゃん？」

「な、何？姉さん……？」

「お姉ちゃんと脱ぎ脱ぎましょう」

「い、いいっ！自分で脱ぐっ！」

「ダメですっ！お姉ちゃんの言う事は聞きなさいっ　ほら、ばんざん
っいっ」

「うう〜……恥ずかしい」

言い聞かせる様に語気を強めて箒ちゃんに言っと、

箒ちゃんは私には何をしても敵わないと判断した様で素直に大人しくして、顔を真っ赤にさせながら、恥ずかしそうに両手を挙げてばんざいしていた。

私は、ばんざいしている箒ちゃんの衣服を優しくゆっくりと脱がしていく。

少し強引に押し切るような形で箒ちゃんのお洋服を脱がす事になっただけど、まあいいよね。

箒ちゃんも恥ずかしそうにしているだけで、拒絶的と言うか本当に嫌という様子でもなく、満更でもないという様子だし。

それに箒と綾は兄妹なんだなっと思う。二人はもちろん血繋がりのものはないけど、妹は兄又は姉の背中を見て育つとよく言ったもんだ。

私に敵わないと判断して、素直に大人しくしてくれる辺り本当によく似ている。

それにしても、顔真っ赤にしている、箒ちゃん可愛いよ。裸っでのもグツと来る。

と思う私も充分変態なんだろうな。

箒ちゃんに変なこととして後で綾に起られるのも嫌だし、変態だというも自覚は一応しているから、変態でも大丈夫だ問題ない

「可愛いね、箒ちゃん」

「ひゃっ!?!」

お洋服を流し終わってそう私が言うと、箒ちゃんは可愛い悲鳴を上げて体をビクつとさせ、カアアツと顔を更に真っ赤にさせて、素早く近くあったハンドタオルで裸だった体を隠す。

流石は私の愛妹、本当に可愛い。
歳相応に背も体も小さく、それでいて顔立ちは整って綺麗で美形。
毎度思うけど、篝ちゃんは将来絶対に黒髪がよく映える巨乳美人さ
んになるね。

だから、私は篝ちゃんが可愛すぎて……

「ぎゅーっ……」

「ひゃああっ！」

つい、抱きしめてしまった。

抱きしめると期待通り、可愛い悲鳴を私に聞かせてくれる。

篝ちゃんは私の腕と胸の中で、恥ずかしそうにモジモジと体を動か
せている。

何か綾とは別に抱き心地がよくて安心する。

それに篝ちゃんの髪が鼻にかかって、くすぐったいけどいい匂い。

夫婦は長年連れ添っていると似るらしく、匂いフェチと髪の綾の気
持ちがよく分かる。

「ね、姉さんっ！いい加減に離れてよっ、恥ずかしいのっ！」

「ああ、ごめん。篝ちゃんが可愛くてつい」

「そ、そんな事言われても許さないんだからねっ！姉さんのばかあ
……早く入ろっよ」

「おっと、そうだね」

顔を真っ赤にして可愛らしく照れている篝ちゃんに言われて、私はお風呂に入る為に衣服を脱ぎ始める。

夏とは言えいつまでもお風呂に入らず、篝ちゃんを裸のままにしておくのもダメだ。

早く私も衣服を脱いで早く入らないと、篝ちゃんに風邪を引かせてしまいかもしれない。

そうならば綾からキツイお叱りと説教が来て、触れ合うのが禁止になっってしまう。

そんな悪い予想が立ち私は、素早く衣服を脱いで、ハンドタオルを持つと篝ちゃんと一緒にお風呂へと入る。

ここじゃくてもお風呂でも篝ちゃんとは裸でイチャイチャ……じゃなくて、姉妹の裸の交流も出来る訳だしね。

「じゃあ、まず先に体洗ってお風呂に浸かろっか」

「うん、分かった」

「じゃあ、前に座って洗ってあげる」

「へ、変なことしないでね？」

「分かってるって 信頼できない？」

「信頼してる。でも、念の為。まあ、へんなことしたら兄さんに報告するからいいけど」

「そ、それだけは勘弁かな」

そんな話をしつつシャワーの前にあるバスチェアに篝ちゃんに座ってもらい、その後ろにバスチェアを置いて私は座る。

実家は神社本殿と繋がるように隣接して建っている大きく広い平屋の日本家屋だけだ。

中は結構近代的。チッキンも使い易くシステムキッチンで、今入っているお風呂も日本家屋の家でよくある古い昔ながらの物ではなく結構新しいタイプのユニットバス。IS学園と比べてしまうと結構古いタイプとなる。まあ、IS学園のは無駄にお金かけて近代的にしすぎなだけだ。

それでも実家のお風呂は使いやすい事には変わらない。

「じゃあ、頭から洗うね」

「ん、お願いします」

シャワーで髪の毛全体を満遍なく濡らして、シャンプーを手のひらにとり少し泡立ててから髪を優しく洗っていく。

洗いは肌をマッサージする感じで指の腹を使って洗う、洗い方。

「篝ちゃん、かゆいところあるー?」

「んー、ない。気持ちいいよ、姉さん」

篝ちゃんの髪を洗っていると目にシャンプーが入らない様目を瞑っているけど気持ちよさそうにしている篝ちゃんが鏡越しに見えた。その篝ちゃんの表情を見れた私は嬉しく気持ちになった。

「そっか、よかった」

「うん。今日は姉さんが髪、洗ってくれてるから楽だよ」

「そう」

箒ちゃんはいつも髪型をポニーテールにしているけど、解くと髪の毛の長さは腰の付け根までである。

言った通り結構な長さがあるからいつも洗うのが少し大変とよく言っている。

ちなみに箒ちゃんが髪が長いのもなのも綾が原因。綾が長髪の女の子が好きだから、箒ちゃんも大好きな兄を思つて、私やちーちゃんと同じ様に髪を長く、ずっとこの髪の長さになっている。

本当に私の身の回りには、綾を好きな美人で可愛い女の子が多いな。その『好き』が親愛か異性愛かは別にしても、油断は禁物。

それともう一つ。

お風呂場に向う道中にシャンプーハット付けるかと聞くと箒ちゃんは、『子供扱いしないでっ』と言っていたっけ。

そういう少しでも大人であろうと背伸びしている姿はとっても微笑ましく可愛らしい。綾に言わせれば、小さい時の私も同じで姉妹とつてもよく似ているらしいけど。

「次、リンスするから。先にシャンプーを流しちゃうから眼を瞑っててね」

「う、うん!」

やっぱり、小学生になって一人でお風呂に入れる様になって髪も一人でシャンプーハットなしで洗えるようになっても。

他人にしてもらっているからかもしれないけど、怖いようできゅ、つと身体を硬くして眼を瞑る箒ちゃんの髪に付いている泡をシャワ

ーで洗い流していく。
シャンプーが残らないように気をつけて、シャンプーした時間の2倍くらいの時間をかけて。

「よしっ！次はリンスだねっ いい？」

「いいよ」

シャンプーが残らない様に全て流しきると次はリンスを手にとり毛先を中心に髪全体になじませる様に洗っていく。

女の子の入浴ってやっぱり、時間がかかるものだね。私も女の子だしね。

でも、体磨きは時間をかけないと。特に髪は女の命と言われるぐらいに大切なところだから念入りに洗わないと。それに髪フェチの綾の為に。

「じゃあ、流しまゝす」

「ど、どうぞっ！」

やっぱり、先ほどと変わらずでぎゅ、っと身体を硬くして眼を瞑る
箒ちゃん。

そんな箒ちゃんを微笑ましく思いながら、髪の付いているリンスを
落とす様に流す。

そして、リンスの流し落しがないのを確認すると手で優しく髪をギョッギョッと水気をきる。

よし、これで髪は完了。

「はい、終わったよー」

ひとしきり泡を流しきったところで篝ちゃんに声をかける。
顔を流れる水滴を軽く手でぬぐうと、篝ちゃんは首を回してこちらをしてこちらを向いて、嬉しそうな笑みでお礼を言った。

「ありがとう、姉さん」

「どういたしまして」

髪も洗い終わった事だし、いよいよ。

今夜のお風呂でのメインディッシュ……もとい、メインイベント。
胸が高鳴ってワクワクしてくる。

「よし、じゃあ次は身体を洗おうか」

「えええっ！？それはいいよっ！自分で洗うからっ！」

「ダメダメっ　うりゃっ」

「ひゃあんっ！」

既にボディソープを付けて泡立てていた体を洗う様のスポンジで優しく焦らす様に篝ちゃんの体を洗うと顔を赤くして可愛らしい喘ぎ声にも似た悲鳴を漏らした。

主導権は私が取った。

これで私の自由に来れる独擅場。
ここからもずつと私のターンっ

「ね、姉さんっ、や、っん、くす……ぐったいよっ」

「よいではないか よいではないか 可愛いよっ」

「そっつ……いう……っん、あ、問題じゃないっ！自分でっ……あん
っ……洗っつ」

「まあまあ、お姉さん任せなさい ちゃんとするし、悪いようには
しないから」

「だあめえ……ッ、姉さん、て、手つきがいやらし、っいよおっ……
っんっん、ああんっ」

箒ちゃんの声だけを聞いてしていると、厭らしいことをしている様に聞
こえるかもしれないが断じて違う。

ただ、箒ちゃんのくすぐられるとダメで弱い部分を中心に重点的に
且つ、全身満遍なく洗っているだけである。

でもどうやら、感じやすい様で凄い声……喘ぎ声にも似た可愛らし
い悲鳴を小さく漏らしている。

今は前の上から膝にかけて洗っているけど……それだけでこれとは
洗っている私の成すがままで今はすっかり私に洗うのを任せている。
まあ……ぐったりしっつあるだけなんだけど。

「そこだめっ！……っあ、んっ……こそば……いっ！」

「我慢我慢っ 綺麗になりましたよっね」

本当に……喘ぎ声にも似た可愛い悲鳴を小さく漏らす箒ちゃん。
くすぐったいるけどそれでもちゃんと体は隅々満遍なくちゃんと綺

麗に洗っているのに。

何だかとってもイケナイ……はっきり言うとエッチな事をしている様に思えてくる。

篝ちゃんの声に少し内心で少しだけ少しだけ……楽しんで興奮しているのは内緒。

「んっ……!」

くすぐり過ぎて敏感になっているのかぴくり、っとう篝ちゃんの肩がわずかに揺れる。

元々篝ちゃんは、こっぴどくすぐり系にめっぽう弱いけど、これ何というか凄い。

……しかし、いくらなんでも感じすぎではないかな。

この年齢でこんな感じやすくては、将来的にはどれだけ敏感な少女になるんだろう。元々そういう素質でもあったのだろうか……お姉ちゃんとしては激しく心配である。

体洗いながらくすぐっている私が言えた台詞では全く言えた事じゃないけど。

篝ちゃんのくすぐったそうにする姿がいやしく見え……てではなく、可愛く面白く見えて。

ああ、やり過ぎちゃっているな……というを少しずつ自覚していた時だった。

「ちえりおっ!」

「にゃうっ!?!」

物凄い鋭くて強烈な裏拳が顔に飛んできた。

そんなには痛くなかったけど、突然にビックリして、少しだけ涙目になって鏡越しに篝ちゃんを見てみると、物凄いジト目で私を見ていた。

「姉さん？いい加減にしてね？じゃないと、兄さんに本当に言っよ？姉さんはそれでいいんだね？」

「ご、ごめんなさい。それだけはっ！」

「なら、遊ばずちゃんとしてっ！じゃないと本当に兄さんに言って、兄さんに説教してもらっよっ！」

「わ、分かりました。ちゃとします」

「それでいいの。まったく、姉さんのばかり」

「うう……言い返す言葉もありません」

もう、最後は完全に呆れて言っていた篝ちゃん。と言っか、前半の言葉を言っている篝ちゃんとっても綺麗な笑顔だったけど、黒かった。

うう〜こんなところもよく綾に似ている。

流星は私の血の繋がった愛妹あいまい篝ちゃん。

とってもよく私の弱いものを知ってらっしやる。

こんな事してだなんて篝ちゃんの口から綾に言われたら、大変な事になる。

篝ちゃんとううして触れ合えるのが楽しすぎて、調子乗りすぎた。反省。

ここは許して譲歩してくれた篝ちゃんに感謝しつつ、自重してちゃんとしよう。

そう思いながらもう一度、ちゃんと篝ちゃん体を洗って私はシャワーで体の泡を落としていつのだった。

ただ一つ感想を言つと篝ちゃんはとっても可愛くてえっちかった。

・
・
・

それから私も髪や体をちゃんと洗って篝ちゃんと一緒に湯船に浸かっていた。

体格差があつて私が髪や体を洗っている時は篝ちゃんにやってもらうのは遠慮した。

いや……報復が怖かったただけなんだけどね。あはは……

ただ、先に湯船に使つて私の洗っていた姿を見ていた篝ちゃんはとっても不服そうだった。申し訳ない。

「っーんっ」

「篝ちゃん、もしかして怒ってる?」

「別にっ、怒ってないもんっ。姉さんが変なことしたからって私は怒ってないもんっ」

「怒ってるじゃん、ごめんね?」

「だから、別に怒ってないもんっ」

そうは言つものの篝ちゃんは、少しだけ不機嫌にしている。やっぱり、やり過ぎちゃったのが原因みたい。猛反省。

そして今は二人とも全部洗い終わって、私と篝ちゃんは一緒に湯船に浸かっている。

湯船に浸かっている体勢としては私が下になって足を伸ばして、その篝ちゃんの上に膝に座ってもらう様に座ってもらい、篝ちゃんを後ろから抱きかかて一緒に湯船に浸かっている。

少しだけ不機嫌そうにしながらも、こうして私の上で大人しく座って湯船に浸かっている篝ちゃんの様子は何処か微笑ましく思える。

「んっ」

「ふふんっ」

体を預ける様にもたれかかってくれる篝ちゃん。

すると、私と篝ちゃんでは座っていても、体格差があるので篝ちゃんの頭が丁度私の胸に当たる。

それを篝ちゃんも分かっている様で先ほどの体を洗った時の仕返しと言わんばかりに少しだけ前を向いてもたれかかったままの状態で頭を揺らしてすりすりしてくる。

髪が軽く触れて何だかこそばい。

「……………んっ、ふああっ」

「あははっ、姉さん。エッチな声出してる」

「笑わないですよ。だって、こそばゆいんだもんっ」

「少し頬赤いね。さっきの仕返しだよ。どっかの誰かさんがさっきむちゃくちゃしてくれたからねっ」

「いじわるだなあ、もう。本当にそういう意地悪なところ綾に似て

いるね」

「だって、兄さんの妹だからね。それにしても……姉さんって、胸大きいね。それも兄さんが原因？」

「ん〜そういう事はないと思うけど、そうかも。綾は胸も少しは好きみたいだからね」

「そっか……私も将来は姉さんぐらい大きくなるのかな？」

そう心配そうに呟いて篝ちゃんは、私に待たれかかったまま見下ろして自分の体を見る。

本当に篝ちゃんってませてるね。

この歳からそんな事を気にするなんて……篝ちゃんぐらい時は自分にも特別興味がなくて私は気にしなかったけど。

ん〜多分、私の影響か、奈々師匠のせいかもしれない。師匠はいろいろと私にも篝ちゃんにも教えると題しているんなこと吹き込むからね。

と言っか、そんなに気にしなくてもいいと思うんだけどな。

篝ちゃんは確かにぺったんこボディだけど、年齢が年齢だしね。それにこの歳でポインだったら、おかしいしね。

「大丈夫、そんなに気にしなくても篝ちゃんの胸も大きくなるよ」

「本当？」

「本当だよ 私の予言はよく当たるんだから それに好きな人に胸を揉まれると大きくなるんだよ？」

「うつ……それ奈々さんも言ってた。もしかして……姉さんも兄さんに？」

「さあ〜それはどうなんだろうね 内緒だよ」

「何かズルイっ。でも、兄さんはしれないと思う」

「ええっ！？何で綾は男の子でスケベで変態と言う名の紳士なんだよっ？」

「何それ。兄さんはスケベでも変態でもない。変態なのは姉さんだけだよ」

「変態じゃないもん。仮に変態だとしても変態と言う名の淑女だよっ」

「あははっ……姉さん、本当は天才じゃなくて馬鹿でしょうっ？」

「酷い〜っ」

最初は楽しそうに微笑んでいたけど、私を呼んでから真顔で呆れたように言っていた。

本当に酷いな。まあ、いいけど。

篝ちゃんの綾の信頼は凄いな。いろいろな意味でも、篝ちゃんは分かかってないな。

綾は、私に変態だとしても、私以上に変態なんだよ。髪フェチだし、匂いフェチだしね。

まあ、それも変態なのも私限定でらしいんだけどね。

綾も自分が変態と言う名の紳士なのを自覚して、変態なものも私限定でと言ってくれているし。

「姉さんはまだ、言っていないんだよね」

「……………何を？」

「千冬さんに兄さんと付き合っているって事を」

「あ……………うん。よく分かったね」

「これでも私は姉さんと血の繋がった姉妹だからね。姉さんの事は兄さんほどじゃないけど、少しぐらいなら分かるよ」

何も言っていないのに篝ちゃんに見透かされてしまっている。

見透かされてしまっているという事、それは篝ちゃんはちゃんと私を直視して《見て》《くれている》こと。

それは嬉しいことだけど……………反面、情けないなと思う。

余計な心配を篝ちゃんにかけてしまっているから

「それはやっぱり、千冬さんのこと思って？」

「うん……………」

「やっぱり、姉さんは身内には人一倍異常なぐらい思いやりがあつて情が深いからね。これも奈々さんにも聞いた事なんだけど」

「あはは……………でも、私は意気地がないだけなんだよ。意気地なしで臆病なだけ」

「そうだね。確かに姉さんはそうかもしれない。兄さんが言っていたけど、気丈に振舞っているだけでいつも心の何処かでひっそりと泣いている様な子だって」

「……」

「大きなお世話かもしれないけど、いつかは近いうちにはちゃんと千冬さんにも兄さんと言ってね。お母さんの様に取り返しが付かない事ならないように」

「うん……そうだね。ありがとう。頑張るよ」

箒ちゃんにまで言われてしまった。情けないな、私。

でも、いつかは近いうちにはちーちゃんにも言わないと。

取り返しが使えない事になる前に……例えばちーちゃんと縁が切れようとも。全てを覚悟して。

箒ちゃんにも背中を押してもらっている事だし。

「うん、頑張れ。まあ、言ったら千冬さんに一発ぐらい殴られるのは覚悟したほうがいいよ」

「それは予想して覚悟しているけど、嫌だなあ」

「仕方ないよ。これを自業自得、因果応報天罰覲面というらしいからね」

そう言う箒ちゃんに私はあははと苦笑いする。

いろいろと覚悟が必要だね。精神ダメージが来るのも物理ダメージが来るのも覚悟しないと。

と言っか、箒ちゃんよくそんな難しい言葉を知って、噛まずに言えたな。偉い偉い。
等と気を紛らす様に思った。

「それにしても、姉さん？」

「ん？何？」

「こうして、二人一緒にお風呂に入るのって初めてだよな」

「そうだね。綾なしでこうして二人で一緒にお風呂に入るのは初めてだね」

こうして、私と箒ちゃんの二人だけで一緒にお風呂に入るのは初めて。

今までも箒ちゃんと一緒に入った事はあったけど、その時はいつも綾も一緒に入っていた。

まあ、綾は恥ずかしそうにしていたけど。
それでこうして私と箒ちゃんの二人一緒に入るのは初めてで、こんな風と同じ空間を一緒にするのは久しぶり。

「うん。姉さんはいつも兄さんと一緒にいたからね。それは今もだけど」

「あははっ……そうだね」

箒ちゃん言う通り、私は綾に心を開いた日からずっと綾といつもどんな時も一緒に居る。それは今も変わってない。

だから、こうして二人一緒にお風呂に入るのは本当に初めてで、こんな風と同じ空間を一緒にするのは本当に久しぶり。

これはこれで充実して楽しいし嬉しいけど……

「でも、篝ちゃん。二人きりなのは充実して楽しいし嬉しいけど次は綾も一緒に入りたくないよね」

「やつぱり、姉さん変態だ。でも、次は兄さんと一緒に三人でお風呂に入りたい。楽しそうだし、また姉さんが変なことしない様に監視も頼める事だしねえ」

「あつはは……厳しいな」

「入りたいけど……でも、兄さんは恥ずかしくて嫌がって今日みたくに入れないよね」

「大丈夫だよつ　そういう時は二人で綾を誘惑すればいいんだよつ　そうすれば流石の綾でも断れないから」

「わあ〜流石、姉さん、トンデモ理論だね。でも、それぐらいの方が兄さんと一緒に入る為には必要かもしれないね。やってみるのいいかも」

「おつ、ノリ気だね。なら、明日にでも試してみよっか？」

「（コクリ）」

少しだけニヤニヤした小悪魔的な笑みを浮かべながら顔を少し湯船に沈めて頷いた篝ちゃん。

これで綾の明日の命運が決まった様なもの。

篝ちゃんもノリ気な様だし、流石の綾も美女姉妹に誘惑されて誘われたら断れない。

綾と一緒に風呂に入るなんて久しぶりだから、今から明日の夜がとっても楽しみ。

「こうして、私と篝ちゃんが一緒にお風呂に入れてたのも全部綾のお陰だね」

「うん、そうだね。昔から私達は兄さんに沢山、助けてきてもらったから」

「だから、明日はその今まで助けてきてくれたお礼も兼ねて一杯、二人でお風呂で綾にご奉仕しようね」

「うん？うん、そうだね」

やっぱり、篝ちゃんは早かったか。

流石にませていてもご奉仕までは知らない様だね。

だから、本当に明日の夜がとってもとっても楽しみ。

でも、こうして一緒に篝ちゃんとお風呂に入れて、やっぱり一緒に居られるのは綾のおかげ。

いつだって、どんな時でも綾は私達を私を助けてくれる。本当に感謝。

でも、私も少しは綾の助けなしで自分の力で頑張れないとな。

その後は特に会話はなく。

篝ちゃんは私の上に乗って私に抱きかかれ、私はに篝ちゃんをがき抱えながら。

静かに湯船に浸かって温まっていると篝ちゃんが静かに言った。

「私ね……」

「ん？」

「今日、兄さんと姉さんと会えてよかった。仲直りできてよかった」

「うん」

「久しぶりに大好きな兄さんのシチューを大好きな兄さんと姉さんと一緒に食べれたよかったよ」

「うん。それは私もだよ」

「うん。今日は本当にいい日だよ」

「箒ちゃんかかる為に箒ちゃんの体の前に置いている手を心なしか強く握られる。」

「箒ちゃんが言う言葉は全て私も同じ。」

「今日は本当にいい日。」

「決して忘れられない、忘れない至福の刹那の様な陽だまりの様に暖かい一日だった。」

「姉さん達がしたことを許しちゃっているかもしれないけど、まだ全部は許せない。それでもね？私は兄さんと姉さんが大切に大好きで愛している」

「……箒ちゃん」

「しんみりとした感じで箒ちゃんが言ってくれる言葉がとっても嬉しいけど、少しだけセンチメンタルな気分になる。」

箒ちゃんは強くて日本刀に様に芯の強い子だな。

私達がしたことは到底許せる事じゃないはずなのに、それを全部ではないけど箒ちゃんは許してくれた。

それに『まだ、全部は許せない』と言ったのは箒ちゃんなりの一線引き方で、まだ苦しんでいる父や母を思ってたんだと私は思う。世間や両親に挟まれて自分もとっと辛いはずなのに、他人を気遣える箒ちゃんは本当に強くて日本刀に様に芯の強くて優しい子だ。

箒ちゃんが私の妹で私と綾の妹で本当によかった。

神なんて偶然で曖昧な物には感謝しないけど、この瞬間に刹那には感謝する。箒ちゃんにも深く強く感謝する。

そう思うと、強く優しく箒ちゃんの前に置いていた両腕で抱きしめる。

「姉さん？」

「ありがとう、少しでも私達の事を少しでも許してくれて。ありがとう、私と綾の愛しい妹で居てくれて」

「ありがとうって言われる事じゃないよ、私は私で姉さん達は姉さん達。まずは他人の存在を認めてから許すのが大切って奈々さんが教えてくれたから、私はそうしただけ」

「そっか」

「うん。それにありがとうって言うなら私もだよ。私のお姉ちゃん
でいてくれてありがとう、東お姉ちゃん」

優しい声で名前を呼ばれた瞬間、胸の底から嬉しさがあふれ出てき

た。

大好きで愛しい妹に名前を呼ばれるのってこんなにも嬉しいんだ。嬉しいよ、本当に。篝ちゃんが私の妹であることが、居てくれる事が。何よりも。

私の私達の妹は、これからもずっと篝ちゃんただ一人だけ。

それは変わらないし、変えようもないし、他の子を『妹』には絶対にしない。

私の私達の妹は篝ちゃんただ一人だけだ。

「篝ちゃん、大好き」

「私も。大好き、姉さん」

私はぎゅっと篝ちゃんを抱きしめ、篝ちゃんは嬉しそうにしながら私に体を預けてくれる。

言葉はその場に優しく溶けるように消え。

そこに残ったのは、綾助けを必要とせず、一人でお互いに向き合えた姉妹の静かに寄り添う姿だけだった。

…

第三十一話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第三十一話 ?

何だかんだだ三日連続更新。

それでもやっぱり、長くなった(汗)冗長過ぎるな。

髪の毛洗う描写を長くしすぎた。束さんの洗う描写は必要だったかな？

最後以外は完全に読者サービスですwww

積極的な15禁に取り組んだらあなりましたwww

楽しんでいただければと思っています。

篝ちゃんは勘がいいので

束さんが千冬さんに話していないのは見通しています。

何で言わないかは見通していませんけど。

そして、最後の「私の私達の妹は篝ちゃんただ一人だけ」等の文章は。

原作七巻の束さん視点の「妹はただ一人だけ」の言葉と繋げています。

まあ、裏設定見たいなものです。基本的にこの小説は原作の裏設定ばかりですね。

今回はかなり力を入れた力作のはずだったのに最後にスランプになりました。

最後とか、スランプの酷さを物語っています。

何度も自分でも見直して、修正もしていますが、

スランプ過ぎて何がどうだめでおかしいのか分かりません。

なのでどこがどう可笑しいのか指摘していただけると嬉しいです。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に「お気軽に聞いて下さい。」
よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

第三十一話 ？（前書き）

今回が八月初めての更新。

八月に入ったたというのに小説内の時間は七月最終週。遅いな（汗）
少しグタクダしてきた様に思えるし、もう少しパツパツと物語を進めたい今日この頃。

それではどうぞっ！

第三十一話 ？

綾視点

束と箒の二人がお風呂に入っている頃。

俺は一人、実家の縁側に出て隣に蚊取り線香を置いて、縁側の廊下に寝転びながらぼーっと星々と綺麗な月が浮かぶ夜空を眺めていた。

「……」

夜は昼間ほど熱くなく、夜風が吹いていて少しだけ涼しい。

それに昼間は激しく自己主張していた太陽は沈み、変わりに夜空に綺麗な月が幻想的に浮かび、月の光は黙ったまま人の意識の中に入り込んで、昼間に燃焼した気持ちや感情を癒してくれる。

そんな不思議な月の幻想的な雰囲気を感じつつ、俺は一人寝転んで夜空を掴むように手を高く掲げて夜空を眺めている。

今日は大変だったけど、いい日だった。

箒と再開する事が出来て、話をする事が出来て、その結果、和解や仲直りする事が出来た。

沢山、つらい思いや苦しい事を体験させてしまったけど、それでも箒は俺達を認めてくれ、許してくれた。

そして何より、箒の笑顔を見る事が出来た。本当によかった。

それに仲直りするだけじゃなくて、束と箒の仲が昔以上によくなっている。

やっぱりそれは、箒が貯めていた胸の内の全ての思い、全て鬱憤の思いを全て吐き出して、和解して仲直りしたのが大きいのだろう。昔は多少ながらあった蟠りみたいなものや心の距離がなくなっ

昔以上に束と箒は仲が良くなって、今は姉妹の鏡の様に仲のいい姉妹となっている。

その証拠に声はちゃんと聞き取れないけど賑やかに楽しく仲睦まじく、二人はお風呂でも仲良くしているのが何となくだけど分かる。もつとも、楽しすぎて箒が束のいいおもちゃになって、束が調子乗りすぎて、箒が少し怒って束を叱っているに違いない。そんな光景が容易に思い浮かぶ。だけど、それはそれで微笑ましい。二人とも心の底から楽しそうにして、今という刹那を体感できている事に嬉しそうにしているだろうから。

「…………でも」

今日、箒と再開できて話し合いの末に箒とは和解して仲直りすることができた。

けれど、篠ノ之のご両親との和解は現状かなり難しい。二人とも根深く俺と束を憎んでいる。

特に今日、箒と一緒に再開した篠ノ之のお父さんが出て行く間際に

『束《あの子》が成した偉業だけは認めよう。そのIS^物も認めよう。だがな、君達は何があっても認めはしない。許しはしない、認めも許してもならない』

と言われてしまった。

この言葉を言った時の篠ノ之のお父さんの表情は、強張っていて険しい表情で、声色は怒っている様な憎んでいるような重々しい声色だった。

言われた時はほんの少しはショックだったけど、束には聞こえてないからよかった。俺はただ、その言葉を受け止める。

篠ノ之のお父さんが言った言葉は多分、その時の本音なんだろう。俺達がした事は本当に許される事ではなく、許してもらおう必要もないこと。

俺達がしたことによって、篤にもご両親にも迷惑をかけた。だから、こう思うのはある意味当然の事で仕方ない。

だけど、世間も東に対して篠ノ之のお父さんの同じ様な事を思っているのだろうか。

ISだけは認めて、東自身はまったく認めず、利用だけ考え東を変われず嫌悪して忌避しているのだろうか。

それも仕方ないことである意味当然のなのかもしれないけども。こうだったら、嫌だな……悲しい。ギロチンに注ぐ血飲み物に変えてしまいたい。

シッコクだったけど、嬉しくあった。

憎んでいながらから篠ノ之のお父さんは、俺達のことを忘れていなかった。

本当に憎くして仕方ないのなら、忘れてしまえばいい。忘れるのは難しいけど、それでも忌避続けて忘れていったらいい。

単に憎すぎて忘れられなかっただけかもしれないけど、それでもちやんと覚えてくれていて。

篤のことをちゃんと思い考えてくれてあまつさえ、今日この家に泊まる事を許してくれた。

それが嬉しい。

やり直すのは難しいそうだけど、それでも篠ノ之のお父さんとやり直せるチャンスはいくらでもありそうだ。

よかった……今日は本当にいい日だ。

もっとも、篠ノ之のお母さんとの和解はとっても難しい。篠ノ之のお母さんはこんなに事になる前、ISを産み出す前から東を嫌悪し

て気持ち悪がっていた。

束以外の俺や篤の前では母親してくれていたけど、生まれた時から『天才』であった束を心の奥では心の底から嫌って、嫌悪して、気持ち悪がって、直視を躊躇っていて忌避していた。

IS誕生以前からの問題で元々、メチャクチャに壊れているから、篠ノ之のお母さんとの和解はとつても難しい。どうにかしたいけど、どうしたものか。

そんな事を一日を振り返りながら考えたり思ったり考えたりしている時だった。

「……………電話？」

ズボンのポケットに入っている携帯がマナーモードの為、バイブで長く振動して誰かから電話が来ていることを告げている。携帯を取り出し誰からの電話なのか、携帯の折り畳み部分のディスプレイを見る。

「千冬？」

ディスプレイ部分に『織斑千冬』と表示されていた。何の用かな？と思いつつも、素早く出る。

「もしもし」

『もしもし、千冬だ。今は何処にいる？一郎さんのところか？』

「いや、篠ノ之家だよ」

『そうか……………なら、無事に篤と和解出来たようだな。よかったな』

「ありがとう」

電話越しの千冬の声は自分の様に嬉しそうにしてくれている。

IS学園からこの街に千冬とも一緒に帰ってきたけど。

行きの電車内で、ずっと不安そうにそわそわしていた束をずっと元気づけていたくれたのは千冬だ。

だから、和解できたと聞けて千冬も自分の事に喜んでくれているのだろう。

『実家いえに泊まっているということは。両親とも和解できたのか？』

「いや、無理だった。実家いえに泊まっているのも、篠ノ之のお母さんが体調を崩して実家の方で療養していて、その篠ノ之のお母さんの様子を見に行った篠ノ之のお父さんの変わりに篤の面倒を見る様に頼まれただけだからね」

『そうか……にしても、静かだな。束や篤は？』

この話題を深く追求するべきじゃないと判断した千冬は別の話題を振ってくれた。

気を使ってくれたんだな。正直、物凄く助かる。

篠ノ之のご両親とも関係を改善はしたいけど、方法を考えるだけ難しくなっていくから少し気が滅入っていた。

「二人一緒にお風呂」

『二人一緒に風呂か……和解しただけじゃなくなって仲も良くなったんだな。本当によかったな』

「そうだね。本当によかった。それで千冬……何か用なの？話したくて電話かけてきたつてのも別にいいけど」

『それも少しあるが本題がメインだ。明日、そっちに一夏連れて遊びにいつてもいいか？』

「いいよ。久しぶりに一夏とも会いたいからね」

『よかった。一夏も綾と会いたいと言っていたらな。私も久しぶりに箒と会いたいし』

「箒も喜ぶよ。それで何時に来る？」

『朝の九時からでも大丈夫か？』

朝九時か……明日は七時、遅くても八時には起きるつもりだ。箒は早起きだし、すっきり目覚めてくれるから、束を起すのに力を入れれば問題はない。ん？何ついでの問題だ？
まあ、それはいいとして。千冬達が来るのも何となく予感していたから、朝食も五人分ある。備えあれば嬉しいなしという奴だ。

「うん、大丈夫だよ。朝ごはんはこっちで食べる？」

『いいのか？なら、お言葉に甘えよう。それじゃあ、一夏が呼んでるから切るな。では、明日の朝九時に』

「分かった。待っているよ。それじゃあ、お休みなさい」

『お休みなさい』

そう言っただけ俺と千冬は電話を切った。

明日は千冬と一夏が来るのか。一夏と会うのも久しぶりだな。明日も大変そうだけど、充実して満たされた刹那の様な一日になりそうだな。

電話と言えば……

「あ……師匠達の所に電話するの忘れてた」

今日はいろいろとあった目まぐるしくも楽しい充実した一日だったからすっかり忘れていた。

状況に応じて連絡を寄こせと言われていたから……連絡しなくても向こうは向こうでこっちの状況を察してくれているだろう。でも、一言ぐらいは連絡を寄こして方がいいだろう。何をネタに弄ってくるか分かってことじゃないし。特に師匠が。

兎に角、連絡しておこう。二人ともメールは嫌いだから電話でいいか。

相手は……奈々さんでいいか。一番妥当な相手だし、この時間なら出てくれるだろうし、何より師匠に電話するのは何か嫌だ。

耳元で師匠の嫌味なんかを聞いたら、鳥肌が立って鳥肌で携帯を壊せる自身はある。いらない自信だけど。

兎も角、素早く電話をかけよう。そう思い立ち、携帯を操作して電話をかける。

『はい〜 もしもし〜 皆のアイドル、奈々さんです〜すっ』

「……あっ……もしも、綾です」

電話をかけてちゃんと奈々さんがちゃんと出てくれたのはよかったけど。

あまりの出方に言葉を失って、反応するのに少々時間がかかってしまった。

誰でだって心の準備なしにこんなおどけた口調で相手に出られたら、大抵の人は言葉を失うものだろう。

こういう明るくおどけた口調は奈々さん譲りだな、東のおどけたところは。

おどけるのはいいけど。でも、奈々さん、歳を考えたほうが……

『綾？失礼なこと考えてないかしら？』

「考えていませんよ」

『そう。なら、いいけど。まあ、失礼な事を考えたら、口では言えない様な悲惨な事をするだけなんだけどね。されなくなかったら、肝に命じておくように』

「はい」

肝に銘じておこう。

声色は明るくおどけてた口調だけど、何処か重みあって本当だという事を強く告げている。

奈々さんのこういうも東は受け継いでしまっているんだっただけ。悪い伝承だ。

『それで夕方頃には連絡を寄こさず、こんな時間に連絡を寄こすって事はどうやら篝ちゃんとは再開して話し合いを持ってて和解出来た様ね』

「おかげさまで。仲直りまで出来ました」

『そう。それはよかったじゃない。でも、ご両親とは無理だった様ね？』

「まあ……事情が事情だけに。それで報告が遅れてすみません。今日から数日ほど篠ノ之家に泊まります。篠ノ之のお父さんの方が篠ノ之のお母さんが体調を崩して実家の方で療養していて、その篠ノ之のお母さんの様子を見に篠ノ之のお父さんが行って家を空けて、留守と箒の面倒を頼まれたので」

『それについては私達の方に篠ノ之のお父さんから連絡があったから知っているわ。分かった、そういうこといろいと一郎さんに伝えとおくわ。せっかくだから、うーんと妹孝行しなさい』

「妹孝行って……けど、師匠に」

『でも、近いうちに一回は絶対に二人で戻ってきなさい。一郎さんも貴方に稽古をつけながら話したい事があることだし、私も束ちやんと話したい事があるからね』

「分かりました。でも、箒が」

奈々さんの屋敷に帰るのはいい。元々、その予定だったわけだし。だけど、状況が変わって帰るわけにはいかなかった。箒と和解して仲直りして折角、篠ノ之のお父さんから箒を任せれ家に居る事を許してもらったんだ。それを棒に振るような事出来ない。

それに俺達が出て行くと箒を置いていくことになってしまう。箒を連れて行ければいんだらうけど、奈々さんは態々『二人で』と言っ

てきている。

それは多分、重い話をするから箒に心配をかけないようにという奈々さん達なりの気遣いなんだろう。ただど……

『箒ちゃんは千冬ちゃんにでも見て貰えばいいし、ダメなら咲夜を派遣するわ。それに夜になれば箒ちゃんも屋敷ウチに咲夜に連れてきてもらう。私も一郎さんも久しぶりに箒ちゃんと会いたいからね』

「そうですね」

『そうよ。ちゃんと考えているんだから、安心して顔出しに帰ってきなさい。それにしてもそっちは静かね、束ちゃんと箒ちゃんは？』

「二人仲良くお風呂ですよ」

『あら？そんなの、和解して仲良くなったみたいだね。本当に良かったね』

そう電話越しで嬉しそうに言う奈々さん。千冬と同じ事を言っているな。それだけ、二人が仲良くなったのは嬉しいニューズみたいなものだからな。

それに奈々さんは、言っちゃあ篠ノ之のお母さんに悪いけど、本当に母親以上に母親らしくて、母親としての情が深い人だからね。本当に嬉しいと思ってくれているんだろう。そう思ってくれているのは何だか俺も嬉しい。

『綾は一緒に入らなかったのねえ？』

「楽しいそうに聞かないで下さい。誘われましたが仲のいい姉妹の

時間を邪魔したくないので遠慮しました」

『よく言うわ。つまらないわね。まっ、兎も角、一度二人で安心して帰ってきなさい。その事を束ちゃんにも伝えといてちょうだい。それじゃあ、そろそろ時間も時間だし切るわね』

「はい、分かりました。藪遅く、すみません」

『硬いわね、気にしちゃダメよ。もっと、柔らかく柔らかく。じゃあ、お休みなさい』

「お休みなさい」

そう言葉を交わして奈々さんの方から電話を切ってくれた。携帯をポケットにしまうと、寝転んだ状態で伸びを一つする。伸びをすると体に疲労が抜けた感覚が小さく走って、今だ綺麗な夜空を掴むように手を高く掲げて夜空を眺める。

千冬と電話して奈々さんへ連絡をしてこれでやる事は終わった。後は風呂に入って、少ししたら寝るだけか。洗濯物は明日でいいか。そんなに無いみたいだし。

なら、明日の朝ごはんを考えないと。朝から千冬と久しぶりに一夏と会つものだから。やっぱり、好きなものの方がいいのだろうか。いや、定番で行くべきか。つて……やっぱり、所帯臭いな俺。

そんな事を思い少し凹んでいると……

「綾、今上がったよ」

「お待たせ、兄さん」

寝転んだ状態のまま、声が出た方を向くと。

パジャマに身を包んだ束と篝の二人が仲良く手を繋いでいた。どうやら、お風呂を一緒に入って事で更に仲が深まった様子。昔と比べると更にいいことだ。

俺は一旦、寝る込んでいた状態から起き上がり縁側に座る。

「二人仲良く温まってきたようだね」

「うん。だけど、姉さんに体を洗ってもらっている時に変な事を…

…」

「篝ちゃんっ！それは言わない約束だよっ！」

「変な事としたの？」

「軽いスキンシップを……あっはははっ」

「アレが軽いスキンシップなの？」

「いいじゃん、別に。篝ちゃんも満更でもなかったしねっ」

「そ、それは……ううっ」

「篝ちゃん、顔真っ赤っつ　それで綾は何してたの？」

上手い事話したを逸らせようと別の話題をふってくる束。

束が言うその軽いスキンシップが検閲的な意味でどういっものなの

か気になる。

まあ、大体は予想通りなんだろう。篝も顔真つ赤にしているし。満更でもないし別に問いつける必要はないか。本当に嫌だったら、篝は俺に泣きついてくる訳だし。

「俺はここで夜空でも眺めながら寝転んでぼーっとしてた」

「また？」

「兄さんらしいね」

「ははっ。そうだ、さっき千冬から電話あったよ」

「ちーちゃんから？なんて？」

「明日、一夏連れて朝の九時からここにくるんだって」

「朝九時からか……早いね」

「まあ、明日には遅くても八時までには全員で起きるつもりだし、大丈夫。朝食もこっちで食べれるって。こっちで勝手に承諾したけど、よかった？」

「朝早く起きるのはつらいけど、全然いいよ。いっくんと久しぶりに会いたいからね。朝は起してね？」

「最初からそのもりだよ。篝は？」

「私もいいよ。千冬さんに会いたいし」

二人とも了承してくれた。

もっとも、断れるとは思っていたから、念の為に聞いたままでに過ぎないけど。

二人とも承諾してくれてよかった。

明日は朝から気合いれて頑張らないと。

「それと束」

「何？」

「奈々さんに連絡しといた。篠ノ之家に泊まるのはいいけど、近いうち絶対に二人で一度は奈々さんの屋敷ウチに来なさいって。話があるらしいから」

「話……そう、分かった。行くのはいいけど、その間篝ちゃんはどうするの？」

「気にしないで。私一人で留守番するよっ！」

奈々さんの話が何なのか知っている様子の束がそう問いかけてくる。すると、篝は気を使ってくれてそう言ってくれた。

気を使ってくれるだなんて。篝は、本当にいい子だ。お兄さん感動。いい子に育ってくれているからこそ、一夏にやると思うと腸煮えくり返りそうになる。

と、思う俺は本当にシスコンですね。本当にありがとございます。

そんな馬鹿な事と篝の成長を感動しながら二の句を告げる。

「ありがとう。でも、千冬に面倒を見てもらうか、ダメなら咲夜さんを派遣して話とかいろいろと終わったら、咲夜さんに家まで箒を連れて来て貰うって奈々さんが」

「そう、それなら大丈夫だね。ごめんね……私達の都合で箒ちゃんをほったらかしにしちゃうようで」

「そうだね……ごめん、箒」

「だから、兄さんも姉さんもそんなに気にしないでっ！あんまり子供扱いしないでよっ！一人で出来るもんっ！」

そう不貞腐れて何処か拗ねたように言う箒。

そんな箒の様子を見て微笑ましくて、俺と束はつい笑ってしまった。

「ははっ……ごめん。そうだね、箒は一人で出来るね」

「そうだね……ふふっ、可愛いな、箒ちゃん」

「むう〜っ。でも、待ってるよ。咲夜さんが奈々さんの屋敷ウチに連れて行ってくれるでしょう。なら、待ってる」

「ありがとう。箒」

「んっ」

感謝の思いとかを込めながら箒の頭と髪を褒める様に撫でる。箒は撫でられると嬉しそうに心地よさそうにしていた。

話は済んだ事だし、俺もお風呂に入ろう。

そう思い隣にあつた蚊取り線香を持ちながら、立ち上がる。

「さて、俺もお風呂入ってくるよ」

「にははははっ 一緒に入ってあげよっか？」

おどけた口調でとんでもない事を束が聞いてきたものだから、俺は呆れ気味に言った。

「さつき入ったばかりでしょうが。それに姉妹の仲のいい団欒を邪魔したくないから一人で入ってくるよ」

「ちえっ。まあ、いいんだけどね 明日は一緒に入るんだからね」

「ふふっ、そうだね」

姉妹揃って小悪魔的な笑みを浮かべ、恐ろしい事を言う。

二人とも呟く様に言っていたから、聞いたのが言った言葉とあっているか定かではないけど。

二人の笑みが小悪魔的なちょっと怖い。身の危険を感じる。

「今なんて？」

「ふふんっ、気にしな〜いっ ほら、行った行った。早く上がってきてね」

「待ってるね」

二人に背中を押されるように俺は風呂へと向った。いろいろ不安を抱えながら。

数十分後、俺は早々とお風呂を済ませた。

入浴中、二人揃って小悪魔的な笑みを浮かべ、恐ろしい事を言った言葉が気になったりしたが気にしないようにした。

気にしたらところで埒が明かないだろうし、それに聞いたところでも二人ははぐらかして答えてはくれないだろう。

だから、明日を楽しみにしておく。その時がくれが何が起こるす分かることだし、いい事が悪い事かは別としてだけでも。

「さて、そろそろ寝ようか」

そう立ち上がりながら言ったのはお風呂から出て三人でテレビでも見ながら団欒している十時頃。

時間的には少しだけ早いかもしれないが、明日を考えるとこのぐらいの時間の方が丁度いい。

ぐっすり寝れる事だし、夜更かし過ぎて朝最低ラインである八時起きれなくて、寝過ごしたら大変だ。

「そうだね。明日は一夏や千冬さんも来る事だし」

「そうだけど。でもっ、もう少しこうしていようよ」

「はいはい、駄々捏ねないの。そうしていたいのは山々だけど、箒が言う通り明日は千冬と久しぶりに一夏が来るんだ。それに備えて早めに寝ないね」

「分かった」

納得した様子だけど、何処かまだ少しだけ腑に落ちない様子の束を抱きかかえながら立ち上がらせる。

さて、寝る場所をどうしようか。

お客用の布団が人数分あるのは確認した。

でも、寝る部屋……と言うか、寝る場所を本当にどうしよう？

束と箒は一緒だからいいけど……俺は何処で寝ようかな？

うーん、リビングでいいか、朝起きたら朝食を作りやすいし……

などと考えていると後ろにいる箒に袖を引っ張られた。

「箒？」

「ねえ……姉さんと兄さんは今日何処で寝るつもりなの？」

「私はまだ何処で寝るか決まってない」

「俺もまだ決まってない。今考えているところだよ」

そう束と俺が言うつと「そう」と箒は呟く。

すると、箒は恥ずかしそうにモジモジしながら言った。

「だ、だったら……兄さん姉さん、三人でい、一緒に寝てもいい？」

恥ずかしそうにモジモジしながら言った放棄の言葉を聞いて俺達は

「「えっ!?!」「」と言ってしまった。

「うんっ!いいよ、箒ちゃん 三人一緒に川の字で寝ようっ」

「ありがとうっ！姉さん。兄さんはダメ？」

「いいよ。三人で一緒に寝ようか。部屋はどうする？」

「客間でいいんじゃないかな？あそこ広いから。そうと決まれば、バビューンって行くよ」

「了解」

「うんっ！ありがとう、姉さん兄さん」

「」
「」

嬉しそうにニコニコと満面の笑みを浮かべていると早速客間に向う。客間は風呂掃除して浴槽にお湯張っている間に簡単に掃除したから、直ぐにでも掃除なしで使える。

と言うか、箒が提案してくれたそれを全然思いつかなかった。盲点だった。思いついていれば、案の一つに加えて考えやすくなったのに。

まあ、反省するだけ時間の無駄か。結果的にこうなったことをよしとしよう。

客間に着くと押入れから布団を取り出し三人分の布団を引く。布団を引いて寝る準備をすると歯を磨いて、早々と布団の中に入る。ここは比較的にES学園より夜は涼しくけど、俺は暑いのがダメなのでエヤコンを付け、二人が風邪を引かない様に涼しい適温にしてタイマー設定をする。

忘れず、携帯の目覚ましも設定しておく。

これで、このまま目を閉じて意識を落としていけば眠れるんだろう

けど……

「これおかしいよね？」

「何が？」

「だから、どうして俺が真ん中なんだ。こういう場合は普通、箒が真ん中じゃ……」

そう、三人川の字で寝ているけど俺が真ん中である。

俺が真ん中でその真ん中の俺の両隣に束と箒が寝ている。

何か間違っている気がする、俺は間違っているのだろうか。

二人はさも当然だと言わんばかりに言っただし。まあ、昔からこの並びだったけど。

こういう場合、普通は箒が真ん中のはずでは。

「普通ってなんだろうね？箒ちゃん」

「そうだね、姉さん。普通って何かな？」

「二人とも……」

「いいじゃん、これでも。普通はあくまで世間一般の普通であって、私達の普通じゃないんだよ。昔からこの並びだしね……もしかして嫌なの？」

「そんな事は無いよ。そうだね、昔からこうだったしね」

「そういう事 昼間さっきまで散々箒ちゃんとスキンシップしてい

「だから、今度は綾とスキンシップ」

「そうか。なら、いいか」

「うん ほら、篝ちゃんも」

「うん」

「そう言葉で束が篝を手招きすると……」

「ぎゅーっ」

二人に両腕を抱きしめられ抱きつかれた。

束に抱きつかれてる方は、束の豊かな胸が当たって気持ちよく。

篝が抱きついている方は、篝の体の温もりが伝わってきて、これで気持ちいい。

「ただ、抱きつかれたからって動揺したり取り乱したりはしない。

昔からこういう事は慣れ出し、一人は恋人だけでもう一人は妹なので束に興奮しても、篝に興奮は絶対にしない。誓って。仮に興奮したら違いなくいろいろな称号がもらえる変態だ。

「こんな事を冷静に分析するように考えている時点で、充分変態だけど、男は皆スヘゲオor変態で、変態と言う名の紳士で変態という事は自覚しているので、大丈夫だ問題ない。」

「動揺しないんだね。つままないっ」

「残念」

「二人とも本当に悔しそうにしない。人をからかわない。ほら、も

つと傍に」

「わっ」

「わわっ」

やらればなしは少し癩に障るので反撃する様に二人をもつと密着させるかのように抱き寄せると束と篝の二人は驚いていた。

だけど、頬を少し赤くさせて嬉しそうにしている二人の表情が、まだ薄い橙色を放っていた小さい電気のおかげで見えた。

ほんの少しだけ暑苦しいけど、丁度いい心地よい暖かさで俺だけじゃなく束も篝も安心している。

「さて、そろそろ寝るよ」

「はい」

薄い橙色を放っていた小さい電気を消してタオルケットをかけ直す。電気を消して部屋が真っ暗になると眠たさが少しずつ襲ってきて、両隣に二人がぴったりと密着してくる。

本当に幸せだな、本当に今日は満たせされた刹那だった。こうして今、三人一緒に寝るだけで嬉しい。

そう二人も思ってくれているだろう。

「それじゃあ、お休み。束、篝」

「うん、お休み。綾、篝ちゃん」

「お休みなさい。兄さん、姉さん」

そう三人交互に言って三人一緒に仲良く寄り添いあい眠った。

…

第三十一話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十一話 ？

今回は前回よりも長かった（滝汗）

いや、長いというよりは冗長的過ぎていきますね。すみません。

もう少しパツパツと簡単に書けて、サクサクツと物語を進められたらいいのに。

出来も今回はこれで限界だけど、悪いですね。うーん……

いつくか重複表現や変なところや描写が足りた所があるかもしれない。

両親がダメ人間として書いてしまった（汗）これもヤバイ（汗）

父親はまだ大丈夫なんとか、和解出来そうなんだけど。

母親がどうもダメ過ぎる。フルバの物の怪憑きの母親をモデルにした過ぎた（汗）

母親との和解はまず無理ですね。IS以前の問題ですし。

千冬さんが電話してきたのは次への土台創りです。

何も連絡なしに来る人じゃないと思ったので、書きました。

奈々さんは東さん師匠というだけあって、ぶつとんでいます。だが、年齢を…（殴

奈々さんの影響を受けて今の本編の東さん&原作の東さんが出来たとしています。

ただ、名前が名前だけにあの歌姫様で声を再生してしまい違和感が
wwww

当初は名前が同じというだけで声は関係なかったけど、もう歌姫様で声を再生してもいいよね？

そして、酷いと言えば……

「気にしないで。私一人で留守番するよっ！」の後が酷いwww後、心理描写も

いい意味でか悪い意味でかは別として、雑かな？と思っています。風邪で疲れていたんだよ。精神的に。うん。

綾君は爆発しろっ！何だよっ！美女二人と布団を一緒にするって。書いて何度消したか事か。

最後にアンケートばい奴です。

次の第三十二話は起きる描写から始まるのですが。

それにあたり、いろいろ原因があり寝坊して、

千冬さんに束さんと綾君と一緒に寝ていた痕跡を見られるというアクシデントはいりますか？

次から選んでください。

1、いる

2、いない

アンケートは感想等と一緒にお願いします。

それとキャラ紹介&IS機体設定とかちゃんとしたものに乗せた方がいいかな？

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘or誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十二話 ？（前書き）

どうして、私はこう……サクリというか簡単に短く書けないんだ
ろうか。

今回はいつもにもまして長い……冗長的です。1万文字越えですから
それと今回は、ゆっくり読むことをお勧めします。長いので（汗）
ちなみにアンケートは1になりました。これを長く書き過ぎたのが、
冗長的な原意かな？

それではどうぞ！

第三十二話 ？

綾視点

ピンポーン、ピンポーン……

ぼんやりのした意識中、客が来ているのを告げるベルが聞こえる。ベルに起され、意識を覚醒させていくと寝汗を少しだけ掻いているのが分かった。

エヤコンが切れているせいなのかもしれないけど、七時ってこんなに熱かったつけ、襖から差し込む朝日を薄目で確認したけど、外は七時頃にしては明るすぎる気がする。

それにこんな朝早くから誰だろう……兎も角、起きよう。

「起きれないし……」

起きる為に体を起そうとしたけど、起きれなかった。

両隣にいてまだ、寝ている二人に体に抱き付かれているから、上手く体を起せない。

箒は寄り添って普通に体に抱きついて気持ちよさそうに眠って、まだ手は動かせるけど。

反対に束は腕と手ごと体に抱きついて気持ちよさそうに眠っていて、オマケに足まで絡めてきている。

胸とか太もとかいろいろと当たって気持ちがいい、得役だ……じやなくて、とりあえず時間を確認しないと。

生憎とこの客間には掛け時計なくてもものはなく、箒の方の手を上に乗ばし、携帯を取って時間を確認する。

「ヤバイ……」

小さく絶句した声を漏らす。
携帯で時刻を確認すると携帯の液晶には朝の九時を数分ほど過ぎて
いる事が表示されていた。
寝過ごした。アレ？おかしいな……昨日はちゃんと七時に起きる様
目覚ましをセットしたはずなのに。
もしかして……いや、犯人なんて最初から明白だ。叱るなら後で
も十分だから、早くこの状況を打破しないと。
ヤバイ……九時過ぎてるって事はさっきのベルは千冬達か。

ピンポン、ピンポン

また、呼びベルが鳴った。

どうしようか……この状況を一刻も早く打破しないと。
いつまでも外で千冬達を待たせるのは悪い。でも、動けない。
箸は兎も角、問題は束だ。ガツチリホルドさけていて、動けない。
束は起きるのに時間がかなりかかるし。
等と策を考えていると……

「んっ……」

箸が起きた。

起きた箸は上半身だけ起して、まだ眠たそうに目を閉じて目を覚ま
す為に目を擦っている。

箸のお陰で何とかなるかもしれない。

「おはよう、箸」

「んっ、おはよう。兄さん」

朝の挨拶『おはよう』を箒に言つと箒は眠たしそつにしながら得満面の笑みを浮かべながら言葉を返してくれた。

ああ、まるで天使のようだ。と、余計な事を考えている場合じゃなかった。

箒にまた苦勞をかける事になったしまつもしれないけど、ここは箒を頼つてお願いしないと。

「ベルになつていてるみたいだけど……お客さん？出なくていいの？」

「出なくちゃダメだけど、これだからね」

「ああ……姉さんにガツチリ抱きつかれているね」

「うん。束のおかげで少し困つていてね……お客さんというのは千冬なんだ」

「ええっ！？嘘ツ！？目覚ましは？」

「本当。目覚ましは束に止められたばいんだ。それで悪いんだけどいつまでも外で千冬達を待たせているわけにもいかないから、リビングの方に通しといってくれないかな？俺は束を起すのに全力を注ぐから」

「うんっ！分かつたっ！任せてっ！千冬さんは何があつてもこつちに来させない方がいいよね？」

「そうだね。いろいろとヤバイから。リビングの方で待つてもらつて。悪いね、箒。苦勞をかけてしまつてすまないね」

「それは言わない約束でしょう。それに兄さんの頼みなら喜んで聞

くよ。私に何でもしてくれるように私も兄さんに何でもしたいからね。じゃあ、行ってるね。姉さん、起すの頑張ってるね」

「いい子だ、篝。うん、頑張るよ……篝も頑張ってるね」

はにかみながら部屋を出ていく篝。

本当に篝はいい子だ。流石は俺達の妹。と、また余計の考えをしている場合じゃなかった。

篝が頑張ってくれるんだ、俺も頑張って素早くまだ隣で寝ている束を起す。

半分起きているのは確認済みだ。髪の毛を梳く様に撫でるとピックピックと気持ちよさそうに震えているし。

でも、半分は寝ている。その半分寝ている状態が結構厄介、俺の経験上。

「起きなさいっ朝ですよっ。玄関の外に千冬達来ているよっ」

「あ〜しょうなんだ……よかったね。でも……あと、五分。うん……」

「よくないから。聞く耳持ちません。起きなさい」

前にも同じ様な事を体験したな。デジャヴるんだよ。

とりあえずいつも通り、優しく揺すりながら声をかけて起してみた。こういう状況では普通、急いだりせかしたりするのが基本で普通なんだろうが、それは昨日束が言った通り世間一般の普通。

急いだりせかしたりして起そうとすると、返って余計に起きなくなる。

それでもこれは効果がない。お約束でやっているだけなので。

起してみたものの今だ半部おきて半分寝ている状態で、変わらず腕と手ごと体に抱きついて足まで絡めて気持ちよさそうに半分眠っている。
効果なし、これは既知済みだ。なら、最終手段といくか。これなら効果抜群だ。

「キスしたら、起きる?」

「へっ?あ……うん」

俺の突然の言葉に流石の束は聞き逃さず、驚いて完全に起きた。よし、成功した。やっぱり、最終手段は効果抜群だ。

初めからこうしてればいいが、それじゃあ最終手段じゃなくなるのではない。

さて、漸く起きたな。驚いて抱きついている力が弱まっている事だし、今がチャンス。

「よいしょ」

「あつ……ねえ、キス……してくれないの?」

上半身だけ起そうとすると、ガシッと体に抱きつかれ起きそうとするのを妨害された。

そして、布団に肘ついて半分だけ上半身を起した体勢で束を見ると、同じように布団に肘ついて半分だけ上半身を起した体勢で俺を見つめている。

瞳が潤んでじつと俺を離さず見つめている。地雷を踏みに行っていたようだ。最終手段は効果は抜群だが、後々大変になってく諸刃の剣だ。

しかし、束から目を離させない。仕方ない、最初からそのもりでも

あつたわけだし。

「しょーがないね……んっ」

「んっ……ふふんっ 大好き、んっんっ！」

「ちよっ！」

一回だけ口付けして離れて起すつもりだったが、ぐっと抱き寄せられもう一回口付けを交わす。

それだけならいいのだが、ぐっと抱き寄せられたまま舌を出してきて絡めてきた。

最初こそは驚いて押し返そうとしたけど、それは逆に束を喜ばせる行為となつたしまったのだった。

更に束は舌を激しく気持ちよく絡めてくる。

「ん、んうんっ……ちゅっ……」

激しく舌を絡めあう度に脳髄は痺れ、脳内麻薬が大量分泌され痺れている脳髄を気持ちよく溶かしていく。

マズイってこれはっ！ そうは思うものの思考だけに留まって行動に移せない。

気持ちいい……相変わらず束の唾液は甘い。俺の理性をガリガリ削っていく。

だけど、千冬が来ているんだ、こんな事をしている場合じゃない。早く起きないと。そうは思うけど、俺も束も背徳感みたいなものを感じてしまい、お互い唇を離そうとしない。

と言うより、俺の悪い癖……やられたらやり返せが出てしまい、束を攻めてしまっている。やめようとする、束がそれを阻止して、俺がまたやり返すという無限ループが形成されている。

最終手段はこれから控えよう。そう思ったと同時にどちらからともなく、唇を離した。

「ふふっ、満足　じゃあ、お休み」

「ほら、これでいいでしょう……って、寝るなっ!」

「やくんっ!」

勝手に満足した束は勝手に二度寝しようとしている。

待って、待ってっ!人が地雷踏んで自殺しにいつて、起したのに二度寝しないでほしい。

そんな思いがあり、つい急いだりせかしたりする様に体を揺すつてしまい、それが切欠なのは知らないが本当に二度寝しようとしている。

困っていると、こっちに向って数人の足音と声が聞こえてる。それは段々と大きくなって……

「千冬さん、そっちに行っちゃダメだよっ!リビングの方に居ようっ!ね?」

「すまないな、篝。そうしたいのは山々なんだが、何やらよからぬ事がこつちで行われている気がしてならないんだ」

「そ、そんな事ないよっ!」

「本当か?なら、何故そんなに動揺しているんだ?ん?」

「ど、ど、ど、動揺してないよっ?!本当だよっ!?だから、そっちはダメっ!リビングに居てお話ししようよっ!私、千冬さんのお話

聞きたいな〜っ！ほら、一夏も千冬さん止めるの手伝えっ！」

「う、うん。ほら、千冬姉……箒の言う通り、リビングに居て綾さん達待とう？」

「悪いな、箒、一夏。迷惑をかける。だが、漢乙女おとめには成せば成らない事があるんだ。同じ女なら分かるよな、箒」

「えっ……？あっ……うん。じゃなくって、行っちゃダメなのっ！」

そんな会話をしているのが聞こえ、声も足音も段々と大きくなってこちらに近づいてくるのが分かる。

箒が見事に自爆してる。ああ、そんな箒も可愛い。じゃなくって、かなり箒に苦労かけているな。申し訳ない気持ちで一杯過ぎて胸が張り裂けそう。兄としてかなりなさけない。

これも束のせい……じゃなくって、俺のせいだ。人のせいしていても意味ないし、こういう状況を想定してもっと用心してない俺が悪い。

兎も角、束をどうにかして起して離れて死亡フラグを回避しないと。

「ほら、束。起きて、起きなさい」

「後……三分……zzz」

「こらこら、寝ないでっ！今、こっちに千冬が向って来ているからっ！」

「ええっ！？嘘ッ！？本当ッ！？」

「本当だから、早くっ！」

外には聞こえない様に、それでいて束にはしつかり聞こえる様な大きさの声で言うと束は飛び起きた。

流石の束も千冬の名前を聞いて、このまま状況で眠っている訳にはいかないということを理解して様で何より。

でも、起き上がったのはいいけど、まだ少しだけ密着していてもう、時に既に遅し。

ふう……っという音を立てながら、襖が開く。襖の向こうにはもちろん、千冬がいたのだった。

「おはよう、綾、束」

「グ、グットモーニング？」

「何故、疑問系で英語もどきなんだ？」

襖の向こうにいる千冬に朝の挨拶を言われると、俺と束は焦ってか英語もどきの言葉を返してしまった。

それも見事に吃った言葉までも一緒に揃って言った。以心伝心という奴か……

関心している場合じゃなかった。終わった……例えるなら今は、地雷の上に足を乗せていて重さがなくなった瞬間に爆発しそうな状態。どう見ても、危険な状態ですね。本当にありがとうございます。

「綾は向こうに行ってる。束には話がある」

「うん」

「えっ？へっ？な、何？ちーちゃん」

部屋に入ってきた千冬の指示通り向こうに行く。

ふと、開いた襖の向こうを見ると箒が一夏が居た。

一夏は呆れた様な何ともいえないと言った表情をしており、箒は謝るように必死に何度も俺に向って頭を下げている。

そんな箒に手振りで『気にしなくてもいいだよ』という事を優しく表現すると、頭を下げるのはやめたけど申し訳なさそうにシュツとしていた。

気にしなくてもいいんだよ。兄さん達が兄さんがドジ踏んだだけだから。

千冬は束が寝ていた布団に両膝を付けて、束に馬乗りする様な体勢で束を跨いで束を見下ろしている。

束を見下ろす千冬はキツと鋭く睨んでおり、この場の雰囲気若干ながら凍った気がする。

小学生二人はそんな千冬を流石に直視するのはダメみたいで、一夏は全力で顔を背けて、箒は少しだけ背けながらも申し訳なさそうにシュツとしている。

「束、お前が目覚まし止めて。二人を寝坊させたそうだな」

「ごめんなさい……いつも癖でつい」

「何が『つい』だ。昔も同じことしていただろっ！」

「あれ？そうだったっけ？」

謝りはしたもののおどけた口調で話す束に千冬は『はあ……』と溜息を零す。

既知感が……これは強烈な一発が束の頭に振り落とされそうだ。

ほら、この通り。

「反省しろっ！馬鹿者っ！」

「にゃうっ!？」

ゴンツという激しいチョップにしてはおかしい衝撃音が成った。結果としては見て分かる通り、束は千冬からの強烈なチョップの一撃をお見舞いされた。

チョップした千冬はすつきりとした顔をしており、束は涙目になりながらチョップが落ちた所を痛みを紛らわす様に手で擦っている。

襖の向こうで見ていた一夏は何と言えない様子で苦笑いを浮かべており、箒は呆れた表示をしていた。

だけど、涙目の束も可愛いな……いつまでも取り乱している場合じゃない。

こうなるのは仕方ない……因果応報天罰靦面という奴だ。これで少しは束が反省してくれたらいいんだけど。

それでもやっぱり、可哀想だと抱きしめながら慰めたくなるのは俺の性サガと言う奴なんだろうか。

・
・
・
朝のちょっとしたアクシデンとから数分後。

さっきのちょっとしたアクシデントで確実にあやしまれたと思っただけ。

昔から同じ様なことがあって、同じ様なオチだったから、『昔も同じことがあったな』とまったく怪しまれなかった。

あえてかもしれないけど、これで何とかいろいろな危機は回避でき

たがする。

そして、今はと言うと皆で朝食を食べている。

「それにしても、こうして皆で朝ごはんを食べるの久しぶりだね。」

「そうだな。今まではいろいろと大変だったからな。」

今日の朝のメニューは、白ご飯にお味噌汁に出し巻き玉子に焼き鮭におひたしと言うシンプルな日本食の朝食。

座っている位置は、箒、俺、東の順番で横一列に並び、その向かいに千冬と一夏が座っている。

東が言うとおり、こうして皆で朝ごはんを食べるのは久しぶりだ。いろいろと大変だったからと言うのも千冬が言うとおりあるけど、今までが今までだ。

本来なら、ありえなかったかもしれない一時なだけに『大切』だとしみじみ思う。今と言う一瞬刹那を噛み締めよう。

「もぐもぐ……んっ！やっぱり、綾さんが作ったご飯は美味しいよっ……」

「ありがとっ、一夏。箒はどうか？」

「んっ、とっても美味しいよ。美味しいご飯作ってくれてありがとうっ、兄さん。」

「どういたしまして。」

本当に美味しそうに食べてくれる一夏と箒。

束も千冬も美味しそうに食べている。
こんな風に美味しく食べてもらえると作った甲斐がある。

久しぶりに再開した一夏は変わっていないかった。

身長は伸びて、他のところも成長しているけど、中身というか雰囲気は昔のまま。

負けず嫌いの威勢のいい男の子のままだった。本当に一夏はいい意味で変わらない。

「そうだ。綾さんはIS学園？だったけど、そこではどうなの？」

「どっつて？」

「男は綾さん一人なんでしょう？はーれむで楽しいとか、いろいろとあるでしょう？」

「いや……楽しいは楽しいけど、大変だよ。自分以外、全員女の子なわけだし。というか、ハーレムなんて言葉を何処で覚えたの？」

「えっ？一郎さんが『綾はIS学園でハーレムでウハウハなんだぞ』って」

「そうか。教えてくれてありがとう」

「うん……？」

俺の顔が笑顔で強張っているのを見てのだろうか、一夏は不思議そうな顔をしながら食べている。

あの野郎……絶対、葬る。グチャクチャのバラバラにしてやらあつ。

実際のところ、IS学園は、ハーレムなんて優しいものじゃない。周りが異性ばったかりなのはいろいろの意味でキツイ。それに俺には束が居て。

他の女の子に（目移りは絶対しないけど）目移りしようものなら、物凄い鋭いハイライトのない目で睨まれる。

下手したら、某有名ゲームの鮮血の結末になりかねない。ハーレムなんて生易しいものなんかじゃ決してない。ある種の生き地獄だ。

「でも、一夏。今のうちに覚悟しといた方がいいよ。下手すると後悔するかもしれない。一夏は俺と同じよう事になるかもしれないからね」

「綾、それではまるで一夏もISを動かせると言っているようなものじゃないか？」

「えっ？ そうなの？ でも、男じゃISは動かせないんじゃない？」

「もちろん、男はISを動かせない。でも、極僅かな可能性の話だよ。人間、どこでどうなるか分からない。逆立ちしてって人間は神様にはなれないことなんてない。それは見たことないだけで、もしかすると……ということもあるかもしれない」

「どういう意味？ 兄さんの言っている事、難しくて分かんない」

「簡単に言つとだね、筈。ちょっとした事で物事は大きく変わるって事だよ」

「そうだね。人間の一生は何が起こるか分からない。だからこそ、面白い」

そう俺と考えが同じ束が楽しそうに言う。
対する、一夏と篤は意味が分からないと言わんばかりに疑問そうにしている。

残る千冬は、険しい顔で一夏の可能性の未来について心配している様だった。

千冬も俺達に負けに劣らずブラコンだな。

「もつとも、IS抜きにしても一夏がハーレムが作るのは確定かな？ 篤から聞いたよ。一夏、学校で物凄くモテモテなんだってね」

「なっ！？モテて何かないよっ！」

「ほおっつ、それじゃあ、なんでいつもお前の周りには男の子が少なくて女の子があんなに大勢なんだ？」

「知らないって！篤、何でそんな顔をむっすつとしているんだよっ
」！
」

「うるさいっ！」

照れ隠しの様に急ぎ気味でご飯を食べる篤。

ヤッバイ、束じゃないけど恋する乙女状態の篤は可愛い。

これはこれでこの篤はいい。やっぱり、可愛い。

一夏の前では篤は、千冬のような凛とした口調になるんだよな。

千冬への憧れと恥ずかしさからあんな口調になってしまつと前教え
てくれた。

しかし、乙女状態の篤を見ているとにやけが止まらない。

「おい、そのシスコン二人。二人揃ってニヤニヤするな、不気味だ」

「酷いっつ、ちーちゃん。可愛い篝ちゃんを見ているとニヤニヤするのは仕方ないんだよ」

「ふふっそうだね。そういう千冬もブラコンじゃないか」

「ほとつけ。でも、確かに一夏がハーレムが作るは確定だな。我が弟だけに複雑な気分だ」

「なっ！？千冬姉までっ！」

「そういうちーちゃんもIS学園では、百合ん百合んハーレム作っているじゃんか」

「ええっ！？そうなんだ……千冬姉も人のこと言えないじゃんか」

「一夏？優しいお姉ちゃんが怒る前に口を閉じたほうがいいぞ。束、もう一発いっとかか？」

「い、ごめんなさい」

「それは勘弁」

綺麗だけど何処か凄みが悪黒い満面の笑みの千冬に鋭いナイフの様な瞳で睨まれると一夏は素直に謝って、束に苦笑いして頬を引きつけていた。

そんな二人の様子に俺と篝と千冬の三人は呆れて、呆れた篝が言った。

「バカばっか」

「本当にな。んっ、ごちそうさま」

一足先に食べ終わり、食器を台所へ運んだ千冬に続くようにして俺達も朝食を食べ終えた。

・
・
・

朝食後。

俺と千冬は洗い物をしており、その後ろで何やら束がごそごそと何かをしていた。

洗い物をしながら振り向き加減に見ると、束がいつも使っているPADとテレビをケーブルで繋いで、PADを操作している。
何する気だ？

「束、何しているの？」

「ん？えーとね、篝ちゃんといっくんに綾とちーちゃんの模擬戦の映像を見せようと思って」

「えっ？」

「おい、馬鹿やめろ。見せるな」

束の言葉に俺は驚いただけだったが、千冬は本当に嫌そう言ったのだった。

千冬は一夏をそこはかたなく過保護にするからな、心配なんだろう。

ISを見せるのが。

ISは宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・ス
イツだといっても、一般的なISの認識は次元違いの兵器だ。

千冬は自分がISに関わっていてその力の良さや恐ろしさも知って
いるからこそ、一夏に見せてくれないのだろう。

もしかすると、関わらせたくないと言う思いも何処かにあるのかも
しれない。

それは俺だって同じだ。出来れば、箒をISには関わらせたくない。
でも、関わらせないってのはほぼ無理だろう。箒は、ISの生みの
親である束の実の妹であり、今のところ世界で世界でただ一人男で
ISを動かせる俺の家族でもあるのだから。

否応なしに自然の流れで箒もISに関わっていく事になるんだろう
な。それがその時の箒の選択なら、喜んで見守るしサポートもする
けど心配だ。

「ええ〜っ？ダメなの？でも、箒ちゃんもいつくんも見たいよね？」

「少しは……」

「凄く見たいっ！千冬姉、ダメっ？」

「うっ……仕方ない、好きにしろ」

「やったっ！見てもいいっって」

「うんっ！ありがとうっ、千冬姉っ！」

「……ああっ」

一夏にお礼を言われて千冬は照れくさそうに頷いていた。
何だかんだ千冬は、一夏に甘い弱い。

本当、散々俺と束に『シスコン』と言ってからかうくせに千冬のほうこそ『ブラコン』で人の事を言えないと思う。

「ふふっ」

「な、何笑ってるんだ？綾？」

「いや、千冬は何だかんだで本当は一夏の激甘だと思ってね」

「楽しそうに言うなっ！ほっとつけっ！」

少しだけからかうと隣で一緒に洗い物している千冬は、顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしていた。

「見せるのは許したが……やっぱり、見せるのはいい気がしないな。さっきの綾が言ってくれた事を変に気にしてしまっとな」

「あ……ごめん」

「何故、謝るんだ？私が勝手にしているだけの事だ。綾が変に罪悪感を感じて謝る必要は一切ない」

「うん」

「でも、もしも、一夏がISを動かせるようになったら、もしくはIS関わる事になったら私はどうするのだろうと思っとな。正直、どうしたらいいのか分からん」

「可能性の話だから、あまり多くは言えないけど……それが一夏の選んだ道ならちゃんと話し合って、お互いの意見を尊重してその道を進むのを見守る事しか出来ないと思うよ」

「だがな……」

「心配する気持ちは分かるよ、俺も篤がISに関わっていくのは心配だし不安だよ。だけど、相手が自分で選んだのなら見守ることしか出来ない。相手が自分で選んだ道を進むのは自分じゃなくて、相手なんだからね」

「そう、だな……」

「それに見守りながらも助けたりは幾らでも出来る。用は信じるしかないって事だよ。千冬は誰よりも一夏を大切に思っている、お姉さんなんだしね」

「そうだな。綾の言うとおりだ。ありがとう、綾」

「どういたしまして」

そんな事を洗い物しながら話していた俺と千冬だった。

こんな偉そうな事を言っているにも実際になつたらそうできるか分からない。

未来のこと……この場合は可能性の事なんてものは、その時にならないと分からない。それはまでいくら未来や可能性について考えいても、予知や予測にしか過ぎない。

だけど、篤がISに関わっていくことになったのなら喜んで見守るし、全力でサポートするという気持ちは揺るがない……と思う。

洗い物を終わると俺と千冬は後ろの方、リビングでその俺と千冬の模擬戦映像を見ている東達の方に行く。

「おつ、洗い物終わったんだね。お疲れ様〜」

「ありがとう」

「二人とも真剣に見てるな」

俺達三人の前では一夏と篝が画面に映る模擬戦映像を真剣に食いつくように見ている。

一夏は目を輝かせて見ているけど、篝は真剣な顔をしていみている。一夏は兎も角、篝はISに対して思うものがあるんだろう。よくも悪くもISのおかげで巡るめしく周りが変化したからな。

「千冬姉、カツコイイっ!」

「そ、そうか?ありがとう」

「兄さんもカツコイイっ!」

「でしょうっ!綾、カツコイイよ」

「ありがとう、篝、束」

「でも、以外。ギロチンみたいのだけでガンダムじゃないんだね。兄さん、あのシリーズ好きだから。何か意外」

「好きだけど、形だけそれでも中身の性能や機能が伴っていないなかつ

たらただのパチモンだからね。そういうのは嫌なんだ。ギロチンは男のロマンだしね」

「分かるよっ！綾さんっ！」

「そうかつ！流石、一夏だっ！」

「……ロ、ロマンなの？やっぱり、男の子ってよく分からない」

「ふふっそうだね」

不思議そうにしながら言った篝の言葉に同意するように微笑みながら言う。

男の子ってよく分からないのは仕方ないだろう。俺だって、未だに女の子ってよく分からない。

と言うか、俺ってそこはかたなくガンオタとされているのかな？

束にも以前、篝と同じ様な事を聞かれた訳だし。

そんなにどっぷりははまってないんだけどな。精々、アニメ見るかガンダム関係のゲームするぐらいで、プラモデルは作った事ないし。ガンオタと思われるのなら、これも全部水城一郎って奴のせいなんだ。アレが俺にガンダムを薦めたわけだし、そうしておこう。

「ISカッコイイなあ〜乗れないけど、生で見たいつ！出来ないの？千冬姉」

「無理だな。ISは規定の場所以外の稼動は認められてないからな。規定の場所以外で稼動すれば、いろいろと小言を言われる。悪いな」

「そっか〜」

「見れる事には見れるよ、いっくん」

「本当っ!?!」

「うんっ 奈々さんの所の『倉持技研』でなら、稼働できるから生で見れるよ 次奈々さんと会ったら、その話もしとくから楽しみにしててね」

「うんっ楽しみにしてるっ!」

何か勝手に約束ほ交わしている束と一夏。

そりゃ……『倉持技研』でなら、動かせるけど勝手に約束をつけないでほしい。まあ、いいけど。

ただ、千冬はいろいろな事を心配しているのかまた、険しい顔をしている。

険しい顔をしていたけど、一つ咳払いをすると気分を変えたようだった。

「んんっ!それで……これからどうする?」

「どうするっ?」

「このまま家ではーっとしているのはもったいないだろう。折角、こうして皆で久しぶりに集まっている事だしな」

確かに千冬の言う通りかもしれない。

このまま家ではーっとしているのはもったいない。一般的な考えでは。

俺の考えでは、このままぼーっとしていたい。だって、外暑いし夏休みだから何処も人が大勢いそう。だから、外に出たくない。家にいたい。引き籠もりとかではなので悪しからず。

「という事で、プールにでも行こう」

「賛成っ」

「うんっ！プール行きたいっ！」

「俺は……」

「却下とか悲しい事なしだよ」

束に詰め寄られそう言われる。

先手を打たれ、釘まで刺されてしまった。

まあ、この場合『却下』と一言で片付けてしまうのは無粋というものだろう。

千冬が言う通り、折角こうして久しぶりに集まっている事だし。それに却下したところで無駄な抵抗だ。どうせ、行く事になる。

だからここは潔く行こうか。

外は外暑いし夏休みだから何処も人が大勢いそうだけど。

「分かった。行くよ」

「やった〜っ！篝ちゃんは？」

「私も行きたい。家暑いし、泳ぎたい事だし」

「そっか これで全員だね」

「嬉しそうだね、東。千冬達は水着持ってきているの？」

「ああ、もちろんだ。最初から行くつもりだったからな」

用意がいいね。まったく。

「そんじゃあ、バビューンと行こう」

こうして俺達は、プールへと行く事になった。

…

第三十二話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十二話 ？

前書きでも書きましたけど、本当に長いor冗長的でしたね。すみません（汗）

短くしようと思えば思うほど、こんな風に長くなる。ハッ……もしや、呪いか？

伏線を張るのは雑ですね。精進あるのみっ！ですね。

アンケートの結果、1となりましたが如何だったでしょうか？

束と千冬が少しだけ暴走して、綾君と箒が苦勞を買いました。綾君は自業自得ですがwww

箒、ごめんよ（T T）恨むなら、綾君を恨んでくれ。

綾君は表情や動作等、表立っては同様はしませんが。

内心ではかなり動揺して、取り乱しています。綾君の心理描写の通り。

綾君って男or漢らしいですか？ただのシスコンなのは知っていますし、彼も自覚しています。

それに綾君の自論って裏を返すとその自論の欠点なんですよね。こも考え直さないと。

一夏について綾君が言めいた事を言っていますが。

綾君は原作知識を持った転生者などではないので、あくまでも予言の域は出ていません。

まあ、この予言は当たる確率が高いのですがね。

何より束さんが同意している同意しているという時点ではほぼ確定です。

そういえば原作を読み直して思い知ったのですが。

一夏って小学生の時の記憶ってほぼないんですね。この過去編、これでいいのか？

分からない。まあ、ダメだったら微調整して何とかします。

それとアンケートというかりクエストぽいものです。

次回、プールに行くので、篝の水着何がいいですか？

現在はスク水は考えているのですが、他が思いつきません（汗）
といこでアンケートぽいリクエストを実施しますっ！

1、新型タイプのスク水

2、旧型タイプのスク水

3、篝にはこれだっ！これしかない。というリクエスト。リクエスト内容は細かくして下さい。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

次回　ガンダム大地に立つならぬ、三大美女プールサイドに立つ
こうご期待っ！

第三十二話 ？（前書き）

旅行前の更新です。

今回はいつもよりも短いです。まあ、水着を見せる導入編だけですからね（汗）

長くしようとしたら必要以上に長くなるので、試行錯誤中です。旅行前で変に焦っているむといこともあると思いますので。

変だったりおかしたらったりしたら、帰ったら消します。消して書き直します。

アンケートの結果は、作中通りです。

プール編でのシュチュエーションリンクエストを受け付けます。

例としては、水中バレーしたり水の掛け合いでキャキャウフフとかいろいろ

それではどうぞっ！

第三十二話 ？

綾視点

「暑い、人多い」

「あっははは……」

俺がぼやく様に呟いた言葉を聞いて隣に居る海パン姿の一夏が小さく苦笑いを漏らした。

プールに行く事なった後、俺達は早速プールがあるレジャー施設に來ていた。

案の定、来たプールがあるレジャー施設は人が多く、空調設備が整えられており、プール施設内は涼しめの適温に設定されていると思うのだが、俺にしたら暑い。

汗こそは出てないけど、人の熱気みたいなもので暑い。めげそうだ。俺達が何をしているかと言うと束達の水着の着替えを待っている。

「千冬姉達遅いね」

「そうだね。でも、女の子はいろいろと準備に時間がかかるものなんだよ。それを快く待つのがいい漢の甲斐性ってやつだ」

「そういうものなの？」

「そういうものなんだよ」

分かった様な分かってない様な曖昧な表情をする一夏。

一夏には早すぎた、難しいかったかな。

どうでもいいかもしれないけど、俺は待たせるより、待つ方が遥かに好きだ。

待たせていると申し訳ない気持ちで一杯になり、変に急いでしまう。それに待っている方が、いろいろと想像出来るから好きだし楽しい。どんな感じで来るんだろうとか、どんな洋服で来るんだろうとかいろいろな想像が出来るから、楽しくて好きだ。

この程度で待つのに根を上げてはいけない。

俺は基本的に待つ方が多いが、昔からよく待たされた。

千冬はなるべく早めに来てくれるけど、束には悪い時には一時間以上待たされた記憶がある。

まあ、束を待つのは好きだし苦じゃないし、それにその時はちゃんと謝ってくれたから今となってはいい思い出だ。

だから、この程度で根を上げていけない。女の子を快く待つのがいい漢の甲斐性というものだし。

「待たせたな」

待っているとそう言って女性陣で最初に現われたのは千冬だった。

「お………」

千冬の水着姿を見て関心した様な驚いた様な声を漏らす一夏。

そう言えば、去年は見たからは知らないけど、今年の千冬の水着姿を一夏は初めてだったな。

千冬が着ている水着は、学校での臨海学校で着ていた黒色のビキニタイプの水着。

黒という色が、千冬の凜としたクールな雰囲気を引き立たせ、ビキニが千冬をアダルトイに雰囲気演出している。

「千冬姉、綺麗」

「そうだね。綺麗だ」

「でも、綾さん」

「何？」

「東さんが言っていたけどやっぱり、千冬姉って男の人よりも女の人の方にモテモテ……と言うか、人気だね」

「あ、はははっ……そうだね」

そんなコソコソ話をしている、一夏の言葉を聞いて俺は思わず引きつった苦笑いしてしまった。

確かに千冬は、男の人よりも女の人の方に人気だ。

男の人達も鼻の舌伸ばして千冬の水着姿を見てやがるけど、その男の人達の数圧倒的に上回る数の女の人達が千冬の水着姿を見ている。いや、見惚れていると言ったかもしれない。見ている女の人達は基本的に同年代だったり若い人達だったりだが、見惚れている人達全員、恍惚な表情で見惚れている。

一部の若い人達には「お姉様っ！」と言われていたり言われてなかったりしている。

相変わらず千冬は、女性に凄い人気だ。当の本人の千冬にしてみれば、辛い以外何物でもないだろう。そっちの気がない限り、こんなに同性にモテても嬉しくないからね。

「結構、待たせたみたいだな。すまない」

「いや、気にしないで」

「そうだよ、千冬姉。気にしないで」

「そうか、ありがとう」

「どういたしまして。千冬、今日も水着似合っているね」

「そ、そうか……あ、ありがとう」

同じ水着で前にも言ったけどやっぱり、感想を今回も言った方がいいのかなと何となしに言うと千冬は少し照れた様子で嬉しそうにしている。

女性ってやっぱり、同じ衣装でも同じ様な感想でも嬉しいみたいだ。褒められるのは嬉しいことだな。ただ、今少し照れた様子で嬉しそうにしている千冬は褒められたとは別の理由で嬉しそうにしているけど気のせいだろうか。

「千冬姉、水着似合っている。可愛い」

「ありがとう、一夏。ただ、可愛いは余計だ、可愛いは」

「ええ〜っ綾さんに褒められて照れてる、千冬姉は可愛いよ?」

「い、言うなっ!」

一夏にも水着を褒められて千冬は、嬉しそうだったけど。

「夏は弄る気とかないのだろうが言い、千冬は語気を少しだけ強めて否定するように言っちゃっぴり照れていた。可愛いというのは俺も同意だ。いつもクールだからな。」

「束と箒は？」

「そろそろ、来ると思うぞ。私が出たときはまだ、箒は着替えてなかったんだ」

「そうなんだ」

「何だか凄い事が起きそうな気がする。」

「束がまた何か箒にしてそうだ。度を越してなかったらいいんだけど。そんな事を思っている……」

「お待たせ」

「楽しそうに声を上げている束が現われた。」

「束の楽しそうな声を聞いて、予感が確信になる。」

「これ絶対に束、箒に何かしたな。度を越してなく、トラウマになるような事じゃなければいいが。」

「近づいてくる束に俺の方から駆け寄る。」

「ごめんね。かなり待たせちゃったね。箒ちゃんのお着替え手伝っていたらつい時間かっちゃって」

「大丈夫、気にする事はないよ。と言うか、やっぱり箒に何かしてたんじよう？」

「やっぱりって酷いな。何もしてないもん。本当にお着替えを手伝っていただけ。それに……って、んっ？じっと思つめて、何か変？」

「あっ……いや、そんな事は無いよ」

あまりにもじつと束を見つめすぎたみたいで、少し悪気を感じて少しだけ視線を外す。

束が着ている水着も臨海学校で着ていた白色のビキニタイプの水着。束の豊満な胸を面積の少ない布が包んで綺麗に美しくそして、色ぼさが強調されている。

そして、白色が清純さを演出していて、束のいつも雰囲気を抑えていて、何時もとは別な感じでやっぱりこの水着姿は可愛く、綺麗に見える。

素晴らしい！《マーベラス！》と心の中でつい叫んでしまった。

マーベラス！なのだが、一つだけ気に入らない事がある。野郎共が鼻の下伸ばして束を見ているという事だ。

束は美人で可愛いし、体のラインが物凄く綺麗でスタイルがいい、だから仮に一億歩譲ったとして見てしまっただけ見惚れてしまうのは仕方ないとしても見すぎだ。

今の束の姿は水着で面積の少ない布一枚だけが豊満な胸を包んで、野郎共は凝視と言いかガン見してやがる。流石にこれは一步も譲れない。そんな風に束を見られるのは嫌だ。

女性の胸を男が揃ってガン見するのはおかしい、失礼すぎる。束は少しだけ煩わしそうな表情を笑顔の裏に浮かべている。

だから、『 temeエラが見ていい女じゃねえんだよっ！』という殺気《思い》を込めながらその失礼な野郎共を睨むと全員、怯えた様に見えるのをやめた。

一秒だけ空気が凍ったけど、スッキリしたし、束も煩わしい視線

が消えて、スッキリとして嬉しそうしているからいいか。

「うん、やっぱり、束の水着姿は可愛いし綺麗だし何より色っぽいね。今日も本当によく似合っているよ」

「えへへー そう、綾に褒められるのはやっぱり嬉しい。嬉しいけどやっぱり照れちゃうね。ふふんっありがとっ」

照れながらも本当には嬉しくて抱きついてしまいたいんだろうけど、時と場合や千冬達の事をちゃんと考えたよっで。

本当に嬉しそうな笑みを浮かべながら、ぎゅっと俺の両手を優しく嬉しそうに握っていた。

束にしては控えめなその仕草にグツときた。

「そっういえば、箒は何処に？」

「あれ一緒に出て来たんだけど……あつ、箒ちゃん……そんなところに隠れてたんだ。隠れていても無意味だから早く出てきてよ」

箒の姿が見えないと思ったら、どうやら物陰の方に居たようだ。

束は箒が居る物陰に行くとしゃがんで物陰に隠れている箒と何やら話をしている。

物陰に隠れているってことは、ぽっぽどなことなんだな。束は何をしたんだか。

「ほら、恥ずかしがってちゃダメだよ 箒ちゃんは可愛いんだから自信もって 箒ちゃんの可愛さは私が保障するよ」

「でも、こ、これは何か恥ずかしいよお……」

「「ぶつ！」」

俺と千冬は一緒に吹いてしまった。

おいおい、これはいくらなんでもマニアック過ぎるだろ。

何処でこんな水着調達してんだよ。束のやる事は相変わらず物凄い。可愛いから、いいけど。

「うう……何か恥ずかしい……」

箒は恥ずかしそうに身を縮めて、俯き加減に恥ずかしそうにしている。

箒が来ている水着はスクール水着だった。

だが、小学校とかでのプールの授業等で使う普通のスクール水着ではなく、奈々さんから昔教えられたのがあっていいるなら、確か旧型のスクール水着を箒は着ている。

色は濃紺で、胸辺りには名札までついていてご丁寧なことに名札にはクラス番号とひらがなで『しののほうき』と書かれていた。

旧型のスクール水着といい、名札のひらがな表記といい本当にマニアックだ。

マニアックだけでも、今の箒の水着姿を見たら、その筋の人が発狂して精神崩壊を起してもおかしくないぐらいの物凄い可愛さだ。

恥ずかしそうに身を縮めて、俯き加減に恥ずかしそうにしているのも素晴らしい！といったところか。

だけど、本当にこんな水着を何処で調達してきたのか。家出たことはそんな素振りなかったのに。

「この箒の水着、束が用意したんでしょう？」

「んーそうだね」

「でも、どうやって？こんな水着持ってなかったでしょう？」

「篝ちゃんが学校の水着以外ないって言ってたから、それじゃあ味気ないと思って奈々師匠に電話で相談したら旧スクに決定して、奈々師匠との電話から五分後に咲夜さんが奈々師匠の家にある旧スクを家に届けてくれたの」

「あ……そうなんだ」

楽しそうに東が話してくれた篝の水着がこんな水着になった経緯はめちやくちや束らしいものだった。

奈々さんも奈々さんと相変わらず、奈々さんが考えるの事はぶつとんでいる。

普通、ここはフリルのかわいらしいワンピース水着とかだろうに、旧型のスクール水着を選ぶとは本当にこの師弟の考える事はぶつとんでいる。

旧型のスクール水着自体、奈々さんの家にあるのが驚きだ。

咲夜さんも咲夜さんだ。こんな水着を態々届けに来るなんて。奈々さんの家から篠ノ之気までかなりの距離があるのにそれを五分で届けに来るとは……流石、咲夜さん。

完全に瀟洒な従者な名に恥じない働きっぷりだ。ただ、篠ノ之家に来た様だけと俺と咲夜さん会わなかったのが何か不思議だ。

「不満なの？」

「不満は一切ない。だけど、東、篝で遊んじゃダメだよ？」

「不満は一切ないんだ正直だね。それに分かっている。遊んでないよ。ほら、こんなに可愛いんだからね。」

「ううん」

恥ずかしさからなのか、束の後ろに箒は隠れて恥ずかしそうしていたけど。

束に肩を抱かれて、前に出されると耳まで真っ赤にして俯き加減恥ずかしそうにしている。

箒はどんな水着かは知らない様だけど、やっぱり恥ずかしいんだろ
うな。

でも、とってもよく似合っている。違和感ないし、何より物凄く可愛い。

そんな感想を素直に思った。

「に、兄さん……変……かな？」

「ううん、そんな事はないよ、箒。その水着とってもよく似合っている。可愛いよ。」

「そ、そう？えへへー恥ずかしいけど、兄さんがそう言ってくれるなら嬉しい」

「うん。とってもよく似合っていて本当に可愛いんだから、恥ずかしがらずに自信持って。恥ずかしがっていると肩に変に力が入って楽しめないからね。リラックス、リラックス」

「う、うん。わ、分かった」

今だ少し恥ずかしそうにしているけど、褒められたのが嬉しかった
ようで箒は嬉しそうな満面の笑みを浮かべていた。

今の表情も可愛くていい。水着はマニアックだけど、よく似合っ
ていて、可愛い。箒は何を着てもよく似合っけて可愛いな。

流石は束と血が繋がった妹で俺達の妹だ。何か鼻が高い。

「ほら、いっくんも箒ちゃんに言ってあげないと」

「な、何を？」

「一夏……箒の水着の感想に決まっているだろう。普通」

「そ、そうなの？」

「そうなんだよ、いっくん。女の子というものは、お洋服、この場
合は水着だけど。そんなのを褒めてもらえるを待っているものなん
だよ。だからほら、いっくんも綾みたいにちゃんと箒ちゃんに褒め
るように言っけてあげないと」

箒と俺の後ろで何やら束と千冬と一夏がそんな会話をしていた。

そう言えばプールに行く準備している時に束と千冬一夏に英才教育
を施すとか言っていたな。

ただのハーレムフラグ生産男にならないように女心への気配り方と
か、女の子への女性の扱い方とかいろいろと教えるらしい。

そつえば、俺も奈々さんに散々そんな話をされていると嫌と
いうほど教えられたな。

教えるのはいいけど、教えたら教えたらで一夏の無意識タラシが酷
くなるような気がするの俺だけだろうか。

だが東達の話聞いていた篤は、一夏の言葉を期待して待っている様子だった。

何だか兄として物凄くショックだ。

「ほら、いっくんっ 頑張っつて」

「頑張れ、一夏」

「う、うんっ。ほ、篤っ！」

「うあっ、は、はい！」

一夏に呼びかけられ硬直する篤。

周りは賑やかで賑わっているのにここだけ雰囲気が違う。何だか告白するみたいだ。

「そ、その……その水着似合っている。か、可愛いと思うっ」

「…あう、あ、ありがとう、一夏」

しどろもどろ噛み噛みながらも言った一夏の言葉に篤は嬉しそうにしながらも赤くなっていた。

二人とも耳まで真っ赤。本当に告白でもしたかのような雰囲気だ。

「きゃ〜っ二人ともかぁーいいよっ」

「そうだね。二人とも可愛いね……いや、この場合は微笑ましいと言った方が適切かな」

「そうだな。一夏もよく頑張った」

一夏は言い慣れない言葉を頑張つて言つて、箒は嬉しそつだからいいんだけど、何だか複雑な気持ちだ。
上手く表現できないけど。もしかすると、他の男に妹を渡したくないという妹馬鹿な兄の複雑な気持ちかもしれない。

「ふふつ、綾。少し複雑そつだね」

「あつ……少し、ね」

「本当に綾はシスコン兄さんなんだから」

「あいたつ、そついう束こそシスコン姉さんじゃないか」

「あつはは そつだつた 同じだね」

コツンツと二本の指で束にデコを優しく軽めに突かれ、言い返すと束は嬉しそつな楽しそつな表情で微笑んだ。
でもこんな感じじゃ将来、箒に彼氏できる乃至、結婚するとなれば束と二人一緒に泣きそつ。嬉し涙か感傷的な涙かは分からないけどよし、決めた。俺も一夏の英才教育に加わろう。一夏は今、箒の彼氏&お婿さん候補筆頭候補なので箒に相応しい男に鍛えよう。

「よし、ではこれで全員集まつたな。遊ぶか」

「うんつ！遊びたい、千冬姉つ！」

「遊ぼつつ レッラ・ゴー」

一足先にプールへと向う束達。

人多くって暑いのに元気だな……と思っってしまった。
少しきつくなってきたているのかもしれない、周りの視線が。

「兄さん、どうかしたの？少し辛そうな顔しているよ？」

「大丈夫だよ。何でもないよ」

そうは言っただけ見たものの筈は心配そうにしてくれていた
顔に出ているみたいだ。反省。

きついというのは周りの視線。

それも普通の視線じゃなく、殺気混じりの鋭い視線。

睨まれるのは仕方ないかもしれない。一夏は兎も角、端から見たら
俺は東と千冬という美女二人両手に花状態でオマケ筈という美少女
まで一緒にいる。

そりゃ殺気混じりの鋭い視線で睨まれるの仕方ないかもしれない。

昔からこうだったし。中学の時は酷かったときがあったな……

両手に花の様に思えるかもしれないけど、両手に花と言うよりは両
手に核爆弾と言った方がいいかもしれない。だって、何時修羅場
になるか分からないから。

こう、睨まれるのは昔からこうだったけど、流石になれない。慣れ
る物でもないし、慣れちゃいけないけど。

まあ、気にしていても仕方ない。気にしない気にしない。今を楽し
もう。今という刹那を味わいつくそう。

「兄さん、私達も行くこう」

「そうだね。行っか」

東達の後を追いかけるように俺と筈も手を繋ぎながらプールへと行

⋮



第三十二話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十二話 ？

読み返しましたが、旅行前で変に焦っているのか全体的におかしい気が（苦笑）

特に綾君の心理描写が最近不安定。戒兄さんをイメージしているはずなのに。

今回は短くサククリとおもしろくを意識していたから、短くなりました（汗）

本来の予定では今回の導入編だけじゃなく、この一話でプール編を終らせる予定でしたが

それじゃあ、長い時のいつも以上に長くなるので導入編だけにしました。楽しめました？

導入編だけにしたのは、ただ単にネタ不足ということもあります（汗）

前書きにリクエストとして書きましてが、ネタプリーズっ！

格キヤラ事にも力を入れました。

束さんは自分的に言い出来だと思っています。

大人しめの束さんも、これはこれだと思ったので。

一夏は段々と調整されていく予定です。原作の一夏に影響が出ないように。

第も同じです。暴力的な行為とかをなくして行くよう、調整していきます。

第と言えはいかがだったでしょうか？

アンケートの結果、旧スクとなりました。

経緯はむちゃくちゃなので、指摘されたら消して書き直します。

幕のスク水、楽しんで興奮していただけたら嬉しいです。

過度な興奮は綾君と束さんが駆除しにかかるので、ご注意を。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

次回 ガンダム大地に立つならぬ、三大美女プールサイドに立つ
どうぞ期待っ！

第三十二話 ? (前書き)

5日ぶりの更新。

8月半分になろうというのに夏休み編が終ってないという、最悪な事態。

遅筆なのが一番の原因か……原作開始時に行くのは本当にいつだろうか？

単純計算になると超早くて十二月前、遅くて来年というorz前途多難だ。

それではどうぞっ！

第三十二話 ？

綾視点

箒と手を繋ぎながらプールへと行くとそこには既に大勢の人がいて、賑わっている。

プールの水の水温も適温に設定されている様で、ほどよく冷たくて気持ちいい。

「お水、冷たくて気持ちいいね、箒」

「ふふっ、そうだね。冷たくて気持ちいい」

体を水に慣らすために箒と一緒に一旦、肩まで水につける。

まるでお風呂に遣っているみたいな感じで縮かもしれないけど、冷たくて本当に気持ちがいい。

それは箒も同じな様で、気持ちよさそうに肩まで一緒に水に使っている。

これでは人が少なくて、静かだったら最高だったのに。

そんな風になっていると……

「綾、箒ちゃん」

「ん？何？束」

「えいつ」

「わっぷっ！」

「にゃっ!?!」

束に名前を呼ばれ、箒と一緒に名前を呼んだ束の方を向くと顔に水をかけられてしまった。

肩まで水に浸かっていたのが悪かったのか、水が顔にクリーンヒット。

痛みはこそはないが、顔は全体ずぶ濡れで手の平で顔の水を落とす。

「な、何するのっ!突然っ!姉さんっ!」

「だって〜 二人どものほほとして年寄り臭いよ。せっかく来たんだから楽しまなくっちゃ さっきのは軽いスキンシップだよ」

「だからって!むう〜っ」

「まあまあ、落ち着いて。よし、なら箒、俺達は反撃だ」

「うんっ!そうしよっ〜っ!」

「えっ?へっ?ちよっと、待って」

「聞きません」

逃がす事も回避する事も許さず、透かさず反撃に移る。後ろと近くに誰もいないのをしっかりと確認する。

束は胸の下辺りまでしか水に浸かっていないので、手で水をすくって箒と一緒に束目掛けてかける。

「にゃっ!」

「あつははっ！姉さん、ビショビショ」

「ううゝ酷いよゝ箒ちゃんっ」

「姉さんがかけてくるのが悪いんでしょう」

「そ、そうだけど。だからって笑わなくなって」

箒の正論に肩を小さくさせながらも反論する束。

俺達に水をかけられた束は、ビショビショで俺からすると何か色っぽく見える。

濡れた感じがいい。

「ん？どうしたの？」

「いや、水で濡れた束は色っぽいなと思って」

「そ、そう？えへへー」

「むうゝわ、私は？！」

「箒？箒はそうだね……色っぽいというよりは可愛らしい感じだね」

「そうなんだ、えへへー嬉しい」

姉妹揃って頬を少しだけ赤らめながら、似た様な感じで嬉しそうにしている。

二人とも本当によく似ている。流石は姉妹だ。

今こそは箒は可愛い系担当だけど、成長すれば束並のスタイルと美

人さんになるかもしれない。
篝の将来の成長が楽しみだ。

「むうー綾、嬉しそうにして。鼻の下伸びてるよっ」

「そ、そう？そんな事はないのだけれど……」

「あるもんっ！」

「わっぷっ！」

また、水を顔にかけられてしまった。

それもさつきより威力が高く、少しだけ痛い。

何か東にやられたままというのはしゃっくだな。

「東、やったなっ！ほらっ」

「にゃっ！冷たいっ！反撃だーっ！」

「冷たいっ！なんのこれしきっ！」

「にゃううーっ！うう〜ふふんっ 篝ちゃん、がら空きだよ。えいっ
っ」

「にゃっ！やったなっ！姉さんっ！えいっ」

とまあ、やられたらやりかえせで兄妹三人仲良く楽しく水の掛け合
いを楽しんでいた。

三人ともまだプールに入っただけだというのが既にビショビショ
だ。

特に顔は水だらけ。まあ、楽しいからいいけど。

「三人ともはしゃいでビショビショだな」

「あつはははっ……そうだね」

水の掛け合いをしていると別のほうで遊んでいた千冬と一夏が来た。俺達が水の掛け合いをしている最中、千冬と一夏は二人で楽しく遊んでいたみたいだ。

姉弟団欒というのも必要だろう。

「さて、何して遊ぶ？これから」

「そうだね。何をしようか」

「皆で泳いで競争とかは？」

「名案だな、一夏。罰ゲームアリとかならいいかもしれない」

「いつくん、篝ちゃん、それ酷いっ！私、ビリになるじゃんっ！」

「そうだったね。運動音痴の姉さんには難しいかな？」

「そんなにニヤついた意地悪な顔して言わないでよ。運動音痴じゃないもんっ！人並みだからっ！それでもそれは却下。ごめんね？」

「ちえっ」

「仕方ない」

しづしづといった様子の一夏と篤。

さて、これからどうしてようか。何して遊ぼうか。

このまま水に浸かってぼーっとしているのも俺時にはそれはそれでいいんだけど、それじゃあ勿体無いし、来ている意味がない。かと言って、これといった案もない。一夏や篤が提案してくれた皆で泳いで競争をするにも狭いしな。

「とりあえず適当にそこから泳ぐか」

「そうだね」

一番、ありきたりなものに落ち着いた。

適当にそこから泳ぐと言っても人が多い為、泳げる広さは限られている。

それでも遊ぶには十分な広さだから、楽しんで遊べる。

そんな訳で本当にそこから適当に泳いでいた。

束や篤と手を繋ぎながら泳いだりといういろいろとしながら泳いだ。

「あっ！篤、ウォーターライダー乗ろうぜっ！」

「いいなっ！分かったっ！姉さん達も一緒に乗ろうっ？」

「うん いいよ 乗ろーっ 綾もちーちゃん、いいでしょうっ？」

「いいよ、俺は」

「私もいいぞ」

「やった 行こうっ 箒、千冬姉達っ！」

「うんっ」

テンションの高い一夏に箒が返事をして、俺達の前に一夏と箒が歩いてウォータースライダーに行く。

ウォータースライダーはこのプール施設の目玉みたいなもので、流れが早くぐるぐるしていて楽しくて結構有名だ。

昔も何度かここに来て、ウォータースライダーに何度か乗って楽しかった記憶がある。死にそうに記憶も

「わあゝ人が多いね」

「そうだね」

感心した様な束の言葉に俺は肯定する。

やっぱり、ここのプール施設の目玉だけあって利用しようとする人の数は多い。

小さな列をなしており、箒と一夏を前に並ばして、その後ろに俺と束と千冬が列に並ぶ。

並ぶのをぼーっと周りの様子とかを見ながら待っていると、俺達の順番が来たみたいだった。

「おっ！そこの美形のお二人さんはカップルさんですね」

「えっ？へっ？」

「~~~~」

「さあさあこちらへどうぞっ」

順番が来て落ちるのを待っていると女の係員が来て、突然否応なしに束と一緒にカップル専用のウォーターライダーのレーンに連れてこざされた。

俺と束がカップル専用に乗れてこられて、残る千冬は一夏達と一緒に滑るようだ。

束は「カップル」と言われて嬉しそうで、一夏は突然の事態に面白そうにしていたけど、箒は突然の事態に啞然としていた。

ただ、訝しげにジト目で俺達を見つめる千冬が印象的だった。

えっとーこれはどういう状況なんだ？どうしてこうなった？

係員の人はよく、俺と束が恋人だという事に気づいたな。感心する。いやいや、感心している場合じゃない。

こんな風に乗る専用のレーンに通されるほど、そんなに俺と束はカップルカップルしていたか？

人前では必要最低限、極力そういう恋人らしい事はしないことになっているし、千冬の手前もあってそういうことはしない。

だというのにこうなった。どうしてこうなった。やっぱり、赤の他人に簡単に簡単に気づかれたんだ、もう少し気をつけないと。

そんなに事を思いながら、隣の束を見てみると嬉しそうに表情をしている。

「係員、GJッ！」

「GJッ！じゃないよっ。本当、これって大丈夫かな？」

「今回ばかりは自然になった事だし、大丈夫じゃないかな？気にしたところでどうにかなるか問題じゃないしね」

「そうだけどね」

束の言う通り、気にしたところでどうにかなるか問題じゃない
短絡的な考えかもしれないけど悪い事態が起こっても、なるように
なるだろう。

兎に角、今はいろいろな覚悟を決めてこの刹那を楽しもう。

「楽しむしかない、か」

「そうそう、楽しもう だから……」

「ちよっ！」

腕を組むようにして俺の腕は束の胸の谷間に埋もれた。

抱き込むように抱きつかれ組まれている腕は束の丰满な胸の谷間で
挟まれて気持ちいい。

水着、それもビキニタイプなので腕と胸の間には薄い布一枚しか
なく、妙に意識させてしまう。

と言うか、このカップル専用レーンでも周りの男の視線が痛いのは
何故だ？自分の彼女を見て、彼女にでもして貰え。

「ふふんっ 綾、意識して喜んでくれてるね」

「当たり前。恥ずかしくないの？こんな人前で」

「恥ずかしくないよ だって、綾が喜んでくれてるのならばそれ
だけで嬉しくて恥ずかしさなくてなくなるの」

俺に向けて笑みを浮かべながら真面目な口調で束はそう言う。

これまた、グッと来た。

今日の束はどれだけ、男心というものを付いてくるんだろうか。
本当にいい女だよ、束は。

だから、俺は束の想いに答えるように手を指を絡めながら恋人繋ぎで繋ぐ。

繋ぐと束は握り返してくれながら嬉しそうに笑みを浮かべて笑った。

「ふふっ、ありがとう」

「お二人さん、準備はいいですか」

「はい、大丈夫です」

「それでは行ってらっしゃいませ」

係員のその言葉と同時に俺と束はウォータースライダーの一番上から滑り落ちる。

「きゃー 速ーっ 気持ちーっ」

滑り落ちている最中、楽しそうに束は声を上げる。

確かに速い。

ただの直線コースだけじゃなく、カーブとかもいくつかあるので速度が速くなったりして楽しい。

それに滑っていると水が跳ねてかかって涼しくて気持ちいい。

滑り落ちている最中、恋人繋ぎで繋いで握っている手と腕を抱き込むように抱きついて組んでいる力が強くなり、抱き寄せ更に密着す

る。

「きゃー 落ちるう〜っ」

落ちる寸前、体が浮いてどちらからともなく抱き合う。

そして、抱き合ったままバシャンッ！という音を立てながらプールの水の中へと落ちた。

痛みはないがそこはかたなく痛い。水に叩きつれられるって、これ以上に痛いんだろうな。今度、師匠で試そう。そんなどうでもいい考えが頭に過ぎった。

「あっはははっ 面白いー ねえねえ、もう一回行こうよ」

「ちょっと待って……東は元気だね」

「だって、楽しかったし面白かったんだもん だから、もう一回行こうよ」

「分かったから、引つ張らないでっ……っ」

「……」

「「あっ……」」

俺の束の声が重なる。

俺達の視線の先には、プールサイドで仁王立ちで立って腕を組みながら俺達を見下ろしている千冬がいた。

千冬は見下ろすなんて生易しいものではなく、鋭く睨んでいる。

蛇に睨まれた蛙とはまさにこのことか。恐ろしさに身をすくませて動くこともならず、血の気が引いて、体が恐怖で少し震えていくの

が分かる。心なしか水が先ほどより冷たく感じる。

ああ、やってしまった。そんな久しぶりの感覚が襲ってきた。

「二人とも、仲がよさそうじゃなかったな」

「……そうだね、仲がいいのはいい事だからね」

「そういうことじゃないんだがな。それと束もよかったじゃないか
綾と恋人と思われて」

「えへへー そーでしょう あっ、もしかして……ちーちゃん、嫉妬している？」

「っ!？」

当たり障りのないよう束がおどけた明るい雰囲気特徴で言うと凶星を付かれた様に耳まで真っ赤になってうるたえる千冬。

久々にこの千冬見たな。水着姿で肌が露出しているから、真っ赤なのがよく分かる。

「べ、別に私はし、嫉妬なんかしてないっ!」

「にははは、顔真っ赤で言っても説得力ないぞっ ちーちゃんも綾と一緒にカップルコースで滑ってきたら？」

「で、出来るかっ!そんな恥ずかしい事っ!」

「にははは ちーちゃんは本当に可愛いね」

「黙れっ五月蠅いっ」

防戦一方で束にからかわれ続ける千冬。

束の回避スキルの高さには相変わらず感服する。ギリギリのラインを上手く使い分けている。俺には出来ない芸当だ。

ただ一つ忘れてはいけないのは、千冬と一緒に滑るの拒否した時、俺にだけ見えるように小さくガツポーズしていたのだった。相変わらず腹黒い。

とりあえず、修羅場は回避できた様でなによりだった。

一方、箒と一夏達はと言つと……

「箒、もう一回、行くぞ」

「あ、ああっ」

二人仲良くウオタースライダーで遊んでいた。

一夏は教えたとおり、ちゃんとエスコートして、手まで繋いでいる。

一夏と手を繋いでいる箒は頬を少し赤らめていて幸せそうにしている、幸せそうで何よりだった。

・
・
・

結局、二回目のウオタースライダーには乗らず。

適当にもう一泳ぎした後、プールサイドにあるテーブル席で俺達は休んでいた。

「一夏達は元気だな」

「そうだね。いっくん達は若いから」

「いやいや、俺達も充分に若いから」

「あっははっそうだった。でも、二人とも仲いいね」

「そうだね。このまま一夏は第一筋になってもらおうよ、調教……ゲフン、いい漢に育てないかね」

「このシスコンが。人の弟に変な事をしてくれるなよ？でも、将来、箒が一夏の嫁になるのなら、決闘だな。気持ちを確かめるために」

「ちーちゃんもブラコンだよ 嫁姑と勝負か……おしろそう あっははっ」

楽しそう束が笑う。

俺達の視線の先には箒と一夏がいて二人仲良くプールで遊んでいる。何でも競争をして遊んでいるんだとか。本当に元気だな。

「それで千冬はどうなの、一夏との久々の姉弟水入らずの生活は」

「楽しいぞ。一夏と一緒に時間を共有できるのなんて、こういった大型連休に限られるからな。寮生活をしていると」

「そうだね。それは俺も思うよ。折角、箒と仲直りできたのに夏休みを終えると会いにくくなるからね」

「そうだね。それは私も思った」

「ああ。ただ一つ不満と言うか……まあ、これは私がこの生活を選んだから自業自得なのだが……どうも咲夜さんに姉の座を取られていくぼくってな悔しい。私ももっとお姉ちゃんしないと」

「あつはは……大変だね、千冬は」

「大変だぞ、本当に。咲夜さん、一夏の面倒を見てくれるのはいいが、家では四六時中メイド服らしくってな……」

「ああ、分かった。咲夜さんが家では四六時中メイド服だから、いつくんはメイドさんもしくはメイド服に興味を持ったと」

「そ、そう言うことだ。別に人の趣味にはとやかくはいうつつもりはないんだがな……何と言うか姉としては複雑な気分だ」

「あつはは……最近の子って進んでいるね」

「進んでいるの意味が違うがな」

楽しそうに言う束と溜息混じりに複雑表情で言う千冬。対照的な光景だ。

小学生のうちからメイドさんに興味を持つとは……これも計算して、馬鹿師匠は咲夜さんを派遣したんだろうな。

小さな時の育った環境は大切だとわく聞くけど、まさにこのことか。でも将来、一夏は高性能のフラグ生産機の称号を持つ変態と言う名の漢の紳士となりそうだ。称号については排除するけど、紳士の素質は充分ある。

って俺は何を考えているんだろう。思考を切り替えよう。

その後は何でもないような雑談をしていた。

「おーい、千冬姉、束さんっ！そんな所にいないでこっち来てよっ
」！

「兄さんもっ！」

雑談をしていると箒達からお呼びがかかった。

流石に二人で競争とかをして遊んだりするのは飽きた様だ。

「ああっ分かったっ今行くっ」

「行くッよ、箒ちゃん。綾は？」

「俺は悪いけど、ここにいるよ。荷物見てないといけないし」

「そっか、悪いね」

「すまない、後で荷物番変わる」

「分かった。ほら、二人とも早く行った行った」

箒と一夏をあまり待たさせるのも悪いから、束と千冬を急かせて二人の元へと向わせた。

・
・
・
荷物番の最中、束達が遊んでいるのを眺めながらずっと周りの男共に睨みを効かせていた。

睨みを効かせていた為、幸いな事にナンパとかはなかったけど、あまりにも見すぎだ。

礼儀のなつてない失礼な男共だ。

そんな事をしながらも荷物番をしていると一夏がこっちに近寄って

きた。

「どうしたの？」

「少し疲れたから休憩に。喉乾いたんだけど、綾さん何か飲み物ある？」

「あるよ」

そう言って鞆の中から家から持ってきたお茶の入った水筒を取り出し、コップに入れて一夏に渡す。

「ぶっはー生き返るーっ！」

「あっはは、お疲れ様」

「さっきまで水中バレーしてんだけど、本当に疲れた。千冬姉と箒は兎も角、束さん、なんであんなに運動神経いいの？」

「束は普段、トロいけど何だかんだで人並みには運動神経いいからね。ドンマイ、一夏」

「うん……」

本当に疲れ気味の一夏には俺は労いの言葉でもかけてみた。

確かにさっきまでハードな水中バレーしていたら、疲れるな。千冬と箒は兎も角、何だかんだで束は動き回っていたし。

「女の人って、パワフル」

「あつはは、そうだね。女の人は強いからね。本当に」

「でも、だからって女子に負けたくないな。媚びるとかしたくない」

そういう一夏の口調は強い。

やっぱり、一夏ぐらいでもISの存在によって出来上がる進んでいく女尊男卑な社会に納得できないものを感じていて。漠然とした思いを抱いているのだろう。

「そうだね。俺もそうだ」

「綾さん、俺ね。綾さんみたいに「誰かを守る強い漢」になりたいんだ」

「俺みたいに？」

「うんっ！綾さんは俺にとっての目標の人っ！どうしたら、綾さんみたいに「誰かを守る強い漢」になれるの？」

「そうだね」

難しい質問を一夏にされてしまった。

なんて返せばいいのやら。

俺が一夏に憧れているなんてね。

正直、俺自信は一夏に憧れられる様な人間でないと思っているし、「誰かを守る強い漢」なんていい人間でもない。

束というたった一人を守る為なら、束の為なら、自分の周りだって世界だって自分自身だって、捨てて破壊する様な男だ。

そんな俺が一夏に憧れられる様な人間のはずがない。

でも、憧れられているのは悪い気はしない。
むしろ、何処か嬉しいとさえ思ってしまう。
だから、憧られているのなら……

「守るといふのは本当に難しいことで覚悟が必要なんだ」

「難しい事？覚悟？」

「誰か守るといふなら、覚悟決めてそれだけをひたすらに考えないとダメだよ。覚悟ないうちにそんな事していると……」

「している？」

「絶対とは言えないけど、その守りたかったものを失う事になるからね」

そう言つと漠然と何となく言葉を理解した様で少しだけ一夏は沈んだ表情をしていた。

誰か守るといふなら、覚悟決めてそれだけをひたすらに考えないとダメ。

なんて、言つたがひたすらに考えていてもダメでもある。それは周りを言えてないという事だから。
俺もこの信条を胸にしているけど、昔束を守る事だけに意識が行つて大惨事を起こしてしまったことがあるから、よく分かっているつもりで、いつも気をつけている。

一夏は少しだけ沈んだ表情から今一つ良く代わらないとつた表情を

していた。

やったぱり、難しく言いすぎたか。だったら……

「そうだ。なら、一夏」

「何？綾さん？」

「俺達がいないうち、箒を守ってくれないかな？」

「箒を？」

「そう。今は言った言葉は分からないかもしれないけど、箒を守りながら分かっていけばいい事だし、そうすればいい漢にもなれる。頼めないかな？」

「いいよっ！任せてっ！箒は俺が守るよっ！」

「うん、お願いするね、一夏になら任せられる。箒は可愛い強い子だけど、本当は優しくってそれでいてとっても寂しがり屋だからね。任せたよ、一夏」

「うんっ！俺が綾さん達が居ない間、代わり箒を守るっ！」

「ありがとう、いい覚悟だ。その覚悟を本物と信じて……男同士の誓いだ」

「うんっ！」

俺と一夏は誓いを交わすように拳と拳を軽くぶつけ合った。

・
・
「それじゃあ、私達はこれで」

「箒によろしくっ！バイバイっ！」

「うん、バイバイっ、千冬、一夏」

「バイバイっ、ちーちゃん、いっくん」

十字路、家への分かれ道でそう言って俺達は千冬と一夏はさようならして別れた。

結局、あのプール施設には夕方になるまで居た。

いろいろと大変なイベントもあったけど、久々にプールで遊ぶのは楽しかったし、いい思い出となった。

今日もまた、満たされた刹那だった。

「んっ……んんっ……」

「箒ちゃん気持ちよさそうに寝ているね」

「そうだね。今日は珍しくはしゃぎまくっていたから疲れたんだろ
う」

「そうかもね。ふふっ、箒ちゃんの寝顔、可愛い」

俺の背中で寝ている箒の頬を束がつつくと寝息を漏らしていた。

今日の箒はいつも以上にはしゃいでいたから疲れたんだろ。

プールから上がって着替え終わってからずっと眠たしそうにして、フラフラして危なかったから。

背中に担いで上げると安心して眠たさからなのか直ぐ寝ていた。今も俺の背中の上で気持ちよさそうに寝ている。

「んっんっ……兄さん」

「わっ、寝言まで綾の事を言ってる。愛されているね、綾」

「そうだね。可愛い妹にこんなにも想われるのは兄貴冥利に尽きるよ」

「むう〜嫉妬しちゃうな」

「こらこら、妹にまで嫉妬しない」

「分かってないな、綾は。妹だからこそ嫉妬するんだよ。今日だっ
てずっと篝ちゃん嫉妬していたんだから」

「本当？」

「本当だよ。何だかんだで篝ちゃん、いつくんよりも綾にべったり
だったからね。そりゃ嫉妬するよ。気が気じゃないし、篝ちゃんは
もしかすると一番の強敵になるかもしれないしね」

「ないって」

「あるもんつまあ、綾は私のだから、仮に篝ちゃんと妹以上の一線
超えて摩く事あったら分かっているよね？」

「分かっているし、妹相手にそんな事は決しないのでご安心を」

「なら、いいんだけどね」

ほっと内心で胸を撫で下ろす。

さっきまで箒にまで嫉妬してくれた様で、ハイライトがないヤンデシ目だった。

実の妹にまで嫉妬か……ヤンデレな束もこれはこれで可愛くていいけど、将来娘とか出来たらもっと大変そうだ。

そんな事をふと思ってしまった。

「そうだ、束」

「何？」

「いや、明日か明後日に師匠の家に行こうと思うんだけど、いいかな？」

「いいよ、行かないといけないしね。でも、綾の方から行こうだなって珍しいね」

「嫌でも行かなくちゃいけないからね。あまり会いたくないんだよな。奈々さんはあの水着送ってくるし、馬鹿師匠は馬鹿師匠で箒達に変なことを吹き込んでくれるし」

「あっははは……でも、箒ちゃんの旧スク姿可愛かったでしょう？」

「うん、可愛かった」

俺はそう素直に言った。

箒の今日の水着、旧型スクール水着はマニアックだけど、確かに可愛かった。

一生物の思い出となりそうだ。今日の箒の水着姿はちゃんと脳裏に焼き付けている。

すると、素直に言った俺を見て束は楽しそうに微笑みながら、俺の頭を優しく撫でていた。

「素直だね。だけど、嫌でも頑張つて奈々師匠とおじ様に会いに行こうかっ」

「そうだね」

そんな話を帰り道でしながら背に寝ている箒を抱えて左腕で支え、残る右手で束と手を恋人繋ぎで繋いで帰り道を歩いて帰ったのだった。

…

第三十二話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十二話 ？

プール編というわりには大したイベントしてなかったな。

プール言った記憶ないから、こういう場所はよく分かりません。

兎に角、楽しんでいただけたらと思っています。

東さんと千冬さん、箒に萌え悶えていただければ更に嬉しいです。

水かけは定番ですよね。

いろいろなところで見かけるので書いてみました。

ウォーターライダーはあるお方からリクエストしていただいて書きました。

本当に綾君と東さんがイチャイチャしていただけだったwww

東さん可愛いよ東さんっ！嫉妬した千冬さんが微妙だった機もするがいいか。

一夏と箒も何気にイチャイチャ。箒さんが幸せそうで何よりです。

もう少し一夏と箒の描写を増やそうかとも思いましたが、力不足という一身上の都合で断念しました。

綾君と東さんと千冬さん、3人での会話が最近なかった気がしたので書きました

ただの世間話となりましたが。

メイドスキーになる一夏。チエルシーさんとかに興味心身になりそうですwww

そして、綾と一夏の漢の誓い。これが今回書きたかった。

一夏の「誰かを守ること」に強い憧れを持つというのを更に強固なものにしました。

一夏の中で綾君は背中で語る漢の様な存在 or ヒーローです。
原作では一夏の覚悟とかがゆるゆるに思えたので、
こういうところで補強して原作時には第一筋のいい男にする予定で
す。予定未定ですが。

最後のまとめはいつもいいかげんになっちゃってしまっ(汗)
次への話の踏み台みたいなもの予定だったので。
そう考えると全体的にいいかげんな回でしたね。すみません。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞い
て下さい。
よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何
卒お願いします。
待っています。

第三十三話 ？（前書き）

嵐の前のネタだらけの回。

分かる人には分かるネタばかりです。

全部分かる人ってどのくらいいるのかしら？

と言つか、後書きってちゃんと見られているのかな？

いつもグダグダ書いているだけだけど。

それではどうぞっ！

第三十三話 ？

綾視点

プールに行った日から数日後のある日の朝。

俺と束と箒は、朝早くから織斑家にやって来ていた。

「多分、奈々さんが咲夜さんが箒を迎えに来ると思う。だから千冬、悪いけど箒のことよろしく頼むね」

「箒ちゃんのことよろしくね、ちーちゃん」

「ああ、任せろ」

この日は朝から師匠のところへ束と二人で行くことになっていた。

そのことに既に師匠のところにも連絡を入れて『早めにこい』と言われており。

初めのうちは奈々さんが提案してくれた通り、咲夜さんをお願いしようかと思っただけ。

千冬に師匠のところに行くという事を話したところ、箒を織斑家で預かってもらえる事になった。

咲夜さんに箒の面倒を見てもらうのもいいけど、やっぱりここは織斑家で面倒を見てもらうほうがいいだろう。

咲夜さんよりもよく知っていて面倒見のいい千冬の方がいいだろう。何より一夏が入る事だし。

「一夏も箒のことよろしく頼むよ？」

「任せてよっ！綾さんっ！」

「いっくん？篝ちゃんは女の子なんだから、ちゃんと一日優しくエスコートするんだよ？」

「分かったっ！任せてっ！東さんっ！」

元気欲意気込む一夏。

一夏はこの間のプールでの漢同士の誓いをやる気満々の様子だ。

何か少し心配ではあるけど、今日一日一夏に篝のエスコートを任せよう。

余計なお世話だけど篝の淡い恋を後押し出来るし。

それに一夏と篝を一日一緒に居させれば、一夏の第一筋計画を進める事が出来る。

篝をほったらかしにしてしまっけど、そう考えると悪い事だけじゃないと俺は思ってしまう。

「ごめんね、篝。折角帰ってきたのにほったらかしにしてしまっよっで」

「ごめんなさい、篝ちゃん」

「だから気にしないで大丈夫だよ、兄さん、姉さん。千冬さんと一夏と一緒にいるんだ、一人じゃない。私は大丈夫だよ」

「うん。それと篝ちゃん、いっくんの前ではおしとやかでお上品でそれでいて控えめであること。いつも教えたとおりでいれば大丈夫だから。」

それといっくんにもっと来る事があっても絶対に暴力はふっちゃ

ダメだよ。分かった？これは絶対だよ」

「わ、分かったっ」

一夏には聞こえない様、それでいながら箒には聞こえる様に束が箒にいろいろと力説すると

箒は少し、その圧倒された様子で何故が力むように両手でガッツポーズしながら、うんうんと力強く頷いていた。

「姉さんは兎も角、私は少し兄さんが心配」

「えっ？どうして？」

「だって、兄さん、一郎さんと会ったら毎回必ずボロボロになるから」

「あ、はははっ」

箒に心配されるながら的を付かれた言葉を言われて、俺は言い返すことが出来ず乾いた様な苦笑いをする事しか出来なかった。

箒に心配されながら言われたとおり、俺は師匠と会ったらほぼ毎回必ずボロボロになる。

それは師匠が修行と言つ名目で、ボッコボッコされるからである。ちゃんと鍛えられているけど、修行された日には全身傷だらけという惨事。

それを昔、箒に見られて心配されて大泣きされたという嫌な思い出がある。

それを思い出して箒は今、心配してくれているんだろう。本当に思いの最高の妹だ。

「だから、なるべく無事でいてね？」

「うーん、相手が一郎師匠だからね……どうなるか分からないけど、でも、なるべく無事でいられるよう善処するよ。心配かけてごめんね、心配してくれありがとう」

「ううん、気にしないで。それじゃあ、気をつけて行って来てね、兄さん、姉さん。行ってらっしゃい」

「行ってきます。ほら、束も」

「うん。行ってきます、篝ちゃん」

篝を真ん中にしてその両端に俺と束が篝と目線が同じになるようにしゃがみながら、行ってきますの挨拶を言いつつ俺と束の二人は篝を抱きしめ3人でぎゅっと抱きしめあった。

篝に必要以上、心配かけないようにしよう。

でも、相手は師匠だ。鍛えなおすといっただいて、俺も高校生になって、多分師匠はもう手加減はしてくれないだろう。

その気配が奈々さんとの電話でも奈々さんづてに伝わってきたし、何より前に学年トーナメント時に会った時の冷め切った雰囲気の手加減をしない事を物語っている。

だから、100%無事は無理そうだけど。篝に必要以上、心配かけないように善処しよう。

三人で抱きしめあったのに十二分満足すると離れて、そろそろ行くところ。

「それじゃあ、そろそろ行ってきます」

「行ってきます」

「ああ、気をつけてな。行ってらっしゃい」

「気をつけて、綾さん、東さん。行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい、兄さん、姉さん」

「行ってきます」

三人の言葉に俺は東は声をそろえて返した。

そして、三人に見送られながら、俺と東は織斑家を後にした。

「……うーん」

「どうかしたの？」

「いや、箒の事を思いつつ先の事を思うと少し不安と言うか複雑と言うか」

「ああ、なるほど。おじ様、綾には厳しくて無茶苦茶するからね。愛の鞭だけど」

「愛の鞭？愛の無知でしょう、馬鹿師匠は」

「あつはは、上手いね。でも、私がついているから大丈夫だよ。と
言っても、私じゃ頼りないかもしれないけど」

「そんな事はないよ。とつても頼りになるよ。俺は束が傍に居てくれるだけで俺はどんな事だって頑張れるんだ。ありがとう。それじゃあ、頑張っつていこうか」

「うん」

互いの決意を再確認して改めるように恋人つなぎを握りなおすと少し歩くスピードを上げて俺と束は師匠の家へと向う。

・
・
・

織斑家を出てから数十分後。

徒歩と電車を利用して長い道のりを超えて、師匠の家に来て来た。今は門の前にいる。

「相変わらず門から嫌味ったらしい家だ」

「まあまあ、綾。門大きいね。流石はお金持ちだ。あつ、門開いた。凄いな、あのカメラで見てるのかな？」

「多分ね」

門の上の方にある監視カメラに目をやっていると目の前の門が開き、束の手を引きながら門の向こうにへと歩き出す。

門の向こうには綺麗に手入れが行き通ったガーデンが広がったおり、束は少し興味を持ったのかガーデンや屋敷、辺りを見渡している。

「相変わらず、屋敷大きいね。流石はお金持ち、考えが違う」

「違いすぎて理解できないよ。昔から思うけど、嫌味ったらしい家

だ」

「もおゝ綾からゝいつもそんな事言っているよね」

「事実、そうなんだから仕方ない」

俺達は屋敷までの道を歩きながら、師匠の家である屋敷を眺めている。

師匠の家である屋敷は、某三千院家の屋敷を連想させる様なデザインの大きな洋館だった。

オマケに大きくて広い敷地がついていて、高級住宅街の端の方に立っているという贅沢っぷり。

とまあ、嫌味つたらしいと言っているけど、あまり思っていない。

ある種のちょっとした師匠に対する当て付け、皮肉みたいなもの。

内装もそれなり高級品があるけど、それ以外は師匠達が贅沢しているところは見たことない。

使用人だっしょうがなく咲夜さん一人だけだし、通勤電車愛好家だし。

もっとも、使う事は使うんだけど。例を上げるなら、束が昔リクエストしたプールとか。

そのプールもここから見える。

門から屋敷まではちょっとした距離があり、その距離を歩き屋敷の小さな扉の前に立ち、呼びベルを鳴らすと扉が開いた。

「お待ちしていました、綾お坊ちやま、束お嬢様」

そうメイド服のスカートの両端を摘むように持ちながら礼儀正しく

礼しながら言つて、メイド服の女性が扉を開けて中に通してくれた。メイド服の女性は美人で身長は割と高め、衣服は襟・肩のひらひらが付いた白い前掛けエプロンが付いた青と白を基調としたメイド服を着ている。

銀髪のボブに両方のもみあげ辺りから、先端に緑色のリボンをつけたみつあみを結っていて、頭にカチューシャを装備している。

この人がこの屋敷ただ一人のメイドである、十六夜咲夜さんしほやさくやさん。

俺達よりも年上の二十代の美人な女性で名前や容姿、衣服といい某弹幕ゲームのメイドさんを浮かべるが関係ない。オマケと言わんばかりに腰に銀色の懐中時計を下けているけど関係ない。

なので、某弹幕ゲームのメイドさんの様に『時間を操る程度の能力』なんてものはないから、時間を止める事も出来ない。

「はい、時間は止められません」

大っぴらに考えすぎていたのか、考えている事を読まれて笑みを浮かべられて言われてしまった。

咲夜さんはメイドの嗜みで読唇術まで心得ている凄い人だ。

何でも、『メイドたるもの主の雰囲気だけで望みを分かれ』というものらしい。

水城家は基本、家事分担勢で家事は全員でやっているが、二人の仕事柄忙しい時が重なるので。

咲夜さんは、必然的にこの屋敷の家事等を基本的には一人で担当している完璧超人だ。

そして師匠のアホ教育受けて男のロマンも理解しているからしく、これでは一夏がメイドに興味を持つのも不思議と頷ける。

「と言うか、その呼び方やめてくれませんか？」

「私も。何だかこそばゆい」

「すみません。お二人は養子とは言え、ご主人様と奥様の大切な子供故、お聞き苦しいかもしれませんが何卒ご了承を」

「……はあ」

優しいな笑みを浮かべられながら物腰柔らかく言われ、つい咲夜さんの雰囲気に飲まれてしまい、俺と束は口をそろえて曖昧な返事をしてしまった。

ちなみに養子というのはISを作った事で俺と束は勘当と絶縁をされ、篠ノ之家から戸籍を抜かれてしまい。

宙ぶらりんになってしまい、宙ぶらりんでは何も出来ないののでここで水城家の養子となった。

苗字はそのままだけど、俺は元ある鞞に戻ったという感じだ。

「それでは、ご案内します」

咲夜さんに案内されながら家の中を歩き始める。

屋敷の中は普通と言うか、高級感漂う感じだった。

高そうな壺や名画はないけど、床が赤絨毯というのは慣れない。

屋敷の中は靴じゃなくって、スリッパだけだ。

「そう言えば、咲夜さんは千冬の代わりに一夏の面倒を見ているんですね」

「はい、不肖の身ながら千冬様の変わりに一夏様の面倒を見せていただいています。とっても楽しいですよ。特に一夏様と箒様のやり

取りを見ているのは」

「あっ、やっぱり」

「はい、東お嬢様。お二人のやり取りは見ていて本当に微笑ましいです。私も一夏様と箒様推奨派ですね。ただ、一夏様のタラシつぶりといったらいいのでしょうか？それには感服しますが」

「あつはは、流石いっくん」

そんな他愛のない話を屋敷内を案内されながら歩きつつしている。

学校や初対面の人の前では無感情・無表情だけど、咲夜さんとは束は普通に親しく話せる。

これも俺の奈々さんの調教……ゲフン、教え賜物だ。半分は奈々さんのお陰だけだ。

「咲夜さんはまだ、一郎師匠の事が好きなので？」

「はいっ！ご主人様は最高の男性ですっ！私はご主人様に身も心も全てを捧げていますっ！」

「わあゝ凄い力説」

一郎師匠の名前を名前を出したとたん耳が面白いぐらいにピクっとなつて、

一郎師匠のよさを立ち止まって、後ろから着いていつている俺達の方に向けて目を輝かせながら力説する咲夜さん。

咲夜さんはジジコンだ。正確には、一郎師匠狂信者と言ったほうが

いいかもしれない。

咲夜さんは俺達が小五の時に水城家に現われた。

何でも一郎師匠がイギリスに行った時にスラム街で死にかけの状態で見つけて、引き取って育ててからの付き合いらしい。

一郎師匠はちゃんと咲夜さんを育てて大学まで行かせて、押し切られて水城家のメイドとなった。

そんな経緯があるので点咲夜さんは一郎師匠を一人の男の人として愛しており、奈々さん公認のただならぬ関係らしい。

ちなみに咲夜さんはイギリス人だ。名前がなかったらしく、日本人みたいな名前は師匠がつけた。

「流石ジジコンですね」

「ジジコン、なんて変な言い方しないでいただけますか？そういう、綾お坊ちやまはシスコンの癖に」

「言葉に棘を感じるのは気のせいですか？咲夜さん？」

「気のせいですよ 綾お坊ちやま」

笑みを浮かべられ、華麗にスルーされる。

やっぱり、言葉に棘を感じる。

と言うか、『綾お坊ちやま』と協調されている辺り、物凄く皮肉ぶられている。

変なことを言ってしまったから、自業自得か。

そんな他不意のない話をしながら咲夜さんに先導されつつ広い屋敷を歩いていると……

「あっ奈々師匠だっ！」

「へっ？東ちゃん……？東ちゃんだっ！」

屋敷の渡り廊下を歩いていると東が同じく廊下を歩いている奈々さんを発見した。

すると奈々さんは、東の声で気づきこちらを向くと嬉しそうな表情を浮かべながら物凄い速さで走って向かってくる。

そして、やってくるなり抱き付くように東をぎゅっとハグする。

「きゃー いらしゃい 東ちゃん 綾もいらっしゃい」

「はい。お邪魔しています」

「はい 来ちゃいました」

「うんうん 相変わらず、東ちゃんは可愛いわね ちゅーっ」

「ちょっと、やめて下さいよ 胸も触らないで下さい」

久しぶりに再開できたのが奈々さんは嬉しいのか、東を愛しそうにぎゅっと抱きしめる。

ただ抱きしめているならいいけど、奈々さんは勢い余ってか東の頬に軽くキスをしたり、セクハラ紛いに胸を触ったりしている。

やられている東は満更でもない表情をして奈々さんに抱きついてるいる。

その二人の光景を俺と咲夜さんは端から見守っている。

昔からこのだから別になんとも思わないけど、端から物凄く百合ん百合んだ。

若い美女二人が抱き合っているというのは。

「いいじゃない軽いスキンシップよ あつまた、胸大きくなってる。綾に揉まれたのね？」

「あつ分かります？そくだよね綾」

「あ……ノーマントで」

「若いつていいわね、羨ましい」

なんて事を奈々さんは言うけど、奈々さんの外見年齢はどう考えても二十歳代にしか見えない。

下手すると俺達と同年代に見られなくもないらしい。

奈々さんは若すぎるから、白衣の下に着ている若い人向けの水色のワンピースを着ていても全然違和感がない。むしろ、よく似合っている。

師匠……奈々さんといい咲夜さんといい、どう考えても犯罪だと思っうのですが。

「おっ、来ていたのか」

噂をすればなんとやら……向こうの方から師匠が現われやがった。

「百合ん百合んだな、二人とも。いらっしやい、束ちゃん。相変わらず美人で可愛いな」

「ありがとうございます、おじ様」

デレデレ顔に馬鹿師匠におどけた様子で束がスカートの両端を持ってお礼する。

馬鹿師匠は更にデレデレ顔でニヤニヤしていた。

正直、今の師匠の表情は鳥肌物だ。気持ち悪くて鳥肌が止まらない。

「綾もよく来たな……って、何しかめ面してるんだ？ああ、何だ、奈々みたいにハグしてほしいのか？なら、来い。抱いてやろう」

「やめろ。気持ち悪い」

そんな言葉を吐き捨てながら師匠との距離を詰める。

誰が好き好んで五十代越えた親父に、それも同姓の胸に抱かれなければならぬ。

気持ち悪い。気持ち悪すぎで鳥肌が止まらない。

それに第一、俺はこの人に一発かまさないと気がすまない。

「師匠」

「何だ？」

「アンタ、臨海学校のあの手紙だけじゃ飽き足らず。可愛い妹の箒や一夏にいろいろと吹き込んでくれたらしいな」

「ああ、そのことが。別にいいだろう、楽しかったんだから」

「楽しくないっ、ってか、楽しむなっ！死にさらせっ！馬鹿師匠っ
！」

飛び上がり空中で体勢を作るとそのまま馬鹿師匠目掛けて飛び蹴りを放つ。

「喰らえっ！俺の俺の必殺技っ！愛と怒りと悲しみのアトランティス・ストライイイイイクッ！」

「何かいろいろと混じってるっ！？　　ウボオアアッ！！」

「邪悪ッ！絶つべしっ！」

飛び蹴りのイメージとモチーフはライダーキックと某鬼械神の飛び蹴り技がイメージとモチーフ。

威力としては普通の飛び蹴りの威力しかないが、師匠の体には練り込みにクリティカルヒットして。
勢いよく渡り廊下の端まで吹っ飛んでいった。少しスツキリ。

「スツキリしたようね、綾」

「はい、少し」

「そう。なら、一郎さんはほっという私達は大広間の方に行きましようか。咲夜、お茶の用意お願い」

「はい、かしこまりました。奥様」

吹き飛んでぶっ倒れてる師匠を放置して、俺達は奈々さんの案内で大広間へと向った。

・
・
・
「酷いぞ、奈々。私を置いて皆で先に行くなんて」

「酷くなんかありません。防御も受身取らず、遊んでいる一郎さん

が悪いんですよ」

「遊んでなんかないぞ。綾に付き合っただけだ。優しさというものだ。な、綾？」

「同意を求めないで。と言うか、そんな優しさはいらぬ」

「またまたこのツンデレめっ」

「五月蠅い、黙れ。キモイ」

「そうね。それはないわ、一郎さん」

奈々さんにまでもダメだしされた一郎師匠はしょぼーんつとした表情をして少し落ち込んでいた。

そんな俺達三人のやり取りを俺の隣で見ていた束は出された紅茶を飲みながら、面白そうにくすくすと笑っている。

俺達の後ろに控えるように立っている咲夜さんも堪えながらくすくすと笑っている。

咲夜さんまでくすくすと笑っている事に気づいた師匠は更にしょぼーんつとした表情をして落ち込んでいた。いい気味だ。

どうでもいい話だが、俺達が今こうしてお茶をしている大広間はどうしても大きい。

テーブルは長テーブルで、天上にはシャンデリがある。

どれも高級感を漂わせており、高級品というの分かる。俺達が今使っているこのティーカップも高級品で持つのは久しぶりだから何処か緊張する。

「でも、師匠、奈々さん。箒や一夏に変なことを吹き込むのやめて

くれませんか？」

「どうして？別にいいじゃない、そんな変なこと教えてないし」

「いや、奈々さん充分変なこと箒に言っていますからね。何ですか
『あの二人はヤンデレカップルねえ』って」

「ああ〜それ。事実なんだから、別にいいじゃない」

「ヤンデレは束だけで俺はヤンデレじゃありません」

「嘘はよくないぞ、綾。誰だったかな小学生の時、束ちゃんがいじめられてキレて大惨事を起したのは」

「……やめてください、人の黒歴史を掘り起こすのは。それでも違います」

「あつはは頑固だね、綾は」

やっぱり、この人達は苦手だ。

ああ言ったらこう言うを上手く言っている分、どう対応していいのか今だ分からない。

言い返せないよう、上手く言ってくるから言い返せなくなって何だか情けなくなってくる。

やっぱり、本当にいつになってもこの人達は苦手だ。嫌いではないけど。

「でも、臨海学校のあの手紙はビックリしましたよ。私でも」

「ああ、ビックリした。と言うか、絶句した。何なんですか、あの

手紙は」

「あれも遊びよ遊び 楽しめたでしょう?」

「それにしても随分と度の過ぎた遊びですね。態々、学園長伝えに渡してきたりするし」

「でも、あの手紙と私のお陰で臨海学校では綾と束ちゃんは同じ部屋になれたんだ。感謝して欲しいものだ。それでどうなんだ……ヤツたのか?」

「おじ様? いい加減にして下さい?」

「そうよ、一郎さん。女子高校生の前で聞く話題ではないですよ」

束と奈々さんに黒さを帯びた何処か凄みのある綺麗な笑みを浮かべなれながら言われると、一郎師匠は小さくなっていった。

自業自得だ。ニヤ付きながら、そんな事を女の子の前で聞く方がどうにかしている。

聞きたい気持ちも一億歩譲れば分からなくはないが、聞くなら聞くでももう少しぐらいオブラートに包んで言えないものなのだろうか。

「そつだが……奈々は気にならんのか?」

「気にはなりますけど、聞き方の問題です」

「それもそつだが……早い内に孫が見れるかもしれないんだぞ? 私も歳だからな……」

「ま、孫!?!」

「落ち着いて、束。乗せられているだけだから」

「だって、孫だよ！？綾っ！孫って事は……私達の子供って事だよっ！？そりゃ私だって、綾との子供は欲しいけど……そのいろいろな事情があつてまだしてないし。あつても、したいんだよ？そ、その子供だって欲しいし……でも……」

「あゝ帰ってきて、束」

師匠の言葉に上手く乗せられた束は、師匠の「孫」という言葉に過敏に反応して。

力説したと思つたら、顔を真っ赤にして俯き、ブツブツと言いながら何やら一人妄想している。

顔を真っ赤にしながら俯いて妄想している束は可愛いけど、見事に師匠の誘導尋問に引っかかって、言わなかった事も言つて自爆している。

そういえば此間篇も似たような感じで自爆していたな。流石姉妹、よく似ている。そう冷静に思つてしまった。

聞きたい事を聞けた師匠はニヤ付いた笑みを浮かべていて。

奈々さんと咲夜さんは、期待するような暖かい視線を俺に向けていた。

暖かい視線のはずなのに痛く感じるのはどうしてだろう。めっちゃくちゃ期待されてるよ。奈々さんや咲夜さんにも、そして何より束にも。

とりあえずこの場のは保留として。来る日が来たら頑張ろう。具体的にはいえないけど、いろいろと頑張ろう。

「コホン、それで篝ちゃんとは仲直りしたって聞いたんだけど……」

どう、篝ちゃんとは楽しく過ごしてる？」

このままでは話が平行線となるといち早く理解した奈々さんは、空気を入れ替えるかのように咳払いを一つすると別に話題を振ってくれた。

奈々さんの咳払いで束は妄想から我に返った様子だった。

よかった……止まるに止められなかったし、このまま妄想されすぎたら何をポロリされるか分かったことじゃない。

「はい、楽しく過ごさせてもらっています」

「私もです。ありえなかったかもしれない一時だけに楽しいし、とっても嬉しいと感じています」

「そう……それはよかったわね。そう感じられるのも貴方達の頑張った成果よ、頑張ったわね」

「そうだな。頑張ったな、二人とも」

自分の事の様に喜んでくれて、褒めてくれる奈々さんと師匠の二人。やったぱり、この人達は俺達にとってのもう一人の両親だ。ある意味、本当の両親以上の。

二人の事は苦手だけど、嫌いじゃない。むしろ、親として好きなのかもしれない。

そんな風に場がしんみりした雰囲気になまれ、何処か感傷的な気持ちになっていると……

「それはそうと篝ちゃんへあげたスク水着、どうだったのかしら？」

「それは私も気になりますね。箒様ならきつとよくお似合いになると思うのですが」

「はい、とつてもよく似合っていましたよ。箒ちゃんの旧スク姿、画像に記録しているので現像しましょうか？」

「あつ、お願い」

「私もお願いします」

「分かりました」

「東ちゃん、私にも……」「一郎さん（おじ様）（ご主人様）はダメです」「……ちくせう」

三人に却下され、師匠は本日三度目のしよぼーんとした表情をして落ち込んでいた。

本当に馬鹿だ、師匠は。

誰がこんな馬鹿師匠に可愛い妹の旧型スクール水着の画像をやるか。男には誰にも絶対にあげない。

と言うか、物見事に場のしんみした雰囲気こそげぶされた。

まあ、いいか。このメンバーには、しんみした雰囲気は似合わないし。

こう賑やかにやっている方がこのメンバーの性にはよく合っている。

「それでその……電話とかで言っていた話したって何ですか？」

「こんな世間話する為に態々、朝早く呼んだわけじゃないでしょう？」

「相変わらずだな、束ちゃん、綾……お前達は。まあ、充分世間話できた事だしいいか」

「そうね」

「よしなら、綾。お前は今から“俺”と外のトレーニング場で稽古しながらの話し合いだ。そっちのほうじゃ俺達の性には合うだろう」

「そうですね」

師匠の一人称が変わった。

威圧みたいなものを俺一人だけに向けて放っており、肩に何とも表現しづらい重さがかかる。

威圧のほんの一瞬飲まれそうになったが、何とか持ちこたえられた。この威圧はこれは小手調べだ。この時点から稽古が始まっている。この威圧からこの先にある稽古が無事では居られない事をヒシヒシと感じている。これは箒との約束を守るといふのもかなりの難易度のもものとなった。

それに師匠は油断できない相手だし、この時点から既に気を少し緩めるのも難しそうだ。

「では、行くぞ。綾」

「はい」

「綾、気を付けてね。無事でね……行ってらっしゃい」

「なるべく善処するよ。行ってきます」

心配そうに俺を見つめる束に見送られながら、俺は師匠の後を追って大広間を後にした。

…

第三十三話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第三十二話 ?

今回から師匠のお屋敷編です。

初っ端からネタとギャグのオンパレード。

また、次回からシリアス全開で綾君は危険な目に合うので。
ネタとギャグだらけなのはご了承を。

ネタ全部分かる人いるかな？

今までは名前のみでしたがついに咲夜さんが正式に登場しました。
まんま、名前ネタです。似すぎてレベルじゃないくらい似ていま
す。

設定もやけに凝ってしまった。出身地とか、まんま紅魔館の咲夜さ
んです。

紅魔館の咲夜の二次設定はロリコンですが、こっちの咲夜さんはジ
ジコンですw

一郎さんにお手つきされていますしね。何だ、この設定。

本当はもう一人『セバスチャン・ミカエリス』

とかいう執事を出そうと思っていたのですが、やめました。

オリキャラが多すぎて、収集できなくなったら困るので。

ちなみに綾君と師匠はかなり似ているという設定です。

見ての通りですが、この二人結構似ています。中身と言うか、思考
が。

師弟ですからね、この二人は。親子でもありますし。

と言うか、相変わらず長い。

それに無駄な会話や描写が多い気もする。

最近、どう小説を書いたらいいのか分からないです。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十三話 ？（前書き）

あー頭痛い、コーヒー飲みすぎた。

やっぱり、こういう系統の話を書くのは好きだけど大変だった。

俗に言う、難産

支離滅裂かもしれませんが、楽しんでいただけると書いた身として嬉しいです！

ちなみに今回もネタが踏んだいです。

あるトリップ物の医療ドラマネタが分かった人は結婚しようっ！

それではどうそっ！

第三十三話 ？

綾視点

「身体や感は鈍ってないようだが、前よりは反応が悪いぞっ！綾ッ！」

「ぐっ……っ！」

左から飛んでくる師匠の回し蹴りを両腕で防ぐ。

完全には防いでダメージこそはなかったものの、回し蹴りの反動が残ったおり、吹き飛ばされてしまった。

吹き飛ばされながらも受身を取り静止して体勢を建て直す。

屋敷の外、敷地内にあるトレーニング場に来て早数分、俺と師匠は稽古をしている。

私服では動きづらいし、直ぐボロボロになるという理由でここに来る前に着替えされられ戦闘服として、某虚刀流七代目当主が最終決戦で着ていた流し着を着ている。

着物なので防御力は低いが、私服よりも動きやすい。第一、師匠相手に防御力と言うものは皆無なので、この流し着で充分だ。来ていて楽しいし、やる気が出る。

師匠の服装はと言うと、某蛇の名を持つ伝説の傭兵が着ている迷彩服で頭にバンダナまで付いている。容姿が容姿だけに某蛇の名を持つ伝説の傭兵そのものだ。

ちなみにこの服装は師匠の現役時代に着ていた服装らしい。

かなりコスプレ色が強いが今している稽古は真面目なものだ。

いや、稽古とは名ばかりで死闘と表記した方がいいのかもしれない。

お互いに相手の急所や致命傷になりうる場所等も狙って攻撃している。

こんな思考を走らせている分、今はまだ余裕はあるが気は絶対に抜けない。

気を抜いたら最後、ボロボロどころではすまない、瀕死になるかもしれない。

「そういえば、奈々から聞いたがっ！フンッ！……まだ、千冬ちゃんにはお前らが恋人関係にある事を言ってないらしいなっ！かわいそうに、千冬ちゃん」

「くっ……ハアッ！こっちにもいろいろと言えない事情があるんだっ！それにその件は束から千冬に近いうちに言うという事に落ち着いているっ！だから、師匠に口出しされる言われはないっ！」

「ハッ、ヘタレがっ！どんな始終があるにせよ重要な話を女に言わせるとは、男として情けない。そう言うものはなっ、男が言うものなんだよっ！この際だ、千冬ちゃんを囲え」

「出来るかっ！俺は束一筋だっ！それだけは変わらないし、変えようもないっ！第一、それこそ男として情けないっ！妻以外に他の女の作るなんてなっ！なあ、師匠っ！」

「何が言いたい？」

「どう見ても二十代にしか見えない若くて可愛い美人の奈々さんと言っ妻が居ながら、二十代のしかもメイドの咲夜さんに手を出している師匠は男として情けないっ事だよ！馬鹿師匠ッ！」

「何を今更、それは奈々も公認でそれで全員納得しているからいい

だろ！それに私は二人とも変わらぬ愛で愛しているから問題はないッ！第一、愛の形は人それぞれだっ！お前に口出されることではないっ！」

「ああ、確かに愛の形は人それぞれだ。別にハーレム作ろうが何人困おうが本人達がそれでいいならそれでいい。だが、口出しされたくないなら口出しするなっ！」

言い争い口喧嘩しながらも互いに攻撃の動作は緩めない。

それどころか、一撃一撃を交えるごとに威力が強くなっている。

どうでもいいような思考を走らせ、こんな無駄口を言い合っている分、今はまだ余裕はあるが気は絶対に抜けない。

気を抜いたら最後、ボロボロどころではすまない、瀕死になるかもしれない。

それに稽古を初めて数分以上、拳や蹴りを放っているが基本的には俺の防戦一方だ。

攻めているが、師匠の攻め手の方が圧倒的に多く、防戦状態に持ち込まれてしまう。

「ハアッ！」

「甘いッ！そこッ！」

「ッ！　虚刀流……百合ッ！」

腰を使い回し蹴りをする。

案の定、両腕で防がれてしまったが、予想の範囲内。

そのまま押し切る様にそれでいて跳ねる様に師匠の両腕を蹴って、ある程度距離を取る。

距離を取ると息を整えつつ、いつでも攻撃に移れるよう、俺も師匠も構える。

仕切り直し。一撃一撃の大きくダメージは受け流し、受けてないはずなのに開始数分で蓄積ダメージが出来ている。

やっぱり、師匠は強い。構えに隙がない。この場に漂っている静かな空気は相手の動きを伺うにはいいが、あまりいいものじゃないな。

「フンッ！」

「クツ！ハアアッ！」

先に動いたのは師匠の方だった。

地面を強く蹴って俺との距離を詰めると師匠は、踵落としを放ってきた。

距離を詰められ過ぎて避けるのは無理で、踵落としを両腕で受け止めると、師匠は口元をニヤとさせ、続け様に回し蹴りが横から飛んできた。

それもダメージを受け流しつつ受け止め、足を払いのけると流れる様に師匠に向けて、手刀を真一文字に振り下ろした。

「ククッ！ギアが上がってきたようだな、なら更に此方も上げるぞっ！」

「来ませいっ！」

師匠のクロスした両腕で受け止められた手刀を一旦引くとそのまま手刀の状態で突き刺す様に付く。

すると、腕で弾かれてしまい、無数のパンチが飛んできた。

それを回避できるものは紙一重で回避して、回避できないものは受

け止める。

やはり、師匠のパンチは重くて強烈だが、速度も物凄く早い。まともには喰らったら、タダではすまない。

回避・防御運動を取りながら、ダメージ覚悟で師匠の攻撃に手刀をねじ込み、動作を強制終了させると……

「虚刀流……野苺ッ！」

両肘での打撃を繰り返すと両肘で上手い様に受けてられてしまった。僅かにながらダメージは与えられているはいけど、今だ大きなダメージならず。

それ何処か直撃すら今だない。それは俺も防除を駆使してそうだけど、度合いが違う。

防戦一線なのは変わらないか。

詰めあつた距離のまま、左足で飛び跳ね、右足で回し蹴りすると。受け止められ、受け止められた状態で、今度は左足で回し蹴りする。これも受け止められたが、そのまま開いた右足で踵落としをした。

「チィイっ！、器用な事するなっ！馬鹿弟子っ！」

両腕を交差させながら俺の踵落としを受け止めた状態のままそう師匠は叫び。

足を払いのけると、強烈な片足蹴りを放ってきた。

防げたが流石にこれはダメージを受け流す事は出来ず、そのまま遠くへ飛ばされた。

「っう……」

少しばかりフラ付きながらも、立ち体勢を構える。

地面に無事着地できたものの身体が先ほどの片足蹴りでジンジンしている。

師匠は、ダメージを防御している物体のもう一つ向こうへと伝える貫通させる事が出来る。

だから、防御していてもダメージを受け流さないと防御している意味がない。

化け物だ。流石は、戦場の生きた伝説となった元傭兵だ。

「やるな、綾。まだ、立っていられるなんて」

「この程度でやられるほど柔じゃない。まだ、いけます」

「そうか、流石は俺の弟子だ。なあ、綾」

「何……ですか？」

「お前はいつまでそうしているつもりだ？」

「……何を？」

聞き返したものの、既に何を聞かれるかなんて分かっていた。

師匠のこの目は少し苦手だ。

全てを見透かされている訳じゃないけど、肝心な部分のはっきりと見透かしているという目が。

この数秒の間が少しだけ気持ち悪い。

師匠は呆れたように一つ「はあ……」という深いため息を吐くと言った。

「いつまで……そう受け身なままで、受動態でいる」

「……俺が受動態」

予想していた通りのことを言われてしまった。

あまり言われたくない事だけに、気持ち悪いのが更に少しだけ強くなる。

ザラザラとした感覚がして気持ち悪い。

動揺していたのか、それとも呆然としていたのか、定かではないけど。

気がつくとも師匠が目の前に居て、拳が向かってきていた。

それを俺は両腕を交差させて受け止め、ダメージを受け流し、反撃に手刀を右斜め下に振り下ろした。

「くっ！」

「ほら、そこが受動態だと言っているんだ。お前は何かアクションがきっかけがない限り、自分から動くこととはしない」

「そつだ！いけないのかっ！」

「いけないとは誰も言っていないだろうがっ！人の生き方は人それぞれだっ！その生き方でもいいが、そんな調子で本当にこれから束ちゃんを守っていけるのかっ!？」

「ガツハアツ！」

腹部に強烈なボディブローを喰らった。

捻じ込む様にボディブローを喰らい、身体が少しだけ宙に浮き、

腹の中の胃液が出そうになる。

来る事は感覚で分かっており、防御体勢を取ったと確信した時に既に喰らっていた。

師匠の攻撃がまた一段階早く、強烈になっている。目で捕らえ、感覚でも捕らえたものは前のもの。現実では既に喰らっている。

ああ……これが師匠が言っていた話したいことか。俺の欠点をついてくれるのか。

失いそうな意識を繋ぎとめると同時に反射的に手刀を突き手で放っていた。

「ほらっ、またっ！それはもう、お前の直せない癖だっ！自分からは攻撃は決してせず、食らったダメージが危険なものなら反射的にカウンター攻撃をするっ！」

「！」

「その受け身、受動態なのはお前の優しさでもある。そして、その優しさこそがお前の揺ぎ無い強さの裏づけ、証でもあるっ！だがなっ！」

ノーモーションで放たれた蹴りの一撃。

またしても防御体制を取り、確実に防げると思った時。

俺はそれをまともに受けて吹き飛ばされた。

「……がっ」

そのまま、地面に叩き付けられそうになる。

それを俺は地面との衝突とのタイミングを計って、地面に無理やり手をつき静止して、構える。

「ただ、また防御したのにもかかわらず食らった。認識よりも早い一撃。師匠は話しながらも、そんな化け物染みた事をやってけている。この差は大人と子供だ。」

「全身が痛む。ならば、自分から攻撃すればいいまでの事だが出来ない。」

「どうしても出来ない。師匠に指摘されたとおり、これは俺の直せないくせになっている。」

「だから、どうしてもこういう結果になってしまう　クソッ。」

「虚刀流……木蓮ッ！」

「地面を強く蹴り上げると師匠目掛けて膝蹴りを繰り返す。」

「すると、お約束と言わんばかり簡単に受け止められ、無数の拳が飛んでくる。」

「それを紙一重で回避して、今一度体勢を立て直し、身体を構える。」

「物事つてもものは自分から進んで関わっていかねければ何も変わらんぞッ！お前みたいに受身で物事を捉えているうちは何も変わらんぞッ！変わったとしても、最悪な結果となるッ！」

「くうっ！そんな事は……ッ！そうならない様に常に策は大量に用意しているし、練り続けているッ！」

「そうだな。お前は冷静沈着で用心深く、用意周到な奴だ。お前の考える策は大抵、凄いものだ。だがな、限度というものがあるッ！どうにもならん事だつてあるッ！」

「……ッ！」

「受け身、受動態のままではいくらい策を練ろうがその内、ガタが限度が来る。そうなった時、受け身、受動態のままのお前では束ちゃんを殺してしまうことになるぞっ！」

師匠と拳や足を打ち合っていると、そんな事を言われてしまった。

束をこうしてしまう事になる……？

ありえない、そんな事ない。俺はそんな結末にならないようにしている。

師匠は何を言っているんだ、一体。

「そんな事はさせないっ！束を殺してしまわないし、誰にも気づけさせはしないっ！絶対につ！」

「なら、受け身・受動態でいるのを少しはやめろっ！お前はあまりにもそういすぎだっ！受け身・受動態のままですらあつていれば、結果としか遭遇しないッ！未然に防ぐ事は出来んぞっ！」

「ッ！」

「物事は自分から動いて関わって漸く、変わっていくし変えられるっ！だが、受け身・受動態のまま待っている様ではお前は束ちゃんを殺すッ！」

「ッ！？そんな事はッ！」

強烈な師匠の拳が迫ってくる。

これは回避できたが、頬を掠め小さく切って、傷口ができ血が流れていた。

直撃していたら、危なかった。

「分かってないな、馬鹿弟子ツ！物事は起きてからでは遅いつ！幾ら凄いやつを練ろうとも事態が起つてからでは、そんな策何の意味もないツ！起きてからでは、追いつかないんだつ！それを分かれ、馬鹿弟子ツ！」

「分かっている、そんな事は百も承知しているっ！」

「どうだかなっ！お前達は『既存のルールが嫌なら、自分でルールを作る側に回れ』という俺の教えを行つた。それ自体は別にいい。本当の自由とは…自分のルールで生きる事であり、世界はどんな綺麗事を言つても、弱肉強食。社会つてもものは常に強者が強者の為に作るものだからな」

「……」

「だがな、その強者がこんなザマでどうするっ！？受け身・受動態のままでは世界に対して、何も責任を果たせてないじゃないかっ！無責任のままでは破滅しかないぞっ！！」

「くっ」

横から向かってくる回し蹴りを両腕で受け止め。

跳ねるように後ろへ数歩飛んで師匠と距離を取る。

今一度、落ちなければ。防戦一方なのは変わってない、状況は先ほどよりも悪くなってきている。

序々に積って出来た蓄積ダメージと普通のダメージが重なって、身体は疲労困憊だ。疲労で身体が重い。

師匠が言っている事は全て正論だ。

俺は確かに受け身・受動態だ。対象等からの何かしらのアクション、きつかけがない限り自分からは行動はしない。

師匠は俺のこんな部分を優しさで表し、強さの証と裏づけと言ってくれたが、俺にとっては汚点でしかない。

自分でもこういう一面があることを分かっているが、どうしようも出来ない。いや、またそんな事言って受け身になっただけだ。正論だけに言われなくなかった。言われるとやっぱり、堪える。

でも、このままでは師匠が言うとおり、散々否定しているが束を殺してしまうかもしれない。

俺が弱くて不甲斐ないばかりに……束を殺してしまうかもしれない。頭の何処かでは分かっている。変わらないといけない……それも分かっているが。

変わるのに何処か後一步踏み出せない。臆病で情けない、俺は屑だ。こんな風に頭の何処かでは分かっているけど、出来ない弱い俺がいる。「分かっているっ、分かっているけどっ」

「なら、それをやめろっ！お前は馬鹿でもないし、屑でもない。常に自分や周り、物事を冷静に見極め客観視もしている。意識すれば出来るはずだっ！出来なければ、束ちゃんを殺すだけだがなっ！お前は束ちゃんを守るんだろっ？！」

「……っアアッ！」

防御体制を取る事まます完全には防御が遅れてしまい、もろに片足蹴りを喰らってしまった。

内臓を圧迫された様で胃液と同時に大量の血を向けて吐血した。

意識が一瞬とんだけど、直ぐ取り戻し、片足付きそうなる足に今一度無理やりにも力を入れ、立って身体を構える。

吐血したあたり最早、本当に稽古じゃないな。死闘だ、下手したら瀕死の状態でもすまなさそう。

それに師匠は簡単に言ってくれる。

意識すれば出来るはずだ　過大評価してくれるのはありがたいが、俺はそこまで評価されるような男でも人間でもない。

ただの情けない奴だ。

だけど出来なければ、師匠が言う通り束を殺すだけだ。

束は殺したくない。殺させない。失いたくない。絶対に、何があつても。

だったら、変わるしかない。

今はあれこれ理由をつけて逃げているだけで、止まっているだけだ。こんなの受け身・受動態以前の問題だ。

変わらないといけない。本当に束との満たされ刹那を失いたくないのなら。

しかし

「それにお前達がした事はある種の正攻法でもあるが、それと同時に絶対的な悪事ではない。言いように言い換えても所詮はマツチポンプではない」

「……」

「第一、そんな状態でそんな程度の覚悟でその先、進めるのか？お前達が進む道は阿修羅道みたいなものだ。本当に束ちゃんを守れるのか？この道、修羅道を進んでいく覚悟はあるのか？」

「……」

「お前は何の為に生きる？何の為に戦う？他人や周りを世界を世界を犠牲にしてまでも。その果てに何を求める？」

ぎゅっと強く構えなおす師匠から今一度問いを投げかけられる。

どの問いも答え憎いものばかりだ。

考えれば考えるほど、その答えは海の方に広がっていく。

だからこそ、単純に考え、目を閉じ今一度自分を見つめ帰す。

覚悟か……覚悟って一体何だ？

俺は何の為に生きる？のうのうと。

俺は何の為に戦う？他人や周りを世界を世界を犠牲にしてまでも。

その果てに何を求める？

ISが流れ出たことによつて世界は変わった。未知^道や可能性は増えた。

だが、増えたと言っても俺達は修羅道を通らなくちゃいけない。これが世界を変革させ、自分達が自由に生きられるルールを創造したことへの対価なのだから。

だけど、受け身・受動態のままの俺でこの先に通る修羅道で束を守つていけるのか？

本当にこれらを出来るのか？屑な俺が 本当に変わるのか。受け身・受動態であるただの情けない奴が。

いや 難しく考えすぎだ。単純に考えろ。

答えや揺るぎない覚悟は、“あの日”からすぐそこにあるはずだ。

あの日……幼い日に束と呪いの様な誓いを告げた日から、すぐそこにあるはずだ。

「そんなの決まっているッ！」

俺とした事が難しく考えすぎている。

考えなさ過ぎもダメだが、考えすぎもよくない。

本当にあれこれと理由をつけて逃げていただけだ。

逃げた先にはロクな事がないと身体を持って体験して、痛いぐらいに知ってるはずなのに。

臨海学校の夜、束にあんな偉そうなこと言っていたのに、言っていた本人の俺はこんな様。

本当に情けない、ダメな奴だ。答えや揺るぎない覚悟なんてものは、すぐこそにあつたんじゃないか。

「束の為だ。俺は束の為に生きて戦っている。束じゃなければ戦わない。この道も選択しなかった」

「戦い続ける覚悟はあるのか？」

「ある。覚悟ならとうの昔から出来ている。その覚悟は揺るぎないものだッ！俺は戦う。束を殺そうとするものがあるのなら、未来永劫破壊やるッ！刹那の塵芥へと変えてやるッ！」

「そうか。ならばもう一度聞く、お前達が進む道は阿修羅道みたいなものだ。本当に束ちゃんを守れるのか？この道、修羅道を進んでいく覚悟はあるのか？」

「俺は束を守る。絶対に何があってもッ！この先俺達が進む未知^道が修羅道だとしても、進んでいく覚悟はあるッ！修羅道というのなら、己が霸道で塗り潰す。そして、その果てに自由に幸福な世界を、何より束との至福の不変な刹那を求めるッ！――」

「己が霸道で修羅道すら塗り潰し……刹那を求めるか。そこまでの覚悟はいいだろう。だが、肝心のお前が受け身・受動態のままだ。それを変えられるのか？覚悟はあっても、変えられなければ覚悟は無駄だ」

それが一番の問題であり、最大の課題だ。

受け身・受動態のまま俺では、いつまでもたってもただの情けない屑な奴のままだ。

この自分の殻ゲッターから脱却しなければならぬ。

それは俺自信の為でもあり、そして何より東の為だ。

だから、俺は

「俺は変わる。……変わらなければ、自分とも世界とも向き合えない。世界とも自分から関わっていく、世界に対して無責任なままではいけないっ！俺は変わるんだッ！！」

そっだ、俺は変わる。

今まで変われなかった分も変わる。

いつまでも、受け身・受動態のままでは何も変わらないし、変えられない。

待っているだけじゃ、意味がない。それに待っていても世界は、待つてくはくれない。

だから、受け身・受動態でいるのをやめる。やめなければ、ならない。最悪の結果を防ぐためにも。

俺は変わる。

「そっか……なら、最後に聞こう。綾、お前は……どうしてそこまでする？」

「それは」

それすらも決まっている。

俺という人間は存在は、昔から“あの約束をしたあの日”から束の為だけに存在している。

ただの情けない屑な奴で、人として壊れて欠け、一度“終つた存在”である俺にもう一度生きる意味、存在している意味を教え与えてくれた、束の為だけに存在している。

何もかも全て束の為に。

だって、それは

「俺は束を愛しているからだ。愛しているからこそ、そこまでする。いや、したいんだッ！」

「……」

「不変の愛で俺は束を一生愛する。いや、一生なんて言葉でくくらない、生まれ変わって永劫回歸しても、束を愛す。どうしもないくらい愛す」

「……」

「俺は束を愛している。誰よりも何よりも深く深く、ただ束だけを愛しているっ……！」

胸の内を全て吐き出すように師匠に俺の覚悟を告げた。

物凄く恥ずかしい事を言っていることも、物凄く難しい事を言っていることも分かっている。

だけど、これが俺の覚悟、今の今になって漸く出てきた本当の覚悟。

「よく言っつ！」

強く構えの体勢を取る師匠に対して、俺も身体を構える。

構えた身体の体勢は、クラウチングスタートのような構えを取る、
虚刀流七の構え『杜若』。

この構えは、加速しやすく、相手の横の払いに対応することが可能。
この構えの体勢から一気に加速して、師匠の距離をつめ、一撃で決める。

「ハアアッ！」

クラウチングスタートのような構えを取った体勢から、一気に加速して師匠の距離を詰め。

次の攻撃の構えの心準備をする。

「綾、己の信じた道を進め！それがもし神の意思にそぐわぬ示したら、神がその運命を消し去る！」

「なら、神すらも永劫破壊してやるっ！俺は修羅道だろうが己が霸道で塗り潰して俺達の霸道の道を進むッ！束と共にッ！俺は変わるッ！」

「よく言っつ！馬鹿弟子ッ！」

「虚刀流四の奥義……柳緑花紅ッ！」
りゅうりよくかこう

片方の拳を腰元に構え、体を捻り相手背を向けた状態になり、そこから体の捻りを開放して前方に拳を繰り出す。

この技は命中させた物質に、内部的な衝撃を与え一気に破壊する。狙うは急所である溝。杜若で距離をギリギリまで詰めているから、

流石の師匠でも避けれず直撃した。

「ガツハアツ！　　くうっ、いい一撃だな。それにいい覚悟だっ
！この一撃、お前の思いや覚悟、決意が本物で本当だという事がよ
く分かったっ！！」

「……………があっ」

柳緑花紅をもろに喰らった師匠は吐血していたが。

距離を詰めすぎたのが仇となったのか、すぐさま、俺の腹に強烈な
拳が抉るように直撃した。

防御どころかこの距離では、回避することもできず、拳による内臓
圧迫によって、口からまた大量の血を吐血した。

「なれば、その覚悟を最後まで貫き通せよっ！そして、変われよっ
！馬鹿弟子……………綾」

「……………ああっ」

重い重い一撃だ。でも、師匠が俺の事を本当の父親の様に心配して
くれている事が伝わってきた。

師匠、やっぱり強いや……………

痛みは酷いが、不思議と覚悟や決意を師匠に示した事で気分は何処
か清々しいもので。

俺はそんな清々しい気分で今まで無理に繋ぎ止めていた意識を安心
して手放して倒れた。

…

第三十三話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第三十三話 ?

綾君と師匠の稽古&お話の回でした。

まあ、稽古とお話は取ってつけたようなものになってしまいました
が。

書いた後に何ですが、やっぱりシリアスなお話の時にネタを使うと
バカばいですね。

それに本当にこのネタを使っているのか、今でも悩んでいます。

ギャグシーンなら、ギャグとして流せますが、シリアスな真面目な
話では流せないですね。

鑓家の者でもないのに虚刀流を使うなんて、冒涇と思う方も居るか
もしれませんし

それに何より、意義の力となりますしね。いくら戦闘描写を盛り上
げる為に使ったとはいえ

一応、これからも綾君は本編で生身では虚刀流を護身術として使う
つもりです。

やっぱり、悩む……

今回は稽古&お話の回といいましたが、本当に取ってつけた様な物
になった(汗)

話と言うよりは、師匠が喋っている方が多くて、言葉のキャッチボ
ール少ないし

まあ、このお話は臨海学校の夜のお話の綾君バージョンみたいなも
のです。

自分を今一度見つめなおして、決意や覚悟を改めなおすという。

例を挙げるなら刀語りの第十話の様な感じのお話です。ちよちよ参
考にもしましたし。

でも、やっぱり全体的に話が支離滅裂気味ないし話が噛みあってない部分があるかも。

それに「だから、俺は」から行はもう少し、間を待たせ方がよかつたかな？

急展開な気がするんです。まあ、最終的に決意や覚悟を改めなおしましたが

この回からは急には変わる事は在りません。そんな急にパツ変わる人見たことないし。

綾君は根っから日本人気質で、根っからのカウンター人間ですからね。

そうなった理由はありません。昔はもっと、積極的だったので。今の消極的な姿からは想像しにくいですが。

やる気がないというわけじゃないのですが、受け身・受動態です。それを他のお話で仄めかしているけど、ちゃんと繋がっているかな？

師匠もちゃんと父親できていたかな？

息子の悪い点を指摘するとか、間違っているところは間違っているという感じで。

師匠はそういう立場の存在なんですがね。うーん。

兎も角、全体的に支離滅裂or意味不明気味ですが楽しんでいただけると嬉しいです。

久しぶりの戦闘描写だったので、やけり力入れて書いたよ。ISでの戦闘描写でもこれぐらいしなないと。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘or誤字脱字報告を何

卒お願いします。
待っています。

今回はこれの束さんバージョン。

もっとも、束さんの場合は臨海学校編の夜で済んでいるのですが)

汗)

兎も角、お楽しみに！

第三十三話 ？（前書き）

やっぱりこういう話を書くのは好きですが、好きだけでは上手く書けるわけがなく

上手く内容を纏めきれず、話が無茶苦茶になり、長く冗長的になり過ぎてしまいました。

長く、難解な話だと思いますが、ゆっくり楽しみながら呼んでいたけると嬉しいです。

それではどうぞっ！

第三十三話 ？

東視点

綾とおじ様が稽古するとかで外のトレーニング場に出て行った後。私と奈々師匠は、大広間で綾とおじ様が出て行く前と変わらずお茶をしながらお話をしている。

咲夜さんは、家事や雑用とかで席を外しており、この大広間にいるのは私と奈々師匠の二人で、二人つきり。

お話をしているといつたもいつも通り、学校でのことや篠ノ之家実家に帰ってきてからの篝ちゃんとの事とかを話している。

「そうなの、それはよかつたわね。あら？……ふふっ、騒いじゃって。一郎さんと綾、楽しそうね」

「ふふっ、そうですね。綾、とっても楽しそう」

話をしていると外から綾とおじ様が騒いでいる声が聞こえた。

声は聞こえたけど、私達がいる屋敷と綾達がいるトレーニング場は少しばかり距離があつて、何を言い合っているのかはよく聞こえなくて分からない。

だけど、楽しそうに騒いでいることはよく分かる。

綾がこんな風に楽しそうに騒いでいるなんて珍しい。いつも綾は、温厚で物静かなところがあつて、こんな風に感情的に騒ぐ事がない。それはやっぱり、私のせいで同姓の友達がいなかったからだと私は思う。中学では綾にも仲のいいクラスメイトはいたけど、それはあくまで学校だけの付き合いで、綾には同姓の友達はいなかった。

その分、騒ぐ事はなかったんだろう。私達に遠慮しているわけじゃないと分かっているけど、異性である分気遣いな遠慮があつて騒

いだりしない。

だから、こうして綾が楽しそうに騒いでいることが、私は自分の様に嬉しい。その楽しそうに騒いでいる姿を見れたらもっと嬉しい。やっぱり、相手がおじ様だから綾も遠慮なく気兼ねなくぶつかれるんだろつな。

それに最近になって、綾にも同姓のIS整備士のかなり歳が離れた友達が出来たらしいから、学校でも騒いでいる姿が見れるのが今から楽しみだ。

「楽しそうに騒いでいるのは大いに結構だけど、無茶はしないでほしいものね」

「あっはは、そうですね」

心配しているようなこの先の二人の姿を想像して呆れた様な感じで奈々師匠は言い。

私は何とも言えない感じだったので、思わず苦笑いしてから言った。

綾は箒ちゃんと別れる間際『善処するよ』なんて言っていたけど、無理だろつな。相手はおじ様だから。

無茶してボロボロにでもなれば綾は箒ちゃんに心配されて、たくさん泣かれて、たくさん怒られるのは間違いない。

おじ様は箒ちゃんに怒られて、最悪嫌われるだろつ。

それにこんな風に奈々師匠と二人つきりでお話しをするのはとっても久しぶり。

前に学年トーナメント終りに奈々師匠と話したけど、あの時はちーちやんが一緒だった。

だから、こうして奈々師匠と二人つきりであるといのは何処か心なしに緊張する。

「それでその……奈々師匠、お話って何ですか？」

綾達の騒ぎ声が止んだのを皮切りに私は思い切って聞いてみた。

このまま楽しくお茶しながらお話をしているのも楽しくていいけど、このままではある意味平行線。

このままお茶しながら話しをするとは思えない。こうし続けるなら、態々私達二人だけと使命しなくてもいい。

だから、これとは別にちゃんとした本題があると私は推測した。

「ああ、それね」

優しい笑みを浮かべながら小さく呟く奈々師匠。

場の雰囲気、奈々師匠の雰囲気が変わった。

最初は朗らかな雰囲気だったが、今は何処か冷たく冷め切って張り詰めている様な雰囲気。

その変わった雰囲気に私は少しだけ恐怖感を抱き、思わず息を呑んでしまった。

ううゝ奈々師匠のこの雰囲気やっぱり苦手だ。

いつもは朗らかにしている分、こうこの真面目な雰囲気を出されると少し怖い。

やっぱり、奈々師匠は大人だ。大人独特の威圧感がある。

いつだったか、綾は『逆立ちしてって人間は神様にはなれないことなんてない』なんて言っていて、私もその意見だったけど、これは無理。

流石にどう足掻いたって歳の功には敵わないというか、歳の差は埋めようがない。

「東ちゃんは肝が据わっているし、知っているから態々聞く必要はないのだけど、今一度確認の為に聞くわ」

「はい」

「ねえ……東ちゃん、覚悟は出来てる？」

雰囲気に対し威圧され、思わず息を呑んでいると奈々師匠はそっと口を開いて静かに言った。

「……覚悟」

「そう、覚悟よ。貴女はISを創造し、世界にISを流れ出し、そして世界を変えた。貴女達の未来への可能性は大きく増えて、大きく減った。道も出来た、修羅道という道がね。その道をこれから進む覚悟は全ておける覚悟は出来てる？」

そう冷たく冷め切った張り詰めた声で奈々師匠に問いを投げかけられた。

修羅道……阿修羅の住む争いや怒りの絶えない世界であるが、地獄のような場所ではないとされる。

言える。私達がこれから進む道は修羅道だ。

世界は私というISによって変わり、世界は私に適応した。だけど、それは世界だけであり、人の世は適応せずに乖離した。

その乖離した人の世によって私は天災ないし厄災でしたかない。

そんな私が進み道だ。当然、私を消そうとするものもいて現われるだろう。殺される訳にも行かないので、争いにもなるだろう。

そうなるに必然的に連鎖反応で終わる事がない争いや怒りの絶えない世界となるだろう。正に私達が進む未知は修羅道だ。

そんな修羅道ともいえる道を進む覚悟、か……
覚悟なら出来ている。幼き日にあの“誓約とも呪いともいえる約束”をした日から、ISを創造し綾に告白をして受け入れてもらい恋人同士になった日から出来ている。
それにその覚悟の再確認も既に臨海学校の夜に出来ている。

私の覚悟は揺るがない。私は逃げない、もう二度と。
私はもう一人じゃない。私にはもう一人の私である綾がいる。

「覚悟なら出来ています。私はもう二度と逃げません。綾がいるから大丈夫です、私の覚悟は揺るぎません」

「そう……でも、思い上がったちゃダメよ？」

「……思い上がる？」

「東ちゃんはISを創造し、世界にISを流れ出し、そして世界を確かに変えた。人の世……この場合、世間は乖離しまっちゃっているけど、見事、世界は東ちゃんに適応した。だけど、それはあくまでも東ちゃん側からの見方で言い換え方」

「……」

「世界にとっけてしてみれば、篠ノ之東という偉大にして稀代の天才に適応するしか、合わせるしかなかった……と言う事を覚えておきなさい、これを知らず生きているのなら、それは世界に対して稀代の冒険で度の過ぎた自惚れ、思い上がりもいいところだから」

「……」

「どう綺麗で聞こえのいい言葉を選んで、裏を返してみたら、絶対的な悪事でありマッチポンプであったということも覚えて…
…いえ、肝に銘じておきなさい」

「はい」

奈々師匠が言っている事はもっともで正論だ。

私からしたら世界が私に適応したということだけど、相手である世界にとってしてみれば、私という天才《天災》もしくは厄災に適応するしかなかったということ。

ISという次元違いの力の前に適応せざる終えなくしたただけだ。

それを知らず生きているのなら、奈々師匠が言う通り、それは世界に対して稀代の冒涇で度の過ぎた自惚れ、思い上がりだ。

これじゃあ、世界に対して変えるだけ変えて、その責務を全うしてない。変えた者は変えた者の全うしないと……もう、やってしまっただんだ無責任ではられない。綾と生きる明日の為にも。

思い上がって自惚れて……慢心していると後ろから刺される。肝に強く命じておこう。

それに絶対的な悪事であり、マッチポンプか……いい言い回しだ。

私は自分でミサイル2341発という火を、白騎士と黒騎士という水で消化させた。そして、後に繋がる事もした。

どう言おうが認められなかったから、認めさせた。幼い子供でもする我が侘を大スケールでした、結局自作自演……マッチポンプにか過ぎない。

最高の言い回しだね、まったく。事実だから否定は出来ない、否定もしない。これが私の罪だ。

なんてったって私は天才もしくは厄災であり、ISを生み出した親であると同時に私には様々な罪があり、これからもその罪達は増え

るのだから。

その罪、咎は受ける。まあ、もつともその咎で死ぬつもりも殺されるつもりも辱められるつもりも毛頭ないけど。

「ああ、それと東ちゃん」

「えっ？あっ……はい」

思考に没頭しすぎていたのか、反応が送れ、返事が曖昧になった。すると、奈々さんは少し苦笑いをしていた。いけない、思考を切り替えないと。

「さっき言ってくれた覚悟はいいでしょう、本物だし本当ということもよく分かったわ。いい揺るぎない覚悟よ。だけど」

「……だけど？」

「東ちゃんは『綾がいるから大丈夫です、私の覚悟は揺るぎません』と言ったけど、それは綾がいなくなったらダメになるんじゃないかしらっ。」

「それは……っ」

「それにこの先、貴女が進むのは修羅道の様な道。そこには当然、怒りや争いが待っている。その道中で綾が死ぬかもしれないのよ？ 貴女を守る為なら命だって厭わない。結果的に貴女の為になるのなら、何だっつてする子よ。神山綾っていう、人として壊れて欠けた人間は」

変わらず優しい笑みを浮かべながらも私にとって言われたくない事

を奈々師匠は言う。

奈々師匠が言っていることはあっているし、私だってそういう事態も考えたくはないけど一応はいくつか想定している。

そうするのも綾の優しさなんだろうけど、綾の優しさは優しいほどに残酷だ。

でも、言われなくなかった、聞きなくなかった、理解している子とだけに分かっている事だけに再確認したくはなかった。

そうされなくなかっただけに奈々師匠の言われた言葉を反射的に頭の中で勝手に悪いイメージ光景として想像してしまう。

勝手に想像しているだけなのに、何だか少しずつ気持ち悪くなってくる。

「東ちゃん、本当にこの修羅道を進んでいく覚悟はある？綾を危険な目にあわせてしまうかもしれないって覚悟はあるの？最悪、綾を死なせてしまうのよ？」

「……っ」

「東ちゃんは何の為に生きる？他人や周りを世界を世界を犠牲にしてまでも。その果てに何を求める？」

今一度と言わんばかりに奈々さんに問いかけられる。

こんな風に考えたことはなかった。

奈々師匠はやっぱり、最高の私の師匠だ。

こんな風に考えた事はなかったけど、こういう系統の一応考えて一応はいくつか想定している。

今なら取り返しがまだ付く。綾を危険な目にあわせる事もない。最悪、死なせてしまう事もない。

最悪な結果は未然に防げる。

でも、それは選ばない。私にはもう答えは出ている。覚悟も既に出来ている。その覚悟を改めなおすのも、もう済んでいる。

綾がいるから大丈夫、私の覚悟は揺るがない。

「綾の為です。綾の為に私は生きています。綾じゃなければ、私は生きなかつたし、生きてこなかつた。この未知^道を選択しなかつた」

「修羅道をこの先の道を進む覚悟はある？」

「あります。覚悟なら既に出来ています。綾がいるから大丈夫です、私の覚悟は決して揺るぎません！私は私達は進むっ！私はもう逃げないっ！綾は私に死なないと誓ってくれた。一人にしないと誓ってくれた。絶対に。永遠に私の傍にいる、一緒にいると私に誓ってくれた。それは私も同じです」

「……」

「その道の道中で綾が危険な目に死ぬ様な目に会うのなら、私も綾を守ります！」

「守る……ね……」

「守られてばかりは嫌だっ！私だって、綾を守るっ！守りたいっ！私が綾を守る。絶対に何があってもッ！」

綾は私に臨海学校の夜、言って誓ってくれた。

絶対に離さないと、絶対に一人にしないと、絶対に置いていかない

と、永遠に私の傍にいる、一緒にいると。
それは私だって同じだ。譲らないし、変えない、変わらない。

綾を失いたくない、綾との刹那を失いたくない。
だから、私だって綾を守る。守られてばかりは嫌だ。

もう、綾だけに重荷を背負わせない。私も一緒になってその重荷を背負う。

私は綾と一緒に生きていくと誓った。

それは私自信の為でもあり、そして何よりも一人の私である綾の為だ。

「それじゃあ、他人や周りを世界を世界を犠牲にしてまでも。その果てに何を求める？」

「果てに私は自由な世界と幸福な世界を、何より綾との至福の不变な刹那を求めるッ!!」

私は綾との明日の為に前へと進む。

もう、止まらない。二度と逃げない。逃げた先にはロクなことがないと知っているから。

弱い自分とは既に決別している。倒れそうになったら、私は綾を頼ればいい。私は一人じゃない。もう、何も怖くはない。

私は前へ前へ進む。

「そう……なら、最後に聞いわね。東ちゃん、貴女は……どうしてそこまでするの？」

「それは綾がもう一人で私であるから。そして」

ここすらも決まっている。

私という人間の存在は、昔から“あの約束をしてくれたあの日”から綾の為だけに存在している。

人間として……一人間として間違っ壊れて欠けて狂って、生きている希望も意味も存在している意味すらなかった私に生きる希望をくれ、

生きる意味、存在している意味を教え与えてくれた、綾の為に存在している。

何もかも全て綾の為に。

「私は綾を愛しているから。愛しているからこそ、そこまでする。いや、したいッ！」

「……」

「不変の愛で私は綾を一生愛する。いや、一生なんて言葉でくくらない、生まれ変わって永劫回帰しても、綾を愛す。どうしもないくらい愛す」

「……」

「私は綾を愛している。誰よりも何よりも深く深く、ただ綾だけを愛しているっ！！」

この世でただ一人……本当の意味での他人として、何もかも価値観や理由等を抜いて。

私は綾が好き、大好き、愛している。この世でただ一人、たった一人、誰よりも何よりも深く強く、それこそ狂いに狂い続けるように綾が好きでアイシテイル。

未来永劫、輪廻転生、永劫回帰しようとも、変わらぬ不変でただ綾

だけを愛している。

そう、愛している愛している愛している愛している愛している愛している愛している
愛している愛している愛している愛している愛している愛している愛している愛している
愛している
愛している
愛している愛している愛している愛している愛している愛している愛している愛している
愛している

何があっても私は、綾を離さない。絶対に絶対に。綾の何もかも全て、私の為のもので私だけのもの。

これが私の本物にして本当の覚悟。
変わらず、揺るぎない覚悟。

物凄い恥ずかしい事を言っていることも、物凄く難しい事を言っていることも分かつている。

でも、口に出して言ってすっきりした。何だかとっても清々しい気分。

それにとっても嬉しい。
だって、それは

「ふふっ、最高よ東ちゃん。いいえ、この場合は貴女達と言った方がいいわね。まさか、ここまで以心伝心とは。ふふっ、本当に貴女達は二人で一人、とってよくお似合いよ」

「あうゝあ、ありがとうございます」

笑みを浮かべ楽しそうに嬉しそうに言う奈々さんに私は何だかとても恥ずかしくなってスカート裾をぎゅっと握りながら俯いてしまった。

私が最後に「私は綾を愛している。誰よりも何よりも深く深く、ただ綾だけを愛しているっ！」と言った。

外から綾が一字一句違わず、同じ事を言っているのが聞こえてきた。奈々さんにからかわれたけど、とっても嬉しい。

綾が同じ事を言ってくれて、同じ事を思っていていくれて。やっぱり、私達は二人で一つだ。

綾も多分、おじ様に私の同じ様に覚悟を言っているのだろう。それを少しでも聞けて嬉しい、少しでも同じ覚悟だという事実がどうしようもないくらいに嬉しい。

「離れていても覚悟は想いはまったく同じ。離れていても言葉が揃うなんてあきれ果ててしまつぐらい本当に相思相愛ね。幸せものじゃない、東ちゃん」

「……はい」

「真っ赤にしちゃって可愛い 愛に生きるか……いいじゃない？ふん、覚悟は本物の本当の覚悟のようね。よろしい、ならばその覚悟を貫き通して証明してみなさい」

「はい」

「口だけじゃダメなのは重々承知しているわね。だから、女は度胸っ！頑張りなさい」

「はいっ」

口ではなんとでも言える。

口では大層な事も偉そうな事も言える。口から出来る言葉なんて、大半はその時だけの虚言にしか過ぎない。

だったら、その言葉を信じてもらおうとするのなら、行動で示すしかない。

奈々師匠に言ったんだ、前言撤回は出来ない。私はこの覚悟をこれからの行動で示していこう、示す。

「それじゃあ、堅苦しいのはここまで。こつこつのは性に合わないからね。それと」

「えっ？へっ……？奈々師匠？」

突然、向かいにいる奈々師匠がすつと頭を下げてきた。

意味が分からず慌てふためいていると奈々師匠は頭を挙げた。

「随分、意地悪な聞き方をしちゃったわね。ごめんなさいね」

「いえ、そんな事は。こういう聞かれ方やこういう考えもあるんだ
と思いました。覚悟も今一度見つめ直す事ができてよかったです。
だから、師匠が謝る事ないです」

「そう、そう言ってくれると嬉しいわ。大人の務めでこんな聞き方
でこんな事を偉そうに聞いたけど……私は言えた口じゃないのよね。
似たような事もしているし、第一束ちゃんのISに賛同して協力し
た共犯者みたいなものだしね」

「共犯者だなんて……そんな」

「共犯者よ。私も一郎さんに叱られたわ。『どうしてIS開発に手
を貸した』何故、白騎士事件を止めなかったのか』『大人なら止
まるべきだっただろ』って」

独白の様に奈々師匠は言う。

やっぱり、恩人であり恩師である奈々師匠にも迷惑をかけてしまっ
ていた。

こういうこともあるとを分かって、やったけど、やっぱり申し訳な
く思う。

何かをするのにはそれ相応の代価がいる。払った代価は大きく、そ
の対価は尊いものだったという事を改めて思い知った。

「そんな顔しないで、気にしなくてもいい、大丈夫よ。一郎さんに
叱られちゃったけど、ちゃんと訳を話せば分かってくれたし、それ
に私は見たいのよ」

「見たかった？」

「この世界は永劫回帰みたいなことをしているわ。戦争、平和、革命の三拍子がいつまでも続いて回帰している、永劫に。変革を出来る亀裂はあるけど、限りなく閉じた世界」

「……」

「だから、私はこの閉じた世界を愛息子と愛弟子が変革してくれる様を、そして何よりその変わった世界の丘の向こうの未知を見たいの」

最後に「まあ、渡りに船なんだけどね」と微笑を浮かべながら奈々師匠は言った。

弟子は師匠になるものなんだろうか。私も同じだった。

ISを創造した意味の本命とは、別に奈々師匠と同じ意味がある。奈々師匠が言った通り、私達が生きる世界は永劫回帰みたいなものをしている。

細かく世界の流れを見ればそれなりに違うんだろうけど、結果としては同じ様な事を繰り返している。

こんな限りなく閉じた世界を私は変えたかった。だから、私は白騎士事件で変革を出来る亀裂から壊して、世界を一度破壊した。そして、ISを流出させ、今の世界に書き換えた。

私は見たい。永劫回帰を脱却した先の未知を、そして何より大気圏の向こう……無限に流れ出すソラを。

「私も見たいです。変わった世界の丘の向こうの未知を」

「そうね、見たいわ。この先、大変で苦しい事もあるだろうけど頑張つて。私達は出来る限り貴女達をサポートするわ。この道を選ん

だ事を反省しても決して、後悔だけはないで」

「はいっ、私は私達はこの道を選んだ事は後悔しません」

「よろしい、頑張れ、束ちゃん」

「にゅう」

褒めてくれるの様に背を押してくれるように私は奈々師匠に優しく頭を撫でられた。

奈々師匠に頭を撫でられるのは綾とは別の安心感がある。

これはこれで格別で気持ちがいい。

「さっ、お話はここまでにして。二人の所に行きましょう。どうせ、馬鹿やってぶっ倒れているわ」

「はい、行きましょう」

そう言って私達は席を立ち、綾達がいるトレーニング場へと向かうべく大広間を後にした。

大丈夫かな、綾。

ボロボロじゃないといいけど……でも、相手はおじ様だし。

第一、こういうことを思っている時って、心配している通りになるんだよね。

そんな事を心配に思いながら歩いていると、綾達がいるトレーニング場に着いた。

着いたのはいいが、着いたトレーニング場からは予想していたよりも悪い光景が目に見えび込んできた。

トレーニング場で距離こそはあるがおじ様と綾が向かい合わせになって、そして綾だけがうつ伏せで倒れていた。
私はすぐさま慌てて駆け寄る。

「綾っ！綾っ！」

うつ伏せで倒れている綾を抱きかかえ仰向きにする。
様子を伺う。綾の身に纏っている、変わった流し着はボロボロで、露出している肌から打ち身をしている事が分かった。
それに綾の口元には血痕と思わしきものが薄くついていて、ふと見渡した周りの地面にも血痕が広がっていた。

分からない、何があったの？一体何が。
訳が分からず、綾とは反対に意識があり地面に座り込んでいるおじ様を睨みつけた。
すると、おじ様は困ったように苦笑いをしていた。

「おじ様っ！」

「お、落ち着け、束ちゃん。そう怖い目で睨むな、ハイライトなし。可愛い顔が台無しだぞ」

「御託はいいっ！綾に何をしたのっ！」

「いや……少しやり過ぎてな、お互い。安心しろ、綾は気を失って眠ってるだけだ。二時間後には目が覚めるだろう」

「気を失って……る？」

言われて綾を確認してみると確かに気を失って眠っていただけだった。

地面に座り込んでいる私は綾の上半を抱き抱えながら、綾の前髪を撫でるように掻きあげると「んっんっ……」という寝息を漏らしていた。

はあくよかった、身体はボロボロだけど、それ以外は何もなく無事だった。

安心すると気を張っていたのが解けて体から力が抜けた。ボロボロでも、綾が生きていて本当に良かったよ。

安心しながら綾を抱きかかえ、ふとおじ様と奈々師匠を見つめると、奈々師匠は地面に座り込んでいるおじ様を見下ろして、額に手を当てて呆れた顔をしている。

「はあく呆れた。馬鹿やるとは思っていましたが、あきらかやり過ぎです。綾をあんなにして」

「あんなにつて……ただ、気を失って眠っているだけだぞ。他は何も」

「シヤラップっ！いつもほどにしなさいっていいましたよね？
一郎さん？説教なら後でも出来ますから、後で。とりあえず、アッ
プ」

「私は犬かつ！？私だつて、負傷しているんだぞつ。あたた」

「一郎さんの場合話せる様なら全然大丈夫です。それに犬で充分よ。
じゃあ一郎さん、綾を屋敷の客室まで運んで下さい。手当てをします。
咲夜いる？」

「ここに、奥様」

腕を組みながら、綺麗な笑みを浮かべて怒っている奈々さんに指示されたしよぽーんつとした表情で私から綾を受け取り担ぎ上げる。そして、咲夜さんの名前を音もなく咲夜さんが奈々さんの前に現れた。

「手当ての用意を。私は客室の用意をするから」

「かしこまりました」

指示を受けると咲夜さんは音もなく一瞬で消え、私達は綾の手当ての為、屋敷の中へと戻るのだった。

・
・
・
第三者視点

綾を屋敷の中、客間へと運び手当てをすると後は東に任せ一郎と奈々の二人は自分達の私室へと戻ってきていた。

「それで一郎さん、求めていた収穫はあったんですか？」

「ああ、充分過ぎるぐらいにな。綾の覚悟を聞いた。揺るぎない、強い素晴らしい覚悟だった。狂気染みてもいだけどな」

「狂気ね……」

「そういう奈々の方はどうだった？東ちゃんと話したんだろ？」

「ええ、私も束ちゃんの覚悟を聞きました。覚悟は本物の本当の揺るぎない強い素晴らしい覚悟でした。やっぱり、束ちゃんも狂気染みてはいましたけど」

「そうか」

「綾はボロボロだったけど、一郎さんもボロボロのようですね」

「綾の野郎……思考の表面ではあれこれグダグダ難しく考えている癖に本音の根っ子の部分じゃ、答えはとうの昔から出ていて覚悟もとうの昔から出来ている感じだった。その証拠に奴の拳には迷いがまったくなかった。どれにもだ。特に反射的に繰り出してきたものなんか、格別だ。最後の一撃は浅かったが深く喰らってたら私は死んでいただぞ」

「そんなに……本音の根幹的な部分では答えが出て覚悟が決まっているというのは、二人とも一緒ですね。二人で一人の人間とはよく言うものです」

「あいつら化けるな。変革者が破壊の獣のどちらかに必ず。特に綾は危険だ。本音の部分で迷いがなく決心が強い分、束ちゃんに害なすのなら身内であろうともあっさり簡単に消すだろう。二人が互いの制御装置みたいなものでどっちかが欠ければ本当に狂う。危うい」

「そうならないようするのが私達の役目じゃないですか。大人であり、あの子達にああいう人生を歩ませてしまう様に多少なりとでもしてしまった私達が二人が道を外れないよう、見守って、道を踏み外しそうになったのなら、その都度連れ戻せばいい。なに、簡単な事ですよ」

「そうだな。私達大人は必要なら手を貸し、必要じゃないならただ見守るだけでいい。その匙加減が難しいところだが私達は私達で頑張ってくしかないか。あいつ等には本当に幸せになってほしいものだ」

「そうですね」

二人の未来を案じ、少しでも幸多からんことをと願いながら二人はそんな話をしていた。

…

第三十三話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十三話 ？

束さんの覚悟表明の回でした。

もっとも束さんの場合、覚悟を決めたり、改め直すのは臨海学校編の夜に済んでいるのでこうして書く必要はないと思いましたが

奈々さんに対する覚悟表明という事で書きました。

臨海学校編の夜で済んでいるの書いただけあつて。

しつこい感じが強いですが、わりと変えてみました。いかがでしたか？

奈々さんはやっぱり、一郎さんと同じ立場の人間なので、痛いところもちやんと突いてくれます。

ちなみに質問？はわざつと同じものになっています。

綾君と束さんの言葉が似ているのもわざつとです。

束さんは綾君よりも覚悟を決めるのは早く、強固で揺るぎないものですが。

表面で気丈にしているだけで内心の心は無茶苦茶打たれ弱いです。覚悟も何だかんだで揺らいでいる様に見えたら、気のせいです。

ただ、やっぱり覚悟の愛が云々の描写は

臨海学校編の夜の束さん視点との同じ物になってしまった。

これしか思いつかなかった。まんまですけど、うーん。

最後の第三者視点は無茶苦茶です。すみません。

第三者視点なんて書いたの多分、一年ぶりなんですよ。

二次創作、オリジナルとわず私は第一者視点で書いているので。
第三者視点は他人から見た綾君と東さんの危うさ、
紛いなりでも親としての心配と言う感じで書きました。

無駄な分が多い気がするな、やっぱり

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

次回は篝ちゃんも交えてのお話。

一郎さんで総スカン食らったり、湯気がたつ桃源郷だったり。

綾君、マジで爆発しろっ！いや、爆発してください。お願いします。
といった感じになるお話です。

第三十三話 ？（前書き）

今回のお話のテーマは『ほのぼの激甘』ですWWW

読んでいて思わずニヤける様に、を意識して書きました。

えーと、何だったっけ、異端審問会でしたっけ？それが大量発生の予感ですWWW

合言葉は『綾君爆発しろっ！いや、爆発してくださいお願いします

（土下座）』

これ以外の言葉で綾君に嫉妬（？）すると、束さんにナイスボートされるのでお気をつけを

それではどうぞっ！

第三十三話 ？

綾視点

「…………ん、んん…………知らない天井だ」

ぼんやりとした意識の中、少しずつ意識を覚醒させつつ俺はベットの上で目を開けた。

そして、今だ完全に目覚めてない頭で眠る前の事を思い出した。

そう言えば、確か俺は…………

屋敷の外の敷地あるトレーニング場で師匠と話をしながら死闘もとい稽古をしていて。

その稽古の最後、覚悟を証明する為に師匠に一撃を入れて、師匠に一撃を入れられて気を失ったんだった。

という事は、ここは師匠の屋敷の何処かの部屋か。

目で辺りの状況を確認していると同時に俺の手をある人物が握っていた事に気が付いた。

「…………束」

「あつ…………やつと目覚めた、綾」

俺が寝ているベットの傍らで椅子に座って、手を握っていた束は嬉しそうな安心したような笑みを浮かべていた。

「痛っ」

「ダメだよ、起きちゃ。全身ポロポロなんだから、もう少しだけそのまま寝てて」

身体を起そうとすると身体に痛みが走り、束に優しくベットに押さえつけられて寝かされた。

打ち身だらけで打ち身は酷くて全身ポロポロだ。

無理やりになら今すぐにでも起き上がられるけど、簡単には起き上がれない。

これじゃあ、束を抱き寄せて抱きしめるのも難しい。

ああ……馬鹿やって、束に心配かけてしまったな。

覚悟を決めて、師匠に覚悟を証明にしたのに早速これとは何とも情けない。

「心配かけて、ごめん」

そんな言葉が出た。

すると、束は笑った様な冗談めかしに怒ったような表情をした。

「ごめんじゃないよ。血吐いて倒れていて本当に心配したんだから」

「ごめん。馬鹿やって」

「ごめんじゃすまないの。相手がおじ様だったから仕方ないけど、ごめんだけじゃ許さないんだからね」

「あつ、ははは……」

「笑ってごまかさない。綾の身体は綾だけの身体じゃないんだから」

そう束は怒った様な不安そうな声で呟いた。

本当に心配をかけてしまったな。

覚悟を決めたのにこんなザマで、こんな風に束を不安がらせているなんて本当に情けない。

これじゃあ、覚悟を決めた意味失われていく。覚悟を決めた相手なのにこんなザマじゃ、師匠の前以上に覚悟に示しが見つからない。だから俺は

「束……今から、俺の気持ち、覚悟を言う。聞いてほしい」

そう言うところは静まり、束は真剣な顔をしてコクリッと首を縦に振った。

「俺は束を愛している、誰よりも何よりも。絶対に束を一人にしない、死なない、永遠に束の傍に一緒にいる」

「……」

「俺達がこれから進む道は修羅道だ。進めば進むほど、俺達に対する怒りや争いが絶え間なく待っている。だけど、俺は戦う。自分自身の為は何より、もう一人の俺である束の為に。そして、俺は必ず絶対に何があっても束を守る」

「……」

「だから、これからも一緒に居てほしい。いたい。一緒にこの道を進んでほしい。進みたい。だから、俺といつまでも傍に居てください」

束だけを見据えて、束の事だけを考えて、今の偽り無い気持ちを、覚悟を伝えられた。

握っていた手を一度解き、束の言葉を待つ様に束に手を伸ばす。すると束は、何か気持ちの整理をする様に一瞬目を閉じた。

そして、目をゆっくりと開けると、微笑を浮かべて束は差し出した俺の手を握っていた。

「言われるまでもないよ、綾。私も綾を愛している、誰よりも何よりも。私も絶対に綾を一人にしない、私も死なないし死なせない、永遠に綾の傍に一緒にいる」

「……」

「私達がこれから進む道は修羅道だね。進めば進むほど、私達に対する怒りや争いが絶え間なく待っている。だから、私も戦う。私も守る」

「……束」

「守られてばかりは嫌、私だって、綾を守る。守りたい。私が綾を守る。私は必ず絶対に何があっても綾を守る。だから、私も戦う。私自身の為に、何よりもう一人の私である綾の為に」

「……」

「だから私の方こそ、これからも一緒に居てほしい居させてほしい。一緒にいたい。一緒にこの道を進ませてほしい。一緒に進みたい。私の方こそ……私を、いつまでも側に居させて下さい」

俺達の想いや覚悟はやっぱり同じ、一緒だった。

それが強く束の言葉から伝わってきた。

答えなんて、探すまでもない。

そんなものは、決まっている。

「ああ、傍にいるから、俺はずっと、永遠に束の傍に一緒にいる。
永遠に一緒だよ、束」

「うんっ」

喜々とした声でそう言い束は笑う。

部屋の窓から入り込む夕暮れの日差しに照らされて束の笑みは、嬉しそうでそれでいて幸せそうだった。

それにとっても綺麗だったから、思わず見惚れてしまった。

こんないい顔を見れるなんて、血まで吐いてボロボロになってしまったのが救われる気がする。

「あっ、そうだ、束」

「何？……へっ？きやあっ！？」

ベットの傍らで大人しくしてイスに腰掛け、俺の手を握っている束のその握っている手を引いて、出来るだけ優しく抱き寄せた。

すると、束は驚いた可愛い声を上げて俺の上に倒れてきてくれた。

そして、俺は上に倒れてきた束を抱きしめる。

「捕まえた」

「な、何するのっ突然っ、って痛くなかったっ？大丈夫っ？」

「大丈夫大丈夫。俺が勝手にしてことだし、気にしないで。それに胸が当たって気持ちいい」

「なっ！？ば、ばかぁ……」

耳まで真っ赤にして束は動揺を全く隠しきれてない。可愛いな、まったく。

弾みで打ち身が痛んだけど、ほんの少しだし大丈夫。

それに嬉しそうな束を驚かしてしまい変に気が引けたけど、こうして抱きしめられることだし、束の豊満な胸が当たって気持ちいいし得役だ。

いろいろと凄いいつたり思ったりしているが、これも打ち身のせいだろう。

顔を真っ赤にしていた束は一つ小さく呆れた様な溜息を付くとすぐさま満更でもないといった嬉しそうな顔をして、ちゃんとベットに乗り上げ俺に馬乗りになるような感じで全身、身を任せるように抱きついてくる。

「でも、どうして突然抱きしめてくれたの？」

「しいて言うなら、お詫びかな。馬鹿やって、心配かけた」

「お詫びね」

上に乗っている束は顔を俺の方に向け、顔を不敵な笑みを浮かべている。

顔と顔との距離は、少し唇を少しでも上に上げたら今すぐにでもキ

スできそうなくらい近い。

この距離と不敵な笑み……東が次に何を言うか分かった。

「もう一つぐらいお詫びも欲しいな。さっきの綾が言ってくれた覚悟の行為での証明も見たいし、私の覚悟を行為でも示したいし」

「現金だね、まったく。それで何がお望みな？まあ、検討は付くけどね」

「むう〜それじゃあ、同時に言っただててみてよ。それじゃあ、行くよ？私は綾と……」

おどけた口調で東も同じくおどけた感じでむっとした表情をしてそんな提案をしてきた。

同意する前に何か始まっているし。仕方ない付き合うか。それじゃあ、素直にストレートに………さんはい。

「キスがしたい」

俺と東の声が重なり見事に当たった。

すると、俺達は自然と小さく笑いあっていた。

もつとも、東の望みを当てるなんて事をしたけど「キスがしたい」と思っているのは実は俺もだったりする。

そう思っているのをどうやら東には見抜かれてるみたいだった。嬉しいくらい以心伝心の様だな。

俺と東の声が重なり見事に当たった後、静かに見詰め合っているとどちらからともなくキスを交わした。

「んっ」

そつとキスをする。

触れるぐらいの、軽いキス。

今はまだ、これでいい。

束の表情は嬉しそうに幸せそうにしている。

多分、それは俺もなんだろう。

「んふふ……満足だよつ 綾の覚悟がよく分かった」

「よく言うつ。でも、束は本当に満足なのかな？とつておきがあるよ」

「とつておき……？何々？」

かなり期待しているのを顔いっぱい広げ、何かと束は待っている。本当にとつておきだ。これをしたら多分、高確率で束は腰が抜けるだろう。

その時の表情が実に楽しみだ。

そんな事を思いながらまず初めにそつとキスする。

「んっ……んん あっ、んっふふっ、ん……んっんっ……ちゅっ……」

軽いキスから深いキスに変えていく。

俺から積極的に攻める様に束の舌と自分の舌を絡める。

攻めと引きを上手く使い分けながら、様々なテンポで舌と舌を絡め、時には強く強く吸ってみたりする。

久しぶりのティープキスだから、お互い興奮して昂っていつているのがよく分かる。

束の柔らかい舌は気持ちよく、甘い唾液が美味しい。脳内麻薬が早

くも大量に分泌されつつある。
そろそろ、とっておきを始めようか。

「ん……くちゅ……ちゅるっ……はむ……ん、んんっ！！？ちゅっ、
んつくちゅ、ハア……れる、あふう……んんっ」

ディープキスしている途中で気づかれない様にそっと束の耳を塞いでディープキスを続行してみた。

すると、面白いぐらいに動きがあった。耳を塞いでディープキスをしてみた途端、束の身体全身がビクツビクツとなった。

驚いた束は俺の舌を舌で押し返そうとしてが、そつなく口内で舌を避けてまた舌と舌を絡める。

「ハア……んつちゅ……ん、ん……んはあ……くちゅ……っ」

驚いたのは最初だけで抵抗はなくなり、俺のなすがままで舌を絡めあい続けた。

軽いキスをしながら舌を絡めあい続けている間、浅い息継ぎをする時に漏れる声は今まで聞いた事のないほどに甘く妖艶な吐息だった。そして多分、5分間ぐらいディープキスをしていた気がして、束の様子を真面真面と見たさにやめた。

途中から意識がキスにしかいてないようで全体重を俺に預けてくれている。丁度いい重たさで何だか心地よかった。

「終了。束？」

上で顔を横に向けて倒れて途切れ途切れに甘い息を漏らしている束に問いかけて見たが返事がなかった。

その様子を見て俺の心の中で軽い悪戯心が出てきて、わざとそつと背中を撫でるとビクッと反応する束。

「……んし」

「ん？」

顔をこちらに向けて束は何か言ったが息が途切れ途切れな為、上手く発音できていなかった。

途切れ途切れの息遣いは熱い息遣いで束の表情は、ほんのりと赤く凄く妖艶であり少しだけ涙目で何だかとってもえっちな。期待通りの表情だった。

やっぱり、涙目の束は凄くいじめたくなる。

「もう……はあ、今の、禁止、んっはあっ……ね」

「どうしてかな？」

「んんっやあっ、耳に息吹きかけないで」

「なら、どうしてか言ってほしいな」

「うう〜っ」

追い討ちをかける様に耳に息を吹きかけるとビクッと束はなった。やばい、楽しい。『やあっ』とか言ってる割には目は期待していていじめてオーラみたいなのが出ていて、物凄く束が愛しいと感じる。そして、黙秘を観念した束は顔を赤くしたまま目をぎゅっと瞑って言った。

「気持ち……よすぎて……ダメなの」

「どんな風に?」

「ううっ、その、耳塞ぐと舌が絡み合う音がよく聞こえてダメなの。その、き、気持ちよくなりすぎて」

「そうか、よく言えたね」

「意地悪うっ、ふぁっ」

寝ながら頭を撫でるとまた、身体がビクツとなった。どうやらまだ、快感は残っているらしい。

先ほど束にした耳を塞ぎながらのディープキス通称『耳塞ぎべろちゅー』の効果は絶大なものだった。

これは束が言ってくれた通り、耳塞ぐと舌が絡み合う音がよく聞こえるようになり。

それを自然と意識してしまうようで更にディープキスの快感も高まり、いろいろな意味で危険で凄いキスらしい。

束のこの赤くぼーっとした表情からもそれはよく分かり、とっても気持ちよかったのもよく分かる。

俺の上にいる束の息遣いはまだ少し荒く熱い息遣いで動く気配がない。

「どうしたの?」

「なんか足がうまく動かない……力入らないよ。多分、その……えーと、さっきのキスで腰が抜けた、砕けちゃったかも」

「本当?それは……あっははっ」

「笑わないでよう……もう、綾のせいなんだからね。意地悪、きちくうっ」

「褒め言葉だね。仕方なくもあるんだよ。東は物凄く綺麗で可愛いから、つい愛でたくなるんだよ」

「いじめるのを愛でるとはいわない。もう、綾のばかあっ……」

口ではそんな事を言っているけど、声は満足げで嬉しそう。表情は照れて顔を横に向けていて見せてはくれないけど、真っ赤にしてさぞ可愛いんだろうな。

東もどうやら落ち着いたらしく、頭や背中を撫でてビクっとはせず気持ちよさそうにしながら身を俺に任せくれている。

「……ね」

「何？」

「幸せってなんだろうね」

頭を撫でたり髪を撫でるように梳いていると突然、そんな事を言った東。

突然、どうしてんだろう？

でも、幸せか……そんな不確かなもの聞かれても困る。幸せなんてものは様々な価値観によって違うものだし。

だけど、ただ一つ言える事は

「今なら、判る気がするよ。この嬉しさで満ち足りた気持ちが幸せ

そのものなんだね」

そう、その気持ちが一番幸せそのもの。
やっぱり、こんなところでも想いつている事は同じだった。
何だかそんな幸せも嬉しくて束に笑いかけると束は身体の上につつ
伏せに乗った状態のままこっちに顔を向け、同じ様に笑った。

これもまた

「刹那だね、尊く愛しい。本このまま本当に時が止まってしまえば
いいのよね、綾」

「そうだね。“時よ止まれ　お前は美しい”このまま不変となれ
ば、もっと尊く愛しい」

「うんっ」

抱き寄せると束ももつと身を預けてくれて抱きついてくる。
また弾みで打ち身が痛むが、この痛みさえも尊く愛しいと感じる。
俺達は紛れもない刹那の現実に生きているんだ。

“時よ止まれ　お前は美しい”、このまま本当に時が止まってほ
しい。幸せで満たされた一時《刹那》で。
そして、そのまま不変の刹那となつてほしい。そうこの瞬間に心の
中でそつと願う。

だから、少しでもそうできる様にこれからもつと頑張ろう。
俺はもう受け身・受動態のままではいなと決めた、誓った。俺は変
わる、束と共に。生きる束と共に。

俺は逃げない。前へと進む……立ち止まっても後戻りはしない。前
へ前へ上を見て、束とこの刹那で続く永劫の円環を駆け抜けていこ

う。

「あっそうだ、ずっと上に乗っかっているんだけど、痛くない？重くない？」

「うん、大丈夫だよ。だから、誰かが来るまでこのままでいたい」

「私も」

また抱き寄せると束ももつと身を預けてくれて抱きついてくる。

「でも、俺……物凄くボロボロだね。馬鹿師匠が変に器用なことするから打ち身は引いていつているけど」

「ボロボロだね、箒ちゃんが綾のこの様子を見たら大変だろうね」

「うっ……善処するとか言っただわりには逆にボロボロだし……これは泣かれるだろうな、弱ったな」

「自業自得だよ。馬鹿して心配させるんだからね」

「はい」

束の言った言葉は見事に的を付いているもので俺はしょんぼりした声を漏らした。

本当にボロボロだ……打ち身は引いて、もう一人でも起き上がり動く事は簡単だけど。

事情を算が知ったら、多分怒って泣くだろうな。

はあ、自業自得とは言え、弱った。

そんな事を束を撫でながら思っていると、コンコンっとドアがノックされた。

「お楽しみ中、申し訳ありません。二人のお客様が来ています」

「は、はいっ、少し待って下さいっ」

部屋のドアの向こうから咲夜さんの声が聞こえ、俺達は慌てて離れた。

束は元いたベットの傍らのイスに座り、俺は上半身を起して、そのお客様を待つ。

何となく誰かが来る事は分かっていたけど、お楽しみ中なんて言われたものだから、俺も束も顔が少し赤い。

夕陽のせいにもいまはしておこう。

「大丈夫です。通して下さい」

「はい、かしこまりました。失礼します……どうぞ」

咲夜さんが部屋のドアを開けて、そのお客様を部屋の中へと通してくれる。

そのお客様は俯き加減に歩いて、束とは別の方のベットの傍らにやつてきた。

「兄さん」

「篝」

「篝ちゃん」

お客様と言うは、箒だった。
ぼつりと声を漏らした箒は、まだ俯き加減で声は不安一色。
そして、ゆっくりと顔を上げた箒の表情は涙目だった。

「ほ、箒？」

「兄さんの馬鹿っつ！」

開いている俺の手を強く握りながら涙目で叫ぶ。
叫ばれて俺は、思わず苦笑いを浮かべるしかなく、たじろいでしま
う。

強く手を握っていたかと思うと、今度は顔を俺の腹部に深く埋めて
俺が着ている衣服を小さな両手でぎゅっと掴んだ。

「兄さんの馬鹿っ！嘘つきっ！」

「うつ……あ、ごめん、箒」

「ごめんじゃすまないのっ！咲夜さんから兄さんがボロボロになっ
たて、教えてもらってからずっとずっと心配しんだからっ！ごめん
だけじゃ許さないんだからねっ！」

「うつん」

これ以上謝ることも出来ず、俺は短く返事して、ただ頭を撫でてい
る事しか出来ない。

「もう、兄さんの馬鹿っつ。でも、無事でよかった。うつうつっつ、
うつ」

今まで泣くを一生懸命我慢していた篤は、今安心してくれた様で俺の腹部に顔を埋めてすすり泣く様に小さく泣く。

本当、俺は馬鹿だ……本当に篤を泣かせてしまっなんて。

行く前に『善処するよ』なんて言ったけど、善処が全然出来てない。妹をこんなことで泣かせてしまっとは、兄として情けなく思う。

それでもこうして、大切に愛しい妹にこんな風に心配してもらえるのは嬉しい。

涙は流す事は出来ないけど、嬉しくて泣いてしまいそうぐらい嬉しい。

だから、こんな風に俺を思ってくれている篤に感謝する様に、そして心配かけて事への謝罪も兼ねさせてもらいながら。

泣いている方が少しでも、安心して泣き止んでくれるようにと優しく頭を撫で続けた。

そんな俺を束は微笑ましそくに笑みを浮かべながら見守ってくれていた。

そして、数分間ぐらい篤は小さく泣き続け、泣くのに満足した篤は顔を上げた。

目元にはまだ涙が残っており、親指で拭き取るように取ると、篤は少し照れたような笑みを浮かべていた。

…

第三十三話 ? (後書き)

というわけでいかがでしたか、第三十三話 ?

前書きに書いたテーマを意識して書きましたが、テーマ通りになっ
ていましたか？

このところ、2話ほど難しい話&シリアスだったので、気分転換
に激甘で書いてみました。

やっぱり、こういう系統の話の方が私的に書きやすく書いていて楽
しいです。

最後の終り方が少し不安です。

本当は『永劫の円環を』で終る予定でしたが、それでは短すぎる
ので長くしました。

だけど、上手く纏めきれず、少し手抜きな感じになってしまった様
な気がして。

第との絡みを長くするとどうしてもグダグダになるので、短くしま
した。

第ちゃんのターンは次回にもあるのでお楽しみにっ！

今回の目玉は『耳塞ぎベロチュー』です。

これは恋愛スレでは『伝説のキス』と呼ばれており、効果は凄いで
す。

束さんを見たらそれはよく分かりますね。私も一度されましたが、
凄いです。

皆様もぜひどうぞっ！(何の宣伝だwww

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞い
て下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。
待っています。

今回はついに皆様が楽しみにしている(?) お風呂イベントがあるお話です。

新世界は直ぐそこだ。その既知感は枯渇している。今こそ、お風呂イベントに幕を上げようっ！

合言葉は『w k t k & 奇跡 ≪ k s k ≫』です。一緒に唱えようっ！

第三十三話 ？（前書き）

やっぱり、この小説人気ないな。現実を目の当たりにして、少し気が滅入った。

お気に入り激しく変動しているし、週間アクセスは4761。

全盛期（？）よりも地に落ちたな。どうしたら、よくなる？何がダメなんだろう？

もう、ダメだ。今の自分のメンタルでは無理。やめよう……かな？

そんな事は置いていて、今回は皆様が待ちに待った（？）お風呂編ですっ！

ニヤニヤできたり、（＃＾＾）ビキビキできたり、『綾君爆発しろっ！』と言ったり

と、楽しめるように書きました。長いのでゆっくりとお読み下さい
m（――）m

決め台詞は、『綾君爆発しろっ！いや、爆発してくださいお願いします（土下座）』

それではどっぞっ！

第三十三話 ？

綾視点

箒が泣き止み、箒も交えて部屋で三人で話していると咲夜さんづてに奈々さんからお呼びがかかった。

何でも夕食の準備が後もう少しで出来るらしく、来るようにのとこのとだった。

時間帯的に六時半過ぎで外はもう暗く、折角夕食をご馳走してくれるみたいだし。

それに千冬達には根回しのいい奈々さんが連絡を入れてくれているだろう。

そう言う経緯があつて俺達は、今夕食を食べる大広間へとやって来た。

扉を引いて開け、中へと入る。

「おつ、来たな」

中へと入るとテーブルのイスに腰掛けて外国新聞を読んでいる師匠が迎え入れてくれた。

俺達がテーブルの方へ近づいていくと、向かいに居る師匠がおもむろに立ち上がりこつちへと向かつてくる。

そして、俺達三人との距離がある程度近くなると膝を付くようにしやがんで箒と視線を合わせる。

「いらつしゃい、箒ちゃん。久しぶりだね、相変わらず可愛いぞ、元気そうで何よりだ」

満面の笑みを浮かべながらサムズアップしながらそんな事を箒に言う一郎師匠。

奈々さんとはここに来た時に会ったと言っていたけど。

そう言えば、箒がこうして一郎師匠会とうのは久しぶりだったか。久しぶりの再開ではあるけれど、感動の再開とかではないみたい。だって……

「さあ、私の胸に飛び込んでおいでっ！我が愛しの娘よっ！」

芝居がかった口調でわざつとらしく両手を大きく広げる馬鹿師匠。何をしているんだ、この人は。馬鹿なのか、あっ馬鹿だったか。師匠のこの馬鹿な様子を見て箒は……

「ふんっ」

不機嫌そうにそつとぽを向いた。

そして、そのまま不機嫌そうにして、テーブルの椅子に座る。その様子を見て師匠は、一瞬ばかりんとしていた。

「あ、あの……箒ちゃん？」

「おじ様、そういうば、兄さんをボロボロにしてくれたんだってね？」

「そ、それは……稽古があつてな。それでたまたま起つたこなんだ。お互い暗黙の了承があつたから、大丈夫なんだよ？」

箒の只ならぬ雰囲気になししか師匠が少し圧倒されている。

怒っている箒には悪いけど、この二人の絵面を見ているのは面白い。

大の大人……それも五十過ぎの男が、小さな女の子に圧倒されているというのは。

それに筈が不機嫌だった理由はこれだったのか。やっぱり、大切に愛しの妹に心配されるというのは嬉しい。

「でも、兄さんをボロボロにしたということは事実だよな」

「そ、そうだな」

「だからね……稽古でも兄さんをボロボロしたおじ様なんて……大っ嫌い」

怖いほど綺麗な笑みを浮かべて師匠に言い放った筈。

冗談半分で言っているのは何となく分かるが、残りの半分は確実に本気だ。

そしてまた、そつぽを向いて俺達を見ると勝ち誇った様な満面の笑みを浮かべていた。こんな表情も束とよく似ている。

筈のそんな表情を見て、俺と束は顔を見合わせて苦笑いをした。

師匠はと言うと、言われた言葉があまりにもショックだった様で両手両膝を床に付いて深く頭を下げながら「うおおおおっ！」と唸っていた。

まあ、俺も束や筈に「大っ嫌い」なんて言われたら死にたくなるから、師匠がショックを受ける気持ちは分かるけど。

本当に何やってるんだか、この人は。でもまあ、何だかいい気味だ。

「一郎さん、何してるんですか？邪魔ですよ」

奈々さんが料理を持って居間に入ってきた。

その後ろに咲夜さんも料理を持っている。

「何があつたんですか？ 一郎さん」

「篝ちゃんが……娘がグレた」

「はい？ どういうことなの？ 綾」

「それがですね……」

この状況になつた事を奈々さんに説明する。
すると……

「ふふふつそうだったの。 一郎さんって本当にお馬鹿さんですね、
自業自得よ」

「くうっ……」

上品に微笑んで声も優しいけど、言葉は何処か冷たい。

師匠は、悔しそうに唸っていた。 本当に師匠は、奈々さんの尻に敷かれてる。

数々の戦場で生きた伝説となつた伝説の傭兵だつた姿は見る影もない。
こうはなりたくないものだ。

「はいはい、馬鹿やってないで早く頂きましょうか、皆座って」

パンパンと手を叩き奈々さんは、座る様に諭す。

全員料理が並んでいるテーブルの席に着く。 それはもちろんんメイドである咲夜さんも一緒だ。

ここでは皆一緒に食事を取るのが決まりで、この決まりでは主人だろつがメイドだろつが関係ない。皆揃って一緒に楽しく食べる。

「それじゃあ、頂きましようか。頂きます」

『頂きます』

手を合わせて言う奈々さんに続いて、俺達も手を合わせながら食前の挨拶を言つて、食べ始める。

「今日の夜ご飯……奈々師匠が作ったんですか？」

「そうよ、大体わね、少しは咲夜も作っているわよね」

「はい」

今日の夜ご飯のメニューは、ニラレバ炒めと焼き魚とワカメの味噌汁と白ご飯。

この食事の大体は奈々さんが作った様だ。奈々さんの手料理を食べるなんて久しぶりだ。相変わらず美味しい。

それにニラレバ炒めは俺の好物の一つでもある。特に奈々さんのニラレバ炒めは味付けが美味しく、野菜の方が多いと何だか俺好みに作られていて、ご飯が進む。

「美味しいね、兄さん」

「そつだね。美味しいね」

「ふふっ、そう言って貰えると嬉しいわ、作った甲斐がある」

「し、師匠っ、このニラレバの作りかたを教えてくださいっ」

「あら〜東ちゃんも甲斐甲斐しい新妻ね　いいわよ、じっくり教えてあげる」

「あ、ありがとうございますっ」

東は奈々さんにからかわれ頬を赤く染めながらも、一生懸命作りかたを教えてもらっている。

二人の様子を料理を食べながら見ていると、師匠と咲夜さんに生暖かい目で見られた。

言葉でちやかされるよりも何処か辛くて、食べ辛い。

でも、東が新妻か……確定事項なのできつと素敵な家庭と一緒に築いていけるだろう。

「そろそろ三人とも、今日はもう家ウチに泊まりなさい。いい？」

「俺はいいですけど……東と篤はいい？」

「いいよ」

「私もいいよ」

東と篤が答え泊まる事が決まる。

まあどの道、時間は遅いし、ほぼ痛みは引いているとはいえ、この身体で今からあの距離を帰るのはしんどい。

だから、このまま泊まってしまおう。家事とかしなくてもいいし。

って、ここまで来て家事の事を考えると、本当に俺は所帯染みた

男だ。

「決まりね 部屋はさっきの客間でいいわね」

「泊まるのはいいですけど……着替えとかは？」

「僭越ながら、箒お嬢様をお迎えに上がった際に篠ノ之家から持つてこさせていただきました」

「そうですか」

相変わらず準備がいいな。

そんな事を味噌汁を啜りながら思い、夕食を食べ終えた。

・
・
・
食後。

夕食を食べ終えた俺達はダラダラっとしていた。

奈々さんと咲夜さんは洗い物をする為、今を後にしている。

手伝おうとしたら、『お客様なんだから手伝わなくていい』と怒られてしまった。

なので、大広間で箒と束と一緒に熱い緑茶を啜っている。食後にやはりこれだ。

束は束でPADを使って何やらしているようで、師匠は師匠でまた海外の新聞を読んでいる。

ちなみに喧嘩はしてないけど、師匠は箒に許してもらい、『大嫌いではなくなった。』

許してもらった時、師匠が泣きながら喜んでいるのが妙に印象的だった。

「ん」

「お疲れ様です。お茶、どうぞ」

「ありがとうございます、綾」

「ありがとうございます、綾お坊ちゃま」

洗い物が終わった奈々さんと咲夜さんが居間に戻ってきて、労うように二人にお茶を出した。

「あっそうだ」

「はい？」

「三人でお風呂入って来なさい」

「んっ！？ゴホッ、ボコッ！」

「に、兄さん……大丈夫？」

「だ、大丈夫」

いきなり何を言うんだ、奈々さんは。

とんでもない事を言うものだから、幸い吹く事はなかったけどむせてしまつて苦しい。

それに束を見るのが怖い。

筈は心配してくれているけど、束を見るのがとっても怖い。

逃避していても平行線なので、意を決して束を見ると物凄く嬉しそうな満面の笑みを浮かべていた。
うん……逃避していたかった。

「あーお言葉ですが結構です」

「何でっ！？綾、怪我人なんだよ！？お風呂で何かあったらどうするのっ！？結婚前に未亡人なんてやだよっ」

「どうしてそうなる。怪我って言ってももう大丈夫だから。それに一人、入れるし」

そう言うと束は物凄く不服そうな顔をした。

それは何故か筈もだった。

不服そうにしていた二人は、何やらアイコンタクトで話している。奈々さんと言うと、物凄く呆れられた顔をされた。失礼な。

「一人一人別々に入ったら、時間かかって時間勿体無いから、三人で一緒に入りなさい。それとも何、束ちゃん達と一緒に入りたくないの？それでも男なの？」

「男関係ないですよね……それに一緒に入りたくないわけじゃないのですが」

「なら、いいじゃんっ一緒に入ろうよ」綾

「い、一緒に入ろう？……に、兄さん」

「ちよっ！」

両隣にいる束と箒に両腕を抱きしめられ、上目遣いで見つめられる。抱き付かれるなんて思ってなかったから、何とも情けない声が出てしまった。

束に抱き付かれている腕は豊満な胸が当たって気持ちよく、箒に抱き付かれている腕は何だか幸せな気分になった。

二人とも瞳が潤んでいて、ほんのりと頬が赤い。

それに上目遣いで二人とも俺をじっと静かに見つめて、二人揃って期待する様な表情をしている。

卑怯だ……二人揃ってなんて。こんな風にされたら、断れないじゃないか。それも狙ってやっているだろうな、本当に卑怯で敵わないな。

「分かった、三人で一緒に入ろう」

「本当？」

「本当、嘘は言わないよ。束」

「やった〜っ！やったね、箒ちゃんっ！」

「うんっ」

本当に嬉しそうな二人。

あ、二人ともそんなに一緒に入りたかったんだ。

少し呆れてしまったけど、二人の嬉しそうな表情が見れることだし一緒に入るのもいいだろう。

正直言つと一緒に入りたいけど、変な気恥ずかしさから最初は拒否ってしまった。

「それじゃあ、三人でお風呂頂きます」

「ふふつよかったわね、二人とも一緒に入れて。って、何一郎さんも行こうとしているんですか？」

「あ、いや……私も娘達と交流を……」

立ち上がり風呂に行こうとする師匠の奈々さんが掴み、止めた。

師匠は奈々さんの綺麗だが何処か怖い表情を見て、苦笑いして変な言い訳をしていた。

馬鹿がいる、真性の馬鹿がいる。呆れた、こんなのが俺の師匠だと思つと泣けてくる。

馬鹿師匠のそんな馬鹿な様子を見た束と箒は呆れ、声を揃えて言った。

「「サイテー」「」

「ちよつ、酷い」

「当然だ。寝言は寝て言え、やっぱり寝てもダメだ。いい加減にしないと湾に沈めるぞ」

「そうですよ、ご主人様。いい加減にしてください。後でいつも通り奥様と私とで一緒に入るんですから、我慢してください」

「そうだな。ああそれと綾、風呂で問題起すなよ。分かっていると
思うが、性的な」

「言つなっ！ほら束、箒、部屋に着替え取りに行くよっ」

師匠が言った事を少しだけ間に受けて期待している様な表情をして

いる束と不思議そうに首を傾げている筈の手を取り急いで部屋を出た。
大広間にいるのは危険だ。束を煽るは、筈の前で危険な事を言うは、たもつたもんじゃない。

部屋に着替えを取りに行った最中二人は、鼻歌まで歌って嬉しそうだった。

そして、脱衣所に行くと服を脱ぎタオルを持って風呂へと入る。

「わあ〜大きい」

そう感動したような声を漏らす筈。

屋敷の浴室は大きくて広々としていて、篠ノ家のお風呂の倍以上の大きさと広さがある。

浴槽は三人でも悠々と入れる大きさで、洗い場も寝転がって手足を伸ばしても全然余裕があるほどの面積がある。

ちなみに浴槽には泡があつて泡お風呂となっている。

「ねえねえ」

「ん?.....何?」

「どうかな?」

恥ずかしそうに頬を少し赤くしながらそう聞いてきた束。

束は前にバスタオルを宛がっているだけの一子まとわぬ姿。

宛がっていると言ってもバスタオルは普通のサイズなので、白くて綺麗な肌がチラチラと見える。

チラリズムと言ったらいいのか、少しだけ見えるのが変に色気を強調して、こうして直視しているのが恥ずかしくなってくる。

そう言えば、こうして束の裸を見るのは久しぶりだ。相変わらず、綺麗だ。

「綺麗だよ、束。物凄く」

そう思っていた素直な感想を言っていた。

本当に物凄く綺麗だ。思わず、ずっと見惚れてしまう。箒が居らず、時の場合、いろいろ理由を抜いていたら、思わず抱きしめて一線を超えてしまいそうだ。

こんな早々から劣情を催すとは……自重自重。

「ふふっありがとう」

恥ずかしそうにしながらも嬉しそうにして、束は笑みを浮かべる。よく分からないがグッと来た。

「に、兄さんっ私は？」

「綺麗だよ。いや、可愛いと言った方がいいね、可愛いよ」

「えへへーありがとうっ」

「じゃあ、洗っちゃおうか」

そう言っつて洗い場へと向かう。

洗い場は割りと普通だった。

広さこそは広いが、シャワーなどの設備は一般的な普通のもの。

箒から先に洗う事になって、浴用イスに箒が腰をかけるとその後ろに俺の束が座る。

「そうだ、綾が箒ちゃんの髪洗ってあげてよ」

「兄さん、洗って」

「分かった。それじゃあ、洗うよ」

「んっ、お願いします」

箒の髪の毛を洗う。

箒の髪も束同様長くって、女の子だからなんだろう、細くてふわふわとしている。

ふと思ったけど、俺の周りの女の子って咲夜さん以外全員、髪の毛が腰まで長い人が多い。

箒も束も千冬も皆、髪の毛が腰の辺りまである。長い方が好きなほうが好きな俺にとって嬉しい。

束と箒が長い理由は知っているけど、どうして千冬も長いのままなんだろう。まあ、髪型は人それぞれだからどんな髪型でもいいけど何となく疑問に思った。

そんな事を考えつつ丁寧に綺麗に洗う。

鏡越しに見える箒は、気持ちよさそうにしていた。

「おっ、綾。髪の毛、洗うの上手だね」

「本当。気持ちいいよ、兄さん」

「そう？それは何より。まあ、昔は散々束の髪の毛洗ったからね。

じゃあ、流すよ」

髪の上に付いたシャンプーの泡を綺麗に落として、束に交代する。リンスーで筍の髪の毛を洗っている束は鳴れた手つきで綺麗に素早く洗っていく。

筍の髪の毛を洗っている束は楽しそうで、洗われている筍は気持ちよさそうで、仲のいい姉妹の一枚絵が広がっていた。

リンスを流し終え、今度は普通に筍の体を洗っている束が言った。

「あっ」

「どうかした？」

「いや、こうしていると何だか私と綾ってお母さんとお父さんみただくなって」

「そう言われればそうだね」

鏡を見て照れた様に言う束に釣られて俺も鏡を見る。

鏡には俺達が仲良く振っていて、束が言うとお母さんとお父さんみたい見えた。

将来はこうなるのか……楽しみだ。そんなことを思っていたのは、束もだったようで鏡に映った俺の顔を見て照れくさそうに笑った。

筍を洗い終わると湯冷めしたらダメだから一足先にお風呂に入ってもらう。

そして、ついに

「じゃあ、今度は私をお願いね」

「分かった」

今度は束を洗う番となった。

心なしにか緊張してくる。緊張で思わず息を吞んでしまう。鬼門だ……多分、今日一番の難関となるだろう。

「じゃあ、洗うよ」

「んっ、お願い」

手で泡立ててから束の髪を洗う。

束の髪も箒同様に長くて、ふわふわと細く洗っていて触り心地がよくって気持ちいい。

天使の輪があるのも凄い。天使の輪は、髪が潤いを帯びている時に見えるもので、天使の輪が見えるのは髪が健康ということ。

束が常に髪を大切に大事にしてきたんだなっつと、触る度に思う。こんなに綺麗で触り心地のいい髪を気兼ねなく触らせてもらえるなんて、俺は幸せ者だなっつと小さな幸せを感じた。

「んっ、やっぱり、綾は髪洗うの上手だね。気持ちいいよ、とつても」

「よかった。束の髪は綺麗で柔らかくて触っていて気持ちがいいよ。それに髪のコ、細くていいね」

「綾のは、太くて硬いよね」

髪の話だよな？

シャンプーを流し、今度はリンスーで丁寧に優しく洗っていると鏡にふと目が行った。

そこには当たり前前に浴用イスに腰をかけて俺に髪を洗われている束

が映ってた。

映っているのはいいけど、姿が問題だった。バスタオルを胸から下にかけているだけの今すぐにもそのバスタオルが落ちてもおかしくない姿。

しかも、そのバスタオルはシャワーのお湯で濡れて胸にピッタリを張り付いて胸の形を形どっついていて、とても妖艶に、艶やかな姿だった。

そんな束の姿に見惚れていると鏡越しに束と目が合い、見惚れていた事を気づかれてニヤニヤとされた。

恥ずかしさと悔しさからそっぽを向いて、リンスを洗い流した。

「ありがとう。それじゃあ、次は体洗って」

「えっ！？本当に?!」

「うん あっそうそう、手で洗って」

「はっ？えっ？手っ？何で？」

とんでもない事を言うものだから驚いて何度も聞いてしまった。驚いていると顔だけこっちらに向けて上目遣いで束は言った。

「そっ、手で洗って。女の子の肌はデリケートなの。だから手でお願い」

「なっ……っく、分かった。分かったよ」

半ば半分押し切られる形で渋々了承した。

どうせ、ダメだと拒否したところで最終的には押し切られて手で洗

わされる。

結果は見えている。拒否するだけ無駄な抵抗だ。弱いな、俺。変な恥ずかしさからまだ手で洗うのは抵抗があるけど、ここは覚悟を決めて得役と思いながらも洗う事を念頭に置いて洗おう。

「それじゃあ、洗います」

「お願いしますっ」

手にボディソープを付け泡立ててから束の肌に触れる。

すると、「ひゃっ」と小さく声を上げ、俺の心拍数が一気に跳ね上がる。心臓に悪い。

だけど、手で洗うのはこれもこれがいい気がする。束の肌は白くって綺麗で触り心地がいい。思わず抱きしめたい衝動にかられるが平常心平常心。

手で綺麗に丹念に洗っていると束が僅かに声を漏らしていた。

「ああんっ……あっ、ああ……っ……」

「ちよっ、声っ」

「んんっんっ、だって、くすぐりたい……気持ちいいんだもんっ」

「気持ちいいってねえ……まあ、喜んでくれているのは嬉しいけど」

くすぐったくて出る声じゃない。え、えっちい。

少し呆れた。本当に心臓に悪い、生きた心地がしない。

それでもまあ、こうして手で束の肌や体を洗えている得役であることと変わらない。

幸いな事に簞は泡風呂の泡に興味津々で遊んでいてこっちには興味

はないみたい、何よりだ。

束は綺麗だ。後ろからだけど、見て改めてそう思う。

肌は白くて綺麗だし、体のラインもしっかりとっていて綺麗で美しい。

それにスタイルは出るとろは出て、引き締まるところは引き締まっているとスタイルがよく。

そして何より、胸も大きい形も綺麗で……何と言っか、俺の好みだ。

そんな雑念があったからなのか、ふとしたアクシデントが起ってしまった。

「きゃっ!?!」

「あっ」

腰の辺りを洗っていた手が滑って、束の胸に触れてしまった。

突然の事に流石の束も驚きを隠せない様で、鏡に真っ赤になっている姿が映っていた。

一瞬こそ、俺と束の空気は固まったけど、直ぐさま手を下げた。

「じ、ごめんっ」

「もお、綾のエッチっ 触りたかったら、いくらでも触らせてあげるのに。私の体は綾のものなんだからね」

「事故だからねっ!それにそれはまた別の機会って事で」

「ちえっ」

残念そうにおどけた感じでそう言う束。

事故だけど、不幸中の幸いとこの場合は言うべきなんだろう。もっとも、厳密に言うとなツキースケベ。

束の胸に事故で触れてしまった時、つい触ってしまったけど、とても柔らかかった。

「兄さん、姉さん…何かあったの？」

「何でもないよ、篝ちゃん」

「そ、そうそう。何でもないよ。もう少しだけ待っててね」

「分かった」

突然、篝に声をかけられドキっとしたけど、束の無難な返事に便乗して答えると篝は不思議そうにしながらも納得してくれた。

助かった。そんな…妹の前で姉の胸触ってましたなんて言えるわけがない。言ったら、紳士でも何でもないただの変態だ。

俺が変態なのは知ってるし認めるけど、紳士的な変態だ。って、俺は何を思ってるんだ、思考を切り替えよう。

「そうだ、前も洗ってよ」

「アホっ」

「あうっ」

叱るように優しく束を小突く。

前なんて洗えば、事故なんて言えなくなる。

それに恥ずかしくないのかと思う。いや、恥ずかしいのは恥ずかし

いんだろっけど、束のことだから俺が喜ぶなら恥ずかしさは二の次とかなんだろう。

そりゃ喜ぶけども、流石に今は無理だ。でも、次ぎ機会があったら洗わせられるんだろっな……まあ、それは追々として楽しみにしておこう。

束と交代すると渋々といった感じで前を洗った。

束が全て終わると今度は俺の番となった。

「箒ちゃん〜上がってきて、綾と一緒に洗っちゃおうよ」

「うん」

束が浴槽で遊んでいた箒を呼ぶと嬉しそうな声を上げながら、こっちに来て俺の後ろに束と並んで座った。

「それじゃあ、体から先に洗います」

「洗います」

「うん、お願いします」

どうやら二人で一緒に洗ってくれるようだ。

二人はボディークリームを手に取ると泡立てる。

「もしかして……手で洗う気？」

「うんっ さっき手で洗ってくれてお返しだよ」

「綺麗にしてあげるね、兄さん」

「ありがとう」

笑みを浮かべている束が手をわきわきと動かしているのが少し不安を覚えるけど。

楽しそうにしている筈の手前、断れない。まあ、端っから断るつもりはないけど。

二人に身を任せ洗ってもらおう。

自分では手で洗った事はあるけど、他人にしかも手で洗ってもらおうというのは初めての体験だ。

気持ちいいけど、何だかくすぐつたい。

「どう？綾、気持ちいい？」

「気持ちいい？兄さん？」

「うん、少しくずつたいけど気持ちいいよ」

二人の手の大きさは違うけど、一生懸命洗ってくれているからやっただけ気持ちがいい。

誠意……みたいな物が伝わってきて、そして何より二人が嬉しそうに楽しそうに洗ってくれている姿が鏡越しに見えて、それが何より嬉しい。

気分よくしていると鏡越しに束が何か企んでいる笑みを浮かべているのがふと見えた。

あっ、何かよからぬことを企んでらっしゃる。何をする気なのか、様子を伺おうとしたときだった。

「んふふっ」

「なっ!?!」

「こうすると気持ちいいんだよね」

ふにゆつとした柔らかい感触が左側の背中に触れた。

間違いなくこれは胸だ。しかも、バスタオルが背中と胸の間にはない。直接当たっている。

ヤバイ、バスタオルがない事が余計に胸の感触を意識させてしまう。これ、確実にさっきの事故で胸を触れてしまったのが原因だ。

とりあえず落ち着け、兎に角落ち着け。マイサンがおつきしない様にしろっ、我慢我慢をしろっいつ。平常心平常心。

だけど、そんな俺の頑張りとは裏腹に束は胸を押し当ててくる。正直、気持ちいいです。

「ちよっ!待ってっ!」

「あっ、姉さんだけズルイっ!私もっ!」

「なっ!?!ほ、箒までっ!?!ああ、ちよっとっ!?!」

何故かは分からないが束に対抗してきた箒が束とは反対側の右側の背中に抱きついてきた。

しかも、箒までバスタオルを付けてない。どうしてこうなった。

もう驚き過ぎて、驚きが一周してしまい変に落ち着いてしまった。人肌って心地よい暖かさなんだね。

それでもやっぱり、束の胸の感触は気持ちいい。

「兄さんの背中大きい。それに何だか安心する」

「そうだね。安心する、吸い込まれそう」

二人は俺の背中に抱きつきながらそう安堵した声を漏らす。状況ともあれ、二人が安堵して安らいでくれているのならそれで充分だ。

それだけで俺も安堵して、自然と動揺や羞恥心は少しずつ薄れていく。

場は静まり、心地いい沈黙に包まれる。

そうしてほんの少しだけ三人で静かに安らいでいた。

「んっ、それじゃあ、そろそろ離れてくれると嬉しいな。前洗いたいから」

「前洗ってあげよったか？」

「東……洗ってくれてもいいけど、今日一緒に寝ないと、明日から一緒に寝ないの、どっちがいい？」

「ううっ、どっちもヤだよ。それに二択になってないよ、いじわるうっ。洗わないから一緒に寝てね」

「分かってる、一緒に寝るよ。じゃあ、前洗うから先に二人でお風呂で待ってて。湯冷めしたらダメだし、女の子が体が冷やすのもダメだからね」

「うん、分かった。篝ちゃん、先行って待ってよ」

「うん」

二人は名残惜しそうに俺の背中から離れると、束が箒と手を繋いで手を引きながら浴槽に方に行ってくれた。その隙に俺は前と頭をしっかりと素早く洗って、二人の後を追う様に浴槽へと行く。

「お待たせ」

そう言うと束と箒の間にスペースが出来、そこに入れてもらう事にした。

つま先からお湯に付けて、最後に一度肩までお湯に使ってはいる。

「あー、いたた」

「兄さん、痛そうだね」

「うん、少しね。お湯が打ち身にしてみても」

お湯に浸かるとお湯が体と打ち身にしてみても少し痛かった。でも、それは一時的なもので、お湯が血行を活発にして体を内側から暖めてくれ、ゆっくりとお湯につかってリラクセスする。至極の一時だ。

「暖かい」

「そうだね。んー、泡風呂だけに泡が凄い」

「でも、泡々で楽しいよ、兄さん」

「ふふっだね。箒、鼻に泡付いてるよ」

「へっ、あつ……あうっ」

鼻についていた泡を取ると、恥ずかしかったのか顔を赤くする筈。

流石は豪邸のお風呂といったところか。

浴槽は無駄に大きく、こうして三人で入っていても、手足を全部伸ばせてゆったりと出来る。

それにお風呂は泡風呂・バブバスで、初めての体験だが入っているのは中々楽しくて、いい匂いがしてとってもリラックスできる。

アロマテラピー……といったところか。

浴槽は一面泡だらけで泡を退けない限り、水面は見れない。

なので水面の下は見れないけど、ふと見てしまった束の胸の谷間からは泡が隠していて、何だか色ぼく見える。

悲しいかな、これが男のサガというものなんだろう、不意にでも胸を見てそんな事を思うのは。

「んー、気持ちいい。そういえば、こうして綾と一緒に風呂入るのは久しぶりだね」

「そうだね……昔はよく一緒に入れさせられていたね。無理やりね」

「うっ、そんな言い方しなくてもいいじゃん。そんな言い方するけど綾、何だかんだで嬉しそうにしてたじゃんか」

「そうだったかな？でも、それとこれとは話が別。恥ずかしさの方が強かった」

ISが世界を変える前、中学生の頃も何だかんだでよく一緒に入っ
て、もとい入れさせられていた。

中学生なんて思春期の初めで、しかも異性を意識し始める時期だ。そんな時期に一緒に入れさせられれば、いろいろな意味で辛い。変な言い方をすると生殺しだ。入らないと泣かれると今となってはいろいろな意味でいい思い出。浴槽の中で必然的に密着すると束は恥ずかしがっている姿を見れたりと、昔から得役を出来ていいことだし。

それによくよく思い返せば、篠ノ之のご両親に注意されても止められる事はなかった。

束に関してはご両親は完全に俺に任せてくれていて、悪く言えば放任主義だった。

やっぱり、ISを抜きにしても溝や亀裂は昔からか。

「だったら、今一緒に入ってくるのは嬉しいない？」

「嬉しいよ。本当に久しぶりだからね、たまにならいいかなって思ってる」

「ふふっよかった えいっ」

「ちよっ」

「私もっ」

「また、篝もっ？」

嬉しそうに微笑んでるかと思うと笑みを浮かべて、腕を抱きしめ、篝を同じ様に抱きしめてきた。

篝の方は何も問題はないけど、問題なのは束の方だ。腕は束の胸の谷間の間で抱きしめられている。

今回もバスタオル等の物は間になく、腕と胸が直接当たっている。しかも、谷間の間に腕があるので谷間に腕が食われる。

谷間の間に腕を挟んでむにゅむにゅとされる。柔らかく気持ちのいい感触が何度も腕に伝わって、理性がガリガリと大きく削られていく。

ヤバイ、ヤバイよ、オマイサンがつ！　くぁwせdrftgyふじこrip。

「にやははっ　綾、顔真つ赤だね。可愛いね」

「うん、兄さん可愛い」

「箒まで……はあっ」

束どころか箒にまで『可愛い』とからかわれて、悲しくなった。

おかげで落ち着いたけど、男が普通『可愛い』と言われるのは嫌でもないけど、嬉しくもない。何とも言えない気分にならなくなる。

だけど、束はそんなことお構いなしに楽しそうな笑みを浮かべながら、胸に谷間で挟んでいる腕の手を弄って遊んでいる。それは箒も同じだ。

何とも言えない気分だけでも、まあ

「幸せ」

「幸せ」

「そうだね。幸せだ」

二人が言うとおり幸せで、この一時は至福の刹那だ。

腕を抱きしめながらも湯船に浸かっている東と箒の二人が、そう幸せそうな表情で言う声が浴室に幸せそうに静かに響いていたのだ。

：

第三十三話 ？（後書き）

『綾君爆発しろっ！いや、爆発してくださいお願いします（土下座）』
『
というわけでいかがだったでしょうか第三十三話 ？』

皆様が待ちに待った（？）お風呂編ですっ！

いかがだったでしょうか？楽しめましたか？

得役しかしてない綾君に対して、『異端審問を始める』だとか『爆発しろっ！』

などいろいろと言いたいと思いますが、とりあえず綾君を労ってあげて下さいw

彼は理性をフル活動で頑張ったのです。得役しかしてませんがwww

書いて何なんですけど、やっちゃった感が強いwww

手で洗うとかwww昔の変な安価スレのログを見すぎた結果がこれだよwww

そして、最近やっぱり長くなります。このお話も一万文字越えです。最近短く書けなくて、どうしても冗長的になってしまっ。

どうすれば短いながらも、濃密な話にまとめられるのだろうか、私は知りたい。

正直、風呂の導入編もいららないとは思いましたが、一応書きました。過程すつとばっして、本命は少し自分の中で違和感を覚えて気持ち悪いので。

これが冗長的な原因の一つでもあるんでしょうねwwwダメだorz
第の活躍も少ない。口数多くないからどうしても活躍がすくなくなる。

やることは大きいのですが、ごめんよ第ちゃん。

最後のしめかたも変だし、まとめる力も後退していつている。

直そうにもこれが限界で今は気が滅入っていて、とてもじゃないが無理です。

一度全消しでもしようかと、ふと思いました。勿体無くしないですけど。

それに八月が終わりだというのに八月編が終ってない。もう、ダメだ。

後5話で八月編は終る予定です。

まだまだ先が長い。全力で頑張ります。

「がんばれ〜負けんな〜力の限り生きてやれ〜」

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十四話 ？

東視点

「う、うーん……」

ふと、目が覚めた。

眠気はまだあり、意識は眠気でぼーっとしているけど、ゆっくりと体を起す。

辺りを見渡し、窓に目をやると外は薄暗いが少しずつ明るくなっていこうとしている明るさだった。

「う……ん、朝……？」

朝なのは分かった。とりあえず時間の確認を、そう思い近くに置いてある綾の携帯で時刻を見た。

すると時刻は、朝の五時ちょっと過ぎ。

随分と早く起きた。こんなにも早く起きたのは何時振りだろう。学校に行く時でも朝六時代に起きる。

早く起きすぎて以前、頭がぼーっとしている。眠たい。

目覚め起き上がり、時間帯と時刻を確認したのはいいけど、眠たさで起きたままぼーっとしていた。

このままじゃ半分寝て起きてのぼーっとした状態のまま時を過ごしてしまふ。

停滞したままの体に半ば半分無理やり指示を出すと、ここにしようやく左手が握られている事を理解した。

そしてそのまま視線を自分の隣へと降ろす。

「…………ふふっ」

隣の光景を見ると微笑ましくて小さな笑みが零れた。

私の左手を握っていたのはもちろん綾。決して離さないといった感じで大切そうに握ってくれている。

まだ五時ちよつと過ぎということもあって綾は、まだ気持ちよさそうに眠っている。

その綾の傍らにはもちろん篝ちゃんが居て、がっちりと綾に抱きついてあどけない笑みの寝顔を浮かべ、同じく気持ちよさそうに寝ている。

私ももう一度寝よつかないかな。今寝れば確実に寝すぎてしまう。それだけ中途半端な時間に私は起きてしまった。

だけど、眠ろう。約束の時間……と言っより、綾の携帯のアラームがなる時刻に綾は必ず笑みを浮かべながら私も起こしてくれる。だから、その時を楽しみにしつつ、眠ろう。

そう決断し、私は体の力を抜き、ゆっくりとベッドに倒れる。

そして、ベッドに倒れると繋いでいる手はそのままにして、綾の体に抱き付く様に密着する。

体は密着しているけど、顔は綾の顔の横において、ゆっくりと眠っていく。

「…………ふあゝ、綾の匂い」

顔を綾の顔に置いて首筋辺りに近づけると、綾のいい匂いがする。私の昔から大好きな匂い。匂いを嗅いでいるだけで不思議なほどとつても安心する。いつもまでも嗅いでいたい。

少し嗅いでいるだけなのに匂いで脳内麻薬が分泌され始め、頭が少しずつ甘く痺れていく。

安心する……これは気持ちよく眠れそう。

そんなことをうっとりしながら思いつつ、私を唇を頬までもって行き……

「おやすみなさい」

ちゅっ、と言う可愛らしい音を小さく立てながら私は綾の頬に軽くキスをした。

言葉は眠っていて聞こえないはずにも関わらず、返事をする様に綾は「ん……んんっ」と言う気持ちよさそうな寝息を立てながら、繋いでいる手を強く握ってくれる。

そんな綾の様子を嬉しく思いながら、私は意識を落としながらそっと眠った。

・
・
・

綾視点

「……あー、朝か」

眠気を覚えつつゆっくり目を開けると部屋に日の光が差し込んでいるのを見て朝だという事を確認した。

とりあえず起床を、と思ったがいつも通り体を動かす事が出来ない。態々確認する必要はないが一応確認する為にまず、束の方に顔を向けて確認した。

そこには

「……綾……だいすき……」

「……」

そんな事を呟きながら寝る前に繋いだ手を今だ大切そうに繋いで、ぎゅーっと抱きついて幸せそうに眠っている束の姿があった。

繋いでいる手を握りなおして握り返してやると、幸せそうなにへら笑いを浮かべながら、甘える兎の様にすりすり頬ずりしてくる。

「……兄さん……すぎ……」

「……」

反対側を向くと、俺の横腹の服を掴んで密着するようにぎゅーっと抱きついて束と同じ様にて幸せそうに眠っている筈の姿があった。

最近よくよく思っけど、似てないと言われているもやっただぱり姉妹というものは似るもので、幸せそうなにへら笑いを浮かべながら、甘える兎の様にすりすり頬ずりしてくる。

寝言も何だかとてもよく似ている。眠ってまで想われているなんて嬉しい。

どちらを向いてもすやすやと気持ちよさそうによく眠っている。

いつも通りの光景。いつも通り両手に花。端から見る分には最高です。いつも通り身動き一切取れないけど。

まだ携帯のアラームは鳴っておらず、二人とも幸せそうによく眠っている事だし、起すの可哀想だしもう少しだけこのままでいいか。二人の寝顔を見ていたいし……

PPP……

「！？」

と、携帯のアラーム音が鳴った。気を抜いていた事でかなり驚いた。心なしか鼓動を打つ速度が速い。部屋には小さくアラーム音が鳴っているのにも関わらず横の二人は気持ちよさそうに寝ている。

とりあえず止めないと……携帯は東の方にあり、東の方の手を動かせられれば直ぐに止められるのだが、生憎と塞がっていて手が離せない。

なので、反対側だけど篤の手を篤を起さない様に動かして、携帯を掴み開けアラームを止める。ふう〜止めれた。

携帯のアラームを止めるのも一苦労で、携帯を取ろうとした時、身を擦った為篤と少し離れてしまい不服そうに寝息を漏らしていた。

本当に一苦労だ。

とりあえず、携帯のアラームが鳴った朝九時になったんだ、起きないと。

ここは師匠達の屋敷だ、しかも朝には咲夜さんが起しにくると言っていた。

端から端から見たら美味しいこんな光景を咲夜さんが見過ごすわけなくて、見られると自動的に奈々さんに伝わっていい話のネタにされる訳で

『おはようございます。朝です』

「（オフウ）」

コンコン、というノックの後にそんな声が聞こえ扉が開いた。

開いた扉の方を見ると……と言っても声で誰なのかは分かっている。そこには、いつも通りメイド服に身を包んだ咲夜さんがいて部屋に入ってきていた。

「おはようございます。朝ですよ……あら？お楽しみの様ですね」

「お楽しみって……」

そうぼやく様に呟きながら、抱きついている二人を優しく剥がした。拘束を解いて起き上がるうとしたら……

「……ん……」

「……や……」

箒と束の二人が抱きついてきた。

起き上がれない、と言うか変わらさず動けない。二人ともがちり抱きついてきている。

再度剥がしてみたものの、その直後に抱きつかれるというループが発生した。

起きているのかと思ったけど、二人とも今だ気持ちよさそうに眠っている。

結局、二人を剥がすのは諦め、そんな俺の悪戦苦闘していた様子を見ていた咲夜さんは微笑ましそうに見ていた。

「ふふっ、やっぱりお楽しみの様ですね」

「そうですね」

「あら、素っ気無い反応。おもしろくありませんわね……まあ、いいですけど。それでは朝食の準備が出来ているのでお早く来てくださいね。それでは失礼します」

最後にメイド服のスカートの両端を掴んで一礼すると咲夜さんは部

屋を出て行った。

最後までいいおもちゃにされた。しかも朝から……後で話のいいネタにされるんだろっな。

憂鬱な気分になんまりつつ……俺は、束と篝の二人を時間をかけながらも起して着替えて大広間へと向かった。

・
・
・

まだ眠たそうにしている二人（束に到っては半分完全寝ている）と手を繋ぎ手を引きながら、朝食が待っている大広間へとやってきた。

「おっ、遅かったな、三人とも。おはよう」

「おはよう、三人とも」

「おはようございます」

大広間へとやってくると一郎師匠と奈々さん、咲夜さんの三人が出て迎えてくれる。

「おはようございます」

「おはよう……いじやります」

「おはよう……いじやります」

「ふふっ二人は眠たそうね。まあまあ、席に座って。朝ごはんにしましよっ」

奈々さんの言葉に立っていた俺達は席に座る。
箸は眠たそうだけど、ちゃんと起きているけど。
束は朝に弱い為、物凄く眠たそうで半分完全に寝て半分完全に起きているというなんとも物凄く微妙な状態。
一応半分完全に起きてはいるけど、少し不安だ。

「それじゃあ、頂きましょうか」

『頂きます』

全員の食前の言葉が綺麗に揃い朝食を食べ始める。
今日の朝食は、焼き魚に厚焼き玉子に白ご飯に味噌汁にお漬物という定番的な日本食。
どうやら今日の朝食は、咲夜さんが作ったらしく、とっても美味しい。
味噌汁の香りと暖かさがまだ少し眠気があっただけ一っとしていたたまを覚まして、リフレッシュされてくれる。
眠たそうにしたり、半分完全に寝ている箸や束もしっかり美味しそうに食べて、頭をリフレッシュしている。

「そういえば、綾」

「はい？」

「朝からお楽しみだったようね」

「……」

もう少しで味噌汁で咽そうになった。

今、物凄く呆れたといわんばかりの顔をしていると思う。

やっぱり、奈々さんに伝わっていて、話のいいネタにされてしまった。
奈々さんと咲夜さんは楽しそうな笑みを浮かべ、師匠は笑みを浮かべながら話に食いついて、束と篤は何の事か分からず不思議そうにしている。

「朝から両手に花なんて、漢冥利に尽きるわね」

「そうだぞ。朝から美女二人に囲まれて起床だなんて羨ましいぞ、爆破しろ」

「するか、師匠が爆発しろ。師匠も同じでしょうが、奈々さんだけじゃなくて咲夜さんまでなんですから」

「アツハハハっ！言うなよ、照れるじゃないかっ」

「何処に照れる要素がある？はあ……」

「ああ、なるほど、そういう事か　どうだった？綾、嬉しい？」

「どつって……嬉しいけど、動きづらい」

「そっか　嬉しいのか　ふふっ」

完全に『嬉しい』からの後を聞いてないな。

それは篤も同じみたいだし。

だけでもまあ、二人が束が嬉しいならそれでいいか。
動きづらだけで苦ではまったくくないわけだし。

「二人とも嬉しそうね。やっぱり、綾には女たらしの才能がハーレ

ムを作りの才能があるわね。」

「楽しそうに言わないで下さい。それにどうしてそうなるんですか、そういうのは一夏の担当です。俺は束だけいれば充分なので他なんていりません」

「もお〜綾ったら〜」

「むう……」

真っ赤にして嬉しそうに束は照れて、箒は何故か少しだけ不服そうにしている。

「スツパリ言うわね」

「ですね。歯が浮くような台詞をこつこつ堂々と言うなんて、恥ずかしくないのでしょうか？」

「くつくくつまつたくだ、恥ずかしい奴。変なところで漢らしい」

惚気に呆れた様に言う奈々さんと咲夜さんの三人。

呆れるのは勝手だが、師匠は一言一言余計な言葉が多い。

それに本当の事だから恥ずかしがる必要はない……恥ずかしい台詞には違いないけど。

「第一、ハーレムなんていいですけど、束以外誰が居るんです？」

「えっ？……綾、本気で言っているのか？」

「本気ですよ」

「誰って……千冬ちゃんに決まっているじゃない」

「はっ？どうして千冬？」

何でここで千冬が出てくるのか分からない。

どういふのか考えていると……

「はあくまったく、この子は」

「本質は変わらないな、まったく」

「あっはは……綾はまだああしてるつもりですからね」

何故かこの場にいる俺以外全員に呆れ果てられた。

幸いな事に筈には呆れ果てられていなかったけど、何とも言えないといった表情を苦笑いと共にしていた。

物凄い疎外感だ……俺は何かとんでもない失言でもしたのか？自分的には思い当たる節がなくてよく分からない。

「千冬ちゃんと言えば……」

「何ですか？」

「お昼前ぐらいに屋敷ウチに千冬ちゃんと一夏君を来るように呼んだわ。遊ぶならいつものメンバーの方が綾達がいいと思っただし、したい事もあるしね」

「したい事？」

奈々さんの言葉にちよこんと不思議そうに首を傾げる。
すると、奈々さんは何やら何かを企んでいる様な楽しげな笑みを浮かべながら、束に耳打ちをする。

「 ということなの、どう？楽しくなりそうじゃない？」

「 ふふっそうですね それはとっても楽しくなりそう 」

「 でしょう？」

満面の笑みを浮かべて楽しそうにしている奈々さんと束の二人。
この二人、絶対何か企んでいる。満面の笑みと共に何か企んでいる表情が見える。

この二人が結託したら愉快犯的な事が起きやすい。

他の人達はと言うと。

咲夜さんは奈々さんが何をするのか知っている様子で静かに楽しそうに笑っていて。

師匠は、我関せずの何処か清々しい表情でお茶を啜りながら外を見ている。ダメだこいつ、何とかしないと。

箒は何の事がまったく分からず本当に可愛しくちよこんと不思議そうな表情をしながら首を傾げて、聞いてきた。

「 ねえ……兄さん、姉さん達は何するつもりなんだろう？」

「 さあ……俺は分からないや 」

二人が何をする気なのかは分からない。

ただ何となく分かる事を挙げるとするのなら、いろいろと物凄いこ

とがおきるといことだ。

今日も一日朝から波乱万丈で前途多難なな一日になりそうだから、こんな時はあの言葉を平穩無事を祈りつつ言おう。

世界が平和でありますように。

そしてゆっくりと……這いよる様にその時がやってくる

……

第三十四話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第三十四話 ?

何だかんだで連続更新。短いですけど。

今回は通常話(?)でしたけど、いろいろと試したくてあえて短くしてみました。

なので今回の5151文字という字数。いつもは一万越えだからいつもは、この倍書いているのか。

我ながら凄いという……バカというか(苦笑)

今回は純粹に朝の光景を書きたく書きました。ほのぼのと和んでもらいたくて。

出だしの束さん視点は久しぶり束さん視点を書きたくなくて。元々は全部束さん視点だったんですけど、ある指摘で全部ではなくなった名残です

まあ、ニヤニヤほのぼのしていただけると嬉しいです。

今回一番試したかった事は、次回話を期待させる様な話です。

あるお方から

『毎回の様に綾視点の登場人物や情勢の近況報告で始まり、次回話を期待させるような言動や情景描写がないことです』

というありがたい指摘を頂き、自分なりに試行錯誤して書いてみました。

多分、次回を期待させる様なのになっていいると思います。

最後のまとめもいつもより自分なりに上手く出来ていますし(ネタに少し走りましたが)

期待出来たなかったり、指摘を理解できてないようなら、申し訳ないですm()m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に「お気軽に聞いて下さい。」
よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

第三十四話 ？

綾視点

奈々さんと東の二人が何かよからぬ企みを企てていた朝から、約束のお昼前になった。

結局、二人が何を企んでいるのか最後まで分からなかった。

ただ一つ分かっていることは、いろいろと物凄いことがおきるということぐらいで、少し不安。

「お邪魔します」

「お邪魔しますっ」

「いらっしやい、千冬ちゃん、一夏君。よく来たわね」

少しの不安を抱えながら千冬と一夏を屋敷の玄関で待っていると、咲夜さんの案内で二人がやってきた。

二人とも丁寧に礼をしていて、そんな二人を奈々さんが俺達を代表して、優しい微笑を浮かべながら出迎える。

先ほどまで満面の笑みで何かを企んでいた人とは思えない……と言
うか、思いたくない。

今の奈々さんの表情が不安に拍車をかけて不安が倍増しそうだから。

「こんにちは、千冬、一夏」

「こんにちは、ちーちゃん、いつくん」

「こんにちは、千冬さん、一夏」

「ああ、こんにちは。綾、束、箒」

「こんにちはは、綾さん、束さん、箒」

顔をあわせて礼しつつ挨拶を全員でする。

今日も二人とも元気そうで何よりだ。

「さて、挨拶も済んだ事だし、とりあえず大広間に行きましょうか」

「ご案内します」

案内してくれる咲夜さんを先導してこの場にいる全員が大広間へと向かう。

大広間に向かっている道中、一夏は物珍しそうにきよるきよると屋敷の中を見ている。

やっぱり、珍しいのだろうか。

「一夏、珍しい？」

「う、うん。お屋敷に来るの久しぶりだから、何だか珍しくって」

緊張したようにそう言う一夏。

そう言えば、一夏がこの屋敷に来るのは久しぶりなのか。

俺が知っているので一夏が最後にこの屋敷に来たのは、白騎士事件あの時以前のことだから一年前以上のこととなって、一夏は小学生になる前のことだ。

そんな幼い時に来たと言っても、前に来たという事と屋敷の様子をおぼろげにしか覚えてないんだろ。だから、それも相まって物珍し

いんだろう。

すると、俺と一夏の会話を聞いていた奈々さんが言った。

「珍しいか……なら、自由にお屋敷内を見てもいいのよ？」

「あ、ありがとうございますっ。でも……お屋敷広いから迷子になりそう」

「確かに……私達が使っている客間と大広間のでしか覚えてないから他を一人で歩いたら私も迷子になりそうだ」

「あっ、箒もか。だよなあ〜このお屋敷広いから」

「ふふっ、そうですね。でも、その時は私が責任を持ってしっかりご案内しますのでご安心を」

「ありがとうございます、咲夜さん」

そんな会話をしながら歩いていると大広間へと着く。

大広間の中へ入るとテーブルの席に座り、咲夜さんがお茶の準備を出して紅茶を出してくれる。

その紅茶を頂きながら、千冬の近況報告を奈々さんは聞いていて、俺と束も聞いている。

奈々さんは人の話を聞くのが好きらしく、千冬が話す話を楽しそうに聞いている。

箒と一夏の二人はぎこちないながらも何かの話を楽しげに話している。

その二人の様子は何時もながら初デートをする初々しいカップルの

様に見える。

俺と束がふと見ていると頬が緩みニヤニヤしてしまい……

「気持ち悪いぞ、束、綾」

「可愛いのは分かるし、ニヤニヤするのは勝手だけど。ニヤニヤし過ぎよ、二人とも」

千冬と奈々さんに注意されてしまった。

その注意されたのを篤達も聞いていたようで、恥ずかしそうに顔を赤くさせて二人とも俯いている。

仕方ないじゃないか、愛妹あいまいのあんな可愛い様子、微笑ましい様子を見ているとニヤニヤしてしまうものだ。

妹を妹として溺愛愛しているな人なら誰だってそうなる、俺だってそうなる。

と思っていると……

「チツチツチ、分かってないな二人とも。可愛い妹の姿を見ていると兄や姉であればニヤニヤしてしまうものなんだよ」

「アホだな」

「酷いっつ、ちーちゃんだっていっくん見て時々ニヤニヤしてる癖に」

「……黙れっ」

束が俺の気持ちを言葉で代弁してくれたけど、千冬は呆れた様になっていた。

だけど、最後は思い当たる節が千冬にもあるようで、少しの間を経

て言っていた。

それでも、咲夜さんには生暖かい視線で見られると、何か複雑で悔しい。

その後もいろいろ話をしているとガチャッと大広間のドアが開いた。

「おっ、もう来ていたんだな。いらっしやい」

入ってきたのは、ガタイのいいスーツ姿の年配男性……一郎師匠だった。

「あら、一郎さん。お仕事は終わりましたんですか？」

「ああ、先ほどな。今日の仕事はほぼ終わったものだから、たつぷり遊べるぞっ！フツハハハッ！」

嬉しいのか一郎師匠は豪快に笑う。

そう言えば、さっきまで仕事する為に私室にいたりとかでいなかったな。

と言つか、真面目に仕事やってたんだ。基本的に遊んでバカやっている姿しか見たことないから。

何と言つか……無茶苦茶失礼なのは分かっているが、何か意外だ。

「こんにちは、お邪魔します。一郎さん」

「こ、こんにちは、お邪魔します。一郎さん」

席に座っていた千冬が立ち上がり言葉をつけながら綺麗に礼儀正しくお辞儀すると。

一夏もそれに続くように少し最初をどもらしながら、言葉をつけな

がからお辞儀する。

「いらつしゃい。千冬ちゃんは相変わらず美人で可愛いな。さあ、私の胸に　っ！」

「はい、ストップ」

「奈々、何をするんだ。私は可愛い娘と再会の抱擁をしようと思っ
ていただけなのだが……」

「はいはい、言い訳はいいです。いい歳してそんな事していると嫌
われますよ？それに抱擁するなら私と咲夜だけにして下さい」

わざつとらしく両手を広げを抱きしめようと師匠がすると、奈々さ
んが猫の首根っこを持つ様な感じで師匠の首根っこを掴んで引き止
めていた。

そして、相変わらず訳のわからない言い訳をすると物凄く綺麗で笑
みを浮かべている奈々さんに師匠は説き伏せられていた。

奈々さんの浮かべている笑みは確かに綺麗だけど、呆れ怒りなのか
黒さがあつてとっても怖い。東といい奈々さんといい、綺麗な笑み
にトラウマを覚えそうだ。

前にも同じ様な事があつたな、物凄いデジャぶる。相変わらず師匠
は馬鹿で、奈々さんに弱い。

それに奈々さんも奈々さんで物凄い事を言った気が……

流星の千冬もクールではいられないようで『あっ、はは……』と苦
笑いをしている。

「一夏君は久しぶりだな。元気にしていたか？」

「あつ、お久しぶりです。元気にしていますっ！」

「おお、そうか。何、緊張なくていい、自分の家だと思って気楽にしてくれ」

「は、はいっ！」

普通の会話を交している。

珍しい、普通の会話を師匠がしている。きつきり一夏にも千冬の時みたいな感じでいくのかと思っていた。

まあ、流石の師匠も幼い一夏には千冬の時に様にはいかないだろうな……

「そう言えば、一夏君。小学校では沢山の女の子に囲まれているそうじゃないか」

「えっ……？そんな事はないんですけど……」

「そう言ってしまう気持ちも分からなくはない。だが、箒ちゃんから聞いたぞ。いつも周りに女の子が囲まれていてハーレムうはうはだと」

「なっ……！？箒……っ！」

「私は嘘は言っていない。いつもお前はたくさんの女の子に囲まれているじゃないか。嘘ではないだろうっ？」

「それは……そうかもしれないけど……」

やっぱり聞いた、悪い予想を裏切らない師匠だ。

一夏は師匠の言葉に否定はしてみたものの、箒に追い討ちならぬトドメを刺され、シドロモドロになっている。言い返したけど、思い当たる何かがい返し返せないだろう。それに箒は箒で一夏のその事を思い出してか、少し不機嫌そうにしている。箒には悪いけど、不機嫌そうにしている箒も可愛らしい。それに一夏の前だからなんだろう、箒の口調はいつもの感じのものではなく、千冬のような凜とした口調になっている。微笑ましい限りだ。

師匠は二人の様子を見て、口元をニヤツとさせ一夏に向かってサムズアップしながら、また馬鹿な事を言った。

「頑張れよ、一夏君。ハーレム道を進むのだっ！」

「や、やめて下さいよ。そんな事言つの……」

「そうですね、一夏君にあまり変な事を言うものじゃありません。どうするんですか、ハーレム作って箒ちゃんのいいお婿にならなかつたら」

「な、奈々さんっ!?!」

止めたと思ったら、奈々さんは斜め上に行く。一夏もかなり驚いている。

確かに箒の婿は一夏で決まりで箒のいいお婿さんになってほしいけど、その発言はおかしいと思う。

箒も慌てたように照れたように顔を赤くして、俯いている。

「そうだな。いい男になれよっ一夏君。なんなら、私が育ててやるっ!」

「あ、ありがとうございます?」

もう展開についていけないのか一夏は返事はしているがとても曖昧なものになっている。

師匠が来てから一気に騒がしくなったな。流石は師匠と一応は言うておくべきか。

束と千冬は微笑ましそうに一夏達の様子を微笑ましそうに見ている。

そんな風に過ごしていると……

「奥様、そろそろアレの準備をしてきます」

「ごめんなさい、お願いしちゃうわね」

「いえ、私も楽しみですからとっておきを準備しておきますわ」

「そう、楽しみにしているわ 私達も直ぐ後にいくから」

奈々さんとそんな会話をすると咲夜さんは、大広間の扉の前でこちらに向かって一礼すると部屋を後にする。

何をやる気だ?準備とは……先ほど束と奈々さんが何やら企てていた事が関係していると見て間違いない。

そんな準備するほどのものなのか?ダメだ、そんな悪い事ではないはずなんだろうけど、悪い想像しかつかない。

不安で少しずつ胸が一杯なってくる。

「いよいよですね 楽しみです」

「そうね 楽しくなりそうね」

咲夜さんが出て行ったのを見て、企ている事関係で出ていったということに気づき束は楽しそうに愉快な笑みを浮かべて言い。
奈々さんも同じ様に楽しそうに愉快的な笑みを浮かべて言う。

そんな二人の楽しそうな様子に俺の消えかかっていた一抹の不安が蘇り、その一抹の不安は更に増《加速》した。

・
・
それから俺達は奈々さんに連れられて、ある一室に来ていた。

「お洋服がいっぱい」

部屋に入って、部屋の様子を見渡した筈がぼつりとそんな感想を漏らす。

筈の漏らした感想通り連れられて来てこの一室の中には、たくさんの洋服がある。

普通の洋服もあれば、ゴスロリやら巫女服やらメイド服、はたまたナース服等といろいろとある。

服だけだと思えば、ネコ耳のカチューシャーやガーターベルト等いろいろな小物まである。

準備よくて、本当にいろいろとあるな。

それに師匠の手には何やらカメラがあり、それといいこの洋服達といい今から何が起きるか分かった。

それだと確認したくはないが、一応念の為に確認してみる。

「えーと、今から何を？」

「ふふんっ 見ての通り、お着替えだよ」

「そうよ　いい企画でしょう」

至極楽しそうな表情で喜々とした声で言う東と奈々さんの二人。

やっぱり、いろいろと物凄いことが起きた。と言うか、予想通り。お着替えとは……本当にいろいろと凄い。そう言えば、昔は何度かやった記憶が。

しかし、よく思いつけど何でこの家にはこんなにもあんな洋服達があるんだ。

奈々さんがこういうの好きなの知っているけど、いくらなんでも多い。

筈と一夏は物珍しそうに目を輝かせて洋服を眺めているけど、千冬は呆れた様子だった。

「それじゃあ早速、始めましょうか。千冬ちゃん」

「へっ？ちよつと？」

「お着替え、お手伝いします」

「い、いや……ま、待って」

千冬の制止むなしくニッコリと微笑を浮かべている奈々さんと咲夜さんに両腕を掴まれ、ズルズルと試着室みたいなところへ連れて行かれる。

試着室は洋服店等にある試着室みたいなもので、そこからは……

『ひゃっ！ちよつと！？何処を触ってるんですか？！』

『ふふっ千冬ちゃんの胸、綺麗ね〜』

『そうですね。スタイルもいいですし』

『だから、何処を触ってっ！あっ、んんっ』

という感じの声が聞こえてくる。

何をしているのかは知らないし、あまり知りたくもないが。

男のサガは本当に悲しいもので、望まずとも勝手にその声から変な事を想像してしまう。

弄られている千冬にも、そして何より束にも悪い気がして嫌な感じだが、師匠にはそんな事はなく嬉しそうに鼻の下を伸ばしている。惨たらしく爆散しとけ。

そして待つこと数分。

一足先に奈々さんと咲夜さんが出てきた。

二人の変わらぬ楽しそうな笑みの表情を見て、千冬が弄り倒された事が用意に分かる。

「準備ができたようですね」

「ええ、バッチリよ さあ、千冬ちゃん。出てきて」

「うう〜む、無理ですよ」

喜々とした奈々さんに呼びかけに千冬は珍しく自信がない声で返事をした。

声は恥ずかしそうでもあって自信なさげで、物陰に隠れている。

「大丈夫よ、可愛いんだから。ほら、出てきて」

「へっ？あつ、ちよつと」

物陰に隠れていた千冬の手を奈々さんは引き、俺達の前へと出される。

前へと出された千冬は、上手くバランスを取れなかったようで体勢を崩し、女の子座りで座っていた。

そして、その千冬の姿とは……

「うっ……」

小さく唸ってこつちらを涙目で見上げる千冬の姿はメイド服だった。

本人の雰囲気に合わせてような黒色のゴスロリメイド服。

定番のメイド服にあるみたいにヒラヒラがたくさんあり、メイド服とゴスロリが足して二で割った感じのメイド服。

カチューシャもすっかり頭についていて、オマケに黒のニーソックスにガーターベルトまで付いて、いろいろと気合が入っている衣装だ。

千冬のクールな雰囲気を活かしつつ、この衣装で可愛さと妖艶さを演出しているクールで可愛い系な感じに仕上がっている。

「……」

千冬がこういう衣服に身を纏っている姿を見るのは初めてだ。

いつも昔からクールな雰囲気で、着ている服もクール系なものばかり。

だから、こういう衣装に身を纏っている千冬の姿を見るのは、ほぼ初めてで何となく目を奪われてしまって……

「り、綾……？に、似合っていないか？」

「え？あ、ご、ごめん！そんな事はない、よく似合っている。可愛いよ」

そう思った感想を千冬に伝えると。

「そ、そうかつ！それはよかった、嬉しい」

そう嬉しそうに言って両手を胸の前でぎゅっと握って、頬を少し赤らめながら千冬は嬉しそうにしている。

褒められて嬉しいのとは、もう一つ別に嬉しい理由がありそうだが、たった一言でこんなにも喜んでもらえるなんて、何だか嬉しい限りである。

「よく似合っているよ、ちーちゃん」

「うんっ！千冬姉、可愛いっ！」

「千冬さん、可愛いです」

「そ、そうか？でもこの服、ヒラヒラしているしスースーするぞ」

「そういう服はそういうものだから我慢しなさい。可愛いわよ、千冬ちゃん」

「G」だっ！千冬ちゃん、可愛すぎるぞっ！」

「可愛いですわよ、千冬様」

口々にそんな好評な感想を言われて千冬は、恥ずかしそうにしているものの満更でもない様子で嬉しそうにしている。

皆言っているけど、本当に可愛らしい。師匠もそう思っているようで何枚も何枚も千冬のメイド服姿をカメラに収めている。

これはこれでいつものクールな感じと違って、可愛しくていい。こ
ういう千冬ももっと見たいものだと思う辺り、こっというのがギヤッ
プ萌えというものなんだろう。

しかし、あまりにも見すぎたようで……

「綾、少し見すぎじゃないかな？ちーちゃんが可愛いのは分かるけど
どっ
」

「い、いやそんな事は……」

「ふーん」

こ、怖い……肝が冷える。

声は冷めきっているし、発する言葉は何処か刺々しい。

表情は目を細め微笑を薄く浮かべてにこにここと笑っているが、垣間
見える束の瞳は酷く空虚で、輝きがない。

見慣れちゃいけないんだけど、見慣れた俗言うヤンデレ目だった。

一応見慣れてはいるけど、その目を向けられるのは慣れない。いつ、
目を逸らしてしまう。

あっはは……おかしいな。

目の前には端から見てもどう見ても、滅多に見れない千冬のメイド
服姿という楽園が見えるのに。

それ以外は（主に束のこの視線で）禍々しい地獄が広がっている。

何処かで選択を間違ったのかもしれない。こんな調子じゃ、某二一ト神に『地獄グラスヘイムの空に輝きがあると思っただのかっ!』と言われそうだが、関係ないけど。

兎も角いろいろと言っているけど、辛いです。

「じゃあ、次は箒ちゃんね」

「へっ?わ、私もっ!?!」

「そうよ、可愛くしてあげるっ」

奈々さんに連行され、今度は箒が試着室に連れて行かれた。

今度は箒か……楽しみだ。

どんな姿をしてくるのだろう。

それに束の視線も止んだことだし、助かった。

期待しつつ待つ事、数分。

「お待たせ」

「お、お待たせしました」

奈々さんに連れられて俺達の前に現れた箒の姿は、ドレス姿だった。

白いゴスロリを基調として、スカートや袖口・肩口には沢山のフリルやリボンがいくつもあり。

胸元には白い大きなリボンが付いていて、頭にも大きなリボンみたいなカチューシャが付いている。

本人の性格にあわせたような感じで静かで何処か控えめな感じが漂っているが、それでも二充分なほどの可愛さを作っている。洋服という色が箒の長くて綺麗な黒い髪を強調していて、この服を着ている箒はまるで可愛い人形にしか見えない。

「か、可愛い〜っ!」

箒の可愛さに感激したのか束と一緒に千冬までそんなことを言っていた。

確かに物凄く可愛い。変な例えをするのなら、鼻血物の可愛さだ。師匠が千冬の時以上に物凄い速さで撮っているんだ、後で写真の一枚や二枚でも貰って大切に永久保存させてもらおう。

「ほら、一夏も何か言っておいたらどうだ?」

「分かっているよ、千冬姉。あ、えーと、その箒。か、可愛いよ、とってもよく似合っている」

「あう……あ、ありがとう、一夏」

一夏に褒められ、嬉しそうにしている箒。

流石に忘れていなかった様でもりながらも一夏はきちんと言えた。少しは成長した様だ。

それに二人とも耳まで真っ赤でとっても初々しくて可愛らしい。

「兄さん、あの……どう、かな?」

「うん。とってもよく似合っている、とっても可愛いよ。最高だよ」

「あ、ありがとっつ兄さんっ」

髪を撫でながら感想を言うと篤は頬を赤らめて照れた様子で嬉しそうにしていた。

本当に可愛いな。いつまでもこうして愛でていたい。

寝めるようにずっと撫で続けていると篤はくすぐったそうにしていた。

「兄さん、くすぐりたいよ」

「あ、ごめん。篤があまりに可愛いものだから、つい」

「もお〜兄さんたら……」

「ふふっ、篤ちゃん。いつくんの時より嬉しそう」

「そうね、篤ちゃんはブラコンだからね。さて、束ちゃん？」

「はい？」

「今度は束ちゃんの番よ」

「私も……ですか？」

「あたりまえ さあ、可愛くして綾を虜にしちゃいましょう」

「はいっ」

楽しそうな奈々さんの後に束も楽しそうに着いていき、試着室に行った。

何だかんだでやっぱり、奈々さんが一番楽しんでいるな。まあ、いいけど。

さて、束はどんな感じで現われるのだから。

本命と言えはいいのだろうか……どんな感じで現われるのか、期待で胸が高鳴っていつている。

そんな事を考えながら期待しつつ待つ事数分。

「お待たせ。今日一番の出来よ」

そんな自信満々の宣言と共に奈々さんが戻ってきた。戻ってきたのは奈々さん一人だけ。

束の姿は見当たらない。

「あの……束は？」

「焦らないの。ほら、出てきなさいな」

「……はい」

聞こえてきた束の珍しく照れた様子の声だった。ゆっくりと束は試着室から出てくる。

その様子を目で追い目に映ってきたのは

「ど、どう、かな……？へ、変じゃない……？」

「……」

幕と同じようにドレス姿の束だった。

束の性格とは対照的になるようになっていた落ち着いた淡い空色と白色を基調とした、背中がガバツと開いたパーティードレス。全体的にふんわりとしており、各部には可愛らしくフリフリが付いている。髪型はポニーテール様にして、髪を一つに束ね花の髪飾りで止めている。

まだ束は着慣れていないようで、どこか落ち着かない様子でこちらの様子を伺っている。

「……」

こういうドレス姿の束を見るのは初めてだ。

いつもの明るい感じとは対照的で、何処か落ち着いているおしとやかな雰囲気を感じる。

だけど、それでいて可愛らしい雰囲気も感じる。

清楚にして可憐。

このドレス姿の束はそんな感じで、とっても綺麗でとっても可愛い。しい。

僅かに垣間見える束の髪を挙げて出来たうなじからは何処か色っぽくも見えた。

そんな束の姿に心奪われた様に見惚れてしまっていて。

「……」

「……？綾……？」

「とっても可愛いよ。とっても綺麗だ。素敵だよ」

素直な感想がすっと口から出て言った。

すると、束は嬉しそうに微笑んでくれた。

「えへへー嬉しいな、ありがとう」

「うん」

そんな会話を交し、ふと見詰め合うとそのまま二人して黙り込んでしまふ。

「……」

「……」

気恥ずかしい沈黙。

だけど、気恥ずかしいだけで嫌じゃない。むしろ、何処か心地いい沈黙。

視線を外していた目でチラッと束を見ると、少し頬が赤くて嬉しそふだった。

それを知ると俺まで嬉しくなつてきて、頬が少しずつ赤くなつてくる事を感じてしまつた。

そんな風に二人で照れて黙りこくつていと。

「ふふっ初々しいわね」

「まっただくだな」

「そふですわね」

「ふふっ兄さんも姉さんも顔真つ赤」

奈々さん達にはからかわれ、箒にもからかわれてしまった。するとまた、二人して真っ赤になる。

ただ、千冬から時々感じる刺々しい冷たい視線を感じた。

そんなこんなでその後も、お着替えの企画は続いた。

・

お着替えの企画は一先ず終り。

その後、少し遅めの昼食をとると箒と一夏は遊び疲れたのか。

奈々さんに案内された使っているとは別の客室にベットに運びと二人して気持ちよさそうに眠ってしまった。

この部屋に居るのは寝ている二人の他に俺と束だけ。

他は皆、それぞれの用事やらなんやらをしている。

「気持ちよさそうに眠っているね」

「だね」

ベットの上では二人とも気持ちよさそうに眠っている。

一夏は寝相よく眠っているけど、箒は俺の手をぎゅっと掴んで眠っている。

掴んでいる手を離そうとすると手に力がこもり、優しく解こうとすると離さない様がつちり掴んでくる。

なので、離れようにも離れられない。

「ふふっ箒ちゃん、大切そうに握っているね」

「まあ、ね。こんなに握られていると離れられないんだけどね」

「あっはは、まったく篝ちゃんはブラコンだな。あっそうそう、綾」
「何？」

「黒百合を少しの間貸してくれないかな？」

「どうして？」

「今から奈々さんと一緒に『倉持技研』に行こうと思ってるんだ。それで」

倉持技研か……何をするつもりだ？

あそこで出来る事なんて、絞られるけど。また何かするつもりなのか。

そついつ不可読みしてしまっていて、束を訝しげに見てしまっていた。

「心配しなくても大丈夫だよ。黒百合の微調整と……後、とつておきをするだけだから」

「とつておき？」

「そうとつておき。綾が求める刹那の他にもう一つ手を伸ばすものへといける様にする為の……とつておきのもの。だから」

そう言つて束は俺に手を差し伸べる。

浮かべている表情は、何処か妖艶で端から見ると何を考えているのか悟らせない様にする笑みだった。

何を考えているのか端から見たら分からないだろうけど、俺には何を
するつもりなのか分かった。

そういう事が……なら、安心して黒百合を、
束になら預けられる。
「54」
を束に預けよう。

そう思うと俺は自然と笑みを浮かべて。

それを見た束は見透かされたのに気づいたようで「かっこがつかないな」と言わんばかりに罰が悪そうに微笑んでいた。

俺は、首にかかっている待機形態の水星のネックレスの黒百合を束に手は手渡した。

渡すと束は嬉しそうに微笑む。

「ありがとう。大切にするよ」

「うん。あんま無茶の事は黒百合にさせないでよ、もちろん束も無茶な事したら絶対にダメだよ」

「分かってる。それにその言葉そっくりそのまま綾に返すよ、綾も絶対に無茶したらダメだからね」

「分かってる。善処するよ」

「もおくまたそれ？あ、それと多分今日は倉持に泊まるから帰ってこないと思うから、篝ちゃんのことお願いね。それと分かっていると思うけど……」

「……浮気したら殺す？」

「うん もしも、浮気したら殺すからね」

ニッコリと満面の笑みを浮かべて、喜々とした声で束は怖い事を言う。

いつも通り強く胸に刻んでおこつ。

すると束は、大切そうに黒百合を握り首にかける。

「それじゃあ、行ってきます」

「うん、行ってらっしゃい」

ちゅっという小さな気恥ずかしい音が部屋に澄み渡る様に鳴らしながら、軽く触れ合うようないっきますのキスをそつとした。

そして、満足そうな笑みを浮かべながら軽い足取りで束は部屋を後にした。

…

第三十四話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十四話 ？

久しぶりに長いお話となり、一万文字を越えました。何か嬉しいですw

さて、今回は試験的に期待感を持たせるような終り方にして、期待させてみましたが、はたしてご期待に添える展開だったでしょうか？

定番で書きました。応急処置？として各所に萌え萌えきゅんポイントを用意しましたが

ただ、これをやったことにより文化祭の時とかがやりづらくなっただんですけどね（汗）

話も相変わらず似たり寄ったりですし……

奈々さんや咲夜さん、綾君や一夏のお着替えも最初は考えましたがグダグダになると判断したので三人天女だけにしました

ちなみに今回は久しぶり千冬さんのちよっとしたターンでした。

まあ、正妻の束さんには負けるのですが。

久しぶりに可愛い束さんかけたような気がします。

ここところが今回の見所？みたいなものですね。

まあ、この束さんが可愛いかどうかは分かりませんが。

正直可愛いと堂々といえる自信はないです。某小説で可愛い束さんを見たので。

それと『』に対する表現も今回は気を配って頑張りました。

さて、九月初日の更新でした。

八月編が終らず、更に九月はいろいろと予定が立て込んで忙しいので

更新が不定期になるかもしれません。ご了承を。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十五話 ？

綾視点

結局昨日は、言葉通り束も奈々さんも『倉持技研』に行ったまま泊まりとなった様で帰ってはこなかった。まあ、事前に報告を受けているので心配はない。唯一心配事と言えば、黒百合がどうなっているかということぐらい。

そして翌日の今日。

俺と千冬は……その『倉持技研』に来ていた。ちなみに箒も一夏も一緒だ。

本当は連れてきたくなかったんだけど、二人の強い要望に俺も千冬も押し切られてしまい、いろいろと約束をさせて連れてきた。我ながら弱すぎると思う。少しぐらいは厳しくしないと。

「うわ、ここも大きい」

「うん、大きいな」

敷地内に入り建物を見上げるなり、一夏と箒の口から零れてきた言葉はそんな言葉だった。

師匠の屋敷ほどの広さと大きさはないが、確かに『倉持技研』の建物は大きくて広い。

流星は世界でも五本の指に入る宇宙工学関連の技術研究施設といった感じか。

ここ『倉持技研』は、世界でも五本の指に入る宇宙工学関連の技術研究施設。

主に宇宙工学の技術研究をしていて、様々な宇宙工学技術を世に輩出し、有能な技術者を保有している。

基本的には宇宙工学の技術研究や開発をしているが、ISが出現してからISにも平行して研究開発をしており、日本でもっともISの研究開発に力を入れてやっている。

ここで束が開発者として成長し、ここでISが誕生した誕生の地。黒百合だけは少し事情が違って違うが、世界初のIS白騎士や存在しない世界で二番目のIS黒騎士、そして暮桜はここで開発されたIS達の誕生の地。

ちなみにここは、師匠がやっている水城財閥の傘下の施設で。

奈々さんがこの主任・最高責任者で、束がこの副主任ということになっている。

「じゃあ、中に入ろうか」

「そうだな」

このまま建物の前でじっとしているのも熱くてしんどいだけだし、とりあえず中に入る事にした。

筈と手を繋ぎながら千冬達と一緒に中へと入り、ここまで車で送ってくれた咲夜さんから貰ったこの見学用のIDカードを受付で見せ、更に奥へ進んでいく。

奥へと進みながら周りを見渡せば、そこは見知った光景が広がっていて、案の定筈も一夏も物珍しそうに中の様子を見渡している。

「そういえば、綾。お前も私もここに来るのは久しぶりだな」

「そうだね」

俺も千冬もここに来るのは久しぶりのことだ。

だから、こうして目的地に向かつて歩いていると見知った研究員がいて、顔をあわせると軽く会釈しあう。

白騎士事件後からIS学園に入る前までは、ここ『倉持技研』に来ていた。

来ていたと言うより、俺と束はここに半分住んでいたと言った方がいいのかもしれない。

ここは日本の研究施設だが師匠の息がかかっていて、創設当時から厳密には違うが一種の治外法権区みたいなものになっている。

なので、ここではまがいなりにIS関連の技術開発や運用試験が他の施設と比べて比較的に出来るようになってる。

そして施設内を歩いていると目的地へと着く。

ドアの前まで一度止まり、ドアの近くにある呼びベルを鳴らす。すると、ドアが開き俺達は中へと入ると

「待っていたよ」

「待っていたわ」

いつもの感じの明るい声で俺達を迎えてくれたのは、束と奈々さんの二人だった。

半日ぶりの二人の顔色はいつも通り元気そうで、ちゃんとした食事をしっかりと撮っている事と風呂にもちゃんと入っていることが見て取れる。

二人とも根っから研究者で、一度研究開発に入るとのめり込んでいろいろと人並みの生活が疎かになることが昔からよくあったから、少し気がかりだったけどよかった。

部屋に通されて向かい側に束と奈々さんが座り、テーブル一つ挟ん

でその反対側に俺たち三人が座ると奈々さんはふと箒と一夏の二人を見る。

「やっぱり、箒ちゃんと一夏君を連れてきちゃわね」

「すみません。言い負かされてしまって……」

「すみません」

申し訳ない気分になって俺と千冬が謝り、釣られて箒も一夏も申し分けなさそうな表情をしている俺達三人に奈々さんは、

「謝らなくてもいいのよ。それに一夏君も箒ちゃんもそんな顔しなくていいのよ、リラックス リラックス」

明るく微笑みを浮かべながらそう言ってくれる。

「……は、はい」

「もう少し肩の力も抜いて。許可したのは私だし、二人にも一度ここを見て欲しかったからいいのよ。ただ、あんまり二人が見てもおもしろくないだろうし、ここは危ないものもが沢山あるから気をつけてね。私達から離れない事と勝手な事はない事、いいわね？」

「「分かりました」」

奈々さんに問いかけに二人は言葉を揃えてしつかりと答える。

奈々さんが言った約束事は、もちろん俺も千冬もここに来る前にちゃんと二人に約束させた。

本当なら連れてきたくなかったのだが、妹と弟に弱い俺達は押し切られてしまい。

苦肉の策、応急処置というか……そんなことでそういう約束事を交わせて連れてきた。

何分、ここは研究施設で危ないものや施設自体も広いので、小さな二人を連れてくるべきではない場所だ。

もつとも、こんなことを今更思ったところで連れて着ている時点で意味はないんだけど。

そう反省の念に少し耽っていると奈々さんは呟くように言った。

「それに二人は将来、ISに何かしらの形で関わる事になるだろうしね」

幸いなことに篤と一夏には聞こえてはいない。

だけど、俺と束と千冬にはしっかりと聞こえ、一夏の行く末を案じてか。

千冬は、深く何か考え込んでいる。

やっぱり、奈々さんも俺と同じ考えなのか。

篤はかなりの確率で、束の妹、俺の関係者という事で本人が望む望まなくても将来的にISに関わる事になるだろう。

可哀想にも一見感じるが、そういう風に俺達がしてしまった。

それに思い当たっているのか、束も黙って静かに深く何か考え込んでいる。

ただ、一夏の方が篤よりも問題だ。

関わるというのは奈々さんも多分、搭乗者として言っているのだろう。

男がISを使えるなんて、ありえない事だが、この世はありえない

なんてことはない、それに俺と言う実例がある。だから、もしかするとだ……それに一夏にはそういう可能性を強く秘めている気がしている。それを俺どころか東や奈々さんまでも掲示してる。それを理論的に明確に説明しろと言われても感なので無理だけど。女性である東や奈々さんの二人が言っているんだ、女の感もあって確率は高められているのだろう。

いろいろと未知にたいして不安感を感じて、下手すると危険な事になるかもしれないけど。今日、ここに筭と一夏を連れてきたのは二人にとってそういう事になったときの為にもいい経験になるだろう。関わるのなら無知よりも、少しは知っている方がいい。俺の身勝手な考えにしか過ぎないが。

奈々さんは小さな咳払いを一つして、場の変な感じになった空気と雰囲気を変えた。

「あっそつだ、東ちゃん」

「あっそつでしたね。綾、黒百合を返すからついて来て」

そつだ、黒百合だ。

元々、黒百合の為に東はここに行つて、俺達は来たんだ。さて、どうなっているんだろうか……気になる。

「分かった」

「東、私も一緒に行つてもいいか？」

「いいよ、一緒に行こう」

「篝ちゃんと一夏君はここで一緒に待っていきましょうね。ISなら後で見れることだし」

「はいっ!」「」

元気よく頷く篝と一夏を奈々さんに任せて、俺は千冬と一緒に束の後を付いていくような形で部屋を一先ず後にした。

束を先頭にしてその後を付いていくと束の部屋の前に着いた。

「到着」

そう言つて、手馴れた手付きでまるで息をする様に当然の如く部屋をロックしている鍵のややこしそうなパスワードを入れ、扉が中へと入れてくれる。

中は先ほどまで作業していた様で電気はつけっぱなしのままだったようで、わりと散らかってはいるが一応は整理はされている。

この感じ……何処か懐かしい感じがする。この部屋でISは生まれ、俺の運命を大きく変えた場所。

部屋を歩くと部屋の中央に黒い大きな布がかかった大きな物が目に映った。

これが黒百合か……黒い大きな布に覆われていて分からないが、姿が変わっている様で通常の黒百合よりも一回り大きくなっている。どんな風になっているのか楽しみだ。

じっと見つめていると笑みを浮かべている束が顔を覗き込んできた。

「気になる?」

「もちろん。早く見せて欲しいな」

「んふふっ　いいよ、それじゃあ……ジャジャジャ〜ンっ」

口でリズムを歌いながら束は黒百合にかかっている黒い大きな布を取る。

黒百合が姿を現した。のだが……俺は目を疑い大事な事なので二度見直した。

結果は変わるわけがない。とりあえず、束に確認をとる。

「これが黒百合?」

「うん」

「これが黒百合?」

「うん　そうだよ」

大事な事なので二度言いましたよ。

でも、帰ってきた言葉はどれも似た様な物だった。

これって……

「まんま……ブラックサレナじゃん」

「そうだよ〜　いいでしょう」

「ブ、ブラックサレナ？」

「ロボットアニメのロボットの名前だよ」

「そ、そうなのか」

不思議そうにそう呟く千冬。

そういえば千冬は、アニメとか見ないタイプだったな。

目の前の黒百合の姿、新たな黒百合の姿はまんまブラックサレナだった。

元の黒百合のガンダムエピオンのなシルエットは見る影もなく、まんまブラックサレナ。名前もほぼ同じ。

ブラックサレナとは某劇場ナデに出てくる、アニメ時主人公だったキャラが復讐鬼になって乗っていた黒い異形の姿をした機体。

物凄い人気があり、俺も好きなりアルロボットだ。好きだけど何もこれにしくなかついていい気が……嬉しいけど、凄く。

本当に外見はブラックサレナそのもので、今見る事ができる武装はハンドカノン×2と尻尾のようなテールバインダーという忠実な再現っぷり。

唯一の相違点と言えば、両肩の展開式スラスターバインダーにあるエンブレムが頭にヘルメースの翼が飾られ、柄には2匹のヘビが巻きついている蒼いカドウケウスになっていて、そのカドウケウスが機体の中心部分にもあるということぐらい。

他は姿から色、武装まで全てブラックサレナそのままだ。

俺はこの黒百合の変貌を見て啞然としていて、そんな俺の様子を束は楽しそうに愉快そうに満足そうに眺めている。

「ふふんっ いい顔だね〜綾、これが私は見たかったんだよっ」

「そっか」

「そっだよ、これが黒百合の後付武装と換装装備パッケージを複合した武装、その名も『黒椿くろしんぼく』」

「黒椿……」

ぽつりと呟く。

黒椿……黒味を帯びた赤い椿。

花言葉は確か、『気取らない優美さ』だったか。

「これにはレーザー兵器の直線上の『BT兵器』というのが搭載されていて、高い機動性と防御を追及した武装だよ。武器はその『BT兵器』を使ったハンドガンが二丁。バルカンとレーザーライフルのどちらにも切り替えて仕替えるよ。尻尾のようなテールバインダーには、マジックハンドを内蔵。ツメはギロキンを簡易型にしたアンカークローになっているよ」

「ギロチンを簡易型って？」

「ギロチンよりも回数を要するけど、ギロチン同様エネルギーフィールドを斬り続けると一瞬だけけどその部分を破壊できる。まあ、近接戦闘はないものと思って、これは緊急用だから。この黒椿は常時超音速からよる強襲と中距離用の武装として作ったし」

「分かった」

「ちなみにこの黒椿は増加装甲だからもちろん着脱が可能だよ」

キャストオフ
Cast Off』で黒椿を量子返還して脱いで、『フットオンPut On』で黒椿を再構成して、また着れるよ」

「何それ、何処のマスクドライバーシステム？」

「にはははっ 分かった？」

楽しそうに微笑む束。

細かな武器の内容こそは違うものの、外見どおり武装は元ネタ通りだったが。

システムは、マスクドライバーシステムという、遊び心溢れる使用になっている。

まあ、何にも遊び心は少しは必要だ。それにロマン溢れる姿とシステム、最高だ。

そう感心しながら見ていると束は凄い事を言った。

「ちなみに……この黒椿は第二世代提唱時に発表した第二世代の『後付武装によって、戦闘における用途の多様化』というコンセプトで開発したから技術的には第二世代型相当だね」

何ともないように平然という束の言葉に俺も平然としていたが、千冬は厳しく鋭い目つきで束を見つめている。

まるで敵を見つめるような目つき。まあ、そんな風に見つめる気持ちは分からなくはないが。

世界がISを受け入れ軌道に乗ったり、各国が多額の資金、膨大な時間、揃いつつある優秀な人材の全てをつぎ込んでよく出来て量産出来たのが現在の第一世代型。

第二世代目も各国で構想をしつつあるらしいが。束が今回開発したこれが、黒椿が存在してしまった今。

そんな努力は、無意味だということ。

相変わらず予想の遙か上に行く。いや、行き過ぎだな。

でも、これぐらいを平気でするのが俺の束だ。このぐらいが丁度いい。

第二世代相当と言ったけど、それは建前で多分それよりも、もっと上の世代相当なんだろう。

「ただこれ自体は完璧だけど、ギロチンが罪姫・正義の柱が展開マルグリット・ボワ・ジュステイスできないんだね。正確にはしないほうがいいけど。展開したら機動力が落ちるから」

「そうか、それなら展開しない方がいいね。黒百合の象徴がないのは残念だけど、この格好じゃ不恰好だしね」

「あっはは、そうかも」

「でも、束。昨日、ここに行ったのはこれの為？」

「そうだよ。設計は出来ていたから後は開発するだけだったし。本当は、暮桜にも搭載したかったんだけど雪片と零落バススロット白夜で拡張領域をほぼ全て使ってて無理だった。黒椿は拡張領域の空気が多いからいけたけど」

「そうか」

「うん。あっそうそう、黒百合もちゃんと調節したから心配しないでね。ギロチンのライフルの威力が少しは上がったよ」

「そう、ありがとう。だけど、何もブラックサレナにしてなくても……」

「嫌だった？ダメだった？」

「そんな事はないよ。いいセンスだっ！」

「ふふっありがとう」

束に向かってサムズアップしながらお礼を言うと束は、嬉しそうに微笑んでいた。

俺と束のやり取りを呆れたように見ていた千冬が言った。

「それで束。どうするんだ？運用試験でもするのか？」

「んーそうだね、データも取りたいし。綾にはこの姿の黒百合を味わってほしいからするよ。外の訓練場も借りれる事だしね」

「なら、行こうか」

「うんっ」

黒椿を装着した黒百合に触れ、待機形態である水星のペンダントにすると束の研究室を後にして今度は外の訓練場に向かった。

・
・
・

外の訓練場に向かう向かう途中、奈々さんの部屋にもより奈々さんと篝と一夏達も一緒に外の訓練場へとやってきた。

ここは倉持技研の敷地内にある現在は主にISの実験稼動等に使わ

れており、国際大会で使用されるサッカーのフィールド並の広さがある。

俺は一人ISスーツ姿で訓練場の中央に立っており、俺以外の束達は観測からモニタリングしつつ見ている。

「それじゃあ、行くか」

首にかかっているネクレスを握り締め、意識を中注させる。

「形成」

Yetziran

言葉と同時に黒百合が形どられていく。

いつもの黒百合の姿ではなく、ずっしりと重く黒い異形の姿をした黒椿を纏った姿へとなる。

黒い異形の姿をした黒椿を纏った姿になった黒百合は通常時と違い、露出していた肌が首の付け根まで黒い装甲に全身覆われたフルプレート。

頭部には超音速での反応を補う為のブラックサレナのコクピット内のバイザーを模したバイザー状の超高感度ハイパーセンサーを装着している。

頭部といい、今回何度目思うのか分からないが、まんまブラックサレナのコクピット内のテンカワ君だ。

この場に来るまでに既に黒椿状態でのフィッティングとパースナイズを束にしてもらい、自分でもOSの調節をしているため。

初めて纏ったこの黒椿の黒百合の姿であっても体に違和感なく馴染む。

感覚を確かめながらハンドガンが展開されない腕を空へと伸ばしているのと束から通信が入った。

『準備は出来たようだね、じゃあさっそく運用試験を始めようか』

「了解」

オープン・チャネルの通信を繋いだままにして、バッシブ・イナージェナル・キャンセラ PICを一瞬で起動させ、ゆつくりと浮遊して静止する。

『じゃあまず、機動テストからね。好きなように空中で動き回ってみて』

「分かった」

短く答え、一瞬まぶたを閉じ加速するイメージを創造し意識を集中させる。

まぶたを新たに同時に次の瞬間、物凄い速さで飛翔した。

物凄い機動性だ……いつもの感じで軽く飛翔したと思っただが、想定した高さよりも高めの位置に居た。

機動性が通常時の黒百合とは一回りも二回りも違う。圧倒的な機動性を黒椿は有している。

だけど、黒椿時の機動の感覚は掴めた。滑空している状態から旋回しつつ空中を動き回る。

『いい調子だね。じゃあ、今度は大気圏内ギリギリまで上昇して見て』

「大丈夫なのかい？」

『大丈夫だよ。黒椿自体には通常のものより強力なシールドバリアが全方面・球体状に展開されていてGとかが全くかからないように』

しているし

それに黒椿を纏っている今の黒百合は通常加速で超音速一步手前瞬間加速並の速度があるから。それに黒百合は絢爛舞踏けんらんぶたうある事だしね」

「そうだね。じゃあ、黒百合　飛翔する」

全スラスターを展開し火を入れると大気圏ギリギリまでを目掛けて一気に加速する。

束曰く、黒椿を纏っている今の黒百合は通常加速で超音速一步手前瞬間加速並の速度があると言っていたから、どれほどのものなのかと思っただが。

イグニッションブースト瞬間加速なんか目じゃない凄まじい速さだ。エネルギーの減りも割と大きいがいける。

ああ……心地いい、今俺は無限に広がるソラを飛んでいる。

無意識に恋焦がれてしまうソラ……幼き日から手を伸ばしても手を伸ばしても絶対に届く事になったソラに俺はいる。

この瞬間が美麗の刹那だ。そう思うと何故だろうか、泣きたくなるような嬉しさが胸が一杯になる。

そして　大気圏の向こうは、束が求める新世界　いつか見せてやりたい、一緒に見たい。

そう思っていると大気圏ギリギリまへと着き、静止する。

すると、それをモニターで確認したのか束から通信が入ってくる。

ただ、今回はオープン・チャネルではなく、プライベート・チャンネルだった。

『どう、ソラは？』

「楽しいよ、最高だ」

『ふふっそうみたいだね。よかった』

「いつか、東にも大気圏の向こうを必ず見せるよ」

『うん、期待している』

「そうだ、東」

『何？』

「ありがとう、とっておきのものをくれて。嬉しい、愛しているよ
東」

『なっ！？そんな時にしかも急に言わないのっ！もあ〜』

通信越しにからかうようにそれでいて本気で言つと東の声は照れて
いた。

この通信向こうではきつと顔が赤いんだろうな、それで箒達にどう
して赤くなっているのか聞かれて更に赤くなるんだろう。
それがちよっぴり見れないのが残念だ。

『恥ずかしい事言っでないで、今度は降りてきて』

「はいはい」

少し笑いながら返事をし通信を切るとこの大気圏ギリギリの外層圏
から今度は地上に向けて降りる。

学校の授業でも急降下はやっていて要領的には同じだ。

急降下して地上に着き、完全停止で静止する。ジェットコースターの急降下みたいで少し楽しい。

『うん、機動データはこれぐらいで充分だね 次は戦闘データ。バンバン撃つからジャンジャン撃ち落としてね 』

言うなり、束はフィールドに八連発のミサイルポットを二つ呼び出す。

光の粒子が集まって形を成すと、連続して射撃してくる。

俺は少しだけ空中に飛翔し、両腕にハンドガンを呼び出し動きながら撃ち落とす。

銃弾の様になってレーザーがミサイルとぶつかり次々と打ち落とすていく。

ミサイルは実弾でごく丁寧な事に誘導弾。追尾してくるそれを

「ハアッ」

尻尾のようなテールバインダーに内蔵されているマジックハンドのツメで切り落としていく。
放たれたミサイル全弾を撃墜した。

『戦闘データもよし、と。これで運用試験は終了つと。お疲れ様、綾』

「ありがとう」

束のオープン・チェネルの通信の向こうからは主に一夏の歓声が小さく聞こえる。

目を輝かしている事だろう、一夏は。

空中から地上に降りて、ISの展開を解き、待機形態へと戻す。
一先ず終った。黒椿を纏った黒百合……中々の乗り心地だ。
後は超音速時での戦闘を自然な形で上手くやれば、完璧だな。

そんな事を思いつつ、東達が待っているモニタールームへと行く。

「ただいま」

「おかりなさい」

束を皆筆頭にして迎えてくれた。

束から水を受け取り、一口飲むと奈々さんに横腹を肘で軽く小突かれる。

「何ですか？」

「束ちゃんが運用試験中に真っ赤になったけど、また何か言ったのね。まったくタラシなんだから」

「さあ、どうでしょうね。ってか、タラシってなんなんですか」

「またまた」

そう言っただけで楽しそうに奈々さんはまだ横腹を肘で軽く小突かれる。

この様子じゃ何を言ったのか一字一句気づかれてそうだ。

束も束で何か言うわけでもなく、少し赤くなって拍車をかけてくれている。

まあ、事実なので否定するとか必要は一切ないけど。

からかわれるのも好きじゃないんで、奈々さんは束に任せて、箸と

一夏の方へ向かう。

「お疲れ様、兄さん」

「ありがとう、篤」

「お疲れ様、綾さんっ！めちゃくちゃカツコイイよっ！」

「あ、ありがとう、一夏」

篤は普通に劳いの言葉をかけてくれて額の汗とかをタオルで拭いてくれたけど。

一夏は稼働試験の様子を見て、感激したようで興奮気味でかなりテンションが高い。

ああいう光景を見て感動する辺り、やっぱり一夏も男の子だな。

篤達と話しながら急逝していると、ふとある事に気づく。

「そっだ、千冬は？」

「えっ？ちーちゃん？そこにいて……って、いない。アレ？何処に行っただらう？」

辺りを見渡してみてもこの場に千冬の姿は見えない。

皆、不思議そうにして辺りを見渡しているところを見ると誰も千冬が何処に行ったのか知らない様だ。

おかしいな、何処に行っただらう？いつものなら千冬は、何処か行くにしても一つ断りを入れてから行くのに。

そう思っているプシュっという音を立てながらモニタールームの自

動ドアが開く。

すると、入ってきたのは千冬だが……何故かISスーツ姿の千冬だった。

…

第三十五話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十五話 ？

私的にネタとロマンとロマンが詰った回でした。

大気圏ギリギリとかいろいろとおかしいですが、生暖かい目で……

（・・・）

倉持技研を出したのは、二次創作で倉持技研が主人公達側で

出てくるのを見たことがないので出してみました。普通はオリジナル社がデュノア社が多いので。

というのは建前みたいなもので、本当は東さんと倉持技研の繋がり
の裏づけの為にしました。

原作ではいろいろと関係性がありそうなので（白式のやり取りを
しています）。

ただ、設定が少ないのでほぼオリジナル設定です。ご都合過ぎます
ね（汗）

第と一夏を倉持技研に連れてくるかで結構悩みました。

この時期で多少ながらも二人にISと関わらせてよいものかと思
いまして……

変に関わらしておかしな感じに原作の流れ等を壊すのは嫌なので
が。

ここは折角、綾君というオリ主がいるのでオリジナルの接点を持た
そうと踏み切りました。

一夏はこの時期にはISを動かさせません。触れさせないので。

そして、今回の話の本命 黒百合のパッケージ『黒椿』っ！

まんま、テンカワ君のブラックサレナです。見た目も基本的機能も
これはネタに走ったといえれば走ったのですが、こういうのにちゃん

した理由があります。

この黒椿はある装甲のベースとなっており。

そのある装甲の圧倒的な攻撃・防御・機動から、圧倒的な防御力と機動を取り

あれこれ考えていた結果、防御力を高めるなら装甲を増やして、機動力を高めるならブーストを大量搭載すればいいという結論に至りそれならブラックサレナと同じコンセプトだから

デザインはブラックサレナにしようといこうになり、ブラックサレナになりました

武器はネタに走りました。攻撃面でどうも思いつかなかったので。

第二世代目なのでビット兵器を積むわけにも行きませんし（まあ、BT兵器を搭載しているのですが。

最後は何か微妙な感じになった気が……

次回への期待感を持てるようにしようとして、失敗した感じが……

また、この回でお気に入りやら感想が減るかもしれないorz

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘or誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十五話 ？

綾視点

「あれ、千冬……どうしたの？ISスーツなんか着て」

「いやな」

そう言っ言葉を濁す千冬。

見た瞬間、千冬も新装備か何かの稼動試験かなと思ったけど。暮桜にはそんな余裕はないからありえない。

他のことも考えてしまったけど、この状況でこの千冬のISスーツ姿。

思い当たることは一つしかない。

千冬が今から何をする気が分かっていると千冬は東に問いかけた。

「なあ、東」

「何、ちーちゃん」

「もっと黒椿の稼動データを取りたくないか？」

「そりゃ取りたいよ。さっきの稼動試験でデータ的には充分だけど、私としては物足りないと思ってるし。ああ……そういうこと」

「そういう事だ」

束は千冬が何をする気なのか気づいた様で楽しそうな笑みを浮かべている。

千冬は千冬で何かを企んでいる笑みを浮かべている。

二人とも物凄いいい笑みを浮かべてらっしゃる。ああ、これは俺が対象だな。

それに千冬が今からしようとしている事……それは模擬戦だ。

「綾、今から模擬戦をしないか？先ほどの稼動試験を見ていたら、久々に綾と戦いたくなってるな」

やっぱり、模擬戦だった。

しかも、原因は俺。何だかな。

「どうだ？」

「……」

再度、問いかけられ俺は少し考える。

別に千冬と模擬戦をするのが嫌というわけじゃない。

だけど、模擬戦をするのはあまり乗り気しない。

でも、千冬の方からせつかく(?)誘ってくれたんだ。ここで断るといっても気が引けると言うか、男がすたる様な気がする。

それに箒と一夏の二人が期待して楽しみに待っている様な目を……特に一夏の方が強く向けている。

これは引くに引けない。

「分かった。模擬戦やろう」

「綾ならそう言うと思っていた。それに私もお前も一夏や箒に期待

した目を向けられては引けないからな」

「確信犯だったのか。まあ、そうだけど」

「お互弟や妹に弱いという事だ。ああ、それと模擬戦は黒椿を装備した黒百合でな」

「はい？」

「あつはは綾、間抜けた顔している。当たり前だよ、欲しいのは黒椿時の戦闘時の更なる稼動データで。黒百合の稼動データは充分なくらいあるんだから」

束が言う事はもつともだった。

だけど、無理ゲー感が……無理な気が。

いくら黒椿姿の黒百合が現行のIS以上の機動力を持っているとは言え、模擬戦となる戦闘の範囲が限られ、その機動性が十分に生かせなくなる。

それに防御力が高いとは言え、暮桜の零落白夜の前では無いに等しいものとなりうる。

あれこれ考えるのはやめた。

言い訳がましい。ここで今更引くのも、それこそ男がすたるというものだ。

無理ゲーでも創意工夫次第でどうにでもなる。

それを出来る様に手伝ってくれるのが黒椿であり、やるのが俺黒百合であつて、黒百合だ。

「分かった、黒椿での黒百合で受けて立とう」

「決まりだな。いい戦いにしよう、お互い。勝つのは私だけだな」

「抜かせ、勝つのはどちらが知るといい。一夏に珍しく千冬の敗北した姿を見せてやる、ゆえに勝つのは俺だ」

「ふふつ言ったな。その言葉をお前に突きつけてやる」

千冬は楽しそうに小さく笑い言う。

お互い冗談めかしに言い合うと戦い前の挨拶と言うようにガツチリ握手をする。

そして、俺と千冬は模擬戦へと赴く。

・
・
・

場所は再び、外の訓練場。

フィールドは静寂に包まれているが、モニタールームには沢山の詰め掛けているらしい。

多分、束が漏らしたと思うのだが俺と千冬が模擬戦するという情報が漏れ、沢山の人が集まっている。

こういうときによくある賭けは奈々さんが賭け事はあまり好きじゃないのでないらしいが、中には忙しい仕事をほっぽりだして見に来ている人も中にはいるらしい。

俺が言える立場の人間ではないが、見てないで大人しく働け。

でも、それだけここでも注目されているということか。

IS学園に入って数ヶ月立つけど、元々注目されていたのがあの学園トーナメントに優秀した時から益々俺も束も千冬も注目される様に

なった。
悪い気はしないけど、いろいろと不安感を覚え良い様な悪い様な複雑な気分になる。

そんな思いを考えながらも気持ちをしきつ静めていき、模擬戦に目の前の戦いに集中していく。

『それでは両者とも両サイドに立ちISを展開してください』

スピーカーから束の声が聞こえ、向かい合わせに立っている俺達は構える。

「来い、暮桜」

「Yetzirah形成」

同時にISを形成する。

千冬の体には、一振りの刀を持ったISが。
俺の体には、黒く禍々しい重装甲を身に纏った二丁銃を持つISが現れる。

さて、いよいよだ……やるか。

やるなら、全力だ。千冬は、真剣勝負で手を抜かれるのも抜くのも嫌いな性分だし、俺も同じく嫌いだ。

今だ気が乗らないけど、やるのなら全力でぶつかろう。全力でやってこそ、達成感や高揚感、意味が生まれる。

『それでは両者、試合を開始して下さい』

束のアナウンスと共にブーツという試合開始を告げるブザーが鳴り

響く。

それが鳴り止むと同時に俺と千冬は動く。

呼び動作等なしで横薙ぎ一閃に雪片が振られる。

それを俺は、もう少して当たるギリギリのところまで身を逸らすことだけで避け、手に持つ二丁のハンドガンを撃ち、この詰った距離を離そうと試みる。

すると千冬は、俺の真似をする様に場を動かさず体を少し逸らすだけで避けたが、その回避の時に出来た隙を付き俺は宙へと上がり千冬との距離を取る。

とりあえず、距離を取らなければ。

いくら機動力と防御力が優れているとはいえ、中距離主体の機体と今はなっている。

対する千冬・暮桜は、機動力に優れた近接型だ。

エーテル・バインダーで近接戦に一応は対応できるが、一瞬限りのその場のしのぎの物で簡単に切り崩されてしまう。

それで近接戦に持ち込まれ押し切れると俺に勝ち目はなくなる。一定の距離を保ち続けないと。

「はぁあっ!」

「くうっ!」

向かってくる暮桜の真一文字の振り落としを回避し、ハンドガンを撃つ。

クソ 流石は千冬だ。

いくら距離を保とうとしても、簡単に距離を詰められ、追い込まれそうになる。

こうして反射的に反撃をしているのが精一杯で、自分から攻めることが難しくてままならない。

それに射撃も難しい。

射撃は黒百合のサポートを受けてマニュアルで操作しており。

当たり前かもしれないが特に動いている敵に当たると言うのが難しい。

当たるには当たっているがかする程度で、当たった数よりも撃った数の方が遥かに多く難しい。

いつもは千冬と同じく高い機動を生かした近接戦闘をしているので、中距離での戦闘や射撃は余計に難しく感じる。

射撃なんて精々、ギロチンのレーザーのみでしかかないし、しかもガンダム等のバルカンみたいに牽制として使わないから慣れない。

互いにシールドエネルギー残量を減らしあっているが、ほぼ同じ様にしか減っていない。

まるで学年トーナメント決勝戦を思い起こさせるような戦いだな。

「やるなっ!」

「そっちこそっ!」

「……っ!」

言葉を交しながらもお互いに相手の動きを伺い。

俺がハンドガンを放つと着弾したが、それと同時に斜め切り落としの一閃を喰らう。

すると、同じ様に同じ様にシールドエネルギーが減る。

いや、同じ様に減ると言うのは語弊だ。ハンドガンは連射性が高くレーザー兵器な分実弾平気よりは威力は高いが。

雪片と比べると攻撃力が劣り、俺の方が多くシールドエネルギーを減らされる。

仕方ないことなんだろう、この黒椿は気動力と防御力が非常に高い分、攻撃力が低く少し心持たない。

これ自体攻撃向けの物どころか兵器ではなく、あくまで補助武装なので攻撃力が低いのは少し心持たないことなんだろう。

戦いは激しさを増していくがそれと同時に平行線でもあって、膠着状態だ。

それはやっぱり、俺と千冬の実力が似たような程度で。

しかも、お互いに相手の次の攻撃や行動を読み合い、更にそのままで読んでいたりと様々な戦闘思考を巡らしており、物理的な戦闘とは別の場所で思想戦闘もしている。

だから、そのそうなるのも仕方ない。

でも、このままこうしていても埒が明かない。それどころか消耗戦になりかねない。

なら、ここは多少のダメージは覚悟して、強引に押し切っても攻撃に転じよう。

今一度、姿勢を安定させ背部と腰部分のスラスタを展開し、一気に突貫する。

「……………っ!？」

「ハアアアッ!」

「……………っ!」

すれ違うように千冬の横を通り過ぎ、千冬に横に出た瞬間エーテルバインダーで思いっきり切りつけた。

俺の突貫に千冬は驚いていたが、ちゃんと対応してきて俺が斬り付けた後、俺の方に雪片の横薙ぎの一閃を叩き込んで来た。

わりと多めに削られたが予測の範囲内だ。そのまま通り過ぎると、アタリコート・タン特殊無反動旋回で千冬の後ろに回りこみ、後ろを取るとハンドガンを放つ。

「っ！器用な事をするなっ！」

「まあ、ねっ！」

少しでも多く当たるべく暮桜をロック・オンするとハンドガンを連射し続ける。

すると千冬は、超人的な反射で致命打になる攻撃を紙一重へで避けているが、それでも先ほどよりも多く命中して被弾している。

俺が選んだ戦法は、ヒットアンドアウェイという戦法……撃つては離れ、撃つては離れという戦法だ。

千冬との試合では他の試合より、戦法の鍵がある連打や強打をもらわないためのステップが難しい。

連打や強打は喰らってないが、それでもどうしても中々気を抜けない一撃を喰らってしまう。

だが、それすらも承知の上の戦法だ。

模擬線の見栄えこそは、やられたらやり返すと変化が見え難いがそれでも場の主導権は俺の手にあり、今は俺が攻め手だ。

だから俺は、このままにして一気にヒットアンドアウェイでハンドガンを構え撃ちながら更に攻める。

「そこだっ！」

ハンドガンを放つと千冬は、多少ながも被弾するのも承知の上で気

にせず向かってくる。

剣先がかかるかどうかの間合いまで詰められると、初発として真一文字に雪片が振り落とされる。

それを剣先が掠らないギリギリで避ける。

すると、真一文字に振り落とされた雪片は流れる様に綺麗な剣線を描き、今度は真横に雪片が振られる。

「くっ！ ふっ！」

「っ！」

離れようと千冬の向こう側に出ようとした時にその薙ぎ払いの一閃を喰らった。

大した威力はないが、それでも致命傷になりかねない一撃だ。

千冬の背の方へ出るとハンドガンを無数に放つ。

瞬間、スラスタ―展開し場を踏み込み千冬の頭上へと出て真下にいる千冬目掛けて、雨を降らす様にハンドガンの弾を無数に降り注ぐ。

「何っ！？ 頭上からもだっ！？ くうっ！」

背後から迫ってきたハンドガンの弾に対して千冬は向き直し、身の逸らしの紙一重の回避し、または雪片でハンドガンの弾を捌いて弾いていた。

しかし、頭上から来るとは思ってもいなかったようで千冬は正面から来るハンドガンの弾と頭上からハンドガンの弾に対して、無理やりな緊急回避を取ろうとしたが敵わず。

頭上と正面から挟まれるように同時にハンドガンのレーザー弾を喰らった。

一人の人間が別の位置で別々に撃った弾がほぼ同時に当たるとい

のは本来なら出来ない芸当だが、正面と頭上の弾にはタイムラグがあり。

黒椿の次元離れた機動力を存分に活かすことでそのタイムラグを縫い、その本来なら出来ない芸当を現実のものと出来た。

出来る自信はあったけど、実際に出来た時は少しばかり静かに驚くというか感心してしまった。

でも、これで大きくシールドエネルギーを削る事が出来た。戦いの方も膠着状態から脱却出来ていて、主導権は俺が登って攻め手दैいられている。

千冬が攻めてこないうちに千冬の頭上からハンドガンを無数に放ち、地上へと叩き落す。

千冬は、紙一重で銃弾を回避しながら俺の思惑通り地上へと降りる。

「まだまだっ！」

「くっ！」

千冬の動きに細心の注意を払いながらハンドガンを放ちつつ、千冬との距離を詰めるべく俺も地上に降りていく。

すると、何かを感じた。何と言うか……自分の思惑を逆手に取られた様な感じがする。

そんな感覚を覚え、ふと千冬表情を伺うと口元をニヤつとさせ笑みを浮かべており

「うおおおっ！」

「なっ！ ああっ！」

地上から今だ空中にいる俺の懐目掛けて千冬は雪片を振りかぶり構

えながら瞬間加速で迫ってきた。

イクニッション・ブースト

大胆な行動に俺は驚きながらも、ギリギリで避けたが間合いを詰めすぎたのか蹴られて地面にたたき落とされる。

姿勢を制御して体勢を立て直す、千冬はそのまま雪片を構えながら宙から向かってきて、そんな千冬に俺はハンドガンを打ち反撃する。

もう少しで掠りそうなところで振り落とされた雪平を避けると、流れ技の様に雪片を振るってくる。

それを俺は紙一重で避けるがこつも間合いを詰められては全てを全て避けられるわけではなく、いくつか小ダメージながらも食らってしまふ。

クソまた状況が二転三転した。主導権が千冬にへと移り攻め手も千冬に移っている。

エネルギー残量を見てみると残り半分となっており、いろいろと気も手も抜けない。千冬の方がエネルギー残量が多い。

ここは一つ状況を変えるために、また主導権を取り返すために一つ驚くことをやるか。

大ダメージの攻撃がこない様警戒しつつ、千冬の動きを伺う。

「ふんっ！」

千冬は、雪片の刃を地面に水平な状態にして突きを放ってる。

ここだ。

「くううっ！！」

突きが向かってくると同時に瞬間、両肩と両腰の計四機のスラスタを展開すると計四つのスラスタを回転するリボルバーの様に次

々に点火させる。

突きを完全に避けきるとまず一機目に右肩のスラスタを主にして姿勢制御も合わせて、扇状に宙を逆様の状態で舞う。

その間に二機目の左肩のスラスタと姿勢制御でで繋げハンドガンを放ち、地面に着地する。

そして三機目と四機目である両腰のスラスタが点火すると宙を舞い千冬を飛び越え背後を取った。

それを動きを流れ技の様に一瞬でした。

まるでリボルバー銃の様な感じでのスラスタの点火。

そうだな、名前は瞬時的な加速も出来たことだし、個別連続瞬時加速リストとしよう。

千冬の背後を取るとハンドガンの銃弾を浴びせ、オマケと言わんばかりにエテール・バインダーで斬り付け、距離を取るように離れた。

「つうつうっ!? 何がっ!？」

一瞬で起きた事に千冬は理解出来ていたようでかなり驚いている。

狙い通り千冬は驚いていて、一泡吹かせる事が出来た。

それに大きく千冬のシールドエネルギーを削る事が出来た。

リボルバー・イグニッション・ブースト 個別連続瞬時加速は、イグニッション・ブースト 瞬時加速と違い。

個別にブーストする分、移動距離が短くまたフルでスラスタを使っている分、加速力も劣る。

しかし、制限された短い範囲での瞬時的な加速においては瞬時加速イグニッション・ブーストよりも早く。

軌道を変えることができず、直線的な動きになる瞬時加速とは違い、スラスタを個別に使用している為機動を変える事が可能で小回りも効かせられる。

そして、黒椿の次元離れた機動力も相まって目どころか制限されたハイパー・センサーでは捉えられない刹那の速さを現実のものとする。

ただど操作が難しく、成功率は50%前後と中途半端。

出来るかもしれないし、出来ないかもしれないといった随分と曖昧な成功率。

それにエネルギーの消費が激しく、イグニッション・ブースト瞬時加速等といった技能類はフルでは使えない。

技能の操作訓練とこの技能に対して調整もしなければならない。

思いつきでぶつつけ本番の初めてでやったが、出来た。

出来ないだろうと思っていただけに自分でも驚き関心してしまい。

その突発的な技能に対応した黒百合のスペックとポテンシャルの高さを改めて思い知った。

「はあっ！」

「っ！！ はあああっ！」

驚きに反応が遅れている千冬に向けてありったけハンドガンを放つ。無数のレーザー弾に襲われる千冬は反応を少し取り戻しているが、それでも数多く弾丸を喰らい。

だが、反応を完全に取り戻すと千冬は迫り来るレーザー弾を当たってしまふのは最小限で喰らい、回避できるものは紙一重で完全に回避し俺に迫り来る。

千冬の一閃が真一文字に振られた瞬間、細部のスラスタを急速展開しバックステップで下がり避けると、ハンドガンを再度発砲した。

その場から動く事はなく千冬は身をずらすだけで弾丸を避けた。

そして、刀を腰部分で構え一歩だけ踏み込んでくと雪片を薙ぎ払ってきた。

それをまた避け、ハンドガンを撃つというお約束をやると今度は別の方向から薙ぎ払いが迫ってきた。

「はあああつー!!」

「うおおおつー!!」

千冬の一閃を正面で浅いながらも喰らってしまった。

こちらも千冬の正面に浅いながらも銃弾を喰らわせた。

そして、跳ね飛ぶ様に離れ間合いが出来る。

場の主導者と攻め手は今だ俺。

だが、戦況は平行線……膠着状態。お互いにエネルギー残量は六十七。

戦いは終幕へと移り変わった……のだが、やはり戦況は平行線……膠着状態。

このままこうして膠着状態のまま消耗戦をするのも一つの終らせ方
と言えば終らせ方だが。

それでは更に時間がかかるし、消耗戦では俺に分が悪く負ける可能性のほうが高い。

それに暮桜になら単一仕様能力ワンオフ・アビリティである零落白夜という決定打、必殺技があるが。

黒椿を装備した黒百合には、決定打、必殺技がない。

元々攻撃力は平均的であり、武装であるハンドガンは雪片の様に単一仕様能力ワンオフ・アビリティの媒体ではない。

ギロチンなら一撃を決める事は可能だが、今黒椿を装備している黒百合ではそれすら出来ない。

ハンドガンのレーザーの威力を上げる事は出来るがたかが知れている。

エネルギー残量が少ない今、下手に動かず一撃を決めにいった方がいい。

エネルギーが足りないのなら絢爛舞踏が回復できるが、いくら回復しようがバリア無効化攻撃である零落白夜を食らえばエネルギーを無効化され敗北する。

千冬なら零落白夜を発動したら必ず当ててくる。だから、回復しようが意味がない。今回は絢爛舞踏は無理に使わない方が良さだろう。だけど、そろそろ終らせなければならぬ。それを千冬も分かっている様で

「終わりにするか？」

「是非もない。勝負だ」

「ああ」

千冬の問いに俺は答えると千冬は口元に笑みを浮かべた。

すると、千冬は少し体勢を低く構え加速体勢を取ると雪片を斜に構え綺麗に構え直す。

今だ何かが起ったわけじゃないが、千冬から一つだけ感じられる気配から加速と同時に零落白夜が放たれることが分かった。

対する俺は、両腕にあったハンドガンを量子返還すると何も装備してない右腕を後ろに引き構える。

そして、意識を右腕、拳を作った右手に集中させる。すると、エネルギー残量の30%の割合のエネルギーシールドが扇状のバリア様

にピンポイントに右拳に張る。

オマケに思考をISに走らせ情報処理させ、あらかじめあることを用意しておく。

その様子を見て千冬は、面白いといった感じで真剣な眼差しで見つめてくる。

場に静けさが立ち込め、次第に静かになっていく。

その静けさが完成されると

「はああああああっ!!」

「うおおおおおっ!!」

俺と千冬は声を上げ。

どちらともなくまったく同時に加速した。

周りが目の前が千冬が迫ってくる姿がスローモーションに見える。

それでいて目に映るものは鮮明に見え、世界が停止した様にも感じ見える。

この一撃を幕引きの一撃としよう。

端から見れば一瞬、俺からすると真近くにいる千冬が零落白夜を発動させた雪片を上から下へ真一文字に振り下ろそうとしている姿が見えた。

それとタイミングを何とか合わせて

「終わりだっ!!」

予め用意していた瞬間加速を一秒間だけ使用し加速する。

すると、世界は引き伸ばされていた刹那から解き放たれ、一気に加

速する。

そしてそのまま、放った右腕の拳は暮桜を撃ち、零落白夜を纏った雪片も黒百合を撃つていてた。

「……ハアハアッ」

上がると息と同時に黒百合が自動的にパージされ、黒い鎧は地面に落ちる。

劇ナデを思い起こされる様な姿だな……そんな事を思いながら、ゆっくり息を整える。

結果は

「私の負けか」

『試合終了。勝者 綾』

千冬の声の後に束の勝利者を告げるアナウンスが聞こえ、決着を告げるブザーがフィールドに鳴り響いた。

結果は俺の勝ち。

黒百合の拳は零落白夜を発動した雪片よりも先に暮桜を撃つて、シールドエネルギーを0にしていたのだった。

・
・
・

「いや〜よかったよ、二人とも」

「ありがとう」

「ああ、ありがとう」

「それに黒椿の稼働データもバツチリ取れた 絢爛舞踏を抜いて、稼働率六十四パーセント。いい稼働率だよ、綾」

「そう、それは何より」

モニター室に帰ってくると無邪気な笑みを浮かべて楽しそうに少しだけはしゃいでいる様子の束と会話を交す。

束や俺達を母親の様に見守る様に楽しげに微笑んでいる奈々さんを見る限り、モニター室での模擬戦の反響はよかった様だ。

今は模擬戦が終り、見ていた人達は俺と千冬の二人に賞賛をくれると次々と仕事に戻っていた。

なので、今この部屋にいるのは奈々さんを加えたいつも通りのメンバーだけである。

「それにしても今回も私の負けか。これで七勝八敗か……」

「そうだね、俺が八勝七敗。一勝差だし、そんなに落ち込むことはないと思うよ？」

「確かにそうだが例え一勝差だとしても負けは負けだ。すまないな、一夏。お前に勝った姿を見せようと思って頑張ったのだが……」

一夏と目線を合わせる為にしゃがんで千冬は、申し訳なさそうに言う。

千冬は戦うのなら勝ち、勝った姿を一夏に見せたかったんだろう。それは俺も同じだから、そう思う気持ちは分かる。

だが、結果はごらんの通り。俺の勝ちで千冬の負けという結果。

それは変えようのない事実で、だからこそ千冬は一夏にある種の罪

悪感を抱き申し訳ないと思っているのだろう。

すると、一夏は

「ううんっ！ 気にしないで千冬姉っ！ 負けちゃたけど、それでも戦っている千冬姉はとってもかっこよかったよっ！」

「……一夏」

満面の笑みを浮かべながら一夏は、千冬の戦っていた姿の凄さを表現するように嬉しそうに言った。

その言葉を聞いて千冬は、じんとした様に静かに嬉しそうにしていた。

そして、千冬は

「千冬姉っ!？」

「静かにしろ」

「う、うん」

そっと一夏を抱きしめ、感謝するように頭を撫でていた。

突然の事に一夏は当然驚いていたが、千冬に一喝され黙った。

それどころか、千冬に頭を撫でられて気持ちが良いのか安心しきって千冬に抱きついていてる。

言葉ではなく態度で感謝を表すあたり実に千冬らしい。

その二人の様子は微笑ましく、和やかなもので。

見ていると頬がニヤけるのを感じ、俺と束と箒は三人してニヤニヤして見ていた。

千冬のああいう今の感じをクーデレのデレというんだろっな。いつも千冬は厳しい分、ああしてデレ要素を含んで甘やかされると甘えなくなるんだろっ。

そうしてずっとニヤニヤしながら微笑ましく見ていると千冬と一夏は俺達に気づいて。

「っ！」

「うわっ！」

俺達の顔を見るなり、千冬と一夏はバツと同時に離れる。

二人とも顔が赤く恥ずかしそうにしている。

まるで知り合いに逢引きを見られていじられた初々しいカップルの様だ。

千冬と一夏は兄弟だけど。

でも、その様子すらニヤけてしまうものでニヤニヤしてしまっ。

「っ！コラ、綾、束っ！ニヤニヤするなっ！」

「ごめん、つい」

「そう、ついね　ちーちゃん達が微笑ましいから」

「だからって、ニヤニヤするなっ！」

「そ、そっだぞっ！箒もニヤニヤするなよっ！」

「いいじゃないかっ！つい、なんだから」

「っ！」

姉弟揃って顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしている。

流石にニヤニヤし過ぎて最後は千冬に睨まれて、やむをえずニヤニヤするのはやめてあげた。

すると、一夏も落ち着きを取り戻し今度は目を輝かせながら俺を見て言った。

「そうだ、綾さんもすごかったよっ！こよかったよっ！俺、例えISに乗れなくても将来絶対綾さんみたいな強くてかっこよくて優しい男になるよっ！決めたっ！」

「そうか……なら、コツコツと努力して頑張らないとね。今ならまずは剣道をもっと頑張らないと」

「うん、俺頑張るっ！」

目を輝かせながらそう言い意気込む一夏。

そんな一夏の様子を千冬は微笑ましそうに誇らしそうに見守っている。

やる気は満々の様だ。これなら少しは一夏に箒を任せられそうだ。

だから、箒に相応しい男にするための一夏強化教育計画をそろそろ本格的に始動した方がいいかもしれない。

そんな事を思っている口元にニヤ付いた笑みを浮かべている束が箒をからからう様に言っていた。

「だって、箒ちゃん いや、箒ちゃんの将来のお婿さんは有望だね」

「むむむ、婿っ！？ひゃあっ！？ね、姉さんっ！変なこと言わないでっ！」

「にはははっ 本当になるかもしれないんだしいいじゃんか」

「よくないよ……もおゝ姉さんばかっ……」

「ふふっ」

耳まで真っ赤にして言った箒に束は嬉しそうに微笑んでいた。

束がこういった辺り本当になりそうだ。

気が早すぎるだけだと思うが、箒が嫁に行くと思うと今からでも少し胸が苦しい。

よし、箒が嫁に行くときは定番（？）の『お前なんぞに妹はやらん』と言おう、決めた。

「兄さん」

束と箒を見ながらどうでもいい様な事に考え耽っていると箒が傍によって来た。

立っていた俺は目線をあわせる様にしゃがんだ。

すると、箒は俺の両手を手に取り笑みを浮かべていた。

「どうしたの？」

「言い忘れていたことがあって」

「何だい？」

「お疲れ様、兄さん。兄さんの戦っている姿とってもカッコよかつ

た。私もあんな風に強く真っ直ぐでいたいな」

「そうか……なら、箒もコツコツと努力して頑張らないとね」

「うん、私も今やっているもつと剣道を頑張るよ」

そう満面の笑みを浮かべて言った箒。

そして、続け様に束も笑みを浮かべて俺の両手を箒と一緒に握りながら言った。

「本当にお疲れ様、綾。戦っている姿もかっこよかったけど、やっぱり綾はカッコイイね」

「ありがとう」

労いの言葉一つだけで、少しばかりあった疲労は一瞬で安らぐ。

やっぱりこうして労いの言葉を、大切や妹や愛しいの人にかけて貰えるのは嬉しいな。

戦おうと思った意味は些細なものだったけど、勝利の意味は自分で思っていたよりも大きなものだったと感じた瞬間だった。

…

第三十五話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十五話 ？

何と言うか物凄くグダグダしていた気が……

戦闘描写も無茶苦茶で自分で酷い気がします（苦笑）

それでも力の限り書いたので楽しんでいただければと思っています。
「おおっ！」と思わせられるものになっていれば良いのにな（切実な願望）

やっぱり、戦闘シーンは何度書いても難しいです。

懲りすぎると訳が分からなくなりますし、簡単にすると単調になりますし。

それに今回の中距離射撃型と近接型の戦闘は難しかったです。

どう戦いを運んでいいのか分からなかったです

黒椿には本格的に近接様の武装は積んでないですから。

それに今回はネタが多い戦闘シーンでした。

ISネタからナデシコ、00、マクロス、といろいろ。

ISはリボルバー・イグニッション・ブーストで、ナジシコが劇ナデ00がワンセコンドトランザム、マクロスがピンポイントバリアと
言う感じです。

本人は真面目ですが。

綾君は今回結構頑張りました。と言うか、かなり頑張りました。

いつもと全然違う戦いをしているので。

いつもは間合いを取りつつ近接戦なのに

今回は間合いを取りつつ射撃。しかも射撃戦もほぼ初めてですし。

頑張り過ぎですね。爆発しろ

リボルバー・イグニッション・ブーストについてはオリジナルです。
一応

ただ、調べた時似たような説明を書いていた小説があったような。
あったらすみません。言い訳がましいですが、たまたまです。

そして、綾君が勝ちました。

一応、これまでに何度か千冬さんに負けているのですが、書いてない。
い。

裏設定で終わりそう。

読者からしては勝ち続きですがギリギリなので生暖かい目をお願いします。

加筆した部分、モニター室に入ってから無茶苦茶でした。

まあ、千冬さんがデレたりといろいろとあり。

和む感じにしてたので楽しんでいただければ嬉しい限りです。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十六話 ？（前書き）

初めての箒視点。

箒らしさをちゃんと表現しつつ、可愛くなればよかったのですが……
今回は心理描写に力を入れすぎて、心理描写が長くなってしまいました。

なので、感情移入しつつゆっくりお読みする事をオススメします。

それではどうぞっ！

第三十六話 ？

第視点

「ふにゃ〜お腹一杯」

「だね〜、美味しい料理でお腹が一杯になると幸せだね」

「うん」

お昼ご飯を食べた後、私と姉さんはリビングでテレビでも眺めながらのんびりとしている。

ちなみに私達が座っているのはソファーだけど、私が座っているのは姉さんのお膝の上。

最初は姉さんの隣に座っていたけど、気づくと姉さんのお膝の上に座らせられている。

恥ずかしいから退こうとしてみいたものの、後ろからガツチリ抱きしめられてい離れられない。

恥ずかしいけど嫌じゃないから、退くのはあきらめて姉さんの好きにさせている。

姉さんに抱きしめられるのは兄さんと別な感じで気持ちいいし、嬉しい。頭も優しく撫でてくれるので嬉しさや気持ちよさはたくさん。

それにぴったり後ろからくっつかれて抱きしめられているから、姉さんの大きな胸が背中当たって柔らかくて気持ちいい。

そう言えば、奈々さんのお屋敷と一緒に兄さんと姉さんと私とでお風呂に入った時、兄さんチラチラと姉さんの大きくて柔らかい胸を見ていた様な。

やっぱり、男の人って大きな胸の方が好きなのかな？ 私はまだ小

さい、姉さんは気にしなくても将来絶対大きくなると言ってくれ
し姉さんが言った事はよく当たるけどやっぱり不安だな。

「んー洗い物、終わったよ」

「お疲れ様、綾」

「お疲れ様、兄さん」

洗い物を終えた兄さんがリビングにやってきて、姉さんの隣に座つ
た。

腰を深くかけている兄さんは、部屋に広がっているクーラーの冷た
い空気を感じて涼しくて気持ちよさそうにしている。

兄さんは熱いの大嫌いだったんだよね。普段活発的な兄さんも夏に
なるにつれて体を壊しやすくなってしんどそうにしている。

嫌いすぎて絶対にしない事がない限り、クーラーの冷房が効いた部
屋から出ようとしない。

昔、海に言ったときも暑さ対策に上着を羽織った海パン姿に日傘を
差していたのがおかしくて姉さんと一緒に笑った事がある。

そこまで兄さんは兄さんも大嫌いで兄さんの夏にはクーラーとの冷
房器具は絶対にいるらしい。今もリビングにはほんの少しだけ冷た
い温度の冷房がかかっている。

あつ後、冬も嫌いだったんだっけ。

それでも兄さんは夏だからしんどいのお昼ごはんから洗い物まで
私達の為にしてくれた。

本当にたくさん感謝しないと。

「兄さん、お昼ごはんとか洗い物してくれてありがとうね。大丈夫
？疲れてない？無理してない？」

「大丈夫だよ、無理してない。心配してくれて、ありがとう。でも好きでやっているんだ、箸が気にする事はないよ」

「う、うん」

優しくそれでいて言い聞かせられる様に言われてしまうと私もそれ以上にも言えなくなってしまった。

やっぱり、兄さんは凄いや。大変で本当は疲れているはずなのに、そんな事ないようにいつも通りにしている。

そうだとしても、本当は疲れてやったばり無理しちゃっているんだろうな……兄さんは身内の為なら、自分より他人を最優先して無理とか無茶してしまう人だから。

「私は心配だな。綾は自分より他人を最優先して無理とか無茶してしまうからね」

「……そう言われてしまうと返す言葉もないね」

「ほらね」

勝ち誇った様な表情で言う姉さん。

やっぱり、姉さんも同じことを考えていたみたい。

でも、兄さんが無理とか無茶してくれたからこそ私と兄さん達、私と姉さんが仲直りする事が出来た。

兄さんがいたからこそ、こうして三人で仲良く出来て姉さんとも何もなく仲良くできている。

今はそんな事はないけど、私は姉さんが昔は嫌い……と言うより、

苦手だった。

姉さんは生まれた時から自他共に認める天才で、その天才である姉さんとその妹である私を周りの人や大人は比べる。それが私は嫌だった。

うっん、違う……羨ましかったただけなんだ。姉さんの辛さも何となくは分かっているつもり。

でも、羨ましかったただけなんだ。何でも簡単に出来る天才である姉さんが、どうしようもなく。でも、憧れる度に周り比べられて……私の弱さをつき付けられる様で……だから、私は姉さんが苦手だった。

そんな私を救ってくれたのが兄さん。

兄さんは私が物心付いた時から家に新しい家族としていて、辛くて泣いちゃいそうな私を励まして救ってくれた。

兄さんは私に言うてくれた。『二人比べようがない、だって二人とも凄いい子なんだから。東は東で篤は篤だよ。だから、気にする事はない。篤は自分らしくいればいい、いてほしいな』と。

その言葉だけで辛くて泣いちゃいそうな苦しいのがとっても楽になった。

そういうこともあって私は兄さんが大好き。

姉さん風に言うなら、兄さんを愛している。

兄さんとはとっても強くて、優しく、でもたまに厳しくて、頼りになって、たくさん抱きしめて愛してくれる。

そんな兄さんが私も大好き、愛している。

姉さんのことは今はもちろん大好き、愛してる。

姉さんはかしく、優しく、明るくて、でも兄さんと同じでたまに厳しくて、頼りになって、たくさん抱きしめてくれる。

そんな姉さんの事も大好きで、愛している。二人とも大好き、愛し

ている。一緒にいると凄く楽しくて、凄く安心する。幸せ。二人とも大好きで、愛しているけど兄さんか姉さんどっちが好きって聞かれたら、兄さんかな。

やっぱり昔からずっと大好きだったから。

兄さんは私の憧れの人で目標。奈々さんに教えてもらった言葉を使うなら、兄さんは私の理想の男性像。

一夏にも兄さんみたいないい男になってほしいものだ。希望が薄そうだけど。

でも、そうさせる。姉さん達も何だかそのつもりだし、奈々さんにも『好きな男は自分好みにしなさい』と言われたから、私頑張る。

兄さんは素敵な男の人だから、当然モテる。

それは姉さんや千冬さんがそう。二人とも兄さんの事が好き。

私も一夏よりも兄さんのほうが好き……兄としてだけ。それに悔しいけど、兄さんには姉さんが一番お似合い。

でも姉さんはまだ、千冬さんに兄さんが恋人だって事を言っていないみたいだけど、大丈夫かな？

千冬さんは兄さんのこと大好きだから、言ったら多分姉さん一発ぐらいは頬を叩かれそう。最悪、殴られるかもしれない。

でも、それは姉さんが大事な事を兄さんに口止めしてまで言っていないから、そういうのは自業自得？と言うものなんだろうな。

叩かれて涙目になっている姉さんを思い浮かべて、何だかいい気持ちになってしまった私は悪い子なのかな？

だけど、こんな楽しくて幸せな時はもう直ぐ終わっちゃう。だって

「あつ……もう直ぐしたらお盆終わっちゃうね」

「そう、だね」

私の言葉に姉さんは言葉を詰らせながら頷いてくれた。

姉さんは、私が何を言いたいのか分かっているみたいで、お顔は何処か暗くて沈んでいる。

もう直ぐしたらお盆は終わっちゃう。そうしたら、姉さん達は学校の方に帰っちゃう。

「ねえ……兄さん、姉さん。やっぱり、お盆が……お祭りが終わったら、帰っちゃうんだよね？」

「そうだね、元々そういうつもりだったからね。そう長くここにはいられないし」

「そういうこと、ごめんね？ 篝ちゃん」

「ううん、謝らないで。うん、大丈夫だから」

ちゃんと確認したかったから、つい聞いてしまつと兄さんと姉さんは申し訳なさそうな表情をしていた。

ちよつと失敗だったみたい。

でも、やっぱりお盆がお祭りが終わると兄さん達は帰つてしまつ。

それは最初から分かっていた。だけど、やっぱり寂しいと感じてしまつ。

本当は帰ってほしくない。いつまでも一緒に楽しく幸せに兄さんと姉さん達と暮らしたい。

だけど、それは出来ない。我が俣は言えない、思つても口に出しちゃいけない。

だって、そんな事をしたら兄さん達に迷惑かけちゃう。

後数日したら、お盆が終って、夏祭りの日が来る。

そうしたら、お父さんが帰ってくる。そして、もしかするとお母さんも。

そうだったら大変。お父さんは前のときを思い出すと大丈夫だけど、お母さんは大丈夫じゃない。

お母さんは兄さんが特に姉さんが大嫌い、難しい言い方をするならとっても憎んでいる。

姉さんがESを開発しちってから、お母さんは姉さんの事が大嫌いなのが強く大きくなった。

体中で姉さんの存在を拒絶して、姉さんを思い出さないように忘れしまおうとしていた。それでもいつもイライラして、ヒステリックにいつも泣きながら何か叫んでいた。

今思えば、壊れちゃう前だったのかもしれない。だから、お父さんはそんなお母さんを静かなおじいちゃんの家行かせて心と体の休憩させたんだと思う。

でも、そうなる前からお母さんは姉さんの事が大嫌いだった。

だって、ずっと見ないようにして姉さんだけには一人では接しようとも、見ようともしてなかった丸

姉さんの事をずっと心の何処かでは『気持ち悪い』と思っているみたいで、笑っていても目が全然笑ってなかった。それどころかとても冷たい目だった。

好きだけど、そんなお母さんが私は大嫌いだった。怖かった。

お父さんも同じ感じ。

姉さんの事を兄さんに任せて何にもしなかった癖に、兄さん達が一回戻ってきた時、兄さんをキレて殴った事をお母さん達が話していたのを聞いた時は本当に頭が来た。

お母さんもお父さんも辛いし苦しいのは私にでも分かる。見過ごせ

ない。

でも、辛くて苦しいのは兄さんや姉さんも同じはずなのにどうしてそんな事をするのか私には分からない、分かりたくない。

だから、お父さんもお母さんで同じ感じ。好きだけど、そんなお父さんも私は大嫌い。怖い。

心細い……兄さん達に本当は帰ってほしくない。ずっと居てほしいでも、そんな我が侂言っちゃったら、お父さん達にも何より兄さん達に大きな迷惑かけちゃう。

だから、我慢しないと。絶対に会えないんじゃない。私は強いないと、強くいるんだ。そう兄さんにも言った。

だから、私は頑張る。頑張っている兄さん達のように。

「ごめんね、篝ちゃん」

「ごめん、篝」

「へっ？」

突然、後ろに居る姉さんには強く優しく抱きしめなおされ、兄さんにも横から抱きしめられていた。

どうしたんだろう、突然抱きしめて。やっぱり、あれこれ考えすぎちゃって顔に出ちゃったのかな？

そう思っていると、私は気づいた。 頬が涙で濡れている事を。

私……泣いちゃってたんだ。

情けないな、私。カッコ悪いな、私。

強くなると頑張るとたった今思ったのに寂しくて辛くて泣いちゃっている。

止まらない、止まれと思うほど、涙がたくさん出てくる。

「筭、大丈夫。我慢しなくていい、泣いてもいいよ、泣いて」

「そうだよ。我慢しなくてもいいんだよ、頼りないかもしれないけど私達がいるから」

「そんな事はないよ、姉さん。ありがとう、ありがとう……」

安心すると我慢するのをやめて私は泣いた。

声は我慢しているけど、泣くのは我慢しない。泣くのは今だけにして、静かに泣く。

今は泣いてもいいんだ……たくさん泣こう。今は兄さんと姉さんが傍に居てくれるから。

私が泣いていると後ろから抱きしめてくれている姉さんは強く優しく抱きめしてくれて。

兄さんは前から私を抱きしめてくねながら、手を優しく握ってくれている。

二人とも暖かい……優しい暖かさ。二人にこうしてもらっているととっても安心する。

それに二人がこんなにも私を大切に心配に思ってくれているのに、我慢しているのは何だかバカみたいに思う。

今だけは二人に甘えよう。大好きな兄さんと姉さんに。

そうした私は優しく暖かい二人に包まれながら静かに泣くだけ泣くと泣くのをやめて泣き止んだ。

「じゅめんなさい」

「どうして？いいんだよ、謝らなくても気にしなくても。我慢しな

くてもいい、今はたくさん泣いてたくさん甘えて私達に。我慢されちゃった方が私達は嫌だよ。ね、綾？」

「だね。我慢は体にも心にも毒だし、今は泣いてもいいんだよ、俺達に甘えてほしい」

「うん」

そう返事すると二人は更に抱きしめてくれる。

前と後ろからだから少しだけ苦しいけど、とっても気持ちいい。

嬉しいな……やっぱり、兄さんと姉さんに抱きしめてもらうのは、大切に思われるのは。

やっぱり、私は兄さんと姉さんが大好き、愛してる。

もしも、お父さんとお母さんか兄さんと姉さんのどちらかを選ばなければならぬのなら私は迷わず兄さん達を選ぶ。

お父さんたちの事は好きだし、そういうのは嫌だけど、もしもそうなったら私は迷わず兄さん達を選ぶ。

そのぐらい兄さん達の事が好きだから、離れたくない。二人と一緒に居たい。

「ありがとう」

「どういしたまして。俺達の方こそ……」

「あつ、謝るのは禁止だよ。謝らなくても大丈夫、私は強いんだからね」

「そうだったね」

兄さんが謝ろうとするのを遮ると兄さんは困った様に苦笑いして言った。

兄さん達に謝られるのはやっぱり嫌だ。何か兄さん達に負い目？を感じさせるみたいで。

兄さん達にはそんなの感じてほしくない。

「兄さん達は……夏祭りには行くんだよね？」

「そつだよ。一年に一度の夏祭りだから行かないと勿体ないよ。それに篝ちゃんの神楽舞いもみたいから、お姉ちゃんバッチリ録画しちゃおうよっ！一緒に祭り回ろうね」

「うん、絶対だよ。ってあれ……？夏祭り……神楽舞……？」

あれ……？何だろう？

物凄く大切な事を忘れていて、してない気が……
何なんだろう？ うううう思い出せない。

「どうしたの？」

「何か忘れている気がして……あっ、あああああっ！」

「ひゃっ!？」

ついに大きな声を出してしまうと姉さんは声を出してビクッと体を震わせていて驚かせてしまった。

悪いことしちゃったけど、今はそれどころじゃない。

大事な事を思い出した。どうしよう、どうしよう、どうしよう、本当に忘れちゃっていたー!!

大事な事を思い出して、あわあわしていると姉さんが心配そうに私

に言った。

「ど、どうしたの？そんなに慌てて」

「ね、姉さんっ！どっしりっ、どっしりっ、どっしりっ！？」

「とりあえず、落ち着いて。ほら、深呼吸。ヒツツ・ヒツツ・フー、だよ」

「えっ？あつ……うん。ヒツツ・ヒツツ・フー」

慌てている私を姉さんは宥めて落ち着かせてくれた。

私は姉さんに言われたとおりに息をして気持ちを落ちつかせる。何か息の仕方が違うような気持ちするけど、何とか落ち着いていた。

「それ、深呼吸違うからね。でも、落ち着いたみたいだね」

「うん、何とか。ありがとう、姉さん」

「どういたしまして。それで何を思い出したの？」

「えーと、神楽舞の稽古をし忘れていたのを思い出して」

そう私が思い出したのは、神楽舞の稽古をし忘れていたこと。

お父さんが出かける前に『神楽舞の稽古はちゃんとしておくように』と言われたけど、全然出来てない。

剣道の稽古は兄さんと一緒に出来ているけど、神楽舞の稽古は本当に全然出来てない。

剣道の稽古をしてなくて困るのは私だけだけど、神楽舞の稽古をしてなくて困るのは私だけじゃない。

篠ノ之神社の神楽舞は夏祭りの名物？らしくて、たくさんの人が楽しみに見に来る。

だから、稽古してなくて失敗ちゃったらたくさんの人を喜ばせられないし、たくさんの人にも、何よりお父さんに迷惑をかけちゃう。

わわわっ、本当にどうしようっ!？

また、あたふたとしちゃう。

「どどど、どうしよう!？」

「落ち着いて、落ち着いて。確かに稽古してないね、箒が忘れていたのは仕方ないよ。いろいろとあったからね。それに俺達も忘れていたから責任はあるね。さてと……」

「そうだね、私達に責任はある。それでどうするつもりなの？」

姉さんがそう問いかけると兄さんは何やら深く考え込む。

どうするつもりなんだろう？

「そうだね……どうするも何も稽古するしかないね。今から」

「えっ?」

「何驚いているのさ、箒。後悔しても時間は戻ってこない、でも稽古してないのなら稽古するしかないでしょう。幸いな事に夏祭りまでは後数日はある。短い期間でもみっちりやったらいい事だしね」

「う、うん。そうだね」

兄さんの言うとおりだ。

焦っても仕方ない。夏祭りまで短いけどまだ時間はある。
みつきりやればいい。よしっ！頑張ろうっ！

「でしょう。俺達がいるし、それに神楽舞の元踊り役の束もいるから大丈夫だよ」

「へっ？私も踊るの？」

「見本にね。それとも何かな？もう踊れなくなったのかな？篝のお姉ちゃん？」

兄さんは笑みを浮かべながら姉さんに挑発？する様に言う。

何だか兄さんの笑み、綺麗で優しく見えるけど黒ぼく見えるのはどうしてなんだろう。

言われた姉さんはむっとした表情をしている。

「むっ……そんな事ないもん。踊れるもん。お姉さんは凄いつてところを目に物見せてやるんだからっ！」

「なら、楽しみにしているよ。やったね、篝。東の神楽舞が見れるよ」

「うん、やったっ！」

久しぶりに姉さんの神楽舞が見られる。

姉さんの神楽舞を見るのは、久しぶりだから楽しみ。

「それじゃあ、さっそく道場の方で稽古しようか」

「分かった。行こう」

私達はソファーから立つと神楽舞の稽古をする為に道場へと三人手を繋いで向かった。

…

第三十六話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十六話 ？

今回は初めての箒視点でしたがいかがだったでしょうか？

割とすんなりかけましたが、箒らしさをちゃんと表現しつつ、可愛く書けていたでしょうか？

でも、自分的にはちよつと失敗した気がします（汗）あんまり幼くない（汗）

私の中でロリ箒は大人びているという設定があり点その設定の下書いたのですが

何だか束さんと同じ感じになったしまいました（汗）もう少し幼い方がいいかな？

でも、幼い言葉遣いが分からない。特に難しい言葉の言い方とか、雰囲気とか

アドバイスをいただける嬉しいですっ！！m（――）m

それに箒の心理描写に力を入れ過ぎて、心理描写がまた冗長的になつてしまった（汗）

でも、少しは幼いながらに感じる寂しさや辛さを表現できていると自負しています

まあ、所詮自負なんですけどね。

けどこれで、涙が出る感じになつたら良いなと思っています。感動系が書きたい。

ちなみに箒の束対する苦手意識はあえてある妹さんと似させています。

分かりますか？

基本シリアスでしめっぽいです、暖かいハートフルな感じに仕上

げました。

兄弟妹愛きょうつたいに溢れていると読んでいる方も思っていただければ幸いです

次回も等視点なのでアドバイスを頂けたらそれを参考にさせて頂き、頑張ります。

今は九月終るまでに夏休み編を早く終らせないと(汗)長くなつてきて、グタクダ

(汗)

現在、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とても嬉しいです

ご協力お願いしますm(_____)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘or誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十六話 ？（前書き）

第二回目の篝ちゃん視点。

原作の篝よりも乖離しているのはもういいんだ。こつこつ使用ですから（諦め）

でも、やっぱり心理描写が幼くない。大人ばいという解釈でいいのかな？これは

後書きにて、夏祭りでのリクエストを受付っていますので読んでいただき感想と一緒に貰えると嬉しいです。

それではどつぞつ！

第三十六話 ？

箒視点―

「これでよしと。きつくない？」

「大丈夫だよ、兄さん」

「よかった」

道場の方にやってきて、神楽舞の衣装である巫女服を兄さんに着せてもらう。

巫女服は大きくて着るのがとっても大変。小さい私はまだ一人だけは着られない。

だから、兄さんに着せてもらった。兄さんは着せるのが上手、慣れている。

まあ、昔からよく私や姉さんが巫女服を着るのを手伝っていたからそれもあるのかな？

「でも、稽古なんだから態々着なくてもいい様な」

「ノンノンっ 箒ちゃんは分かってないな。夏祭りまで数日しかないだんよ。巫女さんの正装に身を包んで気合入れないとバツチり出来ないよ？それに格好から入ったほうが気合入って、やる気出るでしょう？」

「そうだけど……」

この巫女服は、金の飾りが舞装束という本当の正装の代わりに練習

着みたいなもの。でも、姉さんが言つとおり巫女の正装でもあるから、やる気とか雰囲気は出る。

だから、姉さんの言うことはあつていると言えばあつているし、そうだけど……着ている巫女服は動きづらい。

舞の様な流れるようなゆるやかな決まった動きなら動きやすいけど、激しい動きには動きづらい。

それに着苦しいし、歩き難いから巫女服とか本番の舞装束はあんまり好きじゃない。

「そんな事を言つて、どうせ箒の巫女服姿を見たかっただけなんでしょうが」

「にははは、バレちゃった」

「はあくどうせそんなことだろうと思つた」

呆れて言う兄さんの言葉に私も心の中で同意した。

姉さんのことだ、どうせそんなことだろうと私も思つた。

姉さんは何故か、巫女服姿の私も好きらしい。

そう言えば、姉さんみたいに巫女服が好きなのって何て言うんだつたっけ？

「酷いっつ、私は巫女萌えでもあるんだよっ！」

力んで言う姉さん。

あつそうだ、巫女萌えだ。

姉さんは巫女萌えでもあるらしい。

巫女服は可愛いとは思つけど、姉さんが力んで言つほどのよさが私には今一つ分からない。

やったばり姉さんは変わつてる変、いろいろいろいろな意味で。でも、

そんな事も姉さんのいいところで好きなところ。

「アホ、箒の前で変なこと言うな」

「むっっ、綾だつてたまに言う癖にっ。それとも何、綾は巫女萌えじゃないんだね？なら、箒ちゃんの巫女服姿の画像は挙げない」

「っ……巫女萌えです、だからその画像を下さい」

姉さんの言葉が効いたみたいで一瞬言うのを躊躇したけど、兄さんは真顔で早口だつたけど素直に言う。

兄さんも巫女萌えだつたんだ……上手く説明できないけど、何か意外。兄さん、カッコイイロボットとか特撮ヒーローとかの方が好きだから。

でも、私の巫女服姿の画像が兄さんは欲しいんだ。えへへ、とつても嬉しい。頬が緩むのを感じちゃう。

すると、姉さんは兄さんの言葉を聞いて笑みを浮かべながら、嬉しそうに言った。

「ふふんっ いいよー やっぱり、人間素直が一番だよな」

「ありがとっ。でも、あまり変なこと言っていると縛って屋根から吊るすからね」

「縛るの？なるほど、綾は亀甲プレイがお望みなんだね あ、でもそう思うとなんだか興奮してきたかも 楽しみだな」

「言っておくけど、しないからね。と言うか失言だつた」

体をモジモジとさせて何故か顔を赤くさせてうっとりしている姉さ

んに呆れたように言う兄さん。

好きでしているのは知っているけどやっぱり兄さんは、苦勞しているな。

でも兄さんは、呆れた顔をしていても何処か嬉しそうな楽しそうな顔をされていて、姉さんのこと兄さんがで苦勞するのは全然嫌じゃない、むしろ好きというのがよく分かる。

本当に兄さんは姉さんが大好きで愛していて、楽しそうにしている姉さんもまた兄さんの事が大好きで愛しているんだな。羨ましい、少し妬げちゃうな。

でも、そんな二人を見ているのは好きで楽しくて、つい微笑んでしまう。

「ごめん、箒。アホな兄さん達で」

「ふふっうん、いいよ。夫婦漫才みたいで見てて楽しいから」

「そう言ってくれると助かる。それじゃあ、稽古始めようか」

「うんっ！」

閉じた状態の左右両端対一に小さな鈴がつけられた扇を手に持ち私は道場の中央へと行く。

篠ノ之神社でやる神楽舞はこの扇ともう一つ宝刀とかいう刀を持って舞うんだけど。

私はまだ小さくて宝刀が持てなくて扇だけで舞う。

宝刀がなくても舞の流れは変わらなくて、扇だけでもちゃんと舞えるけど宝刀があった方が綺麗。

大きくなったら、宝刀を持ってちゃんと舞う事が出来たらいいな。

「行きます」

閉じていた扇をゆっくりと開く。

すると、左右両端対一にけられた小さな鈴が、シャン……と綺麗な音を立てる。

練習だけど緊張する。久々の舞の練習だからちゃんと踊れるのか心配というもあるけど。

兄さんと姉さんの前で踊るのが今年初めてだから余計に緊張しちゃう。

ちゃんと踊らないと、間違えないように。兄さん達の前で間違ったり失敗したりして恥ずかしい思いはしたくない。

頑張って持つてみよう。

その決心と時に心臓がバクバク……と緊張で鳴るのが聞こえたけど今は気にしないで踊り始める。

本当なら宝刀を持つはずの手を宝刀の代わりに刀の様な形にする手刀にして、宝刀の代わりにする。

そして扇を右へ左へ揺らしながら、腰を落として一回転でその手刀を宝刀の代わりに放つ。

そして手刀にしている手を扇に乗せて、ゆっくりと空中を切り裂いていく。

そのまま扇と手刀にしている手を離して終了する。

「……い、以上です」

「わあ〜っ！凄いつ！凄いや！素晴らしいよ、篝ちゃんっ！とっても綺麗だったよっ！」

「そうだね。とっても綺麗な舞だったよ、こんなにも綺麗に舞える

なんて箒は凄いね」

「そ、そんな事ないよ……でも、ありがとう」

兄さん達には好評な様でたくさく褒めてもらった。

嬉しい……頑張ったかいがあった。

兄さんと姉さんに褒めてもらえるだけで、嬉しいが胸一杯になってぎゅっとしめつれられる。

兄さん達に褒められるのは何度されても嬉しい。頬が緩む。

舞う前も緊張したけど舞っている間も緊張した。

緊張すぎて間違っただけ失敗するかもしれないと思ったけど、無事ちやんと間違わず舞うことが出来た。

それはよかったけど舞い終わった今でもまだ緊張は残ってて、心臓がバクバク言ってる。体も緊張で出たのか汗でじんわりしている。

でも、ちゃんと踊れた褒められたからよかった。

「本当に凄いよ、さっきの今はムービーでバツチり撮れたから、これはいつくんに見せて箒ちゃんの魅力で悩殺しないとね」

「な、何で撮ってるの！？と言うか、み、見せなくていいからっ！」

「ええ〜！何で？あんなにいいのにつ」

「恥ずかしいからに決まっていますよっ！ほら、姉さん、変なところなかった見て」

「はいはい。分かったよ、お姉ちゃんに任せなさいっ！手取り足取り教えちゃっよ」

私のつい言ってしまったことにニヤニヤされてるのが恥ずかしいというか悔しいけど何とか話を逸らす事が出来た。

一夏にこういう姿を見せるのは恥ずかしい……と言うのもあるけど、こんな格好を見せたらどんな事を言われるか分からなくて怖い。もしも、変な反応だったりすると私は泣いてしまいそう。たがら、見ては欲しいには欲しいけど見せたくはなかった。

何とか話を逸らすと姉さんは私の後ろに立って。

一つ一つの動きを確認しながら、ちよつと直した方がいいところやこうした方がいいところを私の体を動かせながら教えてくれる。

私を気遣ってくれているのか、姉さんの説明はとっても丁寧で分かりやすい。

教えてくれている姉さんは姉さんで楽しんでるけど教えながら私の体で遊んでいて兄さんに少し叱られていた。

そして、数分ほど教えてもらうと一旦休憩を取る事になった。

「お疲れ様。はい」

「ありがとう」

汗拭きタオルと冷たいお茶を貰うと一口冷たいお茶を飲んでからタオルで汗を拭く。

冷たいお茶の冷たさが体一杯に広がってしんやりとして気持ちいい汗を掻いているけど、少しだけ楽になる。

長い間、稽古していたから体中汗でびっしょり。タオルで吹いて少しはマシになるけど、それでも体が汗で気持ち悪い。

巫女服が汗がびったり張り付いていて本当に気持ち悪い。早く脱いでお風呂でお風呂に入りたい。

「暑いね、箒。しんどくない？」

「大丈夫。暑いけど、汗で体が気持ち悪いだけだし。兄さんの方こそ大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」

そうニッコリ優しい笑みを浮かべて兄さんは言うけど、おでこには汗が出ていて少ししんどそう。

兄さんは元々夏と夏の暑さが大嫌いだし、暑いのも苦手だから少ししんどいけど無理をしているんだろうな。

この夏独特の暑さは道場の窓を開けていても変わらない。むしろ、外で鳴いているセミの声で余計に暑く感じてしまう。

でも、あと少しで稽古をしたら終わりにするって言っていたから、舞の一つ一つの動きをバツチリにして明日本番でもいいように頑張ろう。

暑いけど休んでいると兄さんが隣で静かして冷たいお茶を飲んでくれる姉さんに言った。

「そうだ、東。東も一つ舞ってみない？」

「やっぱり舞うの？暑いから嫌なんだけど……綾達は見たいの？」

「出来れば……いや、物凄く見たい」

「うん、私も久しぶりに兄さんの舞見たいっ！」

「まあ仕方ないな、分かった。ここは一つ、天才東さんが舞ってあげるよ」

『仕方ない』なんて姉さんは言っていたけど、私達に言われた事が嬉しかったみたいで。

嬉しそうに言って私が手渡した扇を姉さんは手に取り、楽しそうな軽い足取りで道場の中央に行つて立つ。

姉さんの神楽舞を見るのは、久しぶり。

最後の見たのは一昨年だから、見るのが楽しみ。

姉さんの舞はどんな物になるんだろう。

そんな期待一杯の思いで姉さんを真面真面と見つめる。

「じゃあ、行きますす〜っ」

明るいおどけた感じで言い、笑みを浮かべているけど。

姉さんから伝わってくる雰囲気は真剣そのもの。

ゆっくりと姉さんは舞い始める。

宝刀がないから姉さんも私と同じで、手を刀の形にして手刀にして舞っている。

それでも本当に宝刀を持っている様な雰囲気、私よりも何倍も綺麗な太刀筋。

扇を持つて舞っている姉さんの姿は綺麗で、舞っている姉さんからは何だかキラキラと綺麗な光る輝きが見えた。

その姉さんの舞は見ている人達に行きつく間との与えないもので、全ての舞の動きが綺麗に流れる舞を姉さんは舞っていた。

「以上だよ」

「……」

姉さんの舞は終わったけど、私も兄さんも見惚れていたのか何も言え

ないでいる。

姉さんは私達の様子を変に思ったみたいで、少し不安そうにしている。

「……えーと、どうだった？久しぶり舞ったから変だったかな？」

「……綺麗」

「えっ？」

「綺麗だった」

そう素直な感想がすっと口から零れ出た。

姉さんの舞はとっても綺麗だった。

舞の一つ一つの動きに無駄がなくて、全ての動きが流れる様になっ
ていてとっても綺麗だった。

舞いも綺麗だったけど、一番綺麗だったのは舞っている姉さんだっ
た。

舞を舞っている姉さんは、表情はいつものおどけた明るい表情とは
違い、真剣で厳格さと静寂を兼ね備えており、本当に綺麗だった。

「綺麗だったよ、姉さん。とっても綺麗、凄いよ」

「そ、そうかな？」

「そうだよ。とっても綺麗だった。舞いも舞っている束の姿も」

「えへへー そう言ってくれるなんて嬉しいよ」

「うわあっ!」

「わわっ!」

褒められたのが嬉しかったのか、嬉しそうな表情を浮かべるときゅつと私達に抱きついて抱きしめてきた。

突然の事に私も兄さんもびっくりして倒れそうになったけど、何とか持ち応えて抱きしめ返す。

やっぱり、姉さんも褒められて嬉しいみたい。嬉しそうに頬が姉さんも緩んでいる。

こう見ると自分で思うのも変な気がするけど、私と姉さんはやっぱりよく似た姉妹なんだな。

似てるなんて言われる事がないけど、今の姉さんの嬉しそうな顔を見ていると私と姉さんは似ているんだなとふと思う。

「本当に久しぶり舞いを舞ったから少し緊張したけど、ベツチリ舞うことで二人にもあぁいってもらえたことだしよかった」

久しぶり……しかも、練習なくてあんな凄い舞いを舞うことができなんてやっぱり姉さんは凄い。

凄い……羨ましい、けどやっぱり妬いちゃう。あんな凄い舞いを見せられると余計に。

でも、そんな風に凄いのが私の大好きな姉さんでもある。

姉さんは私が生まれる前から私が物心つくまで、舞の踊り役をやっていたらしい。

その時からこんな感じに凄かったらしいけど、あんまりやる気はなかったみたい。

それをやる気にさせたのはやっぱり兄さん。流石と言うか、やっぱりと言うか。

「うん、凄かったよ」

「にゅっ……あはは、ありがとう」

褒めるように兄さんに頭を撫でられた姉さんは気持ちよさそうにして、嬉しそうに笑っていた。

そう言えばふと、思ったんだけど姉さんはよく笑うようになった。昔はあんまり兄さん以外の前では笑わなかった。いつも笑みだけを浮かべているだけ。

心から笑っている笑顔を見たことはすくなくなったけど、兄さん達が帰ってきてからは、よく姉さん心から笑うようになった。

それが嬉しい。やっぱり、姉さんが笑顔で笑っているのを見ると嬉しくなって、姉さんの嬉しそうなる明るい笑顔が大好きだから。

でも、羨ましいな姉さん。

兄さん撫でてもらっているの。

「ふふんっ、ねえ綾。私だけじゃなく篝ちゃんの頭も撫でてあげてよ。私も撫でるから」

「うん、分かった」

「にゅっ」

姉さんには私の考えなんてお見通しみたいで。

兄さんと一緒に私の頭を撫でてくれる。

気持ちいい……頭を撫でてもらえるのは、やっぱり。

大好きな兄さんと姉さんに撫でてもらっていると、その気持ちよさ

は格別。

三人密着していて暑いけど、それでもそんな事すらどうでもいいぐらい気持ちよくて安心する。稽古の疲れが抜けていく。

やっぱり、三人でこんな風に過ごせたら一番。

でも、それは出来ない。事情というものもあるし、それに兄さん達には兄さん達の都合や生活がある。

それに兄さん達も私と同じ事を思ってくれてるのは本当みたいで我慢してくれている。

そうだから、私も我慢する。いい子にしたら、またいつでも兄さん達と会えるんだから。

だったら、今の私は

「ねえ、兄さん、姉さん」

「何かな？」

「ん？」

「今年の夏祭りを思い出に残る楽しい最高のものにしようね。その為に私はまず神楽舞いを頑張るよっ！」

今は自分でするべき事を、神楽舞いを頑張って姉さんの様な綺麗で完璧なものにする為に頑張ろう。

兄さんと姉さんとまたお別れになるのは悲しいし、辛いけど。

頑張ったら、きっと今年の夏祭りは思い出に残る楽しい最高のものになる。

そうしたら 兄さんの口癖みたいな『刹那』、一瞬の様な楽しい

時間が、至福の刹那がいつまでも楽しいまま永遠だったと思えるよ
うになるから。

「うん、頑張れ、篝ちゃん。夏祭りを今年一番の最高の思い出にし
よ」

「そっだね。忘れる事のない、永遠の刹那だと思えるぐらい、楽し
いものにしよう」

「うんっ！絶対だよっ！だから、私も楽しくなるように兄さん達に
最高の神楽舞いを見せてあげるっ！」

…

第三十六話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十六話 ？

前書きにも書きましたけど、やっぱり幼いのに心理描写が幼くない

（汗）

大人っぽいという設定には苦肉の策でしていますが、

果たして本当にこれは大人っぽいという解釈でいいのだろうか？

もう少し心理描写で、書き方を幼くするべきかな？（やり方は分かりませんが。）

今回は稽古のお話でした。相変わらずグタクダ（汗）

箒ちゃんの思いや考えこの夏にかける重いが読んでいる方に伝わると嬉しいです。

ちなみに稽古の描写とかまんま原作を参考にさせていただきました。ちゃんと原作設定も私なりにいかいしてみましたが（箒が幼い時は扇だけで舞ったとか）

もう少し行動描写とかに力を入れて書いた方がいいかな？

と言うか、全体的に描写が薄っぺらい気がしなくもないような……

そして、前書きで書いたリクエスト受付ですが。

束さん、箒ちゃん、千冬さん達の浴衣の色や、やって欲しい事、シチュエーションリクエスト等です。

と言ってもほぼ参考にさせていたたく程度になると思いますが、ご協力していただけると嬉しいですよ。

ご協力していただける際はリクエストは感想と一緒に書き込んで下さい。

たくさんのご協力待っています。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり
週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっ
ても嬉しいです

ご協力お願いしますm(_____)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十六話 ？

東視点

夏祭りの準備を始めようかとする暑い午後の日に約束通り、父が帰ってきた。

「今戻った」

「お帰りなさい、お父さん」

「ああ、ただいま」

篝ちゃんが父を出迎えると柔らかい笑みを浮かべ、言葉を返してくれる。

父が帰ってくる前に一本電話があった為、何時に帰ってくるのか分かっており、こうして出迎えることが出来る。

父は篝ちゃんとの挨拶を済ませると今度は私達のほうを見る。そうすると自然と顔と顔が会う。

いくら父が感情を抑えて大人な対応してくれているとは言え、父とこうして会うのはやっぱり辛い。

心なしか不安な気持ちが何処かにある様な感じがする

「お帰りなさい」

「……………おかえり……………なさい」

「ああ、ただいま。今まで篝を面倒を見てくれてありがとう」

「いえ」

「……」

何とか私も綾に続いてお帰りの言葉を言う事ができた。

だけど、返ってきた父の言葉は冷たく閑白なもので、定型文の様な言葉だった。

でも、仕方ないし、これでいい。私もそっけない冷たい感じだったし、綾も綾で淡白で短いものだった。

そして、私達との挨拶も済みませると荷物を持ち篝ちゃんと並んで一緒にリビングの方に行く。

その後ろを私と綾は、静かについて行く。

リビングに着くとテーブルに着き、綾が四人分入れてくれた冷たいお茶を傍らにして、父と篝ちゃんは何やら話を始めている。

「お父さん……お母さんの様子はどうだったの？」

「元気だったよ、この調子なら予定よりも早く夏祭り終わった後ぐらいに帰ってこれる」

「そうなんだ、よかった」

嬉しそうにしている篝ちゃん。

やっぱり、母が帰ってくるのは篝ちゃんしてみたら嬉しいことなんだろう。

予定よりも早く帰ってこれるみたいだし、体調もよくなって様で何よりだという感じかな。

それに夏祭りの後に帰ってるのなら、私達も学園の方に帰っているから顔を会わせる事はない。

もしも会ってしまったって、また体調を崩されたら篝ちゃんに申し訳が立たない。

だから、会わない必要はない。どうせ、何か本当に折り入ったことがない限り会うこともないだろうし。

その後も篝ちゃんと父は、近況報告みたいな会話を久しぶりにしていて。

綾は静かに聴きながらも場に応じた反応をしていたけど。

私は静かに聞きつつ、ぼーっとして時間を潰していた。

私も輪に入れば、歩み寄れば本当はいいんだろうけど、そんな気が起きない。

それに無理に歩み寄ったりして、お互いにいい距離感としてあるだろう溝が変に拗れたりするのは嫌だ。だから、このままでいい。

いつかは歩み寄らないといけないのかもしれないけど、今は。でも自然にそうなったのなら、私もそうする。

そう思いながら静かに聞いていると

「そう言えば、綾君^{君達}達は夏祭りには参加するんだろっ？」

「ええ、まあ。もしかして……迷惑ですか？」

「いや、そんな事はない。祭りは自由なものだから自由に参加してくればいい。ただ、神主として目立つような行動は控えてほしいと言いたい」

「はい、それは分かっています」

「なら、いい。それで夏祭りには参加するのは分かったのだが、これから綾君達はどうするつもりなんだ？」

「どうするつもりとは、これから夏祭りまで泊まる場所の事ですか？それなら連絡はまだですが、水城さんの所に泊まらせてもらおうかと」

「そうか……連絡はまだか」

何やら深く考えはじめた父。

何が言いたいのか、さっぱり分からない。

さっきまでいろいろと聞いてきていたのが関係あるのかな？

すると父は、一瞬チラッと篝ちゃんを見て言った。

「連絡を入れていないのなら、よかつたら……夏祭りが終わるまで泊まってはくれないだろうか？」

「えっ？」

父の言葉に声を揃えて驚く私と綾。

驚いているのは私達だけじゃなくて、話を聞いていた篝ちゃんも驚いている。

歩み寄ってきてるのは父の方からだった。

驚いた反面、納得がいった。さっきまであれこれ聞いていたのはこの為だったのか。

それに言う前、考えている時に父は篝ちゃんを一瞬チラッとだけでも見て言った。

ということとは、厳格であったとしてもやっぱり父は……お父さんは、
箒ちゃんの事を思つてこんな風に言つてくれたんだろう。
譲れない思いを少しだけでも譲るようにして。

でも、そのちよつとしたお父さんの心遣いが嬉しく思つたりする。
私の事が大嫌いで憎くても何でもいい。でも、箒ちゃんの事は人一倍の大切に思つて、愛してくれている。
それが分かる事が出来てとっても嬉しい。

お父さんの方から歩み寄つてくれた。だったら、私も意固地にならずゆつくりでも歩み寄らないと。

私の私達の返す言葉は、既に決まっているのだから。

「はい、篠ノ之のお父さんがよろしいのならぜひ。束もいいよね？」

「うん……お父……さんがいいのなら、まだ夏祭りまで泊まりたい」

「そうか……そう言つてくれると嬉しい」

そう言うお父さんは何処かほんの少しだ本物の笑みを浮かべている様だった。

・
・
・
篠ノ之家に泊まるのが今日までから夏祭り終了まで伸びた後。

久しぶりに父と一緒に夜ご飯を食べた。

相変わらず食べていても私と父は、会話は一切ないどころか、顔をちゃんと合わせる事すらなかった。

その間は箒ちゃんが父にこの夏休みの事を話して、それに綾が場に

応じた反応をして、私は昔の様に会話を聞いて静かに黙々と食べていた。
父とは何の関わりのない夕食時ではあるけど、それでも久しぶりに父と一緒に悪くはなかった。

それに

「今日の夕食は美味しいな」

綾が主に作り私も少しは作ったのを父は知ってから知らずか、そんなことをそっけないながらも言ってくれた。
そう言われたのがちょっぴり、少しだけ嬉しかった。
たまにならこういうのも悪くはないな。

その後は特にこれと言ったことなく。
今日は事情が事情だけに綾とは入らず篝ちゃんと二人でお風呂に入り、適当に時間を過ごす。今日は少し早めの十時に三人揃って就寝した。
のだけど

「う、うゆ、あれ……？綾がいない」

違和感を覚え、ふと私は目が覚めた。
外はまだ暗く、部屋も暗い。夜か夜中なの分かる。
私は、寝ぼけ眼でその違和感を辿ると私と篝ちゃんの間で寝ている綾の姿はなく、ぼつりと綾のスペースが寂しくあるだけ。
ふと時間を見ると、十一時五十分頃。後約十分ほどで日付が変わる時間。

いない、何処に行ったんだろう？ 生憎と見当が付かない。

篝ちゃんは眠っているけど、綾がないのを寝ていても気づいているのか、不安そうな顔を少ししている。

私も綾がいなくて不安で、篝ちゃんも不安そうだし。

よし、ここは探しに行こう。そう思い私は篝ちゃんにタオルケットをかけ直し、頭を撫でると寝室である客室を部屋を出て当てもなく綾を探し始めた。

意識も体もまだ、半分寝ていてフラフラとしながら当てもなく綾を探す。

今まで綾と一緒に寝て傍にいなかったことが少なくて傍に居なかったとしても直ぐに戻ってきた。

でも、今回はそうはいかず、様子もいつもと違うように感じた。

だから、不安に思い、不安に思えば思うほど不安が心なしかに待っていて気がする。

そんな思いの中、歩いていると居間・リビングの近くに来た。

リビングには明かりがついていて、中からは話声が聞こえる。綾と

……父の声だ。

綾がいることが分かると、私はあえて中には入らず、居間・リビングの扉である障子の近くの壁にもたれるように腰を降る床に音をたてないよう座る。

そして、居間・リビングの方へと耳を澄ます。

「あの……でも、驚きました」

「何がだ？」

「篠ノ之の家に夏祭りが終るまで泊めてもらえるなんて」

「ああそのことか」

そう小さく呟く父。

それは私も綾と同じで驚いた。

父があんなことを言うなんて思ってもいなかったから、驚きは大きい。

でも、ああ言ってくれたのは箒ちゃんを思っていることなんだということは私も綾も分かっている。

だけど、それを差し引いても父があんなことを言うなんて驚きだった。私達に対して、譲れるものがあるのだろうか。

「私も最初はそんなことは言うつもりではなかった。だがな、あんなにも幸せそうな箒を見てみると私の思いだけで君達と箒を引き離すのはよいのだろうかと思ってな」

「はい」

「だから、箒と君達を夏祭りまでは引き離すのはやめて、ああ言っただんだ」

やっぱり、そういうことだった。

ちゃんとやっぱり、父と父さんは箒ちゃんの事を思っ、ああ言ってくれんだ。

やっぱり、嬉しいな。箒ちゃんだけでも、大切に思ってくれていて。

「だけど、あんなにも幸せそうな箒を見て嬉しい反面……悔しかった、というのもある」

「悔しかった……？」

「箒は君達が出ていき、家族……というものが崩れてしまつてから、心からは笑わなくなつた。笑つていても何処かいつも寂しそうに私や母さんに心配かけまいと無理して笑つてばかりだつたからな」

胸が締め付けられる感覚に襲われる。

箒ちゃんが心からは笑わなくなつたのは、私のせいだな。

今更、後悔しても遅いし、後悔するなんて卑怯だとは分かつているけど。

やっぱり、ズツシリとしたものが心に重たくのしかかる感覚がする。

箒ちゃんが心からは笑わなくなつたのは、やっぱり私のせい。

本当は笑えないはずなのに箒ちゃんのことだから、父や母に気を使つて心配させないように笑っているんだろ。

だから、寂しそうに笑っているように見えるんだろう。今更過ぎるけど、こんな風に箒ちゃんのことを知ると、胸が締め付けられる。

それにいつくんから聞いたけど、箒ちゃんは今までにましてイジメられる様になつていらい。

やっぱりそれは、世界の厄災である私の妹だから。軽蔑の目で見て、それがイジメという行動となり実行される。

人は認められないもの、認めたくないものを、恐れ嫌悪憎悪し忌避し、最後には排除しようする。それが世界のおしかな絶対法則。それも壊したくて私はあやつてしまった。

そんなつらい、生き辛い世界や世間の中で箒ちゃんは生きている。笑つて気丈に振舞いながら、強いようとしながら。本当に強い子だ。

私にも何か出来ればいいんだけど、私が手を出してしまえば帰つて箒ちゃんの状態を悪化させてしまう。だから、私も何も出来ない。

無力だ。ISなんてものを作つたところで、ただの子供である私に

は何も出来ない、何もしてあげれない。

大切な妹にすら何もしてあげることができない。無力で哀れななさない女ということだ、私は。

そう思っているとは何か情けなくなつて、ぎゅっと両膝を抱え込んで俯く。

すると

「悔しいがそれでも嬉しかったよ。あんなにも幸せそうな箒を見て心から幸せそうに嬉しそうに笑っている箒の笑みを見れて。やっぱり、綾君や東の存在は大きい。親である私達よりも」

「……そんなことは」

「別にそんな謙遜しなくてもいい、事実なのだから。君達は箒の心のよりどころだ。それについては君達に箒を任せてよかったと思う」

そう言われるとほんの少しだけ沈んでいた気持ちが楽になる。

私達の私の存在で箒ちゃんにつらい目に合わせているのに、それでも箒ちゃんが心から幸せそうに嬉しそうに笑っているのなら、こんなにも嬉しいことはない。

私達の箒ちゃんのおかげもあつて心から笑えているのだから。

こんな私でも箒ちゃんの心のよりどころに本当になつているのなら、嬉しい限り。

「それに私は箒の心からの笑みを見て、気づかされた事があるんだ」

「気づかされた事？」

「私は、子供である君達に甘えてしまった……んだと」

後悔の念を込めるように父は言う。

甘えてしまった？ 父が？

そんなことをされた記憶や、心辺りが無いから。

何の事だか、何を刺してのことだ変わらないでいると父は言葉を告げる。

「君達がISが発表されてから一度戻ってきた日のことを覚えているか？」

「覚えています」

私も覚えている。忘れるわけがない。

あの日で私達と両親の関係性は大きく一気に変わってしまった。ある意味、分岐点の一つでもある日。

「あの日、私達は感情のままに言い……そして、その感情を抑えられない私は君を殴ってしまった。何を言われても泣きもせず動じなかった君達に言ってはならんことを沢山言い、私達はまだ子供である君達に甘えてしまった」

「……」

「今思うと私達の方こそ子供だった。今まで君に束を任せ……いいや、押し付けたただだったのにも関わらず私達は綾君を悪者にして束の親で居ようとした。親としても大人としても最低だ」

「……」

「本当なら束の思いや考えに気づいてあげべきだったのかも
ない。もつと私達は束の本当の親らしくいればよかった。束が私達
に関心薄い様以上に私達は関心がなかった。怖かったんだ、あの子
を見るのが」

「……」

「なのに、あの時だけは親ぶっていた。本当に子供で、親としても
大人としても最低だ」

父は自傷気味に悲観するように言った。

まるで、自分の過ちに今更気づいて、後悔しているような。
それでいて、今更後悔して悔やんでいる自分を嘲笑う様な声だった。

こんな風に父は思っていたのか。

父も父で思うところがあつたみたい。

厳格で厳しい父は、自分にも厳格で厳しい昔のままだった。

今更だったとしても、こういう風に客観的に見える父はやっぱり凄
いと思う。

こんな思いもあるから、今日のことを提案してくれたのだろう。

父の言葉を聞いていると自分が今もどれだけ子供なのか改めて痛感
させられる。

「だが、君達がしたことを許すことも功績だけじゃなく君達を認め
ることも今更在り方《生き方》変えることなんて出来ない。変える
には私はもう歳を取りすぎた。それにお互い謝ってすむことでもな
い」

「……はい」

少しの間を経て返事をする綾。

今更、謝られても困るといふ感じの綾の返事だった。

それは私も同じ、謝られたって困る。いや、謝られたって許せない。綾に対して言われた言葉も綾があの日殴られた事が、どんな理由があつたにしろ許せない。

両親が私達を許せず、認められないのと同じ様に。

「私一人だけが変わるわけにはいかない。妻は今も苦しんでいる。そんな妻を一人残して私一人だけが変わるほど私は出来た人間ではない。妻を苦しめた君達を許す事は出来ない」

父は私の思いと同じような事を言う。

父も私もお互い許せない事がある。

お互いどうしたって譲れないものがある。でも、今はこれはこれでいい。

今更、全てを変えることなんて無理。

それでも

「それでも私はまだ君を綾君の事を信用している。だから、こう言つてはまた聞こえのいい、無責任なことを言ってしまうことになるかもしれないが」

「はい」

「娘を、束を末永くよろしく頼む。私達が幸せに出来なかった愛せなかつた分、君が束を愛してやってほしい」

「（……お父さん）」

父が、お父さんがそんな言葉を切実そうな事を言ってくれた。

父が前フリしたように一見聞こえてしまっけど。

それでも私はお父さんの言葉が、父がそう言ってくれた事が嬉しい。こんなことを言われるなんて、思ってもみなかった。

こういつちやなんだけど、てっきり私は父には大して思われていないと思っていた。

だから、思ってもみなかったことだけに嬉しい気持ちで胸がぎゅっとなるのが分かる。

そして、綾の返事は

「もちろん、そのつもりです。一生を尽くして束を必ず幸せにします。だから、頭を上げて下さい」

「ああ。やっぱり、綾君は昔から変わらないな。綾君なら、そう言うてくれると分かっていた。本当に束を頼むよ」

「はい、分かっています」

綾の返事は私にとっても嬉しいもので。

父のにとってもうれしいものの様で、今日一番嬉しそうな声だった。

今更、全てを変えることなんて無理。

それでも ほんの少しでいい。

手をのばしあえたら、ほんの少しでも変われるのかもしれない。

今、この時の様に。

少しだけお父さんとの溝がほんの少しでも縮まった気がした。

・
・
・
お父さんの驚きの言葉と綾の嬉しい返事を聞いた後。

綾が戻るのが分かると、一足先に部屋に戻って、布団の中に居た。少しだけ目を開けながら、綾の帰りを待っているとするうつつと襖が開き、

綾が部屋に戻ってきて、私と箒ちゃんの間の布団に入ってくる。すると、私は思い切って綾の名前を呼んでみる事にした。

「……綾」

「まだ、起きていたんだ」

「またって事は、私が聞いていたの気づいていたの？」

「まあ、ね。束が今の近くに来たときから分かっていた」

やっぱり、綾には気づかれていた。

しかも、早くに。私なりに足音を立てないようにして、気配も消してみたんだけどな。

でも、そんなに早くから気づいたって事は、いることが分かった上であんな返事をしてくれただってことだよな。

恥ずかしい事を堂々と言えたりと、相変わらず綾は変なところでも男らしいな。

「聞いていたって事は……やっぱり、あの言葉も聞いていたんだよね？」

「うん、もちろん。嬉しかったよ、ああ言ってくれて」

「あっはは、恥ずかしいな。でも、そう言ってくれて嬉しいよ」

「私も綾を一生尽くして幸せにするから、幸せになるうね」

「うん、そうだね」

何処か照れくさそうに嬉しそうに小さな声で返事をしてくれる綾。

お父さんの言葉が、ああ言ってくれたことが嬉しかったけど。

綾の言葉も、ああ言ってくれたことも嬉しくって、嬉しさで胸がぎゅゅとなった。

絶対に私達は幸せになる。

何があっても、何をしても。

そうしながら小さな幸せを噛み締めていると……

「ん、んんっ……兄さん……」

そう可愛らしい寝息を漏らしながら篝ちゃんは寝返りをうつて、綾の腕にしがみつくように密着して抱きついてきていた。

そんな篝ちゃんの様子を暗がりに見て、私と綾は微笑ましく小さな笑みを零していた。

「ねえ、綾」

「ん？」

「前に篝ちゃんも言っていたけど、今年の夏祭りを思い出に残る楽

しい最高のものにしようね、綾」

「だね、色あせることのない楽しい思い出にしよう。陽だまりの様なものに」

そう言う静かに言う。

そうだね、今年の夏祭りを思い出に残る楽しい最高のものに、戻りたい陽だまりにしよう。

私達がこれから進むのは紛れのない修羅道。もしかすると思う進んでいるのかもしれない。

だから、全身で修羅道を駆け抜け、その修羅道の果てに戻るべき陽だまりの一つとしよう。

そうしたら 綾の口癖みたいな『刹那』、一瞬の様な楽しい時間が、至福の刹那がいつまでも楽しいまま永遠だったといつても繰り返していたいと思えるようになるから。
なるからそこ、今年の夏祭りを帰りたい陽だまりとしよう。
永遠の様な刹那

…

第三十六話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第三十六話 ?

今回は活動報告で予告した通り、父と綾(束)の話でした。

本当なら、?で三十六話は終り、そのまま夏祭り本番へと進む予定でしたが。

「あつ、夏祭り父親帰ってくるの忘れてたわ。少しぐらいからめないと」

という事でこの話を書きました。書いたのはいいけど、やはりグダクダ(汗)

オチ、終わり方もいつもとほぼ同じという……もう、ダメだ。

描写も使い回しがどうしても多くなるし。

この話、正直必要だったのかな?誰か教えて。

一言言くと、今回で綾君(束さん)と父が和解した様に見えますが違います。

ただ、関係がほんの少しだけ回復だけしたので完全な和解はしません。

やはり、両親揃ってじゃないと……母親が鬼門ですし。

ただやっぱり、認めたくはないけども父は二人の事を認めています。何だかんだでお約束のやり取りをしましたからwww

今回もまだリクエストを絶賛受付中です。

浴衣のデザインは頂いたリクエスト通りにはぼいく予定です。

色がまだ決まっています。他のキャラもだけど特に束さん、ピンク色でいいかな?

シチュエーションリクエストも絶賛受付中です。

と言ってもほぼ参考にさせていただく程度になると思いますが、ご協力していただけると嬉しいです。

ご協力していただける際はリクエストは感想と一緒に書き込んで下さい。

たくさんのご協力待っています。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とても嬉しいです

ご協力お願いしますm(_____)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十七話 ？

東視点

たくさんの人々が篠ノ之神社周辺に集まり賑わう、夕暮れ過ぎ。夏休みの定番にしてメイン&一大ビッグイベントである、篠ノ之神社で行われる夏祭りがついにやってきた。今、私達は境内の控え室みたいなどころにいるんだけど

「そろそろだね、神楽舞い」

「う、うんっ！」

目の前にいる、綺麗に薄化粧をして金の飾りを装った舞装束に身を包んだ篝ちゃんは、物凄く緊張した様子。

「やっぱり、緊張している？」

「う、うんっ！」

やっぱり、物凄く緊張している様子の篝ちゃん。緊張するのも仕方ないよね。こんなにも沢山の人がいて、こんなにも沢山の人に見られるのかもしれないんだから。でも、凄い緊張のしよう。緊張で体が硬くなっていて、両肩は緊張からなのか少し震えている。

「緊張するのは分かるけど、大丈夫だよ。沢山、稽古して完璧にしたんだからね」

「うんっ！」

緊張しながらも元気に篝ちゃんは言う。

篝ちゃんは今日の本番までたくさん稽古をしていた。

今までの遅れを取り戻すように、私達に最高の神楽舞いを見せてくれる為に。

それに父が帰ってきたからは、更に稽古に力を入れて完璧なものとした。

沢山頑張ったんだから、私はそんなに緊張しなくても、きっと篝ちゃんなら完璧で最高の神楽舞いを披露してくる。

「私達もたくさん応援するから頑張っ、篝ちゃん」

「そうだね。たくさん応援するから頑張っ、篝」

「うん、ありがとう兄さん。そうだ……」

「あ……」

ぎゅっと私と綾は篝ちゃんに抱きつかれた。

抱きついてきている篝ちゃんは、まるで元気を充電しているよう。

入っていた肩の力も抜け緊張が解けていて、篝ちゃんは安心している様子。

そうだよね、やっぱりこんな大舞台に立つといのは物凄く緊張するもの。

ただでさえ幼い篝ちゃんが大役のプレッシャーを感じてないはずがないよ。

すると、私と綾は腕を篝ちゃんの背中に回してぎゅっと優しく力を

込めて抱きしめる。

こんな私達でも少しでも篝ちゃんの力に慣れれば、心に支えになればいい。

最後にぎゅっともう一度お互いに力を込めて抱きしめあつと、篝はちよこんと私達の体から離れた。

「うん、ありがとう、兄さん、姉さん。今ので気合充電満タンにしたから大丈夫。約束通り兄さん達に最高の神楽舞を見せてあげるっ！」

「うんっ 見るよ、絶対に」

「楽しみにしているね」

篝ちゃんから少しずつ緊張がなくなっている様で、自信に満ち溢れた満面の笑みを浮かべている。

よかった、どうやら少しは緊張はなくなっみたい。

これで篝ちゃんの最高の神楽舞が見れる。今からとってもとっても楽しみ。

すると、篝ちゃんを呼びに来たのか父があらわれた。

「篝、そろそろ」

「はい、分かった。それじゃあ、行ってきますっ！」

「うん、いってらっしゃい。ファイトっ！」

「ああ、いってらっしゃい。頑張って」

背を向けながら振り向き様に言う篤ちゃんに私と綾はそう声をかける。

父の後に付いて部屋を出て行く篤ちゃんの背中は何だか頼もしく見えた。

篤ちゃんが部屋を出て行った後、私達も部屋を境内を後にしようとする。

目的は、ちーちゃんといっくん達との待ち合わせに向う為。

階段の下に広がる縁日通りをまだ人が少ない境内から見下ろす。物凄い人の多さだ。

「わあ〜多いね」

「祭りだからね。でも、こんなに多いと篤が緊張するのもよく分かる」

「まったくだね」

そんな当たり障りのない会話をする。

興味深そうに縁日の通りを見ろしている綾に聞いてみる事にする。

浴衣の感想を

「どうかな?」

浴衣を崩さないようにして袖を摘んで、なるべく上目使いでありながらも見えやすいように出来栄えを窺う。

今日、私が着ている浴衣は薄いピンクを基調とした少し白が入っている浴衣。

髪はアップでまとめ上げている。

ちなみにこの浴衣は奈々さんが用意してくれて、浴衣を着付けてくれて、髪型をセットしてくれたのは奈々さん。

父への挨拶も兼ねて浴衣を届けに奈々さんが来てくれて時にしてもらった。

少しだけ薄化粧もしていて、自分の今の姿を鏡で見たけど、思わずいつもと別人な自分に見惚れてしまった。

「うん、浴衣よく似合っている。とっても綺麗だ、束」

「っ！あ、ありがとう」

優しいな笑みを浮かべて言う綾の言葉を聞いて、私は頬が緩むのを感じる。

同時に頬が赤くなって、心臓がドキドキと高鳴っている。やっぱり、大好きな愛しの人に褒められるというのは嬉しい。

着た時に綾から一度感想は聞いていているけど、やっぱり何度聞いて嬉しい。

私は薄っすらでも赤くなった顔や頬を見られたくなかったので少し伏せ目がちに綾を見た。

「綾も浴衣よく似合っている。とってもカッコイイよ、綾」

「そ、そう？ありがとう」

何処か照れた様子で嬉しそうに優しいな笑みを浮かべて言う綾。

綾も男性用の浴衣を着ている。

綾が着ている浴衣は、紺色の浴衣。

私と綾の浴衣は、夫婦浴衣とかいうタイプのものでデザインはほぼ一緒。
いつも洋服……と言うよりは、学園の制服が多いけど、和服姿の綾もいい。
カッコイイし、凛々しく見える。こんなところでもまた惚れ直す。
綾の黒髪と浴衣の紺色が上手い具合に引き立てあい、浴衣の姿の綾は本当にカッコイイ。

「……それじゃあ、行こうか」

「……う、うん」

普段目にしない相手の和服、浴衣姿に少しだけ見惚れて沈黙が出来るようになったときに綾がそう言ってくれた。

そうだね、そろそろ待ち合わせの場所にいかないよ。

ちーちゃん達を待たせるのも悪いし、ちーちゃんを変に待たせると今以上に怪しまれるかもしれない。

だから、約束の時間には間に合うけど、急ぎ目で向かわないと。

「手、でも繋ごうか」

「えっ？へっ？いいの……？」

「もちろん。人多いからはぐれたりしたら探すの、一苦労だし、こういう時にはこういうものでしょう。と言っても、待ち合わせ場所に着くまでけどね。それでいいのなら……」

そう言って綾は手をすつと自然な感じで差し伸べてくれる。

綾って受け身が多いくせに、こんな時私よりも本当に勇気があると

「いつか、怖いもの知らずというか。」

「でも、こういうイベントごとで手を繋ぐのはお約束中のお約束。」

「繋ごうかな？ 時間制限は短いながらもあるけど、私も綾と繋ぎたいし。」

「ふふっ、それでいいよ。少しの間、エスコートお願いしますね、あなた」

「私が差し伸べられた手を掴んで、そう言つと綾は微笑んで『分かった』と言つ様に手を引いて歩き出す。」

「私も横に並んで歩き出す。」

「手は恋人繋ぎで繋いでいて、やっぱり何度繋いでも繋いだ瞬間ドキッと小さくした。」

「境内から階段を下りて縁日通りを私達は目的地に向けて歩き出す。この地域一番の夏祭りだけに人はわりと多い。気を抜くと逸れそうになる。」

「だけど、綾は逸れにないようにしっかりと手を握ってくれて、しっかりとエスコートしてくれる。」

「あっ、ちーちゃん達だ」

「来てるね」

「遠目でちーちゃんといっくんが待ち合わせをした場所にいるのを確認した。」

「すると、どちらともなく二人同時に繋いだ手を離した。」

「パツと離れたのではなく、指の一つ一つがそつと雫が零れ落ちるように離れた。」

「お待たせ」

「い、いや、ま、待つてないぞ」

「あつ……ちーちゃん、可愛い」

ぽつりとそんな漏らすと元々頬が赤く染まっていたちーちゃんの頬は更に赤く染まる。

ちーちゃんは、ちーちゃんの雰囲気とあつた黒を基調とした浴衣を着ている。

髪はアップでまとめ上げていた、綺麗なうなじを作っている。

それだけなら綺麗という表現が一番合うんだけど、ちーちゃんの髪には珍しく赤い花の髪飾りが付いている。

その赤い髪飾りが可愛さを作っていて浴衣の綺麗さと相まって、綺麗さが可愛さを引き立たせ、綺麗ながらも可愛く見える。

珍しいな、ちーちゃんが髪飾りを付けるなんて。

装飾品とか細々した嫌いだったはずなのに。

それに薄化粧も可愛い感じにしている、気合が入っている事が瞬間的に分かる。

すると、黒い子供用の浴衣を着たいつくんが言う。

「可愛いでしょう、俺と咲夜さんが浴衣を選んで、咲夜さんが着付けて仕立ててくれたんだ。本当はもっとも可愛い浴衣にしようと思っただけど、千冬姉が嫌がって」

「ああ、なるほど。それで髪飾りということか」

納得したした様に呟く綾。

咲夜さんなら確かにここまでちーちゃんを仕立てる事が出来る。

正直、やり過ぎな気もする。同姓にしてライバルである私から見てもちーちゃんは、綺麗でありながらとつても可愛い。ううゝ負けちゃう。

というか、水城家は本当に祭りごとを裏から盛り上げる事が好きだな。裏方として頑張りすぎだと思う。

「そつだよ、綾さん。ほら、千冬姉、後ろにいないで前出てきて綾さんに見てもらつてよ」

「お、おいっ！バカ者っ！お、押すなっ！」

ちーちゃんが珍しく赤くなって照れて恥ずかしがっているのが珍しいのか。

いっくんは、楽しそうな満面の笑みを浮かべて、恥ずかしがるちーちゃんの背中を押して、私達の前にちーちゃんを出した。

「っゝっゝっ！」

「……」

「な、何だっ！じつと見てっ！変なら、可愛くないのならはつきり言ってくれっ！こんな辱め……っ！」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にして、恨めしそうに言うちーちゃん。

そんなちーちゃんを綾は真面真面と見ている。

あまりにも真面真面と綾が見すぎるものだから、ちーちゃんは顔を更に真っ赤にして少し硬直している。

「あ、いや……そんな事はないよ。綺麗だし、可愛いと思うよ。浴衣もその髪飾りも似合ってる」

「う、嘘はいいっ……!」

「嘘なんかじゃないよ、本当のこと。いいと思うよ、千冬の浴衣姿」

「っ!?!うっ!あ、ありがとう……っ」

綾がちーちゃんと浴衣姿を褒めると恥ずかしく肩を縮めているけど、嬉しそうにしている。

やっぱり、私って嫉妬深いんだな。

ちよっとだけ、むっとしてしまう。今、この瞬間だけは綾はちーちゃんだけ見ているから。

それでもちーちゃんの可愛い姿を見れたことだし、嬉しそうにしていることだし、これこれでいいのかな？ やっぱり、むっとするけど。

それにちーちゃんがここまでしたのは、やっぱり綾の為。

ちーちゃんは綾のことが一人の異性の男性として好きだから。

それに綾は気づいてない……と言うより、今でもああしているつもりだから。

だけど夏祭りは、告白とかのイベントごとの発生率が高いから、ちーちゃんは何かするかもしれない、少し注意しておかないと。

「よかったね、千冬姉。綾さんに可愛いって褒めてもらって。俺も千冬姉の浴衣姿、可愛いと思うよ」

「ああ、ありがとう。だが、あまり可愛い可愛い言わないでくれ」

「ええ〜何でだよびっくり!? 千冬姉可愛いのにっ! ね、綾さん」

「そうだね。言われ慣れてないから照れてるだけなんだよ」

「そっか〜! 可愛いね、千冬姉」

「だから、言うなと言っているっ! ばかっ……ほら、そろそろ神楽舞いの時間だ。行くぞっ」

楽しそうに微笑んでいるいつくんと綾に言われると。

ちーちゃんは恥ずかしくてそっぽを向いて、歩き出す。

それを私は微笑ましく思い、私達も歩き出す。

そろそろ、神楽舞の時間だ。

バツチリ箒ちゃんと勇士を舞う姿をビデオに納めないで。

思い出作りも大切だけど、思い出をちゃんと目に見える形で残さないで。

「ここも多いな」

「もう直ぐ神楽舞だからね」

階段を登ると境内に私達はやってきた。

境内にはたくさんの人が詰め掛けてきて、ここに集まっている人達は多分全員、箒ちゃんの神楽舞いを見に来たんだろう。

物凄く期待されちゃってるな、篠ノ之の巫女は箒ちゃんは。

でも、それもそっか。祭り自体はもう始まって沢山の出店もやっているけど、祭りの本当の始まりは、神楽舞いをやってからだ。

だから、今たくさんの人が境内に詰め掛けて、篝ちゃんの神楽舞いを楽しみにしてくれているんだろう。何か嬉しい。

「ここで見るのも何だかとっても久しぶりに気がする」

「そうだね」

私の言葉に綾が頷いてくれる。

私達がやってきたのは、特等席みたいなに秘密の場所。

私達しか知らない場所で、人ごみに混じって本殿の前で見ると、ここからの方が見えやすく、人も少ないから見るのに最適な場所。昔からこの場所で毎年の夏祭りに母の神楽舞いを見ていたのが頭の片隅に記憶としてある。遠い忘却してしまいそうな陽だまりだった記憶だ。

篝ちゃんは、もちろんこの場所を知っていて、ここで見る事を予め伝えてくれるから、直ぐ見つけてくれるだろう。

「始まるぞ」

ちーちゃんその言葉で私達は舞の舞台である本殿の方を向き、ビデオを向け撮り始める。

篝ちゃんがゆつくりと本殿の中から出てくる。

すると、場は歓声にも似た静かな盛り上がりにも包まれ、ざわつく。

篝ちゃんの表情は、真剣そのものでもあるけど、やっぱり緊張しているのか何処か固い。

頑張れ、篝ちゃんっ！

と思うと、心で強く声援を送るとビデオを撮る力に熱が籠る。

そして、太鼓と笛の和風の曲が流れると同時に箒ちゃんが舞い始める。

綺麗……とっても綺麗、と私は見て素直に感じた。

箒ちゃんが舞う舞いも、舞っている箒ちゃんの姿も綺麗。

見惚れているのは私だけじゃなくて、隣いる綾やちーちゃん、いっくんも箒ちゃんの舞と舞っている箒ちゃんの姿に見惚れている。

それどころか、少しざわついてはいるけど境内で見ている殆どの人を魅力して、見惚れさせている。

箒ちゃんの舞いは完璧なものとなっている。

これだけ完璧だと、箒ちゃんが頑張って今日まで練習した成果が実っていて、自分の事のようにうれいと感じる。

凄いな、箒ちゃんは。あんなに幼いのにしっかりと綺麗に舞っている。箒ちゃんが私の妹であるということが誇らしく思う。

舞っている箒ちゃんを見ると、ふと一瞬だけ舞いを舞っている箒ちゃんと私の目が合う。

目が合っているのはどうやら、私だけじゃなく綾もらしく。

目は一瞬だけ合って離れたけど、箒ちゃんの何処か固かった表情は柔らかくなり、何処か嬉しそうに楽しそうに見える。

そして、舞いにキレみたいなものが出てきて、更に綺麗に美しく見える。

固かった表情はもうなく、変わりに表情はまだ少しだけ残る幼さに引き立たされた大人びた真剣な表情そのもの。

その舞っている様には、厳格さと静寂さを兼ね備えており、見るもの誰をも魅了する舞이었다。

そして、舞が終わり箒ちゃんが本殿の舞台上で境内で見てくれた人達に向けて深々とお辞儀をする。

すると、境内は箒ちゃんの綺麗で優美な舞に待っている姿を賞賛す

る様にたくさん拍手と歓声に包まれていた。

・
・
・
舞が終わった数分

「……お、おまたせ」

舞装束から今度は、浴衣に身を包んだ箒ちゃんが私達の前に現れた。箒ちゃんの浴衣は、白地に薄い青の水面模様がついているもので、落ち着いた雰囲気を醸し出している。

浴衣の着方とさつきまで居なかつた綾が箒ちゃんの後ろに居ることから、綾が着付けたのが分かる。

箒ちゃんを綾は可愛く仕立ててくれたみたい。

「お疲れ様〜っ！よかったよ、箒ちゃんっ！最高の舞、ありがとう

」

「ど、どういたしまして。緊張したけど、ちゃんと舞うことが出来てよかった。兄さんと姉さんのお陰だよ」

「そんな事はないよ。あれは箒の今日まで頑張った成果だよ」

「そんな事ない。実はね、緊張して間違えそうになった時に兄さんと姉さんが見えて。二人を見るといつきに力が湧いて、頑張れたのだから、兄さん達のおかげでもあるんだよ」

そう箒ちゃんは控えめに言う。

私達のおかげか……嬉しい事、言ってくれね。

でも、私達が何かしらの篝ちゃんの力になれたみたいでよかった。バッチリ篝ちゃんの舞いは撮れて。それに約束通り、最高の舞いを見たことだし、本当によかった。

「そっか……浴衣姿も可愛いよ 素敵だったよ」

「そうだな。可愛いぞ、篝」

「ありがとう、姉さん、千冬さん。二人ともよく似合っているよ」

嬉しそうにニッコリ笑みを浮かべてそう言ってくれた篝ちゃん。ふと、いっくんを見ると、綾に耳打ちされていて、緊張しているのか顔を赤くしている。

そのままいっくんは、緊張した様子で口を開いて何かを言いはじめる。

「おつかれさま、篝。あ、えーと、その……」

「あ、ああっ」

「舞い、綺麗だったぞ、よかった。そ、そ、それに浴衣も、に、似合っている」

「あ、ああっ。あああ、あり、あり、がとうっ……！」

恥ずかしのを頑張って褒め言葉をいっくんに言われて。篝ちゃんは、ほんっ！という効果音と共に湯気が出そうなぐらい顔を真っ赤にして嬉しそうにしている。

何だかとっても微笑ましい光景だな。

微笑ましく、私と綾とちーちゃんは、微笑を見ながら二人を見ている。

今夜が二人にとっても、思い出に残るひつなつ一夏のとなればいいな。

「それじゃあ、お祭りを楽しもうか」

『うんっ！』

綾の言葉に全員で頷く。

こうして、ついに私達の楽しい夏祭りの一夜が始まる。

…

第三十七話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十七話 ？

ついに夏祭りが始まりましたっ！

と、言っても舞いまでしか終わっておらず、導入編みたいになりましたがwww

浴衣はどうでしたか？資料探しに半日かかったという……

色が一番考えるのが大変でしたけど、シンプルにしてみました。

リクエストしていただいた通りにしてみただけど、いかがでしょうか？

千冬さんは苦肉の策で髪飾りと薄化粧で可愛さを演出しました。

浴衣じゃどうも難しくくて。ミニスカタイプの奴でいこうかと一瞬思いましたがやめました。

アホばくなりますし、変ですからw

それに内心でいろいろと考える可愛い束さんを書きたいっ！！

今回も一応書いてみましたが、微妙すぎるっ！！難しいっ！！

微妙と言えば、舞いの描写。

これももう少し創意工夫をして、描写を変えたほうがよかったのかな？

第一夏に対する話し方は綾達といつも通り対さを付けてみました。

今回までシチュエーションリクエストも絶賛受付中です。

と言ってもほぼ参考にさせていただく程度になると思いますが、ご協力していただけると嬉しいです。

ご協力していただける際はリクエストは感想と一緒に書き込んで下

さい。

たくさんのご協力待っています。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とても嬉しいです

ご協力お願いしますm (| |) m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十七話 ？（前書き）

私の小説のお気に入りが800を越えましたっ！

ヒヤハツーっ！！やったね、たえちゃんっ！（マテ

800超えたから、やっぱり何か記念小説的なことをやったほうが
いいのかな？

ネタないけどww要望があれば考えます。

それではどうぞっ！

第三十七話 ？

東視点

「例年通り、いろいろな出店があるな。流石はここ一番の夏祭りをする篠ノ之神社だな」

「だね、人も多いし、よく賑わってる」

「そうだね」

上からちーちゃん、私、綾の順に話しつつ、出店を見ながら歩く。

道の両脇には数多くの露店、レパトリー豊富な食べ物屋台等のたくさんのいろいろな出店がある。

どの店もたくさんの人の賑わっていて、目移りばかりしてどれから手を付けようかと悩んでいる。

私は人混みは好きじゃないけど、祭りはこういうものだど割り切つて、綾達だけを見てあまり周りを気にしないようにしている。

「アレだな」

「うん、アレだね」

「ね」

後ろに三人並んで、篝ちゃんといっくんを見失わないように見守りながらゆっくりと歩いているけど。

私達の目の前で歩いている篝ちゃんといっくんは、“アレ”な感じ

だった。

「……………」

「……………」

顔を恥ずかしそうに真っ赤にしている篝ちゃんといっくん二人。私達の目の前で歩いている篝ちゃんといっくんは、手を繋いでいる。ここにくる前に逸れない様にと二人に手を繋がせたのは私。

まあ、逸れない様にとというのは建前だ。逸れない様にするなら、私達と手を繋いだ方がいい。

本音は、二人の応援だ。少しでも二人の恋が成就すればいいという姉心(?)から、二人に手を繋がせている。

余計なお節介なのは重々理解しているけど。

それでも二人は恥ずかしそうにしているだけで、嫌がっている様子はない。むしろ恥ずかしがっているだけで、二人とも手を離そうとせず何処か嬉しそう。

それにただ普通に繋ぐだけじゃ面白みも刺激もないから、指と指を絡ませる恋人繋ぎをさせている。

恥ずかしさはとつても凄いらしくって、二人は手を繋いでいながらもいっくんは恥ずかしそうにそっぽを向いていて、篝ちゃんは恥ずかしそうに俯き加減で歩いている。

その二人の様子は何だか

『初々しいな』

篝ちゃんといっくんを除く、私達の声が重なる。

そう、手を恋人繋ぎで繋いでいる二人の様子は初々しい。

感じ的には、初デートする付き合いたてのカップルのよう。

暗がりでも、二人が恥ずかしそうにして顔が真っ赤にしているのがよく分かる。

二人とも私から見てお似合い。やっぱり、篝ちゃんの婿はいつくんしかいない。

私達はいつもの様に微笑ましく思いながらニヤニヤしているけど、あまりも微笑ましいものだから、珍しくちーちゃんも小さくニヤニヤしている。

「ラブラブしているのもいいけど、何か食べたいものとか遊びたいものがあつたら遠慮せずに言つてね」

「り、綾さんっ！？ラブラブってっ！してないからっ！なっ、篝っ
「！」

「あ、ああっ！そうだっ！だから、兄さん変なこと言わないでっ
「！」

「あつははっ、ごめん、二人が可愛いからつい。善処するよ」

「兄さんって、何だか姉さんに似てきた」

「あつはは。それで篝、食べたいものないのか？」

「そうだな……アレがいいな」

そう言つて篝ちゃんが指差したのは、たこ焼きだった。

するといっくんは、ちーちゃんからお金を貰つたとたこ焼きを買いに行った。

「へっ？一夏、いいっ！私が払うから」

「遠慮するなって、いいから」

「う、うん」

遠慮していたけど、いっくんに押し切られてたこ焼きを受け取った。そして、二人は「はふはふっ」言いながら、美味しそうに頬張ってたこ焼きを食べている。

今回もいっくんは、ちゃんと篝ちゃんをエスコートしているし、やっぱりラブラブしてる。

微笑ましい反面、うらやましくも見える。

私だって、篝ちゃんといっくんのように本当は綾と手を恋人繋ぎたいだけど、祭りのテンションが上がる雰囲気と私達の歳が歳だけに、篝ちゃん達の様に気軽には出来ない。

繋がば、ほぼ絶対にちーちゃんが何かしらのリアクションが起る。すると、綾に変な迷惑がかかるかもしれないから、そんな事は出来ない。

遠慮とか相手のことを考えなかったバカな昔の私なら遠慮せずに繋いで、あまつさえ腕ぐらい組んでいた事だろう。

それに二人きりにもなる事は難しそうだし、今回は諦めて次の機会にでも期待して、だから今は皆での一夜の夏祭りの刹那を楽しみ味わいつくそう。

「そうだ、東と千冬も食べたいものや遊びたいものが遠慮せずに言っつてね。二人は俺が見ておくから」

「ん、分かった。綾も遠慮せずに言って」

「そつだぞ、今日ぐらい遠慮するのはやめろ」

「分かった。でも、食べてきたからお腹空いてないし、あまりガッツリはいけないよね」

「そつだね。お祭りでガッツリいくとお財布が赤字になるし」

「だな」

私達は祭りに来る前に予め軽めに腹八分目ぐらいまで食べてきているなら、お腹は空いてない。

お祭りでお腹を満たすのもいいと言えはいいけど、お祭りの食べ物は無駄に値段を高く設定されている。

だから、お祭りの食べ物でお腹を満たそうとするとお財布が赤字になるし、よくよく考えたら態々お祭りで買うのに値しないものがあるから勿体無い。

だから、お祭りでお腹を満たすのはしないようにしている。

篝ちゃんといつくんがたこ焼きを食べ終えたのを確認すると、またブラブラと歩き出す。

お腹は空いてないとは言え、せつかくお祭りに来たんだし何は食べておきたいな……

そんな事を思いながら当たりの店を見渡していると

「あつ……ふふっんっ」

「ん？どうしたの、束？」

「ねえねえ、綾。私、アレが食べる」

そう言つて、私が指差したのはりんご飴の出店。
一々言う必要はなかったんだけど、言つてからりんご飴を一本買
つて来た。

「えへへ〜 綾も食べる？」

「いや、いいよ。束が買つてきたんだし、一人で食べなよ」

「ん、分かった いただきます」

そつと林檎飴に口付け、舐めて食べる。

ん〜っ！ 甘くて美味しい。

舐めて食べながら、綾が私を見ているのを確認する。

そして

「んちゅ、ん……はあ、んんっ……ちゅっ……おいしい……」

「なっ!?!」

はしたないけど、今度は少し音を立てて食べる。

ぴちゃぴちゃと何処か厭らしい音を立てながら飴の表面を舐め、時
には吸うと、ゆっくりと溶けていく。

甘い蜜が口内に入って来て、口の中を甘く犯していく。そして、抑
え切れない甘い蜜は口から甘美に滴り落ちる。

まるで甘いデーパーキスをしているような錯覚に襲われる。

その様に綾は初め驚いたけど、目が離せなくなっている。

それはちーちゃん達も同じ。

えーと、これが何だったっけ？

奈々さんが言っていた『りんご飴を舐める舌使いはえっちい』という奴だったけ？

まあ、そんな奴。りんご飴を見た時にこれを思い出して、実行してみた。

実際やると奈々さんが言っていた事がよく分かる。舐めて食べるのって、とつてもえっちい。

ちなみに口から蜜を垂らしたのも、計算したしてわざとたらしそういうえっちい演出のため。

舐めている私がこう感じているのだから、見ている綾達は私よりも強くそう感じていることだろう。

いっくんは不思議そうにしているけど、篝ちゃんとちーちゃんは顔が真っ赤だ。

「う、わあ〜姉さん。え、えっちい……」

「へっ？それって、どういう……」

「あ〜見るな、聞くな。一夏、篝」

「へっ？でも、千冬姉」

「でもじゃないっ、言う事聞けっ！」

ちーちゃんは、いっくんと篝ちゃんに聞かせないように見せないようにして、後ろを向く。

ちえっ、つままないの。でもまあ、いいや。綾はまだ見ていることだし。

綾は困った様な表情でまだ見ていてくれる。目が離せないだけなのかもしれないけど。

「んっちゅっ……ん、んんっ……」ちそう様」

「あ……お、お粗末様？と言つか、なんて食べかたしているんだ、まったく。箸達の前で」

「んっふふー ごめんなさい ねえ、興奮した？」

「さあ、どうだろうね」

「むう〜つまんない。ちえりおっ」

綾がはぐらかすものだから、私はむっとして軽くパンチを当てた。すると、綾はまたはぐらかすように笑う。

やっぱり、はぐらかされちゃうけど、でもいいや、これで。綾は意識してくれていて、ポーカーフェイス気取っていても何だかんだで興奮してくれていたみたいだし。

それに少しだけでも頬が赤い可愛い綾が見れたことだから。

「それじゃあ、次行こうっ」

「はいはい、分かった。と、その前に。口の周りについている」

「ん、ありがとう」

口の周りに付いたりんご飴を綾に拭き取ってもらい、また歩き出す。少し歩く今度は、スーパーボールすくいの出店を見つけた。

「スーパーボールすくいか……」

「どうしたの？千冬姉、するの？」

「そうだな……そうだ、綾。一つ賭けみたいなものをしないか？」

「賭け？」

「今から私とお前とでスーパーボールすくいをしよう。それでだ、一夏、箒。お前たちは何か食べたいものはあるか？出来れば、お菓子系だと助かる」

そう、ちーちゃんに問われ、いつくんと箒ちゃんは辺りの店を見渡す。

すると、二人の目線がわたがしを売っている出店で止まった。

「一つ二百円ほどのわりと安い値段で売られている。」

「私、綿菓子を食べたいです」

「俺も」

「そうか、ありがとう。それで今からスーパーボールすくい賭けをしようと思っっているのだが、先ほど二人が選んでくれた綿菓子を負けた方が負けた者以外全員分奢るといのはどうだ？」

「……賭けね……おもしろい、分かった。いいだろう、望むところだ」

綾は少しだけ考えるとちーちゃんの提案に乗る。

二人とも勝負する気満々な様子。まあ、なによりかな。

そう言えば、昔は祭りによく綾とちーちゃんとは勝負していたっけ。私もたまに参加していたけど。

昔のことをちーちゃんは、思い出して言ったのかな？

「配点もつけよう。小さいの二つ一点で大きいのが一つ五点だ。これでもいいな？」

「もちろん」

「兄さん頑張つてっ！」

「千冬姉っ！ファイトっ！」

「ありがとう、篝。千冬の金が美味しい綿菓子を食べさせてあげよう」

「ありがとう、一夏。何、綾、今回も強く出たな。今回こそ私が勝つっ！」

「抜かせ、今回も勝つのは俺だっ！」

二人はそう意気込むと店主にお金を払い、ポイを受け取る。

そして二人は、大小様々なデザインのスーパーボールが浮かぶ水面を真剣な表情で見つめ、二人のポイが水面をくぐり勝負が始まった。二人の勝負はスーパーボールすくいなんて優しいものじゃなくて、真剣勝負。

容赦や手加減一切なしで、その勝負結果は

「いい勝負だったよ、ちーちゃんっ」

「その名前で呼ぶなっ！くうっ、また……負けた」

勝ち誇った表情をしている綾と、対照的に悔しそうにしているーちゃん。

勝負結果は……まあ、見ての通り。今回も綾が勝って、ちーちゃんの負け。

と言っても、二人のスーパーボールすくい勝負は熾烈を極めたていたのだった。

勝敗の決め手となったのは、ちーちゃんが小さなボール一杯にスーパーボールを入れすぎて、零れたのが勝敗の決め手となった。

まあ、大きい沢山入れすぎたのが決め手かな。綾は大きいのもすくってはいたけど、小さいのをたくさんすくって点を稼いでいた。

二人の小さなボールはそれぞれの性格をよくあらわしているものだった。地道に頑張れる性格の綾と大雑把な性格のちーちゃんって感じで。

それでも全部のスーパーボールをすくっていて、ポイも最後まで破れなかった為、周りにはちょっとした人ばかりが出来て、凄いつてことで何故か拍手が送られていた。

「ドマイ、ちーちゃん。でも、スーパーボールよく跳ねてたね」

「スーパーボールだけにね」

「おおっ！上手いっ！いつくん」

「上手くない。一夏、あまりしょうもないのと言っていると綿菓子はやらんぞ。束もだ」

優しい(?)言葉で軽くしかる様にちーちゃんはそう言うけど。

視線はギロツと触れれば切れるナイフのような睨みを利かせていて、いつくんは口を閉じて大人しくなる。

私はその様子が少しおしかくて笑う。

「ふふっ」

「はあ〜……仕方ない、負けは負けだ。奢ってやるっ」

そうしょぼーんとしながらちーちゃんは言い。

ちーちゃん以外、全員分の綿菓子を買って買ってくれた。

「ほら」

「ありがとうございます、千冬さん。頂きます」

「ああ。ありがたく食べ」

負けたのがまだ悔しいのかちーちゃんは偉ぶった様に言う。

そんな事は私はお構いなしに既に食べていて、その後続く様に綾といっくんは『頂きます』と言ってから綿菓子を食べ始める。

うーん、綿菓子も食べるの久しぶりだけど、ふわふわしていて甘くて美味しい。

それに何の疲労や苦勞なしで、しかもタダで食べられていると思うと更に美味しく感じる。

現金なのは知っているけど、何かいい気分。

そんな風に楽しく美味しく美味しく綿菓子を食べているとちーちゃんはじつと綾を見つめている。

「……」

「えっ？何？千冬……綿菓子食べたいの？」

「食べてもいいのか？」

「いいよ。理由はどうあれ元は千冬のお金で買ったものだし、こんなに食べられないし」

「そうか、すまないな」

あれ？一瞬だけ、ちーちゃんの口元がニヤつとしたような？
そう私を感じたと同時にちーちゃんは更に驚きのこと言った。

「そのままでは大きくて食べ難いから、小さくちぎって食べさせて
くれて」

「なっ！？ちーちゃんっ！？」

「あ、ううん。分かった」

私の制止の声も空しく、綾は綿菓子を小さくちぎってちーちゃんに
食べさせる。

それ姿はあたかも『はい、あーん』をしている様で……

「……あ、あーん。ふふっ」

「こらっ！指舐めんなっ！」

あまつさえ、ちーちゃんは綾の指を舐めやがった。

『はい、あーん』をして貰った上に、指まで舐めるなんてずっこい。
それに今のちーちゃんは嬉しそうにニヤニヤとじていて、絶対に確

信犯だ。

うう〜やられたあ〜っ！

祭りだから、こういうイベントが来るかと思って注意していたけど、注意が足りなかった。

悔しい〜ッ！！

「ふふっ……あっは、あっはははははっ」

「ね、姉さんっ！？こ、怖いよっ？目に光がないし」

「大丈夫、大丈夫だよ。篝ちゃん」

いけない、つい篝ちゃんを怖がらせてしまった。

でも、怖がった篝ちゃんはぎゅっといっくんの手を強く繋いでいるし、とりあえずは万事OKかな？

それは置いといて、今は平常心平常心……

って、保てるわけがないっ！あ〜っ！してやられた感があるから、余計にイライラするっ！

綾も綾だよ。途中で自分が何をさせられているのか分かっていたみたいだったけど、警戒心がなさ過ぎ。

けど、一番イライラするのは自分に対してだ。警戒が足りなかったし、ちよつとの事で嫉妬して直ぐ余裕がなくなる。情けない、やんたくなる。

「ちーちゃんっ！ずっこいっ！」

「別にずるくない。それにずるいと言うのなら、お前の方じゃないか？何の苦勞や労働せずに私の金でダダでその綿菓子食べられているわけだしな」

「むうっくっ！！」

ニヤ付いた笑みを浮かべて言うちーちゃんに私が睨むとちーちゃんもにらみ返して、私達は睨み合う。

背景には何か凄いのが浮かんで睨みあつて火花散らせているのを想像してくれるといい。

でも、ちーちゃんがこんな積極的(?)なことをするなんて。お祭りの雰囲気って怖い。

はあく悔しい。ちーちゃんにしてやられたのも、情け自分にも。

「わあく千冬姉と束さんが睨み合っている。これが修羅場？幕」

「そうみたいだな。一夏もこうなるんだろうな……はあく。そして、兄さんご愁傷様」

「えっ！？なんで俺がそうなるだよっ？！」

「一夏は自分の胸に手を当てて考えるといいよ。と言っか、幕そんな事言わないで、悲しくなる」

と、私とちーちゃんの傍らにいる綾達は話していた。

すると、私が睨むのをやめるとちーちゃんのやめた。

睨むのやめよ。にらみ合ったところで何も変わらないし、空気が悪くなるだけ。

だから、今は睨むのはやめて雰囲気と状況を変えよう。どうせ後でいくらでもこの貸しは返せる事だし。

気持ち切り替えよう。焦る必要はない……と思う。だって、私は綾の彼女・正妻で綾は私の物で私は綾の物、お互いはもう一人の自

分なのだから。

だから、気持ちを落ち着けて平常心、綾の女として堂々としていていよう。

「じゃあ、とりあえず皆食べ終わった事だし。次行こうか。花火までもう少しだけあるし」

全員綿菓子を食べ終わるとまた歩き出す。

綾が言った通り、花火までもう少しだけある。だから、あと一つぐらいは何か出来る。

花火の時間が近くなった事で多く集まる出店の列を歩いているとふと、私と篝ちゃんの足がある店の前で止まった。

「どうした？篝？」

「どうしたの？束？」

ある店の前で足が止まった私達をいっくんと綾は不思議そうに気にかけてくれる。

でも、私達はそんなことお構いなしでその店のある商品に目を奪われていた。

「わあ〜ニヤンコ先生だっ！」

私と篝ちゃんの喜々とした声が重なる。

そう、私達が目を奪われていたのは、射的屋に景品としてあるニヤンコ先生の大きなぬいぐるみだった。

ニヤンコ先生はある少女漫画のマスコミ的なキャラクターで私も篝ちゃんも大好きなキャラだ。

あの丸みをおびた体とふてふてしい表情……可愛い。ウサギも可愛

くて好きだけど、ニヤンコ先生も可愛くて大好き。
景色を見た私と篝ちゃんの目が合う。

「篝ちゃんっ！」

「うんっ！姉さんっ！」

「絶対に取るっ！」

意気込んだ私と篝ちゃんの声が再び重なる。

そうと決まれば、他の人に取られる前に私達が絶対に取る。

と、言ってもニヤンコ先生のぬいぐるみは一つしかない。だから、
ほしいけど私が取れたら篝ちゃんにプレゼンしてあげよう。

店主らしき人に篝ちゃんの分も私がお金を渡して私達は、鉄砲を受
け取る。

まず初めにやったのは、篝ちゃんだったんだけど……

「うっ……」

五発全部を外して残弾がゼロとなり篝ちゃんは、悲しそうにしてい
た。

にやはは……篝ちゃん、こっこの得意じゃなかったね。

銃型のコントローラーを使うガンシューティングのゲーム、いつも
ポロポロだったし。

「あっはは、下手だな篝」

「笑って言うなっ！一夏っ！くっ……私だって弓なら、当たるもん
っ！」

「はい、もちろん。大将に一泡あかせてあげますよ」

「がっはっはっはっはっ、そうかそうか。そりゃ楽しみだな」

豪快に笑い軽口を叩く店主。この人は綾も取れないと思っている。ただ、綾はそんな事は気にせず鉄砲にコルク弾を詰めると射線をニヤンコ先生に合わせて綺麗に構える。

射線を見つめ狙いを定めている綾は、凜々しくて。何だかドキッとしました。

そして

「一気に本丸を狙いつっ！！」

その掛け声と共に一発目のコルク弾が放たれた。

コルク弾は真っ直ぐニヤンコ先生に向かって飛んで行き

べしっ　ばたん

「何…だと…？一発目であの猫だるまを倒すとは…！！　お、大当たり~~~~っ！！」

「ふう……」

一仕事やり終えたように息を一つ付く綾。

綾が撃ったコルク弾はニヤンコ先生のぬいぐるみに直撃し、落としていた。

落ちた時に『にゅんっ！？』という小さな鳴き声がニヤンコ先生から聞こえたけど気のせいだろう。

しかも、綾は一発目で倒していて、射的屋の大将はもちろん周囲で見っていた観客、それに私達も大いに盛り上がる。

「すげえなっ！兄ちゃんっ！流石は両手に花の色男と言ったところかっ！いい甲斐性を見せてもらったぜっ！絶対に誰にも倒せないようにしていた　いや、なんでもない」

「おいつ！」

店主の言葉に綾は笑みを浮かべながらツッコミ、倒したニヤンコ先生のぬいぐるみを受け取る。

凄いな、綾は。一発目しかもたった一発で大物を取るなんて。かっこよかったし、流石は私の旦那さん、と誇らしく思う。

すると、綾は私を見た。多分、ニヤンコ先生をどっちにあげたらいいのか迷っているのだろう。

篝ちゃんに渡せばいいものを、私にまで気を使って、本当に綾は気使いやさんなんだから。まったく。

でも、その気遣いすら嬉しくて私は頬が緩んでいるのを自覚する。

「私はいいよ。篝ちゃんに渡してあげて」

「ん、分かった。はい、どうぞ、篝……プレゼンとだよ」

「わわっ……あ、ありがとう、兄さん」

「うん、どういたしまして」

受け取ってニヤンコ先生のぬいぐるみを嬉しそうに抱きしめる篝ちゃんは、とつても嬉しそうで。

その表情を見ている綾も嬉しそうで、二人を見ているとまだ少しイライラとモヤモヤとしたのがスッと消えて、私まで心が温かくなつて嬉しくなったのだった。

射的屋でニャンコ先生を綾がゲットして篝ちゃんにプレゼントした後。

私達はいろいろと出店を回り、遊んだり、少し食べたりして、ある場所に向かって歩いていった。

時間は花火が始まる十分前で、もうすぐしたら花火が始まる。

向かった先は神社裏の林。と言っても、何か変なことするしかではなく、私達しか知らない秘密の穴場に行くため。

背の高い針葉樹が集まって出来たこの裏の林は、ある一角だけが天窓をあけた様に開いていて空の見晴らしがいい。

そこに出て外を見上げると丁度

ドーーーーーッ！！

と、雲一つない綺麗に夜空に綺麗な花火が撃ちあがって咲いている。

「綺麗」

夜空に綺麗に咲いた花火達を見て私はそう感想を漏らす。

今始まったこの花火は百連発で有名で、一度始まると約一時間以上ぶっ通しで轟音と共に様々な形と色の彩りが続く。

花火を楽しみつつふと、いっくんと篝ちゃんを見ると二人は寄り添って花火を指差し何か話しながら見ている、思わず微笑が出た。

綺麗だな……と見て見ていると綾とちーちゃんが傍に居ない事に気づいて同時に嫌な予感がした。

辺りを見渡すと私よりも後ろの方でいて綾は夜空を見上げながら、花火を見ている。

「ただ、ちーちゃんは顔を真っ赤にして綾を見つめ、何かを言おうとしていたのだった。」

…

第三十七話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十七話 ？

活動報告の通りえっちいしーんあり、千冬さんデレ（？）があったり、ネタ大量の回でした。

と言うよりは、ネタ詰めすぎて無茶苦茶でしたねwww
本当はもつと綾君と束さんをそこはかとなくイチャイチャさせて、
篝ちゃんと一夏もイチャイチャさせたかった。

後はちゃんともう少しだけ千冬さんもデレさせたかった。

りんご飴は定番ですよ。最近のエロゲーじゃ見なくなったけど（泣）

でも、破壊力は凄いwwwリアルルの祭りですて50人の男性をひきつけたつわものを産まれさすぐらいのものでから。

その破壊力を表現出来ていたらいいな。そこはかとなくえっちい束さんもまた書きたい。

千冬さんデレはあれでよかったのかと自問自答です。

もう一つぐらい何かほしい気がしたのですが、思いつきませんでした（汗）

あんなんでも萌えていただけると嬉しいです。

射的屋の景品は完全に私の趣味と言うか、最近欲しいものです。

にゃんこ先生のぬいぐるみが欲しくて、堪らない今日この頃です。

でも、五千元……高すぎるわっ！近くのゲーセンのクレイゲームには置いてないし

それと本当ならここでも束さんをデレさせる予定でした。

綾君に感謝して綾君に抱き付いて頬に感謝の意を込めてキスするという感じで。

千冬さんへの当てつけも含んでいます。

だけど、書いていて全体的にウザク感じたので消して、自分なりに綺麗にまとめてみました。

なので、束さんのデレ要素が半減して。千冬さんに勝ち越されるという結果に……

見える形ではあまりデレはないですが、描写ではデレデレのつもりです。

それを読んでいて分かっていただければいいのですが……

束さんの心理描写も可愛く表現できているのか不安です(汗)
上手く書けているかどうか、教えていただけると嬉しいです。

ちなみに射的屋も花火を見ている場所も原作と全く同じです。

だ、だからって花火の描写とかが原作と似ているなんて思わないでよねっ！

ふ、ふんっ(／／／／)

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(_____)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘or誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

ちなみに次回は千冬さん視点。

高校生編では初めてなので、上手く書けるといいな。ただ、短いかもしれません。

なので、今回もシチュエーションリクエストも絶賛受付中です。と言ってもほぼ参考にさせていただく程度になると思いますが、ご協力していただけると嬉しいですよ。

東さんをイチャラブされるのがほしいな（願望&遠い目）

ご協力していただける際はリクエストは感想と一緒に書き込んで下さい。

たくさんのご協力待っています。

第三十七話 ？

千冬視点

りいん、りいん、と鈴虫が鳴き声が響く、人気がない林。

そこで私達はもう、始まっている花火を見ている。

夜空にいくつもの花火が打ちあがり、綺麗に咲き夜空を彩っている。

それを私の前で束が見ている、そのまた向こうに一夏と篤が寄り添っている。

束は兎も角、一夏と篤は微笑ましい。綾や束が言っているとおり、このまま行けば将来二人が結婚するやもしれんな。このまま行けばの話だが。

だが、そうなる綾と束と義理の兄妹になるのか……変な感じがするな。

そして、私の隣には

「（……綾）」

私の意を汲んでくれたのかは知らないが、私の隣で綾は夜空に打ち上がる花火を見ている。

綾は楽しそうに花火を眺めていて、そんな楽しそうな表情を見ると私はふと今日の事を思い出した。

私、今日一日自分でも変だと思っただけで何と云うか積極的だった。

服装からしても積極的だ。この浴衣といい、頭に今も付いている髪飾りといい。

まあ、綾に『可愛い』等と褒めてもらえたことだし、積極的になっ

た甲斐はあった。

それに『はい、あーん』までしてもって……し、しかも綾の指を舐めてしまった。

今、思うと積極的と言うよりも何だか……変なことをしてしまった。多分、祭りのテンションや雰囲気私をそうさせたんだろう。これからは気をつけないと。

だが、嫌じゃなかった……それどころか、こう言ったら変だが、何と言っか楽しかったし、それに照れた綾を見たのは嬉しかった。

でも変、おかしいことをしてしまっているのは変わらないわけで。改めて思うととっても恥ずかしくなって、顔が赤く熱くなるのが分かる。

「？千冬？どうかした？」

「い、いや……何でもないっ気にしないでくれ」

こういうところは鋭い綾は、暗がりでも私の様子に気づいて気にかけてくれた。

嬉しいが、余計に顔が赤くなるじゃないか。

とりあえず、平常心。花火でも見て気を紛らわそう。

燃烧した気持ちわずかに吹く少し冷たい風が、夏の暑い空気をどけるのと一緒に落ち着けてくれる。

そう言えば、今日の綾もかっこよかった。

ここだけの話だが、今日久しぶりに綾の浴衣姿を見たが、ドキッと胸が高鳴った。

最後に綾の浴衣姿、和服姿を見たのは中一の頃で。

あの時から綾も私も成長して、綾は凜々しくかっこよくなっている

ものだから浴衣がよく映えて本当にドキっとした。ポーカーフェイスを取り繕うのが一苦労だった。

それに最近は、綾の一つ一つに仕草や表情によくドキッと胸が高鳴る。スパーボールを真剣にすくっている様子にも、射的で真剣な眼差しで狙いを定める表情などにも。

我ながら、高校生になっただけですすます綾に惚れていつて……ある種、綾に溺れていつているのかもしれないと思う。嬉しい様な恥ずかしいような感じだ。

それに今だって、綾が隣にいますとただで胸がドキドキと高鳴っている。

それも五月蠅いぐらいに。

だから、私はこの胸のドキドキと五月蠅い高鳴りが綾に聞こえてしまわぬよう、祈るように花火そつちのけで思っている。

そんなことを思っているものだから、また顔が赤くなっている。

「（お、落ち着け……冷静に平常心を保つんだ、私《千冬》っ！それに今はチャンスだっ！）」

チャンスと言うのは、告白のチャンスのこと。

私の綾の対する思い、恋心は今も変わってない。それどころか強く深くなっている。

私は綾が好き、大好き。昔からずっと、綾の事が一人の異性、男として好き……愛している。

今その気持ちは変わってなくて、これからもその思い・恋心は変わらない。

だから、私はこの機会に今というチャンスときに綾の思いを告げようと決心している。

今までも何度も言おうかと思ったけど、今一方踏み出せず思いを告

げることが出来なかった。

思いを告げないれば何も始まらないし、言葉にしなければ何も伝わらない。いつまでも思っているだけではダメだ。まあ、伝えても結果が伴わないと大して大した意味がないが。

それに最近、東に随分とリードされているようだ。このままでは私は

だからこそ、今日、今夜、今、私の思いを綾に伝えようと思う。

俯いていた顔を少し上げて綾の様子を窺う。

すると、今からすることかを変に強く意識してしまい、はずかしくて首元までしか見る事が出来ず、すぐさままた俯いてしまう。

それにさっきよりもドキドキと胸が高鳴って鼓動が早くなって、とても胸が苦しい。

緊張からなのか、顔が赤く染まって熱くて、変な汗が少し出てくる。

「（言うと思ったんだっ！私はっ！なら、私は言うっ！この綾への想いを嘘にしてくはないっ！言うなら今だ　　！！）」

いろいろと考えてしまい、まだ迷う思考を一旦私は捨てて。

覚悟を固めなおし、意を決して、顔を上げ綾を見つめて、その言葉を言おうとした。

「……………」

「……………」

言おうと瞬間、綾の表情を瞳を見てしまった。

その視線の先を私は横目で追うと、私達の前で花火を見ていた東が私達の様子を不思議そうにそれでいて何処か訝しげに見ている。

そんな束を見て、綾は優しく目を細め、優しげな笑みを浮かべ東に

向けていた。

綾の瞳に映っているのは、束ただ一人だけ。今も昔も　そして、これからも。束以外は誰も映らない、そんな瞳を綾はしているのだ。つた。

そんな綾を見て、私は想いを告げることも、何か言葉をいうことも、何かもいう事もできなくなった。

いや、それ同時に言った方がいいんだろう。私は、自分でも分からないが想いを告げるのを自らやめていた。

理由は自分でも分からない。むしろ、私を知りたい。今夜はもう、綾に想いを告げる気も気力も失せてしまったのだからな。

「(……)」

少しの間、私は放心状態で今だ夜空に咲き続ける花火を眺める。ドーーーーーン！という一際大きな花火の音で、ハッと私は我に返る。

「(また、想いを告げる事が出来なかった)」

そう心の隅で呟く。また、今回も今一つ踏み出せなかったな。

折角のチャンスだったのに、自分で逃してしまった。

でも想いを告げられなかったのは、誰かのせいじゃない。私自信のせいだ。

「情けないな……私は……」

「何が？」

「いや、気にしないでくれ。独り言だ」

そう言って私は、はぐらかす。

覚悟を決めて、意を決して、言おうとしたのに出来なかった。

どんなに他人に評価されようとも、どんな名誉な二つ名を貰おうとも、想いを告げられなかった。

今更言うのも、もう無理だ。意気地がなし。本当に情けないな、私は。

それに綾が束だけを見ている時、私は改めて何か”を気づかされた気がした。

その“何か”が自分では、何の事なのか分からないが、兎に角私は改めて“何か”を気づかされた気がした。

「はあ……」

「なーに、溜息ついているの、ちーちゃん」

「た、束っ!？」

俯き加減に溜息をついてしまっていると目の前に束が居て、私は驚いて後ろへ二歩ほど後退していた。

驚いた私の様子を見て楽しんでる束は、私と綾の間に入ると私達の腕にそつと腕を絡めて、一夏か箒がいる前のほうへと引っ張って行く。

「おい、束っ!」

「二人ともそんな事で見ないでもつと前の方で皆で一緒に見ようっ」

「分かったっ！分かったからっ！胸を押し付けてくるなっ！」

そう慌てる綾は見て、私はおかしく感じ小さく笑った。
少し笑っただけで、少しは気分が楽になった。

済んだ事をいつもでもよくよく考えて思っけてもしょうがない。

また次の機会に全力で頑張ろう。その時は、束にも綾にも、そして自分にも負けない。

だから、今は皆で見る花火を楽しもう。

「綺麗だな、綾、束」

「そうだね」

「うん 綺麗、綺麗」

そう三人で言い、三人横一列に並んで夜空を見上げて花火を見る。

夜空に咲き綺麗に舞う花火が私の感傷的な心を優しく照らしてくれているようだった。

・
・
・

束視点

綾とちーちゃんを後ろの方から引っ張って前の方、篝ちゃんといっくんの近くで花火を見る。

やっぱり、折角皆で夏祭りに来ていて、こんな刹那《一時》滅多にないんだから、皆で一緒に花火見て楽しまないと。

「綺麗だな、綾、束」

「そうだね」

「うん 綺麗、綺麗」

そう三人で言い、三人横一列に並んで夜空を見上げて花火を見る。

さっきまであった嫌な予感は、今はもうなくなっていた。

それにやっぱり……さっきちーちゃんが何かを言おうとしていたのは、綾に告白するつもりだったんだろっ。

本当にそうなのは分からないし、聞くことも出来ないけど、多分絶対そうだと思う。

別にちーちゃんが綾に告白するのを邪魔とかするつもりもないし、むしろ私には邪魔することはおろか止める権利すらない。

私が出るのは、ちーちゃんが綾に告白していても、ただ見ていることか、見て見ぬフリをするぐらい。

そんな事はないと分かっているけど、もしもそのちーちゃんの告白で綾がちーちゃんの想いを受け入れるのなら、ちーちゃんに対して最低な事をしている私は……引き下がるのか？

最初は引き下がると思ったけど、すぐに否定する。もしも、私の前でちーちゃんから告白を想いを受け入れたのなら、私はどうするんだろっ？

誓いは今も胸にあり秘めていて、そんな事はないと綾を信じている。でも、もしも綾が想いを受け入れたのなら私はどうするか、私はどうなるのか分からない。

私だっていつも不安だ。今が夢の様に幸せすぎて、壊れるじゃないかと壊してしまうんじゃないかといつだって不安でたまらない。やっぱり、未知好きだけど怖い。

考えるのをやめよう。考えても答えが出るわけがないのに自問

自答を繰り返すだけ。それにこんな事を考えていたら私を愛し信じていてくれる綾に悪い。綾を信じているだ、私は。

でも、告白いるつもりだったんだろうちーちゃんは、何も言わなかったみたい。

いや、言えなかったといった方がいいのかもしれない。

後ろにいた二人の様子を伺った時に綾と目が合って、笑みを向けてくれて嬉しかったけど、そんな綾を見てちーちゃんは言えなくなっ
たみたいだった。

その時のちーちゃんの表情はとつても寂しそうで、今も何処か寂し
そうな微笑を浮かべている。

ちゃんとした理由は分からないけど、言わなかった言えなかったの
には私も間接的に関係しているんだろう。

悪いことしちゃったな……最低な事ことしている上に大親友に対し
て悪いことしちゃって、本当に私は最低な女だ。

本当は言えればいい、それが全てが終る。いい終わりか、悪い終わり
かは分からないけど。

いや、分からないからこそ臆病になって言えなんだろう。

私と綾《私達》に他人と繋がって入れる、ちーちゃんも含めた三人
の一時を、最後の陽だまりを失いたくないだけに。

綾もいつまであ……して……いるつもりなんだろう？ 他人には愛しの人
でも踏み込まれたり知られたくない部分がある。

私が踏み込んだことじゃないだけに何もいえないのが悔しい。

私達はいろいろと問題が本当に山済みだ。その一つ一つの問題がと
つても難しい。

やっぱり、私達はいつまでも足掻いて足掻いて、永劫の円環を疾走
して駆け抜けることしか出来ないか。

いつつの日にか、そこから本当に脱却する幸せになることを渴望して夢見る

しか。

そんな事を考えているとつい暗い落ち込んだ気持ちになって、俯いていた。

自分を入れ替えようと思い、パツと顔を上げると

「……あ」

「あれが最後の花火だな、篝」

「ああ、綺麗だな、一夏。本当に綺麗だ」

そんないつくと篝ちゃん会話が聞こえ。

パツと顔を上げた私の目に入っていたのは、最後の一発となった花火が夜空に誇らしげに美しく咲いている光景だった。

いつしか最後になっていたんだ。でも、綺麗だ。まるで刹那が輝くみたい。

その輝きを見ていると消沈した私の心は楽に少しは花火の様に晴れた気がした。

こうして、私達の十六歳の夏の夏祭りの思い出は、まるで輝いてはゆっくりと消えていく花火の様に過ぎていく。

そして、別れの時がやってくる

…

第三十七話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第三十七話 ?

前半は千冬さん視点、後半は東さん視点の回でした。

前半の千冬さん視点は乙女チック&恋する乙女の複雑さを上手く表現できていたでしょうか？

千冬さん視点は原作四巻の篇を参考にさせてもらったので、似ているかもしれませんが。

と言うか、似ていますね(汗)でも、ちゃんと区別はつけました。千冬さんらしくスパツといかせました。結果は見ての通りですが。篇のように花火に邪魔されたのではなく、言うことが出来なかったというのが

今後への伏線みたいなものですかね。

やっぱり、千冬さんにスポットライトを当ててヒロインにするとうとうしても篇っぽくなる。まあ、仕方ないですね。二人案外よく似ていますし。

そして、後半の東さん視点は

複雑な乙女心とある種の罪悪感を感じているのを上手く表現できたでしょうか？

急遽加筆して、短時間で考えに考えてたので評価していただけると嬉しいですよ。

要所要所何処かで見た様や表現や意味不明なところが多少あります(汗)

ちなみに永劫の円環というのは山済みの問題の比喻表現みたいなものです。

今回で夏休み編は終り。

今回はエピローグみたいなものです。綾君、束さんと篝ちゃん別れ話の予定です。

ついに終る夏休み編、約二ヶ月かかりました。長すぎる(汗)

(混浴とかの)欲望の限りを尽くしたの結果がこれだよ(苦笑)

エピローグが終れば更新を一旦ストップみたいなものをして、記念小説である

ノクターン小説に執筆作業に入ります。要望とかがあり言うのなら今のうちですよ

でも、これをする和二学期編が遅くなる。遅くても二学期編は10月一日には始めます。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とても嬉しいです

ご協力お願いしますm(_____)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

第三十八話

綾視点

楽しい一時なんてものは本当に刹那の様で尊い。

そして、物事には始まりがあれば終わりがあり、出会いがあれば別れがある。

それがつい今日この日、箒との別れの日がやってきた。

箒と同じ時間や景色を共有できるのも後少し。

本来はもう少し早く別れが来る予定で、それなりの覚悟はしていたつもりだったけど。

箒と過ごせた刹那は本当に楽しくて幸せで、別れ間際になってこの刹那の陽だまりを手放したくない、箒と分かれたくないとの心で何処かで強く思ってしまう。

それは束も同じなようでさっきから沈んだ顔をしている。

でも、別れないといけない。

いつまでもこの篠ノ之家には居えられないのだから。だから、今一度覚悟を決めないと。

「それでは短い間でしたが、お世話になりました」

「……お世話に……なりました」

「……ああ」

俺の後にしどろもどろながら束が続いて言っと、篠ノ之のお父さんは背中越しにそっけなく言った。

紛いなれにでも親子だったのに別れの言葉としては随分とそっけないが、これでいいんだろう。

変に普通だったり馴れ馴れしいのもお互いに嫌だし、これは篠ノ之のお父さんなりの俺達との線引きなんだろう。

背を向けた篠ノ之のお父さんに見えるはずはないだろうけど、俺と束は一礼……深くお辞儀をすると玄関に歩き出す。

その後ろを箒が見送ってくれる様で着いてくる。

俺達は予定を変更して、このままIS学園に帰ることになっている。

本当なら師匠の屋敷いへのほうで夏休み一杯までお世話になる予定だったが、居ても特にこれといってすることもないし。

篠ノ之家とも比較的近いから後ろ髪引かれる気持ちになりそうだし、IS学園に戻って自主訓練もしたい。

それに急ぎではないけど、少し書類関係も片付けないといけないらしいので予定を変更して早めにIS学園に戻ることにした。ちなみに千冬も今日にはIS学園の方に戻るつもりらしい。

玄関に行き靴を履いて出る。

すると、夏の強い日差しが俺達を照りつける。

暑いな……今日は一段と。

「そろそろ帰っちゃうんだね……兄さん、姉さん」

手で目の上に影を作って日の光を見えていると箒のそんな寂しそうな声が聞こえた。

振り返って様子を見てみると箒は、俺達の後ろで俯き加減で立っていた。

別れを寂しいと嫌だと思っているのは俺達だけじゃない。箒だって寂しいと嫌だと思っているみたい。

そう思ってくれているのはとっても嬉しい。

だけど、せつかく仲直り出来て幸せで楽しい一時を送ることが出来たのに、こうして別れの時に箒に悲しい寂しい思いをさせていると思うと心苦しくなる。

それにやっぱり、後ろ髪を引かれるような感じがする。

「うん……ごめんね、いつまでも一緒に居ることが出来なくて」

俯き加減で立っている箒にそう束は、謝るように言う。

謝るように言っているけど、俺には何処か束は自分を責めているように聞こえる。

束のことだ。

自分がISを開発して世に流れ出さなければ、今のようなことにはならなかっただろうし。

いつまでも一緒に居ることが出来たかもしれない。と、やっぱり束は自分を責めているように見える。

箒の楽しそうな表情や幸せそうな表情、そして今の寂しそうな様子を見て、大切に愛おしく思うからこそ束は、箒に対して罪悪感を感じ申し訳なく感じている。気にかけている。

やっぱり、束は心優しい妹思いな立派なお姉さんだ。

だが、束が感じている罪悪感とかを束一人だけには背負わせない。

俺は束と同じ思いで、俺も箒に対して罪悪感を感じているし、俺だってそれを背負いたい。むしろ、背負う。束一人に背負わせたくない。

何より俺は、束と共犯者同罪でもあるのだから。

そう思うと俺は、箒に謝っていた。

「ごめん、箒」

「あ、ううん。謝らないで姉さん、兄さん。お別れは寂しいし悲しいけど、二人と過ごせたこの夏休みは本当に楽しくて幸せで私にとって最高の夏休みの思い出となったよ」

「箒……俺も箒と束と過ごせたこの夏休みは本当に楽しくて幸せで俺にとっても最高の夏休みの思い出となったよ」

「私も」

俺達にこれ以上心配かけない様にと笑みを浮かべて言う箒に俺と束も箒と思いを同じくしてそう言った。

やっぱり寂しいだろうに俺達にこれ以上心配かけない様にと笑みを浮かべている箒。

箒は強い子だな。俺達が思っている以上に。それに箒もやっぱりまた、兄さん姉さん思いな出来たいい妹だ。

こんな風に箒が強くなっている、その箒の成長を嬉しく思い、今日まで見る事ができてよかったと素直に感じる。

そうしていると俺は、俺もあることを思い出す。

「そうだ」

「？」

俺の言葉に不思議そうに箒はする。

すると俺は、手に持っていた用意が詰ったポストンバックを地面に置いて、中から小さな紙袋を取り出す。

それを箒に渡す。

「はい、どうぞ」

「これは何？」

「開けてみて。開けたら分かるから」

そう言うと箒は不思議そうな顔をしながら袋を開ける。

袋を開けると箒は中から、両淵に黒いラインが入った黄緑色の髪留め様な一本のリボンを取り出した。

「これは……？」

「かなり遅れちゃったけど、それが俺達からの誕生日プレゼントだよ」

「えっ？綾？俺達っていいの？」

「いいから、いいから。気にしないで」

箒が袋から取り出した、両淵に黒いラインが入った黄緑色の髪留め様な一本のリボンは箒への誕生日プレゼント。

と言っても、箒の誕生日は七月七日であり、随分と遅めの誕生日プレゼントである事は自覚している。

このリボンは、束との初デートの時に寄った雑貨店で束にプレゼントしたウサミミカチューシャと一緒に買ったもの。

あの時はいつか箒に会うことが出来たのならと買って、再開して仲直りした後の時に渡そうかと思っていたけど、いろいろと会って忘れてしまっていた事もあって、今の今になって渡した。

束は俺が『俺達からの誕生日プレゼント』と言って驚いていたけど、束の元々の予定では、箒とこうなるとは思ってもなくて、箒へのプレゼントを用意してないだろうから。便宜上、『俺達からの誕生日プレゼント』として、束は一応納得したみたいだった。

プレゼントを手にとって見ている箒は、啞然としながらリボンを見つめている。

「あ……いいの貰って?」

「もちろん。箒に喜んでほしくてプレゼントしたんだ貰ってほしい」

「う、うん。ありがとう、兄さん、姉さん」

「どういたしまして。あっそうだ、箒ちゃん。折角だから、そのリボンで髪を結んであげるよ」

「じゃあ、お願い」

まだ嬉しそうにしてハニカミながら箒は、束にリボンを渡す。

リボンを受け取ると束は、箒の後ろにしゃがみながら立ち髪を一度解くと楽しそうに笑みを浮かべながら、プレゼンとしたリボンで髪を結んでいく。

結んで出来上がっていく髪の髪型は、髪を一つに纏めているポニーテール。

箒の髪型と言えば、やっぱりこのポニーテール。この髪型が箒にはよく似合っていて、プレゼントしたリボンがよく映え、リボンもよく似合っていて今の箒は可愛らしい。

箒の髪を結ぶと束の俺の隣へと戻って、前から箒を見て、箒はリボンを付けた自分の感想を聞いてくる。

「どう……かな？」

「うん、とってもよく似合っている」

「可愛いよ、箒ちゃん」

「あ、ありがとう。えへへー」

頬を少し赤くしながらも嬉しそうに箒ははにかむ。

嬉しそうにしているよかったし、何よりプレゼンとしてリボンを喜んでみるみたいでよかった。

その証拠に嬉しそうにリボンをいじいじしている。

そう嬉しそうにしていた箒だったが、ふと寂しそうに顔をする。

「また、会えるよね？」

そう不安そうに聞いてくる。

箒の不安の種はそれだったか……やっぱり、そう思ってしまうものなんだろう。

また会えるよね？ か、どうなんだろう。実際問題は少し難しいのかもしれない。

だけど、箒がそう思ってくれるのなら、俺達も。

「うん、会えるよ。絶対に」

「ああ、そうだね。会えるよ……また、会おう。絶対に」

「そっか……よかった」

俺達の言葉を聞いて、嬉しそうに呟く篤。

篤がまた会いたいと思ってくれている様に俺達もまた篤と会いた
いと強く思っている。

せっかく、仲直りできてまた仲睦まじく同じ時を過ごせて、同じ刹
那を味わい楽しむことが出来たんだ。

会うことが出来たのがこの一度きりにはしたくない。絶対にまた再
開する。

すると、篤は嬉しそうな表情から何かを決意した様な表情をして、

「兄さん、姉さん」と言った。

何事かと思いながらも、何かを決意した様な表情をしているに合わ
せるように俺達は真剣な表情をして篤の話聞く。

「私、頑張る、頑張るから。兄さん達とまた会える時には今よりも
もっと強くなる。身も心も。兄さんの様に強く凛々しい人に、姉さ
んの様にかしこくて凄いい人に、私は頑張ってたって強い私でいるよ」

「……篤」

「だから、私は一人でも大丈夫だよ。兄さん達から貰ったこのリボ
ンもあることだし」

と、ハニカミながらも真剣な表情で篤は、決意を言う。

頑張って、強い自分にいる。だから、一人でも大丈夫。

本当に篤は強い子だ。幼いのにこんなにも強い覚悟が出来て言える

なんて。

揺るがない強いものだということが強く伝わってくる。

それにこの決意は、俺達に心配をかけないようにするものでもあるんだろう。

本当に本当に強い子で、兄さん姉さん思いな出来たいい妹だ。

「だからね、兄さん、姉さん。私が今よりも強くなった時にはたくさん褒めてほしい」

「ああ、分かった。その時はたくさんほめてあげるよ。だから、その時を楽しみにしている。でも、無理はしないでほしいな」

「そうだね。無理は禁物だよ、篝ちゃん。でも、頑張ってね、私達も頑張るから」

「だね。俺達も頑張るよ。また篝と会えた時に今よりも心身ともに強くなった俺達も見せれる様に俺達も頑張る」

「そうだ、俺達も篝に負けないように頑張らないと。」

俺達がこれから先、進んでいくのは修羅道。それでも俺達は二人一緒に進んで行くと、戦うと決めた。

その未知^道からは逃げ出さないし、負けない。何があっても勝つし、生き残る。

俺達は永遠になれない刹那で、俺は走り続けることでしか停滞を感じられない。

だったら、俺は永遠に走り続けよう。この未知^道を修羅道を、その先に行くべきまたは戻るべき安息の地があると信じて。

そして何より背後の残してきた陽だまりに、今日までの様に篝とも過ごすことが出来た楽しく幸せで何処か懐かしい日々の陽だまりに、

束と過ごす至福の刹那の陽だまりに。

回帰……再び陽だまりに戻るように疾走して駆け抜け、その果てにある至福の刹那を掴み、永遠になるようにしよう。そして、永遠になった刹那を無限に繰り返し、味わっていたい。

それが俺の変わらない思いであり、願望。だからこそ、そうなる様に俺も俺達も頑張ろう。

「そっか……兄さんも姉さんも頑張ってたね。その時は私が二人をたくさん褒めて抱きしめてあげるから」

「にやはは、それは楽しみだね。だったら、もっと頑張らないと」

楽しそうに笑う束に釣られて篝も楽しそうに笑っている。

本当に頑張らないとな。全力で。

もう、受け身ではないと自分に改めて自戒を立てたのだから。

そして、時間を見た。

「束、そろそろ」

「あっ……うん、分かった」

時計を見ると家の玄関を出てから約三十分以上経っている。

篝とさようならをしたくないと言うのがやっぱり、強かったんだろ
う。

時間なんて気にせず、話し合っていた。

でも、そろそろお別れをさようならをしないと。本当にいつまでもこうしてはいられない。

「それじゃあ、箒」

「お姉ちゃん達、そろそろ帰るね」

「うん、分かった」

名残おしそうな箒。

別れ間際、最後の最後になってもこんな箒の表情を見ると少し胸が苦しくなる。

だから、最後に

「おいで箒」

「うん」

箒を近くに呼んで三人で別れを惜しむ様に抱きしめあう。

箒を真ん中して、その両サイドから俺と束が真ん中の箒を抱きしめるようにして。

日差しが照りつける中だけど、不思議とこの瞬間は暑く感じなかった。

それどころか優しい暖かさを感じた。

別れを惜しむ様にこれで踏ん切りを付ける様に、と抱きしめあっている。

箒が別れが寂しくてなのか泣きそうなのを俺も束も感じて、頭を優しく撫でながら強く抱きしめる。

そうして少しだけの間、抱きしめあうと最後にぎゅっと抱きしめあい、離れた。

体を離すと箒は少し涙目だったが、嬉しそうに笑っていた。

「それじゃあ、ね。箒、元気で」

「ばいばい、箒ちゃん」

「うん、兄さんも姉さんも元気で。またね」

寂しそうだけど、笑みを浮かべながら手を振る箒ちゃん手を振り返して俺達は歩き出す。

やっぱり、後ろ髪を引かれる様な感じはするけども、その考えを払いのける様に小さくかぶりをふってその思いを振り切る。

これは永遠の別れじゃない。また、再会するための起点だ。

そう思いながら、俺と束は篠ノ之家を去り、IS学園へと帰っていったのだった。

再び箒と再会する為に頑張る為に

…

第三十八話（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十八話。

第との別れ、夏休み編エピローグでした。

今回で完全に夏休み編が終わりました。約二カ月間、お付き合い頂きありがとうございます。

久しぶりの綾君視点でしたが、書いていて違和感が凄かったです。

夏休み編は基本、東さん視点が多いので。

それに今回も最初は東さん視点にしようかと思いましたが、最後なのでということで綾君視点になりました。

それでもやっぱり、東さん視点が一番書きやすい。綾君視点は難しい（汗）

今回は少し展開が急だったような気もするのですが、いかがでしょうか？

何かありましたら指摘やアドバイスありましたらお願いします。

それと読んでいて何か思ったり、感傷的になれるかも今回気になるところです。

心理描写もちゃんと表現できていたかな？

リボンは第二十一話？の伏線回収でした。と言ってもちゃんと伏線張ってないんですが（汗）

それにこのリボンが原作で第が福音戦でリボンが消えるまでまでつけていたものとなります。

約十年持つリボン……：：～
の二日でリボン消えるのに。

ちなみに今回で綾君ははっきりと自分の渴望を自覚して事になっています。

まあ、矛盾的には気づいていないようなものですけど。締めのことばの何か変だな……どう変えればいいのか。

今回は一応10月1日ですね。二期編の掲載となります。その前にノクターンを頑張らないと。

構成を一からしなおしているので、大変です。

ノクターンしてほしいことがあるのなら、言ってくれるかもしれません。

まあ、こんな話をここでするべきではないのですが。

兎も角、お楽しみにしてくださいm()m

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とても嬉しいです

ご協力お願いしますm()m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何卒お願いします。

待っています。

お気に入り800突破記念小説・深く繋がる想いと身体（前書き）

見つからない人用です。

こついつの掲載しないようがいいのかな？

お気に入り800突破記念小説・深く繋がる想いと身体

このお話は「R-18」の作品となります。

18歳以上の方は、下記のアドレスにアクセスしてください。

掲載サイト：ノクターンノベルズ（男性向け18禁。 <http://noc.syosetu.com/>）
IS インフィニット・ストラトス Verweile
doch, du bist so schön（IF初夜/
深く繋がる想いと身体：<http://novel18.syosetu.com/n0688x/1/>）

設定（前書き）

この小説の設定書です。

綾君以外の設定もいるのかな？どうなんだろう？

（随時、追記していきます）

設定

> i 3 1 3 9 3 | 3 9 7 3 <

「名前」

かみやまりよう
神山綾

「年齢」

本編時は16歳

「身長・体重」

身長：176cm・体重：63kg

「容姿」

整った顔立ち、美男子

髪型は、短髪。黒髪、黒い瞳

イメージキャラ、Dies iraeの藤井蓮or櫻井戒

イメージボイス、寺島拓篤さん（創生のアクエリオン、アポロ。装

甲悪鬼村正、妖甲秘聞、湊斗景明等）

「概要」

この物語の主人公。

一見しっかり者で優しく物静かで少しめんどくさがり屋な性格だが、深層心理の域ではかなり好戦的な性格であり、『幸せな陽だまりに満たされ刹那を永遠に味わいたい』という刹那主義者。

雨の日の幼い頃に親に自殺され捨てられ、一人だったのを篠ノ之家に引き取られ居候の身となり、束と千冬とは幼馴染、篝の兄であり一夏の兄貴分。ちなみに篝に対しては重度のブラコン。

紆余曲折があつて幼馴染の束とは恋人同士で相思相愛。ただ、束の守り幸せにする為なら、自己を始めてする身の回りや世界全ての犠牲は問わないある種破綻者めたい一面もあつたりする。

この物語では『初めての世界でISを使える男』であり、IS学園

ではIS学園初代生徒会長を務める。
専用ISは黒百合

くろむぎ
黒百合

綾の第一世代型IS。機体イメージor機体装甲モデルは全身が黒くなったガンダムエピオン（背部スラスターはなしver）束が『初めての世界でISを使える男』である綾の為にだけに開発した専用機。コアは綾が唯一使えるナンバー002を使用されており、第一世代型ISとされているが、束が産み出す技術や武装を試験する試験機の意味合いもあり、厳密には第一世代型ISとは言えない。単一仕様能力「けんらんぶどう絢爛舞踏」を備えている他に綾が独自に構築したOSシステム『エイヴィヒカイトシステム』が搭載されている。複雑で細々とした機体設定やOS設定をしている為、紅椿の様な燃費効率が悪いというのはほぼ解消済みだがピーキー。待機形態は水星を模したペンダント。（イメージ的には、Dies iraeの香澄ルートの香澄から蓮に送られたペンダント）

マルグリット・ボワ・ジュステイス
罪姫・正義の柱

腕から刃が生える様に装備されているギロチンの形をした近接戦闘用の武装で黒百合の主力武装。イメージはDies iraeのギロチン、マリイ。

刃自体にエネルギーシールドを中和するエネルギーを微弱ながら纏っておりある一定の回数、エネルギーシールドをきり続けると一瞬だがその部分を破壊できる。

また、能力の切り替えて紅椿の空裂と同じく、斬撃そのものをエネルギー刃として放出することが出来る。

イメージとしての威力はジムのビームライフルぐらいの威力。

けんらんぶどう
絢爛舞踏

紅椿とほぼ同性能を持つ単一仕様能力。使用時にはギロチンに赤い

紋様の刻まれる。

紅椿の絢爛舞踏けんらんぶたうとは違い少ない残量のエネルギーを増幅して一気にフル状態にするのみの能力。

小説本編時の束や綾の技術力ではまだ、他のISとのエネルギー交換を機体接触するだけで即時実行出来るという部分の能力は安定性が劣悪で理論のみ止め実装していない。

いわば紅椿に備わっている絢爛舞踏けんらんぶたうの試作能力。

強襲用高機動パッケージ「黒椿」

原作でいうところの第二世代の理論「後付武装によって、戦闘における用途の多様化」をいち早く実装したオートクチュールと後付武装をあわせた様な武装。

黒百合機体全体に黒い増量重装甲（イメージとしては、劇ナデのブラックサレナA2型）通称「A2」を装着した状態。

装着時にはブラックサレナのコクピット内にバイザーを模した超高度度ハイパーセンサーと露出している肌などの身体保護の為に首の付け根まで黒い全身装甲となっている。

通常の加速で瞬間加速並みの速度を誇り、最大加速で装甲展開搭載ISの最大加速一歩手前の速度を誇る。

武装は試作BT兵器型の小型レーザーガン×2と尻尾のようなテールバインダーには、マジックハンドを内蔵。ツメはギロキンを簡易型にしたアンカークローになっている。

機動性と頑丈さを追求し機動力を低下させない為にこの状態では主力武装であるギロキンは展開できない。

また、このパッケージは装甲展開の試作品となっており、両肩の展開式スラスタバインダーから攻撃向けのエネルギーシールドを展開する事が可能となっている。

『CastOff』キャストオフで黒椿を量子返還して脱ぎ、『PutOn』プットオンで黒椿を再構成して、また装着する事が可能。

エイヴィヒカイトシステム。

搭乗者の渴望を現実の現象として、創り出すシステム。

このシステムを搭載する事により、ISの基本システムは促され、汎用性や情報処理能力等が高くなる。

エイヴィヒカイトシステムには四段階の位階が存在し、位階が上がることにより戦闘能力も飛躍的に増大していく。位階が一つ違えば、その戦闘力は次元違いになる。

また、ISが持つ単一仕様能力と組み合わせる事で、更なる効果・戦闘力を得る。
ワンオフ・アビリティ

元々は綾が構築をしたが、ISの自己進化と混ざり合い、綾の構築したデータを元に別に新たなデータを構築して、起動している。

ただ、搭乗者の渴望を現実の現象として創り出すといっても、現実法則を守った現実レベル最上限で可能なものしか現実の現象として作り出せない。

元ネタは、Dies iraeの永劫破壊・エイヴィヒカイト

設定（後書き）

という感じの設定書です。

気になる点やご不明な点、もっと記述してほしい点等がありましたら言ってお下さい

第三十九話

綾視点

九月三日の放課後。

ホームルームを終えた俺達三人は、まだ教室に残っている。

二学期は始まって早々から大変だった。

一日目は特に何もなかったけど、二日目は簡易形式の実力考査、三日目の今日は二学期初の実践訓練があった。

ちなみに二学期初の実践訓練の相手は千冬で、前半後半二試合して結果は、前半は勝ったけど後半は負けたという引き分けという結果だった。

総合的な勝ち数は、九勝八敗と俺が今だ一勝だけ勝っている。

そんな風に今日までの事を振り返りながら、背筋を伸ばして伸びをしているとふと隣の束を見てみた。

隣の席で座っている束は、楽しそうに小さく鼻歌を歌って、何やら机の上に置いたPADを楽しそうに見ている。

「何見てるの？」

「ええへー 夏休みの時の篝ちゃんといつくんとの画像だよ 可愛いでしょう」

そう楽しそうな明るい声で言って束は、PADを見せてくる。

ディスプレイには夏休みの時に束が記録していた篝や一夏の画像が写しだされていた。

篝と一夏が一緒になって笑っている顔や、二人の寝顔、夏祭りの時篝が神楽舞を待っている姿、俺たちと一緒に移っているもの。

はたまた撮ってないと思っていたプールに行った時を写した画像等、たくさんいろいろ画像がある。

どの画像に移っている筈は一夏は楽しそうに幸せそうにしている。

それを今隣で見ている東も当時のことをふと思い出させる画像達を見て、その時を思い出しているのか楽しそうに幸せそうにしている。

「夏休みのものか……よく撮れているな」

「そうでしょう 画像はもちろんのこと、動画だってあってバツチり綺麗に取れているよ。両方とも超高画質編集して、動画にいたっては超高音質なんだよ 凄いでしょ」

「凄い……と言っか、凄いすぎだね」

「東だからな。それでだ、よかつたらその画像達いくつかくれないか？」

「ん、いいよ いくつんのを大量にちーちゃんの端末に送ってあげるよ あっ、綾には篝ちゃんのを大量に送ってあげるね」

「わ、私は……別にそんなことを思ってたじゃないぞっ」

「あっ、はは……ありがとう東」

千冬の反応に微笑ましいが思わず苦笑いが零れた。

千冬は何処か照れたように言っていたが、満更でもない様子。

むしろ、あんなことを言っただけの気がない不利していたけど、目が欲しそうにしていた。

流石はブラコン。

「あいたっ」

「変なこと考えるな。シスコン兄貴」

幼馴染の感だろうか、考えを読まれていたようで軽く小突くように裏拳を頭に当たられた。

しかも、皮肉まで読まれて、皮肉で返されてしまった。俺達の様子を見て、束は楽しそうに小さく笑っていた。

そんな放課後の一時を過ごしていた時だった。

まだかなりの生徒がいる教室に担任の先生が入ってきた。表情は何かを考えて、悩んでいるよう。

担任の先生は俺達が座っているに歩いて向かってくる。

「（何だろ？）」

自分に思い当たる節がないから警戒してしまう。

でも、基本的に思い当たる節がないのに先生といった大人が近づいてきたら、僅かばかりでも警戒してしまうものだから仕方ないだろう。

でも、本当に何だろう？ 何か用事でもあるのか？

「あの……神山君、お話があるのですがいいですか？」

「……何ですか？」

「あの、ですね……よろしければ、生徒会長をして頂けませんか？」

「はい？」

「「えっ?」」

突然のことに俺は何とも情けない声を出してしまい。
束と千冬は、普通に驚いた声を出していた。

「……………どうしてですか?」

「えーと、ですね。二学期に入ってからこの学校も漸く落ち着いてきて、部活動などを正式に初めようかという話が職員会議の方で上がって、その先駆けとして生徒会の創設をということになりました」

このIS学園に生徒会というものは今のところ存在していない。

学校側はISを軸にした学校運営に精一杯でそういう事細かなところまでは手が回らなかつた様だ。

だが、二学期になった今は学校運営に落ち着きが出てきて、漸く事細かな部分に手を出せるようになって、だからこそその生徒会創設なんだろう。

生徒会さえ運営させる事が出来れば、生徒主導の学校作りとかいった名目で、ほとんどのことを生徒に任せられる。言ってしまうえば終わりだが、ちょっととした便利屋だ。

だけど今、同好会みたいになっていく部活を正式に活動させる事が出来るようになったり、その他様々な事も出来るようになる。だからこそ、生徒会の創設は急務なんだろう。

意図や理由は分かっているし、説明は大体分かった。

先生の言っていることで変なことも間違っていることもないが、俺が聞きたい事はべつのこと。

「大体分かりました。でも、どうして俺なんですか?俺、男ですよ

「他にもっと凄い適任者がいるでしょう？二組のアルスターさんや千冬とか」

俺が聞きたい事は、どうして生徒会長の白羽の矢が俺に当たったという事だ。

別に逃げているわけじゃないが。いや、こう考えている時点で端から見たら逃げ後なんだろうけど、逃げているつもりは毛頭ない。

ただ、俺は男であり。源さん達のような特殊な事情でいる男性陣を除けば、この学園は生徒も先生も全て女性のある意味では女の園・女子高なのだ。

そんな学校で男が生徒会長をしたという現実的な実例をまず聞かないし、ありえない。だから、遠慮というか……抵抗みたいなものを覚え、感じてしまう。

実際のところ俺に生徒会長の白羽の矢が当たったのは、俺が『世界で今のところ唯一ISを動かせる男』であるを広告塔にでもしたいんだろう。

『世界で今のところ唯一ISを動かせる男』がIS学園・初代生徒会長にでもすればIS学園の知名度があっがって、良いか悪いかは別としてそれなりの評価が来るんだろう。

「確かに神山君が男ということに反対意見はありましたが、それは少いで。神山君の総合成績は学年二位ですし、実務成績にいたっては一位。そして何より六月に学年トーナメントに優勝したことがあって、神山君が生徒会長に選ばれました。それに人格面においても神山君は優しく堅実的な人ですからね。それも選ばれた理由としてあります」

ナ、ナンダッテー。

そう思わず棒読みでもいいから言い言いたくなる選ばれた理由だっ

た。

総合成績や実務成績はいいだろう。でも、ここで来たか……学年ト
ーナメン優勝という結果は。

前者の二つよりもこの後者の学年トーナメン優勝という結果が白羽
の矢が当たった理由として大きいんだろう。

あの時思った『これから物凄く面倒な事が待っているんだろうな』
というのが現実のものとなったしまった。まあ、仕方ないか。
というかやっぱり、人格面を過大評価しすぎな気が。

すると、黙って聞いていた束が珍しく口を挟んできた。

「本当にそれだけの理由ですか？どうせ、綾が『世界で今のところ
唯一ISを動かせる男』であるのを広告塔にでもしたいんでしょう
？違います？」

「えっ？あつ、はい。そ、その通りかもしれないせんっ」

束の無表情・無感情の威圧に圧倒されてか、少し怯えたように答え
る担任の先生。

束の威圧は確かに怖いのかもれないけど、それでいいのか担任の
先生よ。

でも、ああ言ってくれた束の言葉にはいつも以上にトゲがあって何
処か不機嫌そうにしている。

俺の事を思っやっぱりそうだろうと思ひ、そうだと分かってムカ
ついてくれているんだろう。正直、嬉しい。

それにやっぱりそうだったか……

束は感情的になったムカついているようだけど、俺としては何とも
思わない。

使えるモノは度を越さない程度なら使ったほうがいい。

それに俺と東とIS学園・政府またはIS委員会は、今のところ持ちつ持たれつ関係であるの。
だから、そういう風に使われるのは別に構わない。こっちも二充分に使わせてもらっている。

「でも、反対意見も少しはあつたんですよね？」

「はい、ですが、先ほどの選んだ理由を言ったら納得していただきました。それに他の人達、二組のアルスターさんとかにも聞きましたが、皆さん生徒会長に神山君を指定されました。織斑さんはどうですか？」

「そうですね……私も生徒会長はいいです。生徒会長には綾の方が適任だと思います。それに綾にはたまにはこういうことをしてもらわないと」

他の人達はおとろか千冬にまでこう言われてしまう。

それに千冬の最後の台詞は先生よりも俺に言っている感じだった。確かに今までこういうことは避けてきていた。受け身でいるのもやめると誓ったことだし、いい機会だ。やってみようかな？

「ちなみに他の役員とかどうなっていますか？」

「まだ決まっています。その辺りは神山君が引き受けてくれるなら、好きに選んで下さいとのこと。ちなみに生徒会には専用の生徒会室が用意されています」

役員を自由にしているところ、こういうところは適当なんだな。体裁と活動されればいいというわけか。

役員を好きに選んでいいとかここまでくるとご都合展開ばいな。いっちゃんいけない事だけだ。

だけど、大変ありがたいことには変わりない。

あまり知らない人達と一緒に活動するよりも、よく知っている人達と一緒に活動する方が活動しやすい。

束と千冬に声をかけたら、快く承諾してくれることだろう。

それに専用の部屋まで用意されるといったれにつくせり。ここなら昼間自由に使える様にしたらゆっくり過ごせる。

現金な考えばかりしているが、断る理由はまずない。デメリットよりもメリットの方が勝っている。

それに大変なのは予想済みだがやりがいはあるそうだ。

だから俺の返事は

「分かりました。生徒会長をさせていただきます」

「本当ですか?! ありがとうございますっ!」

引き受けると担任の先生に深々とお辞儀されながら感謝され。

教室で話していたものだから、話の結果はこの教室にいた人達に聞こえていた様で暖かい拍手に包まれる。

大した事に全くしてないのに、こういう事をされると照れる。

「それでは簡単な手続きの方をしなくてはいけませんので、着いてきてください」

「分かりました」

先に教室から出ようとする担任の先生の後に着いていき、教室を後

にした。

それから数分後、職員室に行き簡単な手続きをすませた。

職員室に入った早々、俺が生徒会長になるということが伝わったらしく、職員室でも先ほどの教室同様暖かい拍手を送られた。

「それでは副会長は織斑さん、副会長兼会計は篠ノ之さんでよろしいですね」

「はい」

と二人が答える。

生徒会長になった俺以外に決まっている役職の人は先生の言葉通り。

千冬が副会長で、束が副会長会計。

二人とも声をかける前に自らやってくれると言ってくれて、その場で即決まった。

ちなみに束の役職は副会長も兼任する会計という役職。

最初は束も副会長をやると言ってきていたけど、副会長の仕事は基本的に生徒会長のサポートでその他には大した仕事がないだろうと二人はいらぬだろうになり。

束を説得し束の能力を遺憾なく発揮してくれるだろう会計に副会長も兼任という形でついて貰った。

その時の束は案外、あっさりと説得に応じてくれた。まあ、束のことだ『綾と一緒にいたら何でもいい』とかだろう。そうだったら嬉しいが少し複雑みたいな気分だな。

後、その他の役職に付いてくれる人はまだ決まってない。今の

ところは追々決めるという事になっている。

人手は足りないが、それでも充分三人で生徒会として動く事が出来る。それによく知っている馴染み深い二人の方が仕事をしするだろう時しやすい。

束と千冬の簡単な手続きも済むと生徒会の仕事や活動についての説明や、諸注意をされると。

先生とはその後分かれて、場所と生き方を教えてもらうと早速、用意されている生徒会室へ行くことになって向った。

「ここか」

生徒会室と思わしき部屋の扉の前に千冬のその言葉の後に中へと入る。

部屋は夕暮れに照らされているだけで薄暗く部屋の明かりのスイッチを付けてみる。

「凄いね」

「そうだね、綺麗」

明るくなった部屋を一度見渡してそう感想を漏らす俺と束。

生徒会室は新しく作られた部屋であり、綺麗だった。

部屋には、今のところ長テーブルが一つとその周りにイスが数個あってシンプルだが。

内装はアニメや漫画などでしかみた事がないお金持ち学校の生徒会室そのもので何処か高級感漂う内装。

ここでも無駄に金がかかっているな。

「~~~~」

鼻歌を楽しそうに歌って、物珍しそうに部屋を見て、近くのイスに座る束。

その後が続いて千冬が座って、俺も最後に束の隣に座る。

ここが俺達これから生徒会として活動していく活動拠点になるのか。

ここでこれからいろいろな出来事が思い出が作られていく。気が早いもしれないが、そうしみじみ思ってしまう。

それに今はこの生徒会室は新品で綺麗で物はすくないけど、これからその内私物が増えるんだろうな。

そついうの青春ぽくていい。

そんな事を思いながらイスに深く腰をかけて、ぼーっとしていると束が何かを思い付いた顔をしているのに気づいた。

「どうしたの？」

「これで私達は正式に生徒会となって、綾はIS学園の初代生徒会長になったわけだよね？」

「そうだな……私達が初めてなわけだし」

「だから」

何かを企んでいる笑みを浮かべ束はもったいぶる様に言う。

なんだろう？ いつも通りよからぬことが起きそつな予感がする。

特に俺だけによからぬ事が起きそつ。

「伝統の言葉みたいなもを作ってみない？」

「はっ？」

喜々として意味が今一つ分からない言葉を言う東に千冬が呆れ返った様に聞き返す。
「どういう意味だ？」

「だから、伝統の言葉。私達がIS学園の初代生徒会になった今っ！私達がこれから未来への伝統の基盤は必要なんじゃないかな？と思ったのっ」

「また、バカな事を」

「酷いなっつ、ちーちゃんは 特に必要なのは私達に生徒会長だね 生徒会長は生徒の長たる存在、そんな存在が頼りなくてはダメっ。 綾な凄い素晴らしい生徒会長さんでないと。だから、次世代の生徒会長を戒める言葉が必要だと思って。気は早いけどね」

「早すぎだ。それにまだ何もしてないからね。そんなもっもらしい事言っつて、何となくとか面白そうだから言っつてみたとかでしょう？」

「にはやは、バレちゃった 流石、綾」

「はあゝそんなことだろうと思ったよ」

言い当てられたのにも関わらず、悪びれる様子とかはなく、楽しそうに笑っている東に呆れて思わず溜息が出る。
千冬も同じ様になっている。

悪い予感の正体はこれだったか。

こう言っちゃダメだけど、またしょうもない事を。

必要性は感じられないけど。でも、確かに気は早すぎるが確かにそういうのがあっても悪くはないだろう。

そんな言葉があってもそうするかはその時に生徒会長になった人の自由だし、もしかすると束の言っている通りいい戒めにもなるかもしれない。

しょうもないけど、悪い話ではない。俺に害は今と頃ないぽいし。

とりあえずまだ続きあるみたいだし一応聞いておくか。

「それで何か束にはいい言葉とかでもあるの？」

「もちろん この天才束さんに抜かりはないっ！それでは筆ペンと半紙を用意しまして」

「どこから出した？」

「何処からでもないよ。種のしかけもなく出した束さんマジックだよ それでは、サラサラツサラツ〜」

束は持つていなくつたはずなのに何処からともなく筆ペンと掛け軸みたいな長い半紙を取り出す。

そして、それを机の上に奥と口で動作を歌いながら筆ペンを走らす。手際がいいというか……束の奴、初めっからこのつもりだったな。

そして書きあがり、筆ペンを置いて束が持つて見せる半紙を俺と千冬が覗き込んだ。

「『IS学園の生徒会長たるもの最強であれ?』」

俺と千冬の声が重なる。

半紙には『IS学園の生徒会長たるもの最強であれ』と書かれてあった。

しかも、書道家の名人すら顔負けな綺麗で字で書かれてあった。本当に手際がよくて、手が込んでらっしゃることだ。まったく。と言っか……

「束? 一つ質問が」

「何々?」

「どうしてその言葉なんだ」

もっと別が言葉があったろうに。

よりによってこんな言葉を思い付いたのか分からない。

生徒会長の強権が伝統となりそんな言葉を。

俺が少し不満そうに言ったのが気に入らなかったのか、束も不満そうに言っ。

「ええ〜どうして? いい言葉じゃんっ!」

「いい言葉? なんだろうっけど意味が分からない」

「疑問符なのが束さんショックっ! それに意味ならちゃんとするよ。ほら、生徒会長って言っなれば全ての生徒の長なわけでしょう?」

「まあ、言っなれば……そうだね」

「でしょう？しかも、IS学園は現在現行のする兵器を凌駕する最強の兵器ISの操縦者を育成する学校。そういう学校だからこそ生徒会長は最強ではならない。ただ最強つてのは、力だけじゃない。ISの操作技術はもちろん、戦闘力、学力、運動神経、そして人間性……それら全てが最も強い人じゃないと」

「……」

「そうじゃないと私の愛子達には乗ってほしくないね。会長をなのるぐらいなら、そうでももらわないと。だからこそ最強であれ、なんだよ」

そう束は説明してくれた。

確かに束の言っていることはもっともだし、一理ある。

現在最強の兵器として君臨しているISの操縦者を育成する学校で、学生達の長である会長が弱い人では務まらないし、示しがつかないのかもしれない。

その強さはただの力の強さではなく、学力や運動神経……人間性も含めての強さか……

上手い事言ってきたし、見事に納得させられてしまった。隣にいる千冬も納得した様子だ。

だけど、俺がその最強である存在であるのか？

掲げる以上は俺はその言葉通り、最強である存在でなければならぬ。

掲げるのならこれは思ったよりも責任が増えるな……最強であるつもりだけど、初代だけにその責任は大きいだろう。

だから、少し不安と言うか心配と言うか、そんなよく分からない気持ちになつてさい聞いていた。

「仮に掲げるとして、束は俺がそういう存在だと思つてゐるの？」

「もちろん。綾は自分を過小評価しすぎなんだよ。綾は自分が思つてゐるよりも何倍も何倍も凄い人なんだから」

そついつになく真剣な様子で笑みを浮かべて束に豪語するように言われてしまった。

束にここまで言われたらそうなんだろうし、自分でもそつ少しながらでも今は思えた。
しょうがないな。

「分かった。その言葉をとりあえずその伝統の言葉をとして掲げよう。せつかく書いたことだし」

「いいのっ?! やつたっ」

「いいのか?綾」

「うん。この言葉通りできるか分からないけど、とりえず自分なりに精一杯頑張るつもりさ。その最強でも目指して。」

それにこついつのがあつた方が俺にもいい戒めになつて、これから頑張れるよ」

「そつか……まつたく、綾らしいな」

「だね。でも、綾なら最強であれるよ」

こうして今日この日。

生徒会初の仕事（？）として生徒会室の奥の壁に

『IS学園の生徒会長たるもの最強であれ』という言葉が掲げられた。

とりあえずこれからこの言葉を戒めにして頑張っていこうか。束達と一緒に。

そう心の中で意気込んだ。IS学園初代生徒会創設と初代生徒会長就任の日だった。

だが、この掲げた言葉とその結果が後々の新たなトラブルを今込む事に俺は

「……大変な事になりそうだ」

「ん？そうだね」

と、俺は薄々気づいていたんだよな……

…

第三十九話（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第三十九話。

本来なら10月1日に更新しようかと思ったのですが。

ゆっくりしていると原作開始まで遠のいたり遅くなったりするので更新日を早めました。

今回からついに二学期編が始まりました。これから物語は加速していきます。

今回の回で綾君達が生徒会に入って、綾君が初代生徒会長に就任しました。

定番の展開ではありませんけど、やっぱりこうしなくっちゃせつかなんだから。

綾君が就任するまでのいざこざを書こうと思いましたがグダグタするのでやめました。

束さんの役職は正確には会計です。イメージ的に会計だったので会計になったもらいました。

ただそれじゃあ、綾君と釣り合わないので副会長を兼任させて頂きました。

ここも少しもめようかと思ったのですが、グダグダになるので（以下略

この回で綾君が生徒会長になったことあの言葉を掲げた事で

あるキャラとの強制フラグが立ちましたwwwあの人ですよ。あの人ww

そのためもあって綾君に生徒会長になった貰いました。

余談ですが。

先日発投稿したノクターンの感想が今のところ0件という。悲しいです。

まあ、読んでくださっていること分かっていますし、感想を書きにくいのも分かりますが
やっぱり、感想はほしいです。例えどんな話でも短くてもいいから少しでも多く。

評価も頂いていますが、感想の方が嬉しいです。
目に見て何処が面白かったのかとかよく分かるので。

それに最近感想は少ないですし、可愛い束さんがちゃとかけているのか分からないっ！！

それに最近、綾君と束さんが恋に落ちた話も

ちゃんと恋に至るまでが丁寧を描かれているのか、分からないっ！！
僕の筆を進める道も分かりません。だれか助けてくださしゃあ

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(_____)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願っています。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ

!

イラスト集

> i 3 1 3 9 3 — 3 9 7 3 <

現在、ピクシブの方にて活動してらっしゃる、私の相棒の『近衛守』大先生に書いて頂いたっ！

この小説の主人公、神山綾君ですっ！

うん、ブラボーっ！マーベラスっ！

かっこいいですっ！初めて見た時はかっこよすぎて唾然としました
WW

大先生、上手いよっ！大先生っ！ありがとう、そしてありがとうっ！

ちなみにこの絵は、綾君のイメージキャラである

Dies iraeの主人公、蓮炭こと藤井蓮をベースに、『近衛

守』大先生に書いて頂きました。

なので雰囲気似ていますww

本当はもう一つのイメージキャラである戒兄さんで頼もっかと思っ
たんですが。

いい参考画像がなくてやめて、イメージキャラの蓮炭で頼みました。

それでもマジ幸せ者っ！ww

こんなにイメージ通りに描いてくれるなんて！

私ビックリw

> i 3 2 1 1 2 — 3 9 7 3 <

二枚目

再び現在もピクシブで絶賛活動中の
相棒、近衛大先生に書いていただいた
綾君と束さんです。

相変わらず上手いつ！素敵ですね〜

つてか、綾君www

束さんに襲われているwww

いいぞっ！そのままいけーっ！www

そして、又ル又ルのネチヨネヨをしまえwww

ちなみに束さんにウサミミカチューシャがついますが、学生編では
つけていません。

ですが、判別しやすいようにとつけて書いていただきました。

イラスト集（後書き）

感想や評価等を頂けると私も相棒も喜びますので何卒お願いします
つ m (| |) m

『近衛 守』大先生はピクシブでも素敵なイラストや作品があり
コメントや評価がほしいとのことなので
ぜひ見てそうしてあげてください m (| |) m

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり
週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっ
ても嬉しいです

ご協力お願いします m (| |) m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞い
て下さい。

よろしければ、感想やアドバイスや批判指摘 or 誤字脱字報告を何
卒お願いします。

待っています。

第四十話

綾視点

「はぁあっ！」

「おおおおっ！」

ガアアンツ！ガアアンツ！と鋭い金属音を響かせながら、雪片とギロチンの刃が衝突する。
そして、ぶつかり合った刃同士を離し、跳ねあう様にして距離を取り合う俺と千冬。

生徒会が発足してから早三日おり、今日は土曜日。

俺達は今第三アリーナにて、今日の午前中の授業である実践訓練をしている。

ただ今日の実践訓練はいつもとは違い、派遣されてやって来た倉持技研スタッフによる、黒百合と暮桜のデータ収集が実践訓練と平行してデータ採取されている。

今日の実戦訓練の課題は機動性をメインにして生かしたもので、いつもとは違う感じがする。

「はぁっ！」

「ふんっ！」

すれ違い様にギロチンと雪片の刃が激しく何度もぶつかり合い出来る剣戟。

戦いはいつも通り五分と五分。エネルギー残量もまったく同じ。

いつも通りの戦況、俺と千冬の強さというものは同じらしく、同じ強さの者同士が戦えばこうなる。

だが俺も千冬もお互いまだ、決め手・切り札は出してない。だから、決着はいよいよだ

「ふんっ、はあっ！」

「っ！」

雪片の柄の先で強く様に牽制される。

とっさことだった、体を半身引き緊急回避した。

すると、それを狙っていたのか、千冬はそのまま柄の突きから流れる様に雪片を真横に薙ぎ払い

「貰ったっ！」

「くっ……っ！」

瞬間、俺は負けを確信した。

一歩早く千冬の決めてである零落白夜を瞬間的に発動され、雪片が真横に薙ぎ払われる。

柄による突きは回避に成功したが、ここまで間合いを詰められては、回避する事も小回りの聞き難いギロチンで受け止め流して防ぐ事も出来ず。

零落白夜を発動した一戦をもろに食らった。

そこで俺のシールドエネルギーは0となり、試合終了を告げるアラームがアリーナに鳴り響いた。

・
・
・

「これでお互いに九勝九敗か……同点だね」

「そうだな。まあ次、戦った時も私が勝つのだな」

「抜かせよ、次は俺が勝つ。でも、してやられたよ。柄での牽制から零落白夜の一閃、見事だったよ。あれは流石に回避も防御も出来なかった。流石は千冬だよ」

「アレは私の秘策だからな。避けられては困る。だが、お前も凄かったぞ？」

「前の実戦訓練では零落白夜を当てたと思ったら、瞬間的に絢爛舞踏で回復されて、零落白夜の隙を上手くつかれて負かされたのだからな」

「まあ、そのぐらいしないかね。何たって今は会長さんなわけだし」

「そうだな」

楽しそうな笑みを浮かべて言う千冬。

今日は千冬の勝利という形で今回は幕を引いた実践訓練。

その簡単に報告と片付けを終わせた俺と千冬はISスーツのまま、束と派遣されてきた倉持スタッフが待っているピットへ向かっている。

負けはしたが、いい実践訓練だったし、機動性をメインにした実戦訓練でもあったから、悪くてもそれなりのデータ収集は出来ているだろう。

「お帰り、綾 ちーちゃん」

ピットに戻るなり、俺と千冬を満面の笑みを浮かべた東が出迎えてくれた。

その表情を見る限りは今日の実戦訓練の結果にも満足してくれたんだろう。

出迎えてくれた東に俺と千冬も言葉を返す。

「ただいま、東」

「ただいま」

「うん、お帰りなさいっ 二人とも今日も最高だったよ 機動力をメインに戦ってくれたからバッチリデータは取れた」

「そっか、それはよかった」

東の言葉と変わらない嬉しそうな表情に一安心する。

ピット内を見渡す。

そこには沢山の機材があつて、顔だけは見知った倉持技研女性スタッフが数人居て、どうやらデータ収集の整理をしているようだ。

その女性スタッフの中にはとってもよく知った久しぶりの人が居た。

「お疲れ様〜千冬ちゃん、綾。と言うか、お久しぶりっ」

「お久しぶりです。奈々さん」

「お久しぶり奈々さん、来ていたんですか」

「綾達の試合が始まった直後にね。これでも倉持の所長ですから

それと可愛い子供達の学園での様子を見にね」

笑みを浮かべ喜々とした声で言う奈々さん。

ピットへ戻って奈々さんがいるのを見つけた時驚いた。

居るなんて知らなかったし、ましてや来るなんて思っても見なかったから、見間違いかと最初は思ってしまった。

様子見とは言っているけど、半分以上はデータ収集の仕事で来たんだろう。

倉持では束の次にISについて詳しく、言っていた通り所長という立場にいて。

それに現に奈々さんの手元には奈々さん専用のPADがあり、操作しながらデータ整理の仕事をしているみたい。

奈々さんと言えば、師匠も来ているのだろうか？

何だかんだで二人ともいつもよく一緒にいるからな。

何となく気になって聞いてみた。

「奈々さん……そう言えば、師匠も来ているんですか？」

「一郎さんなら来てないわよ？仕事でIS委員会に行かさせているわ」

「IS委員会……何かあったんですか？」

「心配しなくても大丈夫よ、束ちゃん。また、この二機のことですごくつつかれているのよ」

「ああ……またですか」

警戒した様に心配した様に聞く束に言った奈々さんの言葉を俺は呆れながらも納得する。

最初の頃よりは大分マシになったが今だに二機について各国からしつこくつつかれてる。

二機のコアの所属は便宜上一応は、日本になってはいる。アラスカ条約をちゃんと正式に守った上でそうなっている。

だが、二機とも束が直接開発した機体。だから、ISを所有する何処の国もその二機が喉から出るほど欲しくて。

その二機が小国である日本に所属している事が他の国にしてみたら、気に入らなく疎ましくことあるごとについついている。

呆れるばかりだ……IS学園に入学する時にそれ関係の話をそれを納得するという事でも。

世界で唯一男として使える俺の運用データの一部を全世界への公開と束は少しでもいいから知識と技術協力をしてほしいというのに許容と予測の範囲内で受諾したのに。

師匠の呆れている顔が目につかぶ……頑張ってください、師匠。

もつとも二機とも所属は便宜上一応は、日本になつてはいるが、それは束の科学者としての出身地みたいな倉持が日本にあるから日本所属というだけで。

正確には二機との何処にも所属しない束の所属下にある。

千冬は日本所属で代表兼代表候補だが、俺は束の所属下にいる。

俺は『今のところ世界で唯一ISを使える男』というのがあって、二機同様何処の国に所属しても新たな争いに火種になりかねないの
で苦し紛れの苦肉の策でそうなっている。

「またよ。呆れちゃうわね、ちゃんと納得したはずなのに。小国である日本の今の地位を認められないのは分かるけど、過去の繁栄や栄光にしがみ過ぎよ。世界は変わったのだから、前を向いて冷静に

ものものごとに見つめない」と

「そうですね……でも、師匠が行ってくれているのなら大丈夫そうですね」

「そうね、生きる伝説だし、本当に不可能を可能にする人だからね、私の旦那様は。それに各国共に一郎さんに昔の借りがあるから迂闊に手を出せないわ。心配しなくて大丈夫」

何でもないように言うけども充分惚気て言う奈々さん。

師匠もだけど、奈々さんも師匠にベタ惚れだな。相変わらず、ラブラブ夫婦の様で何よりだ。

それに師匠なら今回も何とかしてくれそうだ。流石は師匠……やっぱり、そういう一面があると口には出さないが師匠の事をものすごく尊敬する。将来は、ああいう凄い人になりたい。

ちなみにだが、昔の借りとは。俺たちが生まれる前に水面下で大きな世界大戦が、世界の裏では行われていたらしく、それを終結させたのが師匠。

大した損害もなく瞬殺の様に停戦させたことから各国はIS世界となった今でも師匠に大きな借りがあって、迂闊なことをするのは避けているらしい。

本当に化け物の様な人だな。尊敬はしてあかないとは思うが、変態人外までにはなりたくない。

それにやっぱり、俺と束には敵が多いな。

今の世界ひいてはISを認めず排除しようとする人達、ISを認めざるおえなくても認めた人達でもISを利用して俺達をあれやこれやの手段で取り込もうとする人達。

そんな人達が俺達と敵となりうる人達。やっぱり、世界を変えると

うのは本当に大変で難しい。

それでも俺は束を守る。何に代えても絶対に。

そうしてデータ収集が終るのを待っている

「そう言えば、理事長の十蔵さんから聞いたんだけど、あなた達生徒会に入ったんですってね。しかも、綾が生徒会長なんだって？」

「はい。俺が生徒会長をやらせています。他は千冬が副会長をして、束が副会長兼会計をしています」

「へえ〜そうなの。でも、綾がそういうことをするなんて……やっぱり、変わったわね」

「そうですね？あ、いや……変わったかもしねませんね、あの夏の日から。いつもまでも受け身でいるのはやめると強く決めたので」

「ふふっ、綾もだけど、束ちゃんも変わったわ」

「そうですね？」

「ええ、自ら生徒会をやるって言ったんですってね。変わったわ、束ちゃんも」

「まあ……昔のままでは流石にいられないですからね。もう……」

奈々さんの言葉に何かを思い出しているのかしみじみとして感じで言う束。

確かに束も変わった。

生徒会を自分からやると言ってくれた辺りそう実感する。やっつてはくれるとは思っていたけど、仕方なしという感じでだと思っただ。

「ただ、実際は自分から生徒会をすと言ってくれた。」

「それが俺は嬉しかった。やっぱり、どんな形であれ変わるといのはいいことだから。」

「それに束の言うとおり俺と束は昔のままでは流石にもういられない。変わっていかないと……この道を進んだ先に幸せに溢れた未知があると期待して。」

すると奈々さんは、俺達の様子を見て嬉しそうに微笑んで言う。

「やっぱり、息子と娘の成長が見れるというのは嬉しいわ。もちろん、千冬ちゃんもよ。若いっていいわね。」

「奈々さんだつて充分若いですよ。」

「そんなこと言ってもお小遣いはあげないわよ、綾。それで生徒会は何かもつ初めの仕事したの?」

「今は生徒会の活動の土台作りと小さな雑務ばかりですね。後、大きな仕事と言えば……各部活の創設ですね。もう、部活は活動している活動は活動しています。」

「そうなの……三人は部活入っているの?生徒会との掛け持ちはアリなんでしょ?」

「はい。俺と束は部活には入ってませんが、千冬は。」

「私は生徒会優先ということで剣道部と誘われて興味があったので茶」

道部に入っています」

生徒会の初めての大きな仕事は部活の創設だった。

生徒会創設から三日で部活を創設する事が出来たおかげは各所で存在していた同好会の存在のおかげだ。

同好会を部活へと格上げみたいなものにするだけで正式な部となるので、精々部活の創設申請の書類説明の為に各所を走り回るだけで済んだ。

俺と東は部活に入っていないけど、千冬は剣道部と茶道部に入っている。

東はどこも興味がなくめんどくさくて入っていないけど、俺は立場上特待の部に入ると今は部活が少ないからいいけど苦情が多くなるかもしれない為に入らなかった。

本当に剣道部に入りかったんだけどな……まあ、入らなくても素振りや型の稽古ぐらいは出来る。それに部活に入って東との時間が減るのは惜しい。

それでもただ驚いたのは千冬が剣道部だけじゃく茶道部に入ったという事だ。

生徒会優先という事でその二つに入ったらしいけど、千冬が茶道部か…不思議な組み合わせと言うか感じだけど、着物姿の千冬も絵になることだろう。

ちなみに千冬には中学の頃よりも物凄い部活の勧誘があったらしいけど、やっぱり丁寧に断ってなくなくと納得させたらしい。流石は千冬だな。

「千冬ちゃんが茶道部ね」

「はい」

「？」

「ああ……なるほど。花嫁修業の間って奴ね……目指せ大和撫子ね 千冬ちゃん」

「……は、はいっ」

一瞬奈々さんは俺を納得した様に千冬に言った。すると、奈々さんは言葉の意味を理解したらしく、頬を薄く赤く染めて照れたように返事していた。

どうして奈々さんは、俺を見た？

花嫁修業、大和撫子、千冬が茶道部にも入った理由が俺に関係しているのか？

そういうのに疎い俺は意味が分からなくて、隣でいる束に聞こうとしたが、何処か少しだけ複雑そうな顔をして手元のPADを弄っていて、聞くに聞けない感じで聞くのをやめた。

まあ、いいか分からなくても。世の中には知らなくてもいい事があるのだから。

すると、収集したデータの整理が済んだのか倉持の女性スタッフが奈々さんと束に声をかける。

「所長、副所長。先ほど収集したデータ整理が終わり、そちら端末に整理したデータを提出しました」

「はい、今確認しました。それでは私と副所長は操縦者二人と機体の打ち合わせ等があるので、皆は機材を簡単に片付けた後、いつもで帰れるようにして各自休憩して下さい」

「分かりました。一先ずお先です。お疲れ様です」

仕事口調の奈々さんから指示を貰うと女性スタッフは持ち場に帰り、機材の片付けを始める。

ふと、隣の束に再度見ると手元の端末に送られた整理されたデータを
見ているのか、真剣な表情で楽しげに興味深そうに見ている。

それは奈々さんも同じで、楽しそうに束と同じ様にその送られたデータを見て、口元を楽しそうに吊り上げて言った。

「はあ〜これは凄いわね。前に取った時よりも倍以上に成長しているわ。あなた達……本当に人間？」

「失礼なっ！師匠じゃないんだから、普通の人間ですよっ！」

「そうですよっ！」

「でも、本当に人間か疑いたくなるほど今回の収集したデータは凄
いよ。データ収集した前よりも倍以上成長しているし。」

それに何より、二人とも単一仕様能力を瞬間的に発動できる様になっ
てオンオフ・アビリティいるからね」

結果が嬉しいのか楽しそうに言っ
て手に持っているPADを見せてくる。

その画面には今回の実戦訓練と前回の実戦訓練に収集したデータ
が分かりやすグラフとして比例されたものが映し出されており。

奈々さんや束が言うとおり俺達が倍以上に成長しているの嫌でも分
かる。

改めて以前と比較されたグラフとして見ると、自分でもよく成長し
ていて、自分の成長に我ながら不思議と感心してしまう。

でも、このぐらいがある意味当然みたいなものだ。

ISに乗れると分かって、束から黒騎士の変わりに黒百合を貰った日からずっと駆け^繰抜け続けている。

その頑張りが一つの結果として実ったのが単一仕様能力の瞬間的な発動。^{ワンオフ・アビリティ}

今までは単一仕様能力に数秒の間を要していたが、今では俺も千冬も意識するよりも早く発動できる様になった。

それが出来るようになったのは最近で、入学する前からその特訓を始めていたから、約一年苦労したのはいい思い出だ。

だから、このぐらいがある意味当然みたいなもの。強さに執着しているわけじゃないけど……俺は、もつと強くあらないと。大切な人を束を本当に守りきる事が出来るぐらい。

「今回のメインの機動力の方も二機ともバツチりだし、これならえーと……キャノンボール・ファストだったけ？それも二人の一騎打ちになりそうね」

「あつはは、確かにそうかもしれないね」

奈々さんの意見に同意する様に愉快そうな笑みを浮かべて言う束。

キャノンボール・ファスト……確かに今月の末に開催が予定されていた。

学校というか政府・IS委員会企画なので、俺達生徒会には仕事はないが連絡は来ていたのを覚えている。

キャノンボール・ファストとはISの非常に高い機動力に着眼して行われるISを用いたレースだ。

臨海区にある全長約一キロメートルのコースを平均時速六キロメートルで駆け抜ける、地上サーキットレースでは世界最速のレースである。

今年から開催され既に各国や各機関では試験的に実施されているらしいが、IS学園の様に大きなコースでやるのは初めらしく、大会である同時に試験実施の意味合いもある。

これから取れた結果やデータを元にして今後は、学園の恒例行事にしたり国際的な大会にするらしい。

このレースは専用機持ちが有利な為、一般機部門と専用機部門が予定されている。

と言っても学園での専用機持ちは、俺と千冬とアルスターさんと三組の人の計四人。試しに予選をした時は千冬が一位で俺が二位、離れてアルスターさんが三位で三組の人が四位だった。

二位と三位の差が開きすぎて、若干デキレースの様だが、ここところ大丈夫なんだろう？ 奈々さんが言うとおりこのままでは俺と千冬の一騎打ちになりそうだ。

ちなみに安全性が約束されているので妨害が認められている。なので、前回の予選では零落白夜が襲ってきて回避している一瞬の間に千冬に抜かれて負けてしまった。

「んー今回收集したデータを参考に二機とも超音速機動専用で駆動エネルギーの分配調整や各スラスターの出力調整をしたらいいね。腕なるぜー」

既に機体調整の構想に入っているのか、手元のPADを操作しながら楽しげに言った束。

キャノンボール・ファストに出場する機体は全機超音速機動専用で調整される。

黒百合と暮桜は元々から高機動型な為、他の機体よりも幾分かは超音速機動に優れている。

勝ちたいのなら高機動パッケージ『黒椿』を使えば、確実に勝てるが今のところパッケージなんてものは構想中である第二世代目IS

と同様構想中の為黒椿以外は存在しないので使えない。

第一に勝ちたいからと言って黒椿を使えばフェアじゃなくなる嫌だ。それでも第二世代目ISと高機動パッケージが完成した暁には、来年以降のキャンボール・ファストでそれを用いて更なる高速レースをするらしい。

「兎も角、二人の熾烈を競う高速レースを楽しみにしているわね」

「キャンボール・ファスト、見に来るのですか？」

「もちろんよ、千冬ちゃん。水城財閥はIS学園の^{ウチ}スポンサーみたいなものだし、何より二人のレースが楽しみだからね。いいレース、期待しているわよ。千冬ちゃん、綾」

奈々さんの言葉に千冬と俺が「はい」と返事をする、奈々さんと束は二機の機体調整を始めた。

・
・
・
放課後。

黒百合と暮桜の機体調整が終ると奈々さん達は倉持へと帰っていた。その後は丁度お昼時だったので、昼ごはんを食べてその後、今俺はある所に来ていた。

「こんにちはわ」

「おっつ！らっしゅいっ！」

景気のいい声で源さんが出迎えてくれた。

やってきたのは整備場。男所帯だからか、ごたごたとして男の職場

という感じがしている。

「四日ぶりだなっ、元気にしてたか？」

「まあ、それなりに」

「曖昧だな、まあ元気そうでよかったぜ」

今は昼の一時半過ぎで三時からの生徒会を始めるので、それまで時間があるので四日ぶりに顔を出しにきた。

ちょうど今は源さん達も休憩中のようで、来たタイミングはよかったようだ。

「まつ、綾。そこに座れや」

「はい」

言われて指定された席に座る。

するとコーヒーが出てきて、それを頂きながら近況報告みたいな雑談をする。

最近は源さん達のところによく顔を出している。

束達、束という時間は楽しいし幸せだけど、源さん達という時間も楽しい。

同姓というのが強いんだらうな、束達・束という時とつ違った感じで落ち着く。

遠慮もいらぬ分、同姓のよしみで気が楽で済む。

歳こそは離れまくっているが、それでもこういう空間はいい。

中学の頃は仲のいい同姓のクラスメイトはいたけど、やっぱり一歩距離を置かれている感じだった。

だから、源さんみたいないい意味で遠慮がない親友がいるものいい。適当な雑談をしていると源さんが何かを思い出したように言い、続け様に隣に居た橋本さんも言った。

「あゝそう言えば、お前生徒会長になつたんだって？」

「そんなことを風の噂で聞きましたね」

「はい、三日ほど前に」

「はあゝIS学園初の生徒会長様が男のお前か……真面目だし優秀そうだし適任ちゃ適任だけだよ。学園側も大胆な事をするわな」

「ですね。男が一人いるっただけで大変なのに生徒会長になれときた時は驚いたのもありましたが戸惑いましたよ。推薦はされているけど本当に男の自分がやっていいものだろうか」と

「そうなるわな、普通。基本は女しかない女所帯みたなものだし……まあ、いろいろと大変だと思いが頑張れよ」

「はい。自分ができることを精一杯、小さな事でもコツコツ頑張りますよ」

「ははっ、相変わらず生真面目な奴なこっつて」

笑みを浮かべながらも俺を労ってくれる滅さんは拳を一つ突き出してくる。

それに俺は返すように拳を突き出して拳と拳をぶつける。

俺と源達との漢同士あいつらの挨拶だ。

すると、微笑んでいる橋本さんはやっぱり毒舌を吐いた。

「頑張つて下さいね、綾君。ただ、モテモテ生徒会長になって篠ノ之博士達に後ろから刺されないように気をつけてくださいね。それはそれで面白いのですが」

「一言多いですよ、橋本さん。まったく……で、源さん達は仕事のほうでしょうか？」

「最近忙しいぞ。ほら、今月末にキャノンボール・ファストだったか？それ様に学校の機体を超音速使用に整備したり、会場の整備とかいろいろと忙しいぞ」

「えっ？会場の整備とかもですか？」

「ああ、人手が足りないからな。借り出されている……こつちとら雑用係りじゃねえのになつ、いろいろいと言われてやらされるんだよ」

「今の世界は男が弱いですからね。やるしかないんですよ、チーフ」

「そうだな、橋本。まあ、仕事ないよりはマシだ。男なんて頼られてそれに答えられて何ぼだ。それに何だかんだで方の職よりも給料はもちろん待遇いいからな」

「ですね。ISに触れる事ですし」

そういう源さんと橋本さん。

確かにIS関連の分野は基本的に何処でも人手少ない。
IS出現から一年が経ち、急速に発展して落ち着いているとは言え、それは大きく見たらの話で細かく見たら今だ慌しい。
そして、昔からある女尊男卑が強くなって言っている。
だから、源さん達みたいにISに精通している男の人達には必然的に激務がおそくってくる。

こういうISの負の部分を見ると後悔はしないが後悔に近い反省の念を抱いてしまう。
すると、俺が考えず暗い顔でもしていたのか源さんは元気付けてくれるように俺の肩をポンポンと軽く。

「しょうもないこと考えるなや、綾。お前さんが悩んだところでどうにもならん。お前も嬢ちゃんも悪くないと言えは悪くはないんだ。結局そういうもの。気にしたら負けって奴だ」

「はい」

「確かに理不尽も時たまあるし、激務で大変だがいい給料もらってるんだ。少しの不満はあるが大した恨みはしてないさ、激務だと負けるかってなって遣り甲斐がある仕事だしな」

「そうですね、綾君。世の中理不尽だらけ、理不尽だと言って物事を諦めたら人生と言う試合は終了ですよ。特に抗議団体みたいな奴らはね。俺達はネバーギブアップでやってます」

「そうたぜっ！神山君っ！と言うか橋元もたまにはいいこというじやねえかっ！ただの毒舌めがねだと思っただけ」

「うるせえっ！このやるうっ！チーフも笑わないで下さいよっ！気持ち悪い」

「糞ガキがよく吼えるっガツハハっ！でも、確かななそうだな。いいことを言っ」

楽しそうに騒ぐ源さん達。

やっぱり、理解力ある様々な考え方を持つこういう人達がいてくれてよかった。

今までの人生で同姓の友達や親友は皆無だったら、よかったとしみじみ思う。

歳こそは離れているが、源さん達はやっぱりいい漢達で仲間だ。

「そうだ、綾はキャノンボール・ファスト出るんだろ？」

「はい、専用機部門で」

「前回の予選では二位だったし、今回は女どもには負けんなよ。男を見せたれっ！漢をあげるよっ！綾、俺達はお前に期待してっからっ！」

「っ……はい、頑張りますよ。今度は俺が一位になりますよっ！」

「その意気だっ！」

湯を入れてくれる様に背中を強く叩かれ、意気込みを言っとまた湯を入れる様に叩かれる。

背中ジンジンとしてい若干痛いけど、それでもこういのは何だか男同士の友情でいいものだなっとしみじみ思う。

⋮

第四十話（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第四十話。

キャノンボール・ファスト導入編でした。

原作では学園祭の後ですが、少し時間枠の設定？を変更して学園祭よりも先にしました。

今回肝心なのは前半です。というかついにちゃんと綾君を負けさせる事が出来た；

今までは変な主人公補正でちゃんとしふところでは勝ちまくっていた綾君ですが

結構負けています。今のところ9敗はしていますし。

今回は今まで書き忘れていた綾君の所属処遇やコアの所属についても触れました。

これで大丈夫かな？

ちなみにキャノンボール・ファストのスタジアムの設定等はしんかー様の『IS - 疾風の生更ぎ -』の記述を使わせていただきました。

しんかー様と同じ様にあの原作のスタジアムの広さで時速五キロメートル以上の

レースができるのかな？って疑問に感じたので。

それに今は一年なので第2世代はおろかパッケージは出来てないので本当に操作技術のみのレースとなります。多少は機体性能は左右されませんが。

言うなればFイレースみたいですね。

このキャノンボール・ファストは原作のもののプロトタイプみたい

なものです。

規模こそは原作よりも小さい物となっています。

そして、奈々さんが何故か出てきた。書いていたら自然に出てきました（汗）

流石は奈々さん。部活などの設定は適当です。

実際こんな簡単に活動できるわけがないのですが、生徒会の初仕事ということなのであまりました。

千冬さんは原作の顧問設定もいかしたら、あありました。まあ、綾君の為なのですが。

源さん達は最近出してないので何となく出しました。

と言うかよりは綾君にはもっと男同士の関わりをもってほしいので出しました。

綾君には一夏の親友の弾みたいな親友はいません。というか友達すら居ない（汗）いつか話しましたが、中学時代の仲のいいクラスメイトにも一歩距離を置かれて接されていました。

人付き合いや人当たりはいい方なんですがね……やっぱり、綾君も束さんと同類なんで。

なので、今回源さん達を出しました。男同士の関わりをもっていたのならよかったです。

もつとも、歳は親子の関係ぐらい離れていますが（汗）それでも男同士の友情はいいっ！

ただ、やっぱり束さんに対する思いを私が書くとは庇護的になってしまふ（苦笑）

今回はキャノンボール・ファスト本番の予定です。

超音速機動の訓練などは飛ばします。原作同様訓練風景っている？そして、皆さんにお聞きしたいのですが、一夏の誕生日イベントっ

ていりますか？

設定を見たら九月27日なので出来るのですが。

これをやると簿とも再会するので、こんな早い再会はいいのかなって書くのを待っています。

ご意見を頂けると嬉しいですよm(____)m

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(____)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願います。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ！

第四十一話 ？（前書き）

今回、後書きにいろいろと聞きたい事を書いているので後書きを読
んでください。

第四十一話 ？

綾視点

キャノンボール・ファスト当日。
臨海区の海に人工島として創設されたキャノンボール・ファスト専用サーキットのピットに俺達がいる。

「（いよいよよか……）」

スタート地点から見える秋晴れの空を見上げながら、左手で日差しを遮りつつ、残る右手を天高く掴む様に伸ばす。

俺達がいるスタート地点から見える観客席は、超満員で歓声と熱気に包まれている。

各国や各機関などでは試験的な開催はされたいが、ここでも試験的な開催だが公式の場で開催するキャノンボール・ファストはIS学園の今回の初めての様で。

学生や招待された一般客はもちろん、学園トーナメントの時と同じ様に各国政府関係者、研究員、企業エージェン、等その他諸々のIS関係者が大勢見に来ている。

先ほど一般機部門が終わり、いよいよもう直ぐ始まる俺達が参加する専用機部門は特に注目されている。

それは世界で数少ない専用機同士のレースということもあるんだろ
うけど、それでもやっぱり俺と千冬が競うというのが注目を集めてい
るもつともな原因なんだろ。

それに俺のあのネームバリューみたいなもいつも通り客寄せしてい
るんだろうけど、学園トーナメントで優勝したんだろうのも更なる客

寄せをしているんだろう。

その証拠に戦闘競技であった学園トーナメントよりも見に来ている先ほど例に上げたIS関係者が多い。

そんな会場にちよつとした緊張感を感じつついると、隣のピットにいる千冬からプライベート・チャネルが入る。

『綾……約束、忘れてはないだろうな？』

『ああ、忘れてない、ちゃんと覚えているよ。心配してなくも男に二言はない』

『そうか……ならいい』

納得したのかそう安心した様に落ち着いた声で言うと千冬はプライベート・チャネルを切った。

レースに意識を集中させているかの様な真剣な表情でプライベート・チャネルを入れて来たから。

何か真面目な話でもあるのかと一瞬思ったけど、こんな話で入れてくるとは……何だか拍子抜けみたいなものをする。

こんなことを聞いてくるなんて、千冬らしからぬことだ。

千冬が言っていた『約束』だが、それは学園トーナメントの時にしたあの約束とまったく同じ。

千冬が勝ったら千冬とデートするという約束。

今回もそれを言われて最初はやっぱり、束のこともあるし断ろうとしたけど、前と同じ俺が勝ったらその約束は無効という条件で、結局折れて飲む事になった。

相変わらず、押しに弱い。ヘレタというか弱いというか情けないな、

俺。

千冬がその約束を気にしてプライベート・チャンネルを入れてきた気持ちは何となく分かるのだが。

また、この約束を言い出していた時の千冬は勢い迫るものだったし、そこまでデートに執着？と言ったらいいのか？する意図が俺には分からない。

千冬が第一こんなことを言うてくるのかも俺にはさっぱりだ。

デートと素直に言うてくるあたり、そういう意味なんだろうけど…

…でもやっぱり意図が分からない。

もしかすると千冬は

分からない、分からない。

少しずつ混乱してはじめてきた。“分かっていることが分からない

”だけに やめよう、考えるのは。

集中力が散漫するだけだ。今は大事に時、迷走する思考を切り替えて今一度集中。

余計な思考は今はいらない。勝てば全ていいように収まる。

その為に今日の日に今まで千冬とは別々に超音速機動訓練に明け暮れたんだ。

負けるわけにはいかない。

深呼吸一つして、辺りに気を配る。

スタートの準備が出来た様で、会場に大きなアナウンスが響く。

『それではみなさん、最後のレース。専用機部門のレースを開催しますっ！』

そのアナウンスに観客席の歓声は更に大きくなる。

それを耳の片隅で聞きつつ、俺達専用機部門の一同はスラスターを

点火する。

それを見た観客席は歓声が止み固唾を呑む様に静かになり、会場が数秒静さに包まれる。

F1レースの様に赤いシグナルランプが一つずつ増えていき、スタートのブザーが鳴り響いた。

「
！」

ブザーが鳴ると同時にスタート地点から出て加速する。

あっという間に第1コーナーを過ぎ、列が出来る。

先頭は千冬、その後少しの間を開けて俺、俺とかなり距離を開けてアルスターさんと三組の人。

やはり今回も二位と三位の差は大きく開き、俺と千冬と一騎打ちと必然的になってしまう。

千冬との距離は丁度、ギロチンのレーザー射撃の射撃有権内。

だがしかし、今回は今のところ機動部分にレーザー射撃用のエネルギーを回していて撃てない。

今回使えるのはギロチンの能力唯一つだけ。それも接近しなければ効果を発揮しない。

だから、俺は前で走っている千冬との距離をスラストを微調整しながら詰めていき

「はあああっ！！！」

「ふっんっ！！！」

ガァギイインッ！！と言う刃と刃が衝突する斬撃音を立てながら、ギロチンと雪片が押しあう。

すると俺と千冬は横に一直線に並び、激しくギロチンと雪片をぶつけ

押し合いながらコースを疾走する。

超高速加速状態での罅迫り合い。俺と千冬、どちらも今のままの速度を維持しなければ、相手を引き離す事につなげなくなってしまう。俺達、お得意の膠着状態。それを打開するには相手を振り払い、その反動をも利用して更なる加速へと入れればいいのだが、俺と千冬の実力はほぼ同じ。

振り払うのが少しでも早くても相手に隙を与え、その隙を突かれでもして出遅れる。反対に少しでも遅くても出遅れ、一瞬の間に圧倒的に差を作られてしまいかもしれない。

だから、どちらでもダメだ。振り払うのは両者ほぼ同時でなければならぬ。

膠着状態だが、水面下では互いに相手の手の内や出方を窺っている。これこそが戦いの醍醐味の一つでもある。

「負けるかつ！」

「勝つのは私だ！」

千冬の力の籠った声からとってつもない覇気ものを感じる。

それにより千冬がこの勝負にかける強い思いが、漠然とだが分かった気がする。

だからと言って俺は負けられない。戦うなら勝ちたい。

千冬と共にカーブを曲がりきると短い直線コースに出る。

そのコースを走っているとハイパーセンサーが短いカーブが迫ってきているのを捉える。

それを千冬も捉えたようで真剣な表情で次なる行動を考えているようだった。

そろそろこの状態から脱却しなければ。

そう思い俺は右腕のギロチンに力を入れ、千冬をコース外へと弾き飛ばそうとする。

すると、千冬も同じ事を思っていたのか、雪片を振るってきた。

「甘いっ！」

「っ！！」

ほぼ同時に互いを振り払ったが、ギロチンは雪片ほど小回りがよくない為遅れた。

瞬間、千冬は俺の一步前へと出ると顔だけ振り返り、俺を見るとニヤツとした笑みを浮かべて千冬は言った。

「悪いな。先に行かせてお前を圧倒させてもらっっ！！」

そう言っていた時の千冬の様子は、至極楽しそう。

変なスイッチでも押ししてしまったのか、更に千冬はやる気を出したようだった。

そして、千冬が先に捉えた短いカーブを差し掛かる。

短いカーブだが、このコースでもかなりいいカーブの一つ。

ここを減速することなく曲がりきれれば、曲がりきった助力で更に加速する事が出来る。

それに差し掛かった千冬は

「なん……だと……っ!？」

カーブを瞬間加速で曲がりきり、更に加速して俺との差を作り広げた。

凄過ぎる……千冬さん。

普通、イグニッション・ブースト瞬時加速は使用中は加速に伴う空気抵抗や圧力の関係で軌道を変えることができず、直線的な動きになる。

だが、千冬は直線的な動きになること無くイグニッション・ブースト瞬時加速で綺麗にカーブを曲がった。

それによりイグニッション・ブースト瞬時加速の速度を維持したまま、カーブを曲がったことによる更なる加速を得て、俺との差を作り広げて疾走する。

しかも、その動作を次のカーブでも成し遂げていた。

俺と一緒に千冬も奈々さんに人と疑われていた事があっただけ。

今の俺は千冬のほうが本当に人かどうか疑いたくなる。

やる事が化け物染みている……あんな荒業とも言える難しい高等技術相当のことをするなんて。

驚きながらも俺は千冬との大きな差をブーストを思いっきり踏み詰めるにかかると。

「まだっ！まだ終らんよっ！」

差が大きいからといってここで諦めてレースを終らす訳にはいかない。

負けられない。負けない。負けたくない。俺が　勝つつ！！

そう内心で強く意気込み、迫り来るカーブをスラスタの微調整で減速せず加速状態のまま次々と曲がりきる。

すると、ほんの少しずつだが差が縮まっていき、一周目をタイムラップ、47秒28でクリアした千冬の後には気持ちだけ半歩続いて俺も順位二位で一周目をクリアする。

タイムラップ49秒45

千冬との差は以前大きいがレースはこれから。

⋮

第四十一話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第四十一話 ？

キャノンボール・ファスト編前半編でした。今回はいつもより短い
です。

やっぱり、最初は余計な話が多くなって蛇足感が強くなりましたね。
すみません（汗）

伏線を上手く晴れたらいいぐらいの感覚で書いたら、ああなりま
した（綾）

今回にも千冬さんとの約束を持つてくるのもやめたほうがよかった
でしょうか？

『少しは綾が千冬を意識する場面がほしいですね』という意見があ
ったので

自分的にも必要だと思い、取り入れてみました。そういうイベント
が起しやすいように。

久しぶり（？）だけど綾君の鈍感ぶりは健在（汗）

一夏ほど『酷くは』ないのですが、一夏の鈍感よりもある意味質は
悪いです。

これでリア充……本当、未永く爆発して爆散すればいいのにな……
（ボソッ）

肝心のレースの方はいかがだったでしょうか？

活動報告でもいった通り熱いレースを私の持てる力で可能な限り表
現しましたっ！

というか、ロボット物で速さを競うの書いてのなんて今回が初めて
です。

ロボット同士の戦いを書いたのもISが初めだし、ISって初め尽

くしだ（笑）

そして、千冬さんはチートマジチート。でも、「ああ千冬さんか…
…納得」ですね

さて、これからどうしようか。

後半編まだ書いて大した構成もしてないので聞きます。

千冬さんに勝ってほしいですね……？

綾君はこういう場では一度ぐらい負けてもらわないといけませんし、それに『少しは綾が千冬を意識する場面がほしいですね』というのもデートすれば

一夏の誕生日のプレゼント用意と平行して達成できる。

ただ、束さんがいる以上二人にデートされる物凄く複雑な気持ちになります。

なので、千冬さんに勝ってもらうかどうか、ご意見頂けると嬉しいです。

『次の話を考えるのはあなただッ！』という感じです。

それと前回聞いた一夏の誕生日の意見。

特に活動報告に書いた束アンチについての案にも

ご意見頂けると非常に助かります。ご意見、お願いします。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm（　　）m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言一言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願っていた

します。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ

第四十一話 ？

東視点

激化していく専用機部門のキャノンボール・ファスト。

その様子を私は学生用の観客席の一角、一番見えやすいところで見
ていた。

今の順位は、一位がちーちゃん、二位が綾。二人とも最高クラスの
タイムで一週目を終えている。

レースはちーちゃんと綾の独走状態で最早二人だけのレースになっ
ていて、ほとんどの観客が綾とちーちゃんだけを見ている。

他に走っている人がいるけど、綾達との差はほぼ一週分ぐらいあり
挽回は難しい。私の眼中にはなからどうでもいい。

「凄いな……綾もちーちゃんも」

そうぽつりと関心した様な驚いた様な私の声が漏れる。

独走状態の二人は物凄い。

現在一位のちーちゃんと二位の綾の間には、ほんの少しの差がある
だけで僅かな気の緩みで順位が何度も変動する接戦。

それに二人とも機体の機動性を最大限発揮してくれている。それこ
そ世界最強の機動兵器 インフイニット・ストラトス IS の名に恥じないもの。

それは私一人としても尊敬するし凄いとも思し、開発者として機
体性能を最大限発揮してくれるというのは嬉しく思い感じ、開発者
冥利に尽きる。

そして、二人ともやる事が化け物染みている。と言うか、化け物だ。
ちーちゃんは今までのカーブ全て、直線でしかその効果を発揮でき

イグニッション・ブースト
ない瞬時加速を巧に使って、減速することなく綺麗に曲がり更なる加速を得ている。

ちーちゃん本当、凄すぎ。まあ、ちーちゃんなら出来るよね……と凄くても不思議と納得してしまう。

イグニッション・ブースト
対する綾は瞬時加速といった特殊技能は使わず、スラスターの微調整などで差を広げさせないようにして、更にちーちゃんとの距離を縮めていつている。

前に奈々師匠が機体のデータ収集の時に『あなた達……本当に人間？』と冗談で疑いながら言っていたけど、私は今の二人を見ていると本当に人間か疑いたくなる。

ガギイインツ！ガギイインツ！

一位のちーちゃんと二位の綾が真横一列並び、雪片とキロチンが激しく衝突する衝突音が鳴り響く。

すると、その音に釣られる様にして大きな歓声で観客席。

横一列に並びコースを共に疾走しながらも妨害は欠かさない二人。

二人の攻撃は通ることなく、相手の得物とぶつかり激しい衝突音を何度も会場に響かせる。凄いな……二人とも、本当に。

普通、あの疾走している状態なら激しい攻防は難しいはずなのに減速する事も止まる事もなく、難なく激しい妨害の攻防戦をレースと平行して繰り広げている。

聞こえてくる雪片とキロチンの激しい衝突音は、私にはまるでお互い一步も引かない譲らないという思いが強く籠っている様に聞こえる。

それに

「二人とも……楽しそう」

そう、二人とも楽しそうな表情でこのレースを楽しんでいる。順位を競い合っている時も、妨害し合い激しい攻防戦を繰り広げている時も、二人の表情は楽しそう。

二人とも何処か戦闘狂みたいなところが元々からから、楽しそうにするのは必然的な事で仕方ないことだとは思う。

それでもこうして勝敗を競い合っているこの刹那一時だけは、綾とちーちゃん……二人だけの一時《刹那》。

二人の戦いは私には到底入る事も付けいる隙もない、本当に綾とちーちゃん二人だけの刹那。

二人はこうして競い合う事が出来る刹那一時を表情から見て分かるとおり、心の底から楽しんでる。

今この瞬間は綾はちーちゃんだけを見えている。少し言い方を変えると綾は今この瞬間ちーちゃんのことしか見ていない。

自分がどれだけ独占欲が強いのか改めて思い知らされて少しだけ嫌になるけど、それが少し嫌な様な悲しい様な寂しい様な複雑な気分でも、二人が楽しそうならいいや。私のこんな瑣末な思いなんてものは。

それに綾は負けたくない一身上で戦っている様だけど、ちーちゃんはそれもあるけどもう一つ勝ちたい理由があると思う。

これは私の予感だけど前の学園トーナメントと時に当たった『ちーちゃんがこの戦いに勝ったら綾と二人つきりでデートする』という物だと思う。

多分なもので確証はないけれど、そうだと思う。女の感って奴もあるけど、綾とちーちゃんの様子を見ていれば何となく分かる。

綾がもしも負けたら、私は何も言わないし何もしない。

黙って何も知らないフリをして大人しくしておこう。

だって、かりにちーちゃんが勝ったのだから当事者でもない外野の私がそう易々と口出ししていいことじゃない。

ましてや、認めたくないと言って尾行でもしてしまえば、それこそちーちゃんに対する大抵な行為の上乗せだ。

だから、私は何も言わないし何もしない。何かするというのは勝者へと祝福ぐらいかな。

それに私は綾を信じている。綾は私以外に靡かないと言ってくれた、あの言葉をあの誓いを今も胸に強くあり秘めている。だから、心配はいらない。

私は綾を信じている。誰よりも何よりも深く強く。

だけど、それでも私は綾に勝ってほしい。

だから、お願い。勝って、綾。

そう強く胸の内で思い、私は再び今も綾とちーちゃんが熾烈を極めているサーキットを見つめ直す。

・
・
・

千冬視点

レースも残すところ後一週で決着が付く。

現在私が一位だが、すぐ後ろ至近距離には綾がいる。

ここまで私と綾の順位は何度も変動した。

正に接戦、追い抜いては追い返し、追い返しては追い抜かれたりとそんなレースを繰り返している。

両者共に一步も引けない、油断ならないレースだ。

私は瞬間加速を瞬間的に多用しすぎて少しばかりエネルギー残量が

心持たなくなってきたいるのがまだ大丈夫だ。
この調子なら全然大丈夫だ、多少の無茶も可能だ。

それに綾の奴は本気だが、全力は出し切ってはいない。
その証拠に綾は今だイグニッション・ブースト瞬時加速といった特殊技能を使っていない。

器用に操縦してスラスタの微調整などで綺麗にカーブを無駄なく
曲がり、差を広がらせないようにして、私との差を更に距離を縮め
ていつている。

流星は綾、イグニッション・ブースト瞬時加速といった特殊技能なしでここまでのレースを私
と共に繰り広げてくれる。

イグニッション・ブースト瞬時加速で私がカーブを曲がった辺り、綾は私に対して失礼な事を
思ったようだが、私にしてみれば綾は本当に人間なのかと疑いたく
なる。

イグニッション・ブースト瞬時加速といった特殊技能を出してきてない辺り、奥の手必殺技はこれか
らということか……相変わらず、ヒーロー気質のある男だ。

だからこそ

「どうした？お前はそんな程度ではないだろう？」

「抜かせっ！　　はあああああああっ！！」

「っ！そうだっ！綾、そのままにしてみっとこいつ！」

綾の更なる本気を、そして全力を出させる為に挑発すると爆ぜる弾
丸の様にギロチンの刃が飛んできた。

すると私は、ギロチンの刃を雪片の刃で受け止めた。

瞬間、爆ぜるよう弾丸の様に飛んできたギロチンの刃との衝突に体
がよろめきそうになったが身体に力を入れ持ち応える。

そして、再び綾と私は横一列に並び、刃と刃を激しく衝突させたま

まコースを疾走する。

共にコースで共に走る綾は、まるで流星・星の様に感じる。止まることなく永遠にまるく連なっている道を疾走している星。

早すぎるが故に停滞している様にも一見見え、早すぎるが故に星は破壊の光の様に隣で共に走っている綾は、見え感じる。

その強烈さ故一緒に走っていて楽しいと純粹に感じ、そういった綾と一緒に走れていると思うと胸が躍る。

そうだ、もっとこいつ！綾、お前の全力を私に見せてくれっ！私をもっと楽しませてくれっ！綾っ！

「負けるかああああッ！」

カーブと一緒に曲がりながらも雪片とギロチンの激しい衝突は終わらない。

漸く綾の全力にも火がついたようで、ギロチンに籠り私に伝わってくる綾の力は凄まじい。

激突の威力で押し切られてコース外へと吹き飛ばれそうな強い感覚が私の身体を襲う。

だが、この感覚が私には心地よく感じる。胸が熱くなってくる。

もっと、もっとだ。もっと、ギアを上げるよ、綾っ！その方が倒し甲斐があるっ！私に本気の全力を叩きつけてくれよっ！

遙か後ろ私達よりも一週半遅れで今だ他の後続選手がいるようだが、最早どうだっていい。それどころか私と綾の眼中にはない。

だからこそ、私はこのレースをゴールまでの一時でいいから心置きなく存分に心の奥底からこのまま楽しみ続けていたい。

何故ならば、今だけは綾は私だけを見てくれている。私と綾の二人っきりの一時なのだから。些細なことだけど、それが嬉しい。

それに私だって

「それは私の台詞だっ！私は負けんっ！」

私だって負けられない。負けたくない。

今回こそ勝ちたい　いいや、絶対に私が勝つんだっ！

その思いは純粹にこの戦いの結末、勝ちたいというの思いから来ているが。

それと同時にやはり、あの約束を叶えたいという思いからも来ている。

現金だと他人から言われても別に構わない。

それほどまでに私は絶対に勝ちたい。勝利の二文字を手に入れ、その後にある賛美を味わいたい。

だからこそ、私は勝つ為に頑張り努力する理由の一部が現金だろうと言われても、私は絶対に勝ってみせる。

それに惚れた男ぐらい女なら、奪いに行かなくてどうする。

だからこそ

「　勝つのは私だっ！！」

声を大きく張り上げ、綾のギロチンとほぼ一緒に互いの武器を振り払う。

激しい衝突の威力の反動で私達は弾け飛ぶように一旦離れた。

この程度で負けるなら私は所詮その程度の女だったということだ。

そうならない為にも私はこのレースを全力で疾走し、勝って、勝利もあの約束をも掴み取る。

その為なら私は更に頑張れる　そう、私は覚悟を決めなおし、私

は勝利とゴールを目指して、レース最後の一周を駆け抜け始める。

・
・
・
綾視点

レースもいよいよ終盤。残すところ後一週、最終週へと入っている。最終ラップに入ってから、千冬の顔付きが変わった。戦場を駆け抜ける戦乙女の顔付きへとより一層なり、コースを駆け抜ける速度は更に早くなっている。

「……………」

ぐいぐいと差を広げられ、離されていく。

これまでお互い一步も譲ることなく、俺と千冬は追い抜け追い越せ接戦を繰り広げていた。

だけど、やっぱり追い越してもすぐに追い越され、中々一位を維持できない。

やっぱり、千冬は凄い…………昔も今も変わらず、凄い子だ。流石は俺の永遠の好敵手^{ライバル}だ。

後続選手も今だいるらしいけど、どうでもいい眼中にない。

千冬とこうしてレースをしている刹那^{一時}が楽しくて仕方ない、この刹那もまた永遠に味わっていたい。

本当…………

このまま時が止まってしまえばいいのに

「負けてたまるか…………っ！」

「何を言う、お前の敗北が私の勝利の証となるのだっ！故に勝つのは私だっ！」

「させるかあっ！」

プライベート・チャネルでそんな事を話しながらも差は少しずつ広がっていく。

まずい……！ここままでっ！

レースは最終週の間回りまで来ていて、残りもう半分。

フル出力の瞬間加速イグニッション・ブーストなら追いつけはするが、よくて千冬と肩を並べるぐらいか、千冬の後にくぐぐらい。下手をすると追いついただけで失速するかもしれない。

ここままで、追いついてところで同着、もしくは負ける。戦うのなら勝てなければ結果としての意味は持たない。

差を開かれすぎている……このままでは負けてしまう。どうすれば

「ヴッ、おおおおおおッ　っ！」

ダメ元、無理は承知の上でフル出力の瞬間加速イグニッション・ブーストを発動させ、全身全霊で疾走する。

それでも追いつけない。そんな道理、己が無理でこじ開けるっ！

そんな意気込みで千冬へと疾走するが、今だ追いつけず、むしろ千冬も更にギアを上げてたのか更に引き離されそうだ。

「ぎッ、ぐうウウッ」

これではダメだ。

俺の疲労は上限を越えている。

維持や根性だけではどうかなるものじゃない。

これを凌ぐならただ一つ、この場で学園あの時トーナメント決勝戦と同じ、現象をエイヴィヒカイトシステムを起動させるしかない。

「ぐウツ、うツおおおっ！」

今だこのシステムがどういふ感じで発動するの、構築した俺にすら分からない。

このシステムは俺の手をISの自己進化と混ざり合い、俺が構築したデータを元に新たに別のシステムを構築している。

だが、基本的な内容は同じ。搭乗者の渴望が現実の現象として創り出す。

渴望しろ 俺はこの刹那に何を強く求める？

ちよくしょう、時間が、時間がないのに

「
」

驚きにも感心にも似た声が俺の口から漏れる。

瞬間、俺を取り囲む世界が変質したように思えるのは気のせいだろうか。

音は消え去り、空気は凍り、疾走している事により流れるように見える景色は進行を停滞させる。

まるで俺を中心にして、全て少しずつ遅くなっていくようだ。

これは一体

時間が止まればいい

「」

時よ止まれ、お前は美しい。それがあなたの渴望……ねえ、そう
でしょう？

学園あの時トーナメント決勝戦に聞こえた声が聞こえた。
黄昏た寂しそうな少女の声。

そつだ、俺が思うこと。強く願い求めること。
時間を 時の体感速度を遅らせて、誰よりも速く疾走すること。

「そつ、そつ ツ！！」

知らず自分でも言うつもりのない、知らない言葉を発していた。

ブリストはフル出力のまま、イケニッション・ブリストリボルバー・イケニッション・ブリスト瞬時加速から個別連続瞬時加速へと刹
那で切り替える。

単調のままでは千冬を抜けない。短いながらも四機スラスタを次
々に点火させることによって、イケニッション・ブリスト瞬時加速を四乗する。
そして

「ううッおおおおおおおおおおおおおッ ……！！！」

絶叫と共にゴール直前の千冬の元へと一気にラストスパートをかけ
る。

何をやって、どういう理屈で、どの様に、ことをシステムを発動さ
せたの分からない。

そんな事を考えている余裕は何処にもない。

だが瞬間、俺は時間の頸城から外れていた。

目の前で今だ尚、超音速で疾走する千冬へと光となって破壊をする星の様に疾走し続け走破する。
これが俺の渴望の具現化、強く渴望すれば渴望するほど、上限知らずに加速を行う停滞の疾走。

「　　っッ、あああッ」

この刹那を全身全霊で駆け抜けた。
白黒ツートーンのゴールラインを越える瞬間、千冬が横にいるのを確認した。

どちらかが先に一着でゴールを告げるブザーがなる。
結果は

「……………」

数秒の間を経て一着を知らせるランキングボードが空中ディスプレイに表示される。

「はあっはあっ……………どうやらッ、今回は私の勝ちだな」

そう結果は千冬の勝ち。

空間ディスプレイにはそう映し出されていて、タイム差はコンマ0.1の僅差。

だがしかし、結果としては千冬の勝ち。

負けたという事実を即座に理解したが、驚きは隠せなかった。
頑張った、全身全霊である刹那を駆け抜けた。

だが、俺は負けで千冬の勝ち。

その事実を再確認すると同時に身体に忘れていた疲労が回帰してきた。

「ぐうッ……はあッ、はあッ」

「私の、勝ちだ……あの約束は守ってもらっぞ。いいなっ？」

「ッ、はあッ、分かっている……ッ」

負けたことにより一度無効となっていたあの約束は効果を得た。

その条件を飲み、負けた敗者は勝者の言葉に約束に遵守しなければ
ならない。

それが敗北と勝利に込められた意味。

「ごめん、束。」

知らずぼつりの心中で束に対する罪悪感で一杯になった謝罪の言葉
が思い浮かび。

こうして、しのきを削りあい接戦であったキャノンボール・ファウ
ストは幕を閉じた。

…

第四十一話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第四十一話 - ？

キャノンボール・ファウスト後編、決着編でした。

視点が束さん視点、千冬さん視点、綾君視点と二転三転しましたが、視点の切り替えで表現したかったのは、それぞれの想いです。

と言っても感想板でアドバイス頂いたのを全部使っただけなんですけど（苦笑）

乙女な千冬さんは乙女らしさを上手いこと表現できていたら……と思っっています。

束さんは綾君の恋人としての構え方、しおらしさを表現できていたと思っっています

ちなみに今回の束さん視点で尾行云々は握りつぶして、完全にしないものとなりました。

流石に尾行すると、それはそれで面白いとは思っていますが、ありきたりですし。

諦めの悪い、嫌な女になりそうなのでやめました。ただ、ヤンデレは密かに強化w

レースの方は前回に引き続き熱く、狂おしいほど熱くっ！表現できていましたか？

熱い熱い激しいレース、今回楽しんでいただければと思っっています。

二人は戦闘狂と言うよりも、バトルマニアにあまりましたwww

ただ、構成ミスをして本当に二人だけのレースになってしまったの失敗でした。

いるという設定だけでいないようなものでしたから。

でもまあ、綾君と千冬さんはチート？なので仕方ないかなあ〜と割り切りました。

そして、久しぶりに登場させる事が出来たエイヴィヒカイトシステムと黄昏の少女

Dies iraeファンなら分かるネタばかり使ったので知らない人は(。(。ポカーンかな

そうなら、すみません(汗)m(| |) m神呪でテンションが上がっていたものでww

今回で綾君は未完成ながらも創造位階を使い、創造位階に足を付けました。

この点はマリイ の未完成創造使用のあの行をかなり参考にさせてもらいました。

ただ、今回凄いやつに見えますが力だけで質は学園トーナメントの方が上です。

渴望する想いがたりなかったのと渴望内容が少しだけ不安定だったのが関係しています。

そして、ついに綾君が敗北し千冬さんが勝ちましたっ！

こつこつ場でやつと綾君を負けさせる事が出来たっ！ヤタ v

(。。(。v

それでも接戦中の接戦だったので、その辺も評価していただければ

……ww

さて、次回というかデートの話はどういう風にしようかな？

今決まっているのは純粹にデートをしてもらうということだけなので告白などは考えていません。というか告白は です。気になる人は次回をチェックだっ！

さてさて、デートをすることになった綾君……どうするのでしょうかね〜 ?

それと活動報告にも書いてありますが

束さんがアンチされる理由を簡潔に、束アンチ物の主人公が束さんに向けていいそうな束アンチゼリフ等を教えていただけると嬉しいです。それこそ堪える様なキツイものでも構いません。

何卒、お願いしますm(| |)m

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とても嬉しいです

ご協力お願いしますm(| |)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ

第四十二話 ？（前書き）

いつものスランプなら悩みを悩みまくるだけで済むけど。

今回のスランプは一味違って、いざ書こうとすると頭が真っ白になって。

考えようとしたけど何も思いつかなくて、ぼーっとしてしまっていた。

なんだこれ。

ちなみに後書きの最後の方に150万ヒットについて書いています。読んで下さい。

それではどうぞっ！

第四十二話 ？

綾視点

「あつ、そつだ。綾、束。今週の日曜開いてるか？」

キャンノンボール・ファウストから三日たった日の放課後。生徒会に入ってから放課後の日課になりつつある書類処理の雑務をしている時、千冬がそつ話題を出してきた。

日曜か……何もなかったな。

今している少し急ぎの仕事のたくさんある生徒会の書類処理の雑務は悪くて明日、普通にやったら今日中に終る予定だから。特にこれと言って急ぎの用事もない。

「ん？今週の日曜？開いてるよ」

「俺も開いているけど……それがどうしたの？」

「ほら、今週の土曜、九月二十七日は一夏の誕生日だろ？」

「ああそついうこと」

合点が行って呟く様に頷く。

そつ言えば、九月二十七日は一夏の誕生日だった。

一夏は今小一だから、七歳になるのか。

あの小さかった一夏がもう、七歳か……そつ考えると何だかジーンとする

それは筈も同じだけど。

それに千冬が今から何を言おうとするのか検討が付く。
多分、それは……

「分かったか。折角の誕生日だからウチで一夏の誕生日会をしよう
ということになったという連絡が咲夜さんから先日来てな。それで
だよかったら、来てくれ。メンバーはいつも通りだ」

やっぱり、誕生日だった。

小さい子にとつて一年に一回しかない自分の誕生日は、どんな特別
な日よりも特別な日。

そんな日をブラコンである千冬が祝わないということはないし、第
一祭りごとが好きなの水城家の人達が見過ごすわけがない。
それに俺達も……

「うんっ もちろん、いつくんの誕生日行くよっ」

「ああ、是非とも行かせてもらっよ。折角の一夏の誕生日だ、少し
でもいいから祝ってあげたい」

「そうか……よかった」

そう千言って冬は、嬉しそうに頬をほころばせる。

俺と束も一夏の誕生日を祝いたい、祝ってあげたい。
俺達

折角の一年に一回、小学生になって初めての誕生日なのだから。
それにいつものメンバーということは、筈も来るのだろう。後は、
咲夜さんと奈々さんと師匠。

筈と再会することは暫くないだろうと思っただけ、随分と早い、

期間で直すと約一ヶ月ぶりと再会となる。

だから、篝との再会も含めて一夏の誕生会には是非とも行って、誕生日を祝ってあげたい。

それに篝の誕生日はまだごたついていた時にだったから、誕生日プレゼントこそは渡せたけど、誕生日を祝う事も出来なかった。

一夏には悪い気がするけど、それも兼ねて祝わせてもらおう。

それはまあいいとして、一夏へのプレゼントは何にしようか……

あまり高価なものは無理だし、最近の小一の男の子が好むものはない。

そう言えば一夏、仮面ライダー好きだったな。

だったら、変身ベルトのおもちやとかが妥当か……

そんなことを思いながら片手間で書類を片付けていると千冬が何処緊張している顔をしているのに気が付いた。

何かと思っていると……

「それで何だが……綾」

「うん？」

「一夏に誕生日プレゼントの一つや二つ上げたいと思っているんだが明後日の放課後……その買い物に付き合ってくれ」

千冬は、緊張した面持ちで俺を真っ直ぐ見つめ、『買い物』を少し強調する様にそう言った。

少し強調する様にそう言われて、流石の俺でも強調した意味、強調されたその言葉の裏にどんな意図があるのか分かった。

買い物に付き合ってくれ……と言うは、一夏に誕生日プレゼントを

選ぶのを手伝ったほしいというのもあるけど、意味として一番強いのは『デートしてくれ』ということ。

やっぱりここで来たか……あの約束は。俺は約束を飲み、あの競技で負けたんだ。断る権利はないし、断るつもりはない。

「分かった……」

そう元から返す言葉として決まっていたただ一つの返答をちゃん返す。

だけどやっぱり、束のことが気がかりで何処か濁すような返答になっってしまった。

「そうか」

だけど、千冬は嬉しそうに小さくはにかんでいた。

何も束の前で言わなくてもと思ったが、その反面あえて束の前で言ったのは千冬なりの束に対する気遣いなんだろうと思う。

黙ってるよりも、正直に言っただけから分かっていければ、変な誤解を招く事もないだろうから、その辺りは安心してその一時を楽しめる。

それは分かっているつもりなんだけど、千冬とデートするというのはやっぱり束に対してかなりの罪悪感を感じ、様子を窺ってしまう。

束は何も気にしてないようで、振り振った書類処理をいち早く終わらせてPADを弄っている。

束のことだ、多分今回もあの約束をしているのは分かっているだろうし、強調した言葉の裏にある意味も分かっているだろう。

その上で束は何も気にしてないといった態度をしているのだろう。

すると、様子を伺っていることに気づいたんだらう束は、笑みを薄

く浮かべて言った。

「そうだよ、せっかくのいっくんの誕生日なんだから二人で行ってプレゼント選んで買ってきなよ。私は一人でしたいことあるから、二人でプレゼント選んで買ってあげて」

「したい事って？」

「キャノンボール・ファウストの時の黒百合の稼動データのチェックと二機の簡単な調整だよ。ほら、またエイヴィヒカイトシステムが稼動したみたいからそのチェックがしたくって」

そう言った事は本当にしたいことだけど、多分建前みたいなものだ。本当は全て分かった上で、何も知らないフリをして俺の意思を汲んでくれ、気を使ってああ言ってくれ。

本当は他の女の人とデートさせたくないという思っがあって我が俣をいいたいのだろうけど。

そうすることが千冬への勝利の祝福であり、まだ言っていないことへのある種の罪滅ぼしみたいものなんだろう。

それに束は俺を信じてくれている、それがさっきの言葉達でよく分かった。

それが嬉しいのと同時に、そうだと分かるだけで感じる罪悪感心なしにか強くなる気がするの気のせいだろうか。

なんというかその信頼を何処かで踏みにじっている様で。

それでも俺はこの選択を選び、束にはああ言ってもらい、信じてもらっているんだ。

その信頼を何処かで踏みにじっている感じがしても、本当にその信頼を踏みにじり裏切らないようにしないと。

それに自分よりも相手の気持ち優先する……強く大人になった、

束は。

今までの事がそういう風に成長させているんだろう。
それに比べて俺ははつきりもしない、腐った屑な奴だ。

「だから、二人ともいつくんのプレゼンを選んで買ってきて楽しんできなよ。調整するから黒百合と暮桜を置いていつてくれればいいから」

「そうか……分かった。ありがとう、すまないな……束」

「ん？何のことかな？それよりもいつくんがいいプレゼント選んであげてね じゃないとお姉さんの座、本当に咲夜さんに奪われちゃうよ」

「ぐうっ……分かってる」

おどけて楽しそうに言う束に凶星を付かれて様な苦い顔をする千冬。

兎も角、俺は束の想いや信頼を本当に踏みにじらない様にして裏切らないようにして。

千冬とのデートのその刹那を楽しもう。それに千冬の想いにも可能な限り応えよう。

そうして明後日の放課後、千冬との買い物というデートをすることが決まった。

・
・
・

束視点

「それじゃあ、行って来る」

「いつてらっしゅっいつ」

約束から三日後の放課後。

いつもとは反対の雰囲気 of 服装でちーちゃんは部屋を出て行った。

「はあ……」

ちーちゃんが綾との買い物に出て行って、私一人になり静かな部屋で私は一つ溜息を付き、座っている椅子に深く腰を掛け天上を見る。

ついに今日この日、あの約束が果たされた。

今頃ちーちゃんは、嬉しい気持ち・楽しい気持ちで軽い足取りで綾との待ちあわせ場所にでも向かっているのだろう。

そして、楽しい楽しい買い物デートが始まる。

そう思うだけで認めたはずなのに、こうなっていていいようにちゃんと覚悟をしても、憂鬱な気持ちになる。

「考えるのよそう」

天上を仰ぐのをやめて、目の前を見て少し斜め下に視線を落とす。

済んだ事を……しかも、認めた事をいつもうじうじと考えているのはよそう。

今回は事情が事情な仕方ない。ちーちゃんは、ちゃんと正攻法に則って勝利して約束を掴み取ったんだ。

その結果を私は受け入れて、認めたんだ。今更、うじうじと考えていても無駄だ。

それに後ろ指を差されるのは私達の……私の方だ。今だちーちゃん

に正直に付けることは言わず、なあなあしているのだから。

そう言えば、中学生の頃に似たような日があったな。

確かに綾とちーちゃんがデートするのを、本当に不器用だった私は変な引止め方をしてんだっただけ。懐かしいな。

それにあの頃はまだ綾に想いを告げるどころか、自覚していないかった。

今日の日はその日と似て非なる日だな、まったく。

「いけない……お仕事、お仕事」

憂鬱な気持ちを切り替える為にPADを机の上に置いて、空間ディスプレイを展開する。

二人が出かける前に預かった待機状態の黒百合と暮桜を机の上に並べて置いて、ケーブルを差しPADと接続する。

自動で立ち上がるシステムを確認しつつ、二機の簡単な調整の作業を始める。

二機の整備はレース後にしたからいいけど、システム面での機体調整はまだ少し残っている。

それに何もせずにはぼーっとしていたら、またうじうじと済んだ事を考えてしまう。

だから、ここま何か作業でもして気を紛らわそう。

そう思いまず暮桜の機体調整から始める。

レース時に取れた機動力データを見ながら、それと照らし合わせるようにしてシステムを調整する。

「ちーちゃん……凄いや、やっぱり」

空間に投影されてキーボードを叩きながら、そう呟く。

今回のレースで取れた機動力は奈々さんがデータ収集しに来た時よりも更によくなっていた。

ちーちゃんは、相変わらず凄い……と言うか、凄すぎ。第二次成長期といった感じかな。

私の予想を上回って物凄い成長期を遂げる。まあ、ちーちゃんだしね。カーブ、イグニッション・ブースト瞬時加速で綺麗に曲がりきっていたし。

そんな事を思いながら、レース時に取れた機動力データと照らし合わせながら、機体調整をする。

「よし……終わりっ」

最後にエンターキーを叩いて、システム面での暮桜の機体調整を終了する。

後はちーちゃんが暮桜を起動させて展開させたら、自動でパーソナライズして自動処理もしてくれるから、これで完了。

暮桜はピーキーだけど、比較的素直でいい子だから直ぐに終る。

そして、今から作業する機体……手がかかる子と言えば

「次は黒百合か……」

暮桜の画面から切り替えて黒百合の画面に切り替える。

暮桜の次に黒百合のシステム面での調整作業を始める。

作業内容は暮桜とほぼ同じ。もしかすると、暮桜よりも作業量は短いかもしれない。

黒百合はシステム面で暮桜以上に複雑になっている。

様々な高密度の情報の集合体であるシステムがいくつも、まるで螺旋の様に交わってシステムを構成している。

それを崩さないよう気をつけながら、暮桜と同じくレース時に取れたデータを照らし合わせて調整する。

綾のレース時に収集したデータはちーちゃんと同じで、奈々さんがデータ収集しに来た時よりも更によくになっていた。

綾も相変わらず凄すぎ。ちーちゃんとデータを比べると、ちーちゃん以上によくっており、ちーちゃんの倍近く成長している。

あそこまでの大技をして負けたから印象は薄かったけど、改めてデータとして見てちーちゃんのと比較すると綾の凄さがよく分かる。

データだけで見ると、ちーちゃんよりも強く化け物だ。もともと特殊技能使わずにちーちゃんといいいレースしていたんだ、そう言えばそう言うんだろう。

基本の機体システム調整は一先ず終わった。

案の定、暮桜よりも終わるのが数分早い。OSは綾が毎回書いて調整していて、私もしようと思えば普通に出来るけど、黒百合のOSは綾が調整した方がいい。

OSは機体を円滑に効率よく起動させる為のもので、黒百合の場合、エイヴィヒカイトシステムとも深く関わっているので迂闊には手は出さないようにしている。

だから、後は暮桜同様自動でパーソナライズして自動処理もしてくれるからとりあえずこれで一先ず調整作業は終わり、次に一番気になっていたことのチェックに入る。

空間ディスプレイの表示をエイヴィヒカイトシステム発動時の機体データへと切り替え、見つめる。

「は〜これは……」

エイヴィヒカイトシステム発動時の機体データを見て私は、関心し

た様な驚いた様な声を小さく洩らす。

関心したのもあるけど、驚きの方が今感じている思いとして強い。今回のエイヴィヒカイトシステム発動時、黒百合の機体の稼働率は百四十五パーセントだった。

ちなみに前回、学園トーナメント時のエイヴィヒカイトシステム発動時の黒百合の機体の稼働率は百二十五パーセント。

二つとも明らかおかしな数値だった。稼働率の限界は精々、百パーセント。そして、綾とちーちゃんの今のところの稼働率は八十パーセント前後。

それから考えるとこの数値はおかしいものと更に強く証明し、また本来なら稼働率の限界を超えると普通の機体なら分解なり故障なりするのだからうけど。

稼働率百二十五パーセントでも黒百合は、問題なく稼働し、それどころから各種パラメーターを見る限りまだ余裕だと言っているようなものだった。

その稼働率に加え、あの速度。

観客席で見ていた私達にはちーちゃんとの差を一瞬で、まるで刹那の瞬間で縮めた様に見えた。

ISの想定している最高速を優に越えていた。あの時の黒百合は刹那の具現体そのものだった。

それに綾から聞いた話では、その加速時綾には世界が停滞している様に見える感じたらしい。

停滞による加速……現実に現象として無理だと言に切り捨てることはできないけど、確立させるのも難しい。

でも、それを確立させたのが今回のレースであり、エイヴィヒカイトシステムを搭載した黒百合。

綾が『そういうのあったら本当にSFぽくって面白いよね』という

愉快発想で構築し搭載したけど、まさかこうなるとは。流石の天才東さんですから、予想もしてなかった。既知外……狂おしいほど求める未知。

そのシステムと機体構造がそれを可能としたみただけど、やっぱりコアもそれに深く関係しているのだろう。

ナンバー002のコア、綾が唯一使えるコアで綾の為に産まれてきたコア。今回も綾はトーナメントの時と同じ黄昏の少女の声を聞いたと言っ。

私の手元を離れて、どのISよりもコアよりも自己進化をいち早く始めている。この子には絶対に確立した個人と自我がコアの深層にはある。

「ふふふっ」

そう思うだけで嬉しくて、その先が待ち遠しく楽しみで一人私は笑っ。

黒百合とちゃんと出会えるのも、近いかもしれないね。

出会えたのなら、黒百合と話したい。話して、お礼の一つでもいい。

綾の為に産まれてきてくれてありがとうと、綾に力を貸してくれてありがとうと。

私の代わりに綾と共に戦ってくれてありがとう……お礼を言いたい。

そして、データをPADに保存して、空間ディスプレイの展開を閉じると私は机の上に寝そべりながら、黒百合を見つめ誰に向けてでもなく話しかけて独り言を言っていた。

「綾とちーちゃん……今頃、何をしているのかな……」

作業が終わり、ふと頭を切り替えるとやっぱり、そのことを考えてしまう。

気にしないようにしていても、やっぱり気になってしまい、気にしてしまふ。

綾は私以外に靡かないと言ってくれた、あの言葉をあの誓いを今も胸に強くあり秘めている。だから、心配はいらない。

私は綾を信じている。誰よりも何よりも深く強く。

そう思っけていても、どうしても気にしてしまい、不安になる。

それはちーちゃんは綾へと想いを思うと更に不安になってくる。

仮にちーちゃんがこの機に綾に告白するとしても、私は何かするつもりも何かいうつもりもない。

それは変わらないし、変えるつもりもない。

ただ、やっぱりそういうこともあると思うとどうしても不安になる。不安は拭いきれない。

やっぱり、私って……うじうじしすぎだな。

それに不安なのと同時に、それ以上に……

「寂しいな……やっぱり」

不安と同時に寂しさでも私の胸が一杯になっている。

寂しいからなのか、さっきから思考……と言うか、情緒が不安定だ。今更どうしようもない寂しさだけに、どうしようもない。

だから今はただ待つ事しか出来ない。

だからこそ今だけは、第一に目を閉じよう。

耳を塞いで、口を噤んで、呼吸を止めて、微動だにしない。

心は、石みたいに頑なに……何も考えず、何も感じず、何も求めない。
今だけはそうしていよう。それが今、私が思いつく最善のことなのだから。

そんな風に寂しさで胸が一杯になっている私を水星を模した銀色のペンダントの形をした待機形態の黒百合が優しく慰めてくれる様に薄く光っていた。

…

第四十二話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第四十二話 ?

いつもと変わったスランプを味わい全体的に支離滅裂、意味不明だったでしょうが

楽しんでいただければと思っています。

今、せつくお気に入り832件あるのに減るな……あっはははっ(苦笑)

今回はデート導入編でした。

パツとデートに入ろうかと最初思いましたが、それではどういう経緯で

デートすることになったのか、描写不足になると考え付いたので書きました。

東さんは視点に今回、スランプながらも頑張りました。

ちゃんと自分の中で踏ん切りをつけているはずだけど、やっぱりふと考えると

不安になり、不安は拭えず、寂しい思いとなる……

という複雑な乙女心を表現をしたかったんですけどちゃんと表現できていたのでしょうか？

と言うか最近、東さんを可愛しく書いているのが不安です(汗)

ちなみに黒百合の稼働率のデータはどう考えてもおかしいですね。

まあ、エイヴィヒカイトシステムの副産物みたいなものだと思うってください。

さて、いつもコアの人格である黄昏の少女を少しでも表面的に出そうかな……

正式に出すのも追々ですから……悩みます。

そういえば、そろそろ150万ヒット誓いのですが。
記念小説でも書きましようかね……時間と余裕はないけど。
その場合、どういう話がいいでしょうか？

完全妄想orある種のイフとして神山夫妻の夫婦生活を書いたり
また、ノクターン小説に挑戦というのもいいですね。
さて、何をして何を書いたらいいのやら……何か意見等がありましたらよろしくお願いします。

今回はサブヒロインの位置は変わらないけど、スーパー千冬さんタイムっ！！

だが、どういう買い物という名のデートにするのか

第一、白系統の可愛い服というのは決まっているけど具体的にどんな服装にするのか

一夏へのプレゼントは何にするのか(小一の男の子だし、仮面ライダーの変身おもちゃとかでいいか

大して決まっていません……思いつかんっ!(汗)

だけど、10月12日までには更新しないと、その日が最後の更新となるわけだし

迷走しまくっている私とこの小説ですが、今後とも変わらぬ応援などをよろしくお願いします。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(_____)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞い

て下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ

第四十二話 ？（前書き）

今回の千冬さんの洋服はゴージャスなアイムのピンク色の洋服の白を想像してお読み下さい。

湯目せよ スーパー千冬さんタイムをっ！！

第四十二話 ？

千冬視点

嬉しい気持ちで軽い足取りで私は、待ち合わせ場所に向かう。

約束を取り付けてから三日後、約束のデートの日がやってきた。

この日の為にレースに頑張って勝ったような物で。

束には隠し事したくないからちゃんと目の前で言ったと言おうとしたが、やっぱり正直に言うのは何処か気が引けて、気恥ずかしさから買い物と言っでしまい。

一夏の誕生日プレゼント選びの買い物という事だが、実際はデート。それを綾もちゃんと分かってくれたようで、言ってくれる言葉は初めから分かっていたが、ちゃんといいい返事をもらえた時は物凄く嬉しかった。

人目がなかったら、はしゃいでいるほどだ。

しかし、束にもやはり気づかれていた様で、気を使わせてしまった。いや、束のことだ。私の言う事なんて、最初から気づいていただろう。レースで綾と交した約束をも気づいているはずだ。

それ故に束は今回、気を使って自ら一歩引いてくれたんだろう。そう思うと、随分と束も変わった。これも綾の影響か。

折角、束が気を使ってくれんだ。

親友にもちゃんと顔立ちできるぐらい、今日は存分に楽しまないと。
な。

そう思うと軽い足取りそのままに少し早歩きで歩いて待ち合わせ場所に向かう。

「（と言つか、今日の私の格好大丈夫なはず……だ。変じゃない……と思う）」

目的地に向う為少し早歩きで歩きながら、ふと自分の服装を改めて確認する。

今日の服装は、スノードビーリボンタイ付きBLという上着で中は白と黒のピンククティードジャンパースカートで靴はブーツ
九月も末に入って少しだけだが肌寒くなっているので冬服で、今日の洋服は全体的に白を基調としたふわふわとした可愛い洋服。
今日は買い物とは言え実質折角の綾とのデート。それならそれに相応しいいい洋服の一つでも着て、綾とのデートに望みたいと思ったのだが。

私は動きやすく見栄えある程度よければいいので今まで洋服には結構無頓着だったので、デート用の服はなく、いつも通り洋服では味気がないと思い。

どうしようかと思い身近で相談できるそういう知識の一つや二つ持っているだろう、咲夜さんにデートの日日が決まった日に電話でそうだったところ。

咲夜さんの他に奈々さんも居て、私・本人の意思関係なく勝手にとんとん拍子に洋服が決まって、昨日の放課後この服装一式が送られてきた。

この洋服一式は確かに可愛いと思う、試着した時にも見てもらった束にもかなり好評で画像とした記録保存されてしまったが。

はたしてこの服装一式に私は似合っているのか？ 洋服は可愛いのに私がその洋服の可愛さを台無しにしてしまっただけは選んでくれた咲夜さん達に申し訳が立たない。

それに私は、基本的に落ち着いた感じの奴しか着ない。だから、今までこんな全体的にふわふわした可愛い洋服を着た経験が少な

いので落ち着かない。

落ち着かないし、改めて自分の服装を確認する恥ずかしくなってくる。

ううっ！ああだこうだ言っても仕方ない。覚悟しろ、私。

揺れる心を今一度、律すると待ち合わせ場所の駅に着いた。

「人、多いな……」

待ち合わせ場所に駅に着き駅の様子を見るなり私は、そんな關心めいた感想を漏らす。

今の時間帯は放課後、夕方頃で駅にはそれなりに多い数の人がいる。

私はそんな駅の光景を見て、ふと思った。

こんな人の多い人ごみの中で私を見つけてくれる人は私には、はたしているのだろうか？

何に対しても厳格で、規律に厳しく、凛々しく格好よく美しいという他人から張られたイメージの私でもなく。

一夏の姉としてでもなく、何もなかったただの何処にでも居るような一人の女として織斑千冬《私》を見つけて見てくれる人は必要としてくれる人はいるのだろうか？

そんな事を私はそれなりに多い人数の人ごみの中で立ち止まり、天上を仰ぎながらふと考え思ってしまった。

すると

「千冬っ」

「綾……？」

「よかった、そろそろ来ると思ったらいだね。見つけたよ、千冬」

その一言が私には嬉しくて嬉しくて頭が一瞬真っ白になる。

それでも胸にあるのは嬉しいという気持ちだけで、その思いが胸にじーっと響く。

たったそれだけの言葉だったが、私には嬉しく感じて、その言葉だけで。

何もないただの何処にでも居るような一人の女として織斑千冬《私》だとしても綾は、私を見つけてくれた見ている。それが私の解釈だとしても今だけはそう思いたい。

そして何より、何もないただの何処にでも居るような一人の女の織斑千冬《私》であったとしても、それでも世界に誰かに綾には必要されてる様に思えた。

「千冬……？」

「あつ……大丈夫だ」

嬉しさの感動の余り惚けていたのか、綾に少しだけ心配そうに様子を窺われ、我に返る。

こいつ相手にデート早々から惚けていてはあつと間に時が過ぎる。

時間は本当に有言なんだ。様々な嬉の感情を感じながらも、十全にこの一時を楽しみ味わなければ損と言うものだ。

けれど、やはり見つけてくれたのは綾だったか。

思っていた時に偶然現われ声を掛けてくれたのは偶然かもしれないが、それでも私は必然だったと思いたい。

綾が私を見つけてくれたのは偶然でなく必然であり、私にとって神山綾という男は本当に大きな存在なのだから。

こんな些細な事でもまた、嬉しく感じる。つくづく私という女は綾

に惚れているのだな。何処か嬉しい気もするが気恥ずかしい。

そして思考を切り替えると綾が私の姿、服装を見ていた。

「あ、千冬、その服新しい服だね」

「あ、ああ……そうなんだ。どう、だ？に、似合うか？」

ずっと気になっていた事を照れから少しどもりながらも聞いてみた。

他人の評価、感想は束から聞いて好評だったが、聞いたのは束一人で、しかも同姓の感想だ。

異性の感想はやっぱり、普段着慣れないこういう可愛らしい服を着ているのだから聞いてみたい。特に綾の感想は是非とも聞きたい。

自分では一応……一応は、大丈夫、変ではないと思うが……果たして綾から見て、今日の服装に身を包んでいる私はどうなんだろうか？ どういう風に綾には見え映っているのだろうか？

やっぱり、普段こういう系統の洋服は着ないから変に見えるのだろうか……

「そうだね、いつもと違うで驚いたけど、よく似合ってる、いつもはクールで綺麗だけど。今日はとっても可愛いよ、千冬」

「っ」

「ギャップ萌えて言うんだろっね、いつもとは違う感じでいいと思うよ。全体的にふわふわした感じも可愛いと思うし、白基調って感じもいいね。それから……」

「もっ……もういいっ！あ、ありがとっ！嬉しい嬉しいから、そ

れ以上言わないでくれっ！」

少しとんでもない事を恥ずかしさから口走っているが、ここでまだ言おうとする綾の言葉を遮った。
すると綾はそうかと微笑を言葉と共に漏らしてた。

嬉しいが嬉しいが、こいつめ……っ私をからかっている。
悪気や他意がないのは分かっている。ないだけに、どうも達が悪いとふと感じる。

いろいろ本音からくる褒め言葉を旨く言って、私を嬉死または恥死でも……いや、その二つでもさせるつもりなんだろう。
やっぱり、質が悪い。だが、悪い嫌な気分ではない
純粹に褒められたのは嬉しい、胸がぎゅっと嬉しさで程よく気持ちのいい程度で締め付けられる。

よかった……似合っていた、可愛いと言って貰えた、それだけで今日はもう充分だと早とちりの様な錯覚をしてしまう。

それでも嬉しい……嬉しさからだろう今の私の顔、頬は確実に赤く染まっていることだろう。

慣れないがこういう服でおめかしするのは悪くはない。たまにぐらいならしてみようかな？
それに

「だけど、千冬ってね」

「何だ？」

「本当はそっとう可愛らしい洋服が好きだよね」

「っ！？」

再度からからう様に言う綾の言葉に私は凶星を付かれ、言葉に詰る。またもやからかわれてしまった。

しかも、凶星まで見事につかれて。

だが、凶星を付かれているだけに言い返すことが出来ない。

ああ、そうだとも、好きだ。

私だって、花も恥らう十六の乙女。

今も他人からの印象とし私にて与えられ続けている、何に対しても厳格で、規律に厳しく、凛々しく格好よく美しい、という印象をあり与え続けられているのを自分でも自覚をされていて。

そうだと自分でも思い込んでいる。思い込んでいるからこそ、その反動から「可愛い女の子らしい格好がしたい」という願望があつて、こつこつ可愛らしい洋服が好きかも知れない。

けれど、そんな事は恥ずかしくて言えるわけでもなく

「からからうなっ、ばか……っ」

「はいはい」

「はいは一回だ。ほら、いくぞ」

恥ずかしいのを誤魔化す様に私は綾の一步先に出て歩き始める。

このまま止まっついていてもやはり時間の無駄な浪費。そして何よりも、からかわれ続ける。

そうされるのは何処か嬉しい気があるが、屈辱である事にも変わりない。

だからこそ、私は綾の一步先に出て歩き始めた。

まったく、こいつといると調子を崩されてしまう。

だが、それもやはり悪い気はまったくしない。むしろ、いい気さえする。

他人から強要され演じる優等生な私。一夏の前では良き模範であるうと、良き姉であろうと振舞う私。

一時も気を緩める事の出来ない中、未成熟な私の精神は、私が思っている以上に磨り減っているのかもしれない。

だからこそ、私の調子を崩してくれる綾という存在はありがたく。綾と二人っきりの時は、何者でもなく何もなただの女としてありのままの織斑千冬としてられる。

綾の前だけでは無理せずにあるのままで私らしく心安らかに居られる。

だからこそ、私にとって神山綾という一人の異性、男の存在は尊く。また、好きなのである。

「見つけてくれたのは嬉しいが……少し待たせたか？」

「いや、全然。待ち合わせ場所の券売機近くに来たら、タイミングよく見つけただけだから」

「嘘はいい。お前の事だ、ずっと前から待っていたのだろう？正直に言え」

「そうだね……待ったと言えば、二十分前少し待ったかな。でも、まだ待ち合わせ時間になってないから気にする事ないよ」

「何処が少しだ、ばか」

言った綾の言葉に私は、心中でやはりかと呟く。

こいつは待つのが好きな性分ゆえに、早く待ち合わせ場所に来ると

思っていたが。

二十分も待たせていたとは……本当に何処か少しだ、ばか。けれど綾が言うとおり、本来の待ち合わせ時間にはまだ十分早い。気にしなくてもいいのだろうが、やはり気にしてしまう。

それでもこういふところも綾の優しさでいいところだ。

一夏には是非とも、綾の様に女性の意を汲んで些細なところで優しく遣い出るような綾みたいな男に育って貰いたいものだ。

もっとも、綾のこの女性の扱いの上手さは奈々さんによる英才教育によるものだが、まあこの場合は忘れていよう。

「まっ、待っていてくれてありがとう」

「いやいや、どういたしまして。はい、切符」

「切符まで用意しているのか準備がいいな、まったく」

「折角の千冬とのデートだからね、時間を無駄にはしたくないよ」

そう言った綾は強調こそはしてなかったものの、この買い物はデートなのだと言い聞かせる様に言った。

そして私は切符を綾から受け取ると改札を通り、列車に乗って目的地に向かったのだった。

ついに待ちに待った買い物が始まる。

・
・
・

列車に乗ってやってきたのは駅前のショッピングモール、レズナン

ス。

ここはIS学園と新都創設と平行して作られた超大型ショッピングモールで、多種多様な店がある。そうであるのなら当然……

「ここも人が多いね……」

「そうだな」

ここもまた人数が多い。

先ほどいた駅と負けず劣らず、もしかするとこちらの方が多いのかもしれない。

レゾナンスは放課後また夕方頃だからだろう、学生や大人、その他様々な人で平日であるのにも関わらず賑わっている。

私はここには数度クラスメイトの子に連れられて一緒に来た事はあがるが、こうして綾とくるのは初めてのこと。

だから、初めて来た場所ではないのに初めて来た場所の様に何処か緊張する。

「人は多いけど、時間は限れている事だし、行こうか」

「そうだな……待て、綾」

歩きだそうとして綾の上着を掴んで歩き出すのを止める。

買い物であったとしてもデートなのは私も綾も重々承知している。

端から見ても、若い男女がそれなりに仲睦まじく歩いていけば、デートをしている様に見えるはずだ。よ、よくて……カップルの様に見えるやもしれん。

だからこそより、雰囲気作りというか、演出みたいなものはいるはずだ。

だから、そのええつつ……！

「綾……て、手を繋がないか。折角のなんだしな」

どもりながら、しかも言葉を濁してしまいなながらも何とか言えた。最後の一言が言葉を濁すようになったのは情けなく感じるが、これが今の精一杯の伝え方。

デートと言えば、手を繋ぐのが定番中の定番。絶対条件みたいなものだろう。

繋ぎ方はもちろん、恋人ではないが恋人繋ぎ。そうでなければ、そういう感じ《……》が出ん。

それに前に綾と手を繋いだのは二年ほど前のこと。そのこともあるから、綾と今日は手を繋いでデートをしたい。

問いかけた綾の返答はというと

「あつ……うん、そうだね。はい」

一瞬手を繋ぐ事を綾は躊躇したようだったが、その躊躇を振り払った様に手を差し伸べてくれた。

それを私は掴み握って指を絡めて不自然かもしれないが自然な感じで恋人繋ぎで繋ぐ。

別段それに綾は驚いた様子はなく、指を絡めるのもあっさりと受け入れてくれた。

その様子に私は、多少なりと驚いたり何かしらの反応を表すだろうと思っただけに、少し落胆した。

今、驚いてドキドキとして反応をしているのは私だけなのかと。

久しぶりだからなのだろうか、前繋いだ時の様にあの時以上に胸が

ドキドキと鼓動を早くさせて、高鳴っている。

それは本当にうるさい、気恥ずかしいのが余計に気恥ずかしくなるぐらい高鳴っている。

ちよつとの緊張からでほんのり頬が赤かったただけだっただろうに、今はその胸の高鳴りに連鎖反応を起こした様に顔や頬は真っ赤になっていることだろう。

「じゃあ、行こっ」

「ん、だな」

そして改めて私達は横に並んで一緒に歩き出す。

こうして手を繋いで歩いていると昔のことを中学の頃、綾とデートした時のことを思い出す。

あの時はあの時で楽しかったし嬉しかった、いい思い出だ。初めからかわれていた記憶も鮮明にあるが……いや、今日もまたからかわれたな。

けれど、私達もあれから二年という年月を経過していて、心身とも成長したはずだ。私は少しでも女らしく、綾は男らしくカッコイイのがカッコよくなったはずだ。

ならば、今の私達はどんな風に見えるのだろうか？ やはり普通について仲のいい異性の友達だろうか？ それともやはり……こゝ、恋人に見えるのだろうか、そう見えているのなら嬉しい

そんな妄想めいた考えが止まらず、私は頭を横に少し振って思考を切り替え綾に本題に纏わる話題を振るう。

「そつだ、お前は一夏にあげるプレゼントで何か目ぼしいものはあるのか？」

「そうだね……んー、仮面ライダーの変身ベルトのおもちゃだね」

「どうしてそれなのだ？」

「小一の男の子の貰って嬉しい物ってよく分からないし。第一、一夏の今ほしい物はよく分からないから。今更聞くのもサプライズって感じもしないし、まあ咲夜さんにも聞ければいいんだだろうけど。だから、一夏が好きなものに関係するものを無難に選んでみた。子供ばいから嫌がるかもしれないし、喜ぶか分からないけど」

「なるほど……それでか、それは妥当な選択だな」

納得が理解がいったと私は呟く。

嫌がる気に入るというのは一先ず置いて、プレゼントは渡したいが何を渡したらいいのか、相手は何が欲しいのか分からない。

分からないからこそ、相手の好みに可能な限りそったものをプレゼントとして買う……実に妥当だ。

それに一夏なら綾が渡すその物ならかなり喜ぶだろう。

一夏は綾の影響で仮面ライダーが好きだからな。それは筈も同じだが。

無難に選びながらも、相手の喜びそうなものを上手く選ぶ、流石だ。

「そう言う千冬は、一夏に渡すプレゼント、目ぼしい物が渡すと決めたものはあるの？」

「あつ……それなんだがな、まだ決まってるない。すまん」

私はまだ一夏に渡すプレゼントはまだ決まってるない。

それどころか、何を渡したらいいのか見当すら立っていない。

綾は既に見当が立ち決まっていると言うのに、一夏の実の姉である私は決まってる。実に情けない話だ。

まあ、一夏なら何をプレゼントしても喜んでくれると思うが。プレゼントするのならいい物をあげて、少しでもいいから沢山喜んでほしい、喜ばせたい。

なのに、私と来たら……と気落ちしていると綾は、そんな私を励ましてくれる様に言葉をかけてくれた。

「謝らないでよ。まあまあ、そう気落ちしないで、それを選び為にも今日は来たんだから、俺も可能な限り力になるから」

「ありがとう、綾」

綾がいると思うだけで、（私にとって）困難な問題でも心強く何とかになりそうな気がする。

それに綾なら、同姓であるのだから一夏が好みそうなものをアドバイスくれるだろう。

そんな話と何の事も雑談をしながら歩いていると目的地に着く。

やってきたのは、様々な種類系統のおもちがある、俗に言う、おもちや屋さんだ。

とりあえず私達はこの店にやってきた。めばしい、プレゼントに相応しいものを選択し、買うためだ。

店内を歩いて中を見渡す。

やはり、おもちや屋さんというだけあって、沢山のそれこそ一夏や箸ぐらいの小さな子供がいて、他には家族連れなどもいて、店内は賑わっている。

それからすると私達は聊か奇妙に見えてしまいかもしれない。

「それでどうしようか……んー、一夏が喜びそうなものか……欲しいものや貰って本当に嬉しいものは大人も子供も人それぞれだから難しいね」

「そうだな……だがな、私の希望としてはやっぱりそれなり値がするちゃんとした形あるものを渡したいんだ」

「形あるもの？」

「ほら、私達、私は家にいられなくて一夏と一緒にいることが出来ない。だから、こそその代わりと言っては現金かもしれないがそれなり値がするちゃんとした形あるものを渡したいんだ」

つまるところ私の代わりに『これがあると私が傍にいる』と思える様な、離れていても硬く深く繋がっている絆の証の様な物になる物ものを。

それを持っていれば安心できて私を想っていられるというものを折角だから一夏にプレゼントしてあげたい。

だからこそそのそれなり値がするちゃんとした形あるものを渡したいということ。

だけどもあ、それもある種の思いの押し付けかもしれないし、私が一夏にその物を依り代にして『大切な姉』と想われただけなのかもしれない。

それでもそういう思いを込めたプレゼントを受け取った一夏が喜んでくれればと思っではいるが……

「だがやはり、現金かもしれないな……」

「現金と言つのは少し違うね。やっぱりどんなものでも一夏は喜んでくれると信じているし、一夏に喜んでほしいという思いからくる見栄、みたいなものだろうね」

「見栄、か……そうかもしれないな」

「だけど、そういう見栄も悪くはないと想うよ。様は大切なのはやっぱり思いたよ。それに一夏を喜ばせてあげたい、一夏を安心させてあげたい、相手にしてあげたいと言ふ思ひは悪いものではないだろ？」

「そうだな」

そんな話を店内で適当に商品でも見ながら話す。

確かにそういう考え方もありだな。

そういうのも悪くない。それにそう想っている方が私も一夏にプレゼントを渡す時、更に素直な気持ちで渡せて誕生日を祝える。また、綾に救われ助けられたな。

それに尊くだけでなく綾にはちゃんとプレゼントの見当を付いているようだった。

そんな表情をしている。

「だが、何を渡していいのかまだ分からん」

「そうだね……一つあげるのなら、腕時計ってのはどうか？」

「腕時計？」

私はふと言われた言葉に疑問を感じて首を傾げる。

どうして腕時計なのだろう？

ここはやはり、何かしらのおもちゃとかを提案されると思っていたばかりに疑問に感じる。

一夏の歳を考慮するとおもちゃとかの方がいいだろうに。

そう私が疑問に感じていると綾は選んで理由を分かりやすく明確に言ってくれた。

「ほら、腕時計って高いものはそれなりのいい値段するし、腕時計があれば遊んでいても時間が確認できてちゃんと門限に間に合うように出来るし、

何より形として残って千冬のことを想えるでしょう」

「そっだな」

「おもちゃばかりプレゼントと言っるのは何だしね、それはこっちのほづが返ってプレゼントらしいしと思うんだけど……どうだろう？」

その問いに私は少しだけ考える。

綾があげてくれた選んだ三つの理由は私が望んだ理由と一致している。

何より、実用性が高いというのもいい。

いくら誕生日プレゼントと言ってもおもちゃばかりを与えるのもあまりよくないと思う。

そしてなにより綾が言っ通りこちらのほづが返ってプレゼントらしくていい。

だから私の返事は……

「いいと思う。それにしよう」

腕時計だから一夏が喜ぶとは限らないが今年のプレゼントは腕時計にしよう。

綾の提案にそのまま乗っかってしまって、やっぱり自分では考え付かなくて何処か悔しくもあるが。

それでもこれで一夏が心から喜んでくれればそれだけで私は嬉しい。

「そうと決まれば買いに行くか」

「だね、ほらそこにあるから、見てみよう」

手を繋いでいる綾に手を引かれておもちゃ屋さんの腕時計がある方へと連れて行かれる。

腕時計があるほうへ行くとそこには沢山の腕時計がある。

おもちゃ屋さんだけにあるのでどれもアニメや特撮物の子供向けのデザインの物が多い。

こういうのは苦手だ。どれを選んでいいのかよく分からん。

「えーと、こういうのは仮面ライダーの奴でいいんだよね？」

「そうだね、そこはやっぱり一夏が喜びそうなデザインじゃないかね……これなんてどう？」

「これか？私はそういうのはよく分からんから、悪いが選んでくれ」

「そうだね……」

そう言いつつ綾は柵に並んでいる仮面ライダーのデザインの腕時計を見る。

見ている綾は目を輝かせて嬉しそうで幼い子供っぽくて、可愛らしい。

「楽しそうだな。本当にお前は仮面ライダー、好きなんだな」

「男の永遠のヒーロー、憧れの象徴だからね。まあ、未だに子供なのは自覚しているよ」

「いいじゃないか、そういう綾もいいと思うぞ」

「そうか、ありがとう。あっ、これがいいね」

「どれだ？」

そう言つて私も姿勢を低くして綾が指差した時計を見る。

指した腕時計はやはり仮面ライダーのデザインのものだった。

ちなみに長針や短針がある部分に描かれているデザインはと言つと、白くて頭がイカばい仮面ライダー！

今、放映しているのは覚えているが名前は忘れた。

でも、本当に本当のデートぽいな。

こう……ほんの少しだけ強引に手をひかれたりして、同じ物を同じ様に見るのは。

本当に本当のデートっぽくていい。

だけど

「……」

棚の腕時計から視線を外し、綾の様子を伺う。すると、綾は優しげな微笑を向けてくれた。だが、その綾の瞳は私を見ている様で遠くをも見ている瞳だった。そして、何処かほんの少しだけ心ここにあらずという感じがする。その綾の様子から私はある事に気づいた。

綾は“今も束の事を考え、想っている”。

そうだと言うのが今の態度からも、そして手を繋ぐ時に躊躇したことから何となく分かる。

綾は私とデートしているということを知りきった上でもどうしても考え想ってしまい。

それを私には見せない様に気づかせない様にと隠していた。気づけたのも本当にたまたまで先ほどまでは微塵も気づいていなかった。どうしても考え想ってしまうのを私のことを想って考えない様に気づかせない様にして、見えないように気づかせないようにしていたのは綾なりの気遣いで優しさなのは分かっている。

それは私は純粹に嬉しいしありがたいと想う。それにそれが相手を想い尊敬する綾の優しさ。

だけど綾の優しさは 残酷な程優しすぎる。

だからこそ私はそんな綾の優しさに潰れ込み甘えてそして、綾の心には何時だってアイツしか

「ッ」

迷走しそうな思考を被りを少しだけ振って振り払う。

考えては迷走し続けて徒労で終る。考えるのに疲れるだけだ。それにこんな明白なことを考えるまでもない。

それでも迷走してしまう思考を取り除く為に私は綾と握り合っている手の握っている力を少しだけ強める。

今はこの感触とこの暖かささえ分かっていたらいい。今だけは何でもないただ一人の女の私でいたいんだ。

だから、迷走する思考の正体なんて知らないし、知りたくもない。今だけはそんなことはどうだっていい。

「これが……よし、なら私の一夏のプレゼントはこの腕時計にしよう」

「本当にこれでいいの？」

「ああ、せっかくお前が進めてくれたものなんだ。私はこれでいいし、これを私は一夏にプレゼントしたい。それに他に何か目ぼしいものがあるわけでもないしな」

「そうだね」

「だから、これでいい、これがいいんだ。決まってるなら買っぞ」

「はいはい」

苦笑いする綾を傍らに店員を呼び、この腕時計を取ってもらい。

誕生日プレゼント用の包装してもらい会計をするのと一緒に綾の一夏への誕生日プレゼントもまとめて会計をした。

綾の一夏への誕生日プレゼントはこの時計の仮面ライダーと同じものらしく、そのベルトのおもちゃだった。

会計をして包装を待っている間も手を繋いでいたものだから

「お二人様はデート中ですか？」

「あつ……はい、そんなところですよ」

「まあまあ」

と微笑ましそうなニヤニヤ顔の店員達にからかわれてしまった。

公然の面前の辱めだが、恥ずかしいだけで嫌ではなく。

むしろ、綾で『デート中』と言うのを肯定してくれたのが嬉しくて私は顔を真っ赤にして何も言えずに会計と包装が終るのを待っていた。

そして、会計と包装が終ると店を後にして、帰路へとつく。

「外も暗くなつたね」

「そうだな、少し冷えてきたし、今年は冬は近いな」

「かもしれないね」

もう直ぐこのデートと言う一時は終る。

本当はもう少しだけ綾との二人きりの一時を満喫して、クレープを食べたり、服等を見て回ったりしたかった。

ただとまあ、元々は一夏へのプレゼントの買い物という名目のデートだ。

無事プレゼントを私も綾も買えて、デートも一時ながらに満喫することが出来た。

何より私達は寮生活をしている学生だ。門限というものがあって、それが近い。だから、もう少しだけっという事は出来なくて、名残惜しく、一瞬のこのようだったが、名残惜しさはあっても、悔いなどない。それだけ楽しく幸せで満たされていた一時だったということ。それだけにレースに頑張つて勝利して約束を勝ち取った甲斐があるというものだ。

「……」

「楽しそうだね、千冬」

「ああ楽しいし、嬉しいぞ」

そう言つて私は綾の顔を歩きながら見つめる。

「今日は私とデートしてくれてありがとう。そして、無理をさせてしまつてすまなかつたな」

「無理？何の事やら？無理なんてものは一切してないよ。千冬は今日楽しかつたんだろう」

「ああ、物凄く」

「なら、よかつた。それでいいんだよ。些細な事なんて気に掛ける必要はないよ」

「そうか……」

何でもない一言。

その一言を言ってくれただけでも私は嬉しいと心底感じ。そして、この一時は本当に楽しく幸せで満たされていた一時だったということをしみじみ実感できる。

本当にどこまでも残酷なほど優しすぎる男だよ、綾は。だからこそ

「ちよっ！千冬っ？千冬さんっ!？」

手を繋いでいた手から主導権を奪って腕を抱き寄せると、私は綾の腕を私の胸の間で抱きしめて腕を組む。

すると、当然驚く綾。顔が赤くならないのが不満と言えは不満だが、まあいいだろう。

ああ 驚いている顔すらも愛しい。

「うるさいぞ、人目があるんだ、静かにしろ。私だって恥ずかしいんだ」

「なら、やめれば……」

「いいだろう、したいんだから。私は勝者なんだ、敗者は大人しくしろ」

「はあ、分かった。俺の負けだよ、好きにして」

「ふふっ、ありがとう、すまないな。そして今日は一日本当にありがとう」

「どづいたしまして」

感謝の念を込めるように今一度私は胸の間で抱きしめている綾の腕をぎゅっと抱きしめる。

また、こんな一時を向かえれたらいいな。その時は偽りではない、本当の恋人同士で迎えたい。

だから、私は束とも自分とも白黒はつきりさせなければな。

そんな事を思いながら、綾の腕を胸の間で抱きしめたまま私達はI S 学園へと二人一緒に帰っていた。

…

でも嬉しいです

ご協力お願いしますm (| |) m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ

第四十三話

綾視点

ピーポーン

インターホンの音が鳴り響く。

九月の末の日曜の正午。

俺と束と千冬の三人は、朝早くからIS学園を出発して、今織斑家のインターホン前へとやって来ていた。

今日織斑家にやってきたのは、もちろん一夏の誕生日を祝う一夏の誕生日のパーティーをする為である。

この日の為にあのデートにも行き、千冬と一緒に一夏への誕生日プレゼントを買って、束も一夏への誕生日プレゼントを用意しているらしく、準備は三人とも万端だ。

そうなんだけど、今日の誕生日パーティーは一夏が主役だと言うのに、主役と会っておらず主役を差し置いて早々と俺達三人は何故か何処かで心なしにか緊張をしている。

千冬は約一ヶ月半ぶりの実家への帰宅という事と、一夏との久しぶりの再会という事で緊張しているのだろう。

加えて言うのなら、あの腕時計のことも今だ気に入ってくれるかどうかで気になっていてこのことでも緊張をしているのだろう。

追隨して俺と束も筈との約一ヶ月半ぶりの久しぶりの再会という事で緊張している。

予定ではもう少し後になるだろうと思っていて、その再会が真面近だと思うとどうしても心なしかの緊張はしてしまうものだ。

実際、緊張しているらしく束の顔は緊張で何処か硬い。まあ、それ

は俺もなんだろうけど。

と、そんな事を考えていると織斑家の家の扉が開いた。

「いらっしやいませ、お待ちしていました」

扉を開けてくれたのは咲夜さんだった。

服装はいつも通り、頭のメイドキップが付いたメイド服。あ……やっぱり、織斑家でも常時メイド服なんだ。

会う時はいつもメイド服だからメイド服着ていることに違和感などは感じないけど。

見るのはいつも水城家だから、それ以外でメイド服の咲夜さんを見るのはやはり違和感みたいなものは感じる。

メイドの嗜みだからメイド服着用するのは昔からよく聞かされて分かっているけど、これで外に少しは出ていると思うといろいろな意味でいい話の肴になりそうだな。

流石の束も玄関でのこの光景に少しは驚いている様で驚いて顔を少ししており、千冬は見慣れているのか何処か呆れた様な態度で平然ともしていた。

「何惚けているのですか？早く中に入って下さい」

「分かりました。お邪魔します」

「お邪魔します」

「ただいま」

俺と明るく束は他人の家に入る時の言葉を言ったが千冬は自分の家

に返ってきた時に言う言葉を言った。
その辺は千冬も自分の家に帰ってきたという事を踏まえ自覚しているのだろう。

その言葉達を聞いて咲夜さんは……

「はい、いらつしやいませ、綾お坊ちやま、束お嬢様。お帰りなさいませ、千冬様」

それぞれにそれぞれの言葉を向けて嬉しそうな笑みを浮かべて言った。

その笑みは昔から見慣れた笑みで、俺達をずっと昔から見守ってくれた優しい姉の様な笑みだった。

そして、咲夜さんに家の中へと通され、咲夜さんを先導にして勝手知ったる感じでリビングへと繋がる廊下を歩く。

そう言えば、織斑家に来るのも約一ヶ月半ぶりだったな……とふと思っているとりビングに早々と着き、扉を開けて中へと入る。

「おお、来たのか。いらつしやい」

「あつ、お帰りなさい、千冬姉。いらつしやい、綾さん、束さん」

リビングの中に入ると我が物顔でいる一郎師匠と一夏が出迎えてくれた。

二人ともテレビゲームをしていたようで、待機画面で置いている。本当にいつもながら師匠は我が物顔だな、いい歳してゲームまでしているし、ダメというわけじゃないけど。

「ただいま、一夏。こんにちは、一郎さん」

「やつほ〜いっくんっ 今日呼んでくれてありがとうっ おじ様、

「こんにちは」

「こんにちはは、一夏、今日は呼んでくれてありがとう。それで師匠、
箒は何処に？」

「束ちゃん、千冬ちゃん、こんにちは。そしてクソ弟子、私には挨拶
なしかよ」

「まあまあま、ご主人様。箒お嬢様ならあちらに」

師匠を宥めながら、咲夜さんはリビングと繋がっている台所のほう
を指差す。

そこには多分、パーティーの食事でも用意しているのだろう奈々さ
んと一緒に箒がいた。

おそらく少しでもいいから奈々さんのお手伝いをしていたんだろう。
いいことだ。

そう思いつつふと見てみると、箒は俺達に気づいて奈々さんに一言
言っただけこちらに向かってくる。

「お邪魔しています、千冬さん。久しぶり、兄さん、姉さん」

「ああ、久しぶり、箒」

「久しぶり、箒ちゃん」

そうやって俺と束は箒を抱きしめる。

再会以上の言葉は出なかつたし、それ以上の言葉はいらない。
ただ優しく二人で箒を抱きしめる。早くも再会できた事を喜ぶよ
うに。

約一ヶ月半ぶりの再会だけど、何も変わってないな。

箒のこの陽だまりの様な体の温かさも、抱きしめている感触も。

いや、少しくらい身長は伸びて大きくなって変わっていたりはするだろう。

それに夏休みの別れ間際に遅れた誕生日プレゼントとして渡したあの髪留めのリボンを使って箒は、髪を纏めて留めて今でも大切そうに肌身離さず付けてくれる。

プレゼントなのだから大切にするのは当たり前かもしれないけど、それでも大切にしてくれて肌身離さず愛用の物としてくれていたことが嬉しい。

「えへへー」

抱きしめるのをやめて俺と束が箒から離れると、箒は少し照れた様に嬉しそうに小さく笑う。

こういう可愛い笑顔を浮かべるところは変わってないな。

でもこうして可愛らしく笑みを浮かべられるだけ、箒は苦労も大変な思いもしているんだろうな。

そうして箒は束の隣に座ると、束は箒にある事を言った。

「そう言えば箒ちゃん、さっきまで奈々師匠のお手伝いしてんだよね」

「うん、まあ少しだけだね。私まだ姉さんみたいにお料理できないから、ほとんど奈々さんのお料理している姿を見ただけだったけどね」

「そっか、そっか 花嫁修業って事だね」

「 なっ！？ね、姉さんっ！変なこといわないでよっ！そう言うことじゃないんだからっ！」

束におどけて楽しむような口調でからかわれた篤は、初め突然の事に言葉が理解できなかったようだけど。

理解すると頭の上からぼんっと湯気が出そうなくらい顔が真っ赤になって、恥ずかしそうに慌てて否定した。

するとそんな篤の反応に束は、からかうのが楽しくなったのから更に楽しむようなおどけた口調で言った。

「なら、違うのかな？」

「ち、違わない……」

「んふふーっ、素直でよろしい 恋する乙女は好きな人の為に毎日が花嫁修業だからね、これからもこの粋で頑張るんだよ」

「にゃっ！？……ううっ、わ、分かった」

束に誤魔化すのは通じないと早々に判断した篤は、素直に認めただ。

束に抱き上げられ膝の上に抱き上げられ、愛でる様に後ろから抱きしめ頭を撫でられると。

最初は驚いたものの、顔を真っ赤にさせながらも物凄く恥ずかしそうに束に言葉に頷いた。

なにこれ可愛い。

と直球で思うほど、束の膝の上で恥ずかしそうに顔を真っ赤にしている篤は可愛い。

その可愛さに俺だけではなく、一郎師匠や咲夜さんも微笑ましそう

に見ていて、千冬も珍しく微笑ましそうに見ている。

これも一夏に恋する乙女故のものなんだろうな……そう思うと、兄心からなんだろう、ちよつと妬ける。

だけど、その対象である当の本人の一夏は束にからかわれて恥ずかしそうに顔を赤くしていることぐらいは分かっているようだけど。その先の意図は分かっているまいやうで、『花嫁修業?』と不思議そうにして首を傾げている。

この一夏の鈍感さとも言える疎さに箒はもちろんだけど、今後一夏に恋する女の子達も大変な思いをするんだろう。

今は幼いからこの程度ですんでいるんだろうけど、成長するともっと悪化するんだろうな……箒の恋路が先が思いやられる。やっぱり、今のうちから調教もとい教育しないと。

ふと隣に目をやると咲夜さんが千冬に耳打ちするような小声で何かを話していた。

何となく気になり耳を済ませてみると

「そう言えば、千冬様」

「なんですか？咲夜さん」

「デートお買い物の方はいかがだったでしたか？あのお洋服はいかがだったでしょうか？」

その問いに千冬もドキつとした様に身体を一瞬小さく震えさせたけど、同時に俺も内心でドキつとした。

どうしてか心になしか動機が少しだけ早くなった気がした。

咲夜さんは言葉では『お買い物』といったけど、その事では明らかに『デート』と言っている。

まあ、『あのお洋服はいかがだったでしょうか？』と言っている辺り、あの洋服は咲夜さんと相談でもしたものなんだろうと言う事が分かるが。

束が近くにいることで、聞こえないように咲夜さんが聞こえない様にしていても、どうしても束の反応が気になって忘れふきつたはずの罪悪感が舞い戻ってきそうになる。

「えーと、いい一時でした。とっても幸せでした。あの洋服を着ている姿を可愛いと言っていただけましし」

「まあ、それは私としても何よりです」

頬を薄く染めて嬉しそうに話す千冬と、その話を聞いて嬉しそうに微笑む咲夜さん。

二人は二人だけで小声で話していて、俺も何とか聞こえている程度で。

束には聞こえていないようで、膝の上に乗せている筈と一夏と楽しそうに何か話していた。

でも、聞こえてなくても束は多分気づいているんだろうな……その上であえて知らない聞こえてないフリをしている。昔からそうだ。それだけにやっぱり、言い表し様のない僅かだが強い罪悪感を感じる。

そう思い感じながらも、一夏達と何気ない雑談でもしている

「お待たせ、出来たわよ。あつ、綾、束ちゃん、千冬ちゃん、こんにちは」

「「「こんにちは、奈々さん（奈々師匠）」」」

奈々さんにそう挨拶する俺と東と千冬。

リビングに現われた奈々さんは大きなトレーを持っていて。

その上には、一夏の歳の数だけのロウソクが並んだ大きくて甘そうな白い誕生日ケーキが乗っている。

奈々さんのお手製か……豪華というか、やっぱり手が物凄く込んでいるな。

その後ろには、咲夜さんも居て、トレーにはこれまた豪勢でたくさん料理が乗っている。

いよいよ、パーティーが始まるみたいだ。

「ほら、一夏君、一郎さん。そのゲーム片付けて、席に着いてください」

そう言われると一夏も一郎師匠もゲームを片付けて席に着く。

席順は、一夏を中心して直ぐ傍の左右両隣に千冬と篤が座っていて、後は一夏を中心にして囲むように座っている。

「それじゃあ、一夏君の誕生日パーティーを始めましょうか」

奈々さんが言っつて、咲夜さんがリビングの明かりを消して、師匠がロウソクに火を点す。

外はまだお昼頃で部屋には薄く日の光が差し込んでいるだけで、全体的に暗いがロウソクの火の光で部屋は小さくだが照らされていて、こういうの変かもしれないが、何だか誕生日パーティーが今から始まるっという雰囲気を感じる。

「一夏君、どうぞ」

「うんっ　ふうっ」

大きく域を吸い込んでから強く息をロウソクに向けて吹きかける。すると、一夏の歳の数あったロウソクの火は一気に消え、少し間を置いて咲夜さんが部屋の電気をつけて部屋を明るくする。そして

「一夏（いつくん）（一夏様）、お誕生日おめでとうっ！」

全員で声を揃えて言うと、師匠と奈々さんは手に持っていたクラッカーを鳴らす。

「ありがとう、皆」

と、嬉しそうに言う一夏。

「さあさあ、ケーキ食べて」

そう言って奈々さんはケーキを人数分、均等の大きさで分ける。それを一口分のサイズにして、一口食べる。

「あっ、美味しい」

「美味しいです、奈々さん」

「ふふっ、そう言ってもらえると嬉しいわ、一夏君、篝ちゃん」

一夏と篝が言うとおり、美味しい。

これは奈々さんの自信作なんだろう。

たまに食べさせてくれるケーキと気合の入りようが違うように感じる。

ケーキは定番の苺のホールドケーキ。

スポンジはふわふわとしていて、生クリームと苺と絶妙にマッチしている。

ただダダ甘いわけじゃなく、ほどよい甘さなので、食べていて美味しいし、何だか楽しい。

本当に美味しくて一夏も筭も皆、美味しそうに笑顔で食べている。

こんないいものを作るのは難しそうだな。

流星は奈々さん、やっぱり料理やお菓子で勝つのはまだまだ無理そうだ。

そんな事を思い味わいながら食べていると、また難しい顔をして食べていた様で、クスッと微笑されながら隣にいる束と同じく微笑する奈々さんに言われた。

「あははっ、綾。また、難しい顔しながら食べてる」

「ふふっ、そうね。どう美味しい？」

「ええ、奈々さんに料理やお菓子で勝つのはまだまだむりだと感じました」

「そうですね、奥様にはいつになっても勝てません」

「若い子にはまだ負けないわよ。勝ちたいなら頑張りなさいな」

楽しそうに微笑して言う奈々さんの言葉に頷いてまた一口ケーキを食べる。

今は無理でも、その内勝てるように頑張ろう。

奈々さんのケーキの様に甘くて美味しいものを作る事が出来たら

つと、束や箒を幸せに出来るかもしれない。

「そつだ、一夏」

「何？綾さん」

「はい、誕生日プレゼントだよ」

「わわっ、ありがとうっ綾さんっ！開けていい？」

「どうぞ」

渡しそびれてはいけないから一夏にプレゼントを渡す。

受け取ると一夏は、嬉しそうにして包装紙を少し急ぎ気味で綺麗に剥がしていく。

「ああっ！フォーゼの変身ベルトだっ！ありがとうっ、綾さんっ！」

大喜びの様子で言う一夏。

俺がプレゼントしたのはフォーゼの変身ベルト。

丁度今放映しているもので、結構売れていて此間千冬と買い物に行った時に買ったのだが、最後の一個だった。

フォーゼも好きな仮面ライダーで、最後の一つでなかったらもう一つ自分用に買っていたかもしれない。

「カッコイイな、馬鹿弟子はこういうチョイスは上手いな。それで一夏、つけてポーズ取ってみる」

「分かった、一郎さんっ！ 変身っ！……宇宙キターッ！」

一夏は箱から変身ベルトを取り出し腰に変身ベルトを着け、フォーゼの変身ポーズを決める。

そんな一夏の嬉しそうにはしゃいでいる様子を俺達は微笑ましく思いながら見ていて、束はそんなパーティーの様子をずっと取って動画に収めている。

本当に喜んでいて、かなり気に入っているみたいだ。こんなにも喜んではいでもらえるとプレゼントした甲斐がある。

ちなみにこれをプレゼントに選んだ理由だが。

丁度今放映していて流行の物だからと言う事で選んだものあるけど、フォーゼは宇宙の要素を使っていてISとかけて選んだというものもある。

「ふふっ、嬉しそうだね、いっくん かっこいいよ、はい私からもどうぞっ」

「凄っ！？ガンプラとかガンダムのフィギュアみたいっ！」

「ふふんっ でしょう！ISを装着している綾達をモデルにしてガンダムぽく作ったフィギュアだよ ちなみに私のお手製」

束が一夏にプレゼンとしたのはフィギュアだった。

ただのフィギュアではなく、黒百合と暮桜をガンダムのフィギュアぽく作ったもの。

なので、二機の機体色そのまま、肌が露出している部分はMSの装甲になっていて、顔はガンダムとツインアイとなっている。ちなみに間接部分は全部関節可動となっている。

そのフィギュアを見て一夏は嬉しそうに目を輝かせていて。

箒は、「これお手製なんだ、姉さん凄すぎ」と関心した声を漏らしていた。その反応は千冬達、他の皆も似たような感じ。

でも、箒が言う通りこれは凄すぎだ。束の手先がかなり器用なのは昔から知っているが、これは普通に商品として売ってもバカ売れしそうなぐらいの完成度。

俺も一つぐらいほしいぐらいだ。

「なら、綾にも作ってあげようか？」

「えっ？あつ、ならお願いしようかな」

「ふふつ、分かった」

そう嬉しそうに束は微笑を浮かべて言う。

以心伝心と捉えるべきなのか、考えている事は簡単に読まれてしまった。

「大切にするよ、束さん。ありがとう」

「どういたしまして」

嬉しそうに微笑みあう一夏と束。

「一夏、私からのプレゼントだ」

千冬は、包み紙あの時計を一夏に渡す。

千冬表情は緊張しているのか、頬がほんの少しだけ薄っすら赤い。

包装紙を剥がし、箱の中から腕時計を取り出すと一夏は不思議そうに呟く。

「腕時計……?」

「ああ、腕時計だ。二人の様子におもちゃではなく、つまらないかもしれないだろうが、受け取って一緒にいれない間私だと思ってほしい」

「つまらなくなかないよ、とっても嬉しい」

そう言つて一夏は、腕に腕時計をつける。

腕時計をつけている一夏の表情は、嬉しそうで千冬から貰ったものをつけているのか何処か誇らしげだ。

その表情で一夏がこの腕時計を気に入って、嬉しいと思ひ喜んでるのがよく分かる。

いろいろと千冬は渡すまで迷走したけど、喜んでもらえたようであったね、千冬。

「どう、似合っている?千冬姉」

「ああ、似合っている。カッコイイぞ、一夏」

「よしっ、よかった。これを千冬姉だと思つて、大事に使うね」

「そうしてくれ」

と、嬉しそうに微笑みあう一夏と千冬。

ほのぼのとしていて暖かい姉弟の光景が目の前に広がっている。その光景を見て俺と束、皆はなごんだ気持ちに包まれた。

そしていくつのか間を置くと

「い、一夏っ。お前に誕生日プレゼントをくれてやるっっ」

今度は意を決した箒が一夏に言った。

意は決したものの、気恥ずかしいのか相変わらず箒は顔が真っ赤だ。箒が一夏に渡したものは、少し大きめの紙袋で一夏はその中からプレゼント本体を取り出す。

「おお？マフラーだっ！」

「そ、そろそろ寒くなってくるから、ちょ、丁度いいと思ってな」

箒のプレゼントはピンク色のマフラーだった。

市販のものかと思ったが、よく見てみると市販のものにはない手作り独特の作りになっている。もしかしてこれって

「これって……」

「あっ、気づきましたか？実はあれ、箒お嬢様の手作りなんですよ」

「ほえ〜箒ちゃんの手作りなんだ」

やっぱり、箒の手作りマフラーだった。

市販のものにしては縫い目が少しだけ荒いからそうだと思った。それでも綺麗に丁寧に上手に縫えて普通にマフラーになっている。凄いな、箒。幼いのになんにものマフラーを編めるなんて。

「えっ！？箒の手作りなのか？」

「あ、ああつ。奈々さんと咲夜さんに縫い方を教えもって、何度も失敗したが機能出来た。じ、自信作なんだ。その……少し汚いかもしれないが」

「そんな事はないぜ、篝。綺麗だ、ありがとう」

「そ、そうか……っ」

褒められたのが嬉しいのかしおらしい態度で顔を赤くさせている。ぎゅっと両手を握っている篝の表情は、とつても嬉しそうにしていて可愛らしい。

「そう言えば、私も昔編んで綾に上げたんだっだけ」

「そんなこともあったわね、似たもの姉妹ってことね。あの時の束ちゃんも可愛かったわよ」

「じゃはは、どうもです」

ぼつりと独り言として呟いた言葉を拾われるとは思っていなかったよつで。

奈々さんの言葉に束は嬉しそうにしてほんのり頬を赤く染める。

そう言えば、昔マフラー編んで貰ったことがあるな。

あの時もマフラーも確かピンク色で、長く作られていて、一つのマフラーを二人で巻いた時はお互い気恥ずかしくて顔が赤くなったのは、今のとなつてはいい思い出だ。

今もその編んでもらったマフラーは、小さくなって使えなくなったけどちゃんと大切に保管している。

それにこういう一面を見ると東と箒は、本当に何気ないところよく似た姉妹だな。

「でも、凄い。箒も器用なんだね」

「そうね、箒ちゃん、飲み込みも早いし教えている身としてはとても楽しかったわよ」

「はい、可愛かったですし。編んでいる時の箒お嬢様の恋する乙女な表情は」

「咲夜さんっ!?!」

「にははは、箒ちゃん、顔真っ赤く可愛いっ 流石はいつくんの嫁だねっ」

「まったくだな」

「可愛いぞ、箒ちゃん」

「なっ!?!千冬さんと一郎さんまでっ!?!ううっ」

皆にからかわれて恥ずかしい様で顔を真っ赤にさで恥ずかしそうにして方を縮めて俯いている。

可愛い子ほど愛でなくなるのはいつものことだ。今の箒は何時にもまして可愛い。

でもやっぱり一夏は、分かっている様な分かっていない様な顔で不思議そうにしている。

先が思いやられて……以下略。

「楽しいな、まったく。長生きはするものだ」

「いつになっても師匠は死なないし、老けないでしょう」

「皮肉に聞こえるな、おいつ。まあ、いい。ほれ、一夏、私からの誕生日プレゼントだ」

と、今度は師匠が一夏に渡す。

そんな感じで一夏の誕生日パーティーは楽しく賑わっていきながら続いていく。

やっぱり、こういう学園以外での陽だまりは楽しくて、尊いと感じる。

この陽だまりは輝何気ない一時の刹那いていた。まるで美麗………の刹那の輝きの如くに

…

第四十三話（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第四十三話。

一夏の誕生日パーティー。

どう書こうかあれこれ悩んだ結果普通に肩の力抜いて書くかつ！ということになり

普通に淡々と書いた結果、山なしオチなし展開801になってしまったのが今回の私が思い付く悪い点かな？

当初の予定では思い出せないけど・まだ書きたい事があつたきがするし

原作にあつた筈のイジメの話しも入れようと思つたけど、展開的に無理なので

文化際編に回すことになったし。

それにやっぱり、すつきり終ってないし。

でも、これ以上書くとグダグダになるからこれでベストなのかな？

それで各所でちよいちよい楽しめるところや小ネタを入れてみたり久々のロリ篝の登場っ！&ロリ篝無双？には力を入れたのですがいかがだつてじょうか？萌えor楽しめましたでしょうか？

萌えor楽しめましたのなら、嬉しい限りですっ！

それとツイッターを始めました。

執筆状況やどうでもいいことや重要よ様な事を呟いているのでよろしければ見てください。よろしくですm()m

<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

後、神咒神威神楽全クリしました。

兄様かつこよすぎるだろww夜都賀波岐の連中最高っ！
私も黄昏に抱かれていたっ！

ただし邪教とハージユン、お前らはダメだっ！滅尽滅相っ！
次回作は螢アフターか第一天の話、期待していますっ！

次は晴れときどきお天気雨をプレイしたいなっ

現在も、週間アクセス数とアクセス解析で悩んでおり
週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっ
ても嬉しいです

ご協力お願いしますm(´`´)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

今回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ！

次回 文化際、始動準備っ！（キリッ

第四十四話 ？

綾視点

様々な事があつた九月が終わり、十月に入つて数日が経つたある日の放課後。

俺達は、生徒会室で最近はや完全な日課となっている書類雑務をこなしている。

「はあくめんどくさいなっ」

「ぼやくな、束」

メンドクサそうにぼやく束に千冬が叱るように言う。

ぼやかれてもどうしようもないけど、束のぼやきたい気持ちはよく分かる。

本当にめんどくさい。日課になつてしまつたが、やっぱりこうなのは得意な方だけど、好きじゃないのでなれない。

十月に入ってから、九月と比べると生徒会に回ってくる書類雑務が結構多くなってくる。

頼りにされているのは間違いじゃないけど、他に他意がありそうなのは今はおいておこう。

けど束はぼやいているけど、後数枚で終わるぐらいに片付いている。

相変わらず早いな……最後になると余計めんどくさくなるのは分かっているけど、ぼやかないでほしい。

まだまだかなりの量が残っている書類の数を見ると、気が滅入る。

「まあまあ、あと少しだから頑張ろう」

「うん、そうだね。頑張ろうっ」

「あっはは。ん？これは……」

メンドクサそうにばやく束を自分も含めて励ますように言う。
すると、束は優しげに笑みを浮かべて笑い、その束の表情に少し癒
されているとある書類を見つけた。

「そう言えば、IS学園でもそろそろ学園祭（じ）の時期なんだね」

書類の内容は学園際を行うなうにあたって今のところ決まっている
骨組みの説明だった。

そう言えば、そういう時期になるのか。

だから、それで十月に入ってからこんなにも仕事が多いんだな。ふ
と納得が行った。

同じく束も千冬も俺が今見ている書類を見てける。

「そう言えば、そうだな。ISを取り扱っているここでも学園祭は
やるんだな」

「当たり前だよ、ちーちゃん。いくらIS学園（じ）が特殊学校とは言え、
高校なんだよ？高校って言えば、やっぱり文化祭なり学園祭がビツ
クイベントじゃん。折角高校生生活送っているんだから、やらな
いと勿体無いよ」

束が言うことはもっともだ。

高校生生活といえば、文化際ないし学園祭だ。

それが目玉となるビックイイベントであり、高校生なら誰もが楽しみに待っているイベントである。

それをいくらIS学園が特殊学校とは言えしないということはまずない。現にこうしてする方向にある。だからこそ、やってみたい。今は幸いな事に高校生生活などを送れているけど、もしかすると高校生活や人並みの人生を送れるか微妙だったし、それに折角高校生しているのならそういう青春イベントを体験したい。

「そうだね、やらないと勿体無い。でも、学園祭って何するんだろっ?」

それが今一つ分からない事だった。

学園祭の準備期間まではわりと日日はあるけど、そう悠長にはしてられない。

それに折角俺達は、IS学園の第一期生にして、生徒会なんだ。

やっぱりするならするで最高の、これから続くIS学園の学園祭の伝統や基礎となるようなものをしたい。

でも高校の学園祭って本当に何をするものなんだろう?

中学生の頃には、文化際もどきをしたけど。アレは文化際と言うよりは、美術や習字で創った作品を展示して鑑賞して、各学年の各クラスの合唱を聞くだけの芸術鑑賞会だったしな。

比べようにもモノが違うから、無理だ。

本当に高校の学園祭って何をしたらいいのやら……

「んー、何しよっか? 学園祭……有体に行くなら、ミスコンとか?」

「分かっている? 束。三クラスしかないんだぞ、そんなものしてもしょぼいだけだ。するなら人が増える来年以降だ。それと先に言っ

ておくが、飯にやるとしてお前が出て私が出んぞ」

「ええ〜っ、つまんない〜っ」

むくれ顔でばやく束。

千冬の言うとおり、ほぼ今年に出来たIS学園（三）は一学年三クラスしかない。

合計でよくて百二十人ぐらい。充分と言えば充分な人数だが、ミスコンを始めとした大掛かりな事をするには少し人数が足りない。

だから、今年はまだそういう大掛かりなことは出来ないとするなら来年以降かな。

今年はIS学園にとって初めての学園祭になるけど、それと同時に言うなれば今後の布石や下積みみたいなものだ。

「でも、今年は初めての学園祭なんだし、別に小さい学園祭でもいいんじゃない？見た目なんてものはそれなりのもので、中身がそれなりにしっかりしていて、皆が楽しいと感ぜられるのなら」

「……………」

「……………」

束の言った言葉に俺と千冬は啞然とした。

すると、そんな反応をしている俺と千冬を束は不思議そうに見ていた。

「どっかした？」

「いや、束が珍しくまともなこと言うものだから、啞然としてしま

って」

「なっ！？ひどいよっ、綾っ！ハッ、という事はまさかちーちゃんもっ？」

「ああ、私もだ。と言うか、そんな反応されるのは自業自得だ。お前はいつもぶつとんだ変なことしから言わないからな」

「ううっ、酷いよ、二人とも」

目尻なに涙を浮かべて束は、泣いているマネをする。

嘘泣きにしか見えないけど、シヨックは受けている。

でもしかないだろう。束は千冬が言う通り、いつも本当にぶっ飛んだことしか言わないのだから。

こう珍しくまともな事を言われると啞然としてしまうのは仕方ない。まあ、こんな反応をしてシヨック受けている束を見て申し訳ないとは思っけど。

でも啞然としているのと同時に珍しくまともな事を言った束に関心と感動みたいなものをしている。

俺達以外の他人を含めて言うなんて思ってもいながら。

「ごめんごめん。でも、そうだね。楽しければ、大小は関係ないね」

「そうそうっ 楽しく終れば全てよしだよっ」

「そうだな。今のところは部活動からの出し物か何かあったら検討の上やらせるといづのもはどうだ？」

「それもいいね。これは楽しくしないといけないし、楽しくなりそうだ」

「にやはは、だね〜でも、これからもつと仕事の量増えそう。やだなあ〜」

「仕方ないさ、皆で頑張るしかないよ。それに多い方がやり甲斐があるでしょう?」

「それは綾だけだよ」

「お前だけだ」

二人にそう断言されて俺は苦笑いするしかなかった。

これからは今日以上に仕事の量が増えるのは間違いないだろう。だけど、二人が束がいることがいるから、何とかなりそうだ。

それに二人には、否定されてしまったけど、多い方がやり甲斐がある。

俺は会長さんなんだし、二人以上により一層気合入れて頑張らないとな。

「他のことや細かいことは後々早めに決めるとして各クラスの出し物かな、やっぱり。この書類にも書いてあることだし」

「やっぱり、高校の学園祭って言えば、各クラスの出し物だよな。何になるのかな 何になるのかな」

「さあな、それは近いうちにクラスの話し合いで決めるだろうな」

「そうだね」

でも、本当にどんな出し物になるのだろうか？
気になるな……まあ、普通に安全なものだったらいいか。
そう、この時の俺は短絡的に考えていました。

・
・
・
数日後の教室にて放課後、ショートホームルーム。

この日、俺達のクラスは準備期間がただと迫ってきた来た学園祭出す出し物を決める為、わいわいと盛り上がりつつ話し合っていた。

「そうだな……」

委員長としてまとめ役の千冬が腕を組みながら悩んでいる顔をしている。

出し物の候補は一応出ている。

最初は、『神山綾のホストクラブ』やら『神山綾とのポッキー遊び』やら『神山綾との王様ゲーム』とかが出ていたけど。

俺が却下する前にこの三つが同時に候補として瞬間、束の笑みを浮かべたこの世の物とは思えないハイライトの瞳で睨まれ、オーラでも圧倒され。

クラス中の時が止まって静まり返り、次の瞬間却下され、事なきをえた。

クラスの人達には悪いけど、こういう時束が隣に居てくれてよかった。物凄く助かる。

「今の有力候補はメイド喫茶だがな……」

千冬は歯切れ悪く言う。

今の有力候補はメイド喫茶。

最初の三つよりも遙かにマシだし。

それに客受けがよく、飲食店系の出し物は経費の回収が出来る。

招待券によって外部からも客は呼び込め、それならその人達にも休憩所として使ってもらえ需要は多少あるはず。

と言う、数多い利点があり、何よりクラスの皆が最初の三つ以上に乗り気だ。

これなら俺も進んで楽しみながら出来る。執事服を着るのは確定で色物となりそうだけど、仕方ない。

千冬も初めは全力で拒否っていたが、クラス全員の切望なる必死の説得で、折れてメイド服を着てくれることになっている。

だけど

「メイド服がないってのが問題だね。いや、問題以前の事だけでも仮に縫うとなると大変だし、縫うとしても流石に全員分縫うには時間が足りないよ」

「そうだよね〜ん……他のになるのかな？でも、他のって思いつかない」

と、クラスの女の子の誰かがぼやき、周りの子達が同意する。

メイド喫茶が有力候補、ほぼ確定となったはいいいけど、問題は衣装が今のところ用意できないという事だ。

普通の喫茶をするなら他がするだろうししくない。普通の喫茶をするなら他がするだろうししくない。

クラス的にはメイド喫茶でなければ意味がないという感じだ。

だけど、今から縫うにしても時間が足りない。

頑張ってみてよくて、半分の人数分しか用意できないだろ。
だからといって今更考え直して別のものにしても、いい案は出ず時
間の浪費となるだろう。

手詰まり状態だな……何か打開ないものか。

そう問題にぶち当たりさつきまで盛り上がっていたクラスが少し暗
く沈んでいると隣にいる無表情・無感情の束が手を上げた。

「ん？どうした？束、手なんか上げて」

「ちーちゃん、私から提案があります」

「提案？珍しいな、お前がそんな事いうなんて。まあ、いい、言っ
てみる」

コクリつと首を縦に振って束は立ち上がる。

表情は、今だ無表情・無感情のままだ。

提案……束は、一体何を話すつもりなんだろう？

「メイド服がないという事ですが、アテがあるので借りて全員分用
意できます」

「嘘っ!?!」

「本当っ!?!」

「本当です」

束のその言葉を確信の物だと感じたクラスメイトの人達が沈んだ暗
い雰囲気から明るい歓喜に包まれる。

アテと言うのは、師匠と奈々さん……水城家のことだろう。その存在をすっかり忘れていたけど、あそこからメイド服を借りられれば、現物がそのまま来るで作る手間がなくなって、その分の時間を喫茶店としての準備に当てられる。チートバック補正って、本当に便利だな。

そしてまだ提案がある様で東は、言葉が続ける。

「これは副題で本題の提案がまだあります」

「何？何？」

「聞きたい〜っ教えてっ」

「普通にメイド喫茶では、普通すぎて少し味気ないので獣耳をつけてするというのはいかがでしょう？」

「獣耳……」

「という事は、織斑さんの獣耳メイド服……」

「イイツ！いいよっ！」

東の発言を受けて、歓喜に包まれていたクラスは更なる歓喜に包まれる。

やっぱり、東はいつもの東だった。口調こそは違い冷たいけど、これまた変な方向でぶつとんだことを言ってくれたものだ。

と言うか、大半が千冬の獣耳メイド服姿を想像して、恍惚とした表情を浮かべている。

それに身の危険を感じたのか、千冬は慌てた顔で言った。

「いつ、言っておくが私はそこまでしんぞっ！？ただでさえ、メイド服を着るといふのに折れてやったのに」

「ええ〜っ！？見れていなんて嫌嫌だよ、私達織斑さんの獣耳メイド服姿見たいよっ！」

「うんっうんっ、見たいっ」

「ほら、クラスの人達もこういつているんだよ？まさかちーちゃん、クラスの人達の期待と反して、輪を乱すような事はいわないよね？」

そう束は、綺麗だけど何処となく威圧感のある浮かべて言う。

今までのお前が言えた事かっ！、と思ったけど今は飲み込んでおこ
う。

今の状況では、束の言うことはもっともだ。

クラスほぼ他意から千冬に向けられている眼差しは凄まじく、教卓で立って纏め役をしている千冬はその期待の眼差しに威圧されて少したじろいでいる。

と言うか、千冬が獣耳メイド服が姿になるってことは

「もしかして……俺も獣耳つけるの？」

「もちろん、当たり前だよ　あっ、ちなみに綾の狼の獣耳だよ」
っ

「あっ、そうなんだ」

分かってはいたけど、物凄くいい笑顔で束に言われて確定したのが分かって、少しだけ落胆する。

やっぱりか……薄々分かっていけど、これはやっぱり羞恥心がというか何か堪えそうな物がくる。

獣耳付きのメイド服or執事服、やっぱり束は束だった。ぶつとんだことを今日は言わないのかなっと思っただ矢先、見事にぶつとんだことを言ってくれた。

と言うか、よりもよって狼の獣耳か……

男の獣耳執事姿なんて誰得だよ。いや、考え方を考えよう。ここは言うなれば女の花園、女子高みたいなものだ。

そして俺はISを使えるこの学校唯一の男子生徒……需要があるってことだね、嫌な需要だ。

だけど、仕方ないか

「狼耳執事服の神山君かあ……」

「それはそれでいいよっ！うん、きつと似合うよっ！期待しているっ！」

「そっか……ありがとう、ご期待を添えればいいね」

何を期待されているの分からないけど、そう返しておいた。

もともと、何かを期待されても困るけど。だって、束の視線がね……すると、俺の返答が予想外の予想外だったらしく、千冬は更に慌てた様子で言ってきた。

「おいおいおいっ！お前はそれでいいのかっ、綾っ?!」

「俺はいいよ、別に。楽しい学園祭になる為なら、このぐらいで皆がやる気を出して頑張ってくれるなら」

「おおっ！神山君、器が大きいっ！流石、生徒会長っ！」

「私達命尽きるまで頑張るよっ！神山生徒会長、最高っ！神山君に続いて、織斑さんももう少し妥協してくれてものにつ」

「あれとこれは別の話だ。それにメイド服を着るといっただけで充分妥協している。それで綾っ、分かっているのかっ？執事服着た上に獣耳だなんて、凄く羞恥プレイになるんだぞ」

「ああ、分かっているよ。でも、知ってるかい？千冬。世の中にはね、大変な努力が必要とされているのと同時に、潔い諦めと言うのも必要なんたぜっ？」

「カツコよく言ってもダメだ。諦めただけじゃないか」

「あっちははっ、でも綾らしいよ」

ジト目で言う千冬と苦笑いしているけど楽しそうな表情の束。

諦めたと言われても仕方ない。事実、さっきの言葉も半分諦めた上で言葉。

それでも俺の羞恥心ぐらいで楽しい学園祭になるのなら、皆が楽しんでやる気を出してくれるのなら狼耳執事姿になるのは別にいいだろう。

千冬が言うとおり羞恥心は物凄いだろうが、その時はその時でそれと折り合いを付けて上手く対処すればいい。

後はやっぱり、諦めた。いい漢は、諦めも潔い方がいいと師匠も言

っていた事だし、変にだだ捏ねて理屈ぽくなるよりもマシだ。

「それで残るはちーちゃんだけだどどうするのかな〜？」

「うっ……」

物凄く綺麗で楽しそうな笑みの束に言葉で追い込まれるように言われ、千冬は苦い顔をする。

答えなんてものは当に決まっているようなものだけど、もう獣耳メイド喫茶と決まっている今、後は千冬の返事を待つだけだ。

千冬のいい返事をクラス一同は目を輝かせて待っており、それを見て千冬は

「はあ〜……分かった、いいだろう。獣耳メイド服だろうが、何だろうが着てやるっ！もう、何も怖くないっ！」

言っている事はかなり無茶苦茶だが。

言っているその千冬の姿は、凜ッ！という効果音がつきそうなくらい凜然としてかっこよく。

その漢前な千冬の姿にノックアウトされ、恍惚な表情を浮かべている子達が更に増えていた。

「きゃ〜っ！織斑さん、漢前っ」

「獣耳メイド服の織斑さん、k t k rっ！」

「やったーっ！獣耳メイド服の織斑さんを見て、尚且つこれで客がバンバン来て、ウハウハよっ！」

といった感じで、何だか当初とは明らか別の方向で歓喜し、盛り上

がっている。

そんなクラスの光景を見て千冬は、諦めた様な呆れたような何とも
言えない気の重たそうな溜息を零していた。

「はあ〜これだから気が引けたんだ。まあ、よく分からんがやる気
を出したのはいい事だが、それでも恥ずかしい物は恥ずかしい物は
恥ずかしい。よって綾、しっかりとフォローしてもらうからな、分
かったなっ」

「はいはい、分かりました。俺の出来る可能な限りなことなら、少
しぐらいは」

「言ったな、その言葉忘れるなよ」

言い聞かせる様なその言葉に只ならぬものがあると感じ、背筋に何
かが走った。

あつ、また俺何かやらかした？ 地雷でも踏んで渡った？

さっきの言葉は、やはり俺と^{俺達}束的に失言だったかもしれない。

また、前のデートの時みたいなお事にならないようにしないと。

だけどもあ、こうして学園祭に一年一組が出す出し物は『獣耳メイ
ド喫茶』となった。

束や千冬、その他の子達といった魅力的な女の子達がいるから、こ
れはいい反響に反響を呼ぶことだろう。

…

第四十四話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第四十四話 ？

学園祭準備期間編。今回は準備期間前の話でした。

相変わらずゆっくりに展開、もしかするとグダグダな展開ですみません（汗）

途中、ちよっとした急展開ならありますが（汗）

この回で綾君達の出し物が決まりました。

原作の一夏達のクラスと同じでメイド喫茶となりました。

ただ普通のメイド喫茶なら味気ないので＋、獣耳要素を足してみました。

『流石シート《変態》、俺達の予想の斜め上をいく。そこに痺れるっ！（ey^E』

的な反応だったら嬉しいですww

さて、どんな獣耳にしようっかな？

綾君は確定です、まあシュライバーみたいな二面性を持つ狼だと思っってください。

作中にもありましたけど、男の獣耳って誰得だよ。あっ、東さん得かつ。理解ww

東さんがクラスに貢献したのは気まぐれともう一つ意味があります。

多分

それとミスコンは最初の段階ではやろうかと思いましたが

そうしたら東さんの活躍が必然的に千冬さんと同じになるのと

時間枠的に人数が足りないという理由でやめました。作中のはその名残です（汗）

それとツイッターを始めました。

執筆状況やどうでもいいことや重要よくな事を呟いているので

よろしければ見てください。よろしくですm()m

<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言うか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

週間ユニーク数を上げてページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだったので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ!!m()m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とても嬉しいです

ご協力お願いしますm()m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願っています。

今回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想

のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ！

次回 スーパーデレデレ東さんタイム&ハイパー激甘々タイムっ

！（キリッ！

君達、僕の砂糖わたぢとなれよ。

第四十四話 ？

綾視点

俺達のクラスの出し物が『獣耳メイド喫茶』と決まった日から数日後。

学園祭はついに準備期間に入り、今日のその準備期間の数日目で放課後。

「わあ〜これは凄い」

「うん、本当に凄い。凄すぎて、これ以上の出ない」

目の前の光景を見てクラスの子達は、驚きすぎて逆に淡白みたいになった声でそんな感想を口々に漏らす。

彼女達……もとい俺達の目の前に数十着のメイド服が掛かっている服掛けラックが三つ、四つ存在している。

ちなみに場所は教材室の空き部屋の一室。

そこに束は口約通り、水城家からメイド服を数十着一式を借りて、こうして用意した。

三つ、四つ服掛けラックの数十着のメイド服がずらっと並んでいる光景は、何というか上手く言い表せない凄い光景だ。

この場の指令役を千冬から半強制的に任された束は、何時もの様に無感情・無表情のままメイド服数十着一式の前に立ち言う。

「では、今から試着をするので、自分のサイズの好きなのを着てください」

『はっい』

束の言葉にクラス一同が頷き、わいわいと騒ぎ初めながら行動に移り始める。

現物が来たんだ各自のサイズのモノを用意しているようだけど。一度試着を兼ねて、着てみたいことにはそれが本当に自分が合っているか分からない。

だから今から、試着を兼ねて着合せしないといけないし。

それに普段滅多に着れないメイド服が今目の前にあるんだ、女の子はそういう洋服も着てみたいと思うらしく、一度は現物を着てみたいのだろう。

束や奈々さん曰く、女の子というものは基本的にはそういうものらしい。理解は何となくは出来る。

と、そんなことを暢気に考えている場合じゃない。

メイド服を身体に当てて簡単な感想を言い合ったりして、着替え……服を脱ぐとしてなくて事なきをえているけど。

俺もそろそろ衣装を貰って、部屋を出て着替えないと。

そう思い束に俺の衣装は何処なのか聞こうとすると。

何かを俺から察したのか束は、楽しそうな無邪気な笑みを浮かべて言う。

「綾……まだいるって事は着替え見たいの？私だけなら全然いいよっ」

「魅力的な言葉だけど、それはまた別の機会で。と言うか、そういうことじゃないから。俺の衣装はどこ？」

「ふふんっ それならその別の機会が来たらたっぷり私の着替え姿
見せてあげるね。綾の衣装はこっちだよ」

「ありがとう」

束の言葉、前者後者どちらとも例を言う。

どちらもいろいろ異なる意味で、ありがたいこと相違はないが。

前者は小声だったのがよかったけど、多分誤解みたいなのを生むんだらう。

まあ、その誤解の内容も間違っていないくないんだけど。

そして束の後に着いて行くと、衣装が入っていると思わしき縦長の箱を受け取る。

「んしょっ、はい、どうぞ」

「ありがとう、じゃ着替えてくるね」

「うん、私も着替えるよ。あっ、分かっていると思うけど見られないようにね」

「了解」

そういうと衣装が入っている縦長の箱を受け取り、足早に部屋を出る。

部屋を出ると部屋からは更に女の子独特の賑やかな声が聞こえて、着替えが始まったのを知る。

それを後ろで聞き流しつつ俺は、隣の空いている教材室に入る。

「さつさと着替えよう」

縦長の箱を適当なところに置き着替え始める。

箱に入っているのはもちろん執事服のみ、獣耳は入っていないかった。その執事服の下をシワくちやにならないように取って、着替える。

スポンを履いてベルトを締めながら一人静かに着替えていると壁から隣から会話が聞こえてきた。

「わあ、ねえまた胸大きくなつたんじゃない？」

「あつ、分かる？ほんの少しだけどね」

「いいなあ、私ももう少し大きくなりたい」

と言った会話。

壁越しなのでちゃんと聞こえるものもあれば、上手く聞き取れないものもある。

だが、どれもスタイルの話やらが多く、着ているこっちの身、男としては少しならず辛いものがある。

デジャヴってるぜ……臨海学校の露天風呂の時の事を思い出す。

わいわいとそんな話とかをしつつ騒ぎながらも着替えてるみたいだが。

聞こえてくる会話には束の声どころか、千冬の声すら聞こえてこない。

束はいつも通りの感じだろうから聞こえてこないのは仕方ないけど、千冬の声が聞こえてこないとは何というか珍しい。

そう言う時千冬は、声を上げて最後まで可愛しく抵抗するだろうに。大人しく今回は着替えているってことかな？

と、少し気になるが、気にしたところでどうしようもないから、今は置いておこう。

ズボンを履き型を崩さない様にして上着を着て、着替えを終了する。制服を綺麗に畳むと顔だけ出して、辺り廊下を見て、人が居ないのを確認して部屋を後にする。

俺や束、千冬といった有名人がいるから噂になるのは仕方ないし、既に小さく噂にはなっているみたいだけど。

このメイド服姿やら執事服を姿よ人に見られては野次馬が集まって本番で見れるお楽しみとお得感は薄れる。

だからこそ、見られないように束と別れる前、『見られないようにね』と言われた。

執事服に着替え時間带的にも女の子達の着替えが終わっただろう頃に部屋の前に行き、入っていいか聞く為ノックをしよう手を伸ばした時だった。

「ま、待てっ！待ってくれ、束っ！その変な手の動きをやめろっ！」

千冬のやけに焦った声が聞こえた。

言葉から察するに千冬はまたある意味で危機的状況に陥っている様だ。

しかも、相手はいつも通り束。

何をされているんだろう？ ふと気になって俺は、ノックしようとするのをやめて扉の前で耳を傾けてみる。

「ええ〜、だってまだ着替えてなはもうちーちゃん一人だけだよ？
着替えられないのなら手伝ってあげよっか？」

「いいっ！自分で着替えられるっ！だ、だが、恥ずかしいものは恥ずかしいんだっ！だからそれで、今一つふん切れが着かなくてだなっ」

「でも、着替えないと。いつもまでもそうしていたら、神山君に織斑さんのメイド姿を見せられないだよ？」

「そうだが……」

口ごもる千冬。

相手は束だけじゃなく、他の子もだった。

結託……と言うか、他の子が束に便乗しているんだけど、他に聞こえてくる束の声は不快感は感じていないようで、普通に状況を楽しんでいる。

俺にメイド服を見せられないと言っていたけど、やっぱり異性からの感想を聞きたいということなのかな。

それもあるのだろうけど、他の意図が今一つ分かるようで分からない。

「ならちーちゃん、さっさとお着替えしないとね 大丈夫、痛くないからっ」

「そういう問題じゃないと言っているだろっ！アホ兔っ！」

「時間が勿体無いから、織斑さんを皆でひん剥いてメイド服着せちゃおっつー！」

『賛成っ！』

「なっ！？お前達までっ！どうしてそうなるっ！？」

「だって時間勿体ないし、読者の皆さん達《他の人達》だって、織斑さんのひん剥かれてメイド服を着させられるのを少しでもいいから見たいと思っっているんだよ」

「メタ発言を言うなっ！そんなもの誰も思っ^{変なこと}てないっ！」

「ところが思っっているんだなあ〜これが。そういうのは需要がいつもだつてあるんだよ　ちーちゃん　いい加減素直な諦めようよ、綾も言っ^ていたでしょう？大変な努力が必要とされているのと同時に、潔い諦めと言つのも必要だと」

「そこでその言葉を持つているなっ！と言っか、冷静に言っ^てないで助けるっ！いやっ……やめて、近寄るなっ、い、いやああああっ！」

部屋と廊下に悲しみとかが満ちた悲鳴が響く。

悲しみの悲鳴と言っ^つよりかは、妙に可愛らしく艶っ^{ぽい}悲鳴だつた。

俺が前に苦肉で言っ^つて千冬がばっさり切り捨てた言葉が、どうやらトドメになつたみたい。

因果応報と言っ^つか何というか。

俺が着替えている時束は兎も角、千冬が静かだつたのはこの為だつたか。

千冬は自分で往生際が悪いのは自覚しているみたいで、先に言つた恥ずかしいものは恥ずかしくつてふん切れが着かないというのもよく分かる。

だからこそ、自分で着替えたかつて最後まで抵抗して^{いて}のだからけども、だけど結末としては考えていたこととは違つた千冬にとっ

て最悪の結末になってしまった。

「やつ、ちよつ、とつ。下着に手を掛けるなっ！あつ、んんっ！」

「いいね〜そそるよ、今の織斑さんはとつても」

「織斑さんのお着替えk t k rっ！」

「織斑さん、ハアハア……」

「気持ち悪いというか不気味すぎるぞっ！お前らっ！だから、下着に手を掛けるなっ！やつ、んっ、んんっ」

このように。

この扉の向こうでは今千冬のお着替えが始まっているのだろう。

結構、不安な声が多々聞こえるけど、物凄く百合百合な光景が広がっていることだろう。

デジャヴっるぜ、臨海学校の夜の露天風呂でも確か似たような声が聞こえてきたな。

だけど、もっとも当の本人の千冬にしたらトラウマ以外の何物でもない光景なのだろうけども。

と言うか、扉越しに聞こえてくる千冬の声は何と言うか物凄く色っぽい。

扉越しで、ましてや男である俺が扉の向こうの光景を見るのは無理だけ。

千冬之物凄く色っぽい悲鳴に聴覚が刺激されてなのか、想像力が増して、いろいろと扉の向こうで行われているだろう百合百合な光景をつい勝手に想像してしまう。

それはもう度が過ぎていくぐらい想像をしまつて……

「っ！」

瞬間、背中に絶対零度の寒気が走る。

感じているのは多分俺だけなのだろうけど、扉の向こうから物凄い威圧を感じる

多分……いや、絶対に束だ。今頃、部屋の中に束は微笑を浮かべて千冬の様子を見ながらのも、扉に気を向けていること間違いない。変なこと考えねなというこのなのだろう。俺に考えている事が毎度手に取るように読まれているのが最近怖くもあるが、やはり嬉しい。それは俺もそうだし、今のとりあえず変なことは考えないで置こう。束にも千冬にもいろいろ意味で、悪い。

そして千冬の物凄く色っぽい悲鳴を聞き流しつつ、千冬の着替えが終るを見計らって、改めて扉をノックする。

「どっぞっ」

束の声が聞こえ扉を開けて中に入る。
すると

「おおっ……っ！」

入って目に飛び込んできた光景を見て、つい関心めいた声を漏らしてしまった。

皆着替えを済ませていて、メイド服に身を包んでいて、オマケに様々な獣耳までつけている。

凄い光景だ……メイド服が服掛けラックに並んでいるだけでも、凄

いと思ったけど、こっちの方が凄い光景だ。
俺一人だけ執事服つてのがアウエーに感じる。

目の前に広がるメイド一杯の光景に驚きながらぼーっと眺めていると、クラスの女の子達が一同に俺を真面真面と見ていた。

「似合うとは思っていたけど……」

「これは似合いすぎるほど似合いすぎ」

「うん、本物の執事さんみたい」

そう一同に感想を漏らすクラスの女の子達。

この執事服はかなり好評なようだ。

俺が着ている執事服は、一般的なオーソドックスな執事服。

ちなみにコスプレ様のもではなく、本場の金持ちに家に仕える執事が着る本物。

着方としては制服やスーツと大差はないが、明らかにデザインが違うので着心地が違う。

すると、今度は束が一度真面真面と下から上へ執事服姿の俺を見上げて言ってくれた。

「うん、とっても似合っている、執事服の綾もとってもカッコイイよ。とっても」

「……ありがとう」

優しいな笑みを浮かべて束に感想を言われて嬉しくて少し返答が遅

れてしまった。

言葉としては、ありきたりな感想の言葉だったけど、褒められるというのは嬉しい。

異性からの感想はこういう場合貴重だし、何より束にこの姿を喜んでもらえたというのが嬉しい。

「あつ、そうそうあとは仕上げしないとっ」

思い出した様に楽しげに言っている物を取り出す。

「ほら、付けてあげるから先に頭を低くして」

「……うん」

そして頭に付けられ、後ろにも付けられる。

その少し変わった様にクラスの女の子達は

「ヤバイッ、狼執事の神山君いいよっ！」

「あつ……興奮しすぎて鼻血が」

「目の前に幻想を結晶化した様な光景が……死んでもいいかも。いや、ご奉仕してもらつまで死ねないっ！」

「と言うか、この狼執事の神山君なら襲われてもいいかもっ！と言うか、襲ってっ！」

とまた更にテンションが上がっている。

元気だな、本当に……と言うか、やっぱりテンションの上がり方が危ない。

でも、この狼耳付けた執事姿も好評な様で何より。
この言葉達で分かると思うが、俺の頭に付けられたのは予定通り狼
の獣耳。

後ろ、お尻辺りにはご丁寧に尻尾までつけている。

これはこれでいいけど、執事らしさが皆無だな……まあ、言つて学
園祭だからいいけど。

口々に言われる俺への感想を聞いて束は、自分の事のように得意げな
顔をして自分の事の様に嬉しそうにしている。

「ふふんっ 獣耳と尻尾もよく似てってるよ、綾。可愛い」

「今度は可愛い？あまり嬉しくないんだけど」

「拗ねない 拗ねない」

そう楽しげにして言う束に頭を撫でられる。

感想を言われた事は嬉しいけど、可愛いと言われるのは慣れないし
素直にはどうしても喜べない。

執事服着るだけなら何ともないし、覚悟はしていたけどやっぱり物
凄く羞恥プレイだ。

何ともない顔を装っているのが大変だ。本番はもつと羞恥プレイと
なつて、大変になるだろうな。気合と覚悟を更に入れないと。

恥ずかしく今だ真面真面と見られる視線が耐えられなくて目線を外
していると、千冬の姿が目に入り千冬は言っていた。

「くっ……何たる屈辱っ、これでは色物ではないか」

千冬は、顔を赤く染めて恥ずかしそうに恨めしそうに言っている。

よっばどさっきの着替えが効いているんだろうな。

今だ若干ながら息は荒く、肌や頬や艶ぼく仄かに赤いそれに俺が近くにいることすら気づいてない様子だ。

まあ、あんなことされればそうなるのも仕方ないか。

それに確かに俺達の今の姿は色物だ。

「千冬……大丈夫？」

「ああ、綾か……まあ、その一応何とか大丈夫だ。お前も大変そうだな」

「ああ、この狼耳と尻尾？まあ、これは想定範囲内だし恥ずかしいだろうけど我慢はしないとね」

「そう……だな。それよりもどうだ？」

千冬は、気恥ずかしそうにして感想を聞いてくる。

メイド服を着ている千冬は口ではあんな事を言っていたけど。

可愛い服がすきと言うのもあってか、不機嫌どころか、楽しそうに着ている。

皆や千冬は、一般的なメイド服で、千冬の獣耳と尻尾は猫だった。

一夏からは「真面目な狼」と言われて、てっきり俺と同じ狼タイプだと思っていたけど。

猫耳と尻尾の方が千冬にあってる。今思うと千冬は、狼と言うよりは猫のほうがあっている。

千冬は束と同じで姉という立場上気丈で冷静、クールでいなければ

ならなくとそうしていて、それが癖づいているだけで。

実際のところは皆や俺が思っている以上に弱くて繊細で、物凄く甘えたがり屋なんだろう。

そういうところが千冬には狼よりは猫の方があっていると思う。

「似合っているよ、メイド服。素直に千冬のメイド服姿はいいと思うよ」

「そ、そうか……それは嬉しいっ。このね、猫耳のほうはどうだ？」

「それもいいと思うとよ。千冬は猫っぽいところがあるから、とてもよく似合っていて、可愛いと思うよ」

「か、可愛い……そうか嬉しい、綾。ありがとう、そう言ってくれとそういう姿も悪くないな」

思った事を素直に言っただけだけど、千冬は両手をぎゅっと握って顔を真っ赤にして嬉しそうにしている。

嬉しさは一杯に広がっている様で、装飾品のはずの耳が前向きに立ち、しつぽは大きくゆっくり振っている。

装飾品なのに動いているように見えるのは俺の目の錯覚なのだろうか、よく分からない。

ありのまま言っただけでもこんなにも喜んでもらえると言った甲斐があるというもの。

なのだが、周りは俺と千冬の様子を見てニヤニヤとしているけど……

「
」

束から殺気に似たただなら威圧感を俺だけが一身に受けている。や

つぱり、微笑を浮かべているのが怖い。理由は分かっている。千冬を褒めすぎた……と言ったら、千冬にも悪いけど、やっぱり彼が他の女の子をベタ褒めしているのは内心穏やかではいられないのだろう。自分でも言い過ぎたのは理解している。これじゃあ、天然やジゴロやらタラシやら言われても仕方ない。

本当は　　ているのだから。

「確かに猫耳の方が織斑さんには合ってるかもね。可愛すぎる」

「逆に私がご奉仕したいっ、猫耳メイド服の織斑さんいいよっ！」

「猫耳メイド服の織斑さんかぁいいよっくお持ち帰りしたいっ！」

クラスの女の子達からもいつも通り、いつも以上に好評だった。全体的に危ないと発言と危ない子が多いがもう気にしないで、触れないで置こう。

対象である当の千冬は、知らぬ存ぜぬの感じで目を反らして、別の方向を見ている。

そうして皆が皆、千冬を見ていると今度は視線が東の方に集まる。

「織斑さんもいいけど、篠ノ之さんもいいよね」

「うん、可愛い。と言つか、神山君と同じでとっても似合っているね」

「違和感がまったくない。似合いすぎて可愛すぎるよっ!」

と、束のメイド服姿もメイド服姿も好評だった。

束が着ているメイド服は両腕に白色のリストバンドみたいなもの
を着ているだけで他は皆が着ているものと一緒に物。

そして、束がつけている獣耳と尻尾は、ウサギだった。ちなみにウ
サ耳は俺が以前、束にプレゼントしたウサミミカシューシャ。

そのウサミミカシューシャとメイド服がマッチして、メイド服のデ
ザインは違うものの、昔読んだ童話不思議の国のアリスの主人公ア
リスとウサギを模している様に見える。

またその姿は一人不思議の国のアリスをしている様に何となくだが
見える。

ウサミミメイド服姿の束の姿は皆が言うとおり違和感がなく、似合
いすぎるぐらい似合っていて、とっても可愛い。

それはもう、変なことを言ってしまったえば、この姿……狼らしく襲っ
てしまいたいとふと思うぐらいに。

束は一度に視線を集めていても気にしてないようで、俺の反応を真
っ先に伺ってくる。

「どうかな？綾」

「とっても似合っている。可愛いよ、いつもとは違う可愛さがあっ
て。何というか不思議の国のアリスみたいなあっと思った」

「不思議の国のアリスか……あの童話は童話の中で一番好きだから
何だか嬉しいよ。ふふんっ　もしかすると、襲いたくなっただ？」

「さあ、それはどうだろうね。ここでは流石に言えないけど、束が

思っている通りだとは言っておくよ。今の束は黄昏の女神にも勝るほど可愛いよ、最高だね」

「もおっ〜言いすぎ。でも、そっか……うん、嬉しいよ」

そう頬を薄く染めてニッコリと嬉しそうに笑って言う束。

それを見て俺も自然と笑みを返す。

千冬の時以上に周りにニヤニヤされながら見られているけど気にはならない。

ウサミミメイド服姿の束は本当に可愛い。

比べるのはよくないけど、あえて比べさせてもらっならやっぱり束が一番だ。

姿は眼福ものだし、見ているだけでも充分楽しいと思える。

それにウサミミメイド服はもちろんだけど、こうして嬉しそうにニッコリと笑みを浮かべている束はやっぱり可愛くて、愛おしい。

人目がなかったら抱きしめているぐらいだ。

こうして今の束を見られたことで、少し現金かもしれないが、こんな恥ずかしい姿を晒した甲斐があると思える。

それに他の皆もメイド服を着て楽しそうにしている、やっぱりこういう刹那《一時》があつてよかったとも思える。

そして何より

「メイド服から獣耳まで用意してくれてありがとうね、篠ノ之さん」

「ありがとう、篠ノ之さん」

「いえ、あつ……どういたしまして」

クラスの子達に感謝されて、いつもの様にそっけなく返そうとしたが。何かを思っただらしく、いつもとは違い柔らかい嬉しそうな表情で言った。

これはきっと楽しく最高のいい学園祭となりそうだ。そう俺は束の笑顔を見て、確信する。

・
・
・

「はあ〜終わった」

バンつと終えた書類の束を整えた状態たばで置き、一息つく。メイド服や執事服を試着した日から数日後の放課後の生徒会室。いつもの様に場所で、いつものように生徒会の仕事をして、一先ず終えた。

「お疲れ様、はいお茶だよ」

「ああ、ありがとう。束」

横に現われた束からお茶を受け取る。

お茶は束が入れてくれた様で、温度は丁度いい熱さで飲みやすい。飲んでいるお茶は、熱い緑茶。緑茶独特の苦味が疲れた体に染みて、疲れた精神を少しばかり癒してくれる。

「どう？美味しい？」

「ああ、美味しいよ、ありがとう。やっぱり、日本人には緑茶だ」

「ふふつ、よかった」

俺の感想を隣で聞いている束は、俺の方に身体を少し向けて両肘を付いて両手に顎を乗せながら嬉しそうに笑みを浮かべている。

隣にいる束は、とっくの前に自分の仕事を終らせている。

束は、興味がないことはどんな量の書類であってもあっさりと終らせてしまう。

束としてたら『ああ、そんなことをしたかもしれない』という程度の認識しか終えても持たない。

つまり、束にとってはやってないに等しい。まあ、現実のものとして仕事をちゃんとやり終えているから別にいいけど。

そして仕事が終わった束は、ずっと楽しそうに俺を見たり遊んだりしている。邪魔はしない、いつも一番終るのは束だ。

「そう言えば、ちーちゃんはまだ外回りしているだよな？」

「そうみたいだね。帰りが遅いところから察するに女の子に囲まれて帰ってこれないんだらうね」

「あつははつ、そうかもね。今頃沢山の女の子に囲まれてモテモテで百合ん百合んハーレムなんだらうね」

と、容易に千冬の今の様子が想像できる。

千冬は、俺よりも先に外回りの仕事行っただけどまだ生徒会室には帰ってきていない。

外回りの仕事をしているんだらうけど、女の子達には囲まれて帰るに帰れなくなっているんだらう。

千冬、モテるからな……特に、と言うか、女の子だけには。

中学の時は、特に女の子にモテるといっただけだったけど、IS学園に入ってからISでの活躍で更にモテるようになってる。

ご愁傷様、千冬。ぐらいの言葉しか今は外にいる千冬には送ってあげられない。

千冬は今外にいて生徒会室にはいない。

今、生徒会室にいるのは俺と束の二人……つまり、二人きりというわけだ。

今更意識するほどのものでもないが、最近は三人でいることが多かったから、こうして久しぶりに二人つきりにいると思うと変に意識してしまう。

それを束も同じ様に意識しているようで、気恥ずかしそうな表情で頬を薄っすらと赤く染めている。

俺達はこの空間、この状況、この一時を変に意識してしまい二人揃って黙ってしまう。

すると、場は沈黙に包まれる。会話はなく、聞こえるのは緑茶を啜る音ぐらい。

ただ、辛い沈黙ではなく。お互いにこの状況を変に意識しているという事を理解し合っていて、お互いには相手のことだけを意識して想いあっていることも分かる丸

辛くはない、むしろ心地のよい沈黙。

そうした沈黙を味わいながらも少し手持ち無沙汰だと思った時。

同じ事を思ったのか束が口を開いた。

「そう言えば、最近仕事多くなってきたよね。まあ、直ぐに終わるけども」

「そうだね、だけど学園祭が真近だから仕方ないよ」

何でもない様な会話。

そう言えば、最近は生徒会に回ってくる仕事が多くなってきた。

でも、仕方ない。いくら学園祭が生徒主体とは言え、生徒会はその学園祭の中心核・司令塔だ。

なので、必然的に生徒会に回ってくる仕事が多くなるのは仕方ない。期間的にも今は準備期間の終盤、学園祭は直ぐそこなわけだし。

それに生徒会は常時フル稼働が最近のモットーな為、学園祭以外の仕事もあって仕事は多い。

頼りにされているのはいいけど。

他意がありそう……と言うか、正直『彼らは優秀だからこのぐらい出来るだろう』と言った感じで向こうの物差しで俺達を図りいい便利屋とされている様に気もしなくはない。

まあ、それ自体はいいんだけど。そういう気もしもしくはない。

「でも、綾の仕事って私達よりも多いよね。外で各所との打ち合わせとか大量の書類仕事とか」

「多いかもしれないね。だけど、仕方ないよ、今は頑張らないといけない時し。何より俺は生徒会長なんだから、束達が頑張っているんだ。それに負けられないように頑張らないと」

勝ち負けの問題ではないけど、束達が頑張っているんだ負けず劣らずで頑張らないと。

なので、そうすると束達と比べると俺の仕事量は少しばかり多くなったりはする。

大量の書類仕事とか外で各所との打ち合わせ等大変で目まぐるしく

はあるけど、遣り甲斐があるから大した苦ではない。

そう思っていると隣に座っていた束が立ち上がり、後ろから抱きついてきた。

「束？」

突然の事に俺は、驚く。

と言うよりも、背中に当たって伝わってくる胸の柔らかい感触や心地よい温もり。

ぴったりと身体をくつけた時に鼻をくすぐる束のいい香り。それらが俺の気持ちをドキドキとさせ、胸の鼓動を心なしか速くさせる。

驚いていると束は、上から乗せている身体を更に密着させてくる。

「そう言って綾はまた無理をする。無理を絶対にするなっなんて言わないけど、あまり無理はしないでね」

「分かっている。それに無理しているつもりはないよ」

「そう言って綾は無理をするからね。頑張るのはいい事だし、頑張る綾は凄いとカッコイイと思う、純粋に尊敬する。だけど綾は頑張ろうとし過ぎて何でもかんで背負おうとし過ぎなんだよ」

その束の言葉に俺は、そうかなあと、言い少し思い返す。

何でもかんでも背負おうとしすぎか……自分ではそんなつもりはない。

自分ができる事を頑張っているだけつもりだけど。

それは自分だけの考えで、周りからするとやっぱりそう言う風に見

えてしまうのだろうか。

よく分からず言葉に困っていると束は、溜息を一つついて言った。

「はあー、よく分からないって感じだね。綾は生徒会長だから、世界で唯一ISを使える男だから、よく何々だからって気負って頑張りすぎて無理してまう。何でもかんでも背負おうとしてしまう。それ自体は悪い事じゃないけど、綾の場合それが度が過ぎる。綾自身引けないのもあるだろうし、引くのはかっこ悪いと思っているのも理解はしているつもり」

「……」

「だけど、そうし続けていつか疲れて倒れてしまわないか私は心配なんだよ」

心配してくれているようで後ろから抱きついてくる力が強くなる。震えこそはしないが密着している腕や体からは、束の俺に対する不安を何となくにだが感じる。

「これが私の勝手な考えからくる勝手な言い分だと言うのは分かっている。だけど、無理はしないでね。頼ってないとは言わないけど、やっぱり少しは私を頼ってほしい。どんな時も二人で一緒にいるるなものを担いでいくんでしょ?」

「……ああ、分かっている。そうだったね。どんな時も二人一緒にだ」

心配そうな束に俺はそう答える。

確かに俺は、気負いすぎていたのかもしれない。

生徒会長や世界で唯一ISを使える男などいろいろと重大な立ち位置があつて、それから引くのもカツコ悪いと思う自分が何処にいるのかもしれない。

そうだからこそ、束に言われたとおり何でもかんでも背負おうとする。

それいい実例が今の現状だ。生徒会長だからって、たくさん仕事をやろうとして今は疲れている。

今はまだいい。こうして休んで済んでいられるし、割り振った自分の仕事もちゃんと全部やり終えられている。

だけど、それがいつまで続くは分からない。出来ないのにそういう風に気負つて、やっついていけばいつかは疲れ果てて倒れる。

倒れていると分かっている俺は立場とかがあるから、引くに引けないとかで無理してでもやり続けそうだ。

俺は頑張り続けることしか、停滞できず刹那輝きを感じられない止まらずの星なのだから

だけど、こうして思い返してみると我ながら何というか……意地っ張りだと今更だかと思う。

だからこそ束は、その辺を危惧してくれたのだろう。

また、束に気づかされてしまったな。

「うん、二人一緒にだよ。私ばかり守られているのは嫌だ。私だつて、綾を守るんだから。度の過ぎた無理はさせないよ?」

「ああ、分かっている。自分でも無理に度が過ぎないように善処するよ」

「善処か……まあ今はそれでもいいよ。でも、大変な時は私を頼つて。こんな私でも少しは綾の力になれると思う」

「充分、力になっているよ。この上なく」

その言葉に嘘偽りはない。

俺は一人じゃないんだ。あの日の様に。

今は束という愛しい人が、もう一人の自分がいる。

束がいないと俺は、ダメになってしまう。お互いがそうあるように。だから束が俺の力になれてないなんてことはない。

「それにこうして癒してあげれることもできる。いつだって、私が綾を抱きしめるから」

「ふふっ、そうだね。今はとっても安らげているよ。ありがとう」

ぎゅっと束は更に後ろから抱きしめてくる。

体勢的には上から束が乗りかかって、当然束の体重が身体にかかるが、まったく苦ではない重さだ。

むしろ、安心感さえ感じさせる重み。束が、互いが傍にいるというのを肌から伝わってくる心地いい暖かさや感触がそうだと強く実感させる。

それが何だか俺達は無性に嬉しくて二人して微笑み合う。

「皆で力から合わせてこの学園祭をこれから続くIS学園の見本となるような最高のものにしようね」

以前の束らしからぬ言葉に俺は一瞬思考を停滞させかけたけど、あつと首を縦に振って頷く。

すると、束は嬉しそうにふにゃとした可愛らし微笑を笑みを漏らし

身体を俺に完全に委ねてくれて俺は、肩から掛かっている束の手を握る。

束がこんなことを言うのは本当に珍しい。

それだけ今回の学園祭に束は何かしら深い想いを秘めているのだから。

それがこの言葉だったり、クラスの出し物に協力した事でよく感じ取れる。

例え時が止まっても、目に見えない形のないものは変わる。

だからこそ、時の流れは尊い。それを今改めて理解する。

それでもこの至福に包まれた刹那は止まって不変となってほしい。

そして、この至福に包まれた刹那輝きをもつと外に流れ出させたい。

永久不変たる水底のように。

そんな願いを込めながら、俺達は学園祭当日を迎える。

…

第四十四話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第四十四話 ?

この話は約一週間ぶりの更新の話となります。

忙しい一週間の合間を縫って頑張って書き上げましたが。

少し展開が変と言うか、支離滅裂ですね。ご了承をm(| |) m
詰め込みすぎたのがやっぱり一番の原因かな?お気に入りとかが減る……(泣)

前半は獣耳メイド服試着編でした。

千冬さんと束さんの反応などを楽しんでいただけだと思っていました。

と言うか、やっぱりこのクラスは変態しかないwwwビバっ!変態っ!

だが、彼女達は変態と言う名の淑女達だったのだっ! な、なん
だってー!?。

茶番はこれぐらいにして。

ちなみにこれまたちょいちょい伏線を張ってみました。回収できればいいな。

前半の束さんの反応は少し凝ってみました。

いつもの感じとは少し違うという感じにもしたかったですし。
今後の為にも。

そして後半編。

普通に二人っきりの会話でした。予告通り甘く書けたかな?不安です。

二人きりになる事は最近ないですし、書いた久しぶりですし。

綾君についての束さんの思いは今回薄いような……

綾君の気質は蓮炭よりです。と言うか今回、怒りの日ネタを使ってみましたが

分かりましたか？まあ、連想させるという感じぐらいの本当に小さなものですけど

と言うか、チケットの話書くの忘れてた(汗)

ツイッターでは追々とか言ったけど、必要だよな？

奈々さんやロリ篝、シヨター夏を出すのなら。

今回は本番だし、上手く調整するしないな？うん、どうしたら一番いいのやら。

それとツイッターを始めました。

執筆状況やどうでもいいことや重要よくな事を呟いているので

よろしければ見てください。よろしくですm()m

<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言うか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだったので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ！m()m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり
週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっ
ても嬉しいです

ご協力お願いしますm(_____)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞い
て下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言一言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいた
します。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想
のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ
！

第四十五話 ？

綾視点

『お帰りなさいませ、お嬢様っ！』

教室^店に来店したお客を全員で声を合わせ定番の台詞を言い迎える。

ついにやってきた学園祭当日。

前日の夜ギリギリまで準備に追われ、今日の朝九時、生徒会長である俺の開催宣言で学園祭は始まった。

イベントごとでよくある開始の花火こそは今年はしないと決まりしなていものの、

全生徒の弾けっぷりは夜空で綺麗に弾ける花火に勝るとも劣らないほどテンションは高く、一部では弾けまくっている。

なので開催した九時から約一時間経ち、十時頃となるが目まぐるしいほど忙しい。

開催宣言と同時にから余裕を持って用意したはずの席がほぼ満席となり、その人数は今も変わらず今もほぼ満席状態。

なので、俺達のクラスはほぼ全員がフル稼働して忙しさに駆り立てられている。

「神山君、これどうするんだっただけ?!」

「それは」

「ゴメンっ、神山君っ!こっちのフォローお願いっ!」

「分かったっ！こつちのこと済ませるから三分間待つてっ！」

と、こんな感じに忙しい。息つく暇さえない。

超有名人気飲食店並みの忙しさだ。これは例えなので、そんな店行つたことないし現物の忙しさを見たことはない。

だけど、本当にその位忙しい。

この忙しさから察するに所のクラスの仕事している人が仕事ほっぽって来てそう。働いてくれよ。

多忙になると予想して覚悟もしていたけど、これは予想以上。予想外デス。

いつも結構多忙な生徒会をやっているけど、今日ばかりは途中で倒れるかもしれない。

仕事の担当を分担して各自それぞれの持ち場に就き、俺は今委員長をサポートする臨時で作られた副委員長という立場に就いて。

委員長である千冬のサポートをしつつ、人数が足りないからウェイターや調理など一つの仕事に固定されずいろいろとやっている。

オマケにさつきみたいに指示とかもしているから、実質クラスの司令塔・委員長をやっているようなものだ。

と言うより、肝心の委員長の千冬はと言うと

「お、お帰りなさいませっ、お、お嬢様っ」

と恥ずかしいのか頬を赤く薄く染め、どこか引きつった笑顔で言う千冬。

その様子には気にしていないようで接客された子達は、『きゃーっ！

千冬様っ！』や『猫耳メイドのっ千冬様！萌え〜』や『可愛さに潜

む鋭い綺麗さがポイントだね』といった。

黄色またピンク色の歓声が上がリ、いつも以上に大人気。

その様子に千冬は引きつった笑みを浮かべ恥ずかしそうに両肩を少し縮めながらも、接客はちゃとしてしている。メイドらしく、物腰柔らかく。

それに猫耳メイドが変な補正でもかけているのだろう。中には恍惚な表情で千冬を見つめている俗に言う、危ない客もいる。

まあ、抱きついたり触ったりしようとするお触り行為は今のところないので、今のところはとりあえず一安心だ。

だけど、いつも以上に人気なのは本当の事で、そういう店じゃないのにやっぱり千冬の指名率が一番高い。

なので忙しくどうしても自分の仕事以外はする事は出来ず、まとめ役が出来できずする人もいないので、俺が今その役割含めて変わりにしている。

そして束の方はと言うと

「…………お帰りなさいませ、お嬢様」

と淡々とした口調で言う束。

口調は淡々としていて、表情は営業スマイルを軽く貼り付けるだけの何処か無愛想な接客だが。

『クールなウサミミメイドの篠ノ之さん、イイツ！イイ過ぎるツ！』

や『クールなウサミミメイドの篠ノ之さんは正義ジャスティスっ！』といった

やっぱり、何処か危ない黄色またピンク色の声が結構多くあり、いつも以上に人気で千冬の次に指名率が高い。

その様子に束は、いつもの様に興味が無さそうに見て流してはいるが、角は立てず無難に接客をこなし、クラスの子達とも仲良く仕事をしている。

とまあ、忙しくてもこんな感じに頑張っている。

素材のいい可愛い子達や、俺と束や千冬といった有名人が獣耳つけてメイド服なり執事服着ているんだ。

忙しいのもう仕方ない。忙しい分、売り上げはいいことだし、これはいい結果を残せると期待できそうだ。

それにこれだけ忙しいと、本当負けるかっとなって逆にやり甲斐を出て感じられる。

指示やフォローに入っていて、接客することは少し少ないけど、俺も三番目には人気はあるみたいだ。

目立つからな大勢の女の子の男一人、しかも執事服着ているという光景と状況は。

なので、接客に出たときは束や千冬と同じ割合で指名される。そういう店じゃないはずだけどな。

ちなみにその時の反応は、束や千冬達と同じ様に恍惚な表情で悶絶されたり、『狼耳執事、最高……っ！』や『襲われたい、襲われたいよっ！』など危険な反応や言葉e t c .。

そんな風に忙しくも何処か充実感も少しばかり感じつつ、割り振った自分のやるべき事をしていた時だった。

「わっ きゃっ！」

抱きつこうとお触りするお客に大して千冬は、無難に対応して宥めていて。

その時の抱きつこうとお触りするお客にも無難に対応して宥めていてけど、今回のお客の迫りようが物凄かったらしく。

千冬は、たじろいだ反動で体勢を崩してしまい、倒そうになる。

それを俺は傍に駆け寄り

「おっと」

手に腰を回し千冬を抱き止めた。

「大丈夫？」

「あ、ああ……すまん」

俺の腕の中で突然の事に少しだけ驚いている千冬。

何とか間に合ってよかった。もしも、あの時あのまま倒れていたら次なる惨事に繋がっていたことだろう。

千冬には、怪我など何もないようで何よりだ。束と一、二を争う大人気看板メイドだから、何かあってからは遅いからな。

それを度外視しても、親友である千冬に何かあつては目覚めが悪いし。

それに

「お嬢様方？当店自慢の可愛い猫耳メイドを愛でるのはよろしいですが、迫りたててみたいなどの行為は度を弁えてください。他のお嬢様方もですよ？」

千冬を腕の中で抱きながらも一応その迫りたててきていたお嬢様方と周りのお嬢様方に注意しておく。

この状況で場の雰囲気とかを壊したくはないし、説教臭いのもあまり好きではないので雰囲気とかを壊さないおどけた口調で言ってみ

たけど、一応注意はしておかないと。

こういうことはないほうがいいし、それに今回は未遂で済んだけど、もしも本当にそういうことがあった時、トイレに行っていたり休憩に入っていたりして俺がいないことがあるかもしれない

いつも俺が千冬を守れるとは限らない。こういう考え方は俺の思いあがりだとは分かっているけど、仮にそうなった時クラスの子では千冬を守ったり助けたりするのは難しいだろう。

だからこそ、ここで一応でも注意しておかないと。

客は常に入り変わるから言っていて意味はないかもしれないけど、言っていればクラスの子どももそういう時にそれなりの対応はしてくれるだろう。

そんな俺の注意にお嬢様方は納得したのか微笑みながら頷いていた。

「はあくいつ。でもさっきの神山君、危険な目に会っている千冬《お姫様》を助ける白馬の王子様みたいだったよねっ！」

「うんうんっ！狼耳でも流石は執事だね、神山君っ！スツと現われて織斑さんを受け止めて助けるっ！カツコイイねっ！」

「だねっ！神山君と織斑さんのカップリングもいいかもっ！」

「なっ！？私と綾とだとう……っ！？」

注意は聞き入れてもらってことなきをえたけど、今度は何やら別の方向で盛り上がってしまった。

何だよ、カップリングって。変なことを言わないでほしい。

と言うか、珍しく千冬は煽られたのか、顔を真っ赤にして恥ずかしそうにブツブツと何か言っている。

それにこの状況って

「（ デジャヴが ）」

既知感みたいな感覚を感じる。

この先起りうる未来を予知し、一度その場面を体験したような感覚に包まれはじまる。

それと同時に強い一人からの熱すぎる視線を感じる。その視線は熱いどころか、突き刺さっている。

いった何事かと視線の方を向けば

「本当、白馬の王子様、みたい。カッコイイし、それに、楽し、そうだね、綾」

視線の先俺と千冬を見ている野次馬の中の一角に束はいて俺と千冬を見つめていた。

「やっぱり、仲いいん、だね……邪魔、しちゃった、みたい、だね。いいよ、どうぞ、そのまま。私、何も気にしない、から」

ギギギッと物凄い勢いで両手に持っている銀色の円型のトレーにツメを立てている。

装飾品なはずのウサミミがピンッと立って可愛らしく、表情は満面だが、何と言うか……その……ぶっちゃけ怖い。

そんな束の背後には何やら禍々しいドス黒いオーラが見えて、恐怖感を更に煽る。

それに声は比較的優しい声だが、今にも怒り出しそうな感情を無理に必死に抑えようとして、途切れ途切れになりながらも話していてそれに優しい声が合わさって返って怖く感じる。

「綾は、いつまでも、そうしている、つまり、なんだよね？」

そう言われて俺は、自分の今の状態を見てみる。

千冬の腰に手を回して、抱きとめて、千冬は寄り添うように抱きついている。

どう見ても、（そんなつもりは毛頭ないけど、端から見ると）抱き合っている様に見えますね。本当にありがとうございます。

これは束があんな風に怒るのも無理はない。どんな事情があれ、恋人が別の異性の人と抱き合っている姿を見るのは面白くない。それは俺だってそうだ。

しかしどうしてこうなった。どうして、千冬からすぐさま離れなかったっ！あつ離れるタイミング見逃したんだった。

「そうしてる？　っ!？」

「ちーちゃん、何で、赤く、なるの？」

「あつ、その、私は、別にっ」

「ねえ？どう、して？綾も、いつまで、そうしている、つまり、なの？ねっ？」

『ねっ？』と言われた瞬間背筋が凍り、ほんの一瞬刹那だけ、場の空気が絶対零度並みの冷たさに凍る。

表情は、今だ優しいな満面の表情だが、薄目から垣間見る事が出来た束の瞳はハイライトがない、虚ろな瞳だった。

俗に言う、ヤンデレ目。やばい……俺は自ら束のヤンデレスイッチを入れて、ヤンデレに進もうとしている。
死ぬかもしれない。

じゃなくてっ！ そんな事考えている前に今できる最善の行動に移れ。

「っ」

半ば少し無理やりな感じだったが、千冬と抱き合っている体勢を解除し、一方後ろに下がって俺の方から距離を取る。

同時に刹那の間で思考をフル回転させる。

この状況は非常にまずい。いろいろな意味で、いろいろと。

周りの野次馬の客も店員も混じった女の子達が『修羅場』と騒いでいることや、今だ顔が赤く恥ずかしそうに俯いている千冬はもちろん、そして何よりヤンデレ状態の束。

このまま、と言うか次の選択肢を間違えれば、固定はされないものの確実にヤンデレだ。

死ぬことはないけど、それと等しい事が待っていることだろう。と言うか今、学園祭当日真っ最中だったよな。

「綾、何か言う事は？」

兎も角、ここは下手な言い訳はやめといた方がいいだろう。

返って事態を拗れさすことに高確率でなりかねない。

だからこそ

「悪かった。ごめん、束」

「そこでどうして謝るの？」

口調は戻ったものの、それ以外は以前と変わらず、優しく聞き返し

てくる。

しまった……選択肢を間違ったかもしれない。

この状況下で言い訳することと同等なぐらい、謝るのはダメだった。まあ、そうだよな。変に謝られても帰って機嫌を悪くさせるだけだし……

すると束は、かぁーと気炎を上げて言った。

「ってか、綾はどう悪いとっているのっ！？何も悪い事して思っているのなら別に謝る必要なんてないよ。それになのに謝られても束さん、意味不明なんだけど」

「分かっている。でも、ごめん」

謝るのは逆効果みたいなものだと分かっているけど、今の俺には謝る事ぐらいしかできなかった。

ただ、その場しのぎの謝罪ではないことはハッキリと言える。

仕方ないとは言え千冬、異性と少しの間抱き合い、束に不愉快な思いをさせてしまったことらに対する心からの謝罪を込めて謝る。

そういうことを事情が事情だけにハッキリという事は出来ず。

これはこれで非常に情けないし結局、束に対する罪悪感から解放されたいという独りよがりかもしれないけど、それでも束のことを思う想いを込めて謝る事しか今は出来ない。

謝罪に込めたそんな意図に束は、気づいたのか納得した顔で言った。

「はぁーまあ、分かればいいの。でも、こづいことはしないように」

「ああ、分かっているよ」

意図に気づき納得して腹が収まったものの、まだ何処か少しだけ不貞腐れた感じで言い聞かせる様に言う束。

今だ不貞腐れた様子なもの何とか、ヤンデレは回避できた。それについては少し安堵する。

こんな時でも束は、俺の事をよく見てくれて理解してくれようとしてくれている。

それが何だか嬉しくて。

「く、……はは」

俺は、思わず小さな笑い声を漏らし笑ってしまった。

「もお、なんで笑うの。私まだ怒ってるんだよっ」

「……いや、悪い悪い。ははは」

「もお、綾のばかぁ」

頬を膨らませほんの少しだけ怒った表情をして抗議してくる束は可愛い。

人前じゃないければ抱きしめれてるほどだ。ああ、本当に愛しおい。そんな風に頬を膨らませほんの少しだけ怒った表情をして抗議してくる束の頭を宥める様に撫でると、今までの怒っていたのは何処ふく風で、照れた表情で気持ちよさそうに目を細めている。

さっきまで束から掛けられていたヤンデレ的な威圧感や、俺と束の間にあつた何処か少しだけ張り詰めていた空気はなくなり。

いつも通りの暖かい陽だまりの様な包まれる。

その刹那はやはり、ふとした何気ないものだけど中々得難い幸福だ

ろつと思えるから、その空気は俺と束の間だけじゃなく、周りにも流れ出して、皆を優しい暖かさで包みやかなものにする。中には、『やっぱり、定番にして王道は神山君×篠ノ之さんだよな』や『うんうん、やっぱり二人が一番お似合いだよな』。などと、いろいろな意味でいろいろと危ない発言が聞こえるが今は気にしないでおこう。

やっぱり、こういうのはよくよく考えると贅沢なものでもあるのだろつ。

ただ、束のヤンデレ は回避出来たけど、今度は千冬から鋭い視線を向けられていると

「おーおーっ、決戦前みたいな修羅場してんな、オイ。つうか、色男も大変だな」

背中の方、後ろからとても聞き覚えのある男性の声が聞こえた。振り返ってみると。

「源さん」

「ウッス、景気はどうだ？綾」

ニカツと口元に笑みを浮かべていた源さんがいた。

「いつか、そこに？」

「お前らが修羅場っている真っ最中からだ。いいモン見せてもらっただぜっ」

大笑いしそうなのを堪えて源さんは、楽しげに嘔み締めながら笑う。

あ……そんな所から見られていたんだ。
端から見る分には、いいところ。俺にしたら、大変だったけど。
と言っか、今度整備士隊の人達と会ったら絶対イイ話のネタにされる。今の姿も。

源さんは、今の服装の俺を下から上へ、見上げるように見て、笑みを浮かべる。

「く、くくっ、いいなあ〜お前の今のその姿。色物臭ハンパなくつて。その耳似合ってるぜ」

「はあ〜何とでも言っして下さい」

笑い声をかみ殺して笑う源さんに少しイラツと来たが、ここは抑える。

と言っか、事実だから何言われても仕方ないと言えば仕方ない。実際、色物でしかないからな……この狼耳執事服は。

まあ、楽しい楽しい学園祭の為に人肌脱いだんだ。羞恥云々は那由他の果て忘却した。

だからもう、何も恥ずかしくない。ちょっとだけ、嘘だけど。

「相変わらず過ぎてそういうところ弄りがいなくてつまらん」

「や、そういうのはいいです。と言っか、源さんはこんなところで何しているんですか？暇人？」

「ばっ、ちやうわいつ。服装見て分からんのか？おじさんはこれでも警備の仕事だ。若く峰麗しいお嬢さん方の身を危険な事から守る為のな。今は見回りもかねて軽く休憩中だ」

「なるほど」

と、源さんの説明に納得する。

源さんの服装は、いつもの整備士隊の人達が揃って着ている作業着ではなく、一般的な警備員が着る制服を着ている。

整備士隊の人達は整備士以外に警備員という役割がある。

IS学園の警備システムは世界の最高警備システム技術によって構築されているため、一応は鉄壁だ。

だが、そのシステムを作って管理しているのは所詮人間。なので、いくら鉄壁の警備システムだとは言え、万が一破られる可能性があるかもしれない。

その時に警備する人間がいなければ、いくらISが現行する兵器のなかで次元離れたモノであって、展開できなければその侵入者に簡単に鎮圧されるかもしれない。

そんな万が一の為に備えて警備員も兼ねているのが、源さん達整備士隊の皆さん。それもあって、常時ではないけど男としてIS学園にいる。

それに幾らISで女性の社会的地位とは言え、世界の力関係はほぼ常にアンバランスなりにでも持ちつ持たれつつの関係。

しかも、IS学園は女所帯。なので、当然どこかしらで絶対とは言いきれないが、男手が必要になる場面もある。IS学園が近年始まっただけに。

なので、男として特例としているというのもある。ただ、いろいろいと制約は厳しいらしく扱いも悪いが、給料がいい分源さん達は職場環境に納得してこの職をしている。

それと源さんは言っていた。『今の社会に納得が出来ないから、しないのはただのクソ餓鬼の我儘だ。御託言っ前にやれっ!』という

信条でやっているらしい。

それを聞いて、ISや女尊男卑に抵抗している人と比べて、やっぱりいろいろな思いと考えがあるんだなと思った。

などと考えているとクラスの子が源さんに接客していた。

「お帰りなさいませ、ご主人様っ 休憩なんですよね。源さんには日々、お世話になっていきますからサービスしますけど、どうですか？」

「そうだな……時間帯的にも十一時だし、早くに軽く食うのもアリだな。よしなら、お言葉に甘えようかな」

「ありがとうございます〜 それではご注文をお承ります」

特に怯えた様子もなくむしろフレンドリーに接する女の子。

整備士隊の人達と女子生徒は、比較的結構友好的な関係を持っている。

一部の子は男性が怖くて近寄らないのもあるけど、それ以外は皆整備士隊の人達とフレンドリーに接する事が多い。

まあ、この学校で男がやっていくなら角を立てるのはさけ仲良くすることが大切で、源さん達は女教師とも女子生徒と上手く付き合っている。

感覚的には、気前のいい近所のおじさんみたいな感じらしい。

ちなみにだが、その整備士隊のなかで源さんが一番人気らしい。

娘さんで慣れているのか若い子を相手するのが上手く、元々の性格な分硬派に見えるらしく、一番人気らしい。

咲夜さんではないけども、ジジコンの人が増えても可笑しくはないよな。

それに上手くやっているおかげか、源さん達と比較的結構友好的な関係を持っている人達は、男に対して女尊男卑的な考えはないようだ。

これはある意味、今後悪化するだろう女尊男卑社会のいい方向の理想の一礼なんだろう。ISが完全に流出してもこうなってほしいし、悪化しないように何とかしないな。

自分ができる事を可能な限りできるよう一人の人間として、何よりISを使える男として。

そんな事を考えながらも俺は、やるべき自分の仕事をこなして行く。

とんだ修トランプル 羅 場があり、嵐の様に現われ嵐の様に源さんがクラスを後にした頃。

「神山君、そろそろ休憩入って、どこか回ってきたら？」

接客を終え、テーブルの食器を下げ後片付けしているとクラスの子に言われる。

時計を見ると十二時半、ちょっと過ぎ。

十一時頃から軽い昼食でも取りでもきたのか客は大分多くなってきていたが、今は客足は続いているものの大分落ち着いている。

そうだな……そろそろ休憩に入っておかないと後々きつくなるだろうし、それに軽く何か食べといた方がいいかもしれない。ただ……

「大丈夫なの？落ち着いたとは言え、まだ忙しいわけだし」

「ノープログラム。もう大体の事は神山君がいなくて私達できるつもりだし、それにいつまでも神山君に頼りっぱなしで忙しいままにさせるのもダメだしね。だから」

「そうか……なら、お言葉に甘えようかな」

「どんと甘えてよ。出来たら、早く帰ってきてくれると嬉しいけど、一時間ほどゆっくりしてきなよ。後も大変なんださ、それと篠ノ之さくんっ」

クラスの子が束を仕事している呼ぶ。

ちなみにこの子は、一学期の時の調理実習やその他でも束と皆よりも比較的接触としてくれて仲のいい子。ちなみに名前は綾瀬さん。その綾瀬さんが束と呼ぶと仕事を終えて、束がこちらへとやってきた。

「はい、なんですか？」

「今から神山君が休憩入るんだけど、篠ノ之さんも一緒に休憩に入ったらどうかな？」

「えっ？」

「神山君も篠ノ之さんと一緒でもいいよね」

「えっ、あ……うん」

「やっぱりね。それにほら、篠ノ之さんも朝からずっと働き続けているわけでしょう。だから、そろそろ休憩に入ったほうがいいよ」

「いいんですか？」

「いいのっ、遠慮なんてしないで。せつかくの学園祭なんだしさ、そういうのもイベント的に必要だよ。あつでも、獣耳は外しても外さなくてもいいけど服はそのままだね。お店の宣伝になるから」

「分かった。ありがとう、綾瀬さん」

ほのかに微笑を浮かべて束は、綾瀬さんにお礼を言う。

「うし、それじゃあつ、お二人さんっ！短い間だけど、存分に楽しんできてっ！」

そう言われ、背中を少し押されると狼耳を取って置き、皆に一声掛けて俺と束は休憩に入る。

狙ったわけじゃないけど、これはラッキーだな。

休憩時間は予想よりも長くももらえなし、何より束と二人一緒に学園祭を長い時間回る事が出来る。

それが嬉しい。ちょっと難しいかなと思っていただけに。

そう少し胸を躍らせながら、教室から出ようとした時だった。

「あつ」

と言う千冬の引きとめようとする名残惜しそうな声が後ろ聞こえ。後ろを少し振り返って見ると千冬の表情も、名残おしそうだった。

それを見て俺は、何だかふとした罪悪感を持った事に気づく。

後ろ髪が引かれる思いが強い。だけど。

「じゃあ、行こう」

そんな思いを拭いさつてくれるかのように東に手を取らると、不思議なことにそんな思いはゆっくりと消えていき。

俺は東に手を引かれるまま、東と共に教室を後にしたのだった。

・
・
・

「さて、何処から行くか？」

教室を後にして、ゆっくりと学園祭をやっている校舎の渡り廊下をゆっくりと歩きながら、そう会話を切り出す。

俺達のクラスだけではなく、どこも忙しそうで、活気に溢れている。何より、大抵の人が忙しいながらもこの刹那の時間を味わい、笑顔を浮かべて学園祭をしている。

それを見て、生徒会として生徒会長として、この日の為に頑張って各所走り回ったり大量の書類仕事したのは無駄ではなく。

それがこういう結果に繋がっていると実感できて、そのことが嬉しいと強く強く感じる。

それを束も思っているのか微笑みながら、会話に言葉を紡ぐ。

「ふふつ、適当にいろいろなところを見てまわろうよ。時間はたりなくなるかもしれないけど、その分頑張って用意した結果が見れるでしょう」

「そうだね。まあ、このままフラフラと歩き続けるか」

「うん」

特にこれといった場所もなく、学園祭の様子を見つつ、ゆっくりと歩く。

そしてふと、隣で同じペースで歩いている束の様子をしてみる。

服装は、綾瀬さんに言われた通り店の宣伝も兼ねてメイド服を着ている。俺は執事服を着ている。

だけど、やっぱり束の頭にはウサミミカチューシャが着いている。

「やっぱり、そのカチューシャ着けたままにしたんだね」

「店の宣伝もしないといけないし、獣耳を取ると『獣耳メイド喫茶』が分からなくなるしね。そういう綾は、取っちゃったんだね。似合っていたのに」

「ありがとう、でも流石にアレをつけて歩き回るのは男として無理。悪いけど」

「まあ、仕方ないないね。普通？はそうなんだろから、でももったいないなっ」

「そう言う束は着けていても恥ずかしく……ないんだよね」

「あつたりまえだよ」これはこういう時にしか付けられないから、付けておきたいの。折角、綾からプレゼンとして貰ったんだから」

そう束は気恥ずかしそうに俯き加減に言い、それを誤魔化す様に「

まあ、将来的にはずっとつけるんだけどね」と言った。

後者の言葉は兎も角、このウサミミカチューシャを大切に思い、大切にしてくれている。

それが何だか嬉しい。遊び心全開である時は選んでプレゼントしたけど、こんな風に大切にしてもらえるとプレゼントした甲斐があると改めて実感する事ができる。

それに確かにこういう時にしか着けられないからな。普段着ければ間違いなく、本当に色物だかな。

だからこそ、こういう時にしか着けていられなくて、こういう時で今デートみたいなことをしているのだから、着けておきたいという束の想いは何となく分かる。

「ねえねえ、綾」

「はい？」

名前を呼ばれ反射的に聞き返す。

すると束は、周りに気を配っているのか、きよるきよると周りに視線を送る。

「えいつ」

そして束は、その可愛らしい小さな声と共に隙だらけの俺の腕を取った。

「えへへー」

「なっ!？」

にへらと嬉しいそんな表情をする束の行動に俺は、驚いて大きな声を出しそうになったが寸前で噛み殺し小さなく驚きの声を漏らす。

束は無造作に俺の腕に抱きついてきていて。

二の腕が、束の暖かい温もり豊満な胸と胸の間、胸の谷間に挟まれる。

よし、抱きついていてではなく、谷間の中に埋めるようにして抱き込んでいる。

と言うか、メイド服の胸周りの布は変なところで薄く、束の胸の感触や暖かさをより強く認識させる。

変に薄い布一枚を皮膚と皮膚の間に挟んでいる性が、よりこの今の状況を意識させる。

それに気づいた束はまたにえらと嬉しいに笑みを浮かべて言う。

「あつゝもしかして、綾。胸を意識して、興奮でもした？」

「さあ？どうなんだろうね」

なるべく取り乱さすいつもの調子で答えた。

この状況で取り乱すのは非常にまずい。例えるなら、火に油を注ぐのと同じだ。

けれど、俺がそんな反応したことに束はむっとせず、むしろ心を読んで本当はどう思っているのかを察したらしく、更にぎゅっと腕を抱きしめてくる。

取りみだそうだが、正直に言おうが、結果は同じだったみたいだ。なんってこつたい。

と言うより

「あのなあ……東、流石にこれは」

「へ？嬉しくないの？」

「そういう問題じゃなくって……流石に学園祭だからと言って八メを外しすぎな気が……と言っても、聞いちゃくれないよね」

「うんっ 当たり前 折角の学園祭、なんだからいいでしょう？」

「 分かった。このままでいい」

長い沈黙の間、思考を再び刹那でフル回転させ、結局折れた。

聞いちゃくれないし、抵抗や言い訳したところで、結局最後は丸められてる既知感を感じたのが、自分の方から折れておいた。

その方が俺的に男として締まりはいいと思う。

それに折角の学園祭なんだ。

この刹那を無駄にするわけにはいかないし、それに綾瀬さんが折角俺と束で二人でいられるように取り計らってくれたんだ。無駄にするのは綾瀬さんに申し訳ない。

だからこそこれから、この至福の刹那を味わいつくそう。

「それじゃあ、行こうか。デートにでも」

「デート……デート。そうだね……デートなんだよねっ、うんっ
それじゃ行こうっ」

二回ほどづわ言の様に言うと、もう一度『デート』と呟いて、東は恥ずかしそうにそれでいて嬉しそうに表情で再び俺と一緒に歩き出す。

もうなんだ……折角の学園祭って事で、全部無礼講にしておこう。後の祭りにも高確率でなりかねないが、知らない。周囲はもう、俺と束のことをカップルにしか見ていてないだろう。その証拠に

「キヤーっ！神山君×篠ノ之さん、k t k rっ！」

「妄想が現実となったっ……喜びが鼻から溢れてっ」

「やっぱりいいわっ！あの二人っ！」

と騒ぎまくっている。まあ、仕方ない。

校内の有名人が、執事服とメイド服（ウサミミカチューシャ着き）で廊下を歩いていて。

しかも、腕組んで仲良さそうにしている、相手は男の俺。普段男子なんてそうそう見ない子達にとっては、想像力？を掻き立てられるらしい。

それで騒ぐなって言う方が、無理なのは何となく分かる。

いろいろな思い（基本的に好奇心みたいなもの）が籠った視線が集まっているが。

束はいつも通りないものとして受け流し、俺は鍛えられた精神力で跳ね返す。

そんな風にやり過ごしながら歩いているとテニス部がやっているクレープ屋さんに着いた。

「いらっしやいませっって。あら、神山さん、……篠ノ之さん、休憩ですか？」

「ええ、まあそんなところです」

出迎えてくれた店員さんは、アルスターさんだった。そう言えば、アルスターさんは部活テニス部だったな。

店と言うか、テニス部が使っている教室の一室の奥からはクレープのいい匂いがする。

教室を見渡せば、ちらほらとそれなりに多い人が居て賑わっているようだ。

だけどやっぱり、忙しそうだ。それは当たり前前の事なのだが、部活動は基本クラスの出し物で役割配分されて、それに余裕がある人がある。

中には、クラスの出し物の中心核に入っているのに物関わらず、掛け持ちで出ている子もいる。どこの部活も大体そんな感じだ。

やっぱり、もう少しよく見るべきだったな。忙しすぎるだろう、楽しそうだけど。

人が基本的に少ないというのが致命的な問題だろう。それは見直して来年次の歳の人が入学するわけだし、何とかなるだろう。

「そうなんですの。相変わらず、お二人は仲がよろしいんですね。羨ましいですわ」

「……ありがとうございます」

「テニス部も大変そうですね、調子いいみたいですわ」

「ええ、おかげさまで。売上げはいいですわ」

「そうですね、それは何より。さて、注文の方よろいですか?」

「はいっどござい」

そんな会話をして、俺と束はそれぞれ一つずつクレープを注文して受け取ると、テニス部を後にした。そして再び歩き出す。今度は目的地がちゃんとある。いくつか部活動やクラスなどを回り、最中写真を取られまくったものの、俺達は目的地についた。

「うん、ここなら人目にせずゆっくりできるね、綾」

「そうですね」

やってきたのは生徒会室。

クレープは今だ食べず手に持ったままで、流石に外にいて視線を集めながら食べるのは嫌だ。

だからこそ、生徒会の人間しか入れない生徒会室にやってきた。もっててよかった、生徒会室とその鍵。

ここのなら人目を気にする、人目が気になる事はない。それ生憎と申し訳ないことに、千冬まだクラスでメイドさんを健気になっているらしい。

だから時間的にはあと二十分弱しかないけど、誰かの目を気にすることなく、二人でゆっくりで過ごせる。ちなみに万が一の為、鍵は掛けている。

そう二人きり、二人きりなのだ。

「二人きりと思うと何だか気恥ずかしくなっちゃうね」

「そうだね、束。でも時間はあんまりないことだしクレープ、早く食べようか」

「うんっ」

そうして二人テーブルに横に並んで座って、買ってきたクレープを食べる。

クレープは買った時ほど暖かくはないが、まだ少しだけ暖かく美味しそうだ。

それを一口俺達は口に頬張る。

「あむっ。おっ、中々甘くて美味しい」

「ふふっ、そうだね」

テニス部の作ったクレープは美味しいと予想はしていたけど、それ以上に美味しかった。

中身はもちろんのこと、ちゃんと手作りされた生地は全体的に上手に出来上がっている。

流星はアルスターさんのいるテニス部だ。クオリティーが高いクレープだ。

そうだな……今度はクレープを作ってみるのもいいかななどと何時もの調子で思っているのが顔にも出ていたようだ。

東は、俺の表情を見ておもしろそうに楽しそうに微笑んでいた。

「ふふふっ、そう言えば、綾。前のデートの時もクレープ食べたよね」

「そうだね。あの時と同じということだ」

「うんっ 同じっ」

一口食べ終え、嬉々とした声で嬉しそうに言う束。

前にデートした時にも今みたいにクレープを食べた。別に比べるわけじゃないが、あの時もクレープも美味しかった。それにあの時は二人きりでも、外で店。なので、こういう静かなところで二人きりと言うのもいいものだな。

と余計なことを考えていると注意力が少しばかり散漫したのかクレープを持っていた手の指に小さくクリームが付いた。それを吹いて取るうとしたが。

「待つて待つて。私が取る」

と言い束は、そのクリームが指に付いている手の手首を取って静止した。

拭き取ってくれると思ったが、そんな事はなく。おもむろに指に束の小さな口が近づいて

「ちよっ!?!」

「れるっ、んんっ……れるっちゅぱっ、ちゆるっ……んんっ、んんんっ……ちゅっ」

束は、クリームが付いていた部分をもとい、クリームが付いていた指と隣の指を舐め始めた。

最初はクリームが付いた部分だけを、ぺろぺろっ小さく出した舌で舐めていただけだったが。

クリームを舐め取り終わると、次にオマケと言わんばかりに二本の指の根元まで舐め始めた。

指を舐める音が小さく静かに生徒会室に響く。

ただ、響いている音はとつても淫靡な雰囲気醸し出していた。それに直に指から束の舌の感触が伝わってきて、ディープキスしている時と違って。

その……何だか、変に……気持ちよかった。

キスでもされるのかと思っていただけ、これは予想外だった。

予想外すぎて、上手く反応が出来ず、啞然としたかのようなまま束の成すがままになる。

そして、満足したのか笑顔を浮かべながら束は俺の指からそつと口を離す。

「えへへへ　気持ちよかった？」

「えっと、うん。……じゃなくてだね、束。何のつもりなの？」

「何……って、ナニ？それとも指フェラ？」

「ぶっ！指フェラって」

「えへへへ」

俺の驚いた顔が見れたのが、嬉しいのか笑顔でおどけるように笑う束。

流石に予想外のことをされ、予想外の言葉を言われると反応できてもただ驚くことしかできない。

ちくしょう……物凄くしてやられた気分だ。くやしい。

と束に渡れてウェットティッシュで指を拭きながら思う。

やられたまま、休憩時間終えたくないな……もったいないし、くや

しいままだ。

何か、し返せることはないものだろうか……

隣で座っている束は、俺に身体を向けたまま笑顔のままクレープを一口食べている。

それを見て俺は、あることを思い付いた。

「そつだ、束。生クリームだけ口に含んでくれないな？」

「えっ？なんで？」

「いいからいから」

「ん？んー分かった」

なるべく悟られない様、特に表情とかは何も装おわずらにこのままで言つと。

束は、突然の事に何か分かってない様子で不思議そうにしつつも、クレープの生クリームだけを口に含んで俺の反応を待ってくれて。そして俺は、片手で束の顎をクイツとほんの少しだけ上げると

「んっ！ んんっ！？」

奪うように少し強引に束の唇に口付けをした。

「んっ、んんっ……ちゅっ、あっ、んっんっ、ちゅっ」

最初は二、三回は唇く唇を軽く合わせてる軽いキスだったが、唇の僅かな隙間から舌を侵入させ、束の舌と舌を絡ませる。

これは束にとって予想外というか驚きな事で、舌が引けていたが逃

がさず少し強引に絡ませる。

すると、束が口に含んでいた生クリームが溶け出し、甘い束の唾液を更に甘く甘くさせる。

「んんっ、ちゅっ、あむっ……んんんっ、ちゅっ、はぁ、あむっ、ちゅうんっ」

初めこそは驚いて反射的に舌を避けようとしていたが、今では束の方からも激しく舌を絡ませてくる。

それに生互いの、もつどちらのか分からなくなった唾液と生クリームがほどよく溶け合い、脳神経を甘く蕩けさせている。

そして数分ほど、そんな風に生クリームを含みながら、ディープキスし続けるとお互いに苦しくなつて一旦唇を離しあつた。

「はぁ…はぁ…っ、も、もおっ！綾っ、突然何するの?!」

「何つて……ディープ・キスだけど。嫌だつた？気持ちよくなかつた？」

「べ、別に、い、嫌じゃないけど……それに気持ちよかつたけど、急すぎっ!」

「あっはははっ、それはさっきのお返しだ」

「なっ!?!うーっ!」

耳の先まで真っ赤にして束は、恥ずかしそうに小さく可愛らしい呻き声を漏らす。

後、もう一押しかな……と、耳の先まで赤くして恥ずかしそうに

している束を見て、束をもう少しだけ苛めたいという思いが突き動かされ。

「いやいや、さっきの束は本当に可愛かったよ。愛しているよ」

「っ!?!? わわわっ!」

言葉を言って、その言葉に化学反応を起こしたかのように束は更に赤くなる。

そんな束がたまらなく可愛くて、たまらなく愛しおしくて、束の腕を俺の身体の方へと引いた抱きしめた。

先ほどのクラスでの仕事で疲れているのだろうか、今一つ上手く自制心が保てない。

が、まあいいや。今は折角の休憩時間で、陽だまりの様な束との二人つきりで過ごせる刹那の瞬間。永遠にしたくて、この刹那を永劫回帰の如く繰り返し返したいと強く渴望^思する刹那。

そんな一時だから、多少自制心が保てなさ過ぎても今日ぐらいは無礼講だ。

抱きしめ腕の中にいる束も照れて赤くなっているだけで、嫌がっていないようだし、大丈夫。

「もお……綾^{あや}つたら、急すぎだよ」

「それはお互い様だよ。束だって急にあんなことするぐらいだからね」

「それは言わないのっ!もお〜ちえりおっ」

自分のしたことを改めて自覚して、恥ずかしくなったのか。

束は、照れ隠しをするように変な言葉を言いながらも軽くポスつと俺の胸を叩く。
そんなところもまた可愛らしい。ぎゅっと抱きしめる腕二つからが少し籠る。

子供扱いかもしれないけど、し返す事が出来て何だかいい気分。やっぱり、やられたままというのは俺的に納得がいかない。こうでなくては。

すると腕の中にいる束は、上目遣いの潤んだ瞳で言った。

「ねえねえ、綾。もう一回言っつて？」

「愛してる……っつて？」

「っ！うんっ、ダメかな？」

「うん、何度でも言っよ 愛しているよ、束」

「うんっ！私も綾を愛しています」

笑顔を顔一杯に広げ差満開に咲かせて束は、悄しおらしく言う。
そんな風に甘い一時を堪能して、俺達は存分に心置きなく休憩時間を満喫したのだった。

…

第四十五話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第四十五話 ？

学園祭・当日編の前編でした。

このお話は最近、稀となった私の力作です。

途中、いつもみたいに本当にスランプにならず、比較的軽い感覚で書き上げられました。

学園祭・当日、綾君達はもちろんクラスや生徒全員MAXハイテンションですww

最初は修羅場から始まりました。この辺りは書いていて楽しかったですww

私なりに可愛く嫉妬する東さんを書けたつもりですし。

それにかなり久しぶりにヤンデレ東さんをそこはかたなくでも出せましたから。

あんまり出せないんですよ、ヤンデレ東さん。

ヤンデレ状態は精神が不安定という事で、最近は落ち着いていますから。

どうしても出せないのですが、今回はそこはかたなくでも出せてよかったです。

ヤンデレ東さんは（ある意味）正義ジャスティスっ！

そして次は源さん。源には久しぶりに出てもらいました。

ツイッターを見ている方は分かると思いますが、源さんを出そうか少し悩みました

蛇足になるのかなあ〜と思いましたから。

ですが、思い切って出してみました。最近はお出せてなく、また立場

の説明を改めてしたかったので。

そして久々に調理実習の子。と言うか、ついに名前が決まりました。

名前は綾瀬さんです。下の名前は創造の通りですww

この苗字から下の名前は分かる人には分かりますww

何だかんだでいいサポートキャラとしてたってくれました。

そして今回一番の見せ所、綾君と束さんの甘いコマ。

前回ではなんとというか無残な感じになったので、今回はそのリベンジも兼ねています

いかがですか？とっても甘く書いたつもりなのですが、甘いでしょうか？

ただやっぱり、キスとかでしか甘いのを表現できないのが悔しいですね。

甘い言葉いってキスしてみたりセクロスしているのが、決して甘いわけではなく

ふとした何気ない言葉や一緒にいる雰囲気だけで、

甘いと読んで頂いた方に思っていただけなのが私の理想ですから。

兎も角、読んでいただいたかたに甘いと思っただけならば嬉しいです。

それとツイッターを始めました。

執筆状況やどうでもいいことや重要よような事を呟いているので

よろしければ見てください。よろしくですm()m

<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言うか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだったので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ！！m(´`´)m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とても嬉しいです

ご協力お願いしますm(´`´)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願っています。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ！

次回　ロリ箒とシヨタ一夏、IS学園《大地》に立つっ！　お楽しみっ！

絶対領域な篠ノ之束

> i 3 1 3 9 3 — 3 9 7 3 <

一枚目

現在、ピクシブの方にて活動してらっしゃる、私の相棒の『ヒキダコモリ』大先生に書いて頂いたっ！
この小説の主人公、神山綾君ですっ！

うくん、ブラボーっ！マーベラスっ！

かっこいいですっ！初めて見た時はかっこよすぎて唾然としました
WW

大先生、上手いよっ！大先生っ！ありがとう、そしてありがとうっ！

ちなみにこの絵は、綾君のイメージキャラである

Dies iraeの主人公、蓮炭こと藤井蓮をベースに、『近衛守』大先生に書いて頂きました。

なので雰囲気似ていますww

本当はもう一つのイメージキャラである戒兄さんで頼もつかと思っ
たんですが。

いい参考画像がなくてやめて、イメージキャラの蓮炭で頼みました。

それでもマジ幸せ者っ！ww

こんなにイメージ通りに描いてくれるなんて！
私ビックリw

> i 3 2 1 1 2 — 3 9 7 3 <

二枚目

再び現在もピクシブで絶賛活動中の
相棒、ヒキダコモリ大先生に書いていただいた
綾君と束さんです。

相変わらず上手いつ！素敵ですね〜

つてか、綾君www

束さんに襲われているwww

いいぞっ！そのままいけっ！www

そして、又ル又ルのネチヨネヨをしてしまえwww

ちなみに束さんにウサミミカチューシャがついますが、学生編では
つけていません。

ですが、判別しやすいようにとつけて書いていただきました。

> i 3 4 2 8 2 — 3 9 7 3 <

三枚目

今回もまたピクシブで絶賛活動中の相棒

ヒキダコモリ大先生に書いてもらった束です

絶対領域いいですね〜

そこはかとなくエロイのがまたwww

ちなみにですが、設定的には事故で綾君が押し倒したときのことと
なっています。

なので、その後めくるめく甘美な一時が始まったりしてwww

現在もヒキダコモリ大先生はピクシブにて絶賛活動中なので
よろしければ見てあげて下さいm(´`´)m

絶対領域な篠ノ之束（後書き）

感想や評価等を頂けると私も相棒も喜びますので何卒お願いします
m (| |) m

『ヒキダコモリ』大先生はピクシブでも素敵なイラストや作品があり
コメントや評価がほしいとのことなので
ぜひ見てそうしてあげてくださいm (| |) m

それとリクエスト受け付けます。

こんな絵を描いてほしいと言うがありましたら感想に言ってくださ
い。

検討次第書いていただけるようにします。

それとツイッターを始めました。

執筆状況やどうでもいいことや重要ような事を呟いているので
よろしければ見てください。よろしくですm (| |) m
[http://twitter.com/#!/1254Reon
baruto](http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto)

と言うか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲し
い。

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗
りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだった
ので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いします

っ!!m(| |)m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ!

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(| |)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ!

第四十五話 ？

綾視点

約一時間という短くも長い休憩を束と一緒に過ごした後。

千冬も俺達が休憩を貰った後に休憩を貰ったらしく、その時はクラスの子達と一緒に学園祭を回ったらしい。

ただ、クラスの子達と学園祭を周った時のことを話す千冬表情は、引きつった笑みを浮かべていたのが印象的だった。

何があつたのかは大体想像が付く。千冬、人気者だから、行く先行く先で凄い事になっていたんだろうな……メイド服ままで休憩したらしいし。

だけど、そんな千冬の身を削る思いの犠牲のおかげで午後に入っても繁盛している。

ちなみに今は約午後三時頃。相変わらずウチのクラスのメイド喫茶は大人気の大盛況。

客の数こそは午前と比べると少なくいい人数で落ち着いているが、それでも客足は変わらず、今も忙しいのは変わらない。

そんな風に忙しいながらも頑張ってメイド喫茶をしている時だった。

「綾、何だか外が騒がしいけど何かあつたのかな？」

テーブルを拭いている時に束にそう言われ、教室の外の方に耳を傾ける。

すると教室の外からは何やら、女子生徒達が嬉々とした声でキヤキヤ言つて騒いでいた。

外から微かに聞こえてくる声からは、『キヤーっ！美人っ！』や『

ちっちゃくつて可愛いつ！』等と何処か千冬達に対する反応に似た声が聞こえる。

その声に釣られてるようにして、教室から出て見に行く子もいる。

何かよく分からないけど凄い人でも来たのかな……と考えていると教室の扉が開き

「お帰りなさいませ、お嬢……様」

「ハ口っつ」

入ってきた客を千冬が出迎えたが、客を確認するなり固まった。

それと同時に聞き覚えがある喜々とした声が聞こえ、そして見覚えのある人達が見えた。

その人達とは。

「お帰りなさいませ、奈々お嬢様、箒お嬢様、一夏お坊ちやま、咲夜お嬢様っ」

と固まっている千冬の代わりに束が楽しそうに実にメイドっぽい仕草まで言う。

現われたのは奈々さん、箒、一夏、咲夜さんの奈々さん一行。来るのは分かっていただけ、まさかこのメンバーで来るとは。

「来たんですね、奈々さん」

「もちっろんっ 折角、こんな楽しそうな事を綾達がしているのに見ないなんてそんな勿体無い事はしないわよっ」

「ふふっ、奈々師匠はいつも通りですね。でも、よく四人で来れま

したね」

「束ちゃん達から貰ったあの入場券は三人に渡して私は倉持の主任だから企業用の入場券で入ってきたから四人でも来れたのよ」

事情を説明する奈々さんの言葉に俺と束は納得する。

入場券とは、外部の人がこの学園祭を見に来れるように発行したもので、企業用と一般客用の二種類がある。

学園祭には各国の軍事関係者や発展しつつあるIS関連の企業等の人達が多く見に来ている。

目的は、軍なら現段階でのIS操縦者の育成状況を見に来るため、企業なら自社の物を宣伝しに来るといった感じだ。

と言うよりは、大半が束と俺目的が多い。まあ、世界で二人しかないある意味特異点みたいな存在だからな。何とか関係を持ちたいのだろう。

それが鬱陶しいくて、上手く回避してどことも接してはいないが、休憩中に学園祭を周っている時にそういう人達から向けられた視線は、仕方ないけど欲まみれであまりいい気はしない。

一般客の来場は基本的に不可能だが、生徒一人につき一枚、一般の来場客を呼べる入場券があって、一人場合によっては二人までなら一般客を呼ぶ事ができるようになっている。

なので、それを使って両親や兄弟を呼んでいる子もいて、俺達もまたこうして奈々さんや篤を学園祭に呼ぶ事が出来ている。

余談程度にだが、この入場券を作るのもかなり大変だった。

本来は学校側がするべきことのはずなのに、頼られすぎているせいか生徒会に半分以上仕事が回ってきた。

このお陰で各所を準備期間前から走り待って仕事に終っていたのは、本番当日になってみればもはやいい思い出だ。

「あーそれで一応聞きますけど、師匠は？」

「一郎様ですか？ご主人様なら、お仕事です」

「そうですか」

「これないから泣いていたわよ。最近はIS関係で仕事忙しいみたいだし。それに一郎さんは普段遊び倒しているけど、忙しいときは忙しくてきつきりする人だからね。」

何だかんだで最後は仕事を優先したし。まっ、それよりほっとした顔をしているわね、綾。無駄、なのに」

おどけるような悪戯ぽい笑みを浮かべて奈々さんは、俺と束の姿を下から上へと見上げながら見る。

まるで品定めをさめているみたいだ。

と言うか、ほっとしたのが無駄だというのがよく分かった、というか気づいた。

奈々さん、師匠に一字一句伝える気だ。しかも、画像付きで。その証拠には小型のデジカメを持っている。

「ふふっふっ いやあくよく似合っているわね、三人とも。獣耳が
いいわね。束ちゃん、可愛いっ」

「はい、お三人様ともとってもよくお似合いです。束お嬢様と
言えば、やはりウサミミですね。とっても可愛らしいです」

「ありがとうございます、奈々師匠 咲夜さんっ」

奈々さんと咲夜さんの言葉に本当に嬉しそうに微笑む束。
まずは束からの評価から始まったようだ。奈々さんが手に持っている小型のデジカメで束を撮っている。

咲夜さんのいうことはもつともで。何度自分からず何度言う事になつてしまつが、ウサミミメイド姿の束は可愛い。

先ほどまでどの子かが言っていたけど、ウサミミメイドの束は正義ジャスティスだと俺も強く思う。

そんな風に半ば現実逃避気味に考えていると奈々さんが今度は俺を見た。

そして口角にニヤリとした笑みを浮かべて言う。

「くすくすっ、綾ちゃんも可愛いよ その狼耳。束ちゃんから綾が着けるって聞いたときから似合うと思つていたわ」

「それはどうも。さすが、ちゃん付けしないで下さい」

「そう拗ねないで下さい。とってもお似合いですよ、綾お坊ちゃま」

からかうような笑みを浮かべて言う奈々さんと、優しげな微笑で言う咲夜さん。

対照的な二人。

咲夜さんは、普通に心から思った感想を素直に言ってくれているだけだ。

奈々さんは、素直な感想と一緒にからかうような、俺が言われて嫌味だと思つことを感想として言ってくる。

最悪だ……奈々さん、デジカメで俺のこの姿納めている。

一度撮られてしまつては、もうどうしようもない。消しても後で復元される。破壊は論外。

こんなことなら、企画書の段階で撮影などは禁止にするべきだった。無理だけど。

これ……絶対に奈々さんから師匠に伝わって、アホ師匠のいいネタにされるのは、確定的に明らか。

仮にこれについて師匠が何か言ってきたり、画像に一枚でも見せびらかせてネタにしたら。

その度にターミネイトしてやろう。オマケ程度に剛掌波をお見えするのでもいいかもしれない。

そんな事をまた現実逃避しながら考えつつ、千冬の方をしてみる。

「よ、よく来たな。一夏。楽しんでるか」

「うんっ！楽しんでるよっ！呼んでくれてありがとう、千冬姉っ！ISは見れないの？」

「ああ、今日は学園祭だからな。基本的には見れない。楽しみにしていたなら、すまないな。一夏」

「うん、気にしないで、千冬姉。今日は千冬姉のメイド服見たんだからさ」

「そ、そうなのか？」

「うんっ！ネコミミ着けた千冬姉っ、とっても可愛いよっ！メイド服もとっても似合っていて可愛いっ！」

「そ、そこまで言わなくてもいいっ」

千冬のネコミミメイド服姿に興奮？感動？、どちらなのか意味まいちなのだがいつもよりテンションが高い一夏が言って。

そんな一夏の言葉に千冬は、口ではあんなことを言っているが嬉しいのを表情では隠しきれない様で、頬が少しだけ緩んで嬉しそうな表情をしている。

流石はブラコンだな。ってか、一夏のテンションが高い。千冬のメイド服を見たからなんだろうけど、本当にメイド服好きなんだな。千冬と一夏の様子を見つつ俺は、箒に話しかけた。

「こんにちは、箒。それともいらっしやいと言つべきかな、よく来てくれたね」

「そこはお帰りなさいませ、箒お嬢様 だよ。ね、箒ちゃん」

「う、うん……姉さん可愛いね、似合ってる」

「えへへー、褒められちゃった。ありがとう 箒ちゃん」

「えーと、兄さんは……」

俺の言われたくない事を言って、言い難そうにする箒。

そんな箒に束は苦笑いする。

箒、相変わらずいい子過ぎる。箒が妹でよかった。偶像崇拜はしないけど、その点だけは神に深く感謝する。

この場の雰囲気にながれに任せて、箒にならそのまま言ってくれてもいいのに。態々、気を使ってくれるなんて。

「言っつていいんだよ、箒ちゃん」

「いいの、兄さん？」

「いいよ。どんな言葉であれ、箒に感想を言ってもらえるだけで嬉しいから」

「うん、じゃあ言うね。執事服着てる兄さんカッコイイよ、だけどその狼耳？つけてる兄さん、可愛い」

「ありがとう」

ふにゃと頬を緩めて感想を言ってくれた箒。

箒に言われたせいなのか、束以外の人に言われた時よりもダメージは全然なかった。

むしろ、嬉しいとさえ思う。

なので、感謝するように箒の頭を撫でる。

すると箒は、嬉しそうな表情でくすぐったそうにしていた。

束が微笑ましげに俺達を見守っていた。

そうしているとずっと見ていた周りのこの一人、クラスの子が話しかけてきた。

「神山君、えーと、その人達神山君の知り合いなんだよね？もしかするとなんだけど、宇宙工学の第一権威の水城奈々さん？」

「もしかしなくてもそうだよ」

「ちなみに私の師匠です」

その俺達の言葉にクラス中が驚きの声に包まれる。

大声過ぎたのか、ビクツと身体を震わせ驚いて箒は俺の背中のお後ろに隠れる。

束や千冬達がメイド服着ているとき以上のはしゃぎようだ。

クラスの子の数人がが奈々さんに詰め寄る。

「本物ですかっ!?!」

「本物よ」

「キヤー、本物の奈々様よっ!」

「神山君達のこの姿を見て、あの水城奈々を見るなんて今日はなんていい日なんだろっ! ありがとっ! 神様っ!」

「わあ、本当に信じられないくらい若くて美人っ!」

「何食べたらそんなに綺麗でスタイルよくなれるんですか?」

「日本食メインにしてたら大体は何とかなれるわ。と言っか元気ね」

凄じ剣幕で詰める子達の質問攻めに奈々さんは、難なく受け答えるけど。

流石に勢いが凄くて、流石の奈々さんも少し呆れている顔をしている。

身近過ぎてつい忘れがちになってしまっけど、奈々さんってかなりの有名人なんだよな。

昔からだっただけでISが流れ出している今の世の中でも宇宙工学の

世界的権威であるし、ISでは束について二番目の偉い事にもなっている。

それに奈々さんは実年齢よりも二十歳若くにしか見えないスタイル抜群の美人。そして、今みたいな感じで男女問わず国民的アイドル並に人気で、カリスマ性も高いものがある。

本当に凄い人気だな。

一瞬目を離れた際にかなりの子に取り囲まれている。皆憧れの眼差しなどといった熱い視線で奈々さんを見つめている。

「じゃあ、こちらの方は？」

と、クラスの子が咲夜を見て言う。

すると、そんな疑問げな言葉に束が答える。

「こちらの人は水城家でメイドをしている十六夜咲夜さんです」

「皆様、初めまして。水城家でメイドをさせていただいている十六夜咲夜と申します。皆様、お見知りおきを」

「あ、どうも。って、リアルメイドさんっ!？」

「はい、そうです」

「普通の服着ているから分からないけど、そう言われて想像してみれば正にメイドさんって感じだね」

納得するクラスの子達と客の子達。

今日の咲夜さんは、メイド服ではなく、可愛らしい普通の私服。

流石に外行きの時までメイド服は着てないだろう。その辺は、何というか一安心だ。

着ていたら一緒にいる一夏達が変な目で見られる。

着るのは咲夜さんの家的の中のみらしいが、必要な時は外でも着るらしい。

今日は咲夜さんは、私服だけど。

いつもメイド服姿しか見ないから、咲夜さんが私服を着ているのを見ると違和感みたいなものを感じる。

こういうのを感覚のマヒというんだろうな。

ちなみにだが、束曰く今日のこのメイド服or執事服と獣耳を用意してくれたのは奈々さんと主に咲夜さんらしい。

メイド服があるのは分かるけど、水城家ってこんなにも沢山の種類がある獣耳まで何でもあるんだよな。

獣耳は師匠の趣味で奈々さんや咲夜さんにつけて楽しむ為に数豊富にあるのを借りたらしいんだけど、師匠のこの収集癖にならないものか。

「メイドさんまでいるなんて流石有名人って感じだね。じゃあ、そこにいる小さい子達は神山君や篠ノ之さん、織斑さんの妹と弟？」

「ああ、そうだ。私の弟がこっちの男の方で織斑一夏と言って、そっちの女の子が綾と束の妹の篠ノ之箒だ。ほら、二人とも挨拶ぐらいしろ」

「こんにちはっ織斑一夏ですっ！よろしくっ！」

「……篠ノ之箒です。よろしくお願ひします」

元気よく笑顔を浮かべて言う一夏と、俺の後ろからちょこつと顔だけ出して恥ずかしそうに言う篤。

篤の一人見知りというか恥ずかしがりやを見るのは久しぶりだ。同い年なら凜とした感じで接するが、どうも年上は逃げてというか恥ずかしいらしい。年上の初対面の人とはいつもこんな感じだ。

俺の背に隠れる辺り、幼い頃の束とそっくりだ。

対する一夏、は相手が同い年だろうと年下だろうと年上だろうと関係なくフレンドリーに接する。

こういうのは俺にはない、主人公気質を持つ一夏らしい一面だ。

そんな二人の対照的な光景に然程気には止めず、クラスにいる俺達以外の子はクラスの子も他所のクラスの子も関係なく予想通りの反応を見せてくれる。

『きゃー！可愛いつ！』

クラス中を包む喜々とした大きな歓声。

それに俺達は呆れ、一夏は驚き、篤はビクツと震え俺のスポンの裾をぎゅつと握る。

そんな篤に俺は、安心させるように大丈夫だよと小さく言いつつ頭を撫でて落ち着かせる。

何というか、実に要素通りの展開と光景だ。

「ねえねえ、一夏君……だっけ？ 私達のことを一回だけでいいから『お姉様っ』って呼んでみて？」

「えっ？えーと、お、お姉様……？」

『きゃあー！可愛いつ！』

再び大きな歓声に包まれるクラス。
中には、恍惚な表情で『シヨタツ子、k t k r』と言っている子達もいる。

やっぱり、この学校危ないわ。

と言うか一夏、明らか言わされた意味分かってないだろう。

発音こそは言われたものと合ってはいたが、語尾は疑問符になっていてた。

だけど、そんなことを気にはせずに騒いでいる子達は騒いで盛り上がる。

一夏はメイド服を着た子達にも囲まれているのが嬉しいのか、楽しそうに笑っている。

いろいろな意味で一夏は、いい大人になりそうだよ。まったく。

だけど、モテモテだな。これをモテているとは言えないけど、一夏はやっぱりハーレム主人公気質があるのか。

これままと調子だと、主に六人の女性から積極的なアプローチをされるんだろう。今の一夏を見て、何となく未来をそう思う。

「でも姉弟きょうだいと言っただけあって、織斑さんと一夏君。とってもよく似てるね」

「そ、そうかつ?」

「うんっ、似たもの姉弟だよ」

「だってさ、千冬姉。よかつたね」

「そ、そうだな」

言われた言葉が嬉しいのか、嬉しそうにする一夏と千冬。

一夏は普通に嬉しそうにしているけど、千冬は表情だけは照れた様に少しだけになっているけど、その裏では心底嬉しそうに様に俺には見える。

本当に一夏も千冬もブラコンだな。

「篝ちゃん……？も可愛いよねっ！」

「うんうんっ！人形みたいで可愛いよっ！」

篝をまるでかわいい人形やかわいい小動物を愛でるような感じで言う。

それを聞いて俺と束は何だか鼻が高くなる気分になる。

千冬に言っという何だけど、俺、俺達もシスコンなんだな。

「そっだろう、篝は可愛い。最高の妹だ」

「うんうん、篝ちゃんは私達の可愛い最高の妹だよ　ラブリー過ぎる」

「もっ、もお〜兄さんっ！姉さんっ！」

「あっははっ、神山君も篠ノ之さんも実はシスコンなんだ。妹さん、真っ赤に照れちゃって可愛い。でも、こんな可愛い妹がいるとシスコンになるのも納得しちゃうよ」

「シスコンで結構。可愛い妹は可愛いだから仕方ない」

「ふふっ、綾ったら。でも……こうするともっと可愛いくなるよ」

そう言って束は、頭に付けていたウサミミチューシャを箒につける。

「わわっ！」

「これは　っ!？」

俺が衝撃を受けた後、連鎖反応を起こした様に教室全体が静かに衝撃の包まれる。

何かシンクロした。

束のウサミミカチューシャを着けた箒は、衝撃を受けるほど可愛い。こっぴうの、愛情は鼻から出る、とかと言っただけ。

兎も角、今は

「奈々さんっ！今の箒を撮って下さいっ！そして後で下さいっ！」

「分かったわっ！ほら、箒ちゃんポーズっ」

「あっははっ、綾が何だかんだで一番シスコンが酷いよね」

「わわっ！撮らないで下さい、奈々さんっ！と言っか、姉さんも着けないでよっ！」

「ああっ、とっちやダメだよっ！可愛いんだから着けておかないと。はい、ポーズっ」

「ね、姉さんっ!」

頭についたウサミミカチューシャを箒は、取るうとしたけども。

手を伸ばそうとした寸前で束が箒の腕を掴んでそのままウサミミカ

チューシャを取れないようにして抱きしめて、頬刷りする。
すると箒は顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。束と箒の光景いいな……俺もどうやら変態になってみたいだ。元々からか。
だけど、そんな光景を他の子達は微笑ましそうに騒ぎながら見ていた。

・
・
・
ちよつとした騒ぎがあつた後。

あの後騒ぎは無事収束し、奈々さん達は俺達が接客して注文をちゃんと獣耳メイド喫茶を満喫していた。

ご用意して出したモノは何処にでもある様なありきたいなものだけど、それでも奈々さん達や箒達は美味しそうな楽しそうな表情をして本当に満喫してくれていた。

それが俺は、その時何よりも嬉しかったのを強く感じた。

そして別れの時。

「そろそろ時間だし、私達は帰るわね」

時間帯的には午後四時頃。

後一時間ぐらいで学園祭は終わってしまう事になっていて。

奈々さん達は、約一時間ほど俺達のクラスの獣耳メイド喫茶を満喫してくれた事になる。

「そうですか……すみません、大してお持て成しも学園の案内とかも出来なくて」

「ううん、気にしないで。充分もてなしてくれたわ。一郎さんにもいい写真と見上げ話ができた事だし。今日は楽しかったわ。ね、箒

ちゃん、一夏」

「うんっ！千冬姉のネコミミメイド服姿や束さんのウサミミメイド服姿、綾さんの狼耳執事服姿を見て、ここにこれて今日はとっても楽しかったっ！」

「私も今日一日楽しかった。兄さんの狼耳執事服姿や姉さんのウサミミメイド服姿を見て楽しかったし、それにこうしてまた兄さん達に会えてよかった」

笑顔で元気よく言う一夏と、嬉しそうにニツコリと笑みを顔一杯浮かべて言う。

箒達の言葉を聞けて、よかった。

本当に楽しんでもらう事が出来たようだ。

それに改めて認識したけど、今日もまた箒達と別れるんだよな。

再会があれば、必然的に別れもあるのだから、それは仕方のないことなのだけだ。

別れだと思つと、分かっけていて受け止めていてもやっぱり、名残惜しいものがある。

そう思っているのは俺だけではなく、束も千冬も、何処かではほんの少しだけ名残惜しそうな表情をしている。

「……ああ、元気だな。体調には気をつけるんだぞ。勉強もしっかりとな」

「分かってる、千冬姉っ」

千冬の気遣いに嬉しそうにまた元気よく一夏は言う。

「箒ちゃんもだぞつ。元気で体調にも気をつけて、勉強も剣道も頑張ってるね。後、お父さんやお母さんによろしく言っといて」

「あ……うん、分かった。姉さん」

束の予想外の言葉に箒は、少し驚いた様子だったけども、箒は束の気遣いに嬉しそうに言っていた。

千冬は凜として表情ながらも優しげで、束は優しげな笑みを浮かべて箒の頭を優しく撫でていた。

これまた対照的な二人だけど、二人とも妹や姉を愛しおしく思っている姉としての思いは負けず劣らず。

離れ離れでもちゃんと姉をしていて、やっぱり二人は妹又は弟思いなお姉さんだ。

束達のそんな様子を見て思っていると咲夜さんから声を掛けられた。

「あつ、そうです。綾お坊ちゃま」

「はい？」

「ご主人様から預かっていた物を忘れていました」

そう言って小さめトランクケースから手渡される。

そのトランクケースは大きさの割にはずっしりとしていてやけに重たい。

ここで開けるのも何なので、思いきって聞いて見ることにした。

「あの……この中身ってなんですか？」

「それはですね」

人前では堂々と言えることではないらしく、奈々さんに耳打ちされる。

そしてその内容に俺は驚く。

「えっ？それはどうして？必要ないんじゃない？いや、必要とか以前にこんなものは」

「旦那様の言葉をよくよく思い出してみてください。必要はないのかもしれないが持つていて損にはならないです。それに備えあれば憂いなしと言いますし」

「ですけど」

「持つてなくて後悔するよりはいいと私も及ばずながら思います。なので、綾お坊ちゃん持つていて下さいませ」

「……分かりました。師匠にはよろしく言っておいて下さい」

「かしこまりました」

咲夜さんの言葉に納得してこのトランクケース受け取るの中身の事を覚悟した。

このトランクケースの中身は俺にしたらあたり必要のないものだけだ。

咲夜さんが言う通り、持つてなくて後悔するよりはいい。備えあれば憂いなしと言うし。

けれど、これを手に取る時相当の覚悟があるな。使い方は知ってい

るけども、覚悟いなものが本当は持たないほうがいいだろう。
兎も角、持っていて大した損はないので、こうして渡してくれた咲
夜さんと師匠には一応、感謝だ。

「それじゃあ、そろそろ行くわね」

「皆様、今日はありがとうございました。楽しかったです」

「バイバイっ！」

「さようなら、です。今日は楽しかったです、ありがとうございました
ました」

奈々さん達や篤達は、それぞれらしい言葉を残すとクラスを後にし
て四人仲良く帰っていた。

それを俺達とクラスのいる子達は、名残惜しそうに見つめ、『また
来てねっ！』とかを誰かが言いつつ見送り。

IS学園史上初である俺達の学園祭も終わりを迎えようとしていた。

・
・
・

楽しい一時というのは本当に、刹那の様に過ぎていく。

過ぎ去った在りし一時は取り戻せないからこそ尊く、永遠になて欲
しいと願う。

そしてまた

「というわけでIS学園史上初の学園祭が無事にそして楽しく終え
る事が出来ました。本当によかったです。それでは学園祭の成功を
祝して、乾杯っ！」

『乾杯〜っ!』

俺の音頭を合図に祝いの言葉が上がり、コップとコップが合わさる音が各所で鳴る。

学園祭は無事、大成功のうちに幕を閉じ、簡単にだけ後片付けを済ませた後。

放課後の夜七時頃俺達は、今寮の食堂にて、一年生全員で学園際の打ち上げを行っていた。

皆ジューズなどが入ったコップを手に持ち、今日は特別に作ってもらった盛り合わせ^{オードブル}の夕食を囲みつつ、わいわいと楽しく盛り上がっている。

「いや〜今日は本当に楽しかったよね。最高だったよ」

「うんうんっ、だよね〜織斑さんや篠ノ之の獣耳メイド服姿を見れたことだしね。バッチリカメラに撮ったよ」

「記念に取っとかないとね〜」

「おい、バカやめろっ。と言っか、勝手に取るな。消しとけ」

『嫌です〜っ』

「はあ〜」

全員で声を合わせて言う子達に呆れた溜息を付く千冬。

千冬は、呆れ顔だが、こういう感じは満更でもないといった感じで楽しげに小さく微笑んでいる。

千冬にとってはトラウマにもわりと近いものらしいが、まあどんな形であれ、どういふのであれ、ああいう思い出も別に悪くはないだろう。

そう千冬も思っていることだろう。

それに皆、今日の学園祭を心から楽しんでくれたみたいだ。

学園祭中も、そして今も皆笑顔を浮かべて楽しんでいる。

それが今の俺にとって何よりで安堵を覚えたのだった。

そして隣で座っている東と少し夕食を一緒に食べながら、皆の光景を眺めいると。

「そう言えば篠ノ之さん、今日は本当にありがとうね。獣耳やメイド服を用意してくれて、クラスの出し物にも協力してくれてありがとう」

「いえ……当たり前のことですから」

「謙遜しないでよ。本当にありがとうっ、楽しかったよっ！篠ノ之さんのウサミメイド服姿も可愛かったよっ！」

「ありがとうございます、こちらこそ楽しかったです」

綾瀬さんに両手をぎゅっと握られ迫る感じで顔を近づけられ東は、驚いていたもののそれと同時に嬉しそうに笑みを浮かべて言った。

満更でもない……むしろ、本当に嬉しいみたいだ。

こういふ東のいつもとは違った一面を見られたのも、今日一日学園祭を頑張りきった甲斐があるというものだ。

綾瀬さんと言えば。

今更だが、綾瀬さんには俺と束が恋人関係と言うのは完全にバレているだろう。休憩を取り計らってくれた事や束とのアイコンタクトで、そうだとよく分かる。

きつと、クラスの子達も察しのいい子は気づいているのかもしれない。最近束は隠す気がほんの少しだけないのようで、流石にもう隠し通すのも限界がきているんだろう。

千冬にもそろそろ告げて、いろいろと清算しないとな……

そんなことを思っていると話は終わったのか束に見送られながら綾瀬さんは他の人達の方へと行った。

そして、今は束とは別の方のいた千冬は別の子に囲まれてその隣には居らず、この場所では再び束と横一列になって、二人つきりとなる。

あつ、千冬がいつもどおりといったらいいのか女の子達数人に絡まれている。

と、皆は楽しくも大変だった学園祭の後とは思えないほどまだ、わいわいと楽しそうに騒いでる。

「ねえ、綾？」

「何、束」

「私、壊れたのかな。こういうのも悪くないと思う。綾達以外の人達とも同じ刹那を味わえるのは」

「壊れてなんかないさ。ただ、束も変わっただけさ」

「そっなのかな」

照れくさそうに束は、微笑を浮かべる。

気恥ずかしさを隠すように、束は俺の手を皆には見えないように握り、俺も握り返す。

束の手から伝わってくる陽だまりの様な温もりは、気持ちよく心地いい。

今と言う刹那を味わえているのが、心の底から嬉しいと強く強く感じる。

感じて、束もそう感じている様で、それが表情に出てなのか、俺と束はお互いの顔を少し見て照れ笑いする。

「ふふっ、ねえ綾。こういう刹那を味わえたらいいのね。永遠に
回歸するように。時よ止まれ、その刹那は美しいから、って感じで」

「ああ、そうだね。この陽だまりを、刹那を失いたくはない」

「うんっ」

俺の言葉に束は、照れ笑いのまま頷いた。

永遠に続いて、永遠に^{繰り返}回歸してもとさえ思えるほどの刹那。

皆が笑顔で心の底から楽しいと思いつつ、この刹那を楽しんでいる。

本当にこの陽だまりの様な何気ない幸福に満たされた刹那を味わいたい、永遠に。

そして、その果てに刹那のままに時間が止まればいい。

例え、近いうちにこの刹那が犯され、“在りし日の刹那”と成り果てしまいかもしれないと気づかずにも……

…

第四十五話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第四十五話 ?

学園際・当日編、後半。

急ぎ気味で書いたので表現のしかたがもう少しかな？

今回皆好きロリ箒とその愉快的仲間を出してみました。

やっぱり、人気な面々。そして、変態ばかりでしたwww

と言つか、最後までヒヤッハーさせましたっ！www何か楽しかったですwww

それと今回箒と一夏がIS学園に来ました。

なので、原作開始時には多少ながら影響はできるかもしれません。

ちなみに今回表現しなかったのは、奈々さんカリスマ？全開で人気と一夏と箒でファイバーというのと

束さんと千冬さんのお姉さんらしい一面、というのを表現しなかったのですが。

上手く表現できていましたか？

そして伏線を結構張ってみました。

最後はもう少し暗く重たい感じを演出できたらよかったな……

それとツイッターを始めました。

執筆状況やどうでもいいことや重要よような事を呟いているので

よろしければ見てください。よろしくですm()m

<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言つか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

絵のリクエストも頂けると嬉しいです。

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだったので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ！！m(´`´)m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(´`´)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願っています。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

なので読んだのなら、本当に感想を書いて下さい。お願いしますっ！

第四十六話

放棄され伽藍堂となったとある大きな廃工場。
そこに数十人もの大人の男性達は集っていた。

「戦友達よ、いよいよ来る約束の日はやってくるっ！」

集う男性達の中、リーダー格である鍛えられた体格を持つ武人の様な雰囲気の男が声を張り上げ高々と言う。

「我らは今の反吐が出るような世界のあり様を耐えてきた。そして我らの戦場世界を汚し、奪ったあの忌々しく憎き篠ノ之束に今こそ思い知らせる日がやってくるっ！」

彼らは、ISが流れ出ている世界よりも前の旧世界にて、幾多の誕生を駆け抜け活躍した兵士達。

そして流れ出し完成しようとするIS世界に彼らは反発する者達。それは人種や国籍問わず、数多く集まっている。

その証拠に彼らは、自国の戦闘服・軍服を身に纏い、手には自動小銃等を持っている。

「我々は決して許さない。あの憎きIS鉄屑が空を汚したことをっ！戦場を汚したことっ！」

そして我々は決して認めない。あのキチガイ小娘が作り出したおぞましいIS鉄屑をっ！ISを意図も簡単に甘受し続けている世界をっ！何より小娘の我儘で我々の在りし日の世界を破壊したあのキチガイを認めはしないっ！許しはしないっ！決してっ！！」

リーダー格の男の言葉に続く様に他の男達が頷く様に賛同する様に

声を上げする。

声こそは歓声ではあるもののリーダー格の男の声も含め、皆憎悪に染まっている。

言葉の通り彼には今の世界の在り様に、ISに嘆き深く絶望し深く恨んでいる。

彼らにしてみればISという理解しがたい異物に自分達の世界を汚され、壊され、奪われ、乗っ取られ。

ISがスポーツや本来の用途である宇宙用のマルチフォーマル・スーツとしてだけではなく兵器としても平行してしまった事により。

経費削減や人経費削減、本格的に女性の戦場への進出などといったISが齎したある意味負の一面の影響をモロに食らった彼らは、職を居場所を奪われるしかなかった。

彼らも最初は仕方なしと耐えてはいた。だが、世界は意図も簡単にISを甘受し、縋り、元からあつた女尊男卑の社会風潮を急激に促進させた。

そのことにより彼らが駆け抜けたは戦場は、過去の栄光として踏みにじられ、汚された。それは今も各所で続いている、女尊男卑の社会風潮で。

その現状に、今の現状を齎したISに、ISの生みの親である篠ノ之束に彼らは憤怒し、深く強く憎悪している。

決して認めない許さない、甘受し続けて墮落しようとしている今の世界の現状を、原因のISを。

そして何より元凶である稀代の大罪人、篠ノ之束を。

だからこそ彼らの望み・目的は

「我々がISをこの世界から取り除き、世界を本来あるべきあつた姿に戻すっ!」
鉄屑

それが“例え未来のない、可能性のない、枯渴し死に絶えてゆく旧世界”であったとしても。

「来る約束の日に我々が我々の手で、あのキチガイ小娘の篠ノ之束を殺すっ！！何とんでもっ！」

人々を世界を騙し、混沌に落とし入れようと、世界を崩壊へと引き摺ろうとするキチガイ小娘。

旧世界と証した兵士である我々が貴様を、殺してやる。必ずや。

我らの屈辱を思い知らせてやる。子供だからと言って許しは毀させない、無様に惨さらしく屈辱を晒させて、殺しきる。

死ね、死に絶えろっ、消えてしまえ。屈辱と絶望の味を教えてやる。

「そして奴も必ずや殺すっ！世界の異物の一つである神山綾もっ！」

奴も認めない、許さない。

篠ノ之束に加担し、彼らと同じ男でありながらISを使える存在を。その存在こそが認めがたく許しがたい。ISを操れる奴こそが、本当の意味で異物だ。

奴を殺さなければ、篠ノ之束も殺せない。

だからこそ、篠ノ之束と共に死ぬ消え去るがいい。それが奴に送る最大の賛辞と言う名の屈辱だ。

この世界にISは、あの二人は必要ないのだ。
だからこそ、取り戻す。

未来のない、可能性のない、枯渴し死に絶えてゆく旧世界を。

彼らが愛し駆け抜けた戦場がある在りし日の彼らが望むあるべき世界を。

ISという汚色に汚されていなかった青く綺麗な空を。

だからこそ、望みと望みと憎悪を胸に彼らは今こそ武器を手に取り立ち上がる。

『我らに勝利をつー!』』

…

第四十六話（後書き）

というわけではなかったでしょうか第四十六話。

今回から新章。東アンチされる側ものです。

その手始めにプロローグみたいなものとして今回のを書きました。次話達に対する絶望感や不安感を持たせられたらいいなと思っ
ます。

これである程度の方がトランクの中身を察したかもしれないww

というか、上手くアンチものを書いていましたでしょうか？

書いて何か急激に気分が悪くなったので、ほどほどにして手を抜き
ました。

これじゃあISアンチものにあるヘイトと変わらないな……うーん。

軍人である彼らを選んだ理由としては

ISの負の面を受けやすい立場と職、そして思いなどからと。

同じ軍事である源さん達と対照的にするためという意味合いもあり
ます。

ですから、これから始まるこの話に置いて彼らをISアンチもの
主人公だと

思っただけならば、読みやすくなるかもしれません。

もう少しこの話を改良したいこの頃。

ツイッター、やってます

執筆状況やどうでもいいことや重要ような事を呟いているので

よろしければ見てください。よろしくですm()m

<http://t.witter.com/#!/1254Reon>

baruto

と言うか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

この機会にツイッターしてない人はして、一緒にこちょこちょしようぜっ！

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだったので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ！！m(┌┐)m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(┌┐)m

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんのご感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願っています。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

第四十七話

綾視点

ふと気がつけければ俺は、そこにいた。

どうしてここにいいのか分からず、どうしてこうなっているのかという記憶はない。

むしろそんな考えすら浮かんでこそ、浮かんだとしてもあつという間に消え、ただ漠然と俺はそこに存在していた。

不満はない。むしろ心地いいと感じる。

現状と比較すべき対象がないのだから、今を不満に思い感じるのとはまずない。

だからこそ心地よく、この揺り籠が心地よく、ふわふわと揺蕩いながら永劫ここに浮かぶものだと、勝手に解釈していた。

目に映るのはモノクロの世界を背景にして、滴り落ちるように流れるモノクロの水。

ゆっくりと降る小雨の様なそれらはあまりにも綺麗で輝かしく、それ同時に何処かちょっとした孤独を感じさせ。

純正かされた俺の世界を規則正しく円環している。

その繰り返しに見せられた。その停滞に安堵した。

嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意。

揺蕩う俺の意識の中で、知らず掻き集めた欠片記憶はそういつものだと認識とした時。

前にもまして、この停滞を好ましいと強く思い始める。

もう、あれは要らない。

あの日々を、あの忘却刹那したい過去を駆け抜けて、辿り着いた安息の一つがここなのだろうと、思い信じて確信する。

なぜならあれらは、俺の頭を腐せるから。

俺の心を、身体を、痛めつけ蝕むから。

俺を、俺という存在を、強烈なまでに否定し、苦しめるから。

誓い、断じて俺は、そんなものを求めて駆け抜けたのではない。

『さて、本当にそうだろうか』

知らない、聞き覚えのない、ゆったりとした声の問いが聞こえる。

そうだ、嫌いだからこそ、俺は更なる全身全霊を持って、駆け抜けた。

望みはただ、還ること。後、愛してやまない陽だまりの刹那へと。

あの忘却刹那したい過去を駆け抜けた先にしか、俺の世界はなかったというただそれだけというだけのこと。

そこに何の間違ひがあるというだけだ？

『逃げなかったこと』

引いては踏破などできないが。

『君は自分の矛盾に気づいてはいない』

だからお前は何を言う？

『分からのかね、至極簡単なことなのだが』

揺れる大きな水滴達。瞬く気泡。

その隙間から覗いているのは一体誰なんだ？

お前は何を言おうとしている？

『つまり 前のめりに駆け抜け、辿り着く安息とやらを何故還る場所と形容するのだ？それは普通、背後に残してきた過去幸せを指す表現ではないのかね？』

分からない。この人物が、お前がいつていることは分からない。

いや、分かっただけじゃないような……

この問答に隠された真意というやつ……それに気づけばもう戻れなくなるような。

戻る？ 還る？ 行く？ 進む？

ああ、少し、ちょっと待て。何かがおかしい、歪んでいる。

これは真つ当な理論が立たない。

『そつだ、君は歪んでいる』

低く、暗く、深く、笑う。

思考の乱れに呼応し、揺らぎ始める俺の形をそいつは愛でているように覗いている。

その視線は、まるで自己嫌悪する自分の一面を象っている様に見える。

そう認識してしまうと、自己嫌悪している時の様な気分になる。

思考が螺旋の様に乱れ、混乱する。

いや、もしかすると……そう思っているのは自分に都合のいい考え方だけであつて。

本当は気づいているのかもしれない。

『ああその通りだ。君は本当は気づいているのだよ。だが、気づきたくはないという思いから、その思考に忌避しているのだ』

何にだ？

それに、なぜこの人物は、俺の思考を読めるんだ。

俺は言葉を発していない……それ以前に、そもそも俺の口は何処にある？

『それは確かな真実がしつかりと見えないことへの嘆きかな？それとも……還るべき前進、行くべき戻る場所が示されぬと不安かな？』

理論として矛盾する言葉を吐きながら、その人物は笑う。

駆け抜けたと思っていた。信じていた。極点へと辿り着いたと思っていた。信じていた。

しかしそれは釈迦の掌。天体の構造が知られる以前に、広く信じられていた世界の幻想。

故に世界に最果てなど存在せず、突き進んだ先にあるのはただの始まり。

すなわち

『前進の果てに起点へと辿り着くのならば、其は言うまでもなく円環なり』

だからこそ

『君の魂、存在そのものはそのように出来ている。甘美なるいつかを無限に味を味わうため、永劫走り続ける止まらずの星。ゆえに何処へも行けず回り続け、繰り返すだけの君は止まっていると言ってよい』

そうだ、俺は止まっているのだ。あの時から。走り続けることでしか、停滞を実感できない。

『だからこそ、永劫の円環境走り続ける。その事実を知れば最後、君は何処にも辿り着けない』

俺は何処にも辿り着けない。
では一体、何度あの忘却刹那したい過去を駆け抜ければいいんだ。

『知れたこと、無限なり』

では一体、無限の果てに何があるというんだ。

『無限の起点があるのみだ』

無限の起点へと回帰して、再び疾走して駆け抜け始める。

『だからこそ、回るのだ。繰り返す、永劫に、止まらずに。狂おしいほどの陽だまりの刹那とやらを求めて』

駆け抜けた忘却刹那したい過去。辿り着いた安息。

だが、それは本当に刹那刹那のことと成り果ててしまふ。

手にした陽だまりや温もりは所詮は一瞬刹那の出来事。

そしてそれがまた次への忘却刹那したい過去への起点となる。愚かしい。そう理解するからこそ、矛盾していても

『ああ、君は渴望望むするのだね。愛する陽だまりの刹那の繰り返しを
それ故の、“時を止まれ、君は美しい”』

その人物が芝居がかった口調で、ゆっくりと謳う様に言う。

そうだ、俺は渴望^{ほむ}する。

繰り返しを、繰り返しゆえの時の停滞を。

そして、愛する陽だまりの刹那での永遠の停止を。

その為ならば、もう一度ならあのあの忘却したい過去《刹那》を全身全霊を持って駆け抜けよう。

俺が俺達が愛した刹那を破壊しようとするものがあるのなら、等しく愛を持って反対に破壊しよう。

総てを愛し、俺達が愛する陽だまりの刹那の礎として、果てにとしで。それはまるで、破壊の星の如く。

なるほど、そういうことか。俺は、俺の真意、真実に漸く気づいた。いや、改めて気づいたんだ。本当は分かっているはずなのに今まで避け忌避していた、己の渴望《思い》に。

『そうだ、漸く知ったか。本当は分かっているはずなのに忌避していた君自身の渴望に。ならば、君はいい加減忌避していること達に改めて気づかなければ、改めて向き合わなければならぬ』

それは

『天魔の黒兎と君、君達に向けられる対する意思を。忘却しようとしていた悪夢の様な過去を、そして何より君向けられる天魔の黒兎の少女と対する少女の淡い恋心に』

前者に対してはそれはそのつもりだった。

予感、既知感の様な予感で、近いうちに俺達の刹那が犯されようとしているのは薄々感じていた。

それは避けられるものでもないし、避けてはいけない。全力でぶつからなければならぬ。

自分たちとは違う、思い、考え、主義主張等に。全力でぶつかろう。

後者に対しては何となくにしかわからなかった。

何となくになら意図は分かるが、それを行動や思いにして実行するというのはまだ今一つ出来ない。

本当に曖昧で、おぼろげ。それが果たして、本当に何を示しているものなのか。

二つはまだ分かったり、曖昧ながらも分かったりだったが中者のことに対しては、全く分からなかった。

むしろ、分からないのと同時に、何か知らせないように縛鎖で縛りつけている。

だけど一度疑問に思ってしまったえば、その縛鎖はその意思に連鎖反応を起こすように外れる。

そして、目の前に移る光景が絵が移り変わるスライドショーみたいなものとなる。

絵はゆっくりながも切り替わっていく。

その絵、光景は何処かの家の一室の様に見える。

何処か影絵の様になっていて、そこには男の人と女の人がいた。

二人は夫婦のように見える。だが、仲睦まじい夫婦ではない。

女の人が座って俯き加減の顔に両手で覆って小さく静かに泣いているように。

そんな女の人を男の人が指差して怒鳴りつけていた。

影かかっていて表情こそは見れないが、見える二人の姿の雰囲気か

らは、女の人自分が自分に向けて強い自己嫌悪と悲しみ、男の人が女の人へ向ける憤怒と苛立ちを感じる。

そして何よりそんな雰囲気以上に、第三者へ向ける、嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意を強く強く感じる。

感覚的に俺は酷く気持ち悪い、辛くて悲しいと感じる。

無音で声は聞こえないが、男の人が女の人へ向けている言葉が読み取れた。

『アンナ コドモ ウミヤガツテ。イナクナレ、オマエラフリ、トモ イナク ナレ』

そう読み取ると瞬間、目の前の光景が切り替わる。

それと同時に首に物凄い圧迫がかかる。俺の目の前にはその二人の夫婦が居て、俺の首を強くしていめる。

苦しい……息苦しい。

息を吸おうとすれば、するほど息苦しさは倍異常になって、とっても息苦しい。

激しい息苦しいさと同時に、悲しくなってくる、辛くなってくる、申し訳なくなってくる。異常なまでに。

どうしてこうなっているのか分からない。分けが分からないけども、やはり、悲しくなつて、辛くなつて、申し訳なくなってくる。

そして首らしきものから俺に二人の感情が伝わってくる。

それは 嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意。

先ほど感じたのなんて非じゃないぐらいのもの、比べようがないぐらい強烈。

上手い表現の仕方が分からないが、二人だけからじゃなく世界そのものからも拒絶され、忌避され、そんな思いを送られているよう。

まるで渾身の負の思いを送られているようで、同等に首らしきものを絞める力をゆっくりと強くなってくる。

そうしてゆっくりと二人の口が開き嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意に満ち満ちた声で言う。

『お前ナンテ 産マレテコナケレバヨカッタダ。私ヲ 不幸ニシタ 罪 ヲ 報イテ 死ンデシマエ』

『貴方ナンテ 産マナケレバ ヨカッタ。気持チ悪イ 気味悪イ 死ンデ 私達ノ前カラ 私達カラ消エテ』

二人の声が重なる。

『『才前八死デシマエ』』

そんな渾身の嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意に満ち満ちた言葉が俺という存在全体をを酷く貫いた。

・
・
・

「
「

強い衝撃を受けるような感覚に驚いて、俺は危うく叫びかけた。

「あっ、……っ……っ……っ」

どうやら、俺は眠っていたのから目覚めたらしい。

目を横にしてベット近くの時計を見ると、目覚ましが鳴る約十分前。

朝のようだ。

「あれは……夢……？とつか、何の夢を見ていたんだ？」

確かに眠っていた先ほど、こうして目覚める寸前まで、見ていた。だけど、何か得たいの知れない何かを見たかのように、全身汗まみれで動悸が早い。

それに何だか頭が何処か重たくて、気分が悪い。朝から憂鬱な気分になる。

夢を見ていたという認識は確かにある。

しかし、どんな夢を見ていたかははっきりと覚えていない。

ただ覚えているとするならば、夢で忌避していた自分の何かの思いの真実に改めて気づき向きあった感じだった。

「……起きるか」

目覚ましは後約五分ぐらいで鳴る。

もう一度眠るにしても、時間があまりにも足りなさ過ぎるし、それに今日は学校がいつも通りあるいつも通りな日。

もう一度寝てしまつて寝坊で遅刻するなんて、みっともなさ過ぎる。

なので俺は、重い身体をゆっくりとベットから降りて立ち上がる。

そのまま外窓の方へ方へ行き、カーテンを引く。

窓から見えた今日の天気は雨だった。しとしと振る小雨。

なるほど、どうりで微かながらに雨の日独特の湿気の匂いがしたのか。

窓から見える景色は、空が灰色の雲で覆われていて、しとしと振る小雨の雨粒が窓にパラパラとついでには線を描いて落ちていく。

この感じからすると、小雨だけど、今日一日中降り続いていそう。
雨だからなのか、憂鬱な気分を更に憂鬱にさせる。
ふと今思い出したけど、こんな光景を見たような気がする。
それにいつか……遠い遠い昔にも、こんな灰色の曇り空の小雨の光
景をこんな風に見つめていたことがあった。

そう……あの日に

「
」

瞬間、強烈な頭痛と立ちくらみを感じた。

なんだこれ？

とても、気持ちの悪い感じを感じた。

自分の心や体の事なのに、どうしてこうなっているのかよく分から
ない。

ぼーっとしていては、今は余計に重い体が重くなって、憂鬱な気分
が更に憂鬱な気分になる。

顔でも洗って気分を入れ替えるか。

そう思い俺は、部屋の洗面所に行き、顔を洗い、歯も磨いた。

そんな簡単な身支を済ませると俺は、寝巻きから制服に着換え終え
た。たった。

「……これは持っておいた方がよさそうだな」

制服をいつも締まっっているクローゼットからトランクケースを開け、
中の物を手に取る。

体が重く、いろいろと優れなくて、気分は憂鬱なのと同時に、いい
表せない悪い予感を拭う事がどうしても出来ない。

今日何かか、とてつもなく悪い事が起る。

それはあくまで予感の域を出ていないものだけど、何かがそうなる
と強く伝えていて、安易に無視する事はできない。

だからこそ、トランクケースの中身を手に取る。

これを使うことがないのが一番だけど、必要になったときは使っ
かない。

覚悟は大丈夫。総ては束の為だ。

そう思い、シヨルダーホルスターをYシャツの上に装着し、その中
にあるモノをしまい、後る腰にもあるモノを二個差し込んだ。

「……準備よし、行くか」

覚悟を入れなおし、気合を入れ、最後にもう一度ちゃんと身支度な
どを済ませて部屋を後にした。

・
・
・

午前の授業中。

教科は、国語。俺の一番好きな教科だ。

だけど、この時の天気も変わらず灰色の曇り空の小雨。

憂鬱な気分は変わらない。

そうなのだからなんだろうか、いつもより今一つ授業に、目の前の
物事達に集中出来ない。

焦り、みたいなものを感じている。これは危機感にも似ていて、ま
た危機感も感じている。

それらを振り払おうとしても振り払えず、そうすればそうするほど
それらは増徴し、今だ続いている悪い予感も強く増徴する。

気が抜けない。むしろ、張り詰めたままだ。
そう感じているのは俺だけではないようで……

「……」

隣の席に座っている束は、とつても難しい顔をしていた。

というよりは、俺と同じく悪い予感を感じているのか、とつても難しい顔の中に危機感を感じている様な顔をしている様に見える。

いつも通り授業は放置してPADを弄っているが、その証拠に今日はIS学園の警備状態やテロ用の非難通路等のデータを何度も何度も見ている。

束がこうしているんだ。

高確率で悪い予感は、現実の物となるんだろう。

予感……最低でも予感の域を出ないのが一番なんだけど、ここはもしもに備えての心の予めの準備と、更に気を張る必要が、気を引き締める必要がある。

この、束と共有する幸福の包まれ満たされた陽だまりの何気ない刹那時刹那も失わない為にも。

だけど、何も起らないのがやっぱり一番いい。
願って
渴望願っている、穏やかに安らげる日々を。

だけど俺達が生きる今刹那というモノは、そこまで都合主義な世界ではない。

ドゴーンッ！！

俺達が愛してやまない、愛し続けている陽だまり— 《刹那》が壊れていきそうな、大きな爆発音が響き聞こえた。

⋮

第四十七話（後書き）

ということではいかだったでしょうか第四七話。

ついに本格的に始まって東アンチされ編。

冒頭のシーンは、分かる方には分かる思いますが。

怒りの日のマリィ のザミエル戦の前のあのシーンをかなり参考にさせて頂きました。

なので、かなり似ているかもしれませんが何卒ご了承を。

ちなみに某変態ニート神ぽいのが出ていますが、自問自答を分かりやすくするために

作者が用意したこの話限りの存在なので、もう必要がない限り出ません。

と言うか、出しません。そういう完全クロス系の小説ではないのでとはいいつつ綾君には、三柱成分が大量に含まれているという……

（苦笑）

冒頭の後半もカタカナばかりで読みににくいですからね？

でも、狂気……みたいなものを演出しようとしたらああなりました。今回はあからさまな伏線ばかりかな？

トランクの中身もこれで明らか分かるでしょう。

名前出してないだけで、もろ分かりのものですもん。

どのタイプのものにしようか、検討中……いいタイプあるかな？
現実的に

そして締め。

何か貧相になった（汗）

効果音書くとアホぼく見えるな（汗）

締めもいつも通りな感じで、何かいい手はないものだろうか……

ISの小説8巻というよりも、ISの小説自体もう発売しないそうですね。

様々な情報によると『ISは打ち切りだ』とか『作者と会社の契約が切れた』だとか

『作者と会社の仲が険悪になって打ち切りになった』だとかいろいろと囁かれています

8巻発売の当初の日日、九月二十五日から発売日が何の予告もなく伸びていますし……

8巻が出ないと、原作沿いではないですけど、続きが掛けないんですよね……

学校での流れや、行事ごとが全然分からないので。

なので、今書いている東アンチされる側が終って、数話書きおわった時に

8巻が発売されてなかったら、オリジナル小説を可能とっています（といっても、終るのは来年になりそうですね（汗））

オリジナル小説は夢遊病とドライデレを題材にした奴を書こうと思っています。

これはラノベの賞を狙う奴なので、本格的な連載はしません。

プロトタイプを短編としてここに投稿しようかな？と思っています。と言うか、私の今の小説の腕で通じるのかな？（汗）

ツイッター、やってます

執筆状況やどうでもいいことや重要ような事を呟いているので

よろしければ見てください。よろしくですm（）（）m

<http://t.witter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言うか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲し

い。

この機会にツイッターしてない人はして、一緒にこちょこちょしようぜっ！

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますけど、一度きりだったので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ！！m(´`´)m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

というか、そろそろ本当にランキングに乗りたい。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(´`´)m

これも何としてでも上げたい。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。 言うてくださいっ！

第四十八話 ？

綾視点

校舎全体に鳴り響く大きな爆発音。

それは祝砲にしてはあまりにも暗く重たく、不吉を孕んでいる。

突然聞こえた爆発音にクラスは騒がしくなり、授業どころではなくなっている。

そしてこの爆発音を聞いてから、感じている危機感などが増している。

胸騒ぎが一向に収まらない。とりあえず今は状況確認を。

そう思った瞬間、勢いよく教室のドアが開いた。

「み、皆さん、緊急事態ですっ！は、は、早くっ、地下のシェルターに全員避難してくださいっ！」

教室に入ってきた女の先生が慌てた様子で早口で言う。

その女の先生の血相を変えた表情から、さっきの爆発音に関する事は深刻な事態だということが察しが付いた。

事態の度合いは何となくにはな分かったが、もの少し現状に対する細かい情報が必要だ。

その思いを代弁にしてくりねように担任の女の先生がその女の先生に聞いた。

「りよ、了解しましたっ。ですが、シェルターに避難って一体何がっ？」

「テロ、武装テロリスがIS学園に攻め込んできたんですっ！」

この女の先生も俺達に避難を伝えるだけで一杯一杯だったようで、伏せるのも忘れて語気を強めて言った。

その言葉にクラスは更にがやがやと騒がしくなる。

先生達の様子や表情を見て、どうやら嘘ではない、本当の事だと分かったんだろう。

騒がしくしていた人達は皆、恐怖を感じている顔をして取り乱している。

IS学園が軍事学校みたいな扱いでもあって、万が一こういう事態もあるかもしれないと、おぼろげにでも頭の片隅に置いてはいんだろうけど。

こうして現実問題として起るなんて夢にも思ってたからこそ、取り乱している。

恐怖を感じ取り乱したい気持ちも理解できなくはないが、今はそんな場合じゃない。

俺は騒がしいクラスの中、教卓の前に立ち場を纏める。

「皆、静かに。先生方、一刻も早く避難しましょう。取り返しの付かなくなる前に」

「そ、そうですね。今は、吉岡整備士隊長を初めとする整備士隊の方々が鎮圧に向かってくれていますし。今のうちに」

その言葉を合図として先生方は避難の準備を始める。

原さん達が鎮圧して防衛線を気づいてくれているのか。

それなら気休め程度には安心だ。だけど、そう易々と安心はしてられない。

安心するのならそれと同等に気の弾き詰めも必要だ。

源さん達が命かけて鎮圧にかかっているんだ、俺の方も命かけて全校生徒を全員無事でシエルターまで行かさないと。

本来ならこんな目に合わないだろう、どう考えても割には合わない、俺達の巻き添えを食わせるわけにはいかない。

「東、作っていた避難経路の地図を先生方の端末に送って」

「分かった」

頷き東は、PADを素早く操作して先生方の端末に避難通路の地図を送る。

学校が用意したテロ等といった事態の備えての緊急事態用避難通路の地図はあるだろうが。

多分、シエルターまでの通路はいくつか押さえられているだろう。

防衛システムでは最高峰の、このIS学園に攻め込んでくる連中だ。確実にプロだ。

プロだからこそ、こういう避難通路の地図があることは熟知していて、学園が考えた避難通路地図を予想しているはずだ。

だからこそ、避難通路に検討をいつくか立て、そのいつくかを抑えてくるのはほぼ確実だ。

待ち構えている通路に行けば、死に行くようなもの。

死なない為にも、皆を死なず怪我一つなく無事にシエルター為にも、ここは東が作った避難通路地図の方がいい。

通路方向事態はパツと見簡単に見えるが、奇をてらいすぎて、多分束以外の人じゃ思いもつかないルートとなっている。

これなら待ち構えられている可能性も、見破られる可能性も割かし低いだろう。万が一の場合は、その都度俺が全力全霊を持ってフォ

ローすればいい。

束が端末に送った避難通路地図を確認し、一通り頭に入れた先生方は行動を指示し始める。

「それでは皆さん、今から避難を開始します。非難中の第三原則を守って、私達に着いて来て下さい。神山君と篠ノ之さんは後ろへ、織斑さんは前に居て下さい」

「分かりました」

「……はい」

「分かりました」

俺、束、千冬の順に頷き、指示されたそれぞれの場所に着く。

そして俺と束は直列に並んだ列の最後尾に立ち、最後に教室を後にする。

教室を出ると先生間で様々なやり取りは行われていたようで、他のクラスの子達も直列を作って避難行動を開始している。

向かうは、シエルター。旧世代の核シエルターをベースに束が開発して発展させたもので、エネルギーシールドや絶対防御等の防御機能を兼ね備えており。

砲撃型のISの最大出力攻撃を一、二発なら防げる様想定して作られている。

だから、シエルターに入ればテロリストに殺されるなどといった物理的な問題はなくなる。後は、予め外部・軍にもうこの事態のことは伝わっているだろうから、軍が来るのを大人しく待つだけ。

だが、今のところはそれが難しい。今は何の問題もなく避難通路を進んでいるが、校舎の隅の方、玄関付近の方角からはどちらか識別

できない男性の怒号と銃撃音が微かに聞こえてくる。
その音にクラスの子達は、顔一杯に恐怖を浮かべ、怯えている。

彼女達の恐怖や怯えを綺麗さっぱり拭う事が出来れば今一番いいんだけど、屑で無力な俺はそんな事は出来ない。

今出来る事なんてものは片手の指の数以下で、それらに最善と全力を尽くす他何も無い。

それに俺の推察の域を出ないものだが、今このIS学園に攻め込んで来ているテロリスト《連中》の狙いは俺達、東、だろう。
理由としては行動理由となるものならいくらだってある。ありすぎて、それなのか分からなくなるぐらいだ。

俺達は今、連中をテロリストと呼称しているが、向こうにしてみれば俺と東の方が忌むべきテロリスト以外の何物でもないのだろう。

ああ、やってしまった。

久々にそんな言葉が思い浮かびあがってきた。

ああ、本当にやってしまった。

こうなると分かっていた。分かっているながらも、この未知を進んだ^道その結果が今の現状。だけど、俺は今のいいままで分かっているながらも心の何処では、こうなることに対して僅かながらでも忌避していた。

ツケが今跳ね返ってきた感じた。仕方ない……今まで忌避して、仕方ないことだからこそ、何としてでも全員無事でいなければならぬ。

と考え事をしつつ束が作った避難通路地図を進んでいた時だった。
急に列の動きが止まり、前にいて誘導をしている先生方の表情は陰しく曇っていた。

一刻でも早くシエルターへ避難しないといけない事態なのに、進まない理由が気になり、俺は束を連れて前の先生方の方へ行き、何があつたのか聞いてみる。

「あの……一体何があつたんですか？」

「そ、それがテロリスの数人が防衛線を強行突破したらしいんですけど！こちらに来ることはないとのことですが、方角的にはこっちに向かったらしくてっ！」

慌てた様子で言う先生。

事態は刻一刻と悪い方向に向かっている。

こちらに来る事はないとは言え、方向的にはこっちの方に向かったとのこと。

来る可能性がないとは言え、それはあくまで可能性。

方向的にこっちの方に向かったのなら、遭遇する可能性だってゼロではないはずだ。

今の状況、1%でも可能性があるのなら、それは現実のものとなりやすい状態になっている。

ISによる駆逐も可能と言えれば可能だが。

ISの機体格納庫は既に押さえられているだろう。なので、使えるのは専用機持ちの機体のみ。

しかし、校舎内でISを動かすのは面積的に難しく、大きな隙を作ってしまう。その隙を付かれたら、皆を殺されでもしたら本末転倒だ。

ISという存在の強さを証明し続ける事が出来なくなってしまう。

だから

「東」

「うん、分かってる」

問いを投げかけようとして東の名前を呼んだが。

東は、既に問いが何なのか分かっているようで覚悟した顔で頷いていた。

覚悟はしているようだな……なら、いい。後は行動するだけだ。

「先生、それでテロリストはこちらの方向に向かっているですよね？」

「ええ、整備師隊の連絡ではこちらの距離はかなりあるようですが……それが？」

「そうですね……なら、俺と東、篠ノ之さんはここで皆さんと別行動させてもらい、万が一テロリストがこちらにこない様おとりをします」

『なっ！？』

突然の言葉に先生方だけじゃなく、周りで聞いていてクラスの子達、千冬までもが驚いていた。

まあ、驚くのも無理もない。

今の状況で別行動を取るとは自殺行為に等しい。

今安全として言えるのは俺達が進んでいるルートぐらいで、その他のルートや場所は危険地帯。

そんなところにいけば、遭遇して、殺されるかもしれない。

そう先生方は思っているのか、現状を忘れたかのように声を荒げて言う。

「何言ってるんですかっ！？危険ですっ！死ぬ気ですかっ！？」

「死ぬ気は毛頭ありませんし、殺されるつもりも毛頭ないです。ですが、彼らの目的は俺と束です。彼らが今向かってきたているのなら俺達となると全員共倒れするかもしれない」

彼らの目的が俺と束なのは間違いない。

このまま一緒にシエルターまで行動をしていたら、皆を巻き添わせるかもしれない。

死人が出なくても最悪、銃弾を浴びて重症を受ける可能性だって俺達がそうだったように、人間は目的の為ならぬり構わずだ。

それに俺達が死ななくても、誰かが殺される可能性だってある。俺達を殺す代わりに全員見逃すなんてものは、アニメや物語の中だからこそ起きる事だ。

皆殺しだってある。だから、そういうことらを危惧して、俺と束が別行動することを進言した。

それにそう簡単に納得が出来るはずもなく千冬は、声を荒げて言う。

「そうだとしてもお前達がやろうとしていることは自殺行為以外の何物でもないぞっ！馬鹿がっ！これは一郎さんとやった訓練ではなんいだぞっ！？」

「そんなことは分かっている。俺は誰も死なせない、皆も千冬もっ。何度も言うけど、死ぬ気も殺される津も一切毛頭ないっ。俺が命に

変えて束を守り抜き、生き残る」

「だが……っ！」

「分かってくれなんて言わない。だけど、俺は生徒会長として俺として、皆を守らなければならぬっ！俺達が囷となつて皆を守る。だから、千冬は皆を導き勇気付けて守ってくれ。

それを押し付けだと思ってくれても構わない。恨んでくれてもかまらない。恨み言なら、終ったら聞く。だから今は……っ！」

「く……っ！」

苦い顔をして口ごもる千冬。

判断しかねているらしい。

それは仕方ない。態々、死に行くようなところにいかすわけがない。そう思っているのは千冬だけじゃなく、先生方も苦い顔している。

時間がない。

言っている事が破綻しているのも、結局は「後味が悪い」からという思いから来る自己満足なのも理解している。

俺は、俺と束は、ここで一度自分の罪に踏ん切りをつけたいだけなんだ。忌避していたものたちをもう一度見つめる為にも。

端からするとしょもない行動理由なのかもしれないが、これが俺達を選択する最善の選択だと思う。

最後は千冬達の心配を振り切つてでも行かないと。

千冬の中で踏ん切りが着いた様で、苦い顔のままだったが呆れた感じで言った。

「どうせ、お前のことだ。言ったところでどうせ聞かん。それは束もだ。私が引きとめたところで、駆け抜けてしまっ」

「千冬……」

「……ちーちゃん」

「……好きにしろ……だが、勝手な死は断じて認めん。私がこいつらを生きて守るんだ、お前たちは囷としてこいつらを生きれ守れ。生き残れ、いいなっ」

「ああ」

「うん」

結局最後は千冬に折れてもらった。

本当は死に行くような場所にいかせたないんだろうが、背に腹を変え現実問題を考えああい判断をしてくれたんだろう。理解力のある親友を持った。心から感謝する。

「先生方もここは……」

「一教師、一大人としては、許される判断ではないのですが、ここは神山君と篠ノ之さんの判断に任せます。全員共倒れしては本末転倒ですし、ですけど二人とも絶対に死なないで下さい」

「ありがとうございます。感謝します」

「ありがとうございます、先生。絶対に二人生きてシェルターに向かいます」

先生方の了承に東と俺は、感謝する。

ここで俺達に別行動させるといふのは、立場や大人として認めるわけにはだろつが。

ここは苦肉の策で先生方は了承してくれた。

本当は今の状態のまま全員でシエルターへ非難することが出来るのが一番いいのだが、現状テロリスのこちらの方角に向かったのとで、万が一遭遇する可能性がある。

そうなつたら俺と東の巻き添えを皆が食らい、最悪共倒れという事態になりかねない。それは何としてでも避けなければならぬ。

だからこそ、現実問題をしっかり考え先生方はああいう判断を下してくれたのだろつ。

それに先生方は、俺を信頼してくれている。それはこの言葉が証明してくれて、その信頼が何より嬉しくありがたい。

先生がスーツのポケットを探り、インカムを取り出すと渡してくる。

「私のインカムのスペアですが、ちゃんと動きますし、これで整備士隊の方々や私達と連絡が取れます。使い方は分かりますよね、使ってください」

「ありがとうございます。皆さん、無事で」

「生きてシエルターで会いましょう」

「それは私達のセリフですよ、神山君、篠ノ之さん。貴方達もどうか無事で」

「死なないでね、神山君、篠ノ之さんっ！」

「無茶ダメだよ」

「皆がこういつているんだ。死ぬな、死にかける様な無茶も許さんからな」

「分かってるよ、皆、ちーちゃん」

「ああ。それじゃあそろそろ」

「はい」

そう言っつて俺と束以外の皆は避難経路を直進に移動し始める。

皆、後ろにいる俺達を名残惜しそうに見つめていた。

千冬は、曲がり角に入って見えなくなる最後の最後まで俺達を見て、心配そうしていた。

「さてと」

皆が居なくなつた通路で俺は先ほど先生から貰ったインカムを耳に付けて、起動させる。

「そろそろ別ルートで行こうか」

「うん、ここからなら本来の避難通路を大回りで行けば遭遇する確立が少なくて、遭遇せずにシエルターまで行けるよ」

「分かった」

言っつて別ルートを俺達は歩き出す。

そして俺は、脇からある物を取り出す。

取り出したものは、自動拳銃ベレッタM92。
黒のグリップの手触りと重量感が、手によく馴染む。

これは本物で、グリップに掘られている型番から俺が水城家で師匠との訓練で愛用していた物。

本物だが、銃弾は実弾ではなく、通常の弾丸のように飛翔し、命中すると同時に対象物に電流を流して一時的に神経を麻痺させる、スタンガンとゴム弾を組み合わせた暴徒等を鎮圧するゴム弾。

初めは実弾かと思ったが、マガジンの中身を見てそのゴム弾だと理解した。甘いのもしれないが、これが俺に対する師匠の本当に小さい気遣いなのかもしれない。

この自動拳銃の使い方は熟知している。

白騎士事件後、IS学園入学までの半年の間。

その期間の間に師匠から、護身術及び束を守る為の術の一つとして自動拳銃の拳銃の使い方を学んだ。

それが今役立つとし始めている。

ちなみに学園祭の時、咲夜さんから受け取った中身がこれだ。

正直、あの時はこれを見て少し受け取るのを拒んだ。師匠が仕組んだのは確実に、明らかこういう事態を師匠は絶対に起きるものだと思っただけで、咲夜さんに渡してくれたのだから。

あの時は少しいろいろと迷って、拒んだが、今待っていただけることはこの状況下に置いて非常に助かる。

それに無理にでも渡そうとしてくれた時の咲夜さんの言葉が思い上がる。

持つてなくて後悔するよりはいい。その言葉が改めて身に染みている。

咲夜さんと師匠に改めて感謝しないと……確かにこの言葉の通りだ。

これがあるからこそ万が一の時もどうにかできそうだ。

俺と束は、様々な人に迷惑を今も掛け続けているが

それ同じぐらい様々な人に、こんな風に助けられている。

感謝するからこそ、今は事態を自分達が出来る範囲で収集させて、生き残らないと。

すると束は、俺の顔を申し訳なさそうに心配してる様な表情で覗いて言った。

「ごめんなさい……私の事でこんな事に」

「仕方ないさ。こうなると分かっていたんだ、なら今一度忌避せず逃げ出さず、立ち向かおう。二人で」

「そうだね、私はもう逃げない。頑張ろう、二人で。でも、本当に無理だけはしないでね」

「弁えて、善処はするよ。でも源さん達や女の先生達が頑張っているんだ。それに、女の陰でバトルの解説なんかしてる男は、死んでいいだろ」

「まあ綾たつたら、格好つけちゃって。でも、綾らしいよ」

格好つけて強がって言うてみたけど。

強がりだと束には、見透かされてしまつて微笑まれてしまった。

けれど、平気なフリを俺も束もしているが、本当は怖い。

こうして格好つけて強がっていられるのが限界だ。

確かに今までもこんな事はあったにはあったが、テロというほどでも今回ほど大きなものでもなく。

それにその時は師匠がいてその都度、何とかなっていた。

だけど、今は師匠はいない。師匠の手を借りる事は一切出来ない。

本当に、本当の意味で俺の手で束を二人とも揃って生きて守り聞けなければならぬ。

本当に俺だけで守れるのか？

現実を目の前にして、今まで強く硬く固めてきた覚悟が揺らいでしまいそうになる。

違う、ダメだ、迷うな。守りるのかではなく、守りきるんだ。必ず俺の手で、俺一人でも。

だけど、俺はこの手にあるベレッタM92を撃つことができるのか？

そんな疑問を抱いてしまった矢先にだった。

「いたぞっ!!」

「っ!」

十字路に差し掛かった時、前方に戦闘服を来て手にはM4カービンを待ったテロリスの男二人が現れ、声を上げ二人ともが此方を捉えたと同時に手に持つアサルトライフルを発砲してきた。

発砲され高速で向かってくる無数の弾丸。

俺は、相手の声が上がったのと同時に束の腰に手を回し抱きかかえ、すかさず右の通路のへと飛び込んで回避した。

危機一髪。

突然の事に驚きはしたが、その時確実に回避してないければ絶対に死んでいた。

その証拠に壁に銃弾が激しく衝突した音が聞こえ、テロリストの男達がこちら走って向かってきてきている足音も聞こえてくる。
まずいな

「…………綾」

テロリストの男達の足音を束も聞いたように。

俺の服の袖をぎゅっと掴み、心配そうな不安そうな表情で俺をも見つめている。

心臓の鼓動が、心拍数が、いつもより早いと感じる。

緊張とかから来るものなのか、それとも場の雰囲気から来るものなのか、どちらかはよく分からないが嫌な汗が流れ始めている。

こう思考を巡らしている刹那の間でも、刻一刻とテロリスト達は俺達をに持つアサルトライフル撃ち殺そうと向かってきている。

相手をやらないと俺達が殺されてしまう。

撃つ覚悟、撃たれる覚悟ならあるつもりだ。

だけど、本当に俺にこの拳銃の引き金が引けるのか？

何度も何度も拳銃は撃ってきたが、それは相手が師匠だから躊躇いなしに撃てた。

しかし、今俺が撃とうとしているのは師匠ではない、俺達を今殺そうとしている別の人間だ。

師匠以外の人間を撃つのは初めての事だ。そして今俺達を殺そうとしている彼らの行動はある意味正しい。

また、俺達のエゴだけで、彼らを世界を踏みにじっていいのか？

それで俺は求めた陽だまりに還行くることができるのか？

そうした些細な疑問を抱いてしまうと拳銃を持つ手に僅かながら迷いが生じ、決しても揺れ動きそうになる。

っ、迷うな、覚悟は決めたんだ。なら、それを強く持ち続けるっ、覚悟達を最後まで貫けっ、神山綾っ！！

今更迷つても、考え直しても意味はない。忌避していた現実は今目の前にあるのだから、今更迷うのは無意味に等しい。

俺達が進む未来の未知^道は、修羅道。その修羅道の一端が目の前に現れている。なら、逃げず。全身全霊全力で疾走しろっ！

総てに等しく愛を持って、刹那の塵へと星の光の如く破壊してやる。今後も現れるだろう、俺や束、俺達に敵対する脅威も総てそうしてやるっ！

だから、今だけでも常識的な世界から脱却して、いつかあの刹那の陽だまりを取り戻す事を脱却するっ！

これが業というのなら俺達のエゴの代償なら、最後までエゴを貫き通してやる。

更なる罪や業やらなんやらも全部背負ってこの未知^道を疾走して駆け抜けきるっ！

俺自身の為にも、何よりもう一人の俺である最愛の人為にも

善でも！ 悪でも！最後まで貫き通せた信念に偽りなどは何一つない！！

だから

「行ってくるっ！」

そう強くない束の手を更に刹那だけぎゅっと握ると再び十字路に出た。

手を握った瞬間、俺の今の今までの思いや意を汲んでくれるかのように強く頷いてくれていた。

なら、もう何も怖くはないっ！

十字路に出ると向こうが進んだ距離が距離だけにすぐさまアサルトライフルの銃口で捕らえられる。

「覚悟しろっ！世界の敵っ！神山綾っ！あの篠ノ之束キチガイと共に殺してやるっ！！」

「だから、さっさの死にやがれっ！！」

「死ぬかよっ！！それに俺の女をそんな風に言っじゃねえッ！！」
声を荒げて言ったのと同時に双方とも発砲する。

距離は比較的近く、一対二。数や状況に置いては俺が圧倒的に不利だが、諦めないっ！

俺は、テロリストの男二人が撃ち高速で向かってくる弾丸を今俺の周りがある間合い全てと、今出せる渾身の力を振り絞って弾を回避する。

「　　っうッ！！」

着弾こそは全弾何とかギリギリで回避する事に成功はしたが。

全てを完全完璧に回避するなんて超人技は出来ず、数発ほど頬や腕の皮膚を抉る様に掠った。

いつきに様々な箇所から次々と襲ってくる痛みを耐えバネとして息氏を更に覚醒させると、ベレッタの銃口で相手を捕らえ力強く引き金を引いて発砲した。

「　　ッアッ」

「ガアッ」

俺が放った銃弾達は確実にテロリスト二人に命中した。そして二人はそのまま小さく声を上げた後、意識を手放したのか倒れてくれた。

完全に意識は手放して意識を失っている様で目覚める気配はない。それに俺が撃つたのは暴徒鎮圧用のゴム弾。

なので、殺してはないが手には初めて師匠以外の人間を撃つた感触が籠る。

結果こそは、違うがこれは人を殺したのとほぼ近い。

その感覚がやけに気持ち悪くてたまらなかった。

今でこのぐらいなんだ。実弾で本当に人を殺したら、もっと来るんだろう。

それが更に恐ろしくて背筋が凍りそうだ。

「東、大丈夫だ。行こう」

「う、うんっ。で、でも綾血が」

「掠り傷だ。放って置いても大丈夫だ。今は一刻も早く俺達もシエルトーに行くよ」

「……う、うん」

俺の頬や腕等あちこちでできた数々の掠り傷を見て東は、気遣い心配してくれただが。

俺は、心の中で東が気遣ってくれて心配してくれている事に感謝しつつも、半ば強引に手を離さない様離れない様強く握って手を引いて歩き出す。すると、東が握り返して着いてきてくれる。

束の気遣いや心配は、この状況下で非常にありがたいが、今は道草を食っている場合じゃない。

一分でも、一秒でも、早く皆と合流できる様にシエルターに向わなければならぬ。

それに今こうして握り合っている事で、先ほどの気持ち悪さとかはなくなった。

また、銃撃戦みたいなのは間違いなく起る。今はいいけど、いつまでもへこたれてはならない。

彼らの敗北を勝てにして、俺達は一刻でも早くシエルターに、この修羅道一端の未知《道》を突き進まないといけない。

覚悟は決めた。俺は、やっぱり何としてでも二人生きて束を守りきる。自分達のエゴを最後の最後まで押し通す、誰かを誰かの世界犠牲にしても。

しかし進む未知^道、その先は更なる修羅道が、血濡れる壮絶で悲惨な光景が待ち構えていた。

…

第四十八話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第四十八話 ？

今回は前回の続きみたいなものですね。

テロリストが学園に攻め込んできて、それに皆が巻き込まれる。

原因である綾君と束さんは別行動で、生死をかけるという感じでした。

ちにみにこのテロ事件の意味合いには

『篠ノ之束が一つの場所に留まると起る事件』というのがあります。なので、逃亡している原作では国内テロがないように見えました

いろいろと今回も破綻していますが、ご了承を。

自分では結構全体的に上手く書けたつもりなんですけどね……
どうも緊迫感が薄いというか何と云うか。

先生達の綾君達を別行動にした理由。

もっと細かくマシにしたほうがいいのかしら？

綾君も熱い漢としてかけていけばいいかな。

熱いっ！かっこいいっ！と思っただければ嬉しいですっ

ゴム弾にしたのはここでは話的に殺人をさせるほげがいかないという私の都合と

弟子にまだ殺人をさせるわけにはいかない。守る力がなんなのかを教えるために

一郎さんはあえてゴム弾にしました。スタンガンの奴の方なので……
気絶率死体のですが

そして今回は綾君の実戦での覚悟というのを見せたかったです。

口では偉そうにペラ回していますが、本当にそれを行動に移せるのか？

行動に移す　　というのを表現したかったです。上手く出来ていますかね？

言い分も納得できるようにしたのですが……

いろいろ無茶苦茶だww銃撃戦。

もうじきロボロになるけど。

緊迫感をもっとだしていな……

ツイッター、やってます

執筆状況やどうでもいいことや重要ような事を呟いているので

よろしければ見てください。よろしくですm()m

<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言うか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

この機会にツイッターしてない人はして、一緒にこちょこちょしようぜっ！

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだったの。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ！m()m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

というか、そろそろ本当にランキングに乗りたい。

この小説って需要ってあるのでしょうか？ 最近よくそう悩みます。お気に入りや評価は最近あがっていますが、感想や週間ユーク数が一向に上がらないむしろ、減っていて……ランキングにも中々、乗れない。ということはない、面白くない、こんな小説やめろって事なんです。

と思ってしまう。ダメですね（汗）すみません（汗）

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm（　　）m
これも何としてでも上げたい。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

今回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。 言うて下さいっ

次回 東アンチ本番。では、今宵の恐怖劇を始めようか
アドバース等をいただける嬉しいですよ！

ランキングニヨル

第四十八話 ？

綾視点

鳴り止む事のない数多の激しい銃声と、弾丸が壁とぶつかる激しい衝突音。

聞こえ響き続けるテロリスト、男達の激しい憎悪と敵意と殺意一色の怒声。

そして、向けられ増殖する、嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意。

事態は刻一刻、時間が経てば経つほど悪化の一步を辿っていた。確実に目的地であるシエルターには向かって、近づいている。

しかし、感覚としては、全然近づけていない、それどころか遠のいている気さえ覚える。

それに

「……ハア…ツ、ハアツ……」

「……綾」

壁に持たれかかっている隣から、俺を気遣い俺を心配してくれる束の不安そうな声が聞こえた。

束が傍にいる。

その事実にあ堵を覚えつつ、俺は荒くなつた呼吸を整える。

しかし、体はボロ雑巾の様にボロボロだった。

今少しだけ休んでいるこの通路に来るまでいくつもの銃撃戦があっ

た。

俺達が今進んでいる避難ルートを一別に割られた訳ではないが、ルートとルートと繋ぐ中間地点。

そこに差し掛かる度に必然と呼んだ方がいいぐらい偶然に、鉢合わせ銃撃戦となった。

その度に俺は、束を全力で守り、その銃撃戦が広がる戦場を踏破し、前のめりに求めた陽だまりへと回帰しようと《行こうと》、疾走して駆け抜けた。

いくつもの銃撃戦を踏破してきたが、幸いなことに致命傷等は受けてはいない。

だがしかし、いくつもの弾丸を掠り、全身にはたくさんの掠り傷があちらこちらに存在している。

なので、制服も全身掠り傷がある場所は裂け、微量だが掠り傷から血が流れ出し、ドロドロに汚れたボロボロの制服に血が滲んだ小さな水玉模様を描いている。

身体も、そして心もこの時点で既にボロボロだ。疲労困憊。

生身での銃撃戦の訓練を師匠から何度も受けたとは言え、実戦を経験するのは始めたのこと。

何度も銃撃戦を繰り返すのは、精神的にくるものがある。相手を撃つ実感、相手を撃つた実感、それらは中々慣れない。

だけど、そのうちこういう感覚や相手を撃つという恐怖は実績と経験を得る変わりに薄れていずれば消え、慣れてしまっただろう。

そう思うと必然的なことで仕方ないとは言え、怖いと思う。

それにここまで来るまで元からセットしてあった一本目のマガジンと予備の二本のマガジンの内、既に一本目を使いきってしまった。残りのマガジンは二本。ここから先もまた足止めを食らい、再び銃撃戦となるだろう。

足止めを受けた分だけ、時間は遅れ、銃弾も減る。

「行こうか」

「……もう、大丈夫なの？」

「ああ、ここで休んでいたらシエルターに着くのが遅れる。今は少しでもシエルターへ進もう」

「分かった」

頷いた束を見て俺は、束の手を決して離れない様に離さない様に強く握って、手を引き進み始める。

方向性としてはあまりよくない考えに浸りそうになり、思考を一気に切り替えた。

危うく、出来るのか？、なんて情けない疑問を抱きそうになった。

出来る出来ないの選択問題以前に、選択肢はただ一つ『出来る』のみだ。

今更、『出来るのか？』なんて情けない疑問を抱き、迷ったところで意味はない。出来ないのなら、上手く出来るように瞬間的にもするだけだ。

出来ない、なんて弱音はもう吐けない。“今”からはもう逃げ出させないし、決して逃げ出さない。

ただ、目の前の事を全力で解決し、乗り越えて全身全霊で駆け抜けるだけだ。

俺は束を守ると誓った。生きて束を守ると言った。この状況から二人一緒に生き残ると誓った。

その誓い達は今も胸に在り秘めている。変わらないし、変えない。

ただ無事に束を生きて守るだけじゃない、束を引いては今千冬が守ってくれているだろう皆を守る。俺と束《俺達》が、俺が。

それにこうして束と手を繋いでいるだけで。

手から束の温もりを、束が近く傍に居ること感じられて。

生身の相手に向かつて銃を撃つ事に慣れそうになる、少しずつ向こう側の人間となりそうなおかしくなりそうなおんな俺を束がこの手で繋ぎ止めてくれていると感じられる。

その証拠に束の方からも、また俺の手を離れない様に離さない様に握ってくれている。

非日常的な状況下でも、こんな風に温かい安らかな陽だまりの刹那を僅かながらにでも感じていた時だった。

「いたぞっ！」

「死ねエエツっ！厄災篠ノ之束っ！それに加担する神山綾っ！」

「貴様らは我々が殺すっ！世界を女尊男卑に、混沌に陥れた元凶っ！篠ノ之束、科学者崩れのエゴイストっ！貴様のような癌はすべからく切除されるべきだっ！」

突然、そんな怒声共にアサルトライフルの銃口が一斉にこちらを取られ発砲してきた。

俺は、慣れた手付きで束の腰に手を回すと、身体を抱きかかえ床を蹴り上げ、横の廊下へと飛び込み銃弾を回避した。まではよかった。

「！？」

オマケと言わんばかりに数十歩先、遠くに手榴弾が投げ込まれた。威力が届く範囲には俺達は居らず、回避充分な間合いはあるが、手榴弾は強力だ。

油断は出来ない。銃弾の回避に更なる回避行動を追加する。

銃弾回避で一度床に着いた足でその場を強く蹴り上げ手榴弾を回避する。

するとほぼ同時に手榴弾が激しく爆発した。

それにより巻き上がる爆発の風圧によって俺達は吹き飛ばされる。

吹き飛ばされ地面へと落ちる瞬間俺は、爆風の衝撃と地面と衝突して出来る衝撃から束を守るようにして、地面と衝突した。

「　　つウツ」

一箇所ではなく体全体に広がる衝突の痛み。

生身で受ける爆風に威力は想像以上のもので、危うく右手に持つ自動拳銃を落としそうになった。

衝突後の痛みの余韻で数秒の間を取られてしまったのか、溜まっていた疲労が込み上げ、更なる疲労感が込み上げてくる。

床とぶつかつたいくつもの擦り傷が染みて痛い。これが、実践でおこりうる一つの事か。理解しがたくて、理解できなくて、嫌になる。それに体が重い。本当なら一瞬で身体を起こさないといけないのに、上手く身体に力が入らない。

限界近くある疲労と衝突の痛みが合わさったダメージだ。普通の人間なら、今頃意識を失ってもおかしくはないが……今の俺に気を失っている様も暇もない。

この思考の後すぐさま、身体に活と力を入れて、半ば無理やりにも身体を起こし体制を整え、次に束を起こす。

「大丈夫？怪我はない？」

「う、うん……綾の方は」

「大丈夫だよ、今ので怪我はしてない」

確認の為聞いてみたが、逆に心配そうな顔で聞かれてしまった。

俺は、これ以上に不安に思わさせず心配もさせないように微笑を浮かべ言ったが、逆効果だったようで更に心配されてしまった。東の不安や心配を拭って上あげられないのが、苦いところだ。

けれど、東の言葉通り怪我はしておらず無事だ。

何かあると言えば、些細だが精々東の制服が先ほどの爆風で巻き上がった砂埃で少し汚れているぐらい。

他は何もないようで一安心しつつも、今は

「……………」

銃をいつでも的確に構え撃てるように用意し、耳を済ませる。

すると、遠くの方からこちらにゆっくりと向かってきているテロリスト達の足音が聞こえた。

距離はまだ少しならあり、呼吸を整える時間はある。

先手必勝。呼吸を整えつつも腰を低く低く落とした体制のまま、行動に移ろうとする。

「……………よし、迎えうつてくる。危険があればその扉が開いている教室に隠れて、絶対に着いて来たり出てきたりしたはダメだよ」

そう言い聞かせるように言って俺は、テロリスト達が歩いているだうる通路に出ようとする。

相手は三人。ここに来るまでに一度踏破した銃撃戦の時にも相手したテロリストの数は三人だった。どうやらテロリスト達は、三人一組の小隊編成が俺達の殲滅に当たっているらしい。そんなことは今はいい、さてやるか。行動に移ろうと初めの一步を踏み出そうとした時、着ている制服の上着を後ろから掴まれ引つ張られた。

誰かは決まっている、制服の上着を掴み引つ張っているのは束。事態と状況が状況だけに、つい『今は構っている余裕はないっ！』等ときつく少しだけ怒鳴る様に言いそうになる。だがしかし、言えなかった。顔だけ振り向いて後ろの束を試みると、心配そうなこの上なく不安そうな表情を顔一杯に浮かべていた。

「行っちゃ……ダメ、だよ綾」

「いや、行かなくちゃならない。速やかに彼らを踏破して、この避難ルートを進まないでシエルターには一向にたどり着けない」

「だけど、今のまま出て行ったら綾死んじゃうんだよ！なら、このまま逃げた方がっ！」

「逃げてどうなる」

「うっ……」

俺の言葉の意図を痛いほど理解して、痛いほど分かっている束は、暗い顔をして言葉を詰らせる。束の気持ちも不安は分かるし、俺を気遣い心配してくれる心もありがたい。

このおかしい状況にまるでなるべくしてなった状況下で、束のそん

な思い達も束と一緒に俺を、陽だまりに繋ぎ止めてくれている。しかし、それはこの瞬間においてだけは無用だ。

今更、逃げたところでどうなるというんだ。

敵は、テロリスト達は俺達を殺そうと向かっているんだ。

そんな連中から逃げるなんて事をしたら、背中を見せているのと変わりなく、自殺する様なものだ。

仮に上手くこの場かに逃げ出せても、また追いつかれてこの状況へと戻るし、引けばこの避難ルートを進む事は出来ず目的地であるシエルターに辿り着けない。

だったら、前のめりにでも進むしかない。彼が自分達の戦場《日常》を汚されると思っているのなら、それは俺達も同じ。

今こうして、長い長い苦労という名の戦場を越えた先に束と掴み味わいつくしている愛し求める刹那（陽だまり）を毀され、奪われようとしている。

なら、前のめりにでも、前へと進んで、彼らとの銃撃戦《戦場》を越え踏破して、その先にある再びの愛し求める刹那（陽だまり）へと還る（進む）しかない。

狂おしいほどその日常を求めている、『俺の日常を』。だからこそ、目の前のテロリストである彼らを倒し越えなければならぬ。故に、今更逃げる事なんて出来ない。

だから

「俺は行く、俺が束を守るために。皆を守るために。生き残って俺達の刹那の陽だまりを取り返してもう一度迎えよう、束」

そうとだけ言うとな場の安全と束の安全を堪忍すると、束を半ば無理やりに振り切り、テロリストが来るだろう通路に駆け出す。

「ま、待ってっ！綾っ！死んじゃうっ！死なないでっ！行かないでっ！綾っ！」

振り切った後ろで束から悲痛な声の制止の言葉達が聞こえる。

だけど、今は構っていられない。この時だけは、申し訳ないけど束を無碍にしてまでも行かないといけない。

時間が惜しい……時間が経てば経つほど、状況は確実に悪化していく。

だからこそ、これは今のこの最悪な事態を無事に收拾して、脱却せねばいけない。

「うおおおおっ！」

「なっ！？突っ込んで来るっ！こいつっ、特攻っ！死ぬ気かっ！？」

「うるたえるなっ！相手は所詮学生で銃の腕も素人同然だっ！構うなっ！殺せっ！」

「死ねエエツ！罪人がっ！」

銃を構え的確に敵を捉えながら、相手に向かって全力俺は駆ける。

その突飛な俺の行動に、テロリスト達は驚いていたが、すぐさま我に返りアサルトライフルを構え発砲してくる。

向かってくるいくつもの弾丸。それを俺は全神経、渾身の力を振り絞って、ギリギリで回避する。

死ぬつもりは毛頭ないので特攻ではない。身を危険に犯してまでも距離を詰める必要があった。

テロリストと束の距離を詰められた今。確実に相手を仕留める必要がある。

大した射撃の腕のない俺には、遠くから確実に相手を仕留めっ自信

はない。一発でも外して、それが大きな隙となったら終わりだ。だからこそ、こうして身を危険にさらしてまでも距離を詰めて、確実に当て仕留められる距離まで詰める必要があった。

しかし、かなり距離を詰めた今。

距離を詰めた分だけ、自分の身の危険度は上がり、必然的にいくつものアサルトライフルの銃弾が当たりそうになる。

いつまでも、全神経、渾身の力を振り絞ったところで、ご都合主義よろしくいつまでも紙一重で銃弾を避けるなんて、そんな化け物じみた事俺には出来ない。

いずれ紙一重の回避はもたなくなってきた、いくつもの銃弾が頬や腕等を掠り。そして

「グウツ！」

銃弾が左肩と右の二の腕に当たる。

命中し、銃弾が血肉を裂き、深く貫通しているのが分かる。

当たった個所から全身を劈く様に走る激痛。

痛い……初めて体感する痛みだ。

初めて体感する痛み、激痛に意識を暗転ブラックアウトしそうになるが。

「ぐうおおおおオオ」

力一杯怒声を上げ、暗転ブラックアウトしそうになる意識に活を入れ、俺は銃を撃つ。

銃口、射軸は確実にテロリスト達を捉えている。外さない、確実に当て確実に倒す為に、手傷を負ってまで距離を詰めたんだ。絶対に当てる。

それに不思議と痛みは発砲の瞬間なかった。本当なら、今も痛みは尾を引くように続いていて、発砲の衝撃を受けもつと痛むと思って

いたが、不思議とこの瞬間だけは痛みはない。
だからこそ

「ギツッ」

「ガアッ」

「グハアッ」

俺は倒したと彼らを踏破したと確信する。

俺の銃弾を浴び、気絶して倒れるテロリスト達。

完全に気絶している様で、場はただ静かに沈黙している。

一先ずこの場は終わった……そう思い、少しだけ警戒心を強めていた
気を緩め休めると。

戦闘の雰囲気から抜け、現実に戻ると精神的な疲労と肉体的な疲労
が襲ってきて。

異常分泌されていたアドレナリンが一時的に切れたのか、忘れてい
た銃弾の傷口が傷む。

そのまま疲労や痛みで膝を付きそうになるが俺は、体の鞭を撃って
束の元に戻る。

「おま、たせ……」

「あつ、綾……」

なるべく少しでも心配かけないように笑みを浮かべて言ったが、束
を俺の名前を呼び、俺を見るなり「の匂が告げられなくなった様に
言葉を失っていた。

まあ、無理もないか。
生きてはいるが、束の元から出て行った時よりも、掠り傷は増え。
そして、左肩と右の二の腕には銃弾によって出来た傷がある。
そこからは今も、血が直線を描いて地面へと滴り落ちている。

誰が見ても、今の束の様に二の句を告げられなくなっ言葉を失うだろう。

自分でも分かっているけど、俺の今の姿はそれ程酷い。

「それ……」

「ああ、少し無茶してね。まあ、軽症だから大丈夫だよ」

強がってみたものの、軽症だなんて冗談もいいところ。

銃弾で受けた傷に軽症はまず、基本的でない。それに二発食らっている時点で重症だ。

肉を切つて骨を絶つ、なんて戦法で挑み無事撃破できたのはいいけども、後が問題だった。

心配させないようにしても、こんな姿じゃ返って心配がらせてしまう。

必要な事だったし、仕方ないないけども。今の束を見ると、後々になつてこの戦法を選択したことに反省してしまう。

もっと、上手い戦法はなかったものかと。

今の束は、目尻に涙一杯浮かべ、物凄く不安そうな心配そうな表情をしていて、束は声を荒げた。

「何が大丈夫なのっ！？そんな重症まで負ってっ！」

「……」

目尻に涙一杯浮かべ声を荒げて言う東に俺は何か言い返すことも、言う事も出来ない。

「綾はいつも本当に無茶ばかりするつ。今回は生きていたからけど、もしかすると死んでいてもかもしれないだよっ！？分かってるっ！？」

分かっている。分かっている……つもりだ。

今回の今の様な事がいつくら必要で仕方ないことだったとは言え、無茶の度合いが過ぎていた。

重症で済んだもの今回は本当にまたまた運がよかつただけだ。

ご都合的な運に守られてなかつたから、距離を詰めていたあの時、確実に死んでいた。ただそれだけのこと。

自分の浅はかさに嫌気が指す。後悔はしていないが、反省しても反省しきれない。

すると東は、少しずつ涙を流しながら言った。

「もっ……やめよう」

「何を」

「逃げるのを」

「死ぬつもりか？」

「綾が私を守ってボロボロになって傷ついて、もしすると死んじやうかもしれないんなら。私は彼らに殺されて死んだ方がマシだよ。」

それに私はこんな事を起こしてしまった原因でもあるんだから」

束はそういった。

何言ってるんだ、こいつは。

俺が束を守って、ボロボロになって、傷ついて、もしかすると死ぬかもしれないから、自分が殺されて死んだ方がマシだと？

今更何と比べてやがるんだ、この馬鹿兔は。こうなる事は、束も百も承知でなはずだ。だったら今更なんでこんな事を言うんだ。有り得ない、有り得ないだろが束。

「なんでそんなにこと言うんだ」

「私は……もう、嫌なの。こうなるのが仕方ないのは分かってるし必要な事なのも理解してる。だけど、これ以上綾が傷つくなんて嫌なんだよっ！」

「だから、死ぬか……ふざんけんよ、馬鹿」

俺は抑えが利かなくなっただけで怒鳴って言った。

こいつの言っている意味や思いも分かる。

俺が束なら、いくら必要で仕方ないとは言え、大切な人が傷つき最悪死んでしまうなら、同じ様に自らの命の絶つ事を選択する。

それは理性的な合理的な問題じゃない、感情的な問題だ。結局、合理的な事を言っても最後はその合理的な感情論、感情に左右される。それにこの束の選択が自己犠牲できるものだとしても、自己満足じゃないのは分かっている。

だけど

「逃げるのか、お前は」

「」

「現状から、自分達の自分のやった事から逃げてんじゃねえぞっ！」

「……っ」

「確かにこうなった原因は俺達に、ISを作った束にある。だから、死んで事態を收拾して、彼が言う罪を死をもって償う。ああ、素晴らしいな、潔いな。……甘ったれんなよっ！」

「」

「死んで罪を清算する、死んで終らせるなんて本当の屑野郎がすることだっ！俺達は生きなきゃならないっ！世界をISによって変革させた責任を俺達は生きて取らないといけないっ！」

「」

「何のお前は、死んで総て終わりにする。それこそ最も無責任で、逃げてるってことだろうがよっ！」

俺達はISによって世界を変革させた。

それにより、世界はいい方向にも悪い方にも等しく変革した。

それにより様々な責任が生まれた。その責任の一つが、今回の事だ。だったら、俺達はその変革の責任を取らなければならない。生きて、行き続け。

死んで責任を取るなんてことは卑怯だ。

確かにそれは聞こえがよくて、潔くて、終わりがよくなるのかもしれない。

だけど、死んだらそこまで。何も出来ない。次に何かあっても何も出来ない。

だからこそ、死んで責任を取るなんて卑怯で逃げているのと変わらない。

「束は『逃げない』だろう。だったら、逃げるな。前へ進もう。一人じゃない、俺がいるから二人で前へと進もう」

「
」

「俺は死なない。例えボロボロになって傷ついて死にそうになっても倒れてもまた何度でも立ち上がってやる。生きて束の傍に永劫いる。それに俺がボロボロとかになったのなら、その度に俺を守ってくれ。俺は束を守るし、頼る。違つかっ」

首を振る束。

束は既に泣き止んでいて、俺が何を言いたいのかわかっている様だ。

「なら、勝手に一人で死のうとするな。絶対束を殺させない。俺も死なない。俺は一人じゃ、束なしじゃ生きれないだ。束が必要だ。だからこれからも、二人で一緒に生きていこう」

「うん、そうだね」

「だろ。それに千冬とクラスの皆と約束しただろう。生きてシエルターに行く。だったら、約束を守らせてくれ。約束を二人で守ろう」

俺を嘘つきなさせないでほしい。束を嘘つきにさせない。俺達は嘘つきにならない。

テロリストだが、世直しだが、正義づらした批判野郎アンチだろうが知るかそんなもの。

彼らが、彼らの日常を破壊したと行って、俺達の日常を破壊して、奪うなら、俺達の日常がどれだけ尊いものか思い知らせてやる。

いらないんだ、もう旧世界の様な戦争も戦いも。そして、嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意、も。

陽だまりを、愛し続ける刹那を取り戻す為なら、どんな辛い事だつて乗り越えてやる。

束とも共に。二人一緒に生きて。

アンチモノや、彼らがやっていることなんて所詮、聞こえのそれらしい屁理屈を捏ねている子供の我儘だ。俺達のやったことと何ら変わりない

ゆえに愛を持って、総て破壊してやる。そう思うすら、総てを総てではないが破壊して汲んで解決してやる。

支離滅裂気味だった束は、一瞬だけ目を閉じて開けると、気持ちの整理が済んだのかいつもの束の表情になっていた。

「ごめん、少し取り乱しちゃった。うん、私は死にたくない死なない。綾を殺させない。二人生きて、生き残ってシエルターに行く。生きてこの大元の原因の責任もちゃんと取り続ける」

「それでいいんだ。それに重症の大怪我の一つや二人は男の戦いの勲章だ。それぐらいかっこ付けさせてくれよ」

「変だよ、そんなかつこうの付け方は。ふふっ、でもそんな変なかつこ付けな綾も大好きだ。愛している。ふふっ、あははっ」

「笑う言うなよ」

飽きたれ様に、けれどそれでいて楽しそうに笑いながら話す東。

こんな展開やこんな事している場合じゃないんだけど。まあ、いいか。いい気分転換となった。

ストレスも怒鳴った事で束には悪いと思うけど、解消できたことだし。

それに入っていた入らない気も抜け、精神的な疲労も楽なものとなっており、肉体的な疲労も幾分か楽になっている。

お互いこれで今一度、いろいろと確認とか改めなおせた事だし。お互いの気持ちも理解し合えた。

これでまた、進める。この状況を踏破、脱却して、刹那の陽だまりに向かつて。

「綾のおかげで目が覚めた。ありがとう」

「どういたしまして。それじゃあ、先に進もう。二人で生き残る。二人一緒に生きていこう、東」

「うんっ！」

笑みを浮かべて頷き、満面の笑顔を見せてくれる。刹那を、陽だまりを、在りし日のものにはしない。この笑顔も失つたりはしない。

例えこの先に、この事件最後の山場と“死”が来るのが決まっていたとしても。

…

第四十八話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第四十八話 ？

ヒヤッハアーツなMAXハイテンションな時に書いたので。

何と言うか、いろいろと無茶苦茶ですが、何卒ご了承を。

出来た時は上手くかけたと自負していたはずなだけども……
よろしければ、オブラートに包んだ指摘チツクなアドバイスを頂けると嬉しいです

今回も前回に引き続き戦闘・銃撃戦でした。

と言うか、綾君チートすぎるエ……

前回ぐらいに超人的な事は出来ないとか言いながら、今回も銃弾を避ける。

しかも、あんな割と近い距離で……無茶苦茶だ、反省。

だけど、銃弾を二発くらいました。戦闘ではここが必要なポイントですね。

綾君だって、所詮は人間なのだとアピールする為に。

行動可能な重症ですが、本当はここで死にかける予定でした。

この話で重要なのが束さんとの掛け合いですね。

束さんをもっと成長させるために、今回の話は必要でした。

心に迷いが生じ、心が折れかける束さん。

今回のあそひこでは束さんの弱さを表現したかったのです。

いくら、覚悟を持っていようと現実に起きたらどうなるかというのを。

これも最初は上手くかけたと自負していたけど、今思うと何か今一つだな。

モチーフとしては螢ルートの螢の心が折れるシーンがモチーフのつ

もりです。

ここはもつと深くかい、もつと弱く書いたほうがよかったかな……？

でも、それじゃあ心が折れかけるんじゃないやなく、折れる。

ちゃんと還元に折れるのは後々だし。

長くなって、読んでいる側につらいおもいをさせると思うし……
短く簡潔に表現したい事をまとめたのですが、いかがでしょう？

そして最後に綾君。

これはおもつきり螢ルートの練炭をモチーフにしました。

強くカッコイイ男、というのが今回の綾君のテーマの一つで。

弱っている束さんを支えるのかも今回のテーマでした。

んだけど、言っている事がこれでいいのか？ カッコイイのかな？

熱く書いているつもりで、決まってるのが一番かつこ悪い。

薄い気がするんだよな……さて、これでいいものか？

オブラートに包んだ指摘チックなアドバイス頂けると嬉しいです。

よろしく願います。

ツイッター、やってます

執筆状況やどうでもいいことや重要ような事を呟いているので

よろしければ見てください。よろしくですm()m

<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言うか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

この機会にツイッターしてない人はして、一緒にこちょこちょしようぜっ！

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としてでも乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだったので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ！！m(┌┐)m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

というか、そろそろ本当に本当にランキングに乗りたい。

それと逆お気に入りユーザーが60人に達。

小説のお気に入り件数が900を突破。めでたいですねっ！ありがとうございますっ！

落ち着いたから記念にノクターンでもまた書こうかな？なんちゃってw

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(┌┐)m
これも何としてでも上げたい。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願います。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

次回は本当に束アランチされる側。難しくなりそうだ。アドバイスよろしく

第四十九話 ?

綾視点

随分と前に千冬とクラスの子達と別れ、大分時が経っている。

学園に攻め込んできたテロリスト達と、学園と生徒を守る為に死力を尽くして行動する整備士隊。

両者が戦い校舎の各所から聞こえてきていた、激しい銃撃音の数は少しずつ減ってきている。

どちらが生き残っているのかは分からない。だけど、このテロも確実に収束へと向かっている。

生き残っていてほしい。この思いが押し付けがましいエゴだと言うのは分かっているが、それでも整備士隊の人達には生き残っていてほしい。

彼らと過ごし共にした一時も、彼も、失いたくはない俺と束の刹那の陽だまりの一部なのだから。

そして斯く言う俺達は、ちやくちやくと確実にシエルターに向かっている。

千冬達と別れ、別ルートの避難経路を進みだした頃よりも確実に向かっており、後もう少し一頑張りしたらシエルターに着くところまで来ている。

だがしかし、進行速度は先ほどよりも遅くなっている。今通過している通路に来るまでは幸いな事に戦闘、銃撃戦はなかった。

だけど、先ほどの激しい銃撃戦で左肩と右の二の腕に銃弾を浴びた不可でのダメージで、どうも何時もの様な素早い行動が出来ない。なので確実にシエルターには近づいているものの、進行速度は遅く、大分遅れているシエルターに着くことはもう確定していた。

「……っ」

「綾、大丈夫？」

「ああ、結構辛くてギリギリだけど、まだ何とかいける」

隣の束が心配そうに声をかけてくれ、俺を気遣い、強く手を繋ぎながらも俺を支えてくれる。

深手のダメージが尾を引く様に続いていようとも。

今も体に鞭を打ち活を入れ、無理や無茶しようともシェルターへ先へ進まなければならぬ。

そうしたことを束は分かってくれていて、俺の思いをしつかりと汲んでくれる。

故に今こうして束は、俺の身体を、ボロボロで酷い状態の俺を支えてくれる。

そうした些細だが、この状況下では何よりありがたく“尊い刹那の陽だまり”に安堵し余計な分も張り詰めている気を抜いて落ち着いていられるからこそ、まだ冷静さを保っていられる。

「まだ、インカムはジャミングされていて、整備士隊の人達と連絡取れないんだよね」

「ああ、今だ連絡は取れない。不便だ」

「仕方ないよ。こういう状況で、そういうものなんだから」

まあそうだねと頷き、俺達は更に道を進む。

先生から別れ際の貰ったインカムは今じゃ耳に嵌っているただの耳飾となっていた。

ジャミングをされている状態で、役目である通信が出来ないでいる。いくらいろいろな手段を試してみてもずっと無音のまま。

その為、源さんを初めとする整備士隊の人達と通信できないでいて、俺達以外の詳細、他の場所の現状や状況を把握出来ないでいる。

それ故に何処か更に不安を煽られる。分かるはずなのに分からない、いつものあの忌避とは似て異なる感覚を味わうだけに。

だけどそれと同時にこの状態もこの感覚も、もうすぐ終わると俺の感が告げている。

テロ、この事態は収束に向かっている。そして校舎で起っている激しい銃撃戦の音も減って止んでいる。

その為、次第にジャミングによる通信妨害は解除され、通信が出来る様になるだろう。

この様に

『あ、あ、今通信妨害を解いた。今ところは傍受される心配もない。おいっ誰か聞いてんなら出やがれ』

ある意味ちよつとした奇跡。

そろそろ繋がるだろうと思い、耳に付けたインカムを弄っていると、何十時間ぶりに聞いた懐かしの声。

千冬達と別れた後、束以外に聞いた“仲間”の声。上手くはつきりと表現できないけど、何と云うかこの声が聞けて懐かしい様に嬉しいような気持ちになる。

そして、俺は慌ててインカムの通話ボタンをオンにして通信に出る。

『も、もしもし？ 源さん、俺です。綾ですつ』

『綾かつ！？ということ、嬢ちゃん束も一緒か。別れて別ルートで避難したとは聞いたが、どうやら生きてるみたいだな。無事か？』

『ええ、ボロボロですけど何とか生きてますよ』

『そうかい。それだけ言えるのなら無事な様だな。今何処だ？』

俺は源さんに今の場所を通信で知らせる。

数言交わしたただだが、不思議と束と味わうのとは別の安堵を味わい感じる。

源さんが生きていた。声からして源さんも無事みたいで、元気そう
だ。

『よし、今から向かう。お前達はそのまま進め、その先で合流だ』

『了解です！』

『おっ！いい返事だ。では、通信終了』

そして二の句を告げるまもなく源さんの方から通信を切る。

別に二の句を告げるつもりも予定もなかったのでこれでいい。
むしろこれからだ。

俺達の目的に更なる目的が合わさる。これにより更に俺達は前へと
進まないといけなくなる。

無論、俺はつもりだし、束も

「進もう、綾」

「ああっ！」

無論そのつもりだった。

束の言葉に俺は頷き、歩く速度を気持ち一つ分ぐらいに速める。

別に歩く速度があがったわけじゃない。むしろ、今の俺はボロボロで深手を負い。

端から見れば、足を引き摺っている様に見える、歩く速度は遅く、束と支え合いながら歩いているんだ。今の俺は、弱々しく見えるんだろっ。

そう端から見えても構わない。だけど、少しでも早く歩けるようにと前へ進める足に想いを込める。

後一頑張りでシエルター目的地に着けるんだ。だったら、もう一頑張りして少しでも早く着けるにしなければならぬ。

その為にも気持ち一つ分でも歩く速度が早くなる様に努める。

それに、そんな俺の思いを察し理解してくれているのか。

束も俺に合わせながらも少しでも早く着ける様にと同じく気持ち一つ分歩く速度を早くしている。

束の瞳は、希望に包まれている様だった。むしろ、この先、この事態を乗り越えた強い意志を灯している。

まだシエルターに着いてはおらず、これから戦闘、激しい銃撃戦に襲われ合うだろうが、それでも束と同じく希望は捨てられない。

“頑張れば報われる”なんて、そんな都合のいいそれは“俺と束”には絶望的に適応されなくて、皆が受ける祝福とは別の絶望を身に痛いほど感じたけど。

それでも頑張らなければならぬ。

頑張ったら自然的に報われるなんて自動的なものじゃなくて、俺と束は頑張って分だけ、報いを“幸福を刹那の陽だまりの永遠”を勝ち取りに行くんだ。

けれど、それを簡単に勝ち取れる程、現実という今この時はそこま
で甘くは、ご都合的ではない。

何処までも現実で、何処まで残酷で無常極まりない。

まるでこの一時、俺の人生でこれまで味わい体験した事がないほど
危険で死と憎悪と憤怒がこの事態を包んでいる事態が俺と束を試す
様に。

そしてまた、ISという新しい理が流出し、新生した新たな世界も
座の主《俺達》を適格者として試す様に本気で殺しにかかって来て
いる様で

「見つ、けたぞおおおおつ！罪人共がアアツ！！」

「死ねっ！死に、絶えろっ！」

突然、全方の曲がり角から再びテロリストが男二人が現れた。

男達は、ここに来るまで銃撃戦を突破ないし、逃げてきたんだろう。
彼らが来ている軍服に似た戦闘服は、到る所が裂け、銃弾が貫通し
たらしき後があり、血に濡れている。

その推測は当たらずといえども遠からずな様で、俺達を捉える目の
色は今までのテロリスト達よりも、憎悪と憤怒に染まっている。

突然の事に俺は驚いたが、驚いたのと同時に透かさず回避行動を取
り、束を抱きかかえて隣の方の階段方へと飛び込み銃弾を回避した。
そこは彼らからは死角のなっており、壁を背にして呼吸を整え、い
つでも出て迎え撃てるようにする。

後もう一頑張りつてところなんだ。直前のこんなとるでは諦められ
ないし、諦めない。

俺は言葉を発せず、手で束にここで待っているようにと指示し、そ

れを束が了承したのを確認すると、その場で助力を付けこの場を出て迎え撃つ。

「死ねエエツ！」

「倒れるっ！ 蛆虫風情の分際がっ！」

テロリストの手に持つアサルトライフルが火を噴く。

いくつも放たれる凶器の銃弾。彼らは冷静な判断力こそは、憎悪と憤怒で失われているみたいだが、それでも腕は落ちてない。

むしろ、憎悪が憤怒が後押ししているのか命中率はいい。的確に急所を鋭く狙って銃弾は向かってきて、俺の身を襲う。

深手を負い疲弊しきっている今の俺の身体では上手く立ち回れない。俺を殺そうと、俺を殺して束を殺そうとする、あまたの凶器の弾丸が身を襲い。

新たな深手で、完全な着弾を負うことこそは免れたが、深手を負った疲弊して身体では銃弾を総て避けきることなんて出来ず。

銃弾が俺の皮膚や血肉を、深く抉る様に切り裂く。

「　　ツアアアアツ！ツ、誰が死ぬかよオっ！」

何度味わっても、何度体感しても慣れない銃弾の激痛に意識を暗転フックアウトへと持っていかれそうになるが。

奥歯をギリツと音を立てながら強く食いしばり、暗転フックアウトしそうな意識を踏ん張らせ、銃口で彼らを捉え、

ここぞと言わんばかりに今の使っているカートリッジの弾数をほぼ全部使い切る様な勢いで、銃弾を放つ。

「ガアツ」

「ガア、ハアツ」

銃弾を命中させ倒れる一人目。

一人目は気絶させて倒した。

だけど二人目は、不肖を負いながらも、呼吸を荒げ怒りに燃えた目で俺を捕らえていた。

「ぐ……ッ、我らに齒向かう気がっ！あまつさえまだ世界を汚すというのかっ！」

「ツウアツ」

銃弾一発で再び左肩を撃たれる。

貫通した場所は前の場所とは違うけど、やっぱり激しいほど痛い。

さつき以上に、意識を暗転ブラックアウトしそうになる。

視界が霞む、だけど倒れられない。俺は、俺が最後に残してきた束モノを守らなければならない。

激痛を堪え、右手に持つ残り一、二発ぐにいなら銃弾が残っている拳銃を、今一度残る一人のテロリストに向けようとす。

「許さんぞっ！死ぬっ！くたばれっ！」

だけど、一步遅かった。

俺が拳銃の銃口で捕らえるよりも先に、相手の方が一步早く俺を捕らえている。

相手の銃口は俺の急所を捕らえて、絶対に離さない。

俺が拳銃の銃口で相手を捕らえた瞬間、俺は凶弾に倒れている事だろっ。

だからと言って今更、回避行動は取れない。

あまりにも時間がない。刹那の間すら、銃弾を避ける暇はない。

撃たれ倒れてしまう。

俺は、そう情けない事確信してしまった。

倒れられないのに、倒れてしまう。

嫌だ、こんな所でしたくないっ！

何より、束を誰にも気づけさせも殺させもしないっ！

屈辱に塗れようが、俺は束と刹那の陽だまりを立っていたい。

瞬間、引き伸ばされていた刹那が弾けた。

「ッ」

廊下に木霊する銃声。

銃弾が着弾し、血肉を貫き、吹き出る夥しい量の血。

地面へと体が堕ち、血が体の周りに広がる。

「ガアアッ」

「よおっ、今のはちと危なかったな」

そう、今倒れ、気絶ではなく息絶えたのはテロリストの方。

テロリストがいた場所の向こうに、手にM4A1を持って構えている、笑みを浮かべている源さん。

テロリストよりも先に撃ち、源さんが倒した。

間一髪、助かった。

ご都合的な運にまた助けられた……そのことに言い表せない不快感を感じるが、それでもそれ以上に助かったという安堵に包まれる。

死ななかつた……それについてはよかつたし、これでまた生きて束と先を進んで還れる。

だけど、俺が生きているという事実があるということは、生きている代わりに目の前で地面に倒れている彼が死んだという事。

彼は死んだ今も尚、微量だが血を流しながら、倒れ死んでいる。

人の死を見るのは初めてじゃないけども、こうして直接的に生々しい現実の人が死ぬという光景を見るのは初めてのことだ。

それは俺が生きるために必要な等価交換に似たモノで、仕方ないことで必然的な事だけだ。

何と言うか、この感じは初めて他人を撃った時の嫌な感覚と似て、気持ち悪くてなれない。

今はこう正常に思えるけど、こういうことが度々続けばその内こういう感覚も消え失せて、慣れてしまふんだろう。

それもまた仕方なく、必要で必然的なことだとは言え、恐ろしい気がする。

源さんは、辺りにまだテロリストがいないか確認すると。

いないことを確認し、構えていた銃を降ろし、こちらに向かってきた。

「生きてはいて元気そうだが……酷いありさまだな」

「ははっ……でも、怪我の一つや二つは男の戦いの勲章でしょう」

「そうだが、今にも倒れそうな癖によ、ガキが強がんなや。ほら、掴まれ」

強がってみたものの、今の俺は深手に深手を負い、ボロボロで疲労困憊なんて当に振り切っていた。

そんな俺の強がりを見抜いて、呆れたように苦笑して源さんは俺に捕まるよう手を差し伸べてくれる。
源さんの好意に甘えて、俺は差し伸べられた手を掴み玄関に片方の肩を担がれる。

「……………あ、ありがとうございます」

「たつく、一人で無茶しやがって、ほら嬢ちゃんだってメチャクチャ心配してんじゃねえかよ」

「……………あ」

源さんに言われ源さんの目線の先を負う。

視線の先には、何処か少し暗い心配そうな表情を浮かべた束がこちらへ駆け寄ってきた。

束は、駆け寄ってくる何処か少し暗い心配そうな表情そのまま、俺の身体に触れ労わってくれる。

「綾……………また」

「悪い。また無茶してしまった」

「……………つ。もおつ、馬鹿つまた無茶して。でも、生きててよかった」

本当は今にも感情に任せて言っただけの思いをぶつけたかったんだろうが、ここはその思いをぐっと噛み締めて堪えてくれ、束は冷静に努めようとしてくれて。

叱る様に言っただけ、俺が今生きている事を一番に考え思い安堵している表情を浮かべている。

束に身体を労わってくられる様に触れられ、体の些細な動きが傷口に染みるが、これはこれで束が、俺が生きている事を実感されてくれる。

これを最後にしないとな。

何時でも束を不安がらせ続けていては、男として情けないし。

それに深手を負った疲労困憊の今の状態では、もう一回たりとも無茶は出来そうにない。

無茶を次こそすれば、力尽きて終いだ。

すると、俺と束のやり取りを見ていた源さんは笑みを浮かべながら、両手で俺達を労うようにポンポンっと頭を軽く叩くように撫でてくれる。

「げ、源さん？」

「いや、お前も嬢ちゃんもよく頑張った。お疲れさん、よく頑張ったな、偉いぞ」

「……………あ」

「……………」

笑みを浮かべ浮かべながら俺達の頭をポンポンっと叩く様に優しく撫でてくれる源さんが言った言葉に啞然としてしまう束と俺。

別にこの言葉が聞きたくて、この一連の事態を死に物狂いで乗り越えてきたわけじゃない。

俺は俺の為に、こんな所で死にたくないが為に、そして何より束だけの為に、束を誰にも傷付けさない為に、俺はこの一連の事態を死に物狂いで乗り越えてきた。

だけど、この言葉を聞けて、ずっと無意識に張っていた部分の気がゆっくりとほぐれて行く。

こんな風に思っていて反面、この言葉が心の何処かで少しでもいいから聞きかたつたんだろう。

心が酷く安堵しているのを感じている。

安堵している場合じゃないのにな……でも、この刹那だけはこうしていいのかもしれない。

束だって、親しいそれこそ俺やついでに師匠以外の男には触れられたら嫌なはずなのに、今は嬉しそうに安堵した顔をしている。

「頑張り続けるなどは言わないが、少しは気を抜け。そんな調子じゃ、本当にガタが来るぞ」

「分かっています」

「はい」

「なら、いい。ここから先は俺がシエルターまで護衛する。だから、少しは安心しとけ。先に進むぞ」

頷いて俺は源さんと束に支えられながら、俺達は前へと進み始める。源さんの言葉通りに心は安心させつつも、まだシエルターに着いてないので気を抜けない。

もしも、万が一の事態に備えて心の準備や覚悟はいつもでして、拳銃のマガジンを最後の一つへと入れ替えた。

そして進み始めながら俺は、ずっと気にかかっていた事を源さんに聞いてみた。

「そう言えば、源さん。他の場所の状況、他の整備士隊の人達はどうなっています?」

「各所での戦闘は終わっている。テロリストはやも追えず殺したり捕らえたりしている。隊の連中は怪我人こそいるが、全員生きている。隊はほぼ全員引かせて、橋元を初めとする数人がシエルターにいる生徒達を護衛中だ」

俺の問いに答えてくれた源さんの言葉を聞いて安心する。

やっぱり、各所での戦闘は終わっていた。

それに整備士隊の怪我こそはしていても、全員生きている。

よかった……それにシエルターに先についているだろう千冬達の護衛はいる。

もう危険な目に会う事も可能性もなくなった。一安心する。

そして俺はもう一つ別に違う事を思考する。

だけど、この事態が起り、ここまで事態が悪化したのは。

やっぱり、いろいろな意味で注目の目を集める“束という存在をIS学園ないし、一つの場所に留めてしまったから”なんだろう。

一つの場所に留めてしまえば、政府や各国にしてみれば居場所を直ぐ把握でき、

政府直轄のIS学園に置いておけば、人権という点を配慮して学園生活を遅らせつつ、簡単に監視が出来る。

政府や各国にしてみれば利点は少ないが一つ一つが重要度の高い利点だが、その一つの場所に留めたのが仇となった。

ISを憎むもの、束を憎むもの達にしてみれば、束が一つ場所に留まっていることでその対象のいる場所を態々探す必要もなく、

監視されているからこそ、いなくなれる心配もなく、準備を進めて強行なりで束を殺しに行く事が出来る。

そついう狙われやすく事態を起こしやすい要因があったからこそ、

こうして事態が起ってしまった。

やっぱり、一つの場所に留まっていたのは間違ってもあって。

結局のところ、本当のテロリストである俺達が刹那の陽だまりへと還ろうだなんて思いすること事態間違いでもあるかもしれない。
なんせ、つまるところ自業自得：陽だまりを失ったのではなく、自分で陽だまりを捨ててしまったようなものであるんだから。

「ああ、それとだな。あまり言うべきことではないんだろうが」

「はい」

「まだ、テロリスト達のリーダーが捕まっていな。そいつを捕らえれば、完全に事は終るんだが、深手を負わせたはずが上手く逃げ続けられていてな。数人で居っているんだが見つからん」

源さんは、笑みを浮かべてはいるが、雰囲気は張り詰めているもので警戒心を強めている。

源さんの言葉を受け、俺も警戒心を強め、神経を尖らせる。

まだ終わっていない。こいつ時、最後の最後で一番大きいものがあるものだ。

それに相手は追い詰められて、切羽が詰りに詰っていることだろう。死ぬ物狂いだ。

何かかこちらに近づいてくる気がする。

遙か遠く彼方から、徐々に、そして急激に近づいてくる計り知れない悪意と敵意と殺意の気配。

それらを纏ったモノが、この場所やってくる。

「……………」

それを源さんも元軍人として肌で直感めいて感じたようで。俺も源さんも警戒心を強め、自然と気を張る。

ここにやってくる。後、少してシエルターへ着けるといふのに。煮え滾った計り知れない悪意と敵意と殺意の塊がここへやってくる。

彼らが言うところの世界をむちゃくちゃにした俺達を咎め、復讐する復讐鬼の死刑執行者。

今からここへやってくるのは、そんな……

「　　ッ!?」

突如、俺達の前に手榴弾が何処からともなく投げ込まれる。

突然の事だったが、突然の危険に出現に何度も合い、慣れてしまった身体は驚きと共に反射的に動く。

三人では避けられない。それに深手を負って俺では上手く立ち回れない。

俺がやるべき事、優先すべき事は一つ。

「源さんっ！束をお願いしますっ！」

大声で叫び、刹那で俺と束を入れ替え、束を源さんに預ける様に源さんの方へ束を突き飛ばす。

弾ける爆音。校舎の廊下に木霊する手榴弾の爆発音と、地面がはじけ飛ぶ爆発。

俺は深手が痛むのも構わず、かなり強引に手榴弾の爆発を回避する。しかし、爆発の余波までは避ける事なんて出来ず、吹き飛ばされてしまった。

受け身なんて取る暇なんてなく、俺は無防備となる。
そんな俺を受け止めて……足で強く地面へと踏みつけて受け止めた
のは、軍服を身にまとう男だった。

…

第四十九話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第四十九話 ?

最初に、申し訳ございませんでした。

前回の後書きで次回はアンチされる側と言っていたのにまた後々になりました。

言い訳はできないので、この場で深くお詫び申し上げます。

ですが、次回こそは東アンチされる側のお話です。

今回で見えて分かる通り最後のテロリストの一人が現れたので。

インカムについては適当です。

書いていて頭がこんがらがったので状況整理の為、読み返して。

インカムをつけているのを発見して。折角なので使ってみました。

ですが、細かい設定が無茶苦茶です。一応インカムの通信回線とかを調べましたが

よく分からず、あえてあやふやにしました。

戦闘or戦争モノの洋画でも、たまにインカムがジャミングされているのもあるし大丈夫なはず。

というか、軍事設定を使つてないし今更かな？

前回は引き続き緊迫感を維持or表現できていたかな？

今回も綾君は頑張りました。と言うか、頑張りすぎですね。あれ、なんてチート。

いいえ、火事場の渾身の力。命が燃えつき最後の輝きだと思って下さい(後一回残っています)。

でも、さらにボロボロ。だけど、そうするのが楽しい私はダメな男の娘《奴》だ。

それと綾君はいろいろとある客観的な自分達に対する評価をも理解しているというを表現できたか心配です。

源さん出したのも最後だからですね。単純な第一の理由は。

他は、流石にボロボロの疲労困憊での綾君では現状維持が出来ないので登場してもらいました。

渋い大人のカツコよさを表現できていたらいいかな？

綾君もボロボロで疲労困憊の死にかけでもカツコよく、漢らしく見えたかな？

出来ていて、読んだ人に見えていたらとても嬉しいです。

さて、この長かったアンチ物もいよいよ最後。

さて、綾君と束さん、綾君はどうなるの結末を迎えるのだろうか？

！お楽しみに！

（次回こそは本当にアンチされる側本番です。難しいけど、書いて楽しい）

（そう思うのはダメなのかもしれないけど、アンチ物を書いている人の気持ちが少し分かった）

（他人をあんな風に批判するのはただ単純に気持ちがいいがいいということ）

ツイッター、やってます

執筆状況やどうでもいいことや重要ような事を呟いているので

よろしければ見てください。よろしくですm()m

<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言つか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

この機会にツイッターしてない人はして、一緒にこちょこちょしようぜっ！

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。
日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗
りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだった
ので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いします
っ！！m(´`´)m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

というか、そろそろ本当に本当にランキングに乗りたい。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっ
ても嬉しいです

ご協力お願いしますm(´`´)m
これも何としても上げたい。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞い
て下さい。

今回もまた、たくさん感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいた
します。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想
のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

そう言えばそろそろ、学生編での束さんの専用機か搭乗機作らない
と。

でも、時代設定の縛りがあるから難しい。

縛りプレイで考えるとかテラムズスwww

やっぱり、屋気楼みたいな情報タイプの方がいいのだろうか？

第四十九話 ？

「よおっ！」

怒声混じりながらも感情を抑えて言う軍服の男。

手にはアサルトライフル。

身に纏うは、軍服に似た戦闘服。

だがしかし、戦闘服と男の身体は全身酷く傷ついている。

戦闘服のいたるところが裂け、血痕がいくつも見え、銃弾が食らった後が全身いたるところに見える。

源さんの先ほどの言葉、今の状況、見える男の特徴。

それらが頭の中で刹那の間もなく、合わかり理解した。

この男が、テロリスト達の最後の一人で、リーダー格の男である事を。

「会いたかったぜっ！クス野郎っ！」

「……………！？」

まるで愛しい人と数年ぶりに再会する様な口調で、怒声混じりの声で狂気染みた笑みを浮かべて言う男。

男は、何時でも一瞬の間もなく発破出来るようにアトルライフルの引き金に指を受けながら、軍靴で俺を踏みつける。

俺は、仰向けに倒れており、地面に深手を負った傷口を刷り合わせられて、また軍靴で踏みつけられ、二つの痛みを痛感する。

背中に男は体重を全部乗せている様で重たく、二つの激痛は凶弾並みに痛い。

「どうだっ痛いか？ああ、痛いだろうな、屈辱的だろうなっ！それが我らが味わっている痛みと屈辱だっ！」

「がああっ！」

背中を上から強く踏みつけられ、痛みが全身に走り、反射的に叫び声が出してしまう。

「綾っ！」

「行くなっ、嬢ちゃんっ！」

「離してくださいっ！離してっ！」

「今は行っちゃいけないっ！嬢ちゃんも分かっているんだろっ！」

「っっ！」

俺の叫び声を聞いて、テロリストの死角である教室に隠れている束は今にも俺の元に来そうな感じだったが。

寸前のところで源さんが束を抱きかかえ静止したんだろう。束達がいる教師の方から、少し暴れる束の物音が聞こえる。

だけど束は、源さんに言い聞かせられる様に言われると、歯痒いような辛そうな歯を噛み締めている声が聞こえた。

心配してくれるのは嬉しいが、今は駆け寄られたら迷惑だ。だから、源さんが束を引き止めてくれたことに一安心する。

男は俺を今までの鬱憤を晴らす様な感じで踏みつけていて。

束の本当は今すぐにも俺の元に駆け寄りたいが、事態を理解しているからこそ駆け寄れない、
という間で揺れ動く歯痒い思いを感じている事に気づき、テロリストのリーダー格である男は狂気的笑みを浮かべたまま口元をニヤッと歪ませながら言う。

「どうだっ？キチガイ小娘……いや、罪人篠ノ之束。自分の大切なモノが踏みにつけられている思いってのはよっ！辛いだろうっ？！屈辱的だろうっ？！ 思い知れよっ！篠ノ之束っ！これが貴様が踏み躪ってきた我らの味わってきた屈辱の思いだっ！！」

「くっ つアッ」

「綾っ！？ くっ」

束の唇を噛み締める悔しそうな声が微かに聞こえる。

リーダー格の男は、銃口を頭に突きつけたまま、更に怒りや鬱憤をぶつける様に踏みつけてくる。

深手の傷口がより傷む様に男は踏みつけている。全身に激痛が走り続けている。

体に押し掛かっている体重は重く、深手を居った疲弊しきった疲労困憊の今の俺では、この男を振り払う事は不可能。

仮に振り払えたとしても、男のアサルトライフルの銃口は俺を決して離すことなく捕らえており、振り払ってもその後すぐさま撃たれ殺される事だろう。

だから俺もどうにも出来ず、源さんも誰も手出しが出来ずにいる。

それにどういふ経緯などがあれ、他人に踏みつけられていい気はない。むしろ、辛くて、屈辱的だ。

俺がそう感じるのなら、男の言葉通りこの男もそして他の男も辛くて、屈辱的な思いを感じ続けてきて、今も尚を感じているのだろう。これもまた、俺と束《俺達》がISが世界に齎した“変革”の一旦。起きてしまった後では、どうしようもない負の影響の光景。

苦痛に歪む視界には、男が俺の今状態や表情を見て何処か満足そうにいるが映り、また強く踏みつけながら更に男は言葉を発す。

「篠ノ之束、貴様があのISという鉄屑、兵器モドキを生み出さなければっ！積み上げてきた我々の輝かしき栄光をあんな形で奪わなければっ！今の様なことにはならなかつたんだぞっ！こうなったのも総て自業自得っ！貴様の業であり、貴様の消えない罪だっ！それは貴様もだっ！神山綾っ！」

「……」

「貴様らのはあのISという兵器モドキの鉄屑で世界を変え革新させたいと思っっている様で、さぞ心地がいいだろうな。だが、貴様のしている行いはただ悪戯に世界を社会を秩序を安定を平和をつ！掻き乱した掻き乱したのになし過ぎないんだよっ！」

「ガアハアアッ」

燃え滾る憤怒が一度限界を振りきたのだろうか、何も気にせず男は足を上げ物凄い勢いで踏みつけて来た。

それにより俺は、背中から内臓を強く圧迫され吐血する。

再度全身に走る激しい苦痛。痛みで視界が霞む。

「世界は貴様達、塵屑の様な子供の遊びに付き合わされて今、その片付けをさせられているような物だ。」

ISが女尊男卑という社会の腐り間違ったシステムを作ろうとしていて、そのしわ寄せがもう来ている」

「……」

「今やクソ女共アマとモがIS片手に得意げな顔で軍に出て第一線で戦つて、全員が全員とは言わないが、女はどいつもこいつも女自分達だけが偉いですみたいな顔をして威張りやがっている、吐き気があるし氣にくわねえっ！ 対する俺らはやれ人件費削減、軍備縮小。男達俺達だけが、しわ寄せを食らっている。終いには、居場所を奪われ、軍を出るしかなかった。俺達は戦い以外の生き方を知らない馬鹿だが、俺達が必要じゃなくなる事が来るのかは理解している。だからと言ってそう簡単に、しかもこんな形で納得出来るはずも受け入れられるわけがないだろうがアツ！！」

「ッ」

男も冷静さを総て失わないよう冷静に努めて言っていたが。我慢の限界が来て、再度煙草の火を靴で消すように踏みつけてくる。軍靴が痣となつたところを当たって、激しい苦痛で思考が僅かだがゆっくりとおぼろげになっていく。

男の言っている事はもつともだった。

男の今の所の主張は感情に左右されているが、それでもちゃんと論として成立している。

元々からあつた女尊男卑の社会風潮を、女性にしか乗れない現行の兵器の最強であるISは急激な速度で後押しするという事となつた。それはISの現行の兵器で最強の名を頂き、女性にしか扱え似ない不平等なモノであるかこそ、それは不自然なモノ、不自然な社会風潮。

そしてそれは自然な形でそうなったのではなく、今までを奪われる形で自然流れとは反対に不自然な流れで成り立とうとしている。だからこそ彼は男達は納得できない、受け入れられない。納得するわけにも、受け入れるわけにもいかない。

「ただどそれは俺達が後押ししてしまったような物だけど、何と云うか第一者と第二者以外の人間。俺達 彼ら知らぬ何か第三者が、まるで“意図的にそういう風にした”ようにもこの時、俺は些細ながらふと思った。」

「戦うとは何か、兵器での戦闘は何か、貴様らは本当に理解しているのか」

「鉄屑ISがいくら宇宙空間での活動を想定して開発されたマルチフォーム・スーツ、といえど兵器として扱われているのならどうあれ兵器だ。だが、貴様達鉄屑の操縦者達は兵器をカッコイイ服か何かと勘違いしてやがる。まあ所詮は、クソ女共だ。アムとも脆弱な女々しい精神では仕方ない。しかし、あまりにも覚悟が足らん。幾ら聞こえのいい言葉を並べても兵器として世界に認識されているならばそれは兵器であり、兵器は所詮人殺しの為だけの物だ。貴様ら鉄屑の操縦者達は戦闘という名の戦争を、血の何たるかをまるで理解してない。例え理解していようと薄っぺらい」

男が言う事は何も間違っていない。むしろ、正論だ。正論だと分かるからこそ、理解してしまっているからこそ、何か言い返すことも言い返す言葉も思いつかない。二の句が告げられなくて、ただ生唾を飲む。

確かに俺も含めて俺達IS操縦者は、戦闘という名の戦争を、血の何たるかをまるで理解してなのかもしれない。いや、まるで理解してない。

短期間でのISによる戦闘訓練を含めた操縦訓練を積み、ISという人殺しの道具《兵器》を手に入れられる。

簡単には手には入れられないが、軍事学校よりも軽い気持ちで訓練を受けられる。そして、他者よりも少し操縦が上手く、それなりに適正が高ければ専用機が貰える。

しかも、ISは兵器であるけれど学校等では兵器としてはあまり触れられず、危険が少しだけ伴うスポーツ競技の道具として教えられる。

故に自然的に、兵器という認識は薄れ、ただのスポーツ道具と言う認識が一般人には浸透し、人殺しの道具としての意識や理解、覚悟などが薄れていく。

だから、空想から出てきたカツコイイ、見栄えのいいロボットないし、ファクションの服に思えていく。

それにISは小さな怪我はしても、気をつけられれば下手なことで死ぬ危険性は旧兵器と比べてしまうと低い。

シールドバリアーと絶対防御。その二層の厚い防御壁があることを分かっているからこそ、自分は絶対的な物に守られていると自覚という愚考をしてしまい、

戦うという本当の意味、他者を傷着ける殺すという意味薄れ理解できてない。

例え理解していてもそれは分かっているだけであって、その分かっているだけでも何となく、だからこそまるで理解していなくて、薄っぺらい。

得られるものがあるという認識。得た物があるという事実。

それが故に反対に奪われる怖さ、失う恐怖、手から零れ落ちる切な

さがある。

俺達がやってきたことはそういうことで、当然で至極当たり前のこと。

そして

戦闘と戦争、戦うということ。殺すということ。

それは心臓がひっくり返って、歯ががち鳴って声が出なくなるようなこと。

手足の先から冷たくなって、骨まで凍りそうなおぞましさ。

それはそれは、今の俺にとって何時になっても慣れない。

これをちゃんと自覚して、理解した上で人殺しの道具兵器を扱わなければならぬ。

それが無いのなら幼い子供が無自覚に火遊びしているのと変わらない。

そういう理解してなく覚悟のない、甘え体質の考えが無知が無意識の悪意を生む。本当に薄っぺらい。

俺は、覚悟も理解もした上で戦っている。自覚した上で生きていて、束と一緒にいる。

だけど、それは彼らにしたらそうしているつもりには見ええないのかもしれない。

彼らには、そうしている俺でさえ、薄っぺらく見えていることだろう。

「そんな勘違い野郎の覚悟足らずの甘い塵屑共が今や戦場に立ち、我らが愛していた我らの戦場を汚してやがるっ！それは度し難く、断じて許せる事ではないっ！！」

「
」

「第一、本来は宇宙用として存在し、女にしか仕えない兵器とは何

だっ！？そんな物兵器として不完全ではないかっ！そんな不完全なIS《鉄屑》なんぞが今の世に蔓延っているのがどうかしているっ！！呪われるっ！呪われてしまえっ！ああ、おぞましいっ！汚らわしいっ！！忌々しいっ！！消える消える消えろっ！！この世から排除されるっ！！鉄屑がアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

抑える事なんてせずに男は、むき出しの憎悪そのまま、何度も何度も足元にいる俺を踏みつけてくる。

彼に、そこにあるのは、ISに俺と束俺達に突き刺す様に激しく向ける、嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意。

気持ち悪い……体を襲い全身を走りぬげる激しい苦痛と合さって、言い表せない激しい気持ち悪さが感覚の中に渦迷うに停滞する。

男はISをしいては俺と束俺達を心底憎み、軽蔑を……恐怖を抱いている。

ああ、やってしまった。

そんな感覚が一気に浮かび上がってくる。

この感覚が来るのいつも物事の直面している時。

ああ、本当にやってしまった。

こうなると、こうなってしまうと今までちゃんと全部全部分かっていて、理解していて、覚悟もしていたけど。

心の何処かでは強く忌避して、跳ね除けていたモノが今一気に帰帰している。

これが俺達が白騎士事件を駆け抜けた背後に広がっている俺達が招いた惨状。

こうなると分かっていた。理解していた。覚悟していた。

何度も言うが、もう逃げる事しないし、出来ない。第一、俺に退路なんてものは初めから存在してない。ただ前のめりに前進するのみ。それに今更、事態が起きたというのに知らなかった、気づかなかつたではすまない。

自分が苦しんだから、他人が苦しいんでいい。

そんなことを俺と束が断じて思ったことも、思っ^{俺達}てやったわけじゃないけれど。

結果的にそうなってしまった。

他人を犠牲にして、結局は俺と束のエゴを優先し、押し通しただけ。客観的に見れば最低の行為で、どうしようもない塵屑野郎。今、男にああ言われても当然の事で、仕方ない。

そんな言い訳染みた情けない思考を巡らせても、何の罪滅ぼしにもならない、何の意味もない。

だからそんな自嘲みたいなのを、禁じえない。

「大体世界も世界で、元から腐敗していたのが鉄屑によって更に腐敗した。自分達の身と地位を守ることを優先して、白騎士事件なんて大層なマッチポンプのテロを起こした首謀者篠ノ之束を今こうしてご丁寧に学園まで作って全世界でかくまっているんだからよっ！」

「
ッ」

何かを言おうとしたが、男の言葉に驚いて言葉が出ない。

男は……偶然に起きたと認識されている白騎士事件を、束が起こしたマッチポンプのテロ紛いの行為だったと気づいたっ!?

そう驚きを感じたが、すぐさま驚きを抑え思考を冷静なものに引き戻す。

冷静に順を追って考えれば、白騎士事件は束が起こしたマツチポンのテロ紛いの行為だということに簡単に気づけるはずだ。

日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一齐にハッキングされ、2341発以上のミサイルが発射されるも、

その約半数をIS「白騎士」が迎撃し、捕獲ないし破壊しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した。

あまりにも物事がとんとん拍子に進み、あらゆる物事が都合がよすぎる。

この事件は予め最初から最後まで誰かによって脚本が決められているのは明白で、そう考えれば自然と束が発端だというすぐに気づく。冷静に考えれば当然なような事で、驚くことはない。

だけど、俺が驚いたのにはもう一つことがあった。

自分達の身と地位を守ることを優先して。

男が言った言葉が胸に引っかかり、俺が以前に立てた推察が浮かび上がる。

白騎士事件は総て束が計画し完遂した、マツチポンプのテロ。事件自体は束が仕組んだが、事件後までは束は仕組んでない。

むしろ、その時の現状に対応するという物で、その時の予想では国際指名手配犯、よくて厳重な監視のついた区画内での生活。

だったが、今俺達が置かれている状況は普通に学生をして国外には決して許されないが国内では自由に行動でき、監視もあるが厳しいわけじゃない。

いくら取り引きをしたからといっても、事件後までもあまりにも都合が良過ぎる。

だということとは

「世界は系も簡単にISという鉄屑を自ら受け入れた。それが例え

受け入れざるおえなくても、世界は鉄屑を甘受しやがったっ！自分達のあらゆる自己利益の為だけになっ！」

「……」

「天才だか呼ばれていようが、たかが十六そこの小娘に各国の、しかも先進国のミサイル基地をハッキングされ、戦闘でも乾杯したとなればどの国も先進国も面子が保てない。嚴重なシステム防衛や自軍の優位を誇っているだけな。数々の先進国が倒れば、それこそ世界の終わりだ。完敗しハックされたとは言え責任問題が追及され、それが様々な事柄に飛び火して数々の先進国の現政権は立場を失いかねないそうなれば自分かわい政治家共は自分の地位や権力を守るために、自己の保身の為ためなら必死になって何だっする。そう……例えば、事実を隠蔽どころかなかったことにして、白事件は同然起きてしまった自然的な事故であり、偶然的に近くで運用試験していたIS『白騎士』が居合わせて助けとくれた、と各国一同に揃って主張することだってな」

だということとは、そういうことだ。

世界は逃げた。

自分達に都合の悪い事から目を反らし、忘れて、平気な顔で嘘をさも本当の事のように何の迷いもなく、自分達に都合がいい事を主張する。

自分の地位や権力を守るために、自己の保身の為なら手か自分可愛さに必死になって本当になんだったっした。

ある種、その恩恵を受けて束、俺と束は今のよう^{俺達}な処遇で済んでい

る。そんな以前立てた推測が真実味を帯びてきのと同時に俺は、あるこ

とを思った。

もしかすると……束は、俺俺達と束はそうした欲塗れの世界に、利用される為に今の現状に置かれているだけかもしれない。

だから、あんな取引等で事故処理は一応済み、こうした本来ありえなかったかもしれない日々を送れている。

そして男は、男が言うところをISを甘受したそういう世界を世界のあり方を嘆く様に、大元の原因である束を軽蔑し憎み憎悪をして呟く。

「ああ、嘆かわしい。元から政治家なんぞは腐っていたがやはり鉄屑によって更に醜く腐ってしまった。そうしたのも総てキチガイ小娘、篠ノ之束っ！貴様のせいだっ！篠ノ之束っ！貴様は世界を蝕む猛毒持つ癌細胞だ。世界を蝕み、総てを破壊する。腐った政治家よりも醜い自己の欲望の為だけになっ！そんな今の世界に価値はない。我らが愛した世界を腐らせ塵屑に墮したのは篠ノ之束、他ならぬ貴様だっ！ISなんていう鉄屑は、この世界には不必要なのだっ！排除してやるっ！故に我々は小娘の我儘で我々の在りし日の世界を破壊した我儘な子供の様なキチガイにしか過ぎん貴様を認めはしないっ！許しはしないっ！決してっ！！ああっ、死に絶える死に絶えるっ！！殺しやるからよオオオッ！！」

隠し切れない憤怒をあらわにして、怒鳴りつけ、力の限り踏つけ、地面の更に擦り付ける。

変わらず全身に激しい苦痛が走り、神経が痺れている。意識が薄れそうになる。

だけでも、それと同時に言い表せない憤怒が煮えたぎる。別に理解しろなんて、別に別れなんて、別に受け入れるなんて言わない。

受け入れられないようなことをしたのは替え様のない事実で、万人

が万人納得できるとも初めから思っていない。

それを分かった上で、東は俺と東は己のエゴを押し通した。人なんて物は所詮そういうもので、そうしたことに反省はするが、後悔は絶対にしていない。

むしろ、こういうアンチしてくれる人がいるというのは在りがたい。そうされている内が花つてのもあるけど、反面教師みたいなのでいい。

だけど、ここまであんなにまで大切な愛しい人を侮辱されて何も感じない訳がないっ！！

だけど、何も知らない癖に何も知ろうとはしない癖に好き勝手言いやがってっ！！、という強い思いが憤怒として煮え滾る。

例え相手が紛いなりに少しでも正論を言っただとしても、我慢の限界だった。

俺は煮えたぎる憤怒を糧にして、薄れそうな意識を奥歯を強く噛み閉めながら繋ぎ止め、男を真っ直ぐと捕らえ睨みつけながら言う。

「だから、殺すというのか」

「ああ、そうだ。我々の手で殺す。篠ノ之東というどうしようもなく愚かで愚鈍なキチガイの様な存在は須く速やか且迅速にこの世界から排除しなければならぬっ！そして、我々が我々自らの手で鉄屑なんぞ存在しない、本来在るべき姿に世界を戻すっ！我々は最後の一人になるまで篠ノ東に抗い続けるっ！そして殺せない時があったとしても必ずや殺す！悪には屈しない。これは貴様ら愚鈍な子供でも分かるはずの言葉だ。貴様らは我々をテロリストだと思っているようだが、本当のテロリストは貴様達の方だと知れっ！！」

「ガアアアッ！　　ツウツ！」

「何だ、その目は。まだ我らに抗うというのか？ そのままそうして我らが受けた苦しみと屈辱を味わいながら倒れて殺されるのを待たばいいという事だというのにな。貴様には我々が無様にか映っていないんだらう。こんな事でしか、自分達の正当性を主張できず正当化できないと思つて。それともなんだ？ 世界で唯一ただ一人男として鉄屑^{IS}として貴様から無様に見える我々の思いすらも汲んで、ISが作る糞^{IS}つ垂れた世界でも男と言つ存在を守るといつのか？」

「　　ッ、そんなこと」

「ないとは言わせない。貴様は思つたはずだ『世界でただ一人男でISを使え男の期待を一身に背負っているのだから、男としての尊厳を守る、男達が女尊男卑の世界に負けない様にする』等と」

その言葉に二の句を告げられなくなって、息を呑む。

男の言葉が胸に突き刺さる。あまりにも確信をつかれ過ぎて。

男が例とした上げた言葉に似た事を俺は、思つたのかしめない。

いや、思つていた。心の何処か隅の方では、そんな風に思つていた。思っている。

二の句を告げる事が出来ず、啞然としている俺を見て、男はク口だという事に確信した様で憤怒に顔を歪ませ奥歯をギギつと強く噛み締める、

踏みつけて踏みにじりつけた足はそのままに、頭につき付けていたアサルトライフルの銃砲を頬にスライドさせ、決る様に突き刺す。そして男は、隠している凶器を滲ませながら言つた。

「その様子ではやはりそうだった様だなっ！ 塵屑の分際で貴様は我々を所詮結局のところ哀れんでいるだけだらうっ！！」

「ガアアアツ！」

体に激しい苦痛の衝撃が走り、口から大量の血を吐血する。背中を蹴られ強打して、意識が遠のいていくを、激痛をより強く認識する事で回避する。

哀れんでいないっ！

哀れみで、そんな事を思ったことはないと言言できる。だけど、男に捕らえた俺の思いは、俺の解釈と相反する物だった。

「貴様是我々を哀れんでさぞ気持ちがいいことだろっ！！だかなっ、貴様がそんな哀れみに塗れた偽善的なことを愚考^{愚考}出来るのも総てお前が男でありながら鉄屑を使える故にだっ！」

「
」

「貴様は他の男達と違い鉄屑が使える。それに故に無意識ながらに傲慢に自分は優れていると思ひ込み自分の優位を見せつけ、恩着せがましくそんな事をしようとするっ！実に屈辱的だっ！」

更に突きつけてくる力や踏みつける力が強まるのを感じる。

男は恨んでいる。この男に恨まれている。

それは束に向ける恨み似ているけども、少し異なっている。

プライドを傷つけた。

俺の思いを、男はそういう風に解釈した。

だからこの男は俺を恨んでいるのか。

「そうした事があるから貴様を我々に自分の鉄屑に乗れるという優位を見せつけ、恩着せがましく」男としての尊厳を守る、男達が女

尊男卑の世界に負けない様にする『等としようとするっ！』

「っ！」

「ふざけるなよっ！貴様はそんなにまで、上から見下ろしてまで我々を哀れみたいのかっ！恩着せがましいことなんて誰も望んでないっ！それどころか我々は貴様なんぞに期待なんぞ一切しない！むしろ、貴様の様な存在を我々は認めんっ！男でありながら鉄屑を使えなんぞ、貴様も異物でしかない。そんな貴様が我らと同じ男^男であるなんて認めないっ！断じて認めんっ！！第一貴様はそこで隠れているキチガイの小娘、篠ノ之東に加担しているっ！その時点で男であるがなかるうが貴様は認めないっ！」

その言葉を俺は、何もいう事もせず、何も考えず黙って静かに聞くことしか出来なかった。

男の言葉によつて、男である神山綾^俺という存在は、人である神山綾^俺という存在は完全に否定されてしまった。

いや、男には束も俺も人には見えないんだろっ。ただ人の形をした醜い肉片の塊、おぞましいモノにしか見えてないことだろっ。

だけど、男の反応はある意味当然のものだった。誰しも人は自分には理解出来ないヒトやモノを排除し、忌避する傾向がある。

それは当然の事で、こういう反応があることも理解しているつもりだった。

ただとだけ、気分のいいモノじゃない。必然的なもので理解はしているけど、納得までは出来ない。

そういう点は完全否定されたとしても俺はまだ彼らと同じ男^男ノヒトであるんだろっ。

もう限界なんて当に駆け抜けている。

今こうしてか細い我慢の線を保っているのが精一杯。
いや、保っているのかも怪しい。言い表しようないこれまで抱いた
事のない殺意を内包した憤怒が我慢したのから漏れている。

「故に貴様も殺してやるっ！必ずなっ。安心しろ、一人では逝かせ
ん。あのキチガイと一緒に逝かせてやろう。だから、安心して死ね
っ！」

「殺したところで何か変わるといふのか」

「ああ、変わるとも変えるともっ！貴様ら異物に奪われた我らの日
常^界を在りし日の本来あるべき世界の姿に我々人の手で戻すっ！鉄屑
なんぞ貴様らなんぞこの世には不必要な存在だっ！鉄屑が世に放た
れて約一年しかまだ経っていない今ならまだ間に合っっ！世界が鉄
屑^{細胞}に篠^癌ノ之束に完全に蝕まれる前に異物^癌は取り除かなければならな
いっ！」

「
」

「故に貴様らはもう死んでもらうっ！自分達の業を罪をあの世で悔
いて、あの世でも永劫苦しめっ！貴様らに安息や安らぎは有り得な
いっ！与えはしないっ！」

最後の最後と言わんばかりに男は渾身の憎悪と嫌悪と憤怒を込めて
怒号する。

俺を踏みつけている足の力も物凄く、骨が異常な痛みを発しながら
軋む。

だけでもっ、激痛が全身に走っているのは分かるのが、感じない。
むしろ、感じるのは先ほどよりも更に倍増したこれまで抱いた事
のない憤怒を感じている。

そして男は最後に言った。

「お前は死んでしまえっ！！」

その言葉に衝撃を受ける。

何度もこの男に言われ続けていた言葉のはずなのに、初めて言われるような受けた衝撃。

何処か遠い昔に誰かに言われた言葉と重なった。

憤怒があると同時に不快感が無限に広がる。酷く不愉快だ。

もうこれ以上、この男の言葉も話も聞きたくない。顔を見たくない、存在を認識したくない。

もう充分、充分なはずだ。

彼らの言い分も、俺達に対する憎悪や憤怒や殺意はこの身で痛いほどに分かった、痛感した。

だけど

「おッ、おおおおおオオオッ

！！」

「ガアッ！！??？」

魂から絶叫する。

吠えて踏みつけ背中にある男の足を渾身の力で振り払い、仰向けの倒れたままの姿勢で男の鳩尾目掛けて蹴り、無理やり距離を作り立ち上がる。

無理やりで無茶な体の動きに全身に今まで以上の激痛が走っていて、あばらが何本か折れているが気にはしない。そう今すぐに死ぬような状態じゃない。

今はそういうのも、痛みも感じない。

ただあるのは、激怒。

この今の力のなさが狂気に到るほど情けなくて許せない。

このまま殺されるのは嫌だ。このまま束を殺されるのは嫌だ。そんな事俺の命、魂にかけて絶対にさせない。

男達、男のアンチ《批判》の言い分はある意味では正しいのかもされない。

万人が万人今を全部を全部受けられないのは当然とこだ。

俺達はそれだけの言われる事をした。結局は自己に対する欲望から滴り落ちるエゴを押し通したまでの事。

だからこそ、俺達はこんなところで死ぬわけにはいかない。

事件の発端は、端からすればどうしようもない本当に身勝手に迷惑なエゴからだけど、それだけが総てじゃないと証明しなければならぬ。

エゴから始まったのならそのエゴから始まった事を最後まで貫き通さなければならぬ。それが俺達が最低限のせめてもの事だ。

それに俺は停滞を狂おしいほど望んでいる。だけど、死によって出来る完結を望んではない。

その場に永劫立ち止まってるの永劫は嫌だ。停滞を望んでいても、前へと駆け抜けていたい。明日を未来を未知を見たくて、ほしい。

その事も、その中で出来る陽だまりの至福の刹那の繰り返しがほしい。

それにこいつらは

「ハア、ツ……認められないのも当然だ。受け入れられないも当たり前だ。だけど結局、お前達は逃げたっ！耐えられなかったんだろ

う、今を生きる事が。目の前の変わった世界を受け入れられなくて理解できないとしたくないと一方的に拒絶して理解を拒んで、理解も分かるうともせずっ！お前達はずっと背を向けて逃げたっ！自分が変わるのを恐れたっ！もっともらしい理屈をつけて、変ないい訳つけて、我儘言う小さな子供みたいな駄々捏ねる！情けないっ！愚鈍なのはどっだっ！」

「なっ！？」

「過ぎ去った時を取り戻す事なんて出来ないっ。後ろを、過去を求め続けたお前達は結局今でも何をしてその手に何も未知新しいモノや未来を掴む事なんて出来ないっ！」

「くっ、貴様アアアアツ！！」

それにもう一つ。

こいつらは第一

「第一、俺の女をキチガイだの何だの言うんじゃねえっ！お前達みたいなのが揃いも揃って俺の女を値踏みするなっ！ふざけんなっ！お前達の勝手な物差しだけで束を計るなっ！！」

「ッ！」

「殺す？！ああ、だったらお前達が死ねえよっ！ここで本当に斃れるのはお前達の方だっ！」

啖呵の如く怒号して手に持つ拳銃で男を逃がさない様に外さない様に捕らえる。

理解できないものだって、分かり合えないものだってある。

それはどうしようもない仕方のないことで、ある意味当然のこと。だからこそ、俺達はエゴをこれらも最後まで押し通す。いい加減なままなんて、無責任なまままでいてくれない。

世界を彼が言う通り、腐ってしまったのなら、俺達はその責任を生きてとる。死んで責任を取るなんて逃げはしない、生き続けて責任を取って、例え腐っていても腐った世界を浄化したい。

それが偉大な先人達を苦しめてしまったことへのせめてもの罪滅ぼしみたいなもの。

これもまた彼らにしたら、俺達の身勝手なエゴなのかもれないけど、それでもこれが俺達に出来るせめてもの罪滅ぼしみたいなもの。

彼らの思いも何もかも俺が背負ってやる。

背負って生きて、修羅道であるこの未知を、還道りたい陽だまりの至福の刹那へと続く道を進む。

それは別に男でありながらISが使える違う存在だから見下しているわけでも、現れんでいるでもない。

逃げるのが嫌だから、死ぬのが嫌だから、そうしたいから、そうするだけのこと。

それに今、今まで感じた事のない憤怒を抱いているの同時に不思議と彼らに感謝している俺がいる。

アンチ批判されるのは気持ち悪いし嫌だけど、ありがたい。彼らは俺達を見てくれている。

正反対の存在がいるということは感情論では気持ち悪いけど、それでもありがたいくて、嬉しい。

ゆえに彼という存在を認め感謝して、感謝の思いを込めて彼らを破踏壊してやる。

そして俺はこれからも刹那を愛し、束とこの未知道を駆け抜ける。

「生き残るのは　俺達だっ！」

声と共に両者の銃の引き金が引かれる。

弾は完全に着弾。

俺が男に向けて放った銃弾は、男のみぞうち綺麗に当たっていた。そして男は、静かな断末魔を上げ、先に斃れた。

対する俺は

「　　がはっ……」

口から大量の血を吐血する。

疲労困憊の満身創痍。

その場に立つだけでも限界で、銃を撃ち当てる事が出来たのは本当に奇跡だった。

だけど、奇跡を起こす事が出来たのは一度きり。

流石に回避行動まではすることは出来ず、俺は男の銃弾を食らった。

当たったのは一発。

場所は横腹の近く。そこに銃弾が直撃し、めり込んでいる。

相手を撃ったという感触。事が総て終わったという実感。

それを感じて俺は、抱いていた憤怒がなくなるのを感じると、同時に忘れていた激痛を無意識に反射的に思い出し、感じる。

そして俺は忘れていた激痛と銃弾の痛みを感じて、崩れる様に仰向けになるような感じで地面へと倒れた。

どうやらこのへんが本当の限界らしい。

「綾ーーーーーっ！」

「」

束。

束がこちらへ、俺の元へと駆け寄ってくる。
まだ声だけで、仰向けで倒れている俺からは駆け寄れない。
だけでも、安堵する。

俺は生きている。生き残っている。

この事を無事に終らす事が出来た。千冬や源さん達、皆のおかげで。
ああ、ありがとう。感謝する。

そして何より束を守ることが出来た。

体に今だ走る激痛は痛い……とても痛いけど、痛いだけで気にはならない。

不愉快どころか……今はこの未知の結末に満足していて、安堵している。心地がいい。

俺は本当に束を守ることが出来たんだ。

「綾っ！」

座り込み心配そうな顔で束が俺の顔を覗き込む。

今にも泣きそうだ。

その証拠に今の束の表情はほぼ泣き顔。

目尻には沢山涙を浮かべている。

泣いちゃいけない……そう思っているのか、束は泣くのを我慢している。

だけど、我慢できず涙がいくつか流れている。

こんな状態。こんな状況だけど、泣いている束も表情も綺麗で、可愛くて、愛しい。

ああ、本当に本当に俺は束を守ることが出来た。

失いたくない束という大切な人モウがあるからこそ、頑張る事が出来た。

ただどいい未知の結末を迎えられたとは言え、必然的にやっぱりこうして束を心配させ、不安にさせて、泣かせてしまった。

だからこそ、俺は会えて言葉でなく、行動で束を慰め、少しでも落ち着いて、笑ってくれるように慰めようとする。

君の笑顔が見たいから。君の笑顔が見たい。君が笑っていると俺も嬉しくて。君が笑っている顔は可愛くて。そして、誰よりも美しいから。だから、笑ってくれ。

「束」

なるべく優しい声音で名前を呼んで、ゆっくりと手を伸ばす。

全身激痛がやっぱりまだ走っていて、少しでも動かせば更に痛くなつて、動かし辛いけど、それでも俺は束の頬に触れる様に手を伸ばす。

すると、束が俺の手を取って握ってくれた。俺の手はボロボロで血まみれなまも関わらず、気にもせず束は手を取って、そのまま頬へと導いてくれる。

俺の手が束の頬を荒れる。

「泣かないで、俺は頑張ったんだ。だから、自分勝手に少し不謹慎かもしれないけど、ご褒美いいかな？」

「うほづび……？」

「笑ってくれ、束。それが俺にとって今一番のご褒美だよ。小言なら後で聞く。だから、今は束に笑っていてほしい。せっかく未知を手に入れたんだ。束の笑顔が見たい。」

君は誰よりも、美しく綺麗で、かわいいから」

「もう、ばかあつ」

怒る様に照れ隠しする様にいろいろな感情を込める様に束はニツコリと微笑を浮かべる。

それは無理してでもない、普通に自然に出来た笑み。だけど、それは今だけの笑み。

ああ、やっぱり束の笑顔はいい。美しく綺麗で、可愛い。

束のこんな笑みを見れて嬉しい、気分がいい。

だから、俺は気分がよくて、少し調子に乗ってみた。

「もう一つ、ご褒美いいかな？」

「いいよ。何でも言つて。私、何でもするから」

「膝枕がいい」

「お安い御用だよ」

そう言つて束は俺の体を気遣いながら膝枕をしてくれる。

背中と尻の下はごつごつとして冷たいけど、頭だけは膝枕してくれているおかげで、ふんわりと柔らかくて暖かい。

頬に触れている手と、膝枕してもらっている頭が柔らかくて気持ちいい。

互いに何も交さずに触れ合う。

俺は束に膝枕をしてもらい、頬に触れる。

少しでも少しでも、束の今の不安や悲しくがなくなりようにと。

束は俺を膝枕しながら、頬の手の上に手を当て、もう一つの手で俺の頭を撫でる。

心が安らいで、本当に気持ちがいい。

「ふふっ」

「ふふふっ」

俺と束は、この共に感じられている刹那が何だか嬉しくて、どちらともなく一緒に微笑み合う。

心底ほっとしている。

俺達の戦いも、俺達の勝利も、そしてこの選択も、みんな現実なんだと理解できる。

これが俺達が自分から自分の手で掴み取った未知の結果《刹那》。今、目の前に、束がいることこそ何よりの証拠だ。

陽だまりの暖かさ。

これの時もある意味、陽だまりの至福の刹那。

事件を、嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意を駆け抜け、辿り着いたこの刹那こそ安息。

安息に、この陽だまりに包まれていたい。束にこうして抱きしめられて包まれていたい。

すると、俺達の様子を見守って少しの間黙ってくれていた源さんが話しかけて来る。

「お疲れさん。本当に無茶しやがって……だけど、本当にさっきのお前はカツコよかった。漢らしい、惚れたぜ、親友っ！」

「ありがとう、親友」

「ははっ……まあ、いまはそのままでゆっくりとしとけ。当たり所が総てよかったとは言え、お前はボロボロで重症の重症なんだ。救護班があと少しで来る、今はもう安め」

「はい」

頷いて力を抜いて、体を束に預けるようにする。すると、束が受け止めてくる。

同時に繋ぎ止めていた意識が、朦朧としてくる。

「そろそろ」

「」

俺の言いたい事を察したようで笑顔だった束は、また悲しそうな辛そうな顔をする。

そんな束を慰める様に苦笑する。苦笑するけど、銃弾を受けた横腹から流れる血が止まらない。

これで死ぬ事はないと俺も束は分かっているが、束を不安にさせて余計に心配をかけさせてしまう。

それが辛くて、情けない。

起きたら謝ろう。そしてたくさん抱きし合おう。沢山、キスしよう。たくさん愛し合おう。

そんな思いを込めて頬を撫でると、それを分かったのか、束は悲し

そんな辛そうな顔から、我慢して少し泣いている泣き顔でニッコリと笑みを浮かべて言う。

「うん、お疲れ様。起きてね？ おやすみなさい」

「ああ、必ず起きるよ。おやすみ」

そしてどちらかともなく俺達はキスする。

源さんがいるのも構わず、触れ合うようなキス。

だけど、今はこれで充分。これだけでお互いの気持ちや想いは充分に通じあった。

膝枕をされ頭を優しく優しい陽だまりで包む様に撫でられながら俺はまるで眠る様に何の気もなく、そつと目を閉じた。

自分から自分の手で掴み取ったこの未知の結果が“至高（至高のキス）の刹那”だと誇りに思いながら。

…

第四十九話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第四十九話 ？

ついにやってきた東アンチされる側編。

何だか、思っているよりも長かったような気がします。分の量的にも。

アンチ、IS or 東アンチはあれでよかったでしょうか？

なるべく東アンチ物の主人公ぼくしようとか心がけ。

軍人としての侮辱感等の感情を込めて、狂気を醸し出してみました。それでも正論は言っているように心がけました、どてだったでしょうか？

ちなみにですが、イメージとしては何故かジルベルトとハージユン。最低の悪役w

アンチシーン、男のセリフを書いている時は何だか無性に楽しかったです。

アンチ物を書いている人の気持ちは何となくですが、何だか分かりました。

やっぱり、ああいう悪い意味で正当化された批判するのは気分が変にいいモノなんですな。

ただ、書き終わった後はいつも深い自己嫌悪の連続でした。

我に返ると吐き気がしてイライラしましたね。手首が切り傷だらけで痛いわ。

綾君もカッコよく見えましたか？ そうならとてもなら嬉しいです

なんと言つか綾君も、男と同じく幼稚な感じがするんですね。

アンチ物から真っ向にぶつかったのなんて見たことないですし。

ただ、発言にある程度の正当性があり、カッコよさもあり、

発言がブーメランにならないように心がけました。
ちなみに綾君はアンチは公認派です。理由は作中とおりです。
ここはアンチ反対派の私とは真逆にしました。

それと男がISを使えてどうのことうのは。

そういう系統のISを読んでよく思いました。

男の操縦者に男からの批判が少なすぎる。

アンチされる側はこの小説のテーマです。

これを書きたいが為にこの小説を書いたようなものです。

アンチ物はアンチしている主人公から見れば正当化されていて正しいの見える

「束を殺してください」「束の死刑を望みます」「束って本当に屑ですね」

等の偏った感想が集まり、小説の内容も含めてそういうのに激しいイラ立ちと吐き気を感じたので書くことと意思を書きました。

アンチは正当化されても所詮はただのイジメです。

なのでされている方の思いや状態を書くことと思いましたが。難しいです。

私も非常に偏った人間なので。

これでいいのかもよく分かりません。

ただ今一度アンチ物の在り方について考えなおしてくれたらと思っ
ています。

殺してはい終了が多い。救おうとしない。

そういうのはアンチしているのと変わらない気がするんです。

ツイッター、やってます

執筆状況やどうでもいいことや重要ような事を呟いているので
よろしければ見てください。よろしくですm()m()m

<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言うか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

この機会にツイッターしてない人はして、一緒にこちょこちょしようぜっ！

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだったので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ！！m(┌┐)m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

というか、そろそろ本当に本当にランキングに乗りたい。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(┌┐)m
これも何としてでも上げたい。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒にご気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんの感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。

そう言えばそろそろ、学生編での束さんの専用機か搭乗機作らないと。

でも、時代設定の縛りがあるから難しい。

縛りプレイで考えるとカラムズwwww

やっぱり、履気楼みたいな情報タイプの方がいいのだろうか？

次回 事件終了後。三人のときの決別の日。

第五十話 ？

綾視点

夢を見ていた。

その夢の光景はある家のリビング。

そこにある一人の幼い、小学低学年ぐらいの少年がいる。

少年は、ただ一人リビングから外が見える大きな窓辺に立ち、無表情に暗い外を眺めている。

外は夜となっていて、時間はもう直ぐで日付が変わろうとしている時間。

そして夜の外は雨が降っていた。激しく雨が降り、雷が激しい音を立てながら鳴っている雨の日の夜。

懐かしい夢。

いや、それは夢というよりも、懐かしい遠い遠い幼い日の俺の記憶と言った方が正しい。

これは俺の記憶。探せば何処にでもあるような、しかし嚴重に封印して、本当に覚えていないはずなのに目を反らしずっと忌避していた、忘却し続けていたい過去。

思い出した。ずっと覚えている。

この日はいくら忘れようとも、決して忘れられないある意味思い出の日。

この日、俺は両親に捨てられ、この時間帯に丁度両親達は二人揃って自殺した。

捨てられた事も、両親が揃って自殺したのも悲しくないといえは嘘

になるがあまり悲しくはない。

悲しいけれど、それは例えるなら悲しい物語を本やテレビといったモノを一枚隔てて感じる悲しみ。

だから、感じた悲しみは漠然としていて、悲しくても「ああ、そうなのか」ぐらいにしか思えない。

元々冷めていたというもあるけど、多分それは家庭環境も関係しているのだろう。

俺は一人っ子で、本当の両親達と築いていた家庭は表面状、絵に描いたようなアットホームな家庭だった。

本当に“絵に描いたような”アットホームな家庭。それはあまりにもアットホームな家庭過ぎた。

両親は親馬鹿というほどではなかったけれど、子供《俺》に甘くて優しい、いつも幸せそうに二人ともニコニコしているのが今でも印象的。

それはそれはまるで芝居のよう。いや、芝居だった。何もかもが芝居のようだった。その証拠に、両親は俺を憎み捨て、自殺してしまっているのだから。

だから、あまり悲しいとは思えない。感じるのは、悲しい物語を本やテレビといったモノを一枚隔てて感じる漠然とした悲しみ。

「
」

当時の幼い俺も悲しいとは思っても、感じてはいない様で、ただ無表情のまま窓辺に立ち激しい雨がふり雷がなる夜の外の光景を眺めている。

今思えば、この時にもう薄々と分かっていたんだろう。

もう、幼い子供なだらの不安な気持ちで両親

何故自分が両親から見放され、捨てられのか。何故、両親が自殺し

たのか。その理由を。

俺は言うなれば、天才^{神童}……みたいなものだった。

束と比べるとは束に申し訳ないし、束には遥かに劣るけども、天才、神童、そんな風に幼い俺は呼ばれていた。

流石に産まれた時から天才ではなかったけれど、幼稚園に入った頃から、そんな片鱗を見せていた。

何をしても常に他者よりも一歩先にいて優れている。その他者よりも事実。

それを幼いながらに悟ったからこそ、他者と自分は同じジャンルではない、他人を理解して他者とも合わせ物事を共有し合わなければならぬと理解し、“他人とあわせ様と努力し頑張った”。

それが巧を制したのか、その時はまだ拒絶されることはなかった。

それどころか、頑張れば頑張るほど、周りは俺を天才としても認めてくれた。皆が期待してくれた。

皆が笑ってくれて、両親も笑顔で褒めてくれた。その事が何より嬉しかった。

だから、頑張った。頑張った、頑張った、頑張った。皆にもっと認められようと、両親にもっと褒めてもらおうと、頑張った。

中にはやっかみを言ってくる子達も言ったけど、そんな子達にも認めて一緒に笑顔になれるようにと頑張った。その刹那を愛し永遠に出来るにと、全力の全身全霊をもって頑張った。

だけど今思えば、やりすぎていた。

全力を出して頑張れば頑張るほど、優劣の差は明確なり、次第に異端に見えてくる。それは当然のこと。

違いがあらさまに見え、本当にこいつは自分と同じ人間なのかと思えてくる。違つと一瞬でも強く思い続けてしまえば、それは畏怖となり拒絶となる。

人は自分に理解できないものを「悪」とするようになってきている。そし

てそう呼んだものを忌避や拒絶する様にも出来ている。

特に幼い時なんて、自分達と少し違う相手がいれば、別の物に見える感じ、気持ち悪くて拒絶したくなる。事実、そんな違いでイジメられていた。

それは大人だつて同じ事だ。大人だからこそ、本当の意味で子供の目線に立つなんて事は出来ず、大人だからこそ分からなくて他の子供とは違いすぎる子供が恐ろしく見える。

それは自分の子供だつてだ。

故に気づいた時には周りが壊れていて、いや周りを破壊してしまつていた。

自分で愛した刹那を破壊し、自分で遠ざけてしまつた。

そして、俺みたいなこんな天才化け物の子供を持つてしまつた両親は、俺が自然的に変な目で見られ、その異様な目で見られ続ければ耐えられなくなる。

故に壊れてしまつた。心も体も。

そして、俺という存在を捨て、俺を忌避し忘れ去り、今だ残る苦痛を忘れるために自殺した。

ああ、やつてしまつた。

そう言えばこの感覚もこの時からだ。物事が起こつた時にくる既知感にも似た感覚。

それは、こうなると初めつから分かっているからこそ起きる。

俺は最初から、こうなると……自分の手で愛した刹那を破壊し、両親を追いやってしまうと分かっていた。

分かっていたながら、全力を出し頑張つてしまつた。

これらが過去の果てに置いて忘却していた過去。

それでもただ一つ、俺が鮮明に記憶して、忘れようとしても忘れられず、忌避していた記憶がただ一つだけ。

才前八死デシマエ

いつかに見た夢が勝手に再び再生される。

あれは夢じゃない。現実にあったこと。

それもこうなる前の日の夜、両親が俺を捨て、自殺する前の日にあんなことがあった。

たくさん罵倒され、最後は首を絞められながらあの言葉を言われてしまった。

その時に両親が俺に向けたのは愛情なんて、ましてや憎しみだけじゃなかった。

今まで貯めに貯めていたモノを吐き出すかの様に、渾身の嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意に満ち満ちた思いと言葉が幼き日の俺という存在全体をを酷く貫いた。

そうされて悲しいとは感じなかった。だけどこんな風にしてしまった、悲しくなって、辛くなって、申し訳なくなってくる。

死んだ人は生き返らない。

死んだ人と会うことなんて出来ない。

死んだ人を蘇らすことなんて出来ない。

過ぎ去った時間を戻す事なんて出来ない。

だから、もう両親とは決して会うことなんて出来ない。

怖かったんだろう。辛かったんだろう。苦しかったんだろう。

そんなことは漠然と今の俺もこの幼い俺も分かるけど、両親が感じたそういう苦痛の思いは俺が想像しているもの以上なんだろう。

俺なんか到底分かる事なんて出来ない。正確に理解する事なんて

出来ない。“もつと大きくなれば絶対に分かる”なんて、綺麗事は言えないし、言わない。

だけど死んでしまったら、何も試せない。何も本当に取り戻せない。生きていたほしかったよ。

俺を怖がってもいい。

俺の総てを総て受け入れてくれなくてもいい。総てを総て理解してくれなくてもいい。

だけど、一方的に拒絶してほしくなかった。一方的に忌避してほしくなかった。

これが俺の身勝手な我儘だという事は分かっている。

それでも、死なないでほしかった。放り出さないで欲しかった。

生きているうちは 父さん、母さん。

「
」

日付が変わってしまった今でも無表情のまま、幼き日の俺は窓辺に立ちずっと外を見ている。

相変わらず激しく雨が降り、雷が鳴っている夜の光景。

表情は無表情のままだけど、何故両親から見放され、捨てられのか。何故、両親が自殺したのか。

それを幼いながら分かっている幼い俺は、申し訳ないという気持ち、罪悪感の色をした瞳の色をしている。

だけどやはり、今抱いている。今抱けている感情は、変わらず漠然としたもの。

こうなってしまった、こんな風にしてしまった事に対する悲しいという感情も。

追い込んでしまった両親に対する、後悔と懺悔に何処か少し似た感

情も、漠然としている。
ちやんと思ひ、感じてゐるはずなのに漠然としている。これはある種の矛盾みたいなものなんだろう。

故にその矛盾すらも忌避するかのようになり、悲しみや苦しみを忌避するかのようになり。

この事を駆け抜けた忘却刹那した過去と定義し、本当は気づいて分かっているのに気づかず分かっていないフリをして、忘却する忌避し続ける事に無意識ながらに行つた。

それが今様な心理体勢になつたわけ。

だけど、そんなことを感じたところでどうしようもない。

こうして幼い頃の俺が誰も大きく広い深夜の家で、ただ一人であるという事実。

それは変えようもないし、変えられない。取り返しの付かないことになり、してしまつた。もう、どうしようもない。

時間は巻き戻らない。本当に刹那が永遠になるわけじゃない。

全力を出すのもやめたのも丁度この時からだ。それはこういう経験からトラウマみたいなものとなつたからだろう。

そしてこの時の幼い俺は、停止による刹那の永遠を無意識にしていた。

だが、動いていた物がとまるという俺にとって言い表せない恐怖。動かさずの停止は恐ろしかった。

あんな事をしてゐたのも関わらず、今の自分は何もせずその場に立ち止まって止まって停止している。

それは死と変わらない停止の無だつた。恐ろしい、この雨に洗い落とし流される無色透明になつていく感じ。

それだけは漠然ではなく強く深く感じていた本能的な恐怖。

「ただ、そう思っている俺は別段何かしようとは思わなかった。親がいなくなり、一人となった当時。トラウマからなのか、前進すら怖かった。」

「むしろ、この無色透明の死にも似た何も無い無の停止を幼いながら無意識に好ましいと思っていたのかもしれない。だから、あの時は何もしようとは思わなかった。」

「そして数日後が、変化のない無に等しい俺にとっての変化の機転だった。」

「両親の自殺後、一時的に師匠の家出水城家に一時的にお世話になっていたけど。」

「昔から世界を又に駆けている師匠や奈々さんはもちろんの事、今はメイドをしている咲夜さんも当時は学生をしていて忙しく、当時は一緒に暮らすのは難しく。」

「なくなく、奈々さんの知り合いである人の家族の家に居候同然の形で住まわせてもらう事になった。」

「それが篠ノ之家。」

「それじゃあ、これからよろしくお願いいたします。」

「よろしくね、綾君。」

「ああ、よろしく、綾君。……東、お前も挨拶ぐらいしなさい。」

「……」

「あ……」

「ごめんなさい、気にしないでね、綾君。うちの子、人見知りが激」

しくつてね。あんな子だけど、仲良くしてあげて」

「はい」

束との初対面は、初めて篠ノ之家に来た時だったけど、そんな感じだった。

玄関で俺が立っていると通路を渡っている束が見え、篠ノ之の両親に呼び止められたけど、無視して。

俺がいることなんて認識せず、「初めっからそんな人間いない」と思われているようで、束の独特な雰囲気印象的だった。

そんな束の態度に初めての時、呆気にとられて何も言葉をかける事が出来なかったけど。

それ以上に当時から束の独特な雰囲気、篠ノ之束というただ一人の女の子という存在に圧倒的なまでに魅了されていた。

余計な感情なんて一切なかった。ただ、天才でもない、ただ一人の女の子である篠ノ之束という存在に圧倒的なまで魅了されていた。

それは……言うなれば、俺はこの時束に一目惚れしていた。

『あなたに恋をした』『あなたに跪かせていただきたい、花よ』

という感じのことを思ったかもしれない。

だから、一目惚れした瞬間停止をやめて自ら動き出し、束に関わりたいたと思った。

それは『束と仲良くしてあげてほしい』ということ篠ノ之のご両親に言われたからじゃない。

ただ純粹に一目惚れをして、関わりたいたと純粹に思ったから。それが容易ではないとは理解はしていた。

だけど束に、無視されたくないと思った。

取るに足りぬ一人として、流されることは幼いながらに避けたかつ

た。
だから、関わっていく事にした。俺という無色透明な刹那の残滓の存在総てをかけて。

理解どおり、束と関わるのは本当に容易ではなかった。

ずっと無視はされたし、心を開いてくれる瞬間まで俺と言う存在はちゃんと認識されてなかったばかりだし。

それはそれで辛かったけど、それでもめげず、着かず離れずの一定の距離を保ちつつ、接し続けた。その甲斐もあってか、時間はかかっただけど、束は心を開いてくれた。

そして恋人同士今の様な関係になることも出来た。

その過程の中で、俺は死に似た無の停止による刹那の永遠ではなく、束達との束との愛する陽だまりの刹那での永遠の停滞。前進に駆け抜けることによるその繰り返し時の永遠の停滞を渴望望むするようになった。

束達との束との愛する陽だまりの刹那での永遠の停滞。

俺にも沢山の変化が起きて、今は俺と言う刹那の権化の存在にかけて、魂・全身全霊をかけて束を守りたいと思っていて、深く強くその事を誓っている。

俺は束を守る。

そう、俺は束を守るんだ。

束を失うのが嫌だから、どんな時も頑張った。

それこそ、やめたはずの全力で、愛する陽だまりの刹那へと還行くる為に駆け抜けた。

駆け抜けた。改めて、あの忘却刹那したい過去を。

嫌悪、悪意、殺意、害意、悪意、舞う先の戦場刹那を。

だから、そういう外的要因から総てから、俺の手で束を守りたかつ

た。守りたい。
そして守った。

だから、この夢から覚めないと。

いつまでもこうして、後ろ^{過去}だけを見つめて、死に等しい何も変化のない無の停止をしているわけにはかない。

愛する刹那を抱いて、新たな愛する陽だまりの刹那へと還^{進みたい}りたい。

だから、目覚めないと。束と早く会いたい。

また、一人で悪い考えをして、自己嫌悪にでもしているんだろう。

一人で抱え込んで苦しいんでいるんだろう。

だから、束と早く会って、話したい。聞きたい事もあるから。

だから、俺は一度でもいいから目覚めないと。

そして俺は、死に等しい無になりそうな意識を無理やり、覚醒へと持っていく。

そうして意識をゆっくりと覚醒させていく。

・
・
・
「……………」

意識を覚醒させ、ぼんやりとした意識の中、俺は目蓋を開く。

初めに見えたのは見慣れた知っている天上。

それを認識すると、今度は体に覆い被っている柔らかい布団の感触を感じた。

体と顔に少しだけかかる黄昏の優しい日差しの暖かさ。

顔を動かさず、目線だけで辺りを見渡すと、窓から優しい夕暮れの

日差しが入り込んできた。
優しい黄昏の日差し。それを感じ、俺は目覚めた事を完全に理解した。

ここは保健室かつと、今だぼんやりとした意識の中、ぼーっと天上を見つめながらそう思つと、ある事に気づく。

ベットの傍に誰がいる。

ベットの傍から誰かの気配を感じ、その気配のする方へ無理やり顔を向けた。

「あら、起きたのね。綾」

「……奈々さん」

ベットの傍に居たのは、椅子に座って優しい笑みを浮かべこちらを見ている奈々さんだった。

「……なんで、奈々さんが……ここに？」

「何でって、あなたが瀕死の重傷って聞いたからに決まっているでしょう。聞いて仕事ほっぽかして、一郎さんはどうしてもこれなかったけど、私だけは来たのよ。命に別状はないからいいけど、心配したんだからね」

「すみません」

「謝るな、馬鹿息子。愛する大切な子供で家族なんだから、来るのは当たり前よ。そこに他の感情や外因はいらないわ。ただそれだけのこと」

「……ありがとうございます」

「それでよろしい」

満足げに言う奈々さん。

奈々さんにも迷惑と心配かけてしまったな。

だけど、「愛する大切な子供で家族なんだから、来るのは当たり前」
っという言葉がやけに心に嬉しく響いた。

やっぱり、先ほどの夢がそう感じさせているのだろうけど。今は兎
も角、ただ純粹に嬉しく感じる。

ベットの傍に居たのが、知り合いだったので無意識に安堵したけど、
同時に自己嫌悪も感じて、してしまった。

奈々さんだと認識するまでもしかすると、この誰かの気配は束かも
しれないと思い、認識するまで束と奈々さんを間違えていたからだ。
師弟だからなのか、束と奈々さんの雰囲気や気配は何処か少し似て
いる。

だから、間違えてしまった。だけど、愛する人をどっという形であれ
間違ってしまったのは情けない。

意識は今だぼんやりとしていて、こういう状態だから仕方ないかも
しれないけど、自己嫌悪みたいな物を禁じえない。

なので、それに詫びるかのように、気になった事を聞いてみた

「束達は、束は……」

「安心して、身体的には無事、元気よ。ただ、二人とも心の整理に
いろいろと戸惑ってみたいだけ」

「……………」

無事で元気という事を聞いて安堵したけれど。
また同時に自己嫌悪も感じて、してしまっている。

やっぱり、総てを守りぬけたわけじゃなかった。

結局、二人には、束には心の障害を残してしまった。

二人に、束に心配をかけ、いらぬ思いまでさせていることなんだろう。

それは俺個人ではどうにも出来ないことで、二人が自分達で解決しないと、決別《決別》しないといけないこと。

だけど、こうしてしまったのは俺。あの時もっと、上手く出来なかったのかと自己嫌悪が増してくる。

あの戦場を駆け抜けたけど結局のところ俺は、二人に心配をかけ、苦しめているだけだ。

情けなくて、こんな情けない俺が嫌になる。

俺は、俺は

ただ、束を守って、幸

せにしたい。束と一緒に幸せでいたいはずなのに。

それすらもまた自分で毀しそうになっている。

刹那輝きなんてものじゃなく、破壊の閃光なのかもしれない。

俺はそんなつまらない卑屈なことを思ってしまった。

だから俺は、怪我を重症を負っていた身である事を忘れ、起き上がろうとした。

一刻も早く、束の元に駆けつける為に。

「……っ」

「ダメよ、起き上がっちゃ。綾、あなたは怪我人。きつきまで瀕死

の重傷だったのよ」

「……………だけど」

「言い訳はいい。今は安静してなさい。今起きたとは言え、あなたは数日意識不明だったのよ。いくら黒百合の絶対防御の恩恵で生体再生みたなことをしてくれても、重症だった事には変わらないのよ。それとも何、そんな状態で二人に、束ちゃんに会って、悲しませないの？ それは違うでしょう。だったら、今は安静にしてなさい」

「……………分かりました」

起き上がるうとすると、両肩を奈々さんに優しく掴まれて、そのままベットの方へ戻されてしまった。

本来なら、奈々さんのか弱い力を振り切る事なんて簡単に出来るけど。

起き上がるうとするだけで限界でそれ以上が入らず、振り払う事も出来ず、言い聞かせれ俺は奈々さん言葉通り大人しくすることにした。

奈々さんの言うとおり、いまくら今日覚めとは言え、さっきまで重症で意識不明。

しかも、今の俺は起き上がるだけで精一杯で、これ以上力が出ない多分歩くことすらままならない。こんな状態では、返って束を悲しませる事になる。

だから、今は安静しているしかない。

本当に情けない。

また自己嫌悪に浸りそうになると、そんな俺を見てか奈々さんは溜息を付いていた。

「はあ〜、でもこれを愛ゆえにってことなのかしらね。愛が深いのもって考えすぎね」

「……」

「東ちゃんが好き過ぎるのも愛しすぎているのも、東ちゃんもそうだしお互い様で、それが悪いってことじゃないけど。余計な事を考えすぎよ、そんな考えはただの杞憂よ」

「……」

「考えすぎはただの毒。体が悪いのに更に悪くなってしまふ。一人で勝手に心配して不安になるだけ本当に杞憂よ。綾らしくない。いや、何でも背負い込むのはらしいし、相変わらずだけど本当、何でもかんでも一人で抱え込み過ぎよ、馬鹿息子」

そう呆れるように苦笑しながら言った奈々さん。

奈々さんが言うことはもつともだと、無意識で理解する。 unnecessary、余計な考えや心配はしすぎると返って思考を鈍らせてしまふ。

本当に思つべきことが思えなくなる。本当に取り越し苦労《杞憂》だ。

だから、奈々さんにああ言われて、俺は気が軽くなった気が少しした。

俺がやるべき最優先の事は

「兎に角、今は安静して早く体をよくすること。それが最優先。い

いわね？」

「はい、分かっています」

「なら、よろしい。その言葉を信じるわ。だから、もう少しだけ眠って安静にしてなさい」

「はい」

頷いて俺は答える。

すると、その答えを聞いて、奈々さんは優しい微笑の笑みを浮かべ、布団をかけなおしてくれる。

今俺がすべきことは安静をとり、体を万全することが最優先にすべきこと。

だから

「お休みなさい、綾」

「はい」

今だ変わらず優しい微笑の笑みを浮かべている奈々さんに見守られながら、もう一度眠りへ俺は付く。

…

第五十話 ？（後書き）

というわけでいかがだったでしょうか第五十話 ？

アンチされる側編 + でした。

今回からは今までは伏線を総て回収する形となります。

まずは最初、綾君の過去を明かしました。

神童がどうのこう説明する辺りが少しくどくなってしまったぽいのと少しナルシスぽい書き方になってしまったのが今回の反省点かな。私的に。

読んでいる方はそう感じるか、また別に感じるか気になります。

綾君の過去は“あえて”東さんと似せて書きました。

天才設定だったのは空気だったので、ここで出しておかないと。

綾君の天才ってのは、人並みに凄いつてことで。

東さんや千冬さん達にみたいに特質して凄いわけじゃないです。

このから綾君は刹那主義者です。渴望の内容は同じなようで、異なっています。

全力を出すと壊してしまうのは、ハイドリヒ卿をモチーフにしました。

全力を出すと毀してしまうし、全力をさせないつてこがポイントです。

綾君が全力を出すとあまりいい結果は出しません。何かしら傷跡が残ります。

この場合は、アルスターさんとの決闘などがそうですね。

彼女には結果的に恐れられる対象になりましたし。他にも全力を出した爪痕がありますし。

両親に対しても罪悪感を感じていますが、綾君は破綻しています。漠然とした思えないので。その辺は作中にあるとおりです。

束さんには一目ぼれな綾君。

このころから今の様な渴望になりました。

あのセリフは獣殿と同じくストーリー性のあるネタです。

綾君はどうやら、刹那・黄金・水銀の要素を持ち合わせているようです。

けど・この夢で少しヘタレってしまったのは失態だった。

これってヘタレって事になりますかね？

プロットでは「何があってもヘタレてると思わせないっ!!」とあったのに。

一応・そうなったのは過去を知ったからってことになります。

世の中には知らなくてもいい事があるのです(ダンタリア風に)

そしてやってきた奈々さんっ！

本当にいいお母さんしますかね。書いていて楽しいですww

ちゃんと出して意味はありますよ。この他にも。

それとあのIS設定もちらほら。

そろそろあの子をちゃんと出したいので

ツイッター、やってます

執筆状況やどうでもいいことや重要よ様な事を呟いているので

よろしければ見てください。よろしくですm()m

<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言つか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

この機会にツイッターしてない人はして、一緒にこちょこちょしようぜっ！

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますけど、一度きりだったので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ！！m(┌┐)m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

というか、そろそろ本当に本当にランキングに乗りたい。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とっても嬉しいです

ご協力お願いしますm(┌┐)m

これも何としてでも上げたい。

十件もお気に入り解除されるとつらい今日この日。

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんのご感想を待っています。

一言二言でもいいので感想を本当に本当にどうかよろしく願います。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。言うてくださいー！！

第五十話 ？

東視点

まず考え続けているのは自己嫌悪と自己の否定だった。

「……………」

時刻は夕方の五時過ぎ。

ここから見える外の景色は夕暮れの黄昏の光に照らされている。私が今居るのは、誰もいない学校の屋上。本当に出れもいなくて、誰も来る気配なんて微塵もなく、ほぼ貸切状態同然。

静かでここにあるのは流れてくる冷たい風。感じる風は、少し肌寒いけど、今の私の感情を冷めさせて、あるいは凍らせてくれそうで丁度いい。

それに今更、部屋にも帰りにくいし、居辛い。部屋にいたくない。こんな情けない私じゃあ、ちーちゃんと顔をあわせるなんてことは、向き合う事は出来ない。

ちーちゃんは、私と似ている様でまったくの真逆。

ちーちゃんという存在が放つ輝きは、私にとって正道かつ純粹で、その輝きを見てしまうと必然的に無意識に勝手にくべてしまって、自分私の醜さ、愚かさ、矮小さを思い知る事になる。

ましてや、こんな馬鹿で、愚かで、情けない今の私じゃあ、綾に会わせる顔がない。

「……………」

そう言えば、あれから数日がたったんだっけ。
そんな事を思いながら、ぼーと夕陽が沈んでいく黄昏の空を虚脱
状態の心のまま見つめる。

テロリストIS学園襲撃事件と呼称された、テロ事件から早数日が
経つ。

綾の最後の一発がテロ事件そのものの幕引きとなり、事件は終了し
た。

事件後、簡単な事情聴取を去れたけど直ぐに済んだ。

テロでボロボロになった校舎は今、修復中の為、学校は休校となっ
ている。

かく言う私は見ての通り。

いつも日が暮れるまでここに居て、自己嫌悪と自問自答と自己の否
定の繰り返し。

綾のお見舞にも行くには行くけど、眠っている綾を見ると、自
己嫌悪と自己否定で直ぐに部屋を出てしまう。

情けない事、この上ない。

そして、気が付くここに来ていて、再び自己嫌悪と自問自答と自己
の否定の繰り返し。

本当に情けない事、この上ない。そして愚鈍で、馬鹿だ。

こんな事しても大した意味はないし、こんな事は綾の為にならな
い事は分かっている。

それでも、今の私にはこんな事しか出来ない。今の私に他の選択肢
はない。

そして、こんな風に考えてしまうと、自己嫌悪と自問自答と自己の
否定の繰り返し。

悪循環。そう分かっても、一度考えてしまうと罫に掛かった様

に悪い考えから抜け出せなくなる。
悪い考えが永劫回帰の様に何度も悪循環している。

「何が私も守るだ……っ！」

悔やむ様な自分に対して怒る様なそう知らず、そんな言葉が私の口から零れている。

事件から数日経った今日まで綾は、意識不明の重症だった。
眠りに付くまで、ボロボロだったけど綾はずっと元気にしている綾を見て、その時は何故か気には止めなかったけど、綾の身体状態の
実情は悲惨だった。

銃弾や打撲等による大量出血はもちろんのこと、体内での内出血も
起こしており、様々な個所の骨が折れていた。

そして最後に綾が受けた銃弾、それが横腹の深い部分に着弾してい
て、内臓等を傷つけており……本当ならもう死んでいなきゃ説明が
つかない状態。

痛みによるシッコクで道中、確実に死んでいるほど、綾の身体状態
の実情は悲惨で、数日の間不明の重症だった。

だけど今日、綾は意識を取り戻し一時的に目を覚ましたらしい。

そう先ほど、お見舞いに来てくれていた奈々さんでメール報告して
くれた。

それは多分、IS、黒百合が綾を守ってくれたんだらう。

一命を取り留められたのも、怪我が早期回復してのも、黒百合の絶
対防御の恩恵で白騎士の同じく生体再生をしてくれた。

「守るなんていいながら私だけは、大切な人を守れなかった」

独白の様に私は呟く。

黒百合あの子は綾を守り、包んでくれた。
ただ、私は綾を守る事が出来なかった。守れなかった……守れな
かった……守れなかった。

守れなかった、守れなかった、守れなかった、守れなかった、守れ
なかった、守れなかった。
守れなかった、守れなかった　マモレナカッタ、マモレナカッタ、
マモレナカッタ、マモレナカッタ

あまつさえ、私は守りたい大切に愛しい人をあと少しで殺しかけて
しまっていた。

それは綾だけじゃない。

ここで共に生活しているクラスの子達も、他の人達もだ。

皆、私という存在がいるばかりに、本当なら合わなくていい危険な
目にあわせてしまった。

綾以外のちーちゃんや皆私はもう少しで殺しかけてしまった。

私は、自分で自分が愛した刹那瞬間をもう少しで完全に壊しかけていた。

それは私という存在があまりにも強大すぎるから。

傲慢なんかじゃない。ましてや、自惚れてなんかない。

私でも嫌になるほど、どうしようもなく、紛れもない事実にして真
実。

篠ノ之束私という存在はあまりにも強大すぎる。故に、いつも世界の
許容範囲を超えていて、許容されない。

それは昔からだ。昔の世界の在り方にも、いくら努力しても人の輪世
にも許容されず、いつも排除され。

ISという己が理を流出させても、自分にあつて許容範囲を生み出せたのはあくまで世界や世界の在り方のみ。

世人の輪には、変わらず許容はされず。排除こそはなかったものの、ISの世界でも許容はされず、結果としてこういう事件と結果を招いてしまった。

いや、こういう考えこそテロリスト達彼らにしたら、心地驕っているがいい様に見えるんだろつ。

「 どうしてこんな」

言い訳がましい言葉が出かけ、自覚して言うのをやめた私は、自嘲を禁じえない。

今更、こんなことをいったって大した意味はない。

今更、してしまった事の結果が変わるわけじゃない。悔やんだところで、巻き戻るわけじゃない。

本当に刹那が永遠になるわけじゃない。

そつたと理解しているからこそ、私も綾と一緒に刹那を駆け抜けた。置いていかれるは嫌だ。だって、追いつきたくても、私足が遅いから。

だから、私は綾の刹那に入れるように全身全霊で駆け抜けながら頑張った。

いい加減に頑張ったんじゃない。

ふらふらとあっちに行ったり、こっちに行ったりもしてない。

確固たる目的があつてこの未知道を進んでいた。

確かにこうなつた発端、流出の理の発端は『自分に適応していないのなら、適応させよう』。

そんな自分勝手の小さな子供の我儘だったよ。それを私は否定しな

いいし、否定できない。

だけど、その発端の事だけが流出の理の全てじゃない。そんな子供の我儘染みたエゴだけで、ただ悪戯に世界を引っ掻き回して、変革を誘発しているわけじゃない。

私には、ちゃんとした流出の理の確固たるもう一つの理由がある。

強烈な痛みを伴わないと変革なんてものは、ただの繰り返しにしか過ぎない。

中途半端な痛み、よく考えればあるありふれた痛み。そんなものは、戦争・革命・平和の終らない三拍子のワルツが繰り返される。永劫回帰するだけ。

この繰り返しゲッターの檻から解放されず、共食いをし合い、枯渇して滅びる。

だから、変えようと。少しでも世界がいい方向に変革を誘発できればと思い、この未知《進んでいる》

もう、止まらない。だから、発端のエゴを最後まで貫き通すと心に誓っている。

その覚悟達は揺るぎない物だと、信じてもいるし、自負している。

だから、私はそれを胸にこの未知道を綾と一緒に駆け抜けている。

例え、道中が修羅道であったとして。

IS《私》を認めないもの、私達に害なすもの、私達を排除し殺そうとするもの、私達を利用しようとするもの。

そういう様なことやものがあると理解して、分かって、覚悟して、この修羅道《道》を進んでいる。

そして守ると誓った。守られているだけじゃなく、私も綾を守ると誓った。

それは自分だけに誓ったじゃない。奈々さんにも、そして綾にも自

分を戒めるように誓った。

だから、私も守ろうとした。

けれど、守れなかった。それどころか、後もう少しで殺していた。

私が綾をあと少しで殺しかけていた。

「
」

はっと我に無理やりに返り、思考を切り替えようとする。

こんな私は駄目だ。

いつまでも暗い、答えなんて見えない考えを考え。

いつまでもウジウジしている。

いつもまでこんな思考に囚われて、引き摺られてはダメだ。

嫌われてしまう。困らせてしまう。綾を。

それは絶対にダメだ。

会に行かないと。綾に。

一応でも意識を取り戻し、目覚めたんだ。

だったら、早く会いにいかないよ。笑って笑顔で、会に行かないと。

だけど、行けない。

折れた心から立ち上がる勇氣が出ない。

やっぱり、私は全然ダメだ。

こうなると分かって、覚悟していたのに。揺るぎないものだと思信していたはずなのに。

今の私じゃ、覚悟が折れなくても、激しく揺れ動きそうになる。

結局、守ってもらってばかりで守れなかった。

誓いを私は果たせなかった。守ることが私は出来なかった。

悔しい、悔しくて嫌になる。またこうなるんじゃないかと思うと怖い。

『篠ノ之束っ！貴様は世界を蝕む猛毒持つ癌細胞だ。世界を蝕み、総てを破壊する。腐った政治家よりも醜い自己の欲望の為だけになっ！』

頭を鈍器で殴られたかのような激しい痛みにも似た、眩暈を感じる。突如、頭の中で思い出したわけでもないのに、テロリスト達の言葉が勝手に浮かび上がってきた。

おぞましい。嫌だ、そんなの。

そう思うのと反対、同時にそうなのかもしれないと私は、思った。

私は蝕む猛毒持つ癌細胞。故に醜い自己の欲望の為だけに、他者を踏みにじり、その他者の世界を蝕み壊す猛毒持つ癌細胞。

それは一つでは終わらない。終われない。総てを蝕み飲み込み破壊する。

事実、それを癌細胞私の小さな癌細胞が、変革ISというこんな形では望んでない押し付けの悪意善意でしかない形で、証明している。

侵食は他者や世界だけに止まらない。

私音が愛する綾。彼を、彼が愛する陽だまりの日常刹那すら、猛毒持つ私は蝕み飲み込み破壊する。総て総て。

私音がまず最初に彼、綾の手に入れた日常を壊した。

そして今も深く深く恋人関係になってまで関わり合い、後戻りできない非日常、ISの世界で重要な自分の地位を築いてくれている。

例え綾自身が選択した事であっても、根本的には私がそうせざるおえなくさせた。それは私が全部、残らず全部、私がそうしてほしいと何処かで渴望思ったしたからだ。

ただ人間一人の人生を、例え綾が望み確固たる意思を持って選択したとしても、私が好きに弄っただなんて、そんな傲慢認められない。それじゃあ私がまで、
みたいだ。

だけど、現実としてそうなっている。それを否定するだけの要素はあまりにも少ない。

こういう私を綾の自滅因子アポトーシスと言うべきなのかな。

私は私の醜い自己の欲望の為だけに、綾の愛する日常を壊し、綾という刹那の存在を蝕み飲み込み破壊する。

そしていつか私は、綾を殺してしまう。今回は、瀕死の状態でも無事助かった。

だけど、次があれば私は私という猛毒持存在つ癌細胞のせいで、綾を殺してしまうかもしれない。

殺したいだなんて、絶対に思っていない。深層意識にでも無意識にでも、何処かでも殺したいだなんて絶対に絶対に思っていない。

だけど、極小の確立で確実にそうして、殺してしまう。

なら、死ぬ事も選択の一つではある。

けれど、それは選択できない。選択してはならない。

私は生きなければならぬ。行き続けて、変革の責任を取り続けな
いといけない。

死んで責任を取るなんて、半端で逃げるような事だけは、生き恥さ
らしてもしたくない。

それに死にたくない。エゴや私の醜い自己の欲望の為だとしても、
私は行きたい。

もっと、世界や他人に触れて、変わりたい。綾と同じ刹那を感じ、
陽だまりの日常に居たい。

私が綾を包み抱きしめたい。そして、綾と一緒に幸せになって、綾を幸せにしてあげたい。

だから尚更、死ぬ事なんて出来ない。

そう分かっている。

だけど

「私、生きてちゃダメだ」

心が折れたの私じゃ、自分の生を肯定できない。

生きたいけど、死にたい。生きてしまいたいけど、死んでしまいたい。

酷い矛盾。

『だったら、何故まだいるんだ？お前は。お前は本来なら平和な場所こんな場に要られない、居てはダメなはずだ』

口調はちーちゃん。けれど、声は奈々さん。

二人を足して二で割ったかのような、全く知らない声……が話しかけてくる。

分かっている。分かっているよ だけど。

『世界を無茶苦茶してた癌細胞なんだから、さっさ消える。死にたいんだろ。迷惑な存在だな、まったく』

違う、違う、違う。そうじゃない。そうじゃないの。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。何でもするから許して。

『だったら、消えるよ。下手に死なれて、何かあったら迷惑極まりないからよ。ってか、消えてくれ』

口調は整備隊の隊長。けれど、声はおじ様。

二人を足して二で割ったかのような、全く知らない先とは違う声が話しかけてくる。

そんなこと言わないでよ。

私はこの今の日常が好きで、綾と一緒にいたくて。

『アホか、だったら尚更消える。好きなのに壊しちっちゃったら意味がねえだろうが。好きなんだろう？愛しているんだろう？綾の事だけを。だったら、尚更だ。お前はどするべきか分かっているながら、やりたくないってほざいてばかり。本当に屑でキチガイ、使えねえな。まあ、そうなんだから仕方ねえか。だってお前よ、全部無視しようとしていたんだからな』

あざ笑うかの様な男の声が脳裏に響く。

第一に目を閉じよう。

耳を塞いで、口を嚙んで、呼吸を止めて、微動だにしない。

心は、石みたいに頑なに。最後は思考までも停止する。

それが最善だと思うがゆえに、そうする。しようとする。

それが正解だと信じるが故に、強く深く信じたいと思うが故に。そうする。しようとする。

それも正しさの一つなはずだ。

『うん、正しい。それも一つの正しさの形だよ』

そう私の声に似た全く知らない声^{……}が話しかけてくる。

『だけど、正しいのならそれは同時に間違っている。そして、それは逃避であり忌避だよ。アンチする人^{批判}みたいに聞こえのいい浮かべだけの正論を言っているのと何ら変わらない』

知っている。分かっている。だからこそ私は　　っ！

『だから、こうならないように自分なりに努力して頑張った。ああ、そうだね。頑張った頑張った、偉いよ偉いよ。だけど、努力はしたけどそれが見合わないなら力が足りないか、頑張る方向が間違っているんだろっね。アナタの場合は、両方だけど』

おどけて馬鹿にしてあざ笑うかの様な女の声が脳裏に響く。
もう、どんな声なのか。誰の声に似ているのか。もう、はっきりと分からない。

奈々師匠にも似ているし、ちーちゃんにも似ている。咲夜

『だから、生きて責任を取る。綾^彼を巻き込んで？ 君は矛盾している。ああいう風に逃避して忌避してる癖に。逃げないと誓った癖に。嘘つき、屑だね。本当にどうしようもないよ』

そんなの分かっている。分かっているから。

やめて、やめてやめてやめてやめてやめて　　！

もう、聞きたくない知りたくない言われたくない再確認されられたくない　見たくない！！

『そうしている内はそのままだよ、かわいそうで屑でどうしようもない篠^{アナタ}ノ之束。逃避していたい忌避していたい事が繰り返される。』

第五十話 ? (後書き)

というわけでいかがだったでしょうか第五十話 ?

私的には結構な鬱展開でした。

だけど、久しぶりに束さんのヤンデレな一面を出せたことだし、満足かな。

そういえば、束さん視点も久しぶりでした。わりとスラスラ書けてよかったです。

さて、今回は束視点の結構な鬱展開でした。

綾君に前で笑顔でいた束さんも、一人になり綾君の実情を知ればこうなります。

(書いてアレだけど、綾君が何の異能の能力もない人間なのかあやしくなってきた)

束さんも束さんで、今回のことを真摯に受け止め、いろいろと思いを考えています。

原作の束さんなら何処吹く風ですが。

ここの束さんは綾君の影響で人間性を手に入れた事により、あんな風になります。

こう見てみると、人間性を手に入れた事がいいことなのかあやしくなりますね。

まあ、原作の束さんと(私的にいい意味で)乖離しているから、今更ですけど。

ちょこつと出た黒百合の細かい設定。

ナンバーは002となっていますが、それはあくまでナンバーだけであって。

白騎士のコアとはまったく同時に作られているので、基本的な所で

の差はないです

こちらへんと黄昏つてのが、キーワードです。

Dies iraeユーザーなら何をしているのか分かるはず(シ

!d)(o)ノ)

そしてこれもDies iraeユーザーなら「おおっ!」となるはず。

アポトーシス
自滅因子 こういったDies iraeの用語はちよくちよく使っています。

アポトーシスと言ってもあくまで例えなので、本当にそういう存在ってわけじゃないです。

ここは永劫回帰、輪廻転生、等といった座の世界ではないので。

ただ、因果みたいなものはあります。宿主とアポトーシスは引かれる、という。

ちなみに綾君には、刹那・黄金・水銀 + 屑兄さん要素がありますが反対に束さんは、司郎・黄金・水銀・ルサルカ・マリイ要素があります。

ルサルカとマリイの要素は、本当に僅かだけ。

束さんの心理描写上手くかけているかな

支離滅裂なのはわざとですが、読み難くないか、理解しやすいのか、不安。

それでもやつと、ヤンデレ束さんが出せて何より。

ヤンデレ束さんは精神的に不安定になったら表に出ると言う設定で最近では、精神的に落ち着いているから全然出せなかったけど漸く出せたっ!

やったね、たえちゃん。ヤンデレ好きが増えて、歓喜するよっ!

主に私が)

やり過ぎた気がするが 私はあやまらない(所長風に)

ヤンデレ束さんっ!最高っ

ツイッター、やっています

執筆状況やどうでもいいことや重要よくな事を呟いているのでよろしければ見てください。よろしくですm()m
<http://twitter.com/#!/1254Reonbaruto>

と言うか、誰かツイートして下さい。コメがほしい。一人芝居悲しい。

この機会にツイッターしてない人はして、一緒にこちょこちょしようぜっ！

週間ユニーク数を上げて一ページ目に何としても乗りたい。

日間ランキングから週間ランキング、どちらか一つでもいいから乗りたいっ！

一度日刊ランキングには乗った事がありますが、一度きりだったので。

だから、三つのうちどれか一つでも乗れる様にご協力お願いしますっ！!m()m

私も執筆を力の限り、頑張りますのでっ！

というか、そろそろ本当に本当にランキングに乗りたい。

現在も、週間アクセス数とアクセス解析等で悩んでおり

週間アクセス数向上と感想アップにご協力していただけると、とても嬉しいです

ご協力お願いしますm()m

これも何としてでも上げたい。本当に本当にお願ひしますっ！

では、ご不明な点や気になる点があれば感想と一緒に気軽に聞いて下さい。

今回もまた、たくさんのご感想を待っています。

一言二言でいいので感想を本当に本当にどうかよろしくお願いいたします。

次回の更新意欲に深く関係してくるので、読んだのなら何卒、感想のご協力をお願いします。

感想が少ないのに理由があるのなら直せるものは直します。言ったださい!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7587r/>

IS インフィニット・ストラトス Verweile doch, du bist so schoen

2011年12月6日22時46分発行